

告白されたら高校生活が変わりました！

オオル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人生で初めて告白をされた主人公神崎レイ、差出人不明のラブレターを受け取り告白されたがその告白方法はあまりにも理想的な告白とかけ離れていた。

ラブレターを貰ったことで変わったレイの高校生活、そこからは今までとは激変した生活を送ることには!?

目次

告白されたことありますか？	1
幼馴染っていますか？	12
へんてこな姉貴っていますか？	25
あなたはチキン野郎ですか？	36
妄想したことありますか？	46
GW何してましたか？その1	58
GW何してましたか？その2	67
GW何してましたか？その3	75
自分のことを考えたことはありませんか？	83
幼馴染が変態になったことありますか？	97
ラノベは好きですか？	106
青春したことありますか？	117
サークル活動したことありますか？	128
女子に慰められたことありますか？	138
試験勉強したことありますか？	151
テスト勝負したことありますか？	167
女子に襲われそうになったことはありませんか？	183
体操服を変なことに使われたことありますか？	196
ご主人様になったことありますか？	212
恋人未満を知りたいと思っただことありますか？	224
下着姿の女子に壁ドンされたことありますか？	235
盗聴されたことありますか？	248
自慰行為中の音を聞かれたことありますか？	264
女子湯に入ったことありますか？	274

女子湯に入ったことありますか？ 脱出編

291

第一次枕投げ対戦が勃発したことありますか？

311

女子から大切な話があると言われたことありますか？

327

お巡りさんに疑われたことありますか？

345

密室で下着姿の女子達と過ごすことはできますか？

358

休憩ホテル（意味深）に入ったことありますか？

379

幼馴染と親友の関係は気になりませんか？

397

男子だと思つてた人が女子だったことありますか？

415

間接キスしたことがありますか？

431

女性の胸をじっくり揉んだことありますか？

448

夏服デビューしたことありますか？

465

ドMなペットと夜道を散歩したことありますか？

484

女子に自分の下半身を押し付けようと思つたことありますか？

500

女子に嫉妬されたことありますか？

519

クラスの男子全員を敵に回したことありますか？

538

おっぱい星人と呼ばれたことありますか？

556

めんどくさい後輩から絡まれたことありますか？

577

女子からデートに誘われたことありますか？

599

友達が告白されたことありますか？

617

幼馴染のスク水姿は見たいですか？

631

友達に秘密を隠していたことありますか？

658

友達に秘密を隠していたことありますか？その2

677

初めての相手と言われたらなにを想像しますか？

695

女子から避けられたことありますか？

716

夢を叶えたことありますか？ | 737
姉は見えないところで頑張ることを知っていますか？ | 760
誰かから期待されたことありますか？ | 780
黒歴史をさらけ出したことありますか？ | 797
触れてはいけない話に触れたことありますか？ | 833
バットエンドのその先を知っていますか？ | 863
幼馴染が犯人だと疑われたことありますか？ | 885
露出魔を捕まえようとしたことありますか？ | 907
露出魔を捕まえようとしたことありますか？その2 | 933
大きな屋敷に行つたことありますか？ | 967
可愛い幼馴染とデートしたことありますか？ | 994
共犯者になつたことありますか？ | 1026
皆さんには信じてもらいたい話がありますか？ | 1052
寝ている女子が目の前にいたら何をしますか？ | 1083
女子に好きになつてと言われたらどうしますか？ | 1107
○○○を見せてくださいと言われたことありますか？ | 1137
有名人と一緒にアイスを食べたことありますか？ | 1162
自称お姉ちゃんと名乗る赤の他人を知っていますか？ | 1183
三郎ラーメンを食べたことありますか？ | 1203

告白されたことありますか？

みんなに聞きたいことがあるんだけどさ、人生で告白されたことってありますか？

それってどんな告白？正面から好きです！って言われたの？それともメールやメッセージアプリで告白されたり…もしくは電話とか？

だよね！普通そうだよね!?

でも…俺が人生で初めて受けた告白はどれとも該当しない、え？どんな告白だったか？

じゃあ教えてやるよ！紙袋を被ってる女子から告白なんてされた事ありますか!?

時は数時間遡る

「なあ蘭、彼女ってどうやったらできる？」

「知らない、イケメンならできるんじゃない？」

「じゃあ俺は!？」

「…あんたはイケメンじゃないでしょ？」

「うわー傷つくなー」

けしてナルシストではないが自分では普通中の普通の整っている顔だと思っただけだよね!?

「蘭って彼氏いないよな？」

「いないね」

「じゃあためしに俺」

「絶対に無理」

冗談のつもりで言おうと思ったが食い気味で拒否されちゃったよ、冗談で言うことすら許されないってことなのだろう

「レイと付き合えるのはもの好きだけだよ」

「な、なんだ?!俺はこう見えてもイケメンだろ!」

「それを自分で言ってる時点でイケメンじゃないから」

「…:…はあ、そうですか」

正論言われたからなにも言い返せない…

「あたしそろそろバンドの練習あるから」

「このリア充め！」

「ふっ、あたしはレイと違ってリアルが充実してるから」

「そんなこと言うなよな!？」

このいかにも悲しんでいる男子生徒の名は神崎レイ、この物語の主人公である。今の彼の発言からリア充に憧れているところが感じられる。

「……まあ俺も別にリアルが充実してないわけではないけどね」

蘭の他にも友達だっている。別にリア充になんて憧れてない……!でも!

「彼女は欲しいなー」

シンプルに可愛い子を求めますよ、でも年齢〓彼女いない歴の俺にそんな求めるには難易度高いのだろうか

「おーすレイ、まだ教室いたのか?」

「んー? 蘭と話してた」

「ま、まじか、美竹とまともに喋れる男子はお前ぐらいだぞ」

「えー、柊優も話してみろよ、結構面白いぞ?」

「俺は遠慮しとくよ」

こいつは夜桜柊優よさくら、サッカー部に所属していてガツチガチのイケメンだ。2年でもうエースらしい、何お前? やばいじゃん

「お前彼女欲しいのか?」

「聞いてたのかよ!？」

「理想とかあんの?」

「……理想か」

理想と言われれば

「可愛い子がいい!」

「お前には一生できねーよ、じゃあな!」

「えー、聞いててその反応!？」

すました顔顔してリュックを背負うとすぐに教室を後にしやがった、サッカー部荒らしに行こうかな? って思ったけどそんな勇氣ないから諦める

「……はあ、俺も帰ろうかな」

リュックを背負い教室を出て下駄箱に向かって靴に履き替える、いつもの些細な出来事さ

「ロッカー開けた時ラブレターとか入ってたらしいのになー」

なんせこの羽丘学園はもと女子高、俺の一個上の代から共学になったんだ。

共学になった理由は年々生徒が減少していたからとのこと、女子高なんて女子しかいないから女子がいないと生徒が増えないだとき、うん、何となくわかるようでわからん

てなこと男子も入学させよう、そうだ共学にしよう、となり共学になったってわけ、だけどそんなすぐに生徒が増えるわけではない、男子生徒より女子生徒の方がはるかに人数は多い

無論俺は可愛い子が多いと噂を聞き付け入学したのだー！死ぬほど勉強してな!?

てことで女子が多いのなら告白する人だっただけは多いはず！だからなーんて夢みたいなことを考えながらロッカーを開ける。

「ツ！って！入ってるうううううう!!!?!」

ピンク色の便箋が入っている！こ、これはラブレターと言ってもいいものだろ！

「やった！ほらな！やっぱりおれはそこそこイケメンなんだよこれが！」

勢いよく手紙を取りだし差出人を確認するがなにも書かれていない

「……シャイな娘からなのかな？」

もしくは広げた時に文と一緒に名前が書かれているのかもしれない！

今度こそと言わんばかりに手紙を広げると！

『屋上に来てください』

と、書かれていた。

「ツ！こーしちゃいられない！すぐに行かないと！」

俺が帰宅部だと知っててこの手紙を置いていたのなら！この娘は

！この娘はずつと俺を待っていることになるだろう！

屋上に続く階段を駆け上がり期待に胸をふくらませながらドアを開ける。

「……あれ？」

しかしそこには誰もいなかった。

「あああああ！くそ！はめられた！」

誰だよこんな残酷なイタズラをしたやつは!?!期待して損したじゃないか！

大人しく帰ってご飯を食べて寝ようと思いつつ屋上を後にしようとしたその時、ふとベンチに目を向けるとさっきと同じ便箋が置かれていた。

「……なんだ？これ」

自分宛ではないけど興味本意で開けてみると

『次は武道場裏だよ』

と書かれていた。

「これは？同じ差出人が俺用のために置いていたのか？」

あれか？なんか試練的なものをクリアしないと差出人には会えない的な？……なるほどね

「いいぜ……やってやる！たとえこのラブレターが本物でも偽物でも差出人ぐらい見つけ出してやる！」

叫びながら屋上を後にしたレイは次なる目的地、武道場裏へと向かっていたのであった。



「はあ、はあ、はあ……着いたぞ！」

パツと見誰もいない、つまり屋上の時と同じように手紙がどこからしらに置かれているパターンだな？

「ツ……え、まじで？」

奥を見てみるとパネルが立てられていた。

『あなたは巨乳派？』

『あなたは貧乳派?』

『どちらも大好きです♥』

巨乳、貧乳が左右にあり真ん中にどちらも大好きのパネルが立っている。

ちなみにパネルの根元には手紙が置かれていた。

いや土ー、土着いてますよ!?

「てかこれは難問だな」

正直に言うが俺は巨乳派だ、夢はおっぱいを揉みながら寝ることだ!……って冗談は置いていて

よく考えろよ、なんでこんな質問をしているのかを

もしかしたら差出人は貧乳なのかもしれない、だからあえてあまり好まないであろう貧乳のパネルが正解のパネルの可能性がある?

てか正解って何?どの手紙も取ればいいんじゃないの?

「だったら最初は巨乳の方に……」ズボ

パネルに向かうその途中で転けてしまった。と言うよりは穴に落ちたと言った方が正しいと思う。

「落とし穴ってなんだよ!」

そう、巨乳派のパネルに向かったら落とし穴にハマってしまったのだ。

恐らく差出人が用意したんだろう、いや凝ってますねー

そこまで深い落とし穴ではないよ?膝まで埋まるぐらいに深さだ。

落とし穴から出て元の場所に戻ってまた考え直す。

これは差出人が貧乳だったから巨乳の方に進んだ俺の罰なんだろう、だったら貧乳の方に

「……………」ビシャーン!

次は落とし穴の中に泥水が入ってましたよ……!おかげで制服のズボンと靴が泥だらけになったじゃないか!

「くっ!最初からどちらも大好きを選べばよかったー!」

穴から抜け出しどちらも大好きのパネルに向かうと何も起きない!やはりこつちが正解だったんだな!?

「……………なにになに?」

『次は体育館裏、スコップの準備よーい』

『あ、後巨乳派には落とし穴、貧乳派には落とし穴＋泥水だから落ちないようにね、あ、もう落ちてるか』

「こ、このアマ!!」

舐め腐ってやがる!こんなこと書くなら最初から用意するなつての!てかスコップの準備よーいってなんだよ!?

泥だらけの靴のせいで足が重い中、次なる目的地なる体育館裏に向かった。

「……………は?」

『ここほれワンワン』

「スコップよーいはこうゆうことかー」

夕焼け色に染まる空を見上げながらそう嘆きスコップを探す旅が始まった。

旅なんて言ったがスコップなんてグラウンドの倉庫の中にあるだろ

「ツ!鍵かかってるし」

あれだよ、運動部のやからが鍵を持ってるんだつた!

「柊優!柊優さーん!助けて柊優さーん!」

プライドなんてものは俺にないから急いで柊優の名前を呼び助けを求める!あいつは部活中かもしれないがこっちは彼女ができる唯一のチャンスなんだ!無駄になんてできるか!

「なんだよ、部活中なんだけど?てかお前汚!靴泥だらけじゃねーか!」

「そんなのどうでもいいからグラウンドの倉庫を開けてくれ!」

「……………別にいいけど」

柊優はサッカー部のキャプテンから鍵を受け取り倉庫を開けてくれた。勿論スコップはあるから手に入れたよ

「ありがとう柊優!これで彼女ができる!」

「……………あいつ何言ってるんだ」

柊優はレイの頭がおかしくなったんじゃないかと疑いながら部活へと戻って行った。

それと同時にレイも体育館裏に着きパネルの下を掘り始めた。

それはもう掘って掘って掘りまくって、夕焼け色の空はもう暗くなり一番星が輝き出す空模様になっていた。

「い、一体いつまで掘ればいいんだよ……!」

もうかれこれ頭から足の先まで埋まるぐらい深く掘ったぞ?何かあるならそろそろ

「そろそろ終わってくれよー!」カン!

「ッ!」

掘ってみると何かに当たったらしい、石とかなら何度か当たったが音的に金属と金属がぶつかり合ったような音に聞こえた。てかさうであって欲しい!もう石は懲り懲りだ!

「は、箱だ!」

何かのクッキー?の箱かな?泥だらけだし暗くてよくわからん、クッキーってのは適当に言ったんだ

「次はどこだ!」

まあ今日はもう無理だから明日になりそうだな、用意してくれた差出人さんすまん

箱を開けると何度も見た便箋が入っていた。もちろんその中には手紙も入っておりその中身にはこう書かれていた。

『神崎レイ君……君が好きです』

「ッ!」

これは完全に!

「ラブレターだあ!」

まさかあの手紙からこうなってあーなって本当にラブレターに繋がるなんて!もうコレは嬉しい!

「でも差出人がわからん!」

ここまで凝ってラブレターを出した人の名前と容姿もわからないなんてそんなのはダメだろ!?

「でも今日はとりあえず帰ろう、料理作らないと姉貴が腹空かして死んでしまう」

穴から出ようとすがそう簡単に抜け出せない、なんせ自分の身長並の深さも掘ってるからな……差出人の人はどうやって埋めたこと

やら

「よいしょっと」

地面に手を置き身体も持ち上げて穴から出ようと試みると上手く行き上半身まで地面に出すことができた。後は上半身の力ではい出れば……!

「そこまでだよ」

「ッ!」

あまりにもおかしい声の人から話しかけられると同時に頭へ拳銃を突きつけられる。

「一旦そこで止まろうか」

「い、いやー結構きついんですけど」

「撃つよ?」

「はい!動きません!」

な、なになに?拳銃突きつけられてるよね!?拳銃?いやエアガンだよね?!

「し、質問いいですか!」

「いい、あ、」スー

おーい!なんか声がおかしいと思ったらヘリウムガス吸ってんのかよ!?さつき少し地声出てたよね!」

「いいよ」

「……ラブレターの差出人?で、いいのかな?」

「そうだよ」

「なんでこんなことするの?俺の事す、好きなんですよ?」

「ッ!す、好きだけど……」

「今だ!」

「とうー!」

勢いよく穴から抜け出し携帯を取り出してライトをつけて差出人に光を当ててる!

さあ!その可愛い顔を見せてもらおうじゃないか!

「ッ!か、紙袋!」

「……僕の正体を知ってしまったね」

頭に紙袋をかぶり口元だけ僅かに穴が空いていた。多分だけヘリウムガスを吸うための穴だろう。

服装に関しては私服…だよな？白いワンピースを着ている。そしてその胸元はもう大きい何かが、いやメロンがついていた。

「なんで私服でいるんだ！」

「……制服だと学年と学校がバレちゃうよ」

「？あとなんで顔隠してる！」

「僕は恥ずかしがり屋さんなんだよ」

恥ずかしがり屋さんだからこそこんな凝ってる告白の仕方を選んだのか？

「……いや、さすがに誰かわからないと付き合えないっすよ」

「それは…スー、困るね」

まだヘリウムガス吸うかよ!?そこまでして身元バレたくない?ならなんで俺に告白したんだよ!?

「じゃあこうしよう、僕とゲームをしようよ」

「ゲーム？」

「そう、僕を探し出すゲームだよ」

「……要するに俺が君を見つけ出して問い詰めるってことかな？」

「そうだね」

犯人探してきなやつか、犯人に証拠はこれだー!って言って自首させるように俺も証拠を出して自首させる…。

「でもそれは俺が不利すぎる、それに君は俺が君を見つけないと付き合えないじゃないか！」

なにも情報がないなかから君を当てることは不可能に近い、てか不可能だよなそれは!?

「だったらレイ君が死にものぐるいでも僕を探し出すようにするよ」

「……これ、なーんだ」

「ツ！そ、それは！」

差出人は黒いノートを見せびらかすようにヒラヒラさせていた。

それは嫌でも覚えているぞ、何せ俺の黒歴史…闇に関する話が沢山書かれている痛いノート、確か中三の頃道に捨てて誰も拾ってないこ

とを祈ってたやつだ…!

「この内容を小説家になろうぜ!に…そうだね、月の初めに1話ずつ投稿するよ」

「それだけはやめてくれよ!」

俺が厨二病をこじらせていた時の痛いストーリーがネットに公開されるなんて!

まさかに公開処刑だよ!今日になって書いていたことを後悔したよ!公開だけにね、なんつって

てか月初めって…今日は4月29日、後数日で5月だからすぐに投稿されるじゃねーか!?

「でも確かにレイ君が不利すぎるからヒントを与えるよ」スー

「…:僕はガールズバンドの25人の中にいるよ」

「が、ガールズバンド?」

「あと一人称はあえて僕にしてるし、胸もパット入れてるかもだし、入れてないかもだし?」

「髪型だつてショートとロングわからないようにしたし?」

「喋り方だつて変えてるからね♪」

なるほどねーその胸は偽物かもしれないし本物かもしれないってわけか、一人称も私だつたら私で話すやつに絞ればすぐにバレる

「神崎レイ君、僕が誰だか当てられるかな?」

「…:上等だ!25人の中から探し出してやるよ!」

25人の中に1人俺のことが好きな人がいる。そいつを見つけ出して俺は…その娘と付き合つてリア充になる!

「それじゃあレイ君、待つてるからね」

謎の差出人は数歩下がった後またヘリウムガスを吸い出した。

「私は神崎レイ君のことが好きです」

「あたしは神崎レイ君のことが好きです」

「…:君のことが好きです」

「ツ!」

最後の大好きです。だけは地声だったのだろうか女の子の可愛い声だった。

だけど初めて告白された喜びからかあまり鮮明に声音を覚えることはできなかつた。

またまたヘリウムガスを吸ったかと思うと

「またねー!」

と言い差出人は走ってどこかへ行ってしまった。ここで追いかけて頭に被ってる紙袋を破れば誰かなんてすぐにわかる。

でも：俺はこのゲームに乗るよ、だってなんか燃えないか？普通の告白じゃなくて驚いたけどさ、こんな告白された人は人類の中でも俺しかないだろ!

「よっしやー!待ってろよな!未来の彼女!」

うおおおおお!と雄叫びを上げながら掘った穴を埋め直し、泥だらけのままレイ家へと帰っていった。

さあ、物語の始まりだ。レイはガールズバンド25人の中からラブレターの差出人を当てて晴れてリア充になれるのだろうか!それともゲームオーバーとなるのか!

今までの高校生活とひと味もふた味も変わるレイの学生生活が今!始まる。

幼馴染っていますか？

先日、神崎レイこと俺は差出人不明のラブレターを受け取った。中身を開けてみると様々な試練が用意されていて全てをクリアした俺は晴れて差出人から告白をされたのであった。

しかし……差出人は不明のまま、わかるのはガールズバンド、25人の中の1人という情報だけ、本人は僕を当てて欲しいって言うもんだからゲームに乗ったが

あまりにも難しいゲームですよね!?

「……って夢を見たのか」

「ちげーよ！現実だ！このラブレターを見ろ！」

昨日の出来事を親友の柊優に話したら夢だと言いやがった！夢ではないことを証明するため俺は泥だけのラブレターを見せつけた。

「きたねーな」

「しょ、しょうがないだろ？地面に埋まってたんだからさ」

「でもこれ手書きじゃないよな？Wordとかで打ち込んでるやつだろ」

人が書いたような字ではなく電子文字だ。多分直筆で差出人を特定されないように書かなかったんだろう

「これお前が作ったんじゃないの？」

「だから違うって！信じてくれよ!？」

「わかった、わかったから少し声をおさえろ」

「ツ！すまん」

今は4限目、授業中だけど幸運なことこの2年A組は自習時間なんだ、生徒各々がそれぞれ活動をしている。

勉強したり携帯いじったり、俺達みたいに喋ってるヤツらだっただらほらいる。だけど大きい声を出すと注目はされる。

「てか紙袋被ってるってなんだよ」

「彼女は照れ屋さんなんだ」

「拳銃突きつけられるてなんだよ」

「彼女は照れ屋さんなんだ」

『ん?』

照れ屋さんなんだ、で済まされる話ではないな、でも多分だけエアガンだから大丈夫だよね!?

「その差出人はガールズバンドの中にいると」

「そうなんだよ、差出人を探したいけど難しいからさ」

「その差出人って呼び方やめよう」

「いや、でもどう呼ぶんだよ?」

確かにずっと差出人や、彼女とか呼ぶのはどうかと思う、彼女ってのは彼女ではなく彼、彼女の彼女な! 彼氏ずらなんてしてないから! 「拳銃突きつけて脅してきたから……アサシン? とか」

「よし、アサシンは誰なのか探し出さないと」

「アサシンでいいのね」

自分で案を出したくせに納得してなかったってなんだよ! だったら案出すなよな!?

「でだ、俺が知りうるガールズバンドはAfterglow、Roselia、パスパレだけだ」

蘭達のAfterglowとテレビでよく見るアイドルバンドのパスパレ、あとはRoseliaだな、バイトの先輩が所属しているんだよ

「これがPoppin'Party、そしてハロー、ハッピーワールドだな」

「なんでお前は知ってるんだよ」

「なんか今めっちゃ人気らしいんだよ、部活のやつがハマってるらしくてな」

柊優のやつがそう言いながらそれぞれのバンドの写真を見せてきた。てかそ、そんな人気なのか?

ふ、そんな人気者の誰かから告白されるなんて俺もモテる男なんだなって自覚しちまうよ全くな!

「てかお前美竹さん達と仲良いだろ?」

キーンコーンカーンコーン

柊優がそう言うと言と昼休みを知らせるチャイムが教室に鳴り響いた。

その途端教室はいつきに空気が軽くなったような感じだった。

「そうだよ、蘭達に確認すればいいんだよ！」

「多分だけど俺に相談する前に気づくべきだったな」

いや、でもまて…もしもだ、もしもA f t e r g r o wのメンツの中でアサシンがいるとしよう。

素直に聞いて答えてくれると思うか？…いや、そんなの気にしてたらいつまでたって前に進めないよな！

「よし！お前ら久しぶりに昼でも一緒に食べないか！」

蘭達が固まって食べようとしたもんだから一緒に食べようと提案する。

「レイから飯食おうって誘うなんて久しぶりだな」

「俺とお前らの仲だろ？たまには飯でも食べようぜ！」

宇田川巴、男っぽい口調だが乙女な一面も持ち揃えている。ギャツプ萌えに注意、だちななみにバンドではドラム担当

「…なにが目的？」

「聞きたいことがあるからだな！」

美竹蘭、特徴はあの赤メツシュ、俺に対して当たりが強い気がするが2人の時は普通に話してくれるなぞの女、バンドではボーカルとギター担当

「聞きたいことってなに？」

「後で聞け！」

上原ひまり、A f t e r g r o wのリーダーでありみんなのことを誰よりも大切にしている優しい娘、ちなみに胸が超デカイ、バンドでは先程も言ったがリーダーでベース担当だ

「レイ君弁当自分で作ってるよね？凄いな！」

「まあ家事全般は得意だからな！」

羽沢つぐみ、商店街の羽沢珈琲店の看板娘、頑張りすぎな一面がありみんなからつぐってると言われることが多い、キーボード担当

「だったら今度からモカちゃんの弁当も作ってきてー、あ、できればパンがいいかな？」

「おかげぐらいなら作ってきてもいいぞ」

青葉モカ、マイペースなやつでのほほんとした口調が特徴、パンが好きすぎてパンの夢を見るほど大好き、ギター担当

そして俺がなぜこいつらと仲が良いのか、それは幼馴染ってやつだからだ。

小3から小6まで同じクラスで結構な頻度で遊んでいたんだ、まあ中学進学と同時に別れたんだけどな

なんせ蘭達は当時女子中だった羽丘へ、俺はそこら辺の中学に通っていた。

んで、羽丘が共学になって晴れて合流！一年次は蘭と俺が同じクラスだったな

「あ、お姉さん元気にしてる？」

「もうちょー元氣、だけどひまりにあったら怒られるからな」

「なんで!？」

なんでって言われてもな、それはあつたらわかるよ

「てかお前ら普段から俺も誘えよ、ずっと柊優と食べてるじゃないか！」

「夜桜と食べてるからいいじゃねーか」

「まあそうだけどさ」

こーうなんていうの？女子と食べたいじゃん!？」

「れーくんその唐揚げひとつちようだい〜」

「許可する前に取るなよな」

「あた、えっへへー相変わらず美味しいですな〜」

モカにチョップするもあたと可愛く答えるだけで痛がる様子なんてなかった、てか痛がったらそれはそれで困るな

「レイ君私も貰っていい？代わりに私の唐揚げあげるから！」

「つぐみ、それは交換ってやつだろ」

「うん！交換！」

ぬあー！な、なんだこの100万ドル以上の笑顔は！小さい頃から笑顔が可愛いことは知ってたが高校生になってさらに可愛さを増したなつぐみの野郎…！

「盛り上がってるのはいいけど聞きたいことって何？」

「おー！忘れてた！」

アサシンの正体を聞くんだった！と、その前に彼女達にとって俺のことをどう思っているかの確認もしないといけないな

「俺の変わったところを教えてくれ！」

最後の小6からどう変わったか話を聞かせてもらおうじゃないか！

「変わったところか？……そうだな、髪型とかか？」
「うんうん」

髪型は高校生になったからツーブロックなるものを入れてみた。美容院に行つて頼んだ時何ミリにする？つて聞かれて戸惑つたのは内緒だ

「あ！声が変わつたね！」

「そりゃー声変わりもしますよ!？」

つぐみさんそれは強制的に変わるものなんすよ！

「身長伸びたね！今何センチ？」

「175センチだ！」

それなりの身長だと自負してるよ、いやーチビじゃなくてよかつたよ、いや別にチビをバカにしてるんじゃないんだ。チビじゃなくてよかつたと思つてるだけだ

「んー髪色変わつた？」

「変わつてねーよ！てか適当なこと言うなよな!？」

ずっと紺碧色の地毛のままだよ！モカのやつ適当なこと言いやがって！ちよつとはなんかあるだろ!？」

「蘭はなんかないのか？」

「レイの変わった所……?？」

「んー、お、男前になった、とか？」

『……………』

え？それつつまりさ

「ツ！ち、違う！今のなし！レイはキモイから話しかけないで」

「なー！それはいくらなんでも俺泣くよ!？」

「蘭くさつきのは本心ー？それとも冗談？」

「じよ、冗談に決まってるじゃん！」

そ、そんなに強く否定しなくてもいいじゃないか！少なくともガキの頃よりかは男前にはなってるだろ！

もーいい、貴様らの俺への印象はわかった、わかった上で聞いてやる！

「単刀直入に聞くぞ」

『うん』

「俺のこと好きなやつは手を上げろー！」シーン

うんわかってた！わかってたよ誰もあげないことぐらい！でも聞くだけいいじゃないか！

誰か変な反応したらその人がアサシンの可能性もあるし？色々な可能性をかけて聞いたが無駄だったな!?

「あ、はーい」

『ツ！モカ!?!』

も、モカのやつが手を上げやがった！え？モカがアサシンだったのか!?!すぐに見つかったじゃねーか！いや、聞いてみるもんだな！

「今日山吹ベーカーリーに行きたいのでシフト代わってくださいーいな」

「お前は紛らわしいことすんじゃねー!」

「ほ、ほめんなはーい（ごめんなさい）」

モカの頬を引つ張りながら俺はそう言う。モカのやつ何か喋ってたが多分ごめんなさいって言ってたんだらう

てかバイトのシフト代わってくれと聞いたらわかるが俺とモカの

バイト先は同じなんだ、普通のコンビニ店員だよ

「山吹ベーカーリーってパン屋さんか」

「そうそう、ここだよー」

「ツ！」

モカが見せてきた紙袋、それはモカが中食のために買ってきたパンを入れていた紙袋だろう。

でもその紙袋があまりにもアサシンが被ってた紙袋に似ている気がした。

「ちよーモカこれ借りる！」

「もう、なに？モカちゃんはもうパン全部食べ終わったよ〜？」
「ぱ、パンはどうでもいいんだよ！」

自分の席に戻りシャーペンにて1箇所穴を開ける。それはアサシンがヘリウムガスを吸うための穴と同じ大きさぐらいのな

「ひまり、ちよつと頼みがある」

「え？な、なに？」

「この紙袋を被ってくれ！」

「……え？」

戸惑うのも無理はない！だけど……やるしかない！アサシンは巨乳だった！ならばひまりの可能性だってあるだろ！いや巨乳って言ってもパット入れてたかもしれないけど似合うはず！

「頼む！ひまり！一生のお願いだから！」

「い、いやでも……」

「1回だけでいいから！頼むよ！……先っちょだけでいいからさ！」

「そ、そそそれは別の意味に捉えられるでしょ！このバカー！」

ひまりにビンタされたレイは午後の時間ずっと右頬には綺麗なもみじが浮き出ていたのであった。



午後の授業も終わりHRが終わると放課後と言う名の自由がやってくる。

部活の生徒は部活へ、その他の人達は自分の好きなような時間を過ごせれる、なんせもう学校は終わってるからな

「れーくん、一緒に帰りますか〜」

「帰るってよりパン屋に行くだけな」

あの後モカとパン屋に一緒に行く約束をしたんだ。

理由はあの紙袋だ。見たところアサシンが被ってた紙袋は山吹ベーカーリーのだと俺は思う。いやそう勝手に決めつけてるな

そこで店員さんもガールズバンドの1人だと柊優から話を聞きいたためワンチャンアサシンがパンを買っていたのなら誰かわかるか

なと思って向かうんだよ

「リサさんシフト代わってくれてよかったねー」

「ああ、俺が土下座したからな」

本人の目の前でなく電話越しで土下座をしたら代わってくれらること、ありがとうございます！

「でもなんで山吹ベーカリーに行きたいの〜？」

「……モカが美味しそうに食べるから気になったんだよ」

嘘ではない、学校でもバイトでも美味しそうに食べてるもんだから少しは気になってた所だ

てかモカはアサシンじゃないのか？紙袋なら沢山余ってそうだな、パン食べるし

ここは一度探りを入れてみるか

「モカは昨日放課後何してたんだ？」

「んー？モカちゃんは昨日家に帰ってその後…」

「その後？」

「…ふっふっふー教えな〜い」

「は、はあ!？」

そこまでもつたいぶって答えないのかよ!?!てか家帰った後何したんだ？まさか着替えて学校に戻ってきた？

あー考えれば考えるほどわからん!

「着いたよー」

「ツーココか」

商店街の一角にあるのは山吹ベーカリー、目的地だ。近くにはつぐみの珈琲店もあるんだな

「沙綾ー来たよ〜」

モカは店の扉を開けて中に入ったと思うとそんなことを言っていた。沙綾つてのはガールズバンドの人の名前だろう

「お、モカいらっしやい♪今日は…って！モカが男子と一緒にいる!？」

「ど、どうも神崎レイです」

「こちらこそ初めして、山吹沙綾です！」

山吹沙綾さん、か初めて見たけどわかる。めちやくちや可愛ええ!

この人がアサシンだったらどれだけ嬉しいことか！

って！違う違う！アサシンの正体は知りたくないけどこの人がアサシンだったらなーとか思ったらアサシンに失礼だろ!?

「なににーモカの彼氏?」

「だってさー沙綾には話しちゃう?」

「付き合ってねーだろ!」

俺はいつモカと付き合い始めたんだよ!冗談でもそう言うことは言っちゃいけないだろ!少し期待しちゃうだろ!?

「……へー付き合っていないんだ」

「?」

一瞬間があっただけど気のせい?だよな

「モカごめんね?来てくれたのに私これからバンドの練習があるんだ」

「練習かーなら仕方がないね」

「いや山吹さんいなくてもパンは買えるだろ」

「あつはは!確かにそうだよね!ごめんね神崎君」

「い、いや謝ることではないんと思うんだけど」

これはあれだろうか、俺が余計なことを言ったから少し怒っちゃたのかな?だったらごめんなさい!

「あ、そうだ山吹さん」

「沙綾でいいよ、私もレイ君って呼ぶからさ」

「ツ!じゃ、じゃあ沙綾さんに聞きたいことがあるんだ」

「?何かな?」

丁度よくモカはパンを選びにどっか行ってるしこのタイミングで聞くのがベストだろ!

「昨日の放課後は何してた?」

「え?ほ、放課後?」

「ツ!ち、違うんだ!別に何か深い意味があつて聞いているんじゃないぞ!ただそのあれだ!なんか人の生活って気になるじゃん!?!だ、だから聞いただけでさ!」

「こいつヤバイやつじゃね?」って思われなかったためにそれとなく適当

な理由を言ってみたが通じてるかな？

「まあ人それぞれだからね、き、気にしなくても大丈夫だよ！」

「……あは、はは」

苦笑いしかできねーよ！

「昨日かー昨日はバンドの練習もなかったし家の手伝いもなかったから部屋にいたよ」

「それを証明出来る人は？」

「証明？あ！香澄と通話してた」

「か、香澄？」

「うん、同じバンドの子だよ」

香澄、香澄って戸山香澄じゃないよな？

「多分そろそろ来る……おーい！香澄！」

「く、来るの!？」

「一緒に有咲の蔵に行くって約束してたんだよ」

香澄と呼ばれた人らしき人物が遠くから手を振りながらはしつてくるけどやっぱり知ってる方の香澄だった！

「沙綾！遅くなってごめん！母さんがクッキー焼いてて食べてたら遅くなった！あ、これおすそわけ分だよ」

「ありがとう香澄」

「……………あー！ゼロ君！久しぶり！元気にしてた？」

『ゼロ君？』

くっ！パンを選んだはずのモカがいつの間にか戻ってきてやがった！

なんでここで戸山が来るんだよ！中学のメンツとは会いたくないのになんで会うかな!？」

「ゼロ君どうして中学の送別会来なかったの？」

「その呼び方をやめろ！」

「だってゼロ君がそう呼べて」

「ああああああ！忘れてくれ！」

なぜ俺が戸山にゼロ君がと呼ばれているのか、それはだな…俺と戸山は同じ中学に通っていたんだ。そして当時の俺は厨二病と言う世

にも珍しい奇病にかかっていたのだ。

そしてなぜゼロ君なのか、それは俺の本名に意味があるんだ。

俺の国籍上の名義は神崎零^{レイ}、本当は漢字で零と書いてレイと呼ぶんだ。ほらあれだよ、濱を浜^{レイ}って書くように零をレイって変えてんだよ。

そして零はゼロって読むだろ？それをいいように利用して

「ふっ、我^{オレ}のことはゼロと呼べ」

なんてクラスの連中に言い戸山のやつは馬鹿正直に俺のことをゼロ君と呼んでいたんだ。まあそう呼ばれて喜んでいた俺もいたんだけどな

「れーくんの中学時代かー気になりますな〜?」

「聞きたい?まずねー自己紹介から」

「ストップ!ストップ!俺の話はいいだろ!?!ほら!戸山なんか話してなかったか!?!」

「そう!なんで送別会来なかったのかなーって!」

そ、送別会!?!そんなのあったなんて知らなかったよ…ってことは俺は誘われてないってことだよな

「……ふっ、来なかったじゃない、行かなかったんだ」

「そうだったんだ!来ればよかったのにね」

誰が行くかそんな地獄みたいなどころ!てか中学のメンツとは会いたくないから誰も選ばない羽丘を選んで必死に勉強して入学したのに会ってるんだよ!?

ま、まあその理由の他には可愛い子がいるからってのもあるけど

「レイ君……いじめられてたの?」

「いじめられてねーよ!戸山とはまあ、なんやかんやでよく話してたし?」

「うん、でも何話してるか全然わからなかったけどね!」

「お前もいい勝負してただろ!」

キラキラドキドキ?なんだよその効果音で話す的なやつは!厨二病の俺ですらわかかなかったぞ?てか戸山も少し浮いていたような?

「もう俺の中学時代の話は終わり!」

戸山のやつもガールズバンドの1人だ。だけど沙綾さんと通話してたって話だからアリバイがある。

これは本当に先が思いやられますよトホホ

でも：モカのやつが昨日の放課後の話をしたがない、それはやっぱりモカがアサシンだからか？

んーバイト先一緒だし？話せる時に話して探る形で進めるしかないな

「あ、そういえばれーくん」

「なんだいモカさん？」

今神崎レイさんは人生という名の難題について考えていたんだよ、アサシンを探すってことにさ

「今度ライブあるけど来るー？沙綾もでるよ」

「私も出るよ！」

ら、ライブか：あまりそうゆう陽キャが行くような場所は好まない俺だがガールズバンド全員が参加するのなら見に行かざるを得ない

「それってさ？Roseliaとえーとハロー、ハッピーワールド？とパスパレは参加するのか？」

俺の質問に対して3人はわけがわからなかったのかお互い顔を合わせた後笑いながら答えた。

「みんな参加するから大丈夫だよ！」

「私が誘ったから問題ありません！」

戸山が誘うなんて不安しかないだろ、本当に来てくれるのか？

中学の時とかもあるから戸山には少し不安があるんだよ

「そんなことを気にするとは？れーくん好きな人がガールズバンドの中にいたりして？」

「ツーな、なわけないだろー」ドン

全力で否定した時に机を思いつきり叩くと並べられたパンのいくつかが床に落ちてしまった。

『……………』

「落とした分全部買います」

「…………お、お買い上げありがとうございます」

なんとも言えない空気となり俺は逃げるように山吹ベーカーリーを
後にしたのであった。

へんてこな姉貴つていますか？

山吹ベーカーリーにて大量に落ちたパンを買った後は特にすることなんてないから寄り道せず家に帰っていた。

「それにしても謎だ」

アサシンは恥ずかしがり屋さんだからあんなことをしたって話してた。確かに好きな人に告白するのは難しいことだよ？

だけどあの告白の方がさらに難しいんじゃないのかなと俺は思うね！

まあ告白の仕方は人それぞれなんだろう、好きですって言ってくれたアサシンの気が変わらないうちに早く見つけないと彼女になつてくれなくなってしまう！

「ライブである程度見定めないと」

A f t e r g i o w 及び沙綾さん、戸山、そしてリサさんは俺のことを知っている。ならばその他の人に会った時にどう反応されるのか、これが見ものだな

と、そんなことを考えている時ふと目の前の人物を見てしまった。

「……あ、やあ！レイ君！」

「結弦さん！あ、仕事帰りですか？」

「そうそう、全く君のお姉さんには困ったもんだよ」

見るからに全身から力が抜けているように歩いていた人は畠山結弦はたけやまさん、姉貴の仕事仲間と言えればいい？よな

「今回も締切ギリギリで出してくれてさー！全く僕を苦しめることに関しても天才すぎるよー！」

「ま、まあ姉貴は窮地に立たないとやる気出しませんからね」

あのぐーたらな性格はすぐに治せと言っても治らないレベルだよ

「結弦さんはもう仕事終わりましたか？」

「何言ってるんだい？僕はこれから本社に戻って編集長に報告、残業確定ルート突入ですよ」

「そ、それは大変ですね」

「本当だよ！君のお姉さんがすぐに原稿を出せばいいものを！」

「今の時代メールで送れるからわざわざ来なくても…」

「君はあの人が自主的に送ってくれると思うかい？」

「思いません！」

自分の姉貴だけと言われてみればあの人が自主的にするとは思えないな！

「……えーと、パン食べますか？床に落ちちゃったやつなんですけどね！」

「床に落ちたやつ？僕みたいな人には床に落ちたパンがお似合いだよ？」

「い、いやーそうじゃなくてですな」

慰めようと思つてパンを進めたが落ちたなんて言わなきゃよかったよ！数秒前の出来事に後悔する。

「……まっ君もそのうちうちに来る運命だから気をつけててね」

頭をポンポンと叩いたあと結弦さんは振り返ることなくて本社に向けて足を動かしていた。

「俺も帰るか」

帰つて姉貴に飯作つて寝よう、うん今日はもうアサシンのことは考えない！いいな！

そう決めたレイは落ちてないパンを取り出し食べながら帰つたのであつた。



「ただいまー」

家に着きただいまと言えば

「ぶはー！あ、おかえりレイ！」

「……服着ろよ姉貴」

ドアを開けて目の前に現れたのチューハイを片手に持ちパンツだけを履き、上半身何も着てない姉貴がおかえりと出迎えてくれた。

「あたしの胸見ても意味ないっしょ？だつて無いに等しいからね！あつはは！」

胸を張るも胸は微動だにしない、揺れるものすらついていないのだ。

「自分で言ってる悲しくならないのかよ!？」

「別に思わないよ!あー巨乳娘ども滅ばないかなー」

「思ってるじゃねーか!」

姉貴はリビングに向かいテレビを見ていた。そんな中俺は一度部屋に戻り制服から部屋着へと着替えてリビングに向かう。

「姉貴食いたんもんある?」

「あたしハンバーグ食べたい!チーズ乗ってるやつね!」

「ニートにそんな贅沢飯は食わせれません!」

「ニートじゃないよ!今日だって働いたもん!結弦君に聞いてみなよ!」

「ツ!はあーハンバーグね、了解です」

確かに今日は働いたな、この姉貴が何の仕事をしているのか、先程結弦さんとの話を聞いていた人で察しのいい人ならわかると思う。

何を隠そう姉貴は小説家なんだ、それもラノベ作家。

株式会社KEDOKAWAが発行しているライトノベル系文庫、弦巻文庫にて「義妹なら結婚できるんですよ?」がタイトルのラノベを書いている神奈先生こと神崎滯奈、俺の姉貴だ。

え?KEDOKAWA?KODOKAWAじゃないのか?何言ってるんだよ、この世界ではKEDOKAWAなんだよ!間違えんな!

そしてこの姉貴はそれとどまらない!この人はラノベ作家でありながらイラストレーターでもある。ラノベの挿絵なんて自分で書いてるんだ。

話を考えて絵も書くならそれって漫画家になればくない?と思っただその君、大丈夫!姉貴は自分の書いてるラノベを漫画化させてるからな!

よくある話だと漫画化されたら絵柄が違う、とかで読者が漫画版を読まないって話があるが神奈先生が書いているから変わらないとのことですさらに人気が出たんだ。

と、聞く限り作家にしては完璧な人だと思うがそうではなーい!

全然原稿を出さないで有名な先生ですよ!?

てか説明長!もういいだろこれ!

なんやかんやでハンバーグは完成!早速食べようか

「姉貴ーできたよ」

「おー!美味そうですな!では早速いただきまーす!」

今は服を着てくれているがズボン履かない、うん意味がわからん、家でもズボンぐらいいちちゃんと履いてくれよ!

「レイーストロングレイとってー」

「……1日1本が約束だろ?」

俺が帰ってきた時に既に1本飲んでいたら止めに入る。ぶっちゃけ姉貴が酔うと普段よりさらにうぎくなってしまう。

「いいじゃん!いいじゃん!今日頑張ったんだよ?」

「……何したんだよ」

「今日は短編集の締め切りだったから書いたんだーぶっちゃけ本作より気楽にかけるからずっと短編集書きたい」

「それあんたが言ったらダメだろ!」

姉貴の設定が濃すぎる!なんなんだよ!あと設定って自分で言うてるけどなんだよ!

「はやくストロングレイー」

「ストロング零ゼロをストロングレイと呼ぶな!」

「だってこの方がいいって、書きやすいし?怒られないし?」

「書きやすいって何!?怒られないってなんだよ!」

てか色々怒られそうんだけど大丈夫だよ!ちゃんと違うって分かってくれますよね!?

「……はあ、ラスト1本だぞ」

「わーいありがとう!レイが小説書いたらあたしが挿絵担当してあげるよー!」

「しよ、小説は書かぬーからあああ!」

昔聞の小説を書いて痛い目にあってんだろ?アサシンに拾われて脅されてるんだよ!

あ、明日で5月1日じゃん、あの話が小説家になろうぜ!に投稿さ

れるのか…まあどーせ人気でないし？投稿したところで俺だってバ
レないから大丈夫さ。

ってどうかアサシンのこと考えてんじやんかー今日はもう絶対考
えないぞ。

「ぶはー…このために生きてる！ストレイ最高だあ！」

「……………」

姉貴の言葉に何も返事をせず俺は静かにご飯を食べていたので
あった。



ライブ当日、学校にてモカにチケットを渡された時蘭がめちやく
ちや嫌そうな顔をしていたのを見て見ぬふりしてガン見してた。

「ライブなんて久しぶりだなー！あ、ストレイ買ってくる〜♪」

当初の予定は一人で来るはずだった…のに！モカのやつがな
ちゃんも連れてきなよなんて言うし？あ、なーちゃんつてのはうちの
姉貴だ。

「姉貴ーライブ行く？…ってあんたは仕事以外であんまり外でない
か」

「それってさもしかしてC i R C L E!?!だったら友達働いてるから行
く！」

ちなみにだが答えてないのに勝手に判断され今に至る。

ストレイを買ってきた姉貴は大層満足そうな顔をしながらライブ
ハウスへと向かった。

中に入るとそれはもううるさいのなんの、ガヤガヤワーワー、人が
多いから仕方がないがライブ始まる前に静まるのか？

「あつははーうるせえー！人がご」

「それは言わせねーぞ?!」

いくらあんたが売れっ子の、超売れっ子のラノベ作家としてもその
セリフだけは言わせないぞ！

「てかライブハウスに飲みもん持ち込んでいいのかよ！」

「バレなきや大丈夫ー」プシュ!

そんなことを言いながら2缶目を開ける姉貴はもう無視しようとして心に決めたレイだった。

携帯をいじること数分ステージにライトが点灯した、のと同時に「いえーいーみんな盛り上がり上がってるー?」

『おー!』

「どうも私達ー!」

『PoppinPartyです!』

最初に登場したのは戸山達か、ちなみにだがタイムテーブルはPoppinParty:は長いからポピパ、Afterglow、Roselia、パスパレ、最後がハロー、ハッピーワールド?略してハロハピ?だったな

てか戸山の衣装凝ってんなー、あれって買ったのか?それとも作ったのか?作ったとしたら手際良すぎないか!?弟子入りしたいよ。

「えつとー……あーゼロ君ー!来てくれたんだね!」
「なつー!」

満面の笑みで俺に手を振ってきたため視線が一気に俺に刺さる。この視線は昔の自分を思い出しそうにくらつときた。

「何言ってるんだよ香澄!ゼロなんて名前のやつがいるわけないだろ!」

「いるって有咲くほら!あれがゼロ君!」

「ゼロ君じゃねーよ」

戸山には聞こえない声で言うが意味なんてない

「大丈夫だよ有咲、ゼロ君はゼロ君だから!」

沙綾さん!?あなた俺のことレイ君と呼んでくれてませんでしたっけ!?

「ゼロ君私のギター見ててね」

「おたえ知り合いなの!」

「ううん、知らないよー」

お前誰だよ!と、心の中でツツコミ、もしここで大声で言ったとしてもさらに注目されるだけだ、もうライブなんて来なきやよかつたよ

「か、香澄ちゃん早く始めないと時間が…」

「そうだねりみりん!ではまず1曲目!」

あのりみりんと呼ばれてた子可愛いな、気が弱さそうだし?恥ずかしがり屋さん?…てことはアサシン候補!?

ライブ来ててよかったのかもれない!

なんやかんでポピパの演奏は終わり次のAfterglowへとステージの主演は変わる。

「Afterglowです!まず1曲目は」

「すとつーぶ蘭」

「…なにモカ」

ぬへ、ライブ本番でもその露骨に嫌そうな顔はするんですね、蘭さんや

「香澄達れーくんになんか言ってたし?蘭は言わなくてもいいのかな?」

「…言うことなんてないし」

「なーちゃん来てるらしいよ」

「ツ!ええ!」

そう言えば蘭って

「うおおおおお!蘭ちゃん可愛いよ!こつち向いてよお!」

「げ、本当に来てるし…!」

姉貴のやつあのメンツの中で蘭のことを一番に気に入っているからな、理由は知らんけど。

「滯奈さん相変わらずだね!」

「あれって大丈夫なのかな?…酔ってそうだけど」

「あーもうお酒飲める齢になったのか」

あのー俺が言うのもあれだがさ君達ライブしに来たんだよな?雑談しに来たんじゃないよな?…だったら早く歌えよ!

「ツ!話がそれました、まず1曲目は…」

蘭は俺の心の声が聞き取れたのか知らないが雑談は終わり蘭達Afterglowのライブが始まった。

戸山達とは違う見方って言うに変に聞こえるけど、こうなんていう

の？幼馴染達が揃いも揃ってライブ活動してるってなんかいいよな。

……あれ？俺ってハブられてるのかな？いやいや、違うよね!?

「蘭ちゃん達大きくなったね……特にひまりちゃん、あの胸おかしいでしょ」

「……それはわかる」

「ああー！やけ酒だあー！」

酒と言うがストレイド、だけどアルコールの度数はチューハイの中でも高い方だと思うけどな、いや知らないけど。

「ありがとうございます！」

蘭ではなくひまりがそう言いAfterglowの出番は終わった。みんな忘れてるかもしれないから言うがAfterglowのリーダーは蘭ではなくひまりだ。

「次はRoseliaか」

リサさんいるし？ちよつと興味あるかも。

「Roseliaです、今日は来てくれ…ッ!？」

なんだなんだ、話が止まったぞ？

「どうして……あなたが？」

なんかこつち見て言ってるぞ？え!？俺のこと見て驚いてるのか!?

あの人は確か湊友希那さん、リサさんがよく友希那く友希那ー!？って言ってたから知ってるぞ、それに学校も同じだ。

「……友希那さんー？」

「ッ！まずは1曲目、最初からとばすわよー！」

Roseliaのライブが始まったが耳になって全く入ってこない、湊さんは俺を見て驚いていた。

ではなぜ驚いていたのか、それは一つしか考えられないだろ。

「湊さんがアサシン？」

だけど先程驚いたのは俺じゃなくて隣の姉貴だったかもしれない、自慢じゃないがそこそこ有名人だ。サイン会もして顔バレてるし知っててもおかしくない。

「俺を見て驚いてたわけじゃないよな」

自意識過剰すぎっての！あ、あんな人が俺に興味持つわけないだ

ろ、あれ？自分で言ってる悲しくなってきたんだけど。

Rose liaのライブが終わりメンバーがステージを退場しようとしたその時、

「……………」

湊さんだけその場から動いていなかったのだ。

「友希那ー次は日菜達だから早く退けないと」

「…………少しだけ待ってくれないかしら」

「？う、うん」

何か重大発表でもあるのか？

「……………」モジモジ

なんかもしもじし始めたぞ、それになんか頬も少し赤そうだ。緊張してんのかな？

「…………またね」ヒラヒラ

『はっ！』

俺を含めてみんなが一齐に反応した。何故ならあの湊友希那が頬を赤めながら手を振っていたのだ。

それも俺を見て、な！

あれは完全に俺を見ていた！なんなら歌ってる時もチラチラ見たぞ！これは……やはり湊さんがアサシンなんだ！

と有力候補を見つけたところで

「うっせえなー！あれは俺に向けて手を振ったんだよ！」

「冗談じゃないわ！友希那様は私達に手を振ったのよ！」

いやいや俺だろ！私だつて！と、自分達に手を振ってくれたんだと観客のみんなは思っているようだ。

ふっ、違うなお前らじゃない！俺にだろ!?

「これは今度調べないと」

幸いなことにリサさんは湊さんと仲がいい、ならば話をつけてもらって……バイトの時話すか。

「あれ？姉貴？」

隣にいたはずの姉貴の姿がない、んーまだパスパレとハロハピが残ってるけど……湊さんがアサシンの可能性高いし今日は見なくてい

いかな。

パスパレ、ハロハピフアンの皆さんすみません、姉貴が心配なので探させてください！

会場から抜け出しホームに戻るも姉貴の姿はない。帰ったのか？

「き、キモチワルイ」

「もう酒弱いのに飲むからよ」

「ツー」

声がる方向に向かうと

「はあ…何やってんだよ姉貴」

ソファアーに座りポリ袋に向けてゲロゲロパーティをしている姉貴こと神崎滯奈がいた。その付き添い？みたいな人がいる。

「…あー零君！久しぶり！」

「??？」

え、誰だよこの美人さん、俺こんな人と知り合いだったけ!?

「レイ、あれだよ、友達のまりなだよ」オロオロ

「吐くか喋るかどつちかにしろよ！気持ち悪いな！」

思い出したぞまりなさんか！いやあの人か？あの人があんなに美人になるなんて…やっぱり彼氏とかいるのだろうか。

「まりなさんうちの馬鹿姉貴がすみません」

「いいよいいよ、でも…飲み物を持ちいれるのは感心しないかな、それもお酒とか」

わかる。俺はわかるぞ…笑ってるが目が笑ってない、怒ってるやつだ

「まりなごめんってーそんなに切れてたら彼氏できないよ？」

「ああー！言っちゃいいけないこと滯奈が言った！もう知らないからね！」

「すみませんでした」オロオロ

『だから吐くな！』

こんなのが姉なんて恥ずかしいよ…アサシン並の恥ずかしがり屋さんじゃなくてもこれは恥ずかしいよな!?

「とりあえずこの子は私が面倒見るから零君はまた会場に戻りなよ

！」

「いえもう帰ります、こんな姉貴ほつとけないので」

それにアサシンの正体は絞れた、湊さんを重点的に調べあげれば！
いけるー！いけるぞこれはー！

「ほら姉貴ー！帰るぞー！」

「な、なんでそんなに嬉しそうなの？」

姉貴をおんぶして家に運ぶもずつとうーうー嘆いている。これはもう当分お酒禁止だな、買ってたら全部捨ててやる！

「ほら家ついたぞ、風呂入って着替えて寝ろ」

「……あいあいさー」

フラフラしながら姉貴は風呂場に向かっていった。なーに風呂に入ればアルコールも抜けて良いも冷めるだろ

俺はライブ会場に向かう前に風呂に入っていたため姉貴が風呂に入ってる間歯を磨き部屋へと戻った。

部屋に戻ったところで今日のライブを振り返る。湊さんのあの仕事、あれはアサシンだからするようなものだ。

ん？何故言いきれるかって？それは湊さんと俺の絡みは一度もないからだ！絡んでもないやつに手なんて振らないだろ？

振ってきたのは俺のことがその、す、すすすす好きだからだろ
!?

「……よしー！人目は湊さんだ！」

果たして湊友希那がアサシンなのか、その結果を後にレイは知ることになる。

あなたはチキン野郎ですか？

「……………」

朝起きてすぐに気づいた。今日は月曜日、学校に行かないといけない、そして…湊さんに聞かないといけない！

ベットから飛び出てクローゼットから制服を取りだし着替え姿を鏡にて容姿を確認してリビングに向かう。

ちなみにだが姉貴の部屋の前を通った時大きなびぎが聞こえた。つまりのところまだ寝てんだらう。

リビングにて適当に朝食を作る。ベーコン焼いて目玉焼き作ってパン焼いて

「いただきます」

蘭の言葉を借りるといつも通りの朝だ

「やばいーやばいよおー！」

上からドタバタと音が聞こえだしたと同時にやばいー！つて声も聞こえてきた。

「ちよつとレイ！なんで起こしてくれなかったの!？」

「いや何も言われてないし」

「今日は結弦君から大事な話があるから本社まで来てつて言われてるのにー！」

「でもまだギリ間に合う！……あ、パン貰ってくね！」

姉貴はパンを啜えたまま珍しくスーツを着て本社に向けて家を出ていった。

「……はあ、また焼くか」

出来上がるのを待っていると料理が冷めてしまいいつも通りの朝にはならなかったレイだった。



「……………」

教室にて一人で宿題をして時間を潰していた。俺は朝早く来て学

校にて宿題を済ませてるんだ。あとはバイトが始まる前に終わらせたりしてる。が今週はバイトなかったしな、朝してる。

「うーすレイ」

「おーす柊優」

柊優のやつがサッカー部の朝練が終わり俺に話しかけてきた。これもいつも通りだな

だけど話の内容はいつも通りなんかじゃない！

「アサシンはわかったか？」

そう、俺達は最近このアサシンの話で持ち切りだ！

「それがな有力候補が1人見つかったんだ」

「へー誰？」

「ちよいちよい」

柊優に手招きをしてこちらに来てさせて耳元にて小声で

「湊友希那さんだ」

と言うと

「あつははは！お前、それは嘘だろ？」

「なー！こないだのライブの話を聞け！」

俺を見て驚き！俺を見ながら頬を赤めて手を振ってきた！って話をしたら

「それは……脈アリだな」

「だよな！そうだよな!？」

これはもう確定と言ってもいいレベルじゃないかと思ってるぞ！

考えてみる！女子が頬を赤めながら手を振ってきたんだぞ!？」

「でもさお前と湊さんって絡みあるか？」

「……ない」

そう、絡みが全くない、のに好意を持たれるとなると一体何の理由があるんだろうか

「それに湊さんについて全く知らないんだよ」

「あいにくだが俺はもっと知らねーぞ」

た、確かに柊優が俺より知ってるわけないし詳しいわけも無い、てか詳しかったから怖いぞ

「湊さんがどうかしたの?」

『ッ!』

蘭のやつはどこから現れたが知らないが俺達の話聞いていたよ
うだ。アサシンのことは聞かれてないよな…?

「じゃあ俺はあれであれだからまたな」

「お、おう」

相変わらず終優のやつは蘭に対して苦手意識が強いな

「で、湊さんがどうしたの?」

「……………いや、そのー」

「蘭ー、れーくんー、おはよー」

モカのやつがパンを食べながらやって来た。と思えばよっこい
しよ、なんて言ってる俺の机に座って来た。

「モカ机に座るのは行儀悪いよ」

「れーくんの机だから大丈夫でーす」アムアム

「お前なー」

スカート短い!だからさ!太ももとか直で机についてるだろ!こ
の後俺授業で使うんですけど!?

って!そんなことより!

「なあお前ら」

『?』

「湊さんってどんな人?」

同じガールズバンドのこいつらとに聞いたら詳しく教えてくれん
じやないか!

「んーモカちゃんはあるし知らないなーリサさんに聞いた方が早い
と思う」

「だよなー!」

「それより聞いて何すんの?」

「ッ!へ、へ?」

「……………なんか怪しい」

モカのやつはいいとして蘭のやつがなんか怪しい人でも見るよう
な目で俺を見てくるんだけど!?

「べ、別に気になったただけだよ！うん！」

「それより蘭、お前柊優のやつになんかしたのか？」

「夜桜？なんで？」

「なんでって言われても柊優のやつが蘭のことを怖がってるからー
なんて言えないよな」

「……いやなんか仲悪いのになってさ」

「別にあたしはなんとも思っていない、それより他人に嫌われようがど
うでも良くない？みんながいるし」

確かにそうだよな、仲のいい友達がいるのならほかの人達になんて
思われようと関係ない、よな

「じゃあ俺に嫌われたら？」

と冗談で聞いてみた。蘭のことだから低い声でどうでもいい的な
ことを言うんだろうな、自分で何考えてんだか

「……あんたに嫌われるのは、寂しいかな」

「え？なんて？」

キーンコーンカーンコーン

朝のHRを知らせるチャイムが丁度よく鳴り蘭達は席へと戻って
行った。

授業は始まり合間合間の10分休憩の時に柊優と湊さんについて
話した。

「でもやっぱり好かれる行為をしてないぞ？」

「……一目惚れって可能性もあるだろ？」

「柊優ならまだしも俺にか？」

「前まで自分は普通の中の普通とか言ってたけどいざこうなるの自
信ってやつがなくなる。」

「もう直接本人に聞けよ」

「ツ！それはキツイだろ！」

「……じゃあ俺が湊さんにアタックしよっかなー」

「な！」

「俺湊さん結構タイプだぞ？」

「そ、それはー！もし湊さんがアサシンだったらと思うと……！」

「それはダメだ！」

「なら行くしかねーだろ！なに違ったなら違うで済むだろ？」

「……俺行くよ、行ってちゃんと湊さんと話す！」

「その意気だレイ！」

気合を入れたところで午前中最後の授業が始まった。

のち話すタイミングは昼休みがベストだろうとなりこの授業が終わった後俺は3年の教室に向かう。

早く授業が終わって欲しいのと同時にまだ終わって欲しくないとも思ってしまう！

ダメだろ神崎レイ！ここで負けたらいつまで経ってもアサシンを探し出せないぞ！

あ、そう言えば俺の黒歴史が小説家になろうぜ！に投稿されてるのか、いやそんなのどうでもいいか

キーンコーンカーンコーン

本日何度目かのチャイムが鳴り昼休みを知らせる。

勢いよく立ち上がり戦闘道具（弁当箱）を取り3年A組の教室へと向かった。

リサさんと湊さんは仲がいいから一緒に食べているはず！

「リサさーん！」

「お、レイじゃん！どうしたの？」

「ッ！……」

やっぱり湊さんと食べていたか……

「いえ昼一緒にどうかなくて」

「あたしはいいよー友希那は？」

「……わ、私もいいわよ」

「ゆ、友希那？」

若干声が裏返ってきたんですけど!?それってやっぱり俺のことを意識してるからか!?

「とりあえずご飯食べましょうー！」

「そうね」

と、こんな感じで話は進み昼ご飯と一緒に食べる許可を得た。

「レイそれ自分で作ってきたの？」

「はい！弁当はいつも自分で作ってます！」

「……器用なのね、凄いわ」

「ッ！そ、そうですか!？」

「ッ！そ、そうよ」

くっ！湊さんと上手く話すことができない……！何かあれば！何か話があれば！

いや！あるじゃないか！この話をすれば確かめることだってできる！

「つかぬ事をお聞きしますが……4月29日の放課後は何をしましたか？」

「あー先週？先週のその日は確かバイトもバンドも休みだったよ」

「それで何を！」

「シヨツピングモールで買い物してたよ！」

「……誰と」

「えつと、日菜と！」

なるほど、リサさんは完全にアリバイがあると、ついでに日菜さんも、本当かどうかはその日菜さんに聞けばいいとして次は湊さんだ！

「湊さんは何を？」

「話さないわ」

「……そ、それを何とか」

「何がなんでも絶対に話さないわ」

それは怪しすぎるだろ!？ま、まさか湊さんがアサシンで!？正体をバレたくないから話してくれない……とか？

「それよりレイ、あなたゴーヤは食べられるかしら？」

「な、名前……」

「ッ！これは違うわ！リサが呼んでたから呼んでみただけで……ダメ、かしら?」

ぬあー！な、なんだその下から視線は!？か、可愛すぎる！……こんな否定できるわけないだろ！てか呼ばれた方が嬉しい！

「全然大丈夫です！」

「そう、ならレイも私のことを友希那と呼んでくれてかまわないわ」

「じゃ、じゃあ友希那さんで」

『……………』

な、なんか急に話し終わったんですけど、あとリサさんがむすーつて目で見えてくるんですけど!?

「それよりゴーヤ食べられるのよね？」

「あ、はい」

「………だったら、はい………あーん」

「ッ!？」

え、え!?!俺今友希那さんにあーんされてるのか!?!されてますよね!?!
何この夢のようなシチュエーション!

口を運ぼうとした時

「えーい」パク

『なっ!』

リサさんが友希那のフォークにかぶりつき俺へのあーんは消えてなくなつた。なんてことをしてくれただあ!

「友希那好き嫌いダメだよー」

「リサ、そうね」

「レ!イ!も!そう簡単に女子からのあーんに答えないの!」

「な、なんで!？」

「それは………あたしが困るって言うか、いやだつて言うか」

「リサさん?」

「ッ!とにかくあーんはなしなの!」

なんなんだ?なんなんですか!?!人生で一度もされてないあーんをさせてくれてもいいじゃありませんか!?!それすら許してくれないのですか!?!

「今井さん、先生がなんか呼んでたよ?」

「そう言えば呼ばれたっけ………ごめんねちよつと行ってくる!」

「ちよつ!」

このタイミングでいなくなりますか、友希那さんと2人だけつての

はなんか気まずいぞ…

「…………ちそうさま、席に戻るわ」

これで終わりかー、ってそんなのさせるわけないだろ！ここまで来たんだ！アサシンであるかないかの確認ぐらいはしないと！

「友希那さん俺はまだ！」

「ごめんなさい、レイと話するとき、緊張するわ」

「なっ！」

その後友希那さんは席に戻り本を読み始めた。俺はと言うと

「よーレイ、どうだっ…た？」

「…………聞かないでくれ」

チキンすぎて聞き出せなかった自分をこれほど恨んだことは無かったです。



く、くそー！あの時ちゃんと聞いておけば俺は本日友希那さんと放課後デートが出来ていたのかもしれない！

いやまだ友希那さんがアサシンと決まったわけじゃないけどさ、そもそもチキって確認できなかったのは俺だし

「…………レ…君！」

もう友希那さんは諦めて別の人探しちゃう？ここまで来たけど諦めちゃうか？

「レイ君！」

「ぬあ！ひ、ひまり驚かすな！」

机に伏せて考えてたもんだから目の前にひまりがいたなんて気づきもしなかった。てか顔近！なんか女子ならではのいい匂いがする。

「レイ君どうしたの？考えごと？」

「いや考えごとっていうか」

「そう言えば朝モカがレイ君の机に座ってたよね？」

「？おう」

座ってて注意もしたな

「まさか！モカが座ってたからわざと伏せて…」

「い、意味がわからんわ！てかそれするなら直後だろ！」

あと何をするかわからん！何すんだよ!？」

「お前は何してたんだよ」

「つぐの生徒会の仕事が終わるの待ってるの、他のみんなはバイトだし一人にすると可哀想じゃん」

「とか言って一人で帰りたくないだけだろ？」

「ッ！ち、違うもーん！」ポカポカ

お、おうひまりのやつが叩いてくるがぼかぼかとか本当に効果音出るんだな

ん？ちよつと待てっくれ！

「ひまりお前今彼氏とかいないよな？」

「今も何もできたことなんてありません！」

「でも憧れとかあるだろ？例えば好きな人に告白する時のイメージ？とかさー」

俺は自分で何を言ってるんだらうか、急すぎるよな!？」

「それは…あるけど、それが何？」

「そんなひまりに相談があるんだ」

「ッ！へ、へーレイ君気になる人でも出来たの？」

「違う、友達の話だ」

「友達って夜桜君？」

「……………そうだ！」

すまん柊優！これも俺のアサシンを探すために必要な犠牲なんだ、それがたまたまお前だったってことで許せ！

「恐らくあっちは好意を持ってるけどこっちが近づこうとしても避けられる？んだ、どうすればいい！」

「どうすればってあっちは好きなんですよ？」

「……………多分」

確信はないけど友希那さんは俺に何か特別な感情は隠している感じがある。

ただ俺はその感情がアサシンの件だと思ってるだけなんだけど

な

「だったらアタックしかないよ！聞き出すしかない！」

「……んー」

「大丈夫！レイ君が砕け散っても私が欠片を拾ってあげるよ！」

「ひ、ひまりー！抱きついていい？」

「……あ、やっぱりレイ君の話だったんだね」

は、はめられたー！ひまりにはめられるなんて俺はもう終わってる
のかもしれないな、あはは

「でもお前のおかげで勇気出た、俺アタックしてみるよ」

「うん！私は優しいからこのことは誰にも話してあげないから砕けて
きなー」

「砕ける前提かよ!?!」

ひまりに背中を押ししてもらったレイは果たして友希那の口を割る
ことができるのか！次回友希那とレイのちよつとした戦いが繰り広
げられる！

妄想したことありますか？

「今日こそ話してやる！」

気合を込めそう言いながら家を出て羽丘へ続く通学路を走り抜ける。

「ゆーきーなーきーんー！」

大きく手を振り話しかけるも

「……………」スタスタ

「ちよー!？」

相変わらず友希那さんは俺に見る気もせずすたすたと歩いて学校に向かう。

もうかれこれ1週間近く話しかけているが相手にされた試しがない、いくらアサシンの可能性が高いからってここまで無視されると違うんじゃないのかって思わされちやうよ

「……………」今日も収穫はなしかあ」

自分の心とは裏腹に空は雲ひとつない満点の青空だった。

「うーすレイ」

「おーす柊優」

「最近遅いな？なに、夜寝れないのか？」

「ふあー、ん？まあそれもあるけど別件もな」

眠れない原因は友希那さんにどうやったたら振り向いてもらえるか試行錯誤してるからなんだけどな！

「朝の登校時間を変えて一緒に登校作戦、でも成果なし」

「……………そして宿題をする時間がないから柊優のを写す！」

「昼のジューズは奢れよな」

ほい、と言い俺にノートを渡してくれる。いやもう自分で考えてとく時間なんてないんで、宿題なんてしなくてもテストの点数は取れることを俺が証明してやるよ

「レイ君や、調子はどうかね」

「師匠！まっつたく成果がありません！」

「たわけ！何をしとるんだお前はー！」

「す、すみませんー!」

と、訳の分からないことを言いひまりこと師匠の相手をする。

なんでひまりが師匠なのか、それは1週間近く前の話だが俺がひまりにアドバイスを求めたから師匠弟子の関係が出来たってわけ

「そろそろ相手を教えてくれてもーいいんじゃない?」

「……それはひまりでも無理だ」

「……………そっか、なら仕方がないね!」

あつさり食い下がってちよつと驚いたな

「最近れーくんとひーちゃんは仲良いよね」

と言いながらやって来たモカはまた俺の机に座って来た。こないだ蘭が行儀悪いよって言ったのに一向に治す気がない、わざとか?

「実は2人は付き合ってたろ?」

「ねーよ! だいたいモカ! お前は何度机に座るなど言わせるんだ!」

「別にいいじゃんー? 女子が座った所に顔を埋めれるよ」

「埋めねーよ! アホか!」

なんで言われた後にしようとするんだよ! 行為的にするやつはやばいやつだろ!?

「そう言えばひまり、4月29日の放課後何してた?」

この日常のワンシーンのタイミングで聞けばボロが出るかもしれないと俺は思ったんだ。

だから聞いてみたがどうだ!?

「放課後? んーバンド休みで学校にいたよ?」

「ツ!? な、なんで!」

「え!? いい、いやーうん、恥ずかしいから言えないや、あはは」

顔を真っ赤にして笑いながら誤魔化してるけどそれってよ! まさかよ!

いやいや、モカにも聞かないと!

「モカは!」

「言わなーい」

とてもニコニコしながら答えたもんだから追求する気すら起きなかつたよ

「まあ今は友希那さんだよな」

彼女以上の有力候補はいないだろう、だからこそ俺は友希那さんに直接確認をしないと行けないのにー!

授業は始まるが内容なんて全く入ってこない、これは次のテストは徹夜確定ルート突入だな

キーンコーンカーンコーン

何度も聞いたチャイムが鳴り響きなっている途中に立ち上がり教室を出て3年の階層に向かう。

が、やはり友希那さんはいなかった。どうやっていなくなるのか謎だよ

「……いなかったのか?」

「んあー! なんなんだよまじでー!」

「とりま自販機行こうぜ」

肩を組まれ逃げられない状況になった俺は宿題を写させて貰ったお礼として柊優にジュースを奢ってやった。

「学校に炭酸とか置けばいいのにな」

金を投入しながら話しかけてくる柊優に対して俺は

「スポーツ選手は炭酸飲まんぞ」

「俺はそんなガチ勢じゃないんだよなー」

「……それレギュラー狙ってるやつの前で言ってこい!」

どれだけ練習してもレギュラーに入れず3年間ベンチ生活の生徒だっているだろうか?

時々思うけどそれってやってる意味あるのかな? 俺はそういうのが嫌だから部活に入ってないけどさ

って俺も失礼な考えだったな、柊優に言えないや

「別に俺は好きでエースなんかしてないぞ、譲れるもんなら譲るさ」

「……………でもあの中で俺が1番上手いから仕方がないんだよ……つと!」

りんごジュースを飲み干し空になったペットボトルを蹴り飛ばし、あのペットボトルや缶をすてる専用のゴミ箱へ綺麗にゴールを決めた。

「お前みたいなのやつは嫌われる！」

「はは！だな！」

とは言うけどなんだかんだでこいつといて楽しいから縁を切れれないんだけどな

「次の授業体育だろ？着替えて体動かしようぜ！」

「まだ飯食ってねーだろ！」

教室に戻り急いでご飯を駆け込みクラスの男子共を誘いグラウンドでサッカーをしていた。

ちなみにだが体育での球技はベースボールだ、女子はテニス？だったかな

授業でベースボールをするもんだから休み時間はサッカーをすることになった。

「よーし、こいやー」

終優はサッカーが上手いからって理由でキーパーに回され俺はジャンケンに負けてキーパーとなった。

つまりの所俺と終優は敵どうしてわけだ。

仲間が接戦しているのか女子がテニスコートへと移動していた。

「(ひまりあれ絶対サイズあってないだろ……)」

胸張ったらインしているシャツが出るだろあれ、ん？てことはテニス中に出るのかな!?

「……………」

なんだろう、視線を感じる

と思つて後ろを向くと

「ツ！友希那さ」ガハッ！

後ろを向いた途端後頭部に強烈な一撃のボールが当たり俺は頭を抱えて蹲っていた。

「ツ！ツ！ゆ、友希那さーん」

と手を伸ばすも一瞬反応したかと思えば校舎に戻って行った。

「(そ、そこは助けてくださいよ)」

「レイー！」

レイは5限目の体育には出ることが出来ず放課後までずっと保健

室のベッドで眠っていたのであった。



「久しぶりだね」

なんだ、誰かが話しかけてきた。

「まだ僕を見つけれないのかな？」

僕……俺のまともな男友達は柊優ぐらいだぞ？それにあいつの一人称は俺だろ

「そう言えば君の作品とても人気出て正直焦ってるよ」

君の作品？ああ厨二病の時に姉貴に憧れて書いた闇の書か、あれ？
なんで知ってる？

「……僕はいつまでも待つてるから見つけてね、大好きだよ」
それ以降誰かの話し声は聞こえなかった。

「……ッ！」

目が覚めて起きるのはいいけど後頭部がとても痛くて押さえ込め
でしまう。

ぶち当てたやつぜってえ許さねえ……！めちやくちや痛いじゃね
か！

あと誰かから話しかけられてたような？気がする。

「お、よー起きたかレイ」

「……巴、あー俺どれぐらい寝てた？」

巴のやつが花を手に保健室に入ってきた。俺のお見舞いに来たの
か？

「4時間近くだな、もう5時前だし」

「4時間!?寝すぎだろ！」

「……と、そうだな」

持ってきた花を空いていた瓶に詰めていた。ってことは俺のお見
舞いではなく先生に頼まれてやってきたって所か

「ん？なんだよあたしの顔になんかついてるのか？」

「……いや俺の見舞いに来たんじやなかったんだなって」

「あー先生に頼まれたんだよ、ま！レイが起きたのなら心配ないだろ！」

「……お前は昔と変わらないな」

前から巴はこんなやつだったな、女子なのに男っぽいところ、高校生になって変わってるかと思えば何一つ変わってねーや

「あたしだって……ほら、可愛くなったりしただろ？」

「いや全然」

即答すれば

「ふん！」

「……ツー！お、おまおまお前！頭怪我してるのに殴りやがって！」

「失礼なお前が悪いんだ、それじゃ」

コブが2つに増える事故が起きたが……あれ？やっぱりなんか聞いてたんだよな……

巴が出ていった数分後先生が戻って来た、と思えばもう帰っても大丈夫と言い俺は保健室を後にした。

教室に戻り帰りの支度をしている時ふと外に目を向けると

「湊……友希那、さん！」

一人で外を歩いている友希那さんの姿が目に入った。

一人でいるチャンスなんて今しかない！俺は急いで階段を降り靴を履き替え

「友希那さん！」

「ツー！」

「くっ！もう逃がさないぞ！」

俺に気づいた友希那さんは走って逃げだした。いつもなら逃げられてその場から動かさず追おうとしなかった。

でもここまで待ったんだ！そろそろアサシンじゃなかったとしても俺を避けている理由は知りたい！

「友希那さん！」

手を掴んだ！取った！

「……は、離して」

「いいえ離しません！」

「大声出すわよ」

「喉痛めますよ？」

「それでも出すわよ」

「え!?だ、だったら離します！」

さすがにそれは警察沙汰になって人生が積んでしまう!

離れたけど逃げる気がないな、なんでだ?

なら話しかけてもいいよな

「友希那さんなんで俺のこと避けるんですか？」

「……それはあなたが……」

もう一か八かだ、この方法は好ましくないがもう残された手はこれしかない!

「俺の友希那さんの秘密知ってます」

「ツ!ど、どこでそれを!？」

食い付いてきた、やつぱり……アサシンは友希那さんだったんだ。

ここまで来たならもう全部話そう

「何処でってライブで俺に手を振ってくれたじゃないですか」

「ツ!」

「……でもそれだけではわからないはずよ」

「ええわかりませんね」

でもわかっちゃうんだよ、今までの行動から彼女が、友希那さんが何かを隠していることはな!

「友希那さんは俺に対して何か特別な感情、ありますよね」

「……………」

カー!と顔はみるみる赤くなりプルプル震え出した。これはもう答えに導いたと言えるだろう

「いつから?」

「結構前からです」

「そ、そう」

友希那さんは指で髪を何度かいじり決意が着いたのか俺に話しか

けてきた。

「レイ、明日の放課後時間あるかしら？」

「ツ！は、はい！」

「……そう、なら大事な話があるから教室に迎えに行くわ」

「今でも！」

「今日は無理よ、心の準備がまだできてないわ」

そう答えると友希那さんは一人ですたすと歩き帰って行った。
ちなみに俺はと言うと

「……よっしやああああああ!!」

通行人の何人かが驚き出したがそんなの気にしない！俺はとついに！ついに！明日でリア充になれるんだー！

るるるん気分で家に帰り

「なっ！お、おかえりレイ、いやレイ様」

姉貴がまだ開けてないストレイを自室に運ぼうとし場面に偶然でくわしてしまった。

「これはそのーほらー！ファンの子がくれてさー！いやー参ったもんだよあつはは！」

「ほどほどになく♪」

「……え？、え!？」

上機嫌すぎるレイに対して滯奈はどう対応すれば良いかわからずとりあえずストレイを一本飲んだのであった。



次の日の放課後

「……………」ニコニコ

レイは過去一最高の笑顔のまま自分の席にいた。レイは気づいていないが周りのクラスメイトは少し引いている表情をしていた。

「レイーなんかあったのか？」

「うんうんなんでもないよー」

「巴ちゃんどうだった？」

「なんでもないだとき、それよりラーメン食い行こうぜ！」

巴がなんか聞いてきたけど全然耳に入ってなかったよ、だって俺は！本日より晴れてリア充なんだからー！

その相手はー！

「……レイ、一緒に帰りましょう」

「待ってました！喜んでー！」

そう！湊友希那である！今日の放課後に大事な話があるってことだから期待してるけどさー！それってよ！告白だよな！？

「湊さん何しにきたんですか？」

蘭のやつが友希那さんに話しかけていた。ま、まあ同じガールズバンドだし？面識はあるから話すよな！

「あら美竹さん、このクラスだったのね」

「ッ！……なんですか？あたしのことか眼中に無いから気づかなかったんですか？」

「違うわ、ただ知らなかっただけよ」

「だから」

「ストップ！ちよつとストップ！」

落ち着いてくれよ蘭！話しかけたと思えばなんかヒートアップしそうなトークしてんじやないか！

「なにレイ？」

「い、いやー友希那さんに用事があるって言うかー」

「友希那さん？」

蘭が低い声でそういうもんだから

「……じゃなくて湊さんに」

と言い直せば

「湊さん？」

「じゃなくて友希那さん！」

友希那さんも同じように反応する、なんなんだよこれ！？

「美竹さん悪いけど今日はあなたじゃなくてレイに用事があるのよ」

「レイって零って呼ばないことには何か理由があるんですか？」

気にするとこそこ！？同じ発音だから気にしないだろ！

「……とりあえずレイを借りるわ、行くわよレイ」

「はい！」

友希那さんが俺の手を繋ぎ教室を出ていく、女子と手を繋いだのは小学生の時蘭達と繋いだりした以来だった。

「ツ！まだ話は終わってませんよ！」

すまん蘭！友希那さんと付き合うことになったらちやんと報告するから！

なんて心で言い学校を後にした。

「ツ！ご、ごめんささい、ずっと手を握ってわ」

「だ、大丈夫です！」

むしろ嬉しいと思います！って本人に言わないといけないけどチキンだから言えないや

「レイに着いてきて欲しい場所があるの、そこで大事な話をしたいの」
「ツ！はい！」

それは絶景のスポットにて告白をしたってことだろうか！なんて乙女チックな人なんだ！

後ろを着いて行くこと数分後

「レイ目を瞑って欲しいわ」

「……こ、こうですか？」

と聞きながら目を瞑った。なんだ、キスでもしてくれるのかな？

と待つこと数秒

「レイあなた私の秘密を知ってるのよね？」

「はい」

「……だったら問題ないわね」

「……………ツ!!??」

なんだろう、頬に何か柔らかい感触があるぞ、キス？とかじゃないよな

「目を開けていいわよ」

恐る恐る開けると

「なーっ」

「……………へ？ね、猫？」

友希那さんが白猫を抱っこしててその猫が俺の頬に肉球を押し当てていた。いや状況が読めない

「どうゆうことですか!？」

「何って私の秘密よ」

「ひ、秘密?」

ますます意味がわからなくなったんですけど

「私が大の猫好きって知ってたのよね?……知ってる人なんていないと思っただけどバレてるなら話すわ」

「……………はい!」

よくわからんがはい!と言っておこうか、もしも違うなんて否定してみたら…秘密を知られたから消すなんて言われるかもしれない…!

「……………あれ?この猫!」

「やっぱりあなただったのね」

この白猫は見覚えがあった。あれは確か数ヶ月前、まだ俺が1年の時の出来事だ。

「なーづ……………なーづ」

変な鳴き声が聞こえたから近くに行けば高い木から降りれなくなった子猫がいた。

降りれないのにどうやって登ったんだと思いつつながら気をのぼり地面まで連れて行ってやった覚えがある。

その猫がこの白猫に似ていた気がする。てかこいつだろ

「あの時私もこの子を助けようと思ったんだけどとどかないから大人を呼びに言っただのよ」

「……………でもよくよく考えれば私は大人だったて気づいたから戻れば既にシロは地面にいたの」

色々ツツコミたいが黙っておこうか

「その時あなたとすれ違ったから」

「……………俺が助けてくれたと思っただんだ!」

「違いわ」

「ええ!」

今の流れならそうだと思うだろ!? 違うと否定されましたよ!

「私と同じ大の猫好きなんだと思っただわ」

「猫が好きだから助けたのよね? シロのことが可愛くて可愛くて仕方がないから助けたのよね?」

「……は、はいっすう!」

変な鳴き声だが確かに可愛い、今も俺の足元でウロウロして喉を鳴らしていた。

「つまりの所…ライブで手を振ってきたのは?」

「類友と会えたから」

「……じゃ、じゃあ俺を避けてたのは?」

「やっぱり恥ずかしくなったのよ…」

「大事な話って…!」

「私の秘密についてよ」

全ては俺の妄想、だったのだ…

だよな、こんな俺が友希那さんなんか好意を持たれるわけないよな、浮かれすぎてたよ、トホホ

「ほら奥にはもつと猫ちゃん達がいるわ、行きましょう?」

「………は、はい」

とりあえず友希那さんはアサシンじゃないって知れただけで良しとするか…

後はそうだなー猫の溜まり場と友希那さんの秘密知れたし? これもこれで結果はオーライってやつなのだろうか

「ねえレイ」

「なんでーすか」

シロを抱きながら返事をする

「これからも…よろしく」

「ツ…:…あー、はい、類友としてよろしくです!」

それと友希那さんとはある意味友達以上の関係にはなれた気がした。

友希那と別れた後クシャミと鼻水が止まらなくなりレイが猫アレルギー持ちだと気づくのはまだ先の話であった。

GW何してましたか？その1

みなさんGWを知ってますか？5月にある長期休暇だよ、話上飛ばしていた内容だからその休み期間に何があったのかお話ししようか

あれは確か休暇に入って2日目のことだった

「ふぁー」

大きな欠伸をしながら頭を掻き、俺は階段を下りていた。下につけば誰もいないため適当に朝食を作る。

とは言っても自分の分だけ、なんせ姉貴はまだ寝てる、起きたとしても適当にすませるだろ

朝食を食べながらテレビをつけると丁度天気予報をしていた。

「今日は晴れかー、布団とか一気に乾かすか」

長期休暇だがこれと言って用事なんてない、バイトも今日はない

だとすると家にいるのも暇だし天気がいいなら布団を乾かすことに越したことはない

姉貴のは知らんが

元両親の寝室から2階のベランダに布団を運び掛けては干し、あの叩くヤツで布団を叩いた。

叩くヤツつてのは俺も名前を知らないんだ、だから叩くヤツ

昔は近所のおばさんがしてるのを見てて自分には関係の無いことだと思っただけどまさか自分が今してるとは…未来はどうなってるかは本当に想像できねーな

次に冷蔵庫の中を見てみると

「……ぬへー」

なーんにもない、あるのは姉貴のストレイだけだ。これはもちろん迷わず捨ててやった、だって禁酒令を出してるからな！

余談だが野菜室もカラポッド。これは買いに行かざるを得ないな

適当に着替えいつも行ってる八百屋さんに向かう、その後は精肉店にて肉買って魚屋で魚とかも買って…って本当に主婦みたいなことしてんな俺は!?

小さい頃から両親が仕事上家を空けることが多かったから仕方が

なく俺が家事をしてたらいつの間にか神崎家の台所は俺の領域に変わっていた。

両親が帰ってきたと思えば俺の料理が食べたいと言い出すしな、あれ？俺ワンチャン〇月学園行けんじゃね？

「いやいや無理無理」

てかこの世界にそんな料理学校はないし食戟もありません！

そんなことを考えながら歩くこと数分

「ふええ、ど、どうしよう」

なんか聞きなれない言葉が聞こえたけど気のせいだよな

「こ、こっつちかな？」

前の方に女性の方は右に曲がり姿を消した。まあ特に気にすることなんてないさ、この世に人間で女性なんて死ぬほどいる！

またまた数分後

「ふええー！ここのどこ?!」

「ッ！」

次は後ろにいた、いや俺より前にいたのにどうやってたら後ろに行くの!?

それに見てみると泣きそうな顔になってるぞ、中学生か？にしては顔が整ってんなー今の中学生レベル高！

「このままじゃ練習遅れちゃうよ」

「……………」

俺は今盛大に迷っている。

もし俺がここで話しかけたらどうなるだろうか、変態です！助けてください！なんて叫ばれないだろうか

それとも助けてくれてありがとうございます！あ、良かったら今度お茶しませんか？

なんて言われるのかの2択、しかーし！そんな結果は前述しかないだろ!?

俺のメンタルは豆腐すぎる、それにチキンボーイでもあるため声なんてかけれないのだ、強く生きろよ、中学生

「薫さんにれ、連絡しなくちゃ」

「……………薰？」

あーあ彼氏か、よかったー！声なんてかけなくて正解だった、もしこんなこと知られたら彼氏に俺が殺されるよ

「……………ふええー！携帯落とした」

もう何やってんだよこの娘は!? ドジっ娘? なのか!?

んー、んー、んー!!! えーい! もうどうにでもなれ!

「……………あのーお困りですか?」

「ツーいや! 決して怪しいものではないですよ!?! なんか困ってたみた
いだったので話しかけただけです!」

「……………み、道に迷っちゃって…ふええ、もう帰れないよ」

帰れないわけではないだろー! ってツッコミたいけど今は我慢我慢

「お、俺でよければ…んー商店街までなら道案内しますよ?」

「い、いいんですか? 助かります、ありがとうございます」

な、なんだこれ可愛い! すげー可愛ええ!

「わ、私松原花音って言います」

「俺は神崎レイ、羽丘の2年でー、あ高等部のね」

同級生なんて思われたくないから咄嗟に高等部って言ってしまっ
たよ、これで先輩ってわかってくれただろ

「私は花咲高等部の3年で、です」

まさかの高等部だったー! 勝手に中学生とか判断してすみません
でした!

「もしかして……………中学生だと思ってました?」

「へ!? そ、ソナナコトナイヨ」

カタコトになったけどバレてないよな?! バレてないよね!?

「よかったー私よく中学生と間違えられるんですよ」

「へ、へーそんなんですね」

なんだろう、心が超痛い、申し訳ない感が半端ないです。

「とりあえず商店街に向かいましょう、俺の後ろについてきてくださ
いね」

「はい、ありがとうございます」

「敬語なんていいっすよ、松原さんの方が上なんです」

「…………うん、そうするよ?」

本人は納得してないようだが年上に敬語を使われるのはなんか俺が嫌だ。

「松原さん3年ですかー、花咲でしたよね?…………就職ですか?進学ですか?」

「進学だよ、大学に行くんです…じゃなくて行くの」

なれないなーと言いなながら笑っている声が聞こえている中俺は次の話を考えていた。

何とかして話を繋げないと気まづくなってしまう!これは男子なら誰しも分かることだぞ

「大学ですか!俺も大学行くんですよねー」

「……………」

「そのために進学校の羽丘行ったようなもんですし、あ!決して女の子目的とかじゃないですよ?ちゃんと進学のこと考えててですね」

「……………」

「あれ?松原さん?」

返事がないから後ろを振り向くと

「まあ大学行くのね!お金かかるから将来稼いで親に返さないといけないわよーおほほ」

「……………誰だよ!?!」

知らないおばさんが後ろにいたんすけど!?!てか松原さんは!?!松原さんはどこ行ったの!

「…………れ、れいくーん!もう見つからないかと思ったよー!」

泣きながら走ってきた松原さんは俺が先程まで向いていた方向、つまり進行方向から泣きながらやってきた。

一体どうやってたら後ろにいた人が俺より前に行くのだろうか、この人は道に迷うに關しては人のレベルを超えていると思った。

「松原さん、俺の服のどこでもいいんで握っててください」

「……………ごめんね」

ごめんねとか言われると俺は何もしてないのになんか罪悪感あるじゃんか!てかさつきもこのこと言わなかったかな!?

服を握らせることで松原さんと離れることなく商店街まで道を案内することが出来た。

「れい君は何をしたの?」

「俺は買物ですよ」

「だから商店街に…」

商店街にはスーパーなんかより新鮮な野菜に魚、そして上手い肉が手に入る!主婦にとって最強の味方がここにはいるんだー!

「おー!零之助^{れいのすけ}!今日は彼女さん連れてんのか?」

「ツ!ち、違いますよ!この人はついさつき知り合った人つすよ!」

俺に話しかけてきたのは八百屋の佐藤さん、なんでもここに通いすぎたもんだから客をこして一友人として仲がいいんだ。

まあ歳はかなり離れてるけど

「んだよー澪奈の姉御もやつと弟離れしたかと思つたのになー」

あの姉貴のことだ、俺に彼女ができるまでは存分にこき使うんだろ
うな…早いとこアサシン見つけて逃げ出そう

「後で野菜買いに行くから待つとけよー」

「おうよ!うちはいつでも新鮮な野菜を売るぜー!」

確かに美味しいから否定できないんだよ、佐藤さんの野菜で天ぷらなんかしてみろ、もう極上よ

「あとでつてもう道案内は大丈夫だよ?」

「……………いえ、気が変わりました、最後まで面倒みますよ」

「?う、うん」

この人を一人にすると絶対目的地つけないだろ!一度面倒を見たのなら責任も持つて最後までやり遂げます!

「んで、目的地はどこですか?」

「えつと弦巻邸なんだけど分かる?」

あーあれか、多分この地域で一番大きな屋敷だろ、あれじゃないとこで弦巻邸と言えは…うんそこだろ

一瞬間の家が頭をよぎったがあれは蘭の家、つまりの美竹邸ってやつだろ

「ではそこへ行きま」

しようと言おうとした瞬間

「あー！かのちゃん先輩いたー！」

「……あ！はぐみちゃん！」

松原さんはそのはぐみちゃんを見つけた途端そっちに走って行った。

そんなに俺から離れたかったのかな？泣きそう

「なかなか来ないから探しに来たんですよ、すぐに見つかってよかったです」

「美咲ちゃんもありがとう」

「さあところが待っている、共に行こう」

「薫さんまで、ふええ、迷惑けてごめんなさい……」

あ、薫さんって瀬田さんのことだったのか、え？あ、瀬田さん!?
俺はこの時柊優との会話を思い出した。

「ハロハピにはあの瀬田薫もいるらしいぞ」

って話を！つまりの所目の前にいる人達がハロハピのメンツってことか!?

「ッ！君は……！」

「？」

「………いや、なんでもない」

瀬田さんが俺を見て驚いてたんだけどなんだろう？気のせいかな？

「れい君道案内ありがとう、おかげでみんなに会えたよ」

みんなに会えた、練習遅れる、つまりハロハピ！決めつける工程がおかしいが間違いないだろ！

「お礼に今度お茶」

「いえ！俺の質問に答えて欲しいです！あ、できれば他の人達も！」

「え？う、うん」

よーし！これで4月29日の放課後の話を聞けば！

「4月29日の放課後何してたか覚えていますか!？」

何度目の質問になるかわからないけど聞かないと何も始まらないんだよ!?

いやね友希那さんの可能性の方が高いよ？けど聞くにこしたことはないだろ！

「いや質問の意味がわからないんだけど」

「そこを何とか！お願いします！」

「……えーどうします？答えますか？」

このキャップを被った娘はなんか疑い深いな…さては何か隠しているのか？

「これも何かの運命なのさ、答えてあげようじゃないか」

「私はその日演劇部の子達と劇の練習をしたよ」

「……そうですか」

瀬田さんは違う、と

「はぐみは家にいたよ！とーちゃんの手伝いしてた！あ、うちのコロッケ美味しんだよ！」

「ツ！まさか北沢精肉店？」

「そうそう！つて！あー！零之助君じゃん！」

「な、何故その名を!？」

「とーちゃんが言ってた！男で髪が紺碧色で中性的な顔だつて！」

そ、そんだけでわかるのか!？てか俺って中性的な顔なの!？自分では自覚してないんだけど!？」

「確かに女装させると案外行けるかもね」

「せ、瀬田さんやめてください」

引き釣り笑いで言うが本当に嫌だ、やりたくないです

「……私は、そのーバイトだよ」

「………なんの？」

「それは言えない、いやーあーここでは言えないだけだね、あはは」
やれやれと言いながら肩をすくめていた。ここでは言えないというのが引つかかるけど…まあいいや

「私はちぎ、友達と喫茶店に行ってたよ」

「……なるほど」

まあそうだよな、てか真正面から聞いても答えてくれるやつなんていないだろ、うわやば、どうやって探ろうか

てか今は友希那さんだろ!?それ以外は考えるなよ

「君はなんでそんなことを聞いていたんだい?」

「瀬田さんはなんで聞いたんだと思いますか?」

「おっと、まさかそんな返事が来るとはね……やはり君は興味深いよ」
「??」

「さあ、こころが待ってる、早く行こうか」

瀬田さん：俺は興味深いよ? って言ってたよなどうゆうことなんだ?

「じゃあ私行くね、今日は本当に助かったよ、ありがとう」

「ッ!は、はい!」

そう言った松原さんの顔は笑顔だった。そんな笑顔でありがとうなんて言われたら道案内したかいがありますよ

「またね零之助!ばいばーい!」

「……おう、またな」

「花音さんの件はありがとうございました、またどこかで」

「はい」

この娘の名前聞いてなかったな、休み明け終優にでも聞いてみるか
それぞれが別れの挨拶を言い終えるとハロハピのメンツは一斉に
商店街を後にした。

「君との出会いもまた儂い、のかもしれないね」

薫が小声で言うもその声は誰にも聞き取られなかった。

「さーとと、俺は買い物でも済ませて家に帰ろっかな」

佐藤さんのところで野菜を買い、魚屋にて魚を買って最後は北沢精
肉店にて肉を買う。

「あ、コロッケください」

「零之助の分と滯奈ちゃんの分とで2つか?」

「いえ4つで」

「晩御飯にでもすんのか?にしてははえーよ、揚げたて食え!」

晩御飯にはしないよ、別のメニューは考えている。それに

「違いますよ、姉貴が3つ食うんだとさ」

「……なるほどな！ほれ！揚げたてだぞ！」

「あざーす」

俺は揚げたてのコロッケを食べながら家に帰った。この揚げたてっていうのはなんでこんなに美味しいんだろうか、科学的に判明されてるのかな？

「ただいまー」

「お！か！えー！りー！コロッケをくださいー！」

帰って出迎えてくれたかと思えば走ってきて玄関にて土下座をしているのは姉貴の滯奈ことペンネーム神奈さん

こいつにプライドという言葉はあるのだろうか

「はい北沢のコロッケ」

「おー！これがまたストレイと合うんだよな〜」

ストレイ？あー言うの忘れてた

「冷蔵庫にあったお酒は全部捨てたので大人しくサイダーでも飲んでろ」

「なっ!?!ひ、酷いよレイー！」

「知らんな」

滯奈の叫びが家に響いた数時間後、神崎家の食卓には新鮮野菜の天ぷらが並んでいたそうです。

GW何してましたか？その2

「らっしやいませー」

GW3日目はバイトだよ、元々シフトは入れてなかったがリサさんがどうしても変わってくれ！なんて言うもんだから手作りクッキーにて手を打った。

「れい品出し頼む、あー雑誌類な」

「おつけーす、裏にありますよね？」

「ああ、あ、表紙見て驚くなよ？」

「？はい」

今月はまだあの月刊少年漫画の品出しをしてなかったっけ？

それはみんなが知ってる有名月刊少年誌

「……そう、弦巻マガジンだ」

毎月の第1水曜日に発売される弦巻マガジン、いやあのマガジンじゃないのか？あれは週刊少年だろ、いや……ごめん、ちよつとわからないや

ラノベは弦巻文庫、漫画は弦巻マガジン、弦巻マガジンは……まあ弦巻文庫のラノベが漫画家して連載してる的なやつだと思ってくれ

まあマガジン限定の作品もあるけど

って説明はこの辺にしてと

「表紙見て驚くなってなんだよ」

何か俺が喜ぶようなことでも書かれているのか？まさかの義妹の話か？

裏に行きダンボールを開けて表紙を見た瞬間

「……………ッ!？」

驚くな、の意味がわかったよ、でも

「ええええ!？」

いやこれを見て俺は驚けないよ!？」

「て、ててて、てて店長!？」、「これ!？」

「だから驚くなって言ったのに」

「…………いやアニメ化なんて聞いてないっすよ俺!？」

そう、姉貴の作品義妹なら結婚できるんですよ？のアニメ化が決定！と表紙に大きく書かれていた。

弟の俺に話さないって……よっぽど俺を驚かせたのかな？
てか驚いた

「姉貴さんとうとうやったな」

「ツ！ええ、凄いやっすよ」

本当本を売るだけでもすげーのに自分で漫画も描く、そしてとうとうアニメ化まで

いや本当にすげーよ漣奈姉

「……っと、そろそろ働け、時給減らすぞ」

「は、働きます」

アニメ化、アニメ化……アニメ化、かー

普段他の作品でこの言葉を聞いても

「あ、そうなんだふーん」

って反応だけど姉貴の作品がアニメ化させるなんてもうそれは普通の作品とは比にならないぐらい嬉しいだろ

「あざしたー！」

バイトも終わり家に帰って姉貴に早速色々聞こうと思って走って帰るも

「すまん、今日は用事があるー！」

なんて置き手紙を残しており姉貴の気配は家にはなかった。

走って帰ってきたのに一瞬で無駄になってしまったよ

「……………あ」

リビングのソファーにて携帯をいじること数分、そう言えばと自分の領域であるキッチンへと足を運ぶ

「オーブンそろそろ変えないとな……」

料理の際に使うんだけど最近調子が悪い、例を挙げると前と今とでパンの焼き加減が全然違う。

それだけで変えるのかよとか言うけど……俺が小6の時に買ったと母さんは言っていたっけ？

その後すぐに家を出るとは思ってもいなかっただろうな

「ショッピングモールに行くかー」

GWで人がうじゃうじゃいる中ショッピングモールに1人で行くとする俺は勇者なんじゃないか？

終優でも誘うか？と思ったけどあいつと学校以外で絡んだことがないからやめとくか

蘭達……はあいつらはあいつらで遊んでるか

実は友達が俺にはいないんじゃないか、と悲しい気持ちでいっぱいになるレイだが1人で悲しくショッピングモールに向かった。

「……んー悩む悩む」

ショッピングモールの家電コーナーにて悩んでいた。

最近のオーブントースターってのはどれもこれも性能が良くてぶちやっけなんでもいい、金ならある。いや自分で稼いだ分だよ!?

「ありがとうございます……」

店員さんと交渉に交渉を重ね安くオーブントースターを購入することが出来た、なんでも水を少し入れてパンを焼くともうどんなに安いパンでも高級パンと変わらない味になるらしい。

美味しくならなかったら許さんぞ

無事にトースターを買い終えた俺はあとは帰るのみ、トースターは本日の夕方に届けるように頼んだ。まあ料金はかかるけどね

夜ごはんを何にするか考えながら帰っているとき妙にザワついている店があった。

興味方位に立ち寄るとそこは見慣れた本屋さんだった。

でかでかと義妹アニメ化決定!と書かれているパネルが飾られている。もちろんその絵を描いているのは俺の姉貴なんだが

義妹シリーズコーナーに立ち寄るとおひとり様一冊まで、なんてもんが書かれてるしそれほど人気があるんだってわかるよ

「お、残り一冊じゃん!」

恥ずかしながら最新巻はまだ買ってなかったんだよ、まあ内容は姉貴がちよくちよく話してたから知ってるけどさ!

と、手を伸ばした時

「……ッ!」

不意に誰かの手に当たり急いで引つ込める。それと同時に相手も手を引つ込めていた。

「……あ、あの……買わないんですか？」

「へ!?!いい、いやー買ったんですけど……あはは、譲りますよ」

いや流石に女子に対して「俺の方が早かった、だからこれは俺が買う!」なんて言えるわけないだろ!?

「いいんですか……?」

「あーいいっすよ、また今度買えばいいんで」

「で、でもそれってまだ買ってないんじゃない?」

「……まあそうですね」

『……………』

き、気まずー!?!何これ、なんでこうなったんだ!?!これは俺から何が話しかけないとこのまま気まずいままサヨナラになってしまう!・

『あの一!』

「ツ!そ、そちらからどうぞ!?!」

「い、いえいえ!そ、そちらからどうぞ!?!」

「いやいやそちらから」

「……………女の子にこれ以上言わせるんですか?」

「なんかすんませんね!?!」

何初対面の女子に謝ってんだよ俺は……今日こんなこと起きるはずなんてなかったのに

「あのよかったらこれ買ってください、面白いっすよ?」

「はいそれは知ってます……なので是非買って欲しいです……!」

「え、えー?」

この娘は何を言ってるのだろうか?面白いのは知ってる?なので買って欲しいです?

んー俺に薦めてるってことか?でもでもここでこの本を手にとったら取ったで男がーんがー!

「あー!よかったー残り一冊!今日で読み切るぞー!」

どこからか現れた人に残り一冊の本を持っていかれた俺たちは

『……………』

何も言葉が出なかったとき

「……あはは、持ってたかちやいましたね」

「で、ですね」

ま、まあこれはこれで結果オーライだ、このまま帰れば後は何事もなかったように事は進んでいつも通りが…

「あの一！」

「?な、なんですか?」

「……その、よ、よかったら、その一」

「?」

「ツ!よかったら家に来ませんか!」

「……………えええ!」

な、なんでこのタイミング家に誘った!?あ、あれか!逆ナンか!?いやにしてはそうには見えないぞ

モジモジして…なんか心做しか頬も赤い気がする。

いやそれって誘ってるからか?ど、どうする神崎レイ!アサシンと言う未来の彼女がいるにも関わらず俺は…俺は本日大人の階段を登るのか!?

「実は家に最新巻が何冊か残ってるので取りに来ませんか?」

「……そ、そつちか!」

「?なんだと思っただんですか?……ツ!ち、違います違います!私そんな気なんて」

あわわ!と聞こえるかのように動揺してる女の子は見てて可愛ええなと思える人だった。

「あーもらつてもいいんですか?」

「はっ!……いいですよ?家には観賞用、布教用、読書用、とその他合わせて各巻五冊は保持してるので!」

「……おひとり様一冊は?」

「ネットで買えば怖いものなんてありません!」

ドヤーと胸を貼る女の子のお胸にはそれは大きな大きなメロンが2つついてるし自然とそちらに目がいつてしまう……!

って何見てんだよ俺は!?

「あはは、じゃあお言葉に甘えて布教用を貰いますよ」

「では我が家に向かいますよう！」

ひよんなことからこの女の子の家に行くことになったが…各巻5冊保持してるほどの人物だ。てかならなんであの時買おうとしてたんだ？なぞだ

そして彼女はオタク中のオタク、なんだろう…：なんか昔の自分を思い出しそうで嫌だな

「……………すみません、私少し浮かれてしまつて変なテンションになつてました」

「そ、そんなことないっすよ？」

「今思えばドヤ顔して胸を張ってるなんて……………は、恥ずかしいですよ」
両手で顔を抑えながら言うもまたその仕草がなんと言うか、言葉がないから可愛いとしか言えない。

「あ、俺神崎レイって言います、羽丘高等部2年です」

「でしたらわ、私も……………白金燐子、花咲高等部3年です」

「……………へ、へー」

「?どうかしましたか？」

「いえなにも」

昨日も花咲の3年の女子生徒と知り合いになつたんだよなー、あれ?この娘達知り合い同士とかないよね?

「……………白金さんはラノベ好きなんですか？」

まあ気にせず関わるでしょう…あれ?でもどっかで見たような?

「はい！大好きです！特に義妹はもうストーリー構成が最高ですね！」

「最近は何世界ものが流行ってますがそれに引けを取らない王道学園ラブコメで！」

「ツ！それはわかります！異世界シリーズよりもやっぱり近親感があるというか！」

「そうです！特に夏美のあのデレシーンとか現実でもありそうで！」

「だけどなさそうで！」

と、家に着くまでに義妹の話で持ち切りだった。

ここで義妹の内容を説明しよう。

正式タイトル、義妹なら結婚できるんですよ？で、略して義妹、いや略してないな！

主人公の篠しの之のは晴太はれた、その義妹の春乃はるの、夏美なつみ、秋音あきね、冬香とうか

長男が晴太で長女が春乃、次女が夏美、三女の秋音、そして末っ子の冬香

この4つ子だが1人ずつ親が違う、いやみんな親が違うだ。

晴太の家、篠ノ之家は大きな家のため孤児院にいる子をよく引き取っていた。そのため晴太の下にはそれぞれ親の違う義妹の4つ子がいるんだ。

その晴太と4つ子の日常の話がまた面白くて…そして！本当の兄妹ないのに愛が強くて…ぜひ読んで欲しい！

「やっぱり冬香と晴太の距離が縮話ですよね！」

「あれは1番晴太といる時間が少ない冬香だから持つてる感情で…」

「それを難なく聞き入れ受け止めた晴太！」

「俺もあんな妹が欲しい人生でしたよ」

何度も言うが4つ子は可愛いんだぞ！でも4つ子の兄は大変だなと思うよ、作品を読んでたらね!?

話で盛り上がっているとこどうやら白金さんの家に着いたらしい。

「で、でけー」

俺の家がしよぼく見えるよ、いや両親の稼ぎが悪いわけじゃない、なんなら姉貴の稼ぎも合わせれば普通の家庭よりも裕福ですよ

けどど家にいないからそこまで広さとか大きさとか気にしないんだらう。

「はい！こちら最新刊です！あー！私少しネタバレしちゃいましたけど大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫！」

あ、危ねー本貰うためにここに来たんだった！話の内容してってたから普通に最新巻の話してたけど覚えてるのかな？

「ホッ、ならよかったです」

覚えてなかったー！そして胸に手を置くのがなんかいい！

「あ、感想聞かせてくださいね?」

手を後ろで組んで首を傾げながら聞いてくる様は2次元とかでよくメインヒロインがするような仕草だった。

「ツ!いいですよ、暇な時連絡してください」

「はい!」

先程連絡先を交換したから連絡を取るの簡単だ!

「私初めてです、こんなに話が合う人いままでいなかったです」

「俺もです、あね…ツ!」

「あね?」

「な、なんでもないです!ではまた!」

「はい!」

姉貴の作品をこんなにも好きな人がいて、と言うところだったよ
多分だけと言わない方がいいと俺は思う。それにそのこと言ったら…:…なんか嫌われそう。黙ってる方がお互いのためだな

「さーてと!今夜はアニメ化記念としてご馳走用意してやるか!」

家に帰り滯奈の作品のアニメ化記念パーティーの準備をしたレイ
だったか…

その日滯奈は家に帰ってこなかったそうだ。

GW何してましたか？その3

GWも後半戦突入、今日と明日を合わせて休みは2日だけ、俺は宿題等は終わってるからその点の問題はない。

今回は俺が柘優に宿題を見せるパターンかな？春休みの宿題は柘優に見せてもらった、となると次は俺が見せる番、明日にでも連絡入れて見せるとするか！

……ってあいつの事だからもう終わらせてるか

家だというのに俺は1人悲しくそんなことを考えていた。

と言うのも昨日姉貴は帰ってこなかったんだ。

別に怒ってない、俺は怒ってないよ？いや社会人と言ひ張るのなら連絡の1つくれてもよかったと思うよ？

将来結婚して夫に連絡しなかったら怒られるぞ？いや俺は怒ってないけどさ

「た、ただいま戻りましたー……」

どうやらリビングでくつろいでいると姉貴が帰ってきたようだ。

朝帰りならぬ昼帰りだな

「レイ……はーやっぱりいる!？」

「……………」

姉貴は俺を見つけた途端座っているソファの目の前にやって来て土下座をして見せた。

「連絡せずにすみませんでしたあああああ！」

「……………」

「……普段携帯を持ち歩かないため連絡できませんでした！」

「あと！家の番号もレイの番号も覚えてませんでした！」

こ、これは……人間性を疑う話になりそうだ。

「で？楽しかったの？」

「……へ？れ、レイさんかなりのお怒りで？」

「怒ってない、それで楽しかったのか？」

「そ、それはーた、楽しかったです」

指と指を合わせてもじもじしている姉貴は普通の女の子なんだと

感じざるを得ない行動をしていた。

「はあ………つたく、こつちだつてアニメ化記念でせっかくグラタンつくつて待機してたんだぞ?」

「あたしの大好物じゃん!? え! 捨ててないよね!」

「捨ててねーよ、冷蔵庫で眠ってる」

「てかなんでアニメ化知ってるの!」

「あんなに堂々と宣伝すればわかるっての!」

話がコロコロ変わって対応がめんどくせーな!

アニメ化の話なんかは俺じゃなくても色んな人が既に知ってるはずだ、なんなら白金さんは大喜びしてたし

「とりまアニメ化おめでとう、姉貴」

「ううう! レイ! お姉ちゃんは今猛烈に感動しているよ!」

「昼帰りしてきた姉貴はもう姉貴じゃねーよ」

「なっ!」

てかなんでも昼なんだ? 朝帰ってくる方が普通じゃないのか? 知らんけど

「失礼な! ちゃんと編集長の家に泊まったよ!」

「げっ! あ、あの人の家にか!」

「そう! そしてさっきのさっきまでレイの話をしてたんだよ」

弦巻の編集長……あの人苦手なんだよな、何かと俺に話しかけてくるし、なんか変に気にいられてるのか? 俺は

「まっ、昨日祝えなかったし今日祝ってやるよ、何食いたい?」

「……色々リクエストしたいけど今日は軽めで」

「てめえは何食ってたんだよおー!」

せっかく手料理を振る舞おうと思つたんレイだが濤奈からの返事に対して叫びをあげた。



姉貴は自分の部屋に行つて少し眠ると言っていた。

話を聞くと昨日は焼肉寿々苑と言う高級焼肉店にてアニメ化記念

のパーティーをしたらしい

と言っても弦巻の編集者達とのパーティーのためそんな大きなことをしたわけじゃないらしい。だから焼肉だと

ちなみに支払いはいじゃんけんで決めたらしい、最後まで残った結弦さんは編集長とのじゃんけんに勝ちガッツポーズをしている写真を俺は見せられた。

あの人は普段姉貴に振り回されてるもんだから少しは幸せになつて欲しいと心から願うよ

リビングにて貯めていた深夜アニメを見終えて携帯でもいじろうと取り出した瞬間

／ピンポーン／

「ん？」

神崎家にチャイムが鳴り響いた。

姉貴が何か注文していたのか?と思ひ玄関に向かいドアを開けと

「れ、レイ君……き、来ちゃった？」

「ツ!?つ、つぐみ!?!」

き、来ちゃった?つて!彼女かよ!いやつぐみは俺の彼女じゃないけどさー!

「どうしたんだよいきなり」

「れ、レイ君にあいた、会いたくてな、なつちやつて!?!」

?つぐみのやつがこんなに積極的な女の子じゃない……まさか!アサシン!?

いや、でもこれは

「……………おい!」

玄関から身乗り出して外を見てみると物陰に隠れている4人、巴、蘭、モカ、ひまりを見つけた。

「……………で?俺が慌てふためくところを見たかったと?」

「いえーす、どう?つぐの仕草はドキドキしちゃいましたか?」

「お前らがいなかったら満点だったよ」

リビングにてみんなにお茶を出した後さっきの話をしていた。

あのまま玄関で話すのはご近所さんに迷惑だから中に入れたが…

これって大丈夫なのか？

「最初は蘭の予定だったけどどうしてもいやって言うからなー」

「もー蘭もこれぐらいできないと彼氏できないよ？」

「……別に、ただレイにするのが嫌なだけ」

「おーやー？それだと好きな人にはするのかな？」

「ツ！もーかー？」

「あいあーい、さーせんしたー」

相変わらず蘭に俺は嫌われているようだ。高一の時どれだけ俺がお前を助けてやった事か…もう少し優しくしてくれよ

てか2人どうしの時は仲良いだろ!?

「レイ君ごめんね、こーゆう体験も必要だって聞いたから」

「ひまりは後で説教な」

「なんで私!?!私が言ったけどさ!?!」

やっぱりお前だったんじゃないか!?

「んで何しにきたんだよ、俺のことをはめて終わりか？」

「んーレイ君がえちえちなことしたいって言うならひーちゃんが相手するけど？」

「なんでまた私なの！流石にそれはできませんー!」

ひまりはあれか？いじられキャラってポジションになっちゃったのだろうか

いやー3年間で人って変わりますな、特に胸とか

「……今私の胸のこと考えてたでしょ？」

「なわけないだろ、てか幼馴染にそんなのは求めてませーん」

『……………』

な、なんだよそんな反応されるとなんか俺が困るだろ!?!なんで黙るんだよ

いや確かに幼馴染のこいつらは可愛いよ？でも流石に幼馴染にエロスを求めちゃいかんやろ

ひまりの胸はでかいけどでかいどまりでそこからは何も考えてません

「ほ、ほらーんで結局何しに来たんだ？」

「……あ！うん！私達宿題しててね、気分転換も兼ねてレイ君の家でしようってなってね」

「あんたの家に来たってわけ」

「……なーるほど」

「やっぱりこいつらは普段から5人で遊んでのか、なに？俺ってやっぱりハブられてるのか？」

「俺終わってるからー……なんかお菓子出すよ」

「流石レイ！気が利くなー！」

「……だろ？」

「キッチンの棚からポテトチップス、クッキー、その他もろもろ更にだしみんなに振舞ってやった。」

「まあ姉貴のお菓子だし大丈夫だろ」

「俺は宿題終わってるもんだからすることも無く携帯をいじってた。」

「レイくん、携帯いじって何してるの〜？」

「別になんでもいいだろ？」

「まさかエツチな画像とかー？」

「………最低だね」

「見てねーよ！てか蘭！勝手に決めつけるなよ!!」

「否定する前から決まられるとかなんだよ!？」

「ほら！ちゃんと見ろ！ネットで鍋を探しているだけだ!」

「鍋って主婦みたいだな」

「料理は俺の十八番だからな」

「主婦みたいだなを否定することができねー！こないだも自分で主婦だなど思ってたけどさ」

「だいたいレイ君キャラ設定濃ゆくない？」

「料理できて紺碧色の髪、何か狙ってるのー？」

「ひまり……お前は何か言いたいんだよ」

「料理ができる男子なんてこの世に何百人、いや何千何万人といる。その何が濃ゆいんだよ!？」

「べっつにー、あ、レイ君洗面所どこ？」

「洗面所？手を拭くならウエットティッシュで」

「……手は洗うタイプの人なの！」

「ならキッチンで」

「キッチンで手は洗っちゃダメなんだよ？知らないの？」

なんかひまりに知らないの？って言われるとイラッとくんだけど
！

「出て右行ったらすぐだよ」

「ツ！ありがとうございます！」

な、なんなんだあいつは…なんかテンションおかしいだろ

「……んーなんか賑やかだねー」

「げっ！」

「ツ！蘭ちゃん！え！なんで蘭ちゃんがいるの!?!」

姉貴が降りてきたと思えば蘭を見つけて抱きついた。何故かは知らんが姉貴は蘭のことを一番気に入ってるんだ。

「なーちゃんは相変わらず蘭の事が好きですなー」

「おー！モカ之助！もちろんも！あとつぐちゃんも！あれ？ひーちゃんは？」

「ひまりちゃんなら洗面所に行ったよ？」

モカのあだ名だけなんか色々追加されてる気がするが黙って
こうか

「……ただいまーあー！なーちゃん！久しぶり！」

「おー！ひーちゃ…ん？」

「ん？」

「あはは、えつと、何その胸？」

「え？あーはは、最近成長期で日に日に大きくなって」

「ひ、日に日に大きくなる!?!あたしなんてもう成長期なんてないんだぞ!?!」

はあ始まったよ姉貴の胸の話が…こないだ聞いた時は気にしてないとか言ってたくせに

それとひまりはまだまだこれから大きくなるのね

「……うう、巨乳なんてみんなに滅ばばいいんだよ！」

「はいはい、少し黙ろうな」

「だつてえー」

「だつてもクソもあるか！歳下に胸の大きさ負けたくらいで大人が
なくんじやねー！」

「……つぐみその本なのに？」

「あ、これ？前にも蘭ちゃんに紹介した本だよ」

「つぐみは一人だけ早く宿題が終わったもんだから本を読んでおり、
その本に興味を持った蘭は質問をしていた。

「義妹なら結婚できるんですよ？つて本んですけど最近アニメ化が決
定した作品だよー」

「ほうほうーアニメ化ですか」

「この作品面白いから漫画も全巻買っちゃった♪」

「いやーそれは嬉しいですな！」

『……………』

「姉貴がそんなことを言うのは当たり前だ、なんせ作者だからな、で
も蘭達はその事を知らないんだ。

「何言つてんの滯奈さん？」

「……いやだからそれ書いてるのあたしだから」

「……………神奈先生が書いてるんですよ？」

「だから神奈があたしだつて！……あれ？レイ話してないの？」

「……………うん、話してないな」

『えええええ！？』

「まあ驚くよな？あんなに人気な作品の作者が今日の前にいて、そし
て幼馴染の姉貴で知り合いだとかもう衝撃だろ

「う、嘘だろ！？バストマイナスAの滯奈さんが！？」

「よーしとちん表出ようか！？」

「えー！この絵書いてるのも話作ってるのも滯奈さんなの！？す、凄い
！」

「……………」チラチラ

「蘭のやつ本と姉貴を交互に見て驚いてる感が見てて伝わるよ

「……モカはあんまり驚いかないな」

「まあモカちゃんよりー」

「……だな」

そう、この本を読んでいた人物が1番喜ぶに決まってる。

「ほ、本当に神奈先生ですか!? 私大ファンなんですよ!」

「そーなの? 嬉しいなーサインインいる?」

「はい! いただきます! あ、うちの店に飾りたいので2枚貰ってもいいですか!」

「いいよいいよーほい!」

「きゃー! 本物だ! あの! 作業場所とか見てもいいんですか!」

「いいよー! 今夜は寝かせないぜ?」

「お持ち帰り演出来たー!」

きゃー! と何度も言うつぐみは俺の知っているつぐみではなかった、それもそのはずみんながみんなつぐみを見て驚いていたよ

ふと思ったが白金さんも同じようなことになりそうだな、言わなくて正解だったよ

「みんなついでに夜ご飯食べていく? 今日アニメ化記念でレイがご馳走作ってくれるんだってさ!」

「マジか! ならあたしはラーメンで!」

「私はジャンボパフェ!」

「……あたしはコーヒーで」

「モカちゃんは大きなパンがいいな」

「私はケーキがいいかな!」

みんなこれでもかと自分の好きな物を要求してくるな、みんなの要望には答えてやりたい! だが!

「当店では用意出来かねます!」

『えー?』

その後Afterglowの要望には答えることができなかった家にある材料にてそれほどのおもてなしをしたそうだ。

そしてグラタンはまたも食べる機会を失ってしまったようだ。残念

その後レイは友希那さん作戦を行うも彼女はアサシンではなかったのであった。

自分のことを考えたことはありますか？

朝、それは必ず毎日やってくる。

どんなに疲れていても学生は、そして社会人は起き上がり各々目指す場所へと足を運ぶ

もちろん俺もその1人、部屋にて制服に着替えブレザー片手に下に降りる。

適当に卵とベーコンを焼いてパンを焼く、最近買い替えたトースターで焼いたパンは絶品だ。買い替えて正解だったな

「姉貴ーいつてきまーす」

「……………いつてらーしゃーい」

小さい声だが返事をしてくれて生存が確認できた俺は学校へ向かう。

「？」

登校途中に携帯のバイブが鳴る。気づいて携帯を見てみれば

『登校途中に可愛い猫がいたわ、レイにも見せてあげる』

相手は友希那さんからだ

数日前の出来事で俺は友希那さんがアサシんだと決めつけ接していたがそれは俺の妄想であって実際は全く違ったんだ。

俺が問いただしているうちに友希那さんは俺も猫が大好きな人、と思っただらしく今は類友として仲がいいんだ。

『可愛いですね』

なんて言葉を送って登校途中の出来事は終わった。

「うーす柊優」

「おーすレイ」

「…………お、マガジンじゃんー何読んどの？」

「知ってるくせに言うなよな」

「あはは、だよな」

当然読んでいるのは義妹だよなーまあ柊優は俺が神奈こと神崎滯奈の弟なんて知らないけど

「てか席替えしんどー、お前と席離れたじゃーねか」

「だな、お前の席は…はは、青葉さんが座ってるし」
「げ、あいつはまた…」

今まで隣の隣だったもんだからすぐに話せれたし飯も食べやすかった。

離れて話してる隙に席が近いひまりの机の周辺にみんな集まるしモカが俺の机に座り出す。

蘭のやつは…いない？珍しいな

「おはよう、レイ」

「ツ！お、おう蘭、いないと思つたら今来たのかよ」

「…まあ色々あるんだよ、色々とね」

「……………んじや俺はあれであれだからあれするわ」

「？おう」

柊優のやつはやつぱり蘭と何かあつたんじゃないのか？

前もなんかあれがあれでどうたらーって言つてたし？

「あんたさ、いつもあたしから距離取るよね」

「……………だったら美竹さんは俺と話したいのかな？」

「な！なわけではないでしょ！」

「ならお互いの為に関わらないのが正解なんだよ」

そう言つた柊優は教室から出て行き、蘭もみんなの所へと向かつた。

俺はと言うと

「何か…………あるのかな？」

なんてことを言つていた。

俺は席につくなりモカに注意して朝のHRが始まる。

その後授業はなんやかんやで進み、もう昼休み

「柊優ー飯食うおうぜ」

「んーいいぜー」

あんまり聞いちゃいけないことかもしれんが一応聞いてみるか

「柊優つてさ蘭と何かあつたのか？」

「ツー！」

柊優のやつが大きく反応したもんだからさ

「い、いや！別に答えなくてもいいんだぞ！その幼馴染と友達が仲悪

いのは俺がそのーあー何言ってるんだろ俺は!？」

ビビって言い訳を並べていた。

あーいつもこれだよ!なんか話しかけたら直ぐに理由を説明して…何ビビってるんだか

「……さあ、美竹さんに聞きなよ」

「え、えーそう来るか」

「って何ビビってるんだよレイーなんだよ、俺ってそんなに怖いか？」

「び、ビビってねーし!？」

「あつはは!今度からレイを脅す時はこうしよつかね」

「それはまじでやめろ」

柘優は笑いながら言ってるけど俺はまじトーンでやめろと言っていた。

なんか柘優が怒るって想像できなかったけど今日の出来事であった、柘優は怒らせると怖いタイプの人間だ。

飯を食おうと弁当箱を開けようとした時

「失礼するわ、レイはいるかしら」

「ツ!友希那さん!」

なんの前触れもなく友希那さんが我がクラス2年A組にやって来た。

「?メッセージは送ってるはずよ?」

「……あー来てました」

「ならわかるわね、お昼一緒に食べましょう」

「ツ!え、えーと何故急に?」

「私とあなたの仲だからよ」

『ツ!』

え、えー!?そんなこと言うとかラスのみんなが勘違いするじゃないですか!?

急いで後ろを振り向くと殺意ダダ漏れの男子生徒共!柘優のやつは黙々と弁当食べてるし!

「私とお昼を一緒にするのは嫌なの?」

「ツ!」

何その下から目線ー！身長少しだけ高くてよかったー！
でも、と柊優を見るが

「(行つてこい)」「コク

とでも言うように頷く、ならば俺が断る理由はもうない、友希那さんとお昼を一緒に！

「ちよつと友希那さん！いきなり現れてレイとお昼つてどうゆうことですか？」

「……美竹さん、一体何の用かしら？」

「どうして友希那さんがレイをお昼に誘うんですか？」

蘭さーん！何故あなたはいつも友希那さんに突つかかるんですか！?
仲良くできないのかよー！

「なんでつてそれは…ゴニヨゴニヨ」

「なんですつて？」

「い、言えない仲だからよ…」

『ツー！』

違うんです！違うからな！?猫友だと知られたくないから言えない
だけでだからな!?

だから俺を殺すような目線で見るとはじゃない！

「ふっ」

「ツー……なにあんた、今笑つた？」

「……………別に俺は笑つてない」

蘭のやつ次は柊優のやつに絡み出したぞ、てか蘭…お前そんなんだから友達いないんだぞ

蘭はもつと優しくなりなさい、そうだなーひまりにみたい人になりなさい！

「(なんて口が裂けても言えねーよ!)」

「だいたいあんたのせいであたしが迷惑してるんだからね、そこんところちゃんと理解して」

「……………別に俺は気にしてない」

「ツーもういい」

んー2人には仲良くして欲しいんだけどな…蘭がそうしようとし

ないんだよなー

みんなの所に戻るなり弁当を勢いよく食べてるし、また蘭の評判が下がらなければいいんだけど

って！人の心配してる場合じゃねー！俺も今男子の大半から敵意を持たれてるんだぞぞ！

「みんなー違うぞ？これはだな」

「やっぱり料理か？料理なのか？」

「いや中性的な顔だろ」

「まじねーわ」

2年A組の3馬鹿トリオの遊、優亜、由明日、何かと首を突っ込むやつら…相手にするとめんどくさい

「……もういいや、友希那さん行きましようか」

「ええ」

友希那さんが昼ご飯に誘うなんて初めてだな、まあつい最近仲良くなっただけなんだけどね

「今日はお弁当作ってきたの、特におにぎりに力を入れたわ」

そう言いながら見せてきたおにぎりは

「おー猫だー」

俗に言うキャラ弁ってやつだ。海苔を器用に切って目とか作ってるし、おなかで三毛猫の色を再現してる。普通に俺から見ても上出来だと思う

「あなたなら喜んでくれると思ってたわ」

「……え、ええ！もちろん！だって俺は猫好きですから！」

そう、俺は猫が好きって設定になってるんだ。もしこれが違うとバレたら俺は消されるかもしれん

「……違うわよね？」

「……………へ？」

え、一瞬にしてバレちゃいましたか？いや、は？やばくね？

「好きじゃなくて大好きよね？」

「ッ！そ、そうっすよ！何言い出すかと思えばそんなことだったんすね」

「そんなことなんかじゃないわ、にゃんこ達は私にとって癒し、それを共有できるのなんてあなたぐらいなのだから」

あー心がクソ痛い、なんであの時猫が好きなんて言ったんだがいや別にとくべつ嫌いってわけじゃないけどさ

「あ、おにぎり食べてもいいですよね？・食べますよー」

手を伸ばしおにぎりを掴み食べようとするが

「あー」

「……………なんすか？」

「な、なんでもないわ」

「じゃ、じゃあ、いただきます」

「あぁー」

「……………」

食いづらいよ!?なんだよ!このおにぎりにすら感情を持つてるのか!?

「くっ!し、仕方ないことよ、この子達はにゃんこ達と違って食べられるために生まれてきたのよ」

「決して動物愛護団体に何か因縁をつけられることはないわ、ガブツと行って……………いいわよ……………」

さらに食べずらいわ!なんで動物愛護団体なんて言葉を出すんだよ!なんかその言葉を聞くだけでなんか、な!?わかるだろ!

「……………この猫達は友希那さんが面倒を見ましょう」

「ツ!え?」

「こいつらも俺なんかより友希那さんに食べられたいはずです」

「……………そ、そうね、そうするわ」

おにぎりを個別タッパーに避難させた後残りのおかず類を食べようと箸を伸ばした。

「……………かって!え、ナゲット硬いんですけど?」

「そんなはず……………何これ、硬いわ」

「冷凍食品は少しチンして入れるといいっすよ?」

「気をつけるわ」

こーゆう肉類の冷凍食品はチンをオススメするぜ、まあ俺は冷凍食

品とかには頼らない人間だけど

「では気を取り直してー卵焼きをー」

「ッ！」

「どうかしら？」

「……う、美味しい、美味すぎます！」

「そ、ならよかったわ」ホッ

美味いと言ったが…友希那さん、砂糖入れすぎですよ！クソ甘いよ！
!?!いや美味いけど！

「じゃあ次は俺の弁当食べますか？」

「いただきます」

次は俺のターン！

「ッ！な、にこれ」

「？」

「……あなたキャラ設定で料理が出来るんじゃないやなかったの？」

「なわけないでしょ!」

何故友希那さんがそのキャラ設定とか知ってたんだよ！あとあなたがそんなことを言っただけじゃない！

「とても美味しいわ、リサといい勝負ね」

「なら今度勝負してみよっかな、審査員は友希那さんで」

「ええ、喜んで受けるわ」

その後は友希那さんが携帯で撮った猫の写真を見ながら話をしてあつという間に昼休みは終わった。

ちなみにだが何故4月29日の放課後の出来事を話してくれなかったのかを聞くとどうやら猫と遊んでいたらしい。

証明できる人はいないってわかってるから聞かなかったけどとりあえずアサシンは友希那さんではないと決めつけ他の候補を探すか

友希那さんと別れ教室に戻ると蘭が一人でイヤホンを付け音楽を聴いていた。

「おーい蘭、何聞いてるの？」

「……？あーレイか」

「あれ？みんなは？」

「みんなだつてそれぞれ友達いるでしょ」
「なるほど」

要するにAfterglowのメンツ以外の方と楽しく昼休みを
すごしているわけだ。

昼ご飯は仲良く一緒に食べてるんだな

「レイき夜桜と仲良いよね」

「?ああ、仲良いな」

「あんたらさ……付き合ったりしないの?」

「ツ!?はっ!?お前何言つてんだよ!」

「……今のなし、忘れて」

蘭は一度取り外したイヤホンを付出し教室を出て行った。

最近の蘭はよくわからん、友希那さんには絡むし柊優とは仲悪そう
だし……おまけにどうどうと付き合ったりしないのか?つて聞いてき
た。

「(もしかしてあれか?蘭は腐女子つてやつなのか?)」

そんな考えが一度は浮かんだが午後の授業の体育できれいさつぱ
り忘れてしまった。



午後の授業も全て終わりあとは帰るだけ、そう帰るだけなんだが俺
は帰ろうとしなかった。

今日はバイトもない、買い物する予定もない、ならば帰って晩飯
作ってゲームして寝ればいいだけの話

ふと外も見るとグラウンドで運動部が活動をしていた。

サッカー部を見てみると柊優がいる。腕にはキャプテンマーク、あ
いつはいつの間にかキャプテンにまで上り詰めていたんだ。

まあ一個上から共学になったし?三年にしきれんやつがいなかつ
たんだろう、にしてもすげーよ

柊優を見てると俺つて何もできないやつだと自覚してしまおうよ
アサンだつて俺なんかより柊優みたいなやつを好きになつても

おかしくない、なのに何故俺なんだろうか

「……って何考えてんだか俺は」

そんなのは考えても意味なんかない！考えるだけ答えを見つけ出せず永遠と考えるだけだ

玄関にてロッカーを開くと

「て、手紙だ!？」

あの時貰ったラブレターと同じ便箋！だったら差出人はアサシンだろ！

手紙を読んでみると

「屋上に来てください」

と、また電子文字で書かれていた。

「……………」

わかってる。俺はわかってるぞー！屋上に来いと言いなながら！

「……体育館裏にいるんだろ!？」

体育館裏に着くのと同時に俺は声を上げた。

屋上とか行ってもどうせいないし無視してこっちに来た方がアサシンはいる!と思ったら

「お、今日は早いねー、やっほー」

「……現れやがったなアサシン!」

「アサシン？僕の呼び名かなにか?」

「ああ、そうだよ」

アサシンはいやがった!しかも羽丘の制服だ?!それはもう羽丘生徒だつて言ってるみたいなんもんじゃないか!

「実はヘリウムガス吸うの面倒くさくてね、声を変える変声機?つて言うのかな?買ってみた!」

「どう?前より女の子ぽく聞こえるだろ!」

「前から女の子だろ!」

ヘリウムガスごときで男の声が女の声になるわけが無いだろ!てか変声機とか金掛けてんな

「てか羽丘の制服なんか着て来て大丈夫なのか?」

「うん、どっちの制服も持つてるから大丈夫だよー?」

わざわざ買ったんかい…

「あ、もしかしたら姉妹がいるかもね」

「……さいですか」

まあこれも嘘かもしれない

「いやー君の作品ね、結構人気出てるんだよ」

「はっ!？」

「1話だけでU A 10万以上…色んな出版会社から声もかけられて困ったもんだよ」

肩をすくめながら答える様子は嘘をついているようには見えなかった。

あの俺の黒歴史がなろうぜ!で10万以上見られてるのか…あれ?普通に恥ずかしくね!?

「でも全部断ってるから安心して!……でも?小説家になりたいのなら受け入れるけど?」

「受け入れなくていいわ!てか話をそらすな!」

「ツ!だ、だつて好きな人と話すと緊張しちゃうよ」

仕草は一丁前に可愛いが顔が見えない、そして声は可愛くない!

「その好きってlike?love?」

「I Love レイ君!」

「……………」

もうこの際彼女に聞こう、さっきまで悩んでいたあの話を…

「なあ、なんで俺のこと好きになったの?」

「ツ!いや!俺つてさ別にいい所ないだろ!顔はそこそこ性格は…んー?だけど特技とかは料理とか家事全般だけだし」

「……なんで俺なんかを好きになっちゃったんだろうって、思つてさ」
直接本人に聞いた方が手っ取り早い、自分で考えてもわからないのなら他人に聞くのが1番だろ

「なんでそんなこと聞くの?」

「……それは自分に自信がないというか」

「あのさーあんまり強い言葉言うと嫌われそうだから言いたくないけど」

「僕の好きな人をこれ以上悪い言い方しないでよ」

「ツーゴ、ごめん」

紙袋（山吹ベーカーリーの紙袋）を被っているも声音で彼女が怒っているのはわかる。

「いい？僕は君が思っているよりも君のことが大好きなんだよ」

「ツ!？」

「あ！顔赤くなってる！」

「う、うるさい！」

そうだ、そんなのどうでもいいんだ。

彼女はおれのが好き、それだけでいい、理由なんてそんなのどうでもいいんだよ

「……そっか、なら俺はあんたを全力で見つけ出す」

「付き合ってくれたりしたらエッチなことだっけしてくれるんだろ？」

「うん、見つけてくれたらするよ」

「そ、そこは動揺しろよ!？」

なんか俺が性欲の塊みたいなゲスいやつになってるじゃねーか!?

本当は違いますよ!?!ただアサシンが動揺する様子を見たかっただけですよ!?!

「今日はどういかな、君と話せたし楽しかった」

「俺は君に怒られたけどな」

「それはーごめんね、でもスッキリはしたでしょ？」

それは、まあうんスッキリしたよ

「ああ！だからその首あらって待ってけよな！」

「……うん！」

アサシンはそう応えると俺が来た方向とは逆に向かい姿を消した。と、思ったら

「きゃっ！」

「ツ！」

追いかけるつもりはなかった、だってそこで見つけたところで俺やアサシンは望む結果になんかならないだろう？

「大丈夫か！ツ!?」

「いたた……はっ!」

「み、見た?」

「いや黒のショーツなんてこれっぽっちもみ、見てないよ」

「見てるじゃんか!……もういい!帰るから!」

「あ、おい!」

盛大に転けてたもんだからパンツは丸見え、嫌でも目に入ってしまったのうっての!

見えたなんて言わない方がよかつたのかもしれない

と言うよりこのままさよならなんてお互い気まずすぎる!俺は追いかけるようにアサシンの後を追うと

「あいた!」

「ぬわ!」

誰かとぶつかってしまった。

急いでたもんだから前が見えていなかったんだ。

「ごめん、大丈夫か?」

「いえいえーモカちゃんこそ余所見しててごめんね」

「ツ!も、モカ!」

ぶつかったのは幼馴染のモカだった。こんな体育館裏付近に何故帰宅部のモカがいるんだよ

いや俺も帰宅部のくせにいたけどさ

「あれー?れーくん何してたの?」

「いや、俺は……そのーさ、散歩だよ、あはは」

さてはモカがアサシンなのか?こんな所にいるのはさつきも言ったがおかしいぞ

ここで確かめるか?あのことを聞けば一発でモカがアサシンかどうか判断をつけることは出来る。

けどその質問を俺が出来るわけが無い!

「じゃーモカちゃんはお仕事があるので」

ここでモカをみすみす逃がしていいのか?

今の時点で可能性が高いのモカしかないんだぞ?

どんなに足が早くてもここからすぐに姿を消して逃げられるわけがない。

ならば必然的にモカがアサシン…になりうる

「行かせない」

「ツ！へ？」

逃げようとするモカに対して俺は壁ドンと言うものをしてみた。

初めてすぎて緊張するけどそんなことより今はモカに質問するところが1番だ。

「……こんな所で何してたんだよ」

「い、いやーモカちゃんも？れーくんと同じ散歩ですよ」

「ここで揺さぶりをかけてみるか」

「俺は知ってたんだぞ、お前がここで何をしてたか」

「ツ！へ、へ？なんのこと？も、モカちゃんれーくんの言ってる意味がわからないな……」

髪をいじりながら、そして目を泳がせながら言うモカは俺にとってそれは答えを言ってるようなものに捉えてしまった。

「(モカがアサシンだった)」

こんなことで知りたくなかった。もっと探偵みたいに推理して探し当てるんだと思ってた。でも…そうはいかないか

「悪いが俺はお前の秘密を知っている」

「ツ!？」

「それでだな、その秘密を知るためには」

そう、秘密アサシンを知るにあたって必要な情報、それは

「モカ…パンツを見せてくれ」

「……………」

パンツを見れば全てがわかる。もしモカが黒のショーツならばそれはアサシンだ、悪いが柄も覚えていいるぞ

って俺やば変態じゃん!？」

「れーくんはモカちゃんの秘密を知った時どう思った？」
「？」

それはアサシンだと思った時の話だろうか？

「……正直驚いた、モカがその…だったとはな」

「えへへ、幻滅した？」

「ツ！なわけない！お前がその気なら俺はその気持ちに答える！」

こんな俺を好きになつてくれたんだ！幼馴染だろうがそんなの関係ない！モカが望む関係を俺は素直に受け入れる！

「ツ！ほ、本当の本当？」

「ああ、本当だ」

これから俺達の関係は幼馴染からステップアップするかもしれない、だがそれも遅かれ早かれだったんだろう。

そのうち見つけ出せばの話だったけど

「だからパンツを見せてくれ」

今思っただけで完全にモカがアサシンつてていで話を進めてるんだが、まあこの様子からはモカがアサシンだろう。

「……うん、なられーくんを信じるよ」

「ツ！お、おう」

モカのやつが今までに一度も俺に向けたことがないような女の顔でそう言うとおもむろにスカートに手をかけた。

そして…めくりあげる。

「なっ!?!」

俺の目の前に広がる光景は予想とは全く違っていた。

そして俺はその日一日中後悔した。

なんで女子に対してパンツを見せろなんて変態なことを言ったのかを、な

幼馴染が変態になったことありますか？

昨日まで寝起きなんてそこまで悪い気分じゃなかったんだ。

何故寝起きで気分が悪いのか、それは夢を見たんだ。

モカとあれこれするような夢…まああれこれって言うのはR18の内容だと言えはわかってくれるだろ、いやわかってくれ

全く幼馴染であんな夢を見るなんて俺はどうかしてるだろ…幼馴染にそんなのは求めてないって言ったのはどこのどいつだよ

たんだろう…？昨日何かあったからこんな夢を見てるんじゃないかと思ってしまう。

「昨日、昨日…はっ！」

ぶんぶんと首を振り昨日の出来事を思い出していたがかき消す。

人間黒歴史や嫌なこと、そういうことは忘れたくても忘れることが出来ないものだ。

いや話によると？忘れろ忘れろ！って思えば思うほど脳に根付き忘れなくなるらしいって話は置いといて！

でも嫌な夢を現実だと俺が思い込んでいるだけなのかも知れない俺の幼馴染がそんなことをするはずがない、だからあのできごと

きつと全部夢なんだよ

そうそう！俺が変態野郎だからモカでイケないことを想像して興奮してただけだ！

うん！そうに違いない！

携帯に目を向けるとメッセージが来ると表示されていた。

「モカからだ」

先程まで変な夢を見てたせいで少し罪悪感があるんですけど

トークアプリのトーク画面では画像が送信されました。となってる。

ちなみにモカのアイコンはフランスパンだった。

何かと見てみると

「ッ!？」

またも目を疑う写真、あーそうだよ、そうでしたね

「あの出来事は夢じゃなかったああああ」

気が抜けるような、いや遠くなるような覇気のない叫びはレイの部屋に響くことなく布団へとダイブした。

モカから送られた写真の後は一言

「今日こんな下着はいてまーす♥」

なんてメツセージを送ってきたきやがった。

そう…モカが送ってきた写真は自分の部屋の姿鏡にて撮ったであろう下着姿の写真

そんなの幼馴染に送るはずがない、てか送っちゃダメなんだ。

でも俺の幼馴染、青葉モカは…

昨日の話をしようか、昨日俺はモカにパンツを見せろ、なんて事情が知らない他人が聞いたらドン引きされるような一言だが仕方がなかったんだよ

それだけでモカがアサシンかどうか判断できたからな!?

そしてパンツを見せてきた、と思ったら

うん、結論から言うがモカはパンツを履いていなかったんだ。

いや異性のその…初めて見たのがまさか恋人とかじゃなくてただの幼馴染、それも露出狂とかいう変態のだ。

「……………」

もちろん見た時一瞬反応した後は言葉なんてでなかったさ

「えっへへ、れーくんにはバレてたんだ〜?」

「ど、どゆこと…?」

「だーかーら〜?モカちゃんが露出趣味がある変態女子だったこと♪」

いけない音符マークが見えた気がした、普段リサさんとかから出るような綺麗音符じゃない、それは別のものを感じたよ

「いやーでもいつ知られたんですかねー、もうモカちゃん恥ずかしくて、えへへ、興奮しちゃうよ〜」

きやーと言いながらお尻をフリフリするが目の前のモカは下着をつけておりません

「ッ！ちよつと待て！お前！」

「？」

ま、まさか？

「俺の机に座ってる時……！」

「あ、気づいちちゃった？もちろん履いてませんでしたーえへへ」
てことは俺は……!?

今までのできごとがフラツシユバックしてくる。

授業中に机に伏せて寝てたり！朝のHRでは顔面をつけてもろ寝てたり！

そして！放課後のさつきまで！

「れーくんが寝てる時は興奮したな〜」

「ああ……………」

言葉なんて出ないよ

「でもバレたなら仕方がない、隠さずにこれからはれーくんはどうとうとしたモカちゃんを見せれますな〜♪」

どうどうと見せられる!?

じよ、冗談じゃない！

「ちよつと……………」

「ん〜？」

「ちよつと俺の知ってる範囲を超えてましたので無理ですうう!!」

俺はその日モカから逃げるようにその場を後にしたんだ。

そう、昨日のできごとは夢なんかじゃなくて現実だ。あんな出来事あつた後…頭からあの光景が離れないですよ!?

嫌でも考えてしまうもんだから夢に出てしまうっての!?

「…………レイー？おーいレイー？」

もうなんなんだよ！幼馴染？ちげーよ！ただの変態じゃねーか！

幼馴染がいつの間にか幼馴染から変態にジョブチェンジしてる奴なんてこの世にいますか？

いないよな!?

「レイー、焦げてるよ？」

「ぬあつ!？」

「?何驚いてんの、てかベーコン丸焦げじゃん、どったのさ」

い、いかんいかん料理中だった、料理中に昨日の出来事を説明するとか…あれ?説明?俺は何を言ってるんだか…

「…………いやちよつと考えごと」

「レイでも料理失敗することあるんだねー」

「てか姉貴はまたか?」

「あはは、いやー徹夜しててさ?今から寝るところだけど腹減ったしレイのご飯食べようかなって!」

まあよくある事だ、ラノベの締切間近の時とかはよくある、それにこんな機嫌よく話しかけてくることはなけど

なんせ話をずつと考えているもんだ、一人でブツブツ言ってる時はさすがに俺もなにか声をかける気にはならん

姉貴曰く作家には入ってる時ってのがあつらしくその時が一番話を進めれるんだとさ

「焦げたやつは俺が食うから、今から新しいの焼くから待つとくけ」

「はーい!あたしは優雅にニュースでもみながら待つときまーす!」

一瞬だけモカのことを忘れてたレイだがすぐに思い出したことは黙っておこう。



朝教室に入る前に中を見る。モカのやつは机に座ってない、ならば今のうちに駆け込んで座っておけば!

「…………ふう」

なんで教室に入るのに緊張しないといけないんだよ、そんなのは進級した時初めて教室に入る時だけでいいだろ

少し早く来すぎたのか柘優のやつはまだ来てないな

教室にいる生徒も…まああれだ、喋ったことの無いクラスメイト達ばかりだ。

携帯を取り出したら通知が来ていた、相手はモカだったからスルー

しようとしたが手が勝手にトークへと進んでいた。

あのモカの下着姿の写真を見て思ったけどいつの間にかみんな大人の女性に成長してるんだなって自覚させられますよ

ひまりは置いといて蘭もつぐみも、そして巴もこんな感じなんだろうか？

「つて！何想像してんだよ!？」

だ、ダメ！それ以上の想像はダメだぞ神崎レイ！

幼馴染でそんな変態みたいな想像をするんじゃない！

とは言ったもののモカの下着姿の写真をまたまた見てしまう。

下着の色はアサシンと真反対の純白の白、それだけじゃない、やっぱり何度見てもスタイルとかもーいろいろ…とかこれ数分間見ていしまったところ

「なーに見てるのレイ君!？」

「ぬああああ!?!？」

「そ、そんなに驚くこと!？」

モカの下着姿を見る途中に話しかけてきたひまりに驚き携帯が手元から見事に姿をなくした。

と言うより俺が投げ捨ててしまったって言う方が正しいかもしれない

「いきなり話しかけるな！死ぬかと思ったじゃねーか!？」

「な、なんかごめん…つて！なんで私が謝るの!？」

「俺も怒鳴って悪かったな!？」

それどころじゃないんだよ！携帯だよ携帯！どこ行きやがった！

もし誰かにモカあの写真なんて見られたらとか思つと…ダメだあの変態の事だ、その事で興奮しそうだ

「れーくん、はい携帯」

「あ、さ、サンキュー」

近くにいたクラスメイト？が携帯を持ってきてくれたんだろう、急いで携帯を回収して画面を見ると画面は消えてた。

低電力モードにしてたから画面が勝手に消えたんだろう、助かったよ

……え？そんなに時間経ってたっけ？

「れーくん？何見てたのかな？」ニヤニヤ
「ツ！」

拾ってくれた人が普通のクラスメイトだと思った俺が馬鹿だった。れーくん、なんて呼ぶ人はクラスに一人しかいない、なんなら幼馴染しかいない、そして気の抜けたような声：モカしかいないよな！
「そんなに見たかったのかな？まだあるけど、あ、直接み」
「ちよつと来いやー!!」

モカの手を取り教室から抜け出し、最上階の渡り廊下に到着したのと同時に俺は叫び出す。

「お前は一体何を考えてんだよ!？」

「何って…でもれーくん見てたじゃん？」

「ツーい、いやそれは」

な、何も言い返せない！見たものを見てないなんてこの状況では言えません！

「まさかそこまで見てくれるなんてねー、送ったかいがありましたな」

「…：はあ、まさかお前がそこまでの変態だったなんてな」

「でも知ってたんでしょ？」

「知ってたけど度を超えてんだろ！」

嘘です、知ってません！なんか知ってる風になってたからそれを押し通しているだけです！

「えーこれぐらい普通だよ」

「全然普通じゃねーよ」

勘弁してくれよ、幼馴染が変態なことしてるのに普通だと言ってきたんだ、俺は一体どうこいつと向き合えばいいんですか？

「でも今日は下着つけてんだろ？このまま毎日つければいずれお前も」

元に戻るはずだ、と言おうと思ったのに

「いやー今つけてないよ？」

「ツ!?な、なんで!？」

「あれはれーくんに見せるためにつけただけですー、興奮しちゃった

「？」

「わざわざ脱いできたのかよ!?!」

大きなため息が出ますよ、わざわざ脱ぐなんて…そこまでして下着を付けない理由が俺にはわからん

そっか、露出趣味の変態さんだったな

「だから〜」

「ツ!?!」

「こうして服越しで胸を触っても柔らかいでしょう〜?」

自分で俺の手を取り胸に押し当て無理やり自分の胸を俺に触らせてきた。

「お、おとおお前な!」

「………下も触る?」

「それはまずいって!」

ダメだダメだ!モカのやつ言うこと聞かずに手を動かして、あ、あー!

キーンコーンカーンコーン

「ちや、チャイム鳴ったぞ?!」

「………むー、今日はお預けだねー」

き、今日は!?!まだやるのかよあんたは!?!

も、もう無理だ…俺の幼馴染、青葉モカは度を超えた露出趣味がある変態さんであることが確定した瞬間だった。



授業中、あのモカの下着姿が頭から離れずずっと不機嫌だ。

なんならあのモカの胸の感触も手に残っててシャーペンがいつもより更に固く感じてしまう。

「なんだ神崎?機嫌悪そうな顔して、私の授業はそんなに楽しくないか?」

「げっ」

英語の担任に目をつけられてしまった。

そんなに不機嫌そうな顔でもしてたのか？あんまり先生から嫌われるのは内申点とかあるから嫌われたくない。

「そんなわけじゃないですよ、寝不足なんで眠たいだけです」

「そうか、なら丁度いい私の質問に答えろ」

「？はい」

授業なんて全く聞いてなかったから内容の質問だと答えられない：どうなる

「お前は黒と白どっちが好きだ？」

「ツ!?な、なぜその質問!?!」

「例文の話だ、お前の返答次第で次の例文を作るんだ」

な、なるほど…!…!けどその質問は俺にとっては答えにくいもんだよ!

黒と言えばアサシン!白と言えばモカ!ど、どちらを選んでもどちらかのパンツを選んでしまうじゃないか!?

「?早く答えろ」

「い、いやー他の人に聞けばいいんじゃないんですか?」

「お前に当てたからお前が答えろ」

クソー!答えるしかないのか!

ならアサシンの黒を!

「俺の好きな色はく」

「黒とか厨二くさいよなー」

「キリトに憧れてそう」

「まじねーわ」

黙つとれこの三馬鹿トリオ!お前らのせいで黒つて答えずらくなつたじゃないか!

確かに一時期黒色の物ばかり好んで買い揃えていたさ!なんなら髪を黒くして生徒指導室に連れてかれた思い出だつてある!

全く思い出したくない黒歴史だよな!?

でも白を選んだら選んだでモカのやつに

「♪」

このタイミングでメッセージが届いた。逃げるようにそのメッ

セージに目を通したら

「ちなみに黒はこんな感じでーす♪」

「なっ!?!」

モカのやつが前に撮ったであろう黒の下着を身につけた写真を俺に送ってきた。

これは…何を答えてももう逃げられない運命ってやつなのだろうか

「……白です」

「わかった、とこのように…」

と言い出し先生は黒板に例文を書き始めた。

アサシンごめん、黒ってやっぱり少し苦手な色だから消去法で白を選んできましたよ

でも君のパンツは凄かったです。決してモカの色気に負けて白を選んではないので!

てか何言ってるんだよ俺は!?

と、頭の中で格闘している時に

「白が好きなんだねー」

なんてモカからメツセージが来た俺は…その日放課後まで誰とも話すことなくずっと眠っているだけだった。

ラノベは好きですか？

「おーい、レイ起きろよ」

「……………んん」

誰かに呼ばれて起きて外を見てみれば空は綺麗な夕焼け模様、いつの間にか放課後になっていたようだ。

「……………巴、こんにちは」

「こんばんは間近だろ」

「はは、だな」

あの英語の後昼ご飯も食べることなくずっと死んだように眠っていたと巴から話を聞いた。

あ、寝る時はちゃんとタオル敷きましたよ？ちよくで寝る気にはさすがになれなかつたさ

なんせモカが生尻を…ってもう嫌だ！考えたくもない！

「よくあんなに寝れるよな」

「まあ寝不足気味だったからな、てか巴は何してたんだ？」

「つぐを待ってたんだよ」

「……………何お前ら、つぐみ待ってる間に俺起こしてくれる係も決まってるのか？」

「何言ってるんだ？」

確かに俺は何を言ってたんだろうか

「……………はあ」

「お？ため息つくとき幸せが逃げるぞー？」

「うるさい、俺の幸せなんてとつくに消えたよ」

全てはあのクソ変態野郎、青葉モカのせいで今日という高校生活は最悪な気分だ。

え？おっぱい触れたのに嬉しくないのか？

違う違う違う、それとこれは別だ。おっぱいは柔らかかったですよでも幼馴染が露出趣味がある変態さんなんてどうしても受け入れられない自分があるんだ。

「なあ巴、男気のあるお前だからこそ聞くぞ」

「それ褒めてんのか？馬鹿にしてんのか？」

「それは置いといて答えてくれ」

「ツ！な、なんだよそんなまじまじ見やがって…」

同じ幼馴染だからこそ聞ける事なんだ、そして巴なら俺が求めている答えを言ってくれる！だから聞くんだ！

「幼馴染が道を誤ったら…：巴はどうすればいいと思う」

「いや誰かが既に道を誤ったわけじゃない、これからの話だ」

あぶね、危うく誰かが道を誤ったような言い方してたよ、まあもう誤ってて手遅れだけだな

「…：それはーまあ仕方がないんじゃないか？」

「ツ？」

巴は腕を組んでんーと唸りながら考えた結果そう答えた。

「人間誰だつて隠していることだつてあるだろ？」

「お、おう」

「レイもあたしも、蘭もひまりもつぐも、モカだつてあるさ」

「うん」

「それがたまたま誤ったことだつただけじゃないか？」

たまたま誤った、ねーそんな軽い話で終わるような道の誤り方じゃないんだよなー

「でもそれが間違つた道、そうだなー法律に触れるような誤ちならあたしは全力でこっちに引きずり戻す」

「…：手遅れになる前にな」

もうダメだよ、手遅れですよ!?

露出って法律とかどうこうとか問題になるよね!?

「実はモカには露出趣味があるんだ」

「ツ！おい！本当かそれ！」

「ああ、巴！俺達でモカを正規ルートに引きずり戻さないか！」
「……………」

「ん？どうしたー？」

なんて言えませんよねー！

言えねーよ！そんなこと言えるわけが無い！そもそも言ったとこ

ろで信じてもらえないよね

俺に送ってきた写真を見せればいいが送られている以上共犯者と思われてしまうかもしれない…

モカのやつはそれを見越して送ってきているのかもしれない！

「巴ちやーん！帰ろー！」

「おっけつぐー！よっしゃー！それじゃ帰るかー！」

生徒会の仕事が終わったつぐみが巴の迎えに来た。決して俺の迎えなんかじゃない。うん、悲しい

「レイも一緒に帰るだろ？」

「…いや俺はトイレに行って帰るよ」

「そうか」

巴は通学カバンを肩にかけて教室の出口に向かう。

「あ、言い忘れてた」

「？」

「親友が道を踏み外したのなら、同じ道に進むってのもありかもな！」

「ッ!？」

「つて冗談だよ、あつはははは！」

いや巴さん…

「その冗談はシャレにならんよ…」

レイはさらに頭を抱え込んでしまったのであった。



重い足取りで羽丘の正門へと向かうと

「あ、神崎君、こ…こんばんは、です」

「あー！白金さん！」

羽丘の正門には花咲の制服を着ている白金さんの姿があった。

「あのー、義妹読みましたか？」

「あー！読みました読みました！うん、読みました」

白金さんすみません！最新巻せつかく貰ったのに読んでません！

ちよつと読む気が起きなかったんすよ…いや内容は知ってるから

ね!?!話はできるからね!?

「それはよかったです!是非お話ししましょうね」

「あ、はい」

最初は弱々しく話しかけてきたのに俺が読んだといえ急げに元気になったな

まあ俺は全然気にしないけど

「あれー隣子じゃん!やつほー」

「今井さん、こんにちは」

「あれ?レイもいるじゃん!」

「どうも」

ここでリサさん登場ーあれ?白金さんってリサさんと面識あったの?知らなかったよ、空がこんなに青いとは、本当に何言ってるんだか隣子は何しに羽丘に?」

「そ、それは…」チラ

「?」

な、なんだよこつちをチラチラみて、何か俺したっけ?

「はっ!ほうほうほう、なるほどねー」

「???」

どゆこと?リサさんはなんか変な言葉言い出すし何考えてんだ?

「てかなんでリサさんと白金さんが知り合いなんすか?学校違うくない?」

『え?』

「……え?」

俺がまるでおかしことを言ったでも言うかのような視線を送ってくる美人のお二人さん

「隣子とアタシは同じバンドに所属してるよ?」

「……………つてことはRose lia!?!」

「そーゆうこと♪」

かー!なるほど!どっかで見たことあるなと思ってたらRose liaだったか!こんな美人さんを見落としてるなんて俺はどうかしてるよー!

でもあの時は友希那さんのことでいっぱいだったから仕方がないじゃないか!

「リサ、燐子、それにレイも集まって何してるのかしら」

「あ、友希那さん」

「友希那ー日直の仕事は終わった?」

「ええ、終わったわ」

友希那さんが普通に白金さんに話しかけるとは…やはり白金さんは Roselia の一員だったのか

ん? Roselia の一員?...ガールズバンドの1人! つてことは?!

「(白金さんがアサシンの可能性もある!)」

「友希那髪にチヨークの粉ついてるよ?」

「そうなの?...レイ、振り払って?」

「え?お、俺っすか?」

なんで俺なんだ?いくら類友だと言ってもそれはリサさんとかの方がいいんじゃないんでしょか!

「いやリサさんに」

「レイがいいわ」

「い、いやーそれは」

「振り払って」

「だからね」

「振り払いなさい」

「はい!」

負けましたー頭についている粉を振り落とす。こんなこと本当に俺じゃなくてもいいのにな

「.....むう...」

「り、リサさん?」

「ふん、なんでもないよ、レイの女たらし」

「な、なんで!？」

友希那さんに振り払って(強制)って言われたからしただけに女たらしだってよ、なに?泣き出してしまえば海作ってやるぞ

「それで燐子は何しに来たの？」

「それは……か、神崎君に用があつて」

「また俺っすか!？」

「今度はなんだよ！」

「本を貸してたので返してもらいたいなど」

「……あーはい、返します」

「なんだからくれたわけじゃなかったのか……まあ布教用だし？貸して返ってきてまた貸す感じなのか」

「そうなんだーアタシ達これから自主練するけど返してもらった後はスタジオ来る？」

「……いえ、今日はあちやんとゲームする約束してるので」

「NFOかーまた今度息抜きでみんなでしよつか♪」

「……あれは上手く喋れないから苦手だわ」

NFOねーまだ続いていたのか、俺のアカウントは消し去ってやったけど

「じゃアタシ達こっちだからー2人もまた今度ねー」

「はーい」

お互い逆方向だったため手を振りその場で友希那さん達とは別れ各々足を進めだした。

「白金さんごめんなさい、俺てつきりあの本くれたのかと思つてましたよ」

「ツーち、違います違います！返さなくて大丈夫です！」

「？」

さつき返して欲しくて会いに来た的なこと言つてたじゃないっすか、何か別の理由でもあるのか？

「実は私嘘をつきました……」

「嘘？」

「はい、実は、その……神崎君とお話したいから会いに来たんです」

「ツ!?!え」

俺とお話したいから会いに来た……？それはアサシンだからなのか？

それともただ単にラノベやアニメの話をしたくて来たのか？

「もつと神崎君を知りたいんです！」

「ッ！」

「こ、これは!?まさかまさかの白金さんが本当にアサシンなのか!?

いや……さて、最近よくこんな期待させるような出来事が起きるけど全部外れてるよな

「……神崎君の好きな作品を知りたいんです」

「……………ですよねー」

「?どうかしましたか?」

「なんでもないっす、知り合いの両親が経営している喫茶店があるの
で底で話しましょうか」

「はいー」

まあ…うん、わかってましたよ!?

もうダメだよな、なんかこう少しでも動揺させるとアサシンじゃないかと疑ってしまうのは俺の悪い癖だ。

なんやかんやで友達の両親が経営している喫茶店、羽沢珈琲店に
やってきた。

ドアを開けるとベルが鳴り店員に俺達が来たことを知らせる。

「いらっしやいませー!おや、今日は珍しい客が来たようだね」

「あはは、約一年ぶりっすね、義嗣よしつぐさん」

羽沢義嗣、つぐみのお父さんにて羽沢珈琲店のマスター、一時期ブ
ラック、げふんげふん

か、カフェラテにハマったからよく通ってたんだよ

「奥の席空いてるようなんでそこに行きましょうか」

「は、はいー」

まずい、急に態度とか俺変わってないよな?でもなんか白金さん緊張してるように見えるんだけど

「注文はいつものブラックコーヒーで?」

「カフェラテで!」

「前はよく飲んでたじゃないか、どうしたんだい?」

「の、飲んでないです、気のせいです…」

「ふん、そうか、わかったよ」

「私はコーヒード」

「かしこまりました」

「な！普通にコーヒードを頼んでもよかったのか！

もう薄々気づいている方もいると思うがさつき言ったことは嘘なんだ。

厨二病を拗らせてた時はよく

「マスター、いつものを頼む」

なんてカツコつけて言ってたんだ。

後から知ったが厨二病あるあるで飲めもしないブラックコーヒードを飲もうとする、と聞いたことがあったから恥ずかしくて躊躇したが

でも普通に白金さんコーヒード頼みますやん、いや俺の飲めないからいいけどさ

「でです、神崎君は義妹以外でどのようなラノベが好きなんですか？」

「んーそつすねー」

お互い飲み物が来て1口2口口に運んだところで白金さんがそう聞いてきた。

「俺は結構富士見文庫の作品読んでましたね」

「ほー富士見ですか！」

富士見文庫、株式会社KEDOKAWAが発行しているライトノベルの文庫レーベル、弦巻とはまた違う作品の名が多くの人に知られている。

一言俺から言わせてもらえばちゃんと漢字を読んでくれ、なんならネットでも調べてみてね、言いたいことわかるから

「何を読んでたんですか？」

「それはもう沢山読みましたよ！俺の青春はこの作品達に持ってかれたようなもんすよ！」

「ジュニアハイスクールD×Dとか！ケーバーズ！とか！デート・ア・ライフとか！」

1個ずつ簡単に説明するとジュニアハイスクールD×Dはおつ

ばい、エロいやつ

ケーバーズは競馬にハマった人達の話だ、もちろん登場人物は大学の成人済みの人達だ

デート・ア・ライフはなんかあーだこーだでデートしてデレさせるやつ

「あれ？冴えカノは読んでないんですか？」

「あー冴えてる彼女の接し方っすか？」

これはまだ途中までしか読んでないんだよなー、途中で受験という壁が現れたし

「私あの作品大好きなんですよ！サークル活動！よくないですか!？」

「ツ！それはわかります！なんか憧れっつてのがありますよね！」

とは言っただ物のもし本当にサークル活動なんか始めたら毎日が大変になってしまいうだろうな

同人物を作るのはそう簡単じゃないって作品を通してわかるよ

「ですよね！やっぱり神崎君もそう思いますよね！」

「はい！あ、話変わりますけど個人的にデアラ好きなんすよ！」

「私も好きです！主人公が色んな女の子とキスするのはあれですけど…内容は面白いんです！特に終盤のシーンなんですけど…」

との具合でGWの時同様白金さんとの話は大いに盛り上がり、いつしか別の文庫の話にもなり

「君達そろそろ帰ってくれないかな…?」

「何言っつてんだよマスター！まだこれからなんだよ！」

「もう少しだけ！あと少しだけお話させてください！お金は払いますから！」

「え、えええ」

義嗣さんに交渉を頼むもものの数分で追い出されてしまった。

人のことを言えないがオタクっつてのは一度火がついたら抑えられない性を持っているんだと今日改めて知ったよ

てかもう白金さんにラノベオタクっつてのがバレてしまったが…まあいつか！楽しいし！

「はは、話しすぎちゃいましたね」

「で、ですね…でも、とても楽しかったです！」

「それは俺もです！」

あのまま店が閉まらなかつたのならずっと話していたと思う。

「……私決めました」

「?はい」

白金さんは足を止めその場で小声で何か言った。俺はなんて言つたか聞こえなかつたけど多分何か言つた。

「神崎君、いえレイ君に話があります」

「……………は、はあ」

覇気のない返事をした。なんせ期待しても意味なんてないのだから

もー慣れた、別にアサシン関係の話じゃないんだろ? 大方…んー友希那さんの類友になりましよう的な話だろ

「ツーや、やつぱりまだ言えません…」

「……………だったら無理しなくても」

「いえ! ……き、今日の夜9時、羽丘公園に来てください! だ、大事な話があります! では!」

「ちょー! 白金さん!?!」

白金さんは話すだけ話すと後は走って先に帰ってしまった。

今日は金曜日、明日のバイトのシフトは昼から入ってるが…少し夜更かしするぐらい全然問題ない。

「?」

いや待て、待て待て、公園に来てください?

「……………もう告白じゃん!」

この時レイの頭の中には先ほどまで思っていた別の何かという考えが一切浮かばなかつたのだ。

話がある!! 告白!

公園集合!! 告白!

異性から話がある!! 告白!

白金燐子!! 告白!! アサシン!

なんて考えがレイの頭には一瞬にして過ぎってしまい確定してし

まった。

「……白金さん、いや燐子さんがアサシンなんだ！」

「ふふ、ふふふ、あはは、あははははは！」

夜道の中レイの笑い声が響いたと思えば

「巨乳来たあああああ！」

失礼な話かもしれないが男子の皆ならそう思っても仕方があるまい！

あんな姉貴の崖つぶちなんかとはもー違う！それにだ！

彼女ができればモカも下着姿の写真を送ってこない！

「やった♪やった♪やったー♪」

中性的な顔だとよく言われがちのレイだが……中身は他の男よりも男、とでも言えはいいのだろうか

果たして本当に白金燐子がアサシンなのか……レイはまだ決めつけているだけだった。

青春したことがありますか？

燐子さんから9時に羽丘公園に来るよう伝えられたが家に着けばもう8時すぎ、夜ご飯を作る暇なんてない。

お風呂に入って髪を乾かせばもうちょうどいい時間になるだろ

「姉貴ー帰ってきてきて早々で悪いけどまた外出るけど飯」

と姉貴の部屋にノックせず入ると

「んーあたし今手離せないから大丈夫、腹減ったらなんか食べる」

「……………おけ」

姉貴は眼鏡をかけていた。姉貴は普段眼鏡なんかかけずコンタクトで済ませる派の人なんだが入ってる時はよく眼鏡をかけてる。

とは言ったものの多分忙しくて取り外すのがめんどくさいから眼鏡をかけているんじゃないかと俺は勝手に決めつけてる！

風呂に入って髪乾かしてパーカー着て公園に向かう。

このお洒落せずに行くのがポイントだ、変に気合を入れても結果は変わらないだろ？そゆことだ

時刻は8時54分、公園につけばベンチに燐子さんが座って待っていた。

膝の上には…リュックサック？が置かれていた。何を持ってきてるんだ？

「……………あーレイ君こっちですー！」

「あ、はい」

もう普通に俺と話せる仲まではなっているようだ、それはまあ？あれだけ話せば仲も良くなるし？

恋愛感情持たれても!?!仕方がないよね!?

「ちゃんと来てくれて良かったです…」ホッ

ほっ、と胸を撫で下ろすが…なんか、もうその仕草だけで…な？察してくれ

「……………で？話ってなんですか？」

ここで変に緊張してはいけない！カッコつけるのなら限界までカッコつけよう！それが多分男だあ！

「そ、そうでした!」

燐子さんはベンチから飛び立ち俺の前にやって来た。

「……や、やっぱり緊張します……」

「何言ってるんですか、俺と燐子さんの仲じゃないですか?」

「ツ!」

ここでさりげなく名前呼びをしていく! さつきから心で呼んでたけどね!

「………実は私レイ君を見た時から思ってたんです」

「はい」

き、来たぞ、ここからだ! ここからが重要だぞ神崎レイ! ここであつたなんかしてたら全てが台無しだぞ!

「この人なら私のことわかってくれるって…本当に心からわかったんです」

「………」

「そして…今日確信しました、やっぱりレイ君がいい、いや! レイ君じゃないとダメなんだって」

「………そう、思ってたんです」

これは来るぞ……もう燐子さんがアサシンだ!

「あの! 言います!」

「はい」

「ツ! 私と一緒にコミフェスに出てください!」

「はい! 喜んで! ……え?」

え、は? こ、コミフェス?

「言っちゃいました言っちゃいました! しかも喜んでなんてやっぱりレイ君はサークル活動好きだったんですね!」

「………へ?」

コミフェス、がわからないみんなに俺が説明してやろう。

コミフェスとは年に2回、夏と冬に行われる日本一の同人誌販売イベントなんだ。

プロ、アマチュア、問わず同人誌販売をしたい! って人なら誰でも参加が可能なイベント

とは言ったものの先程言った通りプロがいる。もちろんお客さんもプロのコミフェス限定同人誌とかを求めてやってくるんだ。

だから…そのあんまりアマチュアの人達が輝けるような場面はないと思う。

いやね？普通に沢山売れる人だっているよ？プロじゃなくてもSNSで人気な絵師などの作品はもー売れまくる！

でも姉貴の手伝いで何回か参加してるけどさ…やっぱり、全然売れてない人だっているんだ。

そんなイベントに燐子さんは参加したいんだとさ

「…：はあ、あのですねーコミフェスって何かわかってるんですか!？」
「はい！日本一の同人誌販売イベントです!」

「だったらそう簡単にサークル参加できるもんじゃないことも知ってるんじゃないんですか?」

まずは審査!そこから通ってブース確保!ここまでに落ちる人だって沢山いる。

しかももう夏コミの参加申し込み込みの期限は終わってんだろ

「大丈夫です!ブースは確保できてます!」

「ノリノリじゃねーか!」

予想以上にノリノリだ。この人は本当にあのコミフェスに参加するつもりなのか?

「…：で、コミフェスで何を売るんですか」

「あの私最近絵を描き始めたんですよ」

「は、はあ」

最近ねーそんな最近描き始めた人がすぐコミフェス参加とは…落ちた神絵師の方がいたら怒られちゃいますよ

「これなんですけど…レイ君から見えてどう思いますか?」

「ッ!」

リュックサックの中からタブレットを取り出し、燐子さんが描いたであろう絵を見せてくれた。

見た瞬間思ったことは

くそ上手い、ってよくわからない単語ですらないにかだった。

絵は姉貴の作品である義妹の4姉妹の絵、線のひとつひとつが細かく書かれ色の塗り方も素人と比にならないレベルだ。

でもそれだけじゃない

「……これってあね、神奈さんの絵にそっくりだ」

「はい、神奈先生の絵を参考にして独学で描き始めました」

こ、これは確かに……この絵ならいけるのか？

「……でも無理っすよ、俺友人の手伝いで何回かサークル側で参加してますけど」

「ますけどっ！」

「……売れてない人っているんすよ」

なんせその人達のブースの近くには俺の姉貴、神奈さんがいるんだ。

それはもう……うちばかり目立ってその他はオタク達の眼中にない、のだろうか

俺が見たところ決して下手くそだったってわけじゃない、なんなら俺は隣の人の作品はスキだった。

終わり際を買ったんだけど

「君達はいいよね、沢山売れて」

どうせ僕の作品を買ったのも見せしめるためだろ？なんて言われた。

別にそんな気持ちじゃなくてもそう思われてしも仕方がないんだよ

売れてる人がいればその分売れてない人だっている。簡単に言えば勝者と敗者ってことさ

「……あまりこうゆうことは言いたくなかったんです」

「？」

「確かに売れる売れないが大切だと思えます……」

「でも、私はそんなのより思い出が欲しいんです！」

隣子さんはその後語りだした。

自分の高校生活が2年の時に日常が劇的に変わったと、Roseliaに入ってバンド活動して……毎日が充実した日々になった、と

「私は今年で3年生、もう高校生活も終わりです」
「……ですね」

「だからこそ！最後だから！最高の思い出にしたいんです！」
「バンドだって！サークル活動だって！やるからには本気でやりたいんです！」

「私の高校生活最高のページと一緒に作って欲しいんです」

……はは、なんだよそれ

燐子さんの話を聞いて思い出した。

青春とは呼べないであろう中学生生活、厨二病なんて変な病気になつてたもんだからさ

最高の高校生活？そんなもん俺だって送りたいっての！

「……ずるいなーそんなこと言うなんて」

「や、やっぱりずるかったですか!?あ、あと熱くなってましたけど私そんなキャラじゃないのに」アタフタ

さつきまでのキリツとした顔はどこに行ったのやら

「やるからには全力、ですよね?」

「はい!」

でも一つだけ気になることがあるんだよな!

「あのサークルに参加するのはいいんですけど他のメンバーの許しとか大丈夫なんすか?」

「大丈夫です!だって私一人しかいませんから!」

笑顔で自分を指で指しながら燐子さんに対して俺はもう何を言えなかった。

「私と一緒に最高の同人誌を作りましょう!」

「その冴えカノみたいな言い方やめてええええ!!」

深夜の公園にはレイのかん高い声が鳴り響いたのであった。



ひよんなことからコミフェスに参加することになった俺、神崎レイは不安を抱えたまま帰宅した。

「(なんか車止まってたな)」

両親は帰ってくる時手紙出すし…親ではないことはわかる。
てか誰かもわかるっての

「ただいまー」

リビングに行く姉貴はJapanese土下座をしていた。

それは俺ではなく、ソファーに座っているのは短髪で背丈の低い少女に向かって土下座をしていたんだ。

「いやね、僕は怒ってないんだよ」

「はいー」

「君には才能ってのがあってのになんで真面目にしないんだい？神奈先生、いや滯奈」

「すみません！」

なんだなんだ、姉貴のやつまた編集長怒らせたのかよ

「今日僕が来なくて別の人が来てたらどうしてたんだい？」

「…まだ終わってないと言って追い返す予定でした」

「だけど君は今日で来月分をもう書き終えた…言いたいことわかるよね？」

「は、はい…！」

今日も今日とて絞られてんなー姉貴のやつ

「あ！レイ君！なんだよ！帰ってきてるなら教えてくれよー！」

「相変わらず元気ですね、氷川さん」

「もう、君と僕の仲だろ？気安く茉日まひると呼んでくれよん♪」

「は、はは」

この人はマガジンの編集長、氷川茉日さん、この幼女でボクっ娘の氷川さんがちゃんと人妻だ。

氷川さん曰く自慢の双子の姉妹がいるらしい、詳しい話は聞いたことないけどね

「レイ君く僕お酒飲みたいなー」

「はいはい、車で来てるからオレンジジュースですね」

「子供扱いするなー！」ポカポカ

毎回思うがこの人は本当に母親なのだろうか、この人の娘さん達が

少し心配だ。

「レイーあ、あたしはストレイで」

「禁酒中だろ」

「ぐはー!」

冷蔵庫にあるオレンジジュースを人数分そそぎテーブルに並べる。

「ところでレイ君はこんな時間まで何をしてたんだい?心配するじゃないか」

「それはあたしも思う!何してたの?あお」

「ちよつと滯奈は黙ろつか」

姉貴が何を言おうと思つてたかわからないけど俺は公園であつた出来事、コミフェスに参加することになったことを伝えた。

「えー!レイ今年もうち手伝うんじゃないの!?!」

「すまん、参加できそうにない」

「それは困るよ!今年こそは!うちで滯奈の商品を売りたいのに!」

今年こそ、はまあ後で話す。

「でも聞くとこそその人最近絵描き始めたんでしょー?」

「……だけど上手いんだよ」

「上手いならあたしも同じだよ、あんまりこの業界甘く見ない方がいいよー」

「うう」

確かに姉貴の言う通りだ。姉貴は優しく言っているが内心怒っているのかもしれない、いやわからんけどさ

「正直僕も参加することを進めれないなー何か理由があるなら話は変わるけどね」

理由ならあるさ、最高の理由

「……高校生活の思い出作りですかね」

「……………ふーん、まつ、最悪な思い出にならないことを祈るよ」
わかる。姉貴怒ってるー!な、なんで怒ってるだ?てか怒ってるつて予想当たっちゃったよ!

「僕はいいと思うよ!そうゆう青春は人生に必要なだよ!僕も冬夜君とうやと出会つたのも高校2年の時……」

『(始まったよ)』

冬夜さんってのは氷川さんの旦那さん、この見た目の人と結婚するなんて冬夜さんはロリコンなのかもしれない

「……てな訳で僕は冬夜君と結婚してそれから」

と話すこと数分、まだ氷川さんの思い出トークは止まらない！

「あなたの思い出トークはもう聞きたくないようですけど？」

『ツ！』

「ちよ！編集長！な、何言ってるんですか!？」

氷川さんの話をとめた人、それは

「で、出たな！千紗^{ちさ}！何しに来たんだ!？」

「それはこちらのセリフだ、先輩こそ何しに来たんですか？」

これはこれでまた面倒なこと……

立花千紗、弦巻文庫の編集長だ。氷川さんはマガジンの編集長、つまりこの2人は同じ会社に勤めている仲であり大学が同じだった、って理由で最初は仲が良かったらしい

らしいってのは今は仲良くないってことだよ

「僕は神奈に用があつて来たんだよ！」

「奇遇ですねー私もなんですよ、まあ神奈はうちの作家さんなのでお引取りを」

「何言うか！僕達のマガジンでも連載してるだろ!？」

「お情けで連載させてあげてるだけさ、うちは漫画じゃなくてラノベなんでね」

「そもそも？漫画よりラノベの方だって売上勝ってますしね」

「ぐ、ぐぬぬ！」

そう、簡単に言うとは姉貴の取り合いで仲が悪くなったんだ。

マガジンの氷川さん、弦巻文庫の千紗さん、お互いが姉貴を、つまり神奈は自分のところの作家だろ！って言い張ってるんだ。

俺からしては姉貴を物扱いしてるのはちよっとなん？ってなるけどそんなの言えませぬよね

「だいたい君は僕の後輩だろ！」

「その後輩と同じ位の方はどこのどなたかな」フツ

「ぐぬぬ！鼻で笑ったな！」

位つての仕事での話で同じ編集長つて意味だ

「10歳も離れてる後輩ちゃんと同じなんですね、先輩」

「うがー！そんなんだから結婚できなんだよ君は！」

「ツ！結婚はまだしなくてもいいんですー！」

またまた始まったよ…そろそろ終わってくれよ!?

「君には娘達のありがたみを知らないんだ！ああ紗夜ちゃん日菜ちゃん会いたいよー！」

「本当先輩の娘とは思えないエリートですもんね」

「うがー！だいたい君は紗夜ちゃんと同じ漢字使ってるんじゃないよー！」

なんちゆうイチャモン！もう言うことがないのだろうか

「私が先に生まれてますので、そっちがパクリですよ」

「そうですね!？」

本当に何言ってるんだか…うちに来て鉢合わせたらいつもこれだから来ないで欲しいものですよ!?

「それはそうと早く大好きな娘たちのもとに帰ればいいんじゃないんですか?」

「ふんだ！言われなくても帰るよ！」

氷川さんは勢いよくリビングから飛び出て靴を履いたと思えば玄関のドアをうるさく開けた。

「うわあーん！冬夜くんー！」

なんて言いながら帰ってんだだろうな、ないて帰るもんだから娘さん達に俺達がなんて思われているのかかなり心配だ

「ふう…すまんレイ、少々うるさかったな」

「……………いえ、大丈夫です」

「そ、そうか、ならよかった」

千紗さんこえーからそんなこと言えないっての！てか胸でか！

え？関係ないって？黒髪ボブで巨乳つて最強だと思いませんか!?

「あたしは赤髪ショートの貧乳だけどね！」

「姉貴の情報なんてどうでもいいんだよ!？」

姉弟派手な髪だね！ってよく近所のおばさん達に小さい頃からよく言われてたよ

まあ両親がそんな髪だったら仕方がないさ

「にしても編集長と氷川さん本当に仲悪いっすねー」

「……うるさい、昔は仲良かったんだよ」

「えーなんかあたしのせいみたいに言わないでくださいよ」

頬を膨らませぶうぶう言う姉貴だがとてもお世辞でも可愛いなんて言えるものではなかった。

「ではそろそろ本題に移るか」

「本題？」

「知らないの？アニメ化の話しき！」

「……なるほど！」

結弦さんが胸を張りながら言うもあなたがそんなに自慢げに言うてもいいのか？

「結弦！早く資料の準備」

「は、はい！編集長！」

結弦さん大変っすね

「レイも早く高校卒業してうちに来い！なに給料は弾んでやるぞ！」

「……い、いえ結構です」

「えー？高卒にしてはかなりの収入だよ？てかうち高卒採用してないよ？」

「だからこそ行きたくねーんだよ!？」

そんなところ入ってみろ！

あいつ編集長のコネで入ったらしいぜ？って！言われるじゃないか！そんな人生は嫌だ！

「結弦は特別だ、あいつは一度褒めると調子乗るからな、なかなか褒めれないんだ」

「でもお前は違う！早くうちに来い！そして早く私と結婚しよう！」

こゝ、これなんだよ、この人さっきは結婚しても意味がないなんて言いながら本当は結婚したい人なんだよ

「結婚はまだできないので…」

「そうだよな！18になるまで私は待つてるぞ！」

「……………はは」

もう何を言っても聞かないからいつもこうやって適当な返事をし
てますませます。

思ってたけどモカといい姉貴といい千紗さんといい俺は変なやつに
好かれる人間なのかもしれない、何その人生!?

「編集長！準備ができました！」

何故うちで話をするのか、姉貴が今日は家を出たい気分じゃないと
か訳分からんことを言い急遽我が家で行われるようだ。

「ちようどいい、編集者レイ君の意見も聞きたいですな！」

「そ、それは言わないでくださいよ!?!」

レイがまたまた叫んだところで会議が始まりレイはその日ずっと
千紗と滯奈の相手をするはめになったのであった。

しかしこのサークル活動がのちにレイにとって重要なできごとと
なるの今の彼はまだ知らないままである。

ここでもう1つ…誰もいない夜の公園、彼女が好みそうですね

その数分後氷川家では

「うわぁーん！冬夜君！」

「はいはい、冬夜ですよー」

大の子持ちの母親は夫の抱き着きながら大声で泣き叫んでいた。

「なにになにー？母さんまた泣いてんの？お姉ちゃんはい、ポテト」

「…ありがとう、いつもなんで泣きながら帰ってくるのかしらね」

氷川家にとってはこれがほぼ日常だったようです。

サークル活動したことありますか？

「神崎君雑巾がけよろしくね！」

「……おーす」

ここ羽丘学園では毎日全校生徒にて掃除を行っている。

女子はスカートだから男子は強制的に雑巾がけの刑になるが俺は嫌いではない、だって掃除は好きだから！

「あ、青葉さん無理して雑巾しなくてもいいんですよ!？」

「いやいやー雑巾がけ楽しいよ〜？」

「だったらズボン履きましようよ!？」

「……………」

モカの事だ

「雑巾がけしているモカちゃんのお尻を男子が見るなんて…興奮しちゃうなあー！」

って所か、まあ俺は決してモカの方を見ることなくずっと窓の隅掃除をしておりました。

掃除を終え教室に戻ると男子共が窓際に並び外を眺めていた。

「何やってんだよお前ら」

「おや神崎君じゃないか」

「中性的な顔を持ちながらイチモツを持っている神崎君じゃないか」

「まじねーわ」

「……お前らに話しかけた俺が馬鹿だったよ」

遊、優亜、由明日、A組の三馬鹿トリオだ。この他にも男子生徒が窓際に並んでたもんだから話しかけたのにこいつらが返事するのかよ

「まあまあ神崎君、あそこに女子がいるのがわかるだろ」

「ちなみに巨乳だぜ」

「まじやべーわ」

何を言っただか、巨乳ならこのクラスにもいるだろ、ひまりが俺は三馬鹿が見ていた方向、羽丘の正門に目を向けてみた。

「ッ!?!」

「あの人って隣の女子高の生徒会長だよな?」

「黒髪ロングで巨乳は最高だよな」

「まじやべーわ」

な、何故燐子さんが!?

なるほどこの窓際に並ぶ男子共は何故かいる燐子さんを見るためにここにいたのか

「!」ヒラヒラ

『ッ!?!』

こちら俺に気づいた燐子さんが手を振るもんだからさ

「今俺に手を振ってなかったか!?!」

「ちげーよ俺だろ!」

「いえ僕です!」

「俺だろ!」

など言い男子達は大いに盛り上がる。

「いや待て童貞ども!」

「中性的な顔で有名!腐女子に人気でクソイケメンな我らが夜桜さん
とできてるんじゃないかと囁かれてる神崎レイ君がいるではないか
!」

「まじやばいっすね」

「優亜!?!その話ガチなのかよ!?!」

嘘だ!誰だそんなデマ流したやつは!?!確かに中性的な顔だと言わ
れるがそこまでか!?!そんな腐女子が求めるようなシチュエーション
になつてののかよ!?!

「んー?俺がどうした?」

「し、柊優は来なくていい!」

く、クソが!なんで燐子さんが来ただけで俺の訳分からん話を聞か
されなきゃならんのだ!

「おーい馬鹿ども早く席つけ」

担任の先生にそう言われた俺達は大人しく席につき最後までHR
を耐えしのいだ。

聞きたくもない話を聞いた俺は珍しくもなく落ち込んでいた。

「ねえ」

「あ痛い！な、何すんだよ蘭」

蘭のやつが珍しく絡んできたかと思えばカバンで思いっきり頭を叩かれた

「空っぽそうだったから叩いたら割れるかなって」

「そんな卵みたいにわれねーよ」

中からのう、やめとくか

「ところでさ」

「？」

「レイと夜桜は付き合ってるの？」

「ぶおー！」

「何その反応」

い、痛いことを聞いてくるやつだな…俺は腐女子が求めるようなキャラではないのでそんなこと考えないでください！

「デマだつて、なんか腐女子が勝手にいいまくってるだけだよ」

「……ふーん、レイも大変だね」

「同情するならデマをなくしてくれ」

「ごめん、あたしにそんな拡散力はないよ」

「……………ですよね」

蘭と少し話すとバイトがあると言って帰っていた。俺はと言うとまだ教室に1人で待っていると廊下から柀優の声が聞こえた。

「おいレイ、彼女さんが迎えに来たぞ」

「か、彼女じゃないで、でですよ！」

「隣子さん!？」

そう言えばさつき正門にいたな…俺のところに来るってことは俺目的か？

てつきり友希那やりささんに用があるのかと思つた

「あの案内してくれてありがとう…ごさいました」

「いえいえ、教室に用があつたのは本当ですし」

い、イケメンだ、男子からみた俺でも柀優はイケメンだとわかつて

しまうよ

いやだから俺は普通の人ですって！

「レイ：お前アサシン見つけたなら俺に教えるよな」

「……いや燐子さんはアサシンじゃないんだよ」

「え、まじか：彼女かと思ってたのに」

「俺もそうだと思ってたよ」

最初はそう思ってたのにまさかの違ったからな、しかも大切な話があると言って呼び出し期待したらコミスエスに参加して欲しいってさ

「んじや俺は部活行くわ、じゃーな」

「……おう」

柊優のやつは燐子さんが何故来たのか聞くことなく部活へと向かって行った。

あいつなりの気使いにとらえればいいのだろうか

「で？燐子さんは何しに来たんですか？」

「はい！サークル活動しに来ました！」

「サークル活動しに来たのならここじゃないでしょ!？」

なんでサークル活動！羽丘に来るだよ！意味わからんわ!？」

「実は！なんと！新メンバーが決まったんですよ！」

「……はい？」

詳しい話を聞くとどうやらその新メンバーが羽丘の生徒らしい。

そしてその生徒さんが視聴覚室の使用許可を得たとかでそこをサークル活動の場所にするらしい。

最初から活動場所はどうするのかわかってたけど……聞く前に決まったようだな

「んで、今日からその方も活動に参加してくれると」

「はい！もう楽しみですよね！」

「……………はは」

参加すると答えたがぶつちやけあまり乗る気じゃない、なんでかって？そりやーな？

こっちはアサシンを探し出さないといけないのにサークル活動な

んてしてたら暇なんてないだろ！

もうほぼアサシンの情報ってないんだぞ!? 強がらずに聞けばよかつたのに……!

「えっと、ここですか?」

「そーっすね」

燐子さんは視聴覚室がどこかわからない為俺が案内した。

「多分中にいるんじゃないですか」

「……新メンバー、ねー」

ちゃんとした人なのだろうか、てかさ!

昨日の今日でなんだよ!? 俺がいいとか言いながらちやつかり他のメンバー確保してるじゃん!? あの時の話はなんだったんだよ!?

でも燐子さんが選んだ人だ、きつと大丈夫だろう。

なんて考えながら視聴覚室のドアを開けると

「あーれーくんやつほー」

「……………」

「……あれ? 気のせいかな?」

「? どうしたんですか?」

「いや俺のへん、幼馴染がいたからさ……あれ、部屋間違えたかな」

上を見れば確かに視聴覚室と書かれていた。俺は間違えていないようだな、いややつぱり間違えてんだよ

「早く入りましょうか」

「ちよまー!」

部屋を間違えてますよ! なんて言う前に燐子さんは視聴覚室に入って行った。

「青葉さん! もう来てたんですね!」

「いやーサークル活動が楽しみ過ぎて来ちゃいましたよ」

「そんなに楽しみにしてくれてたんですか!? 私嬉しいですよ!」

燐子さんはびよんぴよん飛び跳ねるがそれはもう胸が揺れる揺れる。 凄いよね

「……………」

「な、なんだよ」

「れーくんはお胸がお好きと」

「……勝手に決めつけんな!？」

「黙りんしゃいーこの変態露出野郎!」

「で!なんでお前がここにいるんだよ!」

「なんでってあたしもサークルの一員だから

」

「だからなんでだよ!？」

「だからサークルの」

「そうじゃねーよ!なんでお前が入ってんのって話だよ!？」

「話聞いた感じオタクって訳でもないだろ!？モカ入れるならつぐみ入れた方がいいだろ!？」

「いやーモカちゃんも義妹見ますよ?」

「!か、かもしれんが……」

「なんでよりも燃ってこいつなんだよ……サークル活動は燐子さんの相手にするだけですんだのに!」

「青葉さんはモデル役で入ってくれたんですよ!」

「は?」

「昨日の夜公園にいたそうで……いや、は、恥ずかしいですね」テレテレ
夜の公園? いや……そんな、な? 好き好んで夜の公園に行くなんて一

体何が

「ツ!？」

「一瞬にして俺はモカがああ公園にいた理由がわかってしまった。

一生わからなくてよかったことがわかってしまったことに猛烈に後悔する……」

「……モカ、ちよつとこい」

「んーなーに?」

「視聴覚室の隅に呼び小声で話す。

「お前……夜の公園で何してたんだよ」

「……?……それはもちろん」

「ツ!???」

「そこには布一枚も羽織ってないモカの生まれたままの姿、手で胸を

隠し下半身は丁度草で見えなかったものの…普通の人間がこんな真夜中の公園でするような格好ではなかった。

それに写真も撮っている。うん、完全にこれは病気だな

「写真撮って帰ろうと思っただられーくんと白金さんがいてー」

「話を聞いてすぐに話しかけたってわけか…?」

「いえーす!」

「いえすじゃねー!!!」

モカのほっぺを思いつきりつねりながらそう言うも

「いはいいはーい」

なんて笑顔で言うもんだからこの変態には効果がないと分かりすぐに辞めた。

「青葉さんの話は聞きました!」

「……ええええええ!!?お前話したのか!」

「だってヌードモデルするなら言わないとだしく?」

「ヌードの絵なんて描かんわ!」

一般参加だぞ! R18作品を描くわけじゃないだぞ!?

「ヌードじゃなくてもモデルさんは必要ですからね」

両手を合わせて首を傾げる隣子さんのせいで一瞬受け入れる体制に入ってしまった自分がいる。

「いやでも!」

「さあ…私達の戦争^{デート}を始めましょう!」

「次はデアラですか!」

毎回毎回レイは叫ぶが今回は防音室も兼ねている視聴覚室のため周りに聞こえることはなかったのであった。



さて!俺達のサークル活動が本格的に始まった!

絵を描くのは花咲の生徒会長白金隣子さん!

そしてそのモデルをするのが完璧美少女JKこと青葉モカ!

いやこのモカが本当に可愛くてな!可愛くてな!うん、すつごく可愛いんだ!

そしてなんとと言ってもナイスボデエ!チツチツチツ、ナイスボデエ

なんすよこれがあ！

はっはっはっ！残念ながら嫌でもおっぱいを見ちやうんだよなあ
これがあ！

「つて！勝手に話を進めるな！」

「えー結構面白そうだったじゃん」

「そうですよ！私の説明全然ないじゃないですか!？」

「それは知らねーよ！」

今までのモカが適当に話をしたただけであって俺ではない、忘れてくれ

「では！サークル活動始めましょうか！」

「おー」

「……………はあ」

モカだけがその後におーと言い俺は大きなため息をついた。

モカのやつひまりのえいえいおーには絶対答えなくせに、なんだよこんな時だけ

「ではさっそく」ヌギヌギ

「ちよつと待てや!？」

「え、なに？」

「そこで止まるな！服を着ろ！」

脱ぎ掛けの状態で止まるもんだからお、お腹がチラリと見える。

く、くそーあんなにお菓子とかパンとか食べてるのになんで太らないんだよ

「青葉さん今日は制服姿を描きたいので着てもらってもいいですか？」

「……………んーなら仕方がないですねー」

「ど、とりあえずよかった」

やつぱりこいつもモデルにしたのは間違いだろ、すぐに脱ぎたがるし

「では青葉さん何かポーズしてみてください」

「はーい…これでどうですか？」

「ッ！いいです！完璧です！」

あはーんとでもい言つてそんな顔をしながら絶妙なポーズをとるモカはそこら辺のモデルさんと比べてポーズのレベルがずば抜けて高いんじゃないかと思えた。

……ごめん嘘ついた、他のモデルさんとか俺知らねーわ

「いいですー！最高です！」パシヤパシヤ

「はいここで笑顔！」パシヤパシヤ

「あの」

「はい、くるつと一回転！」パシヤパシヤ

燐子さんがそう言うもんだからモカがくるつと回るとスカートがめくり上がり

「なっ!？」

「あははー今日はなんと紐パンを履いてるのでした」

「れーくんちよつと期待した」?

「な、なわけないだろ！」

ちよつとだけ期待してしまった自分を殺したい……だから幼馴染にそんなの求めたらもう終わりなんだって!?

「紐パン！是非資料に！」パシヤパシヤ

「お、おい、いくらなんでもそれは犯罪なんじゃ」

未成年のそーいう写真はもうダメだろ！

「何言ってるんですか？」

「……へ？」

「バレなきゃ犯罪じゃないんですよ」

「……………」

もう声が出ませんでしたよ……でも体の一部分は見事に動き出した。

「……………」スツ

「無言で携帯に手をつけないでくださいよ!？」

「だーまーれー！こんなこと許されると思うなよな！」

モカはまだ嫁入り前の女だろ！そんな簡単に色んな人に見せていい肌じゃないっての！

と、携帯を取り出し電源をつけたところで

『あっ』

俺のロック画面の壁紙がモカの送ってきた下着姿の写真になっていた。

とは言ってもだ、俺は絶対にこんなことしてない！

「れーくんも共犯者でーす〜♪」

どうやらモカのやつがいつの間にか壁紙を変えていたらしい、パスワードかけてんのにどうやって解いてんだよ!?

「……あああああー！クソうぜえー!!」

俺が憧れていたサークル活動なんてもの全部夢だったんだよ、あの冴えカノみたいにキャツキャウフフなんてことはないんだ。

地獄の時間を耐えしのいだ俺は家に帰るなり

「な、何がサークル活動だ」

まるでぶっ倒れたかのようにベットへダイブしたのであった。

女子に慰められたことありますか？

人生腑に落ちないことなんていくつもある。

社会人にでもなれば苦手な上司と飲みに行ったり、めんどくさい仕事を無理やり押し付けられミスをしたらめっちゃ怒られる。

俺はまだ学生の身、しかし縛られている身でもある。

何度も言うがひよんなことからサークル活動に参加した。ここでメンバー紹介をしておこう

変態、ならんでオタク（最近変態化してきている）そして俺（元厨二病）という訳の分からんサークルができてしまった。

そんな俺達は今日もサークル活動をするのであった。

「やっぱりこの方がエロくて可愛いと思うんですよ」

「モカちゃんならもつと胸を持ち上げますな」

「おー！そのアイデアいただきです！」

「……………」

一見普通の会話だ、いや普通の会話じゃないけどさ…

モカのやつがスカート履いてないんですよ!?

「あ、ごめんごめん、忘れてた」

「気づけばいいんだよ」

「よいっしょと」ヌギヌギ

「脱げって意味じゃねーよ!？」

更に上のブレザーを脱ぎ捨てカッターシャツのボタンに手をかけていた。そーゆう意味で言ったわけじゃないのに!?

「とりあえずスカートを履けえー!」

「えーこつちの方が可愛いよ、ほらこのショーツ結構高かったんだよ?」

「俺と汗水垂らしてバイトした金で買った物が下着ですか!？」

同じバイト先で同じ業務をこなし！ほぼ同じ時間を過ごしている仲間がこれですよ!?!みなさん！助けてくれよ!?

「万が一を考えると、もし誰かに見られたらを頭の中に入れろ」

「…………もう、わかったよ、続きは今日の夜ね」

「死んじまええええええ!!」

今出せる最大の声で叫ぶも流される。頑張っても意味がないとはこのことだ。

その後サークル活動は終了し各々がそれぞれの自宅へと帰宅したのであった。



「つとゆうことで明日からテスト週間に入るからー部活せず帰るんだぞ」

『はーい』

羽丘は本日よりテスト週間に入る。よって全部活は活動禁止、よって！俺達のサークル活動が強制休止になるってわけだ。

ひとときだがこの間に自分の今の立場、そしてアサシンについて考えないといけない。

「それと神崎は少し話があるから残るように」

「……………へ？」

『……………』ジーン

これはあるあるだがみんなの前で名前も呼ばれると何故か知らんが視線を多く感じるよな

「ではHR終了ーはい、挨拶」

「きりーつ、れい、しゃーした〜」

『しゃーした〜』

学級委員が休みだからってモカに号令させんなよ、羽丘生徒とは思えない適当な挨拶になつてたじゃねーか！

つてそれより先生が俺に話つてなんだろうか…

「お、来たか神崎」

「はい、え？…………俺なんかしました？」

「そう身構えるな、お前に話が来ててな」

「は、はあ、話？ですか」

聞いてみると何やら放送部の奴らが視聴覚室の仕様について話があるらしい。

「いやあそこの使用許可の申請出したのはモカですよ？」

「その青葉が代表者はお前だと言ってるんだ」

あ、あの変態野郎……俺を利用しやがったな!?

「……てか放送部とかうちにあっただんですね」

「ああ、部活と言うより同好会ってやつだな」

さすがに放送同好会、なんて呼べないもんだから部員は1人だけど放送部と呼ばれているらしい。

「活動とかしらないんすけど」

「それは私も知らん、とにかく放送室の隣の空き教室にいるみたいだからーそこで2人で話すとけ」

「………放送室じゃないんかい!？」

放送部とか言いながら活動場所が隣の空き教室?のくせに視聴覚室の使用について話だ?

「……わからん」

使ってもない部屋について話をつて言われても……いや、俺が思っ
てないだけで使ってるかもしれないが

そんなことを考えながら階段を上ること最上階、視聴覚室とは真反対にある放送室、の隣の空き教室の前に着く

放送部の人はもういるのだろうか?

コンコンコン、とノックを3回

「……どうぞ」

「し、失礼します」ガラガラガラ

中に入って驚いた。

「なに?」

「ツ!い、いえ、その…朝日奈凛あさひなりんさんが放送部員だったんですね」

「そうよ」

朝日奈凛、俺のクラスの中で最もみんなに愛されている生徒、その顔は人形のように美しく、あまり表情を表に出さず常に凛とした人
とりあえず簡単に言うためちやくちや可愛くて美人な人ってこと
です。

「?さて、なんで放送部は朝日奈さん1人だけなんだ?」

こんなにも美人で人気な人だ、さぞ男共は同じ部活に入ろう!つて

なって部員数もサッカー部以上になって大部活になってるんじゃないのか？

「初めはたくさんいたわ、でも」

「……でも？」

「彼らが私のこと嫌いだとわかったからやめさせたの」

「……………は？」

朝日奈さんが発した言葉を理解するのに少し時間がかかってしまった。

「は？私のが嫌いだから？いやいや、この学校であなたのことを嫌ってるのなんて嫉妬に燃える女子とかじゃないの!？」

「だって、だって!?!あの人達私に嫌がらせしてくるのよ!?!」

「ッ!?!」

「毎日大量のジュースを持ってくるし!お菓子も持ってくる!私を糖尿病にでもしたいんじゃないかってレベルよ!」

「い、いやーそれは多分朝日奈さんのために」

「私を嫌がらせるためにでしょ!?!」

普通に考えてみる、

お菓子を持ってくる＝喜んでくれると思うから

ジュースを持ってくる＝喜んでくれると思うから

まあ学校に自販機とお菓子を少ししか売ってない購買しかないからこの二つに絞られるのは無理もないのか

「学校に来れば挨拶だけして姿を消す子だっているのよ!?!」

「いやそれは尊いから」

「手が少し触れただけで一生洗いません!なんて、私の菌を繁殖させて仕返すつもりよ!」

「いや朝日奈菌なんてないから」

「それに2人組作る時いつも私だけ残るし!」

「いやそれは……オーラのなやつで組みにくいというか」

あー、何となくわかったかもしれない。普段大人しい彼女が何故こんなにも荒れるのか

彼女のセリフを聞いてわかった人はわかっただろう。

彼女は超がつくほどのネガティブ思考なんだ。挨拶をして消える子、というのは学校の中でも人気のある朝日奈さんと挨拶ができて嬉しかったから、のに彼女は私のことが嫌いだからすぐに姿を消したと思っっているんだ。

手が触れて一生洗いませんはよくアイドルとの握手のやつだろ：のに先ほど自分で言っって言っていたように朝日奈菌を繁殖させようとしているんだと思っっていたり

2人組の時に組めないのは俺がさつきも言った通りオーラの何かが大きすぎるからにもかかわらず、彼女は自分が嫌われているかだと思っっている。らしい

彼女と組めるのなんて瀬田薫さんくらいだろ

それと周りの人達が彼女を勝手に特別扱いする。それが彼女にとっつて全てがネガティブなことに繋がってしまっうだろう。

何故かはしらんが

「そして何よりあなたよ神崎レイ！どうして視聴覚室を奪って私を苦しめるの！」

「あなた本当はわかっててしてるんじゃないや……！」

「ま、待って待って！ちよつと落ち着いて！」

「こんな嫌がらせされて何が落ち着けよ！」

「いいから！可愛い顔が台無しだから落ち着けて！」

「ッ！」

し、しまったーっ、つい本音が！いや本当に可愛い顔が台無しになるくらい叫ぶもんだから落ち着けて言っただけで深い意味なんてー

「そ、そうして私を騙すつもりね！」

「ちが、違いますっつて！」

「一体なんの為に視聴覚室を!？」

「……………ちよつと成り行きで」

「成り行きで人の大切な場所をあなたは奪うの!？」

「私の夢のために必要な場所を奪わないで！」

「……………はあ」

ダメだ、この人落ち着かない…もう爆発してんだ、俺だけのことじゃなくて普段のみんなの態度に

何故初めて絡むのにこんなことになるのやら

「とりあえず勝負よ神崎レイ！」

「は、はあ」

「次のテストで私と勝負よ！」

「ちよつと待て!?話の展開飛んでるし君と俺の成績の順位の差知ってるの!？」

何故勝負!てか急展開すぎてついていけないよ!？」

「一度誰かとテスト勝負をしたかったのよね…」

「は、はい?」

「負けた方が勝った方の言うことには絶対にしたがう、それでいいわね」

いいわけないだろ!?俺っていつも154人中50位ぐらいだぞ?

常にTOP10にいる朝日奈さんにどう勝てと!？」

「私はあなたに、いや!あなた達に視聴覚室の一切の使用を禁ずるって要求するわ!」

いや俺だけじゃないんかい!?それはいいのかよ!

「……言っとくけど俺が勝ったら朝日奈さんは俺の言うこと気ないといけないんだよ?」

「ツ!ま、まさかあなた!わ、私で何をしようというの!？」

「いや別に何もしないよ」

てかそもそも

「勝負なんてしない、視聴覚室がそんなに使いたいなら使えばいいよ、なんかモカのやつが奪ったみたいだからさ…」

あいつは一体どうやって視聴覚室の使用許可を得たのだろうか

……まさか学長とか偉い人に賄賂エロを?

い、いやいや!さすがにないか!

「そ、それはダメよ!さつきも言った通り誰かとテストの勝負をしてみたかったのよ!」

「……………それに私がテストで負けるわけが無い、何故なら勝てる勝

負をしかけてるから！」

「あんた情緒不安定すぎないか!?てかせこいな！」

ネガティブなのか、挑戦的なのか、戦略的と言うのか…

まあテスト勝負なんて負けるの確定だし?それに…:ちよつとサークル活動に俺は必要ない存在ともわかつてきたしな

だってそうだろ?モカはモデル役、燐子さんは絵を描く、俺は?俺は何もしてなくてモカの行動に突っ込んでるだけ

燐子さんにああ言ったが…:俺いる意味本当にないだろ、うん、そうだ、やめよう。

「あーはいはい、テストね、いいよ受けるよ」

「…:そう、では勝負よ神崎レイ！」

「はい」

その後は急に暗くなった朝日奈さんがブツブツ言いながら教室を出て行った。俺もその後出て教室に荷物を取り学校を後にした。

◆◆◆

「…:はあ、なんなんだよ」

帰りの路面電車の停車駅にて1人そう呟いた。周りには誰もいない、帰宅部のヤツらが帰るにしては遅い時間、部活してるヤツらはまだ帰ってこない時間、だから人っ子一人もいないってわけだ。

「次の電車は5分後か」

SNSとか見て時間潰すか、携帯を見るように前のめりになる。

数秒いじると隣に誰か座って来たようだ。誰かと思って顔を上げようとしたその時

「顔あげないで、今日は紙袋被ってないから」

「ツー！」

この電子音みたいな声…:普通の人間の声じゃない、変声機越しの声だ。

そうアサシンだ。

「携帯、回収するねー反射して顔見られたら恥ずかしいから」

「お、おう」

携帯を俺か奪い取り手すりの傍に優しく置いていた。優しくつて

いうのは音的にゆっくり置いたんだろうなと思ったんだ。

「で、何しに来た」

「君を慰めるために来たんだよ」

「?慰めるため?」

何を言ってるのかわからないんだが

「テスト勝負……受けるんでしょ?」

「ツ!?な、なんでそれを!」

「僕は君のことなんでも知ってるからね」アハハ

「……なんで知ってんだよ、怖ーよ」

「それは僕が今日君に会いに行こうと思ってたかき」

続きを聞くとどうやら俺を探しているうちに放送室の隣の空き教

室につき、盗み聞きしてたらしい。

「……勝負なんて受けたフリしとけばいいんだよ、どうせ勝てないし」

「なんで諦めるの?」

「なんでって……相手はあの朝日奈凜だぞ?成績TOP10から外れたことがない人だ」

それに彼女は一般生徒がみたら美人で人形のような人だと思うかもしれないがさっきの事実を知った俺はどうも思わん

ああ、今頃彼女は俺が自分の正体を言いふらしてないか心配してるんだろう。

「サークル活動場所をかけた勝負でしょ?」

「いや活動場所とか別に視聴覚室じゃなくてもいいし」

「……それに俺なんてあのサークルにいらなくてもいい存在だしな」

自分で言って悲しくなるってな、まあ事実だし仕方がない、俺なんていない方が彼女達も静かに自分達の好きなような絵がかけられる

「……ねえ、自分の気持ちに素直になつて?」

「ツ!」

アサシンは俺の手に触れてきかと思えば手を握ってきた。

それは俗に言う恋人繋ぎってやつ、恋人?と言われれば違うと言いたい関係?だと思いが……急にすることか?それに

「自分の気持ちに素直になってっつてどうゆうことだよ」

「君が小説家になりたいって気持ち、」

「………そんなのない」

「あるよ、だからあの場所は君にとって大切な場所なんだよ?」

「ツ!………なんで言いきれるんだよ」

「だから僕は君のことなんでも知ってるんだって」

その言葉を聞いた瞬間にイラッときた。だから俺は

「いい加減にしろ!」

「ツ!」

「俺のこと知ったようなこといいやがっつて……俺が!いつ!小説家にならいたいって言っつた!」

誰かに小説家になりたいなんて話したことなんて一度もない。だから彼女が知ってるわけなんてないんだ。

「君のあのノート、所々不思議なシミがあったの」

「ツ!」

「……泣きながら書いたんだね」

「………」

「本気でなりたいから書いたんだね」

「……うるさい」

嫌な思い出だ。

中学では姉貴がラノベ作家だと知れ渡っていた。先生が口を滑らせ話したんだ。

まあ今となれば俺が悪かった、俺が厨二病だから「姉が作家さんだからあーなんだよ」的なことを担任が言っつたんだ。

学校でも普通にあの闇の書は書いていた。

周りからは姉と違って才能がない、ただの厨二病だのなんだの言われ続けた。

「ツ!今に、見てろよ……!いつか絶対有名なやつに、な、なっつてやる!」

つて宣言しながら夜な夜なノートに向かって泣きながら闇の書を書いていた。

でも姉貴が本格的に売れてわかつつたんだ。俺にはもうどうしよう

もないと、俺と姉貴には天と地の差があるんだとそこらになつてやつとわかつたんだ。

だからあのノートと一緒に小説家になりたいなんて夢も捨てたんだ。

「君の話本当に面白いよ」

「……どうだかな」

「評価だって沢山ついてる。色んな出版会社から声だつてかかってくる」

「……そんなの、偶然だ」

「………そんなこと言わないの」

じゃあなんて言えばいいんだよ、本当に俺の努力が認められて人気が出たとしても言いたいのか？

「君は周りの人に恵まれなかつただけだよ」

「は、はあ？」

「……でもあそこは君をちゃんと認めてくれる場所だよ」

「小説家になれないとしても」

あそこというのはあのサークルのことを言ってるのだろうか

「君はあの場所から離れては行けない、あそこなら君の夢は叶えられる」

「……そんなわけないだろ！」

「彼女達が君を支えてくれる」

彼女達が？モカと隣子さんが？いやいや、だったら

「じゃあお前はなんなんだよ！俺のこと好きとか言いながら顔だつて見せてくれないじゃないか！」

「ッ！………ごめんね」

「ごめんねじゃねーよ……本当に俺のこと好きなら近くで支えてよ……！」

もう涙が止まらなかつた。ずっと、ずっと封印していた記憶を彼女が呼び覚ましたんだ。

なのに彼女は俺のことを好きだと言いながら直接関わろうとしない、だから……すぎるように俺は支えてくれって言ってしまったん

だ。

「うん、いいよ僕もサークルに入る」

「ッ！は、はあ？」

顔を上げようとしたけど

「だから上げちゃダメだって！」

「ッ！い、痛い！痛たた！」

頭を思いっきり抑えられ首がもげそうになる。泣いてるんだからもつと優しくしてくれよ

「僕が入れば頑張れる？」

「……いや、そういうわけじゃ」

「でも支えて欲しいんだよね？」

「ッ！う、うん」

でもどうするんだ？紙袋を被ったアサシンが新メンバーです、なんて紹介できる訳が無い。

「普通に僕の正体を隠してサークルに参加する」

「……で、もう既にいるって可能性もあるよ？」

「ッ!？」

「すぐにやって来たと思えば一番最後に入った子が僕だったりしてね」

「……僕は僕のタイミングで入る、これならいいかい？」

いいも悪いも大丈夫なのかよ！

「君の正体がサークルメンバーの中に絞り込まれるぞ？」

「んー別にいいかな、だって早くバレたいし」

「ッ！な、なんだよそれは」

「それほど僕は君が好きってことさ」

握ってた手をさらに強く握ってきた。

誰かところとして手を繋いだことなんて俺にはない。強いて言えば小さい頃姉貴と手を繋いだことぐらいだ。どうすればいいかなんて俺にはわからないけど……俺はそれに答えるように強く握り返した。

本当の恋人でもないのによくするよ

「だから……僕がくるまであの場所を守っててくれないかい？」

「ツ！さっきも言ったろ、無理だつて」

あの朝比奈凜に勝つなんて無理だ、俺が羽丘のTOP10に入るってことだぞ？つぐみだつて入れてないのに俺が入れるわけ

「大丈夫、君は勝てる。僕は君を信じる」

「……………どうしてそこまで」

「知ってる？愛は負けないんだよ」

「ツ！」

この人…一体どれだけ俺のこと好きなんだよ…！

あーくそ！こんなこと言われても否定なんてできるかつての！

「クソが！俺が勝つて場所を守ったらちゃんとするんだよな！」

「うん」

「俺を支えてくれるんだよな!?!」

「うん！僕は君の味方さ」

なら…………俺はまた立ち上がれる、かな

ガタンゴトンガタンゴトン

路面電車の近づく音で音の音が聞こえた。わずか5分だけの話だったが俺にとって人生を変えるほどの大きな話だった、ような気がする。

「電車きちやうね…………どうする？手、繋いだまま電車乗る？」

「…………いやいい、もう十分だ」

アサシンの手を離し立ち上がる。今ここで振り返ればアサシンの正体はすぐにわかる、がサークルに来ると言ってるんだ、探せばいい。

それにこんな終わり方は俺が認めん

「…………でも一っだけ譲れないことがある」

「？なんだい？」

「一度捨てた夢を拾うようなこと俺はしない」

電車が着き、ドアが開くと同時に

「俺は姉貴小説家とは違うやり方で名前を残す！」

「ツ！」

「そしてお前は…………そんな俺の彼女になるんだ、いいいな！わかったか！」

「……はい！」

な、何言つてんだ俺はー!? そう簡単になれる物じゃないのにまるで
もうなれるかのようによいやがってー!

何考えてんだよ俺は!? てかアサシン! お前も間に受けんな!

「勉強! 頑張つてね！」

「ツ! 五教科プラスオタク科も勉強しとくつての!」

そう言いながらカツコつけて電車に乗ったのはいいものの

「あ……携帯忘れた」

カツコつけたことがすべて台無しになるレベルのあほっぷりを披
露するレイなのであった。

試験勉強したことありますか？

次の日、いつも通り1人で登校していた。

なんと言うか珍しくやる気に満ちていると自覚してしまう。

「〜♪」

鼻歌を歌ってたようだ。ちなみにだが今歌ってたのはデアラー1期の曲で曲名は…ってこれ以上話さなくてもいいか

余談だがデアラー関係の曲は神曲ばかりだ、諸君もちゃんと聞きたまえ！オーケストラバージョンなんてもう最高だぞ!!

いや、だから落ち着けよ俺は!?

燐子さんのせいで最近俺までオタク化が進行してきているな…まあ元は厨二病でオタクだったから化はしてないか

と自分にいかせるように心の中でいいながら教室に向かう。

「……………はあ」

相変わらずモカのやつは俺の机に座りひまり達と話をしていた。

モカのやつは普段から下着を履かない露出狂の変態野郎なのだ。

そしてノーパンのまま生尻を俺の机に押し当てその上で眠る俺を見て興奮するという残念なやつでもある。

「うーす柊優」

「おーすレイ」

柊優といつもの挨拶をして席替えによって離れた柊優の席でいつもの様にだべる。

「テストめんどくせえーなくなればいいのに」

「ん？まあ、そうだよな…てかお前そんなこと言いながらいつも10位以内じゃんか!」

「…俺がいいんじゃない、他の人達が俺より下なんだよ」

「お前まじで嫌われろ」

こいつは前も言ったがスポーツができて勉強もできるアニメとかにいるような完璧人間なんだ。

冗談抜きで嫌われて欲しいレベルの人間なんだが…そうはいかない、女子からはやはり人気なのだ。

それと人気と言えば

「みろ朝日奈凜さんだ」

「人形のように美しい…!」

「ま、まじねーわ」

朝日奈凜、柊優が女子に人気であるように、朝日奈さんは男子に人気がある。

ま、まあ朝日奈さんは瀬田さんみたく女子にも人気はあるが…俺は知らないふりをしよう。

そんなことより俺はこの朝日奈凜さんとテストの順位で勝負をすることになってるんだ。

昨日は適当な返事をしたから…

「おはよう、朝日奈さん」

『ツ!?!』

周りの人達は俺が朝日奈さんに話しかけたことに驚いたのか、話している口を止め一斉にこちらに視線を向けてきた。

ま、まあ話しかけた俺も俺だ、人目につかないところで話せばいいものを今この時間に話しかけてしまった。

えーい!話しかけたのなら話すしかない!

「昨日のこと…覚えてる?」

「ええ、忘れもしないわ、私の体(心)に一生消えない傷を負ったわ」

や、やめてー!その言い方!

「おいおい神崎君何やっちゃったんだよ」

「中性的な顔しながら三大欲求の1つが強すぎたか」

「まじねーわ」

あの三馬鹿がまた余計なことを言うじゃないか!

多分だが朝日奈さんは昨日のことを誰かに話してる。と、決めつけているんだと思う。だからあんなことを言ってるんだ。

ならば、すぐにとる行動は!

「昨日のことは誰にも言っていないから気にしないでくれ」

「…そう、それは助かる」

「うん、だから」

「でもあなたが私の大事な物（視聴覚室）を奪ったことには変わりない」

『ッ!』

だからその紛らわしい言い方をするな!

女子から私の大事な物、なんて言葉を口にしてみる!?別の何かだと思ってしまうだろ!てかそれって物じゃなくて視聴覚室って場所だろ!

「んんっ!と、とりあえず昨日の話の続きだ」

「……昨日の続きも何ももう終わってるわ、結果は陽性反応で私はあなたの」

「だから話がずれてる!お前俺をこの学校から消し去ろうとしてないか!？」

「危険な存在は排除すべき」

「口に出しちやってるよ!」

く、くそ……やはりここで話しかけるべきじゃなかったか!だがここまで来たならもう最後までやりきるしかない!

てか普段はあなたこんな感じだったんですね、確かにそんな話し方だと人形さんだと思われて仕方がないか

「とりあえず俺はあんたとの勝負を受ける」

「昨日受けると私は聞いた」

「いや、改めて宣言しないとやる気が出ないというか……」

あの時は適当に流してた。でも今は違う、朝日奈さんに勝って、俺はあのサークルで俺がしたいことをするんだ。

そう、だからあえてこうしてみんなの前で宣言してもう逃げられないようにする。

とは言っても勝負内容を少しだけ変更したい!

「勝負内容なんだけど少し変更させてもらう」

「どうぞ」

「そうかい」

「なら……俺はあんたにテストで、五教科合計点数で勝つ!」

『ッ!』

「テストで勝負だ、逃げんじゃねーぞ?」

「それはこちらのセリフ、あなたこそ大金を用意して待つておくこと」
「だからいつまでその話するんだよ!」

クラスをやつにもこの勝負のことを知られた。だから俺はもう逃げ
ることも隠れることも出来ない!

もう俺には勝つ道しか残されてないのだ。

「賭けの内容は覚えてるよな?」

「……負けの方は勝った方のいうことを絶対に聞く」

「すんごいの要求するから待つとけよ!」

「ッ!」

これは朝日奈さんを精神的に追い込むために言っただけだ、特に深い意味なんてない。

「(すんごいの!?すんごいのって何!わ、私本当に大事な物奪われるの!?)」

なんて涼しい顔しながら思ってるんだろうな

「レーイ、なんだよお前、朝日奈に手でも出したのか?」

「なっ!と、巴お前!」

「馬鹿、お前のごと助けてやろうとしてんだ」ボソ

なるほど……ここで否定できるタイミングをわざわざ作ってくれた
のか!巴!お前と幼馴染でよかったと心の底から思うぜ!

「な、なわけないだろ!ただたんとある権利をかけた本気の勝負を
しているだけだつての!」

これで……どうだ!

「え?そうなんですか朝日奈様」

「何かされたらのなら本当のこと言っっていんですよ?」

「まじなーやつ?」

「……………」

返事をしない朝日奈さん、三馬鹿とは話したくないのだろうか

「はーな、なるほどー!」

「そうゆうことですね!」

「まじねーわ!」

「……………そうゆうこと」

えー!?お前らテレパシーでもあんの!?何も話してないのにお互い理解しちやっただよ!

「神崎が言ってることは正しいそうだ!」

「だいたい考えろ!神崎君には夜桜君がいるだろ?」

「まじねーわ(笑)」

「お前らまじでそろそろ怒るよ?」

何故腐女子が喜びそうなことを言う!てかその女子!キラキラした眼差しで俺と柊優を交互に見るな!

「確かに、レイには夜桜がいるし女に手を出す必要はない」

「なんで蘭が言うんだよ!?!」

「ツ!べ、別にアンタを助けるために言ったわけじゃないからね!」

「ツンデレ風に言っても言つとる意味がわからんわ!」

俺には柊優がいるから女に手を出す必要はない?意味がわからん!

「はあ、なんでこんな目にあってるのかな」

みんなの誤解は解けたがその後が酷かった。いつも影で言われているかもしれないがこうもみんなの前で言われると正直辛くなる。泣きそう

「大丈夫ー?おっぱい揉む?」

「……………ん、ああ、揉む揉むってアホか!?!」

「素直になりなよー」

「ひよー!お、お前!?!」

近くにいたモカのやつも訳分からんことを言いだし、ノリツツコミをしたところでモカは俺の手を取り自ら胸に押し当てた。

「?どうしたのレイ君?」

「ななな、なんでもない!」

「あ、ひーちゃんもやる?れーくんがお」

「ちよつと黙ろうなモカ!」

ひまりのやつ俺の声に気づき話しかけた時には既に俺はモカの胸

から手を引いていた。

「こんな所見られたらひまりのことだ、大声出して叫び出したに違いない。」

「それよりレイ君凛ちゃんに勝てるの?」

「安心しろ、お前よりかは頭がいい」

「私関係なくない!?!」

確かに関係ない、だけどいじるくらいちよつとは許せ

「おーい、HR始めるぞ」

丁度よく担任が教室に来たことで騒ぎは静まり多分今日もいつもと変わらない1日が始まったのであった。

◆ ◆ ◆

時は夕暮れ、テスト期間もあつて部活をしてる生徒は一人もいない、グラウンドを見ても誰も使つてなく普段見てたか光景が嘘なんじゃないかと思ってしまう。

そんなことを考えながら玄関とは真逆の図書室に向かい空いてる机を見つけて腰を下ろした。

「……………」

その後は一言も話すことなく黙々と勉強を行う。

家でやると漫画とかラノベとかゲームとかで集中が途中で切れてしまい片方に熱中してしまうからな

まあそんな時はリビングで勉強するが図書室が使えるならそこで勉強すればいいだろ

「……………」

どれぐらい勉強しただろうか、時計を見てみるともう6時前、そろそろこの図書室も閉まる頃か

早く出ないと先生に怒られるしもう出るとするか

「おーい、そろそろ図書室閉めるから残ってるやついたら出ていけよー」

「……………」

寄りにも燃つて施錠する先生が担任かよ、これは早く出ないと怒られるやつじゃないか

俺は開いてたノートを急いで閉じ、消しカスなどをポケットティッシュに包み込み家に持ち帰って捨てようとした。

ここで捨てたら少し時間かかるし？ゴミ箱にちゃんと捨てるならどこに捨てても変わらないだろう？

「ん？なんだ神崎、お前だけか」

「ば、バレちゃった」

「なにがバレちゃっただ、別にこんな遅くまで残ってて怒るなんてことはしないさ」

「むしろこんな時間まで残って勉強してるんだ、褒めてやるぞ」

「褒めるなら頭を撫でてください」

「お前は小学生か」ポフ

担任が持っていた学級日誌にて軽く頭を叩かれた、叩かれたと言うより置かれたと言えば正しいのか？

「角じゃなかったただけ安心しろ」

「いや角だったらもう凶器だろ!？」

「はは、そうかもな」

なに、今適当に流されたんですけど！

「！お前英語の勉強してたのか、いやー関心関心」

「まあ苦手科目なんて」

「だいたい日本人だから英語の勉強なんてする意味ないだろう、将来海外で働きたい人とか、外人と関わる系の仕事なら必要になると思うが…」

「そんな仕事につこうと思っていない俺にとってあまり意欲的に勉強しようと思う教科ではない。」

「ただ今回は今回だからさすがに勉強しないとイケないと思ってだな…うん、やっぱり難しい」

「私でよければ少し教えてやろう、なに担任直々に叩き込んでやるんだ、嬉しいだろ?」

「ええ、い、いいんすか?」

「……まあ、家に帰ってもやることないしな、独身教師なめんなよ」
フツ

「……………あーすみませんでした」

こうして急に英語の担当兼担任の教師から放課後特別指導を受けるのであった。

ここまでしてもらったのなら…英語だけでもすんごい点数取らないと怒られそうだよな

そう思ったレイは放課後、美人教師と2人っきりの図書室という夢のようなシチュエーションにも関わらず馬鹿正直に勉強に集中するのであった。

◆◆◆

テストまで今日を入れて後2日間しか俺に勉強をする時間は残されていない。

「……………」

部屋にて勉強をしていた。が、部屋の様子はいつもと違う。

本棚に並べられていたラノベなどはダンボールに移しガムテープにて封印をした。

その封印の最中に小一時間ほど読書に専念してたって話は内緒だ。口が裂けても拷問されても絶対に話してはいけないことなんだ。

そんな極限状態まで追い込んで勉強してるわけなんだ。

／＼ピンポーン／

誰がうちに来たようだ、宅急便かなにかだろうか

「姉貴ー鳴ったぞー」

「ごめん！あたし今いいところだから！……………ああ！死んだああー!!!」

「……………ゲームかよ」

自分の部屋に置いていたゲームだがこれも集中を切らすと思い姉貴の部屋に置いていたんだ。

恐らく俺のゲームを借りてなにかしてたんだろう、そういえばあのゲームに関しては絶望的に下手くそだったな

姉貴がゲームに専念していたため勉強中！の俺がわざわざ出向くことになってしまった。

「はーい」

「こんにちはレイ君！」

扉を開けるとなんとひまりの姿が、ひまりが俺の家に遊びに来た？
なんでだ？

「……すみません、新聞はいらないます」

「ちよ！ちよつとストップ！ドアを閉めないで!？」

「巨乳教にも入らないので」

「宗教の勧誘じゃないよ!？」

「……うちテレビないんで」

「NOKの集金でもないよ!？」

「じゃあなんだよ」

「普通に遊びきたって思わないの？」

遊びに来た？いや！この前のこともあるから一度外の様子を見て
みるがひまりしかいない、な

「お前本当に遊びに来たのか？」

「……う、うん、ダメ？」

「ダメも何もお前来週テストだろ、勉強しろよ」

「だーかーらー！勉強するついでに遊びに来たの!」

んーこいつを家にあがらせていいのだろうか、姉貴に見つかれば姉
貴はうるさいしひまりもいい気分にならないだろうし……

「いや勉強に集中したいし、てか来るなら連絡しろよ」

「したよ！でも返事なかったもん!」

「……まあ携帯無くしたしな」

「それ大問題じゃない!？」

あー！うるせえ！一言一言がうるえ！静かにしろ！近所に迷惑だ
ろ!？」

ほらー！そこのおじさんめっちゃ俺の事睨んでるよ！こ、これは次叫
ぶと怒られるやつだ……！

「と、とりあえず入れよ、近所に迷惑になるからな」

「なんか腑に落ちないけどお邪魔します」

とりあえずリビングに案内して少し話せば気も済んで帰ってくれ
るだろ

「なんで携帯なくしたの？」

「うう、え、駅に忘れた」

「駅に忘れた？ぷーくすくす！レイ君アホだねー」

「おい、お前の両乳もぎ取るぞ」

「ツ！だ、ダメだよ！ダメ！」

自分の大きなものを両手で隠すような仕草をするがなかなか様になつてた、てか少しエロいような感がある。

あ、あと携帯なんだがあの後駅に戻った頃には携帯なんてものは置いていなかった。

アサシンが拾ってくれたことを信じて俺は当然携帯無し我的生活を送っていたのだ。

これを機に携帯離れもできたし？テスト勉強にも集中できた、これもアサシンが計算してたことなのだろうか

「携帯買わないの？」

「……まあそのうち見つかるだろ」

データのバックアップはパソコンにあるし見つからなかったとしても問題は無い。

「てか本当は何しに来たんだよ！」

「だから遊びと勉強しに来たの！えっと……ほら！勉強道具も持ってきたよ！」

カバンから勉強道具を取り出し笑顔で俺にアピールしてくるがその仕草になんの意味があるんだ？

「……じゃあ遊ぶなら勉強の後な、ちよつと待ってろ、勉強道具部屋から持ってくるから」

ソファアーから立ち上がり上の部屋に向かおうとしたその時

「待って」グッ

「……おいおい、なんだよひまりさん、勉強道具取りに行くだけだろ」
ひまりのやつが俺の服を引っ張り上に行こうとする俺を止め始めた。

「レイ君の部屋で勉強しない？ほら！リビングって勉強するところじゃなくてご飯食べるところだよ？」

「……………いやいやお前、俺の部屋に入りたいの？」

「ツ！な、なわけないじゃん！ただ男子の部屋がどんなのかは少し気になるのは嘘じゃない、よ？」

えー何その回答、てかさんなのだったら別に俺じゃなくて他の男子の部屋でよかったじゃんか！

「男子の部屋に夢を見てるのならあまり期待しない方がいいぞ」

「それでもいいから見てみたいの！」

な、なんだこいつ！それでも見たいってなんだよ！

「……………はあ、行くぞ」

「ツ！うん！」

俺の悪いところってやつなのだろうか、どうもこのひまりには少し馬鹿甘いところがある。

いや、ひまりだけじゃなくてあの幼馴染集団全員に俺は甘いのかもしれん、特にモカなんてな

「ほらここが俺の部屋だ、何もねーだろ？」

「本当だー、何も無いね」

「……………まあ今は勉強に集中するため本とかゲームは閉まつてるけどな」

！
こんなことひまりに話しても意味ないけど一応伝えとかないな

「とりあえずお菓子とか飲み物とか持つてくるよ、なんか飲みたいもんとかあったら言ってくれ、なかったら適当な物出すから」

「オレンジジュースで！」

「おっけー」

オレンジジュースなら氷川さんが来た時に出すのが残ってるはず、ならジュースはこれでいいとしてお菓子残ってたっけ？

「……………きのこの山とたけのこの里とポテチか」

まあこれだけ持つていけば気が済むだろ、コップにジュースをそそぎ、皿にはお菓子を並べトレイに乗せて部屋へと運ぶ。

「おーいひまり、お菓子持つてきた」

と、部屋のドアを足で開けて入ると目の前には目を疑う光景が！

「ほれほれーこの胸でどれだけの男のあれを抜いてきたんだー？言つてみる？」

「ひゃーな、なーちゃん私まだそんなことしてないよ」

「またまた冗談を、胸が大きい人なんてみんなビッチって定番なんだよ……」

「あ、あぁー！そこはダメです！」

「お、だんだんかたく」

「何してんじやおんどりゃー!!!」

姉貴が俺の部屋でひまりとレズプレイなるものをしようとしてたもんだから思いっきり蹴り飛ばしてやった。

「部屋に女子を連れ込むなんてレイも成長したなーお姉ちゃんは嬉しいよ」

「なんでだよ」

「で？いつから2人は付き合い始めたの？」

「付き合ってるねーよ!？」

部屋に連れ込んだから彼女とかなわけないだろ！

「え？でもさつきひーちゃん……」モゴ

「な、何言ってるのかななーちゃん!?なーちゃんは何も見てない!いいね!？」

「う……うん」

姉貴のやつはひまりに口を押えられた、のでは無く胸に思いっきり顔を埋められていた。見た感じわかるがあれは絶対柔らかいだろ

「それよりもあたし女もいけるのかもしれない」

「知りたくもなかったわそんな情報」

姉貴がレズに目覚めたかもしれないとか一生聞かなくていい話だろ

「あ、オレンジジュース貰うね」

「あたしも！あたしの分も用意するとか気が利くねー」

「いやどう考えても俺のだろ!？」

姉貴が部屋に来るなんて考えてねーから俺とひまりとで2つコップ持ってきてたのに！

「……はあ、で？姉貴は何しに来た」

「いや隣からすんごい音が聞こえたからさーレイがエロ本でも隠してるのかなって」

「エロ本は姉貴が全部燃やしただろ…」

エロ本と言ってもグラビア雑誌だ。極秘に確保したことがあるが次の日庭で姉貴が焼き芋してたもんだから何燃やしたの？って聞いたら

「レイのエロ本！巨乳は滅べー！あっはは！」

なんて言いながら棒で突つついていた、それ以降俺はもうエロ本もグラビア雑誌も買わないと心に決めただ。

てかその時俺は下の階にいた、なら……ひまりのやつが騒いでたのか？

「い、いやーレイ君も年頃だし？そうゆう本見つけて……」

「俺を脅そうとしたんだな？」

「は、はい」

俺を脅してなにが楽しいんだろうか…訳が分からん

「てかさひーちゃん本当におっぱい大きくなったよね、何したの？」モ
ミモミ

「何もしてないよ、勝手に大きくなったの」

「うわー何それ、喧嘩売ってんの？買うよ、いくら？100万ぐらい余裕で払えるよ？」

「なーちゃん怖いよ!？」

姉貴の目からハイライトが無くなってる。やっぱり巨乳に対して俺が思ってる以上の何かを持っているようだ。

「レイも想像したりしないの？ひーちゃんの裸とかさ」

「……いや幼馴染にそんなの求めねーよ」

「ッー」

「ガキの頃からいるんだぞ？意識なんてするわけないっての、あと体目的で仲良くするとか失礼だろ」

嘘です！こないだめっちゃエロ夢をモカで見えてしまいました！いやあれは前日にあんなことがあったから仕方がないとして！

だつてほら！あれから一度も変な夢見てないし！？」

それに幼馴染を恋愛対象として見たことなんてこれっぽっちもない、あいつらは幼馴染、そして親友って立場であつてそれ以上の関係を俺から築こうとは思わない。

アサシンが幼馴染の誰かだつたとなると……それはちやんと考える。前モカがアサシンだと思つた時はちやんと気持ちに向き合うと決めてたしな

「なんかレイがまともなこと言つてるー」

「俺は元からまともだつての」

「……そつか、レイ君は私達をそんな風に思つてたんだ」ボソ

「ん？なんか言つたか？」

「なんでもないです、ほら！早速勉強しようよ！」

「……おう、てことで姉貴は部屋から出てけ」

「わかつたよーちやんとゴム付けなよ？」

「保険体育の実技の勉強をするわけじゃねーよ!？」

叫ぶと姉貴は逃げるように部屋を後にした。その後は何故かひまりも急にやる気を出したしお互い集中して勉強をすることが出来た。

夕方になるとひまりは帰ると言い出し途中まで見送つてやった、そのついでに夕飯の食料を調達し家に戻る。

急いでご飯を作つて姉貴に食わせて勉強に戻るが……くそ、もうすぐテストだつて言うのにわからない箇所がまだいくつもある。

「これはまずいな」

シャーペンをカチカチ音を鳴らしながらそう一人呟いていた。

この期に及んでまだわからない箇所があるなんて勝負の権利すら俺はまだ獲得できてないぞ

「レイー何してんの？」

「へあ!？」

「何驚いてんの、あ、試験勉強か！懐かしいー今どこやつてんの？」

色々集中しすぎて姉貴が部屋に入ってきたのに気が付かなかった。

「どう？3年間羽丘で首席を取つてたあたしが直々に勉強教えてあげようか？」

「あつたなそんな設定」

姉貴は大学もいいたところ行って羽丘では3年間ずっと1位を取り
首席で卒業したんだ。

本当……こんなのが姉貴とか普通嫌になっちゃうよな!?でも俺は
そこまで嫌ってないけど

「……別にいい、自分で何とかする」

「ふーん、あつそ、羽丘の先生って性格クソだから結構引つ掛け問題バ
ンバン出してくるからー気をつけてね」

「……………おう」

姉貴はあつきり引き下がったと思えばそんなことを言いだし部屋
を出て行った。

「…………………………」

その後数時間ほど勉強してみるが…やっぱりわからない所はわか
らない。

姉貴がさつき言ってたセリフのせいで一気に不安になってきたぞ
…!

俺勝てるのか?てかそもそもテストでいい点数取れるのか?

「……………クソ」

部屋から出て行き

「……姉貴」

「んー?どったのレイ」

「あー……夜食作ってやるからちよつと勉強に付き合ってくれないか
?」

「素直になりなよ」

「うるさい」

夜食を作りリビングにて姉貴に勉強の面倒を見てもらった。わか
らなかつた所を重点的に教えて貰い準備は万端、と言つても過言じや
ないほどの仕上がりだ。

日曜は自力で勉強し、月曜日はあつという間にやってきた。

「……俺は俺がやるべきことをやる、そうだろ?アサシン」

テストを開始を知らせるチャイムは俺にとって戦いを知らせるゴ

ングのようなもの、そのチャイムが今、鳴り始めた。

テスト勝負したことありますか？

さあ……！やってきたぞ結果発表！

羽丘はテストの順位が生徒玄関に掲示されるんだ。

毎回思うけどさこれってドベの人にとっては公開処刑じゃね？俺がドベなら先生に即辞めるべきだ！なんて抗議するよ

「なんかドキドキするー！」

「なんでひまりがドキドキするの？」

「なんか結果発表！ってドキドキしない？」

「……あたしはどうでもいいかな」

「とか言っつて蘭くひーちゃんより順位低いんじゃないの〜？」

「それは絶対でない」

なんかモカ達盛り上がってんな、まあひまりは100位以降として、モカとか蘭は少しはいい順位取るだろ

「つぐ、今回の自信は？」

「私結構自信あるよ！だって今回頑張ったもん！」

「お、なら俺と勝負するか？」

「レイ君は朝日奈さんに勝たないと」

「……はは、だな」

確かに今は人のことを気にしてる暇なんてないよな、ここで負ければ視聴覚室は奪われアサシンがうちのサークルに参加しなくなってしまう。

そんなことは絶対にさせない！なんせ25分の1から数分の1になるんだぞ!!もう当ててくれって言ってる物じゃないか！

「レイは自信あんのか？」

「んーいい点数だって自信はある、けど」

「けど？」

「……勝てるかはわからん」

巴のやつに自信はあるか、なんて聞かれたけど……正直不安だよな
「とか言っつて勝ってたら面白いんだけどな！」

「ッ！だな！」

なに弱気になってんだよ神崎レイ！アサシンが言ってただろ？愛は負けないって！

俺とアサシンのナイスコンビネーションを見せてやろうぜ！

「あーレイ兄ー！」

「こ、この声は！」

『あー！』

廊下の向こうから笑顔で手を振りながら走ってくるのは巴の妹、宇田川あこだった。

「あー！」

俺はあこが走ってきてる中抱きつくように手を広げながら近寄っていたら

「うちの妹に手を出すんじゃないぞ！」

「へぶち！お、お前、グーパンはないだろ……！」

お腹に重いストレートが決まったー！今日の朝ごはん少なめでよかったー、沢山食べてたら絶対吐くやつだよ！

「レイ兄久しぶり！同じ学校なのに今まで全然会わなかったね！」

「あ、ああ、不思議なぐらい会わなかったな」

「はっ……ふっふっふっ、それは私の力が偉大すぎてレイ兄の、いやレイの？」

「あこ、これ以上こちら側に来るな、お前はまだ間に合う」

「ん？うん！」

か、可愛ええー！このあことつぐみの笑顔に勝てるやつは果たしてこのようにいるのだろうか！いるとしてもアサシンだろ！

それとこちら側というのは厨二病の意味だ。

厨二病とは本当に難病だ。すぐに完治はできるもののその後が地獄のように辛い。

何が辛いかって？周りの視線だよ！

「あーいきなり走らないでよ」

「あ、あこちゃん急に走り出してどうしたの？」

「明日香！六花！紹介するね、レイ兄だよ！」

「どうも、あこの兄レイです」

「ええ!? あこちゃんお姉さんだけでなくお兄さんもいたの!？」

「いや六花、どう考えても嘘でしょ」

「うう、この子ノリって言葉知らないのだろうか? そこはほら、乗ってやってくれよ!」

「つてのは冗談で俺の名前は神崎レイ、あこは小さい頃から友達なんだ」

「あたしの幼馴染ってやつだ」

「巴先輩の幼馴染? ……あ、私朝日六花です」

「私は……戸山明日香です」

「ツ!と、戸山!？」

「あ、あれだよな? たまたま苗字が同じってだけで香澄の妹…なんてことはないよな?」

「は、はじめまして、神崎レイです」

「いや、えっと…はじめまして、では無いですよね?」

「……へ?」

「はじめましてではない? この子は何も言ってるんだ? こんな可愛い子一度会ったなら覚えているはずだ、だって可愛いんだぞ? 忘れるわけないだろ」

「あの一度家来てますよね?」

「家?」

「お姉ちゃんの彼氏さんですよね?」

「あー、香澄の妹か」

「はい」

「思い出した! 昔香澄の家に行った時にいた妹! い、いたな、確かにいたな…うん」

「えっと明日香ちゃん? …俺と香澄は付き合っていない」

「へーレイは香澄と付き合ってたのか」

「だ、だから付き合っていないって!」

「レイ兄香澄ちゃんと付き合ってたの!？」

「だから付き合っていないって!？」

「ど、泥沼やー…」

やめろー！そんなこと言うなよ！えつと、朝日六花ちゃん！

「お前何黙ってたんだよ！」

「え？なんで巴さんお怒り？」

「違う！付き合ってたら教えろって話だ！結婚式はいつだ！」

「だから付き合ってたねええええええ！！」

俺に嫉妬して怒ってるのかと思ったたら全然違ったよ！確かに巴なら祝ってくれそうだけどきさ！

「てつきり彼氏さんかと思ってました、よくうちに来てましたし」

「おま！ちよつと黙れよ！」

「へーれーくんは中学時代女子の家で何をしてたのかな？」

「はあ!?お前どこから現れた！」

モカのやつが急に現れた。それに話も聞かれていた！もうーい
やだこんな空間！

「レイも男なんだね」

「蘭は俺をなんだと思ってたんだよ！」

「腰抜けへなちよこチキン野郎？」

「こ、ことごとく俺をデイスるな！」

やめろー！泣きそうになるだろ!?てかもう若干泣いてますよ!?
「……………」

「柊優お前はなんか喋れよ!？」

「俺は気にしない」

「何を言ってるんだよお前は…」

肩をガクツと落とし俺はそんなことを言っていた。気にしないってなんだよ、あれか？お前も俺は男じゃないとでも言いたいのですか
!?

「さあさあやって来ましたー！」

「野郎共！待ちかねの順位発表だー！」

「まじねーわー！」

おお始まったな

「今年も我ら遊、優亜、由明日の3人が！」

「順位表を張り出すぜ！」

「まじねーわ！」

この三馬鹿が「先生達張り出すのめんどくねー俺達に任せなよ」的なことを言い去年の冬のテストからこいつらが発表してるんだ。

「いつもなら3年からの発表だが…今回は違うぞ！」

「なんせあの男の娘の神崎君と朝日奈様のテスト勝負！」

「まじねーわ」

うう、こいつらのことだからそんなことするだろうと思ってたが本当にしでかすとは…急に来られると心の準備ってやつが！

「行くぞー！」

「とくと見やがれ！」

「まじねーわ！」

由明日！お前さつきからまじねーわしか言っていないけどまじで大丈夫なのかよ!?

と心の中でツツコミを入れてる中早速順位表が掲示された。

「上原ひまり上原ひまり…！」

「ひーちゃん？下から見たほうが早いと思うよー？」

「う、うるさいな！ちよつと黙っててよ!？」

「ひまり99位、ギリギリ2桁おめでどう」

「ぎゃー!!なんで私より先に見つけるの！」

「ひまりは今日も元気だな！」

ひまりは周りの人達がガヤガヤワヤワヤしている中みんなの鼓膜を大きく響かせる声音で叫んでいた。

「蘭はーおー50位ですか」

「…まあいつも通りかな」

「徹夜してよかったー、今日は早く寝よう」ボソ

「蘭ちゃん？何か言った？」

「つ、つぐみ!?な、何も言っていない！それよりつぐみの順位は？」

「私？私はー」

「いやもつと上から見なよ」

つぐみはひまりと逆に下から指を指し自分の名前を探していた。それを見兼ねた蘭が上から見なよと伝えれば笑いながら上位の方に

目を向ける。

「あつた！12位！」

「え！つぐすごーい！1桁まで後少しじゃん！」

「……今回沢山勉強したのにな」ボソ

「つぐみ？何？」

「ッ！なななんでもないよ!？」

蘭とつぐみはお互い小声で言ったことを少しながら聞き取れていたようだ、耳がいいのか、それとも単に仲が良くてウマが合うのか

「巴は何位？」

「えつとーげつ、59位……くっそー蘭に負けたか」

「ふん、あたしの勝ち」

「んだとー！次は勝つからな！首洗って待つとけや！」

「蘭がともちんに殺されちゃう〜」

「なわけないでしょ！てかモカ！あんたは何位なのさ！」

蘭がモカに指を指し言い放った。するとモカは自信げにふっふっふーとわざとらしい笑い方をして順位表を指差す。

『ッ！きゅ、9位!？』

「えっへん、モカちゃんはやる時はやるんですよ〜」

「うっそなんで!？なんでつぐを置いてモカが9位!？」

「まあモカちゃん天才なのでー」

「カンニングした？」

「モカちゃん記憶力はいいのでー」

ひまりと蘭はモカの順位を信じることができず質問をするが適当に返されるだけ、痺れを切らした2人はもうモカに何も聞かなくなっていた。

「それよりほら、上を見てみなよー面白いことになってるからさ〜」

『?ええええええええええ!!』

モカを除く蘭、つぐみ、巴、ひまりの4人はモカの時よりも大きな声で驚いた。何故なら

「レイ君がひ、1桁代に！」

「しかも凜ちゃんと並んで……!」

「あいつまじか…!」

「ツ!…やるじゃん、でも」

上からつぐみ、ひまり、巴がそれぞれ感想を述べた後蘭も一言言った、しかしその最後にはでも、なんて言葉が添えられていた。

「きゅ〜〜〜」

レイは立ったまま全身を白くしながら口から魂が抜け出ていた。簡単に言うとは燃え尽きた状態だ。

「夜桜君が朝日奈様をおさえて1位か!」

「いやー神崎君は夜桜君と並べなかつたか」

「まじねーわ(悲)」

夜桜が学年トップ、そしてその隣は

「朝日奈さんが2位ですね」

「夜桜君の隣は神崎君って決まってるのに…」

「でもほら!夜桜君と神崎君に挟まれるなんてもう天国じゃない!」

『ツ!確かに!』

誰かも分からない女子生徒がそんなことを言っていた。

察しのいいかたならもうお分かりだろう、レイの順位は

「神崎、レイ」

「はっ!?あ、朝日奈、り、凜…」

「私の勝ち」

順位表では上から夜桜終優、朝日奈凜、続いて神崎零…そう、学年3位、1歩及ばずレイは朝日奈凜に負けてしまったのだ。

「ま、まあほら?学年3位だろ?すごいじゃねーか」

「えー何それ嫌味?」

「別に俺は凄くない、みんなが俺より成績が悪いだけだ」

「お前マジで嫌われてえー!」

シンはその叫びを最後に一言も喋らなくなったのであった。

一方その数分後

「あちゃーまた1位だ!てへぺろ♪」

アイドルであり天才でもある少女がそこにはいたそうだ。



テストの成績発表があつた当日のHR、担任は少し以上に興奮した様子で話をしていた。

「先生は嬉しいぞ！夜桜と朝日奈はまあ1桁入れると思つてたが！」
「神崎！そして青葉！お前らよくやった！クラスに1桁代が4人もいるなんて先生は感動したぞ！」

普段大人しい担任だがこの時だけはどうやら違つたようだ、なんせ数年教師してる中4人が1桁代に入つたことがなかつたため嬉しいとのこと

「羽沢も惜しかったな、次はいける！」

「は、はい！」

担任が興奮している中1人だけ悲しく誰もいないグラウンドを眺めている少年が1人

「なんだよ神崎、学年3位だぞ？」

「……はは、学年3位（笑）ですよ」

「いや普通に凄いじゃないか」

確かに人生の中で学年3位を取るなんてことそうそうない、にもかかわらずこの男、神崎レイは笑なんて言葉をつけていた。

「先生にまで特別指導してもらつたのに英語なんて92点ですよ？」

「……もう殺してください」

「い、いや神崎？英語だけならほら……学年、4位？」

「………はは」

ほんつと情けない！姉貴には勉強の面倒を見てもらつて!?先生にいたつては英語教えて貰つたのに学年4位で国数英理社の中で1番点数低いぞ!?

それにアサシンなんて愛は負けないとか言つてたのに俺負けちやつてるよ!?!いいのか！俺達の愛はその程度だったのか!?

あーあーあ！視聴覚室持つてかれるからもうアサシン来なくなちやつたよ!?

「おー！か、神崎！」

「………なんすか」

「お前家庭科1位だぞ！100点だ！」

「……へっ、家庭科なんて…なんて?」

あつれえー?待って、よく思い出せ?

「5教科の合計点で勝負だ!」

的なこと俺は言ってたよな!?

となると?

国語96点数学98点英語92点理科100点社会97点、合計483点!

これに英語を引いて家庭科様を足せば!

合計491点!

朝日奈凜の合計点数に勝ってるじゃないか!?

「朝日奈凜ー!俺言ってたよな!言ったな!絶対言った!5教科の合計点数で勝負だつて言ってたよな!」

「聞き覚えがある」

「だよな!俺は英語を生け贄に家庭科様を召喚!よって俺の合計点数は491点!」

某カードゲームアニメのライフの数値を表すときの効果音が俺の脳内では再生されていた。

「おっと…こすいなんて言わせないぞ!これは俺もお前も納得したことなんだからな!はっは!」

そう言っているレイをクラスメイト達は「こいつにプライドはないのか?」とでも言いたげな目付きでレイをじとっつと眺めていた。

が本人はそんなこと気にせず朝日奈凜をずっと見つめているのであった。

「……でもそれは私にも言えること」

「ッ!」

「私も家庭科君100点だから」

「国語98数学96英語97理科94社会100の485点、そこに理科を引いて家庭科君を足して…491点」

「へ?」

100点の用紙を俺に見せつけそう答えた朝日奈凜はテスト用紙の裏、いや心の底では

「(ざまあ見ろ！あとみんなからめっちゃ見られてる……)」

とでも考えているんだろう。

って呑気にこんなこと言ってる場合じゃない！この手を使っても俺は負けたんだぞ!？」

「なんだよお前ら点数の勝負なんてしてたのか?」

「だったらまだ保健体育が残ってるじゃないか」

『ツ!?!』

そ、そう言えばそんな教科あったな！まさか保健体育で決着がつくなんて……!

「えつとー朝日奈凜の点数は90点、おおお前全部90越えか」

「そして神崎は」

ゴクリ、と喉が大きな音をたてた。お、俺は果たして朝日奈凜に勝ったのか!？」

「……90点、これは引き分けだな」

『ツ！はああー?!?!』

ここにきて引き分けだど?!ま、まあ引き分けなら?」

「ひ、引き分けてっことはお互いかけてた物はなしってことで」

「別に構わない。あなたは私の大事な物を奪い、挙句の果て逃げて、おろさせ、人生の中で常に私のことを思い出し後悔しながら生涯をあとにすることになる。それでもいいのなら私は今回の勝負を降りよう」
「待って！俺は本当に何もしてないからね!？」

クソうー！この女！ここぞとばかりに変なこと言いやがって！こんな
いだ誤解が解けたのにまたみんなに説明しなくちゃいけないじゃないか!
いか!

「勝敗ならよそでやってくれーほら、もう他のクラス帰ってんぞ」
「……………」

朝日奈さんは大人しく椅子に座り俺も釣られるように座ってしま
まった。

「はいHR終了、今日から部活のやつは頑張れー」

「きりつつくれいーさんしゃーいーくん」

「しゃーした〜」

クラスのみんなはなんと思っただけかもしれないけどモカのやつしやーしたーって言っただけ？なんか変なこと言っただけにお前ら気づかなかったのかよ！

後なんでもまたモカが号令してんだよ、意味わからん

「……………」

「あ、ちよ朝日奈さん!？」

朝日奈さんは話すことなくHRが終わると同時に教室を後にした。俺も朝日奈さんも今回の勝負に関して納得した答えを出さないからお互い不安なはず。

特に朝日奈さんなんて涼しい顔しながら……はは、考えるのはやめとこう。

「みんな！待ってるよ！俺は何としても引き分けにして戻ってくるからあー！」

「おー頑張ってるよー！」

「れーくんならできるさー！」

返事してくれたのは巴とモカだけですか、でもでもとりあえず引き分けにしないと視聴覚室がー！

俺は急いで放送室の隣の空き教室に向かう！

「朝日奈さん！俺と話しをグヘ!？」

「馬鹿馬鹿ばーか！何してくれてんのよ！」

「だ、だからってリュックを投げつけるなよ……」

教室に入ると同時にリュックを投げつけて見事に俺の顔面にクリンヒット、いやクリティカルダメージだよ!？」

「なんでなのー！なんで引き分けなのー！うええんー！」

「泣くなよ！なんか俺が泣かせたみたいじゃないか！」

「……てか引き分けって認めただな」

「ッ！」

よかったよかった！引き分けならお互いの賭はなしって話せば

「あなたのことだから引き分けならお互いの言うことを聞こうって言い出すんでしょ？」

「はい？」

朝日奈さんは制服のネクタイに手をかけシユルシユルシユル、と服とネクタイの擦れた音が聞こえた。

そしてシャツのボタンを1個1個丁寧に外していき…ひまりと変わらないぐらい、ふくよかな胸が俺の目に突き刺さる。

「ほ、ほらあんたのことだからえ、ええエツチな要求だったんでしょ？」

「……いやなんでそうなる！」

「だって私のことめちやくちやにするって！」

「言ってるよ！」

被害妄想がここまで恐ろしいとは今日をもって痛いほどわかりましたよ!?

「と、とりあえず服を着てくれ」

「……なに？ やっぱり私は体にも魅力がないの？ はは、だよ、少しでも期待した私が馬鹿でした。 恥ずかしくて死にたい」

か、勘弁してくれよー！ 俺が犯人みたいになるだろ!?

とりあえず朝日奈さんが着替えるまでは教室のドアとにらめっこしてやり過ごしていた。

「で、話の続きなんだけどさ」

「……なによ」

「いや俺もあの時は必死だったからあんな風に言っただけどさ…本当に引き分けて大丈夫か？」

あの時はほら、姉貴や先生にあんなにサポートしてもらったのに勝てなかったから最強の手段を使って引き分けにまでに持ち込んだが…

よくよく考えれば結構こすいことしてるよなー俺

「……別にいいわよ、勝てる勝負してたくせにこんな結果なんだから」

「あーそう？ なら引き分けてことで」

「でもひとつ聞かせて欲しい」

俺に聞きたいこと？ 一体何を聞きたいというのだろうか

「そこまでして視聴覚室を使いたい理由って何？」

「ツーそ、それは」

アサシンを見つげるため！なんてこと口が裂けても言えねー！

まあアサシン目的つてのもあるけど別の理由もある。ならそれを話せばいい、よな？

「……実は俺達サークル活動やっててさ、あの場所は活動するにあたって必要な場所なんだ」

「……………ふーん、あつそ」

「聞いたってその反応かよ」

ならなんで聞いたの!?

「てかこつちもそれ聞きたいんですけどー」

「ツ!」

「なんか夢がどうたらこうたらって」

「あーあーあ！ああー！忘れてなさい！今すぐ忘れなさい！」

「おおおおおー」

肩を掴まれ思いつきり揺らさせる。ちよつと気分悪くなりそうだからやめてくれいー！

「…………別に夢なんてみんなあるだろ」

「は、恥ずかしいから知られたくないの」

「夢に恥ずかしいもくそもあるかっての」

「ツ!」

つて夢を捨てた身の俺が言っても説得力ないと思うけどアサシンなら多分こう答えてくれるだろ、だから俺は朝日奈さんにそう答えたんだ。

「わ、笑わない?」

「笑わないつての」

なんなら俺の昔の夢の方が誰かに笑われそうだったの

「……………せ、声優になりたいの」

「ツ！なるほどだから視聴覚室を奪われたら困ると」

「……………」コク

確かにあそこならボイストレーニングとか声優になるにあたって必要な練習?というのとはできると思う。

待って、それ放送室でよくね?

「あと昼休みにご飯食べる場所がなくなる」

「……放課後、1人で部活動の生徒の声も聞かなくていいから居心地がいい」

「なのに……うう、奪われたら」

あーまた入っちゃった負のスイッチ!?

「あのさ、今回引き分けだろ？俺達もずっと使うわけじゃないしお互い上手く使えるように日程調整しないか？」

「……！放課後使えない日がある」

「うう、な、なら！」

えーい！もうこの方法しかない！説明は後ですから許せ！燐子さん！モカ！

「俺達のサークルに入れ！なら視聴覚室も使いたい放題だろ？」

「……私なんか入っても意味ないし」

「安心しろ、俺も今はあんまりいる意味感しない」

とは言ってるが今は違う！この数週間テスト勉強の休憩中はどうやればうちのサークルの作品を沢山買ってもらえるか色々策を考えてたからな！

場所を守ってから報告しようと思ってたからやっとな報告できる！

「それに俺達結構アニメ見てるしお前のその声優になるためのアドバイスとかできるかもしれないぞ？」

「ツ！な、なら少しだけ参加しようかな」

「いや待って、本当は視聴覚室に連れ込んで私をあんた達男共の女にしようって魂胆なんじゃ……！」

「安心しろ、他のメンバーは女子しかおらん」

どうやったらその思考にたどり着くのか教えていただきたいよ!?

「まあ一度行ってみて嫌だと思えばいいし？」

「……その時は視聴覚室使えないけどねー」

「ツ！くっ！神崎レイ！覚えてなさいよ!!ばーか！あーほ！間抜けー！」

「……え!?!」

ちよつと煽り文句で言っただけなのにそこまで言われるのか?こ

とどごとく俺のことを罵倒しながら出ていきやがったな!

「……………ごめん、言いすぎた」ヒョコ

「ツ!いい、いや大丈夫」

出て行った思ったら戻ってきてドアからヒョコつと顔を出して
言ってきた。めちやくちや可愛ええ

「リュック忘れてたから取りに来た」

「お、おう……………って、保健体育のテストじゃん」

さつき投げられた際に中身が飛び出していたようだ。ちようど同
じ点数で勝敗を引き分けにした保健体育のテストが床にあったもん
だから拾って見てしまった。

「あれ?問1の回答アじゃね?」

「何言ってるの?ほら答えはイよ」

模範解答を俺に見せつけそう答える。

あれ…?待つて!ちよつと待つてくれ…!

「ツ!あんたまさか!」

「ち、違うー!そんなわけあるか!そ、そんなわけ」

恐る恐るリュックの中から自分の保健体育のテスト用紙を取り出
し問1の答えをしてみる。

「ツ!嘘だろ!嘘だと言ってくれー!!?」

俺のテスト用紙には問1をアと答えて丸をいただいていた。

そう、先生が誤って丸をつけてしまったってことになる。

よく考えよ?本来点数なんて入らないんだ、そう間違ってるから
ね!だから…マイナス1点

『……………』

「はは、朝日奈凜さん、いや朝日奈凜様」

「なに」

「……………今回は引き分けてことで勘弁してやるよ」

「何言ってるの?」

ですよねー

「頼む!引き分けにしてくれえええー!!」

体操座りをしている朝日奈凜に対してレイはまるでパンツを覗き

込むかのような勢いでしやがみこみ土下座をしながらそう言うのであった。

神崎レイ、保健体育の点数は89点に減ったのであった。

女子に襲われそうになったことはありませんか？

羽丘の最上階へと続く階段をゆっくり、ゆつくと一歩ずつ確実に踏み間違えないように上がっていく

「……………ふう」

小さく息を吐き出してから視聴覚室のドアへと手を伸ばしバン！と大きな音を立てながら開けた。

「よし！みんないるな！」

「れーくんから呼び出すなんて初めてだよね〜」

「一体何の話でしょうか」

「……………手短かに」

モカ、燐子さん、そして…朝日奈凜の3人が既に視聴覚室にいた。いたと言うより放課後視聴覚室に来るように俺が頼んだんだ。

「お前らに大切な話があるからよーく聞けよ」

そこで俺は今までのことを話した。

朝日奈凜と視聴覚室を巡る勝負をして無事に負けてしまったことを

そして！そこから朝日奈凜に何度も、それは何度も土下座をして何とか視聴覚室を守り抜き尚且つ彼女をサークルに招き入れることに成功した話をした。

「まあなんやかんやで視聴覚室は守られた！さあ！俺達のサークル活動を始めようぜ！」

「だから凜ちゃんがいるのか！納得」

「凜ちゃん……名前が被ってるですって!？」

「よろしく」

い、いやー本当によかった。あの後めちやくちや土下座して頼みまくって何とか朝日奈凜をサークルに招き入れることに成功して凌いだ。

あの時の俺はプライドなんて言葉なんてなくただ泣きながらすがっていただけだったのは内緒だ。

「それでだ！朝日奈さんに夢があっただなその夢のために俺達は」

「ちよつと!?!何勝手に言ってるの!?!」

「な、なんだよサークルに参加するにあたって俺達がアドバイスするって言っただろ?」

「だ、だから急すぎるわよ!」

『……………』

「はっ!」

この時凜は思った。

「(や、やってしまった…!)」

と、レイには自分の本当の顔がバレてるが同じクラスのモカには知られていなかった。

にもかかわらず今回このような態度をとってしまったものだからもう引けなくなっていた。

「まあいいさ、とりあえず俺の話聞いてくれ!」

「あ!今日ここに呼んだ理由ですな!」

「え!?!私の話終わり…? あーはいはい、所詮オリキャラのモブは黙ってろつてことね、死にます」

「おー凜ちゃんが見聴覚室の隅っこに行っちゃった」

朝日奈さんを見無視して話をするのは心が痛くなるからちゃんと席に連れていき俺は話の本題に入る。

「で!だ!テストを乗り越えた俺達にコミフェスまでの道に邪魔するものなんてない!」

「これから遅いがラストスパートかけてやってくぞ!」

月は6月、もうコミフェスまで後2ヶ月もない。

絵集を販売するなら印刷しないといけないから結構時間がーま、まあその点は俺が何とかする!

「まあ邪魔するものならまだ沢山あるけどねー」

「…………地獄の宿泊研修、ぼっち天敵の学校行事が残ってるわよ?」

「そう言えば羽丘は2年で宿泊研修に行くんでしたね!」

わ、忘れてた! そう言えば宿泊研修なんてあったな…くっ! この大切な時期に2泊3日だっけか? 抜け出さないといけないときついで

「と、とりあえず俺の話聞いてえー！」

「それで話って何？」

「ああ、話すぞ」

今の俺達は義妹の四姉妹、春乃、夏美、秋音、冬香、それぞれ名前についている季節とは逆の背景と共にその季節にあった服装をした彼女達を描く

これが今俺達がしていることだ。

「そこでだ！これにあるものを付け加える！」

「あるもの〜？」

「そう！SSだ！」

SSとはショートストーリーの略、つまりこの絵と一緒にSSを付け加えたやつを作る！

「簡単に言うとなSSイラストメイキングブック的なやつを作っただけだ！」

『おー!!』

まあブックと言っても今から頑張っても1人1枚しか絵は書けないけどな！

ほ、ほらーそこは初参加だし？多めに目でやってくれよ！

「でも1つ問題がある」

「凜ちゃんどーしたのー？」

「……絵は白金さんが書くとしてSSは誰が書くの？」
『あっ』

確かにそう思うよな、燐子さんは絵を書くのでいいっばい。モカは…も、モデル役でいいっばい。朝日奈さんは…自分のことでもいいっばい。

となるの残る人物は？

「俺しかいないよなー!!」

「俺が書く！何安心しろ！昔小説家に憧れて色々書いてたりした！」

なんだろう…自分で言っただけで恥ずかしくなってきたぞ!?小説書いてたとかいやそれ恥ずかしいだろ！

だってよく言うじゃんか！売れる前の小説家が自分の作品を誰か

に読まれたら恥ずかしくすぎるってやつ！あれ？知らないの？

「なんか私嬉しいです」

「ツ！へ？」

「いやごめんなさい…でもほら、レイ君っていつもどこか退屈そうにしながら私達を眺めてる時間が多かったから、その…」

「……燐子さん」

燐子さんは何となく俺の気持ちってやつを知ってたのか。

モカが時々やらかしたりしたら俺は止めに入ったりしていた。でも何もないときは頼ずえついで燐子さんとモカを眺めているだけだったんだ。

「れーくんから積極的にやろうって言ったの初めてだしね、モカちゃんはれーくんの意見に賛成だよ？」

「………モカ」

お前が露出狂の変態じゃなかったら惚れてたかもしれないけど俺にはアサシンがいるからそれはないよねー

「……なに、あんたあんだだけサークルに誘ってたのに何もしてなかったの？」

「う、うるさいな!?今日から本格的に始まるんだよ!」

確かに俺は必要とされてない人物だったが！ショートストーリーを書くのにあたって重要人物へとランクアップしたんだ！

「レイ君ならきつとやれます！私も頑張って絵を描きますから!」

「ツ！ああ!」

これからだ！これから俺の本当のサークル活動は始まる！

そして！アサシンが来て！いやもういるかもだけど、そのアサシンかもしれない人物と頑張つて、そしていつか結ばれて…

えへ、えへへ、エッチなことできるのかな!?

この男はすました顔をしながらこんなことを考えていたのである。

「いよっーし！早速作戦会議へと洒落こもうぜ!」

「あ、私今からRoseliaの練習あります」

「モカちゃんもバイトー」

「え？あ、えつとー私も用事が…?」

「なっ!」

えーまじですか?このタイミングで?

「お、おいおい今からやろうって時にこれかよ!」

「だって元々今日は活動予定日ではありませんでしたし?」

「すぐに話が終わるって聞いたからきたんだよ?」

「……上に同じ」

おい待て上に同じってなんだよ、そこは右に同じだろ、その誰かのためにわかりやすく言うのやめなさい!

でも確かに俺はすぐに終わるから集まってくれ、なんてことを言つて今日みんなをここに呼び出したんだった。

「本当ごめんなさい!明日は絶対一緒に活動しましょうね!」

燐子さんは急げ急げと言わんばかりにリュックを手に取り視聴覚室を後にした。

「じゃああたしもー凜ちゃん途中まで一緒に帰ろ?」

「ええ?私と?こんなみそぼらしい私なんかと歩いていたら青葉さんがハブられますよ?はは」

「んー例えハブられても絶対いなくならない友達がいるから大丈夫

?????」

朝日奈さんはわからないよう頭を傾げていたが俺にはわかる。

あの仲良し幼馴染集団のことだ、彼女を嫌うなんてことは死んでもないだろ

ま、まあ露出狂のことはないとみての話だ。

話したら、んーどうだろう?

「さあさあーレッツゴー」

「ツ!ちよ、ちよつと待って!」

朝日奈さんはリュックを取ったあとついでは知らないが俺の方にやってきて

「……約束、忘れてないでしょうね」

「ツ!あ、ああ」

「そつ、ならまた」

そう答えた後朝日奈さんはモカの所に行き内心ワクワクしてそんな顔で一緒に視聴覚室を出て行った。

多分だけど誰かと一緒に帰るのが初めてで嬉しいんだろう。

「さーてと、俺も帰って早速書き始めるか！」

一人で書くならここより家の方が捗るだろ

と思った俺は視聴覚室を後にし荷物を取りに教室へと向かった。

階段を降りて2階の我がクラス2年A組の前につき気づく

「トイレトイレ」

我慢しているとなんか寒気が走ったようにぶるって来ないか？男子のみんななら何となくわかってくれるだろ

「って何を言ってるのやら」

トイレにて用を足ししっかりと絞り出す。後からおっかけ残尿的なやつが来てみる、パンツの中があらまー酷いことに

手を洗い特別誰かと会うわけでもないのに前髪を納得するまでいじり整ったところでトイレから出る。

「あ、そう言えば買い出し行かないといけないんだった」

これは話を書く前にひと仕事やらないと行けませんな

そんなことを考えながら教室のドアへと手をかけた瞬間

「……はあーいいに匂い、ヤミツキになりそう♪」

「ッ!」

な、なんだ？誰かまだ教室に残っているのか？

余談だが俺のクラスで部活に所属していない生徒は俺、モカ、蘭、つぐみ、そして遊、優亜、由明日の7人、つぐみに関しては生徒会だから部活に入れないってのが正しい

モカはバイトで帰った。蘭は？……知らんな、だったら三馬鹿？いやいやあの声は女子の声だった。

「(だとすると本当に誰なんだ?)」

ここで喋ったことのない生徒と放課後教室で一時的ではあるが一緒にいるってシチュエーションはチキンの俺にとってきついろだ。

「(できれば知り合いであってくれ……)」

祈るようにドアからぬるりと顔を出し教室を除く

「ッー」

「ふ、ふふ…はあああー！レイ君の体操服、はぁいい匂い」

え、ええええええええええええ!?あ、あれって!?

「(ひ、ひまり…!だよな!?)」

放課後、夕焼けが差し込む教室にて男子生徒の体操服の匂いを嗅いで興奮している女子生徒、もとい上原ひまりこと俺の幼馴染の姿があった。

な、なんで?なんでひまりが俺の体操服の匂いを嗅いでいるんだ!?しかもいい匂いってなんだよ!確か今日は6時間目が体育だった。サッカーをしたもんだから沢山汗かいたし…その汗の匂いがいい匂いだとひまりは言っているのか!?

いい、いやいやない!そんなわけないだろ!女子つてのは汗臭い人嫌いだろ!

「…?!?!?!ああ、好き、好き好き、レイ君………大好き」
「ッ!?!?!」

!?!?!好き?大好き?

この時俺の頭の中ではあの考えがふと湧いてきた。

あれ?ひまりがアサシンなんじゃね?

と、いや考えろ、好きって大好きって言ってんだぞ?……もうアサシン確定だろ!?

ひまりがアサシン…?さすがにこの状況から他の人がアサシンではないか、なんて考えは俺の頭の中には浮かばない。

「(いや不安が少しでもあるのなら確かめればいい!-)」

とは言ってもだ、この状況で

「よっ…ひまり!…ところで俺の体操服ってどんな匂いがするの?」

なんて言いながら入れるわけないよね!

どうやって入ろっか…と数分ひまりをずっと見ながら考える。

「ずっと嗅いでても飽きない匂い…はあああ!なんでこんなにいい匂いな!」クンカクンカ

だ、ダメだ。ひまりのやつアニメとかでよくあるような目がハート

になつてる状態だ。

「ツ！そうだ、誰もいないし着てみるのも…」

「ツ!」

ひまりはブレザーのボタンを外し次にカッターシャツのボタンに手を伸ばした。

「1つずつ丁寧とは言えない手つきで外している様子のひまりは、ひまりの大きい胸が見えてあーあーあーあああああ！」

「見てられなくなった俺は逃げるようにその場を後にしたが

「いやダメだろー!!?」

「ツ！ええ!?!れ、レイ君!」

「……あ」

流石にそれは超えては行けないものだろと思つた俺は後先考えずに教室のドアを開けひまりに話しかけていた。

「もーうなんだレイ君か、驚いて損したよ」

「……………」

「……待つて…！レイ君!」

「こいつは本当にドがつくほどの馬鹿だな」

「……おい、俺の体操服で何してたんだよ」

「ツ!」

え、えーい！ここはあのDSモード的なやつで乗り切るしかない！ここで聞き出してひまりがアサシンならアサシンとしてこれから上手く付き合っていけばいいだろ!」

「……………」ガチャ

ひまりのやつが逃げれないようにドアに鍵をかけ俺はゆっくりひまりに近づいていく

「このはだけた姿のひまりに近づく俺の顔は平常心を装っているかもしれない。だが心臓はもうバクバクだ、なんせあのおっぱいが目の前にあるんだぞ?」

興奮しない男子なんていないよな!」

「ほら言えよ自分の口で、俺の体操服使って何してたんだよ」

「……………」匂いを嗅いだの」

「……そっかそっか、だってお前」

「そう！……ここだ！……ここだ！」

「好きだもんな？」

「ツ！……き、聞いてた？」

「ああ聞いてたよ、好き好き、大好きーってな！」ドン

ひまりを壁際に押し寄せ秘技壁ドンをする！

身長差ってやつで俺は上からひまりを見落とす、上から見た谷間に
見とれて少し顔の表情が崩れたが何とか立ち直れた。

「俺はお前の秘密は前から知ってたんだぞ？」

「……………」

な、なんだ黙り込んで……まさか素直に受け入れたってところか？

え？何、ひまりがやつぱりアサシンなの!?

「なら好都合！」

「ツ！へっ!？」

普通なら俺がひまりを押し倒すどころかだがその逆、ひまりから俺
が押し倒されたんだ。

「ちよ！ひ、ひまりさん!？」

「えっへへ！レイ君を独り占めだ♪」

ひまりのやつは大きな胸を俺の前にチラつかせながら両手で俺の
手を押さえつけ抵抗できないようにしていた。

「でもレイ君がまさか私の秘密を知ってただなんてね」

「ツ！ああ！……こんなことしてないでどうどうと話をしやがれ！」

お前がアサシンだつて！俺が好きだから押し倒されたんだつて！
なあ！そうだよな！そうだと行ってくれ！

「そう！私レイ君の匂いが大好きなの！」

「……………」

ゾクゾクしたような顔でそう言うひまりはペロリと舌なめずりを
していた。

「ひ、ひまりさん？す、好きだったのは？」

「だからレイ君の匂いが好きなんだつて」

「……………ほら今こうしてレイ君の匂いが」

首元に顔を近づけクンクンと音が聞こえるぐらいの勢いで匂いを嗅いでいた。

「ッ!？」

それだけでとどまらず首元に自分の唇を近づけたと思えばキスをしてきた。

それはもう随分と長くだ、多分だけど俗に言うキスマークってやつができるほどの長さ

ひまりの鼻息がさつきよりもだんだん酷くなっている…：ような気がする!？」

「ちよーひ、ひまりお前いい加減に!」

「もう黙ってて!」

「うが!」

お、おっぱいが!ひまりのおっぱいが顔に!顔に押し当てられて最高かよ!

って違う!早く抜け出さないと最高かよ!？」

つ、次は耳を、耳を甘く噛んできやがった!え?なに!何がしたいんだよこいつ!？」

「ひま、ひまりーも、もういいだろ?ごめんって俺が悪かった!悪かったから離してくれ!」

俺が何したって言うんだよ!なんで謝ってんだよ俺は!？」

「まだ、まだまだよまだまだ!これからが本番でしょ?」

「ッ!ひ、ひまりさん?い、一体何を?」

「だって放課後で教室で2人つきりなんて…：もうやるしかないよね!？」

ええええええええ!?!匂いが好きなだけなのになんでエッチなことするの!？」

いや確かに年ごろの男子はエッチなことがしたいのかもしれない、でも女子は?女子もそうなんですか!？」

お、俺はさすがに初めてはアサシンがいいと思うんですよ!？」

「だってエッチなことしたら沢山汗かくじゃん!そ、その匂いを…!」
「ッ!今気づいた!」

俺の部屋に来たがってた理由！そして大きな物音を立ててた！

「お前俺の部屋で何をしてた！」

「……レイ君のパンツの匂いを嗅いでた」

「……！」

じよ、冗談じゃない！モカと比にならないレベルでこいつの方が異常だぞ?!まだモカが可愛く見える！

いや……もしかしたらモカも内心こんなことしたい欲があるのかもしれんが

「鍵まで閉めるなんてレイ君もノリノリじゃん」

まさか自分で自分の首を絞めることになるとは……!

ひまりは完全にブレザーを脱ぎ捨てカッターシャツ一枚になる、が胸元のボタンは外れていて俺に跨り上から見下ろす顔は乙女の暴走顔、とでも言おうか、やる気に満ちた顔だった。

「ツ！ま、まて！ひまり！俺は初めてなんだぜ？こ、こんなことって！」

「大丈夫、私も初めてだから！」

「だ、だったら尚更大切にしないと、な！」

「レイ君にならあげてもいい！」

「ご、ゴムないよ!?!妊娠したら高校生活終わりだぞ!?!」

「その時はレイ君と結婚！」

頭がくらくつと来て一瞬意識が飛びそうになった。

だめだ、このバカはもう考えることを放棄している。考えずに、バレたなら好都合と考え俺に遠慮する気なんてこれっぽちもなく襲う気だ！

「いいからするの……!早くズボン脱いで！」

「待って！俺の息子は恥ずかしがり屋なんです！いつも皮かぶってるんです！」

「大丈夫、元気になったら立派な亀の頭出してるはずだから！」

女子がそんなことを言っではいけませんよ!?!亀の頭なんて俺は知らない！持ってないと言わせてくれー!!

あと皮かぶっているのは嘘なので信じないで！

「そうだ！そうだよ！息子の自己紹介がまだ！」

「ぼ、僕はちん…ぼ、僕初めてだから緊張するよははっ！」

某ネズミのようなハスキーボイスでこれまた苦し紛れの自己紹介をするもひまりは聞く耳を立てずズボンを脱がそうとベルトに手をかける。

「それに俺初めてだから上手くできないって！だから許して！」

「大丈夫、優しく包み込んであげるから！」

もうダメだ！それはアウトですよひまり！

「ッ！そうだ！ズボンならチャックが！」

ひまりがズボンのチャックに手を伸ばし素早く開け社会の窓が全開となり俺の息子の最終防壁パンツへと手が向けられる。

こ、こんな訳分からんできごとで童貞を失っては困る！

なにか！なにかないか！なにかこの手を逃れる方法は！

うおおおおお！考えろ俺の脳細胞！学年3位は伊達じゃないぞ！

「…ん、これだ…！」

女子一人なんてガンダムが、いや俺一人で押し倒してみせる！

「どっせついやあああー!!」

火事場の馬鹿力、と言う頭脳関係ないパワープレイで逆に押し倒した。

その際にさりげなくひまりのおっぱいを触ってしまったがモカのと比べ物にならないほど柔らかくそれはもう言葉では言い表せれないほど気持ちいいものだった。

が！それとこれは別だ！とにかく今は俺の童貞の危機！早くここから逃げ出さないと！

「ちよつと！レイ君！なに逃げようとして」

「ッ！これでもくらえ！」

「はっ！レイ君の体操服！」

体操服を広げひまりの頭からズボりと無理やり着させた。手がふさがっている今がチャンスと見極めた俺は急いでリュックを回収しドアを開け教室を後にした。

「じよ、冗談じゃないぜ全く！」

逃げるように下駄箱に行き自分の靴を回収して履こうとした時

「待ってよレイ君ー!」

「ひっ!」

他の人達から見れば可愛いひまりが笑顔で手を振りながら、そして大きな胸を揺らしながら俺の元に走ってきけるように思えるだろう。

しかしあの出来事があつたあとの俺は普通の人達とは違う意味にとらえてしまう!

「(に、逃げなきゃ喰われる…!)」

あんな顔をしながら頭の中では俺とエッチなこととしてその匂いを堪能したいと思ってるに違いない!

大体匂いを嗅ぎたいならエッチなんてしなくてもいいだろ!?

なんだよ! お前ビッチじゃん! くそビッチじゃんか!?! 幼馴染がビッチなんて恥ずかしくて誰にも言えませんよ!?!

「い、いいやあああー! 来るぬうあああー!」

「ちよつとーえへ! 待ってよー!」

俺はビッチと追いかけてごっこをしながら家に帰り、帰宅と同時に鍵を閉めて部屋に逃げ込んだ。

「レイー私そろそろ腹減ったんですけどー死にそうなんですけどー」

「…………ちよつとレイ?」

漣奈がレイの部屋のドアを開け中に入ると

「……………、怖い、女子怖い…!」

「ぬはっ!」

布団をかぶりベットの隅で体操座りをしているレイを目撃した漣奈は弟の影響か訳の分からない言葉を発していたのであった。

体操服を変なことに使われたことがあります？

結局全然眠れなかった。

「あー頭いてー」

ガンガン来るが学校には行かないといけない。何故なら俺は密かに大学に行くために推薦を狙っているからだ。

本当はめちやくちや学校に行きたくない、行ったらひまりにあって何をされるのやら…

いや皆、巨乳の女の子に襲われるなんてなんてうやらしいやつなんだって思うかもしれない。

でも怖かったんだよ!?!ほら！男子なら自分からリードしたいだろ!?!

「いてて…」

頭を押さえ階段をおりて朝ごはんを作る。下に着くとなんか姉貴いたしこれは作らないといけないと思っただから作る。

昨日買い物を買ったもんだから数少ない食料でやりくりしないといけない。冷凍の魚でも焼いて食べるか…解凍してないけど食べるだろ。

流石に弁当を作るまでの気力はない。今日は学食で済ませるとしよう。

「姉貴ご飯できたぞー」

「……………」

「……おーい姉貴ー」

「……………」

「おいー」

「はっ！ごめんごめん、なに？」

「飯」

「……………」

まったく頭痛いのに大きな声出させるよな！

姉貴はリビングのソファに座りノートパソコンと睨めっこしながら時々うねり声を上げながら作業をしていた。

あれだ、小説を書いてるんだよ、なんでも原作の締切が急遽早くなつたところないだ話を聞いた。

アニメ化が決まりアニメ放送中少なくとも一巻でも発売しないといけないと言われたらしくてただいま急ピッチで仕上げているようだ。

「まあ自分で納期決めたとか言ってたけどな」

サボると思うから早めにしよっか！うん来週提出する！的なことを言っただけ今焦っているのだ。

「はは、あたしなんで小説なんて書いてるのかな」

「小説家だからだろ」

「……………漫画家だよ」

「……………漫画家も話は考えます」

焼き魚と同じような目をした姉貴が魚をつつくりながらそんなことを言っていた。

俺は味噌汁をすすりながら適当に返事をする。

「あれだ、結弦君が悪いんだ」

「納期を決めたのは姉貴だろ」

「……………違う、私は悪くない、世界が悪いんだ」

「……………」

「あたしに小説を書かせる世界が悪いんだ……！」

「おんどりや世界！お前はあたしを殺す気か!？」

「ぐちそうさまでした」

こう変なスイッチが入ってる時はあまり関わらない方がいい、八つ当たりされる時があるからな

まあ百歩譲って八つ当たりするのは許してやるけど……正気に戻った後が、まあめんどい

「んじや俺そろそろ行くわー」

「はっは！巨乳死すべす！」

怒りの矛先が巨乳に向いちゃってるよ

俺は家にいたらいたらで居心地悪いからいつもよりかなり早く家を出たのであった。



気だるそうに肩にリュックを掛け鳥のさえずりをBGMにして歩いていた。

すがすがしい朝なのに俺の心はまったく晴れていない、この青空とかけ離れていますよ

「レイ君！」

「！」

急に名前を呼ばれたもんだから息子を押し声がした方に顔だけを向ける。

あいつだったたら息子が襲われちゃうから抑えたんだよ！

「レイ君今日は早いんだね！」

「な、なんだ…つぐみか」ホッ

よかったー！あいつじゃなかった！あいつというのは察してくれー！

「レイ君首元どうしたの!？」

「ッ！へ、へっ!？」

「昨日怪我したっけ…いやしてないよね？」

「う、うんしてないしてない！これは、その…」

昨日の首元にあいつがつけたキスマークが取れてなかったのか！朝確認するの完全に忘れていた…！

「そう！蚊に噛まれたんだ！」

「…この季節に蚊？」

「そうなんだよ！いや俺O型だし？か、噛まれやすいんだ」

「んーレイ君がそう言うならそうなのかな？」

！
な、何とか誤魔化した！つぐみが純粹で信じやすい子でよかったよ

俺は一部だけ赤くなっているのを隠すためにあえてそこだけ痒いようにかきむしり目立たないようにカモフラージュ？した。

「つぐみちゃんおっはよー！」

「あ！日菜先輩！」

「おや？彼氏君とデート中だった？ごめんねー♪」

なんとなくだけど謝ってる気持ちがおに見えるのは気の所為だろうか

「もう日菜先輩！茶化さないでください！」

「だからごめんってーつぐみちゃんは本当に面白いなー」

なんだろう、この人どつかで見た覚えがあるぞ？

「あれ？君は確か…テスト負けた人！」

「ぎくー！」

「ねえなんで負けたの！結構勉強してたんだよね！なんで負けたの!?!」

「ま、負けてないから!?!引き分けになったから!?!」

「えー！そうなの！なんで引き分けになったの!?!」

「引き分けは引き分けなんですよ！」

こ、こいつ！無自覚に人を傷つけてきやがったぞ!?!

しかもなんで負けたの？を2回も言ってきたぞ！

だが残念、負けてないんだよなーこれが！

「日菜ちゃーん！んんん!!」

「ッ！お母さん！」

近くのパーキングエリアから見覚えるのある少女が走ってきたぞ、あの顔は何回も見てるから忘れるわけない！

「弁当忘れてるぞー！」

「えー今日は学食で済ませるって言ったじゃん！」

「外食ばかりしてたら体壊すぞー！最近紗夜ちゃんも日菜ちゃんもポテト食べ過ぎー！禁止令だすよ？」

「あたしはいいけどお姉ちゃんが悲しむよ？」

「……………え、えつとー？」

つぐみのやつは何が起こってるのかわからない様子で声音を出した。

ま、まあ普通の人が見たらそりや驚きますよね…

「おやレイ君じゃないか！隣の子は…彼女さんかな!?!」

「違います、あとおはようございます」

「うん！おはようだ！」

「あれ？お母さん知り合いだったの？」

「よく話をするだろ？あのレイ君さ」

よく話をする!?そ、それは一体どんな話を!?あと氷川さんの双子の娘さんって羽丘の生徒会長だったのか!

「レイ君って君かー!よくお母さんから話を聞くよーなんでもその歳でお母さんの職場で」

「い、いいから!その話はいいいから!」

「？」

つぐみにあのことを知らせるのは少し恥ずかしい!あと話の展開的にまだ早いから後でね!

「あ、つぐみちゃん紹介するね!あたしとお姉ちゃんのお母さんだよ!」

「どうも、母です!」ドヤ

んー胸を張ってもない胸、この人はこの胸から出る何かを飲んで成長したんだな、うんうん

って俺やば、何言ってるんだよ!?

「え?日菜先輩私の事からかってますか?……妹さん、ですよね?」

「違うよー!お母さんだよ!」

「妹ですよね?」

「だからお母さんだって!」

「……嘘だ!」

これが本当なんだよ、俺もこの人がいい歳した子持ちの人だと聞かされた時すぐに信じるこゝとなんてできなかつたよ

免許書見せてきたときは本当にビビった。冗談抜きでまじでビビった!世の中にこんな人もいるんだと知れた瞬間だったよ

「本当さ!つと、そろそろいかないと!今日は朝から会議があるから出席しないと!」

「レイ君!滯奈によく伝えて!それじゃあ!」

ピューんと近くのパーキングエリアに向かい金を入れたあとひとつの車が出て行った。

「それじゃあ君達!遅刻しないようにね!」

「……はい」

誰も返事をしないから俺が返事をした。

てか誰も思わないの？あの人幼女だぞ？アクセルとブレーキに足届かないだろ!？」

「お母さんの車は車椅子専用車だよ？」

「なるほど」

瞬間に納得してしまう俺は冴えてるのでないかと思ったが考えればすぐにわかることだともわかってしまった。

「さて！あたし達もお仕事あるしぱつと終わらせますか！」

「ツ！はい！」

「おー頑張ってください」

俺は生徒会入ってないし？仕事なんてないからな！ゆっくり登校させていいいただきますよ！

「うあああああ！れ、レイ君んん!!」

「へわ!?ゆ、結弦さん!？」

氷川さんの次は遠くから結弦さんが俺の名前を叫びながら走ってきた。

「今から来る君の姉さんは本来の姉さんじゃない！」

「あーまたやったんですか？」

「またとはなんだ！少し誤字を指摘しただけだぞ!？」

「結弦くんー!」

「あああ！ぼ、僕はこのまま神奈先生を本社まで走って連れて行くからー!」

「あ、はい」

「当分箱詰めにする予定だから衣服とか今度持ってきてくれ！それじゃあああああ!!」

「待ちやがれ結弦くんん!!」

一体どつちが作者で編集者なのやら…それに結弦さん、朝早くからご苦労様です。

俺は遠くを走る結弦さんと姉貴を見ながら近くの自販機でココアを買ったのであった。



学校に着いたはいいものの俺はそう簡単に教室に入れるわけではない。

いや入れるのだが入りたくないのだ、何故ならあいつが…ひまりがいるからだ。

会ったらどうなるのやら、流石にみんなに見られてる前であるようなことはしれないと思うが怖い。

「(ここはチャイムが鳴るまで男子便所で過ごそう!)」

そう固く心に誓い俺は暇つぶしとして社会の教科書を読んでいた。
キーンコーンカーンコーン

朝のHRを知らせるチャイムがなり勢いよくトイレから飛び出す。
そして!

「おつはよーごいませーす!」

「おう神崎、遅刻ギリギリだぞ」

「す、すみませんー気をつけませーす」

ギリギリに来ることでひまりは俺の話しかけることが出来ない!
すなわち避けられるってわけだ!

完全勝利!俺の勝ち!なんで負けたか明日までに考えておいてください!

この後の10分休憩も柊優と連れションすればやり過ごせる!昼休みも男子便所にこもる!

おお!男子便所まじ強くなえ!?俺とお前は今日から親友だ!

「上原ー、おい上原ー?」

「先生くひーちゃんなら風邪引いて休んでませーす」

「つたく何やってんだか…他は?」

え?ひまり…休み?

な、なんだよ…警戒して損したー、丁度よく風邪引いてくれて助かったよ

「(いや待てよ)」

そう丁度よく風邪なんて引くだろうか?

てか…普通に俺と顔を合わせるのが気まずいからサボった可能性

の方が高いんじゃないか!?

「(か、考えすぎか?でも...)」

あーくそ!なんで俺があのかつ変態野郎のことを気にしないといけないんだよ!?

休んでくれたならありがたい!

あーはいはい清々しましたよ全く!これで今日1日は平和な時間を過ごせますよーだ!

午前の授業が始まると同時にレイは安心したということもあり深い眠りに入ったのであった。

◆◆◆

昼休み、それは祝福のひとつ時

「いただきますーすー!」

食堂にて唐揚げ定食を頼んだ俺は大きな唐揚げを一口パクツとたいらげっていた。

「寝てたくせによく食うなー!」

「ま、まあ色々あったんだよ!そう言わないでくれ!」

「あの授業態度で学年3位、か」フツ

「言ってる」パク

授業も大切だが勉強も大事!それにテスト明けの授業だからまた後半で教えてくれるし?今のうちに休んでおかないと損だろ!

「はー食った食った!これで午後は頑張れる!」

「また寝るなーよー」

「わかってるって」

爪楊枝で歯に詰まった物を取り出しポケットティッシュに丸めて近くのゴミ箱に捨てる。

「お前これからどーすんの?」

「……あー教室戻る、柊優は?」

「俺はちよつと用事が」

「ほー女か?」

「まあーな」チラ

ラブレターを見せつけながら柊優は俺にそう言ってきた。

昔の俺ならこのリア充が！なんてことを言ってたと思うが今は違う！

何故なら俺神崎レイはアサシンの言う未来の彼女がいるのだ！

まだ見つけていないけど必ず見つけ出す。それまではチョメチョメみたいなのはなしだけど彼女ができるというだけだけど生きる上でいいモチベーションになるんだよ！

「はあ、また振るのか？」

「んー可愛かったら考える」

「あつそ、とりあえず嫌われろ」

「はいはいじゃーな」

あいつの考えるは毎回信用ならん、まあ柊優はあの見た目だし結構好かれるもんな

でも振られる女子も可哀想だよな…前にちらつと聞いたが記念で告白するとかわけわからんこと言っている女子がいたし？モテル男は大変ですな

柊優と食堂で別れて俺は一人で教室に向かった。

今日はひまりもないしモカに今後の話でもしておくか

サークル活動において俺がSS（ショートストーリー）を書くことになったが昨日は一向に書けなかったからな

それにあんなことがあったんだ。で済まされる話じゃないよな…とりあえず苦戦している風に話して…謝罪の一言でも言っておくか
教室の前につきドアを開けると

「こんにちはレイ君♪」

「ッ！ひ、ひひひひまり!?!」

「レイ君に会いたくなって来ちゃった!」

「ひっ!?!」

急いで教室から抜け出そう後ろに振り向き走り出そうとしたその時、俺は何者かにぶつかってしまった。

「いつ！ッー、なんだよレイ！危ないだろ？」

「巴!?!す、すまん！それより俺は!」

「レイ君!どこ行くの?」

「ひょ!?」

ひまりに肩を捕まれ逃げられない状態になってしまおう。こゝこゝから抜け出すには至難の業だぞ!」

「おー! ひまり! お前来てたのかよ!」

「うん! さっき来た!」

「ツ! ちよ、ひ、ひまりさん?」

ひまりは徐々に自分の胸を俺の背中に押し当てるように近づき始めた。

背中に柔らかい物が当たっている。いや押し当てられている…!

あとなんか耳に息吹きかけくるし…ツ! 寒気が俺を襲ってくる!

「……………」

「と、巴?」

「へっ!? あ、いやーそのなんだ! お前らなんか少し距離感縮んだな!

あはは!」

「そう? これぐらい普通だよー」

「ツ!?」

さらに押し当ててきやがった…。

お願いです巴さん! 俺を助けると思ってた何かしてくれ!

「そうだ! あたし先生に次の授業の準備をするように頼まれていたんだった!」

「ちよっ! と、巴ー」

俺の声は届くことなく巴は何処かへと行ってしまった。

頼むから俺を一人にしないでくれー! なんてことを理由なしで言うことはできない。

「それじゃーレイ君、2人つきりになれる場所に行こっか!」

「あ……はい」

まずい、まずいまずいかなりまずい! まさか普通にこんな面接してくるだなんて思いもしなかった!

巴だけだったからか!? 他の人達もいたらこうはならなかったのか!?

空き教室に連れていかれて身構えるようにしていると

「はいこれ、昨日忘れてたよ？」

「ツ！お、俺の体操服？」

「流石に教室では返せないよー！」

「……はは、だよね、じゃあ俺はこれで」

「待って」

で、ですよねー！そう簡単に上手く抜け出せませんよね！この流れならワンチャンいけると思ったのに無理だったか！

「ツ！お、おい体操服に変なシミついてるんですけど…？」

「もうー！レイ君ったら！乙女の秘密を聞いちやダメなんだよー？」

「ねえ何したの！？俺の体操服使って何したの！？」

「だからひゅみゅつ」

本当に何に使ったんだよ！？え、怖い！もう怖いよひまりさん！

「……はあ、俺はお前がここまでのクソ変態なんて知らなかったんですけどー？」

「ええ！？そ、そうだったの？」

「ああ」

「まあいいやー」

よくねーだろ！？

「ではレイ君？そろそろ本題に！」

「絶対に嫌だあー！！」

「ちよー！レイ君！？」

俺は急いで教室から抜け出し無敵の親友男子便所様にかくまってもらうように逃げ込み昼休みを何とかしのぎきったのであった。

◆◆◆

「ねえねえモカーレイ君知らない？」

「れーくん？れーくんならとつくの前に帰ったよー？」

「え！それ本当！？……もうどこいったのかな？」

ひまりはリュックを手に取るとそのまま教室を出ていき下駄箱に向かった、ように見えた。

「……もういいよれーくん」

「すまんモカ、今回ばかりは助かった」

掃除ロツカーの中に隠れていた俺はその声を聞いた瞬間飛び出した。

狭いし暑いしもう大変でしたよ!?でもひまりをこれで撒けたのなら問題ない

「それにしてもなんでひーちゃんから逃げるの?」

「……ちよつとな、喧嘩したんだよ」

「喧嘩?どつちが悪いのー?」

「あっち」

それはそうだろ!だって俺何もしてないもん!え!?俺なんか悪いことした?してないよね!?

「そうなんだーじゃあそんなれーくんにはご褒美をー」

「ッ!」

モカはスカートを上げ俺の見せつけるように腰をうならせながら下半身を見せつけてきた。

最近また毛をそったとかなんとか言ってからまーないこと

「(そう言えばこいつもだった……!)」

俺は横目で見ながらそんなこと思っていた。

けどまだだ、まだモカの方がかなりましだ。だってエツチしようなんて言わないし?一方的

見せつけてくるだけだから大丈夫だ。え?大丈夫なのか!?

「教室ではやめろ、見つかったら退学だぞ?」

「じゃあ視聴覚室ならいいんだくえへへ、楽しみだなくおっぱいも見る?」

「……………いや、おっぱいは当分大丈夫です」

「ん〜?」

モカは首を傾げその場に数秒立ち止まったがすぐに俺より前を歩きわざとスカートの裾を上げ階段を登る際俺に見せつけへように数段先を上がっていた。

「勘弁してくれよマジで」

俺の幼馴染のうち2人が変態だったなんて…他の3人に知られたらかなりまずいことだぞ?

しかもこの様子だとひまりとモカはお互いのことを知らない。もしもモカとひまりがお互いの性癖を知ったとき俺は一体どうなってしまうのだろうか。

親子丼ならぬ幼馴染丼になってしまいうんだろうか。

「りこさんーりんちゃんー来たよー」

「お！待ってましたモカたん！」

この2人は随分と打ち解けた様子だな？一体何があっただんだ？

「昨日通話した時そろそろ名前でもいいんじゃないかと話をしたんです」

「だったらあだ名がいいね〜ってなって」

「私がりこさん！」

「モカちゃんがモカたんになりました〜」

「……なるほど」

隣子さんだからりこ、かーなかなかいいじゃん！俺も今度しれっと呼んでみようかな

「りんちゃんはそのまままで可愛いからりんちゃんのままです」

「ちよ青葉さんくつつきすぎ！」

「ほっぺぷにぷにだ〜」

「髪も艶々！」

「う、うがああああー！私で遊ぶなー！」

あんまり褒めなれてないもんだから褒められた時叫び出すくせは何とかして欲しいものだ。

ここが視聴覚室じゃなかったらアウトだぞ？

「さて！ではサークル活動始めましょう！ではレイ君！進展の報告を！」

「ッ……すみません、まだかけてなくて……今から書くのでちよっと待ってください」

椅子に座りリュックからiPadを取り出しBluetoothで接続できるキーボードを取り出し接続させ準備を整える。

「……………ふう」

いざ入力しようとなるとやる気は湧く、だけど……手が動かない。

やはりどうしてもひまりのことを考えてしまう。これから俺はど
うなってしまうのか？ずっと俺はひまりからエッチしようと思われ
続けられるのか？正直不安なことばかりを考えて全然執筆に集中で
きない。

他の3人を見てみると燐子さんの周りに集まりあーだこーだ言い
合っつて楽しんでそうに見える。

「！れーくんどーしたの？」

「……いやなかなか進まなくてな」

「……………ひーちゃんとの件？」

「ッ！」

こいつは感が良すぎるっての…：凶星を突かれた俺は何を言い返す
ことなくコクリと頷いただけだった。

「気になるなら話せばいいじゃーん、幼馴染でしょ？」

「その幼馴染だから気にしてるんだよ」

「何があつたんですか？」

「それ私に聞きます？知りませんよそんなの……あ、その使えないや
つーみたいな目で私のみないてください、死」

「わ、わわわ！そんな目で見てませんから！」

この2人はいつも通りと言うかなんというか

「レイ君、集中できないのなら書くのはやめましょう」

「でも時間が」

「1日ぐらいへっっちゃらです！それにそんな状態で書いてもいい作品
なんてできませんよ」

確かに…：燐子さんの言う通りだろうか？こんな気で書いたりして
もとうか達に失礼、だよな？

1日ぐらいへっっちゃらなんて言うけど昨日も書けなかったんです
けど…：本当にすまん

「何があつたか知らないけどしっかりしな、女関係のトラブルなんて
日常茶飯事よ」

「例えば席替えの時隣の女子が悲鳴をあげたり、プリント配る時に後
ろ向いたらこっち向くなとか言われたり他には」

「りんちゃんストップ！スイッチ押しちやってるよ〜？」

「あと男子じゃないのになんでそんなに詳しいんですか!？」

それは確かに言ってる。なんで俺よりも朝日奈さんが詳しいのやら

「すみません、なら少し暇をいただきます」

「はい！次は明後日ですね！それまでに最低2つは話を完成させておいてくださいね！」

「ッ！了解です！」

俺は力強く答え視聴覚室を後にした。彼女達はまだ絵を描くと
言っていたため残るとのこと

「さてこれからどうしたもんかね」

明後日までにはSSを2つ書く、となるとこのひまりと決着をつけないといけないってことだろ？

話を書くのに集中するための話しね！

「とは言え本当にどうしたもんか…」

さつきと同じようなセリフを言ってしまう。それぐらい悩んで
いるってことだ。

そうだ、いつその事エッチをする？

いやいや幼馴染に手を出したらダメだろ！あいつらのこと小さい
頃から知ってたぞ!? そんなやつとやるなんて…!

こ、恋人同士になったらまだしも、な？そこら辺のやつとポンポン
やりたがるのはビッチとヤリチンだろ。

少し考え方を変えよう。ひまりのことではなくSSについて考え
よう。

物語を書くとなると大まかな話を考えてプロットを作り、そこから
話を膨らませて物語を完成させる。

でもSSは一体どう書けばいいんだろうか？そんなに長々と書け
るものじゃないだろ？

「姉貴に書き方でも聞かか」

「……ってそっか、箱詰めするって結弦さん言ってたな」

箱詰めとは本社にて強制的に話を書かせる状態だと思ってくれ、書

き終わるまで帰れない的なやつだ。

色々頭の中で考えながら玄関につき自分の革靴を取り出す。

「レイー！」

「ツ！ビクツター」

話しかけてきた人はなんと

「巴かよ、なんだ？どうした？」

一緒ひまりかと思ってビビっちまったじゃねーか！このビビりを返してくれよ!?ビビり損じゃないか！

「あの、その、えつとーだな！」

「はあ？お前どうした」

巴は目を泳がせ頭をわしゃわしゃかきながら話をしていた。

一体こいつは何が言いたいんだろうか

「そのだな！」

「お、おう」

「ツ！あ、あたしとデートに行こう！」

「……………へ？」

急すぎる展開に間抜けな返事をするレイなのであった。

「ご主人様になったことはありますか？」

巴からデートに行こうと言われた俺はそのまま巴に連れて行かれるがままに娯楽空間と言うゲームセンター、カラオケ、ボーリング、ビリヤード、ダーツ、卓球 e t c : それぞれやりたい放題遊べる場所に連れてこられた。

「まずは何するか？」

「い、いや巴が決めるよ…お前が誘っただろ？」

「ツ！だな！じゃあまずはボーリング！」

店員さんからシューズを受け取り空いていたレーンにて俺達はボーリングをしていた。

「うおりゃー！」

「はあー!?何そのカーブ!?!」

「あつはつは！アタシレベルになるとこんぐらい余裕ー余裕ー」

「それよりもレイー負けたならなんでも言うこと聞くんってこと覚えてるよな？」

「ううー！」

た、確かに途中まで調子良かったから俺からそんなことを口走ってしまった！

「……ここから巻き返す！」

投げるもピンは綺麗にひとつだけ残ってしまふ。次の投球で倒せば見事スピア、巴との点差を縮められる…が

「あつー！」

「はい！レイの負けー」

「ちくしょー！」

負けた俺は巴からジュースを奢れと言われたからペットボトルのコーラではなく瓶のコーラを奢る羽目になった。

「次はビリヤードでもするか！」

「ってルール知らねーよ!?!」

「大丈夫大丈夫、適当にやればいいんだよー」

あの球を打つ棒を手に取り構え出したと思えば巴は球を綺麗に打

ち抜く

ルールは知らないからとりあえず球を番号順に落としていくって遊びをしていた。

真剣衰弱的なやつで入れたらまた打てるルールでやってたら

「悪い…全部入れてしまった」

「勝負する前から負けた!?!」

俺は1回も打つことが許されず強制的に負けてしまった。

負けた俺はやっすいフライドポテトを奢ることになり食べるために次はカラオケの部屋へと足を運んだ。

「え?これも勝負するの?」

「あつたりまえだろ!ほらレイからいいぞ」

「……………ここで勝たないと!」

アニソンなら俺に勝てると思うなよ!?!巴が絶対知らないような曲を選び歌いきる。

「89点、まあ妥当だな」

「レイやるな、ほい」

曲をリクエストして巴は歌い出す。が、全く知らない曲だ。って俺がアニソン以外あまり知らないからわからないだけか!

「……………ええ、96点!?!」

俺がカラオケで負けるなんて…!

「またアタシの勝ちくそろそろやりがいあってもいいんじゃないか!?!」

「くっ!まだだ!ゲーセンだ!ゲームで勝負だ!」

とりあえず勝った後の褒美は後にして俺達は次々と勝負にあけくれた。

「格ゲー!」

やるも瞬殺、よく分からんコンボ技を決められ俺は為す術もなく画面にはYOU LOOSEと出てかでかと書かれていた。

巴の画面にWINと出てると思うとイラツとくる!だがまだ諦めないぞ!?!

「く、クレインゲーム!」

俺は500円で景品をゲットしてドヤ顔しながら休憩所に戻ると巴のやつは既に景品片手に携帯を弄っていた。

「お、お前いくらで取ったの?」

「100円、1回だけ」

「このクソツタレがああああ!!?」

取ったぬいぐるみをその場にたたきつけ俺はそんな叫びを上げていた。

「ゲームで決着付けたらーほらほらー女子に負けっぱなしでいいのかよー!」

「ぐっ…ふん、所詮ゲーム、運が悪かっただけだろ」

「強がんなって!」アハハ

背中をバンバン叩いてくる巴はもううざく見えたもんだから俺はある提案をした。

「そそうだどうせゲームなら近くにあるそのクイズゲームをしよう、まあ?俺はあんまり乗る気じゃないけどな!」

うっそー!クイズなら絶対負けない!学年3位を舐めるんじゃない!いい!

「近くならその隣のパンチングマシンでいいんじゃない?」

「へっ!あ、そ、そうだな」

なんでこんな近くにパンチングマシンなんてあるんだよ!?

「どっつせりやああああー!」

巴が思いつきり殴り画面には1000pwと表示されていた。多分だけどpwはパワーって意味だと思う。

ランキング見たいなのが表示されるが巴が堂々の1位!もう勝てるわけないだろ!?

「けど負けたくねええええ!!」

思いつきり殴るも

「482pw」カンカンカーン

「アタシの勝ちだな!」

「なんでだよ!?!」

もう今日巴と競ったものは全部完敗だぞ!?!なんですか!なんなん

なんなんですか!?

「パンチングマシンぐらいは女子に勝てよな」

「黙れ筋肉ゴリラ!お、お前なんて女子じゃない!」

お前実は生えてるだろ!?!生えてんだろなあ!こんなにパンチ力強い女子なんて俺知らねーよ!?

「お、お前こんな所でなんてこと言ってくれるんだ!?!」

「黙れ!お前筋肉ムキムキなんだろ!この筋トレマニア!マツソ!」

「ツ〜!いい加減にしろ!」

「ぐへっ!」

負けた腹いせに罵倒してたら1000pwを叩き出した巴の拳がもろに腹に入り俺はその場から数分動くことができなかつたのであつた。

◆◆◆

俺はあの後結局巴の肩を借りて施設の屋上へと足を運んだ。

「ほら、その…わ、悪かったな、強く殴りすぎた」

「……………俺も言い過ぎた、すまん」

巴は謝りながら俺に缶コーヒーを渡してくれた。

俺がコーヒー飲めないことを知ってて渡してきたのだろうか?そう思つとやっぱり今日の屈辱と言うやつはさっきので晴らせたんじゃないかと思う。

「てか今日ってなんで俺達デート?してんだっけ?」

「ぶふう!?!」

「お、おいおい大丈夫か?」

飲んでいたカルピスを吹き出し口周りがあーあーあー、白い何かいっぱいついてるじゃんか

俺はどっかの誰かさん見たく変態ではないためなんとも思いません!
ん!

「そ、それは…」

「それは?なんだよ?」

「ツ!だからそんなに目をまじまじ見て言うなつての…!」
?????
」

巴が純粹に俺のことが好きだからデートに誘ったのか？だと思うと心の底から嬉しい！むしろ巴がアサシンなのではないだろうか!?

「だってお前さ」

「おう」

「お前…自殺だけは絶つつ対するなよ!？」

「は？」

綺麗な夕焼け空の下でレイは間の抜けた返事をしたと思えば巴は立ち上がりレイの肩をガツチリ掴み真剣に語り出した。

「レイが何を思ってるかわからないけど死ぬのだけはやめろ！絶対だ！」

「と、巴？俺がいつ死にたいと言ったんだ？」

た、確かに嫌な過去とかは沢山あるけど流石に死のうと思つたことは無いぞ!？」

巴のやつは何を根拠にこんなこと言ってるんだ!？」

「だってお前の手には沢山リスカの跡があつて部屋には遺書が沢山あつて携帯では誰にもバレないなくなり方とか調べてるって…」

「……………」

「もう助けられるのは、あたし、だけだつて…!…………モカが」

「あいつかあああああああ!?!？」

話を聞いてる時一体誰がこんなデマを流したんだと思つたらあいつか!？」

「モカちゃんです」

あいつの顔が脳裏に浮かび声もなんか聞こえてきそうなんですけど!？」

で、でもこのまま巴の問に対しておうなんて答えたら俺が本気だと思われちゃうから否定しないと！

「と、巴…それはモカの嘘だ」

「ッ！は、は？」

「でも…………悩んでいたのは本当だぞ？」

「……………あつそ」

「いや！でも」

もう巴には話してもいいんじゃないだろうか。巴とひまりは他の人達よりも付き合いは長い、なんせこの2人から俺達は始まったと言っても過言じゃない。

「(なら話すべきなんじゃ?)」

「なんだ? どうした?」

巴も親友が道を誤ったなら連れ戻すと言っていた! なら!

「じ、実は……ひまりと」

「ひまりと?」

「……ッ! け、喧嘩、した」

あああー! なんて言えないんだよ俺は! このチキン野郎が!

「なんだよ喧嘩かよ!」

「……そんなもんとつとと謝って仲直りしてこい」

「い、いやー悪いのはあつちなんですけど?」

「あつちでもお前から謝ればひまりは謝ってくれる…それにひまりが100悪いのか?」

そうですよ! ひまりが100悪いよ! でもさ! ここでそうだよなんて言ったらどんなことで喧嘩したんだ? って言われる落ちだろ!」

「ひまりは話せばちゃんと理解してくれる、あたしが言ってるんだぞ?」

お前は信じないのか?」

「ッ! 巴!」

巴がここまで言うんだ、だったら

「おう、俺ひまりから逃げない、正面から本音を話す!」

「そうだ! 男なら逃げんな! 戦え!」

真正面から! 俺は!

お前とはエツチできませんって言ってやる!

「よっしやああ!」

巴から貰った缶コーヒーを開け一気に飲みます。これは気合を入れるためにやることだ、飲み終え渋い顔をした後は

「俺今からひまりに会ってくる! 巴! 今日ありがとう! 今度ラーメン奢るよ!」

「ッ! おう! 今度な!」

ニツと笑ってくれた巴に釣られ俺も自然と口角が上がってしまった。

その後は施設から抜け出し目指すはひまりの家！引越してないのなら場所は知ってるっての！

／ピンポン／／ピンポン／／ピンポン／

ひまりの家に着くなり俺はイタズラのようにチャイムを鳴らしまくった。

「はいはい今行きますからねー、あらーレイちゃん！大きくなったわねー」

「おばさんごめん！ちよっとお邪魔します！」

「あらー？」

靴を脱ぎ階段を登りひまりの部屋の前に着く、ここで躊躇なんかしたら巴から貫った勇気がなくなってしまうと思つた俺はノックもせずそのドアを開けた。

「ひまりごめん、俺お前とちゃんと話…を？」

「……………へ？」ブーン

俺はまた自分が侵した過ちに数秒で気付く…歳頃の女子の部屋、ノックもせずに入るのはマナー違反であるということ…。

『……………』ブーン

ひまりは制服姿のままブレザーは脱ぎ捨てカッターシャツはボタが数個外れていて…まるで胸を弄るように着崩していた。

でもそれよりひまりの右手に握られている電気マッサージ器、略して電マは静かな部屋に鳴り響いていた。

「ツ……………レイ、君？」

「……………い、いやこれは！てかこ、こんな夕方から自慰行為ってのは、ちよっと」

と無理やり話をそらそうとしたがそれでないことは置いといて！

「見られちゃったなら仕方がないね、大人しく」

「絶対！いーや！だー！」

「あつ……………待ちなさーい！」

俺は逃げるように階段をおりてひまりの家を後にする。

「レイちゃん！今度はお茶しましょうね！」

「無理ですう！もう絶対二度と来せんからあ！」

泣きながら俺はひまりの家を後にして住宅街を走り抜ける。

「こらレイ君！……もう」

「ちよ、ひまり！何よそのカツコは!？」

「ツ！へっ!？ち、違うの母さんこれは！」

流星に親に自分の真の姿？を知られたくないと思ったひまりは否定しようと思構えるが

「はっ！……れ、レイ君に襲われちゃった♪」

テヘペロとでも聞こえてきそうなポーズを取り窮地から抜け出そうと考えたひまり、その考えはある意味正しかっただろう。

「まあ！レイちゃんも大人になったわね♪」

レイの気もとめず愉快的な上原家なのであった。

◆ ◆ ◆

衝撃なシーンを目撃してしまった俺はその後公園で散々泣き叫ぶ子供達に変な目で見られたのは内緒の話だ。

「で、でもすげーエロかった」

だから幼馴染にそんなの求めるなつての!？」

い、いやいや！でも、まさか幼馴染の自慰行為を見る幼馴染なんているのか？

うおー！俺って結構運、

「ちいーがあー！ううー！だあーろおお！」ガンガンガン

電柱に何度も頭突きをかましそんな考えがどこが飛ぶことを祈るように頭突きを続けた。

「ママーあの人何してるの?？」

「やめなさい、指さすな」

と、とりあえず周りの人達の目がなんか酷くなってきたから…

「気分転換も兼ねてスーパーに行くか」

スーパーに入ること1時間

「いやー！つい見入って1時間も経ってたぜ！」

「でもたまたまタイムセール開始と同時に肉コーナーに行けるなんて…

「今日はステーキだぜ！」

なんせいい肉が安く手に入ったからな！

ひまりの件でちよつと色々あれだったけど…あれのおかげでちよつといい肉が食べれると思うとマシだろうか？

「♪」

鼻歌歌いながら帰ってる時だ

「お、お客さんもう勘弁してくれよー！」

「ま、まだだ…！あん！まだ終わってないぞー！」

「もう色々と終わってますよ!?!」

な、なんだ？あそこは確か…バッティングセンター？あそこって確か結構早く閉まるで有名なところじゃなかったけ？

「ツ！き、君！その制服！」

「え、俺ですか？」

「君しかいないだろ！ほら！その制服彼女と同じだろ!?!」

彼女と同じ？あーあれか？羽丘の女子生徒さんがなにかしてるのか？

「あのー俺今日は結構酷いことあって今から一人でパーリナイしたいんですけどもー」

「そ、そんなこと言ってる場合じゃないんだって!?!」

「ああああああ！いい！いいぞ！最高だ！流石硬式！軟式と硬さがちげーぜ！きつもちいい!!」

「???」

ま、まあ硬さが違ってバットの芯に当たった時が気持ちいとかってことか？

「とりあえずこの光景を見てくれ！」

「ツ！は、は？」

本日二度目の間の抜けたレイの返事、しかし…それは無理もない。なんせレイの目の前に入った光景には

「と、巴？」

「！」

巴はバットも持たずバッターボックスに、いやボールが必ず通る

ホームベースの上に立ち…まるで自分からボールに当たるように立っていた。

「れ、レイ…?」

「君この子と知り合いかい?もうずっと長いこと自分の体にボール当たててさ!他の客が帰っちゃったじゃないか!」

「…す、すみませんでした、あのこれちよつと以上にいい肉なのでステーキにして食べてください」

俺は急いで店の人に謝罪してスーパーのいい肉をお詫びとして渡した。

「と、巴とりあえずここから出るぞ」

「…お、おう」

巴の手を取りバッティングセンターを後にする。その間に話をすることなんて何も無い、流石にあんな光景を見てから気軽に話しかける気はしない。

「…お前何して」

「あーあ、レイにはバレちゃったか」

「ッ!な、何を?」

分かりきっていることだが俺はこの返事をした。いやあの光景を見て、そしてあの反応を見たら察しは作っての!?

「あたしがドMだつてことをだよ!」

「…ですよねー」

ま、まさか巴がドMだったとは…!どちらかと言えば勝手な偏見だがDSが似合ってると思うんですけど!

「あのボールが腹に当たる時の感触…!は、はあ、とつてもきつつもちいんだよ!」

「あ、はい」

「…でも、まさかレイにバレるなんて思つてもなかったぜ」
「俺もお前が、幼馴染がこんなやつとは思いたくもなかった」

嘘でーす!もう既にモカとひまりの秘密を知っちゃってますよ!?

露出狂!?!匂いフェチ(エッチしたいマン)!?!その次は巴のドMさんですか!?!

なんなんだよ！俺の幼馴染は一体どうしちゃったんだよ！

「でも知られたなら仕方がない！」

「??」

「レイ！お前はあたしのご主人様になれ！いや、なっってください！ご主人様！」

「ツ！ええーい！離せ！てか勝手にご主人様って呼ぶな！」

制服を引つ張り頬を赤めながら言う巴に対してドキツとする要素なんて微塵も感じ取れなかった。

「頼む！知られたならもうレイしかご主人様になれないんだ！」

「し、知らんわ！俺以外にしてくれよ！」

「あたしはご主人様に何をされても問題ない！むしろ気持ちいからな！」

「お前…！痛いのが気持ちいとか言ってたらそのうち死ぬぞ！」

痛さを求めてさ迷ってたら取り返しのつかない怪我とかしたりしないよな!?

「お前が望むならあたしは肉便器になってもいい！むしろして見せろお！」

「ちよ、と、巴さん！は、離してくれ、いや離せええー！」

「あつん！」

「……お、お前少し強く言われただけで興奮したのか…？」

「それだけじゃないぜ？お前にまじまじと見られたりした時とか、今日の怒涛の罵倒とか…全部最高だったぜ」グッ

もうダメだこいつ！に、肉便器とか女子が言っているいい単語じゃないぞ!?

しかも罵倒で興奮するなんて…！か、完全に狂ってやがる！

「そうだ、今度夜中の公園であたしに首輪をつけて散歩してくれないか!？」

「ツ！もう無理だからあああああああ!?!？」

「うわああああああんん!!」

そりや泣き出してもおかしくないだろ!?

幼馴染5人の内3人が変態だったんだぞ!?!もう無理ですよ！

多分だけこの世に3人の変態幼馴染がいるやつなんていないだろ！いや絶対いないよな！？」

家に着きスーパーで買った食材を冷蔵庫に詰め込みソファにダイブする。

「もうやだあ、なんだよこれ…なんで変態ばかりなんだよ…」

もし神様がいるのなら俺にとんでもない試練とやらを与えたことを一緒に恨んでやるぞ!？」

「ツ…こうしちゃいられない！SS書かないと！」

ただでさえ遅れているのに今日かかなくなったら次こそ怒られてしまおう！

「とは言ってもやる気出ないよねー」ピツ

テレビをつけると丁度昔途中まで見ていたアニメが再放送されていた。

「おー！冴えカノじゃん！しかも丁度まだ見てないところ！」

い、いやいや！SS書かないとだろ!?!で、でも…?」

「そうだ！サークル活動の勉強だ！うん！勉強超大事！」

その後再放送の話は終わったが俺はアニメが見れる有料のサイトと月契約をしているもんだからそこで続きを見ていた。

気付けば巴のことも忘れ、SSを書くことも忘れ1期の最後まで見ってしまった。

「俺達の戦いはまだ始まったばかり」

「いやな（以下略）」

「ふうーつい見入っちゃ待ったぜ」

「さてそろそろ寝るか…って！SS書いてない！あ！もうこんな時間!?!は!?!や、やばー！」

嫌なことを忘れてアニメに集中できたのはいいがSSをかけていなかったことに気付いたレイは徹夜確定ルートに突入したのであった。

恋人未満を知りたいと思つたことありますか？

「……………」カタカタカタ

「……………」サツサツサ

『……………」ジ』

放課後視聴覚室には5人の生徒がいた。

1人はものすごいスピードでタイピングをしている主人公こと神崎レイ、中性的な顔を持ち、綺麗な紺碧色の髪はさながら女子のような艶やかさ、そして3人の変態な幼馴染がいる残念なやつ。

その隣にはタブレットに専用のペンを使い、サツサツサと音を立てながら人物像を書く白金燐子。

それを眺めるのは露出狂こと青葉モカ。

その隣にはネガティブこと朝日奈凜。

そしてこないだまでいなかった人物…レイの匂いが大好きな匂いフエチこと上原ひまり。

「……………」あああああああああ!!」

レイは椅子から立ち上がったと思うとタブレットを天高くへと投げ飛ばした。ギリギリ天井につかない距離は果たして読んでいたのだろうか。

「え？あ、あーあー！」

隣りに座っていた燐子もレイを真似るようにタブレットを投げ捨てた。

「つと、危ないよーれーくん」ポフ

モカのやつが胸をいのようにクッションにして俺のタブレットをキャッチした。

ブラジャーをつけてないもんだからさらにクッション性高いってな

「……………えい！もー燐子さんも危ないですよー？」

「ペンも一緒に投げたわよね？…はい」

「あ、ありがとうございます」

うん、燐子さんが投げたタブレットはひまりがキャッチしてペンは

朝日奈さんが拾ったか。

そっか、そっかー、ひまりがね、キャッチしたのか…

「つて！なんでいるんだよお前は!？」

「なんでつて…私もサークルに入ったから？」

「入ったからじゃねえ！出てけこのクソビッチ！」

「ビッチじゃありません！レイ君の匂いが大好きなんですう！」

俺はここで気づいた。あれ？こいつそのこと話してもいいのか？と

「まさかひーちゃんがれーくんの匂いが大好きなとんだ変態さんだつたとはーモカちゃん知りませんでしたよ」

「それはこっちのセリフだよー？モカがまさか露出魔の変態だったなんてね…やつぱり今履いてないの？」

「あたばーよ〜」

「ッ!？」

スカートを持ち上げひまりに下半身を見せつけた後は頬を赤めながら俺にも見えるように見せてきやがった。

後から聞いたがどうやらこのサークルに参加するためには何かしらの秘密を暴露しないとイケないらしい。

何でもモカだけ知られてるのは不公平だ、なんてことを燐子さんが言い出しそうになった、らしい。だから俺は知らないんだ！

「……………変態」

「おい俺を見て言うな、俺は見てるんじゃない、見せられてるんだ！」

「ッ！あんたまさか私のも見せろとか言うんじゃないでしょうね…」

「そんなこと言わねーよ!？」

朝日奈さんが警戒するように片腕で胸を隠しスカートを抑える。

「レイ君そんなに見たいなら私の見せてあげる♪」

「ち、近寄んなクソビッチ」

「だからエッチしたいのはレイ君だけだつて！」

好きだからエッチがしたい。ではなく、そのエッチしてる時にかいた汗の匂いを嗅ぎたいという意味のわからんことをよくこいつは平然と言えるよな

「あんた達本当におかしいでしょ…白金さんもそう思いませんか？」
「んーそうですね？楽しければOKです！」

「もうダメだこの人！」

この人はモカのせいで最近変態化している残念な人だ…引き戻そうと思っていたがもう無理そうだ。

「ひーちゃんも脱ごうよー、スースーして気持ちいよ？」

「え？本当？よつと…あ！凄いい！スースーして気持ちい！」

「おーひーちゃんこちら側にいらっしやいませー」

「りんちゃんも脱ぎましよう〜」

「ぎゃ、ぎゃあああああ！」

朝日奈さん…君のことは忘れない、俺のために生贄になってくれたまえ。

「…やっぱりあんまり進展なしですか？」

「？あーはは、今のところ春乃、夏美の2人のSSは完成しました」

「凄いです！あの短時間でよくここまで！読んでもいいですか！」

「どうぞ」

タブレットを渡し燐子さんは楽しそうに俺の話を読んでくれる…。

「（これがアサシンの言っていたことかな？）」

彼女達なら君を受け入れてくれる。何となくわかった気がする。

「ん？ちよつと誤字がありますね」

「す、すみません、眠い目をこすりながら書きましたので」

巴とか冴えカノとか色々あったあと結局徹夜して書いたんだよなーおかげで午前中の授業は全部寝てました！

「おおーこ、ここで春乃の話終わりですか!?!き、気になる終わりかた…！」

「でしょ！この最後晴太と手を繋ぐと思ったら…的な終わりかた！」

「原作でもまだみんなこれ以上踏み込んでませんもんね！いやいい！実にいい！流石レイ君です！」

「ほ、褒めすぎっすよー！」

と言ってるも心の中では高らかにガッツポーズをしております！
まさかここまで喜んでいただけるなんて！

「では夏美ちゃんを……ふむふむ、なるほど、おーなるほーどー」
「おナル？」

「てめえは黙ってる！」

「痛い！ 処女膜破れた！」

「頭叩いて破れるわけないだろ!?!」

近くにあったノートを丸め馬鹿なことを言ったひまりの頭を叩いてやったら次は訳の分からんことを言い出した。

「……レイ君」

「はい！」

「ダメです、リテイクです」

「……………へ？」

先程の春乃とは別の反応をされたレイは何故夏美の作品がリテイクになったのかわからなかったのだ。

「夏美の季節は冬、でしたよね？」

「は、はい」

「このマフラーを2人で巻くつてのはちよつと…ねー」

「ツ！ なんですですか！ 冬といえば定番なネタじゃないですか！」

冬と言えば彼氏彼女がひとつのマフラーを一緒に巻いて寒いねーでも暖かい、的なこと言うのは定番じゃないのか!?!

「違います、晴太と夏美は恋人でも何でもないんですよ？」

「……だ、だからって」

「義妹のいい所はこの恋人未満、妹以上が鉄則！ これはもう恋人ですよ！」

「ぬは！」 ガーン

レイは隣りにそう言われ椅子から崩れ落ちるように地面に四つん這いになる。

お、俺としたことかー！ こんな簡単なことを見落とすなんて！

「春乃のは妹以上、恋人未満が上手く出て最高です、もう濡れそうです」

「おい今なんて言った!?!」

隣子さんなんか変なこと言わなかったか!?!

「……てか俺そんな恋人未満なんてわからないですよ」

「た、確かに言われてみれば難しいですね…」

「お、行き詰まった〜?」

「ばり詰まった」

「何があつたーの?」

さつきまで遊んでいたモカとひまりが俺達に聞いてくる。ちなみに朝日奈さんは床にぐたーと寝っ転がっていた。

「ほうほうー恋人未満を知りたいと」

「けど私もモカも彼氏なんてできたことないよ?」

「……いやお前ら急に真面目になるよな、その調子狂うだろ」

「何言ってるの?サークルに入ったからにはやる時はちゃんとやるよ」

「モカちゃんはいつもこーじやありませんか〜」

た、確かに真面目な時は真面目だよな…てかひまりの入った理由ってなんなの?

はっ!?サークルに入ったってことはひまりもアサシン候補になるのか…!

事の重大さを今になって気づいたレイだった。

「そ、そんなに知りたいなら一度彼女を作ればいいのよ、ゲプ」

「お、おい大丈夫か?」

「ううん大丈夫ない、死にそう」

「一度作って失えばわかるでしょ?それで恋人感覚は掴んでこれ以下が恋人未満ってやつよ、多分だけ」

まるで産まれたての子鹿のように足をピクピクさせながら立ち上がる朝日奈さん、一体モカ達に何をされたのだろうか

「お前ら朝日奈さんいじめんなよー」

「てかサークル活動真面目にやるなら今後そーゆうこと禁止な」

「……はい」

「ひまりは?」

「はいはいはい」

よーし!とりあえずサークル活動中は真面目にすることになった

からには今後気にすることはないな！

「つとそれで朝日奈さん、彼女を作るとはどうゆう意味なんだ？」

「そのまんまよ、あんたが誰かに告白して付き合えばいいの」

「はっ!？」

この人は一体何を言ってるのだろうか!？」

「振られても大丈夫、今のは冗談だからーって流せばOKよ……でもその次の日から教室では私を見ながらヒソヒソと話してしまいいには黒板に朝日奈凛は○○に告ったーってかか」

「も、ももももういいだろ！戻ってこーい！」

「ああーああーああーああー」

肩を揺さぶり戻ってくるように問いかけるとああー言いながらも自然とこちらに戻ってきた。

「凛ちゃん思ってたよりもネガティブだ」

「あたし達はりんちゃんのスイッチを止める最後の手段」

「わ、私達でりんさんを守りましょう！」

「ツ！あ、あんた達……！」

抱き合う4人……俺は一体何を見せられてるのだろうか？

「てか俺が告つてもOK言うやつなんていねーっての」

大体アサシンに失礼だろ！告白されてるのに他の人に告るなんて！

「じゃあ絶対振られない相手を選べばいいだけの話だよ」

「それが出来れば苦悩しないっての！」

「確かに誰もが自分を愛しているなんて思わないでしょうね」

「だよねー」

さて、こうなるともう恋人を作る作戦は終わりにしようかと思つたら!？」

「あります！いい方法が！」

「……なんか嫌な予感がする……！」

「さあ私達のデートを始めましょう！」

「やつぱりかあああああああああ!!!」

モカ、燐子、ひまり、凛、そしてレイのデートが始まるそうだ。



『あーあーあー、聞こえますか?』

「おう、バツチリ聞こえてるよ」

耳には燐子さんが愛用しているBluetoothで携帯と繋げられるワイヤレスイヤホンを片耳につけ廊下を歩いていた。

俺は携帯を無くしてるもんだから朝日奈さんの携帯を借りることになった。

人の携帯を借りるといのは…ちよつと壊さないか緊張してしま
う。

「あーレイくん!」

「ツ!つ、つぐみ!」

廊下の向こうから歩いて手を振りながら歩いてくるのは俺の健全な幼馴染羽沢つぐみだ。

蘭に続き数少ない俺の貴重な健全な幼馴染、もう俺の幼馴染はお前達だけなのかもしれん

『おーつぐだ、つぐなら優しいから行けるよね』

『確かに…でもつぐを利用するとなると、心が痛い…!』

嘘つけこの変態ども!なら俺と接する時も心を痛くしてくれ!俺は常に心を痛くしながらお前達と関わってんだぞ!?

『私も同じキーボードとしては…でも羽沢さん!サークル活動のためです!』

『あーあの子ならいけるわね、言いふらすタイプの人間じゃないわ』

なんか朝日奈さんが言うと言得力あるように感じてしまう。

彼女は一体何故ここまでネガティブになっちゃったのだろうか。

「よ、ようつぐみ!生徒会の仕事か?」

「うん!来月には文化祭もあるからね!お仕事頑張らないと!」

「……………そ、そうか」

え?俺今からこの子に告白しないといけないの?

い、いやいや!つぐみだぞ!?!この純粋な子が俺なんかになら告白されたら本気だと思ってしまうじゃないか!

『ばか、さりげなく自分の印象を聞くのよ』

「そ、そうか！」

「?レイ君？」

「ツ！な、なんでもないぞーあ！つ、つぐみは好きな人とかいるのか？」

『この馬鹿あー！』

うう！み、耳が！お前ら口を揃えて馬鹿なんて言うなよ！?鼓膜破れるかと思っただじゃないか！

「いやつぐみ！今のは忘れてくれ！」

「う、うん…今日のレイ君いつもと違ってなんか変だよ？」

「俺の印象ってどう？」

『少しは話を合わせなよ！』

ああー！ま、まただ！み、耳が！てかそんな声でしたら音が漏れるだろ

「レイ君の印象…？」

「んー料理作ったりして、あ！あと家ではこまめに掃除してて…携帯ではよく料理器具調べてるよね？うん！専業主婦って感じかな！」

「な、なんでそんなに詳しいの…？」

確かに家では暇さえあれば掃除してるし…または料理とかしてる。

それに携帯では確かに料理器具ばかり見てたな…でもそれは

「そう言えば携帯失くしたって言ってたよね？」

「い、いやー言っていない」

「ツ！あ、あれ？言っただけじゃなかったか？」

「あ、ひまりには言った」

「そう！ひまりちゃんから聞いたんだ！あはは！」

『あれ？私そんなこと言ったけ…？』

まあこの馬鹿のことだ、自分が言ったこととか普通に忘れてそう、いや知能レベル低！

「つぐみって結構俺のこと見てくれてるんだな！」

「ツ！も、もうー！そんなことないって！」

「つぐみちゃん、そろそろ別の場所行くよー」

「日菜先輩！今行きます！それじゃあね！レイ君！」

「あ、俺と付き合ってください！……ってもう聞こえないか」

「てか完全に言うタイミング全部ズレてるだろ……うう、告白なんてしたくないからわからないっての!？」

『つぐは諦めようー次行ってみよ〜』

『おー!』

「こいつら……！完全に俺で遊んでやがる!？」

朝日奈さんが教室に行けば誰かいるんじゃない？知らんけど？とか言っただけだから向かう。

「……………」

ソロソロと教室のドアを開けて入る。が、教室には誰もいないようだ。

「他行くか、てかもうやめるか」

「……レイ?」

「うおー!?ら、蘭!お前いきなり現れるよな!」

「いきなりって……あたし職員室から帰ってきただけなんだけど?」

「そ、そうか……」

あれ?なんで職員室に行ってたんだ?

「なんで職員室?」

「学級日誌の提出、あれってめんどくさい」

「あーそれはかなりわかる」

『お、結構いい流れですよ!』

『え?あの人喋るの?常に機嫌悪い人かと思ってた』

おい朝日奈さん、あんたの本当の姿も蘭と同じぐらい機嫌悪い目をしてますからね!

常に凜した朝日奈凜と思うなよな!?

「てかレイこそ何してたの?」

「え?いや……俺は」

『……………』 『ゴニョゴニョ』

ええーここでそれ言うの?でもこれもサークル活動のため、なのか……!すまん!蘭!後でぶん殴ってもいいから今は耐えてくれ!

「蘭を待ってた」

「ツ！は、はあっ!?な、何言ってるの！」

「嘘じゃない、蘭を待ってたんだ」

「……のくせにさっきビビってたじゃん」

「……………あれは演技だ」

う、嘘です！苦し紛れの嘘だが何とかなっただろうか……！

「ふ、ふーん、そうなんだ…それで？なんであたしを待ってたの？」

蘭は腕を組みながら少し頬を赤らめながらそう答えた。

こ、ここからどうするんだ!?俺は継るように片耳に全集中をかけるも

『……………』

へ、返事がねえー！な、なんだ？こいつら俺を試しているのか？

いいぜー！やってやる！俺だつて女子を落とすぐらいできるって証明してやる！

「俺1年の時蘭と同じクラスになれてすげー嬉しかった」

「ツ！あ、あたしも」

「……そ、そうか、実は俺蘭のことばかり見ててさ」

「あたしも……レイを見てた」

え、ええなんですかその返し!?ちよつとこつちが困るんですけど!?

「へ、へえーそれだけじゃないんだ」

「うん」

「俺蘭をオカズにして夜な夜な変なことしたり」

「あたしも」

「蘭のことエロい目で見てて俺の息子は常に戦闘状態なんだ」

「あたしも……あんだ……のこと見て濡れてた」

あつれー！なんでこんなことになってんの!?いい、いやここまで来たなら……！

「そ、そうなんだ…俺達結構お互いのこと意識してるんだな」

「うん、かなりしてる」

「なら……付き合っちゃおう？」

これはいくらなんでも無理があつたか……！

「い、いいよ…付き合つてあ、あげる。だから…今日からレイはあたし

「ものだよね？」

「ッ!？」

蘭からの返事は俺の予想を遥かに超えていて……そしてアサシンに
対しての罪悪感と言うのが俺の中には確かにあったのであった。

下着姿の女子に壁ドンされたことありますか？

とある日の放課後、俺は幼馴染の美竹蘭に告白？と言えればいいのだろうか、付き合うかと聞いてみた。

するとどうだろうか、まさかの回答、俺はどうやら蘭と付き合うことになってしまったらしい。

「……い、いや（ぐ）めん今の違っただな」

「違っって何が？」

「げ、ゲームに付き合っってって意味で、さ」

「あっそ、とりあえずレイは今日から私の物っってことでもいい？」

「いや話聞いて!？」

俺が蘭に告白することになった理由は恋人未満っってどんなものなのかを知るために告白っただけで：本来は冗談で済ませる予定だったんだ。

まあ蘭にそのことを言ったらぶん殴られてボコボコにされていたかもしれないが

「……とりあえずレイ脱ごっか？」

「はっ!?!なんで脱ぐんだよ!?!」

「うるさい、あんた私の彼氏でしょ？彼女の言うことを聞くのが常識でしょ?？」

「そんな常識俺は知らないよ!?!」

「じゃああたしから脱ごっかな」ヌギヌギ

「ひよー!!」

蘭は教室にも関わらずスカートを脱ぎ、ネクタイを解きカッターシャツをも脱ぎ出した。

「なに?？」

「い、いや…その結構エロい下着つけてんだな」

「ああ、これ資料として買ったんだよ」

「は、はあ」

こいつは一体何を言ってるのだろうか、いや…この状況で考えるのは間違っっているかもしれない

「……ほら、早くレイも脱いで、てか脱げ」

最後の肌着を脱ぎ捨て下着しか身につけてない蘭が俺を見ながらそう言った。

いや待て……ここで俺が脱ぐ必要なんてないんだ、そうだ……このままいつも通り逃げ出せば！

「今あたしがここで叫んだら……レイはどうなるかな？」

「ツ！お前……それが目的か」

なるほど、そうなってしまってもしここで逃げて逃げるところを誰かに目撃されたら俺が蘭を脱がせたと思われてしまう……！

「わ、わかった、わかったからちよつと待ってろ」

モカにもひまりにも脱いだ姿なんて見せたこと無かったのに！てかイヤホンから何も音が聞こえないんですけど!?

「ほら！ぬ、脱いだぞ?!」

「ツ！」

「お、おい蘭？」

「い、いやレイの体予想以上に良かったから」

蘭のやつは鼻血を出しながらそう言っていた。あれか、男子が女子の胸を見た時に鼻血を出す原理なのだろうか

「じゃあ早速だけどあたしの制服着て」

「だからなんでだよ!？」

「いいから着て！叫ぶよ?」

「うう」

言われるがままに蘭の脱ぎたてホヤホヤの女子制服を着始めた。

これがなんとサイズがギリギリ入るんですよ、胸元はやつぱり寂しい感がありますか

「これで、いいだろ?」

着てみた感想はスカートだからなんかスースーする。そして足がなんか腰には布の感触があるのに足にはないから不思議な感覚だ。

「……!」 スッ

蘭のやつはリュックから携帯を取り出し

「いい！いい！もう最高！はぁぁー！予想以上！もうレイ最高！」

「ちよーら、蘭!？」

「可愛い!可愛いよレイ!やっぱりあんたは女子制服の方が似合ってる!」

パシヤパシヤと静かな教室に携帯のカメラの音が鳴り響く

「……ふう、いい資料が撮れた、でもあたしが描いた方がもつとエロいや」

「な、何を言ってるんだよお前は!」

「こーら、女の子はそんな言葉を使わないだぞ♪」

「お前に言われたくねー!」

某うさぎがいる喫茶店で働いている居候さんのような可愛い声で蘭は俺に言ってきた。

しまいにはお姉ちゃんに任せなさい!なんて言いそうで少し怖い。

「でも本当冗談抜きで可愛い……」

「や、やめろ、恥ずかしいだろ」

「ちよつと髪結ぼうか!」

「おい!」

蘭はゴムを手に取り俺の髪を弄り出した。

「サイドテール!ちよつと髪足りないけど似合ってる!ねえ今度メイクもしない?」

「いい加減にしろ!」

「だから女の子はそんな言葉使わないだぞ♪」

「うぜええー!」

完全に蘭の流れになってる!てかよく下着1枚で俺と普通に会話できるよなお前!」

「……………」

「なに?あー胸?触りたいの?」

「いやちげーよ!?!恥ずかしくないのかよ!」

「別にーあたしレイのこと男としてみてないから」
「ッ!?!」

そ、それは一体どうゆう意味なんだ?

「ちよつと待ってて…はい、これ読んで」

「読んでって、エロ本じゃねーか!？」

「いいから読んで」

「いや」

「読んで！」

「あ、はい」

表紙からもう女性が胸を晒しだしているんですけど…てかこんなもの学校に持ち込んでるとか蘭のやつ大丈夫か？

読んでみると内容は、まあエロ本の話だった。

とある男子生徒、レイ、ん？レイ？がある日神のイタズラで女の子になつてしまったみたいだ。

レイの幼馴染シユウがレイにエッチなことをして、もうレイは男に戻りたくないと思うほどの快楽を知つてしまい…。

男性器なしでは生きていけない体になつてしまったようだ。

「ツ！お、おいちよつと待って…！」

「こ、この男のシユウって!？」

「そう、夜桜柎優、あんたの彼氏だよ」

「彼氏って！お前…！まさか！」

「この物語の主人公、レイは女体化した神崎レイ、あんただよ」
「……………」

言葉が、言葉が何も出なかった、です。

い、いやいや！そんな馬鹿な！大体これって多分同人誌だろ!？なら俺や柎優を知ってるわけがない！

蘭が似てるからって理由で決めつけてるだけだ！そうだ！そうに違いない…！

「あ、ごめん、これ描いたの私だから」

「はっ!？」

「あたしのペンネームはLAN」

それを聞いて同人誌を見てみると確かにLAN、と書かれている。嘘ではないんだな

「お前が本当に書いたのか…？」

「だからそうだって…あんだ達尊すぎるからあたしの作品にしたってわけ」

「いや意味わかんねーよ!?!」

尊いって何!?!俺と柊優は男どうしだぞ!?!

あれか!やつぱりそう!蘭のやつ!

「お前腐女子ってやつか!」

「ツ!あたしをそんなのと一緒にしないで!」バン

「ええええー」

まさか下着姿の女子に壁ドンされるなんてことありますか!?!ありませんよ!?!

でも今俺がその状況なんですよ!?!

「あたしは男共がイチャイチャするのは全然興味なんて微塵もない!」

「レイみたいな可愛い子はもう女子も当然!夜桜とレイはあたしにとって最高のカップリングなの!」

もう何言ってるのか全然わかんねえー!

なんだよ!?!じゃああれか!女体化ものが好きなのか!?!そうなのか!?!てかさうだろ!?!

「じゃ、じゃあなんで俺の告白を?」

俺と柊優が蘭の言うところの最高のカップリングならば普通あなたには夜桜がいるでしょ?で終わらないのか!?!

「いや形だけ付き合ってるってすればあれやこれや今後の資料に役立つと思ってる」

「…:すまん、じゃあ別れよう」

「それはダメ、あんたはあたしと夜桜の物だから」

「なんか1人増えてるんですけど!?!」

蘭も柊優の道具になるつもりなんて俺にはないから!

「てか柊優には黙ってるのかよ」

「…:あいつは、まあ別にいいのよ」

「いいわけねーだろ!不平等だ!柊優にも話せ!そして怒られてしまえ!」

あいつの事だ！親友の俺がこんな目にあってるから助けてくれるはずだ！

「……今度話す、それよりほらこのレイ可愛くない!?特に夜桜のいちもつを胸で挟んでしごいてる時の顔とか!」

「ちよつとやめてくれよー!」

な、なんでこんな目に……!今日あの時恋人未満を知りたいと思わなければ俺は知ることなんてなかったんだ!

知らなかったら知らないで俺の女体化した姿が世間に広まっていたかもしれないが……俺が知らないならいいんだよ!

「あれ教室に誰かいるのかー」

「もしかして誰かエッチなことしてたりして」

「まじねーわ」

『ツ!?!』

廊下の向こうからなんか三馬鹿の声が聞こえた気がしたんですけど!?!

「ど、どうしよう!あたし服ない!」

「どうしたもこうもあるか!俺の制服を着とけ!」

「……いやそれはちよつと、レイの服を着れるのは夜桜だけと言うか」

「えーい!だったらこれでも着てる!」

俺はリュックを教室に置いていたもんだから体操服を蘭に渡し急いで着るように言った。

最初はさつきと同様着れないと言っていたがさすがにやばいから無理やり着させた。ひまりのやつに知られたら……考えただけでぞつとする。

「つと、これはこれは美竹さんじゃないですか」

「おお、体操服……てか隣の人誰だ?」

「まじねーわ」

『……………』

蘭のやつが服着てなかったからさ蘭の心配してたけど俺の方が今やばくないか!?

しかも1番知られたくなかった三馬鹿にこの姿を見られるなんて

…!

「み、美竹さんその隣の人は!?!」

「心做しか神崎君に似てる気がするぞ!」

「まじねーわ!」

優亜のやつ勘が鋭いな…!ら、蘭!助けてくれー!とでも言うようにアイコンタクトをとる。

「…:あー彼女はレイの妹、えっとレイコ、で、です」

「レイコちゃん!へー!神崎そつくりじゃんか!」

「え?連絡先交換してくれますか?」

「まじねーわ!」パシヤパシヤ

「ちよつと何写真撮ってんのよ!レイ、じゃないレイコと話したり写真撮る時はあたしを通してくれない?」

お前はアイドルのマネージャーかよ!?

「ほらもう出たってた出たって!レイコは忙しいの!」

「レイコちゃん今度食事でも!」

「いや俺と新しくできたラブホで!」

「まじねーわ!」

蘭に押されるがままに三馬鹿達は教室を出ていってくれた。

俺ももう帰ろう、さつきからイヤホンからは何も音聞こえないし?

今あいつらはミュートとかにして楽しく俺と蘭のやり取りを聞いてたたんだらうな

「ら、蘭さんもういいでしょ?今日は許してください」

「まあ今日は制服姿を撮れただけでもいいかな?…:次は水着よろしく」

「絶対無理だからあー!」

レイ、いやレイコの叫びは女子とは言えない男子の地声で教室に響いたのであった。

「女子は叫ばないんだぞ♪」

普段の彼女とは想像もつかない可愛い声で蘭、いやLANはそう言っていた。



レイと蘭が教室で話している中視聴覚室では

『……………』

隣子の携帯を机に置き、それを囲むようにみんなで座っていた。

「…………レイ君の声、聞こえなくなりましたね」

「あつれ〜？れーくん通話切った感じ？」

「でも「蘭を待ってた」って言ったあとすぐに通話切るかな？」

そう、レイはひまりの言う通りに蘭を待ってた、とセリフを言った時から彼女達はレイとの通話が途絶えていたのだ。

「考えられるパターンはあいつが通話切った、もしくは携帯の充電がなくなっただかよ」

「りんちゃん携帯の充電はー？」

「ふん、愚問ね…………当然してないわよ」

「なんでどやってるんですかね」

普通の学生ならば携帯の充電＝生命線、とでも呼ぶだろう。充電のなくなった携帯などただの板、鉄の板だ。

『……………』ジー

「…………な、何よ！携帯なんてそんな使うことないじゃない！」

「みんなとメッセージしたり？」

「…………家族以外で連絡先を交換したのは白金さんだけよ」

『……………』

先程レイとの通話のためだけに隣子と連絡先を交換した凜はそれが初めての友達だったらしい。

「…………そうだ！ね、ネット使う時とかは？」

「ネットなんて家に帰ればiPadでするわ」

「だ、だからね、携帯なんてあんまり使わないことがこれでわかったでしょ!？」

悲しい人だ…………などと彼女に言うことは出来ない。凜が完璧美少女（表上）のため他の生徒達が気軽に連絡先を交換しようとは言えないのだ。

「…………大体連絡先を交換するほど仲のいい友達なんていないから携帯の必要性を感じないのはわかるでしょ?？」

「私を除け者して青葉さんと白金さんが通話してたって聞いた時はさすがに心に来たわ」

「ふん、いいわよ……私も携帯のように充電（寿命）を切らせてこの世とおさらばして来世に期待するわ」

「（あちやーまたスイツチ入っちゃった）」

しかし燐子とモカだけ通話をしていたことを知ってしまったと確かに心に何かはやってくる

「それにこんな気持ちあんた達みたいな原作キャラにはわからないわよ……オリキャラなんて少し調子に乗るだけですぐ叩かれるのよ」

「……まあ私に関しては感想のひとつもないけどね、あはは」

「も、もももももういいよ凜ちゃん！」

「戻ってください！それに大丈夫です！私も感想なんていただいてませんので！」

彼女達が一体なんの話をしているのかはさておき今回は凜の精神は不安定すぎるようだ。

もし彼女が精霊ならば空間震が起こってもおかしくないレベルだ。

「りーんちゃん、モカちゃんと連絡先交換しよう」

「……ええ？私みたいなオリキャラと連絡先交換してくれるの？」

「オリキャラも原作キャラも関係ない、だってモカちゃんとりんちゃんは友達だもん」

「はっ！」ズキーン！

その言葉を聞いたひまりと燐子は

「私も交換しようよ！あ！そうだ！このサークルのグループ作ろうよ！」

「それいいですね！ならグループ名を考えなくては！」

「だったらそろそろこのサークルの名前も考えましょうね」

「うう！た、確かに……！」

1人で活動してた燐子はサークルの名前なんて気にすることなかったが、もう1人ではない。十分すぎる人材が揃ったもんだからそろそろ名前を決めてもいいところだ。

「あ、あんた達、そのありがとう…」
『ッ!』

「もーりんちゃんは可愛いなあ〜ちゅーしていいー?」

「はあ!? あ、あんた何言ってるのよ!」

「私は抱きつくー!」

「ちよ、う、上原さん!」

「私はその2人の写真を撮ります! おお! 巨乳同士のハグ! こ、これ
はいい参考資料になりますよー!」

レイが今どんな目にあっているのかも気にすることなく4人は楽し
く視聴覚室で過ごしていたようだ。

心做しか、いや明らかに凜の表情は先程と変わり清々しく、そして
楽しそうに笑っていた。

「……あれ、あそこ! ほらあそこ! レイ君がいる!」

「おーでも蘭が……ほー下着姿で壁ドンを……?」

「……………」スツ

「白金さんなにカメラ構えてんですか…」

「こ、これは決して美竹さんの下着姿の写真を撮るためじゃないんで
すよ!」

あくまで参考資料です! と言い張っている燐子だがそれを無視し
てひまりとモカは話し出した。

「これはあれだね」

「うん、あれだね」

そう、本当は蘭はレイの女装姿を見るために自分の制服を脱ぎレイ
に着させている。

そして女装したレイを可愛がる。つまり女装趣味? を好む女子と
いうことをモカとひまりは知らないはず。

「蘭怒ってるねー」

「怒ってレイ君女装させて脅してる的な?」

運良く間違った解釈をしてくれたようだ、これに関しては後にレイ
も蘭も感謝することになるだろう。

「戻ってきたら優しく受け止めてあげよう」

「……その際にちよつと匂いを嗅ぐ」

「……こいつら結局ダメだわ」

「あー！美竹さんとレイ君がいなくなってる！？れ、レイ君の女装姿撮りたかったです……」

「あんたもかい!？」

レイ不在のこのサークルのツツコミ係はどうやら凜のようだ。

そんな第2ツツコミ係の凜が叫び彼女達のデートは終わりを迎えたのであった。

◆◆◆

「………た、ただいま戻りました」

「おかえりれーくん」

「お勤めご苦労様！レイ君！」

「おかえりなさい」

「………ご苦労さん」

視聴覚室に戻ると各々が俺に対して、まあお疲れ的なことを言ってくれた。

たーしかにクソ大変だった！知りたくもない蘭の秘密を知ってしまったし……俺の女体化したエロ同人誌なんかも見せられた。

しかもそれは蘭が、いやLANが書いたやつというね……

わかる、俺はわかるぞ……こいつらにあの本がバレる訳には行かない！何故かって？

いじられるからだよ!？」

「れーくん」ポン

「……な、なんだよ」

モカのやつが急に俺の肩に手を置いてきた。一体何が目的なんだ？

「辛いことはすぐに忘れた方がいいよ」

「はっ!？お前らやつぱり聞いてたの!？」

「いや聞いてないわ、多分携帯の充電切れたのよ……てか携帯返して、今からみんなとれ、連絡先交換するから」

「はい？連絡先？」

い、一体俺がいない間に何があつたんだ…？朝日奈さんが自ら進んで連絡先を交換しようと言い出すとは思えないんだけど

「レイ君、泣きたいなら私の胸使つて泣いていいからね？寧ろ泣きついて、抱きついてー！」

「い、いやだよ！今はその巨乳はあまり見たくないんだ！」

急いで隣を振り向けば

「……あ、わ、私結構胸には自信あるんですよ？」

「こつちも巨乳だった！」

燐子さんも巨乳であーあーあ！一体ひまりと燐子さんどつちの胸がでかいのか一度おたがいで調べて欲しいもんだ！

「………何よ、あーはいはい、私には胸がないと言いたいよね」

「いやあんたも十分胸あると思いますよ!!」

なんだよこの巨乳トライアングルは!?!ひまり！燐子さん！そして

朝日奈凜！

くっ！め、目が保養されてしまう！いや今は違うだろ！

その時ふと1人の少女の胸に目がささる。

「……？」

「モカ、まあ、なんだ？気にするな」フツ

「……うるさいぞー粗チン野郎」

「なっ!?!」

まあ女子は胸の大きさ、男子はいちもつの大きさ、長さ、太さ、そして耐久さ…男子が求められているのは相性によって変わるん……だろうか！

な！否定させてくれ！決して俺は粗チンなんかではないぞ!?!

「そ、そこまでは言わなくてもいいじゃないか！」

「それにモカちゃん別に胸がないわけではないので」ムニユ

「ツ！わ、わかつたから！柔らかいから！」

モカのやつが手を握り無理矢理胸を触らせてきた。確かにこれは…うん、フィット感がいいね！じゃねえー！

「………変態」

「だから俺は違うってー!!」

視聴覚室に響くのはレイコの叫びではなくレイの叫びなのであつた。

盗聴されたことはありますか？

ピピピピピピー、起きろ、起きろ、起きなきや死ぬぞ、今日もお仕事頑張るぞい♪

「んー……うるさく」

普段全く聞こえるはずのない時計のアラーム音が俺の鼓膜を揺らし浅い眠りから覚めてしまう。

昨日は酷い目にあつたからな……まさか俺が女体化して柊優にあれやこれやちよめちよめされるなんて

「ふあー」ボリボリ

欠伸をしながら頭を掻き、次に背中、そして胸元を掻く。

「？」ムニユ

な、なんだ……？モカの胸よりも柔らかい何かを触ったような……！？俺は急いで自分の胸元を見る。

「ッ!？」

見て驚く、なんせ昨日までにはなかった大きな胸が2つ俺の胸についていたのだ。

そう、これは紛れもない女子にしかついていないおっぱい、だった。

「……ええ、ちよ、え？じゃあ下も……？」

「……………」チーン

お、俺の息子があああー！息子が家出してる!?!え!?!なんで！俺のところはそんなに居心地悪かったか!?

「……レイー起きてるか?」

「!？」

この声は……柊優!?!な、なんで柊優が俺の家にいるんだよ!?!

「つと、胸とあそこなんて触って……そんなに俺のが欲しいのか?」

「……はい?お前何言ってるの?俺は男だぞ?」

「もういいって、ほら、今から気持ちよくさせてやるからな」

そう言いながら俺に近づくと柊優、その顔はなんとさえばいいのだろうか、彼女に見せるような優しい顔だった。

「ひゃっ!？」

急に胸を触って来た柊優に対して距離を置く

「……………どうした、もう何度もエッチした仲だろ?」

「し、知らない! な、なんだよこれ!」

「ほら、大人しくてろって」

「う、うわああああああああ!!」

「ああああああああ!」

俺は飛び起き部屋を見渡す。周りには誰もいないことを確認し胸元を触る。

うん、何も無い。そして下の方は…息子も家出をしてないようだ。つまりのところ…

「……………ゆ、夢か…はあ、まったく最近悪夢に魘されるの多すぎだろ」

モカと言いつつ今回の件、今回は蘭が変な漫画(女体化したレイが主人公)を見せられその1部シーンを夢で見てしまった。

「……………朝飯にしよう」と

そう言えば姉貴がもう箱詰めになって結構日数経ったな、そろそろ差し入れとか持ってかないとだけど宿泊研修あるしなー

「休み明けでいっか」

今行ったところで仕事に集中してるだろうしいいかな?

と他のことを考えてもさっきの悪夢が脳裏をにチラつく

「考えるな神崎レイ…今は料理に集中しろ!」

結局その後朝はずっと不機嫌のまま朝食を作り今日はいつもより遅めに家を出たレイなのであった。

◆ ◆ ◆

今週末から宿泊研修が明日から始まってしまふ。

土、日、月、2泊3日の火、水、木、休みの1週間、まあ休みの火、水、木は部活動には参加していいとのことだからサークル活動は行える。

今のところ最低ラインであるSSの3人分を書き終えることができたが燐子さんからなんて言われるのやら…

これは泊まり先でも夜な夜な書き書きしないといけないかもしれない。ない。

「とゆうわけでかなり遅いけど班決めだ、5人ずつで班を作れー」

『はい』

気の抜けたような返事、先生もなんか言ってやれよ！羽丘生徒としてたるんでっぞ！ぐらい言ってやれよ！

それに5人ずつか…とりあえず柊優と組むしかないのか？

「レイは夜桜と同じ班になりなさいよね」

「……あのなーレイさんは今日蘭さんのせいで悪夢を見せられたんですよっ。」

「そんなの知らない、てか夢を見るとか結構気に入ってるってことじゃないの？」

「お前ぶっ飛ばすぞ!？」

「きゃー犯されるー」チヲ

「こ、こいつー！俺が女体化したことが満更でもないんじゃないかと言いたいのか!？」

冗談じゃない！ふざけんな！お前も1回、なんだ？男体化？してみやがれ！

いや現実では女体化してないけどさ…

「つての冗談、大体レイに犯されたらNTRネトラレになるからそれはちよつとね」

「安心しろ、そもそも付き合っていない」

「……え？昨日の告白は嘘だったの…!？」

「お前うぜえー!!」

今は柊優と俺が付き合っつて俺が蘭を犯したらNTRになって、付き合っつてないは柊優とのことで…

あーあーあーあー！ややくしくてさらにめんどくせえ！

「大体NTRなんてあたしが描くわけないじゃん…：まあ前に書いた時は泣きながら描いたからボツにしたけど」

「描いてんじやねーか!?!てかそんなに泣くこと!?!」

「当たり前でしょ!レイが他の男子共に犯されるだよ!?!もう…男子共殺してやろうかと思ったよ」

「自分で描いたんだよな!?!」

「おーい、美竹と神崎は早くメンバー決めろ」

『ッ!?!』

クソ!蘭のせいで目立ってしまったじゃないか!と、とりあえず急いで班を組まない!

「蘭〜こつちこつち〜」

「わかった、今行く」

まあ蘭は仲良し変態幼馴染集団(つぐみは変態から除く)で班を組むか

「おいレイ、早く来いよ」

「……お、おう……」

まさか柊優が呼びつけるとは……!ほら!蘭と言いつくらの腐女子共がなんかニヤニヤしてんじやないか!

蘭は腐女子ではないけどさ!

「神崎俺達は君と同じ班になる運命だったんだ」

「当日は寝かせないぜ?」

「まじねーわ」ギョッ

「あはは、よ、よろしく」

まさか柊優が三馬鹿こと遊、優亜、由明日と班を組むとはな、大方こいつらが柊優に声をかけたんだと思うけど

「よーし決まったな、って朝日奈、お前班はどうした?」

『ッ!?!』

驚いたのは俺、モカ、ひまり、同じサークルに所属する俺達が反応した。

もちろん男女別じゃなかったら俺はここで声をかけるがそれはできない話。

「先生、私は一人で大丈夫です……慣れてますので」

「そ、そんなわけには行かないだろ?ほらそこ!4人なんだから朝日

奈を入れてやれ」

まるで小学校のような光景が目の前に広がってるんですが…

「どうせ私なんか朝日奈菌に感染したくないからみんな組まないだけよ」

「ふ、無敵バリアも貫通する私の菌はどんだけ強いんだか…：うん、明日死のう」

とても思ってるようなあの不機嫌顔、可愛い顔が台無しだが他の生徒達は気づいてないのだろうか。

「だって、ね？」

「朝日奈さん美人すぎるから」

「私達とは釣り合わないというか」

「寧ろ迷惑しかかけないというか」

わかって欲しいが彼女達は決して朝日奈さんを虐めてるからこんなことを言ってるわけではない。

これぐらいになるほど彼女は美しく、そしてしたわれているのだ。美人には美人の人しか集まらない、とても言うのだろうか…朝日奈凛に勝る顔面偏差値を持ってないと思ってる人は自然と距離を置いてしまうのだ。

「(美人なんて嫌味だわ、心の中ではブサイクめって笑ってるのよ)」
『……………』コク

俺達3人は目を合わせ頷きモカが手を挙げた。

「先生く6人でもいいならりんちゃん入れてもいいですか？」

『りん、ちゃん？』

「そうそう！だって私達友達だもんね♪」

「…………でも」

「でもじゃない、友達が誘ってんだ…行ってやれ」

「うう！あ、あんた達ー！」

クラスのやつらはモカが親しくりんちゃんなんて呼ぶもんだから驚いていた。

しかし朝日奈さんが泣きながらモカとひまりに飛びついた時は泣いている朝日奈さんを見て少し静かな空気になってしまった。

これを機に彼女に対して見方が変わってくれば朝日奈さんのネガティブスイッチがONになるのも減るだろう。

「あ、朝日奈様が抱きついてる」

「上原ちゃんと朝日奈様が……神崎君、ちよつと混じつてきてくれな
いか?」

「ま、まじねーわ!」

三馬鹿が各々感想を述べるが由明日に関しては尊いのか目を伏せていた。

「はい、じゃあ班で役割を話し合ってくれ」

こうして俺達はその後宿泊研修を楽しいものにするため各班にてそれぞれしたいことなどの話し合いをしたのであった。

◆ ◆ ◆

「ありがとうございますー」

今日の放課後はサークル活動ではなくコンビニでバイトをしていた。

「ありがとうございますー♪」

「か、可愛ええ」

「あれってRoseliaのベース、今井リサちゃんだよな、ここでバイトしてたんだ」

「はーい、Roseliaをよろしくね♪」

『は、はい!』

相交わすRoseliaはクソ人気だなーAfterglowも人気あるのだろうか……てかつぐみ以外が変態の残念なバンドなんですけどね

「レイ、リサちゃん品出し頼む」

「うっす」

「はーい」

ま、まさか2人つきりで品出しをすることになるとは!こ、ここは久しぶりに忘れかけていたあの4月29日何をしてたかを聞かないと!

「もう6月だね」

「……ですね」

「てことは俺の闇の書もなろうぜ！に続きが投稿されているのか…」

「今週末宿泊研修だっけ？楽しんできなよー？」

「……………はい！」

「あの変態共がいる中果たして楽しめるのだろうか…！急に不安になつてきたぞ！」

「あの「ところでレイ、さ」ッ！は、はい」

「……………友希那のメッセージ、なんで無視するの？」

「……………へ？」

「友希那さんのメッセージ？あ、あちゃー携帯失くしたって話してなかったな」

「すみません、実は俺携帯失くしてて…言うの忘れてました」

「それ本当ー？」

「ほ、本当ですよ！」

「……………アタシに嘘ついてない？」

「なんでこんなことで嘘つくんですか！」

「ふ、ふーんだ！」

「ええー」

「な、何故不機嫌になったんだ？俺が携帯を失くしたこと言わなかったことがそんなに不機嫌になる原因でしたか!？」

「……………友希那悲しんでた、最近レイと話せてないって」

「あーそれは確かにわかります」

「え!？」

「な、なんですか…」

「確かに最近変なことばかりだったしな…久しぶりに友希那さんと猫の話をした！てかシロに会いたい！」

「ゆ、ゆゆゆ友希那とれ、レイってどんな関係なの!？」

「どんな関係？ですか…んー少なくとも友達以上ですかね？」

「あ、そうなんだ」

「い、いや！友希那さんはどう思ってるかは知らないですけどね!？」

「少なくとも類友だから…俺は友達以上だと思ってる！例えアサシ

ンじゃなかったとしても俺は友希那さんと類友になれたことに後悔なんてない!

「レイは「おーい、レイ、助けてくれー」……」

「あ、はい……リサさん何か言いかけました?」

「ううん、なんでもないよ、早く店長の所に行つてあげて」

「?はい」

その後リサはレイを複雑そうに見つめ作業に戻るのであった。

「なあいいだろ?人手不足なんだから養えよー」

「そうそう、暇だからここでバイトしてやるつていつてんだよ」

「店長ーどうしたんすか?」

「レイーこいつらな」

店長は俺にわかりやすく説明をしてくれた。

どうやらこの2人組の男性はリサさんとモカのファンらしい。

ここで2人がバイトしていることを嗅ぎつけここに自分達を養えと抗議してきたようだ。

でも俺に言った所でどうにかなる話じゃないだろ!?

「あ、あーの少し落ち着いて」

「な、なんだこの女は」

「うう!俺男なんすけど……」

貶されたんですけど!?なに!俺そんなに女子に見えるの?

「と、とにかくリサさんとモカ目的で来るのはやめてください!」

「んだーてめえ自分より可愛い2人に嫉妬してんなこと言つてんだろ?」

「……だから男だつての」

なんで男の俺がリサとモカに嫉妬しなきゃならんだ!いや、ま、

まあ?確かに2人は可愛いけどさ!

「あのお兄さん達」

「うお、本物のリサちゃんだ!」

「てことはモカちゃんもやっぱりここにいんのか!なあ!そうなんだろ?」

「君達ねー他のお客様の迷惑になるからやめてくれよ」

店長がかなり優しく言うも聞き耳を持たない、コンビニの店長つても大変だなー

「アタシ目的で来るのはありがたいがとうございます、でも……アタシ彼氏いますよ?」

「え!?ま、まじかよー!」

ええー!リサさん彼氏いたの!?!だ、だったら必然的にリサさんはアタシ候補から抜けてしまうのか…

あー可愛いからちよつとだけ期待してたんだけどなー

「そう、アタシはこの子、レイと付き合ってるからーよろしくね♪」

「……………へ?」

「(話合わせてよ!)」

「ツ!は、はい」

小声でそう言った言葉を次ぐに聞きいれ俺はリサさんの彼氏役をすることになった。

男達は激怒したがリサさんの作り話の俺とのエピソードを話したところ

「うう!お前!大したやつだ!お前がリサちゃんにふさわしいぜ…!俺はあんた達の話に感動したぜ!うおおおん!」

い、いい歳したやつがコンビニで泣くなよ

「ちよつとまで!も、モカちゃんは?」

「……あ、モカちゃんは俺と付き合ってます」

「ふん、お前になら任せられる」グツ

この2人目のやつは一体何を基準にあんたには任せられるなんて言ってるんだ?

てか店長勝手にそんなこと言っているのか!?!未成年と付き合うって結構やばいことだぞ!?

「あばよー!今度はちゃんと客としてくるぜ!」

「スマイルも忘れずにな!」

うちはネットク (マックではない) からスマイルなんてねーよ!

「ふう、何とかかりましたね」

「え?あ、うん!そのーごめんね?彼氏役なんて押し付けて」

「い、いえいえ！むしろ嬉しかったと言うかなんと言うか…」

い、いや何言ってるんだよ!?俺にはアサシンと言う心に決めた人が…
!で、でもリサさんがアサシンなら?!

いける!いけるぞ!うおおー!

「あ、店長もう6月ですよ?」

「あーあ!あー忘れてた」

「今月もアタシとモカとレイに焼肉奢ってくださいね♪」

「まったく高校生を雇うのも大変だな」

そう言えば収入の少ない俺達には月一で店長が焼肉を奢ってくれ
るって話があったな!

先月忘れてるけどね、まあ人の金で食える焼肉ほど美味しいものは
ないだろ。異論は認める。

「はい、じゃあーちゃんと働いてな」

『はい』

その後は喋ることなく俺達は黙々と業務を行った。

途中三馬鹿がやって来たがアイツらも一応マナーというものは
知っているたのかバイト中の俺に話しかけることはなかった。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

リサさんと俺は終わる時間が一緒だったから途中まで帰ることに
なった。

帰り際に店長にお熱いねえーと言われた時リサさんが全力で否定
してた時は泣きそうになった。

「あはは、今日は本当にごめんね?」

「いやいいですよ、でも人気者は大変っすねー」

「まあそれだけRosealiaの人気があるってことだよね、なんか
嬉しいなー!」

自分の所属しているバンドの人数が出れば嬉しいのは当然だ。俺
もリサさんの立場なら喜んでるに決まってる。

「……あのリサさん」

「ん?なに?」

「急に聞くのもあれですけど……4月29日何してましたか？」

「えー前も答えたと思うけどその日は日菜とショッピングモールで買い物してたって」

「！そ、そうでしたそうでした！あはは！すみません、今のは忘れてください」

そう言えば初期の頃に聞いてたんだっ！完全に忘れてたよ！

「……その日何かあったの？」

「いや……ちよつと気になって」

「なーに、お姉さんには話ないのかな？ほれほれー」

「うう」

リサさんは肘でグリグリしてくる。まさかりサさんから体を触られることになるとは思ひもしなかつたぜ

「あはは！冗談だよ！」

「……はは」

冗談で済むならいいけどね！

「所でレイはさゆ、友希那のことどう思ってるの？」

「え？いやだから友達以上だと思ってますって」

「……やっぱり友希那とはいっぱいお話したい？」

「???」

どう行つた意味でこのことを聞いているんだ？

はっ!?ま、まさか俺が友希那さんと話すことに対して嫉妬してる、

とかか!?

いやまだわからない！ならここで揺さぶりをかけて……!

「……俺が友希那さんと仲良くするのは嫌ですか？」

俺に対して特別な感情があるのなら……ここで反応をするはず!

「……そりゃー、まあ、困るというか……悲しいというか」

「ツー」

「あはは、ま、またね！」

「ちよーリサさん！ね！リサさんってば！」

俺は叫ぶもりサさんは止まることなく走ってどこかへ行ってしまった。

「ええ、1番困る返答なんすけど…?」

宿泊研修の前に悩みの種が増えたんですけどー!

「……まあいいや、家帰って掃除しよう」

家に帰って掃除して、晩御飯作って風呂入って寝るか

そう考えながらレイは強い街灯の下を歩きながら帰ったのであつた。

◆ ◆ ◆

「〜♪」

こないだ冴えカノのアニメを見たばかりだからOPを鼻歌してしまふ。

掃除はいいものだ。暇になれば掃除をしていいように時間を潰せれる。

「〜♪と」

急に掃除機が止まってしまった。なんだ?故障か?確かにもう数年近く使っているが雑に使った覚えはないぞ?

コンセントを見てみるとプラグが外れていたようだ。

「つておい!」

なんでか知らんがコンセントのカバーも一緒に外れていたようだ。

「おいおいこれ大丈夫なのか?」

なんか配線とか色々あるんですけど…?勝手に触らず業者さんとか呼んだ方がいいのか?でもでも金かかるし、んー

悩みながらコンセントの元に近づくと

「ツーは?いや……これつて!」

明らかに下のコンセントの上に置かれてない黒いプラスチックの何かが置かれていた。

なんかピコピコ光ってるぞ?な、なんだこれ…?

「……………ま、まじか…!」

iPadにて調べてみるとなんと盗聴器の可能性が高いと調べたらわかった。

よくコンセントの中に隠すのは常識?らしい。一体なんの常識なのだろうか

「はっ！姉貴のファンがつけた、とかか？」

言っちゃ悪いが姉貴は超がつく売れっ子の、そして人気の作家さん、そんな人の異常なファンが仕掛けた、とかか？

でも異常と言えば俺の幼馴染も…確かに家には何度か来たことあるけどさーその時に仕掛けたとかか？

「……確かめよう」

まさか掃除してて盗聴器を見つけるとはどんな運命だったのだろうか。神は俺の味方をしているのか敵をしているのかわからないな

「携帯、はなくしてるー」

おい幼馴染の携帯の番号とか俺覚えてないぞ！それに今はアプリで無料通話もできるしさー！

「あ、ちよつと待てよ」

確かこの辺に…！

あつた！小学校の時の連絡網！生徒さんの電話番号が書かれていますやっ！

これでアイツらの番号がわかるぞ！まずはモカからだ！

「……もしもし、青葉ですけど」

「あ、神崎レイです。おばさんお久しぶりです」

「あらあらーレイさん、声が随分と低くなりましたねー」

「あ、はい。あのモカ…いますか？」

「モカちゃんですね、ちよつと待っててねー」

んー相交わすモカと少し似たような声音、やはり親子だな

「もしもーし、れーくんどつたの〜？」

「単刀直入に聞くぞ」

俺は家に盗聴器を仕掛けたかとシンプルに聞いてみた？

「いやーさすがにモカちゃんそんなことしませんよー、もしかしてひーちゃんにも聞く感じ？」

「ん？ああ、悪いけどひまりの連絡先聞いてもいいか？」

今回はたまたまモカの家番号が変わってなかったから良かったものの他の人達も変わってないとはわからないからな

「ひーちゃんなら今りんちゃんとりこさんと通話してるから聞こうか

「？」

「……んーまあみんなに知られるのは別にいいや」

「てか俺抜きで何楽しいことやってんだよ!?朝日奈さんが言ってた連絡先交換するってのはこの意味だったのか!」

「ひーちゃんも知らないだつてー、カッターシャツなら盗んだけど、だつてさー」

「よーし、明日おしおきしてやる」

「……大丈夫?なーちゃんとかいるし結構危なくない?」

「そうなんだよ、つたく、誰がしかけたんだか……とりあえずモカとひまりではないことはわかった、疑って悪かったな」

「ううん、モカちゃんもひーちゃんも気にしないから大丈夫」

「……じゃあそろそろ」

電話を切ろうと別れの挨拶をしようとした時

「あ、実はモカちゃん今下に何も履いて」

「ふん!」

受話器を直ぐに起きたモカとの電話を切った。

次は巴に聞くか……連絡先あつてくれ!

「もしもし宇田川です、いや大悪魔宇田川だ」

「レイだ、巴いる?」

「レイ兄ー!うん!お姉ちゃんに変わるね!」

あこ……お前俺じゃなかったら引かれてるぞ?

待つこと数分

「な、なんだよレイ……ふふ!で、電話先で罵倒してくれるのか?は、はははあ」

「………単刀直入に聞くぞ」

「？」

俺はモカ同様に盗聴器を仕掛けてないかと聞いてみた。

「ぬあーその手があったか!」

「はー?」

「レイ!今すぐにあたしの部屋に盗聴器と監視カメラを!これで常に牢獄プレイが」

「はい、さよならー」

と、とりあえず巴ではないな…

「てか千紗さんに連絡しないとー!」

もし本当に姉貴のファンが仕掛けていたのなら大問題だ!一応話しておかないと!

連絡先はメモで貰ってるからその番号にかけてみる。

「……………もしもし、なんだレイか?結婚してくれる気になってれたのか?」

「お久しぶりです、あと結婚はしません、少し話があるんですけど今話せますか?」

「ん?今か?」

「うええーん!死ぬ!あたし死んじやう!死んじやうよー!」

「黙ってかけ!お前が脚本家に色々言ったからこうなってるんだろ!」

「聞いている通りお前の馬鹿姉貴が脚本家に色々言ってるよ!」

「……………すみませんすみません!うちの馬鹿姉貴が本当に迷惑かけましたああ!」

あの馬鹿姉貴は何やってんだよ!?アニメ作るにあたって脚本は必需品!それ作る脚本家を怒らせる?って何してんだか!

「それでなんだ?」

「……………いえ、落ち着いたらまた連絡してください」

「?わかった、所で式場の話なんだが」

「……………」

今回ばかりは無言で受話器を直しました。

結婚のことは置いて次は

「……………つぐみか」

家に来たことがある人は俺の幼馴染、千紗さん、氷川さん、結弦さん……………あとの3人は今度聞くとして今日の最後はつぐみか

まあつぐみがそんなことする子だとは思わないけど一応ね、一応聞かないと!

「……………あ、もしもし神崎レイです。あのつぐみいますか?」

「うん、ずっと電話来るの待ってたよ?」

「あ、待ってくれてたのか……ん?」

「……やっど電話かけてくれたね、ずっと、ずつーと待ってたんだよ?」

「……………へえ?」

俺は一体何が起こったのか理解するのに少し時間が掛かり、気づいた頃には受話器から手を離していたのであった。

自慰行為中の音を聞かれたことありますか？

つぐみのやつに電話を掛けたらわけのわからないことを言っていた。理解するのに時間がかかりそのままつぐみに問いただした。

「……つぐみ、今なんて？」

「だから電話かけてくるの知ってたから待ってたんだよ？」
「????」

電話かけてくるの知ってたから待ってた？いや…は？この子は一体何を言ってるんだ？

「……盗聴器、見つけたんだよね？」

「ツ！……お前が仕掛けたのか？」

「うん！」

「う、うん、ってお前」

一体いつ仕掛けたんだ？前に俺の家に来た時怪しい動きなんてしてなかった…！

仕掛けるタイミングなんてあるはずがない！

「………と、とりあえず今から会えないか？会ってちゃんと話をしよう」

「……うん、わかった！いつもの公園でいい？」

「あ、ああ」

なんでつぐみのやつこんなに楽しそうにしてんだ…？

わ、わからない。つぐみが一体何を考えて俺の部屋に盗聴器を仕掛けたのかわからない。

わからないから…会って確かめる！

「すぐに行くから待っていてくれ」

「うん！」

俺は急いで準備をした。帰ってきたばかりだから制服の姿のまま革靴を履き、一応護身用として小さい頃親父と野球してた時に使ったカラーバットを持っていく。

公園に着くとまだつぐみはいないようだ。

俺は某騎士王みたくバットを地面につけて構えていた。

確かに考えるとつぐみの方ががこの公園からは少し離れているな…俺より遅く着くのは当たり前か

「……だーれだ」

「ッ!？」

急に後ろから顔を押えられ俺の視界は真っ黒になる。

よく恋人同士であるだーれだってやつなのだろうか。

「っ、つぐみか?」

「うん! 正解! レイ君やつぱり制服で来たんだね! 着替えてる音なかったからすぐわかったよ!」

「…………お前一体何が目的だ」

「…………なに? 怖いよレイ君?」

「こ、怖い、だと?」

「ふざけんな…! 俺の方がお前より怖いっての!？」

「あっ、そうだよね…ごめんなさい」

「ッ! わ、わかればいいんだよ」

な、なんだよ! つぐみのやつは俺に頭を下げてごめんなさいとお詫びの言葉を述べていた。

それに対して俺は動揺して適当に返事をしてしまったが…あつてるだろうか

「…………一体何が目的でこ、こんなことしてるんだ?」

「目的…? 盗聴するのに目的とかあるの?」

「お前何言ってるの…?」

目的なしに盗聴してるとでも言いたいのかよあんたは!？」

「レイ君の家結構仕掛けてるよ? 気づいてくれた?」

「…………く、狂ってやがる…!」

「レイ君の部屋にも仕掛けてるんだよ?」

「お前なにやってんの!？」

俺の部屋にも仕掛けてるだと?」

「ッ! つ、つぐみさ、さん? も、もしかして?」

「…………今滯奈さん家にいないもんね」

「お、おう」

う、嘘だ！そんなの嘘だ信じないぞ！盗聴器はリビングだけだ！
俺の部屋になんてかけてない…よね？！

「イヤホンなしでエッチな動画見るなんてね！」

「ああああああああああああ！」

「レイ君の自慰行為の音…とてもドキドキしたよ！」

「ああー！あ！あ！あああああ！！」

俺は夜の公園で一人叫びしまいには持参したバットで地面を叩きつけていた。

バキツと嫌な音が聞こえ親父との思い出が詰まったカラーバット見事に壊れたのであった。

「お、お前どこまで聞いた！」

「んー最後まで？」

「……はああああ、何やってんだよ本当」

恥ずかしくてつぐみの顔がまともに見られない……！

姉貴がいる時なんていつやってくるかわからないだろ！男子高校生
の性事情舐めんのよ！？

そりゃ誰だって抜いたりはするだろ！俺は悪くない！悪いのは聞
いたつぐみだ！

「だ、男子って本当に擦るんだね」キヤー

「……逆に女子は電マとか道具に頼るんだな！」

「え！そ、そうなの！？」

「知らないのかよ！？」

もうつぐみってなんなんの！？今まで健全なThe普通の人って
思ってたのにあんたが今幼馴染の中で一番異常ですよ！？

「録音してるけど聞く？」

「誰が自分のオナニーの音聞くんだよ！？」

「……だよね」

何少ししよぼんとしてんだよ！？お前本当に大丈夫か！？

「てか話をそらすな！なんで俺の部屋に盗聴器仕掛けてんだよ！」

「……え？だって」

「だって？」

「年頃の男子は盗聴されると喜ぶって……母さんが」

「あの人娘に何を教えてんだよおおおおおおお!!」

確かにちよつとおかしい奴とは思ってたさ!よくこの人からまともな人が産まれたなつて思うほどにさー

義嗣さんがいい人だから多分その血を引き継いだと思ったら違ってたか!

「でもレイ君喜んでたし成功だね!」

「喜んでねーだろ!」

何度も言うが勘弁してくれよー!俺の幼馴染が露出狂!ビッチ!ドM!エロ同人誌作家!そして盗聴癖!もう全員が異常なやつなんですけど!?

「あの一ちよつと君達」

『ひっ!』

「警察だけど……こんな時間に何してるのかな?」

ええー!な、なんで警察がここに!てかまだ夜中とかじゃないだろ!なんで俺たちに話かけるんだ?

「住人から叫び声が聞こえたつて通報が入っね」

「うう」

「つ、つぐみ、大丈夫だからな」

怯えるように俺の後ろに隠れる。いやなんか普通のつぐみならこうなんだけど今となればどうも思わんな……てか叫び声つて俺が戦犯じゃんか!

「少し話は聞かしてもらったよ」

『ッ!』

「君、この子の家に盗聴器を仕掛けてるつて本当か!」

「……え?俺!」

「そうだ!君がこの子の部屋に盗聴器を仕掛けたつてさつき話してただろ!」

なんで!?!さつスキの会話からしてどうやって俺がつぐみの部屋に盗聴器を仕掛けたつてなるか教えて欲しいんですけど!?

てか俺は加害者じゃない!被害者だ!

「お巡りさん違います！盗聴器を仕掛けたのは私です！」

「ツ！き、君なのか!？」

つぐみさーん！あんた何言ってるの!?!いや言ってることは正しいけどさー！

「……………」チラ

な、なんだその助けを求めるような目は！何か策があつて警察の人に自首したんじゃないのかよ!?!

でも…幼馴染から犯罪者が出るのは流石にやばいよな!?!

「ちよ、ちよつとお巡りさん！は、話を聞いてくれないか!？」

「な、なんだい」

「い、いやそのーとりあえずつぐみの手を離してくれませんか？」

「……………わかった、話を聞こう」

おお、物分りのいい人だったようだ。助かったー

「えつと実は…………」

つて！俺も話を考えてねえー！ど、どうしよう何かいいては！何か、何かないか何かないか！

「ツ！そ、そうなんです！実は俺盗聴されたい癖があるんです！」

「……………は、はあ」

「彼女には俺から盗聴するようにつて伝えたんです！」

「あ！でも盗聴器つて言つても携帯のアプリで通話状態にして放置するつてやつですー！」

なんか巴みたいなドMになつてしまったなー！

頼む…！これで引いてくださいお願いします！何でもしませんがらー！

「……………それは本当なのかい?？」

「はい、私はいやいやにやらされてました」

嘘つけこの野郎！ふざけんなよ!?!俺が完全にドMじゃないか!?!

「……………んー複雑な関係だったのか」

「ま、まあ世の中には変な性癖の人もあるからね…今回は大目に見るけど程々にしなよう…それじゃあ」

「あ、はい……………あ、はは、ははは」

あれ？なんでだろう、涙が勝手に出るんですけど…？そしてなんか俺も変なやつ扱いされたんですけど…？俺も含めて幼馴染全員変態不審者さんになってしまったんですけど…？

「ふう、レイ君助かったよ、あのお巡りさん優しい人でよかったねー！」
「うう、よ、よくねーよー！」

危うく2人ともこの歳で前科持ちになるところだったぞ…てかつぐみに関しては完全に犯罪行動してるけどな！？」

「とりあえず、とりあえず話を聞いてくれ」

「うん！」

「…あのなつぐみ、お前は騙されてる」

「え？」

「年頃の男子は盗聴なんかされて喜ぶわけがないんだ」

「…もう、私のことからかってる？いくら普通だからってそれぐらいは知ってるよー！」

「こ、こここまで普通のことだと信じ込ませるなんて洗脳か何かしてるのだろうか？」

今の状態ならちゃんと話せばつぐみは理解してくれるかもしれない！
い！てか理解してくれよ！？」

「いいか？普通の子は盗聴なんてしないんだ」

「…うう、嘘だよ」

「つぐみ！」ガシ

「は、はいいー！」

信じようとしないうつぐみに対して俺は肩に手を置きちゃんと目を見て話す。

「俺の目が嘘をついてるように見えるか？」

「…も、もしかして！わ、わわわ私やっちゃいけないことしてるうう!!？」

「あ、ああ」

「これって犯罪!？」

「…ま、まあ俺だったから大丈夫だよ」

「うう、嘘だあーお母さんなんでこんな嘘ついたのー！」

こればかりは純粹すぎたつぐみにも非があるのだろうか、でも一番悪いのはこんなこと教えたあの人だけどさ

「……それに俺だけならまだしも姉貴がいるからさ……大事になったらかなりやばい」

「今すぐ回収しよう！」

「だ、だな！」

つぐみのやつは事の重大さをすぐに気づき自ら盗聴器を回収しようと言いだした。

俺達2人は走って自分の家に着く、そこからつぐみはすぐに盗聴器の回収。

もう家中のたぐさんのところから盗聴器が出てきてかなり引いたが……今回でことが済むのなら許そう。

「てかよく仕掛けたな」

「そ、それは……あはは、夜中に侵入してたりしたから……」

「……………はあ、今後は絶対するなよな」

「は、はい」

この子盗聴するだけでなく勝手に家に侵入してたのかよ!?

てか待って……!

「僕は君のこと何でも知ってるのさ」

アサシンがよく俺に言っている言葉だ。

なんで俺のことを知ってるのか、それは盗聴してたから……?

となるとつぐみがアサシンの可能性は他の誰よりも格段に高い!

「ここはこれで終わりつと、最後はレイ君の部屋だね」

「……な、なあつぐみ」

「?なに?」

「あ、いや……4月29日何してた?」

「4月29日?」

ここで俺の求めている答えがやってくるのか、それともただ単にやっぱり母親に騙されてる盗聴してただけなのか

さあどう答える!

「確かその日は日菜先輩と生徒会室にいたような?」

「……日菜さんはその日リサさんと買い物に行ってたようだけど？」
「んーだったら1人だったのかな？だってもう1ヶ月も前の話だから覚えてないよ」

「……………だよな、すまん今は忘れてくれ」

「?……変なレイ君」

反応から焦った様子はなかった、ただ単に本当に覚えてなかったから怪しい回答をしただけだろうか……。

そりやもう1ヶ月も前のことなんてそう覚えてないよな……今後この聞き方は変えた方がいいな

「てかつぐみ盗聴してたなら姉貴が神奈であることも知ってたんじゃないのか？」

「……うん、知ってた、だからあの日みんなに家に行こうって提案したの」

「……………あわよくばサインをいただこうと？」

「うんー」

通りで色紙を持って来てたわけだ……あの時は用意周到だなとしか思ってたなかった。

でもよくよく考えればおかしいことだよな!?

てか一体いつから仕掛けていたんだ? き、気になるけど聞くのが怖い……!

「ほら俺の部屋だ、早く回収してくれ」

「こ、ここのでレイ君は……」

「いらんことは思い出すな! てか録音した音も消せよな!」

「……………」

「……………つぐみ?」

な、なんだよ急に黙り込んで、何か返事してもらわないとなんか困るんですけどー!

「……………ねえレイ君」

「おう」

「ダメだってわかってるけどさ……レイ君の部屋だけ仕掛けとくのはダメ?」

「ダメです、早く回収してください」

何を言い出すかと思ったらそんなことかよ!?

ダメです! 年頃の男子高校生は色々したいことがあるのでダメなんです!

「お願い! もうレイ君の寝息聞かないと眠れないの!」

「お前の体おかしいだろ!」

「お願いします! うちでサービスするから! せ、それでもダメなら私もレイ君にじ、自慰行為の時の音聞かせるからあ!」

「そそそんな音聞かんくていいわ!」

こちとらひまりがいじってるどころ見たことあるんだぞ!? 音で満足するわけが! って違う! 何言ってるんだよ俺は!?

「やっちゃいけないことだつてわかってるけどお願いします! 一生のお願い!」

これほどクソみたいな一生のお願いを聞いたことがあるだろうか? あるわけないよな!?

「……はあ、つたく俺に彼女ができるまでな」

「え?」

「だ、だから彼女ができるまでは我慢してやるつて言ってるんだ、こ、これで勘弁してくれ」

将来アサシンの結ばれていぎ部屋でイチヤイチャすることになった時間かれたりしてたらまずいだろ?!

だから俺は彼女ができるまでつて提案をしたんだ。

とりあえずアサシンを見つけるまではオナ禁つて所か、まあアサシンを見つけるための願掛けだと思えば安いものか?!

「でもこのことは絶対誰にも言うな、約束できるか?」

「うん! うん! 絶対言わない! 約束する!」

やったー! と言いなながら俺の部屋ではしゃぐつぐみを見て俺は幼馴染に対して少し甘いのではないかと思つてしまった。

いや幼馴染と言うよりつぐみに甘いと言つた方が正しいかもしれん……

「……まあこれでつぐみは普通ではなくなつたな」

「うう、だ、大丈夫！誰にもバレなきや犯罪じゃないよね！」

「……はいはい、そうですね」

その後つぐみはウキウキ気分のまま俺の家を後にした。

恐らくだが今日の夜も俺の生活音を盗聴するんだろう。が

ふ、馬鹿め！盗聴されると知ったなら部屋生活せずにリビングで生活すればいいんだよ！あつはは！そんな馬鹿みたいに受け入れるわけねーだろ！

「レイ君！」

「はっ！お、おう」

「宿泊研修！楽しもうね！」

「……あ、はい」

「それじゃ！いい夜をー！」

たくさんの盗聴器を袋に入れ、それを手に持ちながらつぐみは帰って行った。警察に見つかれば終わりだな

「宿泊研修か……無事に俺は生還できるのだろうか」

幼馴染全員が異常なやつらでまともじゃないことを知ってしまった。

そんなヤツらと宿泊研修なんて……何も起きないはずがない！

「よ、余生を満喫しようか」

レイの夜は今から始まる。貯めてたアニメを見ながらそのままリビングで一夜をすごしたようだ。

女子湯に入ったことありますか？

今日から2泊3日の宿泊研修が始まる。

先日つぐみの件があり無事に俺の幼馴染は全員が変態だと発覚した。

全く…どうかと思うぞ？俺の健全な幼馴染はもう二度と帰ってこないだろう。

例えば幼馴染全員が頭に強い衝撃でも加わりものの弾みで記憶が吹き飛んでくれない限り戻ることはない。

「(つてそんなこと起きませんよねー)」

「?どうした、難しい顔して」

「……神様は俺を味方してくれないのさ」

「何言ってるんのお前」

「なんで言ってることがわからねえんだよ」

君みたいなモテ男にはこんな変態幼馴染なんていないんでしょうね、柊優が羨ましいよ

「ねえ」 チョンチョン

「……………」

「ねえって、無視しないで」

「……なんだよ蘭、一応聞くがお前がこの席勝手に決めたんだろ？」

「当たり前じゃん？」

「ーッ、はあ」

俺達は今宿泊研修の泊まり先に向かうためバスで移動中なんだ。

そして俺の隣に座ってるのはもちろん柊優、その後ろの5人席に座ってるのは右から露出狂、匂いフェチ(ビッチ)、女体化大好き変態、

ドM、盗聴癖

俺の元健全幼馴染、なかよし五人衆、略して仲良し部、いやいや仲良し部です。漢字です。

って冗談はここまですてだ。

この席順なんだが朝教室に着くと勝手に決まっていた。ちなみに朝日奈さんが

「朝日奈様！お菓子あるぜ！」

「え、今俺の隣朝日奈様が座ってるの？夢……い、痛い！足の小指ぶつけてみたら痛てえ！」

「まじねーわー！」

多分だが由明日が喋らない分優亜が多く喋ってんだろう。てか夢かどうか確認するなら頬をつねるだけでいいと思う。

「……ありがとう」

「（早くここから抜け出したい、密ですよ、暑いですよ！）」

皆さん密は避けましょうね、いや笑い事じゃねーからな

「レイ夜桜に膝枕して」

「嫌だよ！なんで俺が終優に膝枕してって言わねーといけねーんだよ」

「夜桜じゃない、あんたが膝枕するの」

「い！や！です！」

「どうしたレイ、いきなり大声出して」

「な、なんでもないです！」

蘭と小声で喋ってたが咄嗟に大きな声でいやですと言ってしまった。

ま、まあそりや急に大声出したら気になるよな

「ねえモカーあの計画ちゃんと大丈夫？」

「大丈夫大丈夫く例のものもちやんと店長から貰ってきたよ」

「……これ中、おっと安全だね、」

なに!?お前らなにしろつと俺に聞こえる声で言つての!?

こ、怖いよ！安全つて何!?店長から貰った物つて何!?

「レイ君、夜が楽しみだね！」

「れーくんお覚悟」

『ふっふっふー』

「……………」ガタガタガタ

「おいお前大丈夫か？熱でも……」

「だ、大丈夫！ちよつと寒気が」

夜は押し入れで寝ようかな、なんちやつて

「巴ちゃんそのロープ何に使うの？」

「これか？これはー……ほら、宿泊先森の中だろ？だからコーターザンみたいにできねえかなって！」

「へー！面白そう！でも大丈夫かな？怪我とかしない？」

「大丈夫だ！痛みには慣れてる！」

「（本当は真夜中の森林でご主人様と散歩するために持ってきたんだけどな！）」

あなたの痛み慣れてるレベルではない、その痛みに快楽を覚えるんだよ!？」

「ん？つぐのその黒くてピコピコしてるやつは？」

「これ？新型のボイスレコーダー！生徒会の仕事でみんなの生活音録音してきてって言われたの！」

「……それって市販のものか？」

「え？どうだろう……母さんこうゆうのはネットにしか売ってないって言ってたよな？」

だって盗聴器ですもの、そんなものが市販で売られてたら全人類がみんな盗聴され放題じゃんか！

「……柊優」

「今度はなんだ」

「俺……生きて帰れるかな」

「だから何言ってるんだよ」

「だからなんでお前は何言ってるのかわからないんだよ!？」

理不尽極まりない怒り方をした後俺は前日あまり眠れなかったため死んだようにバスの中で眠っていたのであった。



俺は宿泊研修なんて楽しめるものではないと思ってた。

あの変態幼馴染共にあーやーこーやされると思ってたら！

「ひゃっつっつほおーいー!」バシヤン

近くのちようどいい高さの崖から川に飛び込む、大きな水しぶきが起きるも辺りには誰もいないから迷惑にはならない。

「おおおおおおー!」バシヤン

「ぷは！まさか課題終わったものから自由時間なんてな！」

「ふっ！流石学年1と3位、伊達じゃないぜ！」

『俺達もいるぞ！』バシヤン

「な、なんだ貴様らは！」

とは言うが課題は班行動、俺と柊優が二手に分かれて問題も解き、それをバレないように慎重に三馬鹿へ答案用紙を見せる！

なーにどっかの誰かさんが言うようにバレなきや犯罪じゃないんですよ！

「しかも他のやつらは好き好んで川に来ない！」

「ここはまさに俺達の領土も同然！」

「まーじ！ねーわー！」

由明日のやつは嬉しいのか一言ずつに水面を叩き喜びを体で表現していた。

「とりあえず行ける限界まで泳ぎに行こうぜ！」

「お！神崎にしては名案だな！」

「流石神崎君！今度レイコちゃんの連絡先教えてよ！」

「まじねーわー！」

「お前らやかましいーぞ！黙って俺についてこーい！」

なんだよ宿泊研修！馬鹿楽しいじゃねーか！

あいつらはいくら朝日奈さんがいても馬鹿のひまりがいる限り早く終わることはない！

と調子乗った結果

「……あれ、後ろの三馬鹿が消えたぞ？」

さつきまでついてきてたはず…、何故消えた!?

俺は急いで元の場所に戻ると

「み、見ろ朝日奈様だ！」

「ッ！」

あの俺達が飛び込んだ上で体操座りをして上から俺達を見下ろしていたのはネガティブこと朝日奈凜

その姿は水着、ではなく巻き巻きタオルを体に巻きつけていた。

まるで小学生がプールの授業の時にプールサイドで待機している

格好になったた。ぶつちやけ可愛い。

「……てか朝日奈さんがいるってことは!？」

「バシヤン〜!」

「ぬへ〜!」

何人ものやつが上から飛び降りて、俺は巻き添えをくらい水が口の中に入ってしまった。

「おい!危ないだろ!下に人がいるんだぞ!？」

一体どこの馬鹿どもだ!三馬鹿は朝日奈さんに見とれてるからないとして誰だ!？」

「どうもーモカちゃんですー」

「ツ!モカ!？」

「あと私も!」

「アタシもいるぜー!」

「私も!」

「な、なんでお前らが!」

はっ!まさか蘭も!

と思ひあたりを見渡すが蘭の姿はない。こいつらが蘭だけを置いて仲間外れにするようなことはしないと思うんだが……

「らーん、蘭も早く飛び降りなよ」

「ツ!い、行くから待ってて」

「あつれー?もしかして蘭怖くて飛び降りれないのかな?」

「ち、違うからー!そう!みんなが怪我しないか心配してるの!」

「多少の水しぶきは問題ない、レッツチャレンジ」

「!朝日奈凜……!」

ちやつかし蘭を煽っていく朝日奈さん、その姿で体育座りをしてなかったらかつこよかったのにな

「くっ!い、行くよ!見ててええー!」バシヤン

「あああああああ!」

「って!なんで俺目掛けてやってくるの!?!」

蘭がこつちにやって来たもんだから俺は急いで後ろに下がる。

無事に当たることはなかったが……

「ぶはーし、死ぬ、ちょ、レイ助けて……！」

「お、おい！大丈夫か！」

俺は急いで蘭を抱えるように近くによりそう。蘭のやつ泳げはするが……やはりあそこから飛び込むのは怖かったんだろう。

「や、やばい……人を殺してしまった……！」

朝日奈さんは崖の上から口を押え見下ろしていた。その表情がもうなんとさえばいいのやら

「ほら、蘭、落ち着いたか……？」

「は、はあ、ダメ、もつと抱いて」

「え？あーえーうん、おう」

息を整えるために浮き輪役が必要なのだろう。まさに俺がその浮き輪役ってやつだ。

「(てか濡れてる蘭か、可愛いな)」

この人が俺を女体化させたエロ同人誌を描く同人作家じゃなかったらよかったのに……。

「……もつと、もつと抱いて……？」

「い、いやこれ以上はちよつと……な」

『……………』ジーン

周りからの目が痛い！後なんか上からも目線感じるんですが！？

「……大丈夫、落ち着いたありがとう」

「お、おう」

すーっと俺から離れて行く蘭、すぐに距離を置かれるのはちよつと……

「じゃあ蘭も落ち着いたしみんなで遊ぼう」

「れーくんちよいちよい」

「……な、なんだよ」

流石に水着を着てませんでしたーって落ちはないよな！だってこんな沢山の人目に着くところで着てなかったらやばいもん

「どっちが長く潜れるか勝負しなーい？」

「いいぜー」

なんだよ普通の勝負か！よかったよかった！

『せーの!』

潜ると先程まで聞こえていた皆の声は聞こえなくなる。水のごぼごぼって音が聞こえて不思議な感覚になる。

瞑ってた目をゆっくりと開けてみると

「ごはっ!?!」

目の前にはモカの布一枚もない女性器が目の前にはあった。こいつは端っから潜り勝負をする気なんてなかったのだ。

俺は急いで上がろうとするが上からモカが俺の頭を押さえつける。

「んー!んんん!んんんんん!!?!」

おいおい!なんか近づいてくるんですけど!?!なんか押し当てようとしてるんですけど!?!

俺は咄嗟に顔を手で隠そうとしたその時

「あんっ!もう、れーくんのスケベさーん」

堂々とモカのおそこを触ってしまった。

「ぶあー!お、お前!なんで着てないんだよ!?!」

「いやーまさか直接接触してくれるなんてー今晚は初夜待ったなし?」

「んなわけねーだろ!てか質問に答えろ!」

「これはパレオと言って腰に布も巻くタイプの水着なのだ」

「……だから下を着てなくてもバレない?」

「いえーす」

「こ、こここまでしてくる理由は一体何なのだろうか…もう意味がわからん」

「レイ君!」

「ひ、ひまり、おま胸がその、背中に当たってる…!」

「当たってるじゃない当ててるの♪」

「ほらーレイ君の好きな巨乳だよー今なら胸に顔を押しさえつけ放題だわー!」

「ってぼうひてるー!」

話しながら水中に浮く俺を回転させ自分の胸に俺の顔を押し入れる。

く、悔しいがめちやくちや柔らかい。これが巨乳の力なのか！

「……………んーやっぱり水中だとあんまり匂いがしないや」

「……………あのーなんですつと抱きついてるんですか？」

「え？こうやって胸当てとくと興奮して勃つかなーって」

「えつと、ちなみにどこが？」

「ちん」

「女の子がそんな卑猥な言葉を言っってはなりません！」

俺はひまりの手を振りやり解きその場から少し離れる。

逃げるように泳ぎ少し進んだ先では

「お、今レイはお手隙か？」

「巴……………お前なんだよ」

「そ、そんなに怒らないでくれよ！皆の前でご主人様と呼ぶのは少し
恥ずかしい……………」

えードMのクセに恥ずかしいって概念あんの？なんか意外だなお
い

「で？なんだよ」

「は、はあはいいいなその上から目線、流石ご主人様だぜ」

「あのねーご主人様じゃないから」

「ご主人様！頼みがあります！」

「……………話を聞け」

俺は一体いつお前のご主人様になった!?!なるなんて一言も言っ
てないわ！

「アタシが潜るから頭を足で押さえつけてくれ！」

「……………」

「息継ぎしよう思っ上がろうとしたらご主人様によって止められて

…は、はあはあ、あ、アタシの体は一体酸素が足りなくなるどうなる
んだろうか！」

「この歳で人殺しにはなりたくないので遠慮します！」

俺はまたしてひまりと同様巴から距離を取る。やはり宿泊研修は
こうなる運命だったのだろうか…？

「レイ君、こっちこっち」

「? つぐみ」

つぐみは盗聴癖だからここで何か変なことをする気はないだろう。そう決めつけつぐみが呼び出した崖の裏側へと向かう。

「えへ、みんなに知られたくないからこつそり言うね」

「……………おう」

「ついさつきレイ君達が泊まる部屋に盗聴器仕掛けたから……押入れら辺で寝てくれない?」

「わかった」

「うん! ありがとう! これでも今日も熟睡できるよ!」

ふっ、悪いなつぐみ、場所がわかったなら押し入れの近くなんかで寝らんわ! 一番離れた入口付近で寝てやる!

不眠? なにそれ! 俺最近ずっと不眠気味だからそんなの知らないね!

つぐみと仲良く崖の裏から出ていく、つぐみが先頭でその後ろを着いていくように俺は進んでいたが

「ちよつと」

「ぬあ!」

急に誰かから引つ張られ俺は人目のつかない所へとまた戻っていた。

「げほ、ら、蘭? お前はなんだよ……」

「あんたなに女子と楽しくイチャイチャしてんの?」

「……………え? いや俺は何も」

まずい……ここで彼女達の素顔が蘭にバレたら色々almazい!

友情関係が壊れてしまうかもしれない……!

「あんたはあたしの彼氏、そして夜桜の彼女、つまりあたしと夜桜の物、そこまでわかる?」

「いや全然わからん」

「とにかく」ドン!

「ひっ!」

「……………あんたが他の女子とイチャイチャしてる所は見たく、ないの」
「……………え?」

そ、それは俺のことが…

「あ、勘違いしないで、あたしは夜桜とレイがイチャイチャしてる所だけを見たいの」

「で、ですよねー」

ちよつとだけ期待した俺が馬鹿でしたよ！

「……でもあたしも流石にマナーは知ってる」

「ん？」

「あんたのこと物扱いしてるし…今だけは何しても許してあげる」

「……えつとー蘭？自分が何言ってる分かってる…？」

「だからあんたの好きなようにあたしを使っていいって言ってるの、わからない？」

いやいや！わかるよ！わかりますよ!?!でも好きなように使ってくれつて…！

え！む、胸とか触ってもいいんですか…？

目の前の蘭はThe水着姿だ。肩には水滴がついてて唇はてかてか、髪も濡れてて髪を耳にかける仕草は俺の心を掴み取る。

いやいやダメだぞ神崎レイ！幼馴染だぞ!?!それに胸ならさつき十分ひまりで堪能した！

つてそうじゃなくて、えつと、そのーあー！

「お、俺には無理だ！」

「……ふーん、このへナチョコ腰抜けチキン野郎」

「い、言つとけ！」

あー無理やり犯すなんてことも今ならできたのか…つていや、しないけどさ、例えばの話だよ

「てか戻るぞ、ずっとここにいたら怪しまれる」

「大丈夫、クソヘナチョコゴミムシチキン野郎のレイにはあたしを襲う勇氣はなかったつて言うから」

「さつきと違うね!?!てかなんかさらに酷くなってね!?!」

相変わらず俺に対しての当たりは強いつと…仮にも彼女と言うのならほかの女子より尚更優しくして欲しいものだ。

「……………」

「?柎優、どうした?」

柎優のやつが腕を組みながら川の中で突っ立っていたから聞いてみた。

「……やばい」

「なーにが」

大方ひまりの大きな大きな胸を見て息子さんがメガ進化でもしたって話だろ。

なんですか、あんたもちやんと男だったんですね、よかったです。

「どうしよう、水着が流された」

「一体どうやったら流されるのかを教えてくださいよ!」

何がどうなって男子の水着が流されるんだよ!?!あんたちやんと履いてたよな!?!ズボンが流されるなんておかしいぞ!?

「ツ!しゆ…夜桜ーあんた腕組んで突っ立って何してるのー?」

なんか蘭のやつ悪さを企んでいる小悪魔みたいな笑顔で柎優の元に近づいてく。

てか一瞬柎優って呼ぼうとしてたよな!?

「……別に美竹さんには関係ない」

「何言ってるのか蘭ちゃんわからなーい」

「その甘ったるい声をやめろ、虫唾が走るわ!」

声優並のそのバリエーション、あなた朝日奈さんに稽古つけてあげればいいのではないだろうか!?

「おい、それ以上近づくな」

「えーなんでー?なんか隠していることが、いや隠している所でもあるのかーな!」

かーな!で水の中へ潜る蘭…え、いや蘭さんそれってよ…

「嘘に決まってるだろ履いてるっての」

「……夜桜殺す…!」

「レイ逃げるぞ、捕まったら死ぬと思え」

「ええええええええええええ!?!」

宿泊研修初日の自由時間、前半変態幼馴染と絡み後半は男子高校生軍団でドベのやつは夜好きな人を言う。という掛けの早泳ぎ競走を

行っていたのであった。



「はぁぁーしんど」

時刻は19時、普段より少しだけ早い入浴は体の芯から夜間の川で冷えた体を温めてくれる。

「ふいー生き返るー」

我ながらおじさんみたいな発言をしている自覚はある、が気持ちいから仕方がないじゃないか

「まさか今回も課題が終わったものから入浴とはなー」

混雑するから何人まで入ったらその後は待機という結構謎システム、まあ大浴場だとしても1度に入れる人数には限界があるからな

もちろん俺と柊優は男子の中では1番と2番で時終わり2人で温泉に行こうと約束したが…

「すまん、俺トイレ」

「……おっけー先入っとく」

とのことで2番の俺が何故か一番風呂を浴びていた。

「……………」ガラガラガラ

ドアが空くような音が聞こえた…。柊優がやってきたんだろうか

「遅かったな、なんだ、大便か？」

「ううん、服脱ぐのに時間がかかったの」

「?んーそか」

なんかどつかで聞いたことがあるような電子声…?てかこの声って!

「アサシン!?!」

「やっほー!君に会いたくなって来ちゃった♪」

俺の背中にアサシンの背中をあてお互い顔が見えない状態で同じ湯船に浸かっている。

背中合わせで浸かっていると云った方が伝わりやすいよな、そういう状況なんだ!

て、てかアサシンの背中柔けー、今すぐ後ろから抱きつきたいんですけど!

「……てかさ、ここにいてるってことは羽丘確定だろ」

「さあどうかなー僕が君のこと大好きすぎてやってきたかもしれないよ?」

「確かにお前ならやりかねないよな」

「さすが僕の大好きな人ことレイ君! わかってるー!」

「う、うっせー!」

くーなんで電子声なのだろうか! 君のその声を本当の声で! 肉声で聞いて俺の鼓膜にやきつけたい!

だってそうすればすぐに誰だかわかるだろ!?

「なあアサシンはもう俺達のサークルに入ってるのか?」

「……さあーどうだろうねーどう思う?」

「俺が知るわけないだろ」

今入ってるのなら燐子さん、モカ、ひまりの3人のうちの誰かになるってことか、そしてもしまだいないと言うはるのなら今後入ってくる人達

でもでも既にいるかもしれないし結局全員がアサシン候補になっ
てしまう。

「どうだい? サークル活動は楽しいかい?」

「……うん、アサシンが言ってた通りあそこでなら俺はやって行けると
思う」

特に燐子さん、あの人は俺と真剣に作品について向き合ってくれ
る。

お互いがアドバイスを出し合い切磋琢磨していく日々、そんなの充
実してるという言葉以外に何かあるだろうか。

「……じゃあ僕はコミフェスが始まるまでには入っておこうかな」

「とか言ってる既に入ってた?」

「さあーどうだろうねー」

「またそれかよ」

「君も薄々気づいているだろ?」

「??」

「僕が嘘つき屋さんってことにさ」

「ッ！」

恥ずかしがり屋さんで嘘つき屋さん：なんと言うか、複雑な性格をお持ちのようで何よりだ。

「アサシンってさ俺のことストーキングしてたり盗聴したりしてる：？」

「あはは！何言ってるの？お互い愛してるからストーキングするぐらい当然じゃないか」

「重！なんか急に愛が重くなった気がした!？」

「なんて嘘さ、僕は嘘つき屋さんだからね」

「……はーさいですか」

こいつらはアサシンを見つけるのは本当に苦労をかけるぞ？本当に俺は彼女を見つけ出せるのか？

「とは言っても本当、たまーに君がどんなことをしてるのかは見かける。特別ストーキングしてるわけじゃないから許して欲しい」

「……それも嘘か？」

「嘘だと思うならそう思えばいいよ」

んーやはり複雑だ、探ろうとすればするほど意味がわからなくなっていく

「とりあえずおっぱい揉ませてくれ」

「やーんちっちゃいのがバレれちゃーう♪」

「……………」

「うっそー大きいってバレちゃーう♪」

「……………」

「え？男だってバレちゃう？」

「その嘘は流石にやばい！」

俺に告白して人が女子ではなく男子だったとなると俺は多分告白してきた男をぶん殴って記憶を飛ばそうと思う！

「今日は君と沢山話せて楽しいな：ずっとこの時間が続けばいいのに」

「ッ！……それはまあ否定しない」

あの駅の時と同様なんの躊躇もなくアサシンは俺の指に自分の指

を絡めてきた。

お互いがお互いを意識して強く握ってしまおう。

「でもごめんね、そろそろ時間なんだ」

「時間？」

「うん……はい、これ」

「?……へアゴム？」

アサシンのやつは器用に手を使い俺の腕にへアゴムを通させた。

一体何が目的なのだろうか……?

「僕は君のことが本当に好きなんだ、君は僕のことどう思ってる？」

アサシンが俺のことを大好きなのはもう十分わかった。

次は俺か、俺がアサシンのことをどう思っているのか

「俺は！」

「それじゃーねーせいぜい長風呂楽しんでね」

「って話聞けよ!？」

俺の覚悟を返してくれ!てかお前が聞いたんだろ!?!最後まで返事しろっての!

「……また今度ね」

「ッ!？」

耳元に息を吹きかけるように小声でそう言う声は電子声ではなかった。どこかで聞いたような、聞いたことがないような声でそう囁かれた。

急いで後ろを振り向けばアサシンであろう人物のおしりだけが湯けむりに隠れず綺麗に見えた。

「……び、美ケツ……なのかな?」

そう思い数秒だけ思考が停止したが

「……髪洗おっと」

少しでもこの思考から逃れるために髪を洗う。次に体を洗いまた少しだけお湯に浸かる。

「終優のやつ遅いな」

まさか本当に大便でもしてるのか?

てか待ってくれ、さつきから誰もやってこないのはおかしいぞ?」

そもそもここは男子湯のはず、なのになんでさっきアサシンはやってきた…？

「い、いやいやないない！流石にない！」

俺は急いで大浴場から出ようとす。が

「うわあー！すっげえー！広いなー！」

「流石大浴場ー温泉なら全裸になってもおかしくないもんねー」

「お、モカ胸少し大きくなったー？」

「えへへ、好きな人に揉まれると大きくなるのかも知れませんが、なんつってー」

「ッ!?!」

凹どモカ、そしてひまりが俺の入っていた大浴場にやって来た。

こ、声を出して驚くことは絶対に許されぬ…！

「(あ、あいつやりやがった!)」

俺は絶対男湯に入った！念の為2回確認した！間違えるはずなんて絶対無い！

「(アサシンのやつ暖簾を架け替えたな!?)」

だとしても女子が来るのは遅すぎた、これも彼女が何かしたのだからか!?

「……………」

「蘭ちゃんどうしたの？元気ないような…」

「……………つぐみってバストいくつ？」

「ええ!?!い、いきなり何聞いてるの!?!」

「蘭は恥ずかしがり屋なので胸を隠すのであった…」

「そのナレーション的な言い方やめて、てか胸ないわけじゃないから、モカより大きいから」

「おっとー胸のサイズで勝負かな？ひーちゃんに勝つなんて千年早いよー」

何故ひまりと比べる話になっている！モカと蘭の話だろ！

て、てか蘭のやつ大きさはひまりに劣るが形がす、凄い…！なんて

エロ

「(って何考えてんだよ!?!)」

まずい！まずいまずい！かなりまずい！

今は入口奥から人声が聞こえたもんだから急いで湯船の奥にある岩場に隠れている。

人が集まってくればここに人がやってくるのも時間の問題……！

「（神崎レイ！高校生活史上最も過酷な状態になっております！）」

「（ふふ、レイ君……今頃楽しんでるかなー）」

レイは自分の危機的状況でいっぱいいっぱい。

一方アサシンは何食わぬ顔で楽しんでいるご様子。

さあレイは果たしてこの女湯樂園から抜け出すことはできるのだろうか！レイの運命は如何に！

女子湯に入ったことありますか？脱出編

俺、神崎レイは今人生の中で最も危機的状況になっている。

何故なら俺は今腰にタオルを巻き、大浴場（元男湯）の岩場に身を隠していた。

しかし：俺の未来の彼女ことアサシンのやつが恐らくだが自分が入って来た時には既に暖簾を変えていた、と思う。

じゃないとこんなことは起こらない！

そう、今この元男湯は現女湯となっており俺はその女湯の中にいるのだ。

ったく…こんな展開ギャンプで見たぞ？確かホンコイ、本物の恋って意味でカタカナでホンコイと読む作品の中であつた展開だ。

となるとアサシンはその漫画を知っている…？はたまたただの偶然か否か…って！そんなの考えてる場合じゃない！

こ、ここから抜け出す手段を考えなければ！

俺の手元にあるのは腰に巻いてるタオル、そして何故かアサシンに渡されたヘアゴム

うん、これでもうにかできる状況じゃねえー！

お、おしまいだ、俺の高校生活終わりだ…！女湯にいたなんてバラたらいじめられる！貶される！死んだ魚を見るような目で俺は見られ続けるだろう！

俺はそんな高校生活は送りたくない！ならば死にもぐるいで探せ！なに、この世の全てをそこに置いている訳では無い！答えぐらい見つかるだろ!?

「にしてもひーちゃんがかいよね〜」

「やっぱり大きくなる秘訣とかあるのかな！」

「え、つぐみ大きくなりたいの？」

「別にそう言う意味で聞いたんじゃないよ？ただ努力してるのかなって」

「つぐー流石につぐつても大きくはならないだろ」

「そうそう！いじつたら大きくなるかもだけどね♪」

『……………』

「あれ、私変なこと言った？」

「い、いやー！そのなんだ！体でも洗おうぜ！」

ひまりが問題発言をしたものの巴のその一言により騒動は幕を閉じた。

が、彼は瞼を閉じない、常に目を見開き脱出の好機を探す。のではなく

「A…D…C…おー！あれはEだろ！」

って違うー！何女子の胸見てサイズ診断してるんだ俺は!?馬鹿だろ！てか変態だろ！

待てよ?ざっと女子が20人弱、ってことは?

「おっぱいは約40個…!」

よくよく考えたらかなりすごい状況、えー俺もう完全にここから逃げ出せる気がしないんですけど!?

40個分の何かが絶対俺の行く手を邪魔するに決まってるじゃないか!

か、かくなる上は…!あまり不本意ではないが彼女に頼るしかない!

「ひーちゃん洗いつこしよ」

「いいよー!私から先に背中洗うね!」

「…まさかの胸で?」

「何言ってるんだよモカ、んなことひまりがするわけないだろ?」

「う、うん!こらモカ?流石に私もそろそろ胸いじりから抜けてくれないと怒るよ!」

「モカちゃんも程々にしないとだよ?」

「さーせんしたー」

嘘だ。巴が何も言わなかったら普通に胸を使って洗ってあげると返事をするところだったのだ。

「(今度ご主人様に胸で洗ってやるか…あは!ご褒美におしりペンペンしてくれんのかな!)」

巴も巴でもう先が危うい人物へとなってしまったようだ。この先

本当に大きな怪我をしないか心配である。

「……………」

その頃蘭は一人で黙々と体を洗っていた。

特別モカ達と話そうとする様子もなく淡々と上から体を丁寧に撫でるように洗っていく。

「…………ふう」

体の泡を洗い流し一息ついて空を見上げる。

綺麗な夜空に輝くのは星々、どこかの彼女なら星の鼓動を感じたと
言い出しそうな美しさがあった。

「…………月が綺麗」

ボソツと言ったその時

「ら、らーん、ヘルプミー」

「え…?」

俺は蘭が1人でいるタイミングを逃さなかった。

ずっと蘭を見てた。こいつなら俺を助けてくれるかもしれないと
いう謎の期待の眼差しを送り続けた結果奇跡を呼び起こした！

俺は岩場から腕だけを出しGoodサインを送っていた。ちなみに
だが小声でらーんと呼んでた。

結構急いでいる様子でこっちに誰かがやってくるのがお湯の音で
わかる。頼むから蘭であつてくれ…!

「レイ…あんたここで何してんの?」

「頼む信じてくれ、俺は嵌められたんだ!」

「…………誰に」

「……………しゆ、柊優に!」

柊優には後で事情を説明して何とかしてもらおう!蘭と喧嘩にな
るかもだけど許してくれー!

「…………へー、あいつなかなかいいことすんじやん」ボソ

「な、なんて?」

「なんでもない、てか胸見すぎ」

「ツ!す、すまん!」

今は岩場にて蘭と真正面から向き合い話をしていた。まあ…その、

どうしても蘭の胸に目がいきますよね、だってなんか形がエロいんですもん

「見てるくせに元気にはならないよね」

「へ？」

「……なに？見せつけてんの？」

「……ッ！ち、違う！さっきまで1人だったから隠してないだけだ！」
先程まで巻いていタオルだが1人だからよくね？ってことで外してたら……蘭に俺の大事な息子が見られちゃった。

「てかあんた付いてたのか……ちよつとシヨック」

「そりや付いとるわ!？」

「しかもちよつと大きいのもシヨック」

「え!?!俺って大きい方なのか!?!」

「うるさい、ちよつと黙って」

「ぶ、ぶびばせん」

急に口を押えられすみませんがもう原型を止めていない単語になっっていた。

「蘭ー何してるのー？」

「……なんでもない」

モカのやつ蘭が岩場でなんかコソコソしていることに気づいたのだろうか、話しかけていた。

「で、どうする?……ここであんたが学校中のみんなに嫌われてあたしの下僕になることは確定として……それからどうする?」

「いやいや!勝手に下僕確定しないでくれる!?!何か策がないか一緒に考えてくれよ!?!」

「……ほら、その彼女なんだろう?」

これはあれだ、ここで彼氏アピールをすることで助けしてくれるかもしれない!

だから決してアサシンを裏切った訳では無いぞ!?!

「いやあんた何言ってるの?」

「なんで俺のは聞かないんだよ!?!」

俺のこと自分の彼氏とか言うくせに俺が彼女なんだろう?って言うつ

てもこれか！もう二度と言わんわ！

「あ、一つだけ方法あるよ」

「ツ！なんだそれ！」

「……いやごめん、やっぱりないわ」

「んだよそれ！てかどんな策だったんだ？」

何か活気的な策で出来ないとなればそれはショックが大きいだろう。

「レイコなら行けると思ったけどヘアゴムがないから無理」

「……あるよ」

「は？」

「あるよおー！ヘアゴムあるよおー！」

俺を見せつけるよに腕を構え、着けていたヘアゴムを蘭に見せつける。

「なんで持ってるの？」

「……それはあれだ、気にするな！」

でもナイス策だ！俺がレイコになればここから抜け出せれる！おう！これはいける！いけるぞー！

「でも流石にあたし一人であんたをサポートするのは無理」

「……だから待ってて」

「待て待て待て待ってて！それってよ！」

『呼んだー？』

「ッ！」

岩場の上から俺を見下ろすのは変態幼馴染染集団の蘭を除く面々だった。

何となくわかってたさ、一人では無理って言って蘭の頼れる仲間なんてこいつらしかいないからな

「まさかそこまでして胸を見たがるとはくれーくんもとんだ変態さんですな」

「う、うるさい、ぶち殺すぞ」

「え？ぶち犯す？もう！レイ君の変態！」

「ぐはっ！ば、ばかお前！背中に綺麗なもみじができちまうだろ!？」

ひまりのやつに背中を思いつきり叩かれた。ヒリヒリしてるから綺麗な手形のもみじができたのは確定のようだ。

「蘭から話を聞いた時は驚いたぜ、まさかご主、っとレイがいるなんてな！」

「話聞いた時は嘘かと思っただけど……本当だったんだ」

「いや……うん」

君達の正体を知った時の俺の気持ち但至少でもわかってくれただろうか？

俺も信じたくないことだったが……目の前には事実しかないからな、信じるしかないのだ。

だから君達も女湯（元男湯）に俺がいる事実を受け入れるのだ！

「……って作戦なんだけど協力してくれるか？」

ゴクリ……俺は作戦をモカ達に話した。俺が髪を結んで女子のフリしてこの戦場から抜け出すって作戦だ。

その抜け出すまで彼女達にサポートをお願いするのだが……大丈夫だろうか？

「……それって大丈夫なのか？」

「バレないの？」

「大丈夫、レイの顔ならいける」

「なるほど」

「確かに行けそう」

モカとひまりは一度レイの女装姿を見たことがある。その時の光景を思い出したところレイ、いやレイコなら行けるだろうと言う謎の確信があった。

「よし、お前ら頼むぞ……できるだけ！目立たないまま！ここから抜け出すぞ！」

「よーし！えいえいおー！」

『……………』

「なんで！モカ！レイ君！サークルの時はやってくれるじゃん!？」

「……サークル活動の時はえいえいおーじゃないのでー」

「それにお前じゃなくて俺が言ってるし……」

『??』

余談だが蘭、巴、つぐみの3人はレイとモカとひまりがサークル活動を行っていることは何も知らなかった。

とりあえず今から行う作戦には関係がないため深追いされることはなかった。

「……………」

こないだ蘭に女装された時同様ヘアゴムを使いサイドテールを出現させる。

「……可愛い……!」

「ら、蘭今は我慢してくれ、頼む……!」

「後でじっくり見せてよね」

「あはは、出られたらな」

今は変態幼馴染集団に囲まれ岩場から場所を移していた。

壁を利用し一周する形で出口へと向かう。常に背中を見られない

まま行けば……!

「あ、ひまりちゃん達!何してるのー?」

『!?!?』

!!クラスの女子の一人が俺達に話をかけてきやがった!

ひ、ひまりの野郎……!胸だけでなく顔も広がったのか!?

「あれみんなして何してるの?」

「本当仲良しだよねー」

「てかモカちゃんスタイルよすぎ!あんなに食べてるのになんで太らないの!?!」

「……………」

モカのやつ露骨に邪魔すんかってよって顔に出てるんですけど!?

え、俺のためにそこまでの思いをして脱出させようと思ってくれてるのか!?

「……カロリーはひーちゃんに送ってるからね」

「それなんか前も聞いたような……」

「やっぱりバンド活動って体力使う?」

「ちよー使う!もうきつくて大変」

このままモカ達と話すだけで終わってくれ……！頼むから俺に気づかないでくれ！

「へー………で、その人誰？」

「知ってるか？人って寝てる時にもものすごく汗をかくらいんだ」

「え？うん……で、その人誰？」

「生徒会の仕事でインタビューに協力して欲しいんだ、この後時間あるかな？」

「……うん、だからその人」

「ちよつと、何レイコと話そうとしてるの？」

『……………』

クソうーダメだーもうおしまいだ！

てかバレたにも関わらずあんた達誤魔化し方下手くそすぎないか!? いや頑張っていたのは伝わったけどさー！

「きゃー！誰その子、めっちゃ可愛いじゃん！」

「ねえー！名前なんて言うの！てかこんな子うちにいたっけ？」

「……どことなく神崎君に似てる気がする」

「ツ！そ、ソンナコトナイヨ」

裏声で返事をしたがバレてない、よな……？こんな所でバレたら本当に終わりなんですけど!?

「この子はレイコ、神崎レイの双子の妹」

「ツ！ちよ、蘭!？」

「えー！それ本当!?!だから似てたんだ！」

「うちの学校に神崎君の妹なんていたんだ！」

「……いやーレイコはうちの生徒じゃないよーたまたま両親と旅行に来てたみたいなの」

「神崎君の両親……一体どんな人なんだろう」

うちの両親は姉貴よりクレイジーなやつだと思ってくれればそれでいい、父親に関しては厳しいだけだ。

「確かに週末だしねー泊まりには来るか」

「でも息子の宿泊研修先の宿に泊まる？」

「……そ、それは今日登山をしたので」

『なるほど!』

我ながらナイス嘘だと思う!よく思いついた俺!

「ねえねえ!家での神崎君ってどうなの!？」

「うん!常に家のことを考えてて料理をしては姉さんを喜ばせて家事全般が得意なんだよ!多分将来結婚したら育児も全力でサポートしてくれるはずだよ!」

「な、なんで羽沢さんが答えてるの…?」

「はっ!ね、ねえ!そうだよねレイコちゃん!？」

「え、うん」

「ここでその悪い性癖バレるようなことを言うじゃないよ!?!危ないだろ!」

「ツ!そ、そうだ、逆に俺…じゃなくて普段に、兄さんって学校ではどうなの…?」

「神崎君?ん!夜桜君と付き合ってるって話は本当なのかな?」

「ぐはっ!」

「神崎君が受けて夜桜君が攻めらしいよ」

「何言ってるの?実は逆かもしれないって話もあつたじゃない」

「え!でも神崎君のような中性的な顔の人が夜桜君に腰振ってるなんて…逆に打ち付けられるイメージしか浮かばないわ」

「……………」プルプルプル

お、落ち着いて!蘭さん落ち着いて!あなたは腐女子ではないかもしれないけど彼女達は残念ながらそのような人達なんでよ!」

「でもこないだ神崎君が駅で女性の人と話してるところ私見たよ?」

「ッ!」

な、なんだって!?!それって俺がアサシンと話していて携帯をなくしたあの日のことか!?

だとしたらこの目の前にいるモブ、いや女子生徒Aさんはアサシンの顔を見ている可能性が高いってことか…!」

ここに来てまさかの好機!この好機逃す訳には!

「その人のこと」

俺が女子生徒A子さんから情報を聞き出そうとしたその時!

「おーいもう入浴時間は終了だ、次の組があるから早くしろよな」
『はーい』

「……てことだから上がるうぜ」
「お、おう」

無事に抜け出せるのはいいがこのタイミングとは……！運がいいのか悪いのかよくわからんな

その後俺は無地に女湯（戦場）から帰還した。だがしかしその先には更なる壁というものがあったのだ。

そう、脱衣場……！俺以外の生徒、つまり女子生徒が濡れた体をタオルで拭き、下着に足を通してている。

そんな光景がどこを向いても目に突き刺さる！

「ねえつぐーちよつとブラのホック止めてくれない？1人でできるけどちよつとめんどくさい……」

「いいよ……はい！」

「ありがとうつぐー！」

「……………」

「あ、レイ君が止めたかった？」

「い、いや違う」

何故下からではなく上から付けたのか疑問に思っただけだ。なんてことは口が裂けても言えん

「レイも早く着替えなよ、今ならあたしがあんなの竿を隠してあげるからさ」

「隠すと言うよりも顔と重なってるんですが!？」

ち、近い！息があたる！あたってますよ蘭さん!?!てかそんなだと着替えれないだろ！

「気にしなくていいから、早く着替えなさい」

「んなまじまじみんなよ!?!」

「……はあ、シヨック、本当に付いてる」

「まだ立ち直ってなかったのかよ!?!」

シヨックを受けている蘭を後目に俺はパンツを履く、その後は急いで浴衣を着て変態幼馴染集団と脱衣場を後にする。

「……………とりあえず助かった、ありがとう、ございました」

「それよりもなんで女湯なんかにいたの？」

「実は柊優に嵌められたんだよな…」

「へーあいつ結構いいことするんだな」

「あいつはあんなやつだよ、知らなかったの？」

あ、あつれー普通なら嫌われるようなことしてると思うんですけど？いいことするなってなんだよ!?

「後でお礼言つところかな？」

「い、いや大丈夫！俺から話しておくからさー！」

「とりあえず本当にありがとう！そしてさようならー！」

このままではこいつらが直接柊優に話をしでかすと思った俺は、俺からお礼？を話しておくといいい無理やり話を終わらせた。

てかそもそも柊優は何もしてないんですけどね

「た、ただいまー」

「神崎遅いじゃないか！」

「神崎君！長風呂とは君は肌を気にするタイプの乙女心を持っているのかね！」

「まじねーわ！」

「……………あーはいはい」

部屋につけばこの三馬鹿の相手か…俺が休めれる場所は無いのだろうか？

「あれ、レイ戻ってきたのか、ほらコーヒー牛乳」

「あ、ありがとう」

「ほらお前らの分も買ってきたぞ」

「おー！流石夜桜！君がモテる理由がわかったぜ！」

「夜桜はイケメン、はつきりわかんだね」

「まじねーわ！」

「……………」

まあイケメンは否定しない、悔しいが男子から見ても柊優はイケメンだよな…俺もこんな顔で生まれてたらエロ同人誌のネタで使われることなんてなかっただろう。

「ところでレイ、お前どこ行ってたんだよ、風呂に入ってたか？」
「……それなんだけどき」

柘優にアサシンの罠にまんまとハマってしまったこと、そしてそのせいを柘優に押し付けたことを隠すことなく全て話した。

「……お、お前容赦って言葉知ってる？いくらなんでもそれ俺が100悪いやつじゃないか」

「いやーでもみんな何も思っていないようだったし？たまたま持ってたこのヘアゴムで髪縛ったおかげで女子には俺ってバレなかったし！」
「……………んーそうか」
「？」

一瞬の間はなんだったんだ？俺の気の所為…だよな？うん、多分そうだ。

「なあUNOしようぜ」

「いやいや！野球拳だろー！」

「まじねーわー！」

由明日のやつはスつとリュックからトランプを取り出していた。どうやらトランプを使った遊びがしたいようだ。

「まあお前が無事ならそれでよかった、明日は気をつけような」

「……………お、おう」

と柘優に全てを話したところで俺も遊ぼうと思った。しかし俺は忙しい身、少しでも内容が濃いSSを書かねばならない。

こんな所で三馬鹿と遊ぶような時間は俺にはないのだ。

リュックからiPadとキーボードを取り出し

「んじや俺ちよつと用事あるから小一時間ほど抜ける」

「えーまじかよ！夜はこれからだろ!？」

「これだからだからそれまでに用を済ませるんだろ！」

「おー！俺達のためにも思ってるの行動か！なに、神崎はもしかして俺のこと好きなの？」

「随分と脳中お花畑のようですね！」

「あつはは！まじねーわー！」

「お前はそろそろまじねーわー！以外の言葉を話せや!？」

久しぶりに1人ずつツツコミを入れたがまあきつい、もうこいつら3人が話し終わってからツツコミをしよう。

うるさい三馬鹿から解放され休憩室へと向かう。ここならあの部屋よりかは作業が捗るだろうと思ったが

「……まあそりや沢山人がいますよねー」

それに近くには卓球場やゲーセンだってある。そりや人だって集まるわ、他を探そう。

そうこうして静かな場所を探すこと数分

「あー」

「……ツ!?か、神崎君!」

あの女子生徒A子さん!ここであつたが100年目!あの時の話の続きを!

つて!あれは俺じゃなくてレイコが聞いてたつて設定だった!ど、どうやって聞き出そうか!

「神崎君!私何も見えてないから!」

「……へ?」

「駅で神崎君と話してた人、じゃない!紙袋の人なんて知らないの!」

「え?う、うん」

「あとレイコちゃんにも忘れるように伝えといてください!ああああああ!!」

「……………」

な、なるほど…大方アサシンがどこかしらで話を聞いてて脅したんだろう。殺さなかったただけまだマシだな、多分

となるとあの時いた幼馴染集団の確率がやはり高いのだろうか?それともアサシンのやつはあの時隠れていて話を聞いていた?

もしくは蘭達がそのことを話して聞いてしまった?とか、その点辺りか

「今度アサシンに聞いてみるか」

果たして彼女が本当のことを話してくれるのか、なんせアサシンは嘘つき屋さんだ。真実なんて話してくれないか

そんなことを考えながら適当に歩いていると

「あああああああああああゝぎもちいゝ」

「我々は宇宙人だくなんちやって」

「……はっ!？」

脱衣場から出てすぐにあるマッサージチェアに座りながら声を出していたのは朝日奈凜、だった。

「……………なに?」

「いや俺の前でその顔が通用すると思うなよ?」

「通用するとは思っていない、ただの照れ隠し」

「照れてんじやねーか!？」

その凜とした表情で淡々と言われても言葉が言葉だから結局かよ、って思ってしまう。

「なによ、1人で入ってた私を笑いに来たの?」

「それともほってっている私の体をエロい目で見に来たの?」

「なんでそうなる!？」

「……………そう、やっぱり私は魅力のない体なのね、全身整形するためにお金貯めようかな、あはは」

「いや、だから朝日奈さんは十分発育いいから!」

このセリフだけを聞かれていたら俺はやばいことを言ってるやつだと思われるよな

「……………じゃああなたはなんでここにいるのよ」

「なんで?んー朝日奈さんこそなんでここに?」

「見て分からない?マッサージチェアに座ってるのよ」

「いやそれはわかるよ」

あーそう言えば1人で風呂に入ってた私を笑いに来たの?とか言ってたから…風呂から上がったばかりだったのか

「後部屋に戻りづらい」

「は?なんでだよ、モカとひまりがいるじゃんか」

「……………美竹さんに合わせる顔がない」

「??？」

話を聞くと昼間の蘭が溺れかけた事故を自分のせいだと攻め込ん

でいるらしい。

「私があんな一言を言ったから美竹さんは」

「……でも大丈夫だったからいいじゃんか」

「運が良かっただけよ、もし当たり前所悪かったら私は殺人犯になっていたわ」

「たとえ死んだとしてもお前は落としてないだろ……」

「私が上にいたからお前しかいないだろうってイチヤモンつけられて捕まるのよ……この歳で前科持ちか、ふふふ死のうかな」

「……………」

もう……何を言っても聞かないのだろうか？まさかここまで被害妄想が酷いとはな

「そんなに心配なら直接本人に謝ればいいじゃんか」

「……あの怖い」

「案外面白いやつだぞ？」

色々残念なやつだけどさ……まあ嫌いではないやつだ。それに何となくだが朝日奈さんと蘭は仲良くなれると思う。

「……………考えとく」

「てかあんたこそ何しにここに？まさか本当に……！」

「違う違う、SS書くために静かな場所を探していたんだよ」

「静かな場所？あーならいい所あるよ」

「まじで？」

まさか急に静かな場所を知れる機会が訪れるなんて！持つべきものは朝日奈さんだな！

場所を聞いた際なんでそんな場所知ってるの？って聞いたたら

「ぼっちはいかなる時も1人になれるように場所を探しているのよ、なに？今笑った？……だいたいあんたにあの場所教えたらあたし一人になれないじゃん、死ぬじゃん」

なんて言ってたが渋々言いながら自室へと戻って行ってた。後で彼女には場所を奪ってすまなかったと謝っておこう。

そして俺はそのまま朝日奈さんが見つけた隠れスポット、森林の中にある木のテーブルと木の椅子が置かれている所へとたどり着いた。

大方外でご飯を食べるために作られた休憩所だろう。確かにここなら静かに作業に没頭できそうだ。

i Padを立てキーボードを接続し、いざ執筆！今回は最後である冬香のSSを書かないといけない。

一番晴太と絡みが少ない彼女ならではの行動というものが読者の心を掴んでいる。

ぶっちゃけ彼女の人気は他の姉妹より高いと思う。ここでアニメ化してどーなるかは見ものだな

だってよくある話だろ？アニメ化したら化けたキャラとかさ
「……とりあえず何パターンか用意しておこう」

隣子さんにリメイクと言われてもすぐに提出できるよう予め予備の話を書いておく。

なーに、備えあれば憂いなしって言うしな、ま、まあ俺への負担は増えますけどね…

「んー!!!」

ある程度話を書き終え背筋を伸ばす。やはり背もたれのない椅子に座りながら作業するとなると腰や背中に負担がかかってしまう。

伸びたりなかったため一度席から離れちよつとしたら広場で軽く運動をする。

「あ、」

その際仰ぐように空を眺めた時俺の目には満天の星空が視界の隅から隅まで広がっていた。

「……綺麗だ、な」

都会と違い森の中から見る星は見え方が全然違った。なんせ都会は街明かりが強すぎて上手く星の光が見えないもんな

「ツー、そう言えーばー」

「ここで昔のことを思い出した。」

昔こんな夜空の下である友達とひとつの約束をしたんだった。

「ねえレイ君！僕達でいつか絵本を書こうよ！」

「えー絵本？俺お姉ちゃんみたいに絵描けないよ？」

「だったら僕が描くからレイ君は話を考えて！」

「……それなら……ま、まあ考えてやらんこともない」

「本当!?!なら約束!指切りげんまん嘘ついたら絵の具とかした水のー
ます!指切った!」

「ちよつと!?!絵の具なんて飲んだら危ないよ!?!」

「約束守ればいいんだよ!」

「……………」

昔、もう10年も前の話だ。

昔父さん達がよく弦巻文庫の絵本の読み聞かせ会に連れて行って
くれたんだ。

その際に仲良くなったとある男の子と俺はいつか絵本を書こうよ、
なんて約束をしたんだっけ

「あれから10年か……」

「芹沢君……元気にしてるかな」

なーんてな、もう10年経ってるんだ。約束した張本人もこんな約
束覚えてないだろう。

「……執筆に戻ろつと」

その後は何故か先程よりも集中することが出来た。なんだろうか、
昔の思い出ってやつでやっぱ俺はこうゆうことに憧れていたんだ
と思っただ。

夢を一度捨てた身だが……もし彼にもう一度会えたなら、今度は俺か
ら誘ってみるか

そう考えながら作業をやること早数十分、そろそろ戻らないとあの
三馬鹿達がうるさいと思ひ帰ろうとした時

「……あ、やっと気づいた」

「ッ!?!」

隣の椅子に浴衣姿で体操座りしながら俺を見つめていたのは……

「ら、蘭かよ、驚かせんな」

本当に一瞬幽霊かと思っっちゃまったじやないか!べ、別に?俺は幽霊
とか全然怖くない人なので!そこん所よろしくな!?

あと蘭の浴衣姿を見てさらにドキッとしてしまった。流石華道家
の娘、和服が似合うな

「話聞いたよ、モカとひまりとサークル活動してるらしいね」

「……それと燐子さんと朝日奈さんもな」

「朝日奈も？それは初耳」

確かにあの朝日奈さんがサークル活動に参加してるとは思わないよな……

「てかよくこの場所わかったな」

「朝日奈から聞いた、なんか急に昼のこと謝ってきてさ」

なんだ朝日奈さん結局蘭のやつに謝ってたのか

「なんか土下座してた」

「そこまでさせたのか!？」

「違う、あたしは何もしてない」

となると彼女が深く考えすぎて最終的に土下座にたどり着いた？
んだろう。

「それでその時レイの場所も聞いたってわけ」

「……聞くけどなんで俺の所に？」

「なんか枕投げするから呼んできてって」

枕投げ？泊まり先で行う定番なやつじゃないか！男子の俺達なんてカードゲームで遊ぼうとしたのが馬鹿みたいじゃないか！

「ねえ燐子さんの絵見てせよ」

「だーめ、見たいなら俺達が出した本で見るんだな！」

「そういうのいいから」ヒョイ

「おい!？」

i P a dの写真に保存している燐子さんの絵を勝手に蘭に見られてしまった。

「……………悔しいけどかなり上手い」

「……だろ？俺も初めて見た時は目を疑ったよ」

やはり絵を描いている蘭から見ても燐子さんの絵は上手いようだ。
しかもこれが独学で

「描き始めて数ヶ月とか…伸び代しか見えない」

「だよな！」

「なんでレイが喜んでるの？」

「うう、別にいいじやねーか！」

「……燐子さんエロ描かないのかな？」

「うちのサークルメンバー勝手に引き抜かないで!？」

引き抜かないで、で思い出したけどさー!

アサシンってそのうち俺達のサークルに入るって言ってたよな？

いやもう既にいるかもしれないけどさ

ここでもし蘭を誘って見たら……?

「なあ蘭」

「……なに？」

「……俺と一緒に最高の同人誌を作らないか？」

「……………」

某アニメの主人公みたいな言い方をして俺は蘭をサークルに勧誘してみた。

もし蘭がアサシンなら素直にうんと首を縦に振ってくれる……よな!?

「……………」

お、おいおい早く答えてくれよ!なんかこっちが心臓バクバクするんですけど!?

お願いです!早く答えてください!

「え、無理」

「ツ!だ、だよー」

「それにあたしも夏コミ参加するし……ちなみにあんだの最新刊今描いてる途中だからね」

「いらん情報をいちいち教えるな!」

てか蘭も夏コミ出るのね!それは初耳だ!あの最悪の同人誌の続編がまた売られるなんてー!考えたくもない!

「でも……誘ってくれたのは嬉しいかも、ありがとう」

「ツ!ほら!もう行くぞ!」

「……………はい♪」

そう答えた蘭の声は何故か少しだけ上機嫌な声音のように聞き取れた。

俺と柗優のエチエチな話を想像していたから機嫌がよかったのだろうか、それともサークルに誘われたことが嬉しかったのだろうか

そればかりは蘭にしかわからないことだよな

その後レイは蘭から今まで描いた柗優とレイのラブラブ同人誌の内容を細かく話の内容を聞かされるのであった。

第一次枕投げ対戦が勃発したことありますか？

俺は蘭と一緒に森林から帰ってきた。

その帰り道では蘭がああのエロ同人誌のついて何やら熱く語っていた。俺は聞きたくなかったから iPad を脇に挟み両手で耳を防いだ。

でも蘭のやつが無理やり塞いでた耳を解除させ耳元で大きな声で話を聞かされていた。

「……ただいまー」

精神的に来てた俺はカッスカスの声でただいまと言いなながら部屋に戻ると

「おーレイ遅いぞー！」

「……………まあいるよな」

巴のやつが俺に話しかけてきた。

枕投げするからー俺を呼びに来たと蘭は言ってたよな？ だったらこの変態共がいるのは必然ですよね!？」

「れーくん執筆お疲れ様ーちゃんとかけた？」

「いつも私達が後ろで応援したけど今日は1人でちゃんとかけた？」

「俺ははじめてのおつかいに行かせれたキッズかなにかか!？」

別にお前らがいなくてもかけるわ！ なんなら家で書いた方が執筆は捗るっての!？」

「レイ君はい！ お茶だよ！」

「おーつぐみありがとつてあちやつ!？」

あつっ！ え？ あつっ！ な、なんでこんなクソ暑いお茶渡すの…？
い、嫌がらせ…？

「ご、ごめんね！ 暖かい方が美味しいから…その、ううごめん」

「……謝罪している誠意が足りない、土下座して濡れた床に頭を擦りつけるべき」

「え？」

「……………と言うの冗談、神崎レイはなんとも思っていないのであった」

「(危ないー！ また誰かを殺すところだった)」

その無慈悲な人形設定はそろそろやめろ、後で後悔するのは自分だろ……か朝日奈さんってそんな設定で学校生活送ってたっけ？

ふと思いつく……。

あーあつたな、なんか俺が朝日奈さんの大切なもの奪ったとか、陽性反応とか、墮ろさせたとか、うん、あつたな

「りんちゃんもつと気楽に行こうよー」

「そうそう、普段通りならぬいつも通りにさー！」

「う、うぎやあー！引っ付くなあー！」

「まって、あたしの決めゼリフ奪わないでひまり」

「別に蘭の決めゼリフでもないけどな」

確かにいつも通りだね、なんて言うけど果たしてそれは本当にいつも通りなのだろうか……？

君達のいつも、というのは異常、ではないだろうか？

「とりあえず！神崎も戻ってきたし！」

「枕投げ合戦と洒落こもうぜ！」

「まじねーわー！」

つとそう言えば枕投げするって話だったな、こいつらの対応で忘れてたよ

「チームはどうするの？」

「チームは俺が考えた」

「お、おう柊優が考えたのか、意外だな」

ずっと壁によりかかり手を組んで話のタイミングを見計らっていたようだが？

てかその格好はイケメンだからできることだぞ？昔の俺なんてそんなことしてただけでカッコつけなんて言われてたからな、あはは

「てなわけでーチーム原作キャラ対チームオリキャラで対決です」

『お願いしまーす』

「って！待て待て待てー！」

「なんだ神崎、女子なら朝日奈様がいるだろ」

「それとも君はオリ主だから原作キャラにしろと？それは悪手じゃろ」

「まじねーわ」

「んなこと言ってるよ!?!」

あとあんまりそういうことを言うんじゃないやねえ!嫌われちゃうぞ?!いや柊優のやつには是非嫌われて欲しいけどさ!

「てか6対5をキツイだろ?そっち女子だけじゃんか」

「なーに原作キャラの底力見せてやるぜ!」

「あんた達と格の違いっての見せつけてやる」

「所詮モブキャラ、モカちゃん達の敵ではないのだからあ、りんちゃんを除く」

「あつはは!悔しかったらCVを付けることだね!」

「???頑張るよ!」

もうこいつらダメだ、一体誰目線から話をしてるんだ?俺はもう怖くて何も言えませんよ!?!

「では作戦会議、始めー」

その一言によりオリキャラチーム、そして原作キャラチームは各々作戦会議を始めた。

てかこのチーム名なかなかのパワーワードだよな…。

「と、とりあえず俺達の力をアイツらに見せつけてやろう」

「そうだな!メインは俺達男子で攻める!」

「あ、神崎君は受けだから守られるがわな」

「まじねーわ」

「優亜、お前そろそろキレルぞ?」

しまいにはお前の存在を消してやろうと思えばできるからな!?!あの意味でな!

「神崎レイ、私達が生き残ったら潔く土下座しよう」

「お前さつきから土下座ばっかうるさいな!?!何があつた!?!」

「……はは、同級生に土下座した私ってなんなの、もう死にたい、おにぎりになりたい」

「……………お、おう」

どうやら蘭に土下座をしたことを相当悔やんでいるようだ、てかさんなこと思うなら土下座すんなよ…あとおにぎりはと言うと彼女の

大好物なのだ。

「ねえねえー思っただけけど…勝ったチームにはなんかご褒美欲しくなーい?」

「欲しくない、ちよつと黙っててくれ」

「……じゃあ負けたチームは勝ったチームの言うことを絶対に聞
く、つてのはどう?」

『ツ!』

俺と柊優と朝日奈さん意外の全員が驚いたように身体をびくつか
せた。

なんせ何でもだ、何度も言うが何でもだ、エロいことだろうが酷い
ことだろうがなんでも言うことを聞かせれるのだ。

『……………』

変態幼馴染全員からの視線を感じる…!

「(勝ったら体の隅まで見てもらう…!)」

「(勝ったらエッチ!)」

「(勝ったらご主人様と散歩!)」

「(勝ったら女装させて街歩かせてやる)」

「(勝ったら……後で考えとこう!)」

各々のギランギランな瞳に蹴落とされそうになる。必死にこられ
て矛先を朝日奈さんへと向ける

「お前なんてことしてくれるんだよ!」

「彼女達からは嫌がらせられる気がしない」

「自分だけ助かるうとしてんのかよ!」

「合理的主義、うちのチームもやる気に満ち溢れている」

「??」

朝日奈がそう言うもんだから後ろをむくと

「なんでも?なんでも…?まじか、くつくつく、あつはつはつ!よつ
しゃー自由だ!」

「お、おい柊優?ど、どうした…?」

「……別になんでもない、俺は至って正常だ」

明らかに嘘をついてるが今回は見逃そう、何こつちが勝てばいい話

!

「おいお前ら、俺が言いたいことわかるよな…?」

「ああ、この勝負に勝って俺達は大人の階段を上るんだ」

「ま、ままままじねーわー!」

「こ、こいつらもこいつらでなんてことを考えてるのやら…もういい、とにかく勝とう!俺の身を守るのが最優先だ!

ここがすんごい乱交会場になろうと俺は!絶対朝までぐっすり眠ってやる!

多分ホットミルク飲めばなんとかなるだろ、どっかの誰かさんは熟睡できるとか言ってたし

「ではー只今より枕投げを開始するー」

「……開始ー!」

柘優が普段よりも気合いを込めたその一言で枕投げは始まった。

「おっしやー!いくぜー!」

「男達の熱き戦いがアー!」

「まじねーわー!」

『ふん!』

遊、優亜、由明日の3人は変態幼馴染集団から集中攻撃をくらい即死亡、廊下へと巴に投げ飛ばされていた。

「さあごしゅ、レイ!さつさと、あは!負けを認めろ!」

「あんたの勝ち目はない」

「れーくんお覚悟、えっへへ」

「さあさあー!楽しい夜の始まりだよ!」

「レイ君ごめんね?今回はかりは負けて欲しいかな!」

「……………タイム!」

なんだよお前ら!クソチームワークいいじゃねーか!

三馬鹿達なんて瞬殺だぞ?!こんなのもう勝てるわけないだろ!?

「これはあれだ、朝日奈の言う通り土下座しよう」

「…………夜桜の判断は正しい、2人で先に逝って?」

「お前性格ひねくれてんな」

「こ、こようゆう設定なんです!」

「何この諦めているお二人さーん、負けるの？負けたくないんですけど!?!」

「おい終優、何か知らんが自由になりたいんだろ？」

「……なりたくないよ、なりてえーよ！でも無理だろ!?!」

「朝日奈凜、お前負けたらモカとひまりに何されるかわか」

「よし勝とう、死んでも勝とう」

「……その意気だぜお前ら」

「今俺の頭の中に浮かんでいる作戦なら……！ワンチャンあり！負けたら俺の身が危険になるのだけはわかる！だから勝たないといけない！」

「……作戦だ、最悪全滅だけど……この手を使っても勝てないのなら潔く負けを認めよう」

「……それ私死ぬやつじゃん、殺したいの？」

「この戦力差でやるならそれが妥当かもな」

「もうこの手しか俺らには残ってないんだ！ぬおー！やるぞ！」

「待たせたな、俺達の戦争を始めようぜ」

「ほほーう、その言い方とは余程勝ち目がある作戦のようだー」

「もうやめなって、この戦力差で勝てるわけないじゃん！」

「黙れおっぱい馬鹿！俺達は絶対勝つんだよ！」

『ッ!?!』

「普段よレイとは違う覇気のある声、その声を聞いた5人……のうち1人は何故か興奮していたが、他のメンツは気を引き締めた。」

「それでは枕投げ再開！」

「頼むぞ神崎君！夜桜！朝日奈様あー！」

「まじねーわ！」

「まっさきに死んだ三馬鹿は審判になってるようだ、俺達が勝ってもお前らに言うことをきかせる権利はやらんからな！」

「……………」ポフ

「……りんちゃん弱いなー可愛いけど今回ばかり許せりんちゃん」

「朝日奈さんの投げた枕は普通にモカにキャッチされる。ドッチボール形式でやってるからキャッチして落とさなければセーフなの」

だ。

モカが朝日奈さんに枕を投げようとした時

「避ける朝日奈さん！」

「きやつ！」

「つと、悪いなモカ！この枕は俺達のものだ！」

モカが投げた枕をキャッチして俺達の枕へとする。

「柊優！」

「悪いな羽沢さん…君には死んでもらうよ」

「あつ！……1番に死んじゃったよ……」

柊優のやつがもう滅茶苦茶早く投げた枕がつぐみにヒット！これでつぐみは死亡！

死亡って言っても遊びの中でだからね？実際は元気だから！

「レイ君がら空きだよ！」

「……ひまり、真面目な話がある」

「ツ！な、なに？」

「俺が勝った暁にはお前に俺の脱ぎたてホヤホヤのパンツをあげる、これで手を打たないか？」

「……乗った！」

「よし来た！」

ちゃんと誰にも聞き取られないよう小さい声で会話をし、俺はひまりに枕を当てる。

なに、パンツの1枚ぐらい大したことない！なんに使われるかわからんが

「と今のうちに！」

「ふんー！レイのへなちよこ枕が当たるわけないだろ！」

ひまりの次は巴の相手をしていた。巴は俺の投げた枕をいとも簡単にキャッチして俺に枕を投げようと構えていた。

「……いいのか巴」

「？な、なんだよ」

「俺が勝ったら……お前にもものすごいことしてやろうと思ってたのになー」

「ッ!? な、なんだと…!」

「おやおやー? もしかして今何されるか想像してるのかな?」

「俺以外から調教されるのが退屈で仕方がないだろうなあ!」

「そ、それは首輪をつけて散歩するよりも恥ずかしいやつか…?」

「……………ああ! そうだ!」

こいつ勝ったらそんなこと頼もうとしたのか!? まあなんか変な縄持ってきてたなとは思ってたけどさ!

てか今の今まで言っていたことは全部嘘だ、これは巴を陥れるための罠…! なに! 勝てばこつちのもんだっての!?

「う、うわーて、手が勝手に、きや、キャッチした枕を落としてしまったーこ、これはアウトだー」

「よおっーし!」

棒読みでそう言うも自分でアウトなんて言ってるんだ、アウトになるっての!

「柘優当れエエエ!」

「そんな名出しで投げたら当たるわけないだろ蘭!」

「避けんな! 当たらないじゃい!」

「無茶言うな! 避けるだろ!」

あー俺なにも話してないぞ、柘優と蘭が2人でやり合ってたよあの二人って名前呼びあってるような仲だったけ?

二人がやり合ってる間に俺は作戦の準備に取り掛る、あいにく俺がいる側には襖があるから当てられることはない!

それを利用して枕を集め布団の中に詰め込む

「柘優!」

「よし!」

『うおりゃあー!』

柘優と2人がかりで布団の中に枕を詰めた布団を蘭とモカに向かって投げる。

が、2人はヒョイいっとかわしてしまう。

「そんな大きいの当たるわけないじゃん、馬鹿なの?」

「隙あり」

「いた」

「あた」

こうして俺と柊優はまんまとモカと蘭の投げた枕に当たり2人も死んでしまった。

「あとはりんちゃんーつてりんちゃんどこ?」

「……確かに朝日奈はどこに……?」

「(っく)」

『ッ!』

そう!俺達が投げたあの布団の中にはなんと朝日奈さんも入ってたのだー!

あんな大きいもの簡単に避けられるし床に落ちた後気にもしないよな!?

フィールドが布団で敷きつめられていることをいいことに思いつき朝日奈さんごと投げ捨ててやったのさ!

ま、まあ俺達は死んでしまったけど

「てい」

両手で軽く投げた枕が蘭とモカ、2人にあたり

「勝利チーム!」

「俺達オリキャラチーム!」

「まじねーわ!」

枕投げ合戦は俺達、オリキャラチームの勝ちとなり幕を閉じた、と思うだろう。しかしここからが本当の勝負とも言えるだろう。朝日奈さんは一体何を言い出すんだ?

「え?俺達勝ったよね?」

「だったら!」

「まじねーわ!」

「まっさきに死んだ3人には権利なんてない、よってこの勝負は私だけが命令をくだせることにする」

「……じゃありんちゃんは何を要求するのかなく?」

「うう、(っ)ほん」

しばし考える様子を見せたと思えば

「……では最後の一人に生き残った私からの要求」

「……………何もない、以上」

『……………』

こうして改めて俺達の第1次枕投げ対戦は特にこれといった話も起きることなく幕を閉じたのであった。

◆ ◆ ◆

「……はっー」

起きて0.93秒で気づいた。

「(体が縛られてる…!)」

確かあの後俺は地獄からの解放と共に布団にダイブして男子達とUNOやトランプで消灯時間まで遊んでいた、なんなら消灯時間後も遊んでいた。

体を動かそうとしたが動かん、体には至る箇所にもベルト?が巻かれていた。見るところ俺達男子生徒のベルトだろうか

ふっ、わかる。わかるーよ、これはあれだ、すぐに助けを呼ぼう!

「んー!ん?んー!?!」

口から声が出なかつた。どうやら口もガムテープで塞がれているようだ。

うん、計画的犯行すぎる…!

「……………れーくんやつほー」

「えへ、夜這いきちやつた♪」

「……………」

どうやらモカとひまりが俺の体を縛ったらしい。この2人の興奮する乙女の表情を見た時体の全身から変な汗が出る感覚があった。

シャツは汗で肌にくっつきパンツの中は蒸し蒸ししていて暑がるしい。

「これはもう逃げれないよねー」

「大人しくするしかないよねー?」

「んー!んん!?んんん!!」

声が出ない俺は今できる最大の抵抗をする。が意味なんてない、笑って流されるだけだ。

こんな無理やりな方法で俺の初体験が奪われるなんて思うだろうか!?!思わないよな!?

「では早速ひーちゃん、例の物を」

「はーい!」

例の物というのはゴムのことだろうか…!?

「綿棒です」

「……?」

「これで中までかけるね」

「???」

な、何をする気だ…?中までかける?何を言ってるんだ!?

「何って耳かきだよ?」

「ツ!?!んー!?!んんん!?!」

何故耳かき!?!ここはほら!もつとすんごいことしろよ!?!いや別に求めているわけじゃないけどさ!

ここにきて耳かきはないだろ!

「あ、もしかして別の良かった?」

「耳フェラって単語知ってるー?」

「……………」

首だけ動くことに気づいた俺すんごい勢いで首を横に振る。

あんなのこんな場所でされたら隣で寝てる由明日にバレるっての!?!

「では早速、かきかき」

「どう?気持ちいい?エッチとどっちが気持ちいいのかな!?!」

そんなのしたことないから知らんわ!?!知ってるやつに聞けよそんなこと!

でもあれだ…うん、耳かきされるのは悪い気分ではないな…このまま安全に終わってくれればいいんだが

「ツー…………ツ!?!」

「あは、ビクンビクンして可愛い〜れーくんは耳が弱いのかな〜?」
かきかき〜と言いなながらモ力はさらに奥へと綿棒を進める。

耳の穴から俺の鼓膜を通して音を拾うと脳内にダイレクトアタツ

ク、体が震えてしまう。

「汗出てるっ……てことは！」

「んー!!!」

一番バレては行けないことがバレてしまった……!

ひまりは止まることなく俺の胸に顔を埋め、くんかくんかと音が聞こえる勢いで匂いを嗅ぎ出す。

ぶっちやけ他の人から見られたら引かれるレベルでだ。軽く友達をやめてもいいぐらい。

「もーう、ひーちゃん興奮しすぎ、りこさんからあんまり過激なことしちゃダメって言われてるじゃーん」

「こ、これは、い、いいの!はあ、レイ君いい匂い、ねえ、もつと嗅いでいい?いいよね?!」

「……………」

意識を無理矢理でも飛ばしたい……!いつその事もうどうにでもなっているから!俺の意識がないところでやって欲しい!

「あ、そう言えばれーくんこつち向いて〜」
「?……んんー!!?!」

今までモカの姿を見ていなかったが今の彼女は浴衣……すら羽織つてない、一糸まとわぬ姿で俺の枕元に体操座りしていた。

もうモカのモカがこんにちは、じゃないこんばんはと挨拶してる距離だ。急いで反対方向に首を向け逃げるも

「だーめ」

「……………」グキ

く、首からなんか変な音がした。その変な音と同時に俺は強制的に向きを変えられる。

「……………」

もう何もいいまい、俺は無だ。このまま眠って逃げ切つてやる……!起きた後俺の身に何かあっても知らん。

「喋れないもんねーガムテープ外す〜?」

「……は、はあ……ん?外したら叫びそうじゃない?」

「まあ叫んだ時の対処法はありまーす」ベリ

ガムテープが剥がれた！今だ！

「誰がは！」

誰か助けてと言う前に俺は何かを口に詰められる。布のようで少し硬い素材、ハンカチとかそういうたぐいではないぞこれ…？

「モカちゃんの靴下でした〜」

「ッ!？」

も、もう勘弁してくれ…俺が一体何をしたんだ!?何も悪いことしてないのになんで俺ばっかりこんな目に会わなきゃいけないんだ!?

「そ、そそそそう言えば汗かいてるってことはパンツの中も…!」

「ふが!ふがふが!ふがああああああ!」

浴衣故にパンツまでの防壁なんてものはなくすぐに掴まれる…!

「(ダメだ!もうおしまいだ…!)」

と思った時!

「……まじねーわ」

『ッ!？』

ゆ、由明日の声!?!お、起きててこの光景を見てまじねーわと言ったのか!?

「まじねーわ」ムク

「まじねーわ」テクテクテク

「……痛!」

『……………』

起きたと思えば立ち上がり出入口のドアに向かったと思うと小指を角に当てたようだ。

由明日のまじ、がつく言葉以外の、痛!ってひと単語を聞いたのはこれが初めてだった。

「……これはあれだね、戻ってくる前に帰ろう」

「そうだね〜いやーモカちゃんの裸見られたのかな〜」

いやーんと言いたげに両手で頬を抑える。尚若干赤みがかつていた。

「じゃあねれーくん、また明日〜」

「明日も朝から楽しむよ!」

「……………」

いや帰ってくれたのはクソありがたいよ？なんなら俺は明日由明日の奴にありがとうと言いたるところだ。

「ふががふがががあああああー！」

せめて解放していけよ！と言いたげなふがが語は同じ部屋で寝ているメンバーの耳に入ることはなかったのであった。

◆ ◆ ◆

き、昨日？いや今日の朝？は酷い目にあっただぜ…。

「ふぁーおはようだみんなー」

「神崎君ー味噌汁を作ってくれないか？」

「まじねーわ」

あの三馬鹿達が起きたようだ。君達よくもまー呑気に寝れたよ、君達が求めてた裸体の女子がこの部屋にいたんだぜ？

「お、神崎早起きだな」

「さては今日が楽しみで眠れなかったパターンだな」

「まじねーわ」

「あーはいはい、そうしといてくれ」

俺は旅館によくあるあの謎の空間、外を眺める場所けんちよつとい椅子が配置されている場所に座っていたんだ。

あの後は本当の地獄だった。地獄から開放されたと思えばまた地獄…災難だ。

開放されなかった俺は自力で何とか抜け出した。まずは汗を利用して足のベルトを器用に床や布団を使い脱皮のように脱ぐ、脱ぐっていいかたかであつてんのか？

その後は立ち上がりこの部屋にあるものを駆使して他のベルトを解放する。

「(くそ長い夜だったぜ、おかげで全然眠れてねーよ)」

今の俺はすごいクマができてんだろうな、あはは

「…………とりま俺風呂入ってくる」

ここは朝風呂OKとのことだから嫌なことを洗い流すと共に汗を洗い流しに行く。

「…………ふぁー、クソ眠い」

あのクソ野郎ども、あつたらおっぱい引きちぎってやる!…つてここで俺がそんなことをしたら俺が叩かれるのか、男子って生きにくいね
「お、神崎、早起きなんだな…と言うより今の今まで起きてた口か?」
「…………あ、先生、おはようございます」

「ああおはようだ、つと昨日は楽しんだようで?」

「楽しむ?…………あはは、地獄でしたよ、地獄、酷い目にありました」

「にとしては綺麗に残ってるけどな」 トントン

「?」

先生は自分の首元をトントンと叩き何かをアピールしていた。なんだだろうか?

「気づいてないのか?後で鏡で確認しとけ…私は優しい先生だから黙っとしてやるよ」

「……………何言ってるんだ?あの人」

とうとう俺の担任まで狂ってしまったか、女子というのは変なやつが多いのだろうか?

更衣場につくと大きな鏡がある。まあなんか言われたし確かめてみるか

「つたく何があるつてええええええ!!」

鏡を見て驚愕した。今になって先生が言っていた意味を理解した。

俺の首元には誰かさんの綺麗なキスマークがついた、のだ。

俺は急いで戻り先生を呼び止める

「せ、先生!先生!」

「…………なんだ神崎騒がしいな」

「先生!違うんです!これは違うんですよ!?!蚊に噛まれたんですよ!?!」

「いや嘘下手すぎだろ」

「なんで信じてくれないの!?!」

どっかの誰かさんは信じだぞ!?!

そう叫んだレイの声で起きた生徒は数人近くいたそうだ。

怒涛の2日目の始まり、果たして2日目こそレイはまともな宿泊研

修生活を送れるのだろうか……それはまだレイ本人もわからないのであった。

女子から大切な話があると言われたことありますか？

白金燐子の朝は早い。

「んー！今日も太陽が眩しいですねー」

普段あまり出歩かない燐子にとって太陽は天敵だ。久しぶりに外に出たと思うと上から熱い視線を送ってくるのだ。

時刻は朝5時、日曜日なのに早起きとは意外や意外、ゲームで徹夜してるかと思えば違ったようだ。

「♪」

ルーティンと言うのだろうか、起きてすぐに軽くピアノに触れる。彼女が一体何の曲を演奏しているからわからないが…Rosella関係の曲だろうか

数分演奏して寝ていた脳が起きたと思えば次はシャワー、まだ夏は始まってないが6月、暑い日は暑いのだ。

シャワーで汗を流したところで自室の隣、通称オタク部屋へと足を運ぶ

「はあーたくさんの作品に囲まれるなんて幸せです」

通称人をダメにするソファアに座りながら満面の笑みでそう一人つぶやく。

「そう言えばレイ君はデアラが好きだと言っていましたね…」

部屋の本棚に飾ってあるラノベに手を伸ばし1巻を読み出す。

「ふふ、やっぱり面白い作品ですね」

レイが言う前から面白いは思っていたようだ。しかし他人からさらに面白いと話を聞くとなんと言うか、言葉では言い表せない喜びとこのがあるのだ。

「……………」ペラ

「……………」ペラ

「……………」ペラ

読み耽ること1時間、かれこれあつて時刻は午前7時

「あ、ああー！つい長く読んでしまいました！い、急がないと！」

「……あた！わたし！ぐへえー！」

急ぎすぎたせいで小指を角にぶつけて、その拍子で転んで、床にダイブ、一言で表すと不幸、である。

しかし白金燐子はめげない、何故なら今日は何ヶ月も待った大切な日！

「神奈先生のサイン会……先頭を取らないと！」

急いで着替え部屋を出る。部屋を出てもその家には燐子以外の誰かが住んでいる、とは言いがたい無音の空気が漂っていた。

それもそうだろう、白金家に今住んでいるのは燐子だけ、両親は仕事の都合上家を開けているらしいのだ。

「……日傘を持ってと」

憎き太陽に抵抗するために日傘を掴み取る。そして最後は

「あ、白金燐子です。家までタクシーお願いします」

長くタクシーを利用してはいるためもう名前を言うだけで家にタクシーが来てくれるのだ。

もちろん支払いは親のクレジットカード、特に何も言われなかったため自由に使ってるのだ。

「支払いはカードで」ドヤ

「はい、少々お待ちをー」

本日神奈先生のサイン会が行われる会場、秋葉原はラノベタワー、ブックタワーではなくラノベタワーだ。

そこでは誰よりも早く並び先頭で神奈先生のサイン会を今か今かと待ちわびる。後ろに続々人が並ぶが関係ない。

普段の彼女なら慌てふためく状況だがそんなのどうでもいい、燐子の頭の中は神奈先生に会える、と言うことしか頭にない。

あつたら何を話そうか、そもそも話していいのか？サイン会に初めて参加する燐子にとってここは未知の領域、不安しかない。

「……………」

そんな中遠くから一人の青年が長蛇の列を睨むように眺めていた。

「いやー相変わらず人気っすね、神奈先生」

「よせやい結弦君、事実を言うんじゃないよでゆふふ」

「そのよく勘違いされるオタクの笑い方はしないでください」

「……こんぐらいやんないとやっていけないの」

普段絶対に着ないようなオシャレな服を着てでゆふふと言っていたのは神奈先生こと神崎澪奈、神崎レイの実姉である。

「大体あんな所に閉じ込めておいて外でていいって言ってるこれ!? あたしに人権とかないの!?!」

「……いや出ていいって言ってたけど一向に出なかったのあなたですよね……?」

「仕事で疲れてたんだから仕方がないでしょ!?!」

「じゃあ休んでたじゃないですか、僕も家帰ってないんですからお互い様ですよ」

前に話したが神奈は現在箱詰め真つ最中、そんな中サイン会へと駆り出される。

確かに不機嫌になってもおかしくないが…普段執筆をサボってストレイばかり飲んでいた澪奈にとっては社会復帰するためのいい機会になるだろう。

「ねえ、ちゃんと働いたらご褒美くれる?」

「……ちや、ちゃんと働けばね」

「……なんでも?」

「な、なんでも、だな」

「じゃあ見たいアニメの映画リスト後でLINEで送るからよろしくね!」

「だと思っただよ!?!」

少し期待してしまっただ結弦だがすぐに察した。彼女の求めるご褒美なんて所詮そんなものだと

「神奈先生ーお願いしまーす」

「おいつすー! やばいですね★」

「それは色々アウトだろ」

そんなこんなで神奈先生のサイン会は始まる。始まるということ…は…澪子と澪奈の初対面ということになる。

「お、君が一番最初かー美人さんだね、それに巨乳と来たか、あっはは！」

「あ、あのは、はは、は、はじめまし、してー！」

「そんなかしこまらないでくれよ、気軽に行こうぜー？はい、サイン」

「ありあ、ありがとうー！ごさいましゆー！」

「君緊張しすぎ、まだ話してもいいみたいだからさ、なんか少し話そうや」

流石サイン会に慣れている漣奈、ファンとの接し方なども十分心得ているようだ。

「あ、あのー！私最近絵を描き始めたんですよー！」

「……へー絵をね」

「はい！そして今年の夏コミサークル側で参加するんです！もちろん神奈先生も参加しますよね!？」

「……………」

「せ、先生?」

「ん?ああ、うん、勿論参加するよ」

この時漣奈は思った。

「(あれ?……もしかしてこの子レイが言ってた子じゃない?)」

察しがいいのか的確に当ててきた。小説家となると人物の思考を書くものだから人の思考も捉えることができるようだ。

「ねえサークル名なんて言うの?」

「そ、それがまだ決まってるというか、決めないといけないとは自覚してるんですけど……メンバーが個性的というかなんと言うか」

「あー別に楽しくないわけじゃないんですよ!?!活動する度レイ君も話の作り方とか上達するし、なんなら私もレイ君からは色々教えてもらったりしてて」

「ってー私語りすぎました!ごめんなさい!言われてもわかりませんよね……」

「……レイ君?」

「あーサークルのメンバーです、あーレイ君も神奈先生のファンなんですよー!」

「え、レイ君って神崎レイ君？君聞いてないの？この人」

「結弦君ー？ちよつと黙つところか」

「なんで!？」

結弦はレイ君と言う人物が神崎レイなのかを確認し、その後神奈はレイのお姉さんということを伝えようと思っていた。

だがしかしそれを神奈は止めた、恐らく知らされてないことを悟つたのだろう。

「この子が最近絵を描き始めたって子か、ふーん、やっぱりレイは巨乳好きだったか」

「ペンネーム聞いてもいい？」

「ペンネームですか!?え、えーと、りんりんで!」

「りんりんねおっけ、覚えた、当日どこで売つてるとか聞いてもいい?」

「えつと確かFの34です!シャツター付近なんで緊張しちやいますよ、あはは」

コミフェスのシャツター付近となるとかなり人気のあるサークルが参加することになる席、長蛇の列ができる予想されるためシャツター付近に設置して少しでも混雑を避けようって魂胆なのだ。

「おっけFの34ね、絵は当日になって見させてもらうよーあたし結構楽しみにしてるから」

「ッ!は、はい!神奈先生に見られても恥ずかしくない絵を描きます!」

「当日は楽しみにしてるよ、またね」

「は、はい!」

「つとそうだ、記念に写真を撮らないかい?もし君が売れた時あたしは目をつけてたって言い振らせてくれよ」

「?で、でもいいんですか?」

「いいって!あとの人達全員と写真撮ればいいんだからさ!」

こうして神奈と隣子は2人で写真を撮ることになった。もちろんシャツターを押すのは結弦だ。

「今日はありがとうございしました!当日私も神奈先生の作品買わせて

もらいます!」

「はい、またね、りんりんちゃん」

隣子は素早く列から離れ神奈とのサイン会から離脱する。その後の神奈はと言うと

「ねえ結弦君、F列付近のシャッターサークルどこだったけ?」

「……………いや!やだよ!?!僕土下座するのやだよ!?!」

「そんな硬いこと言うなよー可愛い弟が初参加するんだ…………盛大にもてなさないとか哀想だろ?」

そう答える神奈、いやレイの姉である滯奈の顔は何かイタズラしようと考えている小悪魔なような顔だった。

その後何人かのオタクと話をしては写真を撮るの繰り返し、ぶつちやけ飽きてきた所であの人が来る。

「次の人どうぞー」

「どうもーみんな大好き神奈でーす、今日は来てくれてありがとうとねー」

「…………相変わらずですね、神奈先生…いや滯奈さん」

「あつれれー?君何処かで会ったことあるつけ?」

「いやだなー滯奈さん、昔よく3人で遊んだじゃないですか?」

「…あああああ!芹沢っち!?!え!嘘!いい、いやーこれまた大きく育ったなー」

驚く滯奈は机をバン!と叩きその場に立ち上がる。座っていたパイプ椅子がグラグラ揺れていたが結弦がそれを抑える。

「結弦君!この人あたしのめっちゃ古いや友人なの!VIPルーム的な所に案内して!」

「いやここにはそんな部屋ないんですけど!?!」

こうして神奈先生のサイン会は終了した。最後にやってきた芹沢っちこと芹沢は一体何者なのか、まだその正体に気づいていないのはレイだけなのであった。



場所は移り宿泊研修中のレイは

「はあああああああああ」

夕方の黄昏時、レイは大きな溜息をつきながら野原に寝っ転がつて

いた。

「午前中はクソ講座、午後は山登り、もう体力限界だったの」

特に講座なんて寝たらペナルティがあるとか脅され必死に目を開けていた。

午後の登山は1度遭難しかけてたが奇跡的に他のクラスと合流しちよつとだけ仲良くなっていた。

そして今に至る。

広い野原の真ん中、クラスごとにカレーを作り教頭に食わせどのクラスのカレーが一番うまいのか決める勝負をやってるらしい。

料理好きの俺にとつて楽しいイベントだと思うだろう。しかしあくまで俺は自分の家で料理をするのが好きなだけだ、好き好んで外で料理をする気にはならん

「れーくん、みんなでカレー作ろうよ」

「?……あー今日は履いてるんだな」

「もうパンツ見るなんてれーくんのエッチい」

こちとら寝つ転がつてんだぞ?そんな中見るなって言うのは苦行だろ!?嫌でも目に入るわ!

「ここ風強いし?流石に履くよ」

「いやこゆう時こそ履かないのが真の露出狂じゃないのか?」

「……じゃあモカちゃんは真の露出狂じゃなくていいや」

「?お、おう」

そもそも露出狂にもなるなつての、一体何があつてこいつは変な快感を覚えたのやら……

「おーいレイ君!モカちゃん!みんなでカレー作るから手伝つてー」

「あいあいさーほら?れーくん行くよ」

「……無理、立てない、ここから動きたくない」

「……じゃあ顔面騎乗位しちゃうよ?」

「ツ!よ、よし!立つ!今すぐ立つ!だからやめろや!」

まさか女子からそんな言葉を聞く日が来るとは……!な、何が起きるか分からない、それが人生。正しく人生だ!てかそれはもう痴女だろ!?

仲良く2人してクラスの輪に戻る。なにやら話し合いをしているようだ。

「なあどうする？カレー作りドベだったら夜にペナルティあるみたいだぞ」

「正直に言うが俺はペナルティなんてごめんだ、ただでさえさつき死にかけたんだ」

「ま、まじねーわ」ガタガタガタ

この三馬鹿、講座中に堂々と寝ていたのだ。登山の後俺達は休憩していたがこいつらは担任付きつきりの特別講座。

見た感じ相当絞り込まれたようだな、はは

後日談だがこのペナルティーは生徒達に真面目に取り組んでほしいがゆえに教師が付いた嘘だったようだ。

「んーどこか料理できてさ？」

「うん、中性的な顔でさ？」

「……頭もいい人なんてさ？」

『あぁーいないかなー』ジーン

「……………」

全員からの視線を感じる……く、クソう！自己紹介の時趣味は料理なんて言わなきゃ良かった！

「あぁー！いいか！俺がやるからにはガチで1位取るぞ？ぐうの音出すやつは即首を切る！覚悟はあるか!」

『おー！』

本当だろうか？全員分のカレー作るとなれば俺一人でできないしこいつらには働いてもらうぞ！

そしてなんやかんやで

「カレーの完成だ!」

『いただきますー!』

とりあえず何とかあったな、班別に仕事与えて最終工程は全て俺がやる！なんて完璧な作戦なんだ！

まあAfterglowこと変態集団が少し使えなかったのは計算外だったな……つぐみはめちやくちや働いてくれたけどさ

「流石俺達で作ったカレーー！」

「カレーが辛い！俺が今まで食べてたカレーは甘口だったのか…！」

「まじねーわ！」パクパク

余談だがこの三馬鹿はそこまで仕事してないぞ、なんか俺から聞いたことを他の班のやつに上から言ってただけだ。

「れーくんの料理なんて久しぶりだーGW以降食べてなかったからね
〜」

「美味しい！流石レイ君！美味しい！」

「な、なあレイ、これもつと辛くできないか…？もつと辛いのが食べたいんだが！」

「蘭ちゃん美味しいね！」

「うん、これが毎日食べられる夜桜が羨ましい…。」

色々言わせてくれ

ひまり、お前は馬鹿の一つ覚えか、美味しいしか言えないのか！

あと巴!?!お前それ以上辛くしたら夜中トイレとお友達になるぞ!?

そして蘭、俺は1度も柎優に手料理食べさせたことない。今回は俺一人で作ってないからノーカウントだ。

「なあ神崎、こんな話知ってるか？」

「実はなこの近くのあの湖、あそこで告白したら恋が実るってジンクスがあるらしい」

「まじねーわ」

「ふーん、それで？」

なんか登山の時他のクラスの女子が言ってたなー何でも柎優に告白するとか言ってた。

まあモテることは羨ましいわーでも俺にはアサシンがいるけどね
!

「……神崎、レイ」

「?なんだ朝日奈さん?あ、カレーのおかわりならあっちだぞ?」

「違う、用があるのは神崎レイ」

「???

え、どうした…?いつもと違って凜とした人形の顔しやがって…わ

からん、こいつが考えてることわからんわ

「……私達のこれからの大切な話がある。20時湖に来て欲しい」
『ッ!』

クラスの全員が驚く、なんせあの朝日奈凜がこれからの大切な話、そしてあの湖に来て欲しいと言ったのだ。

「か、かか神崎!」

「神崎君等々君はー」

「ま、まじねーわわわ!」

クラス全員が浮かれ出す。勿論俺も内心心が弾んでいる。

「まさか告白…なのか?」

しかし朝日奈凜の顔はあの人形のままだ、カレーを食べて少し辛いのかちよつと涙目になる程度の表情

「(もしかして朝日奈凜がアサシン…?)」

ガールズバンドの中にいるってのがアサシンの付いた大きな嘘! ならば同じサークルの朝日奈凜の可能性も十二分にある!

「よかつたなレイ」

「ッ!いい、いやーあはは…」

これは…期待してもいいのだろうか!?

「それでは結果発表です。見事教頭の舌をうならせてたクラスは…A組! A組の代表の生徒は前に来てくださーい」

何か知らんが結果発表とかあるらしい、何故か俺が代表生徒として前に出ると言われてでるが…!

「(や、やばい。目の前のこととかどうでもいい!)」

アサシンの正体が分かるかも知れないこの状況! それ以上に気にすることがあるだろうか!?

「見て神崎君の表情」

「1位をとつても物足りそうな顔」

「彼はもつと上を目指しているのね…素晴らしいわ」

レイはただ別のことを考えていたただけなのだが生徒達からは別の捉え方をされていたようだ。

その後は風呂に入って部屋ですつと体操座り、逆にソワソワしてい

たら三馬鹿共に茶化されるため精神を統一していた。

「神崎、男になってこい」

「神崎君、俺より早く卒業するとわ…君はやる男だな」

「まじねーわ」ポン

三馬鹿が一言づついい由明日に関して肩にぽんと手を置いてきた。

「よっしゃー！ちょっと男になってくる！」

意気込んで部屋を出ていき廊下を走り出す。そんな中三馬鹿は

「あれ夜桜君は？」

「そう言えばいねーな」

「まじねーわ」

そんな会話をしていたようだ。



暗い夜道を早歩きで進む、心臓の鼓動が早くなると同時に歩くスピードも速くなる。

速く、もつと速く…！しかし特別大きな必殺技などは出なかった。

「来たぞ、朝日奈凜」

「20時ピツたし、流石あんたって言ったところかしら？」

「…で？大切な話って？」

「ここまで呼んだんだ…！やっぱり告白か!?てか告白だろこれ!？」

「あ、れーくん来たきた〜」

「ツ!？」

「よく遅刻しなかった！偉いね！」

「とりあえず、はい、渡したから」

「??？」

なんか携帯渡されたんですけど…？え、なにこれ？てかモカとひまわりもいるんですけど…？

「もしもし」

「ツーも、もしもし!？」

携帯から声が聞こえたから咄嗟に耳に当ててもしもしと言ってしまう。

「こんばんはです！レイ君！」

「…え、燐子さん？え、どゆこと？」

「いえ、あのーそのーレイ君と話したくなつたと言いますか…ほらレイ君携帯なくしてるじゃないですか？」

「あ、はい」

「だから凜ちゃんさんに頼んだんですよ」

えええええ!?何それ！ちよつと期待した俺の気持ちを返してくれよ!?

「だってあの朝日奈凜だぞ!?あんな人から大切な話とか言われたらもう告白だと思うだろ!？」

「ふん、所詮私はお話するようの道具よ、このためにわざわざ充電してやったんだから感謝してよね、つて私には感謝のかも字もないか、今から飛び込もうかな」

「恐らく凜ちゃんさん落ち込んでるのでフォローよろしくです！」

「無茶言うなよ!？」

片手で何とか凜ちゃんさんを慰め急いで話に戻る。

「で？わざわざ電話してきてなんか用でもあるんですか？」

俺の声が聞きたいから電話した、なんてベタ中のベタなセリフなんてないよな

「実は今日神奈先生と会つたんですよ！」

「あ、はい」

「むう、反応が薄いですね…」

「へっ!?いい、いやー！サイン会ですよね！俺も行きかけたんですよ？自慢されたら凹みますよ…」

「そ、そうでしたか！すみませんでした！」

「い、いえ大丈夫です」

宿泊研修と被つてなかつたらスタッフとして参加してたなんて言えねえー！

宿泊研修と被つててよかった！サイン会がやばい事になるところだった！

「それで関係者らしき人物の方がレイ君のこと知ってるような口で

…」

「あー結弦さん？」

「そうです！確かそんな名前でした！」

「……結弦さんとは古い友人なんすよ、姉貴関係と言うか」

「なるほど！レイ君の姉さんと仲がいい方なんすね！」

仲がいいと言うか担当編集者なんすけどね！

「写真も撮ったんですよ！……はい！送りました！」

耳元から携帯を話トーク画面を見る。

すると姉貴と燐子さんが並んで写真を撮っていた。燐子さんは幸せすぎるような顔をして姉貴のやつは…何故か作り笑い。

「(あれ？この人なんかよからぬこと考えてね!?)」

まさかバレた…？い、いやいや流石にないよな！

そのまさかでバレてるがレイはそのことをまだ知らない。

「おーなーちゃんとりこさん写真撮ってるー」

「ダブルピースでアへ顔だったら最高だね」

「え？今なかなかーちゃんって言いました？」

「い、いや！なんか近くでひまりとモカが話してるだけですよ！」

この馬鹿共！燐子さんにはまだ神奈が俺の実姉って話してないこと忘れてるんじゃないのか!?

「そうなんですか！それでですね！あの神奈さんがコミフェス当日私達のサークルに訪れてくれるって約束してくれたんですよ！」

『ッ!?!』

ま、まじかー!!え、姉貴来るの!?!俺達のサークルに本買いに来るのかよ!?!

「それでサークル名聞かれた時に答えれなくて…だから戻ったらすぐにサークル名考えましょう！」

「……おい朝日奈凜」

「なによ」

「大切な話ってさ…これ？」

「当たり前でしょ、何言ってるのよ」

「……………」

oh、まじか…た、確かに大切な話だよな！サークル名は超大事だもんなー！うん！

うん…でもさ、ちょっと期待したんだよ!? ああー！恥ずかしいわ！「私いくつかいい案あるんですよ！ふふ、みんなが戻ってくるの楽しみにしてますね！」

「……はい、俺もいくつか考えておきます」

確かになー今頃考えるのはかなり遅いかもしれんがまあ間に合うだろ。無理だったとしても何とかするわ

「最後に一つだけいいですか？」

「?あ、はい」

「宿泊研修…楽しんでますか？」

「ッ！」

この時の俺はその言葉を純粹に受け止めてしまった。それはまるでアサシンに言われた時のように…

「……モカやひまりには酷いことされました」

「それでそれで！」

「朝日奈凜には…告白されるんじゃないかと期待しちゃいました」

「そ、それはなんと言うか…うん、ドンマイです」

そう、色々あった。でも

「楽しかったです」

「……そう、ですか…ふふ、レイ君、だったら…」

「だったら？」

「いえ、なんでもありません！ではいい夜を！」

「ちよ燐子さん!？」

ツーツーツーと通話が切れた音が鳴る。最後に何を言いかけたんだろう? まあ今は気にしなくてもいいのかな?

「最後にこさんと何話してたのー？」

「サークルのこれからについてだよ」

「これからの活動は大きくなるのかな?」

「……そうだな、忙しくなるな」

色々やらないと行けないことは沢山ある。モカもひまりもモデル

だけでは留まらんぞ？

ちなみにひまりはモデル役らしいんだ。朝日奈さんは…俺が無理矢理入れたからやりたいようにやらせてる。

「えっと、そのあれだ…なんでお前らがサークル活動に参加してくれるか理由は聞かん」

別にオタクじゃなくてもアサシンだからサークル活動に参加してるってやつもこの中にはいるかもしれない。

「でもそのあ、あり…ありがと、な？」

『……………』

「いやなんか言ってくれよ!？」

恥ずかしいだろ！俺もなんで今ありがととか言ったかは知らんけどさ！ちよつとは反応してくれよ！

「そーゆうのはコミフェス成功して言うものではく？」

「そうそう、まだ私達の活動なんて始まったばかりじゃん？」

「私は私の夢というか…あとあの話忘れてないでしょうね！」

「だ、だな！そうだよな！まずは夏コミ成功させないとね！」

「目指せ1日100部！上を目指さずこの100部を毎日完売させよう！」

少ねーと思われるかもしれない。でも俺達は初参加、SNSとかで有名な絵師なんかでもない。なら妥当な部数だも思わないか？

今回人気が出たら…参加するかわからない冬コミに活かせばいい！

「あれ？モカとひまりがいた理由って…？」

「サークルの大切な話なら来るでしょ」

「まあ当然ですよね」

「あ、はい」

確かにサークルの名前を考慮することが大切な話って言ったよな…ならいるよな、うん

「ねえれーくん、浴衣って下着着ないのが当たり前って知ってたー？」

「それは昔の話だろ！てかお前はそんなの関係なく着ないだろ!？」

「じゃーん！私今日は付けてませーん！常識だからね！知ってま

すうー!」

「お、おとお前!ま、前隠せよ!ちよつと危ないぞ!」

危うく乳首さんが頭を見せるところだったじゃーねか!てか下着着ないのは常識じゃない!

「え、それ本当なの?私もろ付けてるんですけど...?履いてるんですけど...?もしかして私非常識?」

「うん非常識ー早くりんちゃんも脱ごう」

「りんちゃん水着姿隠してたけどかなりのボディだったもんねー私胸負けてるかも?」

「...わ、わかったわよ!脱ぐわよ!」ヌギヌギ

ぬひよー!あ、朝日奈のお腹!てか下着姿...え、エロい!てか女湯(元男湯) 入った時見れてなかったよな

つてそんなこと考えてんじゃねーよ!

「朝日奈凛...さん、あのこここで言うのもあれだがお前騙されてるぞ...?」

「.....」

朝日奈さんのブラってその、なんか前で止めるヤツだよな...そこに手を付けたまま俺の話を聞いた途端固まった。

「あと普通外で下着姿にはならん、考えろよ...」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ!」

急いで浴衣を羽織り縮こまり叫んでしまう。あの、なんか俺がやかしたみたいに思われるからやめて欲しい。

「りんちゃんフロントホックブラなんてれーくん誘ってるのかな...」
ニヤニヤ

「私でも付けたことないよ...」ニヤニヤ

「いや!こ、これは、その、と、止めやすいから選んだだけで、だから...!」

「もーう」

『りんちゃんはエロいな...』

「ツ!違うからあああああ!」

クマ凄いや?」

各々お互い聞こえない声でそう言い最後は同時に雄叫びを上げていたようだ。

「……あたしは、それなりに楽しい宿泊研修だったかな」

蘭は微笑みながら柗優とレイが枕投げしている写真を眺めていたのであった。

お巡りさんに疑われたことありますか？

宿泊研修から帰ってきた俺は

「ぬへええー」

家に誰もいないことをいいことにリビングに大の字で寝っ転がっていた。

部屋でくつろげよ、って言われるかもしれないが部屋ではゆっくりくつろげない。何故なら盗聴されているから

なんなら最近はずっとリビングに布団敷いて寝てるな、制服とか下着とかも全部リビングに持ってきてる。

もう俺の部屋はリビングでいいかもしれん

「夕方まで暇だなー」

夕方からサークル活動がある。しかし午前中は暇だ。

誰かと遊ぼうにも幼馴染は変態だし、柊優と三馬鹿は昨日こっち帰ってきた時ファミレス行ったし、すぐに遊ぼうとは思わん

♪♪♪♪♪

「……電話だ」

家にある固定電話が久しぶりに音を出した。現代固定電話が鳴るなんてそうそうないよな、だって携帯があるからね！

まあ俺は無くしたけど

「はい、神崎です」

怪しい電話とは思わずに俺はすぐに受話器を取る。すると

「あーレイ！やつほー腹減ったからなんか作って持ってきてくれない？あたし久しぶりにレイの手料理食べたくてさー！」

「……姉貴かー、てか家の電話番号知ってたんだな」

「なんか結弦君が登録してたな」

「そ、そうか」

なんで登録してるのかわからなくて苦笑してしまう。姉貴や俺と連絡が取れなくなった時の最終手段で登録してたのだろうか？

「帰ってきたばかりであんまり食材ないけど…何食いたい？」

「グラタン！チーズたっぷりやつ！」

「そっち持っていくのにグラタンはねーだろ!？」

「じゃあなんでもいいやー結弦君の分もよろしくね、じゃっ!」

自分の言いたいことだけ言って電話切りやがった…。暇だから別持っていくのはいいけどさー、本社に行くとなると緊張するよな

結構距離あるから冷めても美味しい物を…

「唐揚げでいっか!」

沢山作ればその分食ってくれるだろ。

唐揚げを作る準備をする。米も早炊で用意して、おにぎりにすれば片手で食べられるか、となればすぐ握って…

かれこれ1時間ちよつと料理と格闘して唐揚げとおにぎりの完成、唐揚げを容器に詰め込みおにぎりをラップで巻く。

話変わるけどコンビニのおにぎりって美味しいよねー家で作るおにぎりは時間が経てばなんかねちやねちやするもんな

そんなの知らん!我慢して食いやがれ!

一応本社に行くし夕方には羽丘でサークル活動もある。なら制服で行くか

「いつてきまーす」

誰もいない家のに理次にいつてきますといい俺は家を出た。

歩くこと数十分、バイト先のコンビニ前を歩いている時だった。

「お、レイ、そんな荷物もってどこ行くんだ?」

「店長…はタバコ休憩っすか」

「今はモカちゃんが働いてくれるしーおじさんは休憩だよ」

20後半でおじさんと言うのはやめてくれ、あと数年で俺の姉貴がうざいだけでなくうざいおばさんにバージョンアップしてしまう。

「今から姉貴の所行くんすよ、今本社で箱詰め状態なんで」

「それを言うなら缶詰めだろ」

「姉貴は箱詰めなんすよ」

だいたい缶詰めを本社ですることなんてないんだ、適当にアパート借りてそこでやる…みたいな話だけど姉貴は昔しよっちゅう脱走してからなー脱走できないよう本社で行うようになったんだ。

「そうだ、姉貴さんのところ行くなら…ちよつと待ってろ!」

「?はい」

待っていると袋いっぱいに入ったストレイを店長は俺に渡してきた。

「アニメ化記念だ、持っててってくれ」

「いや姉貴今禁酒してるし…」

「いいって!最近頑張ってるならこんぐらい許してやれよ」

「……た、確かに……!」

認めたくないがちゃんと仕事をしているようだし…店長からの差し入れ分なら許してやるか!

「んじや俺そろそろ戻るよーレイは明日シフト入ってたよな?」

「そつすね、全く平日の昼間によく高校生ぶち込みますよ」

「休みって言ったお前らが悪い」

「クソう!黙っておけばよかった!」

少し後悔をして店長と別れた。流石にコンビニ袋に沢山入ってるストレイを持ち歩くのやばい。

制服着て酒持つてるとか警察に見られたー発アウトだろ!

人に見られないようこつそりとトートバッグの中にストレイを詰め込む、頼むから誰にもバレるんじゃないぞ

「君、そこで何をしてるんだ」

「うぎやああ!」

「む?なんだその反応は…って君は盗聴されたい癖の子じゃないか」

「……ど、どうも」

何故このタイミングでこの前のお巡りさんが…!てかやつぱり変な覚え方されてる!まるで俺が変態みたいじゃないか!

「その制服…高校生だろ?こんな昼間に学校行かずに何してるのかね」

「い、いやー今日は宿泊研修の振休なんすよ」

「……なるほど、嘘だったりしたら後で分かるからね」

「あ、はは、あはは…」

なに?あなたわざわざ学校に確認でもするんですか!?俺が一体何したんだよ!そんなに怪しい人物か!

「いやね、この辺で万引きがあつたらしいんだ、ほらあそのコンビ
二」

「は、はあ…」

そこ俺のバイト先のコンビニなんですけど!?てか店長万引きされたくせになに呑気にタバコ吸ってたんだよ!?

「別に君を疑ってるわけじゃないよ、うん、でもね…君怪しいんだよ」
「疑ってるじゃんか!？」

「とりあえずそのカバンの中身見せて」

「……え?か、カバンですか?」

「?うん」

ままままずい!これはまずいですよ!このバックの中にはさつき
店長から渡されたストレイ(酒)が入ってるんだぞ!?

いや店長から貰ったと言えばこの場は凌げられるかもしれんが店長
が社会的に死んでしまう!

「いやカバンの中身を見るのはプライバシーの侵害です」

「……確かに私もそう思う、しかし確認しないとイケないだろ?」

「いやですよ!」

「いいから見せなさい!何も無かったら君の疑いは晴れるだろ!」

「晴れるも何も俺は何もしてないですって!」

「変態の言うことが信じられるか!」

「で、ですよね!」

確かに俺もあの変態共の言葉を信じようとは思わないから……こ
のお巡りさんの言っていることは間違ってる!?

でも俺は変態じゃない!

「いいから見せなさい」

「離してください!このカバン結構高かったですから……!」

お巡りさんと俺のカバンをめぐる戦いが始まっていた。本当に高
かったから破れたりしたら困る!手離せや!

「あのーその子が何かしたんですか?」

「ッ!あ、あなた!」

「ここで現れた救世主!」

「まりなさん助けてください！なんか俺が万引きしたんじゃないかと疑われてるんですよ!?!」

「え!?れ、零君が!?!」

「君の日頃の行いが悪いんだろ!このへ」

「今それを言うんじゃないぞ!!」

まりなさんに変態ってバレちゃうだろ!いや、バレるじゃない誤解されるだろ!?

「と、とりあえず2人とも落ち着いて!」

「お巡りさん、この子はそんなことする子じゃありませんよ!」

「な、何言うか、その男子は…ん?失礼」

『……………』

お巡りさんの胸に着けていたトランシーバーからなんか音が鳴った。鳴った途端お巡りさんはそれを耳にあて

「はい、え!?ま、万引き犯捕まったって…?」

『……………』

ねえーどうしてくれるんすか、さつきまでの時間

「本当にすみませんでしたああ!!」

見事に綺麗な土下座、警察官を土下座させるなんて俺も成長したもんだぜ、てな

「だから俺は何もしてないって言っただろ!」

「しかしだな、君はよくわからん性癖を持つてる変態だったからつい」

「そうですよね!じゃあねーよ!そんなので人を疑うな!」

「本当に申し訳なかった!」

「この世の変態全員に謝れこのクソ野郎!ふん!まりなさん行きましよう!」

「う、うん…」

つぐみとのやり取りからこんなことになるとは…軽はずみに変な嘘をつくもんじゃないな、これを機に学んだよ、とほほ

でもまあ?俺もお巡りさんの立場だったら疑ってしまうのも無理はない、かな?

だから俺は許してやるよ、他の人はどう思うか知らないけどね!

「ねえ零君」

「はい！」

「零君は…変態なの？」

「ぶふおー！」

「何その反応！やっぱり変態なの！ねえ変態なんですよ!？」

「な、なんだよこのお姉さん！なんで俺が変態であることに喜んでい
るんだよ！」

「あれには海の底より深い話があるんですよ！」

「えー何それ、お姉さんに話してくれるの？」

「警官の人に嘘ついたら勝手に信じ込まれたんすよ！」

「…何その秒でバレる嘘」

「嘘じゃないですって！俺が嘘つく人に見えますか!？」

「見えないから嘘ついてないって思ってるから言っただよ？」

「複雑すぎてよくわかんねえー!!!」

俺はあれやこれやと色々話をしたがまりなさんは

うんうん、なるほどなるほどー、あ、君に頼みたいことがあるんだ
けどいいかな？

とか訳分からんことを言い出した。まるで公式LINEで永遠と
同じ返事が返ってくるような感覚だ。

「わかった、零君は滯奈の影響で変態になったと！」

「も、もういいですよ…」

負けました。これがちゃんと働いている社会人の力か

「って冗談はここまでで、ちゃんとわかってるから大丈夫だよ」

「ツ！心臓に悪いことしないでくださいよ！」

「ごめんごめん、でも零君変わったよねー昔なんてさ！」

座ってたベンチから立ち上がりわざわざ俺の前に来る。

「俺に近寄るな！俺のギアスがお前にかかってしまう…!」

「ってね！話なんて全くできなかつたもん」

「あああああああああああああああああ！」

は、恥ずかしい！恥ずかしいすぎて死ぬ！てかまりなさんと中学時
代あったことあったけど!?!会ったとしてもそんな対応してて覚えて

ないのかな俺！

くつ、久しぶりに感じたぞこの屈辱…！これがあるから厨二病なんて奇病にならないければって心底思う！

「おっと、私お昼休憩終わっちゃう！零君！今度滯奈と一緒にいいからどこか遊び行こうよ！」

「いやいいっすけどお昼時間俺のせいで無駄にしてすみませんっす！」

「そんなのいいよー今日弁当忘れてたし節約できたと思えばなんともないから！」

ばびゅーんと効果音が聞こえるほどの速度で俺から離れていく、気づけばもうまりなさんの姿は見えない。

「お礼言えなかつたな…いじられただけで終わっちゃったよ」

座っていたベンチから立ち上がりレイは滯奈のいるKEDOKA WA本社へと向かうのであった。



「うわ高つけえー」

目の前にそびえる本社のビル。日々このビルから神作を作り出す作家さん達が会議などをしに集まる場所。

中にはこれから神作品を作るであろう作家さんが持ち込みにやってきたりもする場所。

中に入り色々手続きして姉貴のいる姉貴専用の部屋へと向かう。

「零！え、お前今年もうちにバイト来たのか！」

「あ！お久しぶりです！去年はお世話になりました」ペコリ

「いいって！いいって！それよりやっぱり今年も来てくれるの？てか来てくれや！」

「それが今年はちよつと厳しいんすよねー」

とある社員さんが俺に話しかけてきた。実は俺は去年の夏休み期間はここ、弦巻文庫で編集者のバイトをしてたんだ。

内容は持ち込みの対応、なんか神奈の弟だから見る目あるだろー的なノリで抜擢され、たくさんの作品と目を通すいい機会だった。

「そうか…零君が担当した作家さん今マガジンで漫画描いてるぞ、会

いたがってた」

「いえ俺はただアドバイスしただけです、元々話考えたり絵を描いたりしてるのは本人なので」

「……変なところで律儀だよな、君って」

「そ、そっすかね」

言われてみればそうかもしれない！でも実際俺は本当にアドバイスしただけなんだけどな！

「まあそのうち正社員としてうちに来てくれよー？結弦も俺もいるかわからないけどな！じゃあねー」

縁起の悪いことを言って去っていく正社員、冗談でもそれは言うなよ……てか辞めないでくれよ！こんなにもいい仕事なのに！

その後会う度に色んな人から声をかけられ部屋に着く頃には数十分経っていた。

「姉貴ー来たぞ」

「……ようこそレイー今いいところだから少し待ってて」
「……………」

俺が想像してた部屋なんかじゃなかった！もつと散らかっている部屋かと思えば散らかってもなく綺麗に整理整頓された部屋だ！

「よし！では早速例のものを！」

「はいはい、落ち着けてー」

パソコンを思いっきり閉じて早く早くと言いながら疼いていた。ぶつちやけ気色悪い、いい大人が何してんだよ！

「あれ？結弦君は？」

「んー？あーそこら辺で寝てんじやない？」

「寝てる？」

「……………やあ、レイ君」

「うおー！」

声がした入口付近に目を向けると布団の中に入っている結弦さんの姿があった。

「ゆ、結弦さんまさかこの部屋に泊まってるの……？」

姉貴が泊まるならまだわかる。けどあなた泊まる意味ないだろ！

「違う違うー結弦君はあたしの寝た布団に入って匂いを嗅いでるだけだよ」

「食べながら喋んな、てかよく喋れたな！」

はつきり聞こえる声でよく喋るわ、あんたすげーよ

「違うに決まってるだろ！眠いから布団借りただけだ！」

「でも普通女子が寝た布団で寝るかねーもしかして結弦君匂いフェチ？」

匂いフェチ、と言うのはある特殊の匂いが好きなだけの話、しかし俺の幼馴染はそれを越してエッチしたいと言いつつ、恐ろしいだろう？

「とりあえず結弦さんも食べてください、姉貴の相手は大変だったはずなので」

「流石レイ君だ、君はなんていい人なんだ…！」

結弦さんの分も作るように頼まれてたから作ってきただけとは言えないよな

「んで？アニメ化の方はどーよ」

「あー！聞いてよレイ！脚本家の人さ！原作とは違う始まり方にしよとか言い出したんだよ！作家としてそれは許せないよね！」

「お、落ち着けて、わかった、わかったから、離れるおー!!」

あんたが自分の作品に命かけているのはわかったから！でも近い！少し離れてくれ！

「神奈先生と脚本家で討論になってねーいや、あれは笑うしか無かったなーあはは」

笑ってるが目笑ってない。恐らく終わったーって意味で笑いが出てたんだろう。

「まあ？今はなんやかんやで仲直り、順調に進んでるよ、多分あと数日で家に帰れる」

「……本当か？」

「まじまじ！あと少して新刊の話書き終わるし短編集もストックあるし！」

「帰ってきたら困るんですけど…？」

「なんですか!?!」

だってリビングで寝れなくなるし…そうなると部屋で寝る羽目になつてどっかの誰かさんに寝息聞かれるし…。

「仕方がない、結弦君の家に泊まるか」

「ツ!だ、ダメだ!神奈先生は酔い癖が悪いからダメだ!」

「えーまだあのことに気にしてんの?別にいいって!男子ならそんなこと気にすんなつての!」

「絶つつ対気にするだろ!?!」

「…え、なんかあつたんすか?」

何その何かあつたみたいな話、俺めっちゃ気になるんですけど!

「いやね、アニメ化決まった時さーあたしベロンベロンになつて結弦君の家に泊まつたんだよ」

「…おう」

あれ?確かその時千紗さんの家に泊まつたつて言つてなかつたけど…?

「も、ももももういいだろ!あ!この唐揚げすごく美味しい!めっちゃ美味しいよこれ!」

「ですよね!流石結弦さんわ、わかつてるー!」

「えー2人ともつままないのーまあレイの料理は世界一美味しいけどさ!」

これ以上は聞いてはいけない何かがある気がする…!だから俺はあえて話を聞かない!

「レイ!レイが来てるつて本当か!」

「ツ!千紗さん!?!」

バン!とドアを大きく開け近くにいた結弦さんに当たったと思えばそれを気にもとめずに俺に近寄る。

「実はこないだ友達が結婚したんだ…私もそろそろやばいと思うんだが…!」

「あ、はい」

「早く結婚してくれないかレイ!」

「…いい、いやーまだ結婚できる年齢ではないので」

「だよな！結婚できるまで待つとくぞー！」

くっ！本社に来たらこの人がいるのは当たり前だよな！ワンチャン会わないかとも思ったのに会うことになるとは

むしろあっちから俺目的でやってくるとは、ここに来る途中色んな人と話したせいかな

「相変わらず千紗さんは結婚願望強すぎ、別にレイは今彼女いないから貰ってもいいよー！」

「何勝手に決めてんだよ！彼女ぐらいすぐ作るわ！」

「おー！レイ好きな人でもいるの!？」

「なんでそうなる!？」

好きな人？と言われれば言い難いが気になってる人？ならアサシンがいる！

早いところ見つけて千紗さんに彼女がいるので結婚できませーんって言いたい。

「レイに彼女だと？ふん、作らせるわけないだろ！なに、この世にはできちゃった婚つてのがあるんだぞ？」

「編集長！それは捕まっています！」

「俺もそれは無理！俺に一体何しようっていうんですか!？」

「……って冗談だ」

この人の冗談は冗談だんじゃないんだよ！怖いんだよ！

「ところでレイーあんた美人な人とサークル活動してるみたいだねー」

「！な、なんのことやら……」

まさか本当に燐子さんが俺のサークルメンバーだと気づいているのか？

「ほら写真、この子めっちゃ巨乳だよねーレイもう触ったの？」

「触ってねーよ!？」

「やっぱりりんちゃんサークルメンバーだったか!？」

「ッ！嵌められた!！」

「嵌めたんじゃない、裏とったんだよー」

「同じじゃねーか!！」

そう言えば燐子さんの俺の名前言ったって言ったなーそりやすぐバレるわ

「あーあの子ね、やっぱりレイ君ってレイ君のことだったのか」

「なんだ、レイ…お前この巨乳の子がタイプなのか？清楚系が好きなのか…」

「え？いや俺は千紗さんみたいな黒髪ボブの巨乳が好きです」

『……………』

「……………え？俺今なんて言った？」

全否定しようとしたら思ってること全部口から出ちやったYO！もう終わりだYO！でも別に千紗さんのことが大好きなわけではないYO！

「そ、そうか…うん、ならこのままでいい、かな」

「あ、はい…」

そのモジモジして答えなくてくれ…でも待てよ？燐子さんに土下座でも何でもしてボブヘアーにしてくださいと頼めばワンチャン…

ってあそこまで髪伸ばしてるし流石に切ってくれないか、女子にとって髪は命みたいなもんだからな

「……………レイはやはり巨乳が好きと、千紗さんの胸に爆弾でも仕掛けようかな」

姉貴の前であまり巨乳の話をするんじゃないやなかった。このままの空気はまずい！何か空気を変える話を…！

「そ、そういえばサークル活動でちよつとし問題があつてですね」

「問題？りんりんちゃんスランプ入った？」

「んなことじゃねーよ！」

「じゃあなんなの？」

問題と言うのは…

「作った作品を印刷してくれる所を探してるって言うか…なかなか見つからないって言うか…」

「なんだそんなこと？千紗さん」

「話は聞かせてもらった、ウチと契約している印刷会社に話をつけてやろう」

「え!?まじですか!」

弦巻文庫と契約している印刷会社さんに頼んでくれる?めっちゃくちゃいい話じゃないか!

で、でもいいのか?めっちゃ姉のコネ使ってるみたいで気が引けるんですけど...?

「ただし条件がある」

「……条件?」

俺はその条件を受け入れることにした。しかし…この条件のおかげであいつと数年ぶりに再会することになるなんてこの時の俺はまだ知りもしなかったのだ。

密室で下着姿の女子達と過ごすことはできますか？

姉貴達と本社で数時間話した後俺は綺麗な夕焼け空の下を歩いていた。

目的の地である羽丘学園、校門をくぐれば部活動の生徒達が校舎外を列になって走っていた。

毎回思うがよく走れるな、去年の持久走シーズンなんて先頭集団の部活組はクソ早かったからな、ついて行くなんて不可能だったの

「うーすレイ」

「おーす柊優」

「……っていいのか？今走ってるんじゃ？」

「レギュラーはこれぐらいサボっても許されるんだよ」

「うわうぜえー本当に嫌われてくれない？」

「俺は嫌われてない」

う、うん……だから今から嫌われて欲しいって言ってるの、日本語わかる？英語で話してやろうか!?

「帰宅部のお前がなんの用事で学校に？」

「言っとなかったけ？俺部活って言えばいいのかな？とりあえず活動するなんかに入ったんだよ」

「それ初耳なんすけど、何してんの？」

「んーそれは夏のお楽しみってやつだな」

「そか」

「柊優せんぱーい、サボってないで走ってくださいーい！」

「わかった、今行く……ってことだからまた今度な、レイ」

「おう、またな」

軽く手を振り柊優はものすごいスピードで走り出す。つられて俺も軽く手を振ってしまう。

いやカレカノかったの、気色悪いわ

「……………」

なんかかさつき柊優に声掛けてたサッカー部のマネージャーらしき人物が俺を睨むんですけど!?

あれか、この子終優のことが好きなんだろう。てかせんぱーいだつて、なにそれ、俺も一度でいいからそんなふうに呼ばれたいぜ
後輩なんていない。強いていえばあこがいるけどあれは妹みたいなもんだ。

「はあ、虚しい…早く視聴覚室行こう」

何故か足取りが重くなり階段を上るのにいつもの倍時間がかかった。

ま、まあ本社から駅まで歩いてそこからさらに羽丘まで歩いたし？それに最新のパソコンも渡されたし…重くて疲れるってなやつとこさで視聴覚室に着きドアを開ける。

「こんちやー誰かいる？」

が返事はない。ないけど部屋の真ん中では机にうつ伏せになり、すーすー寝息を立てて眠る露出狂こと青葉モカがそこにはいた。

「(バイトで疲れたのか?)」

午前中働いてたし無理もない、か。俺も土曜日働いたら昼寝したりするからな

「(にしても…こいつ黙ってたら可愛いよな…)」

本当に思う。黙ってれば可愛い、しかしこいつは幼馴染、恋愛感情のれの文字、いやローマ字のrすらない。

しかし、アサシンだったら話は変わる。

「(このとらえかたでいいのかよ)」

ぽりぽりと頬をかきながら一人そう思っていた。

他の人達も来る気配なさそうだし、いただいたパソコンの確認でもしとくか

「むにやむにや、えへへーれーくん…でつかーい」

「……………」

一体どんな夢を見てるのだろうか…でつかーい、わからん、身長か？自慢じゃないが身長はそこそこ高い方だと思ってるぞ

「んー、あつーい」

「ッ！」

モカのやつは暑いといいだしボタンを外し始めた。その顔はぐっ

すり寝ていて幸せそうな顔をしてるのに手は起きてるかのよう
にボタンを外していく

そこからさらにどんどんエスカレーターしていき最終的には下着のみですーすー寝ていた。

「……………」

「ごくり、と静かな視聴覚室に俺の唾液を飲み込む音が響いた：気がした。

俗に言う今なら何でもし放題、胸を触っても、変なことをしてもバレなきや犯罪じゃない。

モカのことだ一度寝たらなかなか起きないとクラスでも評判だ、俺の次に

どうかと思うぞ？視聴覚室で下着一枚で寝るなんて：誰か来た時のことを考えて欲しいものだ。

てか下着着てるのが意外や意外、何で今日に限ってつけてたんだろうな

「んもーう、誘っても反応なしですか」

「うお!?起きてたのか!」

「れーくんが来たあたりから起きてたよー」

のわりには嘘寝が上手いな：あんた役者なれるんじゃないやね？知らんけど

「目の前に下着姿の美少女が寝てるのに手を出さないなんて：そんなに性欲ないの〜?」

「……………あーはいはい、うるさいねー」

手を出そうとしなかった。は少し嘘になる：少しだけ、ほんの少しだけ触ってもバレないじゃね?って思っていました。

しかしそのことをこいつに知られると弄られる。だから俺は黙っておく

「モカちゃんのお胸ならいつでもウェルカムです」

「っておい!?どさくさに紛れて触らせようとするな!」

「えーじゃあ押し付けちゃおう」

「やめてええー!」

抱きつきこれでもかと俺に自分の胸を押し当ててくる。体に女性の柔らかいものがあたりちよつと興奮してしまう。

「え!?レイ君女湯にいたんですか!」

「そうなんですよ!蘭が見つけてそこからレイコちゃんって言う架空の妹を作り出して」

「なんですかそれ!私もレイコちゃん見たかったです!」

「え...?あいつ女湯に入ったの?す、すご...てか上原さん達は、裸見られてたってこと?」

「でも凜ちゃんもほぼ裸見せたじゃん?」

「あああああああ!その話は忘れなさい!今すぐ忘れて1秒も早く!」

なんて話し声が廊下から聞こえてくる。

ここで今の状況を考えて欲しい。俺は今下着姿のモカに無理矢理だが抱きつかれている状態だ。

「え、えつとーモカさん?離れてくれないか...?」

「えーやだー」

「ですよー」

そう呟いたと同時に

「こんにちは!早速サークル活動...を?」

「あちゃーお取り込み中だった?」

「...変態だわ」

「違う!話を聞いてくれ!」

「モカちゃん大人の階段昇っちゃいました」

ぱんぱかぱーんと言いながらモカは胸を張っていた。張ると同時に少し揺れる胸には自然と視線が向けられる。

「み、みんなーこいつの冗談だからな?みんなは俺を信じてくれるよな!」

「た、確かにモカたんはその露出癖なので...そう、なのかな?」

まあ変態だしそう思われても仕方がないよね!よかったー変態じゃなくて!

「青葉さん早く服着て、今日は結構大事な話し合いするんだから」

「おーりんちゃん今日もフロントホックブラ〜?」

「なっ!? な、なんでそれを!」

「勘でーす」

そう言えば朝日奈さんフロントホックブラ着けてたな…あれはすぐくエロかった。

「?なんですかその話」

「隣子さん、実は凜ちゃん…」ゴニヨゴニヨ

「ッ!朝日奈さん大胆で、ですね…」

「だからあれは違うの!白金さんも大きいならわかってくれますよね!」

「いえ私は普通のブラ派ですの〜」

「と、言うわけだ、変態だって認めろ、朝日奈さん」ポン

「あんに1番言われたくないわよ!」

「ぺぷし!」

思いつきりビンタを食らってしまった。脳が揺れた気がしたんですけど…大丈夫なんでしょうか

「つて、つてことでこれよりサークル名を考える会議を始めろ〜」

『おー』

右頬のみ綺麗に赤く腫れ上がった状態で教卓?らしき場所にたちホワイトボードにでかかどとサークル名案と書いていた。

「とりあえず案あるやつ挙手を」

「はい」

「なんだフロントホックブラを着けて俺を誘惑してきた朝日奈凜ことちよろ凜さん」

「あんた本当にいいいいか、ぐすん…かげんにしなさいよ…!」プルプル

ふるふる震えながら俺に指を指す。少し弄りすぎた…急いで謝ろう!

「まあまあーりんちゃんもれーくんにもビンタしたしお互い様ってことで〜」

「私に免じて許してくれない?」

「おい待て、なんでビッチに免じてなんだよ」
「ビッチじゃありません！処女ですー！」

「女の子がはしたないことを言うんじゃないか！」

「このクソ変態幼馴染2人目…！燐子さんを見習え！1人でめっちゃノートに案を書き込んでるじゃねーか！」

「はい！レイ君案言ってもいいでしょうか！」

「よーし！言っただけ！」

「ではまず初めはロゼリアで、その次は」

「待って」

「？なんですか！」

「なんですかじゃない！まず初めはロゼリア？あんたらのバンド名じゃねーか！」

初めからモロかぶり！何言っただよ！?

「違いますよRoseliaじゃありません、ロゼリアです」

「カタカナも英語も変わらん！次！」

「次はRoselia2です！」

「続編ゲームに使うようなタイトル!？」

よくあるよねー○○○2!だからってこのサークルがそんなRoseliaの2作品目みたいな言い方すんなよ!?

いや燐子さんにとってはRoseliaの次に大切な場所だからつけない的なの?あれだと思っただけど却下!?

「これもダメですか?ならRoselia2nd」

「それも一緒だろ！」

「ではRoselia 2nd season」

「どこのアニメの2期ですか!？」

「じゃあAfterglow2！」

「それがダメならAfterglow 2nd seasonで！」

「全部却下だっただけ!!!」

お前ら一旦自分のバンド名から離れてくれないか!?ここはバンドと全く関係の無いサークルなんだからな!?

「ふん、どうせ私はバンド活動するような陽キャじゃないわよ…あー」

来世は陽キャで虐められない人になりたい」

「ほらーお前らが陽キャ話するから朝日奈さん拗ねちまったじゃねーか」

陽キャよりも虐められない人になって欲しい、陽キャになつたらなんか不味い気がする…ただでさえ時々やばいこと言うんだからさ

「となると困りましたね…もう案がつかまりました」

「全然考えてねーじゃんか!」

「あつ!ではこれなんてどうです?りんりんソフトフェア!」

「どこぞのサークル名となんか似てる気がする!てか俺達はゲームなんて作ってないだろ!」

ソフトフェアってつける意味がわからん!俺達はゲームなんて作らず同人誌描いてるだろ!

「パンパンパンパンパン」

「パン好きなのは十分わかったから落ち着け」

「乱行部ってどうかな!」

「俺達は一体視聴覚室で何をしてるんだよ!」

モカはまあ許す、けどひまりお前はダメだ、急に何を言い出すんだ!

「おい朝日奈さん、なんか案ないのかよ」

「そもそも私に来世なんてあるのかしら、また人間で生まれる保証なんてないし…どうせ閻魔様にも虐められて地獄に連れていかれるのよ…あはは、死ぬのはやめようかな」

だ、ダメだーなんかよくわからんことブツブツ言ってる…!でも最後に死ぬのはやめようと言ってるから少しだけ成長したな!朝日奈さん!

「もういい、このままじゃ埒が明かない、各自ちゃんとしたサークル名を考えておくように!」

「何言ってるの?」

「???」

ひまりのやつがなんか言い出した。何言ってるの?はお前だ、もつとまともな案を出せよ

「レイ君まだ1つも案言っていないけど?」

「……いや俺の案は、その…なんとというか恥ずかしいというか」

頬をかきながら苦笑いで返事をする。

「神崎レイ、自分だけ言わないのは卑怯者だ」

「急になんか言い出したなーお前はなんか言ったのか」

「おにぎり定食なんてどう? コスパよくて早く食べ終われる…学食
ぼっち最強の味方」

「それはお前の好物だろ!」

おにぎりが好物ってThe日本人だな、どこぞの小麦加工食品が好きなやつとちげーぜ

「じゃあなんだ? 黒の騎士団とかナイトメアとか言ったら採用される
のか?」

「厨二病乙々」

「ツ!ちゆ、厨二病じゃないから!」

ほれみたことか!よりにもよってモカに煽られたっての!?

「レイ君…流石にそれはモロパクリなので却下です」

腕をクロスさせぶっぶっーと言いながらジト目で俺を見てくる

隣子さん、あんたも結構際どいこと言ってただろ

「はい各自考えるように…」

『はい』

こうして俺達のサークル名を考える会議は終始訳の分からない話
をして最終的に先延ばしって形で幕を閉じた。

「ところでレイ君、そのパソコンはなんなんですか?」

「あ、これっすか…そう言えばみんなに言わないといけないことが

あって」

「え?もしかして彼女できたの? いやだよ、まだエッチしてないよ!」

「うるさい黙れ、んなことじゃねーよ」

「ほん、と咳払いしてみんなにあのことを言う

「えっと、俺夏休み終わるまで弦巻で編集者としてバイトすることに
なった」

「ええ!?!つ、弦巻って弦巻文庫ですか!?!ぎ、義妹の!?!なんでですか!?!」

「ちよ、落ち着いて燐子さんー」

燐子さんに思いつきり肩を捕まれ揺さぶられる。どのオタクである燐子さんにとって弦巻文庫は神作の生みの親、いやボスだ。

そんな所で働ける俺を羨ましいと思うのは無理もない、だから断ろうとしたが…

ここで時は数時間遡る。

「条件…？」

「ああ、レイ、夏休み終わるまでうちでバイトしろ」

「ええ…俺サークル活動もあるし普通にコンビニのバイトあるんですけど」

「何、普通の労働者と同じ時間働くだけだ、残業なし、時給はかなり弾んでやるさ」

「編集長！僕の給料は上がらないのでしょうか！」

「よし、お前は減給だ」

「なんでですか！」

「でも本当に最近頑張ってるからな…私がポケットマネーでいくらか渡そう」

「あなたは神ですか」

泣きながらそう言う結弦さん、よっほど嬉しいことなんだろう。

「見たところiPadで執筆してるんだろ？いい機会だ、お前に最新のMacBookProをやろう」

「ま、まじっすか」

「だから私と結婚しよう」

「MacBookで結婚はやばい」

「間違えた、うちに来てくれないか？」

んーパソコンがタダで貰えるのならバイトすることに越したことはない。それにいい機会だ、これを機に何か執筆のコツなんかを掴めるかもしれない。

でもなー燐子さんがなんて言うか…。

レイはこの時点で燐子のことを気にしていた。もし自分だけが弦巻でバイトすることになったら妬まれるのではないかと

「まありんりんちゃん相当羨むと思うけどねー」

「ッ！」

「見ててわかるよ、あの子あたしの作品本当に好きなんだなって、だからこそ彼女は自分で絵を描き始めた、違う？」

「違わないけど…さ」

「レイが思ってることちゃんと話せば理解してくれるっしょ、じゃないとレイとサークル組みたいなんてものが好きがやることじゃないよ」

「何故そこで俺をデイスる！」

でも姉貴の言う通り、かもしれない。

俺がバイトをすれば最新のパソコンが手に入って印刷してくれる企業も確保出来る。

そして…俺自身が執筆者として成長出来るいい機会になるかもしれない。いや！するからには成長しないといけない！

「やります、やらせてくださいー！」

「よおーし！では早速土曜日から頼むぞー！」

「今週末から!?!早くない!?!」

こうして俺は今週末から弦巻文庫でバイトをすることになったってわけよ

そして時は動き出す。

「なんとか言ってく下さい！なんでレイ君が弦巻文庫でバイトすることになってるんですか!?!」

『……………』

ちなみにだが他の3人は何かを訴えるように俺のことをゴミでもみるような目で見てくる。

『（こいつやったな）』

と…言いたいことはすぐーくわかる。姉のコネ使ったなって思われてるんだよねー

あはは、まさにその通り何も言えねえー！

「隣子さん、事情があるんですよ」

「じ、事情ですか…?」

「はい、俺達の作品を印刷してくれる代わりにバイトして欲しいって

「言われたんです」

「誰からですか？」

「……………結弦さんから」

んー嘘ではないよね？結弦さんもレイ君が来るなら助かるわーって言ってたし、なんならなんかグループLINEにレイ君が来るぞー！みたいなこと送ってたし

「結弦さん…あーあのモブキャラですね」

「お、おいいくらなんでもいいすぎだろ」

結弦さんがグツと親指を立てながら空に消え行く様が何となく頭に浮かんでしまった。

「それだけじゃない、俺は色んな作品に目を通して自分の力に変えたい…今のままじゃ夏が終わった後の冬で大きい作品を作れない」

「え？レイ君冬コミ参加する気満々だったんですか？」

「あ、はい、燐子さんは…？」

ええまさかやる気に満ちてたの俺だけですか!?なんかめっちゃ恥ずいんですけど！

「私もなんですよ！やっぱりレイ君は先を見る目がありますねー！流石です！」

「で、ですよね！」

あつぶねえ焦ったー！参加しないとかい出したらなんとと言うかと思ってたよ

「姉のコネ使うな」

「りんちゃーん、すてーい、黙つとこうか？」

「そうそうー凜ちゃん急に何言い出すのー」

「う、うぎやあああああ!!」

ほっぺを捕まれ拳句の果てには胸を揉まれる。姉って聞こえただけで何か言おうとしてたよな？

余談だが朝日奈さんは俺の姉貴が神奈であることを知っている。そこからとある約束をしたわけだし？

「姉？何の話ですか？」

「ううん、決してなーちゃんの話じゃないよ」

「うん！私達なーちゃんなんて全然知らないから！」

「な、なーちゃん…？そう言えば電話した時間いたような」

「な、なんでもないさー！さあ！さあ！燐子さん！俺の執筆したSSはどうでした!？」

こいつら相変わらず誤魔化すの下手だなー、なーちゃんなんて知らないからはもう言ってるもんだろ！

「あ、ごめーん、電話だ」

急にモカが携帯を取りだし着信音を止め通話に入る。

「もしもしーおーなーちゃん？これは意外や意外、れーくん？今隣いるけど…？」

「…：れーくんとモカちゃんの関係？それはくほら、ベットで楽しむ仲というかくハッスル仲というかー」

「お前は余計なこと言うんじゃねえ！」

モカの携帯を奪い取り視聴覚室の隅っこに向かう。

「もしもし！姉貴!？お前なにモカに電話かけてんだよ！」

「いやさこないだ遊んだ時連絡先交換したからさーレイ携帯なくしたでしょ?」

「ああなくしたよ、てかモカに何の用だよ」

「あつれえくモカちゃんがなーちゃんに取られて嫉妬してくれるのー？れーくん優しいー恋してもいいですかー？」

「勝手にしてろクソ野郎!」

そういう話じゃないんだ！なんで姉貴がモカのやつに電話するのか気になってるから聞いてんだよ!？」

「いやいやモカ之助に用はないよ？レイに用があるの」

「…：だったらモカの携帯に連絡する意味無くね？」

「そうだねー、家に電話しても出なかったし？幼馴染とエッチなことでもしてるかなって、ズバリ的中、あたし凄くね?」

「残念ながら姉貴が想像しているようなことは全くしてねーよ」

携帯を強く握りすぎてぶるぶると震えてしまう。まるで俺が幼馴染を性処理道具かなんかかと思ってるんじゃないかってぐらいにモカ達とエッチしてるのではと疑ってくる。

「あ、あつあー！だめ、ダメダメレイ君、いまさつきイったばかりなのに……！」

「ツ！ひまり！お前！」

「ほれみたことか！モカ之助だけでなくひーちゃんにまで手を！あんた責任取れるの!?!結弦君は取るって言ってたよ!?!」

「今結弦さんは関係ねーだろ!?!てか俺は何もしてない！ひまりが勝手に喘いでいるだけだ！」

「ほ、放置プレイ……！あんたなかなかゲスい趣味してるのね」

「だから違えええええええ!!」

ダメだ！何を言っても話が通じねえ！

「もういい！電話切るからな！」

「ちよ！ストップ！ステイステイ！stay night！」

「うるさい黙れ、俺はZero派なんだよ！」

ゼロ……いい響だよねー！まあ嫌な思いでも沢山あるけどな！

「ってその話は置いといて」

「あんたどんだけ自分勝手なんだよ……」

「結論から言う、すまん！状況が変わったらしい」

「??？」

何をいきなり謝り出してんだ？さつきまでの出来事に俺が怒ってると思われてるのか？

いやいや、姉貴よ？もうこんなの慣れたっての

「あんた達の作品印刷するやつ……あれ少し条件が変わったの」

「……んだよそんなことかよー別にいいよそんなの、条件って？」

結婚以外でよろしくどうぞおー！この歳でもう婚約者がいるのはやばい。2次元とからならまだしも許嫁とかな、いるわけないよねー
こんな現実でさ

「最低1000部だつてさ」

「……は？」

「だから、最低でも1000部からしか受け付けないってさ」

「よ、よーし1000部な、よ、余裕余裕……え？本気で言ってる？」

「本気本気、本気と書いてまじって読むよ」

「……………」

「あれ？レイイ、もしもーし」

腕に力が入らずぶらーんとなり携帯が耳元から離れる。

1000部？1000部をこの結成してまだ1ヶ月ちよつとしか経ってない弱小サークルにそんな数要求するの…？

「いや無理だろ!？」

「無理じゃない、頑張つて!」

「いやいや、馬鹿か！俺達弱小サークル！無駄に余った同人誌はどうすんだよ!？」

「ライオンの穴とかアニメどーよとかで売れば」

「エロ同人誌ならまだしもこれは無理だろ!」

イラストSSブックだぞ!?!所詮弱小サークル！まず店舗に置いてくれるかすら危ういわ！

「こればかりはまじですまん、千紗さんもかなり頭下げたよ？けどこれが限界だつて」

「ッ!」

あの人が俺のために頭を下げてくれた…？な、何それ、ちよつと想像してみようかな…うん、いいね

「まあ電話越しでだけどねー」

「俺の期待を返してくれ」

せ、1000部か…捌けるか？一種類だけのSSブックじゃ絶対無理だろ

「りんりんちゃん絵上手いからなんとするって、あたしも少しは協力するからさ!」

「……そ、そうか」

こういうが姉貴は絶対協力してくれない。てかする気ないだろこの言い方

「ね、ねえ燐子さん」

「…？はい、なんですか?」

燐子さんは俺が執筆したSSを読んでいたようだ。真面目に読んでくれるその横顔を見た時俺心臓は少しだけ弾んだ気がした。

「あの企業様が最低でも1000部からしか受け付けないって…どうします？今からでも変えますか？」

「1000部!?ちょ、誰そんな馬鹿なこと言ってるやつ!馬鹿なの!?馬鹿でしょ!これだから低脳は!」

「朝日奈さん!ちよつと黙っててくれないか!」

興奮するのはかなりわかる。けど今は黙っててくれーい!

「や、やり…やりましょう!」

『ッ!』

「あの神奈先生が買ってくれるって言ったんですよ?これで同人誌作れませんでした、ってなると私はもう立ち直れない!絵がかかる気がしません…!」

「…:…燐子さん」

「1000部だつてみんなで頑張れば何とかかなります!」

「レイ君!モカさんにひまりさん、それと凜ちゃんさん!みんなであれば1000部だろうが1万部だろうが捌いてやりましょうよ!」

こ、この人はなんて凄い人なんだろう。

俺は心の底からそう思った。俺と朝日奈さんは確実に1000部は捌けれないと判断していた。

のになんでこの人はこんなにも、まるで俺達だからできるみたいな言い方ができるだろうか?

こんなにもメンバーの中で、しかも絵を描く当の本人がやろうと言ってるんだ。

「(引くわけにはいかないよな…!)」

「決まりだね、レイ…返事は?」

「…やってやるよ、1000部全部捌ききつてやるよ…!」

「よし来た!」

千紗さん!例の件話進めておつけです!なんて声が電話から聞こえた。

もう後には引けない…:俺達で1000部捌ききろう!

「んじやまたね!今度家帰ったらラーメンでも食べ行こうよ、まりなも一緒だね!」

「……いや、姉貴と外食とか無理だから」

「そこははいって領けばスムーズに話が進むんだよ！」

「何言ってるんだよ」

こうして俺は姉貴とまりなさんと今度ラーメンを食べることになった。姉貴と外食とか久しぶりすぎて引く、ちゃんと大人しく食べてくれるのだろうか

「それじゃねーりんりんちゃんとモカ之助、ひーちゃんによろしくー」

「あ、それと…例の子にも期待してるよーって伝えてて」

「……ああ、わかった」

例の子って…名前ちゃんと教えたんだけどなー本人がその話聞いたら泣くぞ

電話は切れ俺は携帯をモカに返した。するとどうだろうか

「ねえモカ、その携帯新しい機種買ってあげるから私に出来ない？レイ君が耳当ててる携帯とか絶対レアものだから！」

「レアものならあげませーん、ひーちゃんは大人しくれーくんの匂いを嗅いでてくださいいな」

「ああああん！モカのケチんぼおー！」

「って泣きながら俺に近寄るなあー！」

匂いを嗅ぎたいが故に近づいてこようとするな！てかあれだぞ？俺も女子の匂いを間近で嗅いじやうとクラつてくるから！

「はーい！皆さんそこまでですよ！サークル活動始めましょう！」

「そうねー1000部ってなると相当きついわよ、まあ私コミフェスに参加したことないけど」

例えしてなくても1000部となれば大変だろ…

「どうする？メンツ増やすか？一応1人だけ手伝ってくれそうなのやっいるけどさ…」

「いるんですか？」

「ん？ええ、まあいるにはいるけど…」

ら、蘭のやつ事情を言えば付き合ってくれるかな？こないだ誘ったけど断れちゃったし

「さっきの私の言葉返してください」

「え?」

「このメンバーでならやれるとか言いながら候補者一人いるなんて聞いてませんよ!」

「……いや、それは」

「私柄にもなく熱く語ったんですよ……?なのに絵を描く人もう1人増やすなんて……」

「……………なんて最高なことなんですか!」

「そこかよ!」

「このメンバーでやれるならその方が加わったら更に売れに売れて1000部なんてすぐに超えちゃいますよ!」

ガッツポーズする際に揺れる胸を見ては鼻の下が伸びてしまう。

いやいかんいかん!首を思いつきり振り普段の顔に整える。

「まだ決まってるんですよ?とりあえず俺達が今できることをやりましょう!」

「そうですね!では早速SSの方を」

「うう!」

「完璧です!実に妹以上恋人未満を再現してます!特にこの冬香の夏、海ではなく水族館を選んだあたりです」

「夏なのに何故水族館を?って最初は思いましたよ?けど読んでてわかります」

「……冬香と晴太の関係ってのは他の人達より少しだけ浅い、だから俺は2人に水族館がピッタリだと思ったんです」

「そう!だから冬香の心を表した静かな思い、それを水族館で表現したんですね!もう最高ですか!」

よおっし!心の中でガッツポーズをする。

「だけど俺がわざわざ夏定番の海やプールを舞台にしなかった理由がもう1つある。」

「あともう1つ理由があるんすよ!」

「な、なんですか!」

「冬香だけ水着姿を見せるのはズルくないですか……?」

「ま、まさか!」

「そう！」

バン！と机を叩き大きな声で言う！

「全員の水着姿のイラストSSを本の最後に付ける！」

これで平等、春乃、夏美、秋音、冬香、全員の水着姿が見れる！

燐子さんの絵で水着姿に食いつかないやつなんてオタクにいるのか!? 否! いるはずがない!

「水着…ふ、ふふ、水着ね…結局誰にも見せなかったなーあはは」

「あれーくんがりんちゃんのとらウマスイッチ押しちゃったー」

「大丈夫だよ凜ちゃん、あなたは水着よりもエッチなものレイ君に見せたんだから」

「うわあああんー!」

トドメを指すんじゃないやねえよ! 朝日奈さん泣きじやくつて机に伏せちまったじゃねーか!

てかそんなに俺に裸見られるの嫌だった!?

「水着姿の絵を描くとなればモカたん! ひまりちゃん! そして凜ちゃんさん! あなた達の力が必要です!」

「??」

力が必要です…? あーあれか! モデル役ね!

「いつ!?! い、いやよ! もう水着なんて着たくないわよ! そもそもここにないじゃない!?!」

「ないなら下着姿でー水着も下着も変わらないよ」

「変わるわよ!?!」

「隠してる面積は変わらないって!」

「あぎやああああ!!」

がしつとモカとひまりに肩を捕まれ、視聴覚室の機材とかを保管している着替えるに適した部屋と引きづられていく。

「では私も脱ぎましょうかね!」

「!? いやいや! なんて!?! 脱ぐ必要ありませんよね!?!」

なんで燐子さんが脱ぐ必要あるんだよ!?! あとこの人が脱いだら衝撃が強すぎて色々やばい気がする…!

待つてる間には朝日奈さんの叫び声と同時に指を入れるなあー

！ってセリフが聞こえかなり気になった。

あ、あの部屋で一体どんなことが起きてるんだらうか！

「いやぁー興奮しますねー」

両頬に手を置ききやーと言いながら下着姿の燐子さんは心を躍らせていた。

脱がなくていいだろって言ったのに脱いでやがる。誰か視聴覚室に来たら俺は冤罪をかけられ捕まってもおかしくないだろこれ

「いやお待たせ〜」

「凜ちゃんどう？やっぱり私の方が少し大きいかな!?だって凜ちゃんのブラ少しキツイもん！」

「う、うるさいわね、私だって好きで大きくなったわけじゃないの！勝手に大きくなったの！」

「……ひ、ひまりのフロントブラ」

長いから略す。か、かなりエロい…破壊力がやばい…!

「では早速絵を描くためポーズを取ってください！」

「ほらひーちゃん、胸寄せるポーズしてよー」

「ええーしやうがないなーレイ君見ててね？」

「ツーか、かか考えとく!？」

直視できねえ、何だこの空間なんだこの時間！この密室に服を着てるのが俺だけだという謎の状況…!どうなってんだ

案の定ひまりは胸を寄せまるで男を誘惑するかのようさ仕草をしだす。

「(こんな状況で集中できるわけないだろ!)」

ひまりのひまりと燐子さんの初めて見た胸、なんか知らんがめっちゃいいと思う。

あとは朝日奈さん、この巨乳娘3人集は破壊力が強すぎる。俺でなければここで乱行パーティが始まっているかもしれない。

モカは…いやけて小さいわけではないんだけどさ、他の人達が大きくて霞んで見える。

あれだよ、強豪校の野球部ベンチが他の所だとブイブイ言わせる的なやつだ。

「わ、悪い、俺ちよつと御手洗に行ってくる」

「モカちゃん達の裸を想像していけないことするつもりですか?」

「んなわけねーだろ!外に出るための言い訳だつての!」

早くここから抜け出したい!確かにおっぱいは好きだけどこれはなんか違うだろ!?

「レイ君困ります!私晴太の水着姿も描きたいのでモデルになつていただきたいです!」

「い、いや、それは無理と言うか、いや今はと言うか…」

考えてみる、こんな所にいるんだぞ?息子さんが元気になるはずがないだろ。

しかしここでその姿を見せるのは間違っている。そう間違っている!

いや決して俺は変態とかではない。これは男子として極普通の生理現象なのだ!

「神崎レイ、自分だけ下着姿にならないのはずるい。裸になるべき」

「なんで裸だよ!」

「れ、レイ君脱いでくれるんですか…!」

「何真に受けてんだよ!」

俺だけ裸はおかしいだろ!?

「てことは凜ちゃんにはレイ君の裸が見たいってこと?あー凜ちゃんレイ君とお風呂入ってないもんね」

「……前言撤回、やっぱり速く出て行って!」

「言われなくても出ていくわ!」

「戻ってくる前にはちゃんと手は洗ってね!」

「うるさいわ!」

こうして俺は逃げるように視聴覚室から出ていく。出て気づくが中からの音は本当に廊下には聞こえない。

これならあんなに騒いでも問題はないな、と何故か感心してしまう俺だった。

「(俺がいなくなつたら朝日奈さんどうなるんだろうか)」

ちよつとばかり心残りがあつた。朝日奈さんを一人にしてけど大丈夫

夫か？

てか抜け出して思うけどあそこの空間ってまじでやばいよな、めっちゃエロかったです。

「……さてと、図書室で作業でもすっか」

水着回のSSを1人黙々と図書室で執筆するレイ…だったが、やはりとごかしら集中しきれないレイなのであった。

休憩ホテル（意味深）に入ったことありますか？

朝と言うのは必ずやってくる。世界が終わらない限り太陽は登り続け俺達を優しく照らしてくれる。

「いや厨二病か!？」

久しぶりに自分の部屋で寝てみると盗聴されてるという自覚があるためか、熟睡できた気がしなかった。

姉貴が近頃帰ってくるとなればそろそろ部屋で寝る必要があると思つた俺は大人しく部屋で寝ていた。

変なことを頭の中で想像しながら起きてすぐに制服を手に取り下に降りる。

身支度を済ませブレザーだけ着ずカッターシャツ姿でエプロンを付け朝食を用意する。

自分で言うのもあれだが料理は上手いと思う。なんせもう5年近く神崎家の料理長をしてるんだぞ？美味しくなかったらおかしいわチン！パンの焼けた合図である音が響き、ついこないだ買ったばかりのオーブントースターを開ける。

出来加減は最高、これは絶対美味いやつだ。

テレビでニュースを見ながら朝ご飯を食べる。

こうニュースを見てて思うが本当にネタが尽きないよな…誰か定期的になんか事件起こしてるし、世界って本当に不思議に満ちてるなと思つてしまう。

なーんて思いながら朝食を食べ終え家を出る。

「いつてきまーす」

相変わらず誰からの返事をないが律儀にいつてきますと言うレイだった。



いつも通り通学路を歩いていると

「……………」

向こうの塀からなんか黒い髪と羽丘2年の制服のスカートがちよこつと見えていた。

「まあ誰か待つてんだろう」

普段こんな場面があると俺はチキンだから携帯をいじりながらスルーするが今はない。

ああ、注意だが歩きスマホは危ないからやめような！

俺は「俺に用のある子じゃない」と勝手に決めつけそこを通ろうとした時

「ぐへえ!」

誰かから足を引つ掛けられた。く、くそう…さっきの女子生徒か？こんなイタズラするために誰かを待つてたのか!?

「いてて」

「……おはよ、レイ」

「……………蘭、お前かよ」

まさかの俺に足をひっかけ転けさせたのは幼馴染こと美竹蘭、俺を女装させたい趣味がある変なやつだ。

「立てる?」

「お前が転けさせたんだろ…ツ!」

蘭が俺の前に座り手を差し伸べてくれる…が、スカートの中が丸見え、黒いショーツに目がいき蘭の手を取ることを忘れてしまう。

「なに?」

「な、なんでもねえよ、自分で立てる」

「……………あたしの下着見てたのぐらいバレてんだからね」

「ううじゃ、じゃあなにとか言うなよな!」

制服についた汚れを払いながら俺は蘭にそう言っていた。

てか黒のショーツってアサシンが履いてたやつ…クソ、柄までちゃんと凝視して確認するべきだった…!

「今の下着欲しいならあげるけど?資料で買ったものだし」

「……………いや大丈夫」

「ほら、これレイが履いてるパンツと同じだよ、まあぐちやぐちやに濡れてるけど」

「こんな場所での本を出すな!」

自分の書いたエロ同人誌を開き今履いている下着と同じものを作

品の中でレイが履いていると言いなから見せつけてきた。

ちなみにだが本当にぐちゃぐちゃに濡れてる。なんでか俺は知らないが

「時々資料ですって言って言っつてツイートしてる」

「え？なんだって…？」

つまりは蘭の下着姿がネットに晒されてるだと…！早くアカウントを特定しなければ！

って違う違う！注意しないと！

「下着だけだけどね」

「あ、はい」

よかったー！幼馴染の下着姿がネットに晒せることは無かった！まあ1名危ういやつがいるけど

ふわーっと頭の中であいつの顔を思い浮かんでしまう。

「ところで蘭は何をしてたんだ？」

「何ってレイを待ってた」

「何故？」

「…：さあなんでだろうね、行くよ」

「ちよ、ええ？」

な、謎だ…最近の蘭はよくわからない発言ばかりしているような気がする。

もしかして少なからず俺に気でもあるのか…？

ここは探ってみようか、4月29日何をしてた？はもう数ヶ月も前の話だから覚えてないと思う。

ならば…

「なあ蘭」

「なに？」

「蘭って好きな人…いたりするの？」

「…：どうしたの急に」

「い、いや蘭って可愛いし？胸の形すげーいいし？…：こ、告白とかもされたことあったりして！」

「あんた何言ってるの？」

「で、ですよー」

俺は本当に何を言ってるんだろうか、胸の形すげーいいし？馬鹿か、普通にセクハラだろ、訴えられたら負けるぞ

「あんたさ、昔彼女欲しいーって言ってたよね？」

「？まあ言ってたな…？」

確かそれは4月29日当日の話か、てことはそのあとのことも覚えてたりするのか？

「今はあたしがいるじゃん」

「……………あつ！」

そ、そうだった…！蘭とは一応形だけ付き合ってるみたいの設定になってたんだつた！

「でもお前絶対に無理って」

「そう、レイと夜桜の間に入れる人なんて絶対誰もいない…誰も、ね」

「じゃあお前はなんなんだよ」

「あたしはー本当に付き合ってるわけじゃないから、レイをいいように利用するために受け入れただけだから」

「いや言い方もつと他の言い方ないの？」

「そうだ！あの日のこと聞かないと」

「蘭質問がある」

「さつきから何？色々聞きまくって…あたしとエッチでもしたいの？」

「な、なんでそうなる!？」

「ごほんと咳払いして聞いたです。」

「4月29日…お前はバンドの練習があると言って俺と別れた」
「……………」

「でもその日モカもひまりもバンドの練習してたとは言ってなかったんだ」

なんでもっと早く気づかなかったんだろうか。モカは話を聞くといつも通り公園の草むらで露出してたみたいだし…

ひまりはひまりで放課後俺が一生懸命穴を掘っている時、下駄箱に放置していた俺のバックから体操服を取りトイレで匂いを嗅いでい

たらしい。

つぐみと巴は知らない。でもモカとひまりはバンドの練習をしてないってことはさ、つまり蘭は俺に嘘をついていたってことになるだろう。

「うん、だって自主練してたから」

「へえ？」

「その時調子悪かったからさ…みんなには迷惑かけたくなかったって言うかさ」

普段クールな蘭が照れくさそうにそう言うもんだから嘘ではないんだなと信じてしまう。

「んーそうか、自主練か…完全にその考えはなかったぜ」

「もう質問は終わり」

「はい、もうありませんよー」

何もなかったことをアピールするかのように俺は降参のポーズをした。

「ところでさレイのサークルはどう？」

「俺の所か？急遽1000部作ることになってさあもう人手が足りない足りない」

「……あつそ、頑張つてね」

さ、誘う前から断られた!?まあ蘭も自分のサークルの活動だってあるし…俺達手伝う暇なんてやっぱりないよな

もう話すネタがお互い尽きたのか、今日の天気いいねー的な話をしながら歩いていると後ろから声をかけられた。

「……レイ？」

「ツ！ゆ、友希那さん…！」

クールさなら蘭より優れている友希那さんが清々しい顔をしながら俺に話しかけてきた。

「ぬへー！」

そのまま近づき俺のネクタイを握り無理矢理蘭から距離を取らせるように引っ張る。

「どうして連絡の返事くれないのかしら？」

「いやそれはリサさんに携帯無くしたと伝えたんですけど…？」

「そんな話聞いてないわ」

「……ええーでは今言います携帯なくしました!」

「そうなのね」ホッ

リサさんが言ってたことは本当だったのか!あの友希那さんが俺と連絡取れなくて落ち込んでいたって話さ

「ちよつと湊さん!レイから離れてください!」

「……何かしら、私は今レイとお話中なの」

「だったら先に話してたのはあたしです、今日は引いてください」

「レイは私と話したいはずよ、なんせ友達以上の関係なのだから」

「ッ!」

蘭が友希那さんではなく何故か俺を睨みつける。まるで浮気していることがバレたような気持ちだ。

いや友希那さんと俺は付き合っていないから!あと、友希那さんとは類友だけなので!

「あ、あたしは、その…れ、レイと」

「友希那ー!おはよつて!何この状況!」

「リサさんまで来るのかよ…!」

友希那さんと蘭から左右同時に引つ張られてる時にあなたも来ますかりサさん!?

「ちよなになに!レイの取り合い!」

「!と、とにかく湊さん手を離してください!レイはあたしと登校したいんです!」

「私はレイと話すことが沢山あるの」

「ああああもう!みんなで仲良く登校しましょうよ!」

俺がそう提案すると2人はしぶしぶ言いながらも受け入れてくれ俺を真中にして3人で横に並び歩き出す。

「ッー!ッー!!!」

それと後ろをリサさんが歩くがなんか凄い勢いで悔しがってる…?な、なんでだろう?

てかそれより

「な、なんだあれは!」

「よく見ろ！神崎君だ！」

「まじねーわ！」

登校中普段は絶対会わない三馬鹿こと遊、優亜、由明日の3人に出くわしてしまふ。

「あの野郎……！顔に似合わず結構男だったのか！羨ましいぞ！」

「おのれ……！レイコちゃんの連絡先教えてくれないと許さんぞ！」

「まじねーわ」

由明日に関しては俺に中指を立てていた。言っではあれだが俺以外には立てるよな？俺は心が広いから許してやるがな！

「神崎君って結構男なんだね」

「男にしか興味ないと思ってたけど違ったみたい」

「神崎君と夜桜君ペアがやっぱり最強だよね!?そうだよね！」

『だよねー』

だよねーじゃねーよ！終優とできてるんじゃないか疑惑が晴れるならまだ女たらしと思われた方がましだわ！

「なんだか周りが騒がしいわね……」

「湊さんとレイと一緒に歩いているからですよ」

「……………」

「……レイの女たらし」

「これはどう考えても俺悪くないだろ!?!」

リサのそと一言を全力で否定するレイなのであった。

◆ ◆ ◆

「きりーつ、れい、ありがとうございます」

『ありがとうございます』

どうやら今回は綺麗な号令ができたためなのか、全員がちゃんとありがとうございますと言っていた。

波乱の朝を終え俺は無事に放課後まで生き延びることが出来た。

「なあなあ神崎君や」

「今日の朝は良い気分でしたなあ」

「まじねーわ」

「由明日……人に中指を立てるな、しかも両手はもつと酷いぞ」

確かに俺もあんな場面目の前で見たらクソが！リア充タヒね！なんて心の中で言ってると思う。そう心の中でだ。

「そう言えばさ神崎は近くにできたラブホ行ったか？」

「遊、お前何言ってるの？俺達はまだ未成年だろ」

「それがさ近くにできたラブホは俺達高校生も普通に使えるらしい」

「まじねーわ」

まじねーわ、と言いながらもなんか紙を俺に渡してきた。なんの紙だ？

「これがその割引券らしいんだよ」

「なんで由明日が持ってんだよ…」

「妹がこないだ行ったとき」

「まじねーわ」

「あーすまんな」

何故か泣きながら言う由明日に対して申し訳ない感があった。

「でだ！神崎、お前は今日全男子生徒を敵に回すように登校してきたわけだからさ」

「取り巻きの女1人でも誘って大人になれよ」

「まじねーわ!!」

「なんかお前らすげー勘違いしてないか!？」

あの3人はただの友人です！恋人でもなんでもないから！あ、蘭とは？友希那さんとは？ま、まあどっちみち本当の恋人じゃない！

『グッドラック、良い週末をー』

言うだけ言って三馬鹿共はリュックを手に取り帰って行った。

「……絶対使うことないから、こんなの」

ぐしゃつと握り潰しポケットの中に入れレイは視聴覚室に向かったのであった。

「ねえねえあの話聞いた？」

「聞いた聞いたーまじだったねー」

「ど、どうします…？今手元にありますけど…？」

「わ、私は嫌よ！あんなやつと行くななんて無理い！」

気持ち悪がるようにぶるぶる震えながら両腕をさする凜、彼女達はなんの話しをしてるのだろうか。

「ではジャンケンにしましょう！勝った人が行く！これでどうですか！？」

「か、買ったら行ける…？やりましょう！」

「モカちゃんのジャンケン力が火を噴くー」

「……え？それって私も参戦なの？いや負ければいいけどさ…」

「ではいきますよー！」

「じゃんけんぽん！といいだしモカとひまりはパー、燐子と凜がチョキを出して2人勝ち

「ぬあー！せっかくレイ君と行けると思ったのにー！」

「……まあ今回は運が悪かったただけだねーよかったね、りんちゃん」

「冗談じゃないわよ！ま、負けないと！ぜ、絶対に負けないと…！」

「えへへ、勝ったら勝ったで複雑な気持ちになりますね、これ…」

さつきから彼女達がなんの話しをしているかはわからないが凜曰くとにかく勝ちたくないらしい。

『じゃんけんぽん！』

2人仲良く声を出したところで…燐子がパー、凜がグーを出した。

「りこさんの勝ちーおめでとうございますーいやー凜ちゃん残念だったねー」

「よかった…負けてよかった…」

「泣くほど嬉しいこと？私は勝ちたかったけどなー」

「上原さんみたく私は変態じゃないの！」

「またまたーエロい下着つけてるくせにー」

「ぬぎゃあー！触るなあー！」

エロい手つきで凜の体を触るモカ、それを見ながら燐子は1人呟いていた。

「れ、レイ君と…：…に…：…!?!」

と勝負が決まったと同時に

「おつかれー遅くなつてすまん」

「ッ！れ、レイ君!?!」

「んお、な、なんすか燐子さん」

物凄い勢いで俺に飛びついてきた燐子さん、な、何があつたんだ？

「い、今から水族館行きませんか！」

「……今からですか？サークル活動は？」

「今日はモカちゃん用事あるので帰りまーす」

「私はこれから凜ちゃんとお出かけだから帰るねーね！行こう凜ちゃん！」

「わ、私とお出かけ……？い、いいわよ気遣いなんて！わ、私なんか出かけたなら笑われるわよ……？」

相変わらずネガティブな朝日奈さん、いやまあかそれが彼女の味かもしれないが、なんと言うか……。

「関係ないって！私達友達、でしょ？」

「も、もーう……どうなつてもし、知らないわよ!？」

なんだよ結局嬉しそうな顔しながら返事してんじやんか

「ではりこさんれーくん良い週末を〜」

「私達も負けないぐらい楽しむから！」

「……やったらちゃんと責任取りなさいよね」

「????」

こいつらは一体何を言ってるんだ……？

てか燐子さんさつきからずつと下向いたままなんですど？あとなんか耳が滅茶苦茶赤い

「……燐子さん」ピタ

「ひゃ、ひゃい!？」

「……んー」

俺は燐子さんの額に自分の額を押し当て体温を測る。熱は……なさそうだな

「れ、れれレイ君……!」

「うわ!?だ、大丈夫ですか!」

ぷしゅーと音が聞こえるほど顔が赤くなつたところで燐子さんは自分のバックを取り視聴覚室を出ていこうとする。

「と、とりあえず水族館に行きましよう！」

「あ、はい」

俺は言われるがままに燐子さんの隣を歩き着いていく。が、燐子さんは何も話さない。先ほどからカバンの持ち手を強く握りながら

大丈夫、大丈夫：お、落ち着いて私いー！なんて小声で言っていた。ぶっちやけかなり聞こえてる。

なんだ？もしかしてこれが俗に言うデートってやつなのか：！てことは燐子さんは俺に気がある？

「(アサシンなのか：!?)」

雷が落ちてきたかのようなリアクションを心の中でする。サークルメンバー、ならばアサシンである確率は十二分にある！

「あ、水族館着きました」

「いやー俺は水族館久しぶりなんで……はい？」

水族館と言うのはとても大きい施設で中には魚達が沢山泳いでいて、イルカショーとか楽しいイベントも沢山ある施設……のはず。

なのに……なんで俺の目の前には洋風の立派なお城が目の前にあるんですか!?

看板を見てみると休憩……円、1泊……円などピンクの看板に書かれていた。

あれ？ここってラブホじゃね……？

俺はポケットに握りつぶして閉まっていた割引券を広げる。するとどうだろうか、看板に書かれている名前と同じ名前が書かれている。

「(あいつらが言ってたとこってここかよ!?)」

い、いやいや！学生の俺達が、なんなら高校生の若者がこんな所に入れるわけ……

黙って燐子さんの後ろを着いてき、様子を眺めるが……なんか順調に話が進んでるぞ？

ま、まさか入れるわけ……？

「……では行きましよう、れ、れれれレイ君！」
入れるわけありませんー！

燐子さんは目をグルグルさせながら鍵を俺に見せつけ即座に部屋に行こうとする。

「な、なんだ、やはり燐子さんは俺に気があるのか？あるからこんな所に連れてきた…？」

「いいのか？あつちがその気なら俺手を出してもいいですか!？」

「いやいやダメだろ！俺にはアサシンがいるんだぞ？でもでも…もし燐子さんがアサシンならば…！」

「(やってみてもいいかもしれん?)」

心の中で自分と格闘する中部屋へと着いてしまう。

「ツーン、ここは」

水族館、の意味がわかった…。なんと言うか、巨大な水槽の中にある一部屋？と言えはいいのだろうか…？魚はちゃんと泳いでいる。

「本当に水族館ですね…(ここ)」

「ま、まあ外はあれですけどね…」

『……………』

き、気まずい…！かなり気まずい！

こんな所で話すことなんてないだろ！てかそもそもなんでここに来たんだっけ!？」

「あ、暑いですね…ちよつと汗かきました」

「ツーン、クーラー付けます！待っててくださいー！」ピッ

と近くにあつたりリモコンの電源ボタンを押すと

「ああんっ！だ、ダメそこ、今ダメだからアー！」

『……………』ピッ

手に取つたりモンはエアコンのリモコンではなく、テレビのリモコンだった。

テレビをつければその、な？…こーゆう場所だからそーゆうテレビですよ

「あはは、わ、私かなり汗かいちゃったのでシャワー浴びてきますね」

「は、はい…」

「な、なんだこれ、なんだこの時間、俺は一体何をしとけばいいんだ？」

そうだそうだ、確か宿題が出てたはず！今のうちに終わらせておこう！うん！

浴室からはシャワーの音が俺に耳に入るため宿題に集中できない……！

「レイ君……上がりました」

「ッ!？」

お、oh……なんてことでしょう。バスローブ姿の燐子さんの破壊力、まじパないです。

「……お、俺もシャワー浴びてき、きますー！」

「は、はい……」

お互い似たような返事をしていた。俺は急いでシャワーを浴びようとするが……よく考えろよ？

さつきまで燐子さんが使ってたんだぞ……？

っ、使はずれー！

俺はわざわざ浴槽にお湯を少しためそこから桶にてお湯をすくい上げ頭と体を洗う。

燐子さんはこの待ってる時間何してるんだろうか……。

「お、終わりました……」

髪を乾かして燐子さんの元に向かうと

「……………」

燐子さんは泳いでいる魚をずっと眺めていた。なんですか……俺だけ緊張してたのがバカみたいじゃないですか

「あ、レイ君……戻ったんですね」

「え？あ、はい……」

「……綺麗ですね、ここ」

「ラブホじゃなかったら喜んでたんですけどね」

苦笑いしながら返事をしてしまう。確かに本当の水族館だったら綺麗って思うけど外があれだからな……。

「今日はすみませんでした！」

「は？いい、いきなりどうしたんですか」

「……こんな所に連れてきてしまって……」

「……………別にいいすつよ、何かあったんですか？」

話を聞いてみるとどうやらモカかひまりのどちらかがこの割引券を手に入れたらしい。

それでサークルの女子メンツで取り合い？が起きたらしくてジャンケンに勝った燐子さんが俺を誘ったらしい。

いや別に強制って訳でもないだろうに

てか待て、もしひまりかモカが勝ってたら…？

俺はベツトの方に視線を向ける。

「(ここでドンパチしてたかもしれないってことか…!?)」

こんな所に連れてこられたら逃げることなんて不可能、俺は完全にやられたであろう。

ならば燐子さんの勝ちが正しいな！朝日奈さんは多分行かなかつただろう。

「本当にごめんなさい！私が初めての人で！」

「その言い方やめようよ!?ラブホに初めて一緒に入った異性と言い直して!？」

色々と誤解を生んでしまう発言だったぞ今のは!？」

「あ…(ここ)ほら！天井にも魚が泳いでるみたいですよ！」

燐子さんは訂正しないままベツトに向かい仰向けで寝っ転がる。

「うわあー！レイ君！すつごく綺麗ですよ！」

「ッ！」

その純粹無垢な笑顔が俺の心を突き刺す。

是非見てみたい。と思っただが燐子さんと隣で寝っ転がるのはちよつと…

「何してるんですか、ちゃんと見てください」

「うお!？」

バスローブを引っ張られ俺は強制的にベツトへと倒れ込んでしまふ。

「ほらちゃんと見てください、すつごく綺麗だと思いませんか！」

「ッ！」

目をキラキラさせながらそう言う燐子さんに対して俺は思っ

行けないことを思ってしまう。

俺ってそんなに魅力ないのかって、さ

考えてみる、こんな所に来てるのに男の俺じゃなくてオスカメスカ
わからない魚に興奮してるんだぞ？

男としてのあれが、そのー傷つくわ!?

「……ねえ燐子さん」

「はい？」

「……………綺麗ですね」

「はい！」

い、言えねー！魚より俺を見ろよとかそんなくさいセリフ俺には言
えませんよ！

蘭とかに知られたらさすがヘナチヨコ腰抜けレイ、なんて言われそ
う。

「……………そ、そのーレイ君？」

「はい」

「い、今から私がすることに対しては……………絶対黙っててください、ね？」

「……………え？」

俺が返事をする前に燐子さんは俺に抱きついてきた。それと同時に
何故か啾り声でこう言った。

「人ってやっぱり暖かいですね…特に男性なんか」

「……………」

「……………私お父さんに抱かれたことがないんです」

「ッ！」

「だから…異性から抱かれるとどんな感覚なんだろうって思っ…………こ
の気をいいことにレイ君に抱きついちゃいました」

燐子さんは父親に抱かれたことがない、と言うのは…あまり面倒を
見てくれてないって捉えていいのか？

「い、いえ小さい頃とかは多分抱かれてたんじゃないんですかね!? 覚
えてませんけど」

「……………でも、それでも、暖かい、です」

「……………」

変なことを考えていた俺を殺してやりたい。燐子さんは純粹に誰かの暖かさつてのを知りたかつただけなんだ、なのに俺は

「……………」ギョウ

「ツーれ、レイ君？」

「……………」

そうニツコリと笑いながら答えてくれた燐子さんに俺もニツコリと笑い頷く。

まあ違う意味でだけど……やっこの部屋で恋人らしいことはできたのかな？

燐子さんは満足したのか寝息を立てながら熟睡してしまった。抱きつかれてたまま寝てるもんだから俺は抜け出すことも出来ない。

「ふふ、レイ君……」

「ツー！」

「いつも私達のために頑張ってくれて……ありがとうございます」

そう言いながら燐子さんは俺を強く抱きしめてくれた。

胸に顔が当たってしまふほど、にだ。

でもなんだろう。今日は俺もほんの少しだけ甘えてみようかな……

「なんつってね」

その後2人とも仲良く抱き合いながら眠っていたようだ。

『や、やってしまった……！』

起きて2人とも大後悔、恥ずかしいことをしてた自覚はあったがこの雰囲気と言うのがレイ達をあそこまでさせていた。

「(わ、私はなんてことを……ああああ！凜ちゃんさんの気持ちかわかります……！)」

「(何やってんだよ俺は……何いいことに胸に顔埋めてんだよ!? 変態か！あんな空気でもできたな俺は!?)」

実際は燐子が無意識のうち自分でしてたことだがレイはそれを自分が出したと勘違いしていた。

「はっ！金払わないと！俺さ、先に出てますので！ドアの所で待たますから！」

「ひゃ、ひゃい！」

急いで制服に着替え直し俺は部屋を飛び出す。心臓バクバク、でも過ちを犯すことなく無事にこの部屋から抜け出せた。

一安心して大きなため息を着くと

「レイ!?!」

「……………柊優!?!」

ま、まさかのここで柊優の登場!?!お前はあれか!?!じよ、女子とここに!?!

「お、お前何してんだよ!」

「こっちのセリフだわ!何してんだよ!」

「…………別に俺は何もしてない」

「ここでそれが通じると思うなよ!?!」

「そそそそうだそうだ、えっと、えーと!」

ここまでテンパる柊優を一度も見たことない。い、一体何があったんだ?

「いいかレイ!お前は多分真っ先に勘違いすると思う。けど違うんだ!」

「ち、違う?なにが」

「これから来るやつの話だよ!?!」

「…………相手の話か?」

彼女:…じゃないのか?いや俺は違うけど

「レイ君すみません…着替えに時間がかかってしま…………つて!?!」

「なっ!お前!やつぱりその人がアサシンだったんじゃないか!」

「違う!これはその…あれであのだな!」

説明が出来ねえ!…隣子さんに関しては終わった、みたいな絶望顔しながら跪いてる。

「柊優!どこにいるの!柊優!ねってば」

「き、来た!まずいお前隠れて!」

「無茶言うなよ!こんな所で隠れるわけ…………!」

柊優と呼ぶその声には何か聞き覚えるのある声だった。まるで幼馴染の赤メツシユが特徴の女の子の声

「あ、柊優いた、本当あんた片付け手伝わないってどうゆう…」

『……………』

俺達4人はいつせいに息を飲んだ。

なんせ身近な生徒達がまさかこんな所で集結してしまったんだ。

「ら、蘭？」

「……………」

そう…柊優のお相手さんは俺を女体化させたエロ同人誌を書く、幼馴染こと蘭の姿がそこにはあった。

幼馴染と親友の関係は気になりませんか？

俺は今学生という身でありながらラブホと言う大人のムフフな休憩時間を過ごす場所にて幼馴染の蘭、親友の柊優、そして同じサークルに所属する燐子さんと一緒にいた。

『……………』

全員が言葉を発しようとしなない。確かにこんな所で会って話すことなんてない。

「何あれ4人でずっと黙ってるわよ」

「うっわー4Pかよまじねーわ」

「そのまじねーわって言うのやめて、お兄とがよく家で言ってるからまさかの由明日の妹さん？見たところ花咲の制服だよな？一歳差の妹に先越されたとなるとそりや泣くわ

しかも彼氏さんは大学生みたいな人、あーあーあ、もうこれやばいんじゃない？由明日に報告しとくか

ってそんなのどうでもいいんだよ!?

「柊優！これは一体どうゆうことなんだよ!」

「……………」

人は誰かに知られたくない秘密を知られたらこうなるのだろうか。

片手で両目を隠して天を仰ぐかのように上を眺めていた。

「み、美竹さんがほ、ホテルなんて……」

「それ言ったら白金さんもですよ、それにレイとなんて」

「私は違うんですよ!私達はいけないことなんて……なんて……!」

ぷしゅーと音が出るほど顔が赤くなる。そ、そう！俺達は決していないことなんてしてないぞ!?

「なあ蘭……いくらなんでもこれは説明して欲しい」

「はあ……バレたら仕方がないか」

「行くよ柊優」

「……………」

未だに片手で両目を隠している柊優、空いている片手を蘭に取られ引っ張られるように出口に向かう。

蘭達は事前にお金を払っていたらしい。俺と燐子さんは仲良くカウンターに向かう。

勿論俺はポケットに閉まってたぐちやぐちやの割引券を律儀に出したのであった。



近くの公園に場所を移した俺達は街灯が照らすベンチに仲良く座り黙り込んでいた。

俺はと言うとラブホから出ていくところを誰かに目撃されてないかという恐怖が襲っていた。

「いやいや、で？お前らの関係ってなんなんだよ」

まさか恋人？もしくはは…せ、セックスフレンド略してセフレってやつか!?

「ま、まさかセフレ…ですか?」

ド直球で聞いていく燐子さん!あんたよく聞けるな!俺なんて聞く勇氣すらないぞ!?

「ち、違いますよ!あたしと柘優がセフレ!?んなわけないじゃないですか!」

「そそ、そそそうですよね!すみません!私変なこと言っていました!」
負けた燐子さんは両手を上げ降参ポーズで蘭に必死に謝っていた。

「そろそろ話してくれてもいいいだろ?」

「……実はさ、柘優はあたしのサークルメンバーの1人なの」
「……………なるほど?」

サークルメンバー?だからってラブホに行くような関係って…ふ、複雑だなー!

「とは言っても蘭と俺の2人つきりだけだな」

「そう、あたしが描いて、柘優が売る」

「……ゴーストライターのなやつか」

まさか柘優があの本を売り出すとはな…ファンの人からはどうだと思われてんだろう。

いや自分似の男が女の子とエッチしてる本だぞ?普通自分で売ろうと思わんだろ!恥ずかしいだろ!?

「待ってください」

『??』

「美竹さん絵を描くんですか!？」

「え!あ、そこ!?!いやまあそうですね!」

燐子さんが話を知ってるので進めてたぜ、よくよく考えればこの人蘭がエロ同人誌作家なんて知らないもんな

「描いてますよ、これあたしの作品です」

『見せなくていいだろ!』

俺と柊優は声を合して蘭がカバンから同人誌を取ろうとするのを阻止する。

多分だけど柊優と俺の気持ちは一緒だと思う。

元ネタが自分達と知られたら死ぬほど恥ずかしい、と

実際俺達はこんな関係ではない、むしろなりたくもないしなれもしない、なんせ俺は男で作品の中では女

俺が性転換手術をしない限り絶対にありえない話なのだ。

「いいじゃないですか!美竹さんの作品みたいです!見させてください!」

「い、いやーやめてた方がいいですよ?」

「そ、そうですよ!ほら、蘭の絵下手なので!」

「……あんだ今なんて言った?」

「はっ!」

咄嗟についた嘘により柊優は蘭に胸ぐらを掴まれる。学校では普段絶対に見ない光景にかなり驚いてしまう。

「おち落ち着けえー!蘭!柊優から手を離せ!」

「なに?やっぱり彼氏が他の女に絡まれると嫉妬するの?なら離すよ」

「だから彼氏じゃねー!!」

「隙あります!」

燐子さんは俺達3人が揉めてる間に蘭のカバンからエロ同人誌を手に取り読み始めた。

「えつと、なにになに……ッ!」

ボン！つと爆発するかのように顔を赤くさせ体がプルプルと小刻みに震え出す。

まるで思春期の男子が初めてエッチな本を読んだ時なように…。

「こ、これエロ同人誌じゃないですか!?!」

「だから見ない方がいいって言つたじゃないですか!」

「うえええーん！もうお嫁に行けません!」

「そうはならんやろ!?!」

こないだ俺に下着姿を見せた時に言うようなセリフだろそれは！
あと！あの時ののは凄くエロかったです！ありがとうございます！

「実はこれレイの女体化した漫画なんですよ、ちよー可愛くないですか?」

「え！レイコちゃんですか!?!…うわ！言われてみれば確かに似てる！おっぱいとアソコがあるかないかの違いだけです!」

「おおお俺に見せつけるなあー!」

同人誌を思いっきり広げ俺に自分が女体化した姿を見せてくる燐子さん、無自覚でしてると思うけど結構酷いことするんですね

「これお相手誰なんですか!?!」

「こいつ」

「夜桜さんのイチモツですか!?!」

「だから見せないでくれー!!」

次は柊優に俺の時同様に思いっきり広げ見せつける。

『な、なんなんだこれ…』

2人して同時に膝から崩れ落ち四つん這いになる。夜の公園で大
声で泣きたくなるほど悲しい何かがあった。

「ああ、この柊優のあれですけど本物見て描いたのでこれがそのまま
着いてますよ」

『ツ!?!』

な、なんだと!?!てことは見たのか！柊優のあれを見たってことか!?!
そうか!?!

「だからラブホに…!」

「いや今日のは違う、てか来たのは今日が初めてですよ」

「じゃあなんで今日はいたんだよ！」

「……あそこって色んな部屋あってさ？教室プレイが好きなら人用に教室もあるの」

「……………いやいや理由になってないから」

「だから、教室でエッチしてる風景が欲しかったから行っただけ」

『……………』

それなら学校の教室でよくね…？とも言うように俺と燐子さんは目を合していた。

「でもでも、その夜桜さんのあれを生で見たんですよ…？ホテル以外でって何処で…？」

「まさか野外とかか!？」

「な、なわけないでしょ！普通に家で見たに決まってるじゃん！」

『??』

またしても俺と燐子さんは顔を見合わせる。普通に家で見た？蘭のやつは何を言ってるんだ。

普通でも家では見らん、恋人って関係でないのならそもそも気安く異性を家にながらせるようなことはない（幼馴染は除く）

「はあ……もう言うけどさ、柊優はあたしの家で生活してるの」

『ええええええ!!』

同居ってやつか!?!でもなんで!?!な、なんか人には言えない深い関係を持ってたのか!

なんか俺達のせいでバレてしまっただけで申し訳ない感半端ないんですが……!

「驚くのも無理はない…俺さ両親いないから蘭の所に養子として拾われたんだ」

「お前サラツとすごいこと言うな…」

サラツと両親いないからさ、なんて親友から言われてみる…心にグサツと突き刺さるだろ。

「中学ぐらいから蘭の所に住ませてもらってる」

「……だからってそんな…お前何か脅されてるのか？」

「よく聞いてくれた、あれは忘れもしない高校生になって1ヶ月が

経った時だ」

なんか回想シーンに入りそうな言い出し方なんですけど!? あ、あれ、な……こえ、が!

「蘭、風呂空いたよ」

柊優は蘭の部屋の前でドアを数回ノックして知らせた。しかし部屋から蘭の返事はなかった。

「……寝てるのか? 開けるぞ?」

「……………」

柊優は諦め一度自分の部屋に戻ろうとした。

するととんでもない光景を見てしまったそうだ。

「ッ!」

部屋のドアが少し、というか全開に空いていたため部屋の様子が簡単に伺える。

「……なるほど、男子のパンツはこうなってるんだ…肌触りも全然違う、これがトランクス? かな」

蘭は柊優の部屋で柊優のパンツを広げ頷きながらぶつぶつ何か言っていたのだ。

「……………」

風呂上がりのいい気分が台無し、まさか育て親の娘が異性のパンツに興味津々だったとは思いもしなかったからだ。

しかしここで声をかけるわけにも行かず柊優はもの影に隠れて蘭が部屋を出ていくのを待っていた。

「蘭ー、お風呂空いてるから入ってちよーだーい」

「わかった今行く」

そうパンツをガン見しながら棒読みで答えた蘭はそのパンツをポケットに入れ柊優の部屋から出て行った。

「ふう……………」

ため息について部屋に戻るがふとさっきの光景が脳裏をよぎる。

「……俺のパンツ!」

蘭は柊優のパンツをまるで自分のかのように持ち去っていったのだ。男子たるものパンツを持つていかれることは恥ずかしい。それに思春期だ、パンツに変なシミだつてついている可能性もある。

「急いで回収しなければ！」

蘭がお風呂場に向かったと思つた柊優はパンツ奪還作戦を静かに実行した。

「おじやましまーす」

初めて蘭の部屋に入ったがかなり整理整頓されている部屋だつた。異性の部屋に入るのには少し抵抗があつたが背に腹はかえられぬ、自分のパンツを回収するためには仕方がないことなのだ。

部屋には高い机はなく座椅子に座り勉強をしてるのだろうか？使いなれた座椅子と消しゴムのカスが机にはたくさん残つていた。それとところどころ机に黒いシミができていた。ペンでも改造してるのだろうか？

と柊優は呑気なことを考えていた。

「パンツ、パンツ……」

今はどこにかく自分のパンツを回収しなければならないと思つた柊優は蘭の部屋を探る。

とある引き出しを開けた時

「こ、これは……！」

蘭の下着がずらーっと並べられた箇所をたまたま当ててしまったらしい。

異性の下着を見たのはこれが初めてだつた柊優にとって動揺は隠すことができなかった。

「な、なんだこれ、これがショーツつてやつか？質感ちげーなんかサラサラしてるんですけど？」

違う、違う、今蘭の下着はどうでもいいんだ。と自分に言い聞かせ下着の引き出しを締める。

何も見てない。そう心に訴え部屋のまだ見てない箇所を調べる。

「……？」

その時床に転がっていた1枚の紙を踏んでしまった。なんだろうか？躊躇なくその紙を拾い上げ見てみて驚愕する。

「ッ!？」

なんと女子が男子のあれを大きな胸で挟みしごいている1枚の絵だったのだ。

「な、なんだよこれ…!」

ふと机の方に目を向けるとまだたくさん紙が散らばっていた。恐る恐るその手を伸ばし紙を取り見てみると…。

「……………」

あまりの衝撃さに言葉を失った。とある1枚の紙には女子が男子のあれにもろにかぶりつき下から覗いている様子の絵

もう一つは完全に繋がっており生命を誕生させるために大事な運動行っていた。

「……………あんたあたしの部屋で何してるの?」

「ッ!」

「……………見たわね、あんた」

そこには風呂に入った様子もなくさつき柊優の部屋から出て行った容姿のまま蘭が腕をんで柊優を睨みつけていた。

「ふん、ねえあんた男、だよね…?」

「は、はい」

何故かはいと丁寧に返事をしてしまう柊優、この状況完全に柊優の負けなのだ。

男子が女子の部屋にいる。これが紛れもない事実、そして何故か得体の知らないエツチな絵を手を持つてるのなら尚更勝ち目は無い。

「柊優ってついてるよね?…ち〇こ」

「……………付いてません」

「んなわけないでしょ、今日夜ご飯食べたら部屋いくから見せなさいよね」

「……………」

こうして柊優は秘密を知られた蘭の怒りを買い、蘭の言う通り自分の大切なものをいとも簡単に見せたのだ。

ちなみにだが柊優は否定した、しかし部屋で蘭の下着をあさつてい
る所を動画で隠し撮りされていたためそれを材料にして脅されてい
たのだ。

そして時は戻り今の今も柊優は蘭の言うことには従わないといけ
ないと言う上下関係ができあがったのだ。

「それは辛いなあ」

「……ああ、大変だ……」

聞くところによると蘭も柊優のパンツあさつてたみたいだから同
罪じゃないか？

「夜桜さんって結構そっち系の人なんですネ……」

「俺は取り返そうとしただけなんですけど」

「それでも女子の部屋に入るのは良くない、それにあたしは柊優のパ
ンツを奪ってない」

「嘘つけコノヤロウ！」

「証拠がないじゃん？」

「……………」

「何か言えよ!？」

黙り込んでしまう柊優に俺は突っ込んでしまった。

「柊優、ちよつと来い……悪い席外す」

「2人で何するんですかね」

「きつとエツチなことですよ、後で覗き行きます?」

「行きます!」

「しないわ!てか来んな!？」

俺と柊優は2人で近くの自販機に向かい普段学校では売られてい
ない炭酸飲料を買い投げ渡す。

「ほれ」

「うお、あざーす」

投げ渡したせいで柊優がキャップを開けると中の飲み物が吹き出
してきた。すまぬ

「あーその、なんだ……お前も大変だな」ポン

「その言い方だとお前も大変なのか」

「俺は、まあ姉貴とかさ」

「なるほど」

言えないよなー幼馴染全員が変態なんてさ！あとはネガティブなやつが1名いたりオタクがいたりな

「あとはごめんな？辛いこと話させてさ」

「辛いこと？」

「両親の話だよ」

「あーそれな、まあ…もう5年も前のことだし気にしてないよ」

5年、となると小6ぐらいか？その歳で両親が亡くなるとなると精神的に病んでしまってもおかしくないぞ

「実は交通事故にあつてさ、衝突する直前にもう助からないと察したのか自動ドア開けて俺を道端に放り出したんだ」

「気づいた頃にはベットの、両親が亡くなったと聞かされた時はかなり泣いたよ」

意識が戻ったら報告される。当たり前のことだが急にやってくる。

俺がもし柘優の立場だったらどう反応するのやら…

「両親は医者でき、たくさんの人を助けてきた人なのに…俺一人を助けるために自分達の命を投げ出すなんて」

「……………」

「両親のためにもちやんと生きようと決めてたのに…のに…！」

「柘優…」

や、やつぱり悲しい話だったよな!?す、すまん！俺なんも気使わなくて、あーあーあー！俺友達失格だろ!?何してんだよ!?早く慰めないと…！

「のに！なんで俺は女子に下半身見せてんだよ!?こんな人生送るんじゃないかった！」

「……………あ、そっち!?!」

柘優のやつは両手で顔を隠して泣きじゃくっていた。

心にくるような話から急にこうなるとなんて声をかければいいのか
わからん

「てかさお前1人の命だけじゃないだろ」

「……は？」

「いや、ほらさ…お前だけでも残れば夜桜家つてのは絶えないだろう？」

「それに自分なんかみたいない方すんな、両親のおかげでお前が今ここにいる、いたから俺はお前と会えた、違うか？」

「……何お前、なんかB.Lルート入りそうだからやめようぜ」

「人が慰めてやってるのにこれかよ!!?」

「恥ずかしい思いして言ったのに!!てかB.Lルートに入ることは絶対にならない!何がなんでも絶対にならない!なりそうになったら全力でアサシン探すわ!?

「でもなんか少し楽になった…ありがとな」

「お、おう」

「とりあえず可愛い彼女を作る」

「何故そうなる!?!」

「何がどう起きてそうなる!?!俺なんか彼女作れ的なこと言ったか!?!」

「可愛い彼女作って、結婚して、可愛い子供産んでもらう、もちろん俺は全力でサポートする」

「あ、はい」

あ、何となくわかった。多分こいつもヤバイやつなんだ、だからさつきから変なことばかり言ってるんだ。

「って冗談でさ、彼女作ったら蘭の無茶振りもすくなるかなって今さつき思ってたんだよ」

「……かもな、なら次告白されたら付き合うのか？」

「んー可愛かったらな」

「やっぱりこいつダメだわー」

だるそうにそう答えたレイは炭酸飲料を一气飲みして声よりも大きいゲップをするのであった。

◆ ◆ ◆
柊優とレイが話してる中蘭と燐子も2人で何やら話をしていたようだ。

「蘭さんはいつから絵を?」

「……中3の始めぐらいからですね、最初は模写するのが好きで…高

一になつたら終礼に目覚めました、あ、終礼つてのは柊優とレイのことです」

「略して終礼…って！SNSで結構眩かれてる!？」

「まあフォロワーざつと5万人はいるので」

「お、大物サークルだ…」

ガクガク震える燐子に対して蘭は自分のSNSのプロフィールを自慢げに見せる。

燐子とレイのフォロワーを合わせても勝てないその数値、ちなみにレイのフォロワーは0人、燐子はタグでいいねした人フォロワーするで稼いだ1000人近くだ。

「大物なんかじゃないですよ、前の冬コミは調子乗ってダンボール1箱分残りましたし」

「え!?それってだ、大丈夫なんですか!」

「全然大丈夫じゃないですよ、そこそこ人気があつたおかげで本置いてれる店があつたから助かりましたけど」

「あ、何とかなつたんですね、てつきり借金背負ってるのかと思ひましたよ」

燐子の想像していたのは借金に終われ最終的に体売り出すのではないかという謎の恐怖があつたのだ。

「……急な質問なんですけどいいですか?」

「どうぞ」

「蘭さんって……レイ君のこと好きなんですか?」

「はっ!?な、なんでいきなり!?てかなんですか!？」

「だってレイ君の幼馴染ですし?」

「幼馴染だから好きとはならないでしょ!？」

声を上げ全力で否定する蘭、まるで凶星をつかれたかのような対応、しかし燐子の質問はさらに続く

「でも…モカたんもひまりさんもグイグイレイ君にアピールしてますよ?」

「ぐ、グイグイ、アピール?な、なんですかそれ」

「え、視聴覚室で」

「密室で何をしてるんですか！ま、まさかこ、これみたいなこと！」
蘭が自分のエロ同人誌を指差し燐子に問う。

そのシーンはレイコが柊優に自分の下着を見せつけるようにカットシーンを広げ頬を赤らめているシーンだ。

「はい、こんなことしてますね」

「はあ?」

嘘ではない、事実なのだ。モカに関しては着てない姿を見せたりもしてる。

ひまりもこないだ下着姿を見せたしなんなら蘭の目の前にいる燐子も見せている。

「れ、レイのやつ……あたしがいながら他の子とイチャイチャして!」

「どうです? 蘭さんも良ければうちのサークルに入りませんか!? あ、ゲスト参加でもいいですよ!」

「ツ!む、無理ですよ、今ギリギリなんですから……」

「残念です……それじゃあレイ君達を独り占めできるのは私だけです
ね」

「ツ!か、考えさせてください!」

どうする蘭、自分のサークルを危機的状況にしても燐子のサークルに所属するのか

「実は私達これから1000部作らないといけないんですよ、蘭さんが入ってくれたら……行けると思うんですよ!」

「……だ、だから考えさせてください!」

レイ、レイと同じサークル……いい! かなりいい! だけど、あーうちの作品もあるし、柊優1人だと何も出来ないしあー!

と蘭の頭の中はぐるぐる状態、今の彼女に何を話しても右から入り左から出ていくだろう。

「おーい戻ったぞ」

このタイミングで戻ってきた終礼、もとい柊優とレイ、しかしタイミングが悪かった。

「レ……イ……!」

「あ、はい」

「あんたあたしと柊優がいながら何他の子とイチャイチャしてるの!?!」

「え、いやなんのことですか、レイ君わ、わかりません」

必死に目を逸らして俺は嘘をつく。このクソオタク巨乳燐子さん目……! 視聴覚室のできごとはなしやがったな!?!

燐子さんは知らないふりをするかのように下手な口笛を吹きたがら目を逸らしていた。

「まったく本当あんたのサークル大丈夫なの?」

「大丈夫じゃない、異常だ、蘭に助け欲しい」

「無理です」

『ぐはっ!?!』

何故か胸を押さえ付け俺と燐子さんは同時に膝をつく。

ここまで誘ってもダメなんだ、もう蘭のことは諦めて燐子さんと俺の2人だけで1000部捌ききってやろう!

「あたしも今結構まじでギリギリなの、ライブもあるし大変、だから柊優に手伝ってもらわないと困る」

「……はいはい、俺は手伝いますよ」

「助かる、後で特製ドリンクあげる」

「い、いらない、あんな不味いもの飲ませないでくれ」

「不味くない! 健康のために色々ミキサーで混ぜて作る最強ドリンクだよ!?! 魔剤と比にならないから!」

「魔剤より危険だわ!」

2人にしかわからない会話をしているようだ。俺と燐子さんはついていけない、あとそのドリンクがめっちゃ気になる。

「そろそろ門限やばい、帰らないと怒られるぞ」

「……あたしは怒られるの慣れてるか大丈夫」

「俺は住ませて貰ってるから守らないといけねーんだよ!」

「仕方がない: 帰ったらちゃんと作業手伝ってね」

「クソがああああー!!」

普段の柊優とは違う一面を見たレイは特に何も発すことなく大人しく2人が帰るのを見守っていたのであった。



蘭達と別れたあと俺は燐子さんと一緒に歩いて帰っていた。

本人はタクシーを呼びます!と連呼してたけどそこまで離れてるわけじゃないし一緒に歩こうと俺が提案した。

もちろん運動させるためだ、女子と手を繋いで一緒に帰りたいなんてやましい思いは微塵もない。

「美竹さんの勧誘無理でしたね」

「蘭にも蘭のサークルありますしね、もう候補はいないし今の俺達で頑張りましょう」

「はい!早速この土日で全員の水着姿の絵を書き上げますので!」

「あはは、俺は明日から弦巻で編集者のバイトが…」

そう、明日から俺はあの弦巻文庫にて夏休みが終わるまでバイトをすることになったのだ。

まだ夏休みも始まってない6月半ばと言うのに、8月末を想像するとあとどれだけの日があることか。

しかし平日は学校があるためバイトは出来ない、その代わりと言っではなんだがコンビニのバイトがある。

「(店長には土日当分入れないって言わないと)」

一応本職はコンビニ店員です。編集者ではないのです。

「弦巻文庫でバイトなんていいなー羨ましいです」

「や、やっぱりそう思いますよね!いい、今からでも断ろうと思えば断れますよ!」

「でもそれだと私達の作品を印刷してくれるところが…」

「うう、そ、そうなりますね」

最低1000部から、弱小サークルの俺達にとって初めて参加する夏コミでこの数捌けと言ってきやがった。

正直捌けるか不安だがやるしかない!てか燐子さんがあんなにやる気なんだからやるしかない!

「……もしかして気にしてますか?」

「え?!いい、いやまあ…だって今回話が来たもの」

話が来たのも全部姉貴のおかげだ。姉貴の仕事を弟って理由で手

伝いそこで実力が認められて何度か仕事に呼ばれる機会が増えた。

だから今回のようにバイトの話が上がるのは全部姉貴のおかげ、もし俺の実力が本物だったとしても見られないと能力なんて意味がない。

天才は天才と自分では言わない。しかし周りが天才と言うから天才なんだ。

俺は天才ではない。姉貴は天才、その天才の弟は仕事で役に立つ、だから呼ぼう。

的な流れで俺の実力が認められてきた。

実際姉貴がいないとこのラノベ界に俺の居場所なんてなかったものなんだ。

「……俺ってずるいやつなんですよ」

「?何か言いましたか?」

「いえ、なんでも」

こうしてチキる俺もずるいやな、いつまで経っても俺の姉貴があの神奈なんて言えない。

「でも私少しかだけ自慢したいです」

「自慢?」

「はい!私のサークルメンバーはあの弦巻文庫でバイトしたことがあるって!」

「ッ!や、やめてくださいよそんなこと」

「なんでですか?だって凄いことじゃないですか!結弦さんのコネか何か知らないですけど採用されるってことはそれだけレイ君の実力を認めてくれてるってことですよね!」

「ッ!」

実力が認められてる……?のか?ただ単に編集長に気に入られてるからって理由だけではない?

「……いいのかな、俺、こんなずるいやつで」

「ずるくなんてありません、もしそんなこと言う人がいたらレイ君の力でねじ伏せてやってください」

「……隣子さん……!」

レイと燐子、2人して一つの作品を完成させるべく組んだこのペアはお互いの実力を理解している。

レイの作品に対しての思い、そして的確なアドバイス、これに文句があるのなら私の作品に文句を言え。

と言わんばかりの気持ち燐子の中にはある。

「(ああ、もつとこの人と早く出会えてたらなあ)」

何度も思う。しかし人生をやり直すなん術はない。だから燐子は思う。

「(この人と一緒に成長して最高の作品を作りたい)」

だからこそレイの実力をみんなに知って貰いたい、そう強い思いが燐子の中にはあった。

「それと…おこがましいですけどあの先生とこの先生に会えたらサイン貰ってきてもいいですか…?」

「さっきまでの感動する話はなんだったの!？」

俺若干泣きかけてたんですけど!?!なにこれはず!俺だけ目をうるうるさせてた感じですか!?!

「じよ、冗談ですよ…:…半分だけ」

「ツ…:はあ、考えときます」

「えっへへ!ありがとうございます!」

そう答え燐子さんの笑顔を見て俺はドキツとしてしまう。最近の燐子さんは気の所為かもしれないけど俺の前では笑顔でいることが多い気がする。

「(つて自意識過剰すぎってな)」

「燐子さん!俺頑張ります!何か言われても言い返してやります!」

「その意気です!私のレイ君は凄いですから!」

「え?」

わ、私のレイ君?えつと、ごめん、どゆこと!?!遠回しの告白か何かですか!?!

「ち、違います!2人で1つの作品作ってますし、レイ君は私のパートナーと言うかなんと言うか!」

目をぐるぐるさせて手をわなわなとさせ最後は人差し指を立てな

がら俺に抗議していた。

そ、そこまですて全力で否定したいことなのだろうか？

「わ、私なんか今日おかしいです！今日はしっかり寝て明日の朝から活動します！では！ぎゃあ！ど、ドブに落ちた！てうわ!?次は財布ドブに落とした！お気に入りだったのにー！」

「……………では！」

「ちよー・燐子さん!？」

後半急にドブに落ちるわカバンから財布が飛び出てドブに落ちるわと散々な目に遭ってたけど大丈夫かな？

別れた後もなんか悲鳴聞こえてたし…？110番されないか心配だ。

「……………私のレイ君、か」

「なら俺の燐子さん…なんつつて」

最近伸びてきた前髪をかきあげレイは1人暗い夜道を歩きながら家に帰ったのであった。

男子だと思つてた人が女子だったことありますか？

土曜日というのに俺は満員電車の中でおしくらまんじゅうされ、両隣をお太りになられた男性サラリーマンに挟まれた。

今日から弦巻文庫の編集者としてのバイトが始まる。そのため俺は土曜日という貴重な休日にも関わらず電車に乗り本社に向かつていた。

隣の男達の鼻息が何故か荒い：頼むから俺のことを女子だと思つてないことを祈りたい。

もし女子と思つてて肩とか当ててきてるならそれは有罪ですよ、まあ男子だと思つてるよな、絶対に！

「土日ずつとこれはきついな…」

去年は姉貴も行くから一緒行こうとか言い出しタクシーで向かつていた。

しかし今は姉貴は本社にいるし、な

俺は痴漢と疑われないよう吊り輪に両手で掴み駅までじつと立っているだけだった。

「えーみんなも知ってる通りだ、今日からレイがうちで働いてくれる」
「私としては弦巻文庫だけでバイトして欲しかったが…マガジンの方も人手不足なんだとき、だからどっちでも働くからよろしく」

「初耳なんですけど!？」

文庫だけかと思つたらマガジンもかよ!？」

「ラノベも漫画もかわないから大丈夫大丈夫」

「レイならなんとかなるってー」

「よっしやー！お仕事頑張っちゃうぞー!」

なんか適当に流され俺のバイトは本格的にスタートしてしまった。持ち込みブースに行つて持ち込みの作品を一通りチェック、いいと思つたら上に報告する。

言い方が悪いけどあまり良くない作品の時はアドバイスをして次の作品ではこうするべき、もしくはここはこうした方が主人公の心情

が読者に伝わるとアドバイスをする。

意気込んでやってみたもののかなり難しい。急いで作品を読まないといけないし、そこからの確なアドバイスをしないとならない。

ぶつちやけ編集者なんてしてたらそのうち自分でも話をかけるほど実力が身につくのではと思ってる。

「では次回もお待ちしております」

「はい！神崎さんの言う通りやってみます！来月には持つてきますので！」

「はい、ですが僕だけのアドバイスで話を書いてはいけませんよ？自分の意志を入れないとそれはあなたの作品ではなくなりますので」

「勿論！俺のお姉さん愛は誰にも負けないんだ！絶対萌え萌えのお姉さんキャラを作つてやる！」

「……楽しみに待つてます」ニコニコ

時々自分の性癖をもろにむきだして作品を書く人もいるから大変だ。

こう言つてもこれだから姉を知らないものは！とか言われて大変だった。

ぶつちやけ姉貴というのはいいいものじゃない……それはうちだけか

「やあレイ君！」

「氷川編集長、お久しぶりです」

「もうー！そんなに固くならないでくれよ、僕の話は気軽に茉日と読んでくれよん」

「……いえ、私はバイトという身、たとえ知り合いだとしても社内では立場をわきまえるべきかと」

「うるさいうるさい！いいからいつも通り接しなよ！」ポカポカポカ
「い、痛いですつて……」

氷川茉日さん、弦巻マガジンの編集長、そしてうちの生徒会長の実の母親、見た目は完全に幼女の僕っ子だがいい歳してる。

「今マガジンの方で持ち込み立て込んでてさー手伝つてくれないかい？」

「いいですけど俺そろそろ休憩」

「休憩はその後でいいからさ！次の持ち込みの子女子で巨乳だよ？お近付きになりたくないかい？」

「い、いや社内であまりそういう話はやめた方がいいかと!？」

巨乳とか社内ですら絶対聞かないワードだろ！言ったら言ったで女子社員の方から酷い視線を浴びせられ社会的地位がなくなってしまう。

「僕が言ってるだけで君は言っていないじゃないか、ほら！早く来ないと迷惑かけちゃうから！」

「ちよーま、待ってくださいいよおー！」

元からマガジンの方も持ち込み頼むって言われてたけどすぐにやることになるとは…

「ほらーもう来てるみたいだから早く早く！」

「来てるんですね」

「それじゃあ僕はこれから会議があるから！お昼は一緒に食べられないけどまた今度ね！」

あんた人妻だろ！って心の中でツッコむ、流石に社内ですんなことは言えないっての

「遅れてすみません、私弦巻マガジンの…？」

「は、はい！全然問題ないです！…って？」

『……………』

俺達2人して黙ってしまった。お互いがまるで見知った顔かのような反応。

実際本当にそうなのだ、この目の前にいる金髪ツインテールの巨乳娘…俺はこの子を何処かで見ることがある。

「神崎レイ！お、お前ここで何してるんだよ!?!なんでお前が編集者なんかしてんだよ!？」

「え？いや、頼まれたって言うか…俺のこと知ってるの？」

「ツ！当たり前だろ、だってあたしはお前と…」モジモジ

本当にどっかで見覚えがあるんだよ、あるはずなんだ。だけどわからん

「お、おい！顔近いって、離れろよ！」

「ツ！す、すみません、いやどっかで見たとような顔だったので」

「お前覚えてくれてたのか!？」

「……あー!香澄のバンドメンバー!」

「そっちかよ!?確かに香澄とバンド組んでるけどそっちかよ!?」
「??？」

彼女は先程から何を言ってるんだ?そっちかよ?の意味がわからん、俺はあなたのこと香澄と同じバンドの人って認識しかない。

「とりあえず座りましょうか」

「はあ…はい、あ、これ作品です。読んでください」

な、なんだ急にテンション下がって…なんか対応しづらいな。

「ペンネームはありきさんって」

「はい、なんかどこぞの金髪ツインテールと似てるなって言われますけど似せてますので」

「に、似せてるんですね…」

わざわざ言わなくてもいいことだろそれは、てか聞いた瞬間確かにあのツンデレ金髪ツインテール子の顔がふわって浮かんだけどさ

その後は特に話すことなく俺はありきさんの作品を読み込んだ。

『……………』

作品を読んでもる時特に話すことなくありきさんは何度か大きなため息をついていた。

よっぽど俺と関わるのが嫌だったのだろうか?明らかに俺を見て変な反応してたし

話の内容はというととある女子生徒が香澄という生徒によって引きこもりの生活からバンド活動を始めるというストーリー

なんなら登場人物の香澄つてもろアイツだろ、漢字も同じだし、こ
こは…

「ありきさんのリアルの話…ですかね、これは」

「やっぱりお前にはバレるか…そうだよ、あたしのリアルの話だよ」

「……えっと、一応僕編集者なのでもっとこう、なんとというか接し方
てものが」

「同級生だからいいだろ!?!」ドン

「で、ですよねー!」

こ、怖えー！ありりさん怖いよ!?もし俺が今日持ち込み担当の人じゃなかったらどうなってたことか!

「てかあたし聞きたいことあるんだけどいいか?」

「持ち込みの作品の件なのですが…」

「そんなのいいっての!あたしの質問に答えろおー!」

「……………」

持ってきてた用紙を俺から奪いあげ握り潰す。彼女にとって作品より俺に対しての質問の方が優先度が高いらしい。

「なんですか?」

「お、お前さ…香澄と付き合ってるのか?」

「ないです。絶対ないです」

「本当か!?!」

「本当です」

「本当の本当か!?!」

「本当の本当の本当です」

「本当の本当の本当…」

「もういいだろ!?!本当に付き合っていないっての!?!それに俺には大事な人がいるんだよ!」

「ッ!だ、大事な人!?!」

「???'」

さつきからなんなんだこのありりさんは!情緒が不安定すぎる!次は急に頬を赤らめて指と指をちよんちよん合わせてえへへと笑っていた。

「そうか、そこまであたしのこと思ってたのか、はは!なんだよ…やっぱり覚えてくれてたんじゃねーか」ボソ

「あの一ありりさん?」

「なんでもないぞ!ふふ!」

「なんでもない人はそんな幸せそうな顔しませんよ」

「幸せそうな顔してたか?」

「…………質問は終わりですか?」

「ああ、終わりだ!」

何を聞くかと思えば香澄と付き合ってるって？なわけ、確かに中学の時はよく香澄の家で遊んでたが付き合ったような覚えはない。

てかよく普通に異性の家にながってたな俺：当時の厨二病を煩っていた俺はどんな心情だったんだろうか

「つとそろそろお暇するよ」

「あ、俺も出ようかな、お昼買いに行くし」

「てかなんでお前が本当に弦巻で働いてるんだ？」

「お前じゃない、神崎レイだ。あと随分と親しいようだけど？」

「そんなの知ってるっての！あとひ、親しいのはなんと言うか、その…」

あー大方香澄のやつが俺のいらん情報を吹き込んだのだろうか。

あの野郎：最近会ってないと思ったら変なこととしてやがったのか

「名前、聞いてもいいか？」

「ツ！だよな！名前教えないとだよな！」

「聞いて驚け！あたしの名前は市ヶ谷有咲！花咲2年だ！」

「有咲？」

「そう！有咲だ！」

「だからありりなのか！」

「つて違う！そこじゃねーだろ!？」

「ええー」

そんな会話をしながら2人でロビーに向かっている途中、とあるキッズコーナーが騒がしくなっていた。

「よーしガキども！この神奈先生がお前らに絵本の読み聞かせてをしてやるぞー！」

『わーい！』

姉貴？あー弦巻って今もキッズコーナーで絵本の読み聞かせてしてるんだ。

姉貴も昔は俺と一緒に座って聞く側の子供だったのにいつの間にか作家として大物になっさ

「（本当姉貴ってすげーよ）」

歳も5歳しか変わらないのにな、俺が姉貴と同じ歳になったときは一

体俺は今の姉貴と比べてどれぐらいできるやつになってるだろうか？

「先生ーバナナはおやつに入りますか？」

「うんそれ聞く先生間違えてるよー学校の先生に聞きな」

「先生ーなんで宿題ってあるんですか？」

「うん話聞いてた!?学校の先生に聞きなよ！」

「先生ーなんで先生は女の人なのにお胸がないんですかー？」

「よしそこのキッズ！顔覚えたかな！将来エチエチなボディであるたのここと魅了してやるからな!?!」

「先生ー最近胸の成長が激しくて困ってます」

「嫌味かクソキッズ！だいたいそんな歳でその大きさだと将来垂れるぞ!?!」

「尽く小学生に質問攻めされ拳句の果てには胸についてもいじられ始めた。」

「知ってるか？あの小学生にいじられてる人ラノベ界では超有名な人なんだぜ」

「あつはは、相変わらず滯奈さんは面白いなーお前のお姉さんだろ？」

「ツーい、市ヶ谷さんなんで知ってるの!?!」

「当たり前だろ！お前本当にどうしたんだ？名前聞いただろ！いい加減察しろよ!?!」

「察しろ？」

「な、なんなんだ？なんで市ヶ谷さんが俺の姉貴の名前知ってて俺と神奈が姉弟だって知られてるんだ？」

「えつと、昔あるところに…じじいとばあがいました」

「姉貴のやつ完全にやる気なくしてじじいとばあ呼びしちゃってるよ、まあ子供達にはうけてるみたいだけど」

「な、懐かしいなー昔はよくここで3人で聞いてたなー」チラチラ

「なんだ自慢話か？ふん、俺だって小さい頃から親父にここへ連れてこられよく話を聞いたものだ。」

「俺も昔は姉貴とさ、もう1人の芹沢君ってこと一緒によく話聞いてたなー」

「……は？」

「その人とはよくほら、そのキッズコーナーでも遊んでただけど…芹沢君、今何やってるのかな」

「……」

「？おい、市ヶ谷さん？どうしたの？」

下を向きプルプル震えている市ヶ谷さん、なんか俺いけない話でもしたのか？

「あつれー！レイ！なになに、もう早速ナンパしたの〜？」

「姉貴…お前は馬鹿か、あと社内ですんなり単語使うな」

「つと芹沢つちも一緒か！いやーあんたいつ再会したの？お姉さんに話しなよほれほれ」

「いやいや、芹沢つちってこの人は市ヶ谷有咲さん、女で男じゃないだろ」

「……あんたこそ何言つての、市ヶ谷有咲ちゃんが芹沢有咲ちゃんでしょう？」

「は、はあ？」

芹沢君はそもそも男であって市ヶ谷さんは女、まず性別の違いがある時点で芹沢君が市ヶ谷さんになるはずがない。

それに一人称が僕で男子の俺と好んで遊んでいた芹沢君だぞ？

「あんたまじで言つての…？」

「……もういいですよ瀧奈さん、このクソ野郎に何言つても通じないんですよ」

「いや、芹沢君は…」

「芹沢君芹沢君うるさいんだよ…！あたしは男じゃねえ！女だろ！」

「ッ！」

市ヶ谷さんはおもむろに俺の手を取り自分の大きな胸に無理やり押し付けてきた。

「あたしはお前がでかいほうが好きだって言つてたからここまで頑張ったんだぞ…？」

「お前と一緒に絵本描いてくれるって約束したからあたしは必死に絵の練習したんだぞ…？」

「なのに、なのに…あたしのこと顔を見てもなんの反応もしない、挙句の果てにはお、男だと思ってた…?」

「……ほ、本当に芹沢君、じゃない芹沢さん…なのか?」

「いやだからそうだって本人言ってるんじゃないか、いい加減信じるよこの鈍感クソ主人公野郎」

「……………ま、まじか…!」

この目の前のいる金髪ツインテールの巨乳娘がああ芹沢君…?う、嘘だろ!?あの小さい頃ここで一緒に遊んでいた芹沢君!?

ま、待てよ、よく見れば目元とかちよー似てる!

「でも俺昔大きい方が好きとか言っちゃったけ?」

「言っただろ!だから大きくなったら揉ませてあげるって約束しただろ!」

「ええええええ!?そ、そんな約束してたのか!」

「ツ…!このクソ野郎がああああ!」

「痛ってええええ!?!」

昔から俺は巨乳好きだったのか…!い、いや今は巨乳好きではないけどさ!?!ってこれはもう苦し紛れの言い訳か!

なんと俺はガキの頃からおっぱいは大きい方がすぎだったのか!?

芹沢さん、もとい市ヶ谷さんは俺にビンタをした後泣きながら弦巻文庫の本社を後にした。

「ねえねえ先生ーあの人ビンタされたよ」

「あれは仕方がないことなのさ」

「先生ーさつきビンタした人先生よりおっぱい大きか」

「何か言ったかいー?」

「先生ーバナナはおやつに」

「うるさいな!?もうおやつに入らないよ!」

「……………」

放心状態のためなのか姉貴達の会話がすんなりと入ってくる。

まさか芹沢君、いやさんとの10年振りの再会でビンタされるなんて

「レイーこれは完全にあんたが戦犯よ」

「……姉貴は市ヶ谷さんが芹沢さんって知ってたのか？」

「見たらわかるっしょ、まあ胸が大きくなりすぎてたのは驚いたけど」
「見てすぐにわからねーよ!?こちとらずつと男の子だと思ってたんだぞ!?!」

「……まあ芹沢っち僕っ子だったからね、勘違いしても無理ないか」
「そうなんだよー!僕とか言ってたら男の子って思うじゃんかー!」

あー!女子にビンタされたのなんて初めてだぞめちやくちや痛てえー!

あと罪悪感ありすぎて心が超痛い!

「あと芹沢っちことありり結構SNSで人気な絵師だよ」

「本当に約束を果たそうとしてくれたのか……!」

絵本というのに絵本とは比べ物にならないほどの絵のクオリティ、先程の作品での絵も凄かったがSNSで人気が出るのもわかる。

「レイ……あんた友達少ないんだからさ、数少ない昔の友人は大切にしなよ?」

「……言われなくてもそのつもりだったの」

その日の午後の仕事は何処か集中できない自分がいて何度か作者さんにしつかりしてくださいと注意を受けた。

俺の弦巻文庫での編集者のバイト初日から最悪なスタートになってしまったのであった。

◆◆◆
「はあ……」

仕事を終えた後俺は深いため息をつきながら自宅へと向かっていった。

やってしまった。女子を怒らせてしまった。人生の中で女子に怒られたことがあると言えば数えられる記憶がない。

てことはガチで怒られたことがないんだろう。巴とか蘭とかの件は無関係として

でもどうしたことか……どうやって仲直りしようか。

それともあれか?俺のよからぬ噂が他校に広まり拳句の果てにはうちまで話が来て……最終的にクラスからハブられサークルからも……

?

「ぬおー！そ、それだけダメだー！生きて行けねえー！」

頭をかきながら道端で1人発狂していた。通行人からの視線が痛いなんの…。

「どうした奇声なんかあけて」

「でんぢよおー!!」

「うお、な、なんだよ、鼻水つくだろうが」

「もう俺どうすればいいんだよおー！」

ちようどバイト先のコンビ二前で発狂してたら店長が声をかけてきた。

またまたタバコ休憩をとっていたようだ。

「なんだ悩み事か？……俺でよければ相談に乗ってやるよ」

「まじですか！」

「おう！今日はお前らに焼肉奢ろってちようど話してたしな」

「お前ら？」

店長のそのお前らの言葉を聞いた瞬間に察した。お前らってことは複数人を指す言葉

「ですよね！」

「モカちゃんタン塩いっちょよー」

「アタシハラミいっちょいまーす」

「俺はカルビで」

モカ、リサさん、俺、そして店長、金のない我らが学生の俺達は月に一度店長から焼肉を奢ってもらえる権利がある。

相談乗るって！それはこの焼肉で聞くのかよ!?

ま、まずいぞ？できればこのことをモカやリサさんには知られたくない。

なんせこればかりは俺が100悪い、だから…知られたらなんと
言われるかわからん

「レイも頼めよ」

「え、じゃ、じゃあ…」

「れーくんもタン塩だつてーもーうモカちゃんと同じの食べたいなら

「最初からいいなよー」

トングをカチカチ掴む動作をしながらにへへと笑いながら言うモカに対して今は特に何も思うことは無かった。

「レイどうしたの？なんか元気ない？」

「……まあ働いてきたので」

「働いてきたってどゆこと!?!確かにカッターシャツ着てるし!」

「あ、店長このことでも話あるんですよ」

俺は夏休みまで弦巻文庫でバイトすることを店長に話した。

だから土日と夏休みが入ったらバイトはできないと伝えた。

「でも夏休みずつと入れないとなれば邪魔なので：夏休みからは俺バイト辞めますよ」

「れ、レイバイト辞めるの!?!」

「……いやソフト入れないのにずつといるのは邪魔でしょ」

「いや別に邪魔じゃないぞ、残ってても全然問題ない」

「まじっすか!?!」

だって俺抜けさせて一人入れればその人が働いてくれるだろ!?!な、なんでわざわざ俺を残す!

「レイの代わりにうちの看板娘のお二人さんが働いてくれるから大丈夫だ」

「……だからお前はこの二人に感謝しながら弦巻で学んでこい」

「!て、店長……!」

なんていい店長なんだ!よくコンビニはブラックだとか聞くけど

この店長は違え!神様だ!仏様だ!うあああー!

「まあ夏休み明けはこの二人分働いてもらうけどな」

「……ぜ、善処します」

9月なら：夏コミも終わった後だしまあちよつとだけ暇ができるから別にいつか。

俺はモカとリサさんのおかげでコンビニのバイトも辞めることなく弦巻で働くことができる。

二人には感謝しないといけないな……。

「このお肉もらいまーす」

「あ！こらモカ！それレイの肉でしょ！」

「食べないれーくんが悪いんだよーあーん、んんーおいひい」

「んもーう、レイもなんか言えば？」

「いやいいですよ、どどん食ってくれ、そして店長！話があるので席を外しましょう！」

「やれやれ、好きに頼んでいいからな」

焼肉屋に来て俺はあまり肉を食べることなく店長と席を外し相談事を持ちかける。

「相談つてなんだ？」

「……実は昔馴染みの友達と10年振りに再会したんですけど……俺ずっとその子のこと男の子と思ってて」

「再会したら女の子だった、と？」

「あ、はい」

何故わかったー！この人凄くないか！?

「それで、俺気づかないままずっと話してて……挙句の果てには約束事も忘れてて」

「約束つて？」

「それは言えません！」

「言え、減給するぞ」

「それは酷い！」

仏様撤回でーす、何かとすぐ減給と脅してくる！何が仏様じゃボケー！いやさっきのことは感謝してるけどそれとこれは別だよ

く、クソ……話すしかないのか

「……おっぱ、……む」

「は？おっぱい吸う？」

「違っうーおっぱい揉むですよ!？」

俺はその経緯を話した。小さい頃から俺はどうやら巨乳好きでその子に話して大きくなったら揉ませると約束、したらしいと

「でも忘れてるって知られたらビンタされて、怒らせちゃって」

「そりや痛かっただろうな」

「はい、めっちゃ痛かったです」

「いやお前じゃねーよ、その女の子の心だよ」
「ッ!?!」

店長の言う通りだ…。市ヶ谷さんは俺のためにおっぱいを大きくさせて、絵も描いて…全ては俺との約束を果たすために
なのに俺は何をしてるのやら…。

「それはわかってます。そこからの仲直りの仕方がわからないんです」

「そりゃーお前あれだろ、謝るしかないだろ」

「謝る、か…」

「お前はどうしたいんだ?」

「ぶつちやけ仲直りする気がないなら謝らなくていい、元カノとかもそうだろう? 喧嘩して別れてもう気がないなら謝らない的なやつさ」
彼女ができたことがない俺からしては店長の言ってる意味が全くわからないけど!

「俺は市ヶ谷さんと仲直りしたい…!」

「おう、なら真正面から謝ってやれ」

「!うす!」

「んじやあ気合い入れるために肉食うか! 何俺の奢りだ! 好きなだけ食え!」

「店長はやっぱり神だあー!」

「やっぱりじゃない、元からだぜ」

そうして俺達は席に戻る。するとどうだろうか、モカの姿が隠れるほど高く皿が積み重なっていた。

「て、店長…アタシ、もう吐きそう」

「リサさん!?!これは一体何が!」

「モカが、モカが馬鹿みたいに肉頼んでて、これ伝票」

『ッ!?!』

そこには4人で食べる料金を遥かに超える金額が記載されている。
なんなら奥からちゃんと払えるのかあいつらの視線が向けられている。

「いやー奢りって言葉があると人は普段以上ご飯が進みますなくあ、

「お代わりいいですかー?」

「も、モカちゃん!もうやめてくれ!」

「そっだぞモカ!店長が可哀想だろ!」

「これだけで破綻するような人ではないと信じてるが普通に痛いだろ!」

「れ、レイ…焼肉はまた来月でもいいか?」

「あ、はい…なんか俺この金額見ただけでなんか頑張れそうっす」

「店長は所持金では足りないと言いつい出し俺達を店に置いたままコンビニのATMに向かい金を下ろして何とか俺達は解放された。」

「勿論待ってる間俺とリサさんはモカに対して食いすぎだろ的なことは言ってたが本人は知らないふりをして下手くさな口笛を吹いていた。」

「お前らー気おつけて帰れよー」

「はーい!店長も事故らないようにねー!」

バイクのうるさい音を立てながら店長は自宅へと帰っていった。

「余談だが店長はお酒飲んでないぞ?そもそも未成年複数人と店に入ったら飲めないんだとき」

「さてと俺達も帰りましょうか」

「あ、アタシ近くのコンビニに迎え呼んでるから、モカも一緒に連れていくけど?」

「モカちゃんこれから夜の公園に用事があるので」

「夜の公園?よくわからないけど気おつけなよ?」

「りよーかーい」

夜の公園つて完全に露出する気満々じゃねーか!?

「れーくんも来る?あーちなみに今履いてませーん」

「ちよ、お前(こ)こではやめろよ、監視カメラとかに写ったらどうするんだよ」

「えへへ、じゃあないところではいいの〜?」

「ツ〜!んなわけねーだろ!」

「とにかくあんまりバレるようなことすんなよ、ヤンキー集団とかに見つかったらやられるぞ」

「きゃー！モカちゃんのこと心配してくれてありがとう♪だからーくんにおっぱいを揉ませてあげる」

「だからここでするなってええええー!!」

焼肉屋の前にて叫んだレイの声はコンビニに向かう途中のリサの耳に入ったとのこと、後日質問されて答えるに詰まるレイなのであった。

間接キスしたことありますか？

雨が降ってる。まるで俺の心を表すかのようなその雨はもう何日も振り続けている。

絶賛梅雨入りをしたこの地域では月曜から今日までずっと雨が降ってる。

そんな誰が好き好んで外に出るんだよって時に俺はとある道端である人物を待っていた。

「……………」

「(来た!)」

革靴の踵がコンクリートに当たる音を俺は聞き逃さなかった。

近くに来たタイミングを見計らって

「おっはよーありり！今日もいい天気だね！」

「……………」

「……………まあそうだよな」

ありりこと元芹沢君こと市ヶ谷有咲さん、いや様に元気よく挨拶をしました。

あるあるだが話の最初に天気の話をするといいと聞いたが嘘だった、なんなら今日は雨だ、いい天気なわけあるか。

「その傘可愛いな！自分で買ったのか？」

「あ、おれ？俺はほら、ビニール傘だよ、多分これ俺のじゃないなー誰かと入れ替わってるよ」

「うるせえ」

「……………」

くっ！ま、負けない！負けてたまるか！俺は市ヶ谷さんに謝らないといけないんだ！

えーい！もう回りくどいのはなしだ！

「市ヶ谷さん！」

「市ヶ谷じゃねえ」

「……………有咲さん！」

「有咲じゃねえ」

「ありり！」

「ありりじゃねえ」

「……芹沢君？」

「ツッ！」

パーンとまるで1回だけ拍手をしたような大きな音が通学路に響いた。

この前と同様俺はまたビンタをされた。

「ごめん、かまって欲しくてつい……」

「……うるせえ、馬鹿」

『……………』

何やってんだよ俺は……市ヶ谷さんは男と思われていたことにも怒ってるんだぞ？

何蒸し返してんだよあほか馬鹿か能無しか！

「なあありり、本当に悪かったと思ってる……謝るって、ごめん」

「……お前なんかサークル活動してるらしいな」

「え？うん」

「ふーん、それで？メンバーが燐子さんとひまりちゃん、ねー」

「な、なんだよ」

そんなに意外なメンツだったか？確かに燐子さんならまだしもひまりがいるのは驚くか、2次元に興味あるようなやつには見えないもんな

「随分お胸が大きい方と密室で過ごしてるようですが？」

「うう……！」

「どうせサークルメンバーってことをいい気にイチャイチャしてんだろ？鼻の下伸ばして夜な夜な思い出して変なことしてんだろ？」

「し、ししし、してねーから!?!鼻の下も伸ばしてねーから!?!てか家で今そんなことできないから!?!」

「……もう1人巨乳がいたら巨乳トライアングルの完成だな」

い、言えねー、既にもう1人朝日奈さんという巨乳娘で妙にエッチな下着を付けてる人がいるって言えねー！

てか知られてないってことを朝日奈さんが知ったら泣きそうなん

ですけど」

「そんなのどうでもいい：俺はありりと仲直りしたいんだ」

「ツ！ありりって呼ぶなー！」

「ちよー！痛い！痛いっての！そのツインテールピンタをやめろお！」

ツインテールのキャラならしたことがあるのツインテールピンタ、実際にくらったのは初めてだが髪の毛一本一本が痛い。

「だ、だいたいなんでお前ここにいるんだよ」

「それはありりが何処の通学路をいつ何時に通るのかここ数日調べたからだ」

「すみませーん、あの人あたしのストーカーです」

「ちよつと!？」

ありりは近くにあった交番に駆けつけ俺を指さしお巡りさんにそんなことを言っていた。

確かにここ数日間はストーカー的な行為をしていたが決して悪意のストーカーではないのだ！

「また君か」

「こつちのセリフだ！またあんたですか!？」

なんだよこのお巡りさん！準レギュラー入りしてんじゃねーか！

「お巡りさんこいつまじであたしのこと数日間つけてたみたいなので、自白したのでよろしくです」

「よし、詳しい話は中で聞こうか」

「ちよつとまてーい！ありり!?!俺達友達だよな!？」

「元、な」

ええー、いや確かに昔みたいには仲良くないけど元って酷くないか？

確かに怒らせるようなことをした自覚ありありだけど元って言われるほど…?」

「あり、ありり！待ってくれ！俺は本当に」

「本当にやってない?」

「ちつがう！あんたは黙ってる!?!」

「おっ！な、なんだそのくちのきき方は！話は中で聞くから早く入

れえー！」

「嫌だあ！頼むありり！助けてくれ…！」

ありりに対して俺は命乞いをする。

元友達なら助けてくれてもいいはず。助けてくれたなら俺はそのことに感謝の言葉を告げ、そして全てを謝る。予定だ！

「ああーもう！すみません！やっぱりこいつ友達です！」

「ツ！ちよ！君達!！」

「ありり！」

「今回だけだぞ…！」

ありりは俺の手を取りお巡りさんから距離を離してくれた。そのまま走ることに数秒

「ぜえ、ぜえぜえ…！」

「ありり、ありがとう」

「うるせえ、ちよつと黙っとけ…はあ」

少し走っただけでこの息切れ量、ありりは普段運動とかしてるのか？

てかバンド活動してるなら体力は必要だと思っただが？

「ありり大丈夫か？ほら、水」

「んあ？あ、ありがとう…！」

「まあそれ俺の飲みかけだけど」

「ぶふうー!!!」

「ぬは、どうしたありり?」

水を一気に吹き出し次は咳き込む、吹き出した水は幸い雨が降っていたため跡形もなくなっていた。

「お前わざと言ってるのか?」

「いや、俺の飲みかけでよかったのかなって?」

「ツ！あ、あたしはべ、別に気にしないけど…お、お前はどうかだよ」

「まさか！あの元芹沢さんだぞ？そんな意識するわけ」

「死ねええー!!!」

「なんで!?!」

ありりのストレートがもろ顔面に入り俺は雨が降ってる中傘をさ

す暇もなく気を失うのであった。



「おーい、生きてるー？ねえってばー」

「ん、んん…？」

瞼をうつすらと開ける。その時

「(星柄のパンツ…?)」

女子生徒が俺にわざわざ声をかけてくれたのだろうか？傘をさししゃがんで俺の頭をつんつん着いているためちようど下着が見えてしまう。

2次元の絵見たく訳の分からんスカートの抵抗力なんてものはなく重力にしたがってパンツは丸見えだ。

「(太ももって結構エッチいんだな)」

変な性癖に目覚めそうになったところで俺は痛い頬を抑えながら起き上がる。

「いてて、ありりのやつ…そんなに俺と間接キスが嫌だったのかな」

これは、かなり嫌われてるな…俺は昔から仲のいい芹沢君、じゃない芹沢さんだったから抵抗なんてなかったんだけど…

「よかった、ゼロ君全然起きないから焦ったよ！」

あー後ろを振り向きたくねーいるんだろ、あいつが、俺のことゼロ君と呼ぶやつは1人しか知らん

「…：香澄、か」

「あ、名前」

「ツ！2人っきりの時はそう呼ぶ、だろ？」

「う、うん…」

何この空気、いや2人っきりの時と言うか、香澄のことは昔から名前前で呼んでたけど…こないだ久しぶりにあった時はモ力達に関係が知られたくなかったというか、なんというか

まあ特別深い関係ではなかったけどさ

俺は仲のいいやつが香澄、と言うか話しかけてくるやつが香澄だけだったからだだ仲が良かった、それだけだ。

「ところでなんでこんな所で寝っ転がってたの？もしかしてゼロ君っ

て馬鹿なの?」

「なんで雨の中好き好んで寝っ転がるんだよ、俺は雨好きのキッズか」
「確かに、ゼロ君昔言ってたもんね」

「雨は嫌いだ、まるで俺の心を表してるかのようなだからな」
「的なこと言ってたよね!」

「い、言ってますけどなにか?」

嘘だらろおい、ついさっきまで思ってた事なんですけど!?!昔の俺そんなこと言ってたのか!

忘れていた嫌な過去の1部を思い出してしまったじゃないか。

「てかさろそろ星柄のパンツはやめろ、笑われるぞ」

「見たの!?!あはは…でもみんなには可愛いって評判なんだよ!」

「なんだよみんなには可愛いって、なに?お前から見せあつてんの?」

Poppin Partyはレズ集団だった!なんつって

「有咲の家に泊まった時とかは一緒にお風呂入るよ!」

「あ、ありりとい、一緒に…?」

「?ゼロ君?」

あのいやらしく育ってしまったありりとお風呂に入る、だと…?

や、やばい想像したら鼻血が出そうだからやめておこう。

それに昔はよく普通に風呂はいつてたな—当時は全然気にしてなくて男だと思ってたけど

てかその時で気づけよ!?!俺なんで気づけなかったの!?

「なあお前ありり、じゃない市ヶ谷さん達になんか俺の話した?」

「ん—昔よくゼロ君と家で遊んだって話したかな」

「それはお前ダメだろ」

年頃の女の子達が男子と家で遊んだなんて聞くとそっちのことと思ってしまうだろ!

「おたえ以外みんな少し頬赤らめたの、なんでかな?」

「…:香澄は知らない方がいいよ」

「え—!なんで!教えてよ!」

「い、いや無理」

「教えて!」グイ

い、いつてえー！首が首がー！

俺は目をそらすのではなくて向けていた顔をそらしたが、顔を捕ま
れ真正面を強制的に向かされる。

か、顔近い…あとなんかこいつ高校生になったからか知らないけど
いい匂いがするんですけど…。

「多分本人達に聞いた方がいい」

「……ならそうする！」

すまん沙綾さん達！あとは任せた！

もしここでちよめちよめって話して動揺されても困るっての

「ハックション！……んあー最悪だー」

「ゼロ君風邪ひいちゃった？看病してあげよつか！」

「余計なお世話だわ！てか風邪なんか引いてない、ただくしゃみが出
ただけだ」

「なんだー久しぶりにゼロ君の家に行けると思ったのに」

「だからね、そう簡単に異性の家に行くべきではないんだぞ？」

「なんで？」

可愛げに首を傾げてなんでと聞いてくる香澄に対して俺は逆にな
んで？…とでも言い返すように首を傾げる。

「てか今何時？」

「え、時間？って！もう1時間目始まつてる！」

「てことは遅刻確定か」

こうして無理やり話をそらす。我ながら言いできだな！

「遅刻するけど学校には行くかー」

推薦を狙ってる俺からしては休みつてのはかなり痛い、遅刻なら確
から回まで許されたはず。

ちなみにだが俺は進学希望だぞ？忘れてるヤツらもいたんじやな
いだろうか。

「ゼロ君雰囲気変わった？なんかさ前みたいに訳の分からないこと言
わなくなったし」

「……昔の俺の話はすんな、恥ずかしくて死んでしまう」

「そう言えば中学3年の受験シーズンごろからもうあまり遊ばなく

なつたよね」

「……まあ羽丘は進学校だしな、勉強しないと合格できなかつた」

あの闇の書を捨てたあと俺は勉強に専念した。毎日勉強、休み時間に勉強、当時は狂ったように勉強してたよ

まるで何かから逃げるように、な

おかげで前回のテスト勉強を捗ったし？人生にとってあの勉強期間は大切な時間だったんだよ

「……もう昔みたいにさ……学校行きたくないとか言わないの？」

「ッ！知らない、そんなやつ……俺は知らない」

「知らないってゼロ君私に泣きついてきたのに!？」

「ッ……知らないものは知らない！忘れろ馬鹿香澄……!!」

この戸山香澄、俺の誰にも知られたくない一面を知ってるから俺はあまり関わりたくなかつたんだ。

「香澄……」

「香澄……」

「香澄……」

「あああ……忘れろ忘れろ忘れてくれ……!」

昔の自分が香澄を何度も呼んでいた声音を思い出して死にたいって気持ちになつてしまう。

「あああああああああ……!!」

俺は何も考えないよう雨の音で声を通らないことをいいことに叫びながら家に向かい、シャワーを浴び、着替えて学校に向かうのであつた。

一方香澄は

「先生……遅刻しました!」

「知ってる、遅刻してるからな……それで理由は？」

「理由?……あ!昔の男と会ってました!」

『ッ!?!』

女子校のため女子生徒しかいないその教室で放つた一言は教室中の全生徒を驚かせたのであつた。



「……………」

肘をつき外で雨上がりにも関わらず、昼休みにテニスをしている女子生徒を無心で眺めてしまう。

制服なのに妙にエロく見えてしまう、羽丘に頑張って入ったかいがあるぜ

「レイー最近元気ないな、どうした」

「……あ、なに？」

「これは何かあった感じだな」

「はあ…なんか本当高二になってから毎日が退屈しないぜ」

ある意味だけども、本当に退屈しない日常だ。

しかし…ありりに関しては俺が引き金だしな、もう本当にどうしよう、仲直りしたいのに…！

「よう神崎！夜桜となにやってんの！」

「まさか昼休みをいいことにいけないことを！」

「まじねーわ」

「お前達本当いつも3人でいるよな、仲良しかよ」

「仲良しというか？」

「腐れ縁と言うか？」

「まじねーわ？」

「あーはいはい、幼馴染的なやつね、うう…お、幼馴染か…！」

今思ったが俺にとつてありりも一応幼馴染ってことになるよな？

最初の幼馴染だからファースト幼馴染？なんかどっかで聞いたよ
うな響だな

「悩みがあるなら聞くぞ？」

「おうそうだ！夜桜が聞くななら俺達も聞くぞ！」

「神崎君の悩みとなれば俺は協力するぜ、俺達1夜、いや2夜共にした
仲だからな」

「まじねーわ」

優亜、その言い方は色々誤解を産んでしまうからやめて欲しい。あ
と説明するけどただ宿泊研修の時一緒の部屋に泊まったただけだぞ
「実はだな…」

俺は柊優と三馬鹿達にありりとの出来事を話た。

昔よく遊んでた男の子が実は女の子で俺はそれを知らないままいつの間にか再会してて気づくことが出来なかったこと。

そして数日後にはまたビンタをされたということ。

「つてことなんだ、どうしたら仲直りできる…?」

「よし、ちよつと集合」

「??」

柊優と三馬鹿達は教室の端に行き何やら話し合いを始めた。

「で、どう思います夜桜さん?」

「なにあいつ、どこぞのラノベとかエロゲーの主人公ですか?どんな人生歩めばそんな場面訪れるんだよ」

「まじねーわ」

「流石に俺もそれは思う、だけどレイつて嘘つくか?」

「そこなんだよ!…:ほらみろ!ちよつと見たらため息ついでたぞ!」

「まさか本当なのか?だとしたらくそ羨ましいんだが!」

「ま、まじねーわ!」

何やら4人で話をしてるんだが?途中で遊のやつがなんかこっちみてたような…:俺はため息をついていたから本当かわからないけどさ

「レイ、俺達からなにか言えるような話じゃないと思うぞ」

「そうそう、俺達はお前みたいな体験したことないんだ」

「まさか神崎君がラノベ主人公だったとは…:一体どんな結末を迎えると思いますか?由明日さん?」

「まじねーわ!」

「三馬鹿はわかるけど柊優もなの!」

まさか恋愛マスター夜桜柊優さんからも助言をいただけないとは

…!

「俺一度も女子と付き合ったことないぞ」

「ま、まじか…!夜桜まじか…!」

「聞いたか?女子とつて言ったぞ、なら神崎君とは?」

「まじねーわわわわ」

まさかのカミングアウト、柊優のことだから中学のうちで彼女を一度作ったことがあると思ってたが違ったのか！

「なんと言うか家がさ、な？」

「……いやわからん」

「はあ、今度話す」

「??」

家というのは美竹邸ではなんか恋愛禁止とか決まってるのかな？

いやでも蘭は俺と付き合ってるか……。ん？付き合ってる？ま、まあ契約上付き合ってる的なやつか

「とにかくお前ら三馬鹿に聞いたのは間違いだったぜ」

俺は若干後悔しながら午後の授業を受けるのであった。

◆ ◆ ◆

「……………」

『……………』

放課後、視聴覚室にてサークル活動を行っているが俺は昼休みと同様肘をつき外を眺めていた。

今は執筆する気が起きない。

「(ありり……)」

ありりのことが気になって仕方がない。

どうやったら許してもらえらるだろうか、どうやったら前みたいに接してくれるのだろうか。

俺があの時、再会した時からオタクのように話を合わせてさえおけば……。

何度がアサシンを探している中嘘について何とか退けていた困難も今回ばかりは無理なようだ。

もう嘘をつくのも遅い、それに俺はありりに嘘をつきたくない。

「……はあ」

「おーりこさんもれーくんも元気ない感じですか？」

「レイ君はいいとしてなんで燐子さんも？」

「これはあれね」

「あれってなに！」

「く、食いつくなあー！あと離れろ！ぎゃー！胸を触るなー！」

「また卑しい下着なんか付けおつてくそんなにれーくん誘惑したいく？」

「だから違うの！これしかないの！」

フロントブラしかないというのは流石に嘘だと思うが…凜は常にフロントブラを着用していた。

「そう言えばあれって？」

「んあ？あ、あああれよ…あの二人ほら、ホテル行ったじゃない？」

『ッ!』

「そこでやるとこまでやつちゃつてもう後に戻れないというか…既にお腹に新しい生命宿つてたり…この歳で結婚、ふん、ご愁傷さまね」

「おおお落ち着いてよ凜ちゃん！まだ決まったわけじゃー！」

「……………」

みるみる燐子の顔が赤くなっていく。まるで凜が言ったことが本当と物語っているかのように。

「まあそれとこれは別で実は皆さん知ってる市ヶ谷さんについての話なんですけど」

「すんごい話のそらし方ね、あと私は市ヶ谷さんなんて知らないわよ、そう、絶対知らないわ、うん、100%…多分」

「凜ちゃん今日はよく喋るね」

「それでー？有咲がどうしたんですかー？」

燐子も燐子で有咲のことで悩んでいたそうだ。彼女が悩むほどのこと、一体何があったのだろうか…。

「市ヶ谷さんは生徒会の一員なのでよく顔を合わせるんですけど…今日はやけに機嫌が悪くて」

「ありやーそれまたなんで？」

「何やら昔の男のことで怒ってたそうです。なんでも数年ぶりに再会したのに酷い態度を取られたと」

「ッ！」

大きく反応したのは他の誰でもない、鈍感クソ主人公こと神崎レイ

だ。

その一瞬の反応を見逃さないのが幼馴染兼露出狂こと青葉モカ

「れーくんー有咲と何かあったのかな〜?」

「う、うるさい…な」

レイはトントントンと爪を立てリズム良く音を立てる。そしてその音と連動して行儀悪く貧乏ゆすりをしていた。

「えーなになに！有咲ちゃんの再会した男の子ってレイ君だったの！」

「れーくんー一体何をしたのかな〜?」

未だにひまりとモカの方に顔を向けてないが絶対あの二人はニヤニヤしてる。そうに違いない！

「まさかレイ君のことを言ってるなんて…！世界は狭いんですね、それで何をしたんですか?」

「それわねーれーくん有咲のこと昔は男の子と思っててね、久しぶりにあつたのに本人って気づかなかつたらしいよ〜」

「なんで知ってたんだよ！お前盗み聞きしたな！」

「堂々と話してるのが悪いんだよー」

「くっー！」

まさか聞かれていたとは、しかもよりもよってモカにだど!?

おまけにここで全部話してしまっただけもう言い逃れできない状況、最悪だ。

「流石にそれは引くわ、女の子と男の子を見間違えるなんて万死に値することよ」

「だ、だってありりって昔僕っ子だったし」

「女の子なら胸とかさ?」

「だってまだ小一だったし、育ってないし、大きくないし」

「じゃああそこは見てないのー?」

「見てるわけねーだろ！」

見てたらわかるわ！流石にな！でもお風呂入っても俺は気づかなかったけどな！本当に何やってんだよ俺はー！

「もうどうすればいいんだ…」

「やってしまったことは仕方がないわ、罪を償いましょう」

「償うって何すんだよ」

「私とエツチする」

「モカちゃんと1日全裸で過ごす」

「おにぎりを毎日作って持ってくる」

「え？えつと：わ、私と最高の同人誌を作りましょう！」

まだ燐子さんと朝日奈さんの受け入れられる。しかしだ、モカとひまりの償いは無理だ、償ったら償ったでありりに殺されそう。あと蘭からも

「そんな償いは償いたくねーよ！」

「一つ質問いいですか？」

「ん？なんですか」

「ありりって市ヶ谷さんのことですか？」

「あーあいつ絵師なんすよ、SNSでも人気見たい」あのありりさんですか!？」でー?」

なんか燐子さんがありりって言葉に異様に反応して俺の話に食い気味で声を上げていた。

「ありりさんが市ヶ谷さん？なんでそんなこと黙ってたんですか！」

「黙ってたって聞かれてないですし」

「見てください！これありりさんのSNSのプロフィール！フォロワー6万人弱！私もよく拝見させてもらう絵師さんですよ!？」

「へ、へー……」

プロフィールに固定されている絵が紺碧色の髪をした中性的な男性の似顔絵なんですけど…？ま、まさか俺ってわけじゃないよな

「でかしたわ神崎レイ、この子さえうちのサークルに入れば1000部なんて余裕よ」

「確かに！でも喧嘩中なんだよねー」

「喧嘩中なら仲直りすればおっけー」

「レイ君！今から市ヶ谷さんを勧誘しましょう！」

何故こうなった！

てか俺今喧嘩中って言ったよな！仲直り？したいけどできないか

ら悩んでんだろうが！

のに勧誘しろ！あほかまたビンタされてストレートくらつて意識失うだろ！

「あー！私ちようど市ヶ谷さんと文化祭の件で話があったんでした！」

「今から市ヶ谷さんのところに行つてきますね！」

「どうぞどうぞーあ、でももく？」

「女子1人だと危険、外は危ない」

「そうなるー男子のレイ君がー？ボディーガード役で一緒に行かないとねー！」

「ツーこいつら……！」

燐子さんがありりに用があるのが嘘か否かを当必要性は今はない。

しかしモカを含めた残り3人は完全に遊び感覚で言つてやがる！

「これを機に仲直りしましょう、ね？」

「……………」

確かに…第三者によつて仲直りする機会が手に入るのはかなりでかい。

「……………」

一度冷静になつて考えよう。

何故ありりが怒つたのか、そして俺が何をしたのか。

ありりは俺が約束を忘れていたことに、そして自分を男の子だと思つていたことに怒っている。

男の子だと思つていたこと、それは僕っ子だったし勘違いしてしまふのは仕方がないことかもしれない。

だけど女の子ならそう思われたくないのもわかる気がする。

まず1つこのことで謝らないといけない。

そしてもう1つは約束の件、俺が小さい頃大きい胸が大好きだと語つていたためありりは大きく成長させていた。

そして成長した暁には俺に揉ませると約束をした、と

「（我ながらぶっ飛んだ約束だと思ふな）」

まだ一緒に絵本を作ろう…つて！

「これだあ！」

『??』

「ありりと仲直りする方法！」

俺とありりは約束した！一緒に絵本を作ろって！俺はその約束だけは覚えている！忘れたことなんてない、芹沢君ありりと約束！

今更俺が約束のことを話したところでありりには信じて貰えないかもしれない！でも、それでも俺は……！

「燐子さん」

「は、はい！」

「……ありりの所までお供します」

「……ふふ、ボディーガードよろしくお願いします♪」

「仰せのままにー」

「じゃあモカちゃん達はここでお留守番しときますかー」

「りんちゃんりんちゃん！何して遊ぼっか！」

「あのーそろそろ私の件にも協力して欲しいんですけど……？」

そう言えば俺が朝日奈さんを勧誘した時朝日奈さんの夢の話をしたな

「声優か、確かに今度オーディションもあるしそろそろ練習必要だな」

「そう、この気を逃せばこんな後期はやってこない」

「だな、とりあえず俺は今ありりが最優先だから」

「2人で何話してんだろう？」

「オーディションってなの話ですかね？」

「あの二人なんだかんだで結構仲良いよね」

とりあえず朝日奈さんのオーディションの件は後日モカ達に話すとして

「ではそろそろ行きましょう！」

「はい」

「ではタクシー呼びますからね」

「ちよ、タクシー使うんですか!?!」

「大丈夫です、このカードさえあればタクシーなんて私の車です！」

「クレジットカードを気軽に人に見せんな！」

こうして俺は隣子さんが呼び出したタクシーに乗りありが今住んでいる家、市ヶ谷邸へと向かったのであった。

女性の胸をじっくり揉んだことありますか？

羽丘からタクシーに乗り俺達はありりの家へと向かっていた。

「ここがありりの家」

でつけー、昔遊んでた家とは比べ物にならない大きさだぞ？

表札を見ると確かに市ヶ谷と書かれている。

あと家に門があるぞ、なにこれ、蘭の家で見たような門があるんですけど

「インターホンってあるんですかね」

「このタイプの家はないですよ、蘭の家がこんな感じなので」

「ではどうやって呼ぶんですか？」

「叫びます」

「へ？」

蘭を遊びに誘っていたあの頃のように俺は深く息を吸い大きな声を出した。

「ありり！大切な話がある！ここを開けてくれないか！」

「……………レイ!？」

「ああ、ありり！ここを開けてくれ！俺はお前と話がしたいんだ！」

「…………うるせえ、帰れこの巨乳好きの変態野郎」

「……………」グサツ！

巨乳好き！確かに否定できないのかもしれない…！昔の俺は本当になんでありりに大き胸が好きなんて話したんだよ！

「れ、レイ君が巨乳好きなんて…！はっ！私とあの日寝た時も実はこっさり触ってたり？」

「してないですよー！」

「私レイ君の顔もろ胸に推し当ててたんですけど？もしかして喜んでましたか!？」

「…………もうやめてくれえー!!」

どうしてこんな所で隣子さんに攻められなきやいけないんだ！俺はありりに謝りに来たのにー！

「家の前でイチヤツクのやめてくれませんかー」

「イチヤついてねーよ！てかそこにいるなら開けてくれよ!？」

「市ヶ谷さん！私文化祭の話があつて来ました！入ってもいいですか？」

「……どうぞ、ただしレイ、お前はダメだ」

「酷い！」

燐子さん1人が通れるだけ門を開けてくれて燐子さんは入ろうした。

その際に大きな胸が突っかかり結局燐子さんプラス0.5人分の幅を広げて入って行きその門は大きな音を立てて閉められた。

「くっそー」

1人門に寄りかかり悲しくそう呟いた。

もうありりと仲直りできないのだろうか？昔みたいに…遊ぶこともできないのかな？

「あら、まあお客さんかしら？」

「……うあぁ、すみません怪しいものじゃないんですよ…ただ、市ヶ谷さんの古い友人と言うか、いや元友人と言うか」

ありりのおばあちゃんだろうか？歳をとった女性の方から話しかけられた俺はそう判断し話をした。

「有咲の古い友人…もしかしてレイ君って子かしらかね」

「……はい」

「そう…有咲はまだ帰ってきてないのかしら、とりあえず中に入って待っててくださいいね」

「いやありりは…」

待て、このままありりのおばあちゃんについていけば俺は中に入れる。そしてありりと話す機会も

でもいいのか？なんか騙してるみたいだし

「入らないんですか？」

「は、入ります！」

門を閉じようとしてため急いでなかにはいる。

って何入ってんだよ俺はー！

ありりにバレないようにしないと！

「！有咲ーレイ君が遊びに来てくれたわよー」

「ばあちゃん!? って！なんでお前が中に入ってたんだよ！」

「わざとじゃないぞ！体が勝手に入ったんだ！」

「勝手とかわけわかんねえこと言ってるんじゃないか！出てけ！」

「待ってくれありり！俺はお前に謝るために来たんだよ！」

「あたしは謝って欲しいなんて言ってるねえ！仲直りしたいともない！」

「ッ！あ、ありり…お前」

「ふん！お前が出ていかねーならあたしは蔵に行く！夜までにはぜってえ帰れよな！」

「……………」

どうしてだよーどうしてありりは俺の話を聞いてくれないんだよ…！俺はただ謝って、ありりと仲直りしたいだけなのに！

「…………レイ君」

「もういいですよ、ありりもあんなんだし…俺が悪いし、もう諦め」

「ッ！」パーン

「……………へ？」

諦めます、と言おうとした時俺はまるでその言葉を遮られるように隣子さんに頬を叩かれた。

ありりにビンタされた時とは違う。俺は間抜けた声を出していた。

「逃げないでください」

「ッ！」

「私は…そんな弱いレイ君は嫌いです」

「でも俺にはもう無理」

「ッ！」

「痛い！」

次は先程叩かれた方とは逆の頬を叩かれた。まさか左右どちらもビンタされるとは

あと最近の俺女子にビンタされすぎだろ…。

「私こう見えて結構怒ってますよ、あの時はみんながいたので怒りませんでしたけど」

「……………なんでそこまで」

「甘えないでください！」

「ッ！」

「自分がしたことにはちゃんと責任をもってください！レイ君は謝れば済むと思ってるだけです！」

「その考えは間違ってるんですよ、市ヶ谷さんにとってレイ君は、あなたは……きつと……！」

「ま、待って！もう叩かないでえー！」

プルプル震えながら右手を上げて俺にビンタしようとしてたが俺の言葉を聞きなんとか耐えてくれた。

「とりあえず有咲が落ち着くまでお茶でも飲んでてください」

「あ、はい」

言われるがまま俺達はありりの家にあがり居間にてお茶を飲んでいた。

「どうぞ」

「どうも」

「あ、ありあああ、ありがとうござ……います」

燐子さんはかなり動揺していた。多分だが先程俺をビンタしたことをやりすぎたなって思ってたんだろう。

なら最初からしないでくれよ……結構痛かったんだよ？

「有咲と喧嘩したんですか？」

「……まあ俺が全部悪いんですけどね」

お茶を一口飲み俺はありりのおばあちゃんの質問に返事をした。

「……有咲は小一で両親を亡くしました」

「交通事故です……。引き取る人が誰もいなかったものですから私が引き取り」

「芹沢から市ヶ谷に苗字が変わった」

「はい」

苗字が変わってる理由は何となく察していた。でも簡単に聞ける話じゃないだろう？だから俺はありりにそのことを聞くことはできなかった。

「ここに来た有咲は学校にも行かなくなつて……毎日落ち込んでたん

です」

「それがある日急に元気になったんですよ」

「……………なんですか」

「突然絵を描きたいと言い出したんです」

「……………!?!」

「思い出したかのように絵を描き始めて…道具が欲しいからって家の手伝いもしてくれるようになって」

「それがきっかけで有咲は盆栽の手入れも覚えて今ではすっかり」

「……………」

「ごめんなさいね、話がそれたわね」

「いえ」

まさかありりは思い出してくれたのか？

急に絵を描きたいって俺との約束を思い出して…俺のために…!

「レイ君と一緒に絵本を作るんだって」

「……………」

「でも結果的には絵の練習したいと言い出して中学校にはあまり行かなかったんですけどね」

「香澄ちゃんの家に来るようになってからは毎日学校に行くようになったんですよ?」

「ツツ!」

「!レイ君…」

俺は男のくせに話を聞いて泣いていた。

ありりは両親を亡くして、かなり落ち込んでる中俺との約束を思い出して!

俺と言う存在約束を心の拠り所にして今日まで生きてきたって言うのに…!

「(俺は本当になにやってんだよ!)」

情けない、自分を今すぐぶん殴りたい。

結局自分のことばかりじゃないか!ありりのことなんて考えなくて無自覚でありりをここまで傷つけていた。

「俺ありりの所に行ってきます!」

部屋を飛び出し玄関へと向かう。

今すぐ謝ろう。ありりが俺のことをどれだけ思っていたのか、俺はちゃんとありりに聞かないといけない。話さないといけない！

「！」

外に出ると先程まで晴れていた空には厚い雲ができていて雨が降っていた。

傘を持ってないためずぶ濡れになりながらありりが入っていた蔵へと向かう。

「ありり！俺だ！」ドンドンドン

「ありり！ごめん、本当ごめん、俺何もありりのこと知らなくて…！ごめんー！」

「……………」

「ありりが俺のことこんなにも思ってたなんて知らなくて、俺！」
「ばあちゃんに話でも聞いたのかよ」

俺はありりにドア越しだけど何度も謝った。

「…………あたしさ、お前との約束を果たすためにすげー頑張った」

「絵の練習もしたし、胸を大きくするために毎日マッサージもした」

「その結果小学生の頃から男子共からエロい目で見られたぞ…？」

「…………ごめん」

「中学だって絵の練習するために全く通わなかったんだぞ…？」

「本当、ごめん」

「…………まあ？その他にも行かなくていいやって理由もあったからこればかりはお前のせいじゃねーぞ」

「……………そう、なのかな」

でも絵の練習はしてたんだよな？そうになると俺との約束も1つの理由として休んでいたのではないだろうか。

「あたしはお前って存在に救われた、近くにいるのはもう何年も前から知ってた」

「知ってたなら会ってくれてもよかったじゃんか」

「…………あたしがまだ自分に自信が持てなかったんだよ」

「そうか…」

自信が持てなかった、それはまだ絵を描く能力が未熟だから会う資格がない…的なやつだろうか？

「会ったら喜んでくれるかなって、そう思ってた…けど違ったよ、会ったら男だと思ってた？」

「……ふざけんよ…！あたしがどれだけお前のことを思ってたよ、今日まで生きてたんだと思うんだよ！」

「本当、ごめん」

「さっきから謝ってばかりじゃねーか！」

「……………」

俺は謝ってばかりだ。でも言葉を並べて誤っているわけではない。ちゃんと、本当に心底から悪かったと思ってるから謝ってるのだ。

「なあありり」

「……なんだよ」

「俺さ、ありりのこと本当にずっと男の子と思ってたんだ」

「もういいだろその話は」

「……だから、その…聞いた時戸惑ったんだ」

「だから、お前の気持ちも考えなくて自分のことばかり考えて、はは、最低だな俺って」

「よくわかってんじやん？」

ああ、俺は最低のクソ野郎だ。でもな俺は

「でも俺はお前との約束を忘れた訳ではない」

「確かに大きくなったありりの胸を揉むって約束は忘れてたかもしれない」

「でもな、お前と絵本を作るって約束…こればかりは本当に覚えているぞ」

「ッ！覚えて…くれてたのか？」

「ああ、本当だ」

「本当の本当か？」

「本当の本当の本当だ」

「……んなこと言って、いいように許してもらおうと思ってるんだろ」「思ってたんじゃない！」

「ッ！」

雨の中でもはつきりと聞こえるように俺はかなり大きな声でドア越しでありりにそう答えた。

「……俺のことは許してれなくてもいい」

「は、はあ？お前散々謝ってて何言ってるんだよ」

そう、許してくれなくても構わない。でもその代わり

「その代わり……俺達の約束は果たして欲しい」

「約束？」

「ああ」

「俺と一緒に……最高の同人誌を作らないか？」

「ッ！」

同人誌、ならば絵本と言ってもいいのでないだろうか？それに俺達
が作るのはイラストSSだ。もう絵本みたいなもんだろ

「でももし許してくれるならすぐじゃなくていい……少しづつ俺のことを許してくれないか？」

「……………」

「これでもダメなのか……？」

「俺がまだ忘れている約束だってあるかもしれない！でもそれも全部
教えてくれたら果たすから！」

「胸を揉むって約束もちやんと果たす！ありりの気が済むまで俺揉み
続けるから！」

「なんなら吸っても！」

「んなことまで約束してねーだろ!!?」

「あがぁー！」

蔵のドアを思いっきり蹴り開けられその拍子に俺はドアの前から
飛ばされる。

運悪く水溜まりの中へ入った俺の制服はもうびしょ濡れ、これは
帰って洗うのが確定のようだ。

しかしだ、そんなこと今の俺にとってはどうでもいいことだった。

「ありりー！」

そう、ありがたさがドアを開けてくれた。俺に顔を見せてくれた。

登場したありりは腕を組み、その成長させた大きな胸が腕の上に
乗っかっている。

「……ふ、ふん！あたしはお前のことそう簡単には許せない」

「だよ、な……そうだよな」

少しでも希望を持った俺の考えが甘かった。やっぱりちゃんと許
してもらうまでこの約束については仲直りしてからでも…

「でも約束はちゃんと守らないといけないよな、おう、そうだよな
！約束超大事」

「あたしは全然許してないけど？約束は守らないとだ、だからな！や、
約束通り…同人誌、作ろうぜ…」

「……ありり！」

照れくさそうに髪をいじりながらそう答えたくれたありり、俺は嬉
しくなりびしょ濡れたままありりに抱きつこうとした時

「うわぁー！近寄んなー！」

「ぐへー！」

ストレートかと思いきや腹に強烈な蹴りを決められ、まともや俺は
水溜まりの中へと飛んで行った。

「だ、大丈夫かレイ!？」

「全然大丈夫じゃない、死にそう」

朝日奈さんが昔言っていたセリフが咄嗟に出てしまった。それほ
どありりの蹴りが俺の溝に入りここまで深く痛めつけた。

まあ俺がありりの心につけた傷よりかは深くもないし痛くもない
んだろう。

「……ふふ、お前は前となんも変わらねーな」

「な、何がー?」

本当…レイは変わってない。

あたしも思い出した。こいつはこんなやつなんだって
かなり前にも喧嘩はしたことがあった。その時はまだお互い小一
で…おもちゃの取り合いで喧嘩した時も

「俺のことは許さなくてもいい、でもおもちゃにあたるのはやめよう
よ」

「ほら、このおもちゃ芹沢君が使いたかったやつでしょ？もう遊べなくなるよ。」

俺のことは許さなくていい。今回もそんなこと言って結局約束を果たさせようとする。

「(お前は本当…ずるがしこいやつだよ、まったくな)」

「ありり？どうかしたか？」

ありりのやつは微笑ましそうに微笑み濡れている俺を見つめていた。

「いや、別に何も思ってたねーよ」

「それより濡れてんぞー中にタオルあるから入れ」

「お、お邪魔します？」

ありりも傘をささずに俺の元へと来たため少し濡れていた。

自分だけが中に入って髪など濡れたところを吹くのは尺に触ったのか俺を蔵の中へと入れと言ってくれた。

「タオルしかねーけどいいか？流石にあたしは男用の服とか持ってないぞ」

「タオルだけで大丈夫、大体濡れたのは自分のせいだしさ」

「……ふーん、そっか」

答えながらタオルを渡してくれたありりは何故か下を向いたまま渡してきた。

一通り濡れた髪の毛の水分をタオルで拭き取り、最後は肩にタオルをかけた壁に寄りかかる。

「な、なあレイ…その約束なんだけどさ」

「ん？ああ、ありりも燐子さんから話聞いてるだろ？燐子さん達とサークル活動しててさ、それでありりにも協力して欲しいんだ」

「それは知ってる、その他の約束」

「……あーはい、あれね」

俺は恥ずかしがるように頬をかき目を泳がせていた。

何故なら目の前には薄着で服が濡れているありりの姿が目の前にあったからだ。

丁度よく全体的に濡れたその服は女性として強調されている胸の

部分が透けていて…ぶつちやけもろ見えていた。

「別に今じゃなくても」

「今がいい！……それに約束はちゃんと果たしてくれるんだろ…？」

「ツ！」

それを言われるともう逃げられないんですけど!?

い、いいのだろうか？確かに俺には覚えがないけど幼い頃の俺とありりはそんな約束をしたんだ。

なら揉むのもいいのだろうか…！

それにありりだって俺のことを許してくれたわけではないーあー！どうすればー！

「は、早くしろー！は、恥ずかしいんだからな！」

「あ、はい！」

俺はゆつくりとありりに近寄る。

手を伸ばしいつでも触れるかのように手のひらを広げありりの大きく育った胸に触ろうとした。

「ひやつん！」

「あ、ありりごめん！俺触り方とか知らないからさ」

「だからって先つちよから触んなよ…！」

「！ごめん！」

キリツと泣き目になりながら睨んでくるありりに対して俺は後退りになる。

「もっとこう、なんて言うだ？優しく包み込むように…触れよ、言わせんな、この馬鹿…」

「お、おうーい、行くぞ…！」

外は地面に雨水が当たる音が鳴り響いている。が、俺の耳には自分の鼓動がおかしいぐらい早い心臓の音が鳴り響く

「ツ〜！」

「おお、す、すげ…！」

今まで無理やり押し当てられたりしてたからわからなかったけど下から持ち上げるように触ると凄い、なんとというか重みが伝わるとうか

病みつきになりそうな…って！それはダメだろ神崎レイ！

「へへ、どうだ…？あたしはレイの大好きな巨乳な人になれたか？」

「え！あ、うん…凄く、いいと、思い、ます…」

「ツ！そ、そっかそっか！なら今後はいつでも揉ませてやるからな…？」

「いやそれは」

「や！く！そ！く！」

「はい喜んで！」

これで俺はやば、おっぱい超揉みてー！って思った時ありりに一言いえばいつでも揉めるようになったな！

よかつたな神崎レイ！

じゃねーよ！なに喜んでんだよ俺は！これじゃ完全に俺が巨乳好きの変態じゃないか！（変態です）

「はあ、レイ、レイがあたしの胸を触ってる…夢じゃない」

「どうだ！やっぱりあたしだろ！あたしの胸が最高だろ!？」

「ありり落ち着いて！あと、もう離してもいいかな…？」

「ふっふー！だーめ、何年も待ったんだぞ…？今日ぐらいは…な？」

「……はい喜んで！」

「あつ！ちよ、それは強すぎだろー!!」

ありりのやつは本当に俺のこと許してくれてないんだよな…？

のになんで胸を揉まれてこんなにも嬉しそうに喘ぐのだろうか、あと濡れてるせいでめっちゃ色っぽい。

「(耐えろ俺…相手はファースト幼馴染の元芹沢君だぞ！)」

レイは密室の蔵の中にて有咲が満足するまで約束のため胸を揉み続けたそうだ。



『……………』

蔵でありりとの約束を果たした俺は燐子さんに報告しようとするありりの家へと向かった。

「おばあちゃんおかわり！」

「はーい、香澄ちゃんはたくさん食べてくれるから嬉しいわね」

「有咲のおばあちゃんのお焼きたては美味しいですから！ほら燐子さんも！」

「は、はい……いただきます」

「ちよつとまでーい！なんでか、戸山がいるんだよ!？」

「なんだ香澄、来てたのか……あんまりばあちゃんに迷惑かけるなよな」

なにこれ、ありり普通に対応してるんですけど!？」

「あれ！ゼロ君！なんで有咲の家!？」

「……俺とありりは幼馴染なんだよ」

「……………」

ありりは特になにも言わないか、幼馴染って言うことに関しては特に抵抗がないようだ。

「ふへーほうなんだあ」

「食いながら喋んな、下品だろ」

「てか香澄、お前何しに来たんだ？まさか……ばあちゃんのご飯食べるだけに来たのか?」

「違うよー！有咲に会いたくてきちやっただけ!」

「なっ！お、お前なー!」

「ふふ、相変わらず仲良いですね」

なにこれ、本日二回目なのにこれ？今俺の目の前で超百合百合な展開が繰り広げられてるんですけど?」

「レイ君もご飯食べていきますか?」

「いえ俺は家に飯ありますし、あとこれから学校に戻らないと行けませんので」

まあ家帰ってご飯作るのは俺なんだけどね

とりあえず羽丘戻ってモカ達にありりのこと話してそこからサークルの今後について話を

「なあありり、今からメンバーにありりのこと話したいんだけど羽丘までつい来てもらってもいいか?」

「おう！全然いいぜ!」

「メンバー？有咲なんかするの?」

「ああ、こいつと一緒に同人誌作るんだよ、安心しろ、バンドもちやん

と活動するから」

「レイ君レイ君」

「なんですか？ 燐子さん」

「市ヶ谷さんと仲直りできたんですね」

「……まあ、はい」

本当は仲直りしてないけど燐子さんは俺をビンタまでして怒ってくれたからな…仲直りできませんでしたとは言えないっての

「あとさつきはすみません、痛かったですよね…?」

「いえ、ありりのストレートに比べれば平気です!」

嘘だけど心配させたくないからここはこう言うしかない!

「ゼロ君と同人誌…?なにそれ面白そう!」

「面白そうってお前な」

「でしたら戸山さんもサークル入りませんか!?!」

『燐子さん!?!』

コミ障のくせになんで勧誘は積極的に行うんだよ!?! 香澄なんか何も知らないド素人だぞ!

なんならうちには既にひまりって言うビッチの変態無知野郎がいるだろ!

「サークルはたくさん人がいた方が面白いですよね!」

「だからって燐子さん! 戸山じゃなくてもいいでしょ!?!」

「戸山さんが入れば花咲の生徒が増えます! 私ずっと1人で寂しかったんですよ?」

「うう」

それを言われるとなんと答えればいいかわからんぞ

俺達羽丘生徒は数人、しかも全員同じクラスなのに1人だけ他校の生徒…となると寂しくなるのも仕方ないことか

でもなー香澄は俺の誰にも知られたくない過去を唯一知っている人物だからな

俺が元厨二病だったとみんなに言いふらされたら俺は恥ずかしくて生きていけない

「ねえゼロ君お願い! 有咲の面倒ちゃんと見るからー」

「なんであたしがお前に面倒みられないといけないんだよ！」

「いや戸山は…」

「レイ君…もしかして私情で否定しませんか？」

「え!？」

燐子さんは両手の平を合わせ首をかしげながらニコニコ笑顔で俺にそう言ってきた。

まるで私情で否定してたら…どうなるかと物語っていた。

「ほら香澄、あんまりレイを困らせるなよな」

「えーでもゼロ君とは中学の時仲良かったよ？昔の男ってやつかな？」

「昔の男!？」

「うん！昔は家でよく遊ん」

「よしわかった！香澄！よろしく！お前は今日から俺達のサークルメンバーだあああー!!!」

「んんー！んん!!んんー!!!」

香澄に飛びつき思いつきり口を抑える。若干鼻も抑えていたぽついから息ができなかっただろう。それはすまん

てかありりは俺と香澄が昔遊んでいたことは知ってたのか、なら黙ってても

「おいレイ…香澄と昔は家でよく…何をしてたんだ？」

「え？あー遊んでた、香澄から聞いてないのか？」

あと思いつきり名前で呼んじゃってるよ、隠してた意味ないじゃんか！

「誰もお前と遊んでたなんて聞いてねーぞ!？あ、あと男女が家で遊ぶってお前達…!」

「やったんですか!？」

「ああー！お前らとりあえず羽丘行くぞクソがあー!!」

ありりの家、ということを完全に忘れていた俺はかなり大きな声を上げ何とか窮地を脱したのであった。

その後羽丘に向かうため燐子さんが呼んだタクシーでは、助手席に香澄、後ろの3人座る席では俺が真ん中で巨乳娘2人に囲まれてい

「おーれーくんがモカちゃんのおそこを…ふっふっふー今から本当にしちやう〜?」

「見てみてレイ君!私やっとなレイ君とエッチできたよ!」

「……………」

モカが俺に見せてきた絵では何故か顔面騎○位をしている俺

そしてひまりに関しては朝日奈さん同様エッチなことをしていた。

しかし…あの蘭が俺を終優以外の人と、そういうことをやらせようとする人ではないと思ってたんですけど!?

なんてことをしてくれただ蘭!というように俺は蘭を睨んだがごめんちやい!とでも言うように舌を出し自ら可愛げに頭を叩いてるのであった。

そう、新たに変態幼馴染の1人が俺のサークルに参加することになったのであった。

夏服デビューしたことありますか？

リビングにて俺は制服へと着替えていた。

本日より夏服完全移行日、つまりのところブレザーとはしばしの別れ、今思えばこのブレザーと冬用の制服のズボンといいかなり汚れさせてしまった。

忘れもしない4月29日、俺は人生で初めて告白された。

でもその相手は予想を超える告白方法、屋上に呼ばれたかと思えば次は武道館裏、そこで究極の二択に負けた俺は泥水に落ちてしまった。

最後の体育館裏では穴を掘り続けブレザーとズボンは泥だけになつた。

「お勤めご苦労さん…しばらくの間は休んでくれ」

ソファアに優しく置き、今日から新たにお世話となる夏服へ手を伸ばす。

1年の担任が昔こんなことを言っていた。

高校生活で夏服を着れる回数は3回だと。

何言ってるんの？普通に3回以上着ないとダメだろ、暑い夏にブレザー着ろって言うのか？

と最初はとらえていた。しかこの回数といのは俺の想像している回数じゃない。

進級し、夏になるとこの夏服に腕を通す。そう、その時に1回着たとカウントするんだ。

簡単に言う俺は1年次に1度この夏服に腕を通してている。となれば俺は既に夏服を1回着ている。

つまり今から腕を通せば2回目、あと3回のうち2回目がやってくるのだ。

何を言ってるかわからないって思うだろ？まあ簡単に言うとな「青春は待ってくれない…ってな」

柄にもないことを言いながら俺は2回目になる夏服に腕を通した。

「3回目までにはアサシン見つけるぞー！」

夏服のボタンを止めて朝食を食べ、俺は羽丘へと向かったのであった。

◆◆◆
「……………」

あのー角からもろスカート見えてるんですけど、あと黒髪を見えてるんですけど？

それとあの角で待っているとすればもうあいっしかないよな

「おはよう蘭」

「ん、おはよう…」

「夏服デビューって言う貴重な日なのに眠そうだな」

「誰のせいだと思ってるの…はい、これイラスト」

「仕事はえーな」

「ふあー、ついさっきまで描いてたから」

「…………お前まじか」

随分と眠そうにしてるなと思ったらしいさっきまで描いてたのか…！できるだけ早く欲しいと言ったけどまさか土日挟んですぐに持ってくるとは！

俺はコンビニにより蘭のやつにコーヒーを買ってやり歩きながら蘭に渡されたiPadでイラストを確認する。

相変わらずクソうまい、流石はエロ同人誌作家、しかし今回のイラストでは胸なんかさらけ出すことなく全員が服を着ていた。

「蘭は裸以外もかけるんだな」

「当たり前でしょ、エッチする前制服じゃん」

「制服じゃんって言われても…」

つまりは服を着てる絵もかけるってことね、了解です。

「でも蘭がサークルに参加してくれるとは思ってなかったからな…本当、意外だよ」

「だから理由は先週言ったじゃんか」

俺は蘭のその言葉で先週の出来事

サークルメンバーが3人も増えたあの日のことを…。

「えーというわけで、右からファースト幼馴染、市ヶ谷有咲、その隣がシックス幼馴染、美竹蘭、そして、あー友達の戸山香澄だ」

「ファースト幼馴染、ふふ、悪くない響だな、市ヶ谷有咲！レイにスカウトされて入ることになった！よろしくな！」

「ちっ…」

「ゼロ君ーなんか私の紹介だけ雑じゃないー？あ、有咲の面倒を見る戸山香澄です！よろしく！」

蘭のやつは何故か不機嫌そうな顔をしながら舌打ちをしていた。

シックス幼馴染って響が癩に触ったのだろうか？

「よかったねー蘭、セックス幼馴染だよ」

「モカ、それはひまりに譲ってあげるよ」

「いいの!?!ならレイ君！今からエッチしよう！こんな風に！」

「しねーよ！」

蘭の絵を指差しながらひまりがエッチしようと言いだした。

リアルすぎるその絵は早くしまつて欲しい。頼むから、いやまじで

「ちよつと顔貸して」

「え？いやこれからサークルについて」

「そんなことよりちよつと、あたし達の今後の話、じゃないとみんなに」

「わかった、隣の部屋でいいか？」

脅された俺はみんなに隣子さん以外にあの作品を知られないためにも隣の部屋に蘭と2人で入る、と同時に

「いッ！」

足を思いつきり踏みつけられネクタイを捕まれ顔を無理やり近づけさせられる。

「一体どういうこと？ファースト幼馴染？シックス幼馴染？そんなの聞いてないんだけど？」

「……ありりは本当に昔からの友人で」

「ふーん友人、幼馴染？まあ金髪幼馴染は負け組ってレッテル貼られてるからいいけどさ」

「お前それ絶対本人の前で言うなよ!」

負け組ってなんの負け組だよ、だがしかし!とにかくこれをありりの前で言うと言いが起きかねん

「蘭…答えてくれ、お前はなんで俺と、その他の女子とエッチしてる絵を描いたんだ?」

「あーなんかサークルに参加するには秘密を話さないといけないって言われたから描いてあげたの」

「いや意味わかんねーよ」

「喜んでたしいいじゃん、それにモカとひまりの秘密も知れたし、あんたも大変だったわね」

「蘭…!」

やばい、蘭が女神様に見えてきた。多分誰かに同情されたのは初めてかもしれない

「でもあんたはあたしと柊優の物、例え幼馴染だろうとあんたを譲る気はないから」

「……それは蘭のためか?」

「少なくともあたしのためではあるね、ある意味」

「わかった、じゃあサークルに参加してくれた理由は?」

「泥棒猫達からあんたを守るため」

「……………」

あくまで自分のためなのか…そこまでして柊優と俺をくつつけさせたいか?

「参加してくれるってことは協力してくれるってとらえていいんだよな?」

「いいよ、一応あたしレイの彼女だし?あんたもあたしの彼氏ならあたしにも協力しなよ?」

「このカレカノの関係ってなんなんだよ」

「なに、エッチなことしたいの?…:…したいなら相手するけど?」

「ええ?」

それはつまり…どゆこと?」

「柊優が」

「よし！戻るぞ！」

「あつ！ちょレイ！」

隣の部屋から勢いよく逃げ出し俺は視聴覚室に戻る。すると数人に別れたグループが出来ていた。

まるでギャルゲーのヒロインに話しかけるような感覚だ。全員に話しかけないと物語が進まないあれ

とりあえず近くにいる朝日奈さんとありりのグループに行ってみるか。

「まさかお前がレイと絡んでたなんてな」

「……し、知らない」ギギギ

朝日奈さんは錆びれたロボットの首の動きかのようにギギギと音を出しながら首ごとありりから顔を逸らした。

「ありり、朝日奈さんと知り合いなのか？」

「レイ……ああ、同じ音楽教室に通ってたんだ」

「そんな記憶私にはない」

「のわりには大きな胸をお持ちのようですね？」

「ッ！誰のせいと思ってるのよ！あんたのせいであんたのせいで私の胸は大きくなったのよ！」

「将来はセクシー女優が有力就職先かもしれないわね、あはは、そもそもみんなは私の体に魅力なんて感じてくれるのかしら……？」

そう思うならセクシー女優は有力就職先ではないと思うんだが？

「大きくなったて？」

「あたしが考案したバストアップ法をこいつに話したんだよ、よくここまで成長したな……これはレイに触らせないようにしないと」

「触らせないわよ！」

「そもそも触らねーよ！」

なんで俺が朝日奈さんのおっぱいを揉んだよ!?急に揉んだら俺は完全にヤバイやつだろ!?

あと詳しい話を聞くと小さい頃のありりが朝日奈さんに毎日して
るバストアップ法のマッサージを教えてあげたらしい。

人の発言を信じ込みやすい朝日奈さんは毎日しないといけないと

思いつつと続けているようだ。

昔聞いた好きで大きくなったわけじゃない、はこのことを言つてたのだろうか？

「もういい、マツサージは今日限りで辞めるわ」

「いいのかー？垂れるぞー？」

「前言撤回、胸だけでも立派に成長させる」

「……………」

変なところで真面目になったようで俺は別のグループへ向かう。

モカとひまりと香澄？こいつらなんの話してるんだ？

「これ蘭ちゃんが描いたの？すつごくエチエチだね！キラキラドキドキするー！」

「そのよくわからん用語は変わんねーな」

「ゼロ君！おかえり！蘭ちゃんと個室でこんなことしてたの？」

「やめろー！」

しかもよりにもよってモカの絵を指すな、モカの絵のようなことをするのはもうフィクション内での話だと信じたレベルなんだよ

「でも蘭がここまで絵をかけるなんて知らなかったよ…すんごくエロい、これって貰っていいのかな？」

「ひーちゃんだしゆきホルドなんてだいたーん」

「だいしゆきホルド？つてなに！」

「こうやって男子が逃げられないよう…んー実践した方がわかりやすよねーレイ君！今からエッチしようよー！」

「お前らに話しかけなかった方がよかつたわ！」

この変態集団に話しかけたことを若干後悔しつつ次のグループへと話を運んだ。

あれ？モカとひまりのやつ香澄に自分達の性癖話したの？何あいつら恥とかないの？

「まさか美竹さんがサークルに参加してれるなんて！」

「…………成り行きで」

「成り行きでも大歓迎です！モカさんとひまりさんにあの絵を描いたということは？」

「あたしが変態同人誌作家ってことはバレてますよ」

「だったらレイ君と夜桜さんの作品も？」

「いえあれはレイを脅すために残してます」

「やっぱり脅すためかよ!？」

蘭のやつは自分の思ってることをちゃんと話すからまだましなのか？

でも脅されると知ってて生活するのはなんか嫌だな

「でもよかったじゃんレイ？女子に沢山囲まれて、手…出したい放題だよ。」

「俺が出せないこと知っててよく言うよ」

蘭にジト目を送りながら俺はそう答える。

万が一問題が起きて俺がサークルメンバーのうち誰かとエッチなことをしたと知られたら俺は蘭に殺されてしまう。

浮気した男として…な？ある意味だけど

しかしだ、アサシンを見つけたら別の話だ。俺は蘭に土下座でも何でもしてエッチする権利を手に入れる！

「あつはつはつー何言ってるんすかレイ君、あたしはここが乱行パーティーになってもいいんすよ」

「何その急にキャラ変えるやつ、あとそんなことは絶対ないから」

「まさかレイがここまで女に興味がないなんて…あ、でも今日の帰りのタクシーで」

「ももももういいだろ！はい！解散！ありがとうございましたあああぁー!!」

俺がテントを立てていた話は広まることなくその日は顔合わせっで形で解散になった。

余談だがありりはみんなに自分が絵師であることを秘密として話した。

香澄は…昔俺と家で遊んでいたと言い出し、俺は香澄以外のサークルメンバーから質問攻めされる羽目になったのであった。

「あの時は大変だった」

「男女同じ部屋にいるつてのに手を出さないなんてね、本当へナチヨコ腰抜けチキン野郎なレイだね」

「それ言ったら俺が手を出したら他の女とエッチしてたことになるぞ？」

「なっ！あたしが嫉妬してるみたいないやいややめてよね！あんたのことなんかなんとも思ってるないんだから！」

「……いやいつも通りの返事を期待してたんだが」

「ツ！今のなし、ちよつと眠くて頭をおかしくなってるかも」

「はは、だな、絵は後で授業中にも見せてもらおうよ、蘭は休んどけ」
「……ん、そうしとく……ありがとう」

蘭のやつ感謝する時は素直に感謝するからな……普段からこんな感じで素直に接してくれたらいいんだけど

そんなことを考えながら眠たげな蘭が倒れないようそばを歩くレイなのであった。



「どうしよう……！」

朝のHRを知らせるチャイムがなる5分前、女子便所付近に設けられている姿鏡で身だしなみをチェックする1人の少女がいた。

「もう楓凛かりんったら私の髪で遊んで……こんな髪型で教室入ったら笑われるわよ……！」

写真を取られSNSにアップされ全員が自分の髪型を見て笑うのではないかと言う恐怖が彼女を襲った。

こんなネガティブなことを考える女子生徒は1人しか知らない。そう、朝日奈凛は普段とは違う髪型で登校してきたのだ。

「なによこれ、夏服デビューとついでに髪型も変えてきたみたいじゃない……もうー！」

いつも1つ結びにしていた髪を解き本日は左右に可愛らしいく2つに束ねた髪がゆさゆさと揺れていた。

俗に言うビッグテール、決して本人の意思でこの髪型になったわけではないらしい。

楓凜という謎の人物によってビッグテールへと改造されたのだ。

「笑われる、笑われちゃうわよ…今日はもう学校休んで…」

「あれ？り、凜！何してるの？」

「ッ！神崎レイ？あと名前呼び…なに？」

『……………』

まさかトイレから出たら真横に朝日奈さんが、いや凜さん？がいるとは…。

これも先週の出来事なんだが帰り道は家が近いつて理由でモカとひまりとの3人で帰ってたんだ。

俺は数歩後ろを歩き家に連れ込まれないよう警戒しながらだが…。

「ねえーりんちゃんあたし達のこと名前で呼んでくれないよね〜」

「そーれ、悲しいな…」チラ

「な、なんだよ」

ひまりのやつは何か言いたげな顔をしながら視線を向けてきた。

「誰かが名前で呼べば変わってくれると思うんだよねー、そう誰かが」

「あつそ、ならお前が名前で呼べよ」

「私は呼んでるよ！だ！か！ら！普段呼ばない人から呼ばれたら何か変わるかもだよ？」

「……変わらん」

「今度りんちゃんのこと苗字で呼んだら無理やり顔面騎乗位させちゃうよ〜」

「……………」

こうして俺は半強制的に朝日奈さんのことを凜と名前で呼ぶことになってしまったわけだ。

馴れ馴れしいと思われたらどうか？

「……………」ボー

「あさ……凜？どうした？」

「はっ！異性に名前で呼ばれたのが本当数年ぶりです…ちよつと驚いた」

「！そっか！」

なんか許可されたのかな？あれ、なんか少し嬉しいんですけど…！

なにこれ！今までアイツらのこと名前で呼んでたけど名前で呼ぶ
のて結構いいな！おい！

「でも急になによ、名前で呼び始めて…まさかあんた！やっぱり私
の胸が目的で!？」

「ちつがう！あれだよ、もう1ヶ月ぐらいの付き合いだろ？名前で呼
んでも」

「付き合いい!?あれなの？名前で呼び合う仲って恋人って意味なの…?
だったらあんたは何人の恋人が…？」

指を折り数えている凜を見て俺ははあと大きなため息を着く、ここ
まで異性に対しての接し方を知らないとは、悔つてた。

「別に深い関係じゃなくても名前で呼んでいいんだよ」

「…友達なら名前で呼ぶ、普通のことだ」

「友達？あんたと私って友達だったの？」

「友達、だと思ってる。凜は？」

「…友達なのかな？」

「だったらモカやひまり、燐子さんも友達だろ？なら名前で呼んでも
いいと思うぞ」

流石にまだありりと香澄と蘭を名前呼びすることには否定すると
思った俺はこの3人の名前を出した。

「そう、ね！友達！そう友達！うん！友達！名前で呼んでいいの、かな
？」

「……れ、い？」

「ツ！おう！レイだ！」

「れい、れい、れ…い？」

「妹以外を名前で呼んだのは本当…初めてかもしれない」

「あーあはは」

まさかの初めての相手が俺ですか、なんか…すまん

未だに両手で頬に手を当てれいと小さく連呼する凜、まさかこうも
簡単に名前呼びを始めるとは思ひもしなかった。

「？あれ、凜！今日の髪型すげ可愛いな！」

「ほえっ!？」

「なんて言う髪型なんだろう？その方が似合ってるぞ！多分だけど！」

この時凜の頭の中では

「似合ってるぞー！」「似合ってるぞー！」「似合ってるぞー！」とレイの声に若干エコーがかかりながら脳内で再生されていた。

「ふ、ふん！どうせ私なんてストックなんでしょこの変態！」

「え？」

「さようなら」

「……ええー」

女子が髪型変えたら褒めるのが暗黙のルールじゃないのか？

名前呼びが許されて調子乗ってた、やばい、嫌われたかもしれない……

！

「似合ってる、なんて嘘よ……信じないんだから」

凜が教室のドアを開け中に入った時

『ツ！』

男子全員が息を飲んだ。あの朝日奈凜の夏服、そしてビッグテールの髪型は男子の胸を鷲掴みにした。

「(やっぱりみんなから見られてる……。どうせ似合わない夏服デビュードななんて思ってるのよ)」

自分の席に座りいつものように本を読もうとした時

「りーんちゃん、その髪型どうしたの？」

「髪型変えたなら連絡してよ！その髪型とても似合ってるよ！」

「ツ！似合ってる？」

「……も、か……もそう思う？」

「ツ！うん！うん！このーりんちゃんめーおめかしなんかしておってーモカちゃんを落とす気かな〜？」

「ね！わ、私は！私の名前ってなんて言うのかな!？」

「ひま、り？」

「あああああ！凜ちゃんが！凜ちゃんが名前前で呼んでくれた！うああああ!!」

「泣くほど嫌だったの……？も、もう金輪際辞めるわ」

「ぢがうのー！うれじぐで！うぐー！」

「……………」

嬉しい？名前で呼ばれて？

「……………」ガラガラガラ

不意にドアの開く音が聞こえて振り向くとレイが教室内に戻ってきたようだ。

ひまりの泣いている姿を見ると察したかのように凜に対してグツトサインをして見せた。

「ツ〜！」

嬉しすぎて今すぐはしゃぎたい気持ちを抑え凜はモカとひまりの手をギュツと握り

「友達なら名前で呼ぶ…れいに教えて貰ったわ」

「それと…友達だからもう胸も触らないよね…？」

『へ？』

「そ、それは別というかー」

「あーHRが始まるー」

「なっ!？」

頑張れ凜！友達なら胸を触るのも遊びの一環として捉えられるようになるまで頑張るのだ！

◆ ◆ ◆

今日から夏服が始まった…と話をしたことを覚えているだろうか。

俺が夏服になった…女子も夏服姿だ。その姿はもちろん目に入る。

羽丘の夏服はカッターシャツにニットのベストを着る。女子も同様同じ柄のベストを着ないといけない。

教室内はクーラーのおかげで涼しいけど登下校は暑くて大変だ。

「んじやー先週やった席替えの発表をするぞー席移動しろー」

そう言えば席替えなんかしてたな…俺はありりのことを考えてたから適当にくじ引いたから何番だったか覚えてないや

「今回は学年3位という好成绩を出し慢心しきって授業態度がクソみたいになってる生徒がいると批判が殺到してるらしい」

「学年3位って…俺か!？」

こうして俺は授業中絶対に寝ないようにしようと言うことで…

「まさかこうなるとは…!」

「れーくんの隣だーやったー」

「レイ君の後ろ…! 授業中にも匂いかげるかも!」

「ご、ご主人様の左隣か…首輪付けてリード持ってもらっても聞き手じゃないから邪魔にならない! なんて完璧な配置なんだ!」

「……………」

左右、そして後と変態幼馴染に囲まれてしまった…!

「いいなー私もレイ君の隣がよかった…」

「……レイの斜め後ろ、いい角度」

左右の斜め後ろはつぐみと蘭、そして前の席が

「……………よろしく」

「あ、ああよろしくな、凜」

「う、ん」

前が凜、そう、俺は何故かサークルメンバーに囲まれる席になってしまった。

「よかったな神崎…幼馴染達に囲まれてる中寝てしまったら問答無用叩き起されるからな」

「はは、先生はそこまでして俺を起こさせたいですか?」

「推薦」

「今まですみませんでした! 俺今日から生まれ変わります!」

「ならよし」

く、クソー! ただでさえありりと蘭の分のSSも書かないといけな
いのにー!

俺は夜の方が執筆が捗るから徹夜してるのに! 学校で眠れなかつたらやっていけねーぞ!?

あと! 先生は仲がいいから起こしてくれる。と思ってるかもしれない。
ない。

でも違うんだよ先生…俺が寝たら寝てる間に何かされるから強制的に眠れないんだよ…!

「えへへ」

「ぐへへ」

「はあ、はあ…」

「……………」

頬をピクピク痙攣させ、俺は1ヶ月間この席でやっていくのかと自覚するのであった。

「まあ今までの態度が悪かったんだよ、大人しく1ヶ月間我慢しろ」

「柊優ーお前が斜め前つてのが唯一の救いだよ」

「朝日奈さーん、よろしくね」

「……………」

「無視か…巴さんもよろしく」

「おう！よろしくな夜桜！あと授業中は後ろ向くなよ？絶対だからな」

「わかった、善処する」

「ふへー」

やめろ、そのドMに満ちた変な笑みを見せるな、運が悪ければモカや他の生徒にその顔見られらぞー！

「ぬあ！つ、つぐが後ろにいるから首輪付けられない…！」

「お前馬鹿だろ」

俺は呆れたようにそう答え、ふと視線を感じた斜め前を見る。

「まじねーわ」グツ

「由明日…：よろしくな」グツ

小さい声で言い俺は由明日と同様グツトサインを出した。

ちなみに遊と優亜だが教卓の目の前の席になっていて絶望したような顔をしていた。

安心しろ、俺の方が最悪の席だ。

「ふうー」

「ぎゃは!?!」

「レイ君、へへ、くんくん…：はあーいい匂い♥」

「ひ、ひまりー授業中に発情しないでくれ」

「真後ろなんて匂い嗅ぎ放題、つぐが席離れたら抱きついていい!?!」

「ここではやめてくれ」

「わかった！視聴覚室で抱いてね！」

ひまりが今言ってる抱いてね！は普通に抱くことか？それともエッチすることか？

わ、わかんねー、本当厄介な席順になってしまった。

頼むから早く1ヶ月が終わって欲しいと思う。

『……………』

蘭のやつは寝てる。まあ朝まで絵を書いてたらしいし？あと皆の前で俺にちよっかいを出したこともないし…2人っきりの時以外は大丈夫か

「れーくんこっち見てー」

「ん？…つて！お前！」

「じゃーん今日は紐パン履いてまーす、どう？解きたい？解きたいよね〜？」

「実はりんちゃんも紐パンだよー」

「も、もか！それは言わない約束だったでしょ!？」

「あつれーまさか今日も履いてたんだ〜」

「りんちゃんのエッチ〜」

「ツ〜！何あんたも黙ってるのよ!？」

「へ!?!いや、うんいいと思うぞ!？」

「何がよ!？」

大体教室でそんな話をするな！近くに由明日がいるんだぞ!？」

ま、まああいつはたとえ聞いてたとしても誰かに言う心配はないけどさ…だつてまじねーわしか言わないし

「それと文化祭実行委員を2名決める、男女それぞれ1人づつだとき、やりたいやついるか？」

『……………』

やりたがるやつはいないか、確かに毎年恒例あのブラック委員活動は給料が出でもおかしくないほどの働きぶりだ。

近日羽丘と花咲にて合同文化祭が行われるんだ。去年は適当にやり過ぎした記憶がある。ぶっちゃけ青春のいい思い出は実に言いにくい行事だった。

文化祭を楽ししと思ったのは高校一年の時だけかな？ 適当に過ぎたけどね

群れるのがダサイと思っていた当時厨二病を患っていた俺にとって協力して何かを成し遂げるって考えは全く、微塵もなかった。

そう、そんな嫌なことを強制的に思い出させる文化祭…

「(だから文化祭は嫌いだ)」

ひとつ言うのが今がそんなこと思っていない。サークルのメンバー全員と協力して夏コミを成功させようと思っている！

つまり俺のなかでは文化祭へ夏コミって考えになってるんだよ

嫌いなら文化祭に協力することはない、つまり実行委員にもならない。てかあいにく俺はコンビニのバイト、弦巻のバイト、SSの執筆がある。だからすまん、無理だわ

「いないか…朝日奈、お前こーゆうの好きじゃないのか？」

「好きじゃない、寧ろ嫌い」

「そっか、なら夜桜」

「別に構わない」

「よっし男子は決まりっつと」

柊優ー！お前そーゆうところだぞ!?

別に構わない？ そーゆうのはやめろお前！ 仕事とか押し付けられなくても断れないタイプの人間だろ!?

「羽沢はー生徒会か」

「はいー」

「となると…やりたいやつ挙手を」

『……………』 スッ

「……まじねーわ」

男子の実行委員が柊優と決まった途端クラスの幼馴染変態5人と凜を除く全女子生徒が挙手をした。

「正直者は先生大好きだぞーしかし人が決まって手を挙げるのはどうかと思うから…ぐうすか寝てる美竹にやってもらうか」

「なんでだよ」

俺は誰に聞こえない声でそう呟いてしまった。

突っ込むくせはなくしたほうがいいな…将来に支障が出るかもしれない

「じゃあついでだ、時間も余ったしクラスの出し物決めてくれー」

「はい」

柘優はそう答え教卓の前に立つ、しかし蘭は一向に動こうとしない。

寧ろさつきから寝たまま、俺は事情を知ってるから起こすことができない…。

「(寝てる間に勝手に決めるのもどうかと思うけど)」

寝てた蘭も蘭だけど先生も先生だ

あれ？俺の考えてって間違ってる？

「らーん、起きて〜」

「…：なに…：眠いんだけど」

「でも蘭実行委員だから前行かないと、ほら夜桜君待ってるよ？」

「え、柘優が？」

もろ下の名前で呼んじやってるよ、モカもひまりもあまり深くとらえてないようだけど

「は？あたしが実行委員…？夜桜と？」

「はは、何言ってるの？」

「何言ってるのはこっちのセリフだ、よくもまあー堂々と寝てたな、美竹ー？」

「ツ！先生！寝てるからっていくらなんでも勝手に決めるのではないかと！」

「わかったか神崎、今後寝てたらこうなるからな、学べ」

「いえっさー」

なるほど…：そういう魂胆だったのか、蘭、すまんが俺のために犠牲なっつてくれたらしい。

「無理です、あたしはあいつと一緒に実行委員なんて絶対嫌です！」

「全身の四肢がフリーでも絶対にいや！です！」

「夜桜ーお前美竹さんに嫌われすぎだろ」

「もしかして元恋仲とかか？」

「いやいや、夜桜一度も異性と付き合ったことないって言ってる」

「あー異性以外なら付き合ったことがあるような言い方してたな」

「別に俺は嫌われてない」

蘭の言いたいことは何となくわかる。

俺達のサークルに入ってただけでさえ忙しいのに柊優と同じく実行委員になつたら作業が全く進まない、と

「文句を言うな、寝てた自分が悪いだろ」

「……美竹さん、もしよろしければ私が変わってあげてもよくってよ？」

「えー本当にー嬉しいありがとうーで、君名前なんて言うっけー？」

だからその時々声音を変える変な癖はなんなんだよ、その甘ったるい声と喋り方やめろー！虫唾が走るわ！

「な！それはずるいよ！私だって夜桜君と一緒に委員会活動したい！」

「私もー！」

「私が先よー！」

「ここはじゃんけんで！」

一瞬にしてクラスが大騒ぎ状態、柊優がどれだけでもているか分かるってな

「俺は…嫌われ、て、ない」

「傷ついてるし…」

「あーうるさいぞお前ら、じゃんけんで決めろー！」

「よしー！」

蘭のやつは高らかにガッツポーズをして喜ぶ、やはりサークルのこともあるから必死だったんだろうか。

てか実行委員とかどうでもいいから早く決めてくれ、俺はうるさいのは嫌いなんだよ

「実行委員かー去年の先輩達見てやろうとは思わないよねーつぐには悪いけど」

「あはは、確かに去年は忙しかったからねー、今年はどうなるのかな？」

「ひーちゃんひーちゃん、れーくんがね、ひーちゃんが頑張って実行委員してくれたら抱きついてもいいだつてさ」

「おい！そんなこと一言も言っていないだろ?!」

「でも早く決めろよーって顔に出てたよ?」

「うう」

まさかモカにバレてるとは…こいつは何かといい俺が考えていることを的確に当ててくるからな、ちよつと距離置くか…身の危険もあるので！

「ちよつとじゃんけん勝ってくる、レイ君待つてー!」

「ちよひまりー!!」

じゃんけん大会の中に姿を消したひまり、数分後には

「はい！実行委員になりました上原ひまりだよー!よろしく!」

よろしく、と腕を上げ誰かにアピールするように手を振っていた。

「おお、上原さん相変わらずでかい」

「教卓前の席でよかったかも」

夏服のおかげでひまりの胸は綺麗に揺れる。目の前にいる遊と優亜は興奮してるだろうな

「……はあ、まさか本当になるとは」

「れーくん抱かれるの不可避ー」

「抱かれるって違う意味だよな!?!健全な意味だよな!?!」

「それを決めるのはれーくん次第だねー」

「勘弁してくれよまじでー!!!」

俺はは机に伏せて困った声で悲鳴をあげた。

流石に教室では叫ぶことはできないからな

「あ、今日は紐パンだけど面積は少ないから生尻つけてますよ」

「ひっ!?!」

机から急いで距離を置きリュックからタオルを取り出してゴシゴシと顔を拭いていたレイであった。

DMなペットと夜道を散歩したことありますか？

放課後、本日はメンバーのバンド活動が休みのため俺達は視聴覚室でサークル活動をしていた。

「みんなお待たせー！お菓子買ってきたよ！」

「わーい、香澄ーパンは？」

「沙綾から貰ってきた！」

「持つべき友はパン屋の娘のバンドメンバーですな」

「沙綾さんと仲良ければよくないか？」

そう言えば沙綾さんと最後に会ったのは初めて会った日だけだな
…ライブで一方的に俺から見たことはあるけど喋ってない。

「(久しぶりに喋りたいな)」

ありりのこととか香澄から変なこと聞いてないか確認したい。

「おーい朝日奈、お前の好物おにぎり」

「……ありがとう」パシユン

「最後まで話聞けよ……」

肩を落とし凜を軽く睨むありり、少し屈んでも垂れるイメージが一切ないありりの胸は余程ハリのある胸なのだろう。

「……的なこと考えてるよね、レイ」

「……………そんなことない」

「ふん！」

「ひっぎっ!？」

「あんたの彼女はあたしでしよ？」

「ごめんって、蘭も形いいだろ！」

「ちっ、あっそ、絵に集中したいからあっち行って」

理不尽すぎる！確かにありりの胸を見てたかもしれないけど蘭が怒る必要ないだろ!？」

「はい、レイ君！執筆お疲れ様です！」

「燐子さんありがとうございます」

燐子さんは俺に飲み物を渡してくれた。コーヒーではなく普通に炭酸飲料、学校で炭酸を飲めるとなれば少し嬉しいな

「あの俺金払いますよ、いくらですか？」

「大丈夫です！カードがありますので！」

「だから気安くクレジットカード見せないでくださいよ……」

あとクレジットカードだからって金が無限にあるわけじゃないだろ

「ちなみにですけどそのカードの上限っていくらなんですか？」

「んー100万ぐらいですかね」

なんも言えねー、燐子さんの親ってなんの仕事してるんだ？稼ぎすぎで怖いわ

でも気軽に燐子さんに両親の話は聞けないか、この前話を聞いたところ両親と仲のいい雰囲気ではなかったしな

「ではお言葉に甘えて……次は俺がみんなの分払うのでレシートください」

「私現金でお金払う習慣がなくて……」

「その時はありりにでも払わせてくださいよ！」

タクシーでこちらに来る前にコンビ二で差し入れを買って来るってことを今後しなければ一番平和なんだけどな

「みんなお疲れ様ー」

「ひーちゃんが帰ってきたらおつー」

「レイ君ー」ポフ

「お、おう」

フラフラ歩きながら俺に抱きついてきてはものすごい音が聞こえるほど息を吸いはあーと大きくはいていた。

胸に顔を押し付け何度と同じ仕草をするひまりに対して俺は苦笑いをしながら眺めていた。

「お、おいひまりちゃん!?なにレイに抱きついてんだよ!？」

「レイ君が実行委員の仕事頑張ったら抱きついていいって……はあ、いい匂い、えへー！」

「え、えつとひまりさん？初日からそんなに仕事はないと思うんですけど……？」

「夜桜君とこれからの流れについて話をしてたの！」

「なるほど…」

確かに仕事？なのだろうか…。うん

「くっ！約束なら仕方がないか」

「ひまりも面白いだろ？ほら、俺執筆しないとイケないからな」

「……はーい」

ぜ
一気にサークルメンバーが増えたからな…相手をするのが大変だ

「とりあえずありり、蘭、燐子さんと俺は各自で作業を」

「モカ、ひまり、凜、香澄は好きなこととしててくれ」

「じゃありんちゃーん隣の部屋で遊ぼうよー」

「いやよ、私はやることがあるから隣の部屋は私が貸し切るわ」

「凜ちゃんその台本なにー？」

「……あなたには関係ない」

香澄に聞かれた凜は冷たくそう答え隣の部屋に籠ってしまった。

台本持って行ってたし…オーディションの練習でもしてるんだろ
う。

本当は今日から俺も練習相手になるはずだったのに…すまん、凜

「凜ちゃんどうしたのかな？」

「……まあ時が来たら話すよ」

「私凜ちゃんに嫌わてるのかな…？」

「戸山さん、凜ちゃんさんは難しい方なので…あまり気にせず積極的に声掛けてくださいねー」

「あたしからも香澄はそれとなくいいやつだって話してやるよ」

「ううー！有咲ー！」

「だから抱きつくなくてえー!!」

相変わらずありりと香澄は仲がいいな

「あ、そう言えばれーくん、なーちゃんが数日後に帰ってくるだつて
さ」

「なんでお前に連絡してんだよ姉貴」

「あー！ゼロ君のお姉さんの話？確か小説」

「香澄ちよつと来いやー!!」

香澄の口を塞ぎ視聴覚室の隅っこに行き燐子さんには俺の姉貴が神奈であることは黙ってて欲しいと説明をした。

「わかった！なんでか知らないけど黙っとく！」

「それでよし」

これで俺の姉貴が神奈であることが知られなくてすむな、香澄が俺の姉貴の存在知っていたことを忘れてたぜ

「そう言えば皆さんの家族構成ってどうなってるんですか？」

俺の姉貴が話にでてきたからだろうか？燐子さんが各々の家族構成について質問をしていた。

「モカちゃんは一人っ子でーす」

「私はお姉ちゃんがいるよ！今は家にいないけど！」

「あたしも一人っ子だな」

「私はあつちゃんがいるよ！あ、ちなみに羽丘の生徒だから！」
「……………」

蘭のやつは黙って黙々と絵を描く、か

「蘭は一人っ子だったよな？」

「……………」

「俺は姉貴がいる、モカとひまりが言うなーちゃんってやつだ」

「滯奈さんすぐくっついてくるから少し苦手」

「なーちゃんは蘭のこと好き好きなんでねー」

弟の俺ですらなんで姉貴が蘭のことを好んでいるのかは知らないんだ。本当なんでだろうな

「私も一人っ子ですな！」

燐子さんは何となく予想ができてたよ

あとモカとひまりに弟がいたら襲われそうだな、いなくて正解だよ
「りんちゃんはー？」

「凜ちゃん隣の部屋いるからちよつと呼んでくる！」

そう言いモカとひまりは隣の部屋へと足を運んだ。

「ふぎやあああ!!？」

なんて声が聞こえだし少し涙目になりながら凜が登場した。

今日の午前中に友達であると認識したのにこんな目に会う凜に対

して可哀想という思いは少なからず俺の心の中にはあった。

「何よ呼び出して」

「りんちゃんの家・族構成知りたくてさー?」

「家族構成知ってどうするのよ」

「別に教えても減るもんじゃないだろ?」

「……市ヶ谷さんがそう言うなら」

ありりとは昔同じ音楽教室に通ってたって話らしいけど苗字呼びなのか

となると本当いつぶりに妹以外の人を下の名前で呼んだんだ?

てか妹いるじゃんか!?

「私には両親と妹がいるわ」

「妹ですか?」

「ええ、私よりも可愛い、いや世界一可愛い可愛い私の唯一の自慢の妹よ」

「あー! 私思い出した! 今年1年の首席の子! 入学式の時の1年代表生徒だよ!」

「……え、入学式で1年なんか話してたっけ?」

「話してないね」

「我ら居眠り集団は聞いてない感じだねー」

蘭、モカ、そして俺は入学式の時堂々と寝ていたため誰がなんの話をしてたかの覚えてないってな

「朝日奈楓凛よ、みんなが知ったところでどうって話だけど」

「確かに知っても絡まないしな」

「……まああんたは興味持たないでしょうね」

「?おう」

何を根拠に興味を持たないと思ってるだろうか?

とりあえず絡むことなんてそうそうないだろう。

「可愛いってひーちゃん顔見たことあるー?」

「んーあんまり覚えてないかも」

「流石ひまり、記憶力ないね」

「ちよつと蘭! なんでそんなこと言うの!?!」

「事実だろ」

「ツ〜！レイ君もーう!!」ポカポカポカ

「おーなんだこの懐かしいやり取りは、今は何かあればエッチしようって言い出す飛んだビッチちゃんだからな」

「とりあえずそろそろ執筆戻るわ」

「あたしも」

「あーあたしも！香澄！みんなに迷惑かけんじゃねーぞー！」

「わかってるって！ね！凜ちゃん何して遊ぼつか！」

「遊ばない、私は忙しい」

「凜ちゃんさん！私絵は描き終わってるので手伝いますよ！」

「……りんこ、よろしく」

「はっ！凜ちゃんさんが名前で呼んでくれた…!?!」

モカとひまり同様名前で呼ばれた燐子は同じような反応をして見せたのであった。



「起立、礼、ありがとうございます」

『ありがとうございます』

数日後、俺達2年A組は無事に実行委員も決まったということ放課後に話し合う必要もなくスムーズに帰宅できるようになっていた。

「レイごめん、今日バンド練習だから」

「1人で執筆できるー？モカちゃんが全裸で応援してあげよつか？」

「私に抱きつかれてなくても描ける？」

「蘭、わかった、今日中には書き終わるから夜にデータ送る」

「ん、わかった」

モカとひまりを完全にスルーして俺は蘭のみに返事をした。

「もーうれーくん釣れないなー」

「うるさいぞ、早くバンドの練習してこい！」

「帰ったらエッチしようね！」

「教室でそんなこと言うなよ!?!」

誤解されたら困るだろ!?!

変態幼馴染の3人はその後教室を出ていく。

「私も今日は別件がある」

「わかった、それよりごめん？今週から手伝うはずだったのに…」

「構わないわよ、れいはれいにしかできないことがある、またね」

「お、おう」

凜が最近優しい気がするのには気のせいだろうか…？

「モテモテだな、レイ」

「やめろって幼馴染に話しかけられたただけだろ」

「朝日奈さんはどうなんだよ」

「…凜は友達だ」

「そうですかい、まあその幼馴染はアサシン候補なんだろう？」

「まあな」

アサシン候補、というのは俺に告白をしてきた謎の少女（紙袋を被ってたため素顔知らない）をさす名前がアサシンなのだ。

「実は最近はかなり絞れてるんだ」

「へーそれはなんで？」

「アサシンが俺達のサークルに参加するって言ってたんだよ」

「となると既にいると？」

「それがわからないんだよ…既にいるかもだしまだ来てないかもだし？それに彼女は嘘つき屋さんなんだよ」

「恥ずかしがり屋さん、嘘つき屋さん、なんかすごいな」

「だろ？俺の彼女凄いだろ、あはは」

嘘つき屋さんってのがかなり痛いな…彼女が言ったこと全てに疑いを持たないといけないとなると何が本当に嘘かわからない。

「とりあえずまだ絡んでないガールズバンドメンバーに話しかけるしかないか」

「そうだな、つと俺は久しぶりに部活も休みだし家に帰ってゆっくりしとくよ」

「んじゃ一緒に帰るか」

「あーすまん先約がある」

「そか」

「ああ、じゃあな」

柊優と別れた後俺は特にやることがないのに放課後一人で教室に残っていた。

「彼女、か」

アサシン、俺に告白してくれたあの子は今どこで何をしてるのだろうか。

なんて考えても意味がないことは考えても意味がない、時間の無駄だ。

「はあ、帰ろう…」

パソコンが入った重いリュックを背負い俺は教室を出て行ったのであった。

帰り道特に話すようなこともなくいつも通りの日常、路面電車に乗って家に帰る。

本当何もなかった。

このまま何もなく一日が平和に終わればいいんだけどな…

「ただいまー」

「……………」

誰もいないからただいまと言ってもおかえりと返してくれる人はいない。

姉貴だけどおかえりと言われたら少しは嬉しいだろ、人間結構ちよろい生き物なんだぜ？

リビングで執筆を初めて気づけば太陽は沈み、お月様がこんばんはと挨拶をしていた。

「んあー、飯作るか」

背中の中の音を鳴らしソファから立ち上がりキッチンに向かう。無難にチャーハンを作り、食べ終えお風呂に入ろうとした時だ。

「♪」

あの固定電話が鳴り出した。

姉貴か？と思いつながら俺は受話器を取る。

「もしもし、神崎です」

「ご主人様！あなたの忠実なるペットからのお電話になります！」

「忠実なるペットなら今すぐこの電話切れ、言うことが聞けないペッ

トは嫌いだぞ」

「そんなペットなあたしにはキツイお仕置きを！」

「……………」

今すぐ電話を切りたいと思った。

まさか巴からこんな電話が来るとは…さては今家にあこや両親がいない感じか？

「なあレイ、今から遊ばないか？」

「ッ！お前なんだよ…急に態度変えんな」

「こう言えばご主人様遊んでくれるかなって！あはは！」

「……残念なやつだな、お前」

こんなのが男気のある女の子だと思ってた俺は何を根拠にそう思ってたんだろうか

昔なら確かに巴の姉御！って思ってたけど今は思わない。ドMだ、ただのくそドMだ。

しかも自分のことペットとか言い出したぞ、本当に頭大丈夫か？

「遊ぶって何すんだよ、俺は結構忙しいんだぞ？」

「それは会ってから考えましょうご主人様！」

「……………」わかった、いつもの公園な、遅刻したらお仕置だぞ」

「はい…ご主人様あー！」

はは、誰が遊ぶかばーか！

まず考えろ！集場所なんて決めたところで行かなきゃいいんだよ！しかもこんな太陽が沈んだ時間から遊ぼうとも思わんわ！

「俺はお風呂でレッツパーリーだ！」

入浴剤を手に取り俺はお風呂場へと向かう。呑気に鼻歌歌いながらシャワーを浴びていると

「ご主人様！迎えに来ました！」

「……………」は？」

全裸で腰に手を当てシャワーを浴びていた俺の目の前には制服姿の元健全幼馴染ことドM、宇田川巴が頬を赤らめながら登場した。

「んぎやあああああ！な、なんで俺の家に来てんだよ!?!てか早くないか!?!」

俺は急いで風呂桶で息子を隠し巴に文句を言った。

「向かいながら電話してたから!」

「お前断られた時のこと考えろよ!」

「ご主人様背中を流します!」

「えーい!入ってくんない!出てけ!」

「一度裸で絡んだ仲じゃないですかあ♪」

「やめろ!お前に音符は似合わんわ!」

雌豚のような顔をしながら音符を出す。以前の巴ならお前酔ってんの?みたいな質問できたけど今は違うんだ。

こいつはもう完全にドMの変態不審者さんになってしまったのだ。

「家に勝手にはいんなよ、警察呼べば俺勝てるぞ?」

「ご主人様とペットの関係だと怪しまれないはず…?」

「そんなこと言った時点で怪しまれるわ、俺の人間性が疑われるからやめてくれ」

今は腰にタオルを巻き巴と向き合い話をしていた。

タオルは巻いているが裸を見られるのはちよつと恥ずかしいな…って宿泊研修で見られたけどさ

「とりまきたならしゃーない、で?何して遊ぶんだ?」

「ご主人様ならそう言ってくれると信じてました!」

うわ、何このいかにも超嬉しそうな反応、まじで子犬が遊ぶ時の顔してんじゃんこいつ

俺とてここまで来て無理やり帰すようなことはしないさ、少しは遊んでやっても…いいのだろうか?

「ではさっそく」ゴソゴソ

持ってきたリュックの中を漁り何やら取り出した。

「これをアタシにつけてください!」

「……お前まじか」

何を取り出すかと思えば犬の首につけるような首輪を取り出した。首輪につけられているネームプレートには可愛らしい字でもええとひらがなで書かれている。

俺は頬をピクピク引き攣らしながらその首輪を受け取ったが…こ

れからどうすればいいのだろうか…!?

「付けてください!」

「付けて…何するの?」

「散歩!」

「……………ですよね!」

レイがそう答えた瞬間、腰に巻いていたタオルはが丁度よく緩みレイの目の前に犬座りしていた巴の目の前にはレイのレイが目の前に広がっていた。

「ご、ご主人様…しゅごい、積極的だ…!」

「馬鹿!ちげーよ!」

急いで巻き直し脱衣場から逃げるように出ていくレイであった。

◆ ◆ ◆

時刻は夜の9時、通行人も車の通りも少し少なくなったところで俺は手にリードを持ちペットと散歩をしていた。

「えへ、えはは!ご、ご主人様!今アタシは猛烈に感動してますう!」

「やめろ!大声出すな!」

そう、ペットこと宇田川ともえと夜道を歩いていて

ともえの首には首輪が着いておりそれに繋がるリードを持っているのは俺だ。

「(何やってんだよ俺は!)」

流されるがままに俺はこいつのご主人様となり、夜道を散歩するという警察に見つかれば1発アウトの状況になっている。

いつものお巡りさんが現れないか若干心配だ。

「ご、ご主人様が本当に付き合ってくれるなんて!」

「……………今回だけだぞ、ったく!」

俺だっけ好きでこんなことをしてるわけじゃないんだ。

あの後俺は絶対に嫌だと否定しまくったがしないと帰らないなんて言い出したんだ。

別に泊まるのは全然いいんだ、しかしだ。

しかし俺の童貞が勝手に奪われる可能性も無きにしも非ず。俺は自分の身を守るためにドSご主人様、としてペットともえと散歩する

道を選んだのだ。

それにだ、もし俺の部屋でともえとエチエチなことをしてみろ、つぐみに知られて録音されてともえの喘ぎ声とか色々あーあーあー、考えるだけで嫌になるわ！

「ツ！おいともえ、目の前におじさんがいる！隠れるぞ！」

「え、やだ、見られたい」

「黙れクソペット！」

「ぬあー！なんて、なんていい響きなんだ…！」

「こんな言葉で興奮すんな！」

「ぐえ！はあ、はあ、ご主人様からの事実首絞め！きつもちいー!!」

「ダメだこいつ!？」

リードを引つ張り裏路地に連れて行ったがその痛みですら興奮してしまふ。

とんだ変態DMさんのようだ。

「今気持ちいいーって聞こえた気が…？まさか最近多発している露出魔が近くに…なんているわけないかー帰ってAV見よ」

通りすがりのおじさんがなんか変なことを言っていた。あとAV見よって…それは心中で止めとけよ

「ご主人様AVって？」

「アニマルビデオだな、もしくはアンパンマンビデオだ」

「アナルビデオじゃない!？」

「お前知ってるだろ、絶対」

知らんやつからそんなセリフ出らんわ、てかあな…とか、お前そつちが好きなのか？

待て待て待て、そのうちそつちの穴でならしてもいいぞ、なんて言い出さないよな…？

「な、なあもういいだろ？十分スリルな気分味わっただろ？」

「まだだ！まだ気持ちよくなれる！」

「何言ってるんだよお前!？」

もう俺のツツコミのパターンも少なくなってきたぞ!?!そろそろ終われよ帰れよ帰ってくれよ!?

頼むから俺をこれ以上ドSみたいな人にさせないでくれ！てかドSみたいな言葉責めもしてないけどさ!?

そんな時目の前に野良犬がとことこ歩いてきた。

電柱のところをウロウロしたかと思えば足を上げ尿をたしていた。

「……………」スツ

「やめろ、尿をたすな」

「でもペットなら」

「後始末する飼い主の気持ちを考えてことないのか!？」

絶対人に言うセリフじゃない。

俺は恥ずかしくなり両手で顔を隠していた。

小刻みに震える俺は周りから見られたら泣いているように見えるだろう。

それもそのはず、幼馴染が犬のように尿をたそうとしてたなんて誰が想像できるだろうか

「……………」チヨンチヨン

「ん？なんだよ、ともえ、帰る気になつてくれたか？」

俺はともえが話しかけたと思えば後ろを振り向いた。すると

「ま??まじねーわ」

「ツ!!??」

由明日のやつが片手に携帯を持ち俺に話しかけてきた。

よくよく考えればともえは前にいるから後ろから話しかけられることなんてない、か

「まじねーわ」

「由明日落ち着け！これにはマリアナ海溝よりも深い話があるんだ！」

腕をプルプルさせながらどこかへ連絡しようとしていた由明日の手を取り止める。

画面を見たらあの三馬鹿グループにLINEをしようとしてたよ
うだ。

よく見たら由明日のやつはLINEでもまじねーわしか発して
なかった。

「……蒼井？」

「ツーま、まじねーわ……！」

秘密を知られてしまったともえは由明日に対してどす黒い声を出しながらゆっくり近づいていく。

首にはともえと書かれた首をつけそのリードは俺が握りしめている。

なんともシニールすぎる光景、すげーや

ちなみに蒼井つてのは由明日の苗字だ。

「お前他人に言ったら……どうなるかわかるよな？」

「ままままじねーわ……！」

「アタシとご主人様との関係ぶち壊したら……タダで済まないからな」

「ひっ！ま、まじねーわ！まじねーわ！」

これまた凄い光景だ。

ドMが由明日に対して壁ドンを行い、膝を由明日の股の間に置きつつでも息子を破壊できそうな雰囲気がありよりのありだった。

「……ともえ、由明日は他人に言うやつじゃないだろ」

「だけどアタシとご主人様の関係が知られたら今日みたいな散歩ができなくなる……！」

「そうだな、じゃねーよ！もう二度とせんわ！バレたんたぞ！する訳ないだろ！」

ただできえバレなきやいいや、なんて思いながらしてたのに！

由明日に知られたのが幸이었다。と言うべきだろうか

「とにかく明日話は説明するから、絶対対あいつらに言うんじゃないぞ！」

「……………」

まじねーわも言わず由明日は首を縦に振る。本当に大丈夫だよな？まじねーわしか喋れない、いや喋れないからな

由明日は走って帰っていく、てかあいつなんでこんなところうついていたんだ？

理由を聞いたところでまじねーわしか言わねーし、まあいいや、そこは気にしなくてもいつか

「ご主人様！次は何をしましょうか！」

「お前な…もう懲り懲りだ、帰ろう」

「帰ったらAVみたいなことするんですか!？」

「やっぱお前知ってんじゃないか!!！」

夜遅くに叫んだレイの声を近隣住民の数人には聞こえていたらしい…。

次の日

学校に行くも由明日も巴も普通に学校生活を送っていた。

どうかと思うぞ？あんなことあったのによく平然と過ごせれるな…俺は昨日のことが由明日以外に知られてないか不安なんだが

後巴なんだけどあいつはもうアサシンじゃないと信じたい、なんせあんなドMペット志願者が恋人とか…俺はやってけないぜ

そんなこんなで今日1日は恐ろしいぐらい平和な1日になってしまった。もう帰りのHRが始まる頃だ。

「えーちよつとプリントあるから、委員長配ってくれ」

担任が委員長にプリントを渡しクラス全員に配られた。

ちなみに先頭に必要枚数渡し後ろに回すってやり方で配る。普通の配り方だな

「……はい」

「いや後ろ向いて渡してくれよ、嫌われてるかと思うだろ」

「……このやり方が落ち着くのよ」

「さいですか」

前の席の凛は後ろを向かず腕だけ回して俺にプリントを渡す。

その後受け取ったプリントから自分の分を受け取りひまりに渡す。

渡す際手を思いつきり握ってきたから引き離しプリントに目を向ける。と

「ツ！はっ!?!」

そのプリントを見て目を疑った。最初は何かの間違いじゃないかと…。

「最近不審者が多発してるようだ、昨日なんかは男女のカップル？が首輪を女性につけて散歩？してたらしい…なんだこれは」

「後は露出魔の目撃情報も書いてあるからよく目を通せよ、特に男子、なんでも露出魔は女性らしいから気をつけろよー」

「……まじかよ……!」

昨日の今日だぞ?!もう出回るのか!てか露出魔ってモカのことだろ?!

「えへ、カップルだってさ、ご主人様♪」

「黙れ!そこじゃねーだろ!」

「レイ君大声出してどうしたの?あ!そう言えば昨日帰ってくるの遅かったよね…?もしかしてこれレイ君なんじゃ?」

「な、ナンノコトヤラ」

「あっはは!だよね!違うよね!ごめんね?勘違いしちゃって」

「はは、困っちゃうぜつぐみ…!」

なんでこんな鋭いんだこの子!?!てかしれつと帰ってくるの遅かったよねとか言うな!誤解されるだろ!

「違うんだ、俺は違うんだ…!俺は仕方がなくやっただけなんだ、だから違うんだよ…!」

ぶつぶつ1人で呟いていたら

「まじねーわ」ポン

由明日が肩に手を置き余った手でグッドサインを出していた。まるでドンマイと言うかのように…

「だから違うんだってえええー!!」

『??』

レイのその一言を聞いた時クラスメイト達はどうした?って反応をしたが真実を知っているのは巴と由明日だけだった。

「ねえこれってモカのことじゃない?」

「それ、あんた普段なにしてんのさ」

「いやいや、モカちゃんの体見れて喜ばない男子なんているわけないじゃーん?」

『んー??』

蘭とひまりの頭の中にはレイの顔が浮かぶのであった…。

女子に自分の下半身を押し付けようと思ったことありますか？

文化祭、とか言う学校行事が始まろうとしてる中俺はそんなことを気にもとめず今日も今日とて視聴覚室でSSの執筆作業をしていた。

蘭、ありり、この2人がサークルに参加してくれたことで1000部問題は解決した。

しかしだ、新たに本を作るとなるとSSを書かなければならい。

春乃、夏美、のSSは蘭、ありりの分は書き終えた。燐子さんみたくダメ出しはしてこないけど…俺の技量が成長したと捉えていいのだろうか？

秋音と冬香は絶賛執筆中だ。

三女の秋音は何かと晴太に気を使いなかなか2人だけでお話がでないシャイな子だ。

そんな彼女ならではの話を考えないといけなが…ぶっちゃけシャイな子が内心どんなことを考えて接してるのか分からんよな

と、そんなことを考えながら俺は視聴覚室で執筆を行ってるんだ。

「ねえねえレイ君ー」

「なんだひまり、今忙しいんだ」

視聴覚室で俺一人で作業してると思った？残念、なんでか知らないけど上原ひまりこと匂いフェチのビッチちゃんが目の前に足を広げ椅子に座っていた。

女子がしていいの座り方じゃないと思うぞ？下着もろ見えてるし…。

「あー今パンツ見たよねー？もう、素直に見たいって言えば脱ぐよ？そしてエッチしよ♪」

「モカじゃあるまいし脱ぐとか言うな」

「てかなんでお前いるんだよ、今日は活動休みだろ」

今日はRoseliaがバンド練習のためお休みになった。にもかかわらずこいつは今俺の目の前にいる。

俺はー今日は視聴覚室で執筆したい気分だったからいるんだ。

そしたらこいつも後からやってきたってわけさ

「さあーなんでだろうね」ヌギヌギ

ひまりのやつはベストを抜き出し胸元のカッターシャツのボタンを外し手で風を送るようにパタパタと扇いでいた。

「おっぱいでかいと谷間に汗溜まるんだよ?」

「……それはご苦勞様です」

「あと肩こりがすんごいの、こないだ燐子さんと有咲と凜ちゃん相談しあってたよ」

「へ、へえーそうなんだ」

何その巨乳集団、やば

「……レイ君顔埋めたい……?」

「なっ!馬鹿言うなよ!俺はお前みたいに汗の匂いが好きなやつじゃないんだぞ!」

「でもおっぱいは好きじゃん!」

「……ひ、否定できないのがキツイ!」

何を隠そう、俺神崎レイは子供のころありりにおっぱいは大きい方が好きだ、なんてことを言っていたらしい。

らしいと言うのも本当にもんな記憶がないんだ。でもありりはそれを聞いて俺のためにおっぱいを大きくさせたとのこと

聞くところによると毎日マッサージをしてたとか、なんなら凜もそのマッサージせいで大きくなったとか

「最近なんか素直だよねーはい、レイ君の大好きなおっぱいですよー」

「わーい、ありがとう、ばぶばぶ……じゃねーよ!誰が食いつくか!」

「だ、だいたいお前前から思ってたけどさ……」

「??」

前からずっと思ってたことを今2人つきりという事をいいことに俺はひまりに聞いたでした。

「お前俺に自慰行為見られたよな……?恥ずかしいとかないの?」

「……忘れてた!」

「忘れてたんかい!」

あんなこと忘れられるわけないだろ!? 幼馴染の自慰行為とか見たことも聞いたこともなかったんだぞ!?

「でも女子ならみんなやってることだからねー気にしなくていいよ!」

「は、はあ?」

「ほら、前のレイ君の隣の席の子もやってるってこの前話したよ?」

「女子達の普段の会話ってなんなの!」

「やばい、俺のクラス変態なやつしかいないのか!」

「そういうレイ君はー? しないのかな?」

「…俺は最近してないな、何かと忙しいし」

「最近はってことは前はしてたんだー」

「うう」

馬鹿なくせに妙に気づくな…なんだ、こんな話して何が目的だ?

「悪いがエッチは絶対にしないぞ、俺はする相手を決めてるんだ」

そう、アサシンと言う未来の彼女にな! 俺は彼女に絶対童貞をあげると誓おう!

「それって…私のこと?」

「何馬鹿なこと…はっ!」

いや待て待て待て、待て? どゆこと? 遠回しに自分がアサシンですよって言ってるのか?

「おーい、レイ君?」

それともなんだ? ビッチだから自分のことと勘違いしてるのか? だとしたらお門違いだ、誰がお前なんかと…

「あれー? 返事ないな…レイ君ーほら、おっぱいだよー」

「なっ!」

俺が考えている中ひまりは椅子から立ち上がり俺のパソコンをどかして机の上に乗る俺の顔を自分で自分の胸に押し当てていた。

た、確かにひまりの言う通り汗で濡れている。てかそれだと俺の顔が汗まみれになるんですけど!?

「ん! んんん!」

「ひゃん! は! 鼻息がくすぐったいよ、あはは」

「んんんん!!!」

俺はひまりを抱きしめ無理矢理離れるよう体を離す。

こんな時思っではいけないけど…ひまりの体は本当に肉付きがい
いなーと思っしまいました。

「ぶはーや、やめろお前!」

「えーでも好きなんでしょ?」

「す、好きとか嫌いとか今は関係なくてだな…」

なんだこの光景、いつも上から見下ろしているひまりが今は上にい
る。

そしてまるで可愛い動物でも見るかのような表情で俺を見下ろす
ひまり、こいつは本当に俺の匂いが好きっただけでこんなことするの
か?

「ところでレイ君質問していい?」

「今するか?」

「レイ君…今勃ってるよね?絶対」

「……………」

はい質問ーあんなことされて元気にならない男子なんていません
よね?多分その人は病院に行った方がいいぞ、いやまじで

「初夜待ったなし!大丈夫!いつでもできるように私ゴム買ってきて
るから!」

「……………なんで持ってるんだよ」

「モカがバイトしてる時に買った」

あの野郎!まあ確かにゴムには年齢制限とかないけどさ!?!だか
らって普通幼馴染が買おうとしてるんだ、止めるだろ!?!

「悪いな、実は勃ってないんだ、嘘ついた」

「え、今ので勃ってないなんてレイ君そろそろやばいよ…?」

「なわけないだろ!元気だっつの!?!」

あ、そうくるの!?!そっちの心配されちゃったよ!?!

てかさ、毎回思うんだけどさ

「なあひまり、ちよつと机から降りろ、そして俺の前に来い」
「?わかった」

つくづく思うぞ、これはどうかと

「あのなひまり、お前は気軽に俺に胸を押し付けたりするけどな？それは俺がお前に性器を押し付けるようなもんだぞ？」

「……それがどうしたの？」

「そ、それがどうしたのだったって…？」

いや！普通ダメだろ！なんでそこに気づかない!? あんなもの押し付けられたら嫌な気分になるだろ!?

女子の胸は柔らかいからいいけどさ！

「大体私押し付けられことないしわからなんだよねー」

「ツ！ちよつと冷房聞いてきたかな…ベスト着よつと」

ひまりは少し寒がるように身震いした後俺に背を向けベストを着ようとりユツクがある方に向かった。

そんな中俺の中にはとある感情が浮かんできた。

「(わからないならしてんじゃねーよ!?)」

相手の気持ちを考えてから行動しろやこのポケナスが！なんなら今から教えてやろうか！

「ふっふふ、ふははは！」

「レイ君どうしたの？」

「もう我慢の限界だ、今日のレイさんはちよつとバイオレンスだぞ…！」

「何言ってるの？」

俺は後ろからひまりに抱きつこう…とした。

本来ならひまりに無理矢理俺の息子を押し付け、ひまりが俺におっぱいを押し当てるように押し返してやろうと思った。

しかしだ！もしここでガチ反応されて学校に知られたら俺は即退学、大学進学なんて夢のまた夢になってしまう。

そもそも男子と女子ではこうゆう事件男子の負けがほぼ決まっているではないか…なんでこの世界は男子に厳しいんだよ!?! おかしいだろ！

俺は何もしないまま椅子に座る。

やめよう、もう俺に勝ち目はない。

「レイ君本当にどうしたの？」

「あーはいはいなんでもないなんでもない」

「変なレイ君」

「お前に言われたくないわ！」

あー！あんな変なことを一瞬でも考えた俺は大丈夫なのだろうか！将来そう言う問題起こしそうでなんか人生が不安になってきた。

「ところで本当に相談したいことがあるんだけどいいかな？」

「……ああ？なに」

「その、恋の相談と言うか……」

「……え、まじで？」

この流れでそんな相談します？いやいや、は？まじかよ

てかそれってひまりに好きな人ができたってこと？だとしたらひまりはアサシンじゃなかった……？

「実はね、レイ君」

「お、おう！」

「私ね」

「……ああ！」

「私……人生で一度も告白されたことないの！」

「……」

俺は無言でパソコンを閉じ、リュックの中にしまう。そしてリュックの中にある飲みかけのオレンジジュースを飲み干し、数秒経ってそれから返事をした。

「……はあ？」

「だってだって！男子みんな私のおっぱいに釘付けじゃん！？なのに告白してこないんだよ！」

「釘付けじゃんって気づいてたのかよ」

「当たり前じゃん！ちなみにだけどレイ君が高一の時廊下ですれ違う度に胸を見てたのも気づいてたよ」

「……それは違う、お前の勘違いだ」

「私の胸に顔当てて勃起してたのはどこのどの人かな？」

「あ、はい俺ですね」

勝てねー！そんなことを言われたら勝てるものも勝てないだろ！
知られた時点で俺の負けだあー!!

「じゃあなんだ、男友達紹介しろってか？」

「いや、レイ君に告白して欲しいかな」

「……ひまりー好きだー好き好き好きだー、大好き、ひまりのおっぱい
大好きです」

「おっぱいじゃん!?あと棒読みすぎ!」

「当たり前だろ！好きでもないやつになんで告白するんだよ！」

たく、何言い出すかと思えば告白されたことないだ？

知らんわ、俺も人生で1回しかされたことない。

「そう言えば前にレイ気になる人いるみたいな話してたよね？」

「ん？ああ、いたな…まあ今はいい交友関係だけだな」

「へー振られたんだ」

「振られてねーし!?てか告つてもないから!？」

「逃げたんだ!」

「そういう意味じゃねーよ！普通に仲良いわ！なんなら最近連絡取れ
なくてドライな反応されたわ!」

友希那さんと連絡取れてないからな…本当そろそろ携帯買い直そ
うかな？また友希那さんに何か言われるかもだし

そう言えばリサさん何かと友希那さんとの関係を探ろうとしてる
？みたいだからな…今度また話してみるか

「大体お前のルックスなら告れば彼氏ぐらいできるだろ」

「……私可愛いのか？」

「いや可愛いだろ、鏡見ろよ、あと体もエロいだろ」

「ツ〜！そ、そうなんだ…レイ君そんな風に思ってたんだ…ならエツ
チしない!？」

「お前頭大丈夫か？この流れでエツチしようとはならんだろ」

「彼氏はレイ君とエツチした後を作るよ！私可愛いんでしょ？急がな
くてもすぐに作れるよね!」

「……そうなんじゃね？知らんけど」

可愛いのは事実だしな、悔しいが俺の幼馴染全員顔面偏差値クソ高

いからな…高一の時男子からガチで嫉妬されたことも何度ある。

「そろそろ帰るか、って雨酷いな」

「私傘忘れたんだー、レイ君と相合傘するために今日残ったんだよ！」

「……もうお前俺と付き合えばよくないか？」

「……え？」

「って冗談だよ、帰るぞ」

「う、うん」

あつれー何この変な反応、困るんですけど？もっとさつきみたいなの軽く流す的な反応してくださいよ!?

ちなみにだが帰り道ではひまりの作戦通り相合傘をするところになった。

帰ってる間ひまりが俺にくつつきこれでもかと匂いを嗅ぎまくり若干距離を置いたら傘からはみ出し濡れてしまったのであった。



「でな、思うわけですよ、どうやったら彼女ができるかなって！」

「それな、どうやったら彼女ってできるんだ？」

「まじねーわ」

「という訳だ、教えてくれ神崎」

「神崎君可愛い幼馴染いるだろ？」

「まじねーわ」

「あのね君達、昼休みそうそうなんて会話してんだよ」

絶賛昼休み中、自作の弁当を食べながら柗優と雑談をしてたら三馬

鹿こと遊、優亜、由明日がやって来た。

「1人ぐらい紹介しても損はないだろ？」

「そうそう、俺はレイコちゃんを紹介して欲しいな！」

「まじねーわ」

「……あいつらをねー」

露出狂、匂いフェチのビッチ、ドM、盗聴癖、女体化大好き女子…

誰も紹介できんわ

ありりーはダメだ、それに絶対嫌がるだろうし

そもそも幼馴染を紹介する気なんて俺にはない！

「諦めろ、お前らにはお前らにあった人がそのうち見つかるさ」

「お世辞じゃないがお前達そこそこ顔整ってると思うぞ?」

「え?夜桜さんマジで言ってます?」

「俺ってそこそこイケメンだったのか…!今度の文化祭ナンパしようかな」

「ま、まじねーわ!」

柊優のやつは本当にそう思って言ってるのか?ここであいつらを宥めるために言ってるだけなんじゃ?

ま、まあ騙されてるならそれでいいか、こいつら馬鹿でよかったわ
「すまない、失礼するよ」

『ッ!』

三馬鹿達と話しているなか俺達2年A組にやって来たその上級生
を見て全員が驚く

「見て!薫様だわ!」

「はあ、尊いですわ!」

「薫先輩!サインいたでもいいですか!」

「すまないね、今日は用事があってきたんだ…また次の機会にね、可愛い子猫ちゃん」

「あつ…」

「おーい気絶したぞ、誰か担架を」

相変わらず人気だなー瀬田先輩、凜か柊優の顔がいいことを知って演
劇部に勧誘に来た?ってところかね

「やあ凜、久しぶりだね、あれからどうだい?」

「瀬田さん、その節はお世話になりました」

「なに気にすることじゃないよ、また何かあればいつでも協力するさ」
「……どうも」

「おつと軽い反応だね、君はもう少し他人に優しく接するべきだよ、か
のシェイクスピアも…」

「ご忠告ありがとうございます。でも私には少なからず友人は……い
ますので、それでは」

食べかけのおにぎりも口に詰め込み俺の方をチラリと見て凜は教

室を出て行った。

「やれやれ怒らせてしまったかな？」

瀬田さんはそんなことを言いながらこちらに向かって来ている。多分だけど柊優に用があるのかな？

「やあ久しぶりだね」

『……??』

「おい柊優、お前に言ってるんじゃないのか？」

「……違うだろ、俺は面識ない」

「？おやすまないね、神崎君に用事があるんだ」

「あ、俺？」

まじやめてくれよー話しかけるのにもタイミングってやつが必要だろ！クラスのみんなから視線浴びまくりなんですけど!?

「そうそう君だよ君…あの日会った時から私は密かに君に焦がれていた…ああ君なんて儂い存在なんだ。実に儂い」

「えつとー？」

頬をピクピクさせながら瀬田さんに問いかけた。えつとが問いかけになるかは置いてだ。

「単刀直入に言う、君私と一緒に文化祭でステージに立つ気はないかい？」

『ええええええええええええ!!』

クラス全員の声がレイの普段叫んで鍛えられている音量を越える声音で叫んでいたのであった。

◆◆◆

放課後、俺は教室でとある人物を待っていた。

「神崎…お前なんかすげーわ」

「なんで瀬田さんと知り合いなんだよ、すごくないか？やはりお前ラノベ主人公だろー！」

「まじねーわ」

「勘弁しろ、俺と瀬田さんは1回しか顔を合わせたことがないぞ？」

あの日GWの時の話だ。道に迷った松原さんを案内してた時會ったその日以降顔を合わせてことはない。

ないけど一方的に俺がふと見かける時はあつたけどさ

「……迎えに来たよ」

「……………はい」

迎えに来た瀬田さんは教室を見渡し俺に気づくと声をかけてきた。俺は返事をして瀬田さんの元へ向かう…。その際には女子からいいなって目で眺められる。

さらにだひまりはハンカチを噛み締めぐぬぬと言わんばかりに俺を睨んでくる。

そう言えばあいつ瀬田さんのファンだったな、なんか悪いことした感あるんですけど？

そんなひまりをモカと蘭が慰めていた。

「……………」 チラ

「ッ！」

蘭が視線で瀬田さんの方を向くようにチラリと横目で見た。

俺は早く行けと言ってるんだらうと捉え教室を出ていく。

「君と会うのは休みの時以来だね」

「……………そうですね、まさかあれがきっかけで俺を誘うなんて」

まさか話してた女装なら行ける説のやつか…！やめてくれよ！文化祭なんかで女装したら高校生活終わるぞ！

「あーすまない、別にあの日あったことで君を誘ったわけじゃないんだ」

「え？……………じゃあなんでですか？」

「……………」

「瀬田さん？」

一緒に並んで演劇部の部室を目指していたが瀬田さんが急に足を止めて考えるように顎に手を置いていた。

「君覚えてないのかい？」

「……………覚えてない？何がです」

「何が？……………ふむ、そうか…覚えてないのか」

「??？」

「実は君は以前私と会ってお話してるんだ、覚えてないのかい？」

「……え」

それって…4月29日のこと？

でもあれってアサシンは紙袋被ってたし俺が瀬田さんって気づいている根拠もない。

ならそれ以外で俺は瀬田さんと過去に一度会っていることがある？それにお話もしたただと？

んー思い出せん、こんな美形の人会ったら忘れなと思うんだけどな？

「まあいい、覚えてないのなら話せばいいだけのこと、君と私の懐かしい青春の話をしようじゃないか」

「ちよつと!?俺のアオハルはまだ終わってませんからね!」

レイがそう答えたのはもう遅かった。薫は懐かしむかのように語り出したのであった。

「……はあ」

瀬田薫はとある河川敷に座り大きなため息をついていた。

「このままみんなを騙すような形でいいのかな？」

臆病な自分を殺す^{隠す}そのため薫は日常でも演技をする…つまり仮面を被る道を選んだ。

しかしそれはどうだろうか？常に他人に本当の自分ではなく偽物の自分を見せ、仮初のような言葉で他人を虜にさせている。

簡単に言うとは嘘つきだ。そのことを知り、このままで本当にいいのかと自分に疑問を問いかけていた。

「でも今から実はあれは演技でしたなんて言えないし…どうしようこんな時ちーちゃんなら…!」

「ううん、ダメだダメだ!これは私の問題なんだから」

幼馴染である友のことをふと考える薫だったがその考えはすぐにどこかえ消えた。

「そこの女、悩み事か？」

「ッーだ、誰!」

「我か、我はゼロだ」

「……ゼロ？」

そこに現れたのは黒髪で学ランを羽織るのではなく肩にかけ両耳には痛々しいピアスが付けられ首にはチョーカーが巻かれている。

他人から見たら厨二感満載の痛々しい姿だった。

「ゼロとは君の名前なの？」

「ゼロは名前なんかじゃない、一つ記号だ」

「記号？」

「……………」

少年はその先のことを考えていなかったのか、決めポーズをしたまま少しの間無言になっていた。

「その女、悩み事か？」

「え、は、はい……」

先程と同じ質問をした少年に対して薫は素直にはいと答えた。

「我が悩みを聞いてやろう」

「……実は私」

薫は全てを話した。自分が嘘つきであると……嘘をつき他人を騙している自分は悪い人ではないだろうか、と

「……嘘について何が悪い」

「ツ！だってダメじゃないか！嘘をつくと心が汚れるって小学校の先生が言ってた」

「ふん、だったらこの世界に生きる人間全員の心は汚れて、腐ってる」

「……なんでそうなの？」

「何故か？分からないのか？……この世界は嘘でできてるからだ」

「世界が嘘でできている……？」

少年は立ち上がりカツコつけるように薫の前に来た。

「わっ！」

しかし途中で転びコロコロと転がりながら下っていく。

はあはあと息を荒らげながら元の居場所に戻ってきて息を整え言い出した。

「人は嘘をつき、騙されながら生きている」

「ッ！」

「誰にも言えない秘密をお前は持っている…知られたくないから嘘をつく」

「……その通り」

「そんなのは生きてる人全員が行っている事だ、故にこの世界は嘘でできている……」

「だから俺はこう思ってるんだ」

「嘘をついていいのは嘘をつかれる覚悟があるやつだけだ」

「ッ!？」

まるで某アニメのかっこいい名言をあたかも自分が考えたかのように言い出す少年、しかしあながちその発言は間違いではない。

「嘘をついていいのは嘘をつかれる覚悟がある人、だけ」

「ああ、お前にその覚悟はあるか？」

「わ、私は……！」

「……引き返すなら今のうちだ、仮面を被り続けるのは俺だけで十分だ」

決まった、とでも言うかのようなキメ顔をしながら少年は立ち上がり歩道へと歩き出す。

一体少年はなんの仮面を被ってるのだろうか？それとも先程の某アニメの主人公と自分を同じ人だと思ってる残念な人物なのだろうか。

「……………」

私にはその覚悟というのが確かにないのかもしれない。だからと言つてここで引き返せない……

「私は既に嘘をついている……もう引けない！」

「……そうか、ならその道を選ぶことだ」

「しかし忘れるな、お前はいずれ大きな嘘をつかれるかもしれないということを」

「……それまでに私は覚悟を身につけるさ」

「いい目だ…ならば俺からも最高のプレゼントをお前にくれてやろう」

「なんて冗談さ、あんな狂気じみた反応されて演技なんて思うわけないじゃないか」

「いやーそれはなんと言うか……」

頼むからー！あれは演技だったと思ってくれお願いします！

「おや嘘をつくのかい？……嘘をついていいのは嘘をつかれる覚悟ある人だけだと君が言ったんじゃないか……」

「あ、はい、あれ確かに僕ですね、昔の僕頭のネジ吹き飛んでました、忘れてました！」

「……なるほど」

完全に砕け散り俺は廊下で膝を着く。何やってんだよ過去の俺は……しかも過去の俺の決めセリフみたいなのやつでやられてんじゃないか。確かにあれは演技でーって押し通せたかもしれないけどそれは違う。

もしここで俺が演技だった、なんて言えば瀬田さんに言ったセリフが嘘になってしまっじゃないか。

確かに某アニメの影響で言った一言かもしれないけどさ……理になってるセリフだろ？

それだけはなんと言うか、嘘にしたくなかったって言うかさ、な？

「……人間誰にも言えない秘密もあるか、すまないね、どうやら私は君の知られたくない一部分を易々君に問うてたみたいだ、本当にすまなかった」

「ツー……いいですって、それに厨二病だったやつらは……こうなるのが運命なんすよ」

過去のことほじくり返されて酷い目にあう、まあ自分のせいなんですけどね

「それより早く行きましょう、初日で遅れたらみんなに迷惑をかけてしまうので」

「あ、ああ、それじゃあ行くとしようか」

瀬田さんは俺がこのままいなくなつて演劇の話がなかったことになると思つてたのだろうか？

反応が鈍かった気がする。確かにあの後参加しようとはなれない

けど…やってみるのもいいかなって少し思ってしまった。

それにだ！過去の俺を知ってるならそれ相応の役柄があるので
はー！

と期待に胸を膨らませ演劇部の部室に向かう。そこで台本を渡され役を確認した結果

「いや女役!？」

「前に言ったじゃないか、君なら女装も行けると」

「行けるとかじゃなくて！恥ずかしいじゃないですか!？」

「すまない、彼は少し情緒が不安定なんだ…決してそう言う、病気を持った人では」

「あれ？瀬田さん俺のことなんて思ってるの…!？」

確かにあんな柱に頭を打ちつけたら思われても仕方がないよね！でも違うんですよ!？」

「あれはだからほら！あれは演技！そう、演技だったんですよ!？」

「聞いたか演技だったよ」

「薫さんが本当と思うほどの演技力だつて…!？」

「これは薫さん以来の大物新人が来たかもしれないわね」

なんか変に期待されてるんですけど!？嘘です！なんて瀬田さんの前で軽々しく言えないし…ど、どうすれば!？」

「すみません、遅れてしまいました」

「!千聖！遅かったから来てくれないかと思ってたよ」

「乗る気じゃなかったけど状況が変わったのよ」チラ

「ッ!」

なんだ？一瞬こつち見たよな？絶対見たよな!

確かあの人は…白鷺千聖さん？パスパレのえつとギター担当は某日さんの娘さんだったから…ベース担当の人だ!

てことはガールズバンド？アサシンの可能性だつてあるかもしれない!
ない!

あれか？密かに俺に焦がれていたからチラリとこちらを見たとか
?

状況が変わったとは俺が瀬田さんに誘われてここに来たからか!？」

そんなことを考えていると白鷺千聖さんはゆっくりと俺の元に歩いてきた。そして

「はじめまして、白鷺千聖です♪」

「は、はじめまして、神崎レイ…です」

握手を求めてきたもんだから俺も咄嗟に手を出し握ってしまおう。

握った感じなんかすげーってなんてこれが大物女優の手か！って謎に感心していた。

「ねえ神崎君、私急いできたから喉が乾いたわ…よければ一緒に飲み物買いに行かないからしら？」

「ッ！お、俺でよければ！」

この人なんか胸を俺に押し当ててくるんですけど…なんだこれ、普段モカとかひまりに押さえつけられるけどなんか違う雰囲気だ。

あと凄くいい匂い、髪もツヤツヤ、目もパッチリしていて

「ふふ、見すぎよ♪」

「は、はい…」

顔の筋肉が緩くなって自然と笑みを浮かべてしまう。

「ところで神崎君は本当に女性の胸が大好きなのね」

「……え、い、いきなりなにを…？」

「……違ったかしら？」ギョッ

「ッ！」

俺が間拔けた返事をしたら腕を組み腕に自分の胸を押し当てて来た。

一体何が目的だ？あとなんで俺がおっぱいが好きだって知ってるだ…？

「私あなたのこと知ってるのよ」

「へえ？」

「あなたが1番知りたい情報も私は知ってる」

「……………」

「あら？黙り込んだじゃったわね、もしもーし？」

俺が1番知りたい情報ってなんだ？

もしかしてアサシンのこと、とか？

「ねえ神崎君もう一度言うわ」

「一緒に、2人で、飲み物買いに、ここから、出ない？」

「ッ！」

つまり2人っきりで話したいことがあるからここから出たい…的な意味か？

「そこで話しましょう」

「……な、なにを」

耳元でそう囁き、俺が問いかけをしたら笑みを浮かべながら答えた。

「ふふ、アサシンのことについてよ♪」

そのアサシンと言う単語を聞いた瞬間俺の心臓は飛び上がり思考が一瞬にして消え去る。

「さあ、行きましょう…神崎君」

「……………はい」

こうしてレイはアサシンの情報を知るため白鷺千聖と演劇部の部屋を出ていくのであった…。

女子に嫉妬されたことありますか？

白鷺千聖さんと飲み物を買いに学校に設置されている自販機の前に2人で立っていた。

「先輩からの奢りよ、好きなの選んで？」

「……いい、いえ、自分の分は自分で買いますよ」

「いいから、選びなさい」

「……………」

「選びなさい」

「あ、はい」

俺は情けなく負けてしまった。白鷺さんがお金を入れてたもんだから適当に飲み物を選ぶ

でもまさか選んで出てきたのが缶コーヒーとは…：コーヒーは苦手だと何度言わせるんだ。恥ずかしいだろ！

なんでだろうか、この人と友希さんには逆らえないような何かオーラの的なものがある気がする…。

「……………」ピツ

白鷺さんは無難に水を選んでいた。水なら給水器でいいと思うが…：人気女優にそんなこと言えないよな

「えつとー？白鷺さん？さっきの話なんですけど…」

「今日暑いわねーまだ梅雨は開けてないわよね？」

「そ、そつすね、まだ…開けてないです」

「？遠慮せず飲んでいいのよ？」

「あはは、いただきます！」

俺はコーヒーを一気に飲み干し缶をゴミ箱に投げ入れる。白鷺さんにコーヒーが苦手だとバレないように後ろを向き崩れそうな顔を必死に堪える。

「……アサシンのことはもちろん知ってるわよね？」

「……………」逆になんで白鷺さんがアサシンのこと知ってるんですかね」

「さあーなんででしょう」

「この言い回し…アサシンに似ている。もしかして白鷺さん本人がアサシンなのか？」

「さて…ここ暑いし中に戻りましょうか、部室はエアコンが着いているはずよ………そこで話しましょう」

「ここまで来た意味！」

「いいじゃない、私と一緒に歩けるなんてファンに知られたらあなた殺されるわよ」

「あんたは俺のこと殺したいんですか」

「……それは困るわね、あの子のためにあなたには生きてもらわないと」

「ッ!?あの子ってのは」

「だからそのことは中で話しましょう」

俺は渋々白鷺さんの隣を歩きわざわざ外に出てきたのにまた演劇部の部室に戻っていた。

「文化祭かークラスの出し物何立候補するー?」

「俺は…メイド喫茶かな」

「んーまじねーわ?」

「てか去年何したっけ?」

「あれだよ、たこ焼き店出したな、途中で鈴カステラ作り出したのはいい思い出だぜ」

「まじねーわ!」

なんか知り合いの声がするんですけど!?

てかまずい!こんなところ三馬鹿に見られたら!絶対絡まれる!

「白鷺さんこっち!」

「きゃっ!」

俺は白鷺さんの手を取り空き教室に急いでいる。アイツらと絡むとろくなことがないからな…しかも白鷺さんに迷惑はかけれない。

かけたら冗談抜きでファンに殺されるわ

「?さつき女子の声聞こえなかったか?」

「まさか、神崎君じゃあるまいし学校でエッチなんてしないっての」「まじねーわ」

優亜のセリフで三馬鹿共はゲラゲラと腹を抱え笑いながら生徒玄
関へと向かって行った。

「あなた友人になんて思われてるのよ」

「……ラノベの主人公、ですかね」

「変態の間違いなんじゃないのかしら」

「なっ！」

俺は特に反論することも出来ずその後はお互い黙ったまま部室に
戻るのであった。

「薫、隣の空き部屋借りていいかしら？」

「ん？ああ、構わないが何をするんだい？」

「……可愛い後輩と世間話よ」

「世間話もいいがこの後軽く読み合わせる予定だからね、それまでに
は終わらせるように」

「ええ、わかったわ」

瀬田さんと少し話をした千聖さんは隣の部屋へ向かい出す。

「何してるの、あなたも来るのよ」

「あ、はい」

隣の部屋に入り入ると同時にエアコンのリモコンを手に取り付出
す。一瞬にして冷たい風が広がり部屋は涼しい空間となる。

「さて、話をしましょうか」

「ッ！」

机に座り足を組む白鷺さん、組む瞬間に見てはいけないものが見え
てしまった。

「(明るい黄色？パステルカラーってやつか……)」

「あら？人の下着を勝手に見るなんて飛んだ変態さんね……おしおきが
必要かしら？」

「れ、レイさんは何もみておりません！」

「そう、今日履いてなかったから正直焦ったわ」

「いや履いてたでしょ……あっ」

「はい、見たわね」

くっそー、突っ込み係として血が疼いたのか、もろに突っ込んでし

まった。

「これはやってしまったな…。」

「あの子が言ってたことは本当だったのね」

「え?」

「ふふ、見かけによらずあなた変態なのね」

「ねえあなたってM?S?」

「いきなりなんて質問!」

「答えなさい」

えつとーとりあえず俺には巴みたいなドMってわけじゃないから
?ひまりとかには結構きつく言うし…どちらかと言うと

「Sですかね」

「あなた服のサイズ小さいのね」

「そっちかい!」

「逆になんだと思ったのよ」

「ふえ!?あ、それはー」

「ふふ、あなたやはり変態さんなのね」

やめてー!俺がなんか勘違いしたみたいになってるから!てか絶
対はめるために言っただろそれ!?

「もういいでしょ!いつまで雑談するんですか!」

「あなたが変態と認めたら進めてあげるわよ」

「なんですかそれ…アサシンが俺のこと変態っていうなら変態じゃないんですかね」

「…まあいいわ、話しましょうか」

やつとだ!やつと話の本題に入れる!

ここで俺はアサシンの情報を少しでも手に入れて…!アサシンを
見つけ出す!

「私はアサシンの正体を知ってるわ」

「ツ!…白鷺さんと仲良い関係とかですかね」

「そうね…私はガールズバンドの大半の方と仲がいいと自負している
わ」

んーそーなると先が思いやられるな、まさか全員と仲良しですなん

て言い出さないよな？

「ねえあなた、勝負は好き？」

「……いや、好きじゃないです」

「なら私と勝負しましょう」

「話聞いてました!？」

好きじゃないと答えたのに勝負を要求してくる白鷺さん、後俺はいちおう凜との勝負は負けたことになってるからね？

前の別の人との勝負に負けたのにやる気なんてあるわけないっての

「んん、俺は勝負なんてしません」

咳払いをして俺はそう答えた。

そもそもなんの勝負をするんだ？テストならまだ先だし…競うものがないと思うんだが？

「……本当にいいの？」

「はい」

「私に勝てばアサシンの情報を教えると言つても……？」

「なっ！」

不気味な笑みを浮かべながら話す白鷺さんの顔を見た時俺は何故か嫌な気がした。

なんと言えは伝わるだろう。とてつもなく、何故か嫌な気がしたんだ。

「ならこうしましょう、あなたが私の勝負を受けないというなら…あなたと夜桜君の関係をばらす…ってのはどうかしらね？」

またも不気味な笑みを浮かべた。

ああ、俺はこれを警戒していたんだな、と瞬時に気付く、しかした。「俺と柊優の関係？ただの親友ですけど？」

悪いが柊優との関係は親友つてだけだ。それ以下でもそれ以上でもない。あとそれ以上は絶対じゃない。

「誰が現実^三世界^{次元}でつて言ったかしら？」

「……………あつれー？も、もしかして？」

もしかしてだけどあの本のこと知られてる…？嘘だろおい！嘘だ

と言ってくれ!

「受けないとばらすから♪」

「……………」

くっ!逃げれない…!あんなもの学校中に知られたら高校生活完全に終わりだ!

てか諸悪の根源である蘭を潰して実は柊優と俺じゃないよー的なきずを流せば事を成せるかもだけど…

俺と柊優が力を合わせても蘭に勝てる気がしねえ!

いやまあ暴力とかでは勝てるかもしれないがそれは違うだろ?言葉では勝てないのやつだよ

「はあ…勝負ってなんですか?」

「そう来ないと困るわ…ってね、そうねー近頃文化祭があるわよね?」

「…………え、ええ」

「あ、こんなのはどうかしら?私と文化祭で勝負をするってのは?」

「どんな勝負だよ…」

「例えばそうね、私は今回演劇部の劇に出るからステージ部門の順位勝負する?」

「それともそれ以外の部門の順位とステージ部門の順位で勝負する?」

「つまりの所俺はステージ部門じゃなくて他の部門で1位をとって尚且つ白鷺さん達のステージが2位とかだったら勝ちってことか?」

「いやいや馬鹿か!あの瀬田さんと白鷺さんが出るんだぞ?絶対1位だろ!」

それ以外でなら確かに1位を取る可能性はある。取れば同じ順位、引き分けか

「?てか白鷺さんメリットもデメリットもないじゃないですか、俺だけメリットあるんですけど?」

俺は勝ったらアサシンの情報が手に入る。けど白鷺さんは?なんのメリットもないし本当に勝負する意味あるのか?

「あなたが負けたらばらすわ♪」

「俺はあなたの話をしてるんですよ!?!なんで俺の負けた時の話になっ

てんだよ！」

「んー勝ったら…そうね、首輪つけて夜道を散歩しましょう、あ、首にはもうひとつ私は負け犬ですって書いたホワイトボードを吊るしましょうね♪」

「え？まさか知ってます？」

「何が？」

「……いえなにも」

あつぶねー！墓穴掘るところだった！

俺と巴の関係も知られてるのかと思っただが違ったか、危うく喋るところだった。

にしても首輪つけて夜道を散歩とかこの人絶対Sだろ、最初の質問にMと答えてたら問答無用で巴が喜びそうなことをさせられていたかもしれない。

そう思うと全身に寒気が走った気がした。

いかんいかん、勝負の話だったな

負けてもばらされる？何それきつくね？でもこつちができることとなれば

「（んークラスの出し物で1位を取って引き分けにするか）」

やけに女子生徒の顔面偏差値の高い我がA組、あの三馬鹿共がメイド喫茶しようぜとか言い出して1位になるだろ

それにだ、こつちにはひまりと凜のおっぱいがある。メイド服着ればはみ出して、谷間見せて男子生徒わしずかみ！ガツポガツポだぜ！あつはははは！

「……」

「それで？勝負は受ける？受けない？」

この男すました顔して頭の中では最低なことを考えていた。いつか天罰が下って欲しいものだ。

「ええ、いいですよ…受けて立ちます」

「……なら決まりね、薫には悪いけどあなたこの劇を自分から辞退するって言ってくれない？」

「わっかかりまーしたー」

てか元々参加する気もそこまでであったわけじゃないし？別にいいや、瀬田さんに：嘘はつけないから本当のことを話そう。

俺は白鷺さんよりも部屋を早く出て瀬田さんの所へ向かう。

「瀬田さん」

「おや、もう話は終わったのかい？なら早速読み合わせを：」

「すみません、俺辞退します」

「ツ！何故だい？何処か不満でもあったのなら遠慮しなくていい、言ってくれ！」

「いえ、やるべきことが見つかったというか：」

レイは照れくさそうに頬をかいてチラリと千聖の方を向いていた。

「(てか女装させられる時点で嫌だったし)」

「てなわけですみません！せつかく誘ってもらったのに！」

「ちよつと！まだ話は！」

「いつけな！今日スーパーでひき肉のタイムセールがあるんだつたー！」

やべ、咄嗟に嘘ついてしまった：瀬田さんにカツコつけてなんか言ってたくせに何やってんだよ俺は…。

「……………やれやれ、行ってしまったか」

「彼が自分で決めたことよ、ふふ」

「千聖、一体彼に何を吹き込んだんだい？」

「……………さあーあなたには少なくとも関係ないことよ？」

「うむ：そうか、それより麻弥を見なかったかい？」

「そう言えば：いないわね？」

「確か足りない備品を調達すると言ってたような？」

「……………ねえ薫、悪いけどまた少しだけ席外してもいいかしら？読み合わせの最初は私の出番ないから始めてていいわよ」

「やれやれ、今度はなんだい？」

「ふふ、だからあなたに関係ないことよ♪」

千聖は演劇部の部室を出ていき廊下の隅に足を運び携帯電話を取り出した。

「もしもし、私よ」

「……………」

「ええ、あなたの言う通りにことが進んだわ、本当あなた彼の行動がわかるくらい大好きなのね」

「……………」

「当たり前？言うじゃない、それで？私は潔く負けてあなたの情報を教えればいいのかしら？」

「……………」

「……………え？」

アサシンのその一言を聞いた千聖はその後確認するように何度も何度も同じような話を繰り返したのであった。

◆ ◆ ◆

ひよんなことからアイドル兼女優である白鷺千聖さんと文化祭の部門順位で勝負することになった。

「まあクラス部門で1位だろ」

いや待て、総合1位も狙えるんじゃないやね？だったら…白鷺さんにも勝ってるーやば、凄いやん、やっぱりおっぱい凄いや！

凜は絶対嫌がるけど…土下座すればなんとかなる！

俺は家に帰るため路面電車站のベンチに座り電車が来るのを待っていた。

携帯がないもんだから時間を潰すものがない、流石にこんな所でパソコンは取り出せない。昔はiPadちよこつとだけいじったりしてたけど

「よっこいしょーつと」

おじさんみたいな言葉を言いベンチから立ち上がり辺りを歩き出す。

なんだかんだでこの駅にはもう1年近くお世話になってるからな…雨とか酷かったらよく止まってる確率高いけど

ちなみにだがいつでも対応して遅刻しないように早めに起きているレイなのである。

「んっー！」

と背伸びをしながら完全に油断しきっているときだ。

「やあ、久しぶりだね」

「ッ！」

聞きなれた電子声が聞こえた。

忘れるわけがない、普段から電子音で喋るヤツなんて俺の知り合いにはこいつしかいない

「アサシン！」

「どうもー君のことが大好きなアサシンだよーでももうちよつと可愛いあだ名がよかったかな？」

「モデルガン突きつけたやつがよく言うよ」

「……あー完全にキアラ作り間違えちゃったね」

「今日は振り向いてもいいのか？」

「うん！紙袋ちゃんと被ってきた！」

ちゃんと被ってきた。ちゃんとして言葉を知ってから話して欲しいものだ。

国語辞典にちゃんとして単語乗ってるのかな？知らんけど

「今日は花咲の制服か」

「どつちも持つてるからねー」

「それって姉妹がいるって捉えていいのか？」

「……さあ、どうだろうねー」

「はいはい」

姉妹となると氷川さん達？達と言ってもうちの生徒会長とかしか面識ないけど

あとは他のガールズバンドに実は妹とか姉がいたとかそんな設定があれば可能性は他の人にもあるな

「(あれ、てか香澄の妹羽丘だよな?)」

香澄は花咲、妹とは羽丘、ならば制服をどちらを持っている？

香澄のやつそこそこ胸あるからな……香澄の妹の胸しだいではパツパツ、になるまでは大きくないか

「(でも待て、香澄と俺は中学同じだぞ?)」

俺のことを妙に知ってるこいつってまさか香澄……？ってわけないよな

「ねえ千聖君とはどうだった？」

「君って、お前な」

「だってさんとかちゃんとか先輩とか呼び捨てとかだったら絞り込まれるじゃんー！」

「……まあな」

千聖君なんて白鷺さんもまさか君付けで呼ばれてとは思わないよな

「お前何が目的だ？どうせ白鷺さんに吹き込んだのお前だろ」

「ご名答、流石僕の大好きな人、神崎レイ君だ」

「当てても嬉しくねえー！」

てかこいつしかいらないだろ！アサシンのこと知ってるやつなんて本人か俺か柊優しか知らんわ！

「それはね、君に文化祭を楽しんでもらいたいからだよ」

「ツー……なんだよその俺が文化祭を楽しみにしてないみたいなの言いようは」

「だってそうでしょ？君全然楽しそうじゃないよ」

「……」

楽しそうじゃない、か

確かに文化祭でいい思い出あるか？と聞かれたら俺はあるとは答えれないと思う。

中学の文化祭なんて適当にフラフラ歩き回って面白そうと思ったクラスに入り鑑賞する。もしくはゲームをする。

なんてことない、ただの時間を潰すための毎日とさほど変わりのない時間だった。

でも最初と最後の全校集会は嫌だったなー中学では話は立って聞かないといけなかったし

「僕は君が楽しそうにはしゃいでいるところを見てみたい」

「……サークル活動してる時の俺は楽しそうにしてないのか？」

「それはわからないねーだって僕はいるかいらないかわからないんだし」

「でもお前は見たか見てないかわかるだろ？」

「……………まだ答えたくないかな」

「……………そっか」

既にいるかいはいかはいいとして女の子が答えたくないと言ったんだ。なら俺は黙るしかない。

「ちなみにだけどさ…：中学時代の俺のこと知ってるの？」

「もちろん、知ってるよ」

「なんで知ってたんだよ…」

やはり香澄か？香澄なのか？香澄なら俺の中学時代を知ってる。なんなら彼女より詳しい人はいない。

「香澄…？なのか、お前は」

「……………」

本当にそう思う？」

「君が本当にそう思ってるなら今ここで私は答えてあげるよ？」

本当にうんと頷いていいのか？

ただの勘だぞ？本当の本当の勘だ。

もしここで違ったら？もし当たってたら？

どっちにしても俺は戸惑いを隠せない。外れてたら外れてたでの戸惑いもある。

なら何故彼女は俺の中学時代を知ってる？誰にも知られたくない厨二病を患っていた俺を何故、彼女は知ってる？

やばい、色んな考えが頭の中でぐわんぐわん回って頭が少し痛くなる。

「……………それとも君は香澄君であって欲しいと望んで言ってるのかな…？」

「……………ち、がうよ、ただ同じ中学だったのがあいつだけだから、別に俺は」

「本当は？」

「ッ！本当も嘘もあるか！香澄はただの友達だ、仲のいい友達、こんな俺に声をかけてくれた……………友達だ」

「……………そうなんだ」

香澄は友達だけ、何度も言うが深い仲だった記憶はない。家では

よく遊んでいたけど間違いないなんて起きてもないしお互いその気もなかったはずだ。

少なくとも俺にはなかった。ならあの香澄だ、あるわけないだろてか一度距離を置いた俺だぞ？

そんな人を俺は友達って言ってもいいのかな？

「ねえ知ってる」

「ん」

「……僕はね、嫉妬深い女なんだよ……？」

「え、アサシンどうした……？」

「ごめん、僕もう帰るね」

「アサシン！」

電子声でもわかるぐらいアサシンは悲しい声を出していた。

香澄、ではなかった。香澄じゃなかった。でも俺が軽はずみに香澄か？なんて聞いたから……アサシンは外されたから悲しんだ？

「ねえレイ君、文化祭はちゃんと楽しんでね、じゃないと君の秘密がバレるから」

「……ごめんな、アサシン」

「あはは、もうちょつと可愛いあだ名だったら抱きついてたのにね」

「またね、次は……うん、笑顔で会いに行くよ」

「ッ！」

最後の会いに行くよ、は電子声ではなく地声？だったと思う。だけど小さい声だったしあまり上手く声を聞き取ることができなかった。

「……………」

数秒間、アサシンの背中が見えなくなるまでずっとアサシンを見つめていた。

電車の音が聞こえてきて、やがてその音は大きさを増し俺のすぐ隣に止まった。

運転手が何何行きとアナウンスをして俺は急いで乗り込む

「(香澄じゃなかった)」

俺の軽はずみな問いが彼女を傷つけた。

前に一度考えたことがある。ガールズバンド全員の名前を言って

言って探りかけようって

でもダメだ、今日ので学んだ。もう二度とアサシンの前で誰か？なんて聞くのは金輪際やめよう。外したら彼女を傷つかせてしまう。

なら早く正体教えろよって思うかもしれない。だけどこれはゲームなんだ。俺のゲーム、ゲームの途中でネタバレなんかされたら嫌だろ？

だから俺は自分の手でクリアしたい。クリアした時何も気まずくないまま、そのままトゥルーエンドを迎えたい。

家の近くの駅に着きとぼとぼと帰宅路を歩く、家の前につき鍵を開けてドアを開ける…が。

「ッ！閉まってる？」

もう一度鍵を穴に差し捻り、ドアノブを手に取り引くとドアは開いた。

てことは鍵をかけていなかった？おつかしいな、確かに朝かけて出ただけだ

「ただいまー」

「んーおかえりー」

「!?」

最近おかえりと返された記憶がなかったが今日は違うようだ。リビングから昔から聞きなれた声が聞こえたような…？

「ぷはあっー！よー！レイ、ただいまー」

「お、おう…おかえり姉貴」

「なーに？全然嬉しそうに見えないんですけどーまさか今日は女の子泊める予定だったとか？なら姉ちゃんも混ぜろよー！」

「なんでそうなる!?!」

姉貴が混ざるってなに？近親相姦とかシヤレにならんぞ!?

「仕事一段落付いたから帰ってきた、まあまた明日日本社に行かないといけないけどね」

そんなことを言いながらぐいっと先程から手に持っていたストレイを口に流し込む。

「くっー！生き返る！ストレイ最高！ぬっははははー！」

「程々にしとけよ？そのうち健康診断とかもあるだろう」

「健康診断？なにそれ、受ける気ないんですけどー？あはは」

「……………」

まあ普段は俺が健康に気を使ってちゃんと料理してるからな問題ないと思うけど酒はなー肝臓の数値とか大丈夫か？

あと最近は箱詰め状態だったし食生活も悪いと思う。

「とりあえず今日からまた騒がしくなるのか…」

さらば俺の一時の休暇、今日から強制的に自室で寝なければならぬ。

つぐみのやつに俺の寝息を聞かせてやるとするか…ってあつちが勝手に聞いてんだけどな

ここでひとつ言っておこう。盗聴器外せばよくね？と思うだろう。

安心してくれ、俺も思った。だからコンセントのカバーを外そうとしたが…しかしこれがまー外れん。

よく見たら接着剤が塗られたような透明な跡が見受けられる。つぐみの野郎接着剤の中でも最強、アロンアルファ様でやりやがったなと勝手に決めつけている。

「……………はあ、俺部屋に戻るから」

「ん？うーん」

大きなため息をついたレイはそのまま階段を登り自分の部屋へと向かって行った。

「……………」

そんな中レイの様子が少しおかしいことに気づいた湊奈は少しの間考えた。

「あれ？そんなにあたしが帰ってくるの嫌だった…？」

待つて欲しい。自分はレイに嫌われるようなことをした覚えはないぞ？でも何故ここまで嫌われている？

自分が姉らしいことを全くしないからか？

確かに湊奈は料理はできない。洗濯はできない。掃除もできない。もう家事全般ができない。

唯一できるのは執筆や絵を描くことだけ、その他はレイが全て面倒

を見ている。

「レイに嫌われたらあたし死ぬじゃんか!？」

急いで階段を駆け上がりレイに謝ろうと決意する滯奈であった。

一方レイは滯奈のことなど微塵も考えていなかった。

「……アサシン」

アサシンを悲しませてしまったことに罪悪感を感じていた。

本当些細なことで日常生活に支障を起こす……までではないが深く考え込むのはラノベ系主人公の運命なのだろうか…。

否、訂正しよう、レイはオリ主である。

「(アサシン言ってたよな、嫉妬深い女だって)」

香澄と俺が仲良いこと知っててそれに嫉妬してる？

でも待つてくれ、サークルでも俺はそんなに香澄と絡んでないと思うぞ？

いや…でも確かに見てたりはしたかもしれない。でもそれはひまりと燐子さんと凜のおっぱいを見るのと同じ感覚だろ？

同じ感覚ではないな、自然と向いてしまう？

「んー昔から絡んでるしなんて言うか…」

かまって欲しい…とかなのかな？…って何言ってるんだか、乙女か俺は…

「……レイー」コンコンコン

「??？」

姉貴が珍しくドアを開けずにドアをノックしながら声をかけてきた。

普段からこれだったら色々と助かるんですけど…色々な

「あのさ、なんかあった?」

「……は?」

「あ、いやーそのなんと言うか、ほら!あたし姉だし!なんか悩みあったら聞けけど」

「どうした?姉貴が姉面するなんて…明日は雨か?雪か?それとも天変地異か?」

「なっ！そ、そこまでなってるとは……！」
「??？」

滯奈は先程自分が嫌われたのではないかと思っただけで今レイに話しかけていた。

しかし、レイから帰ってきた返事はまさに嫌われていると捉えてもいいぐらいの言われっぷりだ。

「ほらレイ！小遣いあげよう！いくら欲しい！」

「いやバイトしてるからいらさないよ、姉貴は好きな物とか機材とか買えよ」

「……だね！」

「そ、そうだ！レイさ○○先生のサイン欲しくない!?貰ってくるけど！」

「要らねーよ、姉貴経由で貰ったら意味ないだろ」

「嘘でしょ!？」

初めに言うがレイは決して姉貴を、滯奈を嫌っているわけではない。普段と同じように接しているのだ。

この接し方が普段と同じというのもあれだが…

滯奈に取ってはもう完全に嫌われてしまったと思う瞬間だった。

「ぬああああああ！レイが、レイがあたしのこと嫌いになったあー！」

「は、はっ!?!何言ってるんだよ!?!」

「死ねって言ったあー！いやだ、まだ生きてたい！健康診断もちやんと受けるから！嫌いにならないでえー！」

「とりあえず落ち着けー!!!」

ドアを開け姉貴の首を掴み部屋へと無理やり入れ込む。

変な顔で泣き叫ぶ姉貴を見てこいつ本当に20代なのか?って疑いたくなった。

「で?何があつた?」

「だってーごによごによごによ…」

なに、話を聞くと俺に嫌われたと思った?嫌われたら死ぬから困るって?

どこまで自分勝手なやつなんだよこいつー!

「……はあ、あのな、俺は嫌いなやつとは本当口も聞かない人間だぞ？」

とは言っても心から嫌ってる人なんていないけど実際できたらそうだと確信がある。

なんでかって根拠はないけど本当だ。

「本当……？」

「だいたい昔言つたら、俺がこの家にいる間は面倒見てやるって……か嫌われたくないと思うなら少しは遠慮って言葉覚えろこのクソ姉貴」

高一のころ姉貴にそんなことを言つた覚えがある。いつどのタイミングで言つたかは覚えてないけど

「うん！わかつた！」

んー絶対わかつてない、わかつてないなこれ……多分これからもつと今まで以上にこき使われる気がするわ

「いやーよかつたよかつた、流石あたしの弟、姉を嫌うはずなんてない！」

「嫌われたと心配してたやつはどここのどいつだよ！」

「それは命がかかつてたからね」

「命はかかつてねーだろ!?!」

すぐ調子乗るよなこの人ー、でもそんな人が俺の姉貴なんだ。

ちゃんと血が繋がった家族、嫌いになる？アホか、嫌いになっても嫌でも付き合わないといけないんだぞ？

だつたら嫌いになるわけないだろ、でも好きではない……家族だけだな！

「よーしレイ！ラーメン食べいこう！今日はあたしが奢るぜ！」

「うわ嬉しー姉貴大好きー（棒読み）」

「よせやい！あたしの可愛い弟よーここにいてるまでこき使つてやるからね！」

「うるさい黙れ、嫌うぞ」

「嘘ですごめんないさい許してくださいレイ様あー!!!」

縫るように抱きつき駄々をこねる。抱きつかれても胸の感触がな

いのは少し残念だ。

「(あ、でも今後こう言えば少しは自分でことをしてくれるかも…?)」
そう思った明日からこの脅しをしようと思おうと決意をする。

その後ラーメン屋に向かうレイだがひと時の間だけアサシンのことを忘れること出来ていた。しかしその後は思い出し罪悪感が心に残ったままなのであった。

クラスの男子全員を敵に回したことがありますか？

ラーメン行こう！と姉貴に誘われ俺は迎えに行くから玄関で待っててと言われたため、玄関の階段に腰を下ろし待機していた。

迎えいくから待ってて、この言葉を聞いた時ん？となった。

何故なら姉貴は家にいる。にも関わらず迎えに行く？てか俺が着替えている間にいなくなってたし、何を考えてるんだ？

そう思いながら待つこと数分、轟音なエンジン音が聞こえだし俺は玄関の階段から立ち上がり辺りを見渡す。

このご時世暴走族…なんていないよな？

恐る恐る向かいの道を見てみると真っ赤な外車？スポーツカー？オープンカー？わからん、車には詳しくないんだ。

そんな赤い車がこちらに向かってくる。近づいてくるにつれて運転している人の顔がはつきりと見え出す。

「姉貴？」

「へいへいあんちゃんーあたしとちよつとドライブしないかい？」

姉貴こと神崎滯奈が高級車を運転しながら我が家の前にやってきたのだ。

「これどうしたんだよ!？」

「いやー売れっ子作家ってのは高級車を買わないといけない性なんだよ？知らないの?」

「知らんわそんな性!」

話を聞くとでかい買い物させること必死に執筆作業を行うようにという意味を込めて買わせるらしい。

書かないとローン返済できないよ? って言ういわば脅しの類で買わされるんだとさ

「で?まんまと嵌められたと」

「金ありあまつてるしいつかなーって、印税なめんなよ?」

「お前こそ人生舐めんなよな」

勝ち組エリートは羨ましいもんだ。俺もそんな人生を送りたいです。

「にしてもどうよこのあたしの愛車！あたしのトレンドカラーレッドを採用した艶やかなこのボディ！」

「カッコイイけど音がうるさい」

「それはほら！アピールだよアピール」

「……にしてもうるさい」

「んもう、わかったよ、マフラーは今度外すから、でも今日だけフルスロットさせて！アクセルベタ踏みおなしゃす！」

「法定速度は守れよ!？」

こうして漑奈と不似合いな外車のスポーツカーはレイ達の住む住宅街に轟音を響かせながらラーメン屋に向かうレイ達であった。



「よっしやついた！」

「し、死ぬかと思った…！」

せつかくだからもつと走りたくない？とか言い出し勝手に高速道路に乗り、適当に運転したあとまた俺達の住んでいるこの地域に戻ってきた。

屋根全開のオープンカーで高速道路を走りもう全身に風を感じた。まるで台風の中走って家に帰っているような感覚だ。

「これで土日の出勤はあたしの車で行けるね！」

「……まあ満員電車よりはましなのかな？」

姉貴にはちゃんと運転するようにと伝えておこう。あと所々あの標識なんだっけ？とか問題発言もしてたからペーパー講習を受けてもらいたい。

「んなことよりラーメンラーメン♪」

ラーメン屋の扉をガラガラガラと明け俺達姉弟は仲良くラーメン屋に入店する。

「らっしやい！おや、漑奈の姉御と零之助じゃないかい、お久しぶり！」

「おばさんお久しぶり！繁盛してる？」

「おい！おばさんは失礼だろ！……ど、どうも店長、お久しぶりです」
「なんだい零之助、昔みたいにタメ語と敬語が混じった訳の分からない

「い言語は使わないのかい？」

「ななななんのことやらー！」

昔の俺は厨二病を患っていた。そんな中カッコつけて決めゼリフみたいに一言言つては…最後には威圧に負けてです。やます。などつけていた。

我ながら恥ずかしい思い出だ、一刻も早くこの店長には忘れていただきたい！あとつぐみの父さん義嗣さんにも！

「あつれーマッスツスは？渡したいものがあるんだけど？」

「ますきかい？……おーいますき！漣奈の姉御が来たぞー」

マッスツスこと佐藤ますき、彼女は商店街にある佐藤八百屋の愛娘兼ここラーメン銀河の看板娘をやっている。

見た目は…怖いけどそれがいいのか知らんが商店街では怖可愛いなんて言われている。

俺からしてはただの怖いやつだ、何かと睨まれてはあのセリフを言ってくる。

「大将どうしたんすか…れ、漣奈の姉御！」

「おつす！マッスツス！」

「お久しぶりです漣奈の姉御！」

「うん、久しぶりー元気にしてた？」

「はい！自分最近バンドに参加して絶賛活動中つす！漣奈の姉御に劣らない人物になるため日々切磋琢磨してるつす！」

「そうかそうか、あつはは、君はいいドラマーになれる」

「ツ〜！ありがたきお言葉！」

見ての通りますきさんは姉貴にベタ惚れなんだ。なんでもますきがヤンキー集団に絡まれていた時（暴走族はいないがヤンキーはいる模様）

「やめろ童貞共！大勢で一人の女に集って襲うとか乱行か！」

「な、なんだこいつ」

「ここはあたしの体で許してやってくれよ…まあ胸ないけどね！あつはは、はは…ふんー！」

「いッー!？」

このようにリーダー格の男の金玉を蹴り上げヤンキー共を1発で黙らせた伝説の女らしい。

その後ヤンキー集団から滯奈の姉御と呼ばれ商店街のみんなが姉貴を姉御呼びしているってわけだ。

ちなみに零之助は本当に知らない。いつの間にかそう呼ばれていたんだ。

てかぶっっちゃけ姉貴が挟まらなくてもますきは自力で何とかしてたと思うが…ここまで惚れてんだ、横槍はなしとしよう。

「これマツスツスの好きな作品の作家さんのサイン色紙！飲む機会があつてさ貰ってきたからあげるね」

「ツー！いいんすか!?家宝にして代々に引き継がせるっす！」

「そこまでしなくていいだろ、てか姉貴経由で貰って恥ずかしくないのかよ?」

「ああん?」

「嘘です。なんでもありません…」

ほれみたことか！少し突っ込んだだけでこの有様だ！そしてあれだろ、最後は…。

「……………」

ますきはレイをジロジロ長め最後はレイの肩に手を置き

「お前…可愛いな」

「……………あ、はい」

そう、何故か殺られると思ったら可愛いななんて言い出す謎の女なんだ。

可愛いとはあまり言われたくない。確かに周りから中性的な顔だね、なんて言われるけどさ…男だよ?可愛いよりカッコイイ方がいいだろ

「久しぶりだな、零之助」

「はは、だな、元気にしてたか?」

「ぼちぼちだな、最近はバンド活動で忙しいってところだ」

「……………そか」

一通りのやり取りが終われば普段通り話せる。最初の出だしが怖

いんだよこいつ、もつと姉貴に接する時みたいにしるよな

「じゃあおばちゃん！いつものセットで！」

「あいよ、零之助はどーすんだい？」

「じゃあ俺も同じので！」

「ますき半チャーハン頼んだ」

「うっす」

となりでまだかなーまだかなーと言いながらソワソワしている姉貴はさて置き、こうラーメン屋の厨房つてのは神崎家の料理担当の俺にとつてとても興味深い場所になる。

ますきが軽々と鉄鍋を片手で振りながらチャーハンを作っていく。

1回でいいからあの大きな鉄鍋でチャーハンを作ってみたい。あと我が家はガスコンロでなくIHなもんだからそこまで火力があるわけじゃないんだ。

あんな火力で、しかも鉄鍋でチャーハン作ったらきつと美味しいんだろう。

「なにレイ、そんなに料理しているマッスツスをジロジロ見て、もしかして…ほの字ですか？」

「違う、ただ鉄鍋に興味があっただけだ」

「なんだい、零之助鉄鍋に興味もつってどうしたんだい？」

「いやあれでチャーハン作ったらすげーうまいんだろうなって」

「だったら作ってみるか？」

作り終えた半チャーハンを俺達の前に置きますきがそんなことを言い出した。

「だけど…あたしのチャーハンより美味しいのは作れないと思うけどな」

「……へえー言うね、悪いが俺は長いこと神崎家の料理長やってるんでそこそこ腕はあるぞっ」

「なんだやるかあ？」

「ああ、やってやるー！」

「わーと！レイとマッスツスの料理対決だ！あたしちよつと商店街のみんなに言いふらしてくるー！」

席から思いっきり立ち上がり姉貴は店を出ていく。大声で俺とま
すきが料理対決をするといいだし数秒後にはもう人だかりができて
いた。

「1回勝負、先に言うが普段と違ったから…なんて言い訳なしだから
な」

「そつちは負けた時の言い訳を考えておくんだな！」

とは言ったものの鉄鍋の使い方なんて知らんぞ俺…味とかもなん
か市販に売ってるチャーハンの素的なやつ使って作ってるしな…。

いや弱気になるな神崎レイ！俺の数年間学んだ料理知識をこのひ
と皿に全てをぶつける勢いで！

「おっと！両者一斉に鍋を掴んだ！そして…油を入れたあー！次に
卵！おお、なんだもう訳分からん実況なしで！」

途中まで姉貴のうるさい実況があつたいつの間にかなくなってい
た。鉄鍋も案外楽に扱えた、あとは味付けが問題だ…ここで量を間違
えたら完全にますきにやられるぞ！

「な、なんだこの料理対決は！」

「俺達のますきさんが負けるはずがねえ！」

「でも零之助も気持ち悪いぐらい主夫力高いんだぞ!？」
「……………」

うおー！学年3位（過去の栄光）の脳細胞をフル回転だあー！
そして

『おまたせしました（つす）』

同時に完成した俺達は審査員の姉貴の前にチャーハンを置く。

「では先にレイのから…はむ…んーうん」

「次はマッススの…うむ、なるほどなるほど」

某アニメ見たく美味しい料理を食べたから裸になるようなことは決
してない。姉貴が裸になったところでそそられる人はいないと思う
が

「決まった、勝者は！」

『ゴクリ』

銀河の中にいる商店街の中の人達含め俺も息を飲んだ。果たして

結果は…？

「マツスツスの勝ちー！」

「よっしやー！」

「な、なんでさあー!!!」

膝から崩れ落ちその場で四つん這いになる。最近やたらと四つん這いになるのが多い気がする。こんな人生嫌なんですけど

「レイはやっぱり慣れてないからなのかなー煙の味が少しした、あと少ししよっぱい、あと米も少しくつついてる」

「惨敗じゃねーか!?!」

敗因もわからないじゃんか！なんだ、あと数回鍋を振ってればよかったのか？それとも振りすぎたのか？あーどっち!?!

「お前があたしに勝てるわけないだろ、はっはは！悔しかったら今より可愛くなってきな」

「いや意味がわからんわ!?!」

「にしても流石滯奈の姉御！やっぱりあたしのチャーハンを選ぶと思ってたっす！」

「んーでも普段食べてるレイの料理はこんなものじゃないんだけどなーやっぱり場所や道具で変わるのか」

「……………あとは普段使ってる調味器具とかな」

惨敗だ。料理なら誰にも負けないと思ってたのにー！あっさり負けちゃってるよ!?!

「……………」

「ーん？」

1人で悲しんでいる時にふと誰かの視線を感じてしまった。あれは確か…

「……………沙綾さん？沙綾さんだよね！」

「……………」

「いやー俺ずつと会いたかったんだよ？あのさ、ありりや香澄とかからなんか俺の悪い話とか聞いてない？あれ全部嘘だから」

「……………随分と仲がいいようですよ♪」

「……………へえ？」

無言のまま俺は話を無理やり続けたがそんな返事をいただいた。

「ツー」

そうだ、忘れていた…。なに呑気なことしてんだ俺は…アサシンのこと、ちゃんと考えないと

先程の沙綾さんのセリフは…嫉妬ってやつか？俺が香澄やありりと仲がいいことを知ってて、あんなセリフを？

「(沙綾さん…なんであんなこと言ったんだろう?)」

あの一言で全てを思い出す。嫌なこと、忘れたいこと、なんてものはほんの些細なことだと思ってしまう。

そして…深く考えすぎて何がどうなってる、自分はどうなるのか…恐怖が襲ってくる。

でも決してアサシンとの今日の出来事をわすれたいと思っていた訳では無いんだ。

うん、姉貴のおかげで少しだけ楽になれた時間があった。そう捉えよう。そうしよう。

「レイーラーメンできたっぽいから食べようよ」

「…あ、ああ！今行くよ」

俺は厨房から出ていきカウンター席に戻る。そして目の前に置かれていたラーメンを見て驚く

「あ、姉貴…なにこれ？」

「麺多め、脂多め、味濃いめ、死の三段活用を使ったラーメンだよ」

「……………いただきます」

明日の朝食はいららないなど一瞬にして悟ったレイなのであった。

◆◆◆

土日を終え月曜日がやってきた。

この土日は弦巻でのバイトはあまり集中することができなかった。珍しく千紗さんにガチで説教されたからな…次の土日でなんかやらかしたら首が飛んでしまう。

「おーすレイ」

「うーす柊優」

1人で登校中後ろからとある男子生徒が俺に声をかけてきた。夜

桜柊優、運動神経抜群、おまけに成績優秀、顔もいい、イケメンクソ野郎だ。

「朝練は？」

「月曜は休みなんだよ、まあ来週からは先輩達の最後の試合が近いからやるらしいけど」

「そっか、もうそんな時期か」

3年は夏の大会で引退、世代が引き継がれ2年生が部活で最高学年になるわけか

まあ俺部活に参加してないんですけどね

「そう言えばレイはクラスの出し物何にするか案考えてきたか？」

「え、何それ」

「何それって月曜の一眼目に決めるから案考えとけって上原さんが言ってただろ」

「……言われてみれば言われたような？」

あれ、待て！アサシンのことで頭がいっぱいになって忘れてたけどさ！

文化祭で白鷺さんと勝負することになってたんだっ！しかも負けたら蘭が描いた薄っぺらい本が……！これは柊優に報告して何としても勝てる出し物を決めなくては！

「な、なあ柊優……実はお前に言わないといけなことがあつてだな……」
「??？」

俺は柊優に白鷺さんと勝負することになったこと、そして負けたらあの本をバラすと脅されていることを話した。

「やばいじゃんか!？」

「だろ!?!や、やばいよな!？」

「でも待て、俺は実行委員、勝てそうなやつをあえて選択して……乗り切るしか!？」

「だな!大方三馬鹿達がメイド喫茶とかそういう系やろうとか言い出すからそれを積極的に押していこう!？」

考えている暇なんてない。何としても勝たなければあの本がばらせて人生が終わってしまう。

「とにかく！勝てそうなやつを選ぼう！もうこの際お前の判断任せ
る」

柊優にとつてメイド喫茶とはあまり面白いものとは思ってないの
だろう。

安心しろ、俺もそこまでめちやくちややりたーい！つてわけじゃな
い。

女子のおっぱいを見せれば勝ち確なんだよ！

この男中性的な顔をしながら心はゲスい。何か本当にバチが当
たつてくれないかと祈りたい。

そして出し物決めの時間がやってきた。

「はいはい、じゃあ今から文化祭の出し物決めまーす！レイ君何か
意見ある？」

「……あるわけないだろ」

一応ひまりは実行委員のため教卓に立ち司会役としてこの時間の
司会役をしていた。

それとひまりのやつなんか期待してるような眼差し送ってくるん
ですけど？

なんだ、風俗とかソープやろうとか言わせたいのか？流石にそんな
こと言うわけないだろ!?

「ひまりちゃん、ちよつといいですか」

「ん？うん、あかや紅耶君どうしたの？」

紅耶、というのは遊の苗字だ。苗字だけはめちやくそカツコイ
イ、つて失礼か

「男子諸君！少し相談があるから席を外してもらいたい！先生！隣の
空き教室使つてもいいですか！」

「ああ、いいぞ」

「流石先生！大好きだー！」

「はいはい、早く消えろ」

担任は飽き飽きした様子でしつしと手を振り紅耶遊達を含めた男
子生徒は教室を出て行く

もちろん俺も出ようとしたが

「れーくん達なんか企んでる感じ〜？」

「達つて一緒にするな」

まあアイツらの考えは何となくわかるけど今はわからない設定で
いようか

「あなた達はすぐによからぬ事を考え出す」

「だから一緒にすんなつての!？」

「レイは男子じゃないから行かなくてもよくない？」

「そんなこと言うなよ！行かせてくれよ!？」

凜といい蘭といい俺が教室を出ようとすると言言い足止めをし
ようとしていた。なに？あんたら俺のこと好きなのか!？なら好きだ
と言えよこの恥ずかしがり屋め！

教室を静かに抜け出し隣の空き教室に入る。

「神崎君が最後か」

「お、おう」

先頭に三馬鹿ごと遊、優亜、由明日の3人が腕を組んでいた。

「なあ紅耶、話つてなんだよ」

「よく聞いてくれた!」

「みんなに頼みがあつてここに呼んだんだ!」

「まじねーわ!」

同じクラスの男子生徒が三馬鹿に呼び出した理由を問いただした
ところ

「俺達は文化祭の出し物でメイド喫茶を提案する!」

「メイド喫茶こそ俺達男子の夢！女子達のメイド姿をこの目にしかと
焼き付けようじゃないか!」

「まじねーわ!」パチパチパチ

由明日はぱちぱちぱちと拍手をしていた。それは流石だー!つて
意味で拍手してるのかな？

「しかしだ！俺達3人だけが提案しても選ばれることはない!」

「なら男子全員の意見として案を出せば勝てる!」

「まじねーわ!」

まあこいつらがメイド喫茶を提案していることはこないだの件で

何となくわかった。

「(計画通り…!)」

これ押し通せば! いける! ひまりと凜の巨乳おっぱい! 勝ったも当然! だけど男子生徒全員がいいと了承するのだろうか…?

「何言ってるんだよ紅耶、お前達が言わなくても俺達が言ってたぜ」

『まじか! (まじねーわ!』』

「あつたりまえだろ、みんな知ってると思うが俺達A組の女子はスタイルもいいし顔面偏差値を高いんだ」

「それに朝日奈様もいる、もうメイド喫茶しかないだろ!」

なんだこいつら、このクラスの男子は変態しかないのだろうか…?

言うて男子生徒って10人ぐらいしかいないし? そもそも羽丘に来る時点で女目的だった…と思ってもおかしくない? だろう。

「だったら全員メイド喫茶ってことでいいな!」

「(俺達聞かれてないんですけど…)」

後ろで俺と柊優は2人して黙って聞いてたけど話に入ってすらいなかった。

「ま、まあなんとなくは予想出来てただろ?」

「…別に俺はなんでもいい」

「ええ、なにそれ?」

なんだよこいつー! こついらもだけどこいつもやっぱりなんだかんだでおかしいだろ!?

でもメイド喫茶なら確かに勝てる! 何度も言うがうちのクラスの女子は全員可愛い! でも中身残念なやつもたいたいるが…。

それでもその部分を出さなければ! たとえ相手が女優だろうがアイドルだろうが模擬店部門で1位を取って! 来店者数1位も取って! 総合1位で勝ちだー!

「よっしゃー! 勝負に行くぞー!」

『おうー!』

男子生徒との俺と柊優を除く生徒達が勢いよく空き教室から出ていきA組の教室に戻る。

「あ、紅耶戻ってきたか」

「先生！男子全員の意見です！俺達はメイド喫茶を提案します！」

「あーっ、すまん、実はだな今年はA組がステージ部門参加が決定してるんだ」

『なんだって!?!』

なにそれ！初耳なんですけど!?!

「せ、先生どういうことですか！説明してください！」

「お、俺達の夢は…？メイド喫茶は…？」

「ま、まじねーわ！」

「まじねーわもクソも正式なじゃんけんで負けちゃったからな」

羽丘では一学年のークラスは必ずステージ部門の出し物を行わなければならなと決まりがあるんだ。話的にじゃんけんで決めようとして担任が負けたつてところか、いやなにしてるの!?!

「いやー本当にすまん、でもほら！劇とかそっちの方がお前らには向いてるよ、男子と女子全員顔が整ってるからな」

『ツ！』

男子生徒を含み女性生徒全員が反応をした。

なんせ担任から全員顔が整ってると言われたのだ。他人からそう言われ喜ばない人がいるだろうか？

「なら決まりだな、劇でなんかするか！」

「だな！俺達イケメンがステージに立てば1位も当然か」

「まじねーわ」

キメ顔をしながら言う三馬鹿を見て思う。

こいつら本当に馬鹿だなーって、褒められただけで夢とか言ってたメイド喫茶捨てるんだぜ？馬鹿だろ

「じゃあ今からなんの劇をするのか決めよっか！」

改めて全員が自分の席に戻り出し物決めの会議が再開した。

ぶっちゃけメイド喫茶がよかった。メイド喫茶なら総合1位も取れたはずだ…！

そして何よりステージ部門の参加となれば同じフィールドで白鷺さんと戦うことになる。

勝ちか負けか、引き分けなんて選択はない。項目自体がないんだ。

「これはまずいぞ」チラ

「……………」コク

教卓の前に立っている柊優にアイコンタクトを送るこくりと頷く
どうやら柊優もまずい状況になっているのはわかっていているらしい。
ここからどうする…？あの白鷺さんと瀬田さんに勝てる人となれば
凛と柊優ぐらいだ。

でも凛が進んで参加してくれるとは思わないし、かといってクラスに演劇部の生徒もいないし！

「そう言えばレイ君薫さんに劇でないかって誘われてたよね？」

「あ、ああ…でも、断った」

「え!?!なんで！薫さんからの直々の誘いだよ!?!断る理由なんてあるの!?!」

いやー白鷺さんと勝負することになったから！って言えないもんね、負けたら人生も終わるって言えないもんね、となると…。

「……俺はクラスのみんななどの思い出を優先したんだよ、文句あるか」

「ツ！そ、それは…うん、レイ君ナイス」

我ながら完璧な言い訳だろ、決して嘘ではない！女装して劇にでるよりこっちの方がいい思い出になるのに決まってる！

「でも薫様からスカウトされるってことは演技力が高いってことだよ
ね？」

「そーれ、もうこの際神崎君主役の話で決まりじゃない？」

「え？いやちよつと…？何言ってるの君達？」

待って、この流れやばくない？

「そうだ！神崎君主役となればもう相手は夜桜君しかいないよね！」

「確かに！でも神崎君が女装してヒロイン役、夜桜君が主役の方が話
はいいと思うの！」

「うん！そうだ！そうしよう！」

「いやいやいやいや待ってくれって！」

俺は椅子から立ち上がり全員の視線を浴びながら口を開く

「なんでステージで男子同士がイチャイチャしている劇をやるんだよ

！」

「そこまでイチャイチャしないとと思うから大丈夫〜」

「お前は黙ってる!？」

ねえなんで!?!女装が嫌だったから演劇部から抜け出したと言っても過言じゃないのに!

なんでクラスの出し物で女装することになるんだよ!

「話は私達で考えるからさ!大丈夫、神崎君がイチャイチャしたいならそういう話書くからさ」

「まじでやめてくれ!」

「……んあ、どうしたの?」

「ッ!？」

さつきからずっと寝ていた蘭がクラス中が騒がしくなったことで起きてしまったようだ。

先程俺に話しかけてきた後すぐに寝たとしても熟睡する早すぎるだろ…

「れーくんが女装してヒロイン役の劇をするんだってさ」

「なにそれ!なんでそんな最高なことになってるわけ!え!なに!?!公認になったの!」

「お、落ち着け蘭!」

「え?美竹さんもまさかこちら側の人だったり…?」

「それは絶対にならない、一緒にしないで欲しい」

「あ…:はい」

蘭曰くBLには微塵も興味がなく俺と柊優のカップリングだけに興味があるらしい。

その興味も度を越えた薄っぺらいR18の同人誌を描くほどにだ。しかも俺が女体化してるやつ

「レイやりだよ、メイクとかならあたしが手取り足取り教えてあげる。てか教えてあげたい、なんなら毎日してくれないかな?蘭のちゃん喜ぶよ?」

「うっさい黙れ!その時々出す甘ったるい可愛い系後輩の声を出すんじゃない!」

この流れはかなりまずい……！何とかして全員の思考から俺をメイ
ンヒロインから外す策を考えなければ……！

「ツ！そうだ！柊優！お前はどうなんだ!?嫌だよな!?俺と一緒にス
テージ立つのは嫌だよな!？」

「俺は別に気にしない」

「ダメだこいつー!!!」

こいつ何かと別に別に別にと！NOと言える人間になれよこのク
ソ真面目野郎が！蘭にあれやこれは至らんこと言いふらすぞ!？」

言うことまない完璧超人でしたね！あー！畜生！

「レイ！大丈夫だって、あんな風にはならないからさ」

「あんな風にはってそのうちはなつて欲しいと望んでるんだろ?」

「YES♪」

「ツ……いい加減にしろ!」バン

『ツ!』

ザワつくクラスの中で俺が思いつきり机を叩いたことで一気に
しーんと静まり返った。

ちなみに前の席に座っていた凜はビクンと大きく肩を揺らしビ
ビっていた。

「俺はお前達の道具じゃない！人になにかやれと無理やり押し付ける
んじゃない！本人の意見も聞けつての!」

レイはそういうも先程まで凜とひまりのおっぱいで勝ちだぜ
ひやつほーいと他人に無理やりメイド服を着させようとしていた……

にもかかわらずそんなことを言っていた。

「だいたい蘭！お前は俺の事を道具のように！自分の物のようにいい
やがって!」

「……………」

矛先はクラスのみんなから蘭に切り替わる。

サークルに参加してくれるのは感謝している。でも流石にあたし
の物とか終優のものとか言われるのは人として嫌だ！

この機会を借りて言わせてもらおう。

「俺は道具じゃない、物じゃない！もう金輪際俺の……えっと、俺の話

「？」

「ここでは俺と柊優の話を書くな、なんて言えない。適当に誤魔化して言おうとした時

「……うるさい」

「！う、うるさいってなんだよ」

「うるさいうるさいうるさい！」

「なんだよ！それはこっちのセリフだろ！うるさいっての！」

「うるさい！あんたはあたしの彼氏なんだから黙って言うこと聞けばいいじゃん！」

『え？』

蘭のやつは考えることを完全に放棄して周りのことを気にもとめず彼氏なんだから、と言ってしまった。

「……えっと、蘭？今なんて言った？」

「……………レイはあたしのか、かか彼氏なの」

「あ、あはは、ま、まじか…へえーレイと蘭付き合ってたのか…」

「何露骨に悲しんでんだよ信じるなよ!？」

巴のやつはまじか…と小さく言いながら悲しんでいた。これは決して恋愛とかではなくご主人様が他の女と付き合ってたことに悲しんでいる感じだな

「嘘…だ、そんな様子全くなかったのに？」

「レイ君もしかしてリビングとかでエッチなことしたのかな？」

「つぐみ！なわけないだろ!？」

なんでもうエッチなことした前提!?!いやまあ彼女できたらするけどさー！

「……………あーあれか」

「んーあれかな？」

「つ、伝えないと…！早くりんこと市ヶ谷さんに伝えないと…!」

「なんでお前が焦ってんだよ!?!てか伝えなくていいだろ!」

モカ、ひまり、凜の3人は察してくれると思ったが…この様子だと凜は本当だと思ってるんだろう。

てかそれよりもクラスのみんなに否定しないと！

「いや！違うんだよ！付き合ってるというか複雑な関係というかなんと
いうか！」

「神崎」

「神崎君ー？」

「まじねーわ」

「あ、はい」

『詳しい話は隣の教室で聞こうか』

「だから本当に違うんだってえええええええええええええええええ!!」

蘭の問題発言により文化祭の出し物を決める話はレイと蘭の関係を
性を問いただす時間へと切り替わってしまった。

先ほどバチが当たって欲しいと話をしたことを覚えているだろうか？
まさに今がその瞬間、日頃の行いが悪かったからバチが当たった
ようだ。

かなり端的に言うときさまあみろ、だ。

「ふぎやああああああ!!」

隣の教室で拷問を受けるレイの叫び声は全クラスに耳に入ったそ
うだ。

おっぱい星人と呼ばれたことありますか？

隣の空き教室に連れていかれた俺は椅子に無理矢理座らせれ周りを男子達に囲まれていた。

「神崎！お前幼馴染が多いと思ってたがやっぱり1人と恋仲だったか！」

「神崎君には夜桜君がいるだろう！なに浮気してんだよ！」

「まじねーわ！」

「お、お前ら話を聞いてくれ！誤解なんだって！」

と言っても三馬鹿の他の男子生徒からもあーだーこうだ質問攻めされてしまい話せそうにも話せない。

「夜桜！お前も何か言ってやれ！」

「そうだぞ！彼女がNTRされてもお前は黙っておくのか!？」

「まじねーわ!!!」

「お前らまじでそろそろ怒るぞ!？」

何度言わせればわかる！俺は柊優とそんな関係になりたいと思っただことなんて微塵もないわ！

「……べ、別に俺は、き、気にしない……ってまじか、レイのやつ蘭と付き合うとか正気じゃないだろ……」

「え、なんて？」

「別になんでもない」

柊優は誰にも聞こえない声で囁き驚きが隠せない様子だった。

柊優には後で事情を説明しよう。蘭がアサシンだと勘違いされたら困るからな……。

「それより美竹さんって人気なのか？」

「何言ってるんだよ夜桜、美竹さんのクールなところがいいんじゃないか」

「あとなんか彼氏の前だとめっちゃくちやデレてツンツンのツンデレになってるさう」

「……まじねーわ！」

由明日は巴の件もあるからかあまり好ましい反応ではなかった。

じゃあお前俺を攻めないでくれよ、味方になれよ

「そういう夜桜は美竹さんのことどう思ってたんだよ」

「別になんとも思ってたない」

「眼中になし、か流石夜桜くんってところだな」

「まじねーわ?」

「ん?彼女か?作る気はなくもない」

終優のやつ由明日の言いたいことが何となくわかるのだろうか?

普通に会話してるんですけど

「と、とりあえずもういいか?ほら1限目終わっちゃうぞ?」

「そうだな、神崎の人生もここで終わりだな」

「どうする?体育館裏にはなんか大きな穴を掘ったあとがあるらしい

から地面柔らかいと思うぞ?」

「よしそこで決まりだな、あとは監視カメラと人目を気にしてと…」

「勝手に俺を埋める計画を進めんじゃねえ!」

普通埋める人目の前にしてそんなこと言うか!?一応大目に見て友達だと思ってたのに!お前らはもう友達じゃない他人だ!

「んーまじねーわ?」

「え、なんだって?レイに彼女ができるなら俺達にもできるだろうって?」

「まじねーわ!」

「おお、確かに!俺達担任から顔が整ってるイケメンって言われたからな」

「……まあ文化祭でナンパすれば1発やれるか」

「まじねーわ!まじねーわ!」

おー!由明日!お前!俺を助けてくれたのか!?な、なんて良い奴なんだ!お前はやっぱり友達だ!後の2人は知らん

「でも神崎に彼女かーずっと女に興味無いと思ってたんだけどな」

「何言ってるんだよ、俺だって男なんだから女子には興味あるっての!」

とある男子生徒は意外そうな感じでそう言っていた。悪いが俺はどうやらおっぱい星人らしいからな、女子のお胸に興味ありらしい。

「てか俺と蘭は付き合ってるぞ」

「またまたそんな嘘を、もういいって」

「どうせイチャイチャしてんだろこのリア充め！」

「だから違うっての!? 確かに付き合うか? とは聞いたことあるけどそれは別の意味で…」

「それはもう神崎が告ってんじゃないか」

「……………あ、あはは…だな、俺告ってたわ…。」

思い出せば俺から告白したんだっ! でもその後別れようとも言っただけだな…聞きいれて貰えず今回このような事件が起きてしまった。

「でも本当にお前らの思うようなイチャイチャなんてしてないんだ! お互いバイトとかバンドとかで忙しいから全く絡んでないんだ!」

「どう思いますか夜桜さん」

「レイがこう言ってるんだ、そこまで絡んでないんじゃないか? それにら…美竹さんも忙しそうだろう?」

「忙しそうって毎日寝てるだろ…つて! まさか神崎君夜に美竹さんと…!」

「んなわけないだろ!」

なんならこつちがオカズにされてるようなもんだわ! ぎげんな俺は幼馴染で抜いたことなんてないぞ!」

「おーい男子達そろそろ戻ってこーい」

「はーい、ほら担任からラブコール受けたから帰ろうぜ」

「紅耶お前調子乗るなよな」

「またまたそんなこと言っつてー先生も内心喜んでくるくせにー」
「……………」

この遊が先生をからかうのはなんの目的があるのだろうか? 意味がわからんわ

「神崎君もこういつてるし信じてみるか」

「まじねーわ」

「お前ら…! 友達に昇格だ!」

これぞ格闘のおかげだな、あと先生の呼ぶタイミング! よすぎな、

今度嫌なこと押し付けられても1度だけ言うことを聞いてあげよう。

男子全員が戻った後俺と柊優は2人して話をしていた。

「まさか蘭がアサシンだったとはな…」

「いやいやいやいや違うって、その話せば長くなるけどさ？宇宙からマリアナ海溝まで深い話があるんだよ」

「いくらなんでもそれは大袈裟すぎんか」

「いや本当にさ、サークル活動のせいで大変な目に」

大変な目にあつた。と言いたかつたがその言葉をとある人物に遮られる。

「レイおかえり、待ってたよ♪」

『……………』

柊優と一緒に何も言葉が出ない、いわば絶句状態になっていた。

あの蘭が、あの蘭がおかえり、待ってたよ♪なんて言つて抱きついてきたんだ。

「うっ！」

「ちよ?!柊優!」

柊優は恐ろしくなったのか口を押えトイレへと駆け込んだ。あいつの蘭へのイメージって本当になんなんだよ…。

「あ、あの蘭さん?皆さんからすんごく見られてるんですけど…?てか色々当たってるんですけど…?」

「えーいつもこんな感じじゃん、何言ってるのレイ」

「神崎……お前嘘ついてたのかよ」

「え!なわけないって!な、なあ蘭どうしたんだよ、頭おかしくなつたか?!」

「ツく!!!え、ええ、な、なに?い、いつもこ、こうじゃーん」

「ッ!」

う、うわー見ててわかるめちゃくちゃ嫌そうな顔してるんですけど、笑ってるけど口元ひくつかせてるんだけど

なんでこんな状況になってるんだ!?

「お前らイチャイチャするならよそでやってくれ、先生いい歳なのに嫉妬しちゃうだろ」

「だったら先生！俺とイチヤイチヤ」

「紅耶は黙ってる、あと廊下で立ってる」

「はい喜んでー！」

「……まじねーわ」

やれやれと由明日は肩を竦め、波乱の一眼目は幕を閉じたのであった。



昼休み、いつも柊優や三馬鹿達と適当に飯を食べていたのに……！

「はいレイ、あーん♪」

「……………」

「……あーん♪」

「あのさ、蘭、いつまで続けるの？」

「……………あたしもここまでやるとは思ってなかった」

「??？」

話を聞くと俺が拷問を受けてる間、蘭も同じように女子から散々質問されたらしい。

中でも夜桜君と神崎君が付き合っていないって事実がよっぽど悲しかったのか泣いている生徒もいたそうさ。

「なんで付き合うことになったの!？」

「初エッチいつなの!？」

「やっぱりレイ君ってついてるの!？」

「うん、残念ながらついてる」

「……………って答えたの」

「お前馬鹿だろ！そんなこと答えたら勘違いされるっての!？」

「そこからモカとひまりが調子乗って…」

「レイ君と蘭は小さい頃から仲良いんだよ！」

「蘭はいつつもれーくんの背中に隠れてたからねーいやーめでたいめでたい、今日は赤飯だ」

「あ、私おにぎりがいいかな」

「じゃあ凜ちゃん一緒ににぎにぎしよっか！」

「うん、にぎにぎ」

「ってなったの」

「後半ただ凜が可愛いだけじゃねーか!?!」

なんだよにぎにぎって可愛いかよ!?!あと最近俺が褒めたのか知らんけどあのなんか新しい髪型でよく来てくれるんですけど!

「でも前にレイさ柊優との関係性を無くしてくれ的なこと言ってたじゃん?」

「確かに言ったな」

「だから、ほら、あたしと付き合ってるってことにすればもう言われないでしょ」

「あー!!!その手があったか!?!って!良い風に言ってるだけだろ!?!」
「ちっ!」

「舌打ちでっか!少しは隠せよ!?!」

嫌ならしなくてもいいんだぞ?こっちの方が心に来るわ、誰も好き好んで恋人のふりとかするやついないだろ…。

っていたわ、俺普通にリサさんとも恋人のフリしてるんだった。

え、俺浮気してんじゃん、アサシン様違うのです。この子達とは何もいやらしいことをしておりません。

ですのでどうか、どうか嫉妬しないでいただけないでしょうか!?!

「有咲の方は進んでる?」

「!急に話を変えるな…まあ、進んでるよ、でもありりのやつ女の子の絵はあまり描いたことがないらしい」

隣子さんに話を聞くとSNSではよく男子の絵を投稿していたらしい。しかも中性的な顔の爽やか少年だとき、そんなやつこの世にいるわけないだろ

「有咲はテーマ決めてんだっけ」

「ああ、義妹達ってそれぞれ部活に所属してるだろ?」

春乃がテニス、夏美はバスケット、秋音は書道、冬香は水泳

彼女達の部活姿はあまり作中では、てか姉貴が資料探るの面倒く

さいと言って作中で姿絵を1度しか見せたことがないんだ。

だからありりがその絵を描いて、SSつけて人気爆発を狙おう作戦って訳だ。

ちなみにSNSではもう夏コミ参加することを発表しているらしい。早めにサークル名考えないとありりもどこどここのサークルに参加するって詳しい情報を投稿できないよな…。

「なんであたしは何もテーマがないの？」

「……お前は素の実力でなんとかなるだろ」

「……………ふん、わかってるじゃん」

確かに蘭の画力なら、あとフォロワー数ならテーマ決めるより自由にやられた方がファンからの受けもいいだろう。

まあR18はなしなんだが…あと蘭自身テーマあつたら色々文句言つてきそうだからやめた、は言えない

「レイもやつとあたしの作品の良さがわかったなら今からでも遅くない、今日泊まり来る？」

「絶対嫌です」

「もうー彼氏なのに泊まりこないのー？」

「あーうぜえあーうぜえー!!」

弁当を一気にかきこみ俺は教室を勢いよく出ていき最強の碧男子便所へと逃げるのであった。

◆ ◆ ◆

「はい、というわけでA組の出し物は「白雪姫」で決まりだな」

『はいー!』

はは、もうどうやっても変わりようのない結末だな。

時はほんの数分遡り、1時間目で出し物を決めれなかったA組は6時限目の担任が担当している英語の授業時間を裂き、出し物を決める話し合いをしていた。

そんな時蘭のやつが

「あたしレイの可愛い姿をみんなに見てもらいたいなー♪」

なんて嘘偽りのないクソがつくほどの眩しい笑顔でそう言い、モカとひまりがさらにその場を上げ俺は強制的に白雪姫の白雪姫役とし

てステージに立つことが決まっちゃった。

王子役は誰かって？あの蘭だぞ？柎優を指名しないわけないだろう。……つたく、文化祭のステージが腐女子を喜ばせる劇になっちゃったじゃねーか！

ざけんな！1位なんて取れるか!?もう負け確定じゃんか!?

「い、嫌だ……俺は平凡な学生生活を送りたい……。」

「夜桜どうしたー?」

斜め前の柎優が頭を抱え込みながらボソボソと囁き、何も知らない巴が肩に手を置き揺らしていた。

全く同感だ、どうしようか、負けたら本当に高校生活終わるんですけど……?」

「夜桜と神崎が出るならステージ部門1位も決まりだな」

「もちろんキスシーンもあるんだよな腐女子共!」

「まじねーわ」

1位だよ、ワーストな

もし万が一負けてバラされても劇のせいでハマった某作者さんが描いた……的な言い訳で乗り切れないだろうか。

文化祭が終わるまで不安しかないんだけど

「よかったねーくん、主役だよ」

「黙れ、お前は全裸でステージ上踊つとけ」

「そんなことしたらモカちゃん興奮して失神しちゃうーその後襲ってくるのかな?」

「……………」

相変わらずド変態畜生野郎だな、こんなやつ幼馴染と思いたくないんだが

「なあなあなあなあレイ！毒林檎って本物なのか!?よかつたらこっそりあたしに渡してくれないか!」

「お前もお前で脳内お花畑だな」

綺麗な花ではなくかれた花の庭園の中にいるだろこいつ

「レイ君の声全部録音しとくね！寝る前にリピート再生して聞いてみるよー」

「はい、寝息でしか寝れないって嘘ついたー知ってる？嘘ついていいのは嘘をつかれる覚悟があるやつだけなんだぞ？」

つぐみのやつは今でも寝息聞いているのかな…最近そのこと少し忘れてて寝てたんですけど、今日から姉貴なんて気にせずリビングで寝ようかな

「ハッピーエンドはベットイン！ステージでやれるなんて羨ましいな」

「このクソビッチが、俺と役変わるか？変わるか？柊優と一発やってこいや!？」

「それは無理、私はレイ君とエッチしたいもん」

「何真面目な顔で言ってるんだよこいつ…」

ダメだ、俺のまともなものな幼馴染はありりと香澄だけのようだ。

「ではHRは以上だ、あ、朝日奈、後で少し話があるから私のところに来るように」

「！」

こうして文化祭の出し物も決まっちゃってしまいHRはいつもより少しだけ遅く終わった。

「……………」ガタガタガタ

「り、凜、大丈夫か？」

「全然大丈夫じゃない、学校退学になるかもしれない…」

「なんでだよ!？」

退学になるかもしれないってなんかやらかしたのか？

「りんちゃんとうとういけないところでバイト始めたのー？」

「なんでそうなるのよ…でももうダメだ、終わりだわ」

「……何か呼び出されるような心当たりがあるのか？」

「ええ、いくつもあるわよ」

「1つ目は醜い姿のくせに学校来るなど言われ退学になる…2つ目は父さんが倒産して学費が払えなくて強制退学、そして3つ目は…」

「いやどんなこと考えてんだよ!？」

ただの被害妄想じゃねーか！んなこと起こるわけないっての、ネガティブすぎる凜がこんなことを考えているだけであって実際にはそ

んなこと起きないだろ！

「おーい朝日奈、早く来い」

「……………はい」

凜のやつ大丈夫か？なんかもう人生終わったような顔しながら担任の元に行くんだけど

「じゃあれーくん視聴覚室行こうよーもうりこさん達いるってさ」

「早!？」

流石掃除免除の女子高、そして燐子さんのタクシー、来るの早すぎだろ

「レイ君ごめんね、私テニス部に顔出さないといけないから今日は行けそうにないや」

「そか、お前は別にいてもいなくてもいい存在だからこのまま来なくてもいいんだぞ」

「こないだおっぱいに顔埋めて勃起してたくせに何言ってるのもーう!」

否定できないのが辛い、あんな幸せな出来事あれば誰だって勃起するっての、しない男子は病院に行った方がいい、いやまじで

「それと♪テニスウェア姿の私が見たいなら応援に来てくれてもいいんだよ?」

「……………考えとく」

ひまりのテストウェア姿か…ミニスカートとか履いてるのかな？うわ、何それめっちゃそられるやつやん…って変態かよ

「あたしちよつと現国の先生にノート提出しないとイケないから遅れる」

つぐみノート見せてーと言いながら去っていく蘭、俺も前までは終優のノートを移してばっかりだったなー

今は変態幼馴染に囲まれたことで授業中は寝ることないけどさ

蘭にはまたなど、ひまりにはテニス頑張れよと伝えて俺とモ力は2人仲良く教室を出ていき視聴覚室に向かった。

「おーす、おつかれ」

「レエエエイイイイ!!」

「あいた！あいて！て！いて！ちよ、ありり、ツインテレビンタやめて！」

視聴覚室に入ってそうそうありりのツインテレビンタをくらう。久しぶりにくらったが髪の毛って結構痛いんだぞ、顔絶対赤くなってる。

「お、お前！お前、ら、蘭ちゃんと付き合ってるって本当か!?」
「え、」

「本当なのか!?なあ！もうあたしのおっぱいなんていらぬのか!?答えろよ！あたし泣くぞー！」

「ありさー落ち着いて〜」

「落ち着くも何もレイが、あたしの…レイがあ…」

「あのなーありり、実はだな…」

今にも泣き出しそうなありりに罪悪感を感じた俺は頬をかきながらありりに蘭との件を1から説明した。

「てことは付き合ってないってこと…?」

「付き合ってる設定にはなってるけど本当の恋人ではない、な」

「本当か？」

「本当の本当の本当のさらに本当にだ」

「そ、そっか！なんだよーあたしは本当に蘭ちゃんとレイが付き合ってたのかと思っただぜ、今日1日ずっと変な汗かいたぞ、ったく…」

花咲の夏服はセーラー服だ。布の質感はサラサラしてるが結構蒸れるんだろう、首元が汗で濡れている。

パタパタと手をうちわ替わりにして自分の胸の谷間あたりに風を送っていた。汗が溜まるってのは巨乳の人では共通のようだ。

「てかありりは俺と蘭が付き合ってたら困ることがあるのか？」

「困るって、そりゃ困るだろ」

「なんで？」

「くっツ！な、なんでもない！」

「なんでもないって、おいおい、こっちはツインテレビンタくらってんだぞ？答えてくれないと割に合わ」

「う、うるせえー！黙っとけえー！」

「んんんんんんー!!!」

ありりに抱きつかれ顔を無理やり服越しだけど胸に顔を押しさえつけられた。

ありりのはなんかひまりと違って、うんひまりの時よりも幸せな気分になれた。

「有咲今日1日中ずっと悲しんでたからね、慰めるの大変だったよー!」

「べ、別に悲しんでねーっての!？」

「市ヶ谷さんお昼も元気ありませんでしたよ？」

「燐子さんまで!?!そんなことないですって、違うってわかったので、えへへ、大丈夫ですって」

「有咲幸せそうな顔してるー」

「えーしてるか? あつはは!」

ありりのやつすんごい笑顔だな、そんなに俺と蘭が本当の恋人ではないことが嬉しかったのか?

もしかしてありりのやつリア充が嫌いな人種の立ちか、もし本当に付き合ってたら…おっぱい使って窒息死されてたかもしれない。

「でもレイ君あの時の告白でこんなことになるとは思ってなかったんじゃないですか?」

「あ、よかつたー燐子さんはちゃんとわかつてくれてたんですね」

「凜ちゃんさんから連絡来た時は最初驚いたんですけど…授業中にそういうえばあんなことあったなーって思ってますね」

「あの時の告白ってなにー?」

「あー前にな、ちよつと色々あつて蘭に告白? したんだよ」

「え! なのに付き合っていないの! ゼロ君振られたの…? 大丈夫?」

「いや振られてねーから!」

勝手に振られた設定やめてくれーい! いや本当の恋人ではないけどさ!?! 振られてはないだろ!

いいよ的な返事の後俺が別れようとは言ったけど受理されなかったんだよ!

「モカちゃんなら彼氏でしょーって言って顔面騎乗「女子がそんな卑

「猥なこと言うなや!」……………」

こいつと恋人のふりは死んでもゴメンだな、俺の童貞勝手に持つてかれそう。

普段より騒がしく視聴覚室で過ごしていたところに

「おつかれさまー」

「……………」

「蘭と…凜?」

「……………」

蘭がおつかれさまーと言い視聴覚室に入ってきて凜は終始黙ったまま入ってきた。

「ねえもか…」

「んー? なーに?」

「もかー、もか、もかあー!!!」

「お、おーどうしたりんちゃんー」

凜がモカの肩に手を置き勢いよく揺らし出す。一心不乱に揺さぶりモカの声になんかエコーがかかっている。

「あんたいつ放送部に入部したのよ!」

「りんちゃんが喜んでくれると思つてー」

「なんでひまりも一緒なのよ!?!」

「一緒ならさらに喜ぶかなーつて」

「ツ!それは善意で?それとも悪意で?」

「もちろん善意でーす」

「はあ、悪意がないなら責めれないわね…」

放送部? 確か凜は放送同好会という訳の分からん同好会に所属してたと思うんだけど?

「実は羽丘つて部員? が3人以上で正式な部活として活動ができるようになるのよ」

「へーよかったじゃん、同好会より部活の方が響きいいだろ?」

「全然!よくないわよ!むしろ最悪よ!」

「なんでーモカちゃんとひーちゃんが参加してくれて嬉しくないの?」

「嬉しいけどそれとこれは別なの！」

嬉しいんかい、素直に言うとか可愛いかよ、てか嬉しいのに最悪ってどういうことだ？

「近日陽キャイベント文化祭が花咲と合同で行われるわよね」

「だな、生徒会も結構大変なんだぜーそういえば合同会議今週末に…って!? 必要資料まだまとめ終わってねえー!!!」

「だからあれほど生徒会の仕事は大丈夫なのーって聞いてたのに」

「うるせえー! だいたいお前暇だからってあたしの家に来んなよな! 集中して絵がかけないだろ! レイに迷惑かけてること自覚しやがれ!」

えー! ありりの絵の仕上がりが遅いのは全部香澄のせいだったのかよ!? こいつ邪魔をすることの天才じゃないのか?」

「おい香澄、まじで忙しいんだからありりの邪魔するな」

「えー別に邪魔してるわけじゃないのになー」

「お前がいるだけで気が散るんだよ、大人しくしとけや!」

「じゃあゼロ君の家に行くー! 久しぶりにまた家で遊ぼうよ!」

「話聞いてたか!? ありが忙しいなら話書く俺も忙しいっての!?!」

ただでさえ文化祭とか弦巻のバイトとか、コンビニのバイトとか執筆で大変なに香澄のお守りもするとなれば苦行だろ

「おっと、凜、話の続きを…」

「ふふ、もういいわよ、あたしのことなんてほつといてみんなで楽しく陽キャのようにバカ話しててください、陰キャの私は隣の部屋に籠っとくので…」

「そういうのいいから話せよ、まあ俺も途中で話しそらして悪かった、ごめんって…」

正確にはありりが文化祭の資料作成の話からそれたんですけどね、そこはほら、男の俺が謝るべきかと

「……文化祭では部活ごとに出し物を行わないといけならしいのよ」

「ツ!? つまりそれって!」

「正式な部活になった放送部も出し物考えろって…さつき担任から言われて」

「担任から？」

「れーくん知らないの？放送部の顧問はあたし達の担任だよー」

心底どうでもいい情報の共有ありがとう、あの人放送部の顧問だったのか？だからあの時担任から凜が呼んでるって話をしてたのか。

あの時つてのは凜との初対面の時の話な

「どうしろと言うのよ！こんなみすばらしい私が出し物をして誰が見に来るって言うのよ!？」

「これは新手的のいじめだわ、みんなから笑われる私を見て担任はへらへら笑うのよ…挙句の果てには写真を取られて一生脅され続けて、最終的に私はもう学校にいられなくなってみんなと離れ離れに…あー死にたい」

久しぶりに凜のネガティブスイッチオンになった時の発言を最後まで聞いたぞ

「りんちゃん大丈夫だって、あたしとひーちゃんがいるからなんとなるってー」

「なんとかってどうするのよ…放送部なんてだーれも知らないマニアックな部活よ、そもそもあんた達が入らなければこんなことには」

まあタイミングが悪かったよな、文化祭の後に入ればいいものをまさか俺も凜も知らないうちに勝手に入部してたとは

凜の言う通り悪意がないからあまり責めれないよな

「なあ凜、それって部活に入ってる生徒でしか出し物は参加してはいけないのか？」

「…担任に聞いてみないとわからないわ」

「そっか…まあ、そうだな…文化祭の出し物ごときで友達を1人失うのは困るし手伝っていいなら手伝うぞ？」

「ツ！へっ？い、いいの…？」

俺は照れくさそうに頬をかきながら凜に手伝うと言った。

理由としては凜の今度ある声優のオーディションの練習に全く付き合ってやれてないからその代わりについて意味を込めて手伝うと言ったんだ。

もちろん蘭とありりのイラストSSが完成したら凜のオーディ

シヨン練習にも付き合うぞ!?

「……レイが手伝うってなればあたしも手伝うよ」

「美竹さんも!」

「とか言ってるー1人だけ仲間外れになるのは寂しいと思ったからでしよ〜?」

「う、うるさい!」

「でもいいのか?イラストの方は……」

「徹夜すればなんとかなる、それにこんな好機は滅多にない」
「??」

好機?は何を言ってるんだ?

蘭のことだからなんかよからぬ事を考えてないよな!?

「……でもどうだろうね、みんながどんなに可愛くても私のような不細工が一緒にいるだけで」

「前から思ってたけど言うほどか?寧ろ整ってる美形だと思うんだけど……?」

「はああっ!」

「そうそう、りんちゃん可愛いのにそんなこと言わないでよー蘭が霞んで見えちゃうよ〜」

「モカ喧嘩売ってるの?」

「まつさかー蘭も可愛いよ〜」

「は、はいはいどうも、だからスカートめくろうとしないでこの露出変態モカ!」

「それは褒め言葉だよね〜」

「褒めてないから!あ、い、いや!パンツを脱がそうとしないでえー!!」

普段の凜の立場が今日は蘭らしい。パンツを脱がされた蘭はへなーつと床に座りモカは蘭のパンツをブンブン振り回していた。

相変わらず蘭もエチエチな下着みにつけてるよな、多分資料品だと思っけど

「蘭ちゃんスケベな下着履いてるんだね……私もそろそろ星柄の下着は卒業しようかな?」

「お前まだあんな下着履いてたのかよ!? みんなが笑ってたのはお子
ちやますぎたからなんだぞあれ!」

「えー! 好評じゃなかったの!」

余談だが決して P o p p i n Party がレズ集団で下着を見せ
あつてたーってわけじゃないんだ。

ありりの家に泊まった時とか、一緒に風呂に入るから見たりするだ
けらしい。

「香澄もそろそろ星柄パンツは卒業だな」

「確かにあつちちゃんも最近エチエチな下着買い始めたからね、姉とし
て妹よりもエチエチな下着を身につけないとね!」

「いやなんでそうなるんだよ」

意味がわからん、姉に優る妹はいないのなやつか? エロで競うなよ
!?! 馬鹿か!

てかあつちちゃんさんの情報いるか? 今度もし廊下ですれ違ったり
したらなんか俺だけ気まずいだろ!

「そうだ! 燐子さんはどんな下着履いてるんですか!」

「わ、私のですか!?! 普通の下着ですよ! 普通の! い、市ヶ谷さんはどう
なんですか!?!」

「いやあたしに話振らないでくださいよ!?! あたしも普通のですって
!」

「ほほー普通ですか、ならちよつと拝見をー!」

「きゃっ! も、モカたんちよつと! やめてください!」

「モカちゃんやめてー!」

「私も燐子さんの下着どんなのか見てみたいー!」

「戸山さんまでー!」

『……………』

やれやれ、やつぱりいつも通りこんな展開になってしまうか

「凜、なんでも1人だと思ふなよ」

「ツ!」

「別に出し物お前一人でやるってわけじゃない。みんなで作るんだぞ
? 目立ちたくないなら裏で仕事したりさ、人目につかないようなこと

すればいいだろ」

「……なに、要はみすばらしい私を客に見せないように裏方の仕事しとけってこと？」

「なんでそう捉えるんだよ!？」

「……………でもそれならなんとかなりそう。私も全部あんた達に押し付けるのはどうかと思うし」

「はは、だろ？」

凜がどうしてここまでネガティブになってしまったのか俺はわからない。でも……ここまでなってしまうのは過去に何か嫌なことがあったに違いない。

嫌なことがあったって点だけでは俺と似てるような気がする。厳密に言うとは俺の嫌は……嫌な記憶だけどさ

「なあ凜、俺さ実は……」

「ん、どうしたの？」

「……………なんでもない、それより出し物何にするか決めないとな！」

凜に昔の俺の話をして少しでも心持ちを軽くしてやろうと思った。

だけど話したところでどう反応されるのか俺が怖がったため言うことが出来なかった。

「れい、ありがとう」

「ツ！い、いきなりなんだよ!？」

「感謝の言葉を述べただけ」

そう答えた凜は少し微笑み軽い足取りで視聴覚室の椅子に腰掛けただけであった。

「はあ、はあ、はあ……あ、朝日奈が毎回こんなキツイ目にあってたなんて……」

「凜ちゃんさん大変でしたね……」

「香澄なかなかやるじゃん、どう？露出に興味はありませんか？」

「あはは！ない！」

ありりのブラを握りながら100万ドルの笑顔でそう答える香澄、見ててわかるが絵面がやばい。

「香澄！この！返せ！」

「れーくんー有咲今ノーブラだよー」

「そ、そう言えばまだ生で触らせたことなかったよな…今ならいけるか!?!、いやみんないるし…」

「有咲ーどうしたの?」

「な、なんでもない!それより早く返せ!この!」

香澄に飛びつくありりなただけどノーブラのため胸元がかなり揺れている。正直目のやり場に困る。

「ふんっ!」

「だっはあー!な、何をする蘭!?!」

蘭のやつが立ち上がり俺の足を思いつきり踏みつけてきた。骨に響くその痛みは踏まれ終わったあとの今でもかなり痛い。

「このおっぱい星人…」

「べ、別に見てないからー!?!」

「うるさい、鼻の下伸ばしてたクセに」

「え、伸びてたの?」

「嘘…だけど聞くって事は見てたつたことでしょ…!」

「あ痛っー!!」

またしても同じ足を踏みつけられ次はグリグリとじわじわ痛めつけてくる。

「でも今足踏んでる蘭実はノーパンなんだよね」

「ツ!モカ!早くあたしのパンツ返してー!!」

「えーどうしよっかなー」

蘭とモカは視聴覚室内にて走り回り先程よりもさらに騒がしい空間になってしまった。

「おいお前らその程度にしとけよ?下の階に誰がいるかもなんだから」

そうは言うもモカと蘭は聞く耳を持たず先程と同様まだ騒ぎ続ける。

「蘭ならここに来れないねー」

「くっ!」

モカは教卓の上に立ち蘭を見下ろすかのように腰に手を置き胸を張ったポーズをしながらそう言っていた。

これで察したが蘭は高いところが少し苦手のようなのだ。だから宿泊研修の時も崖から飛び降りることを躊躇していたのか。

「登ってこないよとパンツ奪えないよ〜」

「ツ〜！モカー!!」

「え?」

蘭は教卓に登る…のではなくそのままモカに飛びつきモカと蘭2人が教卓から落ちていく

「危ない!」

咄嗟なもんだったから急いでモカと蘭の近くにいき落ちてくる2人を受け止めようとした。

しかしこんな人を助けるようなヒーロー活動的なことをしたくない俺は受け止め方とか何も知らないから…

「ぐへー」

俺が下敷きになることでモカと蘭の落下の衝撃を和らげることになった。こ、腰が痛いのは気のせいではないと思う。

「あいたた、れーくん…ごめん、大丈夫?」

「だ、大丈夫…ぶ!」

俺は2人を抱き抱えるように受け止めようと思ってたたため倒れて下敷きになった際は仰向けになっていた。

腹付近にモカが、そして胸付近に蘭が、2人とも股がるように俺の上に座っている…が

「い、痛ったー…レイ、ありがとう」

「え?!いや、その…これは事故であって俺は決して…いい、意図的に見ようと思っただけでは…」

「?何言ってるの…ツ!?!」

思い出して欲しい。何故モカと蘭が俺の上に股がっているのかをパンツを取られた蘭がモカから奪い返すためにこうなってるんだ。つまり蘭はパンツを履いていない。

「なっ!な、な、なっ!」

スカートが丁度よくめくり上がり、蘭の蘭がさらけ出されていたんだ。

俺の目の前には言い方が失礼かもしれないが森林が広がっていて

モカのせいで見慣れたと思ったが違ったようだ。やはり人によって性器も変わるんだなと実感してしまった。

「おーやーおやおやおやー？蘭くれーくんに見せつけて何してるのかなー？」

「全部あんたのせいでしょこのアホモカああああ!!」

「お、落ち着け蘭！俺もお前に見られた！これでお互いチャラってことで…それにほら！昔俺のこと男として見てないこと言ってる!?!」

自分で言ってる悲しくなるが生き延びるためにはこの方法しかなかった。頼むから殴らないでー！

「だとしても友達に見られるのは恥ずかしいでしょ!?!」

「確かに恥ずかしいけどお前そんな恥ずかしい絵書いてるだろ…?」

「……………それとこれは違うでしょ!」

「うわああああああああああああああああああああああ」

「すぐ飛び出すー」

蘭のやつは泣きながら視聴覚室を出ていくが…あいつノーパンだろ、大丈夫か？

「とりあえずモカちゃんちよつと反省して蘭にパンツ返してくるね」

「おーいー蘭くパンツ忘れてるよ」

パンツを思いっきり振りながら蘭を追いかけるモカ、普通追いかける側と追われる側が逆だと思っただけ

「……………とりあえずサークル活動始めるか」

『……………うん』

普段よりも過激なことがあったからなのか、他のほぼ健全メンバーのみでの活動は短時間だけであったが、有意義な時間であったと凛は語っていた。

めんどくさい後輩から絡まれたことありますか？

『……………』

「(執筆しづらい……!)」

蘭はモカに手を引かれ視聴覚室に戻ってきたあとすぐに自分のタブレットを取り出し絵を描き始めた。

しかしだ、俺がちよくちよく蘭の方を向くとすぐく俺を睨みつけていた。

わかって欲しいがあれは事故だ、しかも蘭は宿泊研修で俺の息子を凝視してただろ、お互い様だ……と言いたいが

こうゆうのは男子が悪いって社会で決まってるんだよな、わかったよ……謝りますよ!?

「蘭ごめんって、俺も目をつぶったりしとけばよかったな」

「でも履いてなかった蘭が一番悪いよね」

「モカのせいでしょ!」

「蘭怖いー」

モカのやつが横槍するもんだから蘭がさらに怒ってしまう。

「……文化祭、覚悟してて」

「あ、はい」

どうやら監督は蘭がするらしいなこれは、こいつが監督とか何をやらされるのか不安しかないんだが……。

「今日ひまりちゃんいねーな」

「あいつは今日テニス部に顔を出すだつてさ」

「そう言えば美咲ちゃん今日は羽丘と合同練習だーって言ってたよ?」

「あー奥沢さんそんなこと言ってたかも?」

「有咲ゼロ君のことで悩んでたからねー」

「う、うるせえ黙ってろー!」

奥沢さん?美咲ちゃん?……どっかで聞いた覚えがあるんだよな

「なあありり、香澄」

「ん?どうしたの?」

「その奥沢さんってさ、ガールズバンドの一員なのか？」

「それは難しい質問だな…」

「どゆこと？」

ありりはんーと唸りながら腕を組む。もちろんその腕には大きく育てたメロンが2つ乗っかっている。

「そもそもレイがその質問をする意味がわからないんだけど」

「い、いやほら？最近お前らと絡み出して…その、ガールズバンドに興味をもったというか」

「つまりゼロ君は私のファンってこと！嬉しいなー！」

「あ、あはは…はは」

特別香澄のファン、ってわけじゃないがここは黙っておこう。へんな返事をしたらややこしくなってしまう。

「じゃあれーくんはハロハピ知ってるー？」

「ああ、瀬田さんがいるところだろ？後は北沢精肉店の娘さんと、松原さんと…黒髪で帽子被ってた子？」

「……なんで中身知ってたんだよ」

「中身ってなんだよ」

「これだよ」

ありりが携帯電話を俺に渡してきた。その画面には何やらピンクの熊？が写っている。ようするにこの中身がああ黒髪の子ってわけか？

「そして多分レイが知ってる黒髪の子ってのが中身の奥沢さんだな」

「……なるほど」

なるほど、わざわざ熊の着ぐるみを着て活動してるのか…バンドの方針で着ないといけなのだろうか？

でもなんかぬいぐるみ着てライブをするってさ…まるで観客に素顔を見せたくない恥ずかしがり屋さんみたいなことしてるよな？

「(ガールズバンドの一員だしアサシンの可能性も…?)」

記憶が正しければ俺が4月29日何してた？って聞いたらはぐらかされたしな

「(聞いてみるだけ聞いてみるか…)」

もう一度聞いてみてそれでも答えてくれないのなら…その時はその時だ。アサシンの可能性が高いとみて接しよう。

「なあお前ら…少し落ち着いたしひまりの様子見に行かないか？合同練習なら練習試合もするかもだし応援してやればひまりのやつ喜ぶぞー」

「…ひまりがテニスしてるところ体育でしか見たことないから興味はある」

「ひーちゃんちゃんと動いているのか確かめちやいますかねー」

よっし！流石ひまりの幼馴染変態共！大好きな幼馴染の応援に行こうとなれば断る理由もないもんな！

「悪いけどあたしはパスで、外暑いしそれにまだ今日のノルマ終わってねーしな」

「有咲行かないのー？だったら私も遠慮しとくよ！」

「なんでだよ！あたしで判断するなつての！」

「でも私がいなくなったら有咲悲しむかなつて…」

「ツ！わ、わかったよ、残ってくれてサンキューな」

「ありりと香澄は残るつと」

隣子さんと凜はどうだろう。2人で隣の部屋にこもり凜の声優オーディションに向けての練習相手を隣子さんがしてるし…やっぱり忙しいのかな？

「りんちゃん、ひーちゃんのテニスしてるところ見に行かない？」

「いやよ、私は今練習してるところなの、それに外なんか出たら日焼けして醜い顔がさらに醜くブサイクになるじゃない」

「り、凜ちゃんさんそこまで酷くないかと…寧ろ可愛いと思いますよ！？」

「それにテニス部が文化祭でなんの出し物するか聞いてきー？参考にできるかもー」

「…もかが聞いてきてよ」

「い、く、よ、ね〜？」

「ひっ！は、はいっ！」

指をわしやわしやさせゆっくーりと凜に近寄るモカ、その光景が

よっぽど怖かったのか凜ははいと即答した。

「燐子さんは？」

「私、ですか？」

「ありりと香澄は残るみたいなんですけど…俺的にはモカの暴走止めるためにも着いてきて欲しいんですけど」

「…すみません、今日はちよつと体調が悪くて、安静にしときたいので遠慮しますね、ごめんなさい…」

「いやいいですって！頭を上げてくださいよ！」

そんなガチで謝られても困るんですけど…？俺はただ奥沢さんと少し話がしたいからひまりの様子を見に行くだけなんですけど!？」

「じゃあ行くのは俺、モカ、蘭、そして凜の4人だな」

「おい朝日奈、日焼け止め貸してやるから塗ってけ」

「…市ヶ谷さん、今度ご褒美としておにぎり買ってあげる」

「ご褒美かよ、そこはお礼だろ!？」

ありりから日焼け止めを借りて体の至る部位に塗り分け準備が整ったところで視聴覚室を出ていきテニス部が活動しているグラウンドに向かう。

が、その途中にだ。

「おや、神崎！」

「神崎君！そろそろレイコちゃんの連絡先をだな」

「まじねーわ」

「お前ら部活に参加してないなら早く帰れよ」

放課後何故か高確率で遭遇してしまう三馬鹿ごと遊、優愛、由明日、なんでこいつらはこんなにも暇なんだ？

「今日は花咲のテニス部が合同練習でこの羽丘に来てるらしいんだ」

「今度ある文化祭でさ、踊る人見つけるための調査を兼ねて見物に行くんだ！」

「まじねーわ！」

文化祭で踊る相手、ねー

この羽丘の文化祭の後夜祭で一緒に踊ったカップルは永遠の愛で結ばれる的なジंकクスがあるらしい。

ちなみに去年の俺は後夜祭にすら参加してないがな！

「あー文化祭の結びの話？あれって恋人同士じゃないと意味ないでしょ」

「わかってないな美竹さん、文化祭までに付き合えばいいんだぜ」

「君達2人は付き合ってたんだから仲良く踊つときな」

「まじねーわ…」

由明日のやつは泣きながら俺を見てくる。うわー本当は付き合つてないんだってこいつにだけいいいてえー

「黄海くんはレイコちゃん狙ってるんじゃないの〜？」

「そうなんだけど神崎君が連絡先を教えてくれないからな…」

「あんたにレイコを渡すわけないでしょ」

「美竹さん冷たいなーそんなこと言わずにさ！神崎君と幼馴染ならレイコちゃんとも幼馴染だよー」

「レイコちゃん携帯持つてないんだよね〜」

「このご時世に携帯なしで生きてるのか!？」

このご時世でもな、案外携帯なしでも生きていけるんだぜ？俺なんてもう数ヶ月間携帯なし生活してるから

「だ、だったら神崎君の家の電話番号を」

「くどい、あんたそんなんだとレイコに嫌われるよ？」

「なっ！」 ガーン

明らかに悲しむその様子を見た俺は何となくだけどすまないと思ってしまう。

レイコなんて人物はこの世に存在しないのにな、そんな子を気に入るとはなんて可哀想なやつなんだ。

「畜生！絶対花咲のテニス部の中からタイプの子見つけてきてやるー!!」

「おーい待てよ優亜…つてことなんで！ちなみにだが俺は誘う人もう決めてるけど付き合いで行くだけだから！」

「まじねーわ!？」

その発言に一番驚いたのは由明日だった。親友がもう誘う人を決めていたとなるとそりゃ驚くよな

「行っちゃったね、今度女装して黄海くんの前に出てみれば？」

「てか多分だけど劇の時に正体バレるでしょ」

「……だといんだけどな」

レイコなんていなくて実は俺でしたーってなれば潔く諦めてくれるだろ

それよりもアイツらが凜に反応しないってなんか珍しいな

「……って、凜のやついないし」

「……よ」

「うおー！」

「絡まれると面倒いから隠れてた」

通りであいつらは凜の存在に気づかず話すだけ話して去っていったのか、でも女子トイレに隠れるとはな

「トイレっていいわよね、完全個室だしこもってもお腹痛いといえ
ば済むし……でも上から水をかけられたら最悪よね」

「凜？」

「それにトイレでぼっち飯してる所を同じクラスの女子に見られて：
教室に戻るとクラス全員が私を見て笑ってて、黒板には大きく朝日奈
凜便所飯してたと書かれてて……」

「りんちゃん戻ってきて〜」

「んあーんあーんあー……」

思わぬ所でネガティブスイッチ入ったな、今後凜にトイレについて
の話は絶対しないようにしよう。

毎回思うが考えることが怖いよな、ネガティブじゃなくても実際に
そんな出来事が起これば人間誰でも傷つくぞ

モカが凜は慰めながら俺達は改めてグラウンドへ向かう。

数分歩き、凜もだいぶ落ち着いたところで

「はい休憩ー、各自ちゃんと水分補給するように」

『うーす』

丁度サッカー部が活動している付近を歩いてたため、キャプテン
らしき人物の声と部員達の声が聞こえた。

「？レイ、お前ここで何してるの……げっ」

「げっ、ってなによ」

「……悪いけど俺はあれをあれであーしないといけないからお暇するわ」

「ちよ！柊優！この際だから言いたいことがあるんだ！」

「いやいいって、よくよく考えたんだけど蘭がお前と付き合ってくれたらこっちも色々と助かるからさ」

「なんの話だよ!？」

俺は柊優に蘭とは本当の恋仲ではなく、表上の付き合いであることを説明した。

もちろんサークル活動の一環で蘭に告白らしきことをしてしまっただけとも説明した。

「……そっか、付き合ってるのか」

「なんで悲しむんだよ」

「さっきも言ったがお前と蘭が付き合ってた方が何かと都合がいいからな……」

「例え本当に付き合ってたとしてもあんたはあたしのサークルの一員だから手伝ってもらおうけどね」

「畜生！早く辞めたいぜあんなサークル！」

「あんなってなによ！あたしとあんたの2人つきりじゃない！」

「2人つきりだから大変なんだろう!？」

この完璧超人な柊優ですら蘭と絡むとこんなやつになってしまう。本来の柊優はこういうやつなのかもしれない

「ねえねえ、蘭と夜桜くんは知り合いだったのー?」

『あっ』

そう言えばこいつらいたな…完全に忘れてて3人だけで話をしてたよ

「んん、では今度こそ俺はあれがあれなのでっ」と

「待って」

「え、」

「こいつはあたしの参加してるサークルのリーダーやってんの、だから知り合い、それだけ」

「あーだから昔蘭の家に行ったく聞こうにも話すタイミングなかったし？ずつと聞けなかったんだよねー」

「……そうだ、その通りだ」

苦し紛れの嘘が通じてよかったですね

あとちよつと思つてたけど中学の時から蘭の家で生活してたらさ？モカ達に目撃されていてもおかしくないんじゃないかって思つたらモカには見つかったのか

「じゃあ夜桜くんは変態なんだーきゃー変態だーれーくんか弱いモカちゃんを守つてねー」

「くつつくなそこの変態！」

「へ、変態……？俺が変態だと？蘭と同じ変態だつて……？違う、俺はあの時奪われたパンツを取り返そうと……！」

「なんかブツブツ言つてて怖いんですけどこの人」

凜がジト目を柊優に送るも柊優は気づかない。余程変態と言われたことがショックだったんだろう。

そんな時柊優の後ろからある人物が顔を出した。

「柊優せんぱーいっ！スポドリ持つてきましたよ！」

「！お、おう、ありがとう楓凜」

「はい……おや？この方達は？」

「やばい！」

凜のやつは慌てた反応をしたかと思えばモカの背中に隠れだした。

「あつれー！姉さんここで何してるの!？」

「……さ、散歩」

「え！散歩！確かに姉さん散歩大好きだもんねー！」

「………凜ちゃんは普段から散歩をー？」

「はい！暇な時とかよくそこら辺歩いてますよ！よく知らないおじさん達に声はかけられてますが！」

ナンパされてんじゃねーか!?!でも凜のやつ1人でナンパ達から逃れることはできるのか？

「ちよつと楓凜、恥ずかしいからそんなこと言わないでよ」

「もう姉さんそんな所で隠れてないで早く出てきてよー！」

「絶対に嫌！」

「おお、人前でこのような反応をするということは…あなた達が姉さんのご友人の方ですね！」

判断するの遅いだろ、一緒にいるだけで友達だと思ってくれないのかな？

「紹介が遅れました！楓凛は朝日奈楓凛といいます！以後お見知りおきをー！」

「……あれ！美竹せんぱいじゃないですか！」

「……………なんで知ってるの？」

「なんでって、楓凛と声が少し似てるなーって思ってたので気になっ
てたんですよ」

「似てるのは気のせい、それに似てたとしてもあたしの方が先に生ま
れてるしCVだってついてる」

「ちよつと何言ってるか分からないです」

「ちっ！」

「落ち着け蘭！後輩に一体何をしようと言うんだ!？」

今にも胸グラ掴みそうな勢いで楓凛に近づく蘭を押さえつけ、宥め
させる。

「そして隣の人はせんぱいですか」

「せんぱいって俺のこと？」

「はい、せんぱいはせんぱいですよね！」

「せめて苗字とかつけてくれないんだぜ？」

「いえ、せんぱいはせんぱいなので…」

「あ、はい」

苗字すらつけれたくないほどなのか？なんか全く面識のない後輩か
ら嫌われているのは傷つくぞ

「楓凛と仲良くなれば苗字をつけてせんぱいと呼んであげますよ！」

「いや別にいいよ、そこまで仲良くなりたいとは思ってないし」

「え、こんな可愛い系後輩から親密度あげると報酬がありますよって
ギャルゲー的な感じで接してあげてるのに喜ばないんですか…？せ
んぱいもしかして本当に男の人にしか…」

「待て、なんでそうなる?」

「だってせんぱいは柊優せんぱいとできてるって私の学年では結構有名な話ですよ?」

「嘘だろおい!」

「聞きたくもなかった情報じゃないか!なんで同学年にとどまらず下の学年に変な噂が広まってるんだよ!」

「せんぱいさんさー、姉さんのこと可愛いと思ったりしませんか?」

「ん?あ、ああ…まあ可愛いよな」

「だったらその妹の楓凛も可愛いと思うはずですよね!」

「……………」

はつきり言うが俺はこうゆう後輩系の女子は嫌いなタイプなんだ。

確かに先輩!って呼ばれたい欲はあるけどこんな後輩はいやだ!

もつと清楚系がよかった…。

「楓凛、だいたいあなた家ではもつと声低いでしょ?」

「何言ってるの姉さんー楓凛はいつも可愛い声だぞ!」

「……もういい、早くひまりのところ行こうよ」

「そうだな、じゃあなこうはい、またな」

「ぐぬぬー!この楓凛を後輩呼びとは!せんぱいあまり見ないタイプの人ですね…」

俺のことを苗字もつけずにせんぱいと呼ぶなら、俺も同じようにこうはいと呼んでやろう。

「妹ちゃん、りんちゃんと性格真逆だったねー」

「一応聞くけど姉妹なんだよね?」

「……うん、姉妹、姉妹だよ…」

「それよりいい、前に私が妹には興味もたないって言ったの覚えてる?」

「そう言えば言ってたな…確かにあれは興味もたないわ」

嫌いなタイプの人だしな、中学の頃にいた人によって態度変える女子と同じぐらい嫌いなタイプだ。

「……………このおっぱい星人」

「なんでそうなる!?!」

何故か凜にそう言われ俺は突っ込むも凜を含めたモカ、蘭も何も反応しないままスタスタとテニスコートに向かつていくのであった。

◆◆◆
「フアイター！」

『はいっ！』

うわ声高いなー、はいつて声はかなり高い。先程のこうはい並に声が高い。

こちらキャプテンらしき人物が声を出しあとからテニス部の部員達が答えるようにはいと返事をしていた。

「(にしても…スカート短いよな)」

元女子校つてのもあるのかスカートが短いのは気の所為だろうか？

「スカート短いよねー」

「れーくん有咲のために資料写真撮ればー？有咲喜んでおっばい揉ませてくれるかもだよー？」

「心配するな、ありりなら何もせずに揉ませてくれる」

「幼馴染をそんな目で見るなんてとんだ変態ね、言っとくけど私は絶対対に触らせないからー」

「モカちゃんは例外だよねー？」

「ちよつと！外では触らないでとあれほど！んぎやあー!!」

「お、おいその辺にしとけよ？」

外でそんな声出されたらみんなからの注目浴びるだろうっての！周りのことを考えて欲しいものだ。

「凜ちゃんの声がある！凜ちゃんの声がある！凜ちゃんー!!」

「ほらひまりのやつ気づいたじゃんか」

ひまりが走ってこっちにやってきて凜に抱きつく

「ひ、ひまり、あんた汗かきすぎ、ちよつと離れてよ！」

「だってたくさん動いたし汗もかくよーレイ君匂い嗅ぐ？」

「誰が嗅ぐかこのビッチが」

ひまりのやつたくさん汗かいてて少し服が透けてる気もしなくもない。汗かきすぎだろ…。

「実はさつき先輩達と暑いからって水かけあってたの！」

「部活をしろ、合同練習なんだから!？」

「休憩時間ぐらい遊んでもいいじゃん!それにレイ君、さつきからずっと胸見てたの気づいているからね」

「うう」

「ちつ、このおっぱい星人」

「やめて!俺今日だけで何回そう呼ばればいいの!？」

「おっぱい星人のレイが悪い」

酷い、事実だとしてもあまり言つて欲しくないことなんですけど!？」

「上原さん、練習試合始まりますよー」

「あ、はいー!」

「もう上原さん濡れすぎです。早く着替えてくださいね」

「レイ君がいたから濡れちゃったよ」

「誤解を生むようなこと言わないでくれよ!？」

大体俺に近づいてすらないだろ!？俺がどうやってお前を濡らさせるのかわからんわ

数分後コートには羽丘の生徒達が着ているテニスウェアとは異なる姿をした可愛らしい女子生徒達がテニスコートに並び始めた。

「あれが花咲のテニス部か」

よく見ると奥沢さんらしき人物もいるな、前とは違って髪を一つ結びしてるようだ。テニス中邪魔になるからだろうか

「よーしー私も気合い入れるよー!!」

ひまりはそう言いながらポケットをあさりヘアゴムを取り出し髪の毛を結び始めた。

短めのポニーテール、正直そのひまりの姿を見た時ドキツとしてしまった。

女子が髪型を変えると印象がガラリと変わるのには凜でわかったけど：ずっと長いこと同じ髪型をしてたひまりが急に髪型を変えたとなると自然と見入ってしまう。

「れーくんひーちゃんのこと見すぎ」

「い、いや…あいつあんな髪型も似合うだなんて」

「……………今度ひまりに報告しとこう」

「やめろ、あいつすぐに調子乗るからまじでやめてくれ」

テニスコート外のフェンス越しでしか見れない、それでも分かるほど、悔しいほど似合ってやがる。

「練習試合とか青春かってね、私も青春生活を送りたかったわ…」

「まだ学生生活終わってないだろ」

あとサークル活動が楽しくないみたいなのはやめて欲しい。なんか悲しくなるだろ

そうこうしているうちに練習試合が始まった。ダブルス2ペア、シングル1ペア、先に2勝した方が勝ちってところか？

ちなみに1勝するのには2セット取らないといけならしい。悪いがテニスはそこまで詳しくないんだ。

ひまりは…ダブルスで参加するのか、何やら部活の生徒と話しているみたいだったし

最初のダブルス戦は花咲の勝ちのようだな、次のひまり達が準備をしている時に！

「いつー！」

タイミングよくボールが足元にころがってきたことにより、ひまりのペアだと思われる女子生徒はボールを踏んでしまう。

そのせいで足首を捻り大声で泣き出していた。

「あれは数週間痛めるやつね」

「凜、詳しいのか？」

「見てわかるわよ、あれで今から試合とかできそうにないわね」

「うわあー！ど、どうしたの！誰にやられたの!？」

「う、上原さん…私はもうダメみたい、ぐはーほ、ほらこんなにも体はボロボロだよ…」

足首捻っただけで血を吐くのか!?!ど、どうゆうことなんだよそれは…

「早く担架をー！」

ひまりのペアの女子生徒さんは担架ではなくキャプテンらしき人物におぶられ保健室に連れていかれた。

ちなみにキャプテンはレギュラーメンバーじゃないらしい。どゆこと？

「ひまりちゃん部活あんまり来ないからペアでやれる人いないよー」

じゃあなんでレギュラーメンバーとして練習試合に出てるんだよ、毎日部活参加してる人を選んでやれよ！キャプテンとか可哀想だろ!？」

「うー！レイ君助けてえー！」

「助けてと言われてもどうもできないっての…」

「仕方がない。モカちゃんが一肌脱ぎますか？」又ギ又ギ

「言葉の意味が違うだろ!？」

「でもテニスウェア着ないとだしー」

「そもそも部活入ってないんだから参加が認められるわけないだろ」

「青葉さん！上原さんをよろしくお願いします！」

「おっけー任せました〜」

ダメだ、このテニス部全員頭のネジが吹き飛んでいるようだ。羽丘

テニス部は常識が通用しないやばい部活だよ

「もか、本当に参加するの？」

「ひーちゃん困ってるしね、友達が困ってたら助けるのは当然だよね」

「でもモカテニスできるの？それに相手はテニス部の生徒なんだけど？」

「まあモカちゃん天才なのでー何とかかりますって」

「お前本当に参加するのか？大丈夫なのか？」

「れーくんモカちゃんの心配してくれるのー？嬉しいなーありがとう
〜キスしてもいいー?」

「心配した俺の気持ちを返して欲しいんだが」

急いでテニス部の部室に連れていかれたモカはテニスウェアに着替え、髪の毛はおさげにしていた。

あの髪型って…小学生の時はおさげだったような？なんか懐かしいな

「モカー！よろしくね！」

「うちらサークル変態組の力を見せつけよー」

「自覚してるし」

「それは俺も思った」

「あの二人に勝る変態なんて……れいぐらいだよ」

「おい待て、俺と一緒にするな」

毎回のことだが俺は自分から触りにいったりはしてないだろ、あつちから来てるんだつての、一緒にしないのでいただきたい。

「ばっちこーい」

モカのそのセリフで試合は始まった。相手はテニス部だつていうのにモカのやつは普通に球を打ち返し、早いサーブも打ちなれているかのように簡単に打ち返していた。

本当に天才なのかもしれないと思つてしまうぞ

「マッチポイント！40—15」

ここでひまり達がブレイクしたら1勝か、まさか勝つとは俺も蘭、凜も思つてなかっただろう。かなり驚いていた。

「モカ！ちゃんとサーブ取つてよね！」

「任しとけー」

モカは構え出すが構えた瞬間強い風がテニスコートを襲う。

「きゃっ！」

テニス部の試合に参加してない生徒達はスカートがめくれ上がらないよう押さえつけていた。

……一部の生徒は除いて、な

「おっ？」

「ありやー」

フェンス越しではあるが目の前にいたモカとその前にいるひまりのスカートは風によってめくれ上がる。

「……………」

モカのやつは相変わらず履いてないため後ろにいた俺、蘭、凜はもろにモカの生尻を見ってしまう。

相変わらず赤ちゃんのように綺麗なお尻をしてやがる、嫌でも見慣れてしまつての

「はあ、あの馬鹿は」

「……………変態」

「だから俺は見せられてるんだってえー!!」

その後は何事もなかったようにひまりとモカのダブルスペアは試合に勝つのであった。

◆◆◆

試合は2―1で羽丘の勝利、最後のシングル戦はテニス推薦で入ってきた女子生徒がもぎ取ったようだ。

ちなみに相手は花咲のキャプテンらしい。うちのキャプテンとはレベルが違うな

「(そろそろだな)」

「……悪い、モカ達にちよつと飲み物買ってくるよ、お前らもなにか飲むか?」

「……じゃあコーヒーで」

「あんたからの奢り…?人からの奢りなんて毒が盛られてる可能性が高いのよ」

「俺がいつ毒を盛るのか教えて欲しいな」

「……………甘酒で」

「この季節売ってるかな…」

蘭はコーヒーで、凜は甘酒か、俺の記憶が正しければうちの自販機に甘酒は売ってなかった気がするんだが

「ほらみろー!」

温かい飲み物なんて上の1列しかないっての!この際仕方がない、無難に緑茶でも買っていくか…おにぎり好きなら緑茶も好きだろ

俺はモカ達と蘭達の飲み物を買うのと同時に1本分多めに飲み物を買っていた。

「ほら、ひまり、モカ、おつかれさん」

「あ、ありがとう…レイ君が気が利くんだね!」

「もうそんなにモカちゃんのご褒美が欲しかったのかなー?後で見ただけ体の全部位見せてあげるね」

「……蘭はコーヒー、凜は…甘酒がなかったから緑茶で」

「ありがとう」

「緑茶ならおにぎりと一緒がいい…」

「おにぎりなら今度握ってきてやるから」
「うむ」

うむってなんだよ、キャラ設定間違ってるだろあんた。

俺は結局モカには返事をしないまま真の目的、奥沢さんと話すために花咲の生徒達が集まっているベンチへと足を運ぶ

ちょうど奥沢さんが1人でいるタイミングを見計らって…!

「……ふう、疲れたあー」

「お疲れ様、惜しかったね」

「ツ!?!」

髪を解いている隙に話しかけたら思いのほか驚いている様子なんだけど?

「え、な、なに、か?ようですか?」

「……………お疲れ様」

「あ、はい…ありがとうございます?」

特に言うこともなかったからお疲れ様といい先程余分に買ったスポーツドリンクを渡す。

「あつはは、ごめんごめん、あの俺のこと覚えてるかな?ほらGWの時に松原さんの道案内してた…」

「……………はいはい、零之助さんですね、その説はどうも」

「零之助は商店街の人達が勝手につけた渾名なんですけどね…本名は神崎レイです」

「じゃあ神崎さんですね」

まあそうだよな、全く絡んだことがない人なのにいきなり名前で呼ぶようなフレンドリーな人に見えないもんな

「今でも松原さんは道によく迷うのかな?」

「あはは、あの人は道を常に間違えないといけない性と言いますか…」

「まだ迷ってるのか」

「おっしゃる通りです、うちのはぐみが…バンドメンバーがよく走り回って探すんですよ」

あの人を走り回って探すとか体力ありすぎだろ、でも少し目を離すだけでいなくなる人だからな…走り回ないと探せ出せないってな

「へーそうなんだ…」

「あの、なにか私に用があつて話しかけてるんですよね？そろそろ練習再開しそうなので聞くなら早くしてくれませんか？」

「！わ、わかつた。単刀直入に聞く」

まさか俺が質問するために話しかけたと察してたとは、この子できる子なのか!?!って冗談はここまでにして

「覚えてたらでいいんだ、4月29日…何してたか覚えてる？」

「その日はバイト、急に手伝って欲しいと言われて…うん、確かにその日だ」

「バイトってなに？」

「何って、ミッシェルのぬいぐるみ着て子供達に風船配るバイト、あたしも最初はそんなバイトなんて知らなかったんだよね…」

「なるほどね」

ミッシェルとはあのピンクの熊のことか？ぬいぐるみを着てバイトとなると中身が奥沢さんじゃなくてもできるよな？

となると奥沢さんはその日別の人にバイトをお願いしてて？俺にアサシンとして告白をしてきた…って可能性はあるよな

「証拠ってある？」

「…あのーなんでそこまでして根掘り葉掘り聞いてくるんですか？もしかして…ス」

「おいストーリーカーって言おうとしたか？違う違う、これは本当に宇宙よりも広い話があるんですよ」

「ちよつと待つてください」

近くのリュックから携帯を取り出し数秒携帯をいじったあと携帯の画面を見せてきた。

「これでいいですか？」

見せてきたのは一枚の写真、苦笑いしながら子供達と一緒に写っている奥沢さんの下半身はあのミッシェルという熊の着ぐるみだった。

携帯の写真フォルダーには4月29日の17時42分と微妙な時間が表示されている。

「……子供達の夢を壊すようなことはしてはいけないと思いますけど

「？」

「いやいや、暑すぎて休憩してたら押し寄せてきたんだって、その後本当のミツシエルは風邪をひいたからおねーさんが代わりにしてたつて、騙してごめんねと誠意を込めてちゃんと謝ったから」

「……そかー」

そこまで言うなら嘘ではないのだろう。それにだ。こんないかにも大変そうなバイトをした後すぐに羽丘にやってきて俺に告白をする余裕はない、かな？

それに俺が掘り当てるタイミングとか近くにいないとわからないだろ？

となるとアサシンはやはりあの日すぐ近くで待機していた？

待て待て、アサシンは嘘つきなんだぞ？今まで聞いた人の中にアサシンがいて実は嘘をついていてえー！

「（ああー！考えると考えがまとまらない！）」

矛盾しているようだが考えれば考えるほど頭が混乱してしまう。くそ、彼女が嘘つき屋さんでなければガールズバンドメンバー全員に質問しまくれば聞き出せるかもしれないのに！

しかしそんなことをしても意味が無い。何故なら彼女は嘘つき屋さん、聞いた人が真実を語っているのか明確ではないからだ。

それも聞いた人が本当のアサシンなら尚更、な

「そろそろ行ってもいいですかね」

「あ、うん、ありがとう……わかったらちゃんと言すから」

「？うん？」

「……じゃあまたどこかで」

とりあえず奥沢さんの可能性は低いと見ていいよな？あんな写真見せられたらそう思うだろ

俺は蘭達がいるテニスコート外に戻る。

「奥沢さんと何話してたの？」

「別にーただの世間話」

「……あんた奥沢さんのこと狙ってるの？」

「はっ!?なんでだよ！」

「テニスの試合中ちよくちよく見てたじゃん」

「見てたじゃん…ってそれを知ってる蘭はちよくちよく俺のこと見てたってことだよなあっつ!？」

最後まで話を聞かなかった蘭は俺の足を思いつきり踵に力を込めて踏んできた。

「べ、別にあんたのことちよくちよく見てたわけじゃないから!ふらふら頭揺らしてたあんたが悪いんだから!」

「はいはい、そうしときます…よおっつ!？」

またも足を踏まれ俺は踏まれた足を抱え込みその場で悶絶する。骨の芯があるのならそこに当たった気がするもしなくもない。折れたりヒビが入ってないことを祈る。

「暑い、死ぬ、もう帰りたい…」

「そ、そうだな、じゃあ帰るか」

「ふん」

「いつまでま拗ねてんだよ、わかった、俺が悪かったから」

「なら許す」

俺は全く無実なんですけどね、こうでもしないと蘭のやつ機嫌治さないだろうし…。

「ひまりーそろそろ帰るよ」

「えーもう帰っちゃうの?今日はまだおっぱい触ってないよね?」

「お前の胸を触らなくても生きていけるっての!？」

「ちよつと待ってよーモカちゃんも帰るから」

「だったらはよ着替えてこい」

部活棟付近でモカを待つこと数分、その間凜があまりにも暑いと連呼して苦しそうだったから先に帰らせた。

ちなみに蘭は付き添いで凜の手を引っ張り、一緒に視聴覚室に戻って行った。

「おまたー、おろ?れーくん1人だけなの?」

「凜が暑いって連呼するからさ、先に帰らせた。蘭はその付き添いな」

「れーくん1人だけで待つなんて偉いねーよしよししてあげるーよしよしー」

「ばっ！き、触るなよ…恥ずかしいだろ」

小学生を甘やかすように俺の頭を撫でるモカ、こんなところもし誰かに見られてみる、恥ずかしいっての

「はあ、帰るか」

「うんー！」

そう笑顔で答えるモカを見て、すぐに振り返り生徒玄関に向けて足を動かす。

「ねえねえー今日美咲ちゃんと何話してたの〜？」

「んーなんて言えばいいのかなー、わからないから言えねーや」

「何それー気になるやつじゃん」トントントン

視聴覚室に向かう途中の階段で後ろを歩いていたモカが急に俺の前に来て2階と3階の踊り場に立ち

「あは〜♪」

なんて言いながらおもむろにスカートを上げてモカのモカを見せようとしてきた。

「ちよーモカー！」

俺は急いで顔を逸らすもモカから何も返事が返ってこない。

……そろそろいいだろうか、俺が見なかったからスカートを元の位置に戻していると勝手に思い込み前を向き直す。

「ッー！」

「はい、見たくれーくんやつぱりモカちゃんの体が大好きなんだねー」

「お前が勝手に見せてるんだろ…」

ガクンと肩を落としてその落とした体制のまま階段を上る。

その後もトントンと軽い足取りで階段を上り、俺の前に来るたびスカートをめくり上げ見せつけてくる。

こいつと2人つきりで向かおうとした俺が馬鹿だった。今度からは他の人を連れてこよう。いや、もうこいつとは階段と一緒に登らないことにしよう。

地獄を乗り越え無事に視聴覚室のある階層につき、重いドアをこじ開ける。

「ただいま戻りましたー」

『ッ!』

「な、なんだよ」

俺が戻ってきた瞬間、燐子さん、凜、蘭、香澄、ありりの5人がビクンと驚くような反応をした。

「ほら、燐子さん!早く言わないと!」

「い、いえ!こ、心の準備が…!」

「…りんこ、ここで女にならなくてはならない」

「女につて卑猥なことするわけではないんですよ!」

「なら早く言うべきですよ…くっそーあたしだつてレイと…ごによごによ」

な、なんだ一体?燐子さんは俺になにか言いたいことがあるのか?

「れ、レイ君!」

「あ、はい!」

「今度!今度でいいので、その…」

「私とデートしてください!」

「…え?」

思いもしなかった燐子からのデートのお誘い。何故彼女がレイにデートのお誘いをしたのか、それはまだ視聴覚室に残っていた彼女達のみ知っているのであった。

女子からデートに誘われたことありますか？

レイ達がテニスコートに向かった時、視聴覚室に残っていたサークルメンバー達は普段より静かな空間を満喫していた。

「なんかモカたんとひまりちゃんがないだけで静かですね」

「ですね、不思議な感覚です」

「モカちゃん達がすぐに暴れるからね！」

「おめえもだろ、香澄」

有咲は手に持っている絵を描く専用のペンで香澄のほっぺをつついていた。

「くすぐったいって〜」

「ふふ、2人は仲良しなんですね」

「は、はいー!?べ、別にこれぐらい普通だつての…ですつて！」

「有咲言葉変だよ?」

「うるせえ！」

「んん、それを言ったら燐子さんだつてあこちゃんと仲良いじゃないですか!」

「あこちゃんとはNFOでも遊びますし、普段も一緒に買い物行ったりもしますからね」

「だつたら同じじゃないですか!」

有咲の言う通り同じだ。違うとなれば歳の差とNFOをしてるかしてないだけ、バンド活動は共通のようだが…。

「…市ヶ谷さんはレイ君と小さい頃からの幼馴染、なんですよね?」

「小さい頃、ですか…まああいつあたしのこと男だと思ってたらしいですけどね」

「昔は川に行ったり風呂に一緒に入ったりしたんですけどね…」

レイもそのことは確かに覚えている。それでもレイは有咲のことを男だと決めつけていて離れ離れになった後は再会するまでずっと男の子だと思っていた。

「小さい頃っていくつ?」

「小一の夏頃だな、家族絡みでキャンプにも行ったことあるんだぜ?」

「ッ！ごめんなさい、私そんなつもりじゃ…」

「あーいいですよ、もう何年も前のことなので…」

燐子が謝ったのは有咲の家族が話に出てきたからだ。有咲の家族は今や祖母の1人だけ、両親は不慮の事故により亡くなっているとの日、レイが有咲に謝りに行った時、有咲の祖母から話を聞いていたのだ。

「それに今はあの馬鹿レイもいますしね」

『……………』

「前から思ってたんですけど…」

「有咲ってゼロ君のこと好きなの…?」

「なっ!？」

いきなりの質問に有咲は驚き、その拍子でペンを落としてしまう。拳句の果て顔は耳まで真っ赤になり数秒停止していた。

「お、おーい、有咲ー?」

「はっ！な、なわけあるか！あいつだぞ!?だ、誰が…好きになるかっての…!」

「え、でもレイ君もいますしって…」

「違いまーす、馬鹿レイではありませんから!」

「じゃあ誰なの?」

「んなの誰でもいいだろ！てか香澄！お前だって中学一緒だったんだろ!？」

「うん！3年間一緒だった！ブイ!」

「羨ましいやつだなこの野郎!？」

この一言だけで全てを悟らせる有咲である。が、この場にいる2人は特に深い意味として捉えてはいなかったらしい。

「レイ君って中学の時どんな人だったんですか？やはりラノベやアニメに人生をかけたオタクだったんですかね!？」

「オタク…?んーある意味？いやそれ以上?」

「それ以上ってなんだよ」

「んーゼロ君から口止めされてるんだよね」

香澄がこのサークルに参加したその日、レイは香澄を別室に呼び出

し、中学時代の話は絶対に誰にも言うなと口止めをしていた。

「……ゼロ君にも知られたくない過去の二つや二つあるってことだよ！」

「んだよそれ、香澄とレイだけの秘密じゃねーか……くそ、いいなあ」

「それを言ったら有咲の方が小さい頃から知ってるじゃん？」

「馬鹿、あたしは数ヶ月程度の付き合いだぞ？それにこないだまでずっと会ってなかったし……」

「市ヶ谷さんはレイ君のこと知ってたんですよね？」

「ま、まあ、時々物陰から眺めたりはしてましたね、はい……」

「ストーカーだ、有咲捕まらないでね?!うちのキーボードがいなくなっちゃうよ!」

「ち、違うわ!勝手に犯罪者呼びすんな!」

そう、ストーカーではない。乙女は気になる男子がいるとその人が触ったもの、またはその人が通った道を通り、共感を得たい生き物なのだ。

「なんで早く会わなかったんですか?」

「会わなかったって、その……なんて声かければいいのかわからなくて、もうこの際レイを見れるだけでいいかなって……」

「えーそれじゃあつまんないよ!好きならちゃんと会いに行かないと!」

「誰が!いつ!好きだと言ったか!」

「じゃあ嫌い?」

「き、嫌いではないけどさ」

「そういう香澄はどうなんだよ!」

有咲は我慢の限界なのか椅子から立ち上がり香澄にそう問うていた。燐子は落ち着いてくださいーと言いながら有咲を抑えるのではなく手はオロオロしていた。

「私?私は……ゼロ君と特別深い関係になろうとは思ったことないよ、仲のいい友達!」

ニカツと笑いながら言う香澄をみた有咲はほっと一息付き改めて椅子に座る。

「でも3年間同じクラスでその、よく絡んでたんですよ？」

「はい！あと家でよく遊んでました！」

「ツ！それ！それだよそれ！男女が1つ屋根の下でやることって言うたら…」

「言ったら？」

「ほら、その、あれだよあれ、く、唇と唇を…って！言わせんな!？」

有咲は恥ずかしそうに人差し指をちよんちよん合わせながらそう言っていた。

「ゼロ君とは学校でも家でもよく遊んでーあ、泊まったこととかもあるよー!」

「泊まり!?それはもうアウトだろ!」

「んー流石に同じ布団で寝るのはまずかったかな？狭いし寝にくいよね!」

「そこじゃねーよ!？」

「えーじゃあなに?」

「なにつて、新たな生命をつくる…な、なあー!くそ、レイのやつめ…あたしが会うのを躊躇してる間になにしてんだよ!」

「……………」

香澄と有咲がレイとの思い出を語っていた時だ。燐子だけ何やら寂しそうな表情をしたまま会話に参加していなかった。

「燐子さん?」

「……2人はレイ君との思い出がたくさんあるんですね」

「燐子さんは高校からの絡みなんですか?」

「高校生の時からにはなりますけどつい数ヶ月前からの絡みですよ」

「出会いのきっかけとかは…?」

「あれは確かGWの時に…」

燐子は香澄達にレイと初対面した時の話をしていった。詳しい話は読み返して欲しい…とここでは言っておこう。

「燐子さんゼロ君をナンパしたんですね!」

「あはは、あの時は気が動転してて…私のせいで義妹の最新話を読めないとなれば可哀想だなあと」

「でもほいほいついて行くレイもレイだろ」

くそ、やはりレイは燐子さんの胸に興味を持ったのか！そんなのか!と有咲は心の中でそう思いながら自分の胸を触っていた。いや揉んでいた。

「そこから仲良くなつて、私がサークルに勧誘して、モカたん、凜ちゃんさん、ひまりちゃん…市ヶ谷さん、戸山さん、美竹さん…沢山のメンバーが集いました」

レイには感謝してる。そう燐子は香澄達に話した。でも、メンバーが増えたからこそ燐子には少しの悩みがあつた。

「…最近メンバーが増えてきて、その…レイ君と全然話せてないなーって」

『ッ！』

「もう私のイラストは完成してるので話すこともないですよ、結局…一時だけのペアだったんです」

「それに市ヶ谷さんも美竹さんも私より絵も上手いですし…乗り換えちゃうのも当然ですよね…！」

「燐子さん…」

「私って思いのほか嫉妬深い女なのでしょう…？」

燐子は悩んでいた。増えていくメンバーの中には絵を描くメンバーだっている。

燐子本人が増やそうと提案はしたものの来た2人は自分よりも経験を積んだ猛者ばかりだ。

有咲に関してはSNSで有名な絵師ありり、もちろん燐子はフォロワーについて投稿される絵は毎回拝見していた。

レイも経験のない自分よりも、実際に同人誌を売ったことがある蘭や有名な絵師の有咲の方に視線を向けるのは当然だと決めつけていた。

「そ、そんなことないですって！ゼロ君ちゃんと燐子さんのこと考えてると思いますよー！」

「なんでそう言えるんですか…？」

「えっと、ほら！ゼロ君おっぱい好きじゃないですか！」

『……………』

「あ、ごめんなさい…」

しゅんと一気に縮む香澄に対して有咲は冷たい視線を送っていた。確かにレイはサークルメンバー全員が認めるおっぱい星人、だがそんな理由で燐子のことを気にかけているとなれば体目的のヤリチン野郎にグレードダウンしてしまう。

「確かに最近はおたしや蘭ちゃんと活動することが多いですけど…前は2人で活動してたんですよね？」

「お互いにアドバイスしあって、褒めあって、少しづつですけど私もレイ君も上達していった」

「……一度レイに相談してみましたよう、ほら、まだ夏コミまで時間あるし燐子さんも絵の修正とかすればいいじゃないですか？」

そう言う有咲だが内心少し罪悪感があった。自分がサークルに参加しなければ燐子はずっとレイとペアを組んで夏コミに参加していたのではないかと

「それだけじゃないんです…レイ君は何か私に隠していることがあるんだと思うんですよ」

「というところ？」

「わからないんですけどなんか、ほら？わかりませんか？」

「浮気されてる時に感じる変な感じのなやつかな？」

「そう！多分そんな感じのです！」

当たっちゃったよ！と香澄は驚くがその顔は一瞬にして冷めきり少し表情を暗くしたかと思えば

「……ゼロ君は隠し事多いもんね」

「戸山さん？」

「いえなにもー」

と、誰にも聞こえない声で香澄は呟いた。燐子に問いかけられた香澄は返事を返し、普段通りの表情で改めて会話を始め出す。

「そうだ！そこまで気になるなら直接本人に聞きましょう！」

「聞くって、もし隠していることがあったとしても話すわけないだろ」

「それは…その場の勢いで喋らせる！」

「でもどうすればいいんでしょうか！」

「はい、教えます！それはズバリ……」

「ず、ズバリ……？」

「デートをするんですよ!!!」

「はあっ!?」

燐子、ではなく大きく反応したのは有咲だった。

デート、とは人によっては捉え方が変わるかもしれないが、簡単に言うとなんか仲良くキャツキャウフしながら、なんなら手を繋ぎながら店を回ったり、映画を見たり……お出かけをすることだ。

「ゼロ君多分女子とデートしたこともなければ手を握ったこともないと思いますよー!」

「なんせ私が言うんですよ！中学時代に別れを告げてまだ1年と数ヶ月！ないと見ていいでしょう!」

「てことは……燐子さんがレイの初デートになるのか!?!」

「そうゆうことだね！有咲ーなんか困ることでもあるの?」

「へっ?!いい、いや……べ、別にない、ぞー!」

有咲は拳を強く握りプルプルと震える手をもう片方の手で抑える。どうやら必死に自分の心に抗っているようだ。

「で、でもでも！それって私がレイ君をデートに誘うんですか……?」

「当然です！ゼロ君が自分から誘うと思いますか！はい、燐子さん！どう思いますか!」

「な、ないです……あと顔近いです……!」

ぐいぐい近寄ってくる香澄に対して燐子は顔を逸らしてそう言う。

「た、ただいま〜」

「あ、涼しい……生き返る」

3人でレイの話をしているタイミングで蘭と凜が戻ってきたようだ。

蘭が凜の手を握り母親のように娘（凜）の手を引っ張りながら視聴覚室に戻ってきた。

「ありがとう、み、美竹さん……」

「ん、気にしなくていい、てか名前で呼んでいいよ」

「……………あ、」

「いや黙られても困るんだけど」

「私は美竹さんを殺そうとしたのに名前で呼ぶなんて…できない」

「あんたまだあんなこと気にしてたの？別になんとも思っていないって、それにあんたから殺されそうになったとは思っていないし」

「…………私達って友達？」

「う、うん…同じサークルメンバーだし、友達でしょ」

蘭は少し頬を赤らめ凜から視線を逸らし、腕を組みながら恥ずかしそうな表情をしていた。

蘭も蘭で勇気を振り絞り凜に言ったようだ。

「じ、じゃあらん」

「ん、なに凜」

「……………」

お互い初めて名前で呼び合い緊張している。そんな2人の緊張を解したのは…

「いいな蘭ちゃん！凜ちゃん！私とも友達になろうよ！」

「…………いえ、あなたはまだちよつと時間が欲しい、あと馴れ馴れしいよ」

「ひ、酷い！私だって凜ちゃんと友達になりたいのにー!!」

「あー朝日奈が香澄を泣かしたー」

「うう、ありしゃあ〜」

「近寄んな！鼻水つくだろ!？」

鼻水を垂らすほどの号泣、凜に振られたのが余程ショックだったのだろう。

しかし当の本人はなんとも思っていないようにらんと何度も呟いていた。

香澄には悪いが、可愛いかよあんた。

「だったら朝日奈くあたしもそろそろ名前で呼んでくれてもいいんだぞ？」

「…………市ヶ谷さんは小さい頃から苗字呼びでなれている」

「あ、そう言えば小さい頃で思い出したわ」

有咲は携帯をポケットから取り出しおもむろに写真フォルダを開き何かの写真を探し出す。

「ほら！これ懐かしくないか！音楽教室の七夕会の写真！」

「そんな記憶私にはない」

「んなこと言うなって、ほら！満面の笑みでお前写ってるぞ」

「本当ですね、凜ちゃんさん小さい頃から美形だったんですね…羨ましいです」

「今とあんまり変わってない、てかこんな可愛い笑顔してたの？」

「なにこれ凜ちゃん可愛すぎ！尊すぎるよー!!!」

「な、なによ…今より前の方がマシっていいいの？それもそうよね、子供の時の純粹で無垢な笑顔なんてこの歳で作れる奴なんていやしないわよ、はは、まあ私は元が醜いからどうしようもないけどね…」

「はいはい、そういうのいいから、凜は可愛いよ…レイの次に」

レイの次に、は誰にも聞こえない声で蘭は言い、自分はその後何も喋ってないよ感を出しながら凜を見つめていた。

「……うう！騙されないんだから！」

「あはは、凜ちゃんさんは相変わらずですね」

「あれ？有咲と凜ちゃんっていつ出会ったの？」

「小3だったけか？」

「……小3よ」

「確か小4の初めあたりから来なくなったよな？なんでなんだ？」

「私は小3の終わり際で辞めていると聞いたそれに行かなくなるのは私の自由…ありさには関係ないわ」

「ん？まあそっか」

2人で思い出の共有が上手くできていないようだが本人がそう聞いたと言ってるならそうなのだろう。

「わかった、今日から名前で呼ぶよ…ありさ」

「！お、おう！よろしくな、凜…」

蘭同様照れくさそうに凜の名前を呼ぶ有咲、ようやく数年越しに名前で呼び合う関係へとなれた有咲と凜

有咲は内心とても喜んでいることだろう。

「他に写真ないんですか？」

「ありますよ、こないだアルバム見返してて写真撮ったので…あ、これは発表会の時の写真ですね」

「朝日奈…じゃない、凜のやつがいつも手を抜いてたからあたしがいつも金賞取ってたなーって！手を抜いてんじゃねえ!？」

「私は知らない、金賞取れたのはありさの実力」

「くっ！今言い合っても意味なんてないか、で、まだ写真がー」

とスライドしていく中全員の目に一枚の写真が目につく

「ちよと！今の写真！」

「へ?!い、いやこれは…!？」

「これってレイと有咲と…漣奈、さん？」

有咲が誤って見せてしまった写真、それは幼少期のレイと有咲、そして当時小学6年生だった漣奈の3人が映る写真だった。

レイと有咲の後ろから抱きつき肩に手を回して笑顔でダブルピースをしている赤髪ツインテールの少女こそが漣奈である。

ちなみに有咲は帽子をかぶっておりボーイッシュな風貌、レイは今ときほど変わらない顔立ちだった。

「(これってまずくない?)」

「(やばい、やってしまった…)」

「(でもバレないでしょ)」

有咲、蘭、凜はアイコンタクトで会話してコクリと頷く、どうやら心の内を共有できたようだ。

「この人は誰なんですか？」

「や、この人はー」

「……この人は漣奈、レイのお姉ちゃん」

「レイ君のお姉ちゃん？漣奈、さん…?なーちゃん？さんですかね、モカたんとひまりちゃんが言ってた人？」

「その人です」

「……どこかで見たような気が？」

もしここに写っている漣奈の姿が今と変わらない姿であれば1発でレイの姉漣奈が神奈であることがバレていただろう。

子供から大人へと変わった滯奈に感謝しなければならぬレイである。しかし、滯奈とて全部が大人になったわけではない、胸以外は成長したのだ。

「気のせい」

「そ、そう！決して小説なんて書いてないから！」
『くっ！』

「あは、えっと…なんでもないです」

蘭と有咲に睨まれた香澄はまたもしよぼんとなりもう何も喋らないように自分の手で口を塞いでいた。

「そういえばあたしと凧が戻ってくる時何か話してなかった？」

「そう！実は燐子さんがレイ君をデートに誘うの！」

「うわ！か、香澄！いきなり大声出すなよな!？」

もう喋らないぞと意思付けたにも関わらず香澄は手を離し大声で有咲の耳元付近にてそう発していた。

「レイとデート？」

「れいがりんこをエスコートできるとは思わない。途中でホテルに連れていかれるのが落ち」

「お前はレイをなんだと思ってるんだよ」

「おっぱい星人の変態」

「あながち間違ってるねーな…」

ファースト幼馴染にさえ間違ってるって言われるレイは正真正銘のおっぱい星人になってしまったようだ。

「蘭ちゃんと凧ちゃんはゼロ君が燐子さんとデートするのは反対派？ちなみに有咲は反対派らしいよ！」

「勝手に決めつけんな!？」

「じゃあいいってこと？」

「いいってわけじゃ…ああー！くそ！もうどっちでもいい！」

「私は全然構わない。だけどりんこが心配」

凧は友達のりんこのことを心配しているようだ。先程言ったようにホテルに連れていかれるのではないかとネガティブな思考が彼女の中にあつた。

「凜ちゃんさん心配してくれるんですか？」

「……あたりまえ、りんこはと、と友達だから」

「凜ちゃんさん……！」

「あたしは反対」

『ッ!?!』

蘭はいつも通りの声でレイと燐子がデートをすることに反対した。一同は大きく反応するも蘭は気にもとめずタブレットを取り出し絵を描き始めた。

「蘭ちゃんはゼロ君と燐子さんがデートすると有咲みたいに困ることがあるの?…」

「だから勝手に決めんな!?あたしはもういいって言っただろ！」

「……レイが他の女子と絡むとか、デートとかするのは困る」

「らんがれいの彼女だから?」

「それとこれは別、あいつにはあたしや他の女子よりもお似合いなヤツがいる」

「な、なるほど」

燐子は蘭の描いているエロ同人誌の内容を知っている。女体化したレイと柊優がエチエチなことをするR18内容の作品だ。

「ゼロ君にお似合いなやつ……?誰かいるの?」

「それはもうお似合いすぎて早くくつついてくれないかとあたしは毎日悩まされてる。早くレイ告ってくれないかな?」

「あ、あいつ好きな人いたのか……！」

有咲は頭を抱えそう呟く、香澄は一瞬??と反応をしたがブンブンと首を振り蘭に話しかける。

「でも!まだ付き合っていないなら燐子さんとゼロ君がデートしても問題ないよね!」

「……まあ確かに問題ないけどあたしが嫌っていうか」

「じゃあ蘭ちゃんは少なからずレイ君に好意を持ってて、他の女の子とデートしてるところを見たら、嫉妬心燃やしてその日の夜は自分の涙で枕を濡らしてしまうんだね!」

「なっ!?!ば、馬鹿じゃないの!そんなので泣かないし!てかレイがあ

いつ以外とデートしてて困るには困るけど…別にあたしがレイに好意を持つとか絶対、ない」

「それより香澄はどうなの？あんたはレイと燐子さんがデートしても何も思わないの？」

「蘭ちゃん有咲と同じ質問してるー、だから私はゼロ君と仲のいい友人だよ！」

有咲と同じ内容を聞かれた香澄は先程と有咲に答えたように蘭の問いかけに答えていた。

本人が何度も口に出してこう言ってるのだ。仲のいい友達、もとい親友ということだろう。レイ本人がどう思っているかは定かではないが…。

「りんこ、もし何かあったらすぐに連絡して、私は友達少ないから通知が来たらすぐに気づける。助けに行くから」

「あ、はい…でもそんなことならないと思いますよ…？前にラブホテル行った時もレイ君襲いませんでしたし」

「ッ!?!」
有咲は勢いよく立った…かと思えば横にぶつ倒れて隣にいた香澄が有咲を支えていた。

「ちよ、ちよまま、え？ら、ラブホって恋人がイチャイチャするところですよね…？なんで恋人でもない2人が行ってるんですか!?!」

『……………』
「二人もなんか言えよ!?!」

蘭、香澄が黙ったままであったことに有咲は思わず突っ込んでしまった。

蘭はその日ラブホで偶然レイ達と遭遇しているため何故いたのか知っているため特に疑問を抱くことはない。

「えーじやあ燐子さんとレイ君一度デートしてることになるじゃないですか!?!」

「確かに!?!あいつの初デートは結局燐子さんだったのか…!?!」

「なんか、すみません…!?!」

「謝られたら余計に悲しくなるだろ!?!」

「有咲ーよしよし、私の胸はいくらでも使って泣いていいからねー」
その後有咲は香澄の胸に顔を埋めてしばしの間黙り込んでいた。
心做しか香澄の胸の感触を少し味わっているかのようにも見える。

「(香澄、結構胸あるんだな…)」

まあ自分よりは大したことないな！と心にいいつけしばし香澄の胸の感触を堪能して嫌なことを忘れようと算段する有咲である。

「あれ？前にデートしたことあるなら誘うのは簡単じゃないですか！」

「うう、だから最近全く絡めてないから緊張しちゃうんですよ…」

「じゃあこうしましょう、燐子さんがデートに誘わないなら私がゼロ君を誘います！」

「え!?!」

「なんならその後ホテルに行って蘭ちゃんがこないだ描いてた絵みたいなことを」

「それは絶対だめええー!!!」

『ツ！』

なんと蘭がいきなり大声を上げタブレットを天井につくかつかないかスレスレの高さまで投げ飛ばした。

ちなみにそのタブレットは自分でキャッチし、咳払いして香澄に言う。
う。

「さつきも言った通りあいつにはお似合いなヤツがいるの、だから…
エッチなことは禁止」

「……わかったよーじゃあデートに誘うだけ、ほらいんですか!?!私
がゼロ君誘いますよ?」

「んんー」

燐子は悩む、自分からデートを誘っても果たしてレイはそれを承諾してくれるだろうか？

そもそもレイは自分のことをどう思っているのか、ただのイラストレーター(仮)?サークルメンバーの1人?元ペア?それともただの友人?

「……………」

例えどれだったとしても少し、ほんの少しだけ心に何かもつと別の選択が欲しいと、あつてもいいのではないかと思ってしまう…。

「私、誘います！レイ君をデートに誘います！」

「ツ！そうと決まれば早速誘いましょう！」

「はい！」

「りんこが決めたなら私はりんこの意志を尊重する、女になってきて？」

「いえそういうことはしないかと…あはは」

「くっ！」

「……ちっ」

有咲は香澄の胸の中で奥歯を噛み締め、蘭は誰にも聞こえない音で舌打ちをしていた。

「……まあしゃーない、サークルと燐子さんのためだ、今回は許す…」

「有咲もそんなにゼロ君とデートしたいなら誘えばいいのにー」

「だから！誰があいつとデートしたいと言った!？」

「ほぼ言ってるようなもの」

「う、うるせえな！」

燐子がレイをデートに誘うと意を決した時、丁度視聴覚室の重いドアが鈍い音を立てながら開いた。

「ただいま戻りましたー」

『ツ!？』

「な、なんだよ」

蘭を除く4人が一斉にレイの方を向く、そして香澄が燐子にあのこと言いつ、凜は凜で女になれと言う。有咲は一言言つたあと悔しがつていた。

「れ、レイ君！」

「あ、はい！」

「今度！今度でいいので、その…」

「私とデートしてください！」

「……え？」

燐子からいきなりデートの誘いを受けたレイは一瞬固まる。そし

て言葉を発したと思えば…。

「で？ドッキリ成功の看板はどこにあるんだよ？」

「……へ？」

「いや、燐子さんが俺をデートに誘ってまじなわけないだろ？それで、看板はどこだ？」

過去に一度ラブホに連れていかれた経験があるレイは少し警戒していたようだ。

その結果ドッキリへと辿り着きそう問いかけていた。

「……………れいは死んでもいいかもしれない」

「おいおいなんだよ急に…」

凜から死んでもいいかもしれないと言われたレイは驚き、みんなの顔をしばし眺めて理解する。

「あれ、嘘じゃない…？もしかして俺本当にデートに誘われてるの!？」

「は、はい…」プシュー

耳まで赤くなった顔からは湯気が出そうなほど緊張している燐子の顔は相当暑くなっているんだろう。

「……………俺でよければ、その…行きましよう？」

「は、はい！はい！是非！よろしくです！」

「やったね燐子さん！」

「りんこ、これであなたも立派な女…それに比べて私は…」

「よくわからないけどとりあえずおめでとうございまーす、りこさーん」

レイは気恥ずかしそうに頬をかいていた。ちなみにその頬は薄く赤く染まっていた。

「……………決まったなら日程とか話せよ、できればサークル活動日以外でなー」

「なんだよありり、機嫌悪いのか？」

「うるせえ、絵に集中したいから黙ってろ」

「お、おう、頑張ってくれ」

全く心当たりがないレイはそのまま頑張ってくれと伝え有咲との会話は終了した。

「平日はサークル活動、そしてバンド活動もあるし…土日だけ…って、俺土日は弦巻のバイトが!」

「でしたら土曜日の夕方からにしましょう!その日は午前がバンド練習なので!」

「ゆ、夕方からですか?でも少しの間しかその、で、デートできませんよ?」

「ふふ、別に1日ずっとデートしたいなんて言ってますんよ?」

「へ?あ、ならそうしますか…」

あつという間に日程は決まり、次の土曜日夕方から2人のデートは始まるようだ。

夕方から夜まで、その後ホテルに…なんて展開にならないことを心から祈ろう。

「(燐子さんはなんで俺をデートに?…はっ!?ま、まさかアサシン!?)」

レイは燐子がアサシンではないのかと思ってしまう。こんな自分をデートに誘うなんてそうに違う、と

「(レイ君が私に隠している秘密を探るいい機会です!)」

燐子はレイが自分に何か隠していることがあると決めつけ、それを探るもよう。実際レイは燐子にとんでもない事実を隠しているが…バレた時どうなるだろうか。

「当日楽しみにしてます!燐子さん!」

「はい!私も楽しみです♪」

「ツ!」バキリ

そんな2人を見てて見かねたのか有咲は握っていたタブレット専用のペンを、嫌な音を立てながら片手でへし折っていた。

「あつはは、レイ、ペンが折れたから描けないや…弁償、してくれるんだよな?」

「え、いやありりが自分で」

「弁償してくれるんだよな?」

「…俺の給料で買える値段なら」

レイは本当にありりに何かしたのかな?と疑問に思うも、それより専用のペンの値段がかなり気になったようだ。

「ふふ、ふふふ、あはは！」

「ら、蘭？」

「いい！いいよこれ！最高のネタを思いついた！」

「急遽レイが男に戻り、それをいい事にモブ女子達とセックスをしまくって！くく！数日後には女に戻り、結局終優のちんぽが一番だと、欲しいと縋って……！」

「待って!?なんかレイコちゃんに危機が訪れそうになってる!?てか他の女子とやっていいのかよ!?!」

「レイコじゃない、レイイイ!!」

「そこは何も言うなよ!?!」

こうして隣子とレイは次の土曜日デートをすることになった。果たして彼女達は極普通のデートを行えることができるのか!?

それはまた、別の機会で語ろうとしよう。

友達が告白されたことありますか？

蒼井由明日の朝は遅い。

「お兄ーねえお兄ったらー遅刻するよ?」

「むにやむにや、まじねーわ…」

「おはよう、まったく学校が近いからっていつまでも寝てたら遅刻するよー」

「……まじねーわ」ムクリ

毎朝妹に起こしてもらい目を覚ます由明日、学校が近いというのは歩いて5分程度の距離、何か忘れ物をしても教師にバレることなく事を済ませることが出来る。

「お兄もそろそろ妹離れしないとねー私彼氏いるし?」

「まじねーわ!」

「あー文化祭彼氏も来るみたいだから紹介するよ、ちなみにお兄より歳上だからねー」

「ま、まじねーわ…」

自分の妹に恋人が、しかも自分よりも歳上となるとショックはかなり大きい。

確かに妹は誰もが認める美少女、目はどんぐりのように丸く2次元にいるような風貌、容姿、決してエッチなことなんてしてない、そう思っていた…はずだった。

事件は数週間前

「お、お兄…:ただいま」

「?まじねーわ」

足をガクガク震えさせた妹が夜遅くに帰って来てたまたまりビングにいた由明日は出迎えていた。

ちなみに妹の帰りが遅く、心配過ぎて寝るにも寝付けずリビングで帰りを待っていたわけではない。

「お兄まだ起きてたんだ…」

「まじねーわ?」

「足が震えてるって?これは、運動してたんだよ、軽い運動…」

「……………まじねーわ」

「よければおぶって私の部屋まで連れてってく」

「まじねーわ!」

「流石お兄、シスコンだね」

話を最後まで聞かず玄関にて下駄箱に手を置き足をガクガク震えさせていた妹の前に背中を見せ屈む

俺の背中に乗りなと言わんばかりの格好に妹は即飛び乗り、由明日は妹を妹の部屋へと連れていく

「ねえ、お兄って彼女とかいるの?」

「ツ!ま、まじねーわ」

「みえなんて貼らなくていいの、そうだ、近くに高校生でも使えるラブホができたって知ってる?」

「まじねーわ」

「そっか、知らないんだ…ならいい機会、あげるから今度女子でも誘いなよ」

「まじねーわ!」

部屋の前でそんなやり取りをして由明日は妹からラブホの割引券をいただく

「じゃあ私疲れたから寝るねーここまで運んでくれてありがとう」

「ままままじねーわ!」

このタイミングで割引券を渡す、最近彼氏ができたと報告してきた、夜遅くに帰ってくる、足をガクガク震えさせていた…。

「まじねーわ!!!」

可愛い妹は自分がのほほんとTVを見てる間に見知らぬ男と大人の時間を過ごしていたと知った由明日はその日の夜はなかなか寝付けなかったらしい。

「お兄のクラスって出し物何するの?」

「まじねーわ」

「白雪姫?劇なんだ、お兄セリフ言えるの…?」

「まじねーわ」ポン

任せろと言わんばかりに胸を叩くも

「う、うん…期待しとくよ」

妹はあ、これ絶対ダメなやつじゃんとか決めつけるのであった。

「私そろそろ行くね、朝ごはん母さんが作っててテーブルに置いてあるからチンして食べて、あと私今日は帰り遅くなるから、先に寝てていいからね!」

「ま、まじねーわ…」

「うん!行ってきまーす!」

由明日はその悲しい気持ちになるも急いで食べないと遅刻してしまふため急いで朝食を食べたのであった。

◆ ◆ ◆

遅刻するどころか普段より少し早めに着いた由明日は校門をくぐり生徒玄関にある自分のロッカーへと向かっていた。

「ッ!」

「??」

行くと由明日のロッカーを漁っている女子生徒と遭遇してしまう。

一瞬何が起きたかわからずに固まる由明日だったが…

「んんっ、由明日君、おはよう…」

「ま、まじねーわ」

女子生徒は何事もなかったかのようにその場から離れる。

何をしてたんだ?と思いつながら自分のロッカーを開けるとひらりひらりと何やら便箋らしきものが落ちてきた。

「まじねーわ」

拾い上げ確認をする。便箋には先程の女子生徒の名前がフルで書かれており、中身を見てみると…。

「まじねーわ!」

なんとラブレターだった。恋分は長くなく単調な文、だが好きだと書かれているならそれはラブレターだ。

「ままままじねーわ!」

これは誰かにバレたらまずい。

つい先日友人の神崎零に彼女がいると発覚した時A組の男子生徒達は怒りをあらわにしていた。

となれば自分にも彼女ができるかもしれないとなると…少なくとも親友の遊と優亜には何かされるかもしれない。

このラブレターは死守しなくては、そう心に決めた時

「よっ由明日、今日は早いな」

「まじねーわ!!?」

「おー相変わらず!今日も何言ってるかわつかんねーな」

話しかけてきたのは親友の遊、ではなく優亜でもなく…友人の神崎零であった。

神崎零は自分のことをテストなどではレイと記入し注意されているところを何度か目にしたことがある。

それはさておき零にバレるのもやばい。

そう判断した由明日はラブレターを急いでポケットにしまおうとするも、ポケットには携帯と財布が入っており、両方とも先客がいた。「いい機会だから言わせてもらうけどさ、巴の件んだけどあれ本当に俺が巻き込まれただけだから」

「まじねーわ」

「いや!でも決して巴がクソ変態DMってわけじゃないぞ!?!あれは幼馴染としての延長的なあれでふざけてやっててさ!巴が悪ノリしてたんだよ!?!」

「…まじねーわ」

そんなことはどうでもいい、今後ろに画しているラブレターを零にバレないように隠せる方法はないか、と由明日の頭の中にはその考えしかなかった。

「ま、まじねーわ、あはは」

「…何言ってるかさっぱりわからん、とりあえずわかってくれたんだよな?」

「まじねーわ」ブンブンブン

首を思いつきり縦に振り何度も頷く、レイは納得したように自分のロッカーからシューズを取り出す。

その隙を逃さなかった由明日はリュックにラブレターを入れようとするも

「ご主、レイ！と蒼井！おはよう！」

「げっ、巴：お前が朝から話しかけるとか珍しいな」

「蒼井と一緒になれば問題ない、ご主人様！ああ、ご主人様！何もしてないアタシに罰はごさいませんか!？」

「何もしてないなら何もないわ！てか由明日についてさつきあれは誤解だつて説明してやったのにこれかよ?！」

「なあ由明日違うだつて！今も巴のやつ：：が？」

ラブレターを隠そうとした瞬間に強敵宇田川巴が現れたことにより由明日は固まってしまった。

その結果

「手に持つてる手紙つて：：まさかラブレターか!？」

「まじねーわ」

こうして由明日はレイ、そして巴にラブレターをいただいたことがバレたのであった。

◆◆◆

A組の隣の教室、それはどのクラスも使っていない空き教室となっているため話し合いをする時などにA組が勝手に利用している。

その空き教室には現在、レイ、巴、そして由明日、3人の姿があった。

「で？つい先程ラブレターを貰ったと？」

「……………」コク

「別に隠すことじゃないだろ？」

「いや巴、お前はわかってない。そうだろ由明日?！」

「まじねーわ……」

つい先日拷問（仮）にあったレイ、そしてする立場だった由明日ならわかる。

A組の男子達はかなり女子に飢えている。特に遊と優亜、あの2人に知られたら親友の由明日ですらどんな目にあうか想像がつかない。

「男子って複雑なんですね、ご主人様はちなみにあたしという忠実なペットがいますので困りませんね！」

「…………巴、今は真面目な話をしてるんだ、普段通りにしろ、じやないと

二度とお仕置しないぞ」

「わかった」

「受け入れるのはえー」

「まじねーわ!?!」

「それと由明日!話すのならそのまじねーわはやめろ!話せないのなら何か他の手を探せ!」

「……………」

由明日はレイにそう言われ椅子から立ち上がり黒板の前に行く、するとかなり短いチョークを手に持ち黒板に文字を書出した。

『おけ』

と男子特有の汚い字でそう書いていた。

ちなみにレイの字は女子みたいな字のためそのことでも蘭に茶化されている。

「お、おおなんか由明日とまともに話したのは初めてだな」

『確かに』

「てか普通に喋ればいいだろ」

『むり』

「だそうだ」

一言書いては消してまた書く、かなりめんどくさいがこうでもしなければまともな会話はできない。

「それで遊と優亜にはバレずにことを済ませたいと」

『せや』

「んーバレずにか」

「蒼井はその子と付き合う気なのか?」

『まだ決めてない』

「決めてないって告白してくれたんだぞ?そんなの断るなんて男じゃねえー!」

『やれれば誰でもいいお』

「てめえ殺すぞ……!」

『冗談です。まじねーわ』

由明日がそんなことを言うとは……!とレイは一人で感心していた

がよくよく考えればクズだなと悟っていた。

まあ冗談だったからよかったのだが

「……なあ由明日、お前と遊と優亜ってどんな関係なんだ？」

『腐れ縁』

「親友か？」

『よく言えば親友』

「親友ならちゃんと話せば受け入れてくれると思うぞ？」

「……まじねーわ？」

由明日は頭を抱え悩み出す。確かに遊と優亜はかけがえのない親友、だからこそ今の関係のままでもいい。

仮にもし自分に彼女ができるか今の関係はなくなるかもしれない……という恐怖が由明日の中にはあった。

『話せば納得してくれるかな？』

「さあな、あいつらのこと俺そんなに知ってるわけじゃないし」

「紅耶と黄海はとりあえず馬鹿だからなんとかなるだろ、あとお前も」

『宇田川さん酷い、馬鹿じゃないのに』

「馬鹿じゃないならあたしよりいい順位とることだな！」

『前回のテスト57位』

「嘘だろおい!？」

『宇田川さんのばーか』

「ツ！な、なんだ、今アタシ蒼井に馬鹿にされたのか!?!」

巴は前回59位、となれば巴は由明日より順位が低いことになる。

つまり由明日は巴を馬鹿にしてもいいことになる。巴がそう言っていたからになるが

「そんなテストの順位とかどうでもいいから、とりあえず話してこいよ」

『ここに呼んできて欲しい』

「俺達が呼ぶのかよ、わかった待ってろ」

レイは教室を出てA組の教卓付近にいる遊と優亜に事情を説明し、隣の教室に連れてきた。

レイは遊と優亜の相手をしている間巴と由明日は何やら討論して

いたらしい。黒板には何やらたくさん書いたあとが見えた。

「宇田川さんと由明日？なんだこのメンツ」

「由明日、話したいことってなんだ？はっ!?まさか隣の宇田川さんと恋人になったとかか!？」

「まじねーわ」

由明日は全力で、それは首が吹き飛ぶかもしれない勢いで首を振り全力で否定しているのが目に見えてわかる。

「そ、そこまで否定しなくてもいいじゃねーか……くそ……ふへ！」
「……………」

あーこいつダメだわとレイは思いながら話を始めた。

「由明日がお前らに話があるんだとき」

「話？由明日が俺達にか？」

「お前が俺達に何か話すなんて天変地異でも来るんじゃないのか……？」

『単刀直入に言う』

「せめて返事はしてやれよ」

由明日は緊張しているのか優亜の言葉に返事もせず黒板に文字を書き始める。

『ラブレターをいただいた』

「は？」

「へ？」

『彼女ができるかもしれない』

「……………」

「……………」

『…………ま、まじねーわ』

遊と優亜は顔を合わせまじねーわとハモリそう言葉を発していた。

「い、いやまあ？確かに由明日は黙ってればかつこいい人だからな」

「世間がお前のイケメンにとうとう気づいてしまったのか……！」

『それにあたり2人から付き合っついていいか許可を得たい』

「許可って、いいだろ……付き合えばいいじゃん」

「ああ、決めるのは由明日だ、俺達から何か言うようなことはないさ」

「……まじねーわ」

2人は潔く由明日に彼女ができることを受け入れていた。

先日レイに対してあれほどのことをしておいて親友に関しては簡単に食い下がるのに対してレイは少しだけ泣きそうになった。

「よかつたな由明日」

「まじねーわ!」

「んじや俺らそろそろ戻るわ」

「そうだな、早く戻って宿題しないとな」

「おうまたな」

遊と優亜は普段通りの立ち振る舞い教室を出ていく。そして廊下に出ると

「まじか」

「まじだ」

「まじかーよ」

「まじだーな」

『……………』

2人して黙り込んでしまう。まさか一番可能性がないと思っていた由明日に彼女ができるかもしれないとなったのだ。

「あいつまじねーわしか言わねーぞ?彼女とちゃんと付き合えるのか……?」

「それは不安だよな、だってエッチした時もまじねーわしか言わないんだぞ?」

「やめろ、変なこと言うな…想像したら地獄だぞ」

「うぷっ、確かに……!」

2人して廊下で男子高校生のような会話をする。もちろん周りに人はいないからいいものの誰かに聞かれていたら恥ずかしい内容だ。

「あ、そう言えば神崎を埋める作戦あつたよな?」

「それを由明日に…でも親友を埋めるなんて俺にはできない……!」

「なら初めからそんなこと考えるなつての」

「あいた!?え、宇田川さん!」

「延髄!?なに殺す気だった!」

「そっちの方が気持ちいだろ」

『??』

由明日をどう処分するのか話し合ってる際延髄にチョップをかましたのは先程隣の教室にいた宇田川巴、だった。

「親友のお前らが蒼井を応援しなくてどうするんだよ」

「応援って、由明日が告るわけじゃないし…」

「むしろ彼女ができたら由明日が俺らを応援するべきかと…」

「はあ、あのな、由明日がどうしてお前ら馬鹿2人に相談したかわかるか?」

「お前らと今の関係が壊れるかもしれないと思ったから相談したんだぞ?」

『ッ!』

「なのにお前ら埋めるだ?由明日を埋めるのはやめろ!埋めるならこのアタシ」

「はい、教室戻ろうね巴ええええー!!!」

颯爽と現れたレイが巴の延髄を握り教室に引きずり込む、もちろんその際巴は幸せそうな顔をしていた。

「由明日のやつちゃんとか俺達のことを考えていたのか」

「それなのに俺達は!くっ!あいつこそが真の友達思いのやつだぜ!」

「ああ!決めた、俺達は全力で由明日の恋を応援しよう!」

「今後ずっと応援し続けると誓うぜ!」

拳と拳をぶつけ合わせ誓い合う2人

「何あれ、怖いんですけど」

たまたま御手洗から戻ってきた凜は2人を目撃してしまいそう呟いていたのであった。

◆ ◆ ◆

「はい、10分たったな、んじゃあこの英文を由明日、翻訳してくれ」

「……まじ」

「はいもういい、神崎、お前代わりに答えてくれた」

「なんですか」

「そんなのお前と私の目があつたからだ」

「なんて強引なんだ、えつと?」

時は6時間目、1日の最後の授業の後半、あと1時間弱で由明日はラブレターを書いた生徒から告白される。

ラブレターには放課後すぐに体育館裏に来るように書かれているようだ。

由明日はどこか授業に集中できない様子でソワソワしている。当てられた時も驚きまじねーわと答えようとしたら先生に止められ代わりに答えていた。

「ご主人様」

「……なんだ、あと学校ではそう呼ぶなど何度も言ってるだろ」

「言うことを聞かない脳無しのペットにどうか熱いお仕置きを!」

「脳がないことを理解している時点での脳はあるんだよな……」

レイは頭を抱えうずくまるが、即担任に注意され起こされてしまう。斜め後ろの蘭を見てみるとすやすや寝ているため何故自分だけ!?!となる気持ちを感じながら残りの授業を受けるのであった。

放課後、時はやってきた。

「……………」

体育館裏にて棒立ちする由明日、それを見守るよう茂みの中には遊、優亜、レイ、そして何故かあとから合流した柊優がいた。

「なあ、由明日は何してるんだ?」

「黙って見ておくんだ夜桜くん、由明日は今から男になるんだ」

「いいか神崎君、これが告白だ……って君は彼女いたな」

「い、いやだから蘭との関係は……」

レイは否定しようとしたがそこで考える。

もう蘭と付き合っているという設定にすれば柊優とできてるなんてことでいじられることはない。ならば

「ら、蘭は俺の彼女、だ!」

「このリア充め!」

「でも待て!今から由明日もリア充になるんだぞ?神崎君も受け入れなければ……!」

「あ、結局本当だったのか、よかったぜ」

「お前は信じるなよ……!」

そうこうしているうちに由明日にラブレター書いた女子生徒とが現れた。

「あの子知ってるか?」

「確か隣の隣のクラスの子だ」

「知らんな……」

「あ、あの子から俺昔告られたわ」

「はっ!」

校優の発言はさておき一同は由明日の勇姿を見届ける。

女子生徒が思いを告げ由明日に対して頭を下げる。そして……由明日は

「……………まじねーわ」

「ツ!?そ、それはいいってことですか?」

「……………まじねーわ」ブンブン

首を縦ではなく横に振る。つまり由明日はその女子生徒の告白を受け入れなかったのだ。彼がどういった理由で彼女の告白を断つたはわかりかねる。

そもそも異性から告白されることすら人生の中でも数少ない貴重な体験、にもかかわらず由明日は断つたのだ。

「……………そう、ですか……わかりました」

「まじねーわ」

「いえ、でも……由明日君ならいけると思っただけだなあ」

「ツ!」

女子生徒は必死に涙をこらえそう言うのと、そこから逃げるように走り出し、そのままレイ達が隠れている茂みの横を通り過ぎさった。

「えっと、は?由明日のやつ振ったの……?」

「まじかよ文化祭彼女と踊らないのかよ!?!」

「由明日、罪な男だぜ」

「お前が言うなお前が」

校優の発した言葉に対してレイは突っ込むも、今の告白シーンを見

てレイは思う。

「(やっぱりあれが普通の告白だよな)」

に比べて自分の告白はなんだ、落とし穴に落ちて、穴掘って、エアガン突き付けられて、どんな告白だ、と少しばかり考え込んでしまう。

「由明日！お前何やってんだよ!!俺達のこと気にかけてたのか!?!」

「だとしたら気にしなくていいと昼休み何度も言っただろ!」

「……………」

「おい何とか言えよ!?!」

「まじねーわでもいいからさ!」

由明日は黙っていたかと思うと口を開く

「…………タイプ、じゃなかった」

『ッ!』

「それに、みんなと、いる方が…楽しい」

まぎれもない事実、今は彼女を作るより遊、優亜そしてレイや柊優とバカ騒ぎしていた方が楽しいと思うのが由明日の本心である。

それにまだ妹離れもできそうにないからという理由もあるが…

「ゆ、由明日！お前!」

「由明日が喋っただと…!?!」

「まじねーわ」

『……………」

レイと柊優は由明日が自分の口で喋ったことに驚きが隠せず棒立ち、数秒後はっ!と意識を取り戻し改めて由明日に喋るよう交渉するも

「まじねーわ」

「なあ頼む!もっかい!あと一回だけ喋ってくれないか!?!」

「まじねーわ」

「まじねーわじゃない、もっかい話すんだ!」

「…………まじねーわ」

何度交渉しても答えてくれない由明日に対してレイと柊優は次第にやる気が失せていき

「ああ、もういいよ、まじねーわでいいよ」

「だいたい喋ったのも幻聴だったかもしれない」

「そ、そうだな、由明日が喋るなんておかしいよな！」

「もし喋ってたら明日は天変地異確定だろ」

4人とも実は由明日は喋ってないんじゃないかと勝手に決めつけ体育館裏から場所を教室に移す。

「そうだ、由明日が失恋したわけだしみんな飯でも食べに行くか」

「となると何処に行くか」

「いや由明日は別に失恋してないからな？失恋したのは相手の方だからな!？」

「そうだ、相手の子可哀想だろ」

『だからお前が言うな!?!』

全人類が思うお前が言うなは、遊、優亜、そしてレイが声を合わせそう椋優に対して言っていた。

「ラーメン」

「そうだな、ラーメン行くか」

「商店街に三郎というラーメン屋さんがあるらしい、なんでも1万円のおぼったくりラーメンがあるとか、ないとか」

「裏メニューとかじゃねーの？てか1万つて1食分で持つてきすぎだろ…」

「じゃあここはレイの奢りか」

「なんでそうなるんだよ」

この時、4人は気づいていなかった…。ラーメンと提案したのが由明日であったことを

その後ラーメン三郎にてじゃんまげが1万ラーメンを食べることになったが食べた人いわく普通のラーメンと変わらずぼったくりだったと語っていた。

なおその人はなんでも弦巻文庫でバイトをしている人物なのであった。

幼馴染のスク水姿は見たいですか？

梅雨が明け本格的に夏が始まった。ジメジメした暑さから一転し、太陽が俺達人類を焼き殺す勢いで毎日照らし続ける。

「おい神崎！そっちいったぞ！」

「おけまかせろ！……ぐへえ！」

「何やってんだよ神崎!？」

そう、俺達男子生徒はこんな炎天下の中2時間ぶっつけで体育の授業としてベースボールをしている。

とは言っても1クラスの男子が10数人しかいない羽丘のクラスでは2クラス合同で体育を行っていた。

「おいおい、レイ大丈夫か？」

「アニメのように顔面で受け止めてたぞ？」

「やはり君はラノベ主人公兼アニメ主人公だったか、アニメ化おめでとう」

「まじねーわ」

「お前らはな、ちよつとは心配しろよ……いてて」

起き上がり背中についていた土を叩き落とす。自分でもまさかボールが顔面に当たるようなことになるとは思いもしなかった。

「おい男子共ー休憩だ、あとあまりプール付近には行くなよな、女子達から痛い視線を浴びるぞ」

『……はーい』

俺達が2時間ぶっつけで球技を行う理由、それは女子達が水泳の授業を受けているからだ。

男子は受けないのか？いや、いやいやいや、ね？この歳の男子がひまりとか見てみる、元気になって授業どころじゃないだろ！

「なあなあ神崎くん、君に折り入って頼みがあるんだ」

「……なんだよ遊」

「神崎君はあの美竹さんと付き合ってるんだよな？」

「まじねーわ？」

「まあそうだな、付き合ってるよ……」

付き合ってるって設定にしてるんだ。理由は柊優と付き合ってるんじゃないかとか言われたいようにするため

「ならさ！美竹さんに会うフリして担任の水着写真撮ってきてくれな
いか！」

「俺と由明日はとりあえず女子達の生水着写真が撮ればそれでいい
ぜ！」

「まじねーわ！」

「やだよ、それに俺携帯持ってないし」

「じゃあ俺の携帯貸すよ、パスワードは0721だ、決して下ネタでは
ないぞ、誕生日がその日なんだ」

「すんごい日に産まれたんだな、お前」

ちなみに俺の誕生日は12月24日、クリスマスと正月が近い日に
生まれたため誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントをもらった
数日後にはお年玉が貰えるという何ともハッピーな冬休みになる。

「俺蘭に殺されちゃうよ」

「神崎くんの命で先生の水着姿が見れるなら問題ない！」

「神崎君のことは忘れないぜ！」

「まじねーわ」

「うわー俺達の友情薄っぺらいな」

蘭以外ならあの変態幼馴染共のことだ、喜んで写真を撮らせてくれ
るだろう。

なんならモカとか巴は誰よりも喜ぶだろ

「はいはいわかったよ…携帯貸せ」

「流石神崎くん！」

「お前は俺達の親友だ神崎君！」

「まじねーわ！」

アホか、借りて撮ってくるって言ってもあ、無理だったよーって見え
ば嫌でも納得するだろ

携帯を受け取った俺は貴重な10分休憩を無駄にしてまで女子
プールへと向かう。

女子共から散々文句言われるんだろうと考えた俺は…

「てことだ、一緒に行くぞ」

「なんで俺を誘う、てか蘭のところ行くんだろ？絶対嫌だ！」

「頼む！お前がいれば女子は喜んでくれるだろ!？」

「別にそんなことはない」

「そんなことあるんだよ!？」

てかあいつら俺じゃなくて柊優に頼めばよかったじゃねーか!？」

「昼休みジュース買ってやるから！あとこないだラーメン奢っただろ！」

「それを言われたら断れないだろ…」

「よし行くぞ」

こないだ嫌でも1万円のラーメンを食べてよかったぜ、やけに店長が進めてきたからな…あの人絶対進め慣れてるよ

柊優と2人でプールに向かう…

「きゃー！夜桜君！私達のスク水姿見に来てくれたの!？」

「神崎君…は可愛いしいいよ!」

「あはは、なんか歓迎されてるなお前」

「別にそんなことはない」

そんなことはないと思うんだけどな…まあ柊優はこんなやつだし今回もスルーしとこう。

「あつれくれーくん何しに来たのかな？モカちゃんのスク水姿そんなんに見たかったの?」

「あーはいはい、そうしとくよ」

「レイ君と夜桜君だ！なにに！2人して覗きなんて！しかもこんな大胆に!」

「だったら声を少しは押さえろこの馬鹿ひまり」

こんなにも早くこいつらと遭遇するとは、会ったところで写真は撮らないけどさ

「いいよな女子は、俺も泳ぎたい」

「だったらあんたもこっち来なよ、レイなら可愛いからバレないよ」

「げっ、蘭…」

「げってなによげっ、だいたい柊優、あんたなんでここにいのよ」

「俺はレイに連れてこられただけだ」

「……そっかーレイが格優をデートに誘ったんだ」

「これのどこがデートだったの!?!」

「こんなのがデートなら世の中のデートの基準がなんなのか心配なるぞ、それより蘭、モカ、ひまり、3人ともなんていい身体してるんだ。」

でも残念こんな美人さんでもなかみがあればなんだよな……

「それで何しに来たのー? やっぱりモカちゃんの体、いや裸見に来たのかな〜?」

「実は三馬鹿から女子のスク水撮って来いって言われてさ……俺としては無理だったって伝えて諦めさせたいんだが」

「えーそれってさ? モカちゃんやひーちゃん、蘭のスク水姿みて夜な夜な1人エッチする時に使うってことだよねー」

「いやそこまでは知らねーよ」

「でも撮るなら使うよね? レイ君は使うよね!」

「あのね君達、俺は幼馴染であるお前らをそんな性処理するために性的な目で見たことなんてないからな」

リアルでは見たことない。夢ではモカとかひまりとか現れて俺を誘惑していることは何度があつたが夢は夢、現実では想像してない。

「でもレイ君私の胸に顔埋めて勃起してたじゃん」

「それとこれは別だ、あれはお前が手を出したからだ!」

「なにそれ初耳ーれーくん、モカちゃんのおっぱいいくらでも触つていいから勃起してよー」

「いやなんでだよ!?!」

「そのままエッチしよ! ほら! スク水だからやりやすいよ! ずらすだけ!」

「生々しいこと言うんじゃないやねー! てかフェンス越しでできるわけないだろ!?!」

俺達にはフェンスという鉄の網で作られた壁らしきものがあるためモカの胸を触ったり、ましてはエッチなことなど決してできやしない。

「レイ君ならフェンスの間から挿れるでしょ？そんなに太くないし」

「おいこら待て、俺の息子は本気出したら凄いだぞ、マグナムなんだぞ!」

「そういえばレイって結構でかかったんだっけ…ショック」

「はっ!」

ここで思い出すが柊優と一緒に来てるんだっ!ま、まずいぞ、この会話を聞かれていたら…!

「夜桜君、今度ある文化祭の花咲合同会議なんだけど実行委員だから参加してもらうけど予定大丈夫かな?」

「全然問題ない、部活なら事情を話せば遅れてもいい」

「よかったー!夜桜君サッカー部のエースって聞いてたから抜けられないかと思ってたんだー」

「そんな、俺はただやれる人がいないからやってるだけで…俺以外が下手なだけだよ」

「へーじゃあ夜桜君が一番上手なんだね!」

「……………そうだね」

隣をむくと柊優とつぐみが何やら楽しげに会話をしていた。ちらつと聞いてみると文化祭の話だろうか?

そういえば柊優は実行委員、つぐみは生徒会、文化祭について話をするのは当然のことか

「なに嫉妬してんのよ」

「嫉妬なんてするか!」

「……………そう、あたしは嫉妬するけどね」

「ツ!蘭、お前…?」

ま、まさか実は柊優にちよつと好意を持つてる的な…

「柊優はレイと一緒にいるべきなのに!」

「だよね、そっちだよね!」

流石蘭、全く期待を裏切らないぜ、何となくわかってたけどさ

「あー!2人して文化祭の話して!私も実行委員なんだからね!」

「ごめん上原さん、羽沢さんと話すのは楽しいから君抜きで話し

ちやつてたよ」

「なにその爽やか笑顔は?! いいつぐー! こーゆう男子はこの笑顔で女子の心を持つていくんだよ! 気をつけようね!」

「え、う、うん?」

前から思つてたけどひまりのやつ柊優とは仲良くないのか? あいつ面食いみたいなイメージあるけど違うのか?

「ん? 巴と凜は?」

「ともちはあそこで泳いでてりんちゃんは見学ーなんでも女の子の曰らしいよ」

「にやにやしなから言うな、てかそーゆうことは男子に言うなよ」

聞いた俺が悪いやつみたいじゃんか! でも凜のスク水姿はちよつと気になつたんだけどな、宿泊研修では水着姿全く見れず見たのは下着姿だったからな

「むーフェンスあるとモカちゃんのおっぱい触らせれないよ」

「はっ! フェンス様に感謝しないとだな、それじゃあそろそろ休憩終わるからお暇するよ、じゃあ」

「あーねえねえれーくん、こうやつてフェンスに胸を押付けば…ね?」
「なっ!」

フェンスの網目からモカの胸の柔らかなものが均等な形で浮き出ている。

触れと言わんばかりにモカは腰を振る。ぶっちゃけかなりエロい、今すぐ触つて感触を確かめたい。

しかしだ神崎レイ、先程こいつら幼馴染のことを性的な目で見たことなんてないと言つた。

「おおお、男は一度言つたことは守るのであります!」

右手を左手で抑え、モカの胸を触りたい欲求を抑える。頼むから収まってくれー!

「女子達休憩そろそろ終わるぞーみんな集まれー」

「ほ、ほら呼んでるぞー?」

「………続きは視聴覚室でね♪」

「か、考えておくのであります」

こうして写真を撮る暇もなく男女それぞれの休憩時間は終わったのであった。



我がA組は文化祭で白雪姫（BLバージョン）をすることになってしまった。

BLと言っても男同士がイチャイチャするのではなく、何故か俺が女装して白雪姫役をすることに…世界の中でも美しい朝日奈凜というやつがいるのになんで俺なのだろうか。

「レイ、話聞いている?」

「あ、ああ…えつと鏡よ鏡、世界で一番美しいのは朝日奈凜か?」

「…全然違う、そのセリフあんた言わないし、てかなんで凜が出てくるの?」

「す、すまん!ぼーつとしててつい…」

「ぼーつとしててよく凜の名前が出てくるね」

放課後、生徒達の自由な時間のはずが劇の台本読み合わせの時間となっていた。

なんでも気合いの入った蘭がすぐに台本を完成させ今日の昼休み頃には配っていたのだ。

ちなみに何故蘭が監督なのかという俺の彼女のため、レイの可愛いところはあたしが一番知ってる的なことを女子にいい抜擢されたようだ。

あんたこの偽物の恋人って立場をいのように利用してないか?

「れい、どういうつもり?」

「違う!本当にぼーつとしててつい」

「つい思ってもないことを言ってしまったと?」

「いえす」

「…そう、どうせ私は世界で一番醜い朝日奈凜よ、お金が溜まったら顔面整形して、名前も変えて、住む地域も変えて誰も知らない人物として生活するわよ」

「そこまで言っていないだろ!」

隣に座っていた凜は体操座りのまま次第に頭が下がり最後は完全

に下を向いていた。

「凜、ナレーションよろしく」

「私なんて…私なんて生まれて来なければ…」

「レイ、凜を何とかして」

「何とかと言われても…」

難しいことを蘭に言われた。こうなった凜を慰めれるのはモカとひまりしかいないんだが

「はあ…じゃあ凜は別日に合わせる。はい、次はあんたのセリフ」

「え!?えつと、ま、まあ!なんて美味しそうなリングオなのかしら」

白雪姫の俺がくそばあから毒林檎を受け取り、それを食す、そして亡くなってなんやかんやで最後に王子様の柎優が現れて終わりと

「はい、ここはもちろん本当にキスしてもらおうのでよろしく」

「はっ!?!いや無理だつての!」

「…美竹さん、俺も流石にそれは」

「え?なんだつて?よく聞こえないんだけど?」

「美竹さん」

「え?なになに、こんな身に余る程の喜びをいただき感動のあまり涙が止まらない?夜桜つて案外涙腺弱いんだねーくすくす」

「(こいつを今すぐぶん殴りたい…!)」プルプルプル

右手はぎゆうつと強く握り拳を作るも手を上げないようにふるふると力み抗っていた。

確かにここで柎優と俺がキスをすればきやーって汚い歓声が上がリステージ部門で1位が取れるかもしれない。

でもな、そうなたら1位をとったらキスをしたと広まり、負けたらあの本がばらまかれる。

もうどうやっても俺達の運命は文化祭の日で大きく変わってしまうのだ。

「(これは何とかしないとやばいな…)」

蘭を説得させキスはなしにしてもらおう。最悪してるフリですませれるように小物のセッティングなどを駆使してなんとか乗り越えたいところだ。

ああ、余談だがモカ、ひまり、巴、つぐみは劇に参加しない。裏方だったり、小物作りだったり、洋服作りだったり、そっちの仕事を行っているようだ。

三馬鹿は小人役、てか男子は大半小人役、ナレーターが朝日奈凜、となっている。

もちろん凜は抵抗したものの蘭からの無理矢理の誘いに断れず連れてこられ、なんか知らないけど俺がトドメをさしてしまった。

てかこいつら名前で呼び合うようになったのね、仲良くなつてよかつたぜ、感心感心

「つて流れなんだけどどうかな？」

「いいです！美竹さん物語を作るのがお上手なですね！」

「まつさか！自分なんて素人ですよあつはは！」

「だからその後輩系の声を出すな、こうはいと被つてんだろ」

「そうだった、今後控えよう」

結局似てる自覚はあったのかよ、まあこうはいは家では声が低いようだけどな、凜が言つてた。

「はい、各自しつかり目を通して台本見なくてもできるように、では解散」

「あー腹減つた、なあ男子全員で飯食い行かね？」

「悪いバイト」

「俺は部活」

「僕は塾」

「俺は旅を探す旅に出るぜ」

「なんだよみんなつれねーな」

「まじねーわ」

三馬鹿が呼びかけるも大半の生徒は行けないと答える。旅を探す旅に出るはさすがにちよつとわからない。俺の脳が追いつけないだけか？

俺は声をかけられる前に教室に戻りリュックを回収し急いで視聴覚室に向かおうとする。

「ねえ、ちよつと待ってよ」

「?あー蘭か、どうした?」

「今からサークル活動するでしょ?一緒行こうよ」

「!お、おう」

なんだ?蘭のやつが一緒に行こうよなんて言い出すとは……まさかこいつなんか企んでるんじゃないか?

A組の教室の入口付近で待つこと数秒

「お待たせ」

「……………」

「どうしたの?」

「い、いやお前から一緒に行こうよと誘うとは珍しいなと」

「……別にいいじゃん、それにあんたはあたしと一緒に行くのは嫌だった?」

「いやとかじゃねーよ!ただ、なんか企んでるのかなってー」

「あたし疑われるようなことした?」

「してないけどするような雰囲気はあるだろ!」

あんな作品作る時点でありよりのありだつての!?!こちとら毎回警戒するわ!

「凜!あんたも今から視聴覚室行く感じ?」

「うん、今から行くところよ」

「ならよかった、俺達と一緒に行かないか?ついでだ、自販機でなにか飲み物買っていくか?」

「おにぎり食べたい」

「はいはい、おにぎりなら俺が作ってきてるやつあるから」

「緑茶!」

「……お前はおにぎりとなれば容赦ないな」

1階の自販機で人数分飲み物を買って3人で視聴覚室に持ち運ぶ、蘭と凜は自分の飲み物を持ってただけだから実質俺一人で持ち運んだもんだけどさ

「ちーす、みんな飲み物買ってきたよ」

「お、ありがとう神崎、お前気が利くな」

「いえいえ!で先生何飲みます?右からオレンジジュース、コーヒー

にカフエモカ…え？なんで先生がいるの!？」

両手で抱えていた飲み物が驚いた拍子に一本落ち、その後連鎖するかのようにはボロボロと落ちていく

周りを見ている見ると全員が視聴覚室の椅子に座り真面目に何かをしていた。

燐子さんは凜のオーディション台本を読んでいて、ありりはイラストを描いている。

モカとひまり、そして香澄はいかにも何かを考えているように腕を組みみんと唸り声をあげていた。

「せ、先生はなんでここに？」

「ああ、私実は放送部の顧問なんだ」

「それは知ってる。放送部は視聴覚室で活動は好まない、放送室で行ってる」

「ならお前達は視聴覚室で一体何をしてるんだ？こんな他校の生徒集めて、な」

「それは…！」

まさかここで担任からの活動休止報告か？確かに他校の生徒が入りしてたら悪目立ちするけど…てか今まで何も言われてなかったことが凄いか

「うっそー本当は知ってるぞ、お前らサークル活動？してるんだっけか？」

「はい？」

「朝日奈と上原から聞いている。一応青葉が学長に視聴覚室の使用許可とそこにいる他校の生徒達の入室許可は得ているそうだ」

「いえーす、ぶい」

「にしても絵上手いなー」

「ちよっと！まだ書いてる途中なんですけど!？」か、返してくださいよ！」

ありりのタブレットをひよいと抜き取り絵をまじまじと観察する。

「先生の時はもつとこう、目が大きい子のイラストが可愛いって言われてたぞ」

「いや何年前の話ですか！今はもうそんなことないんです！」

「何年前だと…？私に向かってそんなこと言っているのか！？」

「ひっ!？」

「やめてえー！先生はあと数年で三十路になるなんて口が裂けても言えないから言わせないでえー！」

「言ってるだろー！」

「ぎゃふん」

頭に思いつきり重いチョップをくらいその場に倒れる。これが長年生きているもののチョップ、歴が違うぜ歴が

「先生三十路なんだー彼氏いないの？結婚は？」

「いいか青葉、お前可愛いからって調子乗るんじゃないぞ、先生だって学生の時は可愛いと、美しいと周りからちやほやされていたが手を出されることはなかったんだぞ?!?なんでそこで手を止める男子！私はいつでもウエルカムだったのに!？」

「先生って処女」

「おいひまりその質問は禁句だ、やめとけって、聞かないほうがいいって…!？」

これ以上この人に男関係の質問はしない方がいいだろう。ただでさえこんな状況なのに酷くなったら手がつけられない。

「先生、あなたがここに来た理由はなに？」

「朝日奈、お前は相変わらず硬いなーもっと柔らかくなれよ」

「ひなりーん☆」

「…：おう、まあなんだ、可愛いと思うぞ」

「…：もう二度としない、死にたい。今すぐ死にたい、無に帰りたい…!？」

指摘された凜はひなりーん☆というわけの分からない挨拶的なやつを担当にするも、担任からはあまりよい反応をいただくことができなかった。

凜は120のメンタルダメージを受けた(MAXHP:100)。マインス20、もう立ち直るにはモカとひまりからおっぱいを揉まれる

しか道はのこされてない。

「実は神崎と美竹に話があつてきたんだ」

「俺と蘭に話？」

「先生、あたし達まだセックスはしてません、高校を卒業してから毎日する予定で今は我慢してます」

「うん、関心だな美竹、だけど先生はそんな話をするためにここに来たのではなーい！」

「……いたい」

軽いチョップを蘭にかまし咳払いをして話を続け出す。

蘭のやつはクラスでもイチャついてる俺達に高校生らしくそういうことは大人になってやるべきだと注意しに来たと思つたのだろうか。

安心しろ、蘭との関係は偽りだ。実際にエッチなことをするわけがない……。蘭がアサシンでない限り

「お前ら部活入ってないだろ、放送部に入る気はないか？」

「……なんで先生が勧誘してるんですか」

「いやな、朝日奈が神崎と美竹を是非」

「先生、余計な話をしなくて結構かと」

「うるさいぞひなりーん☆(笑)」

「ぐっ！」

胸を強く抑え膝をつく凛、これはわかるが黒歴史確定のヤツだな

「朝日奈が神崎と美竹を勧誘したいとき、見ての通りこいつは人見知りだからそんなこと言えるわけがなくてな」

「入ります」

「え？ちよ、即答？」

「あれだろ？文化祭の出し物手伝って欲しいからだろ？水臭いなー入るのが絶対条件なら言えつての」

「手伝うって言ったからには入らないとね、部活入ってなかったしいよ」

「よし、決まりだな」

「ちよつと！話簡単に決まってない!？」

「部活よ！そう簡単に辞めれないのよ!？」

「でも凜、前に他の部員辞めさせたって…」

「それは知らないわ、あの人が勝手に辞めてくれたのよ」

それはそれで何かと問題があるような気がするんだが…？

「本当にいいの？」

「いいって…まあメンバーがあれだけど我慢はするよ」

「なんなら夜桜も誘う？」

「いや、あいつは大丈夫」

うわー柊優のやつ相変わらず凜に嫌われてるな、あいつなんかしたのかね

「それじゃあ決まりだな、明日入部届け提出しとけ」

「はい」

「わかりました」

「ああ、それと言い忘れてたが文化祭の出し物手伝うって話を聞いたが…別に部活に入らなくてもよかったからな」

「……だとしても入っていいかなって思ったんですよ」

「なんだ、私が顧問の部活には興味があったのか、そうかそうか、また今度勉強の面倒見てあげよう」

「ありがとうございます、でも別に興味なんてありませんので！」

凜は友達だ。友達が困ってるなら協力はする。別に部活に入らなくてもいいのは何となくわかってたさ

ただ凜を少しからかいたくてさっきはあんなことを言っただけ、それにこいつは何かとネガティブだし断ったらさらに不安にさせるだろう

なんだろうか、メンヘラ彼女が出来た時みたいな思考をしてる気がする。できたことないけど

「2人ともあ、ありがとう…」

「ん、気にしなくていいよ」

「まああれだな、文化祭の出し物考えないとだな！」

「うん…私頑張って案を出す」

「でも今日はサークル活動な、また別日に話し合おうぜ」

「わかってる。私も別件があるし…」

凜のオーデイションに関してはまだで面目ないと思ってる…自分で協力するよと言いつつサークルに誘ったのに全くできてない。

「先生ちよつとお酒飲みたいから帰るわ、お前ら密室だからって変なことするんじゃないぞー」

「先生するわけないじゃんー!」

「他校のえつと戸山と市ヶ谷、そして白金、うちのクラスの生徒はうるさいが可愛いヤツらだ、面倒見てやってくれ」

「は、はい…どちらかと言うと私達の方がレイ君のお世話になってるか」と

「?まあいい、とりあえず私は帰る。帰りた、帰らせてくれ!」

「早く帰れようるさいな!」

担任はそれじゃなーといいながら視聴覚室を出て行く、今後もちろほらサークル活動の様子見てくるのかな?

だとした嬉しい!モカとひまりの暴走を抑えられる!

「レイ君、レイ君」

「ツ!なんですか燐子さん!」

「その、明日のデートなんですけど…」

「あ、ああ!明日のデートですね!何か!」

「ツ!」

なんかありりのやつからすんごく睨まれるんですけど…?こないだちゃんとペン買ってやったのに未だに機嫌悪いんだけど

「レイ君?」

「あ、はい…えつと明日の19時頃ショッピングモールの噴水エリアで待ち合わせですよ」

「はい!バイトの方は大丈夫そうですか?」

「んー千紗、つと編集長は残業させないって言ってたから大丈夫かと、でも携帯持っていないからいざって時に連絡できないんすよね」

あの日、アサシンと会って以来俺は無くした携帯の代わりとなる新しい携帯は買ってないのだ。

何故かというアサシンが持つてる可能性が高いから無理して買わ

なくてもいいのでは?」と思っただからだ。

「でもいいんすか燐子さん、俺女子とデートとかしたことないですよ…?」

昔香澄とはしょっちゅう何処か出かけたりはしてたがそれはデートってことになるのか?

となると俺の初デートは香澄か、まあ当時の俺からしたら嬉しいことだったんだろう。

「ご飯食べて歩いておしゃべりするだけですよ、ふふ」

「……なら大丈夫そうですね」

「んー!!!」

ありりは手に持っていた飲み物を飲み干したのかペットボトルをぐしゃりと潰していた。

「レイごめん、飲み物買ってきてくれないか…?」

「飲み物?」一本飲み干してるじゃんか」

「最近すげー喉の乾くんだよ!いいから買ってこいよ!」

「……俺の飲みかけやるから勘弁してください」

「へっ!」

わざわざ1階に降りるのもめんどくさい、なら少ししか飲んでなくて、ほぼ満タンで残ってる俺の飲みかけのオレンジジュースなら乾いた喉も潤えるだろ

「れ、レイ…とかかか間接キス…!へ、へへいいのかな?」

「有咲ー顔がすんごくエロいよ」

「ツ!う、うるせえ!こっち見んなあー!」

香澄から顔を逸らしたありりはそのまま勢いでオレンジジュースを飲む、昔俺の飲みかけの飲み物は飲みたくないような反応だったけど今は違うようだ。

「ねえ有咲ーそれ私にもちようだい!」

「はっ?やるわけねーだろ、これはあたし!がレイ!から貰ったものなんだぞ」

「なんでそこまで強調するんだよ」

「えーけちー、有咲がそんなにオレンジジュースが大好きなんて知ら

なかつたよ」

「別にオレンジジュースが好きってわけじゃねーから!？」

「じゃあちようだい!」

「だからやらねーっての!」

ならそこまですて断る理由はなんなんだ?とは何故か聞いては行けないような気がした。

「んなことより早く作業始めるぞ」

「蘭とありりは残す冬香のイラストを、凜と燐子は例の件を、モカ達モデル役は…なんだ、適当に遊んどおいてくれ」

「いや、ちよつとひまりとモカと香澄には手伝って欲しいことがある」
「ならそつちの手伝いを」

モデル役のやつが久しぶりにモデル役をするのはなんか新鮮な気がするな…果たして問題なくことが進めればいいんだが

そうは思ってたが気付けばモデル役全員が下着姿で何やら楽しげに会話をしていた。

「だからなんで脱いでんだよ!？」

「だって蘭が脱げってー」

「なんで脱がせた蘭!？」

「ひまりのおっぱい見たらレイが勃起すると思ったから、そしてそれを見せて、イラスト描くから」

「なんで俺の息子の絵を描くんだよ!？」
「??？」

「その言ってる意味がわからないの顔はやめろ!」

だってそうだろ!俺おかしなことなんて一言も言っていないよな!？」

「こないだ言ったじゃん、新作のネタ思いついたって…夏コミまで時間がない」

「お前今から新作作るの…?無理だつての、諦めろ!」

「…:じゃあ冬コミで出す。だから脱いで?そして勃起してるどころあたしに見せて?」

「お前事情を知らない人が聞いたらとんだ変態発言だぞ…?」

「蘭ちゃん積極的ーでもゼロ君こないだちゃんと1人でテント張って

「偉かったね！」

「偉くねーわ！男子なら不意立ちつてのがあるんだよ！」

だからって別にモカ達を脱がせなくてもいいじゃんか…まじで目のやり場に困るんだよ、こいつら俺が見てなくてもずっと俺のこと見てくるからな…。

「とりあえずエッチしとく？」

「そんな発想は俺にはない、お前は…ほらリュックから俺の体操服取っていいから、匂い嗅いでいいから黙ってる！」

「やったー！じゃあ私はちよつと急にトイレに行きたくなつたから行ってくるね！」

「おい待て俺の体操服使ってまた変なことしようとしてるよね！」

「あつぶない！下着姿だった♪」

「いやそれもだけどさ!?!」

たしかに下着姿でウロウロするのはかなりまずい。まずいけどそもそもそれ以前に

「お前学校で、その自慰行為とか…ダメだろ」

「誰がそんなことするって言ったの…？私はただトイレで思う存分レイ君の汗の匂いを嗅ぎたかっただけだよ？」

「あ、はい」

「きやーれーくん変態〜」

「黙れ露出変態野郎…！」

くっ…だつてひまりだぞ？ひまりが俺の体操服を持ってトイレに行くとかそれはもうやるやん、オナるやん!?!

「じゃあ行ってくるねー!!!」

「つておい！あいつ着替えるのはや」

「…モカと香澄でレイを全力で誘惑して」

「もういいだろ、そんなことしなくていいから服を着てくれ…」

「キラキラドキドキしそうだからやるー！」

「しねーよ!?!」

「じゃあ香澄ー」ゴニヨゴニヨ

何やら香澄とモカが楽しげに会話しては香澄がオーバリアク

シヨンをして行動に出た。

「ッ！」

モカと香澄は背中に腕を回し、自分のブラのホックを外し出し、両手でブラを抑えていた。

「な、何してんだよお前ら」

「そこからこうしてー」

「こうすればー！」

「なはっ!？」

モカと香澄は向かい合い恋人繋ぎのように手を握り、お互いの胸を押し当てていた。

その胸の間にはモカ、そして香澄の下着が挟まっており、背中ของブラのホックは止めていないため重力に従うように下に釣り下がっている。

体の部位にて首とつく部位は大切だと話を聞くが、中でも一番感度が高いと思われる首は顔を出すことなかったものの

押し当てているからなのかやけに横乳の肉厚?というのがハッキリわかり、何か変な性癖に目覚めるのではないかと思わせるその姿に俺はしばし眺めることしかできなかつた…。

「はっ！ダメだダメだ！」

「れーくん触りたいんじゃないのー?」

「ゼロ君になら触られても全然大丈夫だよ！」

「い、いやダメだつて…!」

なんだこれ、こいつらつてこんなに可愛かつたけ?

あー確か美人さんだったわ、俺の幼馴染全員可愛かつたもんな、そりゃそうだ。

「なかなか食いつかないね」

「獣みたいにもっと飛び込んでくるのかと思ってたよ」

「お前らは俺をなんだと思ってたんだよ…」

「おっばい星人」

「だからそれを言うなや！」

なんだ、もうテンプレのセリフになってるのか!?

「ああああああ！見てらんねえ！レイは他の誰でもないあたしの胸だけ揉んどけばいいんだよ……！」

「ぬへー！あ、ありり!？」

痺れを切らしたのかありりがいきなり参戦、そして俺の手を取り無理矢理自分のふくよかな胸に押し当てる。

心臓の鼓動が伝わるがかなり鼓動が早い。そこまで緊張するのなら無理にしなくていいと思うんだが……。

そうは思うもやはりありりの胸はすごく柔らかい。もう言い表せないような祝福の一時、この時だけはおっぱい星人と呼ばれてもいいかもしれない。

「つてー違う違うー！ありり、も、もういいだろ？離してくれないか？ほら俺も執筆しないとだし」

「キーボードは片手でも打てるだろ」

「……ありりも冬香の絵をだな」

「もう描いた」

「描いたつて下書きだけじゃねーか」

「うるせえな！黙ってあたしの胸を揉んどけよ!？」

「ええー」

「や！く！そ！く！」

「へい喜んでえー!!」

その後は片手でありりの胸を揉みほぐすことになってしまった。

ありりとの約束、それはありりの胸が大きくなったら俺が揉んでやるという約束だ。

この約束は1回揉んだら終わりかと思ってたがどうやら継続のようだ。当時の俺は何がどうあってこの約束をしたのか、そもそもこの約束のこと自体を忘れていたんだ。

だから俺はとやかくありりにいうことができないクチなのだ。

「あ、やっぱり勃起してる」

「……絶対椅子から立たないからな」

「ぶぶぶーもう立ってるけどね」

「起立しちゃってるね」

「……もうやだこんなサークル……」

俺は残りの手でちまちまと執筆作業を進め、もう片方の手でありりの胸を揉むというわけのわからない状況を堪能しながらサークル活動していたのであった。

◆ ◆ ◆

「ぬあー疲れた……」

「なんだよそのあたしの胸揉んでて疲れたみたいな言い方は！」

「ありりの胸は最高だった、できれば両手で揉みたかったです」

「おおお前って案外素直なんだな……」

「? そうなんじゃね」

すまない、適当に返事をしたただけだったんだが……まあ今日の活動は終了、帰って飯作って風呂入って、寝て、明日弦巻でバイトして

そして……燐子さんとデートか

「それでは私達は帰りますね、戸山さんと市ヶ谷さん、よければ私のタクシーで帰ります?」

「いいんですか! なら私乗ります! 有咲も乗るよね!」

「……いえ、私は今日歩いて帰ります」

「わかりました、なら戸山さん行きましょう」

「はーい! みんな今日もおつかれ! また今度ね!」

「お疲れさまでした」

燐子さんと香澄は視聴覚室を出て行き残った俺達も帰りの準備をする。

「ただいまーあれ? 香澄と燐子さんは?」

「もう帰った、てかお前いつまで嗅いでんだよ」

「……ねえレイ君、この体操服なんだけど借りても」

「絶対貸さない、返せ」

「もうー! ケチ! レイ君の鬼! 粗チン!」

「粗チンは言い過ぎだろ! 謝れよ! お前俺の立派な息子に謝れよ!」

「じゃあ謝るから出して?」

「そんなてきとうな罨に誰がハマるかっての!?!」

何が謝るから出せだよ、俺が謝れと言ったかもしれんがそうはなら

んやろ!？」

「じゃあ帰りますかーれーくん一緒に帰ろう」

「……いいぞ、けど半径1メートル以内に入るなよな、あとひまりも！」

「相変わらずモカとひまりには態度きついね」

「きついとはなんだきついとは！仕方がないだろ！」

「凜、帰ろっか」

「話を聞けよ!？」

蘭のやつ自分から発言しててこれかよ、スルーするなら言わないで欲しいんだが！

「レイ、あたしも…その一緒に帰ってもいいか？」

「ありりもか？うん全然いいけど…お前結構ここから離れてるだろ？歩きで大丈夫なのか？」

「大丈夫、大丈夫だ！」

「ならいいけど」

こうして蘭と凜は2人で帰り、俺、モカ、ひまり、そしてありりの4人でまとまり帰ることになった。

「最近近くに露出魔が出るんだとき、世の中怖いよな」

「だねー一体誰なんだろうねー」

「……………」

俺とひまりは何となく察したのか特にその話題に触れることはなかった。大方モカが犯人だろ

「明日れーくんりこさんとデートでしょー？」

「ッ！」

「それ私何も聞いてなかったんだよねーなんで話してくれなかったの!？」

「だってひまりに関係ないし…」

「関係あるよ！燐子さんがレイ君の初めての相手になるかもなんだよ!？」

「うんホテルとかには絶対行かないから大丈夫」

「……………」

「ありり？黙ってどうしたんだ？」

「……いやなんでもない」

ありりのやつなんか少し元気がないような？何処か体調でも悪いのだろうか。

「あ、私今日はコンビニに寄るからこの辺で！」

「まさかひーちゃんゴムを？」

「ゴムは常に持ってるから大丈夫♪」

「普通は持っていないんだよなあ……」

こんな会話を聞くと頭がクラつとなる。頼むから幼い頃の純粋な幼馴染に戻って欲しい。でもそれは叶わない思い、もうどうしようもできないのだ。

「じゃあモカちゃんも今日は夜の用事があるので早く帰るねー」

「夜の用事ってなんなの？」

「それは秘密でーす」

「ありり、人には聞かない方がいいこともあるんだぞ」

ありりはモカのことを露出趣味のある変態ってことは知ってる。しかし、巷で話題になってる露出魔がモカであることは知らないんだ。

そもそもその話題になってる露出魔がモカであるかどうかも定かではないんだけど

「じゃーねー」

手を振りながら帰っていくモカ、別れ際にスカートを上げパンツを見せてきたがありりが咄嗟に俺の顔面を殴り見ることはなかった。

こんな痛みを味わうのなら見た方がまだマシだったような……？てかあいつが履いてるとは珍しいな

ってそう思う時点でもうおかしいだろ!?

「2人きり、だな」

「ツ！そ、そうだな……ありりとこうして2人つきりで喋るのはあの日以来だな」

あの日というのは俺がありりに謝った日、殴られ水溜まりに落ちた

のはいい思い出だぜ

「……………」

「なあありり、俺なんかしたか？」

「え？」

「いやこないだのペンといい、今日の飲み物といいさ？なんか俺ありりに対して怒らせるようなことしたのかなーって」

ありりからまだあの件を許してもらったわけではない。約束として今は一緒にサークル活動をしているだけだ。

ありりは既に許しているかもしれないけどそのことを俺が聞かない限りまだ許されていないということになる。

「…………あのさレイ」

「うん」

「明日…やっぱり燐子さんとデートするの？」

「え、いやまあ別に断る理由もないし…それに」

アサシンのことだって探ることができる。わざわざ俺を誘うんだぞ？何か理由があるかもしれない。

その理由がアサシン関連のことで実は燐子さんがーって可能性もある。その他の可能性もあるけど

「それってさ、燐子さんのことが特別とかじゃないんだよな…？」

「特別？…………何を思ってありりがそんな質問してるかわからないけど特別ってわけじゃないぞ」

「やっぱり俺って男子だからさ、女子にデートに誘われたら嬉しいし、つい乗っちゃうよ、あはは」

これはあれか？まさかありりは俺が燐子さんとデートすることに對して嫉妬してる？

それはありりがアサシンだからか？たしかに燐子さんもありりもサークルメンバー、既にいるかもしれないとなると2人とも該当する。

「そんなものなのかな」

「…………ああ」

「(ここは探りを入れてみるか…)」

「だったらありり、今度俺とデートしよう」
「へっ!？」

あからさまな反応、みるみる顔が赤くなり次第には心做しか煙が立っているように見えた。

「……っっていくらなんでも急すぎるか!」

「い、いやそんなことない…寧ろ嬉しい、ぞ」

「ええー有咲さん…?」

まさかの反応、恥ずかしいかと思っただら嬉しいだど?

それはデートに誘われて嬉しいのか?だとしたら少なからずありりは俺に好意を持ってて?

好意を持つてるとなればアサシンであって?いやいやアサシンとは別で俺のことが好きとか…あるのかな!?

「か、勘違いすんなよな!久しぶり昔みたいにお前と遊べるから嬉しいだけだ!」

「……あ、はい」

これだよ、期待したらいつもこうなる。もう学んだ、今後期待なんてしてやるもんか!

と言うけど結局期待しちゃうんだよ、おのれアサシンめ、貴様のせいで俺は常にお前のことを意識して物事を考えないといけないじゃないか…!

「それでいつだ!日曜か!？」

「流石に早いよ、楽しみにしてくるのはわかるけどさ」

それに土曜日燐子さんとデートして次の日に別の人とデートってそれはもう人としてやばくないか?

「……また今度な」

「絶対だからな!絶対デートするんだぞ!約束だからな!」

「ああ、約束するよ」

「……ん!」

「??」

ありりはん!と言いながら右手の小指を立てて何かを求めるように俺の前に手を出した。

「!あれか!」

俺も右手の小指を立て、それをありりの小指に絡める。

そして

『指切りげんまん嘘ついたら絵の具とかした水のーます!指切った!』

「ふふ、覚えてたんだな」

「……お前と絵本作る約束した時したよな」

「レイは飲んだら危ないよ!?!って言ってたよな」

「はは、言ってたな」

「ちなみにだけどあたしの胸を揉むって約束を指切りげんまんしてるからな」

「……まじか」

のに覚えてなかったのか、ひまりには言えないぐらい俺も記憶力悪いのかもしれないな

「……………」

先程指切りげんまんをしたはいいものの離すタイミングがお互いわからなくなってしまった。

未だに小指は絡み合っている。俺から離れたらなにかと言われそうだから離そうにも離せない…。

「あつれーお2人さん手なんか握っちゃってー付き合うことになったの?」

『うわっ!?!』

いきなり話しかけられ急いでお互い手を離す。道端を見ると

「なに驚いてんのさ、てか本当にあんた達付き合ってるの?」

「姉貴!つ、付き合ってたねーよ、姉貴は仕事帰りか?」

「うん!いやー今日も社会のために働いた、帰ってストレイ飲みたいぜー!」

「滯奈さん、お、お久しぶりです」

「ありっち!お久ー」

「てかあんたら今帰り？信号青になりそうだから早く乗りな」

乗ると一言も言っていないのに無理矢理乗せられた。

厳密に言うとかせかされたから体が勝手に動いてしまったんだ。

「よっしゃー！アクセルベタ踏みひゃっはー！」

「法定速度は守ってくださいねえー！」

このまま警察にバレることなく家に着く、ありりは車に乗ったまま
で姉貴の運転のせいで目がぐるぐるになっていた。これは完全に
酔ってるやつだな

「ありつち大丈夫？家でちよつと休む？」

「や、休みます…」

「全く、ありつちをこんな目に合わせやがって…！許さんぞこの車！」

「お前の運転のせいだろ！」

車のせいにするな！車が可哀想だろ！？自分の愛車なんだからもつ
と愛してやれよ！

「そうだ！ありつちこのままレイの料理食べていかない！もうめちや
くちや美味いんだぞー！」

「いいんですか！？是非食べます！食べさせてください！」

「何故そこまでして食べたいんだ…？」

まあ1人分作るのが増えるだけだからいいけどさ、それにありりに
は料理食わせてやりたいとは思ってたし？これもいい機会だ、少し気
合を入れて料理を作るとしようか

「なんならありつち泊まってく？ちなみにやるならゴムは付けるんだ
ぜ？」

「やるわけないだろこのアホ姉貴いー！！」

玄関の前で叫ぶレイの声は、近所の方達の耳に入り、翌日心配され
たのか数人家にやってきたそうさ。

ちなみにそのおばさん達の対応をしたのは結局泊まることになっ
たありりであった…。

友達に秘密を隠していたことありますか？

その日も白金燐子の朝は早かった。

「ッー!!!」

デート当日の朝、緊張、不安、様々な感情が彼女を襲っていたためあまり寝付けることができず、父親が朝帰りしてきた時、玄関のドアが開く音で目が覚めてしまった。

朝帰りと言っても父親がいかかわしいことをしているのではなく、仕事上帰るのが遅くなっているだけだ。

久しぶりに帰ってきた父親に話しかけるべきだと判断した燐子は急いで自室を出て行き、階段をかけ降り玄関に向かう。

「お、お父さん！…おかえり、なさい」

「…：燐子、まだ起きてたのか」

「いえ、その、目が覚めてしまって…」

「そうか、起こして悪かったな」

「そんなこと、な、ないよ…！」

「…：悪い、久しぶりの休みなんだ、早く横になりたい」

「ご、ごめんなさい…」

「ああ、それと最近カードをよく使ってるようだな」

「ッー！」

カード、というのは燐子が持っているクレジットカードのことを指す言葉

彼女は何かと移動する際にはタクシーを、そして買い物をする際も、ゲームに課金する時も、オタク活動をするのにも、そのカードを使っている。

こんなに使ってるんだ、使用額がかなりの高額になるのは当たり前前のことだ。

「お前の好きなように使ってかまわない、私は金を払うだけだ」

「…：あの、その…カードじゃなくて」

「なんだ」

「お小遣い、が欲しいなーって…」

「……………」

クレジットカードを渡されながらお小遣いもせびるのか、なんて強欲な女と思うかもしれないが燐子は別の意味で父親に頼んでいた。周りの子達はクレジットカードなんて渡されない。お小遣いだ、自分も周りの子と同じようにお小遣い制度にして欲しいと頼んでいるのだ。

「カードの方が便利だろ?」

「あ、あはは、ですよね…ごめんなさいお父さん、仕事で疲れてるでしょ?休んでくだ、さい…」

「ああ、すまない」

「…………私お昼ご飯作りますね」

「悪い、昼前にはもう出てしまう」

「それでも何か食べないと!」

「…………燐子、料理できないのに見栄を張るな」

「ッ!」

「疲れてるんだ、もういいだろ」

「ごめんなさい、お父さん…」

いっぶりに会話をしただろうか?

いっぶりにこうして面と面合いか合って会話をしただろうか?

いつからこんな関係になってしまったのだろうか?

いつから…父親は笑わなくなってしまったのだろうか?

「……………これだから三次元は」

その日燐子は2次元に逃げたのであった。

◆ ◆ ◆

夕方18時前、少し早めに待合場所についた燐子は少しソワソワしながら噴水エリアのベンチに腰を下ろしていた。

周りを見渡せばカップルばかり、一人でいる自分が恥ずかしく思えてしまう。

「(いくら楽しみだからって早く来すぎでは?)」

まさか思ってた以上に道が空いておりすぐにショッピングモールに到着してしまった。

もちろんタクシー代は親のクレジットカード、いくらでも使っていないとお墨付きのレアカードだ。

「(今回のデートでレイ君のことを…!)」

レイは恐らく自分に何かを隠している。

確証があるわけじゃない、だけど明らかに様子が急変する場面を何度か見たことがある。

それもモカやひまり、香澄が何かを言いそうになったら女子相手にも容赦なく口を手で覆い隠し、何かを喋らせないようにしていた。

自分だけ仲間外れにされていたら…と想像すると心がきゆうつと締め付けられるような感覚が鱗子を襲う。

「……あつれ?あれあれあれ?」

「??」

「あ!やつぱり!やつぱり!お久!どう?元気?」

「……え、な、なんですか…?不審者ですか…!」

サマーニットを深く被り、夏だと言うのにマスクをつけて顔を隠している男性?らしき人物に話しかけられた。

ちなみに男性と判断したのは胸がなかったからだ。

「ちよつとちよつと!不審者って酷くない?ほらあたし、あたしだよ!」

「ツ!?!神奈先生!」

「しっ!声量落として…!」

「はっ!」

急いで口を抑えるが時すでに遅し、

「神奈だつて!」

「義妹の神奈!?!嘘!いるの!?!」

「でもここってカップルで来るところだろ?神奈先生彼氏いるの!?!」

「神奈先生は男性って噂もあるらしいよ?」

「実はついてるとかな!あはは!」

ここは噴水エリア、先程も説明したが周りはカップルばかりだ。

恋人同士で神奈の話をするというオタクが憧れるような恋仲であるカップルが多いというのは今の澤奈にとってどうでもいい。

「男…？あたしが男だつて…？胸か、やはり胸なのか、胸がないと女として見られないのか！」

「落ち着いてください神奈先生！私の胸を揉まないでえー!!」

悔しがる漣奈は燐子の胸を揉みながら泣いていた。泣くと言つても女の子見たく可愛らしく泣くのではなく、もう鼻水が止まらないほどの号泣、やはり胸のことは気にしていたようだ。

「ぐすん、あたしだつて好きで貧乳じゃないのに…！」

「え、えつとーその、私が言つて嫌味かもしれないませんが大きくても肩がこるだけですよ？」

「……………嘘だー！胸が大きいから肩がこるなんて人類が勝手に妄想しているだけだ！実際は筋肉が全くないひ弱なだけだろー！」

「なんせ巨乳は運痴だからな！あつはは！巨乳死すべし！かつこりんりんちゃんは除くかつことじー！」

漣奈は日頃の鬱憤をぶつけるかのように叫びながら再び燐子の胸を揉んでは泣いていた。

「あの、神奈先生はなんでここに？」

「ん？あー病院帰り」

「病院!?な、なにか病気でも!？」

「いやいやそんな大袈裟な、ただ最近通いだした病院に通院しただけだよーあ、レイには秘密にしてるから黙つててね♪」

「は、はい、気おつけます…！」

漣奈の見た目を見るも特に異常な様子はない、風邪ならばこんなところでないし通院もすることはないはず…。

漣奈が何故病院に通院しているのか疑問に思つていたもののその漣奈から話しかけられ思考は切り替わる。

「りんりんちゃんは何でここに？…ここってリア充が集う場所でしょう？」

「……………待ち合わせ場所になつてて」

「待ち合わせ場所？なにになに！デート!？」

「……………は、はい…」

顔を真っ赤にした燐子は照れくさそうにはいと返事をしては手に

していたカバンを強く握り下を向いていた。

「相手は？同じサークルの子？」

「そう、ですね」

「サークル恋愛かーギスギスするからあんまりおすすめしないねーあたしの知り合いの知り合いの、はたまた知り合いかもしれない人が大変になったらしい、いやー世界って広いね！」

「で、ですね！」

正直何を言ってるのか少しわからなかった。でも相手はあの神奈先生、ラノベ界、漫画界、その全ての覇者神奈

つまりのところオタクにとつては神作を作り出したまさに神そのもの、そんな人に対して何言ってるか分からないなんてことは言えない。

「そういうえばここに来た理由もう一個あったよ」

「？なんですか？」

「実は結弦君と来る予定だったんだよねー久しぶりにご飯食べよって話になったから少しだけ期待してたんだけどね」

「来れなくなっただけですか？」

「そうーそれも今弦巻の方が大変らしくてさー人手が足りないって言われてあたし専属の編集者のくせに駆り出されてさーしかもそのあと私抜き会議だつて！これがNTRか…」

「……へ、へえー」

「ご飯は行けそうにないと言われて渋々一人でやってきたつてわけ」

滯奈の話聞く限り今は弦巻文庫は立て込んでいるようだ。

弦巻文庫とはレイが編集者としてバイトしている職場、そこが忙しい…となればレイも忙しいのではないだろうか。

しかしレイは残業なしと言っていた。なら時間通りに来るだろう…。

「でも来てよかったよ、りんりんちゃんに会えたしね！」

「ツ！私に会えて嬉しいなんて！こ、こちらの方こそ神奈先生とこんなところで会えて嬉しいですよ！」

普段ならサイン会などでしかえお目にかかれないクソがつく有名

人、そんな人が近くのショッピングモールにて会えるとは夢のようなできごとだ。

このことをレイに話せばきつと彼も驚いてくれて神奈はこの地域に住んでるいのではない!?なんて言い出すんじゃないかと思つた燐子は質問をした。

「神奈先生はその、ここら辺に住んでるんですか？」

「うん、弟と一緒に住んでるよ」

「そう言えば弟いるってツイートしてましたね！」

「それ結構前じゃない？そんなどうでもいい情報覚えてくれるとかあたしのファンかよ」

「はい！大ファンです！憧れです！」

「ふつ、そうかそうか！いいぞ！その調子でもっと励たまえあつははは！」

「痛い、痛いです神奈先生！」

痛いけど嬉しいと思うまるでドMのようなことを言う燐子である。ちなみにそんな自覚は今の彼女にない。彼女は神奈に触れられていると言うだけで天にも登る程の喜びを感じていたのだ。

「そういうええありつちから聞いたよ、一緒に夏コミ出るんだって？」

「ありつち、とは？」

「ッ！」

あれ？言つちやまずかったか？と少し戸惑う澪奈であった。が別にレイのことを話すわけではないしいいかと判断してしまう。

後にこの甘かった判断を後悔してしまうとは思ひもせず澪奈は語り出す…。

「ありつちはほら、ありりだよありり、知らない？」

「ありりってあの市ヶ谷有咲さんですか？」

「そう！有咲ちゃん！」

「……なんで知ってるんですか？」

「なんでってそりゃ昔からの仲だしね、違う違う、仲だしね、誤解しないでね！」

中〇しと勘違いされることが澪奈は嫌なもよう。そんな話を最

初から聞いていればわかることだ、いきなりそんなことを言い出す人間がいるわけがない。

「……………」

有咲と昔からの仲…？と言うのはいつ頃からの付き合いだろうか。確かレイも有咲ことをファースト幼馴染と呼んでいた。となるとレイはこのサークルの中で一番の古くからの知り合いは有咲になる。もしその時から滯奈と有咲が知り合っていたのなら？

「(あの写真の女性は…)」

燐子はふと先日有咲から見せてもらった幼少期のレイと有咲、そしてレイの姉の滯奈が写っているあの写真のことを思い浮かべる。

いや、そんなはずはない。だってあの写真に写っている有咲とレイの肩に手を回してダブルピースしている女子はレイの姉、滯奈である。

「(私の思い込みですよね)」

仮にだ、仮にだ神奈がレイの実姉ならとづくに紹介されてるだろう。なんせ初めて会った時から自分は神奈の大ファンだと話していたのだから

「どうしたのりんりんちゃん？」

「あ、いえ！そうだ！神奈先生の小さい頃の写真見てみたいなーって、お、おこがましいですかね…？」

「……………いいよー！」

でも確かめたい、心の底から本当に違うんだと納得したい。

納得するためにダメもとで滯奈の小さい頃の写真を見せて欲しいと話してみるとあっさり承諾してくれた。

「えっとね、ちょっと待ってね…」

滯奈は昨日有咲から渡されたあの懐かしい写真を表示しようとした。

「(流星にこれはレイが写っているからトリミングして、っと)」

器用にレイのみを写真から排除し燐子にその写真を見せる…。

「はいー…どう？あたし小さい頃すんごく可愛くない!?赤髪ツインテールとかどこかの艦長かよってね！」

「…………う、そ…？」

「……………あつれー？」

隣子はその写真をみて唾然とする。

何故ならその写真は先日有咲から見せられたレイとの思い出の写真…

トリミングされた画像のためか左端にいる滯奈、その隣には有咲の幼少期の姿が…。

一度見ただけが覚えてる。あれは確実に幼少期の有咲だ、しかも見せられた写真と同じポーズ、同じ画質…。

「この写真私見ましたよ」

「…………あ、そっか、そうなんだ…ちなみに誰から？」

「市ヶ谷さんからです」

「へ、へえー…だったら元の写真とか覚えてるのかな？」

「…………はい」

やってしまった。と後悔する滯奈、まさか有咲がよりにもよってこの写真を見せていたとは思ひもしなかった。

レイが隣子に神奈の弟であることを隠していることは知ってた、理由をとやかく聞くのはやめていたが…バレるとなれば話は別だ。

レイにはなにか知られたくない事情があったから黙っていた。にもかかわらず先程あの写真を見せてしまった。

滯奈は馬鹿じゃない、有咲から元の写真を見せられたことがあるのならそこに映る人物の話をしたのではないかと瞬時に察する。

「あなたが滯奈、さん…？」

「ツ…：…あたしはレイの姉、神崎滯奈、ペンネームは…：神奈だよ」

滯奈は恐縮した顔でそう言う、彼女も彼女なりの罪悪感というものはある。これはレイからこっぴどく叱られてしまう。

運が悪ければこの子達の運命を変えてしまったのかもしれないということも…少しは思っていた。

「レイ君は神奈先生の弟…？」

時刻は19時の数分前、未だにレイは来る気配がないのであった…。

◆ ◆ ◆
時は1時間前、絶賛繁忙期中、いや常に忙しい弦巻文庫の持ち込みブースには周りの男性よりも顔が幼く、なんなら女性と見間違えられるほど顔が整った青年がスーツを着て仕事をしていた。

「……あと5分で定時つと」

退社したら急いで電車乗って：普通に間に合う距離か、燐子さんとのデートで遅刻はしたくないよな

「おつかれレイ君」

「結弦さん、今日は持ち込み対応してるんですか？」

「何故か氷川さんから頼まれたからね：あの人といい、編集長といい君の姉さんまで：僕は振り回されすぎじゃないか：？」

「それは、まあそれほど結弦さんが頼りにされてるってことですよ！」
そもそも色んな業務を押し付けられるところどころでちよつとブラック感あるんですけど：弦巻は楽しくてアットホームな職場だと信じた
いもんだぜ

とは言うが実際は出版会社なんて常に忙しい、人手不足なことはよくあることだ。

だから俺みたいな平凡な学生を普通にバイトとして呼ぶ、国よ頼むから彼らに癒しを与えてやってくれ

「そろそろ帰りますね、俺残業なしなので」

「くっ！僕はまだ別の仕事があるんだぞ！それに湊奈さんにご飯行く予定だったのにいけなくなってかなり怒られたんだからね！」

「姉貴と飯食いに行く勇気がすごいぞ」

俺は弟だからいいけど異性で姉貴みたいなやつから飯いこう！と言われても行く気にならない。

「じゃあ俺はこの辺でつと」

「神崎さんは！神崎さんはいますか!？」

「いません帰りました」

「あ！神崎さん！俺のこと覚えてますか!？」

「知りません」

「俺ですよ！お姉ちゃん作品の!！」

「くっ！」

何故このタイミングでやってきた…！定時2分前に持ち込みがやって来てしまった。でも本日の持ち込み受付は既に終了している。それを言えば

「実は持ち込みの受付した後少し修正したい箇所があつてですねー
そのソファアールでちよつと書き足してたんですよ！」

「何やってんですか!？」

「お願いします神崎さん！俺はこの作品に命かけてるんです！俺のお姉ちゃん愛は誰にも負けないんですよ…！」

「…ちよつと時間をください」

結弦さん…と呼びつけブースの隅でコソコソ話をする。

「…結弦さん一生のお願いです、帰らせてください」

「帰らせてつて君目当てで来てるみたいじゃないか、それに僕は今から義妹の会議があるんだよ」

「！姉貴いるんですか!？」

姉貴と一緒に帰れるなら車に乗せてもらつて…！

「滯奈さんは今日の会議には出席しないよ、元から参加する予定じゃなかったんだ、なんせ急遽会議することになったからね」

「でもまだ本社にいるんじゃない？」

「それがねーなんか病院に行かないといけないんだとさ」

「病院？」

「体調崩したんだつてさ、見た感じ元気そうだったけどなー」

姉貴のやつ風邪でも引いたのか？まあいい、あんな自堕落な生活してたら体調を崩すのは目に見えている。

帰つて暇ができたからお粥を作つてやろう。

「じゃあ僕はそろそろ…」

「待つてください！俺これから用事が！」

「悪いね、僕も用事あつたのに断れなかつたんだよ…！」

「おうまいがー」

もうここはこの人の作品を見なければならぬのか？ちらりと見ただけだが相当な量だぞ？数十分で終わるような量じゃない…。

「だったら結弦さん！姉貴に伝えて欲しいことがあるんです」
「ん？」

俺は結弦さん呼び止め、姉貴にあることを伝えるように言伝をお願いしたのであった。

◆ ◆ ◆

まずい、かなり遅れてしまった。

退社したのは19時ちよい前、完全に遅刻だ：今からショッピングモールに向かうとしても数十分はかかってしまう。

「なっ！」

社内から出てみると外は大雨、天気予報をちゃんと確認したが雨が降る予報なんてなかった。

「こんな時にゲリラ豪雨かよ!？」

散々な一日だ、残業なしのはずが残業するし、めんどくさい作者の担当をすることになったし、雨は降る。

近くにあるコンビニに急いで駆けつけ傘を買おうとするも全て売り切れ、残っているのは少し値段が高い折り畳み傘のみ

ないよりマシだと判断し、その折り畳み傘を購入し最寄りの駅に駆け込む、が

「運行休止!？」

ゲリラ豪雨の影響で線路に水たまりができたようだ。そのため電車は運行休止、ショッピングモールまで向かうのに電車の方が便利であるが：背に腹はかえられない。

駅を飛び出しタクシー乗り場に向かうも、俺と同じ考えであろう人達がタクシー乗り場に並び行列を作っていた。

「ツ〜!!あー!もーう!」

傘を指したままタクシー乗り場から離れ、そのまま走ってショッピングモールに向かう。

ちなみに走ってる途中にバス停を見てみたがバスも人がうじゃうじゃ、とても乗れるような状況ではなかった。

そのため最終手段、走ってショッピングモールに向かうことを選んだ。幸い雨も少しだけ止んできてる。

このままなら遅くても20時までには着くだろう。とは言っても1時間もの遅刻、果たして燐子さんは待ってくれてるだろうか？

持久走はかなり苦手だが今は走らないといけない。

「はあ、はあ、はあ……っ、着いた」

腕時計を見ると時刻は20時12分、1時間と12分の遅刻だ。

なんてことだ……こんなことになるならケチらずに携帯を買っておけばよかった、だったらすぐに燐子さんに遅れると伝えることができたのに……！

「燐子さんいるのかな？」

噴水エリアに着いたものの周りは誰もいない、雨はまだ少し降っているし当たり前のことか

となると燐子さんももう……

「ッ!？」

と思ったが街灯付近に傘を刺さず寄りかかる体制で立っている人が見受けられた。

見た所女性、そして長い黒髪にふくよかな胸、何度も見たことがあるその顔、間違いない。

白金燐子、本日俺がデートの約束をした女性だ。

傘をさしていないのはやはり燐子さんも大雨が降るとは思っていなかったんだらうか

俺は近寄り燐子さんに傘を渡す。その際にはちゃんと誠意を込めて謝った。

「燐子さんごめん、残業……することになっちゃって」

「……………」

「びしょ濡れですよ、風邪をひきます、とりあえず遅いかもしれないですけど今からでも傘を……」

俺が遅刻したせいで燐子さんはずぶ濡れになってしまった。

服はすけ、夏着のため生地が薄いせいなのか下着が透けて見える。こんな時になに呑気なことを考えているんだと思うかもしれないが目のやり場に困るんだ。

髪も濡れてるし、表情だって悲しそうにしている。

それもそうか、デートだつて言うのに相手が1時間も遅刻するなんて、俺は何やってんだか

「……………たんですか」

「隣子、さん？」

「どうして黙ってんですか」

「……………すみません」

どうやら姉貴は伝えてくれなかったのか

俺が姉貴に頼んだこと、それはモカ達に遅れることを隣子さんに伝えて欲しいと伝えただ。

正確には結弦さんに言伝をお願いしたけど無駄だったか

「遅刻したのは謝りますから、とりあえず早くしないと風邪を…」

「そんなのもうどうでもいいんですよ…！」

「よ、よくないですよ！俺のせいで風邪でもひかれたら！」

「だからどうでもいいって言うてるんですよ！」

「は、はあ？」

どうでもいいってそれはないだろ、俺のせいで隣子さんが風邪をひくとなれば俺に責任があるだろ！

だって俺が遅刻したんだから

「なんで、どうして…どうして黙ってたんですか…？」

「??」

「どうして神奈先生の弟であることを黙ってたんですか…！」

「……………ど、どこでそれを聞いたんですか？」

「……………本人から聞きました」

姉貴のやつなに話してんだよ…どういった経緯で姉貴が隣子さんにそのことを話したのかはわかりかねるがわかることはある。

隣子さんは遅刻したことより黙っていたことに怒っているんだ。なら事情を説明して

「隣子さん、これには理由があつて」

「理由ってなんですか？黙ってた理由ですか…？」

「そう、ですね」

「……………ねえレイ君、私達って同じサークルの仲間ですよ？友達です

よね…？なのに、なんで黙ってんですか…！」

「……だからそれには理由が」

「私がオタクだからですか…？オタクな私に話せば誰かに広めるんじゃないかと思っただんですか！」

「ツ！違う！そんなこと思っただけなんかない！俺はただ燐子さんのために……！」

「私のためってなんですか！友達を騙してて！仲間を騙して何が私のためですか！」

「ツ！………」

言葉だ、何か発さないといけない。

でも何をいえばいい？素直に憧れの人に簡単に会ったら意味が無
いから黙ってた？

確かにその通りだ、ならサイン会で会ったならもう話してもよかつ
たんじゃないか？

でも…それを拒んだのは俺自身だ、俺はそれとは別の理由で燐子さ
んに神奈の弟であることを黙ってたんだ。

「ゼロ君！」

こんな時だと言うにふと香澄が俺のことを呼ぶシーンを想像して
しまう。

燐子さんに俺が神奈の弟であることを黙ってた理由、それは

「俺はただ、香澄と同じように……」

話をしようとしたその時だ。

「ダメ、限界、死ぬ……」

「凜……！」

「あらら、崩れちゃったー」

「だからまとまらない方がいいって言ったのに」
『……………』

噴水エリアの近くにある花壇より姿を現したのは凜、ありり、そし
てモカ

その後ろには蘭、ひまり、そして香澄の姿があった。

大方俺と燐子さんのデートを一目見ようと集まったんだろう。そ

の結果俺が遅刻、長い間姿を隠してた足が痺れた凧が倒れてしまいその拍子で数人倒れてしまった……ってところか

「……ちょうどよかったです。皆さんは……レイ君が神奈先生の弟だっ
て知ってたんですか……?」

「モカたん、ひまりさん、美竹さんに市ヶ谷さんは……やっぱり知ってた
んですか?」

「はい、知ってました」

「ツ！ちよつと蘭、少しは躊躇しようよ」

「なんで？だってもうバレてるじゃん」

「それで燐子さんはレイに対して何が言いたいんですか?」

「それ、は……！くっ！凧ちゃんさん！」

「は、はひー！」

水溜まりにつかっていた凧は急いで立ち上がり燐子に顔を向けて
いた。

「凧ちゃんさんは知ってたんですか……?」

「……………ごめん」

「ツ〜！」

幼馴染に話すのならまだわかる。だけど何故凧には話したんだろ
うか?という疑問が燐子を襲う。

「私だけ教えられてない……?」

ああ、やはりレイは自分に何かを隠していた。それもこんなに大き
なことを。

まさか有名な神奈先生の弟が身近にいて、同じサークルに所属して
いる人の弟なんて天文学的な確率でも相当低い確率のはずだ。

しかし現に今起こっている出来事、紛れもない事実、レイは神奈の
弟、いや滯奈の弟である。

「私だけ、私、だけ?」

もし普段通りの燐子ならばいつも通り驚きなんて教えてくれな
かったんですかー！

と今みたいな状況ではなくかなりの驚きと共に軽く流す、とは言え
ないが驚く程度で終わってただろう。

でも今はどうだろうか？ 燐子は最近レイとの距離を気にしていた。そのため今このことを知ると心にかなり響く、それも自分以外は知ってるときた。意図的にレイが燐子に黙ってたとしか考えられない。

そこからはいろんな考えが浮かぶ

レイは自分に興味なんてない、絵の上手い有咲と蘭のことしか気にかけてない、もう自分は用済みなんだ、と

「もう、いいです」

「……………」

「私だけ！ 仲間外れにして！ サークル活動楽しめばいいんですよ……！」

「……………あ、だから、り……」

「……………くっ！」

燐子さんは泣きそうなところを必死にこらえそのまま俺達に背を向け走り出した。

途中で石につまずき転ぶもすぐに立ち上がりそのまま走って俺達から離れる。まるで逃げるかのように……

「……………」

そんななか俺はただ燐子さんの後ろ姿を眺めることしかできなかった。

正確に言うとう口が動こうとはしなかった。

それは俺が燐子さんに対して理由を説明したくない……と言うのもあった。

あれは一時の迷いだっただが我ながら恥ずかしいことを燐子さんに言おうとしていた。

でもあの時そのことを伝えていたら……どんな反応してくれたかな？

……………優しく受け止めてくれたかな？

「ゼロ君」

「……………香澄、俺ってダメだな」

「話そうとしたんだよね？」

「ああ」

「……ダメだよ、ちゃんとやわらないと………伝わらないよ」

「だよな、そうだよな」

燐子さんとは後日ちゃんと話さないと、でも彼女は話を聞いてくれるだろうか？

いや聞いてくれないとしてもどうにかして話をしないと…

「みんなはこれからどうするんだ？見ての通りデートはめっちゃくちゃ、もう見ても楽しいことなんてないぞ」

「……れい、ごめん」

「なんで凜が謝るんだよ」

「私知ってた、りんこが悩んでたこと、なのに知ってたって答えちゃった…」

「凜…」

「どうしよう、せつかくできた友達なのに、2人の仲悪くしちゃった…私いやだよ…!」

「大丈夫だつてりんちゃん、りこさんは私達でなんとかするから」

「……モカ、これは俺と燐子さんの問題だ」

他の人達がましてや凜がそこまで心配する必要はない。俺が黙ってから起きた出来事なんだ。

「何かツコつけてんの？あんた可愛いんだからツコつけなくていいの」

「は、はっ!？」

「レイ君と燐子さんは同じサークルメンバー、その2人の問題はサークルの問題でしょ？」

「……でもこればかりは俺が悪いだろ」

「れつくん…じゃないお前だけの話じゃねーぞ」

ありりはそう言ってくれた。それは俺を慰めるために言ってることか？

「……ごめん、あたしがさ、これ燐子さんに見せたんだよ」

「この写真つて昨日見せてくれた写真…?」

「この時に燐子さんが澤奈さんのこと聞いてきたからさ」

「あたしがレイの姉って伝えたの、だから……それは、ごめん」

「……………いや、ただこの悔しいけど可愛い幼少期時代の姉貴の写真を見せたところでバレるわけじゃないだろ？」

それに隣子さんは姉貴から話を聞いたと言っていた。

理由はともかく蘭やありりが負い目を感じることなんてないんだ。何度も言うが俺のせいで起きたことだ。

「……………でも」

『??』

「話す機会とか作れるなら……お願いはしたい、かもしれない」

今の俺が話しかけたところで相手にされるかわからない……。不本意だが彼女達の力を借りることで話をする機会が訪れるかもしれない。

「もちろん！もう夏コミも近いんでしょ？当日までこんな空気だったら重くていつも通りできないよ」

「早くりこさんと仲直りしてみんなで視聴覚室で全裸になろうー」

「あのね君達、真面目な話してんのにさ、今そういう話はやめて欲しいなー」

「ほら凜もう泣くなって」

「だ、だってえ私のせいで…」

「……………お前っていいやつなんだな」

俺と隣子さんの仲が悪くなったのが自分のせいだと言い出す凜、本日に彼女は何も悪くないのに……泣くぐらい自分を責めいた。

それは彼女がネガティブ思考だからってのもあるかもしれない。でも俺はそうとは捉えない、彼女は初めてできた友達達の仲が悪くなるのが嫌なのんだ。

「…………………………」

「レイどうしたの？」

「……………いや、なんでもない、次会ったらちゃんと隣子さんと話すよ」

「ああ、まかせろー！なんてったってあたしは生徒会の活動もある、それとなくタイミング作ってやるよ！」

「頼んだよありり……それじゃあ俺帰るから、ちよつとバイトとか、色々

あつて疲れた…。」

今日は1日散々な目にあつた。燐子さんに関しては俺が悪いけどそれ以外は…俺の日頃の行いが悪かつたからだろうか。

「……ゼロ君！」

「なんだ香澄」

「ううん、なんでもない…明日もバイト頑張つてね？」

「……ありがとう香澄、また何かあつたら頼むよ」

「ツ！うん！」

俺は香澄の顔を見ることができず、そのまま振り返ることもなく家に向かうのであつた。

友達に秘密を隠していたことありますか？その2

市ヶ谷有咲の朝はかなり遅かった。

「頭痛ええ…」

起きてすぐ気づく、頭がかなり痛い…昨日のことを思い出そうとするとさらに頭が痛くなってしまう。

「うう、昨日は確か…漣奈さんにジュースをたくさん飲まされてたっけか…」

うつすらぼんやり下着姿の漣奈が自分に飲み物を渡していた気がする気もしなくもない。

「……あれ？…こっつて」

そういえば昨日は幼馴染である神崎レイの家にてレイの手料理を食べていたはず。

その後なんやかんやで記憶が曖昧で…でも今この瞬間はつきりわかることがある。

「家じゃねえ!？」

ベットから飛び起き部屋を出る。出た先に見える光景には零の部屋、漣奈の部屋と書かれたドアプレートが掲げられている部屋が2部屋あった。

「なんだ、レイのベットじゃないのか…って！なに悔しがってんだよあたしは!？」

それよりもだ。

「あ、あたしレイの家に泊まったのか!？」

起きて数秒経ち、ぼーつとした頭が冴えてきて気づく、自分がレイの家に泊まっていたことに…。

「(まであたし、レイとなにかよからぬことしてないよな…?)」

「ッ！」

トイレに駆け込み確認する。

うん、してない、何故わかるか？それは乙女の秘密だ。

「(……泊まるなら襲えよ馬鹿)」

そうは言うも考える。家には漣奈さんもいる、レイが例え獣だった

としてもあの人がいる限りレイは決してそのような行動はしないだろう。

「てか何考えてんだよあたしー!!」

1人忙しい様子の有咲、起きたはいいものの家の中に人がいる気配がまったくなかった。

リビングに行くとい机の上に朝食と置き手紙、そして神崎家の鍵が置かれていた。

置き手紙にはレイの直筆で「ありり、鍵閉めよろしく P.S昨日のことは誰にも言わないから」と書かれていた。

「昨日あたしは何したんだよ!?!」

リビングに膝と手をつき四つん這いになる。大きめのシャツ1枚しか着てない有咲を今真後ろから見れるのなら、男子が興奮する景色が広がってるんだらう。

「……れつくんと漣奈さんは仕事か」

正確に言うとレイはバイトであるがそんなことはどうでもいい、リビングの壁にかけられてる時計を見ると12時間近、お昼ご飯をとるには丁度いい時間帯だ。

「とりあえず食うか……」

レイの手作りフレンチトーストを食す。昨日も夜ご飯をいただいたが相変わらず美味しい、是非とも結婚して毎朝朝食を作って欲しいところだと有咲は思う。

思うも数秒後には首を振って全力否定する。

「流石に……飯はあたしが作らないとダメだよな……?」

誰もが思ったことを代表して言わせてもらおう。

そこかい!?

朝食を食べ終え皿を洗い、長居するのはあれなものだからそろそろ帰ろうと思う有咲、しかし着て帰る服がないと気づく

漣奈の服は胸のサイズがあれだから着ることは不可能、否、不可能ではないが帰路にて服が破裂するかもしれない……。

例えティーシャツでも破裂するかもしれないのだ。

それを見込んでいたレイは昨日の夜のうちに有咲の制服にリセツ

シユをかけ、尚且つシワがつかないよう綺麗に畳ソファアの上に置いていた。

「……………」

有咲は完全に悟る。レイはかなり家事ができる男だと、そう言う男は嫌いじゃない。むしろ好みだぜ…と有咲は心の中で決めゼリフのように語っていた。

「あーやっぱり美形 a n d 紺碧へアアって最高だよな、へへ！」

まるで誰かを指すかのようなセリフ、隠しても隠しきれない思いとはまさにこのところ、本人がいないからやりたい放題

「……………」

昨日はレイ達がリビングにいたからできなかったこと…神崎家のソファアにダイブした。

ここは昨日レイが寝た場所、確か最近部屋で寝れないと言い出しリビングで寝ると言っていた。

リビングで寝る〓ソファアで寝る。勝利の方程式、いぎゆかん、レイの寝たソファアへ

「…………昨日あいつここで寝たのか」

どんな体制で寝たんだ？仰向け？それともうつ伏せ？もしうつ伏せなら…ここであつ伏せになれば…！

＼ピンポーン／

「ツ！」

ビクンと体を跳ねらせソファアから飛び起きる。誰がインタホーンを押したらしい。

「あのーレイ君ー？隣のものですけどー？」

これはまずい。自分はレイにとってはファースト幼馴染、そうファースト、一番…の幼馴染…でも近所の人達からしては赤の他人

そんな人がはーいと言いなながら元気よくドアを開けたらどう思われる？

「あの昨日の夕方叫んでましたよねー？大丈夫ー？」

「行くしかねえか…」

万が一居留守を使ったとしても隣の人に出ていくところを見られ

たらさらに厄介なことになってしまふ。

何食わぬ顔で対応しよう、さすれば隣の人も納得してくれるだろう。

「はい」

「レイ君…？あは？あなたはどちら様で？」

「…えっと、れつくんの友達です」

「友達…レイ君ったらお友達にお留守番お願いしてたのね」

「まあ、はい」

「ん？お友達…？」

「ッ！」

まずい、妙に勘が鋭いお隣さんだ。

自分は完璧なレイが好むようなナイスバディの女だ、友達ではなく彼女と関わっても仕方がないかー寧ろ嬉しい。

「レイ君ったらいつの間になんか可愛い友人を作って…人って成長するのね」

「……………あはは、ですね」

できれば彼女と、恋人と思われたかった有咲である。

「これつまらないものだけどレイ君に渡してくれる？」

「え!?!これですか!?!」

発泡スチロールの箱ごと渡され中身を見てみると大きい鮭丸々一匹が氷に覆われていた。

「レイ君ったら魚も捌けるのよ！もう神崎さん達が羨ましいわ、私の息子もこれぐらい料理ができればモテたでしょうに」

「……………あ、ありがとうございます、れつくんにはあかしから伝えておきますよ」

「ありがとねえーあ、それとあんまり叫んでたらご近所さんから心配されるよってことも伝えててね！」

「あーはい」

近所のおばさんは去って行き玄関に1人残される有咲、重い発泡スチロールを抱え込んでリビングに戻る。

生魚の扱いなんて知らない有咲は無知識故にとりあえず冷蔵庫に

入れておけばいいだろうと判断し発泡スチロールごと冷蔵庫にぶち込んだ。

生憎神崎家の冷蔵庫はかなりの大きいタイプのものだったため収納することができた。

有咲はリュックから筆記用具とメモを取り出し「冷蔵庫の中に鮭があります PS 昨日のことってなんのことですか？よく覚えてません」と記入し、机の上に置く

「そろそろ帰るかーッ!？」

待つて欲しい、今この家には自分以外誰もいない。なら、なら…何をしてもバレない…？

レイが自室に監視カメラを仕掛けていない限りそんなことは決してない。

「……………」ゴクリ

レイの部屋、そしてあの神奈の作業部屋が見れる絶好の機会！

「乗るしかねえ…このビッグウェーブ！」

階段を駆け上がり神奈の部屋にノックもせず入る。

ちなみに神崎家の2階の構造だが階段の間近にある部屋が滯奈の部屋、その隣がレイの部屋、レイ、滯奈の部屋の前にある大きな部屋がレイ達両親共同の部屋だ。

有咲は一番近かった滯奈の部屋に入った。

「ッ！」

散らかってる。あまりにも散らかってる…。散らかりすぎると言う言葉か危うい言葉が出る…。

床にはぐちゃぐちゃに丸められた紙が、机にはインクで汚れた紙、椅子にはいつも作業用で来てるジャージがかけられている。

「……………神奈先生の生原稿…！」

を見ようと思ったが探しても見つからない。それもそうか、昨日の夜に締切がとか言ってた気がする。終わってないのなら持って行って作業を行うのは当然か…。

これ以上汚い部屋を探しても意味がないと悟った有咲はレイの部屋に向かった。

「わっ！」

入つてすぐ右手には漫画やラノベがズラーツと並べられた本棚が目に入る。

このレイの部屋にある漫画やラノベは漣奈が買ったものだ。漣奈は電子書籍版をわざわざ買ったため本はレイにあげるよ、と無理やり押し付けレイが管理することになってるのだ。

「……………」

手に取るとわかる。何度も読み返したんだろう、紙を持つである部分が少し掠れており、レイがどのように本を読んでいるのかはつきり分かる。

「……………ここであの話は生まれたのか」

ここで数々のSSが生まれた。燐子、蘭、有咲のイラストに合わせたSSが作られた聖地…。

「……………今日れつくん、燐子さんとデート行くんだよな、いいな、羨ましい」

手に持っていたラノベを胸に抱え込みボソツと言ってしまう。

羨ましいものは羨ましい…つい言葉に出てしまったのだ。

「ま、まあ？今度デートしてくれるって約束してくれたからな！うん！全然羨ましくないってのー!!」

まるで自分に言い聞かせるように大声でいい有咲は部屋から出ていく

監視カメラがついていたのなら、有咲が行った行動、言動は誰かに見られたり聞かれたりするだろう。

「……………」

ただ一人の少女が仕掛けた盗聴器によって…聞かれることは除くが…。

「おじやましましたー！」

鍵をかけ鼻歌を歌いながら神崎家から出ていく有咲であった。

◆◆◆

朝日奈凜は特に用事もなく近所をぶらぶらと散歩していた。つまりのところ散歩だ。

彼女は散歩が好きだと妹の楓凜の発言により数人には知られていた。

「(今日の夜ご飯なにかな)」

なんて呑気なことを考えながら歩いていると

「あ、凜」

「……ありさ?」

「奇遇だな、何してんだ?」

「ありさはなんで制服なの?」

「え!? あ、あつはは学校に用事があつてさ!」

「それと心做しか体調が優れないようにも見える」

「それは気のせいだろ! ほら! あたしは元気だつての!」

「……そう、気のせいなんだ」

「(昨日れつくんの家に泊まったなんて言えねーつての!)」

有咲の言うれつくんとはレイのことを指す渾名だ。なにやら昨日のお泊まり会で親密度が上がり呼び方が変わったもよう。

「凜は何してるんだ?」

「散歩」

「散歩? まあいいや、途中まで一緒なら歩かないか?」

「いいよ」

2人で仲良く隣を歩きたわいもない話をする。もその数分後

「あー! 凜ちゃんと有咲発見!」

「本当だ! 凜ちゃんと有咲が一緒にいる! なんぞ!」

「これは探す手間が省けましたなー」

「か、香澄!? それにみんなも! なんぞこんな所で会うんだよ!」

「有咲の家に行っただけだけど昨日から帰ってないって言われて探してたんだよ?」

「へ、へえーか、帰っただけだなあ、ばあちゃん気づかなかつたのかなあ」

「……………」

「なんだよ凜、その目は」

「ありさ、怪しい…」

「な、なななんでもないから！てか探す手間が省けたってどゆいうことだモカちゃん！」

「(逃げたな)」

有咲は逃げるようにモカに話しかけこの会話を終わらせようと思
みた。

「今日りこさんとれーくんがデートするじゃん？尾行しようかなーつ
て、えへへ」

「尾行って、みんなはする気なのか？」

「ホテルに行ったら困る！」

「それは同感、れいならやりかねない」

「あいつ腰抜けへなちよこチキン野郎だからそれはないって何度も
言ってるじゃん」

「い、いや！あいつって時々何しでかすかわからないだろ！」

『……………』

全員が否定しない。特別レイが過去になにか過ちを犯したわけ
はないが何となくレイならやりかねないと思ってしまうサークルメ
ンバー達なのであった。

「だったららんはなんで着いてきたの？」

「…………あたしはレイがちゃんとエスコートできるのか心配になっただ
け」

「とか言ってくれーくんとりこさんがくつつかないか心配してるんで
しよ〜？」

「確かにそうかもしれない…ある意味ね」

「…………お、おー蘭が素直になった？」

ある意味というのは本当にある意味だ。蘭にとってレイが異性と
絡むのなんて言語道断、柊優とレイのカップリングが最高なんだ。

「香澄はなんで着いてきたんだ？」

「だって私が誘うようになって言ったんだよ！見届けないといけないよ
！」

「見届けてなくてもいいだろ!?てか迷惑だろ！」

「えー有咲はゼロ君と隣子さんがどんなデートするか気にならない

のー?」

「そ、それはまあ気になるけどさあ…あー!行く、行くから…着替えるから待っててくれ」

「じゃあ有咲の家で遊んで待ってこっか!」

「庭では絶対遊ぶなよな!てか全員で来んのかよ!?!」

こうして有咲達は一度着替えるために市ヶ谷亭へと向かい、その後時間を潰してレイ達が待ち合わせ場所に行っているシヨツピングモールの噴水エリアに向かった。

「今思ったけど待ち合わせ場所を全員が聞こえるところで決めるとか何考えてんだろうなあいつ」

「まあれーくん来て欲しそうなこと言ってたしー?」

モカとレイが2人で帰っている時レイは絶対に来るんじゃないぞと念押しをしたがモカはそれを振りとして捉えていたらしい。

レイ本人は決してそんな意図はなかったのだが…言葉というのは聞く人によって捉え方が異なるのだ。

「リア充が1組、2組、そして3組…あいつら爆発すればいいのに…!」

「凜ちゃん不吉なこと言わないの!」

「だ、だってあいつら人生の勝ち組じゃんか!わ、私なんて非リアの陰キャよ?負け組じゃない…アイツらが今夜イチヤイチャすると思うと私は悲しさのあまり心が痛くなってしまっわ」

「じゃありんちゃん彼氏作ればー?」

「もか、私にできるわけないでしょ、嫌味?」

「それそっくりそのまま返してやろうかおい」

ちなみにだが凜は何度も告白されそうになったことはある。

生徒ロッカーに手紙を入れた男子いわく待ち合わせ場所にてどれだけ待っても来ることなく次の日に話しかけたら

「手紙…?捨てた」

「ガーン」

凜はその手紙をラブレターとは思わず自分に対しての嫌がらせだと勘違いしていた。

自分の悪いところ、もしくは醜いから学校に来るなど書かれているのではないかと彼女は捉えてしまい見ることも無く手紙を捨てていた。

わざとじゃないため責めれないが…振られた男子達のことを思うと可哀想だなと同情してしまう。

「凜ちゃん大丈夫だよ！花咲なんて大半の人彼氏いないらしいから！」

「どうでもいい情報ありがとう」

「酷いよ！凜ちゃん私に冷たくない!?!」

「……………接し方がわからない」

「分からなくないよ！ねえ！楽しく話そうよー！ねえってばあー！」

「今思った、あなた私の苦手のタイプだわ」

「まああまりんちゃん、そう言いなさんなつてー」

「こ、こらー！外で揉まないでつてあれほど…!」

「ほら香澄も揉めば仲良くなるよ」

「本当！揉む揉む！」

「ぎゃあああああ！触るなああー!!!」

胸を揉みほぐされる凜をただ有咲と蘭、そしてひまりは黙って眺めておくだけなのであった。

「なんやかんやで待ってるとなんと滯奈登場、全員がいきなり現れたため驚く」

変装してたがモカ達変態幼馴染集団は瞬時に滯奈と判断した。幼い頃からの付き合いのためわかったのだろう。

「あれが神奈、先生？」

「そうそう、通称なーちゃん」

「未だにあの人が神奈って信じれない…」

「なんでそう思うの？なーちゃんの部屋見たじゃん！」

「いや神奈だよ!?!イラストレーター全員が憧れるあの神奈だよ!?!それが滯奈さんとか世界は一体どうなってるの…?」

「それな、あたしも最初は驚いたよ…滯奈さんが神奈と知った時は受け入れられなかったな…」

「だよねだよね！そうだよね！やっぱり滯奈さんは神奈じゃないよ、うん！」

「蘭がいつもと違う雰囲気なんだけど!？」

あの可愛い後輩系の声を出す蘭に対してひまりは驚愕する。恐らく初めて聞いたのだろう。いやーあれは驚くのも無理はない。

そんな話をしていたが燐子と滯奈様子を見てるとある時に急変する。何やら2人で話をしていたようだが…。

滯奈は立ち上がり燐子に頭を下げるとスタスタとその場を去って行く

「!」

去って行く寸前に蘭達がいることに気づいた滯奈は蘭達の方へ歩いてきた。

「みんな何してるの？」

「な、何って、何かなーひ、ひまりちゃん！」

「え!?!いやあつはは！なーちゃん奇遇…だよね蘭！」

「…お久しぶりです、ねえモカ」

「いやーなーちゃんとはよく電話するので久しぶりではないね〜」

『おい!』

各々適当に言い訳的なことを言うも最後のモカのせいで台無しだ。

「まあみんな久しぶりだねー特に蘭ちゃん、なんでうち来ないの？」

「なんでって…ふっ、あの有名イラストレーター神奈様の仕事の邪魔はできないですからね」

「蘭ちゃんもサークル入ってるんだ」

「まあ成り行きで」

「絵、描くのかな？」

「…どうでしょうね、うちには有咲と燐子さんがいるので」

「ふーん、おや？その2人は？」

凜と香澄に気づいた滯奈は首傾げた。2人は幼馴染ではないため誰かはわからないのだろう。

「…初めまして、朝日奈凜です」

「れーくんの彼女だよ」

「違います」

「違うのー？胸もでかいしレイの好みだと思っただけどなあ」

「……違います」

「それよりレイの言ってた朝日奈凜って君？」

「義妹、冬香役のオーデイション受けるんでしょ？期待してるから頑張ってるねー」

「……………頑張り、ます」

凜と燐子が別室でオーデイションのため練習していたそのオーデイションこそが神奈作の義妹アニメ化にあたり声を担当する声優を決めるオーデイションのことだ。

レイが凜に受けられないかと提案し、それを滯奈に話した。あっさり受けてもいいよ言うものだから受けることが決まったのだ。

ちなみにレイが凜とのテスト勝負に負けてこのことを提案したことは言うまでもない。

「それで君はどっか見たことあるんだよな……？」

「はい！戸山香澄です！何度か家にはお邪魔したことあります！」

「あー！君か！久しぶりじゃん！」

「久しぶりです、1年ぶりですね！」

「あつはは、ごめん、正直あんまり覚えてない」

「だって数回しか会ったことないですもんねー仕方がないですよ」

指で数える程度しか会ったことはない、当時の滯奈はまだ義妹を書いていかなかったが義妹シリーズを書く上での打ち合わせなどを行っていたため家をよく留守にしていた。

あまり滯奈がレイの相手をしなかったためレイが厨二病という闇堕ちをするきっかけになることは知りもしなかった…。

両親もいない、姉もいない…家で1人のレイが何をしても止める人などいかなかったため残念なやつになってしまったのだ。

「なーちゃん今日元気ないね、なにかあった感じー？」

「……………あーそれがさあ」

滯奈はここにいる全員にレイの姉が自分であることを燐子に伝えた話をした。

滯奈はここに居る全員が自分の存在を知っているとわかった上で話をしている。

幼馴染を除く凜と香澄、香澄は厳密に言えばレイの幼馴染だが滯奈の幼馴染ではない。

その凜と香澄も自分が神奈と知ってるなら手っ取り早い、簡潔に話を述べた。

「……何やってるんですか」

「だってだって！ありっちゃんがまさかあの写真見せてるとは思わなかったもん!？」

「えー！あの写真見せたんですか!？」

昔の最強キュートできやわわなあたしを見たいと言い出したから見せたんだよー!」

「どう話したらそーなるのか想像できないんですけど?」

「なんか見たいって言い出したんだよ、信じてよ！モカ之助とひーちゃんはわかってくれるよね!？」

『……………』

「何か言つてよ!」

まさか滯奈の自ら燐子に告白するとは……とここに居る全員が思っていた。

レイから黙つてて欲しいとは言われてたがまさか、まさかまさかの隠している正体の本人がとは…。

「りんこはどんな反応だったんですか…?」

「あたしから言えるようなことは何も…とりあえずあたしはこれからレイに怒られる。口も聞かなくなつて最終的にあたしは死ぬかもしれない」ガクブル

まるで凜のようなネガティブ発言だが滯奈の場合は違う。レイから見捨てられたら彼女は本当に生きて行けなくなつてしまう…。

冗談抜きで生きていけない、死んでしまうレベルだ。

「いい歳なんだから自立しなよなーちゃん」

「……とりあえずあたしは今からレイが帰ってくるまで玄関にて土下座で待機しとかないといけないからまたね」

「それと………みんな、ごめんね」

『ッ!』

「ばーいばーい!」

漣奈は別れの挨拶をすませると走りながら駐車場に向かっていく、彼女が先程言っていた通りなら家に着き次第玄関に正座してレイが帰宅するのを待つのだろう。

「雨降ってきたよ」

「……りこさん傘ささないね」

「私渡してくるよ」

「渡したら私達がいることがバレちゃうよ……?」

「でもでも風邪ひいちゃうよ!」

「れつくんのやつ何してるんだ……?」

レイが遅れることをモ力達は知らない。何故なら漣奈が伝えることを完全に忘れていたからだ。

花壇から燐子の様子を見続けるモ力達、凜が一番下になりみんなを支えていたが体力の限界が近づく。

それと同時にレイが1時間近く遅れての到着、その後は予想通りのレイと燐子の喧嘩が始まり、全員見届けることしか出来なかった……。

誰か動こうとはした、しかしこの人数だ、誰かが止めに入ってしまった。

その中でも誰かが言っていたが自分達が入ると事態が悪化してしまうと話していた。

凜の限界を超えた限界点に到達したため倒れる。その後は燐子が全員に気づき問いかける。

レイの姉が神奈だったことを知ってたかと……。

そんな中迷わず答える蘭、そして悩みながら答えた凜、彼女達のその行動が正しかったかどうかはわからない。

燐子の気持ちはわからなくもない。自分だけが仲間外れにされていたのなら人間誰もが傷つく、それも同じサークルの仲間達からだと言え……。

夏コミまであと1ヶ月しかないこの状況、果たしてレイ達は仲直り

して無事に同人誌を販売できるのか。

レイの今後の行動が鍵を握ることは：レイ本人が誰よりも理解していたのであった。

◆◆◆

帰り道、電車にも乗らずショッピングモールから歩いて帰っていた。

暗い夜道、特になにか起こることも無く俺はあっという間に自宅の最寄り駅に到着した。

なんでか知らないけどその駅の光がやたらと眩しげに見えたのは気の所為だろうか。

駅に着けば自宅まであっという間、ものの数分で到着する。

「……ただいま」

「おかえりなさい」

ははー、と言わんばかりの綺麗な土下座、これほど綺麗な土下座は初めて見たかもしれない。

「姉貴、何してんだよ」

「……ごめんなさい」

「……遅刻すること報告してないことぐらいで怒らねーよ」
「違う、りんりんちゃんにレイと姉弟だって話しちゃった」

「……………」

人が気を使ってあえて遅刻の報告について触れてやったのに自分から怒られるに来るとは……。

「怒ってないって、遅かれ早かれバレたことだよ」

「……へえ？いい、いいの？なんか理由があつて隠してたんじゃないの？」

「あつたよ、あつたけどさ……そのうち話さないといけなかったことじゃないか」

「お姉ちゃんのこと嫌いにならない？」

「……言つたら、俺か姉貴が家を出ていくまでは面倒見るって」

「そうだ、姉貴、体調崩したんだって？」

「ぎく！何故それを！まさか結弦君め！話やがったな!？」

「だらしない生活送ってるから風邪ひくんだよ、今からお粥作るから待ってろ」

「え？あ、はい」

「そうだ。そのうちバレていたことだ。誰かを責めるんじゃない、黙ってた自分自身を責めるんだ。」

黙ってた理由なんてわかってる。燐子さんの憧れの存在神奈、それが同じサークルに所属する俺の姉と知り会っても、それは燐子さんのためにならないと思っただ俺は黙り、隠していた。

でもそれだけじゃないんだと最近になって気づいた。俺はただ：されたくないだけだったんだ。

「はい、お粥です」

「わ、わーいありがとう」

「なんだよ、お粥嫌いなのか？」

「いや、大丈夫だよーレイのご飯は全部美味しいからね！」

「さいですか」

姉貴の分しか作ってなかったな：俺は適当に食パンでも焼いて食べるか、特に腹減ってるわけじゃないしな

食パンを取り出しオーブントースターに入れ、焼き上がるのを待つてる時姉貴の携帯が鳴り出した。

「はいはいはい、っと、もしもし神崎です」

「(姉貴が表示名乗るの珍しいな…)」

なんてことを俺の神聖な領域、神崎家のキッチンにてパンが焼けるのを突っ立って待ちながらそう思った。

「某日さん久しぶりーうん、レイ？いるけど：変わったって？」

俺に変われ？まずいぞ：何か怒られるようなことしたか？心当たりがあるなら今日定時終わり際にやってきた人に対して少し当たりが強かった感があるかもしれない…。

「はい」

携帯を受け取り恐る恐る耳にあてた。

「レイぐんぐんんん!!!」

「うわ！な、なんすか大声出して」

「ごめんよおー！僕は君に残業させる気なんて全くなかったんだあ！話を聞けば千紗が残業なしと話してたらしくてさああ!!」

「い、いやいいですって、あの状況帰れなかったのさ」

「ええい、私の携帯を返せ！」

「なっ!?それが先輩にする態度か！」

「あーすまんなレイ、私は今できの悪い先輩の相手をしないといけなくってだな…」

「は、はあ」

「なんだとおー!?と千紗さんの声の後ろ側からなんか聞こえてきたんですけど?本当この2人って仲悪いよな」

「そうそう、明日なんだがレイ、お前来てなくていいぞ」

「え?…あ、あはは、やっぱり態度悪かったんですかね?」

「何を言ってる、よくもまあ対応したものだ、逆に褒めてやりたい、頭を撫でてやりたい、そして結婚したい」

「結婚はしません」

毎度思うがその結婚欲は俺ではなく歳が近い男性の人に向けて欲しい。結弦さんとか結弦くんとか結弦とか

「それでだ、残業をさせてしまったため…そのなんだ、明日は休め」

「元々させる気はなかったんだ、でもさせてしまったのなら…もう、な?」

何となく言いたいことがわかった気がする。ようは約束を破って申し訳ないから、許してもらおう代わりに休んでくれってところだろ

「ならありがたく休ませてもらいます」

「うむ、若いのに働いてて偉いぞ、お前は将来いい夫になるぞ」

「な、なるほど?」

男が働くのは奥さんが認めても世界が認めてくれないだろ…男として生まれた以上命を削ってでも働いて家族を養わなければならぬんだぜ

「とにかく明日は休め!休まないで給料やらんからな!いいな!わかったか!」

「はい!」

こうして俺は急遽明日暇をいただくことになってしまった。

正直に言おう、予定なんて何も無い。暇な1日が増えただけ…

いやいや、俺に暇な時間なんてない！執筆しないと！

「どつたのレイ」

「なんか明日仕事休めだつてさ」

「ほえーいいねいいね、あんた配属先が千紗さんのところで本当よかつたねー」

「……氷川さんのところは？」

「……まあ気にすんなー！」

「気にするだろ!？」

なんだその言い方！気にしない方がおかしいわ!?

「とりあえず明日休みなら…りんりんちゃんに謝りに行けば…?とか、言ってみたり…」

「………まだ覚悟はない」

「ならしやーないか」

「そうだ！明日暇ならあたしがどつか連れていくよ！どこ行きたい！」

「行きたいところかー」

これといつて行ってみたい場所とかすぐ聞かれてもぱつと思いつかばない…。何か欲しいものならあつたような…?

「……あ、」

「どつた!」

「携帯ショップに行きたい」

「………はい?」

「携帯買いたい」

「……あーっ、なるほどね!」

俺は今日学んだ。携帯は現代では必需品だつてな…。

同じ失敗はもうしない、遅刻はしない、遅刻するとしても携帯を使って連絡すること、そして…誰かを仲間外れにしないこと…。

レイはそう決意して冷蔵庫を開けたら中に発泡スチロールが入つてて驚くのであつた。

初めての相手と言われたらなにを想像しますか？

次の日、携帯ショップに姉貴と向かった俺はついに数ヶ月ぶりに携帯を手にとることが出来た。

無くしたと店員さんに言うとな探すことができると言われたが…俺はあえて探さなくていいと答えた。

理由はアサシンが持っているかもしれないからだ。万が一持っていて家に置いてるのならアサシンの家もわかり正体もわかってしまう…。

そんなことで知りたくもないから俺は探さなくていいと、そしてデータも引き継がず全て最初から設定し直して欲しいと話を進めた。

結果電話番号、メールアドレス、は新しいものへと変わり真正銘全く新しい携帯を手に入れたのだ。

ちなみに機種は最新の iPhoneらしい、なんでももう旧作の在庫がないとのこと、俺的には安く済ませるよう1年前ぐらいの機種を選ぼうと思つてが使えるならいいか

それに金なら結構あるし

携帯を買い終え、俺は家に着くなり家全体の掃除を行う。こうじつとしてるのもあれだから少しは体を動かさないとな

「……つと、執筆しないと」

現状まだ燐子さんの仲は最悪状態だ、でも今から話そうにも家は知つてるけど行きにくいし

連絡先…もモ力達に聞けば知れるけどさ

少し時間が欲しい、まだ話せるような感じでもなさそうだし…つてそれは俺が逃げてるだけか

「レイ！レイはいるかあー！」

「ここにおります」

姉貴がいつも通りノックもせず部屋にやってきた。毎度思うが部屋に入る前にはノックして欲しい。

こちらら男子高校生だぞ、何かしてたらどうすんだよ!!

「……今日の夜、飯なに！」

「ご飯？あー…昨日お隣さんから鮭貰ったし？魚かな」

「えーお肉食べたいよー！」

「じゃあ鮭のステーキで」

「ステーキ!?やったー！」

聞くだけ聞いて姉貴は自分の部屋へと駆け込んだ、全く絵を描くことと執筆することと飯食うことしか考えてないのか？

いや、あとお酒飲むことか

「備え付けの野菜あったかな」

部屋から出て俺の領域、キッチンへと向かう。野菜室を見てみるとまあ野菜がない。玉ねぎ1玉とじゃがいもが残ってるぐらいだ。

これはまずい、神崎家の料理担当としての体が疼いてしまう。

「買い物に行かなくては！」

テーブルの椅子にかけているエコバッグを手に取り俺は家を出た。目指すは佐藤八百屋、新鮮な野菜を求めていざゆかん！

家のドアを思っきり開け姉貴がいるもんだから鍵を閉めずに出て行った。



いつもの道を歩いていると小さい子供達が遊んでいるのだろうか？何やら楽しげな声が聞こえてきた。

「お姉ちゃんこっちこっち！」

「そんなだと私達を捕まえないよ！」

「鬼さんこちらー手の鳴る方へ！」

「ちよつと、ま、待ちなさい…！」

「……………」

なんだろうか、見知った顔の人が子供達と遊んでいるんだが？

銀髪の髪に、金色の瞳、そんな人は俺の知り合いにはたった1人しかいない。

そう、湊友希那さんが何故か子供達と鬼ごっこをしていたようだ。

鬼ごっこというのは1人の少年が鬼さんこちら、なんてことを言っていたもんだからそう思ってるだけだ。

「なーっ」

「(あれはシロか?)」

少女がシロらしき猫を抱え込みながら鬼ごっこをしている。そのシロらしき猫は何故だろう、ちよっとだけ幸せそうな顔をしているように見えた。

女の子に抱えられて嬉しいんだろう。猫にもそんな感情があったのか

「はあ、はあ、はあ…あなた達、少し待ちなさい」

「えーお姉さんからやろうって言い出したじゃんか」

「い、言っていないわよ…勝負しましように言っただけだよ」

「だから鬼ごっこしてるんだよねー?」

「ねー!」

「ッ!」

友希那さんは急にお腹を抱え込みその場に膝をつく、ふっ!くつ!と痛がっている様子が伝わる…:ような気がする。

「まずいわ、これはかなりまずいわ、血を吐いてしまうかもしれないわ」

「え!?!お姉さん大丈夫?救急車呼ぶよ!」

「大丈夫、近くに来てもらって背中を摩ってくれないかしら」

おいおい行くな少年、どう考えても罨だろそれ

が俺の心の声が届くわけはなく少年達は友希那さんに近づくと

「お姉さんさんだいじょ」「はい、タッチ」…:え?」

友希那さんはなんの躊躇もなく近づいてきた少年の肩に手を置きタッチと言っていた。

うわあ汚ねえーあの高校三年生なんだぜ?

「これで鬼ごっこは私の勝ち、大人しくシロを返しなさい!」

「残念ー!俺バリア張ってるから効かないもん!」

「…:なによバリアあって、そんなものこの世にはないわよ」

「あるよーバリア張ってたら一回タッチされても無効なんだよ?」

「鬼ごっこするには必須のスキルだな!」

「くっ!せこいわよあなた達!」

あんたが言うかあんたが、あの人子供相手に何ムキになってるんだ

か…。

「ふっ、それなら私もひとつのスキルを習得してるの」

「えー？なーに？」

「それはねルールブレイカーよ、あなた達のバリアは私の前で無意味なのよ」

『そ、そんなあ』

少年達は膝をつき悔しげに地面を叩く、何やら純粹故に信じ込んでいるようだ。

「くそう！大人気ないぞ！」

「違いわ、これが大人の対応よ、あまり舐めないことね」

本当に大人気ない、何を思ってここまで彼女は本気で鬼ごっこに勝とうとしてるんだ？

もういい、これ以上大人と言い張る人が子供をいじるのは見てられん

「何やってるんですか友希那さん」

「……痛い」

友希那さんに軽く挨拶かわりのチョップをお見舞いしてやった。うん、想像通りの反応だ。

「聞いてレイ、この子達がシロを連れ去ったのよ」

「あ、シロなのね」

やはりシロだったか、てかあんな変な鳴き方する猫なんてそうそういないもんか

「違うよ！俺達はこのネコを飼うって決めたんだ！」

「飼うですって？あなた達子供がシロの面倒を見れるとでも？私は父から面倒みれないと言われてるのよ？」

「私が無理ならあなた達にとは到底不可能なことね」

「そんなことないよ！私達にはお姉ちゃんもいるもん！」

「人だよりじゃない」

やめてあげてえー！それ以上子供達をいじめないでえー！

あとあなた親から猫の面倒みれないだろなんて言われてるんだね、ちよつと可愛いかよ

「シロにもシロの居場所があるんだ、返してやってくれないか？」

「お兄さんお姉さんの彼氏さんー？」

「ううん、彼氏じゃないよー」

最近の子供って貞操観念が薄れてるーって聞くけど男女いるだけで恋仲と思うのはどうかと思うぞ

「当たり前じゃない」

ほら見ろ、友希那さんちよっとお怒りだぞ

「それ以上の関係よ」

「友希那さん!？」

まさかの回答、それはそれでちよっと嬉しいけど困りもするんですけど!?まさかアサシンだったりして…?

「私にとって類友は恋人以上家族以下よ」

「類友強?!」

恋人以上ってすごすぎんか、家族以下は当たり前だけどさ

「とにかく、返してやってくれ、君達も両親の許可なく猫なんて飼えないだろ?な?」

「子供にお願いごととして恥ずかしくないのかよ!」

「うぐーな、なんてことを言い上がる…!」

「言い過ぎだよ純君、沙南ちゃんも勝手に恋人なの?なんて聞かれたら迷惑だよ?」

「ごめんなさーい」

なんだこのガキ、できるぞ?

「ツ!?!」

いや、待てなんだこいつ…!

「(オツドアイ…!)」

だよな?左右瞳の色が違う、何食わぬ顔で普通に俺達の前に姿を出している…。

となれば重症の厨二病?いやいや見たところまだ小学生だろ?にしては早い、か?

それとも本当に生まれつき左右瞳の色が違って…?

「あ、こらーみんなそこで何してるの!」

「げっ！姉ちゃん！」

「こーら！もう逃がさないよ！今日は家で宿題するって約束で遊ぶ許可出したんだよ？」

「さ、散歩してただけだもん！」

「散歩に3時間もかかりません！」

『……………』

少年に気を引かれているとどこからか沙綾さんがやってきた。姉ちゃん、ということはこの子達は沙綾さんの弟達か…

「ねえねえお姉ちゃん！この猫飼っていい？」

「うちは飲食店だからペットは飼えないよー」

「絶対お店の方には行かせないからさー！ねえいいでしょー！」

「ダメったらダメ、例えお姉ちゃんが許してもその次にはお母さん、そして最後お父さんに許しを貰わないといけないんだよ？」

「だったら初めからお父さんに聞けばいいんだね！」

「そうゆうことじゃないんだけどなあ…」

困ったなーと言ってるかのように目を閉じながら苦笑いをする。

ぶっちゃん可愛いな、沙綾さん

「！友希那さん！…と、ああ、君か」

「ッ!？」

友希那さん、までは普段と変わらない声音で呼ぶも、俺に対しては君、なんてまるで他人かのような故障で呼んでいた。

しかもその声はまるで嫌いな相手に対して向けるような声、と言えば伝わるだろうか？

これはかなり嫌われているようだな…。

「山吹さん、その猫は野良猫なの、家族もいるの、返してあげて欲しいわ」

「そのつもりですよ、うちは飼えませんので」

「なー」

「あっー」

シロは沙南ちゃんから離れ友希那さんの元へ走っていく、ちらりと横目で友希那さんを見てみると手にはマタタビりのキャットフー

ドを手に持ちシロに見せつけていた。

食い物に釣られるとは…野良猫というのは生きるのに必死なんだな

「ふふ、よしよしいい子ねシロ」

「……さて！じゃあみんな戻って宿題しようね」

「ちえー」

「逃げ出した僕達が悪いし真面目にやろうよ」

「……そう言うならやらないとね！」

子供達は1人を除き渋々と家に帰るよう歩き出した。

「さ、沙綾さん！待ってくれ！」

「……………なに？」

「……いや、えっと、その……」

呼び止めたものなんて声をかければいいんだ？

俺のこと嫌ってないって？いやいや、直球すぎるか…俺のこと避けてない？もだな

となれば？

「俺沙綾さんに何かしたかな？」

「……………何か？」

「ああ、例えば…怒らせるようなこと、とか？」

「……………そうだね、君は私から奪った」

「ん？」

「それじゃ」

「……………」

奪った？俺が、君から何を奪ったって言うんだ…？

悪いけど最初に話した以降君とは何か話した覚えはないし…君の奪った？というのとは大切な物を奪ったことか？

それとも別の何か…物ではない何かを奪ったというのか？

「レイ」

「ツ！あ、あはは！なんか俺沙綾さんに嫌われてるみたいですね」

「……………そうみたいね」

友希那さんがいることを完全に忘れていた、危ない危ない、悲しむ

ところだった。

「嫌われてもいいじゃない」

「え？」

「人間誰かに嫌われる生き物よ」

「……でもどこかで誰かが自分を嫌ってる、なんてこと知ったらしたら悲しくならないですか？」

「なんで？」

「な、なんで？」

「だって他人なんでしょ？」

「……まあ他人ですね」

少なくとも友達ではないだろう、なんせ嫌われてるようだしな

「そんな他人のことを気にしてたらこの先生きていけないわよ」

「ッ！」

「いいレイ、完璧な人間なんていないの、いたとしても完璧過ぎたら嫌われてしまうわ」

「………そんなの可哀想ですよ」

「仕方がないじゃない、人は自分より幸せな人がいたら嫉妬するものよ」

嫉妬、嫉妬か……なるほど、確かに人ってのは誰のことを羨ましく
と思ったり、そう思ったら嫉妬したり、毛嫌いしたり……

人ってのは本当複雑なん思考を持ち合わせた生物なんだなと知ら
されてしまうよ

「じゃあ友希那さんも誰かを羨ましいと思ったりしたこと……あるん
ですか？」

「ええ、あるわよ」

「へえーちなみに聞いたりしてもいいんですかね？」

「ふふ、言うわけないじゃない」

「この流れは言うやつじゃないですかねー」

でも友希那さんも誰かに嫉妬したりするのか……なんか意外か、って
自分で人のこと散々語ってたか

「それよりレイ、行くわよ」

「行くってどこに?」

「?決まってるじゃない、シロの住処かよ」

「あ、はい」

シロを抱えた友希那さんはスタスタとまるで俺に着いてこいでも言うかのように先導しながらシロの住処へと向かった…。

◆ ◆ ◆

シロの住処につき、シロを巣の近くまで連れて行く

見てみると野良猫が何匹か集まっていた。どうやらシロの帰りを待っていたようだ。

あの子供達まさかこの住処からシロを連れ出したわけじゃないよな?もしそうだったら結構酷いことしてんな

「ほらあなたの家よ、帰りなさい」

「なー」

走って野良猫の元へ行くシロ、でもなんだろうか、野良猫達の様子が少しおかしいぞ?

「にゃー」

「……なー」

「にゃー!」

「!なー」

シロはてくてくと歩きながら何故かこちらへ戻って来た。

見たところ何か言い合いしてたのか?いや俺猫の言葉とか知らねーから本当にそうかわかんねーけどさ

「これはまずいわ」

「なーにが」

「いい、あそこにいる三毛猫はこの付近の野良猫界隈のボス、ミケよ」

「ほ、ボス?」

おいおい、野良猫界隈はヤクザ映画的な世界観なのか?猫の世界つてこえー

「ミケに嫌われたらおしまいよ、シロはもうこの付近で生きていけない」

「いや、いやいやいや!なんで?なんでシロは嫌われたんですか!」

「……恐らく自分から人に飼われる道を選んだと勘違いされてるのよ」

「だったら訂正しないと!」

「!驚いた、あなた猫語が話せるの?」

「なんでそうなる!?!」

訂正しないとは言ったけど猫語は話せんわ!でも確かに勘違いされてもおかしくないかも?・

それどころかシロの住処が……これは行くしかねえ!

「なあミケ!シロは連れ去られただけなんだ!勘違いなんだよ!」

「にやあああああー!」

「ダメでした」

「なんて言ってたの?」

「だから知りませんって!?!でもなんか無理そうでした」

あんなくそ長いにやあーなんて初めて聞いたわ、あれはなんだ?威嚇してたのか?威嚇だつとしても可愛いだろボス猫ミケ

「こうなったら仕方がないわ、私の家に連れていきましよう」

「でも友希那さん父親から飼えないだろって……」

「事情を説明すれば大丈夫よ」

「なーご」

「ふふ、大丈夫よ、あなたはこれから私と暮らすの、毎日一緒に寝ましようね」

「なーご」

相変わらず変な鳴き声だがこれは喜んでるんだろうか?

友希那さんが手に餌を持つてるからどうか判断できかねるわ

そうと決まれば話は早かった。早急に友希那さんの家に向かい今からシロを飼うための準備を

「返してきなさい」

「で、でもシロはボス猫に嫌われてしまつて……」

「前も同じようなことを聞いたんだけど?」

「……ちゃんと面倒見るわ」

「いいから返してきなさい」

「……ダメだったわ」

「まあそうですね」

何となく予想出来てたよ、一度飼えないでしょなんて言われたらそう簡単に許してくれるわけないもんな

「さーてと、どうしますかね」

「どうするも何ももうレイが飼うしか道は残されてないわ」

「なんですか、保健所とかに頼めば何とかなるかもしれないですよ」

「保健所ね、あなたこんなに可愛いシロが保健所で酷い目にあってもいいと言ってるの？」

「……………」

「……飼いなさい」

「はひい」

脅され俺は半強制的にシロを飼うことになってしまった。が、ここで1つ大きな問題点がある。

何を隠そう私神崎レイは猫アレルギー持ちなのだ。

というのは遡ること数ヶ月前、あの日、友希那さんが俺の事を大の猫好きと勘違いして類友になったその日のことだ。

シロとじゃれあったあと俺はくしゃみやみが止まらなくなり、何とかして友希那さんにバレないようにうんこを済ませていた。

家に着くもくしゃみやみは止まらず姉貴にうるさいと指摘された俺は無駄だとわかっていながら姉貴にくしゃみやみが止まらないと相談をした。

ネコと遊んだと伝えたところ

「え、あんた猫アレルギー持ちだよ？自分の体のことくらい自分で知っときなよ」

そう、俺はその日生まれて初めて自分が猫アレルギー持ちだと気づいた記念すべき日になったのだ。

ちなみに姉貴が知ってる理由は知らない。

つまりだ、俺がシロを持ち帰り家で飼うとなれば俺は本当にあの家で居場所がなくなってしまうのだ。

皆さんご存知の通り俺の部屋にはつぐみという変な性癖を持った

幼馴染が部屋に盗聴器を仕掛けてるんだ。

部屋から逃げるようにリビングで生活するとなれば猫がいてアレルギー反応が出てくしゃみが出まらさず死んでしまう。

猫をリビング以外の部屋で飼って？あほ、もう我が家に自由に使える部屋なんてないわ

結論飼えない、飼ったら俺が死ぬってことだ。

「レイの家まで連れてって？」

「いいですよ、とりあえず先頭歩いてください、後ろから道案内するの
で」

「……そんなに離れなくてもいいじゃない」

「さっきまでと変わらない距離ですよ」

近くにいたらくしゃみやみが出るから困るんだよ、てか何が一番困るって友希那さんに猫アレルギー知られたら猫好きじゃないことがバレてしまうかもしれないだろ

「あ、そこを右です」

「わかったわ、右ね」

これはまずい、何とか理由をつけて俺の家では飼えないようにしないと……！

「あ！実は俺の家ペット禁止だったんだっただけ忘れてたよー」

「レイは一軒家に住んでるから問題ないわ」

「……な、なんで知ってるんですか？」

「こないだ散歩してる時に神崎って表札を見たわ」

「いや神崎とかこの世に腐るほどいる苗字なので!？」

「そうなの？」

そうだわ！神崎が俺一人だけだと思ふなよ!?湊だつて探せばこの世にいくらでもいるんだからな!？」

てかなんで知ってるんですかなんて反応すんだよ俺は…一軒家に住んでるのバレたじゃねーか！

「それに今は両親家にいないんでしょ？」

「おかしい！さすがにそれは知ってるはずがない！」

「だつてリサに聞いたもの」

「なんで人の家庭の事情話すかなあの人!？」

私がやりましたーと言わんばかりの顔を思い浮かべてしまう。ちなみにリサさんがピースをしているところを想像してしまった。

そもそもどういふ会話をしとけば俺の話になるんだよ

「あ、次左です」

「左ね」

まずいもう道沿いにそうだけで俺に家に着いてしまうぞ……え、本当にシロ飼うの？まあ嫌いではないけどさあ俺の命が……!

猫アレルギーで死ぬなんてことはないかもだけどくしゃみやみが止まらないとなるの結構きついからな

「……………」

「ここなの？前見た家とは違うわね」

「それは多分別の神崎さんですね」

「レイの親戚?」

「あのね、神崎なんて苗字は別に珍しくないの、あと親戚はこの付近に住んでませんので!」

「……危なかったわ、何も言わなかったら今度遊びに行くところだったわ」

「遊びに来るところだったのかよ!？」

え、なになに、一体何が目的で俺の家に!?遊ぶってなに!大人の遊びとかですか!?!ぐへへ

ってアホか俺は

「さあ早く入りましょう、必要なものは一度シロを中に入れてから買っていくきましょう」

「あ、はい」

ぎゃー!終わりだ!俺の家に猫があー!!

「なにになーに、外から声がするんだけどー」

「姉貴!」

なんと姉貴がここで登場!でもあんたが出てきてもややこしくなる気しかしない!

「……………」

「……………」

『……誰?』

「同時に聞くなよ!？」

俺は懇切丁寧に一人一人説明をした。姉貴が姉貴であることを、友希那さんが友希那さんであると、こんな丁寧に丁寧な紹介はないと思います。はい

「レイのお姉さんだったのね、てつきりお兄さんかと思ったわ」

「へ、へえー言うね、ちなみになんで男だと思ったのかなあ？」

「胸がないもの」

「ちよーゆ、友希那さんそれは禁句で……!」

なんてことを言いやがるこの女!それを姉貴の目の前で言ったらどうなることか!

「てつきり女装趣味のある人かと思ったわ」

「ふ、ふーん、友希那ちゃんも言うほど胸ないと思うけど?」

「ええ、私着痩せするタイプなのよ、こう見えてもCカップはあるわ」

「し、Cカップだって……!」

「……………え、なにこれ」

姉貴はカップ数を聞いた瞬間崩れるように玄関でへなーと地面に座り込んでしまう。

ちなみに姉貴のバストは—Aらしい(巴が言ってた)てかそれってえぐれてんじゃん

「どうやら私の勝ちのようね」

「……………なんなのよこの子、レイの彼女?じゃないとしてもあんた女友達多くない?ヤリチンなの?ねえ、どうなの?」

「レイ、ヤリチンってなに?」

「ほらー友希那さん世間知らずなんだからそーゆうこと言うなよ、興味持っちゃったじゃねーか」

なんて説明すればいいんだよ……

「ヤリチンとはですね、レンチンをやりすぎるくせがある人のことを言うんですよ」

「……………なるほど、レイはレンチンをやりすぎるくせがあるのね、今度か

「らヤリチンと呼ぶわ」

「い、いやさすがにそれはやばいのでやめてください、本当にやめてくださいいね……!」

「?ええ、わかったわ」

友希那さんからヤリチンと呼ばれてみる、もう学生生活おくれなくて、てか友希那さんの口からその単語が出る時点でもう、な?やばい
だろ

「あつはは!ひひ!ふふ!へへ!ほほ!何この子!面白いんですけどー!」

「……………だろ?」

「変な笑い方ね」

変な笑い方には同意見だ、この人こう見えてもラノベ界隈では有名な神イラストレーター、神奈さんなんだぜ?

「あれ、その猫どうしたの?」

「ええ、実はかくかくしかじかで猫をレイの家で飼ってほしいの」

「ふむ、かくかくしかじかねー」

「でもごめんねーあたし猫アレルギー持ちなんだあー」

「え!?!」

「なんでレイが驚くのよ」

「い、嫌だつて!知らなかったから!」

俺が猫アレルギー持ちなのは知ってるけど姉貴もだったのか!姉弟揃って猫アレルギー持ちとか猫から嫌われすぎだろ!

「……………そう、なら仕方がないわね」

「なんかすみません」

「仕方がないわよ……シロを保健所に連れていくわ」

見るからに悲しそうな表情をしないでくれよ……俺達が悪いけど俺達が悪者に見えてしまうじゃないか?

そもそも全てはボス猫ミケのせいだ、何してくれてんだよあの三毛猫

友希那さん一人で行くのもあれだから俺もついて行く、シロの最後を見届けたいってのもあるしな

正確には最後つてわけじゃない。シロを飼いたいという人が決まれば引き取ってくれるが…見つからなかった場合は

想像するだけで怖いわ

「はあ、どうして世界は猫に厳しいのかしらね」

「猫というか生き物全てに厳しい世界ですよ」

「だって、シロは何も悪いことはしてないのに…!」

「友希那さん」

なんだこれ、さつきまで雰囲気はどこに行った？

え、どんなタイピングで切ない話に切り替わったんですかねこれ

「シロ！シロオ、どうしてよ、なんでシロオがこんな目に」

「……………」

近くに行つてやりたいがあいにく俺は猫アレルギー持ちだ、シロに近寄つてしまうとアレルギー反応が出てしまう。

そんな友希那さんが絶望にしたつている時、見たこともない黒塗りの高級車が俺達の近くに止まり、そこから一人の少年が現れた。

「さつきのお兄さんとお姉さん！こんにちは!」

「……ああ、こんにちは」

先程のオッドアイの少年か

いいねーその目、俺も昔カラコンとかつけてオッドアイにしてたなあ、この子もそんな感じの痛い子なのかな？

何それ仲間じゃん、仲良くなれそう。

「何してるの?」

「実はシロがかくかくしかじかだな」

俺は1からシロの現状に至るまでの経緯を話した。子供相手にもわかりやくすするためボス猫の話はあえて伏せたけどな

「それは可哀想だね…よかつたら僕が引き取つてもいいかな?」

「……いいけど勝手に決めていいのか?」

「多分大丈夫、お父様は許してくれると思うしーそれに庭広いし」

「?お父様?」

「世間ではお父様なんて呼ばないんだっけ?こころ姉が言つてたかも、いや…兄だったけ?」

よくわからないけど引き取ってくれるならありがたい、シロも保健所に連れていかれるよりこの少年に飼われた方がいいだろう

「でも飼えるのか？俺が言うのもあれだけど難しいんじゃない？？」

「うち犬飼ってるから大丈夫だよ！お昼もメイドさん達に餌あげお願いすればいいし」

「め、メイド？」

「僕屋敷に住んでるんだよ」

「……へえ？」

屋敷？……こら辺で屋敷と言えば……！

「つ、弦巻家の人か!？」

「うん、弦巻家次男だよ！」

つ、弦巻ってあれだよな？弦巻文庫の大元の財閥って聞いたことがあるような？てかさうだよな、弦巻ってついてるもん！

「え、いや、あはは……お願いします。殺さないでください」

「そんなことしないよ！みんな怖がりすぎだつて！」

「そうよ、弦巻さんの弟さんなら話が早いわ、お願いできるかしら？」
「誰かと知り合いなんすか!？」

友希那さんって一体何者!?なんで弦巻家のこの少年の姉？それとも兄？と知り合いなんだ!?

「弦巻こころさん、同じガールズバンドに所属しているわ」

「……そういえばいたな」

忘れてた、確かハロハピ？のプリンセス？だったけか、松原さんを弦巻邸まで道案内しようとしてたな

「ごめんなさいね、さつき会った時あなたが弦巻さんの弟なんて気づけなかったわ」

「ううん仕方がないよ、初めて会ったもんね」

「とりあえずシロをお願い」

「うん、任せて」

「週一で会いに行くわ、屋敷には行ってもいいのかしら？」

「いつでもいいよ！この子もお姉さんに会えたら嬉しいと思うし！あとお兄さんも！」

「お、おう、気が向いたらな」

まあどうせ友希那さんから誘われると思うけどな、てか土日はバイトで行けねーし？行く機会がないっての

平日は平日で何かと忙しいしな

「あ、お兄さん！」

「？なんだ」

「うちに来る時は気をつけてね」

「はあ」

覇気のない返事をしたあと少年はシロを抱えたまま黒塗りの車に乗りどこかへと行ってしまった。

運転席に座ってる人をちらりと見てみたがなんか黒い服着ててサイングラスかけてた。なんだあのハンターみたいな人は

「とりあえずシロの飼い主が決まってよかったですね」

「ええ、あそこなら一般家庭よりも安全に生活できるわ、なんせ屋敷で暮らすのだから」

「まさか野良から金持ちの猫になるとは…」

なかなかいないだろ、てか金持ちは好き好んで野良猫拾わないだろうし…。

なんか金持ちって性格ひねくれてるもんだと思ってたけど違ったみたいだな、勝手に偏見を持つのは良くない、今度会う時は兄さんとして接してあげよう。

「さてと、俺今から買い物行きますけど友希那さんは帰ります…よね？送ります」

「ちなみにだけどその買い物について行くと何か買ってくれるのかしら？」

「……お菓子は300円までっすよ」

「小学校の遠足みたいわね」

あるある、小学校の時はよく上限超えてまでお菓子持ってたな…特にモカとかもう明らかに量がやばかった。

本人曰くお昼ご飯とか言ってたんだっけ？忘れた、今度確認しよう。

「そういえばレイ、あなた携帯なくしたと言ってなかったかしら？」
「ん、これですか？今日買い直したんですよ」

結構周りみてんだな、時間を確かめた時に瞬時に反応するその速度、のほほんとしてしてるわけではないんだな

「……………」

「ゆ、友希那さん？」

友希那さんは携帯を取りだし誰かに電話をかけ始めた。このタイミングで一体誰にかけるって言うんだ？

「…………レイの携帯にかけてるけどならないわ」

「いや前の携帯の番号は前のやつですから！」

「では今の携帯の連絡先を教えてちょうだい」

「はいいいっすよー」

俺はメッセージアプリのQRコードを見せ友希那さんはそれを読み取る。つい数時間前に登録したばかりのそのメッセージアプリには友達なんて一人も登録されてなかった。

「友希那さんがこの携帯で初めて登録した人ですよ」

「そうなの？私はレイの初めての相手ね」

「色々誤解を生むからその言い方やめてください！」

人から聞かれたならなんと思われることか…友希那さんはそういう知識に関しては全く知らないからな

「はあ…じゃあ商店街に行きますかー」

「え？夜ご飯もご馳走してくれるの？」

「誰がいつご馳走するって言いましたか？まあ別にいいですけど…」

「遠慮しとくわ」

「いや聞いてて断るんかい!？」

何この人…え、俺のご飯そんなに食べたくないの？昔弁当のおかず分けたよね?!美味しいって言ってくれたよね!?

「は、はあ、もう行きましょう」

この人の相手をするのは疲れる。今日だけで何度突っ込んだことか

このままもう何も突っ込まずに楽に一日を終えたいんだが…。

「れ、レイ?とゆ、友希那…?」

「……………」

「ちよつとちよつと!黙らないでよ!?!何か反応してよ!」

「リサさん…」

リサさん(私服)が後ろから声をかけてきた。その声はなんだか震えているような声で、振り向くと指を震えさせながら俺達2人を指していた。

「何してるの…?」

「リサ、奇遇ね」

「今から商店街へ買い物行くんですよ」

「買い物?」

んー買い物は買い物なんだけどな、なんて説明すれば納得してくれるんだ?

「今日はレイの家で夜ご飯をいただくの」

「あ、食べるんですね」

さつき食べないって言ったのはなんなんだよ!?

「え!レイの家でご飯食べるの!?!な、なんでなの!」

「いや俺に聞かれても…」

俺は食べます?なんて聞いてないし?言い方が悪いけど友希那さんが勝手に食べるって言うてるんだけど…この場合は

「よ、よかったらリサさんも食べていきます?」

「……………べる」

「え?」

「食べる!アタシも買い物に行く!」

「……………あ、はい」

なんだ?頬をぷくーと膨らませて若干不機嫌な様子で夜ご飯を食べると言い出したんですけど!?

「無理して食べなくてもいいんですよ?」

「食べるの!2人だけで食べるなんてずるいから!」

「??」

「リサ、おやつは300円までよ」

「んなこと言わなくていいんですよ!」

こうして何故か俺は友希那さんとリサさんに夜ご飯をご馳走することになってしまった。

こないだありりに夜ご飯作ったばかりなのにもう数日後には別の女の子にご馳走するとか…もしかして俺モテ期来た?

「(調子に乗るなってな)」

俺は八百屋にて野菜を買い2人を連れて家に帰る。帰ったあとの姉貴の反応は…。

「あんたまじで女友達多くない?いつか刺されるよ?」

「やめてくれええええ!!」

キャベツを切りながらキッチンで叫ぶレイ、そんなことを気にもせず友希那とリサはリビングのソファに座り仲良くテレビを見ているのであった。

その日の夜

少女は自分の部屋で絵を描いていた。

その絵はレイと少女がみだらな行為を行っている絵だった。自分の自慰行為の際に撮影した自分の顔を見ながら、自分がレイとそのような行為を行った時、自分はこのような表情をするんだなあと思いながら描いていた…。

「はあ…こんな時になにしてるんだろう」

髪をわさわさとかきむしり描いてたイラストを削除した少女は、いつも描いてる絵を描くのであった。

女子から避けられたことありますか？

夜、友希那さんとリサさんに晩ご飯をご馳走した後2人は特に泊まるなんてことは言わず20時頃には帰ると言い出し家を出て行った。

姉貴が珍しく送っていくよ、なんていい連れ出したものの帰ってきた時にストレイを箱ごとリビングに運んできたのは正直驚いた。

本人曰く道端でファンに会い貰ったとのこと、絶対嘘だろ

まあそのうち捨てるとして今日は休もう。

風呂に入って歯を磨いて部屋に戻る。

「……充電器つと」

新しく買った携帯の箱からいつでも充電できるよう充電器を取り出す。セッテングが完了したあとはいつも通り執筆活動へと取り掛かる。

秋音の話は蘭、ありり2人とも何とか書き上げることが出来た。あとは冬香なんだが…正直この子は書くのが難しい。

前に話したがこの子は四女であり、1番最後にこの篠ノ乃家に養子として迎え入れた子にあたる。

彼女は少し他の姉妹とは違い結構きつい過去を持っていて…兄である晴太が…

「そういえば燐子さんと義妹の話した時もこの話してたなあ」

思い出してみろ、俺と燐子さんを結ばせてくれたのはこの義妹があつたからだ。

姉貴が義妹シリーズを作ってなかったら俺は未来永劫燐子さんと絡む機会はなかっただろう。

その点はやはり姉貴に感謝するべきだ、たとえ姉貴が今回の事件の発端として自分を責めていたとしても、俺の今の考えは絶対否定しない。

「ツ〜」

考えると思う。早く仲直りしたい、と

でも話しかける勇気がない…蘭がよく言うが俺は本当にヘナチヨコ腰抜けチキン野郎なんだろうか、あと一歩が踏み出せる気がしない

んだ。

誰かに相談する…？いや、連絡先は知らない、モ力の家の電話番号は知ってるけど…あいつには悪いが相談する気が起きない。

日頃の行いってやつだ、そう思われたいなら清楚感のある人柄になつてください。なおひまりも含む

「……………いや待てよ」

1人いるじゃんか、連絡先を知らなくても向こうから俺の新しい携帯に電話をすれば話すことができる！相談することもできる…！

しかしいいのか？あいつに相談するのは色々…ま、まあ変態幼馴染集団の中では一番マシなやつだろう。

俺はふうと一息付き、声を発した。

「つぐみ、聞いているか？」

「返事してるかどうかなんてわからないからとりあえず今から電話番号を伝える…、まあ騙されたと思ってかけてくれ」

そう、俺の変態幼馴染こと、盗聴癖をもつ羽沢つぐみなら連絡先を知らなくても今のようになら俺の電話番号を伝えれば電話がかかってくる…はず！

「〜♪」

数秒後すぐに俺の携帯から着メロが流れ出し俺は番号を確認せず電話をとった。

「もしもし、つぐみか？」

「う、うん！」

「……………まさかだけどお前ずっと聞いてたの？」

「え？暇な時とか、勉強する時とかはレイ君の生活音をBGMにしてるけど？」

「……………」

相変わらず変なやつだな、見た目は可愛いのに中身がやばいとはこのことだよ、つぐみと付き合う将来の彼氏さんが心配になってきたよ

「それよりレイ君携帯買ったんだね！」

「……………おう、まあなんだ同じ失敗は繰り返さないためにな」

「へ、へえーそうだね、うん！」

「??」

なんだこのつぐみの反応は…? まあいい、とりあえず相談してみるか…。

「実はつぐみに相談があつてだな」

俺はつぐみに全てを話した。俺が燐子さんと同じサークルに所属していること、あと燐子さんが神奈の熱狂的なファンであること。

そして…俺が神奈の弟であることを燐子さんに黙っていたこと、全てを話した。

それとサークル活動についてだが夜部屋でパソコンいじって何してるの? って聞かれたから俺は渋々サークル活動を行っていることを話したんだ。

「それよりレイ君こないだ有咲ちゃんとお泊まり会してたよね?」

「え、え?」

お泊まり会、と言えはいいのか? とりあえずありりは俺の家に泊まってたけど…なんでつぐみが知ってるんだ?

「まあ泊まってたけど」

「そうなんだ! あとあと、今日も友希那さんとリサさんが夜ご飯食べに来てたよね?」

「……なんで知ってるの?」

「えへ、なんでだと思おう?」

全身から鳥肌が立ちました。しまいには鳥になりそうな勢いでだ。

まさか、なわけないよな?」

「俺の部屋以外に盗聴器仕掛けてるとか…?」

「そんなことないよ! レイ君の部屋に着けてて楽しそうな笑い声とか聞こえたから聞いてみただけだよ!」

なんて普段のつぐみと変わらず明るい様子で答えているも、俺にとつてその声はなんでか知らないがとても恐怖を感じた。

「……本当のことを言ったら今日の夜、俺はこの部屋でオナ」

「つけてます。つけてるから早くレイ君の自慰行為の音を聞かせてください!」

「やっぱりかこいつ!」

「あと！イク寸前には私の名前を呼んで合図してね！」

「絶っつ対しねーよ！」

「やっぱり仕掛けてたのか!?あとなんかつぐみがつぐみじゃないよ
うな様子なんですけど!？」

「つぐみ、そういうのは好きな人によってやれ、俺にはやるな」

「え?でも男の子ならイク寸前は誰かの名前を言うものなんだってお
母さんが……」

「ま、まあそうかもしれないけど男子全員がつてわけじゃないだぞ?」

「……………でもいいの!レイ君よろしくね!」

「よろしくねじゃない!てか俺の相談は!?真面目に語ったのにこの返
事なの!？」

真面目に相談したのにこれかよ!?なに、俺が語った話はどうでも良
かったんですか!?人の不幸とかなんとも思わない人ですか!はいそ
うですか!

「ああそれね、謝るしかないよ」

「いや謝るって、わかってるけどさ」

「だってレイ君が全部悪いんだよ?」

「ツ!」

「相談もないよ、レイ君が謝る、ただそれだけだよ」
……………

なんだろう。先程までのふざけた態度から一転して急に真面目に
なりやがった。

「しまいには俺が謝るしかないと一点張りだ。

「いやわかってる。俺が悪いのは他の誰でもない、自分が一番わかっ
てる。」

「……………でもどうやって謝ればいいのかわからないんだ」

「……………だったらそこから相談してよ!」

「そ、そうだったな!ごめん!」

よし、ここからは真面目に答えてくれそう……。

「なら家に盗聴器仕掛けてー弱み握ってー脅す形で仲直り!なんてど
うかな!？」

「もうそれ最悪、てか盗聴器仕掛けるとかつぐみみたいな変態行為しないから」

「酷い、私変態じゃなくて普通なのに……」

「普通じゃない、つぐみも異常者だ」

全世界の普通人に謝れ、つぐみのやってるのが普通ならば人類みんな毎日誰かに監視されることになるぞ

「私もって他に誰かいるみたいない方だね」

「……俺には姉貴がいるからな、あの人以上の異常者はつぐみだけだよ」

「むうーそこまで人生勝ち組じゃないよ」

「だな」

危ねえー！何とか乗り切った、姉貴が異常者で良かった。も、なんて言うんじゃなかった、最悪の場合モ力達含む幼馴染が変態であるとかミングアウトするところだったぞ

「ここからは真面目に話すけどさ、やっぱり確実に会える朝とかに会うとか？ほら、通学途中にばったり会うようにさー！」

「いや燐子さんの通学ルートなんて知らないよ」

「なら花咲の校門で待つとけがいいよ、そこなら絶対通るからね！」

「……なるほど！確かにそれはいいかもしれない！」

校門なら絶対通る！朝早くから突っ立って待ち伏せすれば必ず会える！はず！

「ありがとう、俺会う勇氣はないけど……あっちから来てくれる？つてなれば会えるかもしれない！」

「ならよかった！で、今日はやってくれるんだよね？」

「相談に乗ってくれたことには感謝してる、けどやるとは誰も言っていない、てか俺の部屋以外にも盗聴器を仕掛けていたことを説明して欲しい」

「……………」

「あれ？もしもーし、つぐみ？」

携帯の画面を見ると通話はどうやら切れていたようだ。つぐみのやつ途中で切りやがったな、てか逃げやがったな！

「まあいいか」

とりあえず俺の家ではもう安心して眠れるところが無くなってしまったようだ。

ぶつちやけリビングで寝るにも腰とか痛めてしまうから体に良くないとはわかってたし…

もう家全体に平和な所がないとなるなら腹を括って盗聴される覚悟を持って部屋で眠ろう…。

レイはその後明日早く起きるため、明日着るような制服をクロゼットから取り出し椅子にかけ、布団に入って10秒で深い眠りにつくのであった。



「よし」

俺は某作業猫のようなポーズを取りながらリビングの机の上に姉貴の朝食を準備したと確認して家を出て行った。

新しい朝、希望の朝、とラジオ体操の歌であるひとフレーズ、希望の朝ではないが新しい朝ではあるためそんなことを考えながら花咲の校門前で腕を組んで燐子さんが来るのを待っていた。

校門の前と言ってもみんなが想像するような真ん前でなく、壁に寄りかかり燐子さんを見逃さないよう一人一人生徒の顔をしっかりと確認しながら待機している。

「(完全にストーカーがやることなんだよなあ…)」

こんなことをしている自分がなんか嫌になってきた。早く燐子さん来てくれ…じゃないと俺変態不審者さんになってしまうよ

「ねえあそこにいる人誰？」

「さあー女子？それとも男子？」

「でも羽丘の男子生徒の制服着てるよね」

「男装趣味の女の子かもしれないね！」

『おはよう！』

「……………」

話を軽く聞いていたが彼女達は俺のことを女の子と誤ってららしい…。

「……………」

声を出したら男だとバレてしまうため俺は微笑み挨拶の返事をした。

今日だけは中性的な顔で良かったかもしれないと思う自分である。てか本当に女子と間違われるほど俺は女子みたいな顔してるのか…？

「……ねえ何してるんですか？」

「ほわー」

なんてことを考えていたら急に誰かに話しかけられ俺は変な声を出してしまった。

「お、奥沢さん…こないだぶり」

「そうですねーそれで何してるんですか？まさか本当にスト」

「待って待って、俺は決してそのような変態不審者さんではないぞ」

そう、俺は決して変態不審者さんではないのだ！

「次は誰に話しかけるんですかねー」

「今日は別件でここにいてー」

「へえー」

「あ、でも君が所属しているハロハピの金髪の子、には少し話したいことある…かな」

「あーなるほど、神崎さん私がミッシェルのバイトしてたからわかつたんですね」

「??？」

「？だから私がハロハピ、ハロー、ハッピーワールドのミッシェル役なんだったって」

「……そうだよ」

「何今の間」

ジト目で俺を見てくる奥沢さん、実はありりとかからある程度情報を聞いていたから知ってるだけなんですけどね

やばい、人のこと探るとかなかなかキモイことしてるな俺

「それでこころと話したいんですか？あれを相手にするのは大変ですよ」

「確か弦巻の人だったよな？でも弟とは俺顔見知りなんだ」

「……弟？」

「あー次男の方？」

「シンジ君ね、なんだ、てつきり長男の方かと思った」

シンジ君、というのはいないだの少年の名前だろうか？

「まあ私も長いことあの屋敷には出入りしてますけど1度も見たことないんですよー」

「えつと、長男さんのことかな？」

「そう、でもこころに長男はどこにいるの？なんて聞けないじゃないですか、何か特別な理由とかもあるかもですし……」

確かに他人の家族の事情なんて聞く勇氣俺にはないし、そもそも弦巻の長男がどこで何してようと俺達には関係のないことなんだ。

「いやいや、そもそも弦巻の人と関わろうとはしないからね」

「その弦巻家の長女に振り回される私は何者なんですかって聞きたいんですけどねー」

「そ、それは…ナイス」

俺はぐつと親指を立てた。苦し紛れのナイス、はナイスだろう。

「じゃあ私そろそろ行きます、また機会があれば……」

「ん？ああ、またなにか聞くかもしれない」

あ、そう言えば敬語じゃなくてタメ口でもいいぞって言うの忘れてた。話してる途中にふと思ったけど言えなかったな

「……おはよう」

「へ!?お、おはよう」

次は誰だ?と思いなながら声がした方を向くと…

「さ、沙綾さん……!」

「……………」

「いやー!今日は天気いいですね!」

「曇りだけどね」

「少し肌寒いね!」

「ジメジメしてて暑いんですけどね」

「清々しい朝だね!」

「そうだね、君と会わなければ」

「……………」

ダメだ、この人と話していると心が折れそうになる。なんだ、俺は一体彼女に何をしたと言うんだ。

「ゼロ君!」

「ツ!香澄!」

「くっ……!」

香澄が俺に気づいたのか走って近づいてくる。それと同時に沙綾さんは俺を鋭く睨みつけたあとすぐに校門を潜り玄関へと向かっていく

「今の沙綾だよな?2人で何話してたの?」

「……挨拶しただけだよ」

嫌われてるなんて余計なこと言うときさらに心配かけてしまうからな、今はまだ黙っておこう。

「まさか燐子さんを待ち伏せしてるのか?」

「まあそんなところだ、学校には来るだろ?」

「来ると思うけど……えへへ、私暇だから一緒に待つてあげる」

「香澄……ありがとう、正直今心が折れそうだったから助かる」

「へ!う、うん」

燐子さんとは別件だが沙綾さんとの件でな、ちよつと心が、保てそうになかった…。

これはこれで沙綾さんの件も解決させないといけないんだけど今は燐子さんが優先だ。

サークル優先に決まってるだろ……!

「ゼロ君朝ご飯食べてきた?」

「食べたに決まってるだろ」

「……燐子さんとは仲直りできそう?」

「どうだろう、話してみないとわからない」

「ねえ、どうして燐子さんに姉さんのこと黙ってたの?」

黙ってた理由、それは燐子さんが憧れている神奈に簡単に会わせないようにするため、少なくとも俺が弟だと話していれば簡単に会おう

と思えば会えてしまうだろう？

でも、俺には別の理由があった…自分でも驚くその理由

「……………お前だけには絶対言わない」

「えー！何それ！次は私を仲間外れにするの!？」

「しても悲しまないメンタルの持ち主だと俺は知ってるからな」

「…………ゼロ君私のこと知りすぎー少し怖いよ？」

「アホ言うな、俺の中学生生活はほぼお前としか絡んでないんだぞ？」

香澄はなんてったってクラスで浮いてた俺に毎日話しかけるほどのメンタルの持ち主だ。

確かに香澄本人も少し浮いてはいたが俺ほどではなかった。

それでも話しかけるってのはなかなかの精神力を持つてると思わないか？

「あれ香澄…とれつくん！」

「あ！有咲おはようー！」

「ありりおはよう、いい朝だな」

「いや空曇つてるだろ!?!でも…れつくんと朝から会えるのはう、嬉しいかも…」

「どうした？」

「なananなんでもない！てかなんでいるんだよ!?!」

「ああ、それはな…」

俺はありりに燐子さんを待ち伏せしてるんだと説明をした。

結構長いこと待ち伏せているけどなかなか姿を現さないな…まさ

か休み、とかはないよな？

「でも香澄と2人で待たなくてもいいだろ！」

「香澄と一緒に待ってってくれるって言ってくれたんだよ」

「そう、か…あたしも一緒に待ちたいけど朝から生徒会の仕事がない、今日は会議する予定だから燐子さんなら絶対来るはずだぞ」

「本当かありり！」

「ッ！」

あまりにも嬉しい情報であったため俺はありりの手を両手で掴み喜んでるぞと言わんばかりの仕草をした。

「ご、こんなみんなから見られるところで手を握るな！」

「あ、ご、ごめん！」

「もっと別のところで握れよ、馬鹿」

「お、おう、気おつけるよ？」

「はあ……じゃあな」

ありりは一息付きじゃあなと言うとそのまま振り返ることなく生徒玄関へと向かって行った。

「ゼロ君、有咲と手を握った感想はどうでしたか」

「ん？ああありりとは昔からよく遊んでたしな、別に手を握ったところ……」

「ふむふむなるほど、ゼロ君は有咲の幼馴染、ありりは有咲の渾名？」

「何言ってるんだよ、ありりはありり……」

「……？」

「待て、誰だお前」

香澄が話しかけてきた思ったから普通に話してたけど目の前にいるこいつは誰だ？

俺のことをゼロ君と呼ぶなんて香澄しかいないんですけど……？

「おたええ！おっはよう！」

「香澄おはようー」

「紹介するね、私のバンドメンバー花園たえ、みんなはおたえって呼んでるのー！」

「おたえって呼んでね」

「……………そう、か」

この人ガールバンドの一員だったのか！ならアサシンの可能性も……いい、いやいや！今はそれどころじゃない、隣子さんの件があ

「香澄、星柄のパンツは卒業した？」

「うん！こないだあっちゃんと一緒に下着買いに行ったんだー今度お泊まりの時に見せてあげるー！」

「ふふ、香澄も大人の仲間入りだね」

「私もエチエチな下着デビューだよ！」

「あの一男子の前でそんな話しないでもらえますか？」

あと地味にあつちやんさんも被害にあつてるからな、あの子ああ見えて結構エツチな下着を履いてるんだな…見る目変わるわ

「おたえ最近調子どう?」

「絶好調、レイとも音合わせる慣れたし、何より一緒に演奏してて楽しい」

「……そっか!うん!おたえが楽しそうでよかった!」

「ツ!……ごめんね」

「気にしなくていいよ、こっちは大丈夫!」

レイ?とは俺のこと、ではないよな?俺と同じ名前の人がいるってところか、まあ珍しい名前ではないか

その後おたえさんとは特に話すこともなくそのままふらーっといつの間にか目の前からいなくなっていた。

「かーくん!と零之助!おはよう!」

「はぐ!おはよう!」

「北沢さんおはよう」

「はぐみでいいよ!零之助はうちのお店でよくお肉買ってきてくれるし!それにコロツケも!」

「確かに北沢精肉店のコロツケは美味いからな、親父さんにはもつと腕を上げてもいいと伝えてくれ」

「わかった!」

「わかつちやうんかい」

冗談で言ったんだけど伝えてくれるのか!あそこのコロツケが今以上に美味くなつてしまうと食ったら飛ぶぞ!

「ねえねえかーくん!英語の宿題した?はぐみ難しくてわからなかったんだ!」

「はっ!私その宿題してない!」

「ならはぐみと一緒に今からしようよ!わからないところ教えて欲しいな!」

「教えられるかわからないけどとりあえず宿題しないと!」

「ごめんゼロ君!今から宿題しないといけないから教室行くね!」

「お、おう」

忙しいヤツらだな、北沢さん香澄のことかーくんって呼ぶのか、俺とありりみたいな感じでなんかいいな

ってありりだけじゃなくてモカもか、モカってあだ名で呼ぶような名前してないからな、こっちは名前で呼んでしまうよ

「……………」

あれからまた数分待つが燐子さんが来る様子がない、ありりの情報では来るって言ってたんだけどな？

「……………あなたここで何してるのよ」

「ほえ!？」

「何その反応、あなた面白い反応するわね」

「白鷺さん!」

そう言えば彼女は花咲に通う一生徒だったな、アイドルだろうと女優だろうと学生なら登校するか

「あれ?後ろにいる人は?」

「……………ほら花音、挨拶しないと」

「??？」

花音、どこかで聞いたような名前…だな

「ふええ…ひ、久しぶりだね、れいくん」

「……………松原さん!?久しぶりです!5月以来ですかね!」

約2ヶ月ぶりに顔を見たぞ、奥沢さんと少し松原さんの話はしてたけどさこうして面と面わかって話するのは本当に久しぶりだ。

「あの時はありがとう、おかげでみんなと合流できたよ」

「でも今も道に迷ってるとお聞きに…」

「ふええ、恥ずかしい」

な、なんだこの生き物…!目の前にいるだけで癒される!折れかけていた心が元に戻る勢いで悲しさとか吹き飛ぶ勢いだ。

「んんっ!感動の再会しているところに水をさすのはあれなのだけれど…あなた時間は大丈夫なのかしら?」

「時間?」

俺は昨日買ったばかりの携帯をポケットから取り出し時間を確認した…。

「やっぱ！もうHRまで時間がない！」

「ごめんなさい松原さん！また機会があればお話ししましょう！」

「れ、れいくん待って！」

「さよならあー!!」

「……………行っちゃった…」

レイには花音の声は聞こえず、そのまま遅刻しないため全力前進だ！と言わんばかりの勢いで羽丘に向かうレイである。

「花音どうしたの？」

「……………この前れいくんが道案内してくれて…お礼に今度カフェに行こうって話してたから…」

「誘おうとしたのね」

「……………」

「……………そう、なら私に任せなさい」

「……………」

花音は一気にパーっと顔色と表情が豊かになりしまいには何度も頷きながら千聖にお願いすると言ってるような反応をしていた。

「はいはい、そうだわ、ついでだし彩ちゃんも誘いましょう。あの子神崎君に会いたがってたし」

「そう言えば彩ちゃん今日は合流しなかったね」

「あの子今日は朝から撮影があるのよ」

「ふええ、アイドルは大変だね…」

花音がそう言った数秒後

「ハックション！」

「おいおい彩大丈夫か？」

「P プロデューサー！大丈夫です！まん丸お山に彩りを！丸山彩！今日も頑張りますー！」

「そのPって呼ぶのやめろ、なんかおかしいだろそれ」

彩はPと撮影現場にてそんな話をしたようだ。

場所は戻り花咲の校門付近、もの陰に隠れていた少女は誰かがいなくなつたのを確認したあとため息をつきながら姿を現した。

「はあ…なんで隠れてるんだろう、私」

そう、燐子はいつも通り登校していた。していたが校門前にレイがいたため隠れてやり過ぎしていた。

別に会いたくないわけではない…でも会いたくないという矛盾している感情が彼女の中にはあった。そのためもの陰隠れてレイが帰るまでやり過ぎしていたのだ。

「白金さん何をしてるんですか？」

「ひゃっ！氷川さん…？」

「今日は朝から会議があるはずですよ、いくら市ヶ谷さんが準備してくれるからとは言え遅刻はよくないです」

「そう言う氷川さんもギリギリなんのでは…」

「……………行きましようか」

「は、はい…」

特にはぐらかされた様子はないが、燐子はこれ以上追求してはいけないと何となく思い、そのまま紗夜と生徒会室に向かうのであった…。



「……………神崎、神崎はー休みか？」

羽丘の2年A組は絶賛HR中、丁度出席をとっている最中だった。

「幼馴染共、神崎から何か連絡受けてないのか」

「れーくん携帯なくしてるから知りませんー」

「色々あったので病んでると思います」

「……………レイ君ならそのうち来ると思います！」

「なんだ羽沢やけに自信満々に答えるな、何か伝言でも受けているのか？」

「いえ！なにも！」

笑顔で答えるつぐみに対して担任は少し驚くも、その数秒後

「すみません遅れました」

「……………神崎、ギリギリだぞ、週明けは気おつけておけ」

「はは、肝に銘じます（笑）」

土曜日ぶりに全力で走ったけど疲れたな、もっと早く気づいておけば歩いてこれたのにさ

「うーすレイ」

「おーす柘優」

「どうした、寝坊か？」

「んーそうしとく」

柘優とそんな会話をしながら俺は自分の席に着く、着いてはリュックを机の横にかけて頬ずえつきながら担任の話を適当に受け流す。

受け流したところすぐにHRは終わり俺は周りの幼馴染集団に話しかけられた。

「れーくん何してたのー？りこさんとの件で悲しすぎて夜眠れなかったとか？」

「……それはない、よく寝れた」

「それともオナ……」

「お前と同じにするな、してないから」

「酷い！私だって昨日はしてないよ……そもそも今はそんな状況じゃないし……？」

「わかってるならそういう話をしないとと思うんだけど？」

「りんちゃんの言う通りー」

訂正しよう、幼馴染集団ではなく凜も話しかけてきた。まあ後ろを向かず前を向いたまま話しかけてきたけど

「凜、今日は前の髪型なんだな」

「……楓凜が寝坊した」

前の髪がというのは髪を一つ結びした髪型だ、個人的には最近ずつとしていたビッグテール？って髪型の方が好きなんだけどさ

「レイ、髪が乱れてるから直してあげる」

「ああ、悪いな……頼むよ」

「ところで花咲の校門にいた男装している女子ってレイのこと？」

「なんでもう広まってんだよ、俺だけどさ……」

その情報どこからやってきた？やってきたにしても広まるの早すぎだろ……

「ふふ、男装している女子だって、よかったね」

「……あのな今そういう気分じゃないだろ」

「ツ！ご、ごめん……」

強く言いすぎたかもしれない：蘭はそのまま黙って俺の髪を綺麗にいつも通りの髪型へと整えてくれた。

「ありがとう蘭、にしても蘭のことだから変なことすると思っただけど……」

「あんたが真面目なこと言ったからやめた、てか燐子さんとは話せたの？」

「……………いや話せなかった」

結構待ったんだけどな：燐子さん学校来てるんだろうか？

「なあひまり、ありりか香澄に燐子さんが登校してるかどうか確認してくれないか？」

「わかった！」

少し待ち、1限目の授業が始まる寸前にひまりの携帯に1件メッセージを受信した。

「有咲ちゃんから返事きたよ」

「それで？」

「……燐子さん来てるって」

「……」

ああ、なるほど……

「これは完全に避けられてんな」

松原さんのおかげで回復していた心は……またも同じくして折れそうになった。

どれくらい時間が経っただろうか。モカ、ひまり、蘭と凜が励ましてくれたはしたもののやはり悲しいものは悲しい。

こどもも避けられるとは思ってもなかった。それほど俺のやったことは燐子さんにとって悲しいことだったんだ。

「……………」トントントン

「神崎さん」

「……………」トントントン

「神崎さん！」

「あ、はい！」

「話を聞いてください！いくら料理が得意だからって先生の話の聞かなくていい理由にはなりません！」

「……………すみません、ぼーつとしました」

「ぼーつとしながらキャベツを切らないでください！危ないですよ！」

「気おつけます」

4限目の家庭科の授業、調理実習の際俺はぼーつとしながらキャベツを千切りしていた。

「神崎どうしたんだ？」

「美竹さんに振られたのか？」

「ま、まじねーわ」

「……………何もないよ、それより米をといでくれ」

いかにいかに、料理中は集中しないと、でないと怪我をしてしまう…。なんでこんなタイミングで調理実習とかあるかな

「……………」

幼馴染集団及び凜も気お使っていつも通りの接し方はしてこないし…

はあ、これはどうにかして仲直りしないといけない、んだけどなー
「……………このラノベ主人公」

蘭は誰にも聞こえない声でぼそつと呟き、その後の調理実習では遊が指を少し切った程度の怪我をして終了となった。

◆ ◆ ◆
昼休み、そして午後の授業が全部終わり俺は放課後机に顔を伏せ考えていた。

今日はAfterglowがバンド練習日のためサークル活動は休み

「れい」

「……あ、凜、残ってたのか」

「……りんこと仲直りする気はあるんだよね」

「ある、よ」

「文化祭の出し物……早く決めないといけないから、仲直りして欲しい」
「……………」

「このまま終わるのは……嫌だ」

わかってる。そんなの俺が一番わかってる……！でも、避けられてるんだぞ？もうどうしようもないだろ……！

「りんこも多分悩んでる」

「……どうかな」

「りんこはれいのこと嫌ってない、避けてない」

「なんでそう思う」

「……乙女の勘」

「信じれるかよそんなものー」

先程とおなじよう机に顔を伏せてそう言う。乙女の勘ってなんだそれ……。

「姉さーん！帰りましょっ！」

「楓凜、うん、帰ろう」

「あれせんぱいかなり落ち込んでますねー振られたんですか？」

「……こうはい、まあそんなところだ」

「まじですか！え、可愛い系後輩のこの楓凜ちゃんが慰めましようか？」

「いやいいよ」

このこうはいは苦手のタイプの人種だし？あんまり関わろうとは思わんわ

「姉さん姉さん！今日帰りに買い物しようよ！」

「楓凜と買い物に行くに変な下着ばかり買わされる」

「変じゃないよ！可愛いよ！」

「可愛くない、卑猥」

なんと凜の下着はこうはいが選んでいたのか、通りであんなエチエ

チな下着を身につけていたのか…。

「俺帰るよ」

「えーせんぱい着いてこないんですか？わざと聞こえるように話してたんですけどー」

「行くわけねーだろ、じゃあな」

「ちえーせつかく楓凜が慰めてあげようとしたのに釣れない人ですね」

「…：楓凜は一体どんな心情で誘ってんのよ」

凜は顔に手を当て一人悩むのであった。そんな姉を見て楓凜は姉さんがなんか悩んでる！と思うだけなのであった。

「どうすつかねまじで」

夏コミまで1ヶ月ちよい、こんな状況で販売できるはずがない。早く仲直りしないとサークルが…

「見て見て！あれって白鷺千聖じゃない！」

「うわ本当だ、近くで見たのは初めてかも！」

「噂によると今度の文化祭薫様と共演するとか！」

「だから羽丘に来てるのね！」

なんだ？校門付近が騒がしいぞ…？

と思いつつながら近づくと白鷺さんが携帯をいじりながら壁に背を預け誰かを待つように立っていた。

「！遅い」

「え、俺ですか？」

「私を待たせるなんてとんだ駄犬ね、罰として腐った生肉あげるわよ」

「いらぬですよ！てか何の用ですか？」

待たせるも何も待ってるなんて話聞いてないし…：てか本当に何用？

「花音があなたと一緒にお茶をたしなみたいって言ったから誘いに来たのよ」

「松原さんが？」

あーなんか今度お茶でも…：なんてこと言ってた気がする？かもし

れない。

「……でもすみません、俺今そんな状況ではないので」

「私の誘いを断るの？」

「いやそう言う訳ではなくて……」

「せっかく花音以外にもガールズバンドに所属している娘を連れてきてるのに」

「……………」

「もしかしたらアサシンかもしれないわよ？」

もしかしたらアサシンね、でも今俺が他の女子とお茶なんてしてる所隣子さんに見られたらなんと思われることか

「何かあったなら相談に乗るわよ」

「へ？」

「乗りかかった船よ、あなたがそんなだとアサシンは悲しむわ」

「……………」

「これは私からの案なのだけど……相談会ってことで今回は私の誘いを受けてくれないかしら？」

「……………」

こうして俺は白鷺さんとお茶会の誘いを受けてしまった。

そのお茶会にて俺はまたも知りたくもない情報を知ることになるとは……この時の俺は何も知らない無知な少年なのであった……。

夢を叶えたことありますか？

「……………」

あの後俺はすぐに白鷺さんに連行され終始無言のままその後ろをついていく。

「何か話したらどう？」

「え？いや、あーあーあーあー」

「……………何よそれ」

「話してと言われてもなんの話しをすればいいのやら」

「適当に話せばいいじゃない」

「……………」

「もういいわ」

やばい、飽きられてしまったか？

いやいや、この状況を考えろ、今から相談会という名前だが女子とお茶会だぞ？

俺は隣子さんと絶賛不仲中なのに人とお茶会とか、ましては女子とお茶会なんてもう、な？バレたらどうなるか…

そう、俺は隣子さんにこのことがバレないのか不安なんだ。

まるで浮気がバレるかもしれないと思うクズ野郎みたいな不安が俺の中にはあるんだ。

「……………アサシンとはどうなの？」

「アサシン？」

そう言えば…アサシンとも今仲悪いんだった…！

あの日俺が香澄か？なんて聞いたあと1度も会ってねえ！話してねえ！

「さ、最近会ってませんね…」

「あなたが軽はずみなこと聞くからよ」

「へ？」

「私アサシンから話を聞いてないわけがないじゃない」

「で、ですよねー」

そりやそうだ。唯一アサシンが相談できる相手がこの人なんだが

知ってて当然か

「軽はずみに誰かなんて聞いちやダメよ、外れてたら彼女悲しむじやない」

「じゃあ香澄じゃないんですか？」

「……………さあどうでしょうねー」

なんだよその間、普段の一、二倍の間があつたぞ、それといつものさあどうでしょねーときたか

「あなた香澄ちゃんとは友達なんでしょ？」

「……………まあそうっすね」

「付き合う気なんてサラサラない、のに……もし彼女がアサシンならあなたは一体どんな行動に出るのかしらね」

「……………」

「あら、答えないのね」

香澄、とは確かに友達だ。

もし香澄がアサシンなら……俺は付き合うだろうさ、香澄だけじゃない変態幼馴染共やサークルの誰かであつても付き合う。

だってこんなにも俺のことを愛してくれるんだぞ？なら俺はその愛を返さないと

てか今思うとモカとひまりとかがあーやってからかつたりやたらとエツチしたがるのはアサシンだからなのか？

いやいや、まあアサシンだったのなら喜んでエツチしますよ!?

でも今は絶対ダメだ、分かるまで俺は何がなんでも絶対に手を出さない！

神に誓おう！神崎だけにな！あつはは！

「私には答えないけど心の中では決めてるそうね」

「なんでわかるんですか」

「勘よ」

「いや勘かい!？」

凜と言い女子はよく勘というものなのか？だとしたら女子の勘、いや乙女の勘というのはバカにしてはいけないのかもしれないな

「ふふ、アサシンはあなたのこと嫌ったりしてないわよ」

「ん？」

「確かにあなたは軽はずみなことを言ったかもしれない、でも彼女は嫉妬深くて嘘つきな娘だけどあなたを愛していることだけは決して嘘ではないわ」

「ッ！」

「彼女、あなたがそのうち自分への好意も嘘なんじゃないかって言い出すかもしれないから伝えて話してきたのよ」

「あー確かに、言われてみればそのうちそう考えるようになってたかもしれない」

嘘つき屋さんだけど俺に対しての好意は本当、か…な、なんか真面目に言われると照れるな…。

「なに照れてるのよ」

「え?! 照れてました?」

「ええ、俺の彼女可愛いって顔に書いてあったわよ」

「まだ付き合ってますんからね!」

「でもそのうち付き合うでしょ、もう実際彼女よ」

んー彼女、彼女なのか? でももし付き合えなかつたとしたら…

あああー! 考えたくない! ここまで俺のことを好きだと言ってるのに付き合えませんでしたとか死んでも嫌だあー!!

「でも25人のうちの1人だからなー」

「お手上げ状態なのかしら?」

「んーまだ話してない人とかいるし…そもそももう4月のこととか覚えてる人なんているんすかね」

俺は腕を組みながら悩みだす。

俺も4月の特定の日とか何してた? って聞かれても答えられないぞ

今のところモカとひまり、あと誰だったけ? とりあえず数人はその日何してたは把握してるんだけど…嘘かもしれないんだよな

「だったらいいこと教えてあげる」

「??」

「私、恋人いるわよ」

「……………はっ!」

「こ、恋人!? 恋人って彼氏? 彼氏だよな!? 付き合ってるってことか!? 誰と?」

「てかいんですか! あなたアイドルですよね!? 付き合ったりしていいの!」

「誰がいつアイドルは恋人を作っちゃいけないなんて決めたのよ」

「いや誰かというかそう言う暗黙の了解なのでは...?」

「悪いがアイドル界限のことは知らないがアイドルは付き合っってはいけないじゃないのか?」

「大丈夫よ、誰にも話してないから」

「なら大丈夫つすね」ホッ

「いえ嘘ついたわ、Pは知ってるわ」

「はい、アウトオー!!!」

俺は片手を振り回しながら大声で叫んでいた。Pにバレちゃまずいでしょ、パスパレ解散の危機到来か

「あんたアイドルだろ! ファン達が悲しむだろ!」

「パスパレは恋愛禁止なんて公表してないもの」

「だ、だったら許されるのか...?」

「そう、だからパスパレの中にアサシンがいるかもしれないわね」

「ッ!」

完全にそのことを忘れていた...!

俺もしかしたらアイドルから告白されたの...? 素顔を見せないのはアイドルだから?」

それともあれか、アイドルを卒業すると同時に素顔を見せてくれる...?」

いやいや、そんなんだと高校生活中にアサシンを見つけられなかったことになるから!」

てかアサシン見つけないと俺の黒歴史の闇の書が小説家になろうぜ! にまた投稿されてしまう!」

今は7月、もう3話も投稿されてるのか...! アサシンは好評とか言ってるけどそんなの嘘に決まってる。なんせ彼女は嘘つき屋さんなのだから

「でもいいんすかね、白鷺さんアイドルだけじゃなくて女優でもあるじゃないですか…:そので、デートとか大変なんじゃ?」

「その心配はないわ、彼今日本にいないもの」

「??」

大人の人と付き合ってるのだろうか?そう簡単に学生が海外に行く理由がないもんな…

「じゃあ付き合ってるのに会ったことない?」

「失礼ね、会ったことはあるわよ、元々同じ地域に住んでいたもの」

「…:ますます分かりません、なんで海外?留学か何かですか?」

「ええ、そんなところよ…:休学中だけ」

「…:…:…:もういいっす」

やめよう、なんか白鷺さんが可哀想な人に見えてきた。

付き合ってるのに彼女をほっといて休学して海外に行ってるだど?という理由で?」

「彼は彼女の私よりも多くの人を優先する人なのよ」

「…:善人かなにかですか!」

「はい、この話終わり、話してたら会いたくなるからもうしないこと、わかった?」

「あ、はい」

人差し指を立てながら俺に言う白鷺さん、この反応ってことは彼氏さんは本当にいるってことか…。

浮気が大好きな女性ではない限り俺に告白するような女ではない、つまりアサシンではないってことか

やったな神崎レイ、これで25人から24人のうちの1人だと言い切れるまでになったぞ!

まあ3ヶ月近く経過してますけどね!?

「あ、花音達もう着いてるみたい、急ぎましょう」

「お茶会って…:そういえば松原さんでしたっけ!」

レイの声を聞いた通行人は1度レイの方を向き、何もなかったのよう立ち去ろうとしたが…:偶然白鷺千聖の姿を捉えた通行人は千聖に話しかけるのであった…。



あれから数分後

『……はあ、はあ、はあ……』

1人の通行人が大きな声で白鷺千聖だわ！なんて言い出したおかげで次から次へとファンらしき人達が群がり俺達は死にものぐるいでその群れから逃げてきた。

だから息を切らし、肩で呼吸をしているんだ。

「あ、あなたが大声出すからよ」

「そ、そんな…ゆ、有名人、の、白鷺さんのせいですよ」

「女のせいにするなんてとんだクズ野郎ね、そこに四つん這いになりなさい、おしりペンペンしてあげる」

「彼氏いるくせにそんなことしないでください…」

息を整えながら会話をする。残念ながら俺は体力に自信のある方ではないため普通に少し走っただけで息切れする。

「とりあえず入りましょう」

「……わかりました」

とは言ってもお茶会の会場はどうやら羽沢珈琲店のようだ。見なれた外装とメニューの書かれた看板、間違えようのない風貌、これは羽沢珈琲店だ。

「いらっしやい、っと久しぶりだね、レイ君」

「義嗣さんお久しぶりです」

羽沢珈琲店のマスターでありつぐみのお父さん、羽沢義嗣さん、ダンディーな見た目とは裏腹に娘は盗聴癖を持った残念なやつだ。

ダンディーは関係なかった、めんご

「あーつぐみの母さんいます?!いたら今すぐ呼び出してください!」

話したいことが山ほどある!つぐみによからぬ事をふきやがって!俺の知ってる普通で可愛い女の子は今では恐怖を感じる変態野郎へと変貌してしまったんだぞ!」

「すまない、嫁は今友人達と北海道一周旅行に向かっかけてね」

「贅沢すぎんかあの女…!」

誰のせいでつぐみが異常者になつてると思う?!あんたのせいだよ

！なににげとんじゃーりや！

「白鷺君、向こうでみんなが待つてるよ」

「ありがとうございます、マスター」

向こうを向いてみると松原さんが手を振っていた。んー可愛い、その隣には…何やら可愛らしい女性の方がいる？

てかこの店松原さん達以外のお客さんがいないような？

「今日は白鷺君が貸し切ったんだ」

「ま、まじですか？」

「ええ、だって私と彩ちゃんがいるもの、他のお客さんがいたらまともにお茶なんて飲めないわ」

「流石芸能人、金持ちはちげーぜ…」

「何か言ったかしら？」

「いえなにも！」

さっきのセリフが聞かれてなくてよかったー金持ちってイメージ的に金使い荒いしかないからな、思う俺も悪いけど思わせるようなこの世界が悪い（シンジ君は除く）

「あなたが来ないと言いつ出した時は正直焦ったわ、こんなにお金を出したのにこないなんて、ね？」

「……断らなくてよかったです」

後でお金を請求されていたかもしれん…参加すると言ってよかったぜ

「レイ君、いつものやつで…」

「ココアで！」

「……ふむ、ココアね、わかった」

余談だが俺は厨二病を患っていた時、よく夜中にここ羽沢珈琲店に来ては「いつものを」なんてかつこよくいいながらコーヒー頼んでいた。

今思えばかつこいいもクソもない、ダサすぎる。あと俺はコーヒーが飲めないのに頼んでいた。

そんなことを数秒のうちに考えながら席に向かう。

「花音、遅くなつてごめんなさい…途中で神崎君が胸の大きい女性に

目を惹かれてて」

「変なこと言うのやめてくれませんか!？」

「ううん、私はキニシナイヨ」

「何故カタコト!？」

心做しか目のハイライトも消えていたような…? 松原さんにはあまり下のネタは控えようか、体制があまりないようだ。

「ちよつとちよつと! 私は!」

「……………さて、みんな何飲みたい?」

「なんで千聖ちゃんまで無視するのさ!」

この人が彩ちゃんさん? どこかで見たような顔…って白鷺さんと同じアイドルグループに所属している丸山彩さんか

テレビで見る時と大分印象違うな…髪型か? 今は下ろしているみたいけど…ツインテールの方を見慣れてるから一瞬別人かと思っ
てしまった。

俺は髪型が変わっただけで人を間違えたりする人だ。

しかし知り合いが髪型変えたりしたのなら気づくぞ? 現にひまりの時とかちちゃんと気づいてたし

「ねえ! 私! 私のこと知ってる!？」

「あ、はい」

「え! 誰誰! 誰だと思う!？」

「…………パステルパレットの丸山彩さん、ですよね?」

「ぞう思う? やっぱりバレてた! えっへへ! 君にはバレちゃうか!」

「????」

??俺は丸山さんを指さしながら白鷺さんに「この人は何を言ってるの

?」と目で訴えていた。

「はあ、彩ちゃん? あなたの悪い癖よ、すぐそうやって自分のことを知ってる人を見て喜ぶのはやめなさい」

「ち、違うよ! ゼロ君は特別だもん!」

「ぐはっ! な、なぜその名を!？」

「そういえばレイ君、昔そう呼べと僕にも言ってたなあ」

「はいはい義嗣さんは黙ってて!？」

ココアを持ってきてくれた義嗣さんがゼロに反応したようだ。

頼むから、痛い過去だからもう触れないで…!

「ゼロ、君?」

「ゼロ?」

「いや!それはなんとというかっ!なんでそのこと知ってるんですか!?!」

「なんでっ!君がそう呼べっ!」

「?」

「?」この人は何を言ってるんだ。

俺がいつあなたにゼロと呼べなんて言った…?

「!ま、まさか…!」

覚えているだろうか。俺が中学生の時、あの瀬田薫さんと出会って
いたという話を

あの話を聞いた時俺は後悔と恥ずかしさ、そしてやはり厨二病を
患っていたものへの代償の重さを改めてしまった。

その後俺はもう一人とある女性と話をしていたことを思い出した
んだ。

それも夜寝る前にだ。人間あるあるなんだが夜寝る前にいやーな
黒歴史を思い出してしまい無に帰りたい衝動と戦いながら眠るとい
う戦いがあるのだ。

そう、その時に思い出した忘れたくなるほどのくそみたいな記憶、
それが今鮮明に蘇る…!

「ゼロ君覚えてない…?君が私をアイドルにしてくれたんだよ?」

「は、はひい…」

「?どうゆうこと?説明してくれないかしら」

「ツ!いや!だ、ダメだ!ダメです!それだけは!」

「千聖ちゃんの花音ちゃんには話すね!あれは確か1年とちよつと前
…」

「やめろおおおお!!」

レイは聞きたくないのか耳をふさいで机に顔を伏せる。伏せたが
彩は一切構わず千聖達にレイと過ごした甘いひと時(笑)を語り出し

た。

「……………はあああああ」

丸山彩はその日河川敷にて一人大きなため息をついていた。

時は黄昏、自分の後ろを自転車通学の生徒がチャリチャリと意味もなくベルを鳴らしながら走り去っていくのを後目にもう一度大きなため息をついた。

「このままじゃやばい……！」

丸山彩は焦っていた。何に焦っていたか、それはアイドルになれないことにだ。

別になれなくてもいいだろ！なれる方が凄いい！と思うだろうが彼女には絶対にアイドルになるしか道は残されていなかった。

「養成所のお金…パパが払ってくれてるけど…」

アイドルになるためにはレッスンが必要、しかしそのレッスンもタダで受けれるわけではない。

養成所に通い、指導を受けながら自分を磨きあげオーディションを受け、合格する

そこからアイドル人生の始まり、だ。

でも丸山彩は養成所に通いだしてもう2年と数ヶ月、養成期間は3年…もう残り数ヶ月の内にスカウトされないと3年間が水の泡

従い両親が払っていたクソ高い養成所のお金もドブ川に捨てたよ
うなもの…と彼女は思っている。

「……お金、返さないといけないんだよね」

両親が養成所に通うためのお金は払っているものの将来売れて必ず返すとの約束で支払ってもらってる。

つまり前借り状態、端的に言うところ丸山彩は親に借金をしてるんだ。

「アイドルになれなかったらどうしよう……!」

そうなってしまったら自分の体を使って……。

「……………」

良くない考えが頭に浮かび彩はそれをかき消すかのように頭を大きく振った。

「はあ、アイドルになるのってこんなに大変だったんだ……」

養成所の先生からは毎日怒られ、同級生からも嘲笑うかのように見られ……踏んだり蹴つたりの毎日

「もう……やめて真面目に働こうかな」

将来はOLにでもなっただちまちな親にお金を返そうか、まあ何年かかるかな、あははと諦め状態になってしまう。

「……………」

「ツ?!?!」

彩はその声を聞き驚く、なんせ自分が河川敷で座っていた場所の左斜め前には河原で1人本を読んでいる少年の姿があったからだ。

「(ひ、独り言多い変な女子だと思われてる……!)」

恥ずかしさのあまりすぐにその場から離れようと思った、が

「その女」

「は、はひい!」

「……………」

「あ、あはは……聞こえてましたか?」

「ああ」

少年は立ち上がり本を制服の内ポケットへとしまう。

立ち上がった少年の容姿はパーカに学校の制服だと思われる学ランを羽織り、耳には痛々しいピアス、そして首元にチョーカーが巻かれており、髪色は黒だった。

主に全身黒で統一された黒の戦士スタイルの少年だった。

「その女、話せば少しは楽になるぞ」

「へ?あ、そうかな……だったら、うん……少し話そうかな……?」

精神的に参っていた彩は他人であるその少年に今の話をした。

どうやったらアイドルになれるのか、そしてこのままアイドルを目指すでもいいのか…。

主にこれからのことについて話をした。

「……いい夢じゃないか」

「……………そう？」

「^{オレ}我も実は夢があつてな」

「夢？」

「ああ、語るまでもない小さな夢だが…なーに、バカにするやからがやけに多い」

「ツ！その気持ちすつごくわかる」

彩がそう答えると少年は少し驚く、まるで共感されて嬉しいかのよう…。

「ふ、ふん！ま、まあ、その、なんだ！バカにするやつは他人をバカにすることしかできない無能だ、挑戦することを拒んでる腰抜け共だ」
「う、うん！」

「それに比べれば我達には夢がある、実に素晴らしい、我達が強者だ！」

「うんうん！私達の方が凄い！」

「……………」

少年は考えた。

「(やばい、この後なんて言えばいい)」

どうやらは無能はこの少年だったようだ。たまたま近くにいたからカツコつけて話しかけたはいいもの、これからどうしようか。

てか俺カッケー絶対この女俺に惚れたよ、やっぱりピアスか？

チョーカーか？黒髪か！

ふん、クласのバカ共はこの良さをわからない無能だからな…あと香澄も

「ねえ、君名前なんて言うの？」

「……我はゼロだ、それ以上でもそれ以下でもない」

「ゼロ君？」

「ああ、我のことはゼロと呼べ！」

一体何と比べてそれ以上でそれ以下なのはさておき彩のおかげで話の続きができるようだ。

「ゼロ君、君と会えてよかったよ、多分君が話しかけてくれなかったから私今にでも養成所辞めてたかもしれない」

「……なに、我は夢の話をしたにすぎない」

「それだよ！夢の話！」

「……………」

「私忘れてた、アイドルになるのは夢なんだよ！夢を叶えるのってすつごく大変なのは当たり前、現に今心折れそうだもん…」

「でもね！ゼロ君のおかげでわかつちやった！」

「我のおかげで？」

「ばっ！と彩はその場に立ち上がりゼロと名乗る少年の前に行き、意気揚々と語り出す。

「夢は叶えるためにあるもの！どんな壁だって超えて初めて叶うもの！なのに途中の壁でやられるようじゃ私は叶えることなんてできない！」

「私戦う、辛いこと、悲しいこと、全てから逃げない、立ち向かう、負けない、絶対にアイドルになる！神様に誓う！」

「……………」

少年は驚いたのか何も言うことが出来なかった。

正直少年のおかげでここまでやる気に満ち溢れたのか、と聞かれれば嘘ではないがそこに至るまでの助言はしていないと思う。

後半の意気込みは完全に彩自信が自ら導いた答えそのものだ。

「ふん、我のおかげで気づけたか、なに我のおかげだな」

「うん！ゼロ君ありがとう！」

「……にはなんと無能が2人おったそうだな」

「では最後に俺が最高のプレゼントをお前にくれてやろう」

「ん？」

少年も立ち上がり左目を覆い隠す。そして

「神崎レイが命じる！お前は2〇3、3〇6プロダクションのような、！歌って踊れるアイドルになれ！」

「ッ！」

その左目のみ右目とはことなる瞳になっていた…が、それはただ左目を抑えている時にカラーコンタクトをつけただけに過ぎない…。

と以前も説明したような気がしなくもない。

「私がアイドルになったら絶対ライブ来てくれる？そして…：…また会ってくれる？」

「…：…それはどうだろうか、我は裏の人間、そう安安表の住人と絡める機会が訪れるのやら」

「そ、そんな！」

「…：…：…機会があればまた会おう」

少年はポケットに手を入れ彩から離れ、決まった！とでも言うようなドヤ顔をしながらスーパリーに向かうのであった。

一方彩は少年の、いやレイの背中姿が見えなくなるまでずっと感謝に意を込めて頭を下げていたようだ…。

「つて話があつてね！」

「んぎやあああああああ!!!」

「はいはい、落ち着いてーゼロ君」

「やめてくださいー！」

まさか、まさかまさかあの人が丸山彩だったなんて…！

言われてみれば面影あるわ、めちやくちやあるわ、なんならもう丸山彩しかありえないわ！

「…：…でも本当に感謝してるよ」

「あの時私にアイドルになれって言ってくれてありがとう」

「……………」

丸山さんは椅子から立ち上がり俺の前にやってきてはありがとうなんて言いながら深深と頭を下げた。

「や、やめてくださいよ、思い出せば俺本当に何もしてないですよ。」
ちよつと夢をバカにするやつを無能呼ばわりしただけだったよ
うな…?」

「ううん、私あの時初めて誰かからアイドルになれって言われて凄く
嬉しかった」

「それと…私は夢を叶えたよ?」

「!?」

「ゼロ君も夢があるんでしょ?」

夢、か…確かに今は小説以外で姉貴を超える、って夢があるけどさ
丸山さんと話した当時の俺は小説家になる夢を持ってたんだ。

夢を持たないやつは無能、ならば夢を捨てた俺は一体何者なんだ…
?

目の前には夢を叶えた人がいるんだぞ?

俺は?何してるんだよ…

「れい君?」

「はっ!あ、いや、俺はその…まだ挑戦中というか…なんというか…」

「そうなんだ…ごめんね?私浮かれて変なこと聞いちゃった、気にし
ないでね?」

「あ……はい」

「……………」

俺は黙り込んでしまう。

俺にとって丸山彩は眩しすぎた。助言した?何言ってるんだか、彼女
は自分の力でここまで上り詰めたんじゃないか…。

「あなたもこれからよ」

「!」

「……まだ人生は長いわよ、たった10年と数年で叶えたってその先
から何するのよ」

「え!?それ私に言ってるよね!」

「あなたはトップアイドルになるのが次の夢でしょ?」

「えっへへ、私だけじゃなくて私達でなるんだよ?」

「……………これはやられたわね」

「ふふ、千聖ちゃんにも夢があるんだね」

「な、何よ花音、悪い？」

……白鷺さんのそのセリフで少し救われた気がした。
早く叶えたって意味がない、か。

丸山彩さんにはもう新しい夢がある。でも俺は……そうだな

「(せめて今の夢は捨てないようにしたいな)」

俺はそう決意してココアを一気に飲み干すのであった……。

「ところでゼロ君、あなたコーヒーは飲めるかしら？」

「ぶふうー!!!」

「ちよつと汚い、花音にかかったらどうするのよ！」

「だったらゼロ君なんて呼ばないでくださいよ!？」

少し感動してたのは俺だけなのか？てかあとその呼び方は色々と傷つくからやめてく欲しい！

「やめようよ千聖ちゃん、れい君嫌がってるよ？」

「花音が言うなら……」

「えーでも私はゼロ君って呼んでも……」

「ダメです！やめてください、お願いします！」

「えーじゃあレイ君で！」

じゃあで名前呼びか、なんかこの人俺とめちやくちや親しげに話そうとするんですけど？気の所為か？

「でもれい君と一緒にお茶飲めるなんて思わなかったー千聖ちゃんありがとね」

「気にしなくていいのよ、私も色々都合がいいから」

「……………」

花音さん、ちよつと怪しいかも……？

千聖ちゃんありがとうね、そう言えば松原さんが俺とお茶会した
いーって話で誘ったんだよな？

「(松原さんは白鷺さんと仲がいいみたいだな)」

白鷺さんが肩入れするのも親しい仲だからか？

となると同じ空間にいる丸山さんも可能性が十分に高い……！

「(な、何だこの空間……!)」

アサシン候補の可能性が高い人が2人もいる！

今すぐに話したい、4月29日何してた!?

でも今はそんな場合じゃないだろ？

忘れかけていたが俺はここに燐子さんの件を相談するべくやってきたんだ。

松原さん、丸山さん、白鷺さんには悪いがここはちゃんと相談の間として利用させてもらおうぞ…!

「あ、あのー!」

『ん?』

「ッ!」

3人が一切にこちらを向く

その顔は何か嫌そうな顔とかをしている訳では無い、でも…俺にとつては貴重な時間を奪ってしまうため、とても申し訳なく感じてしまった。

「(でも…負けない!)」

「相談があります!」

「れい君が私達に相談?」

「いいよいいよ!私全力で答える!君のためになら私はなんでもするよ!」

「い、いやさすがにそれは…」

「……………なんだ、言えるじゃない」

「???

白鷺さんが小声で何か言っていたが…俺に関係することかな?関係することなら聞いておきたいけど、まあいい

「実は花咲の生徒会長、白金燐子さんと…ちよつと喧嘩?というか仲が一時的に悪くなつてて」

「仲直りしたいんだ!」

「……………はい」

経緯を説明した。とあるサークルに参加していて、俺は無意識のうちに燐子さんを仲間外れにしていた、と

「んー仲間外れかー私もパスパレのみんなから仲間外れにされたら悲

しいな」

「うぐー！」

「わ、私もハロハピのみんなから同じ事されると……うん、ね？」
「がはー！」

「……まあ芸能界なんてそんなものよ」

「え？その話今関係ありますか？」

確かに色々と闇が深そうな界限だろうけどさ、今関係なくね？

「……あの、話そうにもなんか避けられてるみたいで、今日も朝から校門で待ち伏せしてたんですけど」

「あーだかられい君朝いたんだね」

「れい君朝いたの!?仕事があったから会えなかったよー」

何故か丸山さんは俺に会えなかったことを悲しんでいた。

この人は本当になんなんだ？もしかするとアサシンなのだろうか

……?

「………ねえ神崎君」

「はい」

「難しく考えなくていいの、自分が思っていることを正直に伝えなさい」
「い」

「ッ！」

「燐子ちゃんならちゃんと話を聞いてくれるはずよ」

白金さんは、燐子さんは話をちゃんと聞いてくれる、か…。

あの日、俺が神奈の弟だってわかった時から正直に、チキらずに説明しておけばこんなことにはならなかったのかな…？

「あとはあなたが」

「俺がちゃんと話すこと、ですよ」

「………わかってるじゃない、ヘナチョコ腰抜けチキン野郎君」

「なんでそのことを知ってるのかは聞きませんよ」

「ふふ、ここで聞いたら面倒なことになるものね」

心の中で舌打ちをしてしまうレベルで少し以上にイラツときた。

蘭からよく言われる俺を罵倒する言葉、アサシンのやつは一体いつ知ったんだ？

そもそも何故白鷺さんにそのことを話すかな…って今はそれどころじゃないか

「あれだよ！家に行きなよ！」

「家ですか」

「家なら逃げられない！出てこないなら出るまで待てばいいよ！」

「あ、彩ちゃん？それ出てこなかったら日をまたいじやうよ？」

「そうね、でもいいんじゃない？必ず会えるのだから」

松原さん以外まともな思考をお持ちでないようだ。

「(でも…この人達に相談してよかった)」

主に真面目に答えてくれたのは白鷺さんだけどき、松原さんは可愛
いから癒されるし、丸山さんはアイドルだし(？)

なんか色々考えるのが馬鹿らしくなってきた。

そうなんだよ、簡単なことだった。

俺が思ってることを全部ぶちまければいい、それでダメだったなら
土下座でもなんでもしてやる！

「俺今から白金さんの家に行つてきます！」

「うん、れい君頑張つて」

「頑張ります！あと松原さん、今日は誘つてくれてありがとうございます！
ぎいます！俺今度なんかお礼します！料理得意なんでなんか作ります！」

「い、いいよそんなことしなくても！今日はこないだのお礼だから…」

「花音？神崎君がお礼したいって言ってるから甘えてもいいんじゃない
い？」

「ち、千聖ちゃん言い方…なんか私がまるでごによごによ…」

「ずるいー！私も！私もお礼されたい！」

「丸山さんにも何か作りますから！」

「えへ！本当にー？約束だよ？」

「は、はい！」

丸山さんちよつと要注意人物かもしれない、自意識過剰すぎるかも
しれないが…この人なんか俺に親しげな関係になりたがってる気が
する。

松原さんもなんかさつき怪しい言動があつたな、ごによごによつ

て、あれは何を言ってたんだ？

「白鷺さんは…」

「気にしなくていいわよ、文化祭で負けた時に何かしてもらおう」

「うわあ!!今それ言わないでえー!」

これから男を見せるところなのにー!蘭の同人誌に関連することは言わないでくれー!

「とりあえずご馳走様!お釣りはいりませんから!」

俺は財布から1000円札を取り、テーブルにバン!と叩き出した。

そのままマスターにはごちそうさんと一言いい俺は羽沢珈琲店を後にする。

目指すは燐子さんの家、今日はAfterglowがバンド練習と聞いていけどRoseliaもなのだろうか？

となると家にいないかも…いや、行くだけ行こう!いなかったらライブハウスに向かおう!

俺はもう何があっても燐子さんと今日絶対話す!たとえなにがあっても!?

走りながらそんなことを考えていた。

なんでもか知らないけど今は疲れも感じない。今ならノンストップで燐子さんに家まで走れそうな気分だ。

そんな時

「ああー!せんぱいいいたああ!!」

「げっ、こうはいー!」

凜の妹兼ウザイこうはいこと朝日奈楓凜が俺を見つけたからなのか俺目掛けてこっちに向かってくる。

「……………」

「ちよっ!せんぱい!逃げなくくださいよ!」

「うるさい!俺は今お前にかまってる暇はないんだよ!」

「なんですかそれ!こんな完璧美少女に追われるようなThe青春シチュエーションに興奮しないんですか!」

「んなわけねーだろ!少なくともお前では感じらんわ!」

なんなんだこいつ、なんでそこまでして俺を追いかける？凜と一緒に下着屋さんに行ったんじゃないのか？

「大事な話があるんですよー！」

「わかった、後日聞く！今は無理だ！」

「今じゃなきやダメなんですよー！」

「悪いが俺も今は無理だ！」

こうはいと大声で話しながら逃げることに数秒、目の前の信号が運良く青信号が点滅し始めた。

このまま俺が無理矢理突破すればこうはいは渡れない、ならば！

俺は心做しか少しだけ足を早く動か信号を渡ろうとした…その時

「れい待って、楓凜の話を聞いてあげて」

「わっ！凜!？」

いきなり目の前の曲がり角から凜が現れた。

俺は急に止まることなんてできないから俺は走ってる勢いを抑えることもできずそのまま凜にぶつかりそうになる…。

「れい、お願いだから…話を「あぁー!ごめん凜!」…:きやつ!」

ぶつかりそうになる、ではなく時すでに遅し、俺は凜目掛けで突進をしていた。

「(こ、これはやばい!)」

隣子さんだけでなく凜とも仲が悪くなるかもしれない！

でもでも止まれなかったから…。

なんて考えているなか

「ちよつと…いつまで上に乗ってるのよ」

「ツーッ、ごめん!すぐに退けるから!」

凜の上に乗っていた俺は急いで立とうとして地面に手を置く

「いっ!」

地面に手を置いた位置に何故かガラスの破片があり俺の手のひらには綺麗な切れあとができてしまった。

痛みの拍子で肘がかくんと曲がりまたまた凜の上に乗ってしまう。

しかも次は運悪く凜の胸にもろ顔を埋めていた。

「なっ!な、な、なな何してるのよこの変態!」

「まじでごめんなさい！」

綺麗なビンタが決まりその拍子で次こそ立ち上がる。

くそ、一体なんでこんな目にあってんだよ……。胸は柔らかかったけど……てかくそ柔らかかったんだけど？

「それはですねー姉さん今ノーブラなんですよねー」

「えー！」

「かか、楓凛それは言っちゃダメなやつでしょ!？」

「凛、お前とうとうモカのやつに」

「違うから！本当に違うの！理由があるの！あと私達の話聞いて！」

急いでるんだけどなあ……。ここまでしつこいから本当に何か大事な話なのかもしれない。

「では姉さんは今ノーブラで精神的に参ってるので楓凛から説明しまーす」

「おう」

「手短に、白金燐子さんからの伝言です」

「!？」

燐子さんからの伝言だ?!?な、なんで楓凛からだ？いやそれは凛がこうはいに話したとかか？

てかそんなのどうでもいい！伝言内容！

「えっと、あの場所で待ってる……だそうです」

「……………あの場所？」

「いやー青春ですねー、あの場所ですってせんぱい、わかります？」

「……………なんでお前達が燐子さんから伝言を受けたのかは知らない……でも、ありがとう！」

あの場所、つてのは何となくわかった気がする。

候補が2つあるからまず最初は……

燐子さんの家に行くのはやめ俺は新たな目的地に向かう。

「れいー！」

「どうしたノーブラ凛！」

「あんた殺すわよ!？」

「冗談冗談」

泣きながら、そしてプルプルしながら俺に指さす凜、ちよつとその様子が可愛いからいじりたくなってしまう。

「絶対対りんこと仲直りするのよ！いいい？わかった？」

「……ああ、絶対仲直りする！」

俺は凜達から受け取った燐子さんの伝言を頼りに、目的地であるあの場所に向かうのであった。

姉は見えないところで頑張ることを知っていますか？

放課後、全ての授業を終えた燐子は特にこれといった用事もなかったため帰宅しようとしていた。

朝の会議で文化祭のある程度の話は進んだ。後は後日行われる羽丘との合同会議で話をすれば決まるだろう。

帰宅するのは本日が Roselia のバンド練習もなければサークル活動もないからだ。

たとえば本日サークル活動があったとしても今の燐子が顔を出すとは思わないが…。

「白金さん、よければ途中まで一緒に帰りませんか？」

「……氷川さんの家とは方向が違うのでは？」

一人で帰ろうと思っていた燐子に話しかけたのはクラスメイトであり、同じバンドに所属している氷川紗夜だ。

燐子と紗夜の家の方は真逆、途中までとは校門までのことを指してるのだろうか？

「いえ、今日は江戸川楽器店に用事があるので途中までどうかと」

「そ、そうだったんですね…なら、是非」

「そうと決まれば行きましょう、白金さんの貴重な休みを奪う訳にはいきませんかからね」

「そんな、大袈裟ですよ」

「ふふ、そうかもしれないですね」

前に比べて紗夜はよく笑うようになった…と思う燐子、Roselia の仲も初期に比べればかなり仲がよくなったなと感じる。

仲がよくなった…

「（私はサークルに必要な存在だったのかな…）」

絵に関しては自分よりも上手い有咲と蘭がいる。

レイも最近はその2人としか活動を行ってなかった。

自分の作品が完成しているってのもあるかもしれない…でも、2人

が上手すぎる。

どうしてもあの2人と自分の作品を見比べてしまう。自分の作品なんて神奈のトレースにすぎないのだろうか？

「……白金さん？」

「へ!? あ、いえ…どうしました?」

「何か根を詰めたような顔をしてましたので」

「……そう、ですかね」

「昨日の練習も上の空だったようですし」

「それはすみません…」

バンドの練習中に集中を切らすとは何事か、昔の紗夜ならその様子を見た瞬間に注意されていただろう。

「何か悩み事ですか?」

「大したことではないんですよ…?」

「大したことないならそこまでならなのでは?」

凶星をつかれた燐子は動かしていた足をその場に止める。

廊下には夕日が差し込み、燐子の足元を照らす。

照らすも上半身は影の中、紗夜は振り返り燐子の様子を見るもその

表情を確認することはできなかった。

「………本当に大したことではないんですよ」

「………そこまで言うのならそうしときましようか」

紗夜は瞬時にこれ以上踏み混んではいけないと察した。

と言うよりも燐子の声音で何となくわかる。今にも泣きそうになりながら必死に堪えていると

「氷川さん」

「はい」

「今ネットでポテトが全サイズ150円って話知ってます?」

「そ、それは本当ですか!?!」

ネットとは有名なハンバーガーショップのチェーン店だ。

カリカリのあのポテトが全サイズなんと150円、なんてお得なのだろうか。

「帰りによろろかしら…」

真面目な顔をしながらボソツ呟く紗夜、ポテトに対してガチになりすぎた。

「では急ぎましょう、売り切れてしまいます」

「……売り切れる？」

燐子は首を傾げながら早歩き of 紗夜を追いかけるように小走りしながら歩いてくついで行くのであった。



「ふっ、ここが花咲か」

花咲の校門付近に真つ赤なフェラーリを停め、サングラスをかけた神奈こと神崎滯奈は決めゼリフっぽく発していた。

周りを見てみると自分を見てヒソヒソ何か話している女子生徒がちらほら

自分も売れてしまったなあーと思う滯奈、しかしそれとは裏腹に生徒達は不審者が現れたと少し怯えていただけだ。

「こら君、そこで何をしている」

「お？これはこれはお巡りさん！お勤めご苦労さん！」

「君は……はあ、懲りないやつだなあ次はなんだい？ストーカーかい？」

「……え？あたしのこと知ってる感じ？」

残念ながら違う、今滯奈の目の前にいるお巡りさんはレイとよく謎に絡むことが多いお巡りさんだ。

そしてこのお巡りさん、なんと滯奈をレイと勘違いしているようだ。

「君は髪を染めたのか？あと背も少し……？」

「……ああー多分うちの弟と勘違いしてませんか？それ」

「君はあの子と兄弟なのかい？」

「ん？あたしの耳がおかしいのかなー今兄弟って言った？寝言は寝て言えよ税金泥棒」

「な、なんだと！」

またも男と勘違いされた滯奈はお巡りさん相手に税金泥棒なんて最低な言葉を発していた。

「あたしは女だよ！だから姉弟な！」

「……まあいい、それより校門に不審者がいると通報を受けたんだけど君で間違いないね」

「いやいや！お巡りさん、あなたの目は節穴か？あたしだよあたし！」
「??？」

滯奈は自分を指差し猛烈にアピールをする。が

「誰だね」

「あーもう！これでどう！」

「?!」

サングラスを取りお巡りさんに自分の素顔を見せる。

「（これであたしが神奈ってわかるっしょ）」

ふふんと胸のない胸を張りドヤ顔をする滯奈、しかし

「本当に誰なんだい？」

「ええー！あたしのこと知らないの!?!神奈だよ！ほら義妹の！」

「……知らないなあ」

「う、嘘だ」

くつ、まさか自分の名前を知らない人物がこの世にいたとは……！自惚れていた滯奈は完全にピンチ状態

なぜなら相手は自分の存在を知らない、上に不審者を見るような目を向けられている。

わかる。これは次に職質されるやつだ。

こうなったらこの超売れっ子のあたしに恥をかかせたことを後悔させてやる！と意気込み滯奈はファイティングポーズを取り出した。

「まあいい、君お仕事は何を……」

「小説家と漫画家とイラストレーター！神奈で検索検索うー！」

まさか自分が売名をすることになるとは、またしても屈辱だ。

「失礼、今神奈とおっしゃいましたか？」

「え？あ、うん」

「これはこれは、いつも母がお世話になっております」

「??？」

いきなり話しかけられ困惑する滯奈、しかし話しかけてきた少女に

少し見覚えがあるような？

なんかこの子ににてる幼女をどこかで見たような…。

「あっ！ 茉日さんの娘さん？」

「はい、母からはよく神奈先生の話はお聞きしてます」

「え？ そーなんだ、で？ なんて？」

「真面目に働かない人と」

「いやあつてるけど娘に言うかな!?」

なのにこの子はあたしに話しかけたのかよ!?

と心の中で一人で突っ込む漣奈であった。

「ちよつと君、まだ話は」

「はいこれ名刺、多分高値で売れるかもだから残しときな」

名刺を雑に渡しその後も漣奈紗夜と会話をする。

「こつちも君達のこととは聞いてるよーなんでも茉日さん自慢の双子の娘ってね」

「ッ！ は、母はよくそのような話を？」

「うん、うちに来た時は大半自慢話ばかりだねー」

「……………」

自慢されているなんて知りたくもなかった情報を知った紗夜は恥ずかしくなり顔が赤くなる。

「ひ、氷川さんーすみません、遅れました」

「白金さん、忘れ物は見つかりました？」

「はい、職員室に届いてたそう…で？」

漣子は握っていた手提げカバンを地面に落とし目の前にいる人物を見て驚く

「……………りんりんちゃんお久ーこないだぶりだねー」

「か、神奈先生」

「？ お2人は知り合いで？」

「うん、弟がお世話になってるらしくてねー」

「……………」

遠くから見ていたがまさか紗夜と話していた女性らしき人物が神奈だったとは…驚きが隠せない漣子であった。

「弟、というのはレイさんのことでしょうか？」

「おつ、知ってるの？」

「はい、母がよく褒めてますので」

「あたしのことはデイスってレイは褒めますか、はいはい…今度マガジンの締切破ろっかにやー休載不可避」

「ちよ、ちよっと待っててください！氷川さんは神奈先生とお知り合いで…？」

「？はい、母が弦巻で働いてますので」

「そうなんだーマガジンの編集長やっててさ、あたしとこの子の母親、茉日さんって人と仲がいいんだよ」

「へ、へえー…」

「またも間近に憧れの神奈先生と距離が浸しい人物がいたとは、それも全く2次元に興味なんてなさそうな紗夜が」

「…あ、私急用を思い出しました、か、帰りますね」

「え？ダメだよ」

「ッ！」

カバンを拾い早歩きでその場から離れようとする燐子を漑奈は手を取り無理矢理にとめた。

「今日はりんりんちゃんと話したいことがあつてきたんだよ」

「……………話すことなんてありません」

「あたしがあるの、てなわけで今からお茶しない？あたしが奢ってあげるよ」

「悪いけどえつと……」

「紗夜です」

「ならさよりんは席外してくれない？この子と2人で話したいことがあるからさ」

「私是一向に構いませんが……白金さんが嫌がってるように見えるのですが」

「大丈夫大丈夫、りんりんちゃんは嫌がってるふりしてるだけだから」
「ッ！」

紗夜は一瞬疑ったように漑奈の顔を見るも燐子も下を向いて

逃げ出すような素振りもなかったため大丈夫だろうと判断しその場から離れ、江戸川楽器店へと向かった。

「さーてと、りんりんちゃんはあたしが来た理由わかるよね？」

「……わかりま、せん」

「嘘はよくないなー本当は知ってるんでしょ？」

「レイ君のことですよ、ね」

「あつたりーさすがりんりんちゃん、んでさ、ここで話すのもあれだしさ？さつきも言ったけどお茶しよっか」

「……………」

「……」

「……」

「あーもうーうるさいな！これ以上あたしに話しかけるなら弦巻通してもらえるかな!?あたし売れっ子で忙しいの！あと1時間しか猶予がないから！貴重な時間奪うなっつての！」

「なっつー！」

お巡りさんは一瞬気圧され、そのまま燐子と漣奈は車に乗りその場から離れたのであった…。

「……はあ、あの姉弟は要注意人物と」

何故か被害をくらうレイなのであった。



漣奈は車を運転するためもちろん運転席に座ってる。燐子はその隣の助手席に座りずつと外を眺めていた。

「あたしの知り合いの喫茶店があつてさーそこが空いてればいいんだけど」

「……」

「あつれー閉まつてる感じ？」

いつもならドアにかけてある看板にopenと書かれているが今はclosedとなっていた。

「様子見てくるから待ってて！」

車を近くに止めて様子を見に行く漣奈、窓からちらりと店内を覗いてみると少女2人が何やら楽しげにお茶会をしていた。

「あの子は確か…」

なるほど、丸山彩と誰だ？まあいつか、あの子がいるってことは貸切でもしたのだろうか？

「(アイドルって結構稼げるのかあ)」

なんて感心して戻るが一体どうやってたら貸切状態だと判断したのだろうか？

無駄に感の鋭い湊奈には今回ばかりは感謝をしなくてはならない。なぜなら後にこの場所にレイがやってきてお茶会という名の相談会をするからである。

もし入っていたら鉢合わせして修羅場になっていただろう。

「ごつめーん、なんか貸切状態だったよ、別の喫茶店行こうか」

燐子は特に返事をする事はなかったが湊奈はそのまま車を走らせ次はチエーン店の喫茶店へと向かった。

湊奈は一応神奈であることをバレないようにサングラス、は先程なんか言われたしと次はマスクをして店へと入っていった。

そのまま店員に案内されるがまさに席に座りアイスコーヒーを2人分頼んだ。

「さて、話をしようかりんりんちゃん」

「……………」

「りんりんちゃんの気持ちあたしわかるよ」

「……………わかるって、神奈先生に何がわかるんですか…」

「私はサークルのみんなからハブられてたんですよ？みんなレイ君が神奈先生の弟だって知ってて…」

「りんりんちゃんもレイがあたしの弟である以前に秘密にされてたのが辛かったんでしょ？」

「……………はい」

幼馴染達の有咲、蘭、モカ、ひまりはわかる。でも凧はわからない。凧に話すのなら自分に話してもいいのではないか？と思う燐子なのだ。

「朝日奈凧ちゃんは義妹のオーディション受けるからさ、そのために話したんだと思うよ」

「それは知ってました…でも、話してくれなくて…!」

燐子は凜のオーディション合格に向けて練習に付き合っていた。台本も借りて内容を見た時、これは義妹の話では?と思った。

晴太と冬香の2人が言い合うシーン、燐子もこのシーンにはかなりの刺激を受け義妹の中でどの話が好きか?と聞かれたら上位の方にくい込むレベルで好んでいるシーンだ。

「あの子冬香受けるらしいねー様子見てみたけどあの子にあっつんじゃない?」

「つて今は関係ないか、それはほら、気にかけていたとかさ、色々あるじゃん」

「……………そんな気遣い必要ないですよ、悲しくなるだけですよ…」

今にも泣き出しそうな燐子、そんな話をするために漣奈はここに来たわけではない。とはわかっててもやはりこういうのは自分の柄ではないからなんて話せばいいのかわからない。

「(でもあたしがやらないといけないからなあ)」

少なからず自分にも非があることを認めていた。ならば漣奈はと自分にできることをしてレイと燐子を早く仲直りさせようと今回りんりにリスケしてまで時間を作り会いに来たのだ。

「ねえりんりんちゃん、レイは臆病な子なの」

「肝心な時に言い出せないへナチヨコで、腰抜けで、チキン野郎なの……………」

「だからこそ一度レイの話を聞いてあげて欲しいの」

「あいつチキってりんりんちゃんに話してない理由が必ずあると思うの」

「そんなの私を仲間外れに…」

「本当にそう思う?」

「ッ!」

そう思うか、聞かれれば確かに思わない。

でも現に仲間外れにされた。思ってしまうのも仕方がないんだ。

「りんりんちゃん、レイと一緒に創作活動したんだよね?楽しいって思わなかったの?」

「……思いました」

「全力で取り組んでたでしょ？」

「……………はい！」

「……それはレイも同じだよ」

「……………」

その後漣奈はレイのことを語り出した。

ある日突然サークル活動をしないかと友人に誘われたと、しかもその人の絵が超上手いのなんの

その後SSを書くことになつと言い出し、小説の書き方とかちよくちよく漣奈に聞くようになった。

一時期家をはなれていたが帰ってみれば、レイは家に帰るとすぐ部屋にこもり執筆活動、

正直お金なんてたいして入らないのによくもまあ真面目にやるものだと感心していた…。

「でもそれぐらいレイは本気だった」

「こんな本気で活動してるのに…りんりんちゃんにはぶかれたと思うの？」

「君はレイと一緒に何をしてたの？」

何をしてた…？そんなのは決まってる。

燐子はレイと創作活動をしていた。

例えばレイは燐子が描いてきた絵を一度も下手、なんてことは言つたことはない。寧ろ上手だと褒めた上で指摘をしてくれた。

褒められることが嬉しかった燐子は自分でどんどん絵の練習をし続けて…。

「(ああ、そうだ…あの人はそんなことする人じゃないんだ)」

レイは自分よりも上手い有咲と蘭に気を移したわけじゃない。

あの時燐子にしてくれた時のように、相手を褒めて、伸ばして、最高の作品を作ろうとしていた。

それを遠くから見ている燐子はレイの本気に気づくことができなかつた…。

「(レイ君は私を仲間外れになんかしない…！)」

「でもりんりんちゃんは違う、才能とかじゃなくてさ、レイがいるじゃん」

「!?」

「一緒にひとつの目標目指して活動できる。今の君達のサークルは最高なんじゃないの?」

澪奈の言っていることは間違いではない。

しかし、あのサークルが最高なのかどうかは今のレイに聞き最高だ、なんて返事をするはどうかはわかりかねるが…

「あたしってさ普段レイに迷惑かけてばかりのダメなお姉ちゃんだけどね、こーゆう時だけはカッコつけたいんだ」

「なんてったってあたしはレイのお姉ちゃんだからさ、レイの知らないところではお姉ちゃん面したいじゃん?」

「……そうゆうものなんですかね」

「そうそう、お姉ちゃんってのは見えないところで頑張るものなのさ! まああたしだけかもしれないけど!」

あはは! と大笑いしたあとにアイスコーヒを一気に飲み干す。そしてコップを優しくテーブルに置き燐子と改めて話をする。

「そんなあたしからのお願いです」

「どうかレイの話を聞いてあげてください…これは神奈からのお願いじゃない、神崎零の姉、神崎澪奈からのお願いです」

「……………」

あの憧れの存在神奈先生が自分に頭を下げている…?

燐子は一瞬困惑してしまう。それもそうだろう、なんせ目の前にいる人は先程の話からして急に他人に頭を下げるような人物ではない。そんな人が自分の弟の話を聞いて欲しいがためだけに、プライドも何もかも捨てて年下に頭を下げているのだ。

それに神奈は言った。これは神奈からのお願いではなく、神崎澪奈からのお願いだと

地位とかの話ではなく、1人の、レイの姉としての純粋なお願ひならば答えは決まっている。

「……わかりました、レイ君と一度話をします」

「本当!?!」

「ツ!」

滯奈下げた頭を上げ一瞬にして燐子の手を取り本当!?!と聞いていた。

「はい、今からレイ君と話してきます」

「いやあーよかったですもしこれでダメならお金払うところだった!」

「神奈先生は私のことをなんだと思ってるんですかね!」

流石にお金を出されていたら今のようには話す気にすんなれなかったと思う燐子だった。

「どうする?・レイ最近携帯買ったから連絡取れるよ?」

「……いえ、自分で何とかします、神奈先生はまだお仕事があるんですよね?」

「あつはは、そうそう、実は無断で抜けてきてさあ……これは後で千紗さんに怒られちゃうな」

珍しく怯えるようにそう答える滯奈をみて燐子はとても申し訳なさそうな顔をしてしまう。

大物売れっ子作家の貴重な時間を奪ってしまったのだ、普通的心情の人ならそう思うのは当然だ。

「すみません、神奈先生……」

「いやいいって……あ、だったらさ」

「??」

「絶対、レイと仲直りすること!・これでチャラね!」

「………わかりました!」

「よっし!・そうと決まれば会計だ!・あたし今からすぐに本社に戻らないといけないんだけど……途中で送ろっか?」

「流石にそこまでしてもらったら……あとは自分でなんとかします」

「わかった、つてーもうこんな時間!・ごめんね?・お金おいていくから!・釣りはいらさないよ!」バン!

滯奈は1万円札を財布から取り出し、バン!と大きな音を立てながら置き席から外れる。

出る際に会計はあの子に任せてるから!・なんて店員さんに言いな

がら店から出ていき、轟音を鳴らしながら駐車場を後にしたのであった。

「さて、私も行きますか」

残ってるコーヒを一気に飲み干す、が

「いっ！」

キンキンに冷えていたコーヒを一気に飲み干し、アイスでもないのに何故かアイスクリーム頭痛を発症させていた燐子なのであった。

◆◆

「姉さんまだー？」

「まだ、ちよつと待ってよお」

「姉さんブラ着けるの遅いよーフロントホックなんだから簡単でしよー」

「そ、そうなんだけど、あれえ？」

朝日奈凜は妹の楓凜とショツピングモール内にある下着屋にて試着を行っていた。

というのも楓凜がこれは絶対姉さんに似合う！なんて言いながら選びそれを渋々試着している凜である。

「(楓凜が選ぶ下着は全部卑猥すぎる…！)」

そのせいでモカやひまりからエッチだーなんて言われてしまう。もつとこう普通の下着を選んでくれないのだろうか？

そういえば昔頼んだような…？

その結果

「ええー姉さんおっぱい大きいんだから仕方がないよ、うん、勝手にエロくなってしまうんだよー！」

「(うう、ありさのマッサージ続けられない方がよかったよ…)」

有咲がレイとの約束を果たすために考案したバストアップマッサージ法、なんで凜に教えたのかは知らないが教えられたことを後悔しているようだ。

「やっぱり気の所為じゃない、前より大きくなった…？」

それとも楓凜がワンサイズ小さいヤツをわざと選んだ？ホックがなかなか閉まらない…！

「姉さんもういい?」

「へ!?いい、いいよ」

試着室のカーテンを少し開けそこから凜の様子を覗き込む楓凛、姉妹じゃなかったらただの変態女だ。

「うん!やっぱり姉さん似合ってるよ!すみません!この下着ください!あ、あとタグ切ってください、このまま帰るので!」

「かしこまりました」

「ちよ、ちよつと!?!勝手に決めないでよおー!!」

凜の意見も聞かず楓凛が勝手に決めたことでキツキツの下着のまま店内を後にする凜、その後は特に用事もなかったためシヨツピングモールを後にする……。

「……………」

「姉さんどうしたのーなんか嫌なことあった?」

「いやというか…ねえ楓凛、私そろそろ下着ぐらい自分で選ぶわ」

「……前選んでサイズを大きく間違えたのはどこのどなたかな?」

「ううー!」

以前1人で下着を買った凜は自分の体の部位にもかかわらずサイズを見誤ったのだ。

「(私なんてどうせ貧乳よ貧乳、このサイズでいいわ)」

なんてネガティブに捉え、試着もせずに帰って着けてみればまあ着けない、金を無駄にしてしまったのだ。

「で、でもあの後楓凛が貰ったんでしょ?」

「うん、でもね…サイズ、合わなかったんだよねー」

「……………」

覚えているだろうか?以前凜がレイに言った言葉を

サークル内で楓凛の話になった時だ。

「あなたは興味持たないわよ」

その意味は、なんと楓凛の胸が小さいから興味を持たないわよと言っていたのだ。

レイはクソが着くほどの大の巨乳が大好きなおっぱい星人だ。だから貧乳である楓凛には興味を持たないわよと告げたのだ。

「同じ父親なのになんでこうも差が…！」

「でも大きくても意味なんてないよ？肩こるだけだし…」

「いいじゃんいいじゃんー！楓凛も男子からイラやしい目で見られたいのー！」

「か、かかか楓凛!?!何言ってるの!?!」

妹が問題発言をしたものだからかなり焦ってしまう。まさか妹がモカやひまりのように変態不審者だったとは…!

「にしても！なんでこんなに大きい姉さーん!!」

「きゃっ！」

楓凛は血迷ったのか路上でいきなり凛の胸を持ち上げ触りだした。いきなり触ってきたものだから凛は顔を真っ赤にして手をわなわなさせるも暴走した楓凛は止まらなかった。

そんな時、事故は起きた。

ブツン！

「あっ」

「え？」

なんだろうか、先程まであまり胸の重みも感じなかったが…今さっき変な音が聞こえたと思っただらどつと胸が重くなった、気がする。

「え、えつとー姉さん？」

「ツ〜！もう！楓凛のバカアアア!!」

楓凛が乱暴に凛の胸を触ったためキツキツだった凛のブラのホックが壊れてしまった。

「あつれーサイズ誤った？つて！ま、まさかまた姉さん大きくなったの…！」

なんてことを考えながらぽこぽこ凛に叩かれる楓凛であった。



自分のクレジットカードで会計を済ませた燐子は滯奈から受け取った1万円札を財布にしまう。

今思えば久しぶりに札を触ったなあーと思いつながらててく歩く「後でレイ君に渡しときましよう」

仲直りしたら渡す、そう決め燐子はまたてくてくと歩き出した。

「ツ〜！もう！楓凛のバカアア！！」

「!?」

この声は凜ちゃんさん！と瞬時に判断した凜はてくてく歩きから小走りになり声が聞こえた方に向かった。

「バカバカバカバカ！楓凛のバカア！」

「いやー姉さん大きくなってると言つてよー、となると姉さんは今え」

「言わないで！」

女子のスリーサイズは公表してはいけないものなのだ。男子諸君も気安く聞いてはいけないんだぞ

「凜ちゃんさん！」

「うぐ、へ？り、りんこ…？」

「どうしたんですか！」

「ううー楓凛が！楓凛がー！」

「酷いなあーサイズを教えてくださいなかつた姉さんが悪いんだよ？」

「だ、だって一度つけたのに買わないなんて…私が一度着けているのよ？誰かが着ければ朝日奈菌が感染してその後世界が滅亡して…」

「どんなこと考えてるんですか!？」

そんなハリウッド映画的な展開は現実で起こるはずがない、そもそも朝日奈菌なんてあるわけがない。

相変わらずのネガティブ思考の持ち主のようだ、度を超えている。

「えつとー楓凛ちゃんさんは凜ちゃんさんの妹で？合ってますか？」

「はい！朝日奈楓凛！姉さんの正真正銘の血の繋がった妹です！」

「は、はい」

やけに血が繋がったを誇張しながら自己紹介をする楓凛、燐子は楓凛の胸を見て色々苦労しているんだなと感心してしまった。

同じ姉妹で一歳差なのにこうも変わるとは…。

「姉さん、とりあえず近くのコンビニのトイレを借りてブラを着け変えようよ」

「それもそうね…流石に胸だけでも立派に育てたい」

「……………」

んーと燐子は複雑そうな顔をしながら眺めていた。

「はっ！ふ、普通に話してた…その、りんこ、私」

「ふふ、もういいんですよ」

「ええ？そ、それはあれなの？もう私と友達辞める的なやつなの…？」
「違います違いますよ！もう気にしてないって意味ですよ！」

言葉が足りなかったら凜を色々と不安にさせてしまう…。次からちゃんと説明してから発言しなければ

「私…勘違いしてました、レイ君は、いえみんなは私を仲間外れにしようとしてなかったんですね」

「りんこ、でもごめんさい、私りんこにれいが神奈先生の弟だって黙ってた…」

「でもそれはレイ君から口止めされてたんですよ？」

「え、んーうう、うん」

レイのせいにしてるようで申し訳ない気持ち胸をいっぱいにしてしまう凜

確かにレイには言うなど口止めされていたが…全てをれいのせいにしてるせいで言葉にできないが嫌な気持ちになってしまう。

「だからその理由を今から聞いてきます」

「ッ！れ、れいに会いに行くの!?!」

「はい、だって会わないと話せませんもん」

「！そうだよね、うん、そうだよね！」

「…だから伝言をお願いしてもいいですか？」

「伝言？うん！りんこの頼みなら私なんでも聞く！」

「ありがとうございます！」

いくら会う覚悟を決めたといえ直接家に行って話をするのもあれだし…そもそも家も知らないし…ならお互いが知ってる場所にしよう。

それもレイなら絶対わかってくれる場所、かといって凜にあそこで待っていると具体的に言っても伝わるかどうか…ならば

「凜ちゃんさん、レイ君にあの場所で待っていると伝えてくれませんか？」

「あの場所？」

「はい、レイ君ならきつとわかってくれますから」

「……わかった！私伝える！」

「すみません、なんかパシるような形になって……」

「ううん、私、りんこのために何かしたいと思ってから……」

凜は思っていた。

もしこのまま燐子とレイが仲直りできなかつたら……と

そのそいでサークルが崩壊してしまったりしないか、ネガティブな彼女だからこそそう考え込んでしまう。

でも燐子はレイと話すことを決めてくれた。仲直りすることを考えてくれた。

なら自分は自分のできることをするまでだ、燐子の役に立てるのならパシリでもなんでも喜んでしよう。

だから燐子の頼みを聞き入れた凜なのだ。

「凜ちゃんさん……お願いしますね」

燐子は凜に伝言を頼んだ後、目的後であるあの場所にてくくと歩きながら向かうのであった。

途中疲れてタクシーに乗って向かったのは内緒の話である。

「凜！れいに伝えよう」

「あ、終わったー？凜凜ちらーつと話聞いてたけどせんぱい探すんだっけ？」

「うん」

「でも姉さんーせんぱいの連絡先とか、家とか知ってるの？」

「愚問ね凜！知らないわ！」ドヤ

「……姉さんのドヤるタイミングよくわからないなー」

「でも姉さん！その前にブラ外そうね♪」

「壊れてるの忘れてた……！」

こうして凜は近くのコンビニで下着を着け変えようと思ったが、変えの下着は凜が持っていることをすっかり忘れていてその場で着替えることができなかった。

「姉さん時間ないよ！早くせんぱいを探さないとー！」

「待って！私今ブラつけてないから！」

「……さあ行こう！せんぱいを探そう！」

「楓凛！この状況楽しんでない!？」

「青春は待ってくれないよ姉さん！おっぱい揺らしながら探そうねー
！」

「ちよつと待ってよおおお!!」

と言いながら走り回りどこにいるかもわからないレイを無事に見つけたし隣子の伝言を伝えた凛達なのであった。

ちなみにレイがノーブラの凛の胸に顔を埋めたのは話すまでもないことなのだ。

誰かから期待されたことありますか？

俺は走ってた。凜達からあの場所で待っていると燐子さんから受けた伝言を頼りに心当たりがある場所に向かっていった。

「……………」

一番最初に着いたのは燐子さんがサークル活動をしないかと俺に勧誘してくれたあの公園

忘れもしない、アサシンだと勝手に決めつけ告白される準備を心の中で整え勢いよく答えたらサークル活動をしないかと来た。

最初はあまり乗るきじゃなかった…でも、いつの間にか活動することが楽しくなつて、本気で取り組んで…。

「思い出に浸ってる場合じゃない」

次はさつきまでいた羽沢珈琲店、ここでは燐子さんとは沢山ラノベの話をした。

義嗣さんにも迷惑をかけた、それぐらい2人で楽しい時間を過ごした場所だ。

「燐子さん！」

「……………」燐子ちゃんならいないわよ」

「くっ！」

ドアを開けた瞬間目に映るのは先程まで一緒にお茶を嗜んでいた白鷺さん、松原さん、丸山さん、の3人だけ

隅っこに義嗣さんがいるだけで燐子さんのり文字もなかった。

「……………」

ここまで来たら残る場所は視聴覚室…にもいなかった。なら…！

俺は少しだけ、ほんの少しだけ休憩して息を整えた後目的の場所にノンストップで向かったのであった。

◆ ◆ ◆

「はあ、はあ、うっ！がはあ…はあ…」

体力なんてないのに目的地まで止まらず走り回ったせいで目の前がクラクラする。軽い酸欠状態、痰が絡まり息がしづらい。

冗談抜きで死んでしまうかもしれないぐらい息がしにくい。

でも、あとはエスカレーターに乗ってあの場所に向かうだけ
「ぜえ、ぜえ……」

ああ、目の前が、白くなる。倒れそう、崩れそうになる。
必死に飛びそうになる意識を保ち、俺はあの場所に向かう。

あの場所とは俺と燐子さんが初めて会ったあの本屋さん、ここに
いなかったら…あとは何処だろうか？

「……………」

義妹アニメ化決定！と大きく書かれた看板が置かれてる義妹シ
リーズが並べられた本棚の前にやってきた。

「ここにもいないのか…」

結論から言うと燐子さんはいなかった…。

義妹の最新刊を手にとってみる。あの時、燐子さんと会った時と同
じ巻、まだ最新巻を発売してないから今のところこれが最新巻

「……………買わないんですか？」

「!？」

後ろから誰が話しかけてきた…。

「……………」

俺は恐る恐る振り返る。だって、話しかけてきた人の声は俺が今日
走って探し回った人の声音と似ているのだから

振り向いて確信する。ああ、この人は俺が探していた人だ、仲直り
したいと思った人、白金燐子がそこにはいた。

「その本とても面白いんですよ…是非読んでください」

「……………そんなこと世界の誰よりも知ってますよ」

「……………だって俺は神奈の弟、神崎零ですから」

皮肉なんかじゃない、今の燐子さんならわかってくれる。そう信じ
て俺は弟であることを告げた。

「はい、知ってます」

「……………」

「でしたら…最新巻はもちろん読みましたよね？」

「……………はは、読んでないと言ったら？」

「そうですね、でしたら家に来ませんか？私布教用がまだ残ってます

ので」

「だったら喜んで向かいますよ」

あの日と同じような流れだ。

もし俺があそこで読んでいる、と答えなかったおかげで燐子さんの家に行けるようだ。

別にここで燐子さんと話してもいい、でも家に行けるのであればそれに越したことはない。

それに家の方が色々と話もしやすいしな、外で俺が神奈の弟であるなんて誰かに聞かれて騒がれても困る。

ここは本屋、神奈のことを知らない人はいないだろうさ、いたらいたらで布教用してやるよ、俺と燐子さんの2人でさ

「では行きましょう」

「……あの、燐子さん」

「?はい」

「の、飲み物だけ買っていても……いいですか?」

「……え、ええ、かまいませんけど……」

普段運動を好まないレイ、そんな人が何十分も休むことなく走りすぎたため、喉を潤すべく飲み物を欲しがるのだった。

◆ ◆ ◆

あの後燐子さんが呼んだタクシーに乗り、燐子さんの家へと向かった。

俺は飲み物を買って一気に飲み干したあげく、タクシーの中では寝息を立てながら爆睡していたようだ。

ようだと言うのも寝ている覚えが全くなかったんだ。気づいたら燐子さんから肩を揺らされ起きたと思っただらもう燐子さんの家の目の前にタクシーは止まっていた。

これは予想だけど……俺、もしかして気絶してたんじゃない?」

それよりもそんな悠長なこと考えてもいいのかと思うだろう。

その通りだ、でも今は白金家の中にいる。それもリビングだ。燐子さんはと言うとお茶を出すなんていいキッチンへと向かっていった。

目の前に人なんていない、ならば先程までのように色々考えてしま

うのは仕方がないことなのだ。

「……！」

ふと周りを見てみると窓付近の小物置き場に1枚の写真を見つけた。

見てみると…これは燐子さん？それとご両親か？よく見ると燐子さんは花咲の制服を着ているぞ？

よくあるあれか、入学式の時に撮る系の写真、うちもある。となる
とこれは中学の写真だろう。

決めては胸だ、今と比べればまだ小さい方だろう。一体燐子さんの
胸はいつから大きくなったんだ？

って！真面目な顔しながら何考えてんだよ俺は!?

と、ふと窓に写った自分の顔を見て驚いた。

「ん？」

あーなるほど、燐子さんは母親似なんだな、顔つきとかかなり似て
いる、燐子さんも大人になったらこのような女性になるのだろうか。

髪型も同じか、個人的だがボブヘアの巨乳は俺のドストライク、
まあ千紗さんの人だと思っただけ。

だからって千紗さんと結婚することなんて絶対じゃないけど

「？」

先程の写真の話に戻るが…なんだろう、家族全員で揃ってる写真は
この1枚しかないぞ？

俺の家は姉貴があーだから結構写真を撮ることは多いけど…燐子
さんの家庭はあまり写真を撮るのを好まないのだろうか。

「その写真…」

「ッ！」

燐子さんがタイミング悪く戻ってきたようだ。

普通に人の家の中をうろついていた、しかも写真を手に取りマジマ
ジと眺めるなんて失礼極まりない…。

「家族全員で撮った写真はそれが最初で最後なんです」

「……………」

「少しだけ父の話をしてもいいですか？」

「はい」

その後燐子さんは語り出した。自分の父親について

父親は近くにある大きな病院の凄腕の医者らしい。何百人と人を救い、救った人からは命の恩人と共に尊敬される人物だと聞いた。

そんな父親はある日突然と変わってしまったようだ。

それは父親の働く同じ病院の医者が交通事故にて他界してからと
のこと

自分の手で友人を救うことができなかつた父親、その罪の重さから病院にこもっては人を助けるべく、日々技術を磨き、知識を蓄えている…と燐子さんから話を聞いた。

「もう二度と誰かを死なせないため…だそうです」

「ですけどそればかりで家族のことなんて放つたらかしなんですよ…？」

「母は父に見兼ねて別居してますし…私も久しぶりに話しかけても相手にされなかつた…」

「……………」

燐子さんの父親の気持ちはわからなくもない。友人が亡くなった、そして救えなかつた…となれば自分の無力差をいやってほど解らされてんだろう。

だから家族なんて構わず日々病院にこもつて、腕を磨いて、知識を増やして、人を1人でも多く救い出そうと努力している。

でも俺の家も両親なんて共働き、ましてはもう何年も帰ってきてない。

といつても俺達姉弟を愛していないわけではない。

定期的に連絡はしてくる（手紙で）、小さい頃はよく遊んでくれた、俺を弦巻に連れて行つては絵本の読み聞かせ会に参加させてくれた。

でも燐子さんは違った。そんな思い出話なようなことを俺は聞いていない、それにあんな話を聞いたんだ。

さぞ父親らしいことはしてないんだろうな…

「あの日、レイ君と言い合いました時も…その、朝から父と話して…あまりの態度の悪さにちよつとリアルが嫌になつて」

「それでたまたみかけるようにあんなことがあって…！私！レイ君にあたってしまつて」

「……本当にすみませんでした」

燐子さんは俺の頭を下げていた。

ただそれを上から見下ろすかのようにその姿を見つめているのは俺だつた…。

「(なんで、違うだろ…?)」

なんで燐子さんが頭を下げるんだ？違う、俺は別に燐子さんから傷つけられたわけじゃない。

傷つけたの俺だ、俺が燐子さんを仲間外れにしてしまつたから…燐子さんの心を傷つけてしまつたんだ…！

「違いますよ燐子さん、謝るのはあなたじゃない、俺です」

「俺が燐子さんを仲間外れにしなければ…こんなことにはならなかつたんだ」

「……でも私はレイ君から避けてたり」

「だからそれは俺がちゃんとしとけば起きなかつたことで…燐子さんは悪くないんだ」

「……でしたら話を聞かせてくれませんか？」

「ッ！」

「凜ちゃんさんから聞きました。私に口止めしてたんですよね…？」

「そ、それは」

ああ、ダメだ、ビビつて後ずさつてしまう。

心に決めただろ！今日燐子さんに話すんだつて！なのに、なんでここにきてまでチキるんだよ俺は…！

俺は、本当にヘナチヨコ腰抜けチキン野郎なのか…？

「(いいや違う！話せ！話さないと変わらない！思いは伝わらない！)」

話せ！口の筋肉を動かせ！掠れててもいいから声を出せ！話すんだよ今ここで！

「(じゃないと一生このままだぞ！)」

自分にそう言い聞かせレイは覚悟を決めたように語り出した。

「俺が燐子さんに神奈の弟であることを黙ってた理由……」

「……はい」

それは

「姉貴と比べられたくなかった……！」

「……」

「燐子さんだけには比べられたくなかった……！」

他人から比べれるのは別になんとも思わなかったんだ。

弦巻に行けば日常茶飯事のこと、神奈の弟だからなーなんてことはあっちではいい意味で言われていた。

俺はそこそこ優秀だったから弦巻の人達は簡単に俺を受け入れ、イベント事にバイトとして一緒に働かせてくれた。

でも、それでも頭の隅では比べられてるんじゃないかって、期待されてるんじゃないかって少し不安だった。

中学の時なんて担任がクラスメイト達にあいつの姉は作家さんだからーなんてこと言ったせいで馬鹿にされた。

これに関しても別になんとも思わなかったんだよ
だって俺と姉貴は全くの別人、姉貴ができるやつだから、すごいやつだから弟も完璧超人、なんてことはない。

そんなこと分かっている。だから俺は自分に言い聞かせることで比べれてもなんとも思わなかった。

でも……そんなある日燐子さんが現れた。

彼女は大の神奈のファンだった。最初は姉貴の熱狂なファンが身近にいたことで嬉しい気持ちでいっぱいだったよ

燐子さんからサークル活動をしようかと誘われ、活動を進めていく、その際はちろん神奈の弟であることは黙ってた。

初めは燐子さんが簡単に憧れの人に会えてしまえば意味がないと

思い黙っていた。

でもそれだけじゃなかったんだ。

「燐子さんは姉貴の凄さを知っている」

「そんな人とサークル活動なんてしたら…比べられるのは当然、変な期待もされてしまう、だから黙ってた」

他の人から比べられるなんて本当、心底どうでもいい、でも彼女からは比べられたくない。

それは俺の無力差を知るからだ。

姉貴は誰もが認める神絵師、そしてラノベ作家、俺は？俺には何ができる？

姉貴と比べて何ができる俺は、そりゃ料理や家事なんてできて当然のことは姉貴より長けているだろう。

でも、サークル活動にそんな力不要だ。求められるのは創作力だ。俺には姉貴と比べた時それが全くない。

もし燐子さんは俺が神奈の弟だと知った時俺に何を期待する？俺も姉貴みたいに絵が上手くて、話を作るにしても読者全員の心をつかむ才能を持った作家だと期待されたのでは？

そんな期待されたくない、俺が持つてもない才能を期待されるのは嫌だ…！

「だから俺は黙ってた！俺は姉貴みたいに才能なんてない！燐子さんに知られたら無駄な期待をさせてしまう…！」

これは完全に俺のわがままだ、俺が知られたくない一心で隠してた、黙ってた。

もう正体がバレたんだ、今までみたいになちよつと作家の真似事をしていた俺から神奈の弟であるとジョブチェンジしてしまった。

今後は変に期待されながら俺は執筆活動をしなさいといけないんだろいな

「…：…そんなことありませんよ」

「！は、はあ？な、何言ってるんですか…！誰もがそう思うだろ！」

「そうかもしれませんが、でも私はそう思いませんよ」

「ッ！」

この人は何を言ってるんだ？

俺は神奈の弟だぞ？弦巻の人達だって表上いい顔してて裏では弟だから、って期待してるに違いない！

でもそれはどうでもいいんだよ、あの人達には神奈がいる！作者として俺は求められることはない！

けど燐子さんは同じサークルで活動する仲間だろ？なら必然的に期待するのは当然だろ！

のに…そんなことないだと？

「確かにレイ君が神奈先生の弟であることを知った時は驚きました」

「みんなに話してて私だけ仲間外れにされたのはとても悲しかったです」

「でもレイ君、私が君を選んだ理由は神奈先生の弟だからって訳じゃないんですよ…？」

「!?」

「だって私がレイ君を誘った時…君が神奈先生の弟なんて知らなかったんですから」

そう、だ…その通りだ。勧誘された時燐子さんは俺が神奈の弟であることなんて知る由もなかったはずだ。

そんな中俺を勧誘してくれた…。でも

「でも！その後知ったなら期待するだろ！」

「それはなんでですか？」

「なんで？なんでってそれは燐子さんが神奈の凄さを知っている！」

「それも大ファンなんだぞ？神奈の良さを理解している！そんな人とサークル活動していくのなら…期待されるのは必然だ！」

「期待なんてしません」

「ッ！だからなんで！」

悪いが俺だったら期待する。同じサークルにあの神奈の弟がいるんだぞ？

主戦力としてそいつメインで活動して読者が求めら作品を作るはずだろ

「だってレイ君は今のままで十分凄いですから」

「俺が凄い…?」

燐子さんはソファから立ち上がり俺の前までやってきた。そして優しく俺の手を包み込み掴み語り出した。

「私実は市ヶ谷さんと美竹さんに嫉妬してました」

「嫉妬?」

「はい、だってレイ君最近はその2人としか真面目に活動してませんでしたもん」

燐子さんは自分に才能がないから、ある程度フォロワーのいる蘭やありりの方に俺の気が移り見捨てられたのではないかと思つていた…らしい。

「それはちが」

「わかつてます!」

「……………」

否定しようと思つた時食い気味に燐子さんが口を開いた。

「でもそれは最初の頃の話です」

「??」

最初の頃?

「今は違います、レイ君は私と活動してた時と同じように市ヶ谷さんと美竹さんに接していただけだったんです」

「遠くで見てた私はさっきのようなことを考えてて…」

「……………」

俺だけじゃなかった。燐子さんだって色々なか考えがあつて頭の中がぐちゃぐちゃになつていたんだ。

ありりの時と言ひ俺はいつも自分のことばっかりじゃないか…。

「レイ君は本気で活動してる、それは今もです」

「今も本気で活動しているレイ君に何を期待すればいいんですか?私はまだ十分満足です。私達と一緒に活動してくれるだけでいいんです」

「そんなに自分で自分を期待しないでください」

「ッ!」

燐子さんのその言葉で俺の心にあつた黒い影は何処かへ綺麗に吹

き飛んでいく感覚があった。

ああ、違う。燐子さんに期待されるのつてのを俺が勝手に決めつけていんだ。

それは俺が神奈の弟であると自覚して、俺自身が自分に期待をしていたんだ。

俺が期待してただけで燐子さんは特に気にしていなかった。

全部、俺が変に気にしすぎていたから……

「はは、なんだよそれ……馬鹿みたいじゃんか」

顔を手で押さえ、泣きそうになりながらも必死に堪えて震える声で俺はそう言った。

「……燐子さん」

「はい」

「俺勝手に勘違いしてましたよ」

「……ふふ、レイ君は少し考えすぎなのでは？……って私が言えたことではないですけど」

「いや今回の件は完全に俺が悪いし、んー」

いつものように頬を掻き目を逸らしながら言うも次第にかいていた指は止まり、燐子を真っ直ぐに見つめ直した。

「……俺は俺にしかできないことを見つけたい……」

姉貴ができないようなことを俺はしたい。そのためにこのサークルがあるのかもしれない。

アサシンの言ってた通りだ、ここなら俺はやっていけると確信したよ、活動を通しながら俺にしかできないことを見つけよう。

「だったら、それを見つけた時は私達レイ君に期待してもいいですよね？」

「それはまあ、全然構いませんけど」

それに俺は改めて俺だと知れた、神奈の弟だからなんて変な期待せず俺は俺のやれることをやってやる！

そして、俺はいつか姉貴を絶対に越えてやる！

「俺は姉貴をいつか越えたい、そのためにもみんなと夏コミを成功させたい」

アサシンと約束した、俺は小説家以外で姉貴を越えようと、俺の存在を世間に知らせるためには初めに夏コミを成功させないといけない。

「燐子さん、俺達で最高の同人誌を作りましょう！」

「はい♪」

握られた手を俺からに握手をするかのように握り返し俺は燐子さんにそう伝えた。

「ところで話が大きく変わるんですけどーレイ君って厨二病を患ってたんですか？」

「……………はっ!？」

いきなりの問いかけに驚き咄嗟に燐子さんの手を離してしまう。

何故このタイミング、てか誰から聞いたんだ…?まさか香澄がばらしたとかないよな?

「実は今日神奈先生からお聞きして」

「なんで姉貴とお話を!？」

「レイ君との件で話をして欲しいと…」

「あーはいはい、姉貴が裏で色々してくれたんですね!そうかそうか!うん、実に姉らしいな!でもなんで厨二病の話をした!？」

「落ち着いてくださいレイ君!」

「お、落ち着けるか!黒歴史が!俺の黒歴史があああああ!?!?」

頭を抱え込み叫び出すレイ、顔を抑えたと思えば次に燐子の手を握り、最後は両手で自分の頭を抱え込んでいた。

「ほらーでも私達にはあこちゃんがいますし慣れてるといっつか…」

「……………それもそっか」

確かにあこのやつ厨二病だし知られても別に…いや、てかもうよくね?

厨二病なんて俺にとっては黒歴史、その黒歴史を知ってるのは香澄を含むごくわずか、でもその中にアサシンがいるんだ。

「(今のサークルにアサシンはいるかもしれない)」

もし仮にだ、俺が後日サークルメンバー全員に実は厨二病でしたーなんて公表して出方を探りアサシンを見つけてるって方法もあるので…?は…?は…?

でもそれはリスクが高すぎる、まずモカとひまりにバレたらめんどくさい、何を言われるかわからん

ただでさえサークルの名前を決める時になんか言ったら厨二病乙ーなんてモカに煽られたし…？

さて、モカはなんであの時厨二病なんて言ったんだ？それは俺の昔を知ってたからではないのか？

それともただ単に俺が厨二病っぽい発言をしたから煽ってきただけ？

燐子さんを見る感じ俺が厨二病であることは知らなかったみたいだし：嘘をついてなければの話だが

なんせアサシンは大の大嘘つき屋さん、燐子さんは俺に嘘をついているかもしれない…！

「(腹を括るしかないのか…)」

「わかりました、詳しい話は明日します、もうこの際だからメンバー全員に話しますよ」

俺の黒歴史をさらけ出してアサシンを見つけ出す…とは言ってもアサシンのことだから顔には出さないんだろうな…

でも俺は今回のことで学んだら？誰かを仲間はずれにしてはいけないって

厨二病を患っていたことを燐子さんと香澄は知ってる、その他のメンバーが今回のように仲間外れにした！とは言わないメンツかもしれないけどさ

もう誰かを仲間外れになんてしない、だからもう…全て話そう。

「レイ君凄く何かを考えている様子だったんですけど…？もしかして聞かない方がよかったですか？」

「いや、そのうちどーせバレるし、もういいです、これが厨二病を患ってた男の末路ですよ」

燐子さんを通してあこに伝わってくれ、姉はあんなクソ変態DMだけど妹であるあこは強くたくましく生きて欲しいと心の底から願うよ

姉はもうダメだろうけど

「あ、レイ君、よければ少しゲームをしませんか？スマッシュスターズ！」

「あーあの女の子のキャラだけで戦うやつですね、スマホ禁止ならやります」

こうして俺は無事に燐子さんと仲直りをする事ができた。ゲームを通してわかったけど燐子さんはゲームは上手すぎる。

俺のブランクつてもものがあるかもしれないが強すぎだ、俺1回も倒せなかったよ、もうこのゲーム二度としないレベルで傷ついた。

ちなみにだが燐子さんが途中暑くなつたとか言い出してポニーテールへと髪型を変えた時思わずドキリとした。

なんなら髪を整えてる時に夏服だから脇とか見えるしブラも見えたし：目を逸らしたら巨乳が目につ刺さるし：クッションを太もも付近に置かないとまともに居られなかった。

おいおい、仕方がないだろ、変態とか思うんじゃないぞ？

なんやかんやで特に何も起こらず俺は家に帰ることになった。結構遅くまでいたけど本当に燐子の親父さんは帰ってこないんだな

「では燐子さん、また明日」

「はい！明日は皆さんでサークル活動をしましょう！」

「……ですね」

燐子さんはまず明日は全員に謝らないと！と意気込んでいた。俺も明日は全員に黒歴史を話さないといけないな

「あ、すみません燐子さん、ちよつとお願いが」

「??？」

帰り際に燐子さんから彼女の連絡先を貰った。携帯変えたばかりで新しいアカウントに早2人も女子の連絡先今日一日だけで手に入ってしまうとは

連絡先を登録して俺は無料通話ボタンをタップする。コール音が何回かあった後彼女は電話に出た。

ちなみにだけど俺が登録したら真っ先にゼロ君!?と返事がやってきた。だから俺はメッセージより電話の方がいいと判断したんだ。

「香澄、こんばんは」

「う、うん！こんばんは！ゼロ君携帯見つかったの!？」

「いいや、新しく買った」

「そうなの？でも名前がレイだったからゼロ君かなーって思ってたんだー」

「……そういえば交換してなかったな」

中学の時は交換してなかったし、交換するも香澄と絡むようになった時には既に携帯なくしてたもんな

「実はお前に頼みがあつてだな……」

「……なにに！ゼロ君が私に頼みごと!？前みたいに?」

「……そんな記憶はない、って嘘になるけど、まあうん、また頼らせてくれ」

「!うん!」

なんか久しぶりに香澄とまともに話したけどこんな生き生きしてるやつだったけか？

いや香澄はこんなやつか

「実はさみんなに俺の中学時代の話をしたいと思うんだ」

「……………え、なんで?」

「なんでって姉貴が隣子さんに話したらいいんだ」

「そうなんだ」

「そうそう、だからもうこの際みんなに話した方がいいかなって、いや嫌だけどさ?今回みたいにもう誰かを仲間外れになんてしたくないからさ」

もう決めたことだ、全員に話す。そのためにも香澄の力を借りないといけないんだ。

「俺中学の卒アル捨てたからさ、香澄に持ってきて欲しいんだ、あと生徒手帳の写真も1年と2年分は香澄に渡してただろ?」

俺の記憶が正しければ俺の家で遊んでいた時いらないうちようだいーなんて香澄が言い出して渡したような……?

「……………」

「……香澄?」

「へ!?あ、うん……卒アルと生徒手帳の写真ね、わかった!」

「悪いな、やっぱり証拠写真はあった方がいいかなって」

「あれは見た全員が納得する格好だからねーみんなすぐに察してくれるよー」

「だ、だなー！とりあえず頼んだぞ、じゃあな！」

「……うん、また明日、ね」

「？香澄……？」 ツーツーツー

香澄のやつ最後なんだか元気がなかったような……？気のせい、ではないよな？

あー香澄もそういえば今の容姿と中学で容姿が違うからな……香澄も香澄で自分の中学時代の写真を見られるのが嫌なんだろうか。

「（無責任なこと頼んでしまった）」

香澄には明日謝っておこう。それと無理に中学時代の香澄の写真を見せなくてもいいと伝えよう。

最悪生徒手帳の写真さえあればみんなはわかってくれるだろう。我ながらよくあんな姿で写真撮ってたよな、先生に注意されても無視し続けて撮ったからな……

「あああああ！クソ！なんで今になって色々思い出すんだよ！」

何度も言うがこれが厨二病を患ってた男の末路だ。思い出したくもない当時の思い出が蘇る。

今日はもう熟睡できないだろう。つぐみ、悪いがお前は俺の夜更かに付き合ってもらおうぞ（つぐみが勝手に盗聴してるだけ）

嫌なことを考えながら歩くこと数分、我が家が見えてきた。電気はついてる、そして赤い車が止まっていることから姉貴が帰ってきていることを察した。

「ただいま」

「ん、おかえりー」

丁度2階に上がろうとしてた姉貴と遭遇してしまったようだ。

先程隣子さんから話を聞いてたが姉貴が裏で何かしてたらしい。だからちよつと顔を合わせるのが恥ずかしい。

「遅かったねーもしかして仲直りのエッチでもしてた？なになに、パイズリでもしてくれたのかな？」

「は、はあ!?!何言ってるんだよ急に!」

「嘘嘘冗談、あつはは!レイってば本気で反応しててウケる」

「ツ〜!」

このバカ姉貴はと言わんばかりにレイは頭を掻きむしり、一息ついたところで言葉を発した。

「……今回は助かった、飯を作った」

「ふふーん、あたしはレイのお姉ちゃんだからね!」

「姉貴面すんな、ムカつく」

「多分あたしが長女じゃなかったらできなかつたなーうん」

「……………とりあえず最終選別行つとくか?」

でも今回ばかりは姉貴に助けられた。

今日ばかりは大目に見て姉貴の大好物のグラタンを作って、お酒も許してやろう。

「今日はグラタンな、そしてストレイも好きなだけ飲んでいいから」

「まじで!?!レイ様神かよ!」

その夜、神崎家はいつにも増して騒がしい夜になった…とレイは後日語っていたのであった。

黒歴史をさらけ出したことありますか？

次の日俺はいつもより少しだけ遅めに起きた。理由は昨日の夜寝付けなかったからだ。

なんでも色んな黒歴史を思い出したからな…目を閉じながら色々考えてしまったよ

「んー……はあ、おはようつぐみ」

どうせ聞こえてるんだろう。ならもうおはようと挨拶をしてやろうじゃないか!?

伸びをしながら挨拶をした俺はクローゼットから制服を取りだし1階に降りる。

身支度を済ませて朝食の準備、今日は姉貴が朝から仕事があるとか昨日ストレイを飲む前に言ってたような？

降りてくる気配ないし起こすか

2階に戻り姉貴を起こすために部屋に向かうが…まあ寝相が酷い、ズボンなんて履かずにTシャツ1枚と下着だけの姿でヨダレを垂らしながら気持ちよさそうに寝てた。

一瞬起こすことを躊躇するが

「起きろ姉貴！今日も社会に貢献しやがれ！」

「ぬあ！あ、ああ…頭クソ痛い」

「昨日飲みすぎたからだろ」

二日酔いの姉貴を起こして1階に戻る。適当に朝食の準備が完了したあとは食すだけ

ニユース番組の占いを眺めながら食べ終え俺は家を出ようとしてリュックを取り出す。

「あ、姉貴、二日酔いなら車運転すんなよ？」

「わかってる、さつきタクシー呼んだからー、レイも乗ってく〜？」

「いいよ、俺は歩きたい気分だから」

「おっけーいつてきまーす」

だるそうに返事をしながら家を出ていく姉貴、結弦さんは今日1日二日酔いの姉貴を相手にしないといけないのか、大変ですな！

姉貴が家を出たあと俺も家を出る。鍵を閉めていざ出発ってところまで……

「……おはよ」

「ら、蘭か…びっくりさせんなよ」

家を出ると蘭がいた。姉貴とはすれ違わなかったのか？姉貴なら蘭がいたら発狂すると思うんだが…。

「あんたより滯奈さんが先に来るとは思わなかった」

「？会わなかったのか？」

「隠れた」

「なるほどね」

隠れていたのなら姉貴は気づくことができないよな

「てか蘭はなんでいるんだ？」

「一応レイの彼女だし？一緒に登校してあげようかなって」

「なんだよその上から視線は」

「付き合っただけあげてるんだから当たり前でしょ」

「はあ、はいはい嬉しいですよマイハニー」

「ふふ、なにそれ」

蘭のやつ2人の時だけ妙に優しいんだよな…性格使い分けてるのか？

「隣子さんとはどう？ヘナチョコ腰抜けチキン野郎なレイ」

「ツ〜！おっと、いいのかそんなこと言って」

「？なに」

「はっ、俺はもうヘナチョコでも腰抜けでもチキン野郎でもない！なぜなら仲直りしたからな！」

「……………」

蘭のやつは何も発しなかった。さては驚いて声も出せないってやつか？あはは！俺だつてやる時はやる男なんだよ！わかっただか！

「……あっそ、よかったね」

「え？」

「流石にあのままサークルが解散してたら色々困るしね、レイにしては勇気出したんじゃないの？」

「あ、ああ、だろ？」

「うん、頑張ったと思うよ」

な、なんだこれ…本当にいつもの蘭なのか？

チラリと横目で見るがいつもの蘭だ、夏服姿が相まって実は胸がそこそこあるのではないかと囁かれている蘭そのものだ。

何か企んでる…？また俺と柊優の2人でいけないことを想像してるんじゃないのだろうか！

「ところでさ」

「あ、はい」

「誰のおかげで話せたの？」

「……え、いやそれは…」

「どうせレイのことだから誰かに背中でも押されて覚悟決めたー的なやつなんじゃないの？」

「何故知ってる!？」

「ふーん、やつぱりね、おかしいと思った」

「おかしいって俺だつてやる時はやる男だろ！」

「どうだかね、ヘナチョコ腰抜けチキン野郎のレイ」

「グサツ！」

く、クソう…はなから俺が人に頼ってたことがバレてたのかよ！

「で？誰なの」

「……白鷺さん、丸山さん、松原さん」

「ちっ！」

「ら、蘭さん？」

「サークルメンバーに頼らず何も知らない人達に頼るんだね、レイは」
「それは…ごめん」

蘭の言う通りだ…なんで俺はサークルメンバーに頼らず他の何も事情を知らない人達に頼ってしまったんだ？

でもあれは…あの人達なら頼ってもいいかなって思ったから相談して、相談した結果仲直りもできたし…結果オーライなのでは？

「ま、まあ仲直りできたからよかっただろ？な？」

「それとも蘭に頼った方がよかったか…？」

「……………はあっ!？」

「いや頼って欲しそうな言い方だったし」

「誰がいつあたしに頼ってと言ったの!? あ、あたしは別にメンバーの誰でもいいから頼ればよかったのになって話で!」

「レイが彼女のあたし以外に頼ったとかで別に妬いたりなんてしないから!」

「お、おう?」

「だいたいあんたがラノベ主人公見たいにクヨクヨしてたからこつちが心配してあげてたんでしょ!？」

「わ、わかった!俺が悪かったから落ち着いてくれ蘭!周りの人達が……!」

「はっ!」

同じ羽丘に通う生徒達が通り過ぎる度にコチヲをちらつと見てくる。正直恥ずかしいから蘭には早く落ち着いて欲しい。

「ごめんって、次から蘭に相談するから」

「だから別にあたしは…はあ、次はあたしか柊優ね」

「だからなんでそこで柊優が出てくるんだよ!？」

毎度毎度蘭か柊優の2択になるのは一体なんなんだよ!？」

「おー朝からラブラブですな」

「おっはよう!レーイ君!」

「お、おい!ひまり!くつつくな!色々当たってる…!」

「当ててるんだよ」フー

「ひっ!？」

ひまりのやつが後ろから抱きつき耳ともに息を吹きやがった。全身から鳥肌が立ち急いでひまりを引き剥がし距離を置く

「もーレイ君の恥ずかしがり屋さん」ペロリ

「なぜ今舌なめずりをした!理由を言え!」

「れーくんではない想像をしてるからでありまーす」

「マジでやめて!」

ひまりではなくモカが答えたのは謎だがあえてそこは黙っておこう。てかこいつらなんで今日はこんなに元気なんだ?

「聞いたよれーくんー昨日りこさんと仲直りしたんだって〜?」

「そうそう、燐子さんグループで長文の謝罪メッセージを送った後に内容は聞いたよ!」

「いるか?その前置き」

燐子さんがただただ恥ずかしいだけじゃねーか!てかさ

「蘭、お前仲直りしてたの知ってたのかよ」

「……………なんのこと?」

「おいモカ、そのグループに蘭は入ってるんだよな?」

「もちろんーちなみに入ってないのはれーくんだけだよ?」

「いらんことは言わなくていいんだよ」

「……………次はレイが仲間外れかー」

「おいおいなんだなんだ、このサークルではいじめが流行ってるのか!?!」

「蘭の嘘だって!第一私達がレイ君を仲間外れにするわけないじゃん!」

「ひ、ひまり!」

こいつただのビッチかと思ってたけどちゃんと仲間思いのやつだったんだな、少しだけ、ほんの少しだけひまりのことを見直したよ「だってエッチしたいからね!」

「消え失せるクソビッチ」

「それはいくらなんでも酷い!私初体験まだなのに!」

「……………誰かーこのバカを宥めさせてくれー」

「ひまり、その辺にしとこうね」

「ちえー蘭が言うなら従おうかな」

聞いたか、蘭が言うならだつてさ、俺が言ってもはなから聞かないつもりだつたつてことだぜ?

知ってるか?こいつ After glowのリーダーなのにメンバーの蘭の指示に従う人なんだぜ?

「あ!皆さんおはようございます!今日も朝から青春してますね!」

「楓凜ちゃん!おはよう!」

「おはよう、おろ?後ろにいるのはりんちゃん?」

「そうなんですよー姉さん朝が弱いから」

「……………」

こうはいに手を引かれて登場したのは朝日奈凜だ。妹に手を引かれる姉とかなんなんだ？

あとたつてはいるけどあれは完全に寝ぼけているやつだぞ

「美竹先輩もおはようございませす！」

「……………」

「うわーやっぱり声似てるーもうちょっと高い声出しません？そしたら完全一致ですよー！」

「凜は家では声低いけどね」

「姉さんちよつと何言ってるのかわからないなー凜はいつでも可愛いボイスだゾ♪」

「クソウザいわこの声」

「同感」

珍しく蘭と意見があったようだ。でもな蘭、お前も時々こんな甘ったるいウザイ声出すときあるからな？

「りんちゃんおはようー、おはようのチューしてもいいかな？」

「凜ちゃん凜ちゃん凜ちゃん凜ちゃん凜ちゃん！」

「うわーな、なに!?なんでもかどひまりが!?ん、んぎやああああ!!」
目が覚めたと思つたらモカとひまりに囲まれる地獄絵図、生きて帰ってこい凜

それよりも早くここから抜け出したい、蘭とならまだしもモカとひまりやこうはいと一緒に登校するのはめんどくさいだろ

「じゃあ俺はあれだからあれをしないとイケなくてあれがこうであれなんで」

「レイ君！一緒に登校できて楽しいね！」

「あ、はい」

結局俺はサークルメンバー（羽丘）＋こうはいと一緒に登校するのであつた。

◆◆◆

「久々登場！」

「約数話ぶりの登場！」

「まじねーわ！」

「はい、劇の練習始めるよ」

遊、優亜、由明日、の三馬鹿が何処かの誰かにわかるような説明で登場したものの蘭にスルーされていた。

「神崎、美竹さんはお前の前だけあんなのになるのか？」

「あんなのって？」

「ほら、この前昼休みの時あーんってされてただろ」

「はは、あつたなそんなこと」

「まじねーわ」

「お前は相変わらず何言ってるかわからないな」

「羨ましいって言ってるぞ」

「そしてなんで終優はわかるんだよ」

「別に普通のことだ」

普通なわけがない、全人類がまじねーわ検定2級以上を持ってるわけないだろ

ちなみにだがまじねーわ検定2級を持っていても履歴書には書けないらしい。

「今日は一旦軽く通すから、あとレイは女装してきてね？」

「するわけねーだろばーか」

そんなこんなで通しは終了、ある程度台本も覚えた、後は声優さん達のようにセリフ一つ一つに強弱をつけて棒読み感をなくそう。

内容は…まあ白雪姫まんまだよ、少しだけオリジナル要素があるぐらい

「しゅー！夜桜！もっとレイに近寄ってー！」

「これが限界だ」

「……本番はちゃんとするように」

「……………考えておく」

この2人も相変わらず学校内と外では仲が全然違うよなーどっちでも仲は悪い見たいだけだよ

「それじゃあ今日は解散、また今度」

「ぬへー疲れたあ、もうやだこんな劇」

「本当それな、蘭のやつ無茶振りいいやがって…」

「聞こえてるんですけど?」

「げっ、じゃあ俺はあれであれなんで」

「あんた印刷の話は?」

「ちゃんと企業にお願いしたよ、値段は安くしてくれるだよ」

「流石柊優、顔がいいから役に立つね」

「言ってる、じゃあ本当に部活に行くからな!」

聞く感じなんだかんだで蘭のやつは柊優に頼ってるのだろうか?

俺は2人の仲を知ってるからいいけどさ、周りの人達が見たらどう思われるんだろうか?

「レイ、今日はサークル活動するでしょ?」

「そうだな…あと大事な話がある」

「大事な話?」

なんでも俺の黒歴史をさらけ出す話だからな…蘭は絶対俺の昔のことなんて知りもしないだろう。

「凜、レイが大事な話あるんだってさ」

「大事な話?ふん、どうせ変態じみた頼み事でもするのよ」

「だから俺をなんだと」「おっばい星人」あ、はい」

凜から俺は何度おっばい星人と呼ばれればいいんだ?呼ばれる度に心が痛くなるけどこれはもう慣れるしかないのか?

「だいたい私はこないだの件を許していない」

「あれは俺が悪いけど不慮の事故と言うか…」

「私の胸に顔を埋めたのが不慮の事故…?ふん、そうね、私は事故を起こすような不幸少女なのね、疫病神でも着いているのかしら」

「ちよつと凜が落ち込んだじゃん!あとこないだの件ってなに?胸に顔を埋めたってなに?」

「そ、それより早く視聴覚室行こうぜ!」

「あ、逃げた」

俺は勢いよくA組の隣教室から抜け出し1人で視聴覚室に向かうのであった。



少女は1人落ち込んでいた。

それは何故か、そんなことを知っているのは落ち込んでいる少女だけだ。

彼女の心を覗き見できる人がいるのなら彼女の今の心情を理解することができるだろう。

でも人類にそんな術を会得しているものなど何人たりともいないのだ。

「香澄」

「……………」

「おい、香澄」

「……………」

「香澄い！」

「はいっ！あ、有咲？」

「もう羽丘着いたぞ」

「え!?うそ!?ご、ごめん寝てた、あはは」

「ったくしつかりしろよな」

「支払いはカードで」

「毎度ありー」

花咲グループのメンバーはタクシーにて羽丘に向かっていった。

支払いは勿論燐子のカードだ、いくら使っても父親から怒られないお墨付きのカード、ちなみに上限はいくらなのか具体的な金額は知らない。本人曰く100万ぐらいらしい。

「それにしても燐子さんとれつくくんが仲直りしてよかったですよ」

「本当ご迷惑をおかけしました…」

「そんなことないですって！仲直りできたんですから一件落着ですよ！」

「…………戸山さん、ありがとうございます」

下校中の羽丘生徒達とすれ違いながら花咲の制服を着た3人組が視聴覚室に向かうという事情を知らない生徒が見たら混乱する光景であった。

「市ヶ谷さん絵は完成しました?」

「ええ、昨日仲直りしたって聞いたらいてもたつてもいらなくて完成させましたよ」

「うわあ! 本当ですか! 後で見させてください!」

「へへーん、いいですよ」

「……………」

「? 香澄?」

「…………あ、ちよつとぼーつとしてた」

「おいおい、お前今日なんか様子変だぞ?」

「え!? あ、あー痛たた、お腹が、お腹があ…ちよつと私トイレ行つてくるー!」

「お、おい! 香澄!?! トイレつてもつと別の言い方しろよ」

「市ヶ谷さん、突つ込むところですか…?」

「??」

有咲はわからないような顔をしながら燐子と有咲は2人で視聴覚室に向かった。

香澄はというと…

「はあ、ゼロ君本気なのかな…?」

トイレ、には入らずその前で壁に背を預け外を見ていた。

景色を眺めていたはずが次第に窓に写る自分を数秒眺めてしまう。

おもむろにリュックから中学時代の卒アルを取りだしめくろうとしたその時

「香澄、今来たところか?」

「! れ、ゼロ君!?!」

「お前今れつて言いかけなかったか?」

「言つてない! 言つてないよ!?!」

「お、おうわかったから、近いから!」

否定するようにレイに近づき鼻と鼻が触れ合う距離まで縮めて否定していた。

「それ中学の卒アルだよな? 持ってきてくれたんだ」

「う、うん…ゼロ君があのこと話すからって」

「……まあ燐子さんに知られたしな、話さないと、な？」

「ツ！そう、だよな、やっぱりそうだよな」

「？おう」

香澄の反応を見て一瞬不思議に思うレイだったがそんな疑問はすぐになくなり

「さあ、視聴覚室行こうぜ」

レイは香澄にそういうと上に向かうため階段を上り始める。

香澄はそれをただ後ろから眺めていた。

取り出した卒アルを胸に抱え込み、複雑そうな表情をしたあとレイ背中を追うように少し駆け足気味で後を追った。

「……………待つて」

「？香澄…？」

近寄った香澄はレイの夏服を掴み引き止めた。

彼女かどう言った心情で止めたのかは分かりかねるが…表情からは彼女が何を言おうとしているのかは何となく読み取れる。

「……別に皆に話さなくてもいいんじゃない…かな」

「……………なんで？」

「だって知ってるのは燐子さんだけなんですよ？べ、別に話さなくてもいいと思う」

「人間誰にだって隠したいこととかもあると思うの！だから、無理して、いわ、なくても…」

「……………」

レイは振り返ることなく香澄の話を聞き、香澄の話が終わったことを確認したあと振り返る。

「香澄、お前…」

「ツ！だからね、私はゼロ君との…」

「お前、そんなに中学時代の姿見られなくなかったのか？」

「……………え？」

「いやごめん、俺自分のことばかり考えてた、だよな、やっぱり中学の卒アル写真とか皆に見せたくないよな」

「え？……………え？」

香澄は戸惑った。違う、そうゆう意味で止めたわけではない、しかしレイは別の意味で捉えてしまったらしい。

卒アルの写真を香澄が見せたくないと思ったレイは香澄に対して優しい声で話し出した。

「卒アルは見せなくていいよ、俺の生徒手帳の写真だけで十分だ、香澄の容姿は見せる必要なんてないもんな」

「……………違う！私は！」

卒アルを先程よりも強く胸に抱いて大事な話をしようとしたその時

「レイ、やっと追いついた」

「私達を置いて先に行くなんて礼儀知らず、土下座するべき」

「なんでお前らを置いていっただけで土下座するんだよ、罪重すぎだろ」

「処刑にならないだけまし」

「なわけねーだろ!？」

「あつ……………」

後ろから蘭と凜がやってきたことで話が遮られ香澄とレイの会話はそこで終了してしまった。

「ほら、香澄も行くこう…ってそれ中学の卒アル？」

「卒アル持つてくるなんて、リア充アピールでもしたいのかしら？私の中学の話聞く？周りがお嬢様だらけで言葉遣いが…」

「も、もういいだろーな！早く行くこうぜ」

「凜、あとでおにぎりあげるから、今は落ち着いて」

「緑茶ー」

「あるから、ないならレイが買ってくれるから」

「なんでパシられること確定してんだよ」

そんな話をしながらレイ、蘭、凜は3人で先に行く、そんな3人を香澄はただ後ろから眺めているだけだった…。

「待って…よ」

手を伸ばすも届かない、いやその声すら掠れていたためレイの鼓膜を揺らすことはなかった。

「?おーい、香澄も早く来いよ」

「!.....うん、今行く!」

卒アルをリユックにしまい駆け足でレイ達と合流する香澄だった。

「それでーれーくんとはどういった形で仲直りをく?」

「それはレイ君と話をして…」

「話してなんですか!?!もしかしてレイ君臭いセリフとか言ってたんじゃない?!」

「い、いえそんなこと?ないかと…多分?」

「どっちなんですか?それ」

レイ達が来る前の視聴覚室では残りのメンバー、モカ、ひまり、有咲、そして燐子の4人で話をしていた。

「それでそれで!仲直りのエッチはしたんですか!?!」

「ツ!やつ!やってないですよそんなこと!」

「お2人はラブホへ一緒に行った仲なのですか?」

「あれはモカたん達が貰ってきたチケットで!それに何もしてません」

「燐子さん」ポン

「ひっ!?!」

「詳しく、聞かせてください」

有咲は燐子の肩に手を置き、ものすごい目で燐子を眺めていた。全てを話せと言わんばかりの圧に燐子は冷や汗をかいてしまう。

「有咲本気すぎ〜」

「だいたいレイ君が襲うわけじゃないじゃん、私がどんだけ誘惑しても手を出さないんだから」

「それはそれで問題だな…」

いざ自分が誘惑した時にも同じ反応だと困ってしまう。と有咲は考える。

「そんな時は襲えばいいんだよー」

「そうだねー今度襲おうかな」

「う、嘘ですよねひまりさん!」

そんな会話をしている中、襲われることを一切知らないレイが視聴覚室の思いドアを開け入室して来た。

「おーす、皆もういる感じか」

「レイ君遅い!遅すぎるから襲うところだった!」

「意味がわからんわ」

「レイいいいいいい!!」

「痛たた!痛い!痛いつてありり!」

入ってきてそうそうありりからツインテビンを食らってしまった。

なんの躊躇もなくいきなりしてくるからな、今回はなんだ?俺まだ何も悪いことしてないと思うんだが!

「お、おま、おまおまお前!燐子さんとラブホに行ったってどういうことなんだ!?!やったのか!?!やっぱりやったのか!?!」

「ありり、お前は勘違いをしているぞ」

「勘違いってなんだああ!!」ブンブン

「痛い!痛いから!話すからそのツインテビンをやめて!」

ツインテビンを収まると同時にラブホに燐子さんと一緒に行った経緯を説明した。

「あれはモ力達がどういった経緯か知らんが割引券を手に入れてだな…争奪戦の上燐子さんが勝ち取っただけなんだ」

「……てことは燐子さん以外が勝ってたら…?」

「間違いなく俺は犯されてただろう、な」

想像するだけで怖いわ、視聴覚室のクーラーが効きすぎてるのかわからないけど急に寒くなってきたぞ…!!

「いやいやーさすがにそんなに無理やり犯すなんてーゴムには穴を開けるイタズラはしてたかもねー」

「それはもうアウトだろ」

「うんうん、多分入った瞬間に挿れてたと思う」

「もうなんなんだこいつら…」

俺今からこいつらに黒歴史をさらけ出さないとイケないのか?

「ま、まああれだ！れつくんが汚れてないなら問題ない！なんせれつくんの初めてはファースト幼馴染であるこのあたしが「ところでレイ、大事な話って？」……………」

途中で遮られた有咲はしゅんと落ち込むが自分がなんて言おうとしてたのかと考えたら急に恥ずかしくなり顔がみるみる赤くなっていた。

「ああ、実は俺の中学時代の話をしようと思っててな」

「レイ君の中学時代？」

「そーいえばあたし達中学の時は絡んでなかったもんね、確かに気になりますな」

「…………れつくんの中学時代、か」

「でもなんでいきなり話すの？」

「それが馬鹿姉貴が燐子さんに俺の中学時代の話をしたんだよ」

「？だからそれがなに？別に話さなくてもいいんじゃないの？」

蘭は疑問に思ったのか俺にそう問うてきた。

ここで俺がべ、別にお前達のために話すんじゃないからね！なんて意味がわからんツンデレ風に返事をしたところで自体が収まる訳では無い。

「そうだよゼロ君！話さなくてもいいんだよ！知らなくても今のゼロ君がいるし！それに他の人達は小さい頃のゼロ君を知ってるんだからー！」

「香澄、気は使わなくていいんだ…もう決めたことだから」

「ッ！」

香澄は先程から止めようとしてくれてる。でもいいんだ、そのうち話す必要があったかもしれない、それが少し早まったただけだ。

でもバレるのは恥ずかしいな…。

「いや、そのな？結構過激な生活送っててさ、メンバー内に知ってるのが香澄と燐子さんと…前回みたいな仲間外れにしてるみたいでさ」

「……………」

「ふーん、なるほどね」

「れつくんなりに気を使ったってわけか」

「モカちゃんは昔のれーくんを知れるならおっけーです」

「もしかしてヤリチンだった…なんてことはないよね…?」

「ひまり、お前の脳内は花畑に加えて頭のネジが数本吹き飛んでいるようだな」

もうあいつは取り返しをつかない変態クソビッチのようだ、そつとしておこう。

「なんで好き好んで昔の話するのよ、自慢話でもしたいならよそでやってくれない? 私はとても耐えられる自信がないわ」

「大丈夫、そんな明るい話ではないと思う」

「??」

「でもレイ君、話聞く感じあまりいい思い出はないかと、それに今まで皆に黙ってたのも知られたくないからでは…?」

「…昨日も言いましたけどもういいんです。これが厨二病を患つた男の末路なんですよ」

『厨二病?』

そこにいた香澄と燐子さん以外のメンバーがその単語を言い首を傾げた。

「香澄、悪いけどあの写真を」

「…うん、はい」

「これがその証拠の写真だ」バン

机に思いつきり生徒手帳の写真を叩きつけ全員に見せてやった。

2年次の生徒手帳の証明写真だが…容姿は黒髪に両耳には痛々しいピアス、そして首にはチョーカーを巻いており、おまけにネックレスもかけていた。

「ええ、これレイ君なの…?」

「全然可愛くない」

「こ、これは想像してたより凄いー」

「おい! 紺碧色の髪じゃないぞ!」

「ピアスは痛くないんでしょうか…?」

「なにこれ…え、なにこれ」チラ

それぞれ別々の反応をするんだな…でも後半3人の反応はちよつ

と違うような？いや凜は当然か

だって今と似ても似つかない容姿をしてるもんない自分でも久しぶり似みたけどなんかもう目付きから違うよな

レイが机に置いた証明写真に映る少年は不気味な笑みを浮かべる黒髪の少年だ。

とても紺碧色の中性的な顔を持ち合わせている神崎レイ本人とは思えないほどの別人だった。

「とあるアニメの影響でな、中学時代の大半はそんな格好して生活してた」

「まあこんなんだから友達はできなかったし、馬鹿にされたし、キモがられたし…正直時々思い出して死にたくなる」

「凜…まではないと思うけど俺も結構ネガティブなのかもな」

「……………そのごめん、れいもれいで、結構、酷い、過去を…お持ちのようで」ガクブル

「お、おいおい」

思ったけど凜のやつはやっぱり酷い過去があったから今のような状況になってるんじゃないのだろうか？

「それで？香澄はそんなレイと唯一絡んでくれる存在で？」

「よく遊んでいて〜？」

「エッチなことをしてたんだね…私以外の子と」

「おい！今シリアスな雰囲気なの！お前は黙ってる！」

「んー！んんー!!」

体操服をリュックから取り出しひまりの顔面に投げつけてやった。これで当分は匂いを嗅ぐことに夢中になり話に入ってこなくなるだろう。

あとからそんな話聞いてないと言われても俺が話したことをここにいるメンバー全員が証明してくれるからな、問題ない。

「全っ然可愛くない、やり直し」

「やり直してなんだよ」

「でもまさか離れ離れになった途端闇落ちするとはねーやっぱりれくんにはモカちゃん達が必要だねー」

「勝手に決めんな！てかお前らが居なくても香澄がいたし！」

「な、香澄！」

「……………」

「ツ！か、香澄!？」

香澄の方を振り向く、するとどうだろうか、香澄は何故か静かに鼻をすすすることも無く泣いていたのだ。

「ど、どうしたんだ!？俺何か悪いこと言ったか？卒アルは見せてないし別になんともないんじゃ…？」

「…………う、ううん、違うの…ゼロ君が成長したなーって感心して」

「…………お前は俺の母さんかよ」

「うっ、うー！」

「そこまで泣かなくても…いいだろ」

俺は何をすればいいのかわからなかったからとりあえずハンカチを香澄に渡した。

ありがとうといいい涙を拭うも次から次へと涙は溢れ出し止まることを知らないようだ。

「ちなみに香澄が呼ぶゼロ君ってのは俺がゼロって呼べって言ったからで…」

「あーなんだ、てつきり零だから漢字が読めない香澄がゼロって呼んでるのかと思ってた」

「確かに同じ読み方だけどゼロが本名はないだろ」

キラキラネームってやつになるのではないか？

「てかありり…お前あんまり驚いていなかっただよな」

「は、はあ？驚いてますけど、かなり…黒髪なのがショックすぎて混乱してるだけだ」

「なんだそれ」

有咲があまり驚かなかった理由は別にある。

「(実は知ってたなんて口が裂けても言えねーよな)」

有咲は昔からレイの存在をしていた。知った時からちよくちよくストーリーカー、もといたまたま同じ通学ルートを通い観察していたことがあるんだ。

「(でもそこまで黒かったか…?)」

そこが少しだけ引つかかり戸惑っている雰囲気醸し出している有咲なのである。

「レイ君、ピアスは痛くなかったんですか…?’」

「んー開ける時と塞ぐ時が痛かったぐらい」

「ふ、塞ぐってなに…?’」

「焼く」

「いっ!」

凜のやつは急に両耳を抑え絶対開けない!開けない!開けるもんか!と一人で唸っていた。

「うっ、うー!うぐ、うっ!」

「か、香澄もういいって、そろそろ泣きやめよ」

「てかなんで香澄がその写真持つてんだよ!そこが謎なんだが!」

「それは欲しいって言うからあげたし…」

「ならあたしが貰ってもいいよな?’」

「別にいいけど…なんで?’」

「な、なんでもいいだろ!?!なんか文句あるのか!?!」

「な、ないけどさ気になるだろ…はい」

机に置いていた生徒手帳の証明写真を有咲に渡そうとした。

「ダメえ!」

『ッ!』

「これは…!私のもなの!」

「…:そ、そうだよな、香澄が貰ったものだもんな、横取りしようとして悪かった」

「い、いや…:私も大きな声出しちゃった、ごめんね有咲」

「…:…:みんなごめん、ちよっとお手洗いに行つてくりゅ…:」

「お、おう、気おつけてな」

行つてくりゅって、泣いてるせいかも知れないけどその言い方はなんか巴が言いそうだから嫌な意味で捉えてしまいそうなんだが

「…:…:あたしも行く」

「蘭もか?わかった」

「それとレイ」

「？」

「あんたはやっぱりヘナチョコ腰抜けチキン野郎だよ」

「……口開けばそればっかだな、お前」

「それと、鈍感ラノベ主人公」

「??？」

「それじゃ」

蘭のやつは視聴覚室の重いドアのドアノブを強く握りながら俺に
そう言い、視聴覚室を出て行った。

「それでそれで！レイ君は中学時代厨二病で？学校では何してたの
!？」

「わ、わかった、全部話すから……だからみんな俺に期待の眼差しを向け
るな……！」

早く話せと言わんばかりにキラキラした目で俺を見てくる残りの
メンバー（凜は除く）

「はあ……まずは容疑検査の時の話なんだけだな」

レイは蘭の言葉など気にもせず自分の黒歴史を恥ずかしながらも
残りのメンバーに語り告げたのであった。

◆ ◆ ◆

あの後質問攻めされた俺は変態幼馴染と燐子さんに全てを話した。
「にしてもれつくくんが厨二病なーそんな様子はなかったんだけど
なあ」

「ありり、人にはふとしたきっかけでおかしくなる時があるんだよ」

「前から思ってたけどー有咲がれーくんのこと最近れつくんって呼ん
でるよね〜」

「言われてみればれつくんって呼んでるよね、2人とも何かあったの
？」

「お2人は小さい頃の知り合いだったと聞いてるんですけど……その時
の呼び方とかですか？」

「いや違いますよ、俺はありりのこと当時は前の苗字で呼んでたし？
ありりは普通にレイと呼んでましたよ？」

「じゃあれつくんなんて可愛くない呼び始めたのはつい最近つてことで間違いないですな〜」

モカはニヤニヤしながらありりの方を向く、ありりもありりで照れくさそうに顔を赤くしながらモカから目を逸らしていた。

「は、はあっ!? よ、呼び方なんて別になんでもいいだろ!? モカちゃんもれ〜くんっ呼んでるじゃんか!?!」

「それは小さい頃の名残ですからね〜なんせ小さい頃毎日のように遊んでたから〜」

「お、お前! あたしと離れ離れになつてすぐ別の女を作りやがつてえ!」

「だから当時は俺男だと思つてたんだつてええ〜!」

「んなの知るか! だいたいれつくんの周りは美人だらけなんだよ!?! ライバル多すぎだろ!」

「やめてありり! ツインテビンを今すぐやめろ〜!」

ちなみにありりが俺のことをれつくんと呼ぶようになった原因は姉貴のせいだ。

それとあの後酔つた姉貴がありりにストレイを飲ませて:あの後はある意味地獄だったよ

酔つたありりはこれがお前の大好きなおっぱいだあ〜!なんて言いながら俺におっぱいを押し付けてくるわ:いやこれ以上はありりのために言うのはやめておこう。

あとありりはあの日のことを覚えているのだろうか? だいぶやばい酔い方をしていたと思うんだが?

それと、良い子のみんなは20歳になるまでお酒は飲んではいけないぞ、ありりも好きで飲んだ訳では無いんだ。

姉貴に無理やり飲まされどうにでもなれ〜なんていいながあと数缶飲んだらベロンベロンになつただけだ。

そう、全ては姉貴が悪い。姉貴がいなければあんなことにはならなかったんだ!

「れいは女たらしだったんだね」

「凜、お前はいつも俺の悪いところをピンポイントで覚えるよな!?!」

「おっぱい星人…いい響きじゃん！」

「黙れクソビッチ！大体俺はおっぱい星人じゃない！」

「う、嘘だろ…？れつくんがおっぱい星人じゃないならお前はなんなんだ…？」

「俺は本当にお前達になんて思われてんだよ」

酷い、なんでこんな目に！俺はこいつら幼馴染変態共とは違う人種なのに同等の扱いをされてる！おかしい！なんでだ！どうしてこんな人生に!?

「れーくんも変態さんだもんねー」

「一緒にすんな露出魔め」

「変態！レイ君、つまりレイ君はもう私とエッチをするしか道は残されてないんだよ、さあ隣の部屋に行こうね♪」

「い、いや無理だから」

話す度にグイグイひまりはやってくる。やってくるのと同時に俺は段々と後ずさる。

「やっぱりひまりさん達は積極的ですね…」

「りんこ、ひまりはただれいとエッチなことをしたいだけの変態さんなだけ」

「？ですから積極的だなーと」

「んなことって凜もれつくんをその胸で誘惑してたりしてんじやねーのか？」

「……………そんなことはない」

「なんだよ今の間は！」

こないだシャツとブレザー越しの胸に顔を埋められたがあれは事故であり凜本人が自ら酔っ払った有咲のように押し付けたわけではない。

「ただいま」

「痛っ！」

視聴覚室のあの重いドアが急に開き俺の背中にクリティカルヒット、背中を擦りながら悶絶していた。

「蘭おかえりー小さい方？大きい方？どっちだったの〜？」

「そうだね、小さい方かな」

「真面目に答えなくていいんだぞ…あいてて」

これは背中に痣ができるやつだな、ちなみにこの世界で痣が出たところで飛躍的に身体能力が上がったりしないし体温を上がらないからな

「ただいまー！戸山香澄！只今より平常運転に戻ります！」

「平常運転？なんだよ、やっぱり体調悪かったのか？」

「えっへへ、蘭ちゃんが背中をさすってくれたんだ〜！」

「はあ、香澄…もつと早くいえばあたしがさすってやったのに、てか吐いたのか？吐いたのか!？」

驚くありり、無理もないか…同じバンドメンバーが体調不良となれば心配するのは当然、つまりだ

「香澄…本当に大丈夫か？きついなら今日は帰っても」

「大丈夫！…もう！大丈夫だから！」

「お、おう？」

ひまりよりグイグイ近づいてくる香澄に対しては恐怖心なんてものはなかったからその場から動かさず聞き入れる。

ひまりに恐怖心を抱くのは至って普通のことだ。

「それよりさレイ、サークルカット描いた？」

『あっ』

声を出したのは俺と隣子さん、今になって思い出したがサークルカットをまだ描いていなかった。

サークルカットとはカタログに載る言わばサークルのアイコン的なやつだと考えてくれていい。

サークル内の画力をみんなに見せつける重要な役割をしているサークルカット、それを俺達は夏コミまで1ヶ月ちよつとしかないのでまだ書いていなかったのだ。

それとだ、先程サークルのアイコン的なやつと言ったがもちろんサークル名も載る。

何を隠そう俺達のサークルはまだ名前すらつけていないのだ！

「やばい！やばいやばい！サークル名も考えてねーぞ！サークルカツ

トなんてまず名前を決めねーと！」

「おおおおお落ち着きましよう！サークル名なんてこの際適当に……！」

「じゃあヤリサー」

『却下！』

よりにもよってヤリサーはダメだ、確かに変態ばかりいるけどさ、一線は越えてないだろ!? 決してヤリサーでもないのにそんな名前はいやだ！

「サークル名も何も放送部でしょ？放送部って名前じゃダメなのそれ？」

「凜……流石に放送部って名前に参加するのはちよつと」

「な、何よ、せつかく案を出してあげたのに……いいわよもう黙っておくから早く決めてちょうだい」

あーあ、凜のやつが落ち込んでしまった……俺のせいだけどさ

「やはりRoselia2の方がいいのでは？」

「だから2つてなんだよ、この前言ってた案は全部却下だからな！」

「それじゃれーくんはいい案あるの？」

「ないのに却下とかよく言うよねーしようもないこと言ったら襲うからね♪」

「……………」

おいおいどうすんだよ、何も考えてねーよ、適当なこと言ったらクソ変態に襲われちまうよ

「く、黒の騎士団……」

「はいはい、厨二病乙」

「ぐはっ！まさか凜に言われるとは！」

「それ前も言ってたヤツじゃーん、はい隣の部屋に行こうね」

「近寄んなー！」

サークル名ってどうやってきめんだよ、他のサークルはどうやって決めたんだろうか？蘭は？姉貴は？参考にしたいくけど蘭のやつは答えないだろうし……

「ゼロ君、ゼロがつくサークル名にすればいいんじゃない？」

「……それは厨二病すぎる」

「このサークルはレイ君がリーダーですので好きに決めていいですよ？」

「待て待て、俺がいつこのサークルのリーダーになったんだ!？」

「……だってあたしレイに誘われたし」

「あたしもれつくんに誘われたし……あと胸揉まれたし」

「私も土下座しながら勧誘された」

「なるほどね!勧誘した人数でリーダーを決めるんだなこのサークルは!？」

モカは確か燐子さんが勧誘して?ひまりはなんかいつの間にかいて……香澄はありりを勧誘した時についてきたな

「だけどこのサークルは元々燐子さん1人で活動してたじゃないか!」

「活動実績なんてないんでなかったものと捉えていいですよ!」

「……でも!」

「別にサークルのリーダーぐらいしてもいいじゃん、そうだ柊優も一応リーダーしてるからいい相談相手になってくれると思うよ?」

「なんなんだよこいつ!」

なに?今日の俺突っ込みすぎじゃないか?息が切れそうになるんですけど!?

「もうシンプルにゼロって名前でもいいんじゃないかなーくれーくんがリーダーならふさわしいんじゃない?」ニヤニヤ

「ああそうだな、お前がニヤニヤしながら言わなければよかったかな!」

口に手を置きニヤニヤしながら言うモカを見て真面目に考ええるとと思うか?俺は思わん

「ふむ、しかしゼロは付けたいですね……」

「なんでそこまでしてゼロにこだわるんですかね!？」

「いいじゃんゼロ、あんたも好きなんですよ?」

「お、俺の場合は好きというより好きだったが正しいんだけど」

頬をかきながら言うも我ながら説得力が泣きなど自負してしまう。

過去の俺は黒色とゼロが大好きな厨二病患者だったからな…否定できるところがないのか

「あぁー！だったらさ！ゼロを2つ！だよ！」

「……香澄、お前は何を言ってるんだ？」

「だからこうだよー！」

香澄は走り出し視聴覚室のホワイトボードに0を2つ並べるように描き始めた。

その並びには間がなく2つの0をくつつけるように書いていた。

「過去のゼロ君と今のゼロ君！合わせて∞なんてどうかな！」

「な、なんだ過去の俺と今の俺って…？」

「昔のゼロ君は厨二病で！今のゼロ君はおっぱい星人！」

「……………」

悔しいがどちらも否定できん、なんだ？俺は厨二病からおっぱい星人へと進化したのか？それとも退化したのか？

い、いやでも厨二病よりおっぱい星人…の方がましなのだろうか！？

てかそんなのはどうでもいいんだよ！？

「なんでそんな案を出したのか説明をしろ」

「説明？ピーン！ってきたから！」

「????」

「ごいつこーゆうところあるから大変だぞ？」

「ありりは意味がわかるのか？」

「全然わかんねーよ」

「……ちなみにPoppin Partyの歌詞って誰が作ってるの？」

「香澄とりみ」

「……あーありりも大変だな…」

サークル活動ならまだしも歌詞を作るのにあたってこうゆうピンと来たからなんて言われて困ることはないだろう。

まさかありり達よりも歌詞を、もしくは曲を作るために手を焼くバンドなんているのだろうか？

その点Afterglowは確か蘭が作ってるって話だからな、蘭

ならすぐ簡単にいいフレーズなんか浮かぶんだろぅな

「……なに？」

「いや、なにも」

「ちなみにあたしは今レイと柊優がエッチしてるところを想像してた」

「世界一いらぬ情報をありがとう、できれば教えて欲しくなかつたかな」

「てかサークル名考えろよ!?!なんで今そんなことを考えるんだよ!?!」

「ゼロ2つで∞…ではインフィニティ!なんてどうでしょうか!」

「インフィニティ、って安直すぎませんか?」

無限をかつこよく英語で言っただけだろ、それ

「じゃあインフィニティゼロ!」

「無限のゼロ…意味はよくわからないけどいいんじゃないか?れつくんらしいと思うぞ」

「俺らしいってただ厨二病が喜ぶサークル名じゃねーか!」

「モカちゃんはいいと思うよー理由はともかくれーくんがリーダーならふさわしいと思うー」

「はあ、わ、私も!は、はああああ…好き♥」

「……………」

ひまりのやつは一言言っただと思えば俺の体操服の匂いを嗅ぎ好き、なんて行っていた。

正直もう友達をやめようかなと思った瞬間である。てかやっと話したと思えばこれかよ

「とりあえずあたしはなんでもいい…けど、インフィニティゼロ、悪くないじゃん」

「私もインフィニティゼロで異論ありません!」

「……………私もいいと思う」

「隣子さん、蘭と凜も賛成か…」

「みんな賛成ならこれでいいんじゃないかな!?!」

「ち、近い、近いから香澄い!」

めちやくちや近づいてくる香澄、女子特有の甘い匂いが鼻に突き刺

さり照れるように俺は香澄から距離を置く

昔はこんなんじゃないかなかったのにな…

「とりあえずサークル名は決まりだな、次はサークルカットは…あたしは燐子さん、蘭ちゃんの誰かが描かないとだな」

「あ、もう決まりなのね」

どうやらサークル名はインフィニティゼロで決まりのようだ。ロゴに関してはおいおい考えようか、最悪インフィニティゼロってカタカナもしくは英語で書けば大丈夫だろ、多分

「あたしパス、自分のやつ描いたし2人に譲るよ」

「わーたしは描いたことない…のでー」

「あたしも描いたことないけどー描いていいなら描くぜ!」

「やけに乗る気だねありさ」

「ま、まあな!一度描いてみたかったからなー」

ありりのやつは机に戻りタブレットを取り出し今からでも絵を描こうとし始めた。

でもサークルカットでは何を描くとかきめてないのによくすぐに筆が進むな

「れっくん、少し厨二病みたいなポーズをとってくれないか?」

「ええ、いやだよ、恥ずかしいだろ」

「有咲ーこんなのでいいならあるけど?」

「ツ!流石香澄!我らのPoppin Partyのリーダー!」

「いやあーそれほどでもおーでゆふふ」

「なんだよその笑い方!?!気色悪いな!?!てかその写真を見せんなああああああ!」

香澄がありりに見せた写真は俺が某アニメの主人公が敵に絶対命令権の力を発動する前に片目を隠す姿の写真だ。

今みるとくそ恥ずかしい、よくやってたよな俺は

「ふっふーん、ぎっとこんなもんだろ!」

「描くの早すぎワロタ」

「有咲描くのめっちゃ早ーなんでなの?」

「ああ、なんてったってれっくんは描きなれてるからな」

「……………なんで描きなれてんだよ」

「なっ！な、なんでもない！深く考えんな！ぶっ刺すぞ!？」

「怖い怖い！俺タブペンで殺されるの!？」

ペンを凶器でも持つかのように握り締め突きつけるありりに恐怖を感じた。その恐怖を押し殺しながらありりの絵に目を通す。

「うわ、なんだこれ…普通に上手いな」

「普通につてなんだよ」

「短時間でここまでかけるなんて…流石ありり先生です！…でもネットに投稿している絵と似てるような?？」

「そ、そそそれは気の所為です、これはれつくんなのですあります」

なんか語尾おかしくなってるんですけど?？てかこれ俺なのか?？

ありりのタブレットを持ち上げよく見つめる…が

「ありりー俺流石にここまでイケメンじゃないと思うんだが」

「はあ!?!何言ってるんだよ!?!もつと自信もてよ!?!熱くなれよ!?!」

「最後のは本当に意味がわからないんだが!？」

「有咲の描くレイはイケメンすぎる、レイは可愛いんだから」

「それもおかしいと思うんだけどな」

「ああああああああああ、好き…♥」

「誰かこいつをここから出してくれないか!?!」

ひまりのやつは暴走寸前、正直怖い、恐怖だ、もう今俺の目の前にいるひまりは今まで見てきたひまりじゃない。

ここにいる変態なひまりこそが本当のひまりなのだ…!？」

「ひまり、ちよつと外行こうか」

「……………」ハスハス

凜がひまりを引つ張り視聴覚室を出ていくも引つ張られている間もひまりは体操服の匂いを嗅いでいた。

「はあ、だいたいなんでサークルカットの絵が俺なんだよ」

「インフィニティゼロのリーダーはゼロ君だから!？」

「なんで二次元に三次元が参戦してんだよ!?!」

「別になんでもいいだろうがああ!？」

「痛い！痛いから!？」

今日1日で何回ツイントペンタを比べ良いんだ俺は、もう顔が若干腫れてるのでは無いかと思うんだが！

「それより蘭はれーくんのこと可愛いと思ってたんだねー初耳ー」

「ツ！そ、それは…」

「あたしも気になるな、れっくんがイケメンじゃないってどうゆうことなんだ!？」

「……………」

追い詰められた蘭、ここで俺と柊優のエチエチな本を書いていることをバラすか？それとも逃げ切れるか？

「それは置いといて、絵完成したよ」

「お、まじか」

「あ！あたしも！」

よしよし2人とも絵は全員分完成か！あとは表紙と水着姿の絵を…あれ？水着姿の絵を？

あつれえー？おかしいぞー？俺の記憶が正しければ…

「本の最後に全員分の水着姿の絵を載せる！」

的なこと言ったよな…？絶対言った！

「…………えっと、みんなー大事な話んだけどさ…実は全員分の水着姿の絵を描いて欲しい…なんて言ってみたり？」

「あつー！」

隣子さんも完全に忘れていたようだ。無理もない凜のオーデイションの件と重なってたし積極的に協力もしてた。

それにこないだはあんなことあったし忘れても仕方がない！

でも蘭とありりには俺が言うのを忘れていた！俺のせいだ！俺が言わなかったからあー

「お前えー！そーゆうのは先に言えよー！」

「ごめんーありーりー」

「はあ、まじで言ってる？これから描くのきついんだけど、ね？わかってる？あたし終礼も描かないといけないんだよ？暇あると思う？それともレイが暇を作ってるの？それとも柊優とやってくれるの？ねえどうなの？」

「や、やめて蘭ー、ネクタイを引つ張らないで…!」

そりや怒られるよなー最初に説明した時は4人のそれぞれの絵だけがいいって言ってたのに水着を描けと言われると大変だな

「てかあたし達は無理して描かなくてもいいんじゃないか?あたしも蘭ちゃんもSNSで少しはフォロワーいるからーアドバンテージ?ってやつがあるだろ?」

「……なるほど、燐子さんは初参戦だもんな」

ありりと蘭の本は売れるとして燐子の作品が万が一残る、なんてこと起きないよう予め燐子さんの本には水着姿絵を特別枠として設けるって魂胆か

ありりもちやんと考えて発言してるんだな、偉いぞーあとでおっぱいを撫でてやろう。ぐへへ

「ふんっ!」

「あついつつってええー!!」

蘭のやつがいつも通り俺の足を思いつきり踵で踏みつけてきた。折れてもおかしくなくらいの痛みが俺を襲いその場に膝をつく

「今有咲で変なこと考えてたでしょ」

「……そんなわけない」

「やめろ蘭ちゃん、レイがあたしでエッチなことを想像するのは仕方がないことなんだ…」

『???』

俺と蘭はありりの言っている意味がわからず首を傾げていた。が、蘭ははあとため息を着くと話し始めた。

「あたしもいや、燐子さんだけ水着姿の絵を描いてくれませんか?」

「分かりました!では水着の絵を描くのは私だけにして…そうすると、また2人つきりで活動できますね、レイ君…?」

「あ、はい…そうですね、また昔みたいになら2人だけで、ね」

蘇るあの時の光景、俺達2人と周りにはひまりとモカと凜が遊んでる(凜がいじられてる)

そんな中2人だけ別の世界にいるかのように活動してたあの時間…最近燐子さんと活動できてなかったしな、丁度いいタイミングかも

しれない。

「……………描く」

「は？あのありりさん？アドバンテージは？」

「知らない、描くったら描く！ドエロいやつ描くからな！」

「??？」

「あたしも描く」

「蘭も!?お、お前らどうした!？」

さつきまで描かないと言ったたくせに急に描くとか言い出した。こいつらなんなん？秒で気が変わる生物なのか!？」

「ま、まあ描くのなら越したことないか」

頬を描きながらタブレットと睨めっこする蘭と有咲を見つめるレイ、しかしその隣では可愛げに、そして不機嫌そうに頬を膨らましていた燐子…なおその様子をレイは一切見ていないもよう。

「よし！ラストスパートだ！みんな気合い入れて作業に取り掛かろう！」

「少し待つて欲しい」

「ッ!？」

いきなり後ろから声をかけられたものだから驚いてしまう。

声をかけたのは凜のようだ。先程ひまりを外に連れて行き丁度いいタイミングで戻ってきたようだ。

「文化祭の出し物をそろそろ決めないといけない」

「……………そうだな！」

忘れてた…なんて凜に言えばいつも通りネガティブスイッチONしてしまい收拾がつかなくなってしまうからな、ここは黙っておこう。

「あーそれなら大丈夫ーもう申請書書いたからー」

「……………もか、どうゆうこと?？」

「だからー凜ちゃんのメイド服姿見たさにーメイド喫茶するって書いたんだ〜」ヒラヒラ

申請書を見せつけモカはにへへと笑っていた。なるほど、メイド喫茶か…このメンツなら悪くないだろう。

でも果たして凜が許すかな？

「ちよつと何勝手に書いてるよのよ！貸しなさい！書き換えてあげるから！」

「いいじゃんいいじゃんメイド喫茶くあたし達もメイド服着るからお互い様様ー」

「ねえモカ、それってレイをメイド服来てくれる？」

「着せたいなら着させていいよー」

「凜、悪いけどメイド喫茶で決まりだね」

「俺の拒否権は!？」

「私の拒否権もないの!？」

まさか俺も被害を食らう羽目に…！誰があんなヒラヒラな女子しか着ないようなメイド服着るもんか！絶対着らんぞ!？」

「わあ！メイド喫茶！いいです！一度文化祭でやってみたいと思ってたんです！」

「隣子さん乗る気なんですか!？」

「はい！服とかも作ってみたいと思ってたんです！でも…自分からやろうなんて言い出せなくて…ダメ、ですかね？」

『ツー!』

もじもじしながらそんなこと言うなんて反則すぎるだろ…！なんてことは凜もわかっていた。

モカやひまりからのお願いではない、あの隣子からのお願いだ。それにこないだ凜自信が隣子さんに酷いことをしてしまったと自覚している以上彼女のお願いは…断れない

「くっく！わ、わかったわ…隣子が言うなら、やるわ…」

「！ありがとうございます！凜ちゃんさん！」

「わっ！ちよ、抱きつかないですよ！もか達じゃあるまいし！」

「じゃあモカ達のモカちゃんが抱きつきまーす」

「ぎゃあああああ!!」

「私も凜ちゃんに抱きついてくる！」

「お、おい香澄！」

香澄も加わり凜のやつがさらに大変な目に…でもなんだかんだで

喜んでたりして

「なんかいいな、こーゆう雰囲気」

「ん？ああ、まあ、な？」

「2人でなにもいい雰囲気作ってんの？」

「いやいい雰囲気ってのはこのサークル内であってだな」

「たっだいまー！」

「げはー！」

次はひまりのやつが思いっきりドアを開けまたも俺の背中にクリティカルヒット、もうドアを付近で話をするのはやめようか!?

「レイ君大丈夫!?おっぱい揉む!?吸う!?どっち!?!」

「い、いいから！俺にその大きな胸を向けるな！」

いつでも脱げれるようにブレザーを脱ぎカッターシャツのボタンに手をかけ準備をするひまりは無視して俺はモカ達に話しかけた。

「ところでモカ、お前その申請書ってまだ提出してないのか？」

「うん、だって勝手にしたら凜ちゃん起こりそうだからー」

「怒ると思うならメイド喫茶なんて言うなよな、可哀想だろ」

「うーうー…」

凜のやつは胸を抑え若干泣き目になりながらもか達を睨んでいた。

燐子さんに関しては本当に抱きついただけなんだけどな

「提出期限っていつまでだっけ？」

「今日までですね」

「……ギリギリじゃねーか！」

燐子さんは花咲の生徒会長だからな、なんせ今年は花咲と羽丘合同文化祭だ。ならば燐子さんが提出期限日を知っていてもおかしくない。

「じゃあ早く提出してこいよ」

「あーモカちゃん今手が離せないのだー」

「秒でバレる嘘をつくな、早く行け」

「……いいけど全裸で行っていいー？まあモカちゃん的には色んな人に体を見てもらいたからいいですけどねー」ヌギヌギ

「ま、待て！もう俺が行くから脱がないでくれえー！」

この露出魔め…！逆手にとっていいように俺をこき使いやがつて！別にモカの性癖がバレたところで俺にダメージなんてものはないかもしれないけどさ！

幼馴染が捕まったりするのはいやだろ!?

「じゃあレイ君！ついでにジュース買ってきてねーミルクテイで！

あ、紅茶を買ってレイ君のミルクを混ぜたやつはなしね」

「なしかい！そこまで聞いたらありかと思うだろ!？」

「…ええ、流石に私そこまでしないよ…？頭大丈夫…？」

「あああああ！クソうぜえこいつ！なんだこいつ！なんなんだこいつー！」

頭を抱え叫び出すレイ、凜はこいつ大丈夫と悲しい視線を送り蘭と有咲はいつの間にか席に戻り早速絵を描き始めていた。

「とりあえずれい、頼んだわよ」

「結局俺が行くのかよ、いいけどさ…行くよ、行くからその申請書をよこせ」

「おっけーじゃあひーちゃんの胸に挟むからそれを」

「いらんことすんな！はよよこせ！」

俺はモカから奪い取り急いで視聴覚室を後にする。

「レイ君！」

「？燐子さん？」

出て行く寸前で燐子さんに呼び止められた。一体何の用だ？燐子さんのことだからひまり達みたいに変なこと言わないよな？

「戻ってきたら一緒に活動しましょうね！」

「ツ！はいっ！」

嬉しくなっただけの最後が少し声が裏返った気がする。でも…燐子さんから活動しましょうね、なんて言われたら嬉しいだろ。

少し早歩きで生徒会室に向かう。

なんだろうか、やはり俺は求めてたんだらうな

中身はあんな変態集団の集まりだけどき、俺が神奈の弟と知っておきながら期待もせず、対等に接してくれるメンバーを求めていたんだ。

特に燐子さん、あの人からそう思われてないと思うと自然と、何故かはわからないけどやる気が出てくる。

「よーしーこのまま夏コミも成功させるぞー！おー！」

なんて中庭で一人大きな声でいい小走りで生徒会室に向かった。誰かに聞かれていたと思うと恥ずかしくて仕方がないが…口に出してしまったのなら仕方がない。

生徒会室の前につき俺はノックもせず視聴覚室とは違い、重くないスライドさせてタイプの開けるドアを開けた。

「失礼します！文化祭の申請書、を…！」

「んー？」

ドアを開け目の前にいたのは…カッターシャツ（ボタンは全て外れている）姿で何故かストレッチをしている羽丘生徒会長こと氷川日菜、その人物なのであった。

「……………へっ？」

触れてはいけない話に触れたことありますか？

俺は今の自分の置かれている現状を受け入れるのに数秒時間がかかった。

それは他人の感覚とは遥かに異なる時間の感覚、わずか数秒が数十秒に感じる。

なんせ目の前にはほぼ下着姿と言っても過言ではない羽丘生徒会長こと氷川日菜が目の前にいたのだから

アイドルをしているからなのだろうか、引き締まったお腹、そして胸も…出るところは出てる。そして可愛い、もうひとつ可愛い

「……はっー」

俺はどれだけ氷川さんの体を見つめていただろうか。気がついたら同時にドアを閉めた。

「(あれ、俺疲れてるのかな)」

なわけない、生徒会長が生徒会室でほぼ下着姿でストレッチなんてしているはずがない。

そもそも生徒会室でストレッチってなんだよ、生徒会室は校長室や応接室に続く清楚あるべき場所だ。

そんな所で、ストレッチをましてや下着姿でなんてするはずはないだろう。

それも足を広げて前屈なんて…見てくださいと言ってるもんだろ、モカかよ

「なに？…どうしたのー？」ガラガラガラ

「うひょおおー!!??」

ドアの前で1人考えている中から生徒会室のドアが開きほぼ下着姿の氷川日菜さんが現れた。

「ちよーま、前が！見えてますから！」

俺は急いで両手で目を塞ぐ、が若干隙間をあけ目を細めて氷川さんの容姿を見ていた。

「あっははーレイ君行動と言動が真逆だよ？」

「くっっ！」

バレていた。恥ずかしい…俺は目から手を離し手を下げた。

「なんで下着姿なんですかね」

「あ、もう見なくていいのー?」

「いやーもう見れないというか、見続けたら一部が石化するというかなんというか…!」

顔を逸らしそういうも言いながら自分で何を言ってるんだ?と思ってしまう。正直余計なことまで言ってる気がするんだが

「別に見られても減らないからいいんだけどなあ」

「はっ、ははー!」

かわいた笑い声が廊下に響いた。

てかどうすんだよ、俺はただ申請書を提出しに来たのに何だこのイベントは!ギャルゲーか何かですかこの世界は!?

「つて!流石に今も下着姿はやばいですつて!誰かに見られたらどうするんですか!?!」

「レイ君に襲われたことにすればおっけ!あ、今の理由はちよつとるんっ♪つてきたかも!」

「いや言ってる意味がわかりませんから!あとシヤレにならないから!?!と、とにかく服を着ないなら早く入ってください!」

「きやつ!強引だねーでもそーゆう男子嫌いじゃないよ!」

「いいから早く!」

俺は氷川さんを押しながら生徒会室へと入る。勘違いして欲しくないが肩を押したただけだ。決して胸をわしづかみしながら押したわけではない。

「……で?なんでほぼ下着姿でストレッチを?」

「んー?さっきまで外で遊んでたからだけど?いやー事務仕事って飽きるからね!外で遊んでたんだ!」

「……それから下着姿になる経緯がわかりません」

「体動かしたらストレッチしないと!つてお姉ちゃんが言ってたからね、だからしてたの」

「いやなんで脱ぐ必要が!?!」

「?暑いから!」

「……………」

言い返せそうで言い返せない理由だな…暑いからと言って下着姿に好き好んでなるやつなんて…数人いるけどさ

「あっ…そういえばストレッチの途中だった！すぐ終わらせるからその辺でアタシのこと卑しい目で見てていいよ！」

「み、見ませんか!?!」

俺はぷいっと可愛く後ろを振り向き氷川さんから目を、そして顔を逸らす。

ちえーと言いなながら数秒カッターシャツの擦れるあの音が聞こえ出した…と同時に

「はあ、はあ…んっ！くふう…んっ！」

とまるで年頃の女の子が夜な夜な1人で何か作業を行ってる際、声が漏れないよう我慢してそうないやらしい声が聞こえてきた。

「……………あの、ストレッチしてるんですよね…?」

「うん、そうだけどー?んんんー」

こ、これは精神的にきついやつだ。

モカやひまりのおかげでこういうのには耐性がついていると思ってたが人が変わると全くの別物になるらしい。

それを今日で痛感した。これは嫌でも興奮してしまうやつだろ…落ち着け俺、俺はあのサークルで何を学んだ。忍耐だろ！（違います）

俺は携帯を取り出し、暇つぶしと氷川さんのことを一旦忘れるためにもニュースがまとめられたサイトを眺めていた。

「（紛争地域に現れた謎の少年?俺は正義の味方だ…?）」

頭おかしいやつもいるんだなこの世界は

ニュースのタイトルを見ただけで満足した俺は別のニュースへと目を向ける。

「（義妹の声優予想…）」

オタクどもがSNSで議論しているニュースか、あの4人+晴太の声優さんは一体誰になるんだろうか。

凜のやつ選ばれるといいんだけどな

「何見てるの?」

「ほわっ!？」

「あはは！レイ君の反応面白い！るんっ♪つてくる！うりうりー」

「ひ、ひたいですよ！」

人差し指で俺のほっぺを指しグリグリしてくる。その仕草をして
いる顔がまた可愛い、さすがアイドル

「それお母さんのところの作品だよね？」

「あ、はい義妹シリーズ、知ってますか？」

「義妹…？ごめん興味ないかなー？その作品義妹っていうの？見たことあるけど内容は知らないんだー」

「あなた某日さんの娘さんですよね!？」

母親関連のことに興味なしですか、そうですか…それと義妹にも興味ないんですか、我悲しいよ

「つて！ストレッチ終わったなら服着てくださいよ!？」

「まあいいからさ、そこに座りなよ」

「いやどうゆうこと!？」

まあいいからさの意味がわからんわ、とりあえず言われた通りに座るけどさ

「はい、足開いてー」

「?はい」

「?しよっと」ポフ

「?!?!」

!?!まるで雷が落ちてきたかのような衝撃が俺を襲いすんごい表情になっ
ていてと思う。

雷というのは某有名巨人漫画の主人公が巨人化する時のあの雷だ。
正確に言うとなれば雷かどうか分りかねるがなかなかいい表現だと
自負する。

「ま、待ってください…！本当に意味がわかりません!」

「えーこうすると楽しいじゃーん、レイ君の反応面白いよね♪」

「……………お母さんが気に入った理由がなんとなくだけどわかるかも」

「ッ!」

く、クソう！その斜めの角度の顔が可愛ええ！そして美しい！
多分俺は氷川日菜のファン達に今日殺されてもおかしくなくらいの幸せすぎる思いをしているだろう。

「……………」

……なんだろう？廊下から音が聞こえる。

シューズのキュツキュツって足音が…聞こえる。

それもだんだんと音が近づいてくる…！

誰かがこっちに向かってる！かもしれない！

「あのその！人が！人が誰か来るかもですよ！早くどいてください
！」

俺は指をわなわなさせ氷川さんにどけるよう頼む、なんせ相手は女子だ。先程軽く体に触れてしまったがやはり少しは躊躇ってものがある。

今は触れる気がしないのだ。

「えーやだー♪」

「くっ！」

な、なんだこの人！なんでこんな笑顔で否定するんだ！？鬼か！悪魔か！もしこんなところ誰かに見られてみる！

氷川さんはほぼ下着姿、そしてその俺の上に座っている…遠くから見たらもうやつちやつてるー！って状態だろ！？

まずい！まずい！頭をぶんぶん振り何かないかと言わんばかりに周りを見るも何もない。

流石生徒会室、ちゃんと整理整頓されてるぜ

無断に感心している場合じゃない！早く何とかしなくては…！

「……………」

廊下から聞こえていた足音は生徒会室の前に止まった…。そしてコンコンコンと数回ノック音が聞こえたと思えばドアが開く

「(お、終わりだ…)」

さらば推薦、いや高校生活…俺は生徒会長氷川日菜の姿を見て欲情した性欲モンスター神崎レイとして今後羽丘で過ごさなければなら
ない。

そもそも残ってられるかな、はは

絶望している中ドアが開き、ある人物が姿を現した。

「日菜先輩、頼まれてた資料学長から借りてきました…」

「つぐみちゃん遅いよー！遅いからレイ君に襲われちゃったよ♪」

「……………ッ！」

まさかのつぐみか！なら好都合！つぐみなら俺がはめられたことをわかってくれるはず！

わかって…くれるよな!?

つぐみは驚き抱えていた資料を落とし勢いよく氷川さんに近づくと、そして怒鳴り散らかした。

「日菜先輩服きてください！あとレイ君から離れてください！女の子がそんなはしたない格好で男子の上に乗ってはいけません！」

「????」

いや、つぐみの言ってることは正しいんだけどさ…なんか、それはお前が言う感が強いんだが！

正確にはつぐみはそんなことしてないがそれ以上に狂気じみたことを普段しているはずなんだけど…

「もーうつぐみちゃんってば本当にこういうの嫌いだよねー」

「嫌い…?」

「エッチなことはダメです！こないだエロ本没収したばかりじゃないですか！」

「エロ本ってアタシが載ってたグラビア雑誌なんだけどね」

頭を軽くかきながら口を尖らせ言う氷川さん、あなたグラビア写真なんて撮ってたのかよ…今度見てみよう。

「それと！レイ君もホイホイ乗らないの！なに？エッチなこと好きなの!？」

「え？いや…それお前が」

「とにかく！ここは生徒会室！そういうことはいけません！2人ともわかりましたか！」

「????」

「?????」

「次同じことしてたら先生に言いますからね！」

「うわ！つぐみちゃんそれはみんなに嫌われるやつだよーやめてた方がいいと思う」

「……返事はいいかYESだけですよ」ニコニコ

「あ、はい」

「ちえー…はい」

氷川さんはまたも口をとがらせ次は足を組みながら両手を頭の後ろに回していた。

なんか仕草一つ一つとるんだな、この人

「早く着替えてください！ほら隣の部屋空いてますよ？」

「わかったってー本当につぐみちゃんはエッチなこと嫌いなんだからー将来彼氏君を満足にさせれないぞー」

「まだ心配しないでいいんです！」

制服を手に取り隣の部屋に行く氷川さんを俺は黙って眺めることしかできなかった。

と言うよりもかける声がなかったのだ。

俺の言葉は一切聞かないのにつぐみの言うことは聞くんだな…あの人多分だけど俺をからかうことに快楽を覚えたたちか？

なんとなくわかる。だって俺をいじってる時ゾクゾクしてるような、なんか嬉しそうな顔してた。

「(今後氷川さんに関わるのはやめよう)」

今回の件で学んだ。つぐみだったからまだよかったが先生に見られてでもしろ、俺は1発アウト、最悪捕まるかもしれない。

「……………さて」

「ッー」

「それでレイ君は日菜先輩とどこまでしたのかなあ？まさか本当にエッチなことしたの？」

「……………エッチなことは嫌いじゃなかったのか？」

「それはそれ、これはこれ、だよ？」

「だよ？って可愛く言っても意味わからないからな、それ」

なんだよ、2人つきりになればいつものつぐみか…となるとこいつ

やはり盗聴癖がある変態であることは黙ってるってことか

まあそれもそうか、自分から言うのなんて変態だけだよな、つぐみは変態だけど

「……最近レイ君の寝息が聞けてすっごく幸せなんだよ」

「へ、へえーそれは結構なことだ……んじや俺はあれでこれでそろそろ視聴覚室に戻らないと蘭に怒られるから」

「……………戻ってもひまりちゃんに抱きつかれて匂いを嗅がれるだけなのにな」

「ん？ああそれな、それは体操服を匍にすれば」

「あれ？今日体育なかったよね？」

「！そうか、今日は体育なかったな」

曜日ごとで授業が決まってるけど今日は体育がない日だったな、これはこれはレイ君うっかり

いや、待って……なんでひまりのこと知ってる!?

「……………は？つ、つぐみお前今なんて言った？」

「？あれ？今日体育なかったよね？」

「違う！その前だ！」

「戻ってもひまりちゃんに抱きつかれて匂いを「何故知ってる!?!」

俺は怖くなりつぐみから急いで距離を置いた。何故つぐみがひまりの性癖を知ってるんだ？いつどこでどうやってその情報を手に入れた……

「もしかして当たってた？」

「あ、当たってたって……どういことだよ」

「私はレイ君の家に盗聴器つけてるんだよ……それはもうわかるよね？」

「……………はっ！」

ま、まさかかなり前ひまりが俺の部屋に入った時パンツの匂い嗅いでたとか言ってたよな……？

その時の音を聞いてた？あのバカのことだ、匂いを嗅ぎながら好き♥なんて言ってたんだらう。

「ひまりちゃんはレイ君が好き、もしくは匂いが好き、でもひまりちゃ

んの最近の様子を見ててもレイ君に好意を持つてる様子ではなかったから匂いかなって」

「……………お前なんなんだよまじで…………！」

観察眼まで鋭いのかよ！

「それだけじゃないよ！巴ちゃん！まさかドMのペット志願者だったなんて…ちよつと引いたかも」

「待て、それはおかしい、お前は俺の部屋にしか盗聴器しかけてないよな？解除したもんな？な？」

「巴ちゃんって普段どんなこと考えながら生活してるんだらうね」

「話を聞け！」

「……………それは後日また設置したから、かな？」

「………………………………………」

解除させた意味はなんだったんだ？結局振り出しに戻ってるじゃんか!?そのせいで巴の秘密もバレてるし！

そりや家に盗聴器仕掛けておけばバレるよ、そもそもどのご家庭にも盗聴器なんて仕掛けられてないけど！

これはもう解除しろと言っても解除した後すぐに設置する気満々の雰囲気だな、もう俺は我慢するしかないのか？ないのかな!?

「でもでも！私達幼馴染だしずっと友達だよね！」

「……………はは、どうかな、俺は今正直お前と縁を切ろうかと悩んでるよ……………」

「え？何か言った？」

「いえ！なにも！」

ひまりのやつは恐らく先程言ったような行動をとっていたと思う。巴に関しては脱衣場で思いつきり俺の息子見て欲情してたし、なんならペットです。なんてことも言ってた。

バレるような行動しかしてないな、この変態共は
「あつ！もちろんみんなには黙っておくよ、レイ君と私の2人だけの秘密だね♪」

「……………助かる、正直つぐみといいひまりと巴の相手をするのはきつい」
「あつはは！何言ってるの？」

「は？」

どうゆうことだ？まさかモカと蘭の秘密も知ってるのか…？いや！あいつらは俺の家に来た時はまだ健全だった！（隠してただけ）

「私の相手は2人に比べて楽でしょ？だって生活音聞いているだけでもん！」

「それが1番のストレスに決まってるだろうが！」

毎日誰かに監視されてる気分を喜ぶのは巴並のドM者だけだろ！

「でもひまりちゃんレイ君に抱きついたりしてるんだーやつぱりレイ君は大きい方が好きなの？」

「はは、お得意の盗聴で探り当てな」

「むー！レイ君の意地悪！」

「お前が言うな！この盗聴癖変態野郎！」

「えへへ、それほどでも」

「褒めてねえ！照れるな！気持ち悪いなあ！」

つぐみのやつはひまりと巴の秘密を知ってるのに自分の秘密は隠すなんて性格悪いな、こいつら本当に親友同士なのかよ

「とりあえずつぐみは普段通り巴やひまりと接するように」

「はい！」

「蘭とモカは勘が鋭い、怪しまれるなよ」

「もしかしたら蘭ちゃんやモカちゃんも変態さんだったりして！」

「ッ!？」

「……………」

すつとつぐみの表情が一瞬真顔になった…気がした。まさか一瞬驚いただけでバレたのか？いやなわけではない

「驚かすなよ…！想像しちまったじゃねーか！」

「…………えへへ、ごめんね？」

「たっだいまー！2人して何話してたのー？」

ここで氷川さんが戻ってきた。謝られたあとなんて返事をすればいいのか少し考えていたナイスタイミングで戻ってきた。

流石に我ながら高得点な演技で危機を脱したか？

「ふふ、レイ君と私の二人の秘密です♪」

人差し指を立て、口の前に置きしーとでも言ってるかのような仕草をしながら氷川さんにつぐみは返事をした。

「……ふーん、まあいいや、それでレイ君は一体何しにここに来たのかな？まさか本当にアタシを襲う気だったのかなー？いいよ、やつちやう!？」

「も、もう日菜先輩!」

「あつはは!冗談だって、つぐみちゃんをからかうのは本当に楽しい!るんっ♪ってくる!」

「人をいじって快樂を覚えなくていただきたいですね、ね?レイ君」

「……………あ、はい」

これまたお前が言うかと言わんばかりのセリフ、俺はもうまともな思考でつぐみと接せれる自信が無いですよ

「さて、冗談はここまでで…文化祭の申請書の提出でしょ?」

「なんでわかったんですか?」

「だって提出期限今日だし、来るならほぼそれでしょ、あとは勘!」

「……………ビンゴですよ、これ放送部の申請書です」

ソファアールから立ち上がり氷川さんの座る生徒会長の席に向かい机の上に置く

「ふむふむ、メイド喫茶…あ!これってあれでしょ!エツちな御奉仕するお店!」

「日菜先輩…?」

「……………随分と氷川さんの立場は低いんですね」

「日菜でいいよ、お母さんのこと下の前で呼んでるみたいだし、それに君には下の名前で呼ばれたいかな…」

ええ、なにその言い方…一般男子生徒なら誤解してしまう言い方ですよ、今すぐそういう言い方はやめましょう。

てかこの人ってあのパスパレの氷川日菜だよな…?てことはガールズバンドの1人、となるとアサシン候補でもある!

となれば問いたたださねば!

「日菜さん」

「うん!それとメイド喫茶の予算なんだけどね」

「あ、はい」

「放送部って活動履歴がここ1年全くないから最低限しか出せれないんだよねー」

「……まあ何となく予想はできてました」

「そんな店みたいなのは滅茶苦茶凄い喫茶店を目指してるわけじゃない、最低限の金さえあれば何とか……」

「予算については後日全部活へ回すから……まあ期待はしない方がいいよー」

「そんな元気よく言われても困るんですけど」

「大丈夫だよレイ君！何かあれば私も手伝うから！」

「……おう、ありがとうなつぐみ」

返事はこれで合ってるよな？正しいよな……って！それどころじゃねえ！

「日菜さん！仲も良くなったのでひとつ質問が！」

「はいはい、なに？スリーサイズ？いやーんアイドルにそんなこと聞くなんてなんて変態さんなのー！上から」

「聞きたいですけどそれよりも聞きたいことがあるんです！」

「へー素直だね！」

俺が聞きたいことはただ1つ！4月29日何をしてたか、だ！

リサさんに聞いた時その日は日菜さんとショッピングモールで買い物をしてたと言っていた。

なら同じ返答をいただくはず！そして……相違していればどちらかが言い方悪いが嘘をついていたことになる。

まあ嘘をつくメリットなんてアサシン以外ではないと思うけどさ、てかそう簡単に嘘がバレるわけないか

「4月29日……その日、どこで何をしていましたか？」

聞くだけ聞いて見よう。同じ返答なら2人ともアサシン候補から外れる、ただそれだけだ。

「4月29日？4月29日はねー？」

んーと腕を組み考える日菜さん、やはり数ヶ月も前のことは覚えていないか

「ごつめん、忘れた」

「……ですよね」

「うん、忘れたからスケジュール表見直すね！ちよつとまってる！」「えー！」

スケジュール表！そうか！日菜さんはアイドル！それも売れっ子のパスパレだ！スケジュールだつて管理しないとやっていけないほど忙しいに決まってる！

手帳らしきスケジュール表をリュックから取り出し確認をする。今どき携帯が主流だと思つてたがそうでは無い人達もいるつて訳か

「4月…29日…はーうん！オフの日だ！」

「それでー！」

「それでね…リサちーと買い物行く約束をしてー」「な、なるほど」

やはり2人は買い物に行つていた。てことで結論おけかな？これで日菜さんとリサさんはアサシン候補から除外つと

「でもその日リサちーに用事が出来て延期になつたんだ！」

「?!」

「おー！思い出した！そうだ！つぐみちゃんに捕まって資料の作成してーその後Pから電話来て暇ならご飯食べ行こうつて誘われたの！あの日食べたチーズINハンバーグの美味さを忘れるなんて！」

「ああー思い出したら食べたくなつてきちゃった！ねえつぐみちゃんレイ君！今から食べに行かない!?Pに車出すように頼むからさー！」

「……………」

「……レイ君？どうしたの？ぼーつとして」

「……いやなんでも」

どうゆことだ…？

「(リサさんは俺に嘘をついていた…?)」

言い方悪いけどそうなる、よな？だつて日菜さんはPとハンバーグを食べたんだろ？

待て、その前につぐみから捕まって資料を作成してたと言つてたな、それはつぐみも同伴でつてことか？

そ、それはまた後日考えるとしてだ。

日菜さんが嘘をついている…って可能性はあるかもだけどリサさんの買い物に行く約束がドタキャンされた事実は変わらないだろう？

肝心なのはドタキャンした本人であるリサさんがその日は日菜さんと買い物をしてたと言ってるんだ。

これはもう嘘をついていると確信していいのではないか…？

「ねえ行こうよ！ハンバーグ食べたいー」

「日菜先輩、せめて今日の仕事を片付けてからにしましょう」

「片付けたら一緒に行ってくれるの!？」

「行きますから、とりあえず仕事を終わらせましょう」

「本当!? やった! じゃあすぐに終わらせるね!」

シユパパパパと俺よりも早い高速タイピングで次々文字を入力していく、その速さに嫉妬しながら俺はゆっくり生徒会室のドアに手をかけた。

「あれ? 帰っちゃうの? 一緒にハンバーグ食べに行かないのー?」

「……………いや俺は」

「そうだ! 多分彩ちゃんも暇してるから誘おうよ! つぐみちゃんも誰か誘ってもいいよー!」

「ええ私ですか? 私は…巴ちゃんでも誘いましょうかね!」

「……………それでレイ君は?」

「……………すみません、どうしても確かめたいことがあるのでまた後日でもいいですか?」

日菜さん達に構ってる暇なんてない。

今俺は答えにたどり着こうとしてるんだ、さっきの返答によりリサさんがアサシンの可能性は他の誰よりも高いと判断した。

これはすぐに確かめないと…!

手に力を込めてドアを開けようとした時、俺ではない誰かがドアを開けた。

「わっ! あれ? レイじゃん、お久ー元気してた?」

「ッ!?! リサさん!?!」

「?どうしたの声なんか裏返して、もしかしてアタシに久しぶりに会えて嬉しかった的なやつ?ほれほれ」

「あーいや、ちよつ!あ!俺!そろそろ戻らないと!ごめんなさい!」
「????」

「さようならああああああ!!!」

「え!ちよつと!レイ!?ねえ!レイったら!」

その後レイは顔を両手で隠しながら廊下を全速力で走り、階段も全力で駆け上がりノンストップで視聴覚室に向かうのであった。

「変なレイ」

「そう言えばダンス部もまだ申請書提出してなかったね、リサちー達は何するの?」

「ふっふっふーそれはこれを見てからのお楽しみ♪」

申請書を日菜に渡した後ウイנקをするリサ、それを見ながらつぐみが思ったこと、それは:今度私もやってみようかな、であった。

「そうだ、リサちー聞いて聞いて!さっきねレイ君がアタシに変な事聞いたんだよ」

「変なことって?」

「4月29日何してたかって」

「:あ、ふーん」

何となく察したりサはふーんと返事をしたあと特に話すことなく生徒会室を出ようとした。

「そうだ!リサちー!今からみんなでご飯食べに行く予定なんだ!車出るけどいかない?ねえ行こうよ!」

「日菜、お誘いありがとう、でもアタシ今日シフト入ってるんだよねー」

「バイトかーなら仕方ないね、また今度誘うよ!その時は絶対行くうね!」

「おっけー!その時は絶対行くから!日菜の奢りね♪」

「えーそこはじゃんけんでしょー!」

「あつはは!そうだね、じゃんけんだよね:後出しは:なしだかんね」
「?うん!」

「……それじゃまたね♪」

リサは生徒会室を出ると親指の爪をかじりながら、そして険しい顔をしながら教室に向かうのであった…。

その頃レイはと言うと

「うわあああああああ！あーあああああ！」

全速力で廊下を走っていた。

その姿はまるで恋する乙女、と言えるだろう。何故なら彼は周りが認める中性的な顔を持ち、なんなら蘭から可愛いとお墨付きの美形なのだから

恥ずかしがるように両手で顔を隠し廊下を走るその姿を目撃した生徒は何を思うだろうか。

それは青春だなコノヤロウ、だった。

「何やってんだよ俺は?!」

リサさんに確認しようと思気込んで生徒会室を出ようとしたら？まさか目の前にリサさんがいて？

そして、リサさんがアシンダと思うと…もうリサさんの顔をまともに見れなくて…何あの人、近くにいたけど可愛すぎんか？

「恥ずかしさのあまり逃げ出したし…絶対変だと思われたあー！」

レイの言う通り変だなどは確かに思われていた。

そんなことを考えながら、そして奇声を上げながら視聴覚室に続く階段を駆け上がり思いっきり重いドアを押し開けた。

「うへええん！誰か俺を殺してくれえええええ!!」

「?????」

下着姿の女生徒達が首を傾げながら膝を着くレイに何言ってるんだこいつ、と視線を向けていた。

なおレイは彼女達の姿に気づくともなく膝をつき下を向いては一言一言床を殴っていた。

「結局チキンじゃないか！何もできない！成長したと思ってたのにいー!!」

いざリサさんを目の前にすると頭が真っ白になって、リサさん可愛ええーってしか思わなくて、聞くことすら出来ず恥ずかしさのあまり

逃げ出した。

「……レイ、確かにレイはヘナチヨコ腰抜けチキン野郎だよ」

「今は言うなよ！心にクリティカルヒットだよ!」

いつも通り蘭は俺を励ますことなくヘナチヨコ（略）野郎と俺を呼ぶ、でもそれは本当だと今回のことで身に染みて理解した。

「大丈夫かれつくん？おっぱい揉むか？」

「ありりい！お前だけだよ俺を慰めてくれるのは!」

「ひゃん!」

ありりに抱きつき胸の感触を頬で確かめようとした。今回ぐらい少し逃げてもいいのではないだろうか…。

と弱っていた心にそう言い聞かせプライドなんて捨てて有咲に抱きつく

「れ、れれれつくんがあたしに抱きついてる!」

「へ、へへ、いいぞ、このままずっとあたしに甘え続けていいんだぞ！はああああ！いい、最高だあ」

有咲はレイの頭を撫でながら天にも登るほどの笑顔でそう呟く、それはもちろんレイにも聞こえているが

「?おう」

なんて他人事のような返事をしていた。恐らく深く意味を理解してないのであろう。

「……な、に、やってん、の!」

「痛っ!」

ありりに抱きつきおっぱいの柔らかさを堪能してたところ蘭から延髄を捕まれ無理やり引き剥がされ最後には投げ飛ばされた。

「あー何やってんだよ蘭ちゃん!?れつくんは今アリウムを補給してたんだぞ!」

「アリウム…?」

凜は首を傾げながら、そして乱れた服を着直しながら有咲にそう問うていた。

ちなみにアリウムとは有咲とレイが触れ合った（レイが有咲の胸を触る、もしくは触れた）時に発生する謎の元素だ。

と有咲は凜に説明をしていた。

「……意味わかんない、それ」

「意味がわからないのはお前の方だ、精神的に病んでた俺がアリウムを欲するのは当たり前だろうが！」

「れ、レイ君はアリウムを知ってるんですね……まさか普段から摂取を……！」

「え!?有咲とゼロ君エツチなことしたの!?えちえちだね!」

「ばっ!し、してねーよ!……まだ」

なんかありりがチラチラこちらを見てくるが今は気にしないでおう。

てかさ

「……なんでお前からまた下着姿なんだよ!」

先程ありりに抱きついた時の胸の感触で何となく察していたが……
またしてもこいつらはなんで下着姿なんだよ

凜に関しては脱ぎかけ?もしくは着替えてる途中?なのか滅茶苦茶エロく見える。

「それは私がお願いしたんですよ、だって資料がないと掛けませんか
らねー!」

「燐子さんがお願いしてるのなら仕方がないか」

腕を組みながらうんうんと頷き返事をした。

なんかもう受け入れないとさらに面倒くさくなると察したんだよ
「それはそうとさー有咲ってわかりやすいよね」

「んー流石に丸わかりすぎるよ、もしかして私より先にエツチなこと
する気でしょー!」

「……え、何言ってるのかワカラナインダケド?」

下着姿で髪を人差し指でくるくるいじりながら、そしてモジモジしながら答えるありり、この仕草はよく見る光景だ。

「ありさはれいのが」

「あああ!黙れ凜!モカちゃん!ひまりちゃん!やつちやつて!」

「あいあいさー」

「合点承知之助ー!」

「も、もうやめて！ようやく着替え終えたのに！なんでまた脱がせようとするの!?!」

モカとひまりのやつが指をわしゃわしゃさせながら凜にジリジリ近づくと

凜は逃げるように壁をせにして下がるも…壁を背にしているため、次第にどンドン壁に追い込まれ逃げるのが不可能になってしまった。

「またフロントブラなんて付けおつて〜」

「凜ちゃんはエッチだねー」

「だから下着は楓凜が！ぎゃー！うぎゃあああああ!!!!」

凜の断末魔を聴きながら俺は自分の荷物を置いている席に向かい座り込む、その際ありり達は先程の話の続きをしていたようだ。

「凜ちゃんさんは何を言いかけたんですかね…?」

「えつとー有咲はゼロ君のことがー?」

「……レイのことが?」

「な、なんなんだよお前ら!こ、こつち見んな!」

と言いつつありりのやつは俺の方をチラチラ見てくる。

ありりは俺のことが?…一体どういう意味だつてばよ

「ダメだ、わからん」

と言うレイをクソ鈍感主人公だと思うだろう。しかし彼の頭の中には今リサのことしかないのだ。

あの一連の流れからして現在今井リサ、がアサシンの可能性が高いとみてるレイはリサのことしか考えれないのだ。

ちらりと後ろを見てみれば服を奪われ部屋の隅でうずくまってる凜がいるし、隣を見ればありりが質問攻めされてるし

「はあ、リサさん可愛い…」ボン

誰も聞いてないと思えばソツとそう呟く

人つてのは単純で些細なことでも人を好きになってしまふんだろう。

まあ俺は好きって言うより、アサシンの可能性、つてわけで…むふふ、リサさんと付き合えるとなればもう最高の人生だろう。

「ふふふ、ふふふふ…」

自然とにやけてしまう。俺はどうやら変態のようだ（ようやく自覚した）

「なにニヤけてるの？キモイんだけど」

「おいおいおい、そうデイスるな、今レイさんは将来のパートナーとの熱々新婚生活をシミレーションしてるんだ」

「……なにそれ、最高すぎるんですけど……！」

「はっ!?!ら、蘭……！」

鼻血を出し鼻を抑える蘭に対して心配になった俺はハンカチを渡した。血だらけになるが蘭の鼻血が止まるならそれでいい

「レイと柊優の新婚生活、いい！最高！あんた達早く結婚してよ！」

「いや無理な話だから！」

「とある県のとある市では男性同士でも結婚が認められてる市があるからさー！あんた達そこに住みなよ！」

「断固拒否する！そんな変なことで鼻血出したのかよ!?!」

あーあーあー、ハンカチ血だらけじゃねーか、まあどの道洗う予定だからいいけどさ

「よし、いいネタ貰ったし作業に戻ろうかな」

「……あ、はい」

蘭のやつはペンを手に持ち義妹の絵を描き始めた。

「あたしもそろそろ描かねーと！ほら燐子さんも！」

「え？まだ質問の返答が」

「それはもういいですから！」

「ねえねえ有咲ーゼロ君のことがなんなの？」

「も、もういいだろ！」

小走りで席に戻る際、大きな胸を揺らすありり、知ってるか？俺さっきまであの胸を堪能してたんだぜ

「ふん……！」

「ツ！だから痛いって！」

手の甲を蘭につねられ反射的に引っ込めてしまう。

「見すぎ、このおっぱい星人」

「も、もう聞きなれたっての」

とりあえず今は執筆に集中しよう……。って俺はもう描かなくていいのか、水着姿の絵はSS付けなくてもいいだろう。

となると、あとは？

「蘭とありりは絵を描き終えたのか？」

「おう！今から見せるからちよつと待ってる！」

「……………はい」

ありりと蘭からタブレットを受け取り絵を確認する。

これで、春乃、夏美、秋音、冬香全員の1人ずつの絵が完成した。

ありりは各々所属部活の装いで、蘭は完全私服の姿、正直義妹の私服姿なんて挿絵でも滅多に目にかかれないからなー

舞台は学校だし？家でのお出来事は部屋着とかだからな、早々目にかかれるものではない。

それにあのRANが描くんだ、ファンの人達が好んで買ってくれるに違いない、そしてあわよくば…広めてくれたり、なんてな

「よし、これで3人とも水着絵以外は描き終えたな！あとは任せろ！俺がいい感じに編集しとくから！」

最新のパソコンでちよちよちよいと編集して、SSをいい感じの場所に配置してつと、完成したらみんなに見せてやろう。

まあ文化祭も近いし多分ギリギリになってしまうと思うけど

「無事に終わって何よりですね！」

「まだ水着絵残ってますよけどね」

「蘭ちゃん…そこは素直に喜ぼうぜ？水着絵なんてすぐ終わるだろ？」

あたしは別だけど

「それもこれも全部レイのせいだけだね」

「そ、それは悪かったって！と、とりあえず今日やれる所までやろうぜ！」

「いい感じに流されてもダメだから、レイも服を脱いで全裸で執筆するべき」

「もう執筆することないから、てか脱がねーから、てかもう帰りたいから」

誰が好き好んでこんな下着姿集団の中にいたいと思うんだ。

さつき普通に話してたけどよくよく考えればこいつら下着姿だったんだぜ？よく平然と喋れたな俺

「とりあえずお前達服を着てくれないか？」

「とか言ってレイ君喜んでるんでしょー？勃起してたりして！」

「してたところで見せない」

「え!?!してるの!?!エッチしようよー!!」

「近寄んな!?!」

凜のところから走ってやってくるひまりに恐怖心を抱きながら机を持ち上げ逃げていた。

持ち上げながら逃げる理由は察して欲しい。

ありりと燐子さんの下着姿なんて見てみる、日菜さんに言った通り一部が石化するよ

「レイ君そろそろいいじゃん!一回だけ!」

「お前は一回で満足しないだろうがー!」

逃げるレイとそれを追いかけるひまり、その光景をみてサークルメンバーを何を思うか

「ふん…いつも通り、だね」

蘭は鼻で笑い引き続き自分の作業に取りかかるのであった。



数日後、結局俺はリサさんと話すことなく時間が過ぎてしまった。

「ありがとうございます!」

「しゃーしたー」

こないだのサークル活動の風景から一転し、俺は毎度同じのコンビニにてバイトをしている。社会に貢献しているのだ。

土日のシフトは入れないが平日は入れると話したため、通常通りぶち込まれてしまった…。

余談だが、話してないだけでちよくちよくコンビニのバイトはしていたんだ。

ちようどモカがない日が多かったからな、特になにか起こることもなかったし？

「れーくんここではお久ー」

「……ああ、そうだな」

流石にコンビニで胸を押し付けたりするようなことはしないよな
てかコンビニと言えばリサさん、今日シフト入ってなかったな
シフト確認したけど俺とリサさんのシフトが重なるのは1週間後、
長い、それまでに嘘をついていたのか確かめたいんだが

人生上手くいかないものだ、学校で話しかけるのもなんか照れる
し、職場なら何とかなるかと思っていたが…これは無理そうだな

「ねえねえレくん、どうしたーの？元氣ない？有咲みたいに大きく
はないけどおっぱい揉む〜？」

「悪いな、俺はありりみたいに大きな胸しか興味がない」

「むうーそれは今のところどうしようもないよ〜」

自分の胸を持ち上げながら言うモカの仕草を横目で見ながら内心
心臓バクバク状態、というのもこのやり取りを、またこの光景を誰か
に見られたのではないかと思うと怖い

「なあお前ら」

『ツ?!』

俺は驚き後ろをむく、モカのやつも驚き後ろを向く前に俺の背中に
隠れた。

正直この変態野郎がこんな反応するのは意外だな

「今月の焼肉いつ行く？」

「て、店長！驚かせないでください！」

「なんだよ、なんか2人で秘密の話でもしてたのか？」

「まあしてましたけど盗み聞きたりしてたら…店長のこと殺して
たかもでーす」

「おいおい、怖いぜモカちゃん？時給少しあげるだけで許してくれよ」
「許しませーん」ニコニコ

めっちゃニコニコしながら言うモカにこいつならやりかねないと
思いながら俺は苦笑いをしていた。

「き、聞いてたら話だろ？店長聞いてたのか？」

「全く聞いてないぞ、そもそも俺さつき休憩（喫煙）から戻ってきた
ばっかだしな」

「ならよかつたじゃんか、なあモカ？」

「聞かれてたらまずかつたのか？」

「そりゃーまあ一応2人だけの秘密というか、なんというか」

頬をかきながら誤魔化すように言うも店長は信じてくれるだろうか？

それに2人だけの秘密ではない、サークルのメンバーはモカが露出魔であることは全員把握済みだ。

「なーにが2人だけの秘密なのかな♪」

「はは、それはモカと俺の2人の…」

「えい！日菜の言う通りだー引つかかった引つかかった！」

「ッ!？」

声が聞こえた方に顔を向けると誰かの人差し指が俺の頬つぺにぶつ刺さる。

「リサさん!?! なんで!？」

「なんかさ大学生の子いたじゃん？あの人辞めたらしいから急遽代わりに来て欲しいって店長から呼び出されたんだ」

「へ、へえーそ、そうなんですな」

ま、まずい、目の前にリサさんが！アサシンかもしれないリサさんが！

これは好都合だ、こないだは恥ずかしくて逃げたけど今は逃げられない！

ここはバイト先、つまりは勤務先！そんなところで逃げるなんて選択俺にはない、選択肢は立ち向かうことのみだ。

「はい、リサちゃん早く着替えて着替えてー来たからにはちゃんの働いてもらうよ」

「はーい♪」

「ほら、レイ達も働けー今月の焼肉が不味くなるぞ」

「高級焼肉店に行きたい」

「……ならちゃんと働かないとな」

そう、ちゃんと働きながらリサさんから聞き出さないといけない。

もうほぼの確率で嘘をついているとは思いますが…そこからの流れが

大事だ。

そこで突き詰められるかどうかは俺の技量にかかっている…つてところか。

正直もうそろそろ見つけたい、リサさんがアサシンということで話を進めるか？

でもそれは毎回違う方向に話が進んで各々隠していた秘密を突き詰めるという別の話になってしまう。

…ここはあえて俺になんで嘘をついていたのか、と問い詰めようか…。

なんとレイはこれをレジ打ちしながら考えていたのだ。よくミスをしなかったものだ。

「レイ、品出し頼む」

「了解です」

リサさん…はトイレ掃除？してるのか、くそ、品出しなら隙を着いて話ができると思ったのにー！

ん？待てよ

「……て、店長ー品出し人が足りませーん」

「えー？なんて？ー一人で頑張ってくれ」

「あ、はい」

流石に嘘が秒でバレるか、品出しが人手不足とか早々ないもんな、範囲と時間を分担して仕事するし…今は俺一人だけど

大人しく品出し作業を行って時を待つか、でも同じシフトだからってリサさんと一緒になにかできるか分からないんだよなー

バイト終わりに声をかけるか？

「……レイ」

「ーはっ、はい！」

掃除を終えたりリサさんが俺に話しかけてきた。

なんだろう、先程から主人公補正かのように流れが上手くいっているような気がする。

なんだか知らないが俺は今日だけで今年の運を使い果たしたのかもしれない！それでも構わない、今日で突き止めてせる！

「人、足りないんでしょ？手伝うよ？」

「あ、あつはは！助かります」

「？急に笑いだしてどうしたの？……レイこないだから変だよ？」

「えー変ですか？そんなーどの辺が？」

「んー急に走り出したりー？笑ったり？」

「……それはもう変ですね、変すぎますね」

言われてみれば変すぎる。これは絶対キモがられるやつだ……まあアサシンなら俺のことを嫌いになったりしないと思うけどな！

少し会話をしたところで作業に戻る。自分から話しかけようと思うがなかなか言い出せない、チキン野郎とはまさに俺のことだ。

そんな俺を見て嫌気がさしたのか、それとも俺がなにか言いたげであることを察したのか、リサさんが俺に話しかけてきた。

「こないだ生徒会室で何してたのー？」

「ツ！文化祭の申請書を提出に」

「レイって帰宅部じゃなかったけ？」

「それがひよんなことから放送部に入部することになったんですよ」

「うちの放送部って一気に部員が辞めて同好会になってなかったけ？」

「なんで知ってるんですか、そうですけど……部員が増えたから部活に戻ったんですよ」

商品を並べ店長にバレない程度の音量で話をする。今のところバレる様子もないしこのまま会話を続けられるだろう。

「何するの？」

「……それは秘密です」

「えーお姉さんに教えなよー」

アホか、メイド喫茶するなんてこの人に言えるわけないだろ、恥ずかしくすぎるっての

とは言っても当日バレるか、これは盲点だったな、結局恥ずかしい思いをすることは変わらないようだ。

「ところでさあ、レイはアタシに聞きたいこと……あるんじゃないの？」

「?!」

俺は驚き作業のため動かしていた手を止めリサさんの方を向く、向くもリサさんは何食わぬ顔で作業を行っていた。

これは罠か？いや、そんなことは…リサさんはあの日生徒会室に来ていた。

入室したあと日菜さんと話をした際に…俺が4月29日何をしていたか質問されたと話をしたのか…？

ご名答、まさにその通りだ。この主人公無駄に勘がいいようだ、全くどこの滯奈に似たことか

「(ならもう真正面から聞くしかない!)」

唾をゴクリと音がリサさんに聞こえる勢いで飲み込み、息を少しだけ整え震える声で質問した。

「俺に…嘘つきましたよね？」

「……………」

「4月29日、日菜さんとショッピングモールで買い物した、ってリサさん言っていましたけど…」

「日菜さんはその日Pとご飯を食べに行ってたそうなんですよ」

「……………」

リサさんは俺が問いただしたあと下を向いたまま黙り込んだ。

動いたと思えば普段リサさんなら絶対しないであろう、ドン!商品を思いっきり叩きつけるように置き、棚に並べた。

その様子を見た時俺は聞いてはいけないことを聞いたのではないかと思ひ一人、勝手に焦った。

「ふふ、んもーう、やっぱり最近のレイは変だよー？」

「へっ？」

先程の様子とは打って代わりリサさんはいつものように女神様のような笑顔で俺にそう言ってきた。

「嘘つきなんて酷い呼ばわりだよねー」

「ぐ、ごめんなさいー!」

「…………あれはね、本当に嘘なんだ」

「は、ははっ!嘘だったん…ですね」

「なんで嘘ついてたのか知りたい…？」

「!知りたいたい!知りたいです!」

まさかここでもう正体をバラしてくれるのか!?やはりリサさんがアサシンだったのだろうか!?

そう期待に胸を膨らませリサさんの返答を待つ、これ程1秒が長く感じた時があるだろうか、いやない

「それはアタシがみんなに言えないようなことをしてたから
「ん!」」

「こればかりはいくらなんでもレイには言えないの、ごめんね?でもまさかレイが日菜本人に聞くななんて思いもしなかったよ♪」

「騙してたことは謝る、ごめんね…」ペコリ

リサさんは俺に頭を下げ顔を上げたあとニコッと笑って見せた。

「(アサシン:ではなかったってことでいいのか?)」

もしくはアサシン得意の嘘?レイには言えない、は俺には言えないこと?

なんだそれ、ますます怪しいぞ…!やはりリサさんがアサシンなのか!?どうなんだ!?!何がなんなんだあああああ!

「おーい、レイ?大丈夫?本当の本当に変だよ?」

「はっ!あ、いや…な、なるほど、秘密ってやつですか」

「そつ、生きてたら誰にでも秘密にしたいことだってあるでしょ?レイにはないの?」

「俺ですか?...ありますね、そりゃ」

それもそうだよな、モカ含む変態幼馴染集団だってこないだまで俺に変態である正体を隠してたしな

やはり人間誰しも人には言えないことを抱えて生きているものなのだろう。

「おーいレイ、そろそろレジに戻ってくれ」

「了解です店長」

「:...それじゃあ俺行きます、あ、俺こそ嘘つき呼ばわりしてすみませんでした、今度なにかお詫びさせてください」

「うん♪期待しとくねー♪」

これはハードルが上がったな、さてお詫びになにしてしてやろう

か、少し考えないといけないな

軽く手を振り俺はレジに戻ろうとした。

「待って」

その時リサさんはいつもより少しだけ低い声で俺にそう言い靴の踵を踏んずけた。

脱げそうになる靴を必死に脱げないよう絶妙なバランスを取りながら俺は返事をする。

「なんですか？」

「……レイはさあ、アタシの秘密……知ってたりしないよね？」

「……それはもちろん」

「じゃあ最後に聞かせて、なんで寄りにもよって4月29日なの？」

「それはその日俺が……」

俺が、のあとなんて答えればいいんだ？アサシンに告白された日……って答えればいいのか？

そんなの普通の人が聞いたら？こいつは何を言ってるんだと思われるに違いない。

「レイー遅いぞ、早くしろー」

「ツ！わっかりました！今行きます！」

「ごめんリサさん！また今度！」

「……………ツ！」

踏まれていた靴を一度脱ぎ捨て、くるっとターンをしたあと速やかに靴を回収して歩きながら履く

「……………」

リサはレイの背中を見つめながらはあと一息付き、両手で頬を数回叩いた後

「よーし！作業戻ろっ♪」

いつものように作業に取りかかるのであった。

「レイ遅いぞ、モカちゃんがお前のパン食べちまったじゃないか」

「あふあしひゃー」

「レジ打ちって言ってませんでしたか？」

「?・そう言えば早く来ると思ってたな、いや何?お前まさか本当にリサちゃん狙ってるのか?」

「は、はあっ!?!何言ってるんですか!」

そう言えば昔一度彼氏のふりをしたことがあったけ?…多分もうやることはないと思うけど

にしてもなんだろう。リサさんがそこまでして知られたくない秘密って…やはりアサシン?それともそれ以外?

でも最後のあれ絶対普段のリサさんではなかった。正直少し怖かった…。

これは早急にお詫びの品を用意しなくてはな、これ以上機嫌を損なわせたら今日以上の怖い目にあってしまう。

「(リサさんはとりあえず4月29日なにか知られたくないことをしていた…ってところか)」

アサシンの可能性は上がったようで、下がったような?とりあえず急がす少しづつ慎重に聞き出していくとしよう。

俺はそう心に決め残りのバイト時間を過ごすのであった。

バットエンドのその先を知っていますか？

バイト帰り俺はスーパーにより買い物をしていた。

何度も言うが買い物は素晴らしい、嫌なこととか忘れて集中するの
にうってつけだ。

この時間帯は北沢精肉店も佐藤さんの所の八百屋も営業してない
からな、今回はスーパーの野菜とお肉で我慢だ。

また週末には買い物に行かないとな、久しぶりにコロツケも食べた
いし

「ありがとうございます」

舌足らずの店員さんの声を聞き流し俺はスーパーを出た。

暗くなつた夜道、照らす街灯はあるものの間間は暗いものだ、俺は
幽霊とか信じていないが怖いものは怖い

特にこの辺はDMや露出魔などの目撃情報が多々あるからな、なお
そのDMの罠にかかり一時期捕まるのではないかと帯びていた俺が
いる。

『……………』

すれ違う人達は大半がイヤホンをつけ音楽を聴きながら帰宅して
いる。

この時間にスーツ、さては残業ですか？お疲れ様です。あなたは
きつと出世できる、嫌いにならずその仕事を続けてください。

なんて他人事のように頭の中で1人つぶやく、帰路も残りわずか、
この角を曲がればいつもの家が

角を曲がり家が見えて一安心したところで少し歩く速度を上げた。
上げるうちにみるみる家は近くなる。

姉貴はもう帰ってきてるだろうか？最近義妹のアニメ化にともな
い姉貴も忙しい身になった：今日は帰りが遅いのだろうか？

ほれみたことか、車が止まってない。まだ帰ってきていないよう
だ。

「(ゆっくりするか)」

まずは風呂を沸かして、沸かしてる間に今晚の準備をして、それか

ら…。

とこれからのことを考えながら歩いていたら家の目の前に誰かがいることに気づいた。

大きなカバンを持ち、ウキウキしながら待つその仕草はさながらご主人様の帰りを待つペットのようだった。

そう、クソ変態ドMペット志願者の宇田川巴こと、もと健全幼馴染み集団の1人が俺の家の目の前にいたのだ。

「…ご主人様！おかえりです！」

にかーと笑い俺に近づいてくる巴、俺は今すぐに手に抱えた荷物を放り出し逃げたいところをグツと堪えた。

「……………」スタスタ

「んんっ！無視！流石ご主人様だぜえ…これが放置プレイ…！」

俺はただ無視して先程よりも早歩きをしながら家の玄関に向かって
いるだけだ。

決して放置プレイをしたがるドSなやつじゃない。

「ご主人様ーカバンをお持ちします」

「結構だ、帰ってくれない？」

「くふうー！で、でもペットはいかなる時もご主人様のところへ馳せ参じるもの！宇田川巴！絶対に帰らない！」

「……あっそ、俺は帰るけどね」

鍵を取りだし素早くドアを開ける。そして俺は少しだけ開けたドアの隙間に入り込み家に入ろうと試みるも

「まー待ってください！ご主人様！今日は遊びたくてきたんですー
！」

「ですうー！とかその見た目で言うな！」

「その見た目ってなんですか!?可愛いペットでしょうが！」

「自分で言うな自分で！」

「前みたいに夜の道を散歩しましょう。ほらもう首輪もつけて準備満
タン、もう濡れ濡れです」

体をビクビク小刻みに痙攣させながら、そして少しヨダレを垂らしながら言う様子に俺は苦笑しかできなかった。

こいつもう軽くイってるのではないか？

まだこの程度で済んでるからいいものの将来大人の玩具を装着しながら満員電車に乗ったり、なんかそーゆうAVであるようなことをしでかすのではないかと思ってしまう。

「何度も言うが俺はお前のご主人様じゃない、ほら由明日、お前あいつと仲良いだろ」

ここで友を売るゲス野郎、それが神崎レイ主人公なのだ。

「……あいつは候補です！」

「候補なんかい!？」

それはそれで驚きが、でもそれって由明日の方がドS質が強いと知ればそつちをご主人様と認識してくれるのでは？

巴を無能なAIとでも思っているレイは一瞬そんな考えが頭に過っていた。

「(そもそもこの会話多分全部つぐみに聞かれてるんだよな)」

あいつ俺の部屋だけでなく家全体に仕掛けてるみたいだからな
全くどうかと思うぞ、人の生活音を好みそれを聴きながら勉強したりするなんて、つぐみはきつとASMRが好きなタイプだろ

「巴さ、もしもだぞ、もしもお前がDMだって蘭達に知られたらどうする?」

「……………友達でいられなくなってしまっても」

「お、おう…もつともな回答だな」

なら俺とも友達ではいられなくなると思って欲しいところだ。

「けどレイはご主人様になったから問題ないぞ! さあ! リードを握って、夜はこれからだぜ!」ハアハア

「……………」

首に繋がるリードを俺に渡そうと手を挙げた。無論俺はそれを受け取る気なんて更々ない

こんな発情したペットを今まで見たことあるか? と全国のペットを買っているご家庭に質問してみよう。

9割がないと答えるだろう。残りの1割は知らん

「おおレイ、お久」

「！お隣さん！」

の一人息子、俺より一個上の先輩だ。先輩と言ってもお隣同士なだけで特に仲がいいわけではない。

お隣だけど幼小中高一貫校に通ってるもんだからな、それほど絡んだ覚えはない。

「(それどころがまずいぞ……！巴は幸い背を向けてる、首輪は髪が長いおかげで上手く隠れている！)」

このままゆっくり家に入れと言わんばかりの視線を巴に向けるも

…

「……は、はあ、はははあ……♥」

ダメだこの変態、興奮してやがる。

「おい、早く入らないと痛い目見るぞ」

「ふふ、ご褒美だぜ……」

「……………」

相変わらずのドMに少し以上に引く、めちやくちやいやそうな顔をしながら巴を家に招き入れた。

「その子彼女さん？いいなーうち男子校だからさ、女子と全く絡んだことないんだよな」

「へー先輩もた、大変ですね」バタン

巴を迎え入れたあと俺はドアを閉め外に出る。これで巴に気を使うことなく話を進める終わらせることができる……さて、どうやってこの人を退こうか。

「それよりこないだの鮭どうだった？自慢じゃないけどあれ俺が釣ったんだよ」

「……ステーキにして食べました、美味しかったです、では」

くるつとスケート選手も拍手をしてくれるであろう綺麗なターンを決め俺は家に帰ろうとした。

「待てよ、久しぶりに会ったんだからもう少し喋ろうぜ？」

「い、いやー俺達言うて仲良くないですよね？」

「……ああーなるほど、やはり彼女さんか……悪かったな、邪魔した、楽しくやってくれ」

「そうです彼女はです、これから一緒にご飯食べる予定なので」
「う、羨ましいやつだなこの野郎…畜生」

俺も共学に通っておけばーなんて言いながら正直名前も覚えていない先輩は家に帰って行った。

隣人の名前ぐらい覚えておけよと言うがね、君達は知ってるのか？知らないだろ？つまりそういうことなんだよ

とりあえず彼女ですと言えばすぐに引き下がると思ったら、これであとは巴を帰らせば

「へへ、ご主人様、アタシのこと彼女って…アタシ的には肉便器の方がいいと言うか、なんと言うか」

「何モジモジして答えてんだよ、気持ち悪いぞ」

「んんん！さ、流石ご主人様、罵倒が凄まじいぜ」ハアハア

話を通じねえ！何をどうしても帰ってくれないつもりか？

「！」

携帯のバイブ音が鳴った。内容を見てみると姉貴は今日日本社に泊まるとのこと、夜ご飯は適当に買うからいらぬ…と

せっかく沢山材料買ったのに、まあ幸い生ものは買い込んでないから明日にでも食べればいだろう。

さて、姉貴が本日帰らないとなれば俺は速やかに編集作業を行いところなんだが…先輩を退いたあとはこの変態の相手かよ、今日1日だけで大変だな

「巴、お前帰る気は」

「ない！絶対散歩すりゆうー！」

「引く気なしか」

勘弁して欲しい、こないだ見たたく学校のプリントで不審者が出たと知らされるこっちの身になって欲しいものだ。

本人は喜んでるようだけど

「！そうだ、巴…散歩よりも楽しいことしないか？」

「ツ!?セックス!?!」

「ちげーよ、お前に俺の童貞やるわけないだろ」

「アタシの処女はご主人様の物！いつでも突き破って構わないぞ！さ

あ！」

「ッ！」

スカートをたくし上げ下着をもちに見せつけてきやがった、若干濡れているのは気のせいだと信じたい。

「とりあえずその首輪をはずせ、じゃないと楽しいこととしてやらないぞ」

「はい！外します！」

「よし、いい子だな、代わりにそこら辺にある庭の土と草を食っていいぞ、俺は準備があるからな」

「ご主人様がそういうなら食べておきます！」

「……………いややっぱりそのまま待っててくれ」

「はい！」

罪悪感を感じたレイは言い直し買い込んだものを冷蔵庫にしまい、部屋に戻り楽しいことの準備をするのであった。



「まじねーわ」

由明日はレイより話したいことがあるから公園に来るようにとまるで告白されるかのようなメッセージを送り由明日を公園に招いた。

「よく来てくれた由明日、お前なら来てくれると思ってたぞ」

「ま！じ！ね！ー！わ！」

「伸ばす棒にも！をつけるのか」

なおこの世界は！や!、?!などは見えはしないが漫画のように顔の横に表示されているような捉え方で構わない。

「ご主人様何故由明日を？」

「決まってるだろ、一人だと寂しいからだ」

「まじねーわ？」

由明日を呼んだ理由がそんなことだと思うなよ、由明日は俺以外に巴の正体を知っている人物だ。

先ほども言ったがいい感じに由明日に懐いてくれないかと思いい由明日を呼び出したんだ。

本当にすまないと思ってる、でも許せ由明日！

俺はこいつの他にも相手をしないといけないだぞ!?

「……巴、これ、なーんだ」

俺はポケットから野球ボールを取りし巴に見せつける。

それは親父との数少ない思い出の品、小さい頃よくこの公園でキャッチボールもしたし親父が投げたこのボールをカラーバットと打ち返したりしてたものだ。

カラーバットに関してはつぐみとの件で壊れてしまった。

「ボールだ!」

「そう、これを……とつてこーい!」

「!」

巴のやつは四足歩行……ではなく普通に二足歩行の全力ダッシュで投げたボールを追いかけに行つた。

その光景を見て俺達が思ったことは

『まじねーわ』

だった。

「……いてーいててー! きゅ、急にお腹が……! 由明日、俺ちよつとお腹痛いからトイレ行つてくる」

「まじねーわ」

「いやついでこなくていい、本当すぐに終わる、出すもの出したら帰る……じゃない戻るから!」

「……まじねーわ?」

「ま、まじねーわー」

悪いな由明日、俺はこのまま帰らせていただくぞ

ゲス野郎だと思うだろう。しかしだ、ここで巴は恐らく残っている由明日にボールを投げるようにせがむはずだ。

となれば由明日は優しいから渋々手伝ってくれるに違いない、そして最終的には

由明日はこんなにも付き合ってくれるなんてーは、さては由明日が本当のご主人様なのでは!? なんて思ってくれないだろうか!

そうなつてくれると嬉しいな! あはは!

つと帰る前に少し尿をたそうか

公衆トイレに向かうも男子便所は汚すぎた、さすがにやばいと感じた俺は共同トイレを利用することを選んだ。

ここなら綺麗だろうと、そう信じて入ろうとした時

「……あれ？れーくんじゃーん、さっきぶりだねー」

「……………」

全裸の露出魔こと青葉モカが後ろから話しかけてきた。

その姿は月をバックにしたことで見事に大事な部分に影がつき運良く直視することを防ぎ息子は石化しなかった…。

「な、ななななんでモカがここに!？」

「なんでってーここはモカちゃんのテリトリーなのでー」

「て、テリトリーってお前な…」

そんな堂々としているから露出魔の目撃情報が出回るんだろっての!

頼むから捕まらないで欲しい、捕まったら俺達サークルがどうなるかわかったものではないだろ？

なんせあの露出魔が参加してたサークルだぞ？なんて言われるやら

「れーくんは何してたの?」

「?!さ、散歩だよ」

「えー本当はモカちゃんの裸姿が見れると思って期待してたんでしょ?」

「そんなわ、わけないだろ」

「ほ・ん・と・?」

「ッ!」

手を伸ばし俺の手を取った思えば直接俺の手を自分の大切なところへ運び無理やり触らせようとしてきた。

「やめろ馬鹿!」

俺は必死に抵抗して手を振りほどく、危うくあと少しで触るところだった…。

触ったりしたら責任取れとか言ってきたきそう怖い、なんだよそれ、そっちから触らせておいてそれはないぜ

「お前服は？」

「その男子トイレの個室の中ー」

「……なんで男子トイレの中なんだよ」

そこは女子トイレか共同トイレにしろよ

「共同トイレはみんなのトイレなので」

「そんなことを配慮しているのなら全裸にならないと思うんだが？」

「モカちゃん急に知能レベルが下がったからわからなーい！フエラさせてくれたら戻るかもー」

「黙ってるクソ女！とにかくすぐ服を着てくれ、今由明日と巴と3人でここに来てるからなー！見つかったらお前終わりだぞー！」

「ともちんと蒼井くんが？？なんで？」

「なんでもだ」

「……ふーん、なら服着るから取ってきてくれない？」

「くっ！」

まあ着てくれるなら取りに行ってもいいか……

はあと俺は溜息をつき男子トイレの個室に向かった。

手前の個室から開けてみるも服のふの字もない、最後の個室のドアを開けても服なんてなかった。

「おいモカ、服なんて何処にも……」

と言おうとした瞬間、後ろにあつたドアが嫌な音を立てながらバタンと閉まったかのような音が聞こえた。トドメは鍵を閉めた音が静かなトイレに鳴り響いた。

恐る恐る、ゆつくりと後ろを振り向くと……満面の笑みを浮かべる全裸のモカが立っていた。

「えへへーもうれーくん逃げれないね」

発情したメスの顔をしながらそう言うモカを見ながら俺は後退る。

「……嵌められた……」

ここは完全個室、そこまで広くない場所、ドアの方にモカはいる……ここから抜け出すなんて至難の業だぞ

こんな所で襲われてたまるか、俺は自宅、もしくは少し高いホテル、つまり綺麗なベットでエッチなことはしたい！それは男子全員が求

める浪漫なのだ！

「ここはなんとしてでも死守しなければ……！」

「お、おいモカさん？こんな所に俺を閉じ込めて何をやる気なんですか……？」

「なんだと思う……？ってー本当は気づいてるでしょ……！」ペロリ

舌なめずりしたあとモカは俺を勢いよく押し倒す。

「痛っ……！」

思いつきりケツを便座に叩きつけられ、背中も後ろの水を貯めるところに当たる。

こないだ視聴覚室のドアのせいで背中を痛めたばかりなのにさらに痛める羽目になってしまった。

痛たと背中をさすっている途中にモカは俺に股がりだす。これはもう完全に逃げれないやつ、だ……。

「……モカ、こんなことはやめよう、良くないとレイさんは思うんだ」

「それはあたしがきめまーす」

「……………」

正直に言えばモカなんて押し返してやれば全然逃げることは可能だ、でもさ……いくら変態だからって女の子を投げ飛ばすなんてことできなないよ……！

モカは静かに腰を動かしながら自分の大事な部分を俺の息子に押し当ててきた。

「勃ってる……」

「……………」

俺は平静を表上保っているがここからどうしたものかとかかなり焦っている……と思うだろ？

違うんだなこれが、結構時間経ったし来てもおかしくない……！

さあ来い、救世主よ！

「まじねーわ」

『ッ……』

巴と共にまじねーわなんて行って来るやつなんて一人しかいない、そう由明日だ。

巴との遊びに痺れを切らした由明日が俺を探しにトイレにやってきた、つてところだろう。

なに、これも計算のうちさ(ドヤ)

というもこの神崎レイ、ただ単に運に任せたに過ぎない、なんならこいつは由明日を置き去りにして逃げる予定だったクズ野郎

助かったのは結果オーライ、でもモカに襲われそうになったためプ
ラマイゼロと見てやって欲しい。

これでも一応主人公、悪いことをしたあとはいいいことが起きてもいいじゃないか

「まじねーわ」コンコンコン

震える声で俺を探す由明日、恐らく地獄を見てきたんだろう。面構えが違うぜ

一体この状況でどうやって面を拝んだのか知りたいところだが、入口付近の個室にレイがいないと察した由明日は隣の個室にノックをした。

「ま、まじねーわ…」

もちろんノックしても返事なんてない、そこにはレイはいないのだから

「(ノックがなったら返事をしよう)」

悪いなモカ、お前に俺の童貞、いや童帝を渡す訳にはいかんだ。こっちの方がカツコイイかんあるだろ。

「……………まじねーわ」

一息ついた由明日は最後の個室をノックせずにトイレを出て行くとした。

「!ちよー!由!」

「だーめ」

「ん!」

叫ぼうとした時モカが俺の口に指を突っ込み声を出すことができなくなった。

モカは軽く喉を鳴らしたあと

「にゃーん」

なんて猫の鳴き真似をして見せた。するとどうだろうか、由明日のやつは

「まじねーわ」ホッ

と一安心したかのようにそう言うと今度こそ男子トイレを出て行った。

「(……終わりだ)」

自業自得とはまさにこのこと、由明日を見捨てようとした俺の罰だ……。なんでこんな目に、初めてはアサシンとエッチなことしかかったのに……。

「邪魔もいなくなったし〜モカちゃんいただくね〜♥」

BADEND…

なんかさせんわこのクソツタレがああああ！

「わっ!?!」

モカを抱え込んだまま俺は立ち上がりドアの鍵を器用に解除したあと蹴りあげた。

まるでヤンキー漫画のような勢いでだ。

「ちよちよーれ、れーくん!?!何するの!?!」

「いいかモカ、俺は今からお前を抱えたまま巴達の所に戻る」

「ッ！」

「わかるか？お前の体は巴と由明日に見られるってわけだ」

「ふ、ふっふっふっ別にモカちゃん裸見られたところでなんとも思わないもんね〜」

「はあ、そうか、そうですか…ならさ」

「このままお前を抱えて交番に行こうかな」

「!?本気で言ってるの…?こんなにも可愛いモカちゃんを交番に連れて行くなんて正気なの?」

「ああ、まじだ。俺はやる時はやる男だ！お前を刑務所にぶち込もうと思えばぶち込めるってところを見せてやる！」

これは最終奥義だ。

そもそも俺が全裸のモカを連れていったところで捕まるのはモカではない、俺だ。

何故なら裸のモカを連れていったところで俺が完全に脱がせた張本人だと思われるに違いない…。

仮に俺が捕まればどうなる？モカは俺に裸を見せる事ができない、ひまりは俺の匂いを嗅ぐことができない、その他もろもろサークルが崩壊する。

一応こいつにも友達思いなところがあるはずだ。そんなことはしないはずだ。

「捕まる前に挿れて欲しい、な〜」

「はい、直行でーす」

まるでAVで見るとような体位のようにモカをがっちり抱え、男子トイレを出ようとした。

「ま！待ってって、もうわかったから…モカちゃんの負け、今回は許しまーす」

「許すのは俺の方だわ」

「それで？本当の服はどこにあるんだ？」

「トイレの裏の草むらの中〜」

「わかった、そこな…今度はもう離さんぞ、ガツチリホールドしたまま連れてって俺の目の前で着替えさせてやる！」

「きゃーホールドなんてれーくんのエッチ〜」

「言ってる!?!」

俺は男子トイレから周りの様子を確認して急いでトイレの裏側に行く、するとモカの言った通り服はちゃんとその場にあり俺の目の前で着替えた。

着替えるシーンを目の前で見るのは初めてなもんだから新鮮な気持ちになったのは内緒の話だ。

にしても下着履くところなんて生まれて初めて見たな、なんかエロかった。

「はい、着替えました〜これでいい?」

「んーパーカーがデカすぎてズボンが隠れて下を履いてないように見えるな」

「それを狙ってますので〜」

何処までも露出魔なんだなこいつ

「それにしてもれーくんさっきまでガツチリモカちゃんのことホールドしてたからー子宮がキュンキュンしちやった〜」

「人に全裸で持ち上げられるのも悪くないね〜目覚めそう」

「まじでやめてくれ、勘弁してくれ…!」

トイレの壁に手を置き、もう片方の手で顔を押しそう唸っている最中にガサガサと草のなる音が聞こえた。

「まじねーわ!!!」

「!・由明日!」

「まじねーわ!まじねーわ!まじねーわ!まじねーわ!まじねーわ!」

お前を!殺す!ここで!今!と言ってるように聞こえたのは俺の耳がおかしいからだろう。

この様子からだとか相当遊ばれたんだろうな…あの短時間でよく由明日をここまでボロボロにしたものだよ

まあ俺が元凶なんですけど、いやまじですまん由明日

「ご主人様…ッ!も、モカ!」

「ともちんやっほ〜」

「ん、んんっ!なんでモカがここに?」

「散歩の途中でお腹痛くなってートイレから出たらちようどれーくとぼったり会った感じ〜？」チヲ

話を合わせてとでも言うように俺の方に視線をよこすモカに対して俺は意を受けて話し出した。

「ああ、まさかこんなところでモカと会うなんてな、ほら？つもる話もあるだろ？」

「それでーもちろんさっきご主人様くって呼んでなかった？」

「そ、それは！ほら！こいつと王様ゲームしててさ！王様をご主人様って呼ぶようになって言われてよ！なあ！由明日！」

「ま、まじねーわ！」

首を勢いよく縦に振る由明日を見て俺は本気で泣きそうになった。なんてやつを俺は呼んでしまったんだと、いつか必ず天罰が下ってもおかしくないレベルだ。

「蒼井くんはご主人様と呼ばれてどうだった〜？」

「まじねーわ」

「そうかそうかく嬉しかったのか〜ご主人様ー」

「まじねーわ!？」

「お、おいあんまり由明日をからかうなよ」

由明日とモカが2人して話をしている中巴は俺の手を取り引き寄せ、肩を組んでボソボソ声で話し出した。

「ゆ、由明日のやつ結構良い奴だぜ、ゴミを見るような視線を向けながらアタシに何度もボールを取りに行かせたんだ…才能あるぜ、あいつ」

「……まじねー」

友人が今後もっと危機的状况にあいそうならとところだが…内心喜ぶレイはやはりクス野郎だった。



昨日散々な目にあった俺は熟睡することができなかった。

起きても頭は痛いしぼーっとする。これは身体に影響がでるほどヤツらに俺は苦悩しているという証拠だ。

そんな変態幼馴染共の相手、そして夏コミの準備で忙しいな俺を

さらに苦しめるかのように文化祭という行事が畳み掛けてやってくる。

俺達放送部はメイド喫茶をすることになった…なったのだが…。

「予算どうだった!？」

「これっぽっち、市大会で優勝したのにこれだよ、もつと出せってな」
「ま、まあ出るだけいいじゃん、ほら神崎君達見てみなよ」

うちの学校は珍しいのだろうか？文化祭の予算が決まればそれを各部活の部長もしくはキャプテンに会長が渡してくれるんだ。

しかも大半の部活動が新チームになったもんだから新キャプテン、つまり2年の生徒に渡すことになる。

我ら2年A組の中にも部長だったりキャプテンは少なからずいる。
ちなみに柊優は時期サッカー部のキャプテンらしい。

予算とは活動実績等を踏まえそれぞれの部活に至急される、もちろん俺らの放送部にも支給はされるさ

でもどっかの誰かさんが部員を辞めさせたとかでつい最近まで同好会だった放送部の予算は

「5万ってなんだよ!？」

諭吉が5人、つまり5万円しか貰えなかったのだ。

時は数分遡る

「どうもー！みんなの生徒会長氷川日菜だよ！部活動のお偉いさん達集まってー文化祭の予算渡すから!」

「よっしゃきた!」

「今年は多めにお願います!」

勢いよく飛び出すは運動部のヤツら、俺達文芸部は考えてることが同じらしく最後に受け取ろうとしていた。

「れーくん行きなよ」

「やだよ、大体放送部の部長は凜だろ」

「それは違う、部長はれい」

「なんでだよ、入部したてのやつが部長とかないだろ」

「某超次元サッカーでは1年がキャプテンだった」

「なんとなるさじゃないんだよ」

いいツツコミができたところで日菜さんがわざわざこちらに赴いてくれた。

「はいレイ君、君達の分だよ」

「日菜先輩やつほ〜」

「モカちゃんやつほやつほー放送部に入ったのって本当なの?」

「そうですよーあとはひーちゃんと蘭、そして凜ちゃん」

「凜ちゃん?」

「……私です」

凜は小さく手を挙げるも顔は下を向いたまま、相変わらず人と話す時は顔を見れないようだ。

ちなみにひまりはテニス部の朝練、蘭は寝坊だろう、多分そのうち来る

「ああー!レイ君に勝った子だ!」

「変な覚え方はやめてください!あと負けてないから!引き分けだから!」

「1点差で私が勝った、あなたは恥じるべき、土下座までしてもみ消そうとしたのだから」

「ぐぬぬ!」

ぐうの音も出らん!あのまま結局保健体育の点数は90点のまま間違えてますよと申告しなかったのだ。悪くないだろ俺は!」

「それで予算ってどのくらいなんですか?」

「……まあ見ればわかるよ!アタシまだ配らないといけないからまたねー」

ひらひらーと手を振り封筒の中を見たらこの結果、諭吉が5枚、これどうやってメイド喫茶なんてしろと言うんだ。

そもそも普通の予算でも無理な話だったんじゃないのか?

実費か?実費する?印刷代とか無料になったし多めに見れば…いや衣服代は?料理の材料は?5万で足りないだろ!10万でも足りないだろ!?!わかんないけど!

「おやおや神崎君ーその端金は何かな〜?」

「くっ!」

うちの男子バスケ部は少し強いと有名だ、推薦で強いやつを数人毎年採用している、というか共学になった時から採用している

最初のメンバーから推薦組なんてするいだろ、あとバスケ部の奴らは顔がいいからモテる

「朝日奈さーん、そんな部活捨ててうちのマネージャーにならない？」

「ならない、話しかけないでくれる？今気分悪いの」

「ッ！ああそう、ごめん」

露骨に傷つけるなよ！お前少しは躊躇って言葉を覚えろ

「かー！バスケ部のやつは性格悪いぜ、なあ優亜」

「ああ、みんな神崎君みたいに乙女のハートを持ち合わせていないんだよ、な由明日」

「まじねーわ」ジトー

「……………」

由明日の視線が痛い…本当に心そこから申し訳ないことをしたと思っているよ、今度1万円ラーメンを奢ってやろう。ううん今日奢るわ

「蒼井くん昨日ぶりー」

「ッ!？ま、まじねーわ」

「そんな警戒しなくていいってともしんないからさく？」

「まじねーわ」

巴さんは関係ないよ!？とでもいいだけな顔してるな、モカのやつ完全によ明日のこといじってるな

さては由明日と巴が仲良いと思ってるのか？

「よ！由明日、また今度遊ぼうぜ」

いないと言った数秒後に現れる巴、タイミングが良すぎる。

「ま、まままじねーわ…」

「んな硬いこと言うなって、こ、今度はお互いた、楽しめるやつにしようぜ」ハアハア

朝からこの状態とはなんとまー元気がいいこと、それと巴のやつ俺から由明日のやつにシフトチェンジしてくれた感じか？

「もちろんレイもだぞー！」

「……あ、はい」

どうやら違ったみたいだ。俺から離させるのは時間がかかりそうだな

キーンコーンカーンコーン

朝のHRを知らせるチャイムが鳴った。席に戻るも周りの人が足りない気がする。

柗優と蘭が2人揃っていない……？あいつら朝から何してるんだ？って柗優はサッカー部の朝練か、にしては遅いな

蘭は最近遅刻ギリギリだし……

「席ついてるかーお前らー出席を取るぞー」

担任がやってきて名前順に生徒の名前を呼ぶ、それに返事をする生徒達、小学校かとツツコミたくなるがそこは抑える

「紅耶」

「はい！先生が大好きな紅耶遊！今日も元気いっぱい「廊下に立ってろ」はい！」

相変わらずだな遊のやつは、その後順番に生徒の名前が呼ばれ俺の番がやってきた。

「神崎」

「あ、はい」

「ちゃんと返事しろ、あつてつけるのはお前の変な癖だぞ」

「あ、はい」

「……はい、だ」

「……はい」

変な癖とはなんだ、勝手に出てしまうから仕方がないだろ

その後何人か呼ばれ次は俺の変態幼馴染の1人の苗字を呼ぶ

「美竹」

「……………」

「？美竹蘭はー？神崎聞いてないのか？どうやら夜桜もないみたいだぞ」

「いや俺は特になにも」

「ふむ、美竹のやつ授業態度も悪ければ出席状況も悪いのか…困ったな」

ポリポリと頭を掻きながらそう答える先生を見て生徒のこと一人一人ちゃんと見てるんだーと感心するが…。

ただ単に蘭が問題児なんだなとあとからわかったよ

「美竹は遅刻と」

「……………」

「ガラガラガラ」

後ろのドアがゆつくりと音を立てながら、そして手をノロノロと伸ばしながら入ってくる生徒が1名

前髪を上げヘアピンで止めておりデコには冷えピタ、そして普段かけてないであろうメガネをかけ大きくまを作って登場したのは名前を呼ばれていた美竹蘭だった。

「み、美竹、なんだその姿は…!」

「あ?え、いや…勉強頑張ってますし、」

たと言う前に倒れそうになるもんだから俺は急いで蘭に近づき支えた。

一応彼氏だからな(仮)

「……………」

「お、おう」

一体どうしたんだ?こいつがここまで追い込まれるなんて…何かあったのか?

蘭を支えていたところ前のドアが開きそこからは髪がボサボサの柊優がこれまた蘭にも負けない大きなくまを見せつけ現れた。

「……………」

「ああ、おはようだ夜桜、お前なんだその容姿は」

「……………」

今にも倒れそうな柊優、ネクタイはぐちゃぐちゃでリュックは手持ちの片方しか握っておらず口から簡単に魂が抜け出せそうなひよろひよろ状態だ。

「おいおい、2人揃ってこの状態って」

「夜中に何かしてたのでは?」

「まじねーわ」

「でも美竹さんって神崎君と付き合ってたない？」

「でも登校するタイミング一緒だし、2人とも疲れてるし…どうゆうこと？」

クラスがいつせいにザワつく、俺はある程度こいつらの事情は知ってるから驚かないけどそりゃ驚くよな

「はいはい、2人とも早く席つけ…美竹勉強熱心なのはいいが徹夜なんてせずちゃんと授業を聞け」

「…すみません、よく、わかりません」

「いやSirriがお前ら」

流石に我慢できず突っ込んでしまった。蘭を先に運ぶと柊優はフラフラと自分の先に戻り眠い目をこすりながら髪を撫でていた。

「さてそれでは今朝の朝礼会議で話したことなんだが…ここ最近また露出魔の目撃情報がたまた来ているようだ」

『ッ！』

「いいか、見つけたらそく連絡、襲われたりなんかしたら人生終わりだぞ、特に女子！大切なものは死ぬ気で守れ」

『はいっ！』

かん高い声でそう返事をする女子一同、男子も奪われたりしたら困るんだよ、特にこの右隣にいる変態野郎からは昨日盗まれるところだったからな

てか昨日の今日かよもう出回るとかこいつ普段からどれだけ出歩いてんだよ

「それと来週から文化祭週間にはいるから短縮授業になる、文化祭を楽しむのはもちろんだが学業にも励むように、いいか美竹、神崎、そして青葉もな」

「あ…はい！」

「あいあいさ〜」

「……………わかりました」

こうしてHRは終わった。終わったあと柊優の周りには三馬鹿が、蘭の周りには変態幼馴染十凛が囲んでいた。

「蘭ちゃん大丈夫？昨日何してたの？」

「……勉強勉強」

「その冷えピタなんだ？熱でもあるのか？」

「ない、眠気覚まし」

「メガネはー？」

「最近目が悪くなったからかけてる、授業中もかけないと見えないけど……そもそも真面目に受けてない、から」

あくび混じりに答えた蘭を見てつぐみと巴は本当に勉強してたのかと関心をしていた。

俺とモカとひまり、蘭に関しては絵を描いていたんだろぅなと察す。そして柊優はその付き添いであんな目にあっただんだなと

「ごめん寝かせて……」

「わわ！ごめんね、おやすみ」

「おい、つぐみいいのか？寝かせても……お前生徒会役員だろ」

「うん、でもここまで眠そうなら寝かせないと」

「ふーん、いいやつだなお前」

表上だけどな

「あー私も久しぶりの朝練で疲れたあー寝ようかな」

「モカちゃんも昨日は遅くまで起きてたし寝よーっと」

「アタシも……ふあー蘭のあくび見たら眠くなっちゃった」

「……………みんなが寝るなら私も寝る」

「おいおいなんだお前ら？」

全員が寝てくれるならそれはありがたい、昨日はなかなか寝付けなかったし……俺も寝るとしようか。

『…………………………』スー

その日、午前中の授業をレイ、柊優、凜、蘭、モカ、ひまり、巴の7人は寝過ごしていたのであった。

幼馴染が犯人だと疑われたことありますか？

午前中の授業全て寝て過ごした俺達は貴重な昼休みに担任から生徒指導室に呼び出された。

俺は人生の中でも生徒指導室に呼び出されることなんてないと思っていたが…まさかとうとう呼ばれるとはな

恐らく俺一人だけ寝てたなら怒られなかったであろう、過去に何回も寝てたし

でも今回は訳が違った。変態幼馴染数人と凜、そして柊優までも寝ていたとのこと

「……お前らな、授業はちゃんと受けろと朝言ったばかりだろ」

『……………』

後ろの7人が寝ていたことで各教科の先生達の怒りが爆発、怒鳴り散らかしていたようだが俺達にはそのような記憶は一切ない。

怒鳴られていたなんて遊達から聞かされて初めて知ったことだぞそんなことでも起きないくらい俺達は熟睡してたったわけ、そりゃあんな夜遅くまで遊んでたら眠くもなりますよ

「……退屈な授業をする先生が悪い」

「おつ言うな凜、流石ひなりーん★(笑)だ」

「ッー」

凜に100の精神的ダメージ、立ち直るにはおにぎりを食べなければならぬ。

柊優と巴は?と首を傾げながらしゃがみこむ凜を後目に担任へと視線を切り替えた。

「先生、俺は…悪くないんだ」

「夜桜、何か理由があるのか？」

「……………はい」

柊優のやつは蘭のやつをすごく睨みつけ数秒後にはいと答えた。が、そう見えたのはどうやら俺だけのようだ。

「理由は？」

「……とある知人から作業が終わるまで寝るな、寝ると…と脅されて

ました」

「飛んだ友人だな、そんな奴とは縁を切れ」

「ええ、ご最もです」

「……………」

蘭のやつは明らかにおかしい笑みを浮かべながら柎優を眺めていた…が、これまた俺にしかそう見えてなかったらしい。

「よしこの際だ、全員昨日何をしてたんだ？言ってみろ」

「！な、なんでそんなことを聞くんですか？」

「いやな、疑ってるわけじゃないんだが…ここ最近不審者がこの地域でよく目撃されるからな、まさかではないが、万が一お前達だったりしてーなんて」

「要は夜遅くまで不審なことやってるから眠たいんじゃないか、と聞きたいってところですか？」

「ああ、まさにその通りだ」

巴がそう問うとその通りだと担任は返事をする。昨日の夜なんて人に言えることとしてねーよ、てか最近巷で噂の露出魔さんともろ一緒にいたわ、なんなら襲われそうになったわ

「私は昨日家でオナ…」

「…………おな？」

「オナ…中の子と通話をしてました！」

「それは同じ中学の子と通話してたってことか？」

「はい、残念ながら進級できなかった子なんですけどね、今は他校で元気にやってるそうです」

「ほう、それは何より、それはそうと上原お前はよく進級できたな」

「えへへ、頑張りましたから」

照れるひまりを見て俺も思った。

なんでこのバカが進級できてそいつは落ちたんだよって、でもよく考えるとオナ、なんて言ってたし途中で嘘を吐いたんだろう、

本当は夜遅くまで自慰行為をしてたんだな、あの電気マッサージ器を使って

「ひなりーん★は」

「……私は楓凛と一緒に映画を見てたわ」
「なるほど」

凛は本当に映画を見てたんだろう。でもひなりーんと呼ぼのはもうやめてやってくれ、そのうちガチで泣き出すぞ

「あたしは今朝言った通り勉強してた」

「美竹は、まあ、うん、そう言ってたな、はい次」

蘭は盛大にスルーされていくーなんでなんだ!?

大方夏コミにて販売する同人誌の作成にでも追われてたんだろう。結構ギリギリって前に言ってたしな

んで柊優はその付き添い、寝たら……と脅され起き続けていたってところか

「さて、神崎、青葉、宇田川、お前達は何をしていた？ああ、ちなみに嘘なんてつくなよ」

『……………』

なんて答えればいいんだよ、もうこんなの嘘つく以外ないじゃないか!

「ちなみに神崎、お前昨日の夜家にいなかったよな?」

「ツ！な、何故それを!」

「嘘だぞ、簡単な罠にハマるな」

「……………はっ!」

馬鹿か俺は!何故それを!?!なんて答えたら家にいなかった、と言ってるものじゃないか!

「……………」プププ

ひまりの野郎が手で口を隠しながら笑って俺を見てくる。殺意が沸くが今は我慢だ、何とかしてこの窮地を乗り越えなければ!

俺はモカと巴にちらつと視線を向け行動に出た、要は俺に合わせて適当に話を合わせろって意味を込めて視線を送った。

「…………昨日はボールで遊んでました」

「ボール?」

「はい、モカと巴と3人で、な?、な!?!」

2人にそう俺はバレない程度で必死に問いただした。俺の意を酌

んでくれれば上手くやり過ごせるのに……彼女達はとんでもない行動に出た。

モカと巴は顔を合わせたあとニヤリと笑い、真顔に戻ったのと同時に先生に話し出す。

「いや、アタシとモカは確かに一緒に遊んでました」

「はい、でもれーくんとなんか遊んでませーん」

「……と言ってるが？」

クソ野郎共が、俺を見捨てやがった。

もうこいつらが露出魔とDM野郎ですつて言いたい！でも！散歩させてたの俺だし言えない！

「神崎、お前嘘ついてるんじゃないのか？」

嘘なんてついてないっての、あーリサさんも俺に嘘ついてるって言われた時こんな気持ちになったのかな？

嘘ついてないのに嘘つき呼ばわりされるなんてなんとも不愉快なものだ、身をもって学んだよ

一度ボールで遊んだと話した、ならもう突き通すしかない！

「ボールで遊んでました」

「ボールで何をしてたんだ？」

「投げたボールを1人で取りに行っていました」

「ほう、お前は自分で投げたボールを自分で拾いに行ってたのか……」

「はい」

「お前頭おかしいだろ」

『ブフー！』

俺以外の生徒が一齐に笑いだした。もうなんとも思え、俺はここから抜け出すことしか考えてない。

「時には1人でそんなキチガイ行動をしたくなる夜だってあるんですよ」

「わかった、ならその際に露出魔など目撃はしなかったのか？」

「……………してないです」

こればかりは嘘なんだよなー現に目の前にいたし、なんなら今右隣にいるし

「よし、これで疑いが晴れたな、よかったよかった…でだ、お前らに頼みたいことがある」

「?俺達に頼みたいこと?」

なんだいきなり、先程までの空気と打って変わって急にシリアスな雰囲気になったような…気がする。

「ああ、何度も言うがここ最近露出魔などの目撃情報がたた寄せられている、中には被害にあった生徒もいるそうだ」

「…:はあ、なるほど?」

「それでだ、お前達にはその露出魔を捕まえて欲しいんだ」
「ん?」

捕まえて欲しい?俺達学生が?

いやいや、そんなことするのは警察達の役目でしょ!?!なんで俺達がないといけないんだよ!?!てか露出魔俺の右隣にいるし!?!

「訳が分からない、何故私達が露出魔なんて変態を捕まえないとならないのか、ちゃんと理由を説明して欲しい」

「凜ちゃんよく喋るね」

「う、うるさい!」

凜が言わなかったら俺が聞いてたところだ。本当にわけがわからん、今さっきの話から急に展開変わりすぎだろ

「実はな今朝朝礼でこんなやり取りをしてだな…」

と回想シーンに突入した。

「では続いて地域問題についてです、担当の先生よろしくお願いします」

教頭先生がそう言うと言担当の先生(レイ達の担任)が前に出てきた。

「どうも、先日の不審者の件ですが…:またも昨日目撃情報をいただきました」

「またか?ここ数日でかなりの頻度だな、それで?今回もあれか?」

「ええ、あれです」

あれとは露出魔なんて単語を職員室で言えないものだから伏せて言う。

もちろん教員達はみな意味を察しているためザワついていた。

「もうここまで来たんだ、警察達には早急に捕まえるように話すべきだ、被害者もいるのだから」

「それもそうですね、警察には早急に対応するようにと話してみます」

レイ達の担任は内心面倒臭い仕事を増やすなクソハゲメガネと文句を言っていた。

「……あのーっ話があります」

「?どうしました、理科の先生」

牛乳瓶の底のような分厚レンズの丸眼鏡をクイツと指で上げながら理科の教員が手を挙げた。

「おたくの生徒である美竹蘭、青葉モカ、そして神崎零…この3名は授業中よく居眠りをするので有名です」

「しかもテストではそこそいい点を取る飛んだ迷惑な生徒です」
「いるな」

「あいつらな」

「……ええ、彼女達がなにか?」

なんと朝礼会議でレイ達の名前が上がった。

やはり教員達もレイ達の居眠りの件については常日頃から不満を抱いてようだ。この反応で丸わかりである。

「彼女達がよく眠るのは何かしらの理由で徹夜しているから…つまりあれの件である可能性があるのではないなと思いますね」

「……彼女達の生活リズムが悪いため居眠りをすると考えています、それだけで決めつけるのも…」

「あの件の目撃情報、その中にこんな情報もありますよね?」

「灰色の髪をした人物であると…青葉モカと一致していませんかねえ」

「……………」

そこまでの情報が来ているのなら疑われても仕方がない…のだからか?

ただ単にそう決めつけたいだけなのではないだろうか?

「灰色の髪の人なんてこの世には沢山います、私もその1人です」

「……ええ、そうですねー、この世にはいますけどこの地域では限られるのではないのでしょうか？」

「結局先生は何が言いたいのですか？うちの可愛い生徒達を疑いたいのですか？」

「なに、私はただ可能性があると言ってるんですよ」

「それを疑いと言うんだ、貴様ふざけるのも大概にしろ、うちの生徒に何か恨みでもあのか？」

「せ、先生落ち着いてください」

口調が変わった担任を宥めさせるように隣にいた教頭が額に汗を滲ませながら止めに入った。

「恨みなんて全先生が持つてますよ、特に青葉モカ、神崎零、この2人は授業もろくに聞かずに高得点を取る、実に不愉快だ」

「…授業態度が悪いのは認める、だが点数についてはあいつらが努力した結果だ、それに神崎は今回朝日奈とテスト勝負をしていたから高得点を取ったんだ」

2年の教員の大半から恨まれているレイ、彼はそんなことを知らずに推薦をまだ狙い続けるのだろうか。

夢のまた夢の話になったようだな

とはいえ現に犯人はモカだ。この場合正しいのは担任ではなく理科の教員なんだが…レイ達の担任はそうは思わないはずだ。

何故ならモカとレイは担任の可愛い生徒達、そんな子に疑いの眼差しを向けられるのは理科の教員達がレイやモカを不快に思うより更に不快な気持ちだ。

「では青葉の無実をはらせばいいんだな？」

「ええ、できるものなら」

「できるさ、青葉達に不審者を捕まえてもらう…そうすれば疑いもはれるだろう？」

そこにいた全教員は思う。

確かに不審者が捕まり、モカが普段通り登校してくるのなら、モカ以外の真犯人がいたってことになる。

でもそれを本人にさせるのはどうかと思うのが教員達なのだ。

「教頭」

「は、はい！」

「うちの放送部……文化祭の予算が足りない、少なすぎる……不審者を捕まえた暁には追加で予算を要求する、ダメか？」

「い、いえ！是非！捕まえたなら予算をいくらでも分け与えます！」

「いいのか教頭、彼らの財力が無限となれば何をしでかすかわからないぞ？」

「というも現に露出魔の正体はモ力であるし担任の願いは叶うはずもないがな」

「となれば放送部全員で協力して不審者を捕まえて青葉の無実を証明する、文句あるかクソども！」

『……………』

もし不審者を捕まえたとなるとそれは前代未聞の出来事だ。

生徒が不審者を捕まえる……他校でもそんなことを成し遂げだ生徒など過去にいるのだろうか？いやいやない

内心捕まって欲しいと願う教員と犯人は本当にモ力達では無いかと疑う教員、それぞれいたが最終的に担任の言ったことを受け入れたのであった。

「それと別件の美竹蘭の件なのですか」

「あ、それは本当にすみません、私から厳しく指導しておきます……」

先程まで強気だった担任は一瞬にして弱気になるのであった。

「なんてことがあってだな、お前達には死んでも捕まえてもらわないと困るんだ」

「ああ、青葉だけでは無理だからお前達に協力してもらおうってわけだ、わかるよな？」

「なんかめっちゃ大きな問題になってる!!?」

予想以上の出来事だ、しかし俺達で不審者を捕まえることになった経緯は十分に理解した。

いや正直モ力だけでいいだろと言いたいところだが！何度も言おう、幼馴染が捕まるなんて死んでもゴメンだ。

それはそうとしてつまりのところ…疑われているモカが捕まえる
ことで疑いははらすつてことだな、了解了解

「(つて！無理ゲーだろそんなの!?)」

露出魔の正体はモカだぞ!? 不審者捕まってるモカを差し出せって
意味だぞ!?

んなことできるか！一応幼馴染だぞ!?

そもそもなんで先生達はモカが怪しいって疑いを持つようになった
んだよ!?

居眠りだけでそうなるとは…!なんておそろしいんだ、居眠りとは
!?

「という訳だ、なに安心しろ、捕まえれば文化祭の予算が追加で申請で
きる」

「まじで!?!」

「ああ、教頭から言質はとってる、しらばっくれたら数少ない髪の毛む
しり取ってやる」

「……………」

男子にとつてとても大切である髪の毛をいとも簡単に引きちぎる
と言いだしたぞこの人

もし自分がその立場になったらと想像すると怖くなる…男子はな、
みんな将来ハゲになりたくないと思死なもんなんだよ

「出来れば夜桜と宇田川にも協力して欲しい」

「俺は別に構わない」

「アタシも構わないぜ！モカの疑いをはすためなら協力するぜ!」

「ふっ、頼もしい生徒を持ったものだ」

騙されるな担任、こいつがあんたの探している不審者のうちの一人、
変態ドMペット志願者の残念なやつなんだぞ

何が頼もしい生徒だ、恥ずかしい生徒の間違いだろ

「放送部全員も協力してくれ、あとは市ヶ谷に戸山、白金もお願いでき
るならお願いして欲しい」

「……………あ、えつと…はい」

「?どうした上原」

「い、いえーなんでもー」

ひまりはモカの正体を知ってる、だからこそ動揺するのは分かるがあまりにも分かりやすすぎだろ、疑われたらどうするんだよ

「青葉」

「……はーい」

「確かにお前は目撃情報の灰色髪かもしれない。でもな？先生信じてるから、お前が露出魔なんかじゃないって」

「……もーう、先生ーモカちゃんは可愛くてきゅーとですけどそんなことしませんって〜」

「だよな！信じてるからな！」

信じてるからな、か…現に目の前にもう犯人がいるんだけどな、もうこのこと何回言ってることか

「もうダメだわ、終わりよ…私達も連帯責任で捕まってしまうわ、あはは…刑務所ではおにぎり出るのかしら」

露骨に人生終わった雰囲気を出す凜の腹を軽くつねる、心は痛いが今は我慢だ

「ちよつと凜のやつ腹が痛いようで」

「ふむ、そうか」

「とりあえず俺達が不審者を捕まえればいいんですけど！了解です！早速作戦会議を始めます！みんな視聴覚室で話そうぜ！」

俺は全員を無理やり生徒指導室から連れ出しその場から離れた。

その後担任は

「頼むぞ、お前達」

と神に祈るように言う。しかし露出魔の正体が実は可愛い自分の生徒だと知ったらどうなるだろうか。

それは不審者が捕まってみないとわからないことなのだ。



視聴覚室にやってきたレイは視聴覚室の防音力をいいことに大きな声で叫んだ。

「どうすんだよこれ!?!」

「……これはかなりまずいね〜」

「何他人事みたいに言ってるんだよ!?!お前のせいでこーなってるんだろーが!?!」

「んーでもモカちゃんが全裸でうろつくのは生きていく上で必要なことだからさ〜」

「逆なんだよ、生きてく上では普通服を着るんだよ!」

原始人達も動物の皮とかで服を作っていただろうが!お前は日本史で何を学んだよ!?!

「待ってくれ、青葉さんのせいってなんなんだ?」

「!しまった、お前もいたんだった!?!」

完全に柊優と巴の存在を忘れて話していた。

巴と柊優はモカの正体を知らない、のに俺は知ってる前提で話してしまつて…バレルようなものじゃないか

「それはあたしが露出魔だからだよー」

「……レイ、悪いことは言わない、自首させよう」

「あんた何あたしの親友を刑務所にぶち込もうとしてるの?」

「ごふあ!」

蘭のやつがいきなり怒りだし柊優のネクタイを掴み持ち上げていた。

柊優のやつは苦しむように腕を数回振ったあと蘭の手首を強く握り無理やりネクタイから手を引き剥がした。

「つ、つまりはあれか?お前達は青葉さんを庇うってことか?」

「……………そう、なるね」

「……無茶だ、そのうちバレルことだ。もう灰色髪って情報があるんだろ?」

「だからってモカって決まったわけじゃない!」

「蘭が必死に否定してくれてるーならモカちゃんも期待に込めて言おう。あたしは露出魔じゃないよ〜」

「もう何もかも遅いんだよ!?!」

どうすんだよこれ!

「……なあモカ?」

「どうしたのともちん?」

「モカがその、露出魔ってのは本当…なのか？」

「……………違うよー」

「嘘はつかなくていいんだ、もう……………わかってるから」

「うん、世間的には露出魔って言うらしいね」

「ツ……………ちよつと、時間をくれ！」

巴は視聴覚室から静かに出ていく、それはまあ幼馴染がこんな変態野郎ならそうなるだろう。

分かるよ、心底その気持ちわかるよ、特につぐみの時はかなり心に来たものだ。

「ねえねえ、モカが普通にもうそんなことしなければ済む話じゃないの？」

「ひまり、その考えは間違ってる」

「なんで？だってモカが動かなければもう目撃情報も入らなくなるよ！？」

「だからそれがダメなんだよ」

厄介なことになってやがる。今後モカが全裸でうろつかなければ露出魔の目撃もなくなり、不審者は自然消滅した…ってことになる。

でも違うんだよ、自然消滅したことがダメなんだよ

モカは疑いがかかっている。それを俺達に話したと先生達は知っている、いや堂々と捕まえさせると宣言したのなら俺達に話すのは必然だそこで話した途端はい、不審者いなくなりましたーってなってみろやはり露出魔はモカであり恐れて姿を隠したんだ…となりモカは先生達からさらに疑いの眼差しを向けられることになるんだ。

なんなんだ、なんなんだよこのシリアス展開、俺の人生にここまでのシリアスは求めてないっての…！

「もかは誰かに手を出したりしたの？」

「手を出すってエツチなことしたかってー？いやんモカちゃん初めではれーくんがいいかなってー」

「……………真面目に答えて、返答次第では希望が見える」

「??？」

凜のその発言に俺は首を傾け聞くことしか出来なかった。

返答次第では希望が見える…俺が凜より頭脳が劣っているから察せれないだけ？

いや、柊優も手段があるなら言ってみると言わんばかりで壁に背を置き腕を組んでいる。

「さっきの返答でわかるでしょー襲ってないよ…恥ずかしいから言わせないで欲しいな」キャッー

とお尻を振りながら答えるモカ、視線を外にずらすと柊優も同様に視線を外に向ける。

戻す際にふと目が合い「大変だなお前」と言わんばかりの視線を送ってきた。

本当に大変な人生だよ、こんな変態を匿うことになったからな

「なら決まりだね、モカの他に露出魔がいる」

「ツ！?な、なんでだよ！」

「思い出して欲しい、被害にあってる生徒がいる…と担任が言っていた」

担任が言っていた、とは先生が長々俺達に不審者を捕まえることになった経緯を説明している時に言っていたことだ。

確かにモカが襲ってないのなら？他の第2の露出魔が襲っていた…？ってことになる！

「モカ！」

「は、はひいー！」

俺はモカの肩に手を置き顔を近づけ真剣な眼差しを向け質問した。

「本当に襲ってないんだな？」

「お、襲ってないって…近いって〜」

「別にお前にとってこれくらい普通の距離だろ、本当の本当なんだな？」

「……本当だってーなんなられーくんがぶっ刺して確認しなよ〜」
「ツ〜！」

柊優のやつは恥ずかしいのか壁の方に顔を向け頭をリズム良く当たっていた。

本来であればこれが正しい反応なんだろう。

てかぶっ刺した確認しろって…流石に引くわ

「何その反応、あんたあたしの作品見てるんだからこれぐらいなことないでしょ」

「……人の口から出る言葉とじゃ違うだろ」

柘優のやつは結構女の子耐性ないんだな、勝手にありそうだと思っ
てけど恥ずかしいものは恥ずかしいようだ。

「となれば私達はもう1人の露出魔を捕まえて刑務所にぶち込めばモ
カの疑いがはれるってこと?」

「つまりそーゆうことだ、この変態が嘘についてなければな」

「だから本当だつて〜」

そしてその露出魔が灰色の髪だったら尚更モカの疑いはなくなる
な

にしてもそう上手くいくか?もう1人露出魔がいたとしてもそい
つが灰色髪とは限らないのでは?

いや、捕まえたら急いで髪を灰色に染めてやれば…!うおー!行け
るぞー!

つて!行けるわけないだろ!?

「とりあえず襲われた生徒を探すべき」

「……そうだな、なんか今日の凜すげー、頼りになる、助かるよ」

「……友達なら助け合う」カー

顔を赤くして俺達から目を逸らして答える凜に対して、ああ、こい
つはやっぱり友達思いの良い奴なんだなと改めて自覚した。

「りんちゃんモカちゃんのこと助けよーとしてるの〜?ありがとうー
おっぱい揉んでいい〜?」

「い、今は絶対だめ!夜桜がいるから!」

「別に俺は気にしない」

「私が気にするのよ!?!あと何言ってるのよあんた!?!」

「……怒られた」

それはまあ今言うセリフではなかったよな、気にしないとかじゃな
くて凜自信が気にするんだよ

「とりあえず決まりだね、モカを救うにはその恐らくいるであろうも

う一人の露出魔を捕まえること」

「捕まえられるかなー」

「大丈夫、罠がいるから」

「……………はっ!？」

察した柊優は急いで視聴覚室を出ていこうとするも蘭に服を捕ま
れ逃げ遅れてしまう。

「確か男子生徒が襲われたんでしょ?…ならば、悔しいけどイケメン
のこいつを放っておけば来るんじゃないの?」

「お、おいおい蘭、お前は他の女に侵されるところを見たいのかよ」

「あーじゃあとりあえず本番前に柊優とレイで一発お願いしてもいい
?それなら柊優も納得でしょ?」

『誰が納得するかあ!』

柊優と声を合わせ全力で否定する。

「わかったよ、襲われる前に助けるから、それならいいでしょー?」

「そういう話じゃない、俺に人権は無いのか?」

「柊優はレイの彼氏でレイはあたしの彼氏であってレイの彼女である
あたしの命令ならレイの彼氏である柊優は…」

「あー!うるさい!ややくしんだよ!」

頭を掻きむしりそう答える柊優に対してひまり、モカ、凜は意外そ
うな視線をジーンと送り続けていた。

「!な、なんだ?」

「いや、夜桜君って普段はそんな感じなんだなーって」

「いつもの冷静沈着なよっちゃんじゃない感じ?」

「よっちゃんって、馴れ馴れしく呼ばないでくれるかな変態の青葉さ
ん、俺は君と今後話したいとも思わないんだけど」

「いいよ、今度全裸のモカちゃんを見せてあげるから一瞬で虜に
なっっちゃうよーん」

「……………レイ、お前はずっとこんなやつ相手してたのか」

「ああ、すごく大変だった…!」

モカの恐ろしさを知ってもらったところでお昼休みももうあと数
分で終わろうとしていた。

お昼ご飯食べてないっての、10分休憩の時に食べるしかないか

「夜桜」

「……なに？」

「蘭の本当の彼氏は夜桜なの？」

「は、はあああああああ!?!」

柘優よりも大きな声で反応したのは蘭だった。心底いやそうな顔をしながら凜に近づき大きな声で言う。

「なんでこいつがあたしの彼氏なの!?!」

「……下の前で呼びあつてる、仲睦まじい雰囲気をただ寄せた」

「……柘優はサークルのメンバーなだけだから」

「ちなみに俺は今すぐにでもこんなサークルやめたいと思ってる」

「ならやめればいい」

「………やめれないんだよ」

「それはなぜ?夜桜はらんのが好きだから、離れたくないからやめたくないじゃないの?」

「絶対、断じて!そんなことはない!」

いつもの倍大きな声でそう言う、少し怒っているようにも見えるのは気のせいだろうか。

「なにそんなに嫌がつてるの?もしかして凶星?」

「そつちこそいいように言つて絵を描いてるだけなんじゃないのか?」

「誰があんたみたいなの絵に描いた薄っぺらいイケメンに恋するかっての!」

「んだと腐女子みたいなやつが何を」

「あたしをあんなヤツらと一緒にするな!」

「ほぼ一緒だろーが!」

あーあ、言い合いになつちやつたよ、この2人は本当に仲が悪いな…凜は一体何を見て仲睦まじい雰囲気だと思つたんだよ

蘭と柘優が大喧嘩してる中視聴覚室のドアがゆっくり開き、そこから先程出ていった巴が入つて来た。

「モカ、そしてレイ、話がある」

『?』

俺とモカは目を合わせ同時に首を傾げた。巴は着いてきて欲しいと言うもんだからそのまま着いて行くように視聴覚室を出ていく

近くの図書室に入り、畳が敷かれているところに向かい俺達はそこに座った。

その際モカのやつがわざと体操座りをして俺にモカの大事なところを無理やり見せようとしてきた。

もちろん俺は目をそらすけど…。

「ふっ、さっきの話は本当だったんだな」

「ごめんねー実は超がつくほどの変態さんなのだ」

「……………隠しててごめんね」

そのいきなり謝り出すのは反則だろ…なんなら俺に暴露した時もちゃんと謝って欲しかったものだ。

「いいや、いいんだよ、モカも年頃だしそーゆうのには興味持つのは当たり前だろ?」

「?うん」

巴は深く深呼吸をした後俺の手を取りこう言い出した。

「実はアタシも変態なんだ、そして今はレイの忠実なペットだ!」

「ッ!」

「は、はあ!?!お前な、何言ってるの!?!」

「ご主人様ー!だってモカは秘密を話したんですよ!?!アタシも話すのが当たり前だろ!」

そんな欲情した犬のようにはあはあ言いながら言われても説得力の欠けらも無いっての

「……………もちろんがれーくんのペット?」

「ああ、近いうちご主人様専用の肉便器になる予定だ」

「ならないから!てかさせないから!?!」

「……………なんだくともちんもこっち側だったのー?」

「……………黙ってて悪かったな、実はアタシ痛いのが大好きな、世間的にはドMって言われるやつだ」

さっきから言ってる世間的なやつはなんなんだよ、世間的どう

こうにお前らはそもそも人として終わってるからな

「肉便器かーもちろんれーくんの相手は大変だよ〜?」

「何経験したみたいに言ってるんだよ! 1回もしてないからな!」

「そんなこと言わずに! ささ! 今の時間ならここ誰もいないのでちやちやつとアタシにマーキングを!」

「まじでやめてくれえええええ!!」

混ぜるな危険とはまさにこのこと、こいつらにひまりも加わったら本当に俺はこいつらに搾り取られてしまう!

危機を感じたレイは急いで畳から立ち上がり走っては行けない図書室なんか無視して走り去るのであった。



さてではまず初めに被害にあつたという男子生徒を探そう。

そのためにもまず担任に協力を要請しなければ、なに帰りのHRにちよつと話をするようにと頼んだのさ

「はい、では最後の話だ」

帰りのHR、週の最後のこの時間ほど早く終わってくれと思うはず。でもすまないみんな、少しか俺達に時間を分けてくれ

「朝も話したがここ最近露出魔の目撃情報が(略)そこで何か情報を知ってる生徒がいたら私のところまで来て欲しい、以上だ、神崎号令」

「起立、礼、ありがとうございます」

『ありがとうございます』

なんで俺なんだよと内心思いながら号令をかけたのであった。

その後身支度をする振りをしながら先生の方をチラチラ見るが生徒が一向に向かう気配がない。

「(そう簡単に知ってるやつはいないか)」

1番期待してたのは襲われた人が誰かって知ってる人がいてくれたらよかつたんだけどな

「……いないね」

「ああ、でもまあこんなもんだろ」

「第一もか…じゃない、露出魔に襲われたとなれば心を病んでいるは

ず、登校していない可能性が高い」

「……………かもな」

凜は冷静にそう分析して言う。こんも凜が頼りにもなるなんて思
いもしなかった。心做しか凜がかっこよく見える。

「りんちゃん今あたしの名前出しかけたよねー酷いよーおよよ」

「疑われるもかが悪い」

「私達友達でしょ!?!」

「友達なら胸を揉まない」

「じゃあ彼氏は?」

「……………それは知らない」

「逃げたな、朝日奈」

こつちはこつちで元気にやってんなー今はそれほど大きく動くこ
とは無いから適当にやってて構わないけどさ

「さあさあ花金だーどっか遊び行く?」

「ならさー由明日の家行かね?てか泊まらね?」

「まじねーわ」

ぐつと指を立ておーけーサインをする由明日、泊まっていいってこ
とか

「なんだ神崎?お前も泊まりたいのか?」

「言つとくが俺達と泊まるとなれば眠れないぜ?」

「まじねーわ!」

由明日は宿泊研修の時同様トランプを取り出し俺に見せつけなが
らそう行ってきた。

「悪いなお前達…俺達はどうしても何遂げないといけない使命があつ
てだな」

「…………確かに言われてみれば珍しいメンツで集まってんな」

「夜桜に朝日奈様?それに神崎君とその幼馴染達?あれ?羽沢さんは
?」

「羽沢さんは生徒会の仕事だ、本当は俺と上原さんも行かないといけ
ないけど無理言って休みを貰ったんだ」

「まじねーわ」

文化祭も近いからひまり達実行委員の仕事も忙しい中無理言って休みを手に入れたんだ。

今日、もしくは明日には捕まえて来週からは文化祭に専念したいところだ。

「用がないなら早く帰って欲しい」

「あたし達あんた達に構ってるほど暇じゃないの、帰った帰った」

「ゆ、由明日はアタシの帰りを待っててもいいんだぞ？」ハアハア

「ままままじねーわ!!」

「お、おいおいなんだよ由明日」

「そんな押すなってーどうせ押されるならレイコちゃんみたいな可愛い子の方がいいぜ」

「……黄海、あんたしつこいよ?レイコをそう簡単に渡すわけないじゃん」

「もももういいだろ!お前ら喧嘩になる前に早く帰ってくれ!」

蘭の口に手を置きそれ以上言わせないようにして遊達を帰らせようとする。

「ねえねえ蒼井くん?」

「!ま、まじねーわ?」

「先生の言ってるさー露出魔について:何か情報知らない?」

「?まじねーわ?」

なんでよりもよって由明日に聞くんだよ、こいつがまじねーわ以外の言葉発したところお前は見た事、聞いた事あるのか?・

ちなみに俺は数回だけあるぞ

「露出魔?そう言えば先輩が襲われそうになったって言ってたな」

「ツ!その話詳しく!」

「おおふ、朝日奈様が俺の目の前に……!」

びゅん!と優亜の前に現れた凜に対して優亜は驚くもすぐに顔を治し俺達に話してくれた。

「実は俺の家ってそこそこ金持ちでな、その家絡みで仲のいい先輩がいてーその人がこないだ真っ青な顔で話してきたんだよ」

「金持ちって情報いるの?」

「いいだろ少しは自慢しても!」

まさかひまりからそんなこと聞かれるとは思いませんでしたよ
なー確かに飯とか食べに行った時こいつ異様に金持ってたからな
なんか怪しいバイトでもしてるんじゃないかと疑ってたよ、いやす
まんな

「その先輩は羽丘にいるのか!」

「いるぞ、演劇部の先輩」

「……よりもよって演劇部か!」

演劇部! 話しかけやすそうでかけにくい人だなこりゃー

白鷺さんとは文化祭で勝負することになってるからな、負けたらと
思うと…ゾツとするところだが今はもかの件が優先か、捕まったりし
たら勝負どころじゃないしな

まあ演劇部の人達とは一度多分顔は合わせてるから話しかけても
返事ぐらいはしてくれると思う。

ほら俺瀬田さんに劇一緒にやらないかって誘われたし? その時紹
介されたから顔は覚えられてると…信じたい!

「学校には来てる感じ?」

「……さあ、俺そんなに仲良くないし、なんか弦巻の屋敷パーティの時
に話したぐらいだからさ」

「こいつまた自慢したよ、蹴っていい?」

「お、落ち着け蘭!」

女子としてのあれが完全になくなるぞ!?! それにしてもまさか優亜
からこんな貴重な情報を聞き出せるとは!

持つべきともは金持ちの友達だな! 悪い意味じゃなくてな!

「んじゃその先輩をボコボコにして履かせればいいってわけではな
い!」

「いや言い方! 普通に安全な方法で聞き出すつての!」

「ま、まじねーわ…!」

由明日は巴に怯えながら着々と帰りの身支度を行っていた。それ
を見ながら遊は首を傾げながらも帰りの身支度をしていた。

「とりあえず俺が1人で聞いてくるよ」

「えーモカちゃんも行きたいー」

「ここは私でしょ!?!私と行くべきだよレイ君!」

「えーい!くつつくな!」

両方からいつせいにやってきては手を取りそう言う。左側にいたひまりの胸がもろ腕に当たってたものだからかなり気持ちよかつた。…のは内緒だ。

「ここは間をとってレイと柊優の二人で行くべき」

『だからなんでだよ!?!』

こうして俺は優亜の言うその先輩似合うため、勝負相手の演劇部の部室へと向かうのであった。

露出魔を捕まえようとしたことありますか？

急遽俺達は担任より最近巷で噂の露出魔を捕まえモカの無実を証明しろと無理難題の使命を命じられた。

モカの無実、と言うのはなんやかんやでモカが露出魔なのではないかと先生達から疑われているらしい。

それして露出魔を捕まえることでモカが露出魔ではないと証明してくれとのこと…。

実はここだけの話モカには露出趣味があるため、実質犯人はモカだと思うんだ。

でも凜の話によると露出魔がモカの他にもいるかもしれないと仮説を叩き出した。

まずはその説を証明させるために俺は被害にあつた男子生徒の元に向かうのであつた。

「えへへーれーくんとデートだね〜♪」

「なんでこいつと一緒になんだよ!?!」

そう、予定では俺一人で行くはずだつた。だが…数分前の出来事だ。

「ここはもかとれいの二人で行くべき」

「なんでだよ!?!」

俺は全力で嫌がりモカから距離を置く、こんなやつと2人だけで行動なんて何されるかわかつたものじゃない。

「れーくん露骨に嫌がりすぎー流石に傷つくよ？傷ついたから癒しが欲しいな〜」

「えーい近寄るな!」

「モカがいやなら私は!?!私と行こうよ! 帰りにトイレでエッチな」

「ちよつと黙ろうか!」

俺は急いでひまりの肩に手を置きこれ以上喋らせまいと凄く睨みつけた。

モカの正体が巴と柊優にバレたんだ、ひまりも実はクソ変態野郎でしたとなつてみる…巴とモカ、そしてひまりの3人から襲われたら俺

はもう強制的に卒業してしまおう。

「?どうかしたのか?」

「なっつつんでもない!あは!あはは!」

「変なレイだな、気色悪いぞ?」

「お前にだけは一番言われたくねーよ!このクソ女!」

「お前っ!こんな人前で:でも、悪くないぞ!」ハアハア

「.....」

クラつときて倒れそうになり後ろにいた凜とぶつかりそうになるが凜のやつはスつと避け俺は綺麗に後ろに倒れた。

「痛てて、凜さんや支えてれてもいいんじゃないのか?」

「いきなり倒れるって何?あんたもしかしてそれを言い気に大好きな胸を:」

「やめてー!ここでは言わないで!お願いします!」

俺まで終優に変態であるってバレてしまう!てか変態じゃないから!?!バレるとかじゃなくて変な目を向けられるだけだから!?(変態です)

「:なるほど、二人で行くことで青葉さんの無実をさらに証明できるってわけか」

「本当にもかが襲った露出魔ではなければの話だけどね」

つまりのところその襲われた先輩にモカを一目見せることで変な反応したらモカが犯人だった:となるってわけか?

先輩がモカを見た時の様子で決まるって訳か

「不本意だがモカと二人で行くしかないのか:」

「いえーい、デートだねー」

「うるせえー!」

こうして俺はモカと二人で演劇部の部室に向かうわけであった。

今回は前を歩かせず隣を歩くようにと命令した。前を歩いて階段の上からスカートをたくし上げて無理やりモカのモカを見せつけられるのはごめんだ。

隣を歩くと命令した時は

「もーう、素直に腕を組みたいって言いなよ」

「黙ってるっ!?!」

恐らく過去一大きな声で黙ってる、なんて言葉を発した瞬間だったと思う。

行く途中何度か話しかけられたが適当にそうだな、ああ、美味しいよね、知らんけど、なんてことを言いながら適当に話を流した。

「到着っ」と

さてと、馬鹿正直にノックして入るか？

耳をすませるがミーティング？だろうか、何か話している様子で演劇の練習をしているようには思えなかった。

話しかけるタイミングは今しかない、そうだ早いところ終わらせて今夜中に露出魔を捕まえなければ

「……何してるのかしら?」

「あひよー!?!」

いきなり後ろから話しかけられ驚きながら振り向くと白鷺千聖さんの姿があった。

演劇の練習に来たところで鉢合わせたってところか、これは好都合だ、事情を説明して話をつけてもらって

「千聖さーん、こんにちはです〜」

「ええ、こんにちはモカちゃん♪」

「……それで? 神崎君は何をしているのかしら?」

「えっと、俺はちよつと…て、敵情視察というか?」

「へえ、勝つ気なのね」

「ツ! あ! 当たり前じゃないですか!?!」

負けたら蘭が描いた俺と柊優の薄い本が晒されてしまう! 広まったりしたら俺達はもうまともな高校生活を送ることが出来なくなってしまうぞ

「勝つ気? なんの話ですかー?」

「ふふ、それは秘密の話しよ」

「と、とにかくモカは気にしなくていいんだよ」

奇跡的にこいつらにはまだ蘭の作品が知られてないからな、もし知られたらいじられてしまう!

「敵情視察つてのはいいように言っただけでして…実はとある人に用があつて来たんです」

「薫とか？」

「いえ瀬田さんではなく男性の先輩なんですけど」

頬を掻きながら少し照れくさそうに俺はそう答えた。なんで男子の先輩に用があるんだよって思われてるんじゃないかと思うと恥ずかしいんだ。

「ふーん、あつそう、入れば？」

「あ、はい」

白鷺さんがガラガラと演劇部の部室のドアを開け中に入ると同時に俺達も中に入った。

「千聖！今日は早かったね」

「普段とあまり変わらないじゃない」

「いやなに、昨日より42秒速いじゃないか」

「…少し怖いんだけど」

それは俺も思うが今は黙っておこうか

「！神崎君じゃないか！演劇部に戻ってきてくれたのかい？」

「いや俺そもそも演劇部に入部した覚えはないですし…前も言いましたけど都合があつて参加できないんですよ」

勝負相手がいる中共演なんてできるわけねーだろ、あと女装させられるとわかつて喜んで参加するやつがいるわけねーだろうが

「そうだ！俺先輩に用事が！」

演劇部の部員の顔を数名眺めた。男子生徒なんて数人しかいないけど判断するのは難しそうだな

「あのー黄海優亜と知り合いの人いませんかー…？」

俺は震えた声でその名を呼び知り合いを探した。すると

「一応知り合いだけど？」

「よかったあ」ホッ

いて助かったよ、もし居なかったらここまで来たのが無駄足になるし情報を探ることもできなかった。

「少し話したいことあるんですけどお時間いいですか？」

「いいけど…告白ならいやだよ？男の子は対象外なんだ」

「なんで告白だと思っただよ?!」

先輩にタメ口だったのがその後は急いで言い直した。隣の個室に俺達は向い話をしようとした。

「単刀直入なんすけど、露出魔の件で聞きたいことが」

「あ、ああ…優亜から聞いたのか、そうだね何から話そうか」

「あ！ちなみにこいつに見覚えありますか!」

「どーも、超絶美少女モカちゃんですー」

「……………」

先輩は数秒間首を傾げたあと答えた。

「……や」

「そろそろ読み合わせを」

「瀬田さーん!?!」

ベストタイミ^{!!}ングで瀬田さんがドアを開け中に入ってきた。もう

少しで聞き出せたのにー！なんてことをしてくれるんだ!?

「何か大事な話でもしてたのかい?」

「いや?別に?」

「そうか、なら早く戻ろう、みんなが待ってる」

「あの、せ、先輩方?」

「ごめん時間だ、また今度ね」

「えーちよつと!」

あと少しで聞き出せたのにー！そりゃ先輩達にとってはどうでもいい話かもしれないけどさ!

と、とりあえずモカをみてすぐに奇声を上げなかったことからモカではない別の人に襲われたと思っ^ていいのか?

「とりあえず帰りますー?」

「ああ、帰るか…」

部室から静かに抜け出し俺達は行きとは違い帰りは特に話すことなく視聴覚室へと戻った。

「ただいま戻りました!」

「ました〜」

「れい、結果は？」

「……………」

「ドン！」

俺は膝をつき大きな声で叫んだ。

「何の成果も得られませんでしたあぁあ！」

「ゴミクズ以下」

「それは言い過ぎだろ!？」

突っ込んだところで視聴覚室の様子を見てみるが花咲組もどうやら合流しているようだ。

「大変なことになってんな」

「モカさんの危機となれば助けないと！夏コミがパーになっちゃいますよ!？」

「よくわからないけど露出魔さんを捕まえればいいんだよね!？」

香澄：よくわからないとはなんだよ、話をちゃんと聞いたんじゃないのか？

「？柊優は？」

視聴覚室を見渡すも柊優の姿がなかった。

あの野郎！さては帰りやがったな!?!別に構わないとか言いながら蘭と一緒にだと言っばり手伝う気になれなかったか！

「……」

1番後ろの端に体操座りしながらレイの帰りを待っていたようだ。

レイはサークルメンバーとは親しい仲の為此の女子が多い密室でも気軽に過ごせるものの柊優にはきつい環境

いくら女子から何度も告白されたとは言え密室でこれほどの女子と共に過ごすことはイケメンでもきついものはきついのだ。

「レイがいなくて寂しかったみたいなの、慰めてきてくれない?？」

「なんでだよ!？」

「だってレイは柊優の彼女だから……?？」

「俺は男だつての!?!お前は現実と2次元の区別がついてないようだな!？」

「別に寂しくなんかない」

柊優と一緒にいると蘭のやつから今まで以上に煽られてしまうな、

早いところこの問題を解決させて蘭と柊優を離れさせよう。

「レイ君、捕まえるのはいいんですけど作戦とかあるんですか？」

「作戦ですか？ないですよ？」

「……一体どうやって捕まえるんですか？」

「それを今から話し合ってくださいよ！」

視聴覚室の教卓の前に全員を集めホワイトボードに露出魔捕獲作戦と大きく書く

「んん！では！今から作戦会議を始める！何か意見があるものは挙手を！」

なんか前も別件で似たようなことがあったと思うが気のせいか

「露出魔を捕まえてモカちゃんの疑いを晴らすってのが目的となると無理に捕まえる必要はないんじゃないか？」

「……それは確かだけども」

「見つけた時点で即通報、これはどう？」

俺達が見つけて警察に連絡をする。そして警察達がなんやかんやで露出魔を捕まえて……モカの疑いを晴らす、か

その場合俺達が捕まえたわけではないから文化祭の予算が追加で申請できるか危ういところだが……

一応見つけて協力はしたりしてるから話をつければ少なくとも予定の半分ぐらいは貰えるんじゃないか？

「でもー完全にあたしの疑いを晴らすならあたし達が捕まえないとだよね」

「簡単に言わないで欲しい、そもそもかが変な性癖さえ持つてなければこんなことにはならなかった」

「凜ちゃん！仕方がないことなんだよ！モカにはモカの生き方があるの！人には人の乳酸菌！わかった？」

「いやわからないわよ、それと服着ない生活ってなに？」

「そうですね凜ちゃんさん！私とレイ君が2次元を愛しているのと同じなんです！」

ふんすと鼻息を荒くしてそう抵抗する燐子さん、それは流石に違うと言いたいところだが俺は軽く笑って話を流した。

「なら俺達で捕まえよう」

「捕まえるってどうやって？」

「いくつかグループを作ろう、分けて当たりを散策する」

「んな簡単に見つかるわけねーだろ」

「わかってる、だから毎日見回る必要がある」

『?!』

柊優が気軽に言った毎日見回る、確かに一般人の暇な方々ならそれを続けることは可能だ。

しかし彼女達はあくまでサークルに所属している、夏コミ用の絵だってまだ完成してないのだからそんなに時間を当てる暇なんてない。

それと各々のバンド活動も相まって暇な時間なんて少し作るのがやっつとだ。

それを見越しているが、レイは本日中に捕まえないかと無計画のまま甘いことを考えていた。

「……夜桜さん、流石にそれは無理です」

「そうか、なら俺1人で回るとするか」

「……よっちゃんもモカちゃんのためにそこまでしてくれるのー？もしかして惚れちゃいましたかー？」

「話しかけないで欲しい変態さん、俺はあくまで先生に頼まれたから捕まえるだけだ、君のためじゃない」

「なんだこいつ、ツンデレか？」

ありりはそういうものお前が言うか感が半端なかった。

なお柊優はこれを言いきに蘭のサークルの手伝いをサボれる口実を手に入れたと内心高らかにガッツポーズをしていた。

「それはダメ、柊優がいないと間に合わない」

「毎日見回るならアタシとレイの2人で回ってもいいぞー！」

その際は首輪をつけてまた夜道を散歩して……ぐへへなんて少しヨダレを垂らしながら巴はレイに視線を向ける。

それを察したレイはすぐに巴から視線を外す。

そもそもそんなことをしたらさらに変出者の目撃情報が出回り本

当に元も子もなくなってしまう。

「それに夜道を女子だけで出歩くのもな」

「そうだよレイ君！もし私が襲われたりしたらどうするの!？」

「お前のことなんてどうでもいいんだよ、失う物早く失って完全ビツチになっとけ」

「ひ、ひっどーい！いくらなんでもいいすぎ！馬鹿馬鹿！」

ポカポカと俺に軽く殴り続けるひまりを見ながら巴がなんか発情していた。

「(あのひまりにあんなこと言うなんて……！流石アタシのご主人様だぜ、普段からあんなドSとは!)」

「とても思ってるのだろうか？」

「レイ……流石にいいすぎだろ」

「夜桜、これぐらいなんともないぞ！」

「……なぜ宇田川さんが答えるんだ？」

「お、俺に聞くな！」

黙ってるこのクソ変態ドMペット志願者が、お前のこともバレたら格優が協力してくれるかわからないんだぞ!？」

「……ありりー香澄ー燐子さんーなんでもいい、なんか話してくれ」

他のメンバー達がこんなものだから香澄とかありりが発言するタイミングが全くない

「正直あたし達の手に収まりきれない話だと思っただが？」

「……………そこをなんとか！」

「なんとか、なんとか……あ！じゃあいつそのこと私達全員全裸になつて仲間だよって知らせるのは!？」

「ことを余計に大きくするな！」

「えーいい案だと思っただけだなあ」

ま、まあ呼び出すにはいい案かもしれないが俺達まで捕まってしまうじゃないか！

安全に露出魔を捕まえたいんだよ

「すみません、私の知識不足です。いい案が思い浮かびません！」

「い、いいんですよ無理しなくて!？」

「……レイ君燐子さんには甘いよねー」

「なんだよひまり、頬なんて膨らませて……」

まるで俺がお前と燐子さんで態度を変えていると言いたのそんな顔じゃないか

そうだよ、お前ら変態に甘く接したりしてみろ、俺が襲われちゃうだろーが！

「れっくん!?燐子先輩の胸よりあたしの方が大きいし柔らかいし形もいいぞ!?ほら触って確かめてくれ!」

「ひよー!あーりり!今はやめてくれ!」

「?なんでだ?ま、まさかお前本当に燐子先輩の胸に浮気を……!くっ!凜の方に堕ちるかもとは思ってたけどまさか燐子先輩が先とは!」
「違うから!落ち着けありり!柊優が!柊優さんがいますから!」
「!」

燐子さんも燐子さんで胸の話になったから顔が赤くなってるし凜もとぼちりくらつて俺のことすぐく睨んでくるし……

肝心な柊優は机に顔を伏せ耳を抑えてこれ以上視界と耳に情報を入れられないようにしていた。

「な、なんなんだこの変態集団は」

震える手で顔を押し絶望に慕っている柊優を見て思う。

だよな、そうだよな、やつぱりこのサークルおかしいよね!?!と共感することしかできなかった。

「もう作戦ないならあたしが一番最初に言った柊優の囮作戦で行こう」

「ツ!だからなんでだ?お前ただの嫌がらせだろ第一囮作戦ってなんだよ、何すんだよ」

「柊優一人で夜道を歩いて誘えばいい」

「だからどう言った場面、時間、など確認できればいいと思ってたんだけどね」

「それは本当にすまん!」

そーゆうことも含めて確認したかったのね、凜のやつ本当に頭回るな、あれか?ネガティブな人って色々考えるから脳の回転が早いとか

か？

「とにかく各自捕まえるようなやつとか、護身用のやつとか、色々持ってきて備えよう」

「結局作戦はどうなるんですか？」

「もうグループを作って辺りを見回る…のが一番妥当かと」

とは言っても俺達がうろついてる中露出魔が自ら現れるとは思わないけどさ

「！待てよ？」

となればいい感じにグループを配置して露出魔が露出できるであろうポイントを俺達で作り出してとっ捕まえる…作戦はいいのでは？

ほら例えばA～Dまでエリアがあるとすると。その中のA～Cを俺達で抑えれば露出魔はDに出現する…かもしれない。

そのDに柵優を配置してとっ捕まえる。

決して柵優は生贄ではない、あいつの運動神経なら臨機応変に対応して露出魔を簡単に捕まえてくれるはず…！

「みんな聞いてくれ」

俺は今考えたことをホワイトボードに書き写す。

その際は大まかにこの地域の地図を描き馬鹿でもわかりやすいようA～Dに場所を割り当て各々抑える箇所を説明した。

「はい！ゼロ君！」

「なんだ香澄？まさかわからないとは言わないよな？」

「チームがわかりません！」

「それはまだ決めてないからな」

「チームは…つてもうこんな時間か、俺が適当に考えるから！この流れでいいか？」

『……………』コク

ここにいる全員が頷きこの流れでいい露出魔を捕まえることになった。

単純な作戦だけどこれで捕まってくれたら万々歳、頼むから捕まってくれーい！

「んじや帰って準備するか」

「あ！今からタクシー呼びますね」

「早くご飯食べてお風呂入らないと！今夜は寝れそうにないね！ゼロ君！」

「なんで嬉しそうなんだよ」

香澄のやつやけにやる気満々だな、その勢いで捕まえてくれたらかなり助かる

「りんちゃん帰ろーあ、帰りに山吹ベーカーリー寄ってもいい〜？」

「もか、あんたことの重大性わかってる？」

「捕まえればいいだけでしょー」

「らーん！モカと一緒に守ろうね！」

「……当たり前のこと言わないで」

「よっしゃー！捕まえたら全員でラーメン食い行こうぜ！三郎な！」

「銀河なら考える」

変態幼馴染集団と凜のやつらもやる気？はあるんだよな？変態だけど巴とか運動神経いいし案外役に立つかも

あと三郎より銀河の方がギトギトかん少ないからそっちに行きたい、空いていればー！

「それじゃあ俺はこれで」

「ああ、悪いな柊優巻き込んでしまった」

「……気にするな、この事件が解決すればもう関わることなんてないからな」

「……………だな、頼んだぞ」

柊優はそのまま視聴覚室を出ていく

「別れたあとの彼女みたいな顔してるね」

「あーはいはい、黙っててくださいね」

帰り際に蘭のやつが俺にそう言いながら視聴覚室を出ていく、最後取り残された俺はホワイトボードに描いた物を消していた。

残したままだともう使わせないとか先生達に怒られそうだしな、消しとかないと

「よし、帰るか」

姉貴に今晚も適当に済ませてくれと言うか、まあ外食ばかりさせてたら健康数値悪くなってしまいうし俺的には嫌なただけど

「もう作るか」

適当にチャーハンとか作って食べさせよう。その方が絶対いいに決まってる

視聴覚室から出て生徒玄関へと向かう。

革靴に履き替え下駄箱にスリッパを入れたあと俺はいつも通りの歩幅で校門へと向かう。

「……………遅い」

「ええーな、なんですか?」

校門に誰かいるなーとは思ってたけどまさかの白鷺さんとは、この人なんなんだ?

ことある事に俺のこと校門で待ってるよな?さてはこの人がアサシンで俺のこと好きなのでは?

「少し来て、会わせたい人がいるの」
「???」

特に挨拶もなく俺は着いてこいと言わんばかりの勢いでそう言われ白鷺さんの後ろを着いていく

この人は何を考えているのか少しわからないところがあるからな、今回も会わせたい人:ってアサシンか!?

「(アサシン)」

案内された場所は商店街付近の公園だ、ちなみにだが巴達とこないで行った公園とは別の公園だ。

「(アサシン)よって誰もいないですよ?」

「……………おかしいわね、来るって言ったのだけれど」

携帯を取り出しメッセージでのやり取りを確認する白鷺さん、まじまじと見るのはあれだから横目でちらつと眺めていたその時

「やあレイ君、久しぶりだね」

「!アサシン!?ど、どこだ!?!」

何度も聞いたこの電子声!アサシン以外のやつでこんな声のやつは到底考えられない!

当たりを見渡すも白鷺さんしかいないぞ、どこだどこだ!?

「あそこよ、お馬鹿ね」

指さすを方を見てみる。すると…

「レイ君のことが大好きな僕だよー!」

「なっ!?!」

滑り台の上に立ち腰に手を置き胸を張りながらそう言うアサシンを俺は下から見上げていた。

そんな時誰かの意図かのような優しい風が吹きアサシンのスカートは綺麗にはらりと上がる。

ちなみに服装は羽丘の制服か、こないだはどこの制服だったけ?忘れてしまったよ

つてのはどうでもいいんだ!今日の前にアサシンのパンツが!あの時初めて見た黒のショーツが!

目に柄を焼き付けろ、もしものためにこの情報は役に立つ…かもしれないだろ!?

俺は無言でアサシンのパンツをじーと眺めていた。

「……………」

と同時に俺は白鷺さんからゴミを見るかのような視線を向けられていた。

か、かなり心が痛い

「そんなに僕のパンツが見たいのー?いいよー見せてあげるしなんなら触るかい?」

「いいんですか!?!」

「いいわけではないでしょ、あなたも冗談はそこまでにしときなさい」

俺は軽く白鷺さんから頭を叩かれ叩かれた箇所を擦りながらアサシンが滑り台から降りてくるのを待っていた。

アサシンは白鷺さんの隣に立ち改めて俺にこう言った。

「やあ、本当に久しぶりだね、レイ君」

毎度おなじみ紙袋を被って登場したアサシン、その隣には白鷺さんがいる…ってことは白鷺さんは本当にアサシンじゃないってことかなんか彼氏いるとか言ってたしな、よくよく考えればそんな上手い

話がないよな、大体俺が白鷺さんから好かれること自体夢のまた夢か、とほほ

「彼女がどうしてもあなたに会いたいというから呼んだのよ」

「うん、ありがとう千聖君」

「……じゃあ私は帰るわ、あとは2人で仲良くしてて」

「何言ってるのさ、千聖君も一緒に話を聞きなよ」

「……聞いてなんの意味があるのよ」

「キユンキユンなれるさ」

「……………そう、なら聞くわ」

「どゆことっ!？」

正直白鷺さんに話を色々と聞かれるのは恥ずかしいんですけど!？」

「ツーそれよりもアサシン!こないだはごめん、俺お前のこと気にもとめず変な事聞いてしまった」

俺は前回アサシンと会った時香澄か?と聞いてしまったんだ。

その質問を聞いた時アサシンは悲しそうになり、自分は嫉妬深い女なんだと言い残し去っていったんだ。

「……………うん、いいだ、そんな君が僕はどうしようもなく大好きなんだからね」

「アサシン…: 今後は気おつけるよ、お前は嘘つき屋で、嫉妬深い女かもしれないけどさ、そんなところもヒントじゃないかって思えてきたからさ」

もしかしたら身近に嘘つき屋なやつがいて、嫉妬深い女のやつがいるかもしれない。

まあアサシンが嘘つき屋であること自体が嘘であって嫉妬深い女つても嘘で…: っと思えるかもしれないけどさ

あんな反応されたなら嫉妬深いってだけは嘘じゃないと思えるんだよ

「ところでレイ君、僕がなんで君にパンツを見せてまで今日会いたいと思っただかわかるかい?」

「ば、パンツは置いといて…: なんでなんだ?」

「それはねレイ君、最近君に会えなくて寂しいから会いたいが故に会

いに来たのさー!」

「ただ単に会いたいただけじゃねーか!」

なんだよ!?もつとなんか理由があるかと思っただけとただ会いたかっただけかよ!」

「好きな人と会いたいとなれば会いたいんだよ?ね?千聖君?」

「あなた私に喧嘩売ってるの?」

「いーや、別になにもー」

「……………」

白鷺さんの彼氏さん今日本にいないと言ってたな、確か留学してるんだっただけか?

白鷺さんが誰と付き合ってたようが俺には関係ないことだし深く追求する必要もないし…話を聞いたらなんか返り討ちにあいそうそうだしやめとこう。

「つと悪いアサシン、俺今日は用事があるから要件は早めに頼む」

「ああ露出魔さんを捕まえる話かい?」

「ふ、ふふふ、も、もう驚かねーぞ!いつ聞いてやがった!」

驚かないといいながらレイは少し声を裏返ししながらアサシンに聞いたでいた。

「簡単な話さ、盗み聞きしてたからね!」

「…………お前本当は既にサークル内にいるんじゃないのか?」

「さあーどうだろうね」

「…………どうでしょうね」

『ねー』

「……………」

白鷺さんは真顔のままアサシンのねーに合わせ首を傾げていた。

もう少し可愛い顔しながらやるような仕草だろ、いやアイドルで女優だから顔は整ってますけど

「今回は僕が背中を押す必要はないみたいだね…少し残念だよ」

「!これは違うぞ、誰かから言われたとかじゃなくて!」

「…………うん、君の意思なんでしょ?」

アサシンの言う通りだ、俺は俺の意思でもう1人の露出魔を捕まえ

ようと決意したんだ。

理由は単純、シンプルに幼馴染が捕まるのは嫌だからだ、それにサークルメンバーが捕まったりしたなら夏コミなんて夢のまた夢になっちまう。

「なんだかアサシンと会えてほっとしたよ、もう会ってくれないのかと思った」

「何を言ってるんだい？僕はレイ君のことがどうしようもなく好きすぎるんだよ？」

「……それに次会うときは笑顔でとも言ったじゃないか」ニコ「ッ！」

紙袋のせいで素顔は見えないはず。なのに何故かアサシンが満面の笑みで答えたかのように感じ取れた。

それは何故なのだろうか、俺の勘違いかもしれない、でも…それでもいいじゃないか

こんなにもいい気分になれるのなら笑顔じゃなかったとしても損は無い

「必ず捕まえる、お前が来る場所は俺が守る」

「……うん、ありがとう」

「……………守る、ね」

「な、なんですか白鷺さん？」

「いえ、なんでもないわ、それより話はもう終わり？私次こそ帰っていいかしら？」

「いいよー止めてごめんね？」

「今更何謝ってるのよ、あなたに振り回されるのはもう慣れたことよ」
「なんかすみませんね…俺とアサシンの恋物語に無関係な白鷺さんを巻き込んでしまっ」

「いいのよ別に、文化祭後に秘密をばらす予定だから」
「ばらすって勝ったらはなしですよね」

「なんだ？もう勝つ気満々か、コノヤロウー俺達だって劇するんだぞ!?勝てると思うなよ!？」

「それじゃ帰るわ、さようなら」

「あー待ってよ千聖君、やっぱり僕もこのまま帰るよ」

「じゃあねレイ君！次会うときは文化祭だからね！」

「あ、ああ！文化祭な！」

「……………またね」

最後のその言葉、それだけは電子声ではなく地声のように聞こえた。

けどその声は先程アサシンのスカートを上げた優しい風なんかではなく強い風が吹き声を捉えることができなかった。

俺は一息付き、滑り台を一度滑り家に向かうのであった。



家に着くなり姉貴に事情を説明して急いでチャーハンを作り、風呂に入ったあと俺はパーカーを羽織り家を出ていく

集合場所に向かう途中に携帯のメモ機能を駆使して本日行う作戦のチーム分けをしていた。

俺が決めるんだ、あの変態共とは同じチームにならないよう決めなくてはな

担任から聞いた情報に従い、目撃情報をいただいた付近に集まるうって話だったんだけどもういるかな？

「おつそーい！レイ君が一番最後だよ！」

「……………すまん、姉貴の夜ご飯作ってた」

「夜ご飯ぐらい適当に買わせときなよ、あの人社会人でしょ」

「いやいや、健康的に家の飯を食って欲しいんだよ」

「れつくんは家庭的だな（結婚したい）」

「？ああ」

全員集まってる、のか？

あとありりは何故少し頬を赤らめているんだ？

「りんちゃん私の私服初めて見たー可愛いねー」

「な、なによ、その服が可愛いなんて言い方、まあ着る本人が不細工なら意味なんてないわよ、あははは」

「違うよー！凜ちゃんが可愛いんだよ！」

ひまりのやつが凜の頬っぺを触りながら言う。触られている凜は

少し嫌がってるように見えたが、喜んでいるようにも見えた。

そう言えばこいつらの私服を見るのはなんだかねで久しぶりだな

なんだろう。全員似合ってる可愛んだけど可愛いと言ったら調子乗りそうだからやめておこう

相変わらずありりとひまり、凜と燐子さんの巨乳四天王の胸は最高だな、制服もいいが私服もいい、特にありりはぐへへ

「ご主人様がイラやしい目で女を見てる…だど!? あ、アタシは!?!」

「黙れクソ変態、お前は公衆便所にでもこもってる」

近くの便所を指さし苦し紛れで俺はそう言った。

「なんだか夜に皆さんと会うのは不思議な感じがします」

「言われてみればそうですね」

「ポピパのみんななどはよく有咲の家に泊まったりするからあれだけどーみんなとは初めてだよね!」

香澄の私服、中学以来か? やはり高二にもなると服装とか変わるものなのか、俺はほら、厨二病だったから昔の私服とか思い出すだけで恥ずかしいよ

「それはそうとレイ君の私服パーカー羽織るだけってなんなのー? おしゃれした私の気持ちはー?」

「なんでおしやれをする必要があんだよ、露出魔捕まえるだけだろ?」

「え? 捕まえた後打ち上げでレイ君とエッチなことするからなんだけど?」

「…なら余計に服なんていらないだろ」

「レイ君全裸でってやる気まんまんじゃーん」

「……………」

もうダメだ、このクソ変態の相手をするなんて時間の無駄だ、真面目に答えた俺が馬鹿で阿呆だった。

「あれ? 柊優は?」

「あーあいつなら…」

「どうせ俺は1人で行動するんだ、合流する必要は無い、好きにやらせてもらおう」

「だつてさ」

「なるほど、わかった」

蘭が言伝を受けてたもんだから理由を聞く、確かに1人で行動するなら合流する必要は無いな

それにあいつだつてこんな変態集団と行動したいとは思わないだろ

「それでレイ君、チームはどうなったんですか？まさか決めてないなんてこと…ないですよね？」

「はは、まさか、燐子さん俺を誰だと思ってるんですか？」

「おっぱい星人」

「……凜、お前そのセリフ気に入ってんだろ絶対」

「いえい」ブイ

なんだこいつ、普段はネガティブのくせに俺をいじる時だけはそうゆうのないよな

「んんっ！と、とりあえずチームをメッセージで送る、確認してくれ」
帰りに本日の作戦のためだけのグループをメッセージアプリにて作成し、そのグループにチーム内容を送った。

「見てわかる通り俺、ありり、蘭がA地区担当」

「私^{燐子}戸山さん、宇田川さんがBチーム」

「……えつと、私^凜ともかとひまりがCチーム」

「そして終優がD地区担当、各区チームはチームと同じアルファベットの地区を担当するように…っ」と

ついでにAとDと四分割した地図をグループに送り各自担当地区を見回るようにと口頭で伝えた。

「えーれーくんと同じじゃないの〜？」

「クジの結果です」

「やり直しを要求しますー！」

「しません」

「なあ蘭、アタシと変わってくれないか？」

「変えさせません、ほら早く行った行った」

クジなんてするかっての、お前達から離れるためだけにこのグルー

プにしたんだよ

比較的ありりは他の人達と比べて気軽に接せれるからな、蘭に対しては2人っきりの時は優しくしてくれるし…3人ならワンチャンと掛けてみた。

「では私達はタクシーを使って見回りましょう、歩くと疲れるので」

「いいんですか？お金かなりかかるんじゃない？？」

「大丈夫です宇田川さん！このカードがあれば痛くも痒くもないです！」

「出たー！燐子さんのクレジットカードー！」

Bチームはなんだかんだで上手くやってけそうだな、燐子さんは話によると巴の妹のあこと仲良いみたいだし？

巴と積もる話もあるだろう。香澄に関しては凜以外のやつとは仲良いし問題ないだろ。

「りんちゃんよろしくね〜」

「私達で露出魔を捕まえよう！」

「う、うん…大丈夫かな？」

凜のやつは仲のいいモカとひまりと組ませることで頭脳をフルで発揮してもらおうって魂胆だ。

あー今思えば香澄と凜を逆にしても良かったかも？凜のやつ燐子さんと仲良いし

でもやつぱりひまりとモカは同じクラスだし過ごした時間は多いから…まあ問題ないか

「えへ、れつくんと夜回り、最高すぎるだろ」

「ありり？どうしたんだ？」

「なっんでもないぞ！さあ早く行こうぜ！」

「なんでか知らんが元気だな」

「……ねえレイ、これってさ本当にクジ引きで決めたの？」

「え？なんて？ごめんレイさん急に日本語がわからなくなってしまったよ、ははー」

「……………」

「あああああ痛てええー！」

普段は学校指定のスリッパにて足を踏まれるも今回は普通の靴にて思いつきり足を踏まれた。

そのまま俺は地面に転がり込んで痛みを少しでも和らげようとしていた。

「大丈夫かれつくくん！おっぱい揉むか？」

「あ、ありり…」

「！蘭ちゃん！前から思ってたけどれつくんに対して当たり酷くないか!?怪我したらどうするんだよ！」

「……別に、やったあと有咲が面倒見てくれるでしょ？」

「そ、そうだけどさ…痛かったよな？大丈夫か？本当におっぱい揉むか？」

「いやいいよ」

「……………」

蘭のやつは横目で俺達を見たあと舌打ちしながらてくてくと先に歩いて行く

大方あいつは柊優以外のやつと俺がイチャイチャしててイラついてきて…

でも待てよ？別に今回は誰かのおっぱいを見てたとか、エッチなこと考えていた訳でもない

蘭はいつもそんな時に突っ込むように足を踏むけど今回は？今回は何が原因だったんだ？

「……………行くか」

「だな」

俺は立ち上がり背中に着いた土をありりに払ってもらい蘭に追いつくよう小走りにして蘭の元に向かうのであった。



あの後3人でA地区を見回るも特に露出魔らしき人物、または挙動不審なやつは特に見当たらなかった。

「……………」

でも空気が重い！さつき少し蘭とありりが言い合ったってのもあるかもしれないけど蘭のやつがかなり不機嫌だ。

「蘭ちゃん、さつきはごめん…その、言い過ぎた？かもしれない」

「……別に、なんとも思っていない」

「でも暴力はよくねーってか、れっくんが怪我したりしたらあたし達が困るしよ」

「わかった、控える」

「……控えるじゃなくて今後すんなよな」

未だに足が若干痛いんだが！歩けないことは無いからいいけどまた後日同じところを踏まれたら本当に折れるかもしれない。

「……なに、この匂い」

「？本当だ、タレの匂い？」

蘭とありりはその場に立ち止まりくんと周りの匂いを嗅ぎ、匂いのする方にふらーと歩いて行く

「おい！そっちは担当外だろ！」

「すぐ戻るから」

「って、はあ…」

俺ははあとため息をこぼしたもう少し小走りになりながら蘭達の後をおった。

「へいらっしやい」

「焼き鳥屋さんだ」

「あたし夜ご飯食べてないんだよね」

「あたしも腹減ったぞ」

「……………」

2人は俺に奢ってくれと言わんばかりの眼差しを送ってきた。

「高校生だろ、それぐらい自分で買え」

「あれ？財布ないわ」

「お前絶対それ言いたいだけだろ」

「あたしも財布ないわ」

「……はあ、何食いたいんだ？」

負けた俺は財布を取りだした。

その途端蘭とありりは各々食いたい焼き鳥の品を選び店主さんへ伝える。

俺は野菜を食べたいと思いネギまを数本物買うことにした。

あれ？俺達露出魔捕まえに来たんだよね？なんで屋台で焼き鳥買って食うなんてことになってんだよ

「へいお待ち」

なんてことを考えていたら焼き鳥を渡された。結構待っちゃったからな：時間を無駄にってしまった。

みんなはちゃんと回ってるはずなのに俺達はー！バレたら怒られるかもしれない。

受け取ったあとは歩きながら焼き鳥を食べる。

行儀が悪いかもしれないけど屋台で買ったら歩きながら食べるのが鉄則だろ？

え、違う？知らんな、人の価値観を勝手に押し当てないでいただきたい！

「うめえー！あそこってSNSでちょっと人気があるところなんじゃないのか？」

「にしては客いなかっただろ」

「あーなんか営業日と営業時間が日によって変わるらしい、買えることが珍しいんだってさ」

「食いながら携帯いじんな、串が喉に刺さったらどーすんだよ」

さらに歩いてるんだぞ？万が一のことを考えて行動して欲しいものだ。

「焼き鳥なんて久しぶりに食ったけど本当うめえーな！それにれっくんの奢りとなると格別だ！」

「わかる、人に奢ってもらって食べる肉ほど美味しものはない」

「蘭ちゃんわかってるな！2人で媚ってよかったな！」

「ふふ、そうだね」

さつきまで少し仲悪い感じだったのに焼き鳥で仲直りか、食い物は人を幸せにするってのは本当かもしれない。ありがとう鳥

蘭達と焼き鳥を食べながら歩くこと数分、横断歩道の信号が赤だったから止まるとその数秒後隣にタクシーが止まった。

タクシーなんて至る所走ってるものだから特に気にしなかったが視

線を感じたためチラリと見てみると

「むうー!!」

「ッ！燐子さん!」

頬を膨らませた可愛い燐子さんが俺達を羨ましそうに見ていた。

こ、これはまずい、見回りをサボって焼き鳥を食べてるヤツらだと思われてるだろう。だって実際そうだからな

後ろの巴と香澄のやつもこちらをじーと眺めてるし

なにか言おうと思ったが信号が青になったため止まっていたタクシーはそのまま前進してしまった。

燐子さんが一瞬驚いたように見えたがタクシーはあつという間に見えない距離まで離れてしまった…。

「よし、真面目に回ろう!」

「うん、なんか急に罪悪感が溢れてきた」

「有咲と同じ」

焼き鳥をたいらげ担当地区に戻るよう進み出したその時

「……！電話だ」

何度かコールがなった後に俺は携帯をポケットから取りだし画面を確認する。

「凜からだ、何かあったのか?」

もしかして露出魔を見つけたって連絡だったりして! いやそんな簡単に見つかるわけないか

「もしもし、俺だけど」

「おっつそい! ワンコールで出なよ!」

「それはごめん、で? 何かあったのか?」

「あるわよありまくりよ! 今露出魔に追われてるのよ!」

「ッ!? はあッ!」

『!』

俺の大声で反応した蘭とありりはすぐに俺の近くにやってきて状況を確認しようとしていた。

「凜! 大丈夫か!」

「はあはあはあ! だ、大丈夫なわけないでしょ!?! もう最悪よ! なんて

なの!？」

「もう無理、体力の限界…!」

「凜!」

「んぎやああああああ!!」

電話越し、ではなく実際に外から聞こえた凜の叫び声、もしくは断末魔がこの辺りに響いた。

『……………』

これは冗談抜きでかなりやばい状況だ。すぐに助けに行かなくては…!」

「蘭!ありり!急いでC地区に向かうぞ!」

「お、おう!」

「凜が危ない!」

俺達は凜達が担当していたC地区に急いで向かう。

しかし向かったあとに目の当たりにした光景は…まさにこの世の終わりのような光景なのであった。

露出魔を捕まえようとしたことありますか？その2

凜の断末魔を聞き終えたあと俺達は恐らく凜がいるであろうC地区に向かっていた。

「凜のやつ大丈夫か？」

「大丈夫も何も最悪：襲われてるかもなんだろう？」

「処女持つてかれるかもね、レイみために」

「俺は一体いつなくしてんだよ、てかねーよ!?あと少しは心配しろよ！」

「……………」

そう、もし襲われているのだとしたら：最悪蘭の言ってる通り凜の初めてが露出魔に持つてかれてしまう。

そんなことになってみる、あの凜だ。今後の生活に支障が出るほどのトラウマを抱えてしまう。

「レイ！」

「柊優！」

俺達3人が走ってC地区に向かっている間D地区担当の柊優と合流した。

「朝日奈さんの悲鳴が聞こえた、何かあったのか？」

「どうやら露出魔を見つけたらしい、でも襲われてる状況だ」

「ツ！かなりまずいじゃねーか！俺先に行く！」

「ああ、頼んだ！」

馬鹿みたいに運動神経がいい柊優なら俺達に速さを合わさなければ誰よりも早くC地区にたどり着くことが出来る。

「柊優、凜に何かあったら許さないから」

「…………それは変態露出魔にでも言ってくれ」

そう言い残すと柊優は一気にスピードを上げ俺達と柊優との距離が大きく離れた。

「俺達も柊優ほどではないがスピードをあげよう！」

「はあ、はあ、ああ！まだまだ行ける、ぞ！」

「ありりさーん！大丈夫ですかー!!」

「胸が大きいから走りにくいんだよ!」

な、なるほど、胸が大きいと走りにくいか

まあありりは運動部じゃないから走ることに関して困ることなんて体育とか今みたいな緊急の時以外ないからいいけどさ

それによりは胸が大きく柔らかくないとありりではない、ん?何言ってるんだ?

「人の心配よりレイはどうなの?大分息荒いけど」

「あっ」

蘭にそう言われふと気づく、俺体力全くなかったんだわ…

いままでそのことを気にせず走ってたからだろうか。意識し出すと急に先程よりも息が荒くなっていく

足も思い、辛い、もう1つ辛い

「保つてくれ俺の体力うううー!!」

少しづつスピードは下がりながらも俺達は凜がいるであろうC地区へとたどり着いた。

辺りを探すも凜のり文字もない、本当に襲われてしまったのだろうか?

「凜!助けに来たぞ!いるなら返事をしてくれ!」

「凜ー!大丈夫!?!柎優に襲われたりしてない!!」

「なんでもいい!合図をしてくれ凜!」

俺達は凜にそう呼びかけるも返事はなかった。

そんな中遠くの茂みからガサガサと音を立てあいつが現れた。

「ツ!柎優!お前…」

「……結論から言う。見に行かない方が…いいぞ、あれは地獄だ、俺にとってはない」

「くっ!凜!」

柎優をその場に放置して真っ先に柎優が出てきた茂みの中に入り凜を探す。

でも探す探さない以前の問題だった。その茂みの中に入ると凜は目の前に横たわっていて…

「ほれほれ凜ちやーん!ここが乳首かな?ほらほら」クリクリクリ

「ひゃっ！も、もうやめてえ、許してえ」

「えーせっかく外だしさー全裸で気持ちよくなろうよ」

「私を巻き込まないで！んぎやあああ！」

全裸のモカ、そして半裸の凜がモカに乳首をいじられていた…。

「おろ？れーくんじゃーん、なーに？混ざりたいの？」

「てめえは何してんだよ!!!」

俺はモカに近寄り首を元を掴んでは凜から引き剥がす。がっちりと凜に抱きついてたがそれを無理やり引き剥がす。

ありりと凜は気が抜けたのか、ほっと一息つくど地面にへなーと座り出す。

「よかった、本当に襲われたんじやないかと心配したぜ、全くよー」

「同感、とりあえず元氣そうでよかった」

「何言ってるのよ、軽く襲われてるわよ!!」

「この変態露出魔が！てめえのためにみんなが協力して露出魔捕まえようとしてんだろーが!!」

なんで今捕まるようなことをするのかな!!馬鹿か！今見つかったからモカが完全に巷で噂の露出魔になってしまっただろうが！

「それに凜！お前も紛らわしい電話をするな！心配したんだぞ！」

「な、なによ！襲われてたのは本当じやない！それにこっち見んなおっぱい星人！」

「それはごめん！」

急いで服を着る凜を横目で見ながら着替え終えるタイミングを見計らっていた。

着替え終えたことを確認できたところで俺ははあとため息つき話し出した。

「で？あの馬鹿ひまりはどこだ？さっきから見当たらないんだが？」

「ひーちゃんならお腹減ったってコンビニに行ったよ」

あの野郎…！ひまりのいない間に凜がモカに襲われてたんだぞ!!

てか襲うってなんだよ、モカはそっち系なのか？あなたは女子でも発情できる側の人だったんですか!?

「いやーこう夜中に外にいとどうしても脱いじゃうよねーこれがモ

カちゃんの性なのかな〜」

「性なのかな〜じゃねーよ！モカちゃん下手したら捕まるんだぞ!?」

「だって仕方がないじゃん、れーくんが有咲のおっぱい好きなようにモカちゃんは全裸になるのが好きなんだから〜」キャー

と言いながら尻を振るモカ、制服では無いためスカートではないが…なんて言うか、ズボンで振り振りされるのもなんかスカートよりいけないことを想像してしまいそうだ。

「あと俺がありりの胸が大好きなのは確定なのかよ…」

「あ、あたしは全然問題ないぞ！寧ろれつくんのために大きくしたようなものだしな…」

「俺のために…？あ、ああーあの約束ね、はは」

何を隠そう俺は小さい頃ありりに大きくなったらおっぱいを揉むと約束をしていたらしい。

おかげで揉めるからいいけどさ…って！そんなこと思ってませんから!?

「……………」フン！

蘭のやつが戦闘状態に入った！今回も足を踏むんだろう…でもな！いつも踏まれる俺ではないぞ！

今日のレイさんは少し感じがいいようなんだ！

「はっ！そう何度も足を踏まれて溜まるかっての！」
「……………」

避けられ機嫌を悪くしたのか蘭は目を細めて俺を見つめる。

なんだその顔は、だいたい人に暴力を振るってはいけないと小5の時担任が言ってたじゃないか。

「もう俺にその足踏みは通用しないと思え！大体俺が毎回何をしたって言う」

と蘭に胸を張りながら偉そうに話していたその時

「真後ろからどーん！」

「ぬへあ!？」

後ろから誰が思いっきりタックルを決めてきやがった。

俺はその誰かともわからない相手から抱きつかれる勢いでタツ

クルを食らうのと同時にそのまま前に倒れた。

咄嗟に手が前に出て顔を守るような体制で倒れたもんだから手が痛い。

「戻ったらレイ君がいたから思わず抱きついちゃったー♪」クンカクンカ

「いっすー！」

一瞬にして誰がやったことなのかわかってしまった。

それと同時に全身にゾワゾワと寒気が走り鳥肌がたっていることが瞬時にわかる瞬間がやってきた。

「ひ、ひまりさん?」

「なーにはあ…走ったのかな?汗かいてる…!んんー!最高、いい匂い…♥」

わかる。多分ひまりは今男子には見せられないような顔をしながら俺の匂いを堪能しているんだろう。

さつきから鼻息が荒いだが?

「おいー!お前ら少しは俺を助けようとしてくれよ!」

「え、いや…被害に会いたくないし…レイが犠牲になってよ」

「凜、お前俺が助けようとした恩を仇で返すのか!」

なんてやつだ朝日奈凜、俺はお前のことを助けようとしたのにお前は助けてくれないのですか、そうですか、レイさん残念ですよ!」

「あのひまりさん、そろそろ、な?いいだろ?」

「ダメー最近嗅いでなかったしいじやーん、それにレイ君も大好きなおっぱいの感触を背中であつは!」

「あつはは!そうだね!お互い損ないね!じゃねーよ!はよ退けろ!」

俺は両手を地に置き立ち上がろうとするが

「だからダメだって!」

「ッ!」

ひまりのやつから両手を押さえつけられ、ひまりは自分の足をいいように使い、俺を完全に拘束する。

恐らくだかこうゆうシチュエーションのエッチなビデオみて勉強

したな、こいつ

「ああああああああああ！」

「有咲うるさい」

「もう見てらんねー！おいひまりちゃんそこ変われー！じゃなくてれつくんからはなれろー！」

どうやらありりが助けてくれるらしい。

ありりはひまりの肩を掴み俺から引き剥がす。それと同時に俺は立ち上がりすぐにひまりから距離をとった。

「ありがとうありり、本当お前だけだよ俺に優しくしてくれるやつは」と言いながら俺は凜、凜、モカ、ひまりを順番に眺めながら最後はありりに視線を向け先程のセリフを言う。

「んなことねーって！そ、それよりほら！行くぞ、露出魔は待つてくれねーぞ（？）」

「お、おう？」

こうしては俺はひまりから、凜はモカから襲われることなくこの場を離れることに成功した。

まあひまりに関しては何れそうになったと言うより匂いを堪能されていた…と言った方が正しいんだろう。

「凜、よかつたら俺達と行動しないか？あんな変態露出魔といたらまた襲われてしまうぞ」

「酷い言い方ですなー否定はしないけど」

「……ひまりが離れないと約束してくれるなら残る」

「いいよいいよ！だったら手を繋いで回ろうか！」

ひまりがコンビニに行つてモカが凜と2人つきりになったから暴走したんだろ？

ならひまりが居れば同じことはないと思う…が

「……………本当に大丈夫なのか？」

俺は頬をかきながら少し不安に思いながらみんなと茂みから出て行く

俺が先導して進むが、後ろの女子達は何やらありりを囲んではいじめるような話をしていた。

時折ありりのやめろー！なんて声が聞こえたから多分そうなんだと思う。

「そーいや柊優のやつは外で待機してるんだよな？モカと凜の光景を見て出てきてたし…長いこと1人でいさちまったな、後で謝らないと」

「……………あつ！」

茂みを出て当たりを見渡すと柊優の姿が見られた。しかしその前にはよく知るあいつが…

「君こんな時間に1人で何してるのかな？」

あの何かと俺に絡んでくるお巡りさんが柊優に職質をしているのであった…。



凜の叫び声が辺りに響く数分前の出来事

「それではタクシー呼びますね」

「隣子さん慣れてるんですね」

「はい、タクシーがないと生きていきませんので」ドヤ

「いつも支払ってもらってありがとうございます!!」

「いえいえ、人が増えても値段なんて増えませんので」

サークル活動後隣子は香澄、有咲と3人で同じタクシーに乗りそれぞれの家へと帰宅する。

ルートを予め決め最終的に隣子の家に着くようになっており香澄や有咲が降りる際支払わずに最後隣子が降りる際に支払う。

つまりのところタクシーは人が増えても距離が伸びない限り料金は上がらないのだ。

というのは説明しなくてもタクシーを使うものならわかっていただけのだろう。

「それに距離が少し増えたところ数百、数千円ぐらい痛くも痒くもありませんよ」

「……………」

そのセリフを聞いた巴と香澄は目を合わせ頷くと香澄が声を出した。

「燐子さんの家って大金持ちですか？」

「金持ち？……そうですね、父が医者をしてまして……あ！タクシー来ましたよ！」

「……なあ香澄、知ってるか？」

「？」

「あこから聞いたんだけどさ、燐子さんゲームにめちやくちや課金してるらしいぞ……」

「……もう大金持ちじゃん!？」

「2人ともー早く乗りましょうー」

その後は言うまでもなくタクシーに乗りながら担当のB地区を巡回していた。

タクシーの運転手はと言うととりあえず金さえ払ってもらえればなんでもいいやーなんて思いながら決められたルートを走るのであった。

そして信号待ちになった時3人がふと隣を見ると美味しそうに焼き鳥を食べるレイ達の姿が

「むうー!!」

「あぁー!ゼロ君達焼き鳥食べてる!ずるいよー!」

「くっ!隣にいれないのが悔しいぜ……(?)」

頬を膨らませる燐子、焼き鳥を食べることを羨ましがる香澄、そして何故か悔しがる巴

燐子と香澄は思いは一致しているかもしれない、いやしてないかもしれないが反応は2人が概ねあつてるだろう。

しかし巴に関しては本当に謎だ。

「……あ、今思ったけどゼロ君チームだけどさ、有咲と蘭ちゃん2人もゼロ君の幼馴染だよな」

「幼馴染?有咲とレイは幼馴染同士なのか?」

「そうなんですよーなんでもファースト幼馴染みだとか、ちなみに美竹さんはシックス幼馴染らしいですよ」

「……へえーファースト幼馴染み、ね」

今思えばではない、サークル内にいる生徒の燐子と凜を除く全員は

レイの幼馴染だ。

これ程の数の幼馴染がいるやつがこの世にいるのだろうか。残念、いるのだ。

「ならアタシはセカンド幼馴染だな」

「！宇田川さんがセカンド幼馴染なんですか!？」

「多分ですよ、レイとアタシ達が絡むようになったのはアタシとレイが仲良かったからでー」

「嘘ー！ゼロ君からそんな話聞いてないよ？」

「確か順番つけるならアタシ、ひまり、モカ、つぐ、蘭ーだったはず、蘭が最後なのは覚えてんだけどなー間はうる覚えだ、間違ってたらごめんな」

巴の言ってることは的中している。と言うよりも仲良くなった順と言った方が適当だろう。

レイは小学生の時巴とたまたま席が隣になったことで絡むようになり、その後巴と仲が良かったひまり、モカ、つぐみと仲良くなり：最後は蘭がみんなの輪に加わり仲良く幼馴染グループは完成した。

「じゃあ私はセブン幼馴染かー」

「！香澄もレイと幼馴染なのか?」

「うん！私は中学生の時知り合ったよ！3年間同じクラス！沢山遊んだしーお泊まり会とかもした!」

「お、おお泊まり会…!」

瞬間巴は行けない想像をしてしまう。

お泊まり会Ⅱエチエチ展開

それよりも香澄とレイがそうゆう仲なのかもしれないと思うと自分の野望が果たせなくなってしまうかもしれない…。

ちなみに巴の野望は言うまでもない。

「香澄とレイはそうゆう関係だったのか…!」

「えっ!?!いやいや！そんなことしてないよ！ただ一緒に布団で寝たりしただけだよ」

「もうアウトじゃないですか!?!」

「アウトなの、かな?」

香澄は腕を組み首を傾げそう問うていた。正直一緒の布団で寝ただけで一線を越えた判定にはならないだろう。

確かに羨ましいけども

「わ、私だって！えっと、エイト幼馴染なんですよ!？」

恥ずかしそうに頬を赤らめながら助手席から身を乗り出し後部座席に座る巴と香澄にそう言う燐子を見た2人は微笑み

「そうですね、燐子さんもレイの幼馴染です」

「ラッキーセブンは譲りませんよ!」

ここにレイの8人目の幼馴染が誕生、尚本人はそのことを知らない模様、逆に知っていたら恐ろしい。

「そーなるとレイのやつ幼馴染多くないか？」

「凜ちゃん、もそのうちナイン幼馴染とか言うのかな？」

「そこまで来たら10人揃って欲しいけどな」

「そ、それはなんというか、レイ君が大変そうですね…」

10人幼馴染に囲まれるレイ、その光景を見て思う一言はハーレム以外に何があるのだろうか？

3人が車内でレイとの話で盛り上がる中タクシードライバーの方はと言うと

「(レイってやつモテモテすぎんか?)」

と思い、少し嫉妬しながらアクセルペダルを踏み続けるのであった。

信号に止まることなく走り続けること数分、その間もレイの話はしてたがその時

「んぎやああああああ!!」

凜の叫び声が地域に響いた。そう、あの時の断末魔だ。

「?今凜ちゃんさんの声が聞こえたような…?」

「聞こえましたか?」

「聞こえた?ような?気が?する?かも?」

?の度に首を傾左右に傾げながら可愛く言う香澄、可愛い、可愛いぞ戸山香澄

「気のせいですかね?とりあえず私達は担当地区を回りましょう、お

願いますねドライバーさん」

「……………はい」

「(可愛ええ)」

「安全運転で頼むぜ!」

「(かつこいい)」

今日はいいい日かもしれない。そう思えたタクシードライバーなのであった。



場所は戻り現在進行形で柊優は職質を受けていた。

「君こんな時間に1人で何してるのかな?」

「……………あ、俺に聞いてます?」

「君しかいないだろ」

「……………まさか俺がお巡りさんに話しかけられるとは……………なんかようですか?」

「だからこんな時間に1人で何をしてるのかって聞いてるんだよ、早く答えたまえ」

「…………………………待ってるんですよ、友達を」

あのお巡りさんよく現れるなーこの地域担当の人とか思うけどこ
うも頻繁に現れてしまうものなのか?」

「あいつ職質受けてんじゃん、ダサ」

「ダサって言うなよ蘭、俺だって何回か受けたことあるんだぞ?」

「別に言わなくてもいいじゃんそんなこと、わざわざ教えるなんてダサって言われたいの?」

「…………………………」

生憎だが俺にはクソバみたいなのDMではないんだ。ダサイって罵
られたところで喜ばん、むしろ悲しい。

「最近近辺に露出魔が現れるんだ、まさか君…ではないよね?」

「俺を変態扱いしないで欲しい」

「…………………………」

おいおいおい、お巡りさんガッツリ柊優のこと怪しい目で見てる
じゃんか!

このまま柊優が連れ去られてしまったら誰が露出魔を捕まえるつて言うんだよ……！

……こは……！

「！」

「ちよー！レイ君?!」

俺は蘭達に相談もせず茂みから飛び出し柊優の元へ向かう。

「お巡りさーん!!」

「！君は！盗聴されたい子じゃないか！」

「その話はやめてえー！」

「レイ……」

変に嘘をついたところでこのお巡りさんのことだ、怪しいとか言つてなかなか解放してくれないだろう。

なら俺は真正面から本当のことを話す。そしてこのお巡りさんを説得させる！させてみせる！

うおー！学年3位（過去の栄光）の頭脳を舐めないでいただきたい！

「お巡りさん話をしましょう。みんな出てきてくれ」

『……………』

俺の声を聞くとありり達は茂みから……ではなく上手いこと遠回りをしたのか、曲がり角から姿を現した。

よくよく考えれば茂みから登場してたら更に怪しまれるところだった。

誰が指揮をとってくれたのかわからないけど感謝を！

「な、なんだ君達」

「実は……」

俺はお巡りさんに全てを話した。

俺の友人が露出魔の目撃情報にある頭髪の色、そして女性であるため、授業態度が悪いからと理不尽な理由で露出魔と疑われていることそしてその疑いを自ら晴らすために自分達で露出魔を捕まえようとしていたことを話した。

な？嘘ではなく真実を話しただろ？

「……なるほど、友人が疑われていると」

「はい、幼馴染なんです！毎日疑いの目を向けられる姿を見るのが辛くて……」

なーんてこれは嘘ですけどね、でも露出魔を捕まえたいって気持ち
は嘘ではない。文化祭の費用追加申請権を手に入れたい。

「うーしくしく、うえーん」

「モカ大丈夫、お巡りさんはわかってくれるから」

「……………」

「お巡りさん……」

「な、なんだ……？」

モカは萌え袖＋目をうるうるさせながらお巡りさんの近くにより
下から目線でこう言った。

「お巡りさんもモカちゃんが露出魔だと思うんですか……？」

「ツ……同情はしてあげよう、しかし危険だ、学生がこんな時間にう
ろつくべきではない」

はい、お巡りさん負けたーモカのやつクソ変態だけど顔はいいから
な、俺も下からあんなうるうるした目でエッチしよーと言われたら喜
んで挿入してしまうかもしれないレベルで強い眼差しだ。

「危険？危険も承知の上で行動してます。それに私は習い事で夜遅く
に帰ることなど多々あります」

「しかしだな、目の前にいて」

「ならあなたは深夜に徘徊する全ての学生を一人で取り締まることが
できるんですか？できないですよ、あなたが今日見逃す学生が数人
増えるだけです。問題はないと思いますけど？」

「な、なんて無理やいな理論なんだ！」

「凜ちやーん、流石にそれは無理があるよ」

「す、すみませんお巡りさん！……いつちよつと口が悪くて、はは！あは
は！」

ありりがお巡りさんと凜の間に入り大事にならずに済むようよう
対応してくれた。

凜の言いたいことはわかるがそれをお巡りさんに言ったところで

見逃してくれるはずないだろ

あの凜がこんな行動をとるとはなんか変だな？何か作があるのか？

「しかしだ、痛いところを着いてくるね」

「じゃあ！俺達に露出魔を探す許可を！」

「でも出す訳には行かない、疑いを晴らしたいのならその子をうちで保護しよう。保護している間に目撃情報が入ればこの子の疑いは晴れるだろうさ」

それはそうだ。お巡りさん達のところにモカがいるのに露出魔が現れたなんて報告を受けたらそりやモカの疑いは嫌でも晴れるさ

でもな！俺達の真の目的は文化祭の追加申請権なんだよ！俺達で捕まえないと申請できないからな：何としてもお巡りさん達が捕まえる前に捕まえたい。

「それはダメ、私達が捕まえることに意味がある」

「……どうしてそこまで捕まえることにこだわるんだい？」

「ッ！」

「お、おいつ!？」

凜のやつがありりの手を取り口から手を離させた所で息を思いつきり吸い言葉を発した。

「友達を助ける……助けたいんです」

「お願いします。私達にも協力させてください！」

「！俺からも！お願いします！」

「私からも！お願いします！お巡りさん」

「モカちゃんのためにもーお願いしますーす」

「え？そーゆう流れなのか？…あ、あたしも！お願い、します…」

蘭と柊優以外は全員お巡りさんをお願いしますと言い頭を下げた。

蘭は一向に頭を下げる気を見せることなく腕を組んだまま顎を上げお巡りさんをまるで見下すような態度をとっていた。

そんな蘭に嫌気がさしたのか柊優は頭を抑え無理やり頭を下げさせた。

「俺とこいつからも……お願いします」

「ちよつとー」

柀優のやつはいやいや参加してるはずだ。別に構わないとか言いながらモ力を嫌ってたし嫌に決まってる。

そんな中柀優も頭を下げてくれたんだ。

「許可つて言うよりも深夜徘徊を見逃して欲しいつてことだよね？」

「……まあそうなりますーはい！」

「……………はあ、日を跨いだら帰ってもらう。1時間経つ事に連絡すること、その約束を守るなら許可する」

「ツ〜！はい！ありがとうございます！」

俺は急いでお巡りさんの仕事用の携帯と連絡先を交換した。買い換えたばかりの携帯に追加された6人目の連絡先がお巡りさんの仕事用の携帯とはな、そんなやつなかないないだろ

ちなみに1人目は友希那さん、2人目は姉貴だ。

3人目は隣子さんで4人目は香澄、5人目は凜だ。凜に関してはついさつき交換したばかりだけどな

「所で先程誰かの叫び声が聞こえたんだ、心当たりはないかい？」

『ッ！』

こ、心当たりしかねえ！でも馬鹿正直に凜が叫んだなんて言えないだろ！

さつきは正直に話したさ、でもそれはこの窮地を打破するための嘘であつて…

「いえ俺達も聞こえたので駆けつけたんです」

「……なるほど、だから君は1人で待っていたのか」

「ええ、流石お巡りさん、俺を変態扱いしたいけど鋭いようですね」

「一言余計なんだよ」

こうして俺達はお巡りさん公認で深夜徘徊できることになった。

1時間置きに連絡をしよう条件のもとでだが…補導されないという保証があるだけで堂々と徘徊できるな

正直バレないように回るしかないのかなーって思ってたけど

「何とかなつてよかつたな！」

「何とかなつてよかつたじゃない、何も考えずに飛び出すなんて非常

識、私達があの時どれだけ焦ったからレイは知らない」

「それは…なんも言えねー!」

どうやら凜があの時指揮をとったようだ。あの時は本当に無我夢中で何とかしないと置いて何も考えずに出てしまった。

ありがとう凜様、今度おにぎりを差し上げます。

「所でここからどうするの?またそれぞれの地区で見回る感じ?」

「その方がいいだろ、こんな大人数で行動なんてしてたら出るやつも出ねーだろ」

「柊優は1人?レイと2人で回ってもいいけど?」

「…:…なんでだよ、俺は俺一人で行動させてもらう。変態共と一緒にいて勘違いされてしまうのは御免だ」

ついさつき変態扱いされたことを酷く根に持っているようだ。柊優のやつ何かと変態と言われたら頭抱えてたもんな

「そういう他人を突き放すような言葉はあまり言わない方がいいと思うゾー!」

「蘭が言うな、あとその後輩みたいな甘ったるい声をだすな」

蘭のお得意ボイスチェンジを使いクソ甘ったる後輩のような声でそう言う。

君の一年の時クラスでもそんな感じだっただろうが、今のクラスに入ってモカ達がいるあんど腐女子が多いからなんともなっていないけどさあ

「それじゃ俺は行く、さようなら」

てくてくと1人歩いていく柊優、モカみたいな変態がいなければ一緒に行動できたんだろう。

でも今は自由にさせた方がいい、柊優が襲われるなんてことはないと思うし

「モカちゃん大分嫌われていますね〜これは少しショックかもしれない…」

「…:…そう思うなら少しはまともな人間になろうな」

ああ、なんでだろうか

なんで今山吹さんに嫌われていんだって思い出すんだろうか。

人は嫌われるもの、なんてこと友希那さんが言っていた。

きつとその通りなんだろう。完璧な、誰もから好かれるような人間なんてこの世には存在しないんだろう。

でも…やっぱりこの世のどこかで自分のことを嫌っている。なんてことを考えると複雑な気持ちになっちゃおう。

本人って人が測りしきれないほどの複雑な思考をしてるよな

「れつくん？」

「……ありり、山吹さんっていい人？」

「なんだ藪から棒に…まあ紗綾は良い奴だよ、何かと気をかけてくれるし？てかなんで今それ聞くんだよー関係あるか？」

ジト目で俺を見つめるありり、別にやましい意味なんてなかったんだけど…まさか俺が山吹さんに気があるとしても思ったのか？

「気にすんな、ちよつといぎごぎがあつてな、それよりも早く行こう、露出魔は待つてくれないぜ(?)」

「？お、おう」

モカもこれを機に脱露出魔になつてくれないだろうか。

そんな願つても叶わないことを願いながら俺はありりの胸をちらりと見た後少し早く歩き始めた。



レイ達と別れたあとの凜、モカ、ひまりチームはと言うと

「凜ちゃん凜ちゃんちゃんちゃん、照れると可愛い凜ちゃんー」

ひまりは凜の手を取り歌いながらブンブン手を振る。

合わせて凜も勝手に手が揺れてしまう。嫌そうな顔をしているも離れたあとのことを考えるとまだましだと言わんばかりの表情だ。

「なにその歌…あと照れてなくても可愛くないわよ、こんなみすばらしい私は」

「そんなことないってくもつと自信もとようよ」

「……そんな簡単な話じゃないのよ」

「なんで凜ちゃんネガティブなの？頭もいいし運動はそこそこ、顔も整つてるよっ」

「人は生まれた時から持つてる性格なんて変えることできないのよ、それと同じ、もういいでしょ私の話は！」

これ以上話すと凜が不機嫌になると察したモカとひまりはその後凜のことについて話すことはなくなった。

代わりにお互いの些細な日常の話をしながら担当地区を見回る。

「ねえねえモカ露出魔なら居そうな場所とかわからないの？」

「もかは変態だしそういう隠れる場所とか脱ぐ場所とか心当たりあるんじゃないの？」

「んーあるにはあるけどいくー？」

「いくーって、早くいいなよ」

そういう向かうは先日モカとレイが合体仕掛けたあの公衆便所、モカ曰くああゆう公園のトイレだとあまり人が来ないから脱ぐにはうってつけの場所らしい。

「まあいいと思いますけどねー」

公衆便所につくなりやれやれと言うようなポーズを取りながらもまずは女子トイレを覗く

「いないねー」

「次は男子トイレだー」

「え？入るの？私嫌なんですけど…」

抵抗する凜に対してもー凜ちゃんは一と言いながら何食わぬ顔で男子トイレへと入っていくモカである。

恐らく入り慣れてるんだろう。流石露出魔、変態のレベルが違うようだ。

「……おろ？」

男子トイレに入り個室を確認していく

そんななかあるはずがないものをモカは見つけてしまった。

「ズボン？」

そう、男性サイズのデニムが男子トイレの個室に無造作に脱がれたように放置されていたのだ。

見てみると肌着もあるような…

「ま、まぎかね…？」

普段のおっとりな声ではなく少し焦りながらそう言う

『んぎやあああああああ!!』

「ツ！」

本日2度目の凧の発狂、それとひまりの声も聞こえた気がした…。

「ひーちゃん！凧ちゃん！」

服を回収したモカが男子トイレから急いで出て外の様子を見てみると

へなーと座り込み顔を両手で隠す凧の姿が、それはまるで何かを見ないようにしているかのように見える。

モカは急いで凧の近くにより背中を擦る。その際すぐに気づく

「！ひーちゃんがない！凧ちゃん！ひーちゃんはどこ!？」

「ひ、ひまりなら…とつくの前に」

「…とつくの前に？」

「追いかけて行ったわ」

「…追いかけて行ったんだね！」

モカがツツコミ役に回るとはいかに、とは言ってる場合ではない、ひまりが1人で露出魔を追いかけるところを想像すると笑ってしまいそうになるがそれは今我慢だ。

「凧ちゃん立てる？あたし達もひーちゃんに続こう」

「む、無理い、今はそれどころじゃないい…」

それもそうだろう。なぜなら見たくも無い男の姿を見てしまった、否無理やり見せられてしまったのだから

「ひーちゃんは負けずに追いかけたんだね」

後日よしよと頭を撫でようと決めたモカは立ち上がり軽く準備運動を始める。

「凧ちゃん、れーくんに連絡してくれる？あとりこさん達に迎えに来てもらうように頼んでみて、多分来てくれると思うからー」

「う、うん…それでもかは？」

「ちよつとれーくんに貸しを作ってくるね」

そう答えたモカは遠くに見えるひまりらしき人物を目掛けて走り出す。

のほほんとしてるモカだが運動音痴と言う訳では無い。なんなら持久走なんて得意とまでは言えないがひまりや凜、それこそレイと比べればかなりましだ。

「そうだ、連絡しないとー!」

未だに座り込む凜は携帯をポケットから取り出しレイに連絡をしようとした。

その手はかなり震えており上手く携帯を操作することが出来ず誤タップを何度かしてしまう。

ようやくレイへと電話をかけることに成功した凜は息を整えレイが電話に出るのを今か今かと待ち続ける。

『……はい、レイです』

「!れい聞いて!露出魔が現れたの!」

『あーはいはい、モカがまたなんかしたのか?もういいってーひまりは?ひまりがいるから助けを求めろよ』

「なっ!ち、違うの!本当にいたの!露出魔いたもん!」

『んなトトロいたもんみたいに可愛く言われてもな…お前今信憑性皆無だぜ?』

「ツ…このバカ!おっぱい星人!最低!良い奴だと思ってたのに!」

『お、おいちよつと』

最後まで聞き止めず凜は通話の終了ボタンを押す。

こんなに必死で伝えているのにこの態度を取られ凜は激怒した。

しかし先程あんな出来事があればレイだと疑ってしまうのは無理もないだろう。

凜もそれはわかってる。わかってはいるがレイなら信じてくれるだろうと謎の自信もあった。

「……………バカ、バカあ」

凜は泣きそうになりながら燐子へと電話をかけたのであった。



「な、なんだった?さっきの電話は」

「誰から?」

「え、凜からだけど…なんかまたモカが凜を襲って露出魔が現れた

「……言って言った」

「……まさか本当に露出魔が現れたってわけないよな？」

「でも前科持ちだからな」

「言い方やめなよ」

蘭に注意されて思う。確かに言い方が悪かったな

「念の為もう一回電話して確認するべきだろ、だいたいれつくんもそう決めつけるのもどうかと思うぞー」

「いや信憑性皆無だろ……まあいい、かけて確認するよ」

通話履歴から1番上の凛を選択して電話をかける。

「……………」

かけたもののコール音すらなることを許さず通話中であることを知らせた。

「誰かと通話中らしい」

「……それってさ、本当に露出魔が出てレイ以外の誰かに助けを求めたんじゃないの……？」

「……………」

一同同時に固まってしまう。

「……だとしたら俺は凛を見捨てた最低男になってしまっているのではないかな？」

「いやいやいや！そう簡単に現れないって！みんなもそう思うだろう！？」

とレイが大声で言った瞬間

「待てええええええええ!!」

「凛ちゃんに変なの見せたこと許さないからね……!」

『ツ!』

お、おいおい、なんだ？ひまりの声とモカの声が聞こえたような？

「あいつらA地区担当だろ？なんでこっち来てんの？あと待てー！ってなに？誰か追いかけてるのか？」

この状況で追いかけるやつなんて……いや、そんな馬鹿な！

俺はだんだんと自分の心拍数が上がるのを感じながら声が聞こえる方に目を向ける。

するとどうだろうか。パンイチの男がモカとひまりから逃げるようにこちらに向かつて走ってきていた。

「きゃあああああああああ！」

「ッ!？」

「ぎやあああああああああ！」

「?!?!」

「蘭とありりのやつが露出魔を見つけた途端顔を手で隠して叫び出す。」

蘭に関してはさんざん男性器の絵を描いてるはずなのに恥ずかしかるとはなんなんだと思いつながら2人を交互に見てしまう。

パンイチだぞ、全裸よりかはましだろ

「くっ…ここは俺が止める！」

運がいいことにここは一本道、曲がることなんて許されぬ！俺がここでとっ捕まえれば全て解決！

「れーくん頼んだ！」

「逃したら強制エッチの刑、はあ、はあ、だからね！」

それは勘弁して欲しい。ならここで捕まえなければ…！

とも思い身構える。しかし遠くから見たもんだから気づかなかった。

こちらに走ってくる男性が筋肉ムキムキのボディビルダーみたいな人物であることを

「くっ…屈しないぞーさあ来い！俺が止めてやる！」

うおおおおおおおおおおー!!と心中で叫び身構える。

その筋肉マンは止まること知らなかったのか俺に思いつきりタツクルを決め込む。

これは勝手な意見だがあの人多分ラグビー選手だろ…

と思つたのはつい数秒前、俺は見事に綺麗なタツクルをくらい軽く数メートル吹き飛んだ。

「がはっ！」

背中と後頭部を思つきり強打した俺はその場で悶絶する。手で頭を押し叫びたい気持ちを殺してその場で足をバタバタさせて、もがく

筋肉マンはそんな俺を気にもとめず逃げるように俺達の前から姿を消す。

「れっくん!!れっくん、大丈夫か?」

「……………レイ?」

「あ、ああ大丈夫だ。でも肋何本か持ってかれた…」

「…………お前それ言いたいだけだろ」

「ははっ!」

肋何本か持ってかれた。なんて男子なら人生の中で言いたいセリフ100の中に入るセリフだろ、ソースは俺だ。

「もう!何してんの!?!」

「無茶言うなつての!頑張った方だろ!レイさん怪我してんの!慰めてくれたっていいじゃないか!」

「はいはいよしよーし」

「いや雑ー!」

蘭のやつが頭を撫でる、というより髪をわしゃわしゃしてくれた。

「まさか本当に露出魔がいたとは…てか男じゃねーか」

目撃情報では女性であったはず。のに現れたのは筋肉マン野郎、あんなの男か女ぐらいひと目でわかるだろ、目撃情報の提供社しつかりしろよ、お前らの目は節穴か

「いっ!」

後頭部に激痛が走る。が今は気にしている場合ではない、俺は携帯を取り出し急いで警官に連絡しようとした。

そんな時ふと露出魔筋肉マンの方に目を向けると向こう側から柎優が走ってくる姿が見えた。

「柎優!」

どう言ったわけかわからないが危険を察知した柎優がこちらに向かってきてくれたようだ。

柎優ならあの筋肉マンにも勝てるかもしれない!俺は見事に吹っ飛ばされたけど…。

筋肉マンは柎優に気づくと先程よりも走るスピードを早め思いつきり柎優にタックルをかまそうとした。

「ッ！」

柊優は直前に気づき、スピードを緩め横に回避しようとした、がそれを察した筋肉マンは柊優の足を思っきり踏みつけその後隙を与える暇すら与えず柊優に先程俺にかましたタックルよりもさらに強力なタックルを繰り出した。

「……………」

柊優は焦る様子なんて微塵も見せていなかったがタックルは決まる、吹き飛ばされると言うよりも数メートル抱えられた状態で走られ最後は民家の塀に思っきり叩きつけられた。

その一部始終を見ていた俺達は何をしていたのかと言うと

『……………』

その光景があまりにも恐ろしかったものだから黙って眺めていくことしかできなかった。

本当数秒のできごとだ。あの柊優がこうも簡単にやられてしまうとは…。

「ッ！柊優！」

いかん、こんなことを考えている場合じゃなかった。すぐに柊優のところに行かないと

俺が走り出すと蘭達も着いてくるように走り出した。

近くに行くと柊優は息はしていたものの意識を失っているようだ。塀を見てみると柊優の血らしきものが付いていて痛々しさをさらに表現していた。

「ねえレイ」

「……………」

「柊優死んだの？」

「死んではない、息はしてる」

「……………」そう、ところでさ、あの筋肉ダルマ、あたし絶対牢屋にぶち込みたいんだけど？」

「……………」奇遇だな、俺も同じ気分だよ……！」

露出するだけなら許してやってもいいかもしれない。いやダメだけどさ、でも人を傷つけることは到底許される行為ではない。

「……あたし救急車呼ぶよ、来るまで残つとく」

「モ力、助かる」

「それとこれ、露出魔さんの私物渡しておくね」

なんか手に持つてるなと思ってたら筋肉マンの服か、はっ！服が無くなったこととか気づいてるのかな？

「……………柊優」

蘭は普段とは変わり柊優のことをかなり心配していた。なんだかんだ言つて一緒に住んでるからな、家族と言つても当然だもんな

「あんたがいなくなったらサークルどうすんのよ……！」

そうは言うも柊優は返事をしない。

「夜桜君に頼つてた私達も悪かったね」

「……………あたし達で捕まえないといけない理由が増えたな」

みんなだ柊優を囲いそう話していた時俺達の近くにタクシーが止まった。

「皆さん！……ここはB地区ですよ？」

燐子さん達が丁度よくやって来た。というより俺たちが知らないうちに燐子さん達の担当であるB地区に来ていたってことか。

「みんなして何を……って！夜桜君？だよね!?どうしたの!？」

「夜桜、お前怪我してんじゃねーか！」

気づいた香澄と巴は柊優の近くに向かい確認する。息があることに気づいたのかほっと安堵のため息をこぼした。

「レイ君、一体何があつたんですか……？」

「……………」

俺は燐子さんに問われたが答えることなく携帯を取り出しお巡りさんに連絡をした。

「もしもし、まだ1時間経ってないけど？」

「露出魔が現れた」

「ッ！特徴は？」

「女じゃなかった、男だ、それも筋肉ムキムキで……連れが一人にやられた。大怪我だ。」

「……………場所は」

「B地区、もといこの辺でもっとも大きな住宅街、といえばわかりますか？」

「あそこか、それで露出魔は？まさか捕まえてくれたりなんてことはないよね？」

「……逃げられた、でも捕まえる。絶対」

「それは勝手だが怪我はしないように、僕達も全力で搜索させてもらう」

電話を切った数秒後パトカーのサイレンの音が辺りから鳴り響いた。

あのお巡りさんの他にも待機している警察官がいたようだ。

ならモカとひまりが追いかけてる時点で気づけよ…

「燐子さん、そうゆうことです」

「ええ、わかってます」

「……これからどうするの…？」

燐子さんの後ろからひよこっつと顔を出した凜に対して俺は真正面から見て答えることができず背を向けて答えた。

「露出魔は俺達で絶対捕まえる」

「……だからどうすんのよ」

「走って追いつけるようなやつではない、こいつを使う」

俺は燐子さん達が乗ったタクシーを指さしそう言った。

タクシーに乗って俺達は搜索する。走るより絶対早い、それにここは住宅街だ。細道なんてそんなにはないはずだ。

「乗れる人は限られてしまうから…」

「体力が少ない人を乗せよう。特にレイは走れる気が微塵もしない」
「……………そうだな」

蘭の提案により俺、燐子さん、ありり、凜の4人がタクシーに残ることに、タクシーが5人乗りで助かったぜ

残りのメンバーはと言うとモカは柘優の面倒を見るため残るとのこと、その他のメンバーは辺りを走って搜索するようになった。

「こうなったらあれだな、絶対あたし達で捕まえたい」

「有咲の言う通り！友達？いや知り合いが傷つけられて終わりなんて

「ごめんだよ！」

「クラスメートがこんな目にあつたんだ、アタシは露出魔を絶対許さない（モカは除く）」

巴のこんなキリツとした顔は久しぶりに見た気がする。

そう、これが巴なんだよ巴の姉御、あんな雌豚見たな顔はこいつに似合わん

「捕まえたらご主人様に頭を撫でてもらうんだ」

なんだそのフラグっぽい言い方は！絶対回収させてやんねーからな!?

「各自動くこと！いいな！」

『はい！』

こうして俺達はそれぞれが露出魔を捕まえる理由ができたところで早速捜索に取り掛かる。

正直背中と頭がズキズキとずっと痛みが走ってるがそれどころではない。

早く露出魔を捕まえなければ。

もしかすると一般人にも同じようにタックルを決め込んでいるかもしれない。

どう言った訳でかは一旦置いといてだけど

タクシーに乗り当たりを走り回るも周りからはサイレンの音が鳴り響く

お巡りさん達も本気で搜索しているようだ。

ここまでしてるんだ。捕まえられませんでしたが、で終わってしまえば警察なんてこの世に必要ではなくなってしまう。

「……通行止めですな」

「くっ！」

お巡りさん達め、通行止めして露出魔の動きを抑えようとしてるのか？

住宅街の出入り口をパトカーで塞いで……こうゆうのっていいものなのか？

別のルートを探すように俺は運転手さんに伝え迂回して他のルー

トを探す。

そう、探そうとしたその時！

とある民家の塀の向こうからあの露出魔こと筋肉マンが飛び出してきたのだ。

「ッ！」

通行止めされてるためか、民家の塀の上を走ってたって訳か…！
どうも塀がお好きなようですな

「いたああ！」

「あいつよ！あいつ！なによ！パンツなんて何時履いたのよ!?!」

「まさか凜！お前脆みてしまったのか…?」

「当たり前じゃない！あーもう！最悪！夢に出てきたらどうすんのよ！」

頭を抱え車内で叫び凜に対して運転手さんは苦笑いしていた。

「運転手さん！あいつです！あいつをおつてくださいー！」

人生でタクシー運転手にこんなセリフを言う日が来るとはな、人生何が起きるのか分からない、それが野球ってな

いや意味わからんわ

俺は携帯を取り出しお巡りさんにまたも連絡をした。

「！もしもし！露出魔が住宅街から出た！」

「知ってる！追ってたものが見失ったと報告があった。すまない我々の失態だ！」

「……今俺達の目の前にいる、別に捕まえてもいいんだよな？」

「ッ！か、構わないが…」

俺は通話を気って思うが巴に言えないほどのフラグを立ててしまった気がする。

まあいい、イメージするのは常に最強の自分、あの露出魔の首根っこを掴んで大好きな塀にキスを、もとい顔をぶつ叩き鼻血を出させてやりたい。

よしイメージが完璧だ！

「あと少しで追いつけます！」

法定速度ギリギリまでスピードを出したタクシーは露出魔に追

つけ…たと思えば露出魔は急にくるりとターンを決め後ろへと走り出す。

「ッ！逃がすかこのクソ野郎があああ！」

俺は助手席に座ってたもんだから急いでドアを開け、タクシーから降りるのと同時に地面を思いつきり蹴りマリオカート並のスタートダッシュを見事に決めた。

長距離走は苦手だが短距離走ならその短距離に全体力を使えばいいだけ、ならこの距離なら何とか追いつけるはずだ！

自分でも驚くほど走れている。これなら間に合うと思っただがある程度近づくとそれ以上近づけない感があった。

足の筋力量、体力量、その他もろもろあの筋肉マンには劣っているからなのか、あと少しで追いつけない…。

「逃げ切れると思うなよ…！」

トウカイテイオー並の踏み込みを決め一気に前へと出る。そして筋肉マンに飛びつく

正直男性の裸体（パンイチ）に抱きつくのは癩だがこうでもしないとこいつは止まってくれない。

体目掛けて飛びついたが上手いかず結果は足を捕まえることに成功した。

「！」

「へっ！捕まえたぞこの露出魔さんよ！」

「……………」

「どうした黙って？言つとくが絶対離さないぞ、お前はこれから食、屋根付き、おまけに強制労働付きの物件という名の刑務所にぶち込んでやる！」

皆さん処刑BGMを頭の中で流しながら見てください。

「とにかく絶対に離さ…ッ！」

離さない、と言おうとしたが露出魔が捉えてないもう片足の踵を俺の顔面にぶち当ててきた。

それは何度も、何度も何度も、恐らく俺が離すまでこの行為を続けるんだろう。

「あ、痛いーちよっ、待って、ひ、ひぎい！痛えー!!」

感覚でわかるけど鼻血が出てるだろう。鼻水とは違うあのすーと勝手に流れる感覚だ。

絶対にと言っただはずだ。蹴られ続けて数秒経つと俺は筋肉マンから足を離すことはなかった。

「……頼む……離してくれ……!」

「ッー」

そんな弱々しい声が聞こえ筋肉マンの顔を見ているが大きな胸筋でその顔を見ることはできなかった。

気が緩んだ俺の隙について露出魔は握っていた俺の手を解き走り出す。

「！待てえー！逃げるなあー！この卑怯者！」

鼻を押え立ち上がるが痛くて歩けない。

その場で鼻を押え露出魔の背中を見ることしかできなかった。

さっきまではアドレナリンドバドバだったから何ともなかったが今となると良く耐えていたと思える。いや痛かったけどね

「(ここまでか……)」

俺と柊優が怪我をおったならこれ以上の搜索を担任も求めないと思うし……これ程危険人物だと分かったら露出魔がモカである疑いも晴れるだろう。

それに目撃情報更新されるし

半分諦めモードだったが目の前にいた露出魔は急に止まり出した。

背中が大きすぎたもんだから少し移動して確認してみると

「……………よおお」

顔面血だらけ気絶していたはずの柊優が露出魔の前に立ち進路を妨害していた。

柊優の後ろにいたモカは俺に気づきすぐにこちらへと駆けつけてくれた。

「モカー！なんで柊優がここに?」

「……起きたと思ったら急に立ち上がってー追いかけたられーくん達がいる……今にあたりますー」

あの状態で起きるなんて…流石柊優と言ったところだろうか。

「俺は今猛烈に切れている。足の親指は折れた。背中が痛い。頭からは血が出てる」

「どうもてめえに俺と同じ目に合わせないと落ち着けなくてなあ、これじゃ入院中の暇な時間に眠れなくなっちゃうよ」

普段の柊優ではない。顔を見てみると露出魔の方を見てると思うが焦点が合っていない。

「(ハイになってるのか?)」

ハイテンションつてやつだ。痛みで脳がおかしくなり、その結果言動がおかしくなり、なんならハイテンション状態になってるってところか

「……………」

露出魔はタツクルのポーズを取ったあと柊優目掛けて突っ込む

先程と同様ならば柊優はそのままろくに食らって堀に投げつけられてしまう。

そう思っていたからこそ柊優の今の行動の意味が全くわからなかった。

「避ける柊優！次こそ死ぬぞ!!」

「……………」

俺は注意するも柊優は止まらなかった。

柊優は急に口角を上げ不気味な笑を見せた思えば右手を前に出し露出魔の目ん玉に指を突き刺した。

痛がる露出魔に柊優は容赦もせず顔面をつかみそのまま民家の堀目掛けて後頭部を叩きつけた。

「……………」

その後露出魔は思いのほかすんなりと意識を失い動くことは無かった。

「なーに勝手に気絶してんだ？まだ足の親指追ってないだろがあ！」

柊優は露出魔の足を思いっきり踏もうとした。

「はいもうハイテンションタイムは終わりー怪我してるんだから寝ようね〜」

なんて言いながらモカが柊優に近づき無理やり柊優を露出魔から距離を離す。

正直あの柊優に声をかけようとは思えなかったぞ

何度か怒りそうになった場面に出くわしたことはあるがこうも柊優が恐ろしいやつとは…

今後絶対怒らせまいと誓う瞬間だった。

俺は立ち上がり持っていたロープを使い露出魔の手首、そして足首を縛り身動きが取れないようにする。

これでもう逃げることは無いだろう。それにロープも二重に巻いてるからちぎられることもないと思う。

「あ痛てて、鼻が…血が止まんねえ」

痛いし血は止まらないわでも散々な目にあつた1日だった。

俺は血が垂れないよう上をむくが向いたら向いたで口の奥に血の味が広がりさらに気分は悪くなる。

「モカー柊優は？」

「…寝た？のかなく？動いてない」

「そうゆうのは気絶したって言うんだよ」

あの状態で動けてただけで奇跡だろ、柊優が現れなければ今頃露出魔は逃げ切ってた…とまでは言えないか、当たりを警察官が見張ってたし

「レイ君！」

近くからタクシーのブレーキのかかる音が聞こえた思えばすぐに俺の名前を呼びながら燐子さんが駆け寄ってくる。

それに続いてありりと凜もだ。

「レイ君鼻血が…こ、これハンカチです！良ければ使ってください！」

「ありがとう燐子さん、いや、あはは見事に蹴られましたよ」

鼻を押え鼻声で笑い混じりに言うも正直かなり痛い、誰もいなかったら悲鳴を上げてる。

「夜桜!?なんでここにいんだよ」

「それはーなんか、立ち上がって急に走り出してー着いてきたられーくんがいてー？」

「……んで柊優がこいつの意識をなくさせた」

「……………夜桜って何者なの？」

間が長いと思っただらそんなことを言い出す凜、何者なのかと聞かれ
ても人間としか答えれん

何が柊優をここまで動かしたのかは本人でないとわからないこと
だ。

「ねえこれ大丈夫なの？死んでたりしないわよね…？」

「れつくんハンカチの替え必要か？使うか？」

「あ、ありがとうありり」

燐子さんから借りたハンカチだけでもう血で染まってしまい上手
く吸い取ってくれない。

本当身体中の血がなくなるんじゃないかと思えるほど鼻から血が
流れ出す。

これは鼻の中の大事な血管切れてるんじゃないか？もしくは骨折
れてるんじゃないか？

「レイ君！とモカ！それに香澄達も！」

「……………え？柊優？」

「ご主人様！じゃなくてレイ！怪我したのか!？」

巴のやつご主人様って言っちゃってるし、お前隠す気ないだろ、後
大声出すな

「ゼロ君鼻血が！ポケットティッシュしかないけど使う？」

「あ、ありがとう香澄、使うって借りるに決まってるだろ…」

ありりから借りたハンカチももう使えそうにない、ティッシュなら
鼻に詰め込んで少しはマシになるはずだ。

「ええええええええ！これ露出魔だよね!?!なんで捕まってるの!?!」

「見ればわかるだろ、柊優がとっ捕まえたんだよ」

「意識失ってたんじゃねーのか？」

「いやよくわからないけどなんかやってきて暴れてき、とにかく何と
かなった」

人が来る度に説明しないといけないのかこれは!?!

「…………とりあえず早くこいつをお巡りさんに渡そう」

そして早く楽になりたい。今はとりあえず体を休めたいところだ。端的に言えば寝たい。

だんだんとサイレンの音が近づいてくる気がする。それはパトカーなのか、それとも柵優のために呼んだ救急車なのか。

俺は特別誰かと話そうともせずただ止まらない血を垂らせまいと必死に押さえつけるだけなのであった。

大きな屋敷に行ったことありますか？

／＼ピンポーン／

「……………んんー…」

／＼ピンポーン／＼ピンポーン／＼ピンポーン／

「……………うるさいなあ」

ベットからむくりと起き上がり頭を搔く、その際昨日ぶつけた箇所にはなんとも大きなコブができていた。

そう、昨日の出来事だ。

見事俺達は巷で噂の露出魔を捕まえることに成功した。

俺達とは言ってもほとんど柊優のおかげなんだが…そこはほら、頑張ったから大目に見て欲しい。

捕まえた後あのお巡りさんと救急車がやって来て、夜中だと言うのあたりは昼間のように明るかった。

柊優は意識はあったものの話せれるような状態ではなかったが

「柊優…よかった、目が覚めて」

蘭が柊優のことを心配してて柊優本人も目を見開き驚いていた。

「……………これで原稿間に合うね」

だけど最後の余計なセリフのせいで柊優は顔色を真っ青にしてこう言った。

「あ、頭が！かち割れるほど痛い…！こ、これは長く入院する必要がある、最低でも8月下旬まで入院したい…！」

なんてこと言ってたからそこまで心配する必要はないのでは？と思えた。

でもかなり血が出てたしな、頭に傷が残るとなれば10円ハゲになつてしまうかもしれない。目立ったりするなら尚更嫌だろう。

心配する必要はない、とは言ってもだ。入院してるのならお見舞いには行かなければ

ああ、今ので察したと思うが柊優は入院が確定した。なんでも足の指と脳の検査を受けるらしい。

脳の検査というのは決して柊優がそうゆうあれじゃなくてだな、強

い衝撃を受けたから検査を受ける必要があるらしい。

俺は当日燐子さんのお父さんが務めてる病院にて調べてもらったけどなんともないとのこと

鼻血に関しては骨は折れてなかったものの中の大事な血管がブチギレてるから痛み止めと血止め[？]的な目的で注射を刺された。

俺は自分では重症者と思うが^{後優}上がいるからそうは言ってられないものだから夜遅くになってしまったが家に帰ることにした。

帰ってきたのは深夜2時過ぎ、そこからシャワーを浴びて寝て、今6時頃にチャイムで無理やり叩き起されたてわけだ。

眠い目をこすりながら廊下を歩いていると姉貴の馬鹿でかいびきが聞こえた。

それを無視して欠伸をしながら階段をおりて玄関へと向かう。

「(モカ達だったら追い返してやる)」

帰る前に昼にならったら柊優のお見舞いに行こうと誘われていたんだ。

でも俺は

「悪い、弦巻のバイトがある」

と上手いことアイツらとお見舞いに行くことを回避したのだ。

お見舞いに関してはバイトが終わったあとに向かうとしよう。柊優もアイツらと来られるより俺一人で来た方が楽だろ

それにあいつモカ達のこと結構嫌ってるし

そんなことを考えていたらあつという間玄関へと着く、チェーンを外して鍵を解除してと

「はい、どなた様ですかー」

と言いながらドアを開けるとそこには見知った人物がいた。

「おはようレイ、いい朝ね」

「……え、友希那さん？」

友希那さんが朝の6時に俺の家に来て来たのだ。

このセリフを理解するのに学年3位の脳を持っていたとしても処理するのに少し時間がかかってしまった。

かかって導き出した俺の答え、それは

「いや何しに来たんですか？」

何も思い浮かびませんでした！あは！

「あれよ、早起きは三文の徳」

「全然意味がわからないんですけど!？」

「……なんだか早く目が覚めたからレイに会いに来たの、ダメだったかしら？」

「ツ！三文の徳の1つが俺と会えたこと……？」

「そうね、そうなるわ」

ほえええー！なんだこれ、目の前に女神様がいるんですけど！

俺に会えて嬉しいなんて！かあー！俺もモテちまうなもうー！

ってただ類友に会えて嬉しいだけなんだろうな、この人

「……………」チラ

こうゆう時ヒロインというのは少し頬を赤らめモジモジしているものだ。

しかしこの女神、湊友希那さんは無表情のまま俺をじーと眺めるだけだった。

「(いやこの表情なに？全然心情が読み取れねーよ)」

画質の悪いQRコードをスキャンしても読み取れないようなもんだろ、表情が変わってないならわかるはずないだろうが。

「それにしてもレイの家を探すのに手間がかかったわ」

「……前に教えましたよね？」

「忘れたのよ」

「あれ？じゃあなんで俺の家わかったんですか？」

待ってくれ、なんか凄く嫌な予感がするんだが！

「表札に神崎と書かれている家に目が着き次第インターホン鳴らしたわ」

「飛んだ迷惑なやつだな!？」

「怒鳴られたわ、何度もね」

「普通の思考回路を持ち合わせてるヒューマンなら一度ですぐ辞めるんですよ!？」

「ヒューマン？……ああ、人ね、日本語使いましょうね、レイ」

「なんで俺がそんなことを言われたいいけないんだよ……」

ドアノブに両手を置きしやがみこんでしまう。この近辺に住んでる神崎さん達、うちの類友が迷惑をおかけしました……。

「それで残りの2つの徳なのだけれど」

「あ、はい」

「レイの手料理で朝食を済ませたいわ」

「……まあそれぐらい全然いいですけど」

「そう、助かるわ」

そういつたあと友希那さんのお腹から音がなりお腹空いてたんだなど嫌でも察してしまった。

「どうぞー」

ドアを全開にして入るように言う。

なんかこれ彼女が初めて自分の家に来たみたいなのがするんだが！

い、いやいや！俺にはアサシンがいてだな、家には幼馴染達を招いたことあるから……そう部屋だ！俺の部屋には彼女以外金輪際入れないと誓おう！

「何か食べたいものつてありますか？」

「サラダ以外なら喜んで食べるわ」

「……了解です、あ、適当に時間潰しててください」

「そうさせてもらうわ」

携帯を取り出し何か作業を始める友希那さん、時々ふにやーと笑顔になるもんだからきつと猫の写真でも見てるんだろう。

そんな姿を横目で見ながら俺はありりにもおいしいと満点の評価をいただいたフレンチトーストを作っていた。

簡単だし美味しいし、友希那さんも美味しいと言ってくれるはずだ。

いやー料理できる人でよかったよ、こんな美人さん達にご飯を食べてもらえるのだから

美人さん達というのは友希那さんやりサさん、ありりのことな

自分では言ってはあれだが俺の周りの人達は顔が整いすぎている

と思う。

流石羽丘と花咲、女子校一般高校とは天と地の差があるぜ

そんなことを考えながら料理をしていたらいつの間にか友希那さんが俺の隣にやってきた。

「……え？なんですか？」

「……………」

だ、ダメだ。この人隣にやってきたけど無言のままだ、今何を考えて俺の隣にやってきたんだ？

「何か手伝えることはないのかしら？」

「手伝う……？なら、んー」

皿を出して欲しいと頼もうとしたが万が一落としたりしたら掃除とか面倒臭いし……かと言って俺の性格上料理中キッチン俺の領域だからあまり踏み込んで欲しくない自己中心的な考えも相まつて……

「友希那さんはテーブルで大人しく待つててください、友希那さんは俺の料理を食べるといふ重要な役目があるので」キリッ

決まった。なんて思いながらフライパンを揺する。

「……………そう、ならそうさせてもらおうわ」

そう答えると友希那さんはテーブルに付きあらかじめ置いていたフォークとナイフを手に取り今か今かと待ち続けた。

あんた可愛いかよ、可愛すぎんか？

この姿を写真に撮りたいレベルですよ

いかんいかん、集中しなければ……と思うもあのクールな友希那さんのこんな一面を見れるのは俺だけなのでは？と思ってしまう。

もしそうならば俺は友希那さんに取ってかなり心を許している相手……となるな、いやむふふ、嬉しいな

「レイは料理することが好きなのね」

「？あ、はい」

「今楽しそうな顔してたわ」

「ッ！そ、それは……！」

考えていることが顔に出てたのか、これはくそ恥ずかしいな

「もうできますから！ちよつと待つててくださいね！」

逃げるように皿に盛り付け、できたものを友希那さんの目の前に置く、俺は自分の分と姉貴の分を作る必要があるためキッチンに戻りまた調理を再開する。

「先に食べててください、熱いうちに食べた方が美味しいですよ、あハチミツかけるならテーブルに置いてるのでご自由にー」

「完璧な配慮ね、レイはいい夫になれるわ」

この人こうゆうこと無自覚で言う人だからな、もうわかってるよ、別に深い意味は無いってでも言われると凄く嬉しい！

あと昨日は変態共の相手をしてたりしたからさ、友希那さんだけど普通？の人と一緒に過ごせれることに感動を受けてしまう。

「ではいただきます」

友希那さんが食べている中俺は姉貴の分を焼きながらチラリとそれは何度も友希那様子を伺っていた。

「……最高よ、流石レイね」

「ありがとうございますー！」

心の中でガッツポーズを決め込み料理を再開した。

「あぁーよく寝たーなんか朝からすつごくいい匂いするんだけどー？」

「あつ、姉貴おはよーつす」

「うすうす、朝食はフレンチトースト？」

「ああ、別に嫌いじゃないだろ？」

そう会話をしながら姉貴はテーブルの自席につき欠伸をしたあと背中を鳴らしてふうと一息ついた後に発言した。

「で？なんで朝からゆきなつちがいるの？」

「おはよう滯奈、凄い寝癖ね」

「あれスルーするの？てか呼び捨て！あたし歳上なんですけど!？」

「いいじゃない、滯奈」

「あー友希那さんがいる理由はだな……」

説明するのめんどくせーと思いつつ俺は姉貴に懇切丁寧に説明をしてやった。

朝起きたら来た。とな

「朝からレイの手作り朝食食えるならて贅沢もんよー？」

「それはそうね、毎日こんなに美味しい朝食が食べれるのなら頑張つて起きれる気がするわ」

「そこまで言うか？この娘は」

ボソツと言ったあとフレンチトーストをフォークでぶっ刺しそのまま口へ運び食べだす姉貴、綺麗に一口大に切って食べる友希那さんを見たあと汚いと思えてしまう。

いや普通な一般的な食べ方だけどね

「ご馳走様、美味しかった」

「お粗末さまです」

俺も食べないと、時計を見るが家を出るまであと30分ちよつとしかない。

「？レイさ、あんた昨日帰ってくるの遅かったわよね？」

「あ、ああーそれは、実は色々あつて…」

「まさかゆきなつちと変なことしてたんじゃないの？」

ニヤニヤしながらフォークで俺を指しながら言う姉貴に対して俺は溜息をつきながら返事をした。

「さつきも説明したろ、友希那さんは今朝来たんだよ、昨日の夜は別件で忙しくて遅くなった。あとフォークで人を指すな」

「変なことつて？」

「だからセツ！「ほら姉貴！顔洗わないと！な！」……はいはい」

あ、あぶねえ友希那さんにセツクスなんて言ったらなに？つて聞き返されるところだったんだよ

「せつ、つて何を言おうとしたのかしら？」

「それ、はー…あ！窃盗！そう窃盗！夜遅くに出回って犯罪的なことしてないよなーつて言いたかったんだよ！多分！」

「……なんでそんなことをすると思うのよ、澪奈は不思議な人ね」

「本当に困っちゃう人だよねー！」

何とか乗り越えたぞ…この人本当に保健体育の知識に疎い人だな
「では最後の徳を言うわよ」

「まだ続いてたんですか!？」

「一緒にシロの所へ行きましょう」

「シロ?てことは弦巻邸に行くってことですか?」

「そうなるわね、今日は珍しく1日オフだから好きなだけシロと遊べる予定よ」

友希那さんはそうは言うものの俺にはこの後予定があるんだよね…。

「すみません、俺これからバイトなんですよ」

「……休めないの?」

「そりゃーね、休めないですよ」

千紗さんには印刷代無料にもらった恩があるしなんならその条件でバイトすることになってるし…俺から休ませてくださいなんて口が裂けても言えない。

「……………そう、それは残念ね」シュン

見るからに悲しそうな表情をする友希那さんを見た時、俺の罪悪感
は頂点に達してしまう。

「(でもどうしようもないしな)」

心の中でそう言いながら友希那さんから目を逸らして頬をかいていた。

「レイー言うの忘れてた」

「?なんだ姉貴」

着替えながらリビングにやってきた姉貴、下着が丸見えであったが突っ込むよりも話を聞いた方がスムーズにことが進むと思いい俺は気にせず話を聞く。

「悪い、あたし当分の間家に帰って来れなくなった」

「また箱詰めか?」

「いや、ちよいと神奈さんが有名すぎてね、海外でサイン会することになったからちよつと飛んでくる」

「あーなるほど、了解…?」

となると俺はつぐみに盗聴されながらこの家で1人悲しく過ごさないといけないのか…今日の友希那さんとの件もあとから色々聞か

れるんだろいうな

その頃のつぐみはと言うと漣奈が当分いないと聞いた途端小さくガッツポーズを自室にて決め込んでいるのであった。

「アメリカ行くからさ、ママ達に会うけどなんか伝言とかある?」

「何故アメリカ?」

「JAPANを代表するラブコメ!で義妹が爆発的に人気が出ちゃってねーいやー、自分の才能が日本に留まらず海外にまで影響を及ぼすとは…我ながら恐ろしい天才がこの世に生まれてしまったなど実感してしまふよ、あははー!」

「……………長い」

両親は仕事の都合訳あって海外に住んでる。海外とは聞いてたけどアメリカだったとはな…昔聞いた時は日本の反対側とか言ってたくせに

「んー母さん達に話すことなんて特にないし…逆に俺に何か言うことないか聞いててくれないか?」

「ママ愛してるね、おけおけ」

「日本語が通じないようだ」

スタスタとスリッパが床とか摺れる音を大きくたてながら姉貴は何処かへと行ってしまった。

「両親とは仲良くないの?」

「別にそーゆう訳では、一般家庭より絡みが少ないだけですよ」

「私は父と仲良いわよ」

「いやマウント取られても…」

俺だつて親父との思い出のものぶつ壊したりしたことあるんだぞ!?あれ?これで張り合えてるのかな?

「あつ!それともうひとつ重要なことが!」

「なんだよ!一回で全部言えよ!」

「あんた今日は弦巻の半月に一度の報告会あるから出席するように、だつてさ!」

「?????」

半月に一度の報告会?はあ、そんな重要な報告会にバイトの身であ

るこの俺が出席？何馬鹿なことを

「千紗さんが迎えに来るから準備しといてくれってさ」

「迎えてって本社じゃないのか？」

「何言つてのさ、弦巻の報告会なんだから弦巻邸で行うに決まってるでしょ？」

「……………」

こうして俺は日本の中でも上位の財閥である弦巻家の屋敷へと向かうことになったのであった。

◆ ◆ ◆

俺は今日起きたことをありのまま話すぜ、友希那さんにチャイムで叩き起され朝食を作ったと思えば、姉貴に弦巻邸で行われる半月に一度の報告会に出席しろなんてことを言われた。

「で、でけえー」

クソ暑いというのにスーツを羽織り、ビシツと容姿を決め込み髪型を千紗さんがいい感じにセットしてくれた。

そんな完璧な容姿にも関わらず弦巻邸を真正面から見た時思わず口をポカーンと開け最初に出た一言はでけーだった。

ちなみに友希那さんは弦巻邸で報告会があるなんて関係ないわ、なんて言つて姉貴に無理やり送れとせがんでいた。

まあ姉貴のやつ文句言いながら車に乗せてたけどさ

「あの千紗さん？なんで俺が報告会に？」

「決まってるだろ、結弦が不在になったからだ」

「…………姉貴のサイン会でですか？」

「ああ、あと他のみんなは行きたがらなかったしな、あとは私が連れて行きたかったから、もう1つはあの人が会いたいと言ったからだ」

「あ、あの人って…………？」

「合えばわかるさ、ほら行くぞ」

「い、いやだ！まだ心の準備が！」

「えーい！男だろ！黙って着いてこい！」

買ったばかりの革靴の底が擦れるのを感じながら俺は千紗さんに引つ張られ無理やり弦巻邸の門まで連れられた。

「お待ちしてました千紗様」

「すまない、少し遅れた」

「いえ、まだこられてない方はちらほらと」

出迎えてくれたのはなんとメイドさんだった。

メイドつてメイド喫茶にしかいないと思つてんだが？金持ちの家にはメイドがいるつて本当だったのか…！

見た感じどこぞの騎士王を思わせるようなその容姿は見てて目が奪われる。

「ツ！まさか…！失礼！」

「????」

メイドさんは俺に近寄り胸元を触ると震える手で俺の肩に手を置きこう言った。

「大丈夫です。女性は胸だけではありませんよ、あなたにはきつと胸以外の魅力に気づいてくれる殿方が見つかるはずです、アレックスはそう願っております…ぐすん」

「いや俺男なんですけど!？」

「!？」

なんなんだこの人!？会っていきなり胸触つたと思つたら俺が貧乳の女と勘違いしていただと!？

確かに胸はないよ、そりや男だもの！でもその後の言葉がもし本当に女子なら傷つくかもしれないだろうが！

「うわ本当だ、声低くーよく女性と間違われませんか？」

「ええ間違えられますよ！」

「やめてやれ、こいつはその事で少し悩んでるんだら」

「悩んでる……つて！別に話したことないでしょ！」

「悩んでないのか？」

「悩んでいますけどなにか!？」

悩んでいない、と言えば嘘になつてしまう。ならいつその事悩んでいると公言しよう。そうだよ悩んでるとも！

「じゃあ付いてるんですね、ほえーそんな見た目で腰振るのは少し興味深いですね…お金渡すのでちよつと撮影OKの風俗に行つてきて

くれませんか?」

「行くわけねーだろ!てか行けねーわ!」

「ある日突然生えてきた女の子ー的なAVの作成に抜擢させるルックスですよ!稼ぎ放題ですね!」

「もうやだこの人、なんなのこいつ…」

弦巻邸にまだ入ってすらいなのに既に帰りたいたんだが!もうこの人で察したがこの屋敷の中にはヤバイやつしかいないのでは?

「その辺にしてやってくれないか?」

「はいはい、では仕事に戻るとしましょうか…着いてきてください、旦那様がお待ちしております」

俺達はメイドさん、いや変態メイドさんの後ろを着いていく、変態メイドさんの後ろを着いていく千紗さんの後ろを着いて行つてると言つた方が正しい。

「??」

あそこは喫煙所…?スーツを着たサラリーマンさん達が顔色を真っ青にしながらタバコを嗜んでいた。

「ああ、あれはお前と同じ連れの連中だな」

「連れ?」

「言つてなかったな、レイは別に会議に参加する必要は無いんだ」

「はあっ!?!じゃあなんで連れてきたんだよ!」

「言つたら、あの人が一度会つて見たいと」

「会つてみたい?はっ!俺は別に会いたいともなんともお思わないんですけどー?」

俺は腕を組みながらふいと可愛く顔を逸らしそう言う。自分でそうゆう仕草をしてながら少し以上に恥ずかしい気持ちになった。

恥ずかしい気持ちを殺しながら顔を元の位置に戻そうとしたその時

「ほう、この俺がわざわざ出向いて会いに来たというのに会いたくない言うのか?」

「ッ!」

「あ、旦那様」

後ろから声が聞こえて振り向けど俺よりも数センチ背が高い男性が俺を見下ろしていた。

その容姿は綺麗な金髪にサングラス？をかけていて高そうなジャケットを羽織っていた。

俺の着ているスーツとは比べ物にならない高値なものを、だ。

「千紗、こいつがお前の言ってた捌ける学生か？」

「……はい、すみません、初めて屋敷に来て興奮しているようで……本当に申し訳ない……！」

「い、いでで」

千紗さんに頭を無理やり抑えられ一緒に頭を下げていた。

昨日ぶつけたコブをピンポイントで押さえつけるものだから痛すぎて涙が出そうになるのを必死にこられた。

「ふん、使えると聞いていたものだから期待してみればこのザマか」
「……………」

カッチーン、なんだこいつ、俺の態度が悪いだけで使えないやつだと思ってるな？

「環境がいきなり変わったものですから戸惑っていただけです。それともあなたはそんなことも配慮せず初見の印象だけで判断してしまう三流のか、考えをお持ちの方なのですか？」

「……あ？」

震える声で俺はそう言う。

「いえーあつーあはは！違いますよ、冗談ですよ……」

何言ってるんだよ俺ー！確かに失礼なやつだと思ったけど口に出す必要はないだろ！

それに声震えながら言うとかビビりながら言ってたようなものじゃないか！

終わった。怒らせてしまったか……？

「ふはは！声を震わせながら俺に物申すその度胸！気に入ったぞ、小僧名前は？」

「か、神崎レイです」

「レイ、そうかレイ……確かに報告書では真面目で仕事をこなすと書か

れていたな、認めよう。俺が間違ってた、すまん」

そう言うのと旦那様？は俺の頭をポンポンと軽く叩く、サングラス越しで見えるその目はまるで我が子を撫でる父親のような様だった。

「(そう言えばこの人父親だったな)」

確か弦巻ころろさん？と双子の弟、あとはシンジ君の父親さんだ。結構面倒見てるんだろうか。

「レイ、貴様は弦巻文庫に就職する予定なのか？」

「……いえまだ検討中で……大学も行く予定なのでなんとも言えないです」

「そうか、まあいい気が向いたらいつでも連絡しろ、仕事関係金関係、女関係なんでもいい、悩みがあれば相談するといい」

旦那様は懐から紙切れを取り出した思えば俺の胸ポケットにそつと差し入れそのまま長い廊下の向こう側の大きな扉を開けその部屋の中へと姿を消した。

「(名刺?)」

連絡先も書かれている。悩みがあれば相談しろ……?、い、いやいやあんな人に……

と思ったがあその目を見た後にはそんなこと考えれなかった。

あの目は人に向けるような目ではない。自分の子供に向けるような暖かい目、だった。俺にはそう感じとれた。

「(でもなんで気にいられたんだ?)」

そのことを疑問に思いながら俺は名刺をとりあえず財布の中にしてしまった。

◆◆◆

さて会議には参加しなくていいと言われたがどうしたものか。

俺は一人で弦巻邸を散策していた。

喫煙所にみんな集まってたけど俺未成年だからタバコ吸えないし……かと言ってその場にいるってだけだと邪魔だしな

「んー困ったな」

腕を組み唸り声を上げながら歩くこと数秒後、廊下の向こう側からパリンと何かが割れる音が聞こえた。

近くに行くと何やらメイドさんがあたふたしながら誰かに見られてないかと周りを確認していた。

見られてないかと言うよりも高そうなツボが見事に割れてるものだからバレるのは時間の問題だろう。

それに俺にバレてるし

にしてもあのメイドさんどつかで見たことあるような顔と乳だ。

あんなに大きな胸の女性一度見れば忘れることはないと思う。確か…

「あつ、首席の人だ」

姉貴に続く3年連続首席だった天才子ちゃんだ。俺らの代では有名だったなー美人で胸がでかくて

でも去年の文化祭で実行委員長だったけど驚く程に使えなくて上手く回せなく実行委員達を労働させた伝説の人だ。

大学行ったんじゃないのか？まあ別にいつか

「あつーこの巨乳め！また旦那様の大事な壺を割りましたね！」

「ひいー！ごめんなさいごめんなさい！許してくださいー！」

「許してくださいメイド長様と言いなさいー！」

さっきの変態メイドさんが駆けつけ一目散にバレるといふ。悪いことをしたらバレるのは仕方がないことか

俺は何を見なかったことにして弦巻邸の散策に戻るのであった。

「さてと、迷ったな」

こうも一人でずつと歩き回ると迷うのも当然か、てくてくとその辺を歩き回っていると過去に聞いたあの言葉が廊下の向こう側から聞こえた。

「ふえ、ふええー（こ）ど（こ）ー…？」

「こ、この声は！」

こんな声を出す人はあの人しかいない！

「松原さん！」

「！れ、れいくん？」

なんと松原さん登場、でもなんで？

さ、流石に道に迷って屋敷に迷う…なんてことはないと思うけどこ

の人ならあるかもしれん……聞いてみるとしようか。

「会えて嬉しいですけど松原さんはなんでここに？」

「……………?！」

松原さんは聞かれたことがわかってないのか首を傾げながら俺を見つめていた。

やめてくれ、そんな瞳で俺を見ないでくれ、恥ずかしいじゃないか！

「あ！俺はバイトの延長的なあれですねーその、上司が報告会に出席するから一緒に来いと言われて…でもでも会議には出なくていいとか言われて屋敷を歩いてたんですよ！」

「…………へえーそれは凄い偶然だー」

「お、奥沢さん!？」

松原さんの後ろからヌルツと出てきた人物は奥沢美咲さんだった。

「え!?!な、なんで!?!なんているの!?!」

「はあ、それはこっちのセリフ、まさか屋敷でストーカーさんと会うなんて思わないですよ」

「待て、俺はストーカーなんかじゃない！説明したよな!?!」

「なら変態不審者さんですね」

「やめろー！俺を変態不審者と呼ぶな！」

この奥沢さんとは何度か絡んだことがある。その際に色々聞きすぎたもんだからストーカーと呼ばれる羽目に…あの時は違うと否定してたのにあつたらストーカーさんと呼ばれましたよ

「美咲ちゃんといくんは仲良いの…?」

「え? いやまあ何度か話した程度ですよ」

「…………そっか、ならよかったあ」

「? はあ、そうですか」

「うん」

ほっと一息ついた松原さんは俺をチラリと見た後ニコリと微笑んでくれた。

ええ、なにそれ…滅茶苦茶気になるヤツなんですけど!?!

あれ、松原さんって4月29日何してたって言ってたっけ?

聞いた覚えはあるんだよ、ハロー、ハッピーワールドのメンツは弦巻さん以外まとめてGWの時に聞いたはず。

お、思い出せない！松原さんが何をしてたのか!?

「(ならよかった…?)」

つてのは俺と奥沢さんが親密な関係じゃなくて安堵したつてことだよな!?! そうだよな!?

松原さんはまさかアサシンの可能性大なのでは…?

「黙り込んでどうしたんですかー?」

「うわっ！な、なんでもない!」

確か奥沢さんはバイトだったよな、あのミツシエルの着ぐるみ着た奥沢さんの写真はシニールすぎて忘れられないよ

「実は弦巻邸に来るの初めてでさ、迷ったんだよ」

「その気持ちわかるよ、うん」

「花音さんはここ以外でも常に迷ってますけどねー」

「ふええ、ご、ごめんなさい…」

「別に謝って欲しくて言ったわけじゃないですから、ほら行きますよー神崎さんどこに行きたいんですか?」

「あ、はい玄関に行きたいです」

もう屋敷を回るのは疲れるしな、玄関から出れば門まで道はわかるはずだ。

千紗さんの会議が終わるまで門にて待つとしようか。

「では先に玄関に向かいますよ。花音さんその後練習部屋に向かいますから、ちゃんと着いてきてくださいー」

「う、うん、れいくん、行こう?」

「練習部屋? なんの?」

「バンドの練習ですけどー…あ、もしかしてこころに聞きたいことあったりします?」

「…話が多くて助かる。是非俺をその練習部屋に連れてって欲しい!」

奥沢さんは察してくれたのかそう聞いてくれた。まじで助かる。

「……………まあいいですけど、こころに変なこと教えないでくだ

「さいますよ？」

「あんたは俺をなんだと思ってるんだ。あ、ちなみにストーリーカードでも変態不審者でもないからな」

「はあ、そうですか」

「適当に流れたこっちの身になって欲しい。必死に否定したのにこれですよ、とほほ」

「こころちゃんに何か用があるの？」

「え？ちよつと聞きたいことがーありましてー」

「この人情情報は知らないですけどやたらと色んな人に4月29日何してたのかーって聞き回ってるんですよ」

「……なんでなの？」

「それはえつと…ほ、ほら！早く戻らないと！みんな心配してるんじゃないのかな!?!」

『……………』

苦し紛れの言い訳をしながら俺は一人勝手に歩き出す。

少し頭がおかしいやつだと思われるのはもう仕方がないことだと腹を括つてここは逃げることを選択しよう。

と思つてたけどこうなると話は別だよ!?!奥沢さんめ、俺をとことん変態不審者へと仕立て上げたいんだろうか

もうこの人バイトしてたってアリバイあるしいつその事本当のこ
と話すか？

「……あつ！美咲ー！花音ー！帰ってこないと思つたらこんな所にいたのね!」

「!?!」

階段を下ろうとしたその時何処からか奥沢さんと松原さん以外の女性の声が聞こえた。

聞こえた方を見てみると綺麗な金髪をしなやかに揺らしながら満面の笑みで走りながらこっちに向かう少女が一人。

「戻りが遅かったから心配したのよ?」

「ごめんこころ、花音さん探すに少し時間かかっちゃって…あはは」「ご、ごめんなさい…」

「いえいえ、お手洗いについていかなかった私も悪いですし」

「でも見つかったのなら問題ないわ！早く練習再開しましょう！」

「あーその前にこの人玄関まで案内していい？」

「この人…？あら、あなた誰かしら？」

会話の邪魔をしてはいけなないと思いつつ黙ってたが奥沢さんのせいで俺の存在が彼女に知られてしまった。

どうしようか、傍から見れば俺は不法侵入者と思われるも仕方がない立場だよな

迅速に、早急に、かつわかりやすく俺がここにいる理由を説明しなければ

「実は（略）ってわけでここにいるんだ」

完璧、これで変なやつとは思われるはずがない！どうだこの俺の完璧な説明は！

「まあ！弦巻文庫の社員さんのね！それにしても若すぎないかしら？」

「社員じゃなくてバイトだよ、上司と仲良かったから流れで会議に連れてこられたんだよ」

「バイト…？それ知ってるわ！コンビニで働くのよね！」

「んーバイトが全部コンビニで働くわけじゃないからね!？」

「うちの弟は昔バイトと言ってコンビニで働いてたわ」

「それはあなたの弟さんが働いていただけで…」

「ほらこころーこの人神崎さん困ってるよー」

てか弟って行方がわからない長男さんか？いやそれはどうでもいいんだけどさ

「神崎！下の名前は？」

「レイ、だよ」

「レイ！よろしくねレイ！」

そう言うのと弦巻さんは手を出してきた。これは握手を求めていると捉えていいんだよな？

俺は手汗をズボンで拭き湿っていないことを確認して弦巻さんの手を握る。

「よ、よろしく」

ふおー手柔げえ、女子ってこんなにも手ですら柔らかいのか

「弦巻さんってフレンドリーな方だよね」

「そうかしら。あたしは出会った人とはすぐに仲良くなれるだけよ？」

「それをフレンドリーと言うんだよ、こころちゃん」

「まあ！ならあたしがフレンドリーだったからすぐにレイと仲良くなれたのね！」

「……………」

もうわかるわ、この感じからしてこの人は今までに俺の存在を全く知らなかったんだろう。

出会った人とはすぐに仲良くなれる！俺はあつたことがない人、つまり他人だ。

ならば弦巻さんがアサシンである可能性なんて皆無なのだ。

でも一応聞いておくか…氷川さん（日菜）の時のように思わぬ情報が手に入るかもしれん

「弦巻さん」

「こころでいいわよレイ！」

「あ、はい…こころさんひとつ聞いてもいいかな？」

「うわ出たよ、あれだよ、花音さんこの人またあれ聞く気ですよ」

「うん、あれだよね…？」

「う、うるさいな！」

聞きづらくなってしまうだろうがい！外野は少し黙っててくださいい！

「んんっ、4月29日、覚えてたらでいいんだ。この日何をしてたか教えてくれないか？」

「4月29日…？」

「そう、その日」

もう数ヶ月も前だしやっぱり忘れてるか

スケジュールを管理してた氷川さんとは違ってやっぱり覚えてるはずがあるわけ…

「ええ覚えてるわ!」

あるわけあったあああ!?

「ちなみに何を!」

「その日は弟と電話でお喋りしたわ、今は海外の屋敷に住んで離れ離れなのだけれど……こうして月に一度お父様に報告?の電話の後少し話をしてくれるの!」

「……証拠は?」

「証拠も何も大事な弟と電話をした日なんて覚えてるわ、5月は30日、6月は28日に話したわ!」

「………わかった、教えてくれてありがとう」

「?レイは変なこと聞くのね」

「悪い、忘れて欲しい」

大事な弟電話か、5月以降の電話した日付を覚えてる辺りから4月29日に話してたってのは本当みたいだな

「……月に一度?そんなに仲良いならもつと電話かけなよ」

「ううん、あたし弟の電話番号知らないのよ、さつきも言ったけどお父様の携帯にかかってきて最後にお話させてくれるのよ!」

「いい機会だから聞くけどさ、弟さんは何をしてるの?長男のほうね」

「何を?んーあたし達と同じようなことよ!」

『??』

話を聞いていた奥沢さん、松原さん、そして俺はこころさんが何を言ってるのか全くわからなかった。

「さて、そろそろ練習に戻りましょう、薫達も待ってるわ!」

「そうだった、じゃあとりあえず神崎さんを案内してくるよ、個人的に聞きたいことあるし」

「?なら任せるわ、花音一緒に部屋に戻りましょう」

「………れいくん、またね」

「はい、またいつか」

手を振ってくれたからつられて俺も手を振る。花音さんは小動物みたくて可愛いよな、そうは思いませんか?

「さてと、玄関向かいますか」

「ああ……それで聞きたいことって?」

「それはもちろん4月29日のことだよ、こんなにも色んな人に聞いてるって知ってたら気になるもんだよ」

「……気になる?」

「ちよー気になりますねー」

その返事からしてそこまで気にしてないように感じるのは俺だけなのだろうか?

「んー奥沢さんには別に話してもいいと思うんだけど……」

勝手に話してもいいのかな?

話したりしてあとから千聖さんとかアサシン本人から文句言われたり……?

いやいや話ただけで文句言われるって何?俺別に悪いことしてないよね?恋愛相談するだけだよね!」

「少し長くなるけどいい?」

「え、長い?ならー後日?」

「……後日でいいならいいけど」

なんだ、結構本気で気になってますやん

ん?待てよ、これで奥沢さんが味方に付けばこの人にも探すの手伝ってもらって早めにアサシンの正体を特定して……

ってそんなに上手くないかないか

「はい、これ私の連絡先」

「あ、はい」

連絡先のQRコードを見せてきたもんだから急いでスキャンする。連絡先交換がこんなにもスムーズに済むとわ、この人もなかなかフレンドリーな方なんだろうか。

「初期アイコンとか笑う、変えなよ」

「アカウント変えたばかりなんだよ!」

初期アイコンの何が面白いんだよ、一度変更したら二度とそのアイコンには戻せないんだぞ!?レアだろレア!

「このまま真っ直ぐ言って左の階段降りたら玄関だよ、出て道沿いに歩けば入口の門にたどり着けるから後は勝手にどうぞー」

「ありがとう奥沢さん、助かったよ」

「道案内はなれてるので」

「あ、あはは」

そりや松原さんと一緒にいれば道案内にもなれるか、なれていいものかわからないけど

その後は奥沢さんの言う通り整った道を通ると数分で正門へとたどり着く、数分かかるということだけでどれだけ広いんだと察してくれるだろう。

その後は携帯で適当にネットニュースを見ながら暇を潰す。若いんだからソシヤゲとかしろよってな、残念ゲームは据え置き派なんだ。

正門にて待つこと2時間、そう2時間だ。その後ずっとネットニュースを見てた時間を潰した。

その苦行の2時間を終えた後ようやく千紗さんが姿を現したのだ。

「すまないレイ、少し話が盛り上がってな」

「盛り上がったって?」

「弦巻文庫の売れ行きが去年と比べ物にならないほど飛躍しててな、お褒めの言葉を受けていたんだ。えへへ」

「それはよかったよかった」

「是非濤奈とも会いたいと言ってくれてな」

「それは絶対やめましょう!!!」

強く反対した後俺は千紗さんの車に乗り弦巻文庫へと戻るのであつた。

◆◆◆
「お疲れ様でしたー」

午前中弦巻邸にて時間を潰した後、午後は通常通り持ち込みの受付をしていた。

今日のはあのお姉ちゃん大好きな人は来なかったけど今回もまあ癖が強い人がたくさん

テレビとかで見る作家さんが普通なのって実は隠してたりするのかな?

逆に隠さずアピールしてくる特殊人物達のメンタルの強さを目の当たりにすると学ばないといけないなと思わされてしまう。

さてと、そんなことはどうでもいいんだ。

実は私神崎レイは本日弦巻邸にて会議に出席（表上）したことから「疲れただろ、明日は休め」

なんてありがたきお言葉を千紗様もとい編集長よりいただけたため俺は明日休みになったのだ。

千紗さん何かと俺に休みをくれるあたりかなり優遇されてんなーと思うがそんなことを社員の人達に言えば殺されるから自白剤を打たれても言っつてはいけない。

「(日曜何しよっかな)」

帰りの電車の中で手すりに捕まりそんなことを考えていた。

考えるも特に何も思いつかず自宅の最寄り駅へとたどり着く、降りた後ICカードを改札口にかざした時残高不足でエラーがかかったことは内緒の話だ。

「(そうだ。なにか、なにか誰かと約束してたんだよな)」

誰かとなんか約束してたんだよな：消去法で考えよう。

変態幼馴染達、とは何も約束してないか、そもそもアイツらと個人的に遊ぼうとはもう思わん

「……………ああああ！思い出した！」

俺はすぐに交わした約束を思い出し、その子の自宅へと足を運んだ。

少しだけ遠回りになるが俺連絡先持つてないし？

弦巻邸程の大きさではないがまともして門の前に立ちでけえーと思いつながらその人物の名を大きな声で呼んだ。

「ありーりー！俺だ！レイだけど今いるー？」

そうだ。ありりと以前約束してたんだ。

「だったらありり、今度俺とデートしよう」

俺と隣子さんがデートする前日、ありりが不安がってアサシンの可能性がーなんて思って探るつもりでそう言っつてありりのやつ嬉しそうにしてたからな

でも本人曰く昔みたいに遊べるから嬉しいだけというね、俺も久しぶりにありりと2人だけで遊びたいと思ってたし次の休日はありりに使おう。

それにまたいつ休みが貰えるかもわからない。

「あれ？ありりー！俺だよ俺！レイだよー！いるなら返事してくれーい！」

「……………」

「…………あれれ？」

いないのかな？この家見たところインターホンないから前隣子さんと来た時も同じように叫んだんだけど…

聞こえてないのかもしれないと思った俺は先程よりも大きな声で叫ぶ

「ありりー！レイだけどー！いるー!？」

「うるせえ！近所迷惑だろうが！」

「ツ!?ありりー！」

声が聞こえたのは正面から、ではなく後ろからだった。

振り返ると私服のありりが両手いっぱい荷物を持ち立っていた。

スーパーのレジ袋からして買い物帰りだろうか、にしても凄い量だな

「ごめんありり、ありりに言いたいことがあつて来たんだ」

「あたしに言いたいこと!?!な、ななななんだ!？」

「そんな大したことじゃないんだけどさ？明日俺休みになったから2人でお出かけなんて…ほら前に約束しただろ？」

「……………へっ!？」

鳩が豆鉄砲食らったかのような顔をするありり、俺は何か変なことを言ったのだろうか。

「はっ！にしてもいきなりだなー！」

「悪い、本当に急遽明日休みになったんだよ、これからいつ休み取れるかなんてわからないからな、それに俺久しぶりにありりと2人だけで遊びたいし」

「…………?待ってくれちよつとスケジュール確認する、これ持つててく

れないか」

「あ、うん」

荷物を受け取りありりは余った手で携帯を取り出しスケジュールを確認した。

「うんーと唸り声を出していたが最後は

「うんー！問題…ない！デート、しよう、ぜ！」

「本当？よかった」

「れつくんがこれからいつ休み貰えるからわからないしな、最優先事項だろ？」

「ありり、ありがとう！俺楽しみにしてるよ、あつ！そうだ俺弁当作ってくるよ、どっかで一緒に食べようぜ！」

「おー！いいなそれ！ならあたしもなんか作ってくるから、その…交換しような！」

「ああ！でも俺の方が絶対美味いけどな」

「それはどうかなー？あたし最近料理の勉強始めたからそう簡単に負けねーぞ？」

「それは…楽しみだな」

「これは本当に明日が楽しくなりそうだ。

「こんなにも楽しいと思える休日は久しぶりなんじゃないか？」

「それもありりと一緒になんて…姉貴はいないけどまた昔みたいに一緒に遊べて、遊べて…」

「(あれ？遊ぶって、何して?)」

「ここでひとつ俺は重大なことに気づく

「過去に一度も異性とデートなんてしたことが無い俺は果たして1日のデートスケジュールを立てることができのだろうか？」

「否、出来ない！断言できるぞ！」

「燐子さんの時は夜ご飯を食べるってだけだったけど今回は違うからな…。」

「いや、これはアサシンのデートを見越した事前学習会…とも言えるのか？」

「それは流石にありりに失礼か？でもでも学ぶなら実践って言うし、

今回のありりとのデートを完全成功させてアサシンに俺はエスコートもできると証明したい…。

それとも彼女は嫉妬してしまうか？いいや、ありりとは友達だ！そうゆうやましい思いがあつて誘つてるわけではない！

何かあつてもそう説明しよう。

「(今回のデートは)」

「れっくんとデート、えへ、えへへ…最後はやっぱり？」

その頃有咲は乙女の力を十二分に発揮し一人妄想に慕っていた。

夜の浜辺、2人で歩く

月が綺麗だね、なんてレイが有咲に言うもその頬は赤らめていて…最後は2人がお互いの唇を…。

「(こ、これは！)」

『(成功させなければ！)』

お互い強くそう決心したのであった。

「ところでれっくん、夜空のお見舞い行ったか？」

「あつ、忘れてた…！」

「おいおい、あんなに重症追つてて友達からお見舞いなしなんて流石に悲しむだろ、てか忘れんなよ！」

「仕方がないだろ！今日は1日色んなことがあつて疲れてたんだよ！？」

ああ、確かに最低だ。昨日目の前で柊優があんな目にあつてお見舞い行こうと思つてたのに…！

今日1日だけで本当色なことがあつて完全に忘れていた。

「ごめんありり！俺今から柊優の所行つてくるから！あとで待ち合わせ場所とか教えるからー！」

「わかったー！」

お互い明日が楽しみすぎて肝心なことを忘れていた。

そう、連絡先を交換してないことを…レイがその事に気づいたのは寝る前に連絡を送ろうとしたその時なのであった。

しかし無事に奥沢さんへ頼み込み何とかして有咲の連絡先を聞き出したレイなのであった。

可愛い幼馴染とデートしたことありますか？

ありりと別れたあと俺は商店街の佐藤さんの店で果物をいくつか買い柊優が入院している病院へと向かう。

受付の人に許可を貰い少しの間だけ面会できることになった。後から話を聞いたが面会受付時間ギリギリだったとき、危なかった。

「おーす柊優」

「よーすレイ」

「……はは、結構元気そうだな」

「今は葉が効いてるからな」

柊優の様子を見てみるが初見の印象が強すぎた。頭には包帯が巻かれ踏まれた足にはギブスが嚴重に巻かれていた。

アニメとかでよく見る足をぶら下げるやつ、まさかあれを現実で見ることになるとは思いもしなかった。

「これお見舞い品、切って欲しいなら切ってやるぞ」

「問題ない、りんごぐらいそのまま食べる……美味しい」

話しながらりんごを受け取りそのまま口に運び出す柊優、普通に会話できることから察するに脳には支障なかったんだろう。

「お前入院しなくてすんだんだな」

「ああ、でも鼻に注射刺されたのは痛かった」

「はは！想像すると面白いなそれ」

「そんなに笑わなくてもいいだろうが……」

普段と変わらないような感じで俺達はそう会話をした。でもそれって柊優が心配かけないようにとあって普段通りにしてくれてるのか？

「……足の親指の骨は粉々になってるらしい」

「ッ！」

「頭の方は何針か縫った、きつと跡が残るんだろうな、上手いこと隠せれる位置ならいいんだけど」

「……………ごめん」

「謝らなつて、引き受けたのは俺だ、お前は悪くない……………つて青葉さんにも言つたよ」

「モカにか？」

話を聞くとモカ達はお昼頃お見舞いに来ていたようだ。

なんでもあの日あの場所にいた俺以外のメンツ全員で押しかけて来たとのこと

「その後は看護師さんに誰が本命なの？とか聞かれて大変だった…」

「そりやそんなに女子が来たらそう思われるだろ」

「でも一番驚いたのは朝日奈さんだな、まさか来るとは思つてなかつた」

「お前無視されてたからな」

「うっせえ」

凜のやつは大方私が来ても…なんて渋つてたところモカ達に無理やり連れてこられた、つてところかな？

「あと珍しく蘭が心配してたから恐怖を感じた、あいつ絶対なんか変なこと企んでるよ」

「そ、それは恐ろしいな」

俺ら2人揃つて蘭恐怖症を発症しているようだ。治すためにはあの蘭の同人誌をこの世から抹消するしかない。

「それで？入院生活は無事に8月下旬までなのか？」

「それが残念、あと数日で退院だ、生活も松葉杖生活だよ」

「お前部活は？夏の大会近いんじや？」

確かサッカー部地区大会準優勝してたから7月の本戦行くのかなんとか

「どう考えても無理だろ、こんな足で皆と一緒にグラウンドに立とうなんて俺は思わん」

「それに俺がいなくてもなんとかなるだろ、先輩達強いし、10番狙つてるやつなんてたくさんいたんだから俺がいなくなつて清々してるんじゃないか？」

「お前それ自分で言えるメンタルの強さ凄いな」

「あ、でもあとは言ひ訳だなー露出魔捕まえようとして怪我しました、

なんて言えないからな」

「なんでだよ、言えよ、誇ってもいいことじゃないのか？」

「それは怪我してなかったらの話だ」

ちなみに今から言うことは後日談だが露出魔をとっ捕まえた柊優は栄光を称えられ全校集会で表彰式を行うことになったのであった。

「正直あの時俺どうかしてた、なんか変なこと言ってたりしなかったか？」

「いやまあ少しハイテンションになってて気持ち悪かったぐらいだな」

「そ、それは蘭に見られてたり？」

「してない」

ならよかったと安堵した柊優はまた一口りんごにかぶりついた。

あのことを蘭に知られたらいいじられそうだしな

「そろそろお暇するよ、俺明日ありりと遊ぶからその準備もあるし」

「おっ、ならその子がアサシンだったのか？」

「違う、ってまだわからないけど今のところありがアサシンだとは判明してない」

「本気になるよなー正体隠して告白してくる女の子、俺も早く誰だったか知りたい」

「可愛かったりしたら嫉妬すんなよ？」

「……はあ？お前今の発言キモイぞ、なんでお前が可愛い子と付き合って俺が嫉妬するんだよ、蘭の影響受けすぎな」

「ああああ！日本語って難しいね!？」

別の意味の嫉妬だろうがー！と後から大きな声で説明しレイはふんすと言いながらドアを思いっきり閉め部屋を出ていくのであった。



「弁当よし」

「服装よし」

「髪型よし」

「香水よし」

「えつと後は…」

次の日俺はありりと遊ぶため朝から準備に追われていたら。弁当に関して少し気合を入れすぎた：朝から揚げ物を作るのは大変だと改めて感じた。

家を出る前に色々確認していたその時携帯に電話がかかる。

「もしもし」

「あ、レイ君ゴム忘れてるよ」

「……………」

つぐみからの電話だった。全部聞いてやがったのか：？でも俺ありりと遊ぶなんて言ってたか？

いや昨日の夜部屋で一人叫んでいたからその時知られたのか

ありりに後から連絡すると言ったが実は俺ありりの連絡先知らなかったんだ。

そのことを発言して急いで奥沢さんに連絡先聞いたんだよ、最初怪しまれたけど本人に聞いていいって返事来たら教えると返事が来た時点で勝ったなど確信をもてた。

無事に連絡先も交換できて待ち合わせ時間とかも決まって今から出る。

その直前にゴムを忘れてるだ？ふぎけんな、女の子と遊ぶ！そういうのじゃないんだよ!?

「よし、完璧だ」

俺は家を出て待ち合わせのショッピングモールへと向かう。

弁当を持っていつてるから手荷物がある。最初はショッピングモール内にて行動する予定だから：

俺はショッピングモール内にあるコインロッカーに荷物を収納しありりとの約束の場所に向かった。

安心してくれ、弁当を入れてるバックにはちゃんと保冷剤を入れる。暑さで腐ることはない。

「少し早くついたか」

15分程の早くついてしまった。まあ待てばいいか、待つのは昨日で慣れてしまった。

とは言ってもここは人がうじゃうじゃいる、1人で待つとなると少

し心細い。

「(変じやないよな)」

容姿を近くのガラスに映る自分を見て確認をする。

最近の男子の流行りのファンションだと思っから問題ないと思う。

髪型：については学校行く時と同じか

少し前髪が伸びてきたな、そろそろ切りに行かないと

前髪をいじりながらそう考えていると

「ひゅー決まってる、可愛いね〜」

「ッ!？」

声が聞こえた方を振り向く。するとどうだろうか、いかにも陽キャ集団がそこにはいた。

え、なんですか…？これが俗に言うカツアゲってやつか？

「あ、あの用事が」

「おいおい待てよお嬢ちゃん、今一人？俺らとどっか遊び行かない？」

「……は？」

「めっちゃボーイッシュな娘じゃん、俺タイプかも」

「いや胸ねーだろ、挟んでももらえないぞ」

「挟んでももらえなくても名器ならいいんだよ」

「……………」

訂正しよう。陽キャ集団ではない。最低集団だ、いかにも色んな女の子を手にかけてるような発言だ。

この野郎、しかも俺をボーイッシュな女の子と勘違いしてるだ？

「俺男ですから、残念ですけどお引き取り下さい」

「????」

脳がおかしくなったのか最低集団はお互い顔を見合わせたあと盛大に吹き出し大きな声で笑い出した。

「流石に無理があるっしょ！君どう見ても女の子じゃんか」

「いやですから俺男！声低いだろうが！背も高いだろうが！胸も板だろうが!？」

「全力で否定するとか必死すぎだろ」

おいおいこいつら馬鹿か!? 今まで一人で出歩いたりしたことあるけど流石に女子でしょ? って声なんてかけられたことないから…

そこまで女子に見えてしまうのか俺は!?

ほらなんか周りがざわつき始めたよ、なんだよザワつくぐらいなら助けるよ!?

「……あのやめてもらってもいいですか?」

「!・ありり!」

ありりが俺の前に現れ最低集団の前に立った。

この場合ありりが来た方が何かと面倒になる気がするんだが…!

「うわ上玉じゃんか! ねえねえ君名前は!」

「お前らみたいな女子を性的な目でしか見ないやつには教えねえ、ほられつくん行くぞ」

「お、おう」

ありりのやつはそう言う俺の手を取りその場からすぐに離れようとした。

こんなに真正面からそんなこと言えるとか…かつこいいというより強いな、なんか昔の芹沢君（有咲の旧姓）みたいだ

「あとこいつ本当に男なので、着いてるもん着いてますよ、それじゃ」

『……ま、まじ?』

「大まじ、男と女を見間違えるとか見る目ないな、あんた達」

『……………』

うぐつと何か精神的ダメージを受けたのか最低集団達は俺達の後を追いかけてこなかった。

見る目ないことに関しては本当だよな、だって俺男だし

「ありりありがとう、もういいんじゃないか?」

「……………」

「……ありり?」

「れつくん!」

「!」

ありりは手を離れた後俺に抱き着いてきた。

いきなりすぎる展開であたふたしたがありりが小刻みに震えてい

た…ああ、無理してまで俺を助けてくれたんだなと分かってしまった。

「ごめんありり、俺が自分で説得すればよかったよ、ありりに怖い思いさせてしまった」

「ううん、あたしも来るの少し遅かった。早く着いておけばこんなことならなかった…!」

「…ありりは凄いや、ああやって立ち向かえるの、そうゆうところは昔と変わってなかったんだな」

「それを言えばお前は随分と臆病になったな」

「うぐー!」

俺の胸に顔を埋めていたと思ったたら顔を上げジト目でそう言われ俺は先程の最低集団同様精神的ダメージを受けてしまった。

「いや俺だってちゃんと説明したぞ!なのに信じなくてだな!てか俺ってそんなに女の子に見えるのか!」

「ああ見える。ちよー見えるぞ」

「う、嘘だろ」

少し絶望にしたってる中ありりは更に俺を抱きしめ言葉を発した。

「でも…昔からそんな見た目だったからあたしはもう慣れてるぞ」

「へあ!?!」

言葉にならない言葉を出した俺はなんか恥ずかしくなり手を挙げていた。なんで手を挙げたのかわからないけど

「あ、ありりさんや、もう離れてもいいのでは…?」

大きな胸が当たってて…息子さんが元気になったりしたら大変なんですけど!?

「ダメだ、まださっきの恐怖が残ってて震えが止まらないからもう少しこのままいさせろ」

「震えって止まってる」

「止まってねえ!…な、このまま、少しはいいだろ?」

俺は照れくさそうに頬をかきながらありりが満足するまで抱かれる身なのであった。



あれから数分経ちありりは落ち着いたのか、俺からすつと離れて咳払いをした。

「よし、行こう！」

「お、おう！」

これまたいきなり普通になるもんだから戸惑ってしまふ。

ダメだダメだ、俺は男だろ！仮でもデートなんだから俺がエスコートしなければ！

「ありり！どこ行きたい店とかショッピングモール内にあるか？さっきの件もあるしなんでも買ってやるぞ！」

「いやそれは悪いだろ、自分で買うって」

「いいって金なら腐るほどある」

腐るほどは言い過ぎだけどバイトしてるしそこそこ金は持つてると自負している。

「……行きたい店いくつかあるからそのうち一つだけ…買ってもらうとするか」

「全部買ってもいいんだけどな」

「それはほら、将来な？」

「???'」

少し意味がわからなかったけどありりもそんな奢られることは好ましくないみたいだ。

世の中の女子なんて奢られたがりと思ってたけど全員が全員ってわけじゃないんだ。

いかん女子を敵にしてみました。嘘です訂正します。

とりあえずということであ達はショッピングモールの入口付近まで移動した。

入口付近にはショッピングモール内の地図があるもんだから俺はそこに止まりありりに話しかけた。

「なあありり、日曜で人も多いから効率良く回ろうぜ、人混みそんなに好きじゃないだろ？」

「好きじゃねーけどなんでわかったんだ？」

「……なんでだろう。なんとなく？」

本当になんでそう思ったのかは分からないが当たっていらしい。外れてたら恥ずかしいかったな、当たっててよかった。

「人混みというか、視線が嫌というかなんというか」

「あーありり胸でかいもんな、そりゃ見られるわー」

「誰のせいで大きくなったと思ってるんだー?」

「はい、俺ですね」

季節は夏、こんな暑いもんだからありりも薄い服を着ている。着ているもんだから更に大きな胸が強調されて…。

「……見すぎ」

「!ち、違う!これ、は」

そんなに見てたか!?流石に引かれてしまっただろうか。

「あたしきつきも言ったけど性的な目で見てくる男子大っ嫌いなんだよなー」

「ああー確かにそうだ、俺もそのうちの一人に該当してしまうのかー!」

「……嘘、れつくんのために大きくしたんだから、れつくんに見られたり触られるのは全然問題ない」

「え?」

「はっ!約束だからな!約束したからだからな!そこ勘違いすんなよな!」

「わかっております!」

だよな、少し俺に気があるのかも思ったけどそんないいことないよねー

「と、とりあえず行きたい店を教えてください、効率良く回るためにルートを決めておきたい」

「教えるのはいいけどそんな上手く回れるものなのか?」

「回れるものさ!俺を信じろ!」

「……その自信、乗ってやるぞ」

ありりは次々と行きたい店を指さしていく、1F、続いて2、3とどんどん回数は上がっていく

「ふむ、なあありり、順番とかは適当でいいんだよな?」

「行けて買いたいもの買えたらいいぞ、買えるに越したことねーしな」
「了解、なら初めに2階の店に行こう」
「そこは1階からじゃないのか？」
「いいからいいから、ほら行くぞー」
「ちよーれつくくん待っててってば！」
ありりの手をとり俺達は人混みで溢れるショッピングモール内へと足を踏み入れるのであった。



「う、嘘だろ？驚く程効率良く買い物が出来ている!？」
「言つたろ効率良く行こうって」

まず初めに1階から買い物をしなかった理由は単純明快、1番奥のフロアに店があったからだ。

なら入口すぐにあるエスカレーターに乗って2階の店に行くべき、続いて付近のもう一店舗に向かっ

と用が済んだら少し歩くがまたエスカレーターがあるから下って先程の奥にある店で買い物をして、近くにあるエレベーターに乗って3階に向かう。

そこから目的の店の近くにエレベーターがあるから1階に降りて少し歩けばすぐ1階の目的の店にもつける。てなわけで効率よく回ったのさ！

「どうだ？効率いいだろー」

「そう言われるとなんかムカつく」

「お、おい！誰のおかげで効率良く回れると思ってるんだよ!？」

「……ふふ、そうだな、ありがとうれつくん」

ありりがこうなんか笑ってくれるのはとても嬉しい気持ちになっ
てしまう。

なんでだろうか。1番古い幼馴染だから？

きっと久しぶりに2人つきりで遊べて多分楽しんでてそこから嬉
しいと思ってしまうんだろう。

「でも買ったもの全て宅配ってちよつとな」

「べ、別にいいだろ！そーゆうサービスあるなら使わないと損だろ!」

「使わなくても俺が持つのに」

「へっ!? あ、そ、そうか? なら…次のやつはお願いしよう、かな?」

「おう! 任せろ! どんなやつでもかかってこい!」

と意気込んで次の店舗に向かう、がその途中俺はとある三馬鹿に後ろから声をかけられた。

「おや神崎じゃないか」

「本当だー神崎君こんなところで何してだ?」

「まじねーわ」

「お、お前ら…!」

うちのクラスの三馬鹿、遊、優亜、由明日が後ろから声をかけてきた。

その姿は普段学校で見かける制服姿ではなく、完全オフ、私服の姿であつた。

流石、三馬鹿であつて私服のセンスはいいみたいだ、オシヤレなのになんてお前達には彼女のかも字もないんだよ

由明日はこないだ告られていたけどさ

いや、そんなこと今はどうでもいいんだ。

クラスで俺は蘭と付き合っているという設定になっている。実際は仮の恋人同士なのだが、それもまた複雑な話でだな

話すとかかなり長くなるから省くが、こいつらから見た俺は彼女がいるのに他の女と遊ぶ浮気男、と思われているに違いない。

クラスメイトの誰もが見てもそう思うだろう! でも俺と蘭は付き合っていない! なんて今更言えないし聞かれたらなんて答えようか…。

「なあその隣の子って…まさか」

「神崎君が浮気するクソ男だったとは」

「…まじねーわ」

「おいおいゴミを見る目だな」

「ゴミじゃない、ゴミ以下を見る目だ」

「君には夜桜君が、いや美竹さんがいるというのに」

「まじねーわ」

わかってたさ、こいつらのことだから容赦なく罵倒するだろうとな

由明日に関しては中指を立てていた。しかも両手で、可愛くもないゴミ以下を見るような目だな

だがしかーし！俺には弁解の余地がある！なんせ隣にいるありりは彼女でもないし浮気相手でもないのだから！

「聞いてくれ、この子は俺の幼馴染、んで今日は買い物に付き合うついでに遊んでるだけだ」

「幼馴染って神崎は多すぎな」

「ああ、6人いるぞ」

昔からの長い付き合いなら6人、中学からなら香澄も含めて7人だけど…少なくとも言うのは別に悪いことではないだろ、盛るよりまし…だと思う。

「その6人を手にかけているのか、美竹さんがいるのに」

「だからね、蘭ともそんなことしてないっての」

「まじねーわ?」

何となくだがまだエッチなことしてないの?と少し煽られたように感じた。由明日、お前も俺と同じで未経験者だろうが…。

「れっくんこいつらは?」

「……友達」

「どうもどうも年上好きの紅耶遊です」

「神崎君と一夜を共にした黄海優亜だ」

「……まじねーわ」

「はあ、蒼井由明日、こいつはまじねーわしか喋らないんだ」

「濃い友人達だな」

言われてみれば濃い友人だ。クラスで三馬鹿と呼ばれるこいつらをありりには会わせたくないと思ってたんだが

何故会わせなくなかったのか?それは先程説明したが幼馴染と紹介すれば何かと色々と言われてしまうからだよ

「神崎、君は彼女がいるのに他の女の子と遊ぶのか!」

「そうだぞ!あの美竹さんが黙ってると思うなよ!連絡先持ってないからクラチャで報告するぞ!」

「まじねーわ」

「待ってくれ、弁解させてくれ！」

「弁解もなにもれつくんと蘭ちゃんはその本当の「ありり！」ツ！」

俺はありりが何を言おうとしていたのか瞬時に察し口を抑える。

蘭と俺が本当の恋人ではないと知られたら今までの振りはない。だったのかと色々疑問に思われてしまうから言おうにも言えない。

それにあんなにイチャついてて実は偽の恋人同士でしたーなんて今頃言えるわけないだろ

とありりには説明した。

「だけどずつと騙すのも良くないと思うぞ？あ、そうだ、あたしと付き合うことになったから蘭ちゃんとは別れたってのはどうだ!？」

「嘘を嘘で解決しようとするな」

「う、嘘じゃねーだろ！いや嘘にしなきゃ…」

「ありりそこまで無理しなくていいって、あいつら馬鹿だけど話せばわかってくれるから」

「……………」

勇気を出して提案したのに鵜呑みにされ少し以上に悔しい思いをする有咲、しかしそんなこと気にもとめずレイは口を開く

「蘭からは遊んでいいと許可を貰ってる、それにありりとは幼馴染だ。

お前達みたいにホイホイ手なんて出さねーよ」

「……やけに冷静だな」

「これは本当に悪意なくただ単に遊んでいるだけ？」

「当たり前だろ、何年ぶりにありりと2人だけで遊んだと思ってんだよ」

「まじねーわ」

ちなみに蘭から遊んでいいなんて許可貰ってない。てか偽の恋人なんだから確認するもクソねーっての

でも終優以外のやつと2人つきりて出かけるとなれば文句は言われるかもな

「なるほどねーそれに見た感じ金髪ツインテの幼馴染だし？」

「まあね、選ばれないのは仕方がないかー」

「まじねーわ！」

「お前らなんの話しをしてるんだ!？」

金髪ツインテの少女が負けヒロインと言いたいのか!？全部の作品が負けヒロインだと思うなよ!？」

てかありりは金髪ツインテでも関係ないだろ！

「てめえらぶつ殺す!」

「やめろありり!早まるな!早まるなああ!」

三馬鹿を殺しにかかろうとするありりを必死に押さえつけ、速やかにここから立ち去れと由明日達を逃がすよう手助けをしてみました。

「あいつら好き勝手に言いやがって!金髪ツインテでも頑張れば恋は叶うよな!？」

「お、おう!俺はありりを応援するぞ!」

「なんでお前が応援するんだよ!?!」

「なんで俺怒鳴られるの!?!」

わかんねー!とショッピングモール内で叫ぶレイを通る人達は冷たい視線を向けていたのであった。



ショッピングモールで買い物を終えた俺達は少し歩きここら辺ではデートスポットとして評判の良い公園に赴いた。

ここに来た理由は弁当を食べるためだ。ショッピングモールのフードコートで食べようと思えば食べれる。

でも周りに人が沢山いるし飲食店もあるからさ、買った人達を優先させるのが当然だろ

「はあーづかれたあー」

「結構歩いたからな、ちょっと飲み物買ってくる、何飲みたい?」

「お茶でー」

「おっけー」

ベンチにありりを座らせ俺はすぐ近くの自販機に向かいありりと俺の2人分お茶を買う。

弁当は作ったけど飲み物は現地調達でいいやと思ったから持ったこなかったんだ。

お茶を取り急いでありりの元に戻るりお茶を渡す。

「……………ぷはー！生き返るー！」

「こんなんではばってライブできんのかよ」

「ライブはアドレナリンバドバだからな、きつくてもなんとかなる」
「そういうものなのか？」

「そういうものなんだ」

本人がそういうなら本当なのかな？

「それより早くご飯食べよう、もうあたしお腹ぺこぺこー」

「……………」

お腹を摩るありり、その際にふわっと膨らんでいた服がペタンと腹に引っ付き胸の形というのがくつきり見えてしまう。

何度見ても素晴らしい美乳だな、ぐへへ

「見すぎだぞ」

「……………でかいのが悪い」

「だーかーらー誰のせいだよー」

「俺だよ！お前が大きくなったの全部俺のせいなんだ！」

膝をつき泣きながら同じように全部俺のせいだと言ってる人を何処かで見ることがあるような、ないような

「揉むか？あたしはいいぞ？」

「ッ！今はご飯を食べよう！」

「じゃあ後でな♪」

「……………」

俺は全力で聞かないふりをしながらバックから弁当を取り出す。

今回は自信作！朝から揚げ物作ったりもしましたし早起きして頑張ったからありりには是非とも喜んでいただきたい！

「ほら見ろありり！これが俺が作った弁当だあああああ！」

「なっ！なんだこの弁当はあああああ！」

明らかなオーバリアクションをしてくれるありり、俺がテンション上げてしまったから変に気お使わせてしまったのかもしれない。

「……………えっと、食べてくれ」

「じゃあまずはサンドイッチから」

「……………」

BLTサンド、作るの簡単だけど俺が作った物には変わりはない。簡単なものでも美味しいと褒めて貰えたら！

「う、美味しい！美味しいよれつくん！」

「ツ！そ、そうか！ならよかった！」

嬉しくなつちやうよなー！

「ほら他にもおかずたくさんあるぞ！唐揚げにコロッケ、フライドポテトに、あーあとサラダもあるから栄養満点だぞ！」

「おう、す、すげーな」

今までに見たことないほどレイの目がキラキラしてたもんだから少し戸惑う有咲

だがしかしこんなレイが可愛く見て顔の表情筋が緩み自然と笑みが浮かんでしまう。

「ありり！微笑んでくれるほど美味しいのか！」

「えっ!?う、うん！」

「やっぱり誰かに美味しいと褒めて貰えるのは嬉しいな」

普段自炊はするが姉の滯奈からは美味しいと褒め慣れてるもんだから他人から褒められるとやっぱり嬉しい。

「あたしも作ってきたんだ、でも…さすがにれつくんよりも美味くは作れてないかも…しれない」

「え？でもありり昨日自信満々だったような？」

「そうだったんだよ！でもいざれつくんの料理食べると美味すぎて、自信が…」

「ありり…そりや俺は毎日飯作ってるから俺より味が劣るのは当たり前だろ？」

「真顔で言うな！クソうぜえー！」

「俺何か悪いこと言ったか？」

「なろう主人公か！タヒね！」

真正面からタヒねと言われました。それが幼馴染に言う言葉か！「ほらー！食えー！れつくんには劣ると思うけどな！」

ありりが弁当箱を開ける。すると中身は和風弁当、のり弁だった。おかずはちくわ天にアジフライ、きんぴらごぼうとだし巻き玉子、

なんか本当学校に持っていく用の弁当だな

「もしかして俺が変に気合い入れすぎた…?」

「そんなことはない! 寧ろありがたいというか、あたしのために気合い入れて嬉しかった、ぞ」

「あたしはほら、おばあちゃんと一緒に暮らしてるからこうゆう和風ものがメインなんだよ」

「丁度いいじゃん、俺洋風な弁当だしさ! 早速食ってもいいか!」
「!うん!」

まずはおかずから、ちくわ天…美味しい、ちくわ天って出来たてが美味しいイメージあるけどこうしなってるのもまたいい!

アジフライも同様、サクサク感はないにしろこのタルタルソースと相性抜群

米ものり弁仕様だしな、海苔の下にはおかかが敷き詰められてまたおかずとこれが合うんだよね

ある程度食べ終えたところできんぴらごぼう、そして次にだし巻き玉子…

「ツ!う、美味しい!なんだこのだし巻き玉子は!」

「ぞ、そうか! そうだろう! 実はそれおばあちゃんの得意料理でな! 小さい頃からよく教えて貰ってたんだよ! 自信作なんだ!」

「へーこれどうやって作るんだ?」

「教えてやるよ、いいかまず初めにだな…」

そこから俺は市ヶ谷家特性だし巻き玉子の作り方を教えてもらった。

教えられながら、そして少し汚いけど楽しく話しながらお互いの弁当を食べあっていた。

作り方を聞いた感じ難しそうにないし今度自分で作ってみるとしよいか。

「ご馳走様、美味しかった」

「お粗末様様ー、ありりの弁当も美味しかった、ご馳走様」

「ぞ、それはー…おう、ありがとな」

ニカツと笑うありりを見て一瞬ドキツとなってしまう。いきなり

のその笑顔は反則すぎんだろぅがい。

「小さい頃からよく作ってたのか？」

「？だし巻き玉子？」

「そう」

「……まあな、両親いなかったし、ばあちゃんと一緒にできることって言ったら料理とか盆栽の手入れとか、年寄りが好むようなものばかりだったからな」

「……………そっか」

俺はありりになんて声をかければいいのかわからなかった。

ありりの両親は不慮の事故によりありりが小さい頃から他界していた。

そんな時ありりのおばさんがありりを引き取り今も尚面倒を見続けているんだ。

小さい頃からって無関心なことを聞いてしまった。俺がここでありりに謝ってもなんでお前が謝るんだよ、って言われるのはわかってたから俺は…そっか、なんて他人事のような冷たい返事をしてしまった。

「なあれつくん、もしもあたしの両親が亡くなってなければあたし達離れ離れになるなんてことなかったのかな？」

「……………さあどうだろうな」

「れつくんはどうあって欲しかった？」

「俺は…ありりとは離れ離れにならなかつたらずっと一緒に遊んでいたかった、かな」

嘘偽りのない本音だ。

もしもありりと俺が離れ離れになるなんてことがなければ俺の人生は大きく変わっていたと思う。

多分ありりがいるから巴達とも絡むことなかったと思う。

中学だってありりと仲良かったなら俺が厨二病を患っててもすぐにだせえなんて言って目を覚まさせてくれたと思う。

「今思えばあたし1人ででも弦巻行ってお前と会っどけばよかったな」

「……無理もないだろ、両親亡くなってんだ……気持ちの整理着くまで遊ぶなんてできないだろ？」

俺には両親を失う辛さは全てを理解できる訳じゃない。現にうちの両親は生きている。

だから失った人達の気持ちのすべてを理解することは絶対できない。

何となく気持ちは理解できる。でもきつとその理解している範囲よりも更に辛い気持ちになるんだろうともわかる。

わかるからこそ変に口を挟むことなんて俺にはできないんだ。

「実はさ、ありりが来なくなつて数週間後に俺も弦巻行くのやめたんだ」

「……………」

「親父の仕事が忙しくなつて行けなくなつた、それと行つても芹沢君がいないなら行かなくてもいいかな、つて」

芹沢君とはありりの旧姓だ。当時の俺は弦巻での絵本読み聞かせ会と芹沢君と遊ぶことを目的に弦巻へ通っていた。

でも……来ないならもう行かなくていいかなつて、それに親父も仕事に忙しくなつたし……休みの日に無理に弦巻へ連れて行つて欲しいなんて頼むこともしづらかつた。

だからつて全く遊んでくれなかつた訳ではない。以前話した思い出のバットやボール、そう親父は近くの公園でちよくちよく遊んでくれた。

遊んでくれるなら弦巻に連れてつてくれるのでは？……でも行つても芹沢君はいない、なら近くの公園で親父と遊んだ方がいいと思うようになり俺は弦巻と芹沢君から次第と距離を置いた。

「俺だつてありりが来るつてわかつてたら親父に無理言つてでも連れて行けつて頼んでたさ」

「本当、なんでなんだろうな……なんで父さんと母さんは亡くなつたんだろう……何も悪いことしてないのに……そのせいであたしとれつくんは離れ離れになつたし」

「ありり……」

今にも泣き出しそうなありりを俺ただ見つめることしかできなかった。

なにかしようと思っても恋人でもない、強いていえば親友の俺ができることはなんだろうと考えても慰める方法なんて思いつかなかった。

でも俺はいてもたってもいれずありりに声をかけた。

「でもさありり、俺達こうしてまた会えただろ？今日はありりと2人だけで遊べて本当に楽しい」

「……………え、」

俺はベンチから立ち上がり話し出す。

「だって最近は変態幼馴染共の相手で大変だったし、こないだは鼻から血がたくさん出るし、昨日は昨日で金持ちの屋敷に連れてかれるし…もう大変な日が続いていた」

「俺達はありりの言う通り離れ離れになった、でもさ！」

そういうありりの前にかがみ込み目を見て言葉を発する。

「昔一緒に遊んでいた思い出や、俺達の関係全部がリセットされた訳じゃない」

「現に今日だってまた遊べてる！確かに離れ離れになったのは寂しかったけどさ…また遊べると思えばどうってことないだろ？」

「ッ！」

ありりは驚き目を見開く、俺の言いたかったことが今のありりに響くのか正直不安だったけどこの反応的にこういった返事をいただきたかったんだろう。

「……………な、ならさ！」

「？」

「あたし達の関係も…そのうち友達以上にな、なれたり…」

「え？ありりー声小さくてなんて言ってるから聞こえないんだけどー？」

「あああああ！だから！離れ離れになってなかったらあたし達今頃恋人同士だったかもなって！そう思ったただけだよ！」

有咲はそのうち友達以上の関係（恋人）になれるのかな？と聞こう

とした。

しかし思ったより声が小さくて有咲の発言が気になったレイより聞き声され怒りと共に恥ずかしさのリミッターがぶっ壊れありりは大きな声ではつきりとそう言った。

「……………まあそうだよな」

「へっ!？」

「ありり胸でかいし、スタイルいいし…あと色々してくれそう」

「そ、そそそそんなにあたしって卑猥な体してるのか!？」

「え、うん、もしありりと付き合ってるならほぼ毎日するんじゃないか?」

「ままま毎日!？」

想像してしまう。寝室のいいムードの中自分とレイが一糸まとわぬ姿で愛し合っている様を…鼻血が出そうになるも必死に堪えレイの方に向く

ちなみに鼻血は根性で抑えることができるらしい(根性Gでは到底不可能)

「つてのは冗談だよ、ありり性的な目で見られるのは嫌いだもんな!」

「は、はああああ!？」

「付き合ってたか、はどうだろうー俺幼馴染と付き合うって考えたこと…はあるけどそれはあれだからな」

俺の考えでは幼馴染と付き合う、なんてことはないと思う。

アサシンが幼馴染の誰かだったとしても付き合うけど…

あれ、毎回思うけどさ、アサシンが幼馴染なら付き合うって、普通に幼馴染を俺は恋愛対象に入れてるってことだよな?

だって幼馴染と付き合っただろう?今は恋愛対象外にしといていざアサシンが幼馴染の誰かでしたーはい、付き合いまーす

ってすんなり受け入れるのか俺?

今までそう考えてたけどこれは将来のことを考えて幼馴染を恋愛対象として見なければ…?

「れっくん?」

「い、いやなんでもない…にしてもありりと付き合うかー」

「……………」

「勝手な意見だけどありりと付き合ってたら楽しいと思うぞ」

「ッ！」

なんでありりがそんなこと聞くかはわからない。もしかするとアサシンであるから気にして聞いているかもしれない。

でもアサシンではなく普通にあつたらこの世界線を話しているだけかもしれない…。

アサシンのことを考えないといけない。今は、昔みたいでありりと遊べてるのだから、今だけはアサシンのことなんて忘れて考えよう。

そう思ったから俺は楽しいと思うと返事をした。

「ありりは？俺ともし付き合ってたらどう思う？」

「……あたしは…れつくくんが浮気しないか心配するな」

「はっ!? な、なんで！」

「隣子さんとかひまりちゃんとかの胸眺めてそうだよなー」

「流石に彼女ができたならそんなことしない！」

「本当かー？」

「本当本当！」

「それじゃあ……あたしと付き合った時はそうゆうのなしだかな」

「ッ！」

そ、それは今後付き合う可能性があるかと遠回しで言ってるだろうか!?

あ、ありりともし付き合うとなれば楽しい&夢の恋人生活が…！てかそれってありりがアサシンってことには!?

「なーんてな！」

「は、はあっ!?」

「さっきのお返しだったの！何勝手に付き合えるかもなんて思ってただよー！」

「えー今の流れからのお返しかよ、辛いなーちよつとありりとの恋人生活想像しちまったじゃねーか」

「そんなに恋人になりたいなられつくんから……ってなんでもねえ！言わせんな!?!」

「何があああああ!？」

久しぶりにツインテビンタをくろう。本当に何がだ、なんで俺がツインテビンタをくろう必要があるんだ。

「ふ、ふふ、あははー!」

「ありりー?と、どうした」

なんだよツインテビンタして微笑むとか、さては今のでSに目覚めたのか? 巴を紹介してやろうか?

「いや、もし付き合ってたらかんなこと毎日してるんだらうなって」

「……それは勘弁してくれ、結構痛いからな」

「悪かったって、気おつける」

「……………」

とは言うも今後もツインテビンタをくろう場面は絶対やってくるだろうと思いなから俺は何も返事をせず片付けを行っていた。

「さて、飯も食ったことだしまた遊ぶか、何するー?」

「……って有名なデートスポットだろ? なら散歩してても楽しめるんじゃないか?」

「散歩か……ありりがそれでいいってんなら散歩するか」

「おう、あたしはいいぞ……れっくんと遊べるならなんでもな」

「ッ!」

さつきまでもし付き合ってたなら、なんて話をしてたからありりの言葉にドキリとってしまう。

へ、変に意識しすぎてるのか?

「よーしありり! どっちが先にあの噴水に着くか競走だ! 負けた方がアイス奢りな!」

「……いいいぜ、あたしバンドしてっから体力そこそこあるぞ?」

「俺はな日々変態幼馴染共の相手をしながらの社畜だぞ、負けるはずがねえ!」

意識をしないようにと思いい変な提案をしたらまさかの乗ってきたありり、ここは男して負けるわけにはいかなーい!

結果

「く、クソうー! バックが邪魔だ!」

「はあ、はあ……それを言ったらあたしは大きな胸が揺れてキツかった」

「約束通りアイス奢りな、あー今ハーゲンダッツ食いたい気分だわ〜」
「奢られるからって高級アイスを要求しやがって……わかったよ、帰りに買ってやるから一緒に食べような」

「おう！ありがとな！れつくくん！」

汗がすーとありりの首筋に流れる。今は7月、暑いのに無理させてしまった。

「ありり大丈夫か？暑いなら日陰に移動するけど」

「大丈夫、問題ない、それより早く散歩しようぜ、ほら」

ほら、と言うとありりは手を差し出した。流石にその意味がわからない鈍感クソ野郎ではない。

手を繋ごうって意味はわかるけどなんで手を繋ぐんだろうと疑問に思ってしまった。

「デートスポットだぞ、見ろ周りを！誰もが手を繋いでるだろ！」

「なるほど、なら従おう」

ありりの手を取る。う、うわー肌スベスベだ、手を握り思う、柔らかい。ありりの胸ほどではないけどやはり女性は全体的に柔らかい、気がする。なんでだろうね

その後俺達はその有名なデートスポットの散歩ポイントを歩いた。途中で犬と散歩している人がいたからありりが近づき撫でていた。俺も流れるように近づいたが大きく吠えられた。なんでだ？

「れつくくん嫌われすぎだろ」

「俺があのだに何をしたと言うんだ」

こちらら猫アレルギー持ちなんだぞ、猫と触れ合えないとなれば必然的に犬を推してしまうのは当然だろ

でも犬側から嫌われているのなら俺は一体何に癒しを求めればいいのかのやら

それと飼い主から聞いたがここはペットとの散歩目的として来る人も結構いるらしい。

なんでも飼い主さんは隣町からわざわざ来たとか

「隣町から来たりするんだな」

「あーゆうペットは飼ってはみたいけど面倒見るのが大変そうだな、おたえはうさぎたくさん飼ってるけど」

おたえ、おたえってありりのバンドメンバーの人だよな、あの初めてあつたのにめっちゃフレンドリーだった人

そういえばそのおたえって人もアサシンの可能性あるんだよな…っていかんいかん、今はありりと遊んでるんだ。アサシンのことは一旦忘れないと

「さつきとは別の噴水だ」

「でけー、てか子供達遊んでんじゃん」

プール開きならぬ噴水開きってか？子供達が楽しそうに噴水に入って遊んでいた。

周りを見てみるとその子達の両親なのだろうか、微笑ましい表情で我が子を眺めていた。

「ありり？」

「ツーいや、あはは…あたし本当あんな風に遊んでた時期短いからさ、なんかしんみりした…ってさつきからあたしなんか重いな、ごめん忘れてくれ」

ありりはそう言うのと一人で先に歩いて行く、別に重いと俺は思わないんだけどな

「ありりは将来いい母親になれるよ」

「は、はいっ!？」

「だって親のいない辛さをありりが一番理解してるだろ、だからありりはいい母親になれる、俺が保証する」

「い、いきなり何言ってるんだよ」

元気なさそうだから励ましてあげたんだが？逆効果だったのだからか。

「…でもそれって…いやなんでもない」

「??？」

「だからなんでもねえ!」

ありりはよく大声で何かを誤魔化そうとするんだよな、聞こうと

思っても地雷踏みそうだからいつも聞かないんだ。

少し空気が重くなってしまったかとしれない。と思いながら散歩を続ける。

すると目の前から双子用のベビーカーを押した夫婦がやってくる。

双子って、身近に一応氷川家姉妹がいるけど絶対子育て大変だよな
(氷川日菜ではない方とは面識ない)

「こんにちはー」

「あ、こんにちは、えっと、大変そうっすね」

こんにちははと声をかけられたから返事をしたら思っていたことを口走ってしまった。

ここでいつもみたいにいやなんとかーって否定しても結局変なやつと思われるから黙って様子を伺う。

「そうですね、確かに大変ですけど…」

「この子達は僕達の宝物なので」

そう答えた旦那さんは双子の前にやってきて軽く頬を人は指でつついていた。それに応えるように子供は笑い指を掴んでいた。

「生まれてどれぐらいなんですか？」

「もうそろそろで一年経つんです」

「そっかーなら先にお祝いしとくよ、ハッピーバースデー」

ありりも旦那さん同様に指で赤ちゃんの頬を軽くつく

「あ、ごめんなさい勝手に触って」

「いえいえこの子達も喜んでるわ、ありがとう」

「……ところで君達はカップルなのかい？」

「え!?!まさか俺のこと男だと思ってますか!?!」

「……えっとすまない、女性の方だったのかな」

「ち、違いますよ!俺中性的な顔してるからよく女子と間違えられるんですよ、あはは!」

逆だろ、なんで男と思われて声荒らげてんだよ、今日は初っ端から女子と間違えられてたから感覚がおかしくなった。

「はい恋人です」

「!?!」

「(こーゆうのは話合わせた方がいい、いいんだよ)」

小声でそう言われ俺は何故かそうなのか!と思って頷くがよくよく考えれば話を合わせる意味が意味が全くわからなかったことに気づいた。なんだこれ

「子育てについて何かアドバイスありますか?」

「いくらなんでもそれ気が早いだろ」

「そうね、まずは色々頑張らないとねー」

「……いや俺達別につき」

「ふん!」

「!?」

本日2度目の!?だ。ありりに思いつきり腹をぶん殴られ俺は返事をすることができなかった。

「はい!頑張ります!」

「若いのに凄いわ、またあったら是非お話ししましょうね」

「わかりました!子育て頑張ってください!」

ありりは仲のいい夫婦が見えなくなるまで頭を下げていた。俺も合わせて頭を下げていたが…それはただ単に腹が痛くてなんだが。

「……なにがしたかったんだよお前は」

「将来のことを考えてたんだ」

「……は?」

「だから!将来のこと考えてたんだっての!?!」

ここで有咲の指す将来のこと、とは将来レイと結婚した時のためにあれこれ聞こうと思っていたのだ。

しかしレイはそんなこと気にもとめず

「お、おう、子作り頑張ってください?」

なんて変な返事をしたところ

「お前もだろー!!!」

「だからなんでー!?!?!」

ありりに照れ隠しのツインテナをくらしい公園の中で1人おおふくビンをくらしいながら叫ぶレイなのであった。



公園での散歩も終え、最後はベンチでありりと2人仲良く太陽の光を浴びながらお昼寝をしていたらあつという間に時間が過ぎていた。

「そろそろ帰るか」

「うん、そうだな…」

寝起きのありりは目を擦りながらそう答えた。その仕草がまた可愛くてドキリとした。

俺はなんでこんなにも可愛い幼馴染を男だと思っただのだろうか？と思うほどの可愛さにぼーっとありりに見とれていた。

「……………なんだ？れつくん」

何秒か見ていたところでありりが俺の視線に気づき首を傾げながら問うてきた。

見とれていた。なんて答えたらなんて思われるだろうか。いや：やめておくか

「なんでもない、それより早く帰ろう。時間も時間だ」

7月、初夏のこの時期太陽が沈むのが遅く19時過ぎだと言うのにまだ明るい、かと言って危険がないとは言いきれない。

暗くなる前にありりを家に返してやらないとな、おばあさんも心配するだろうし

「あーありり、ハーゲンダッツなんだけどさ、ショッピングモール内のスーパーで買ってきてもいいか？」

「コンビニでいいんじゃないか？それに人も多いと思うぞ？」

「……………いいんだよ、コンビニよりスーパーの方が安いんだからさ、さあ行くぞ」

ありりの手を取り俺は午前中買い物をしたショッピングモールへと向かう。

このショッピングモールに向かった理由はハーゲンダッツを買うこと、そしてもうひとつ目的があった。

「……………これかな」

買うものを買って俺は少し微笑みながらありりの元に向かっていた。

いかん、微笑みながら歩くなんて俺を変態不審者さんだと通行人に勘違いされる。ここはキリツとした顔でいかなければ…！

そう決意しスーパーの袋を強く握りありりへの元へ向かう。

「ありり！」

「おっ？思ったより早かったな」

「え？早かったか？」

「……なんでそこで問い返すんだよ」

俺的には結構時間かかったと思っただけだな、ありりは人を待つことに関しては慣れてるのだろうか。

「アイスー適当に帰り道の途中にある公園で食べるか」

「そうだな、ちゃんとスプーン貰ってきたか？」

「ああ！それもハーゲンダッツ専用のちよつといいやつをな！」

俺はそう言いながらスプーンを見せつけた。周りからくすくすと我々ながら俺達に視線が集中する。

俺とありりは恥ずかしくなり急いでショッピングモールを後にした。

少し歩き先程の公園とは違う公園に着き次第ベンチに座り俺は買っていたアイスをありりに渡した。

「サンキュー、んじゃ早速食べようかな」

「……そうだな」

俺はあることをしようと思ったがアイスが溶けてしまう。思ったからありりがアイスを食べ終わるのを待っていた。

「久しぶりに食ったけどやっぱり他のアイスとは違うよなー」

「はは、値段が値段だからな、その値段で美味しくなかったら誰も買わないよ」

皆も食べてみるといい、食ってみな飛ぶぞと言いたくなるかも？ならないかも？

「……………ごちそうさま」

「！」

その声を俺は聞き逃さなかった。ありりが食べ終わったことを瞬時に判断した俺は行動をとる。

「ありり」

「？」

「……………いや！その、な、今日は楽しかったな!？」

「??楽しかったよ?」

「で、だな！ほら、ショッピングモールの中で何か買ってやるよって言ったけどさ、俺のお金で結局買わなかったから……………代わりにこれを、と思っただなっ!」

声が裏返った。そして緊張しすぎて話す量が多くなった。反省点をあげればキリがないほどの反省することがある…が！

渡したいものは渡された！

「これは…?」

「安物だけど今日遊んでくれたお礼というか、これからも仲良くいてくれてって意味も込めて…」

「ブレスレット?」

「あはは、ネックレスとかはなんか違うかなって、だからブレスレットを」

本当は今日ありりが買うものは全部俺の金で払おうと思ってた。

でもありりのやつがハイテク野郎でな、電子決済で全部すませちゃうからどうしようもなくて…

少しでも男らしいところ見せないといけない!そう思った俺はこのブレスレットを買うことを決めたんだ。

それとありりにも伝えたけど遊んでくれたお礼とこれからも仲良くして欲しい、それと今思い出したけどナンパされてる時に助けてくれたし、そのお礼も合わせて…ってことで

「嬉しい…ありがとうれつくん」

「!よ、喜んでもらえたなら何よりだ」

頬をかきながらありりの方は見ず明後日の方向を見ながらそう返事をした。

「毎日付ける!」

「毎日って学校にはつけていけないだろ?」

「なら家で付ける!」

「そ、そこまでしなくても…」

「いいや!する!れつくんから初めてのプレゼント♪」

「……………」
本当に1万ぐらいしかしないブレスレットなんだけどな…まあ本人が喜んでるんだ、いいとするか。

学生にして1万もする物を安物というレイの財力とはこれ如何にその後ありりを見るからに機嫌良さそうに鼻歌歌いながら俺の隣を歩きありりの家まで向かう。

「今日はありがとう、久しぶりに休日と言える休日だったよ」

「ごつちこそ、ブレスレットありがとな…あと弁当も美味しかった」

「……………」それとき、れつくん」

「？」

ありりはモジモジしながらなにか言おうとしてる。何か恥ずかしかるようなことでも言うのだろうか!!」

「またっ！今日みたいにな…デートしてくれるか？」

「……………」勿論だよ、また遊ぼうな」

「……………」うん、ありがとうれつくん」

「？返事を間違えただろうか…。一瞬ありりの表情が悲しそうに見えたのは俺の気の所為、なのだろうか。」

「もう遅いだろ？瀧奈さん心配するぞー」

「あ！ああ！それじゃまた明日な！おやすみありりー！」

「うん、おやすみれつくん」

って姉貴家にいないんだった。ありりにそう言われたから反応しちまったじゃないか

晩御飯は1人分で何か簡単に作れる物しよう。そう思いながらレイは1人夜道を歩くのであった。

「有咲おかえりなさい、レイ君とのお出かけはどうだったの？」

「ばあちゃん…うん、楽しかった！」

「そう、それは良かったわねー晩御飯どうする？食べてきたのかしら」
「ううん、食べる、着替えるから先に作ってて」

「はあーい」

歳をとった人ならではの特有の緩い返事をしながら有咲の祖母は台所へと向かう。

有咲はと言うとそのまま部屋に向かいベットにダイブする。

「デート、じゃなくてまた遊ぼうか…」

レイから買って貰ったブレスレットを眺めながらそうぽつりと呟く、本当はまたデートしようと言って欲しかった。

「ふふ、でも…まあいいか」

ブレスレットを触り、微笑みながら有咲は呟く、その後今日一日中歩いたからなのか、昼寝を下にも関わらず強い眠気が有咲を襲った。

「少し、休む……か」

と一言残し有咲は幸せな気分のまま深い眠りにつくのであった。

その後有咲の祖母が部屋を訪れ布団をかけてあげたのは言うまでもなかった。

共犯者になったことありますか？

ピピピピピピピピ

「……………う、うるせえな」

毎度おなじみ目覚まし時計の爆音により俺は起きてしまう。

この目覚まし時計、二度寝防止策とかで音がうるさいのなんの、こいつのせいで二度寝なんてしたことがない。

「……………おはようつぐみ」

言うのを躊躇ったがどうせ聞かれてるんだ。それに誰かにはおはようと起きて言うのも悪いものではないだろう。

まあ盗聴している相手に言うのはあれだが

携帯の画面を見てみるとつぐみよりメッセージで「おはよう」って返事が来ていることを確認した俺は制服を手に取り下に降りた。

そこからはいつも通り朝食を作り姉貴を呼ぶ

「姉貴ー朝ごはんできたぞー」

返事がない、今日は弦巻に行く用事は無いのか？

「って姉貴いないんだった」

俺しかいないけど恥ずかしくなり照れ隠しのつもりで頬をぽりぽりかいてしまう。

2人分の朝食を作ってしまったものだから俺は朝から多くご飯を食べるはめに、俺が勝手に間違って作ったから俺が悪くないんだけどね

「いつてきまーす」

誰も家にいないのに俺は律儀にそういう家を出た。

誰もいないが誰かはこの声を聞いているのか、それとももう家を出てるのだろうか？

どうでもいいか、そんなこと

1人でいつもの通学路を歩く、最近変態幼馴染共と鉢合わせることが多いからな、学校に行く時間帯を変えたんだ。

今までは早めについて宿題をしていた。でも変態幼馴染共と朝会うことを拒み俺は家で寝る前宿題をするようになった。

俺としてはつぐみにずっと聞かれながら宿題をするのは嫌なんだが：モカやひまりの相手をするよりまだマシだと自分に言い聞かせ自宅にて宿題をするようになった。

すれ違う花咲の女子生徒達、胸の大きな子もいれば小さい子、それに顔が整いすぎてる女子まで

信号待ちの女子生徒が携帯の画面に移る自分の前髪を見ながらいじっている様を少し見ていたらふと目が合ってしまった。

女子生徒は恥ずかしそうにはにかむと信号が青になった瞬間ぴゅーんと走り去って行った。

「(いかん、見すぎてたか)」

なんでか知らないが女子の仕草って一つ一つ可愛い気がする。俺の気のせいだろうか

昨日のデートや金曜のこと、それと土曜の弦巻での出来事やらなんやらで結局休むことができなかった俺の目は少しだけ血走ってた。

今日こそ早く寝よう。そう決めながら俺は羽丘へと続く通学路を歩き続けた。

「おはようございます」

「はい、おはようございます!!」

げっ、校門に先生いるし、それも体育の先生だ。

学校あるあるだがなんで体育の先生ってこう暑苦しい人ばかりなんだ？採用に暑苦しい人！って条件決まってるのだろうか。

とりあえず挨拶しないと通れそうにない、適当に大きな声で挨拶でもしとくか

「おはようございます」

「おはようございます…っつと神崎か！」

「……………」

「お前の担任から伝言だ、登校したら会議室に來いとのことだ！」

「了解です」

そんな腹から出すような大きな声でわざわざ言わなくていいんだよ！

ほらみたことか、登校途中のやつら全員俺の方向くじゃんか！変に

目立たせるのはやめてくれーい！

急ぎ足で下駄箱に向かいシューズに履き替えそのまま会議室に向かう。

にしても会議室か、大方露出魔の件だと思うんだが…

ドアの前につきコンコンコンと3回ノックをした。

「入れ」

「失礼しま…す」

入ってみてびっくりーなんと変態幼馴染共（つぐみを除く）と凜がいるじゃないですかー

まさかあの件に関わる全員集めた感じか

「神崎で最後だな、とりあえず座ってくれ」

「あ、はい」

近くの席が空いてたから座る。しかし両隣かモカとひまりとはこれはいかに

「時間もないから簡単に話す」

『……………』

担任が真面目に語り出したため一同視線を先生に向ける。

「本当に…！すまなかつた！」

「怪我人が出るほどの大きな問題にお前達を巻き込んでしまった、私達の判断のミスだ…」

「そ、そんなことないですって！だって露出魔は女性だって情報が出回ってたんでしょ？」

「ならそんな危険なことになるなんて誰も思わない」

「先生は悪くねえよ、ただ実際に現れたものがバケモンだったってだけで」

先生が謝ると上からひまり、凜、巴の3人が先生を否定するよう言葉を並べた。

「だとしてもだ、配慮がかけていた。私も参加するべきだったんだ…！」

「……先生は悪くないよ、第一なんの根拠もないのに疑いかけた他の先生達が悪い、そのせいでレイは怪我したし柊優は入院することに

なった」

「……それは、(´)最もだ」

蘭の言っていることは正しいんだと思う。先生達の憶測のせいで俺達は露出魔を捕まる羽目になった。

でも実際本当の露出魔はモカだった。今回たまたまあの筋肉マンが現れたから丸く納まったものもし現れたりしなかったら……

いや今は考えなくていいか。

「でも文化祭の予算追加申請権に目が眩んで了承した俺達も俺達でした、お互いの判断のミスが招いた結果です」

「……神崎」

「被害は大きかった、でもこれでモカの疑いの目は晴れた、そうでしょう？」

「ツ！あ、ああ！絶対晴れるはずだ！捕まった人が女性ではないが今後また露出魔が現れなければ！問題、ない」

『……………』

しかしここで厄介なのか目撃情報は女性だった。つてところなんだ。

今回捕まった露出魔が男性であることは知れ渡っているはずだ。

先生が頭を下げているということは終優の怪我を知っているはず。ならば少なからず大怪我をおわせたやつが女性である。と思う人は少ないはずだ。

「体を張ってまで止めたんだ、近隣住民には女子生徒2名が露出魔を追いかけている所を目撃した人もいるはずだ」

「第一自分が露出魔だとしたらそんな必死こいて捕まえようとするか？しないでしょ、モカは白だ、何がなんでも絶対どんなことになってもそれを証明してやってください」

「ツ！」

いちやもんをつけてくる先生は絶対いる。認めよう、あんた達が正しいよ

でも許してください、俺の幼馴染なんだ。

幼馴染から犯罪者を出したくない。もう犯罪者かもしれない。で

も…それでも…バレてないなら隠し通してやりたいと思っちまうだろ…！

「私だってもちろん全力で取り組む！が、青葉も今後疑われないような行動をしよう。いいな、わかったか？」

「……はい」

そう、これからの行動だ。

これからモカが夜中に全裸で出歩かなければ、露出魔の目撃情報というのは今後報告されない。

未だにモカに疑いの目を向けてるやつがいても、モカがこれからそういう行動をしなければ証拠も出ないし、憶測でしかないことになる。

だから願わくばモカには二度と全裸で郊外を出歩いて欲しくない、けど…無理なんだろうな

「先生は夜桜の見舞い行きましたか？」

「ああ、昨日な…相当酷い怪我だった、サッカー部は夏の大会も近かったのに悪いことをしてしまったと思う」

「……本当、あたしもギリギリがギリギリじゃなくなっただんですけど」

「？何か言ったか美竹」

「いえ、なんでもありません」

俺も上手く聞き取れなかったけど蘭も蘭で迷惑かかってたからなんか文句でも言ったんだろう。

キーンコーンカーンコーン

朝のHRを知らせるチャイムだ。いつも開始5分前に流れる。

「チャイムもなったし一旦戻ろう、何かあればまた招集する、では」
先生は立ち上がり会議室を出ていく、それに続くよう俺も立ち上がり会議室を出て先生の後ろを着いていく。

他のみんなもバラバラではあったが俺の後ろを歩き皆HRが始まる前には席に着いていた。

「ではHRを始める、学級委員号令を」

そこからはいつも通りのHRが始まる。

「出席だー紅弥」

「はい！先生大好き紅弥遊！今日も先生が美しすぎて太陽が嫉妬して
います！」

「……そうか、次」

『????』

いつもの廊下に立ってろ、ではなくそうかで流されクラスのみんな
は困惑する。

先生も先生で責任感じてるんだろう。

「次、青葉」

「……………」

「青葉！」

「！は、はい、もう先生少し返事遅れただけじゃーん、そんなに大声
出さないでーモカちゃん萎縮しちゃうよー」

「すまない、少し声が大きかったな」

モカの方を見てもモカは廊下側に視線を向けていた。なんか
色々考えてて上の空って感じだった。

「レイ君レイ君」

「なんだつぐみ」

メッセージがつぐみから来たものだから返事をする。今メッセー
ジ送ってくるからつぐみは勇者すぎるだろ。俺も返事してるけど
さ

「みんなどうしたの？元気がないような…それに朝レイ君達みんなで一
緒に来てなかった？」

「気のせいだろ、考えすぎ。あと今メッセージ送んな」

と送り付けたあと俺は携帯の電源を切りポケットにしまった。

「それと欠席している夜桜についてなんだが…後日報告をする。ただ
現状怪我をして入院しているから休んでいるだけだ」

「えー！夜桜君が怪我!?先生何があったんですか!?!」

「ま、まじねーわ!」

「えーい！だから後日報告すると言っただろ！これは大きな問題だか
ら私から生徒達に直接言っついていいかわからんことなんだ!」

「どういうことだっばよ」

おい誰だラーメンの具の真似をしたやつは

「それから本日より文化祭が近いいため短縮授業となる。午前中だけの授業だ、集中して決して寝ることのないように、以上だ」

HRが終わるとすぐに授業が始まった。

聞いていたとしても上の空、何用なんて片方の耳に入った思えばもう片方の耳から抜けていく。

俺の頭って面白い構造してんだな、学年3位がこれとか笑っちゃまうよな

「(そーいや今日はモカのやつ生尻つけてないのか)」
ならぐっすり寝れるのでは？

そう思った俺は久しぶりに授業中にも関わらず深い、それはそれはオゾン層から地球の地面までの距離程深い眠りについたのであった。

◆◆◆
「はっー！」

起きてみると目の前にある時計は12時すぎを指していた。

4時間分の授業全て無視して眠りにつくとは…これは金曜日以来だ。また先生に怒られてしまう。

「神崎ーお昼食べようぜ」

「夜桜君いないから1人だろ？おっと美竹さんと食うなんて言うなよ？食わせないかな」

「まじねーわ」

「短縮授業なんじゃないのか？」

「何言うか、午後にはクラスの出し物の練習だってあんだぞ！」

「腹が減っては戦は出来ぬ、言いたいことわかるだろ？」

「まじねーわ」

一緒に食うことに関しては全然問題ないんだが…

「悪い、今朝急いでで弁当作るの忘れたんだった」

弁当は作ったさ、でも姉貴の朝食も食ったからお腹がいっぱいで…短縮授業だったし昼ぐらい抜いても腹減れば適当にコンビニで何か買えばいいかなって

「なにやっつてんだよ神崎、とりま俺達が食つてるところ見てな」

「うちのシェフが作る弁当は美味しいんだぞーあげないけど」

「まじねーわ?」

「……ありがとう由明日」

まじねーわ?と言いながら由明日はおにぎりをひとつくれた。

他の馬鹿とは違ってこいつは優しいからいいんだよなー

おにぎりを貰って食べようとしたその時、隣に座っていた誰かが飛び起き声をかけてきた。

「れーくん、今からちょっとお話ししようよー」

「……は?今から、飯食うところなんだけど」

「ならモカちゃんと2人で食べようよー蘭ーれーくん借りていい?」

「……………どうぞ勝手に」

蘭はイヤホンを耳に付け音楽を聴いていたが片方外しモカにどうぞ勝手になんて返事をした。

「だつてさ、ねえーれーくん食べようよー」

『ぐぬぬー!』

主に男子2人の視線が痛い、ちなみに痛い視線を送るのは優亜と由明日だ。

「ここじゃあれだし2人つきりになれるところに行こうよー」

「は、はあ?」

「はい、レッツゴー」

「おい!おにぎりががが!」

落ちそうになる寸前でキャッチして俺はモカに手を取られ着いていく

2人つきりになれる場所って何処だ?視聴覚室か?

「視聴覚室だと思つた?」

「?おう」

「じゃあ変えよつか」

「なんでだよ!」

まさかあまり人が来ないという東棟の便所とかか?モカならそーゆうところ連れていきそう……!

と思いきや視聴覚室より更に上へ行くための階段を上り頑丈なド

アを思いつきりモカは開けた。

「屋上……！」

「わー初めて来たけど風が気持ちいいー！」

「！ああ、そうだな」

なんだよ、普通にいつも通り笑うじゃん。俺が変に気を使ってただけでこいつはそれほどこの重大性に気づいてなかったのか。

まあそれはそれでイラツと来るけど変にしよぼくれるよりましか

「！」

強い風が吹く、砂が目に入らないように手で目を覆う。しかし覆い方が甘かったのか、指の間から見えた景色は……！

「ツ！モカ！お前！」

「えへへ、あちやー履いてないのバレちゃったか？」

「……………お前な」

モカのモカがこんにちは状態だった。

こんな状況にもなってるのにこの女今日も今日とて通常運転、下着を履かない飛んだ変態露出魔そのものであった。

「まあまあとりあえず座りなよー立ったまま食べるのー？」

「……………」

近くにある備え付けのベンチに座り俺はおにぎりを食べようとした。

何か話があるのなら先に食べ終えてた方がいいと思った俺は急いでで口に運ぶ

「そんなに急がなくてもいいのにー」

「……………急いでない、おにぎりが美味しそうだったから食べただけだ」

「そうー？モカちゃんはおにぎりよりパンの方が好きかな？」

「お前それ凛の前で言うなよな、戦争になるぞ」

もうそれは米派かパン派の戦争になっちまうからな、絶対言うなよな!?

「ってそんな話はどうでもいいんだよ、何か言いたいことがあるから呼んだんだろ？」

「お？流石れーくん、勘が鋭いですな」

「勘というか、この間あんなことがあってのこれだから何となく察しがつくだろ」

「それもそうだねー」

隣に座っていたモカはそう答えたあと立ち上がった。

何をしだすのか首を傾げながら眺めていたら俺の前にやってきたと思えば馬乗りのように俺の上に股がり座ってきた。

「……………あの、なにやってんだよ」

俺の上に馬乗りになった思えば両手を首に回し俺のことをいきなりギョツと抱きしめた。

「……………本当、ありがとね」

「ツ！べ、別にお前のためにした行動じゃない」

なんだこれ、なんで俺がツンデレみたいなセリフを言う羽目に!? てかなんでモカのやつわざわざ馬乗りして俺のこと抱きしめながらそんなこと言う!?

こいつブラも付けてないのか、胸が、柔らかい胸が当たって、モカの陰部も俺の陰部（ズボン越し）で当たってて…!

「やっぱり興奮しちゃうー?」

「そ、そりやそうだろ…てかもいいだろ?それが言いたかっただけなら別にこんなことしなくても」

「いいや、もう少しこうさせて」

「ええ」

俺は嫌がるようにそういうもモカは否定し、なんならさらに強く抱きしめてきた。

「……………あの後ね色々考えたんだ」

「??」

「もし自分があの露出魔のように捕まったらって」

「ッ！」

モカからその話を聞いた時俺も思い出した。

俺がああ筋肉マンの足を掴んだ時、必死な顔で離してくれ、頼む、なんて言ってきた…そんな顔を見た途端力が抜けて俺の手は簡単に解

かれたんだ。

「……考えた結果、どうだったんだ？」

「みんなと離れ離れになるのは嫌だなーって、そう思っちゃったんだ」
「……………」

少し声が震えていた。鼻をすする音も耳に入る。

ああ、泣いてんだろう。そして泣いてる顔を見られたくないからこうして俺に跨り抱きつくことで見られないようにしてるんだろう。

「あたしこのサークルが好き、ひーちゃんやみんなと馬鹿できて… After glowとはまた違った関係性でなんか青春つてもものを感じられるんだ」

「青春つて、視聴覚室を下着姿でうろつくことがか？」

笑いながら俺はそう答えた。

場違いな返答かもしれないけどツツコミの性なのだろう。そう発言したんだ。

「捕まったらみんなに会えない、馬鹿できない…そんなのやだよお、離れ離れになりたくないよお…」

「……………」

さらに、もうひとつさらにモカは俺を強く抱きしめた。

きつと1人でずつと考えてたんだろう。そうでもしないとあのモカが俺の前でこんなに本音を語る機会なんてそうそう訪れない。

「でも今回の件でわかったんじゃないか？このままずっと性癖に従って生活しとけば痛い目見る、って」

「正直今回お前のことを庇えたのは本当に奇跡だ、今後同じようなことが起きてももう庇える手はないと思っただ方がいい」

「……………」

モカにとって深夜を全裸で徘徊する行為は俺には想像もできない快感があるはずだ。

その快感が忘れられないから同じ行為を繰り返す。簡単に言えば依存症状を患ってるってところか

そうなるこれからすぐに辞めるといいうのはモカの身体に大きなストレスを与えることになってしまう。

どう向き合うか、俺がアドバイスできる話ではないからモカ自身が答えを出さなければならぬ。

「れーくんはさ、なんでだあたしのこと庇ってくれたの？それによつちやんも、怪我をしてまであたしのために…なんで？」

「なんで？」

なんで？なんてこと聞かれてもな、答えは決まってる。だけどそれは複雑なもの、だって理由がいくつもあるのだから

「それはみんなのため、そして俺のためとお前のためだ」

「まずサークル内にそんな変態がいたなんて知られたらインフ二ティゼロの今後の活動に支障が出るから」

「そしてそんな変態と幼馴染であった俺の評価が下がるから」

「そして一番肝心なのはお前のためだよ、モカ」

「ッ！」

自分のためとかみんなのためとかいいように言ってたけど一番はやっぱりモカのためにだろ。

「お前のこれからの人生のためだ、そんな変態地味な履歴とか残したくないだろ？」

「それにお前は腐っても俺の幼馴染、幼馴染から犯罪者を出す訳には行かない、つてもう犯罪者だけバレなきや犯罪じゃないしな、なんちつてははっ！」

人の人生気にするとか何様だと、勝手に気にすんな気持ち悪いとモカに思われるかもしれない。

だけでもこいつは幼馴染だ。幼馴染の1人ぐらい庇いきれなくて何が幼馴染だ。

幼馴染というのなら友人以上の関係性を活かしてより良い人生送れるようにしてやろうと思っても別にいいだろうが。

「あたしが犯罪者と知ってながら庇うとか…れーくんは共犯者だね」

「おいおい言い方…でもそれも悪くないか、そうだな、お前だけじゃなくて庇った俺も犯罪者だ」

話は大きくなるけど殺人などを犯した犯人を庇ったりする行為はその庇った人も協力者と見なされ共犯者となってしまう。

今回はそんなに大きなことではないけど共犯者と言われることは理にかなってる。

それとそう答えてあげることでもモカの気が少しでも安らぐのなら俺は喜んで共犯者になろう。

いやなろうというよりも既に共犯者なのか

「気にすんなどは言わん、でも今後の行動には責任を持って……じゃないとお前が捕まったら俺も捕まっちゃうぞ、なんせ共犯者なんだからさ」

「……う、うわわわあああああ!!」

今まで我慢していたのかモカから一度も聞いたことがない泣き声を聞いた。

俺の背中に爪を立てながら泣きじやくる様子を見た俺は俺からモカを抱きしめ最後は頭を撫でた。

「……………ぐすん」

「落ち着いたか？」

「うん、かなり、落ち着いた」

モカは俺から手を離し涙を拭う。その後は空を眺めるように上を向き何度か鼻をすすり俺の方を見て発言した。

「本当に色々ありがとう、れーくんが幼馴染でよかったよ」

「そうか、俺は幼馴染が変態で残念だったよ」

「でもそんな幼馴染がほっとけないんだもんね」

「ツ〜！お前な！」

「ふっふっふーこのモカちゃんがそういつまでもうじうじしてると思いでー？」

「俺のあの発言を全て返せ！」

なんなんだよこいつ!?!すぐ元気になりやがって！あの泣いた時間はなんだったんだよ!?!

……いや、あんなに泣いたからもうスッキリした？ってことか？

「やだよーこれからも共犯者としてよろしくね」

「……おう、任せろ」

俺とモカの関係は幼馴染、そして…共犯者、となんとも普通の人生

ではありえないであろう関係を新たに築いてしまった。

「ところでさ、さつきからずつとれーくんの硬いものがモカちゃんのモカちゃんに当たってるんだけどくももしかして誘ってるのかな〜?」
「お前が上に股がるからだろうが!」

「どうするー? チャック下げてパンツ少しずらせばすぐに挿るよ〜」
「ツ〜! いい加減にしろ!」

無理やり離そうとモカの肩に手を置いた時勢いが余りモカの体は少し沈む、するとどうだろう。モカのモカと俺の息子が今まで以上に急接近したものだから

「あんっ♥れーくん激しい!」

なんてことをこの変態幼馴染はいいやがった。

「だあー!! なんてこんなやつ庇ったんだよ俺はあああああ!!?」

「ではではーモカちゃんこれからお昼ご飯食べないとだから〜またね〜」

「俺と食べるんじゃなかったのかよ!」

食べるもん持つてないなと思つてたけど! 放つから食う気なんてなかったんだな

「……………たく、自分の気持ちガスッキリした途端これかよ……………てかこんな状態で出歩けないっての!」

テントを張っている自分の息子を眺めながらため息混じりにそう言うレイだった。

その頃屋上にはもう1人隙間を好む少女が1人ご飯を食べてたそう
うな

屋上に続くドアの建物と、フェンスとの間、確かに彼女なら好む場所なのだろう。

「……………聞いてはいけない話を聞いてしまったす…!」

レイの様子を伺うようにそろりと顔を出し、目の前に映る光景はレイの息子が1人で立派なテントを張っているところなのであった。



モカが泣いたあの昼休み、その後はクラスの劇の練習をした。

格優がいなかったから上手く流れ通りに練習することはできな

かったがみんなの演劇スキルは着々と上がっている気がする。

ただし俺は除く

「レイ、あんたやる気なさすぎ、怒るよ?」

「……いやな、そもそも白雪姫役って」

「決まったんだから仕方がないでしょ、やりなさい」

「頼むよマイハニーお前は俺が男とイチャイチャしてるところを見てなんとも思わないのか?」

「……………それ以上にイチャイチャしてるから問題ないでしょ、はいはい帰ったら昨日の続きしましょうねー」

「お前適当な対応すんな!? 誤解を招くだろうが!」

『神崎君ー』

「ひっ!」

ほらみたことか! 小人役の男子が羨ましいそうに俺を見てくるじゃないか。

悪いが俺は本当に蘭とイチャイチャなんてしたことありませんから! この小悪魔が適当なほら吹いてるだけだから!

とは言えないため適当に流し何とか本日分の劇の練習は終わりを迎えた。

「神崎ーこれからゲーセン行くけどお前どうする?」

「悪いな遊、俺部活の出し物有るからそっちに行かないと」

「神崎君放送部に入ったんだだけ? あれだろ朝日奈様が所属してたけど既存メンバーが全員3年だったから引退して同好会になったってところの」

「……………なんでお前そんなに詳しいんだ!」

「まじねーわ」

優亜の情報はいつも思うがどっから収穫してきてんだ? 校内の情報屋から買い取ってるのだろうか。

てか凜のやつ部員は全員辞めさせた的なこと言ってたような?

「放送部って出し物何すんだ?」

「そのうち文化祭のパンフレット配られるだろ、それで確認しな」

「そんなもったいぶったこと言うなよー俺達友達だろー?」

「友達だからこそギリギリまで黙っておきたいんだろ、サプライズだよサプライズ」

「まじねーわ」

とは言うもただ単にメイド喫茶というのが少し恥ずかしいから言わないだけであって：

でもメイド喫茶なんて知ったらこいつら飛び込んできそうだよな

「朝日奈様が何をするのか見ものだな」

「当日絶対行くから！席予約しとけよ！」

「まじねーわ！」

「優亜！席予約しとけよってなんの話しだよ!？」

何も言っていないのにこのセリフが出てくるなんて!？」

「レイー行くよー」

「わかった、今行くから少し待ってて……てなわけでゲーセンはまた今度な」

「ああ、神崎君の金でメダルゲームし放題だ」

「まじねーわ」

「か、勘弁してくれよ」

苦笑いしながら俺は荷物を取り呼ばれた蘭の元へ向かう。

「……なんかあの二人いいよな」

「遊？なんかかってなにが？」

「なんて言うんだらう。見てて思うけど相性よさそうだよな」

「まじねーわ？」

「そうだな由明日、俺達もあんな仲のいい関係を築ける恋人が欲しいよな」

「俺今から担任に文化祭の後夜祭一緒に踊らないか誘ってくる！」

「俺も今から構内駆け回って可愛い子見つけてくる！」

「……………ゲーセンは？」

由明日が珍しくまじねーわ以外の言葉を発したにも関わらず2人は聞くことなく何処かへ飛んで行った。

場面は変わりレイと蘭が仲良く2人並んで視聴覚室に向かっていった。

「お昼モカと何話してたの？」

「それはあれのことだよ」

「そう、あれね」

あれだけで話が伝わるのは蘭もあれのことを知っているなんだろう。知らない相手にあれなんて言ってもわかるはずないし

「なんて声掛けてあげたの」

「いやそ、それは、そのー恥ずかしいから言えない」

「……ふーん、まあヘナチョコ腰抜けチキンなレイにしてはよくできたんじゃない？内容は知らないけど戻ってきたモカ吹っ切れた感あつたからさ」

「……そっか」

蘭もモカのこと気にしてたんだろう。じゃないと戻ってきた時にモカの顔を伺うようなことなんてしないはずだ。普段ならな

「蘭は大丈夫なのか？終優がいなくて夏コミ間に合うのか？」

「んーインフニティゼロの原画納期を遅らせることが出来るのなら少し余裕が生まれるかな」

「うう、遅延か、ちよつと待ってくれよ」

今は7月上旬終わり頃、文化祭とかもあるから納期を7月末にして8月の印刷企業さんの第2営業日までには提出しろって千紗から聞いているから…。

「最悪8月1日に貰えばなんとかなる。そこから俺が編集してすぐにデータを千紗さんに送るから」

千紗さんには後で相談しておこう。怒られるかなー怒られそうだなーだってめっちゃギリギリなんだもんな

「……あ、ありがとう、なんか気を使わせちゃった」

「???蘭が素直にありがとうって言うなんて……明日は雪か？」

「なわけないでしょうがっ！」

「んぎゃあー！」

踵で思いつきり親指を踏まれ痛みのあまり階段の踊り場で転がり込む

痛い、痛すぎる。俺もおちよくなるようなことは言っただけどまさかこ

のタイミングで踏まれるとは！

こないだはよけたのにー！

「んんっ！じゃあお言葉に甘えて納期を少し遅らせてもらおうから」

「お、おうこっちは蘭にお願いしてんだ、蘭が忙しいなら俺は全力でサポートするよ」

「っくー！」

蘭は一瞬顔を赤くしたかと思うと急いで後ろを振り返り階段を上り始めた。

「（白のシヨーツだ）」

見えた蘭のシヨーツが真白すぎて少し見とれてしまった。いかん、なんで俺は蘭の下着に見とれてんだよ…。

「いつまであたしの下着見とくの？そーゆうのみたいならモカやひまりにお願いしたら？喜んで真上から見せてくれるよ」

「みみ見てねーよー！」

「威勢はいいから早く行こう」

「……………」

何も言い返せなかった俺はムクリと立ち上がり蘭の後ろに着いてくのであった。

視聴覚室に着くと皆が椅子に綺麗に座りモカが教卓前にて盛大な土下座をかましていた。なんだこれ

「この度は皆様に大変ご迷惑をお掛けしましたー」

ははーと聞こえると思えたが声からして覇気がない、形だけの土下座なんだろうと見てわかるやつだ。

「もう何言ってるのさモカ、誰も迷惑なんて思っていないよ！」

「てか迷惑かけたと思ってるならそんな適当な土下座しねーだろ…」

「適当じゃないよ！ちゃんと土下座してるよ！形が大事！」

「言葉から覇気がねえから意味なし」

「およよー有咲はモカちゃんのこと許してくれないの〜？」

「ち、違うからー！元からなんとも思っていないの!？」

どうやらメンバーもモカの土下座が形だけであることに気づいていたようだ。

香澄は「なんか形がどうこう言ってるであれだけど」

「とりあえず一件落着ですな」

「……まあ私はあの露出魔のブツを脆みてしまったんですけどね、あはは…毎日夢に出てきてうなされる私の身になって欲しい、死にたい、記憶から消したい、無に帰って来世はアリに生まれたい……!」

なお心に深い傷をおったものが1名

凜のやつ筋肉マンのブツを脆みてしまったらしいからな

考えてみる、男の俺達は見慣れているからいいもの見なれてない凜からしてはあんな異型なもの見てなんて思う。

「それはーほらちようどれーくん来たしれーくんのやつ見て上書きすればー」

「そんなの元も子もないでしょうが!」

「大きさはどれぐらいだったの!?! やっぱり勃ってた!?! 勃ってたの!?!」

「お前はなんてことを聞いてんだ!」

ひまりが凜のことを気にもとめずデリカシーのないことを聞いていた。てかなんでそんなこと聞くんだよ

「え、よくわからないけど多分ちっさいんじゃないかな、ポークビッツぐらい」

「ぶふっー!」

ぽ、ポークビッツだと、それはもう小さすぎんか…:戦闘状態になっても赤ちゃんの部屋ノックできないだろそれ

「なられーくんの方が大きいから上書き…」

「だからなんでよ!?!」

「ちよまま…:なんでモカちゃんはれっくんの大きさ知ってた…?」

『……………』

やめてくれよこの空気、なんでありりのやつ今そんなこと聞く? 関係あるかもだけど関係ないでしょうが(?)

「それはねーきつきれーくんがモカちゃんに押し付けてきたからーもうギンギンだったんだよ」キャー

「違うからな、こいつが勝手に俺の上に乗ってきただけだからな」

「乗って来るのはわかりますけどなんでその、ぽ、いえ、か、固いとま

で?」

「燐子さん無理して言わなくても…」

赤くなつてプルプル震えている燐子さん、なんでそこまでして言うおもうと思つたんだよ!」

「れつくくんらんん!!」

「い、痛い!ありり!痛いからやめてえー!」

毎度おなじみツインテナを食らう羽目に…何度も言うがこれめちやくちや痛いから、多分普通のテナに比べていたい。

そう燐子さんにテナされた時よりも!?なんせ髪の毛一本一本が痛え!

「どうゆうわけか説明しろ!つ、付き合つてもないのにななな、なんで馬乗りになつて押し付けるんだ!?」

「違うんだつて!モカがなんか勝手に乗つてきて俺は、その男だから息子が興奮してだな…」

「胸以外で興奮すんじゃないやねえ!あたしのむっ!」

「有咲はあたしと一緒に作画作業に入ろつか」

「なっ!?!蘭ちゃん!待つてくれ!今れつくくんを!れつくんに事情聴取の途中で」

「市ヶ谷さん作業に入りましょう」ニコニコ

なんでか知らないが蘭と燐子さんが助けてくれた。

モカのヤツめ、ありりが怒るようなことを言うんじゃない。あと疑問に思つたことなんだが…なんでありりのやつこんな怒つてたんだらうか。

昨日は楽しそうに一緒に遊んでいたのに…女心とはわからないもんだ。

「んー相変わらず有咲はバレバレだね」

「本人は私達にバレてないと思つてるけどね」

「なにに!ひまりちゃんと凜ちゃん何話してるの!?!」

「……ここにも1人知らない人がいてびっくり」

「えー!なんなの!?!気になる!教えてよー!」

「う、うるさいから、あと近い!胸を押し付けないでえー!」

「そんなことないって！有咲に抱きつく時と同じ感覚だから！」

目の前に百合の光景が広がる中俺はそれを無視して空いてる一番奥の席に座りパソコンを立ち上げるのであった。

立ち上げて数秒後、凜が香澄から逃げてきたのか俺のところへやってきた。

「おいおい、なんだよ楽しくやってたじゃないか」

「あれのどこが楽しいのよ！」

「ごめんって、それでどうした？逃げてきただけで俺に用はないのか？」

「……ない……とは言えない」

「…………悪いが俺の息子を見せる訳には」

「なんでそうなのよ!?!」

「や、やめろ！今すぐ椅子をおろせ！殺す気か!?!」

血迷った凜が視聴覚室のパイプ椅子にテーブルが合体したあの椅子を持ち上げ俺にぶん投げようとしてきた。

下ろした後に凜はせえせえと息を切らし整えたあと口を開いた。

「文化祭の準備を少しづつ進めたい、部長なんだから協力して」

「……あのな、なんで新参者の俺が部長なんだよ、お前だろ」

「サークルのリーダー!!放送部の部長」

「ごめん言ってる意味がわからない」

「……馬鹿にはわからなかったか」ボソ

「聞こえてんぞー」

なんか凜のやつ心做しか元気そうに見えるんだが？何かいいことでもあったのだろうか？

「凜、何かいいことでもあったのか？」

「いきなりなに……?」

「いや、なんか俺に普通に話しかけるし、心做しか元気そうにも見えただから」

「…………楓凜と一緒に買い物したからじゃないの?」

「?そうか」

筋肉マンのブツを見て落ち込んでいたのかと思えば今は機嫌がい

いようだ。

妹とお買い物することは楽しいことなのか、話を聞いて思ったが俺と姉貴が一緒に買い物するなんてもうここ数年してないなー

中学からは俺一人でご飯の材料とか買ってたし？最後に一緒に買い物したのなんて母さんの誕プレ選びの時か？

あれは懐かしい、まだ家に両親がいた時期だからな、確か俺が小6の頃の話だ。

「で？文化祭の準備って何すんだ？金銭面に関しては支援が入ると思うが…その支援目的で大きなことでもするの？」

「それもそうね、そうしようか、でも私は絶対裏方の仕事しかしないわよ」

「……あーはいはい」

凜がメイド服きて接客してくれたら男子共も沢山釣れると思うんだけどなー

なんなら男子達は一定時間椅子から離れなくなるだろう。なんせ色々あつて立てなくなると思うから

蘭とありりと燐子さんの3人を見ている。ありりは先程暴れていたが今は黙々と作業に取り組んでる。

「とりあえずあの3人以外を集めて軽く話をしようか」

「わかった。集めてくる」

凜はモカ達のところに向かい話をしたあと余っていたメンバー達は俺の机の周りにやってきた。

「文化祭の話し合いー？何話すの〜？」

「そうだな、メニューとか接客する人決めるとか？」

「そっかメイド喫茶だもんねー飲食店になるから料理しないと」

「ちなみにだけど俺以外で料理できる人はー？」

『……………』シーン

か oh… まじか、ここにいるメンバー達は料理できないやつばかり

「あたしは料理できるけどスイーツは作ったことないからねー手を挙げませんでした〜」

「うん、俺は別にスイーツ作れるか？なんて聞いてないから質問にしたがって手を上げれば良かったんだよ」

「じゃあーはーい」

「モカー人だけか」

凜は料理できるんだろうなーって思ってたけど…よくよく考えれば私の作った料理なんて、とか言いそうだからしなそうにないか

香澄とひまりはー、何となく察しがついてた

「ゼロ君！私お母さんがよくお菓子作るからレシピ聞いておくよ！なんなら練習もしくー！」

「それは心強い！是非頼む！」

そーいや昔遊び行つた時よく手作りのクッキー食べてたな、味はあんまり覚えてないけど不味くは無いはずだ。

「ひまりは完全接客対応だな、体が体だし」

「えーレイ君は私が他の男子からいやらしい目で見られてもいいのー？」

「ああ、一向に構わん」

「少しは躊躇しようよ!？」

客を取るためならひまりにメイド服を着させるのは絶対だ。

なんせこちとら白鷺さんとの勝負があるんだ。こっちのメイド喫茶で飲食店部門で1位取つて引き分けに持ち込む！

なにどうせ白鷺さんの演劇部が演劇部門で1位になるんだ、放つから引き分け狙いでやるしかねえよ

あとは…クラスの劇で1位をとるか、まあそれは無理か

「蘭は絶対メイド服着なさそうだし、ありりはと隣子さんは…」

あの2人がメイド服を着ている所を想像してしまう。

「おかえりなさいご主人様♪」

「おかえりなさいませご主人様♥」

うん、脳内で声まで再生されてしまうレベルで想像してしまった。こんなの最高に決まってるじゃないか！

「なに鼻の下伸ばしてるの？」

「ツーの、伸ばしてねえーから！てか蘭!？作業は！」

「あんだ達が面白そうな話してたから興味湧いてやってきた」ブイ

蘭のやつが真顔でピースサインをしてそんなことを言っていた。

蘭も蘭で今日は機嫌がいい…とは言えないか、さつき足踏まれたし

「それにあたしはあの二人よりも経験積んでるから」

「そう言うことはあまり本人達の前で言うなよ」

「言うわけないでしょ」

その点はちゃんと考慮してるんだな、安心安心

「出し物メイド喫茶でしょ？喫茶店ならつぐみのお父さんになんか話でも聞けば？」

「つぐみのお父さん！なんならもう協力するように頼めばいいんじゃない？」

「ひーちゃん？流石にそれは無理があると思うよーつぐみのお父さん自分の店どうするのー？」

「あ、そっか」

「ひまりは馬鹿だね」

「凜ちゃん!？」

まさかの凜に馬鹿にされたひまりは驚き凜の肩に手を置くも凜はそれを振り払い話し出した。

「メニユーについては戸山さんと羽沢さんのお父さんから意見を聞くとしよう…接客対応については」

「ちなみにだけど皆に知り合いのメイドさんなんていないー？」

香澄はそう問うてきた。メイドの知り合い、メイド…んー土曜日にそれらしき人物達を見たが誘えないだろ

そもそもあの変なメイドさんには二度と会いたくないと思ってるし

「あたし黙ってたけど一時期メイド喫茶ってバイトしてたんだ」

「!?初耳！蘭そんなところでバイトしてたの!？」

「うん、同人誌描くにあたって色々情報集めたかったから、1ヶ月で辞めたけどね」

「蘭がメイド喫茶でバイトー？メイド服着てたのー？」

「着てたよ、いやいやね」

「同人誌の資料集めのためにメイド喫茶でバイトなんて…蘭凄すぎ」
蘭のやつメイド喫茶でバイトしてたのか…ひまり同様初耳だ。

大方蘭の作品に登場する女体化した俺に気させようと思つて資料集めとしてバイトしてたんだろう。

なんて精神してるんだこいつ、そこまでするか？ネットで適当にメイド服買えばよかったんじゃないか？

「1人仲の良かった人がいるからその人連れてくるよ」

「蘭が作法とか色々教えてくれてもいいんだぞ？」

「いいけどイラスト完成しないよ？」

「よしわかった、是非頼む」

そんなこと言われたらそう返事をせざるを得ないよ

蘭の知り合いか…いっちゃ悪いが蘭には幼馴染以外に知り合いがいるようなイメージが全くないんだが。

「(大丈夫だよな、多分)」

そう自分に言い聞かせ俺は口を開いた。

「とりあえずメニューを考えてあとは接客作法、場所とかそーゆうのは生徒会長と話し合つて決める的な感じで」

「場所つて視聴覚室じゃないの？」

「飲食店だぞ、視聴覚室に匂いがこもったら今後授業でクレーム来るつての」

「あー！確かにー！」

「ひまりは本当に馬鹿だね」

「なんで皆して私を馬鹿にするの!?言つとくけど前回のテスト99位だからね!」

「3位なんだが？」

「モカちゃん9位」

「私は2位」

「くっ！何も言い返せない!!」

1桁が目の前に3人もいたら何も言えやしないよな、俺もその立場なら同じことを言つてたと思う。

「馬鹿キャラいいじゃん可愛いよひーちゃん」

「胸が大きければ男はそのうちやっつくんぞ」

「なんで馬鹿からそーゆう話になるのかな!?!なんか今日の私ツツコミすぎじゃない!?!」

「……そんな日もあるよ」

「もーう!なんなの今日ー!!」

ひまりは頭を抱えしやがみこみ床に向かってそう大きな声で言うのであった。

ちなみに俺はそれを眺めていただけで特に声をかけることはなかった。



文化祭について話が終わったあと俺は飲み物を買いに校内の自販機に向かっていた。

行く途中でお使いを頼まれメンバー分の飲み物を買うはめに、俺一人で持つて行ける量じゃないだろうに

自販機に向かう途中遊と優亜が廊下を走り回っていた。少し話を聞くと遊は担任を探していて?優亜はとりあえず可愛い子を探していたようだ。

お前らゲーセン行ったんじゃないの?

なんて思いながら自販機前につき財布を取りだしお金を投入して飲み物を買おうとした。その時

「私ミネラルウォーター飲みたいわ」

「は?」

いきなりそんなこと言われたから誰とも確認せずには?と答えた後後ろを振り向き顔が青ざめる。

「し、白鷺さん……!」

「ええ、こんには神崎君」

白鷺さんが腕を組み顔は笑っていたが目が全然笑ってない、作り笑いをしながら俺の後ろに立っていたのであった。

皆さんには信じてもらいたい話がありますか？

「こんにちは、神崎君」

「こ、こんにちは白鷺さん」

羽丘の自販機の前、腕を組みながら作り笑顔をみせながら絶賛大人気中のPastel*Palette、略してパスパレのベース担当兼女優こと、白鷺千聖さんが俺の目の前に立っていた。

「本日は演劇の練習で？」

「ええ、忙しいのにわざわざ時間を割いて練習しに来たのよ」

「……なるほど、あつミネラルウォーターですね、ちよっと待っていてください」

「驚いた、本当に奢ってくれるのね」

「こないだ奢ってもらいましたしね」

「奢りを奢り返すなんてそれは果たして奢りと言えるのかしら？」

「それは確かに…でもいいんです、俺白鷺さんに聞きたいことあったしその前金つてことで」

ミネラルウォーターのボタンを押し取り出したあと白鷺さんに渡した。

「ありがとう、いただくわ」

ペットボトルの蓋に手を置き、回して蓋を開ける。その後は飲み口を口に当てごくごくくと静かに音を出しながらかわいていた喉に天然水を通す…。

その様子を少し眺めていたら白鷺さんは気づき微笑みながら俺にこう言った。

「見すぎよ、変態さん」

「!？」

前から思ってたが俺はどうも人に見とれることが多い気がする。

「何度も言うけど私彼氏いるから、好意を抱くのは勝手だけど諦めた方がいいわよ」

「俺があなたに好意を抱くその自信はどこからやってくるんですか…」

「だって私美人で可愛いもの♪」

「……………」

否定はできない。てか正直俺は自分のことを可愛いとか美人とかいうやつは大っ嫌いだ。

例を挙げると凜の妹とか、あいつは無理だ。

でも白鷺さんは数少ないアサシンの手がかりを持っている人だから嫌いにはなれない、な

「……………彼氏さんが羨ましいですね」

「そうなのよ、でも彼こんな私をもう何ヶ月も放ったらかしして連絡ひとつもしないのよ?」

「はは、自慢ですか」

「何言ってるのよ、愚痴よ」

俺の適当な作り笑いには指摘しなかったが自慢ですかについては反論してきたか

毎回思うがこの人が誰と付き合ってるのが心底どうでもいいことだ。相談を受けたならまだしもこういう話しか聞かないし：興味わからないな

「さて、私の話はここまでで：あなたは私に何を聞きたいのかしら?」

近くのベンチに座り橋を組むその仕草の際下着が少し見えたが俺は見なかったことにして白鷺さんの前に立ち話し出した。

「アサシンについてです」

「それはわかってるわよ、アサシンの何の話なのかしら?」

「……………実はアサシンについて白鷺さん以外に相談できる人を増やしたいと言いますか」

「……………なるほど、あなたは私が無理してでも一般人達の恋愛のためだけに貴重な時間を割いて協力してあげてるのにその私の優しさを無下にしたいと」

「別にそこまで言っていないじゃないですか!?!」

なんでそう酷く捉えるのかなー!?!確かに白鷺さんには沢山迷惑をかけているとは思うけどさ!?!てか迷惑かけてるので俺じゃなくてアサシンだよな!?!

「実はアサシンを特定する過程でとある人に不審に思われてしまいましてね…」

「そう、要はその人に全て話して楽になりたいと?」

「いや言い方ー合ってはいますけどね」

「そして相談相手になってもらえばさらに良しと、馬鹿でも思いつくような考えね」

「うぐっ!」

先程までひまりを馬鹿にしていたが人から馬鹿にされるのはいい気分じゃないな、ひまり今まで馬鹿にしてごめん

でも三馬鹿共、お前達には謝罪する気なんてない。

「?いつまで立ってるつもり?座ったら?」

白鷺さんは隣を指差し俺に隣に座るようにと合図を送る。でもな、流石に隣に座るのはちよつと

「いえ、腰が痛いので立ってた方が楽で」

「そう、ならそのまま突っ立ってなさい」

「……………」

もう何も言うまい。この人Sっぽさが強いからな、彼氏にもこんなことを言ってるんだらう。

「話す人って誰なの?」

「えつと奥沢さんです」

「……美咲ちゃん?へーそう、彼女ねー」

「な、なんですか、まさか奥沢さんがアサシンとでも言いたいんですか?」

「言うはずないでしょ、でも美咲ちゃんなら確かに不審に思うかも、あの子周りのことよく見てるから」

「仲良いんですか?」

「言ったでしょ、私はガールズバンドのメンバーとは仲良いって」

そう言えば初期の時言ってな、奥沢さんのことを美咲ちゃんと下の名前で読んでいることから仲がいいと察しがつくな

「いいんじゃない?美咲ちゃんが絶対アサシンじゃないと確信がもてるのなら全てを話せば?」

「……なんでそんな意地悪するんですか」

「失礼ね意地悪なんてしてないわよ、いじってるのよ」

「意味同じじゃないですか!？」

でも奥沢さんがアサシンではないと絶対に言える証拠はある。

「奥沢さんには当日のアリバイがある」

「へえー聞かせてくれないかしら」

「奥沢さんは4月29日の当日アルバイトで商店街にいた、そして当日バイト中の写真を撮ってたから見せてもらったらフォルダーには時間が表示されてました」

「俺がラブレターを掘り当てたのは辺りが真っ暗になりかけた18時頃、間に合うとは思えませんが」

「間に合わないと思えません?なんでそんなこと言いきれるのかしら」

ああ、白鷺さんの言う通り絶対に間に合わないとは言いきれない。

奥沢さんは17時40分頃に写真を撮っていた。残り20分ちよつとで羽丘に来ようと思えば来れる。

「ええ、白鷺さんの言う通りです。でも奥沢さんのバイトは特別なんですよ、ものの数分で着替え、羽丘に来る……なんてことは出来ません。それにアサシン本人が俺に対して不信任なんて抱くのでしょうか?」

「証拠は確かに不十分、でも俺は奥沢さんがアサシンではないと思うんですよね」

「……あなたがそこまで言うなら美咲ちゃんに話せばいいじゃない」
「プイ」

白鷺さんは頬を膨らませぷいとそっぽを向き俺にそう言葉を発していた。

ええなにこれ、俺可愛いと自負する人はそこまで可愛いと思ってなかったけど白鷺さん可愛いじゃないですか

少しだけ、ほんの少しだけ彼氏さんが羨ましいと思った。

「はあ……美咲ちゃんとはいつお話したの?」

「一回目が羽丘と花咲でテニスの練習試合の時、二回目は弦巻邸で会った時に……」

「あなた弦巻邸に行ったの!?!…なんで?」

「なんで? いや仕事の都合上、いやバイトの延長で」

なんで白鷺さんに弦巻邸に行くことになった経緯を説明するのかわからないまま俺は説明をした。

「その時にこころさんにも聞いたりして…奥沢さんには帰り際に今度詳しいことは話すと」

「こころちゃんとも話したのね、それで?こころちゃんはなんて?」

「?その日は弟と電話してたはずと」

「……………その弟については何か聞いてないの?」

「いや聞く必要ないでしょ、なんでよその姉弟の会話を気にするんですか」

「……………あなたに聞こうとした私が馬鹿だったわ」

「なっ!?!」

なんで弦巻家の姉弟の話聞いていなかっただけでここまで酷いことを言われないといけないんだ!意味がわかりません!・

「と、とにかく奥沢さんには全てを話してもいいんですよね?」

「だからあなたがいいと思うなら話せばいいと言ってるじゃない」

よし、これで奥沢さんにアサシンのことを話して俺のストーリーカー疑惑と変態不審者さんであることを否定できる。

「よし、なら早速奥沢さんに連絡をしよう」

携帯を取りだし俺は奥沢さんにすぐ連絡をしようとした。でも最初になんて送ればいいのかわからなかったから悩むこと数秒すると

「千聖さーん、休憩時間もう過ぎてるっすよー」

「!麻弥ちゃんごめんなさい!私ったらつい…」

「はは、白鷺さんもおっちょよこちよいなところあるんですね」

「……………なんですって?」

「嘘です。ごめんなさい。殺さないでください」

俺まだ死にたくねーよ!と心の中でそう言いながら両手を上げ降参ポーズをしていた。

「あっ!か、神崎零さん!?!」

「?俺のこと知ってるんですか?」

白鷺さん呼びに来たきたこの人…何処かで見たことがあるような？

「さつき屋、で…その…は、恥ずかしいから言えないっす！」

「あらあら麻弥ちゃんどうしたの？神崎君に何か嫌なことでもされたの？大丈夫？」

「い、いえ！これはジブンの失態っす！神崎零さんは悪くないんですよ！」

「……あのさつきからなんの話してるんですか？」

この声、そして白鷺さんと仲がいい…何処かで見たことがある顔…。

「あー！パスパレの大和麻弥さん！」

メガネをかけていたから気づかなかった。パスパレのドラム担当大和麻弥さんだ！羽丘にいたんだー知らなかった。

「あはは、ジブンのこと知ってたんすっね、驚きです」

「それは、ねーだって国民的アイドルじゃないですか!?!…あれ？でもなんで大和麻弥さんは俺のことを？」

あれれ？おかしいぞーなんでこんなアイドルが俺のことフルネームで知ってるんだー？

「それは…神崎君と夜桜君の仲はジブン達の学年では有名な話なので、フヘヘッ」

「……………」

oh…この人は蘭と同じようにそっち系の残念な人だったのか、なんてこった。

「ああっ！違うっすよ！ジブンは別にそんな特殊性癖を持った人じゃないっすよ!?!ただ言い訳が思いつかなくて…」

「??」

「麻弥ちゃんそろそろ戻りましょう。もう遅れているけど更に遅れるよりましよ、薫に注意されるなんて一生の恥だわ」

「！そうですよ、千聖さんが遅れるなんて何かあったのではないかと話になったので急いでやってきたんですよ」

「悪かったわ、これも全部神崎君のせいだから」

「……………」

時間管理ぐらい自分でしつかりしてくださいよ、確かに俺は相談したけど止めて戻れば良かったじゃないですか…。

なんてことは口を裂かれても絶対に言っではいけない。

俺は白鷺さんと大和麻弥さんの姿が見えなくなるまで2人を眺め、視界からいなくなったことを確認したあと自販機でメンバー達の飲み物を買うのであった。

◆◆

「おーい戻ったぞー」

飲み物を抱え俺は視聴覚室に戻った。

戻ってる途中かなりの量の飲み物を持っていたから名前も知らない先輩が途中まで運ぶのを手伝ってくれた。

胸の大きい先輩だった、胸を見てたことバレてないかなー他の人に言い振られてないか心配だ。

「おかえりレイ君ー!」

「おい!抱きつくな!飲み物が!」

ひまりのやつが戻ってきた途端飛びついてきた。抱えてた飲み物がボロボロ落ちていく

「はあ、くんかくんか、外暑かったね、汗たくさんかいたねーうんうん、いい匂いだよー」

「ひっ!」

全身鳥肌が立ち寒気が俺を襲った。相変わらずこいつに抱かれて匂いを嗅がれることにはなれない。なれることなんてあるのだろうか。

「ノームーブから抱きつくのをそろそろやめてくれ」

「でも私の胸の感触味わかるからいいでしょーっていつも言ってるじゃーん」フー

「ッ!」

耳に息をふーと吹きかけ立っていた鳥肌は限界突破、過去最高に鳥肌が立った瞬間だった。

「2人ともいちやいちやしすぎーモカちゃんも混ぜて3Pしようよー」

「意味わからないから」

「あ、ごめーん、凜ちゃん含めて4Pだった〜」

「絶対しないから、それよりも早くお茶よこしなさいよ!」

「お、お前…俺は買ってきてやったのになんだその態度は」

凜のやつめ、俺が怒らない優しいやつだと思ってるこんな態度取ってるのか?それはお門違いだ!俺だって怒る時は怒るぞ!?

まあ今回は怒らないけどさ

「レイ君お疲れ様です」

「あはは、燐子さんだけですよ感謝してくれる人…は!」

「あんっ!」

ひまりの胸を鷺掴みしながら無理やり俺から引き離す。鷺掴みと言ったがそんなに強く握ったわけじゃないぞ、言葉のあれだよ

「作業の方はどうですか?」

「はい、美竹さんも市ヶ谷さんも集中してるみたいです」

「燐子さんは?」

「私はー、あ!飲み物も取りに来ました!あはは!」

「…大丈夫ですか?何か手伝えるなら手伝いますよ?」

「だ、大丈夫です!わからないことは美竹さん達に色々聞いてますので!」

「ただ今は自分の力不足で、そのメンタルが…」

「燐子さん…」

まだ絵を描き始めて数ヶ月、ここまで上手くかけているものの、やはり間近で蘭とありりの絵を見てたら劣っていると思ってしまうのか

「大丈夫ですよ燐子さん、俺は燐子さんの絵が大好きです」

「ッ!」

「もし夏コミで燐子さんの絵にケチつけるようなやつは俺がぶん殴ってやりますからー!」

「レイ君…ぶん殴ったら出禁になりますよ?」

「あっ」

「ふふ、レイ君が私の絵が大好きだって気持ちは十分わかりました。

ありがとうございます」

「いや、えつと……どうも」

照れくさそうにレイは頬をかきながら燐子の目を見ることができなかつたのか、外を眺めていた。

そんな光景を嫉妬深い眼差しを向けふてぶてしそうな顔をしながら眺めていた少女が1人

「くふうー！燐子先輩とれつくんいい雰囲気出しやがってー！」

「……………」

「蘭ちゃんはなんとも思わないのか!？」

「え、いやあたしは別に……てか有咲は好意剥き出しすぎでしょ」

「ツ……そ、そんなにか？」

「多分レイ本人以外のみんなは有咲がレイのこと好きだって思ってるでしょ」

「な！ななななっ！なっ！」

持っていたペンを床に落とし顔を真っ赤にしながら動揺が隠せない有咲を蘭は真顔で眺めていた。

「あいつラノベ主人公だから伝えるのは難しいと思うよ」

「なんだラノベ主人公って」

「鈍感野郎って意味」

「な、なるほど……確かに鈍感だよな」

「鈍感だけど、有咲には無理だよ、レイを落とすのは」

「は？」

首を傾げ何を言ってるんだこいつはと言わんばかりの眼差しを蘭に向ける有咲、その瞳にはハイライトがないようにも見えた。

「だってあいつにはこの世の誰よりもお似合いのやつがいるから」

「……………はっ！自分のことでも言いたいのかー？」

「まさか、あたしじゃないよ、レイとあいつの仲を裂くことなんて絶対できないんだから」

「そう、絶対……誰にもね」

「……………」

2人の世界が重い空気に包まれる。2人の世界以外の視聴覚室は

いつものように少しえちえちな雰囲気は漂っているが、有咲と蘭が座っている場所のみ空気が重く感じる気がする。

「蘭ちゃんはなんなの？」

「？なにが？」

「れつくんのことどう思ってるの？」

「どう…？あたしにとって必要不可欠な存在、ある意味」

「はあー？それってれつくんのこと好きって意味？」

「…：はあ、そう思うならそう思えば？」

「あたし蘭ちゃんがれつくんの話するの嫌い、まるで自分の物みたいに話すから」

「…：別にそんなんじゃないから、不快にさせたならごめんね」

「謝られたら何も言えないだろ…」

「ん？どうした2人共、なんか空気重くないか？」

「なんでもないラノベ主人公、集中が切られるから話しかけないで」

「れつくん、あとでおっぱい揉ませてあげるから今は黙ってて」

「は、はあ、なんなんだこいつら」

レイは話しかけたことを若干後悔しながらいやいやひまり達の話し相手になるのであった。



16時頃、普段なら学校が終わり部活動に所属していない生徒がちらほら帰り始めるこの時間、俺たちインフィニティゼロのサークルメンバーの中にも帰ろうするメンバーが数人

「私これからバイトだから先帰るね」

「あたしもー今日バイト〜」

「残念だが俺もバイトだ、ああ本当に残念だがな」

今日は珍しくコンビニバイトのシフトが入ってるからな、しかもこの変態野郎と同じ時間とか本当にクソだ。語彙力が死ぬほど嫌だとわかってくれたかだろうか。

「蘭と凜がいるから視聴覚室は使えるだろ」

「私は残る予定です、他の皆さんは？」

「あたしも残る、あと少しでいい所まで終わるし」

「あたしはー燐子先輩と蘭ちゃんが残るなら残る」

「私はー？私が残るって言ったらー？」

「はあ、香澄が残るって言っても残るっての（ほっとけないから）」「やったー！じゃあ私残るね！」

「凜ちゃんまだ遊べるね！」

「もう指スマ飽きたんですけど…」

指スマで、携帯とかあるこのご時世に指スマですか、平和ですなーちなみに俺はいつせいのせいーのやつって言ってたな、みんなはどう？

「んじや鍵閉めよろしくー蘭頼んだ」

「ん、わかったーさよなら」

「おう、さよならだ、みんなもまた明日なー」

「お先に失礼しまーす」

「おつおつ」

俺とモカ、そしてひまりは一足早く視聴覚室を後にした。

「じゃあレイ君、両手に花を持って帰ろつか！」

「いやだ」

「またまたーこうしてモカちゃんのおっぱいの柔らかさを堪能してるくせにー」

「……………」

「あつ！待てえ！」

「れーくん逃げないで」

俺はそんな二人の声を無視して全速力で階段を駆け下りた。一段飛ばしなんて甘い甘い、三段飛ばしで駆け降り玄関で追いつかれないよう急いで靴を履いて全速力でバイト先に向かった。

「はあ、はあ、はああああ、なんか今日はいつもよりも攻めていたな、あいつら」

少しは恥じらいを覚えていたきたい。恥じらいなんてリミッターが元から無いあいつらに少しでも隙を見せたら俺は食われるだろう。

今日の昼休みのモカ、あんな感じでいてくれたらどれだけましなこ

とやら

「お疲れ様です」

「お疲れさーん久しぶりだな」

「はい、今日は精一杯頑張っちゃいますよー」

レイ君の頑張っちゃうぞのコーナー、ちなみにレイ君のお願い叶えちゃうぞのコーナーは一生訪れないのであった。

控え室のシフト一覧を見て今日のメンバーを確認する。

俺、モカ、店長、モブと……り、リサさんか

リサさんとはこないだ話して以来話してないからな……なんか踏んではいけない地雷を踏んでしまった雰囲気だったからな

「おい」

「うひょー!」

「? 何変な声出してんだ?」

「い、いえ驚いたもんで……変な声出ちゃったんですよ」

びつくりしたーモカかりサさんのどちらかから声をかけられたのかと思つて心臓が口から飛び出るかと思つた。

「お前モカちゃん知らない?」

「そろそろ来るんじゃないんですか?」

「おつかれさまです」

「あ、きた」

「さあ仕事だ仕事! 働いた後に飲むコーラが最高なんですわー」

なんて適当なことを言いながら俺は控え室から抜け出しレジに向かうのであった。

「レイ、前」

「前出しですね! 任せてください!」

「頼んだ」

店長が前、と言い出したから俺は瞬時に前出しだと判断した。

前出しするため商品が並べられている棚に行く。するとそこには俺より早くリサさんが作業を始めてたみたいだ。

「お、レイ手伝ってくれるの?」

「はい、店長から前出し頼まれたので」

「頼まれなかったら手伝ってくれなかったのかな？」

「い、いえそんなことは」

『……………』

そこからはと言うと俺達は特に話すことなくお互い作業に集中していた。

そもそもバイト中に私語は厳禁だもんな、俺達が普段話しすぎていただけなんだろう。

「……えっと、リサさん」

「んー？」

「こないだは、そのすみませんでした。なんかリサさんが不快になるような事聞いちゃって」

そりや人のことを嘘つき呼ばわりしたら不快にもなって当然だ。ここはしつかり男として謝ろう。悪い雰囲気がずっと漂うのもあれだし

「……お互い様だよ、アタシもレイに疑われるようなことしたし、だからアタシこないだの件でレイに嫌われたのかなって思ってたから：謝ってくれて嬉しい」

「！」

良かった。察するにそこまで怒っていなかったようだ。それどころか俺に嫌われたんじゃないかと思っていたらしい。

「俺がリサさんを嫌うはずないじゃないですか、もう1年近くの付き合いになるんですから」

「ツ！そ、そそそうだよねー嫌いにならない、よね」

「？はい」

ここでバイト始めた時からリサさんいたからーもう1年近くの付き合い合いになる。

「でも俺が100悪かったしー話してた通り何かお詫びがしたいです」

「お詫びかー何お願いしちやおつかなく」

「お、お手柔らかに…」

モカみみたいな変態子ちゃんじゃないから変態地味お願いはないと

思うけどーリサさんに押し倒されるのは悪くないかもしれない。

あんなTheeお姉さんにリードされながらやる。いいぞー悪くない、悪くないんじゃないか…？

「あつーならレイの手料理食べたいかな、アタシも料理するけどさ？ほら、親以外の手料理ってなかなか食べる機会ないからどうかなーって」

「料理ぐらいなら全然します！むしろそれぐらいで…」

「それとレイの家でね」

「……へ？」

「だからレイの家で食べるって言ってるんだよ？」

「……あー俺の家ですか、全然いいですけど？」

「よかったー！やっぱりレイが料理で本領発揮できる場所って自宅じゃん？だからレイの家で食べたら絶対美味しいよね！」

あ、なるほどね、そういうことですか…なんだよ、ちよつとドキリとした俺の気持ちは一体なんだったんだ。

と思っただりサさんは一度俺の家に来てるし、その時何も無かったから特に期待することはないか

「そうだ！友希那も誘っていい!？」

「別にいいですよー」

「………喜ばないの？」

「え？」

「仲良いんじゃないの？」

「あは！あはは！それは、もちろん…最高の仲ですよ！」

無理して仲いいフリする必要なかったかな？でも友希那さんとリサさん仲良いし…レイが変な反応してたとか報告されたら俺は後日友希那さんに殺されるかもしれない。

「友希那さんも来るとなれば美味しいもの沢山作らないといけないです！当日奮発しちやいますよーあ、いつ来ます？俺は土日以外なら何時でもいいですよー！」

「………」

「リサさん？」

「んーそうだね、また後日話そうよ、今バイト中だしさ」

「あ、はい」

な、なんだ？リサさん急に元気なくなっただような…？

「レイ、後ろ」

「？……あつ」

「仕事中になに話してたんだよレイー」

「店長！いやーご、ごめんなさい！働きますー！」

リサさんが大人しくなった理由は店長が来たからか、来たならもつと早く教えてくれてもよかったのにー！

その後俺はバイト仲間と一切話すことなくバイトを終えるのであった。

◆◆◆

「ああああー疲れた」

控え室の冷蔵庫に入れて冷やしていた濡れたタオルをデコに抑えつけ俺はパイプ椅子に座り涼んでいた。

夏はこれが気持ちいいんだよなー家でもよくしてる

「れーくんお疲れ様ーこの後ホテルで休憩なんてどうですか」

「絶対行かない、てか帰るっての」

休む暇なんて俺にはなかった。一刻も早くこの変態幼馴染から離れなければ！

「レイー今月の焼肉なんだがいつがいい？」

「店長…俺は土日以外ならおっけーですよ」

「7月後半からは夏休みだしー夏休み中に行くのもいいかもしれないですよ」

「夏休みかー、人が多くなるから嫌なんだよな」

「なら夏休み前に行きますか」

店長は人混み嫌うからな、あんまり人がいない夏休み前、んでもって平日に行く方がいいのだろうか。

「そーいや今月開校記念日あるよね？うち」

「あつ」

「えつとー来週の水曜日ー7月14日ですな」

「ならその前日はどうよ」

『いけまーす』

リサさんとモカはその日行けるのかーなら

「じゃあ俺もその日でいいですよ」

「シフトもー俺居なくても大丈夫そんなメンバーだしな、その日で決定だ」

「いえーい、また沢山食べちゃうぞー」

「本当に太るぞー?」

「大丈夫ーカロリーはひーちゃんに送ってるからーあー!」
「?」

モカはニヤニヤしながら俺に近づき耳元で囁いた。

「主に胸に、ねー♪」

「ツ〜!あつつつつつそうですか!」

はいはい、確かにひまりの胸は最高に柔らかいですよ、あんなやつじゃなかったら喜んで揉んでた…なんて言ったらありりと蘭に怒られそう。

「んじゃ俺そろそろ帰りますね、今絶賛一人暮らし中のやりたい放題なので」

「ッ!?!」

「リビングでエロ動画見んなよー」

「見ませんから!?!」

ドアを思っきり強く閉め俺は控え室を出て行く、コンビニの外に出るとコンビニの店内の光が届く範囲は明るいが届かない範囲は一面真っ暗だ。

この近辺には街灯を増やした方がいいと思う。

そうすれば露出魔も二度と現れないと思うぞ

「……さてと、なんて送るか」

俺は悩んでいた。奥沢さんになんてメッセージを送ればいいのかと

俺が色々聞き回っていることに対して詳しい内容の話すを伝える。つまりアサシンのことを伝えると話したが…なんてメッセージを

送って話に入る？

そもそもメッセージ内でのやり取りで話せる話か？これは直接会って面と面向かい合って話し合う必要があるのでは!?

「よしー」

『大事な話がある、暇な時間を教えて欲しい』

これで問題ない!

と思ったが…これ変じゃないか？と数秒後に気付く、俺気持ち悪いこと言ってるんじゃない？

急いで取り消そうとトーク画面を開くも時すでに遅し、既に既読が付いていた。

わー付くのはやーい、てかブロックされてないだけでも嬉しいよ

『明日の昼』

「!？」

まさか真面目な返事がやってくるとは、てっきりキモがられると思ってたのに、心配して損した。

明日の昼、そうか花咲も授業短縮期間なのか

『なら羽沢珈琲店で待ち合わせしよう』

『わかった、学校終わったらすぐ行くから』

な、なんだこれ、これが恋人達がするようなやり取りなのか？ありりの時もだけど女子とこんなことできるのでなんかよくわからないけど楽しいよな

こうして俺は家に着く前に奥沢さんとのやり取りは約束もできて、上出来な結果を残し自宅にて

そして次の日、適当に授業を聞き流し、当てられた時は即答え、いかにも真面目に授業を聞いてましたよ雰囲気を出しながら過ごしていた。

「神崎お昼食へ行こうぜ、今日は銀河な」

「弁当あっても行くよな？」

「まじねーわ」

「……悪い、今日は用事があるからもう帰らないと」

「神崎が用事？美竹さんとデートか？」

「ちげーよ」

「じゃあ夜桜君のお見舞いか」

「お見舞いでもねーよ」

蘭という彼女（設定）がいるのに他の女子に会いに行くなんてこいつらに言ったらすぐ拡散されてしまう。

この三馬鹿はスピーカーだからな、すぐ人の情報を拡散する友達じゃないとタチの悪い連中だ。

「まじねーわ」

「悪いな由明日、今度埋め合わせはするから」

「じゃあ俺帰るから、またな」

遊達に別れを告げ席から立ち斜め後ろにいる蘭に声をかける。

「蘭、俺今日用事あつてさ…終わったら戻るからそれまで俺抜きで活動してくれないか？」

「…：用事？なに？」

「いや、友達と会う約束をしてて」

「それって男？女？」

「蘭には関係ないだろ…俺が誰と会おうが」

「あつそ、じゃあ好きにしなよ」

「なんでちよつと不機嫌になるんだよ」

いちいち誰と会うとか教える必要もないだろう？一応付き合ってるって設定にはなってるけどあくまで設定、これから何するとか報告する必要なんて全くないんだ。

「れい帰るの？」

「凜？いや、用事が終われば戻るよ」

「そう、なら早く帰ってきてね、もかとひまりの相手を私一人するのは大変だから」

「お、おう尽力するよ」

ひまりとモカは席外してるのか、なら蘭と凜に用事があると伝えたとし、何かあれば2人が説明してくれるか

「レイ君もしかして帰るの？」

「ああ、つぐみもか？」

「うん、今日シフト入ってるから」

「娘にお店の手伝いしてもらえる義嗣さんが羨ましい…」

つぐみに今から羽沢珈琲店に向かうと伝えたら嬉しそうに一緒に帰ろうと言い出した。

こいつが盗聴癖を持った変態子ちゃんじゃなければ喜ばしい展開なんだから

「あつ！つぐみお前のお母さんは!?今日いるのか!？」

「お母さん?いないよ、今友達と九州一周旅行に行ってるから、当分帰ってこないよ?」

「…:ついこないだ北海道に行ってなかったけ?」

「うん、帰ってきたけどすぐにまた旅行に行ったよ」

「つぐみ、今度帰ってきたら1週間近く何処にも行くなと伝えてくれ、あと帰ってきたことを俺に報告しろ」

「?わ、わかった…:もしかしてレイ君って人妻が好きなの?」

「なんでそうなるんだよ!?お前を変態にした主悪の根源だろうが!説教してやるんだよ!」

「ごめんなさい、ちよつと何言ってるわからないよ…:」

「なんなんだよこいつ」

つぐみのお母さんがつぐみに余計なことを教えまくったせいで俺は常に盗聴されることになったんだぞ!」

しかも本人は年頃の男子は盗聴されたいと思うのは当然だと、当たり前でもないことを普通のことだと教えこまれてるんだ。

ある意味洗脳だよな、ひゃー怖い怖い

そんなこんなで羽沢珈琲店に着いた俺は奥の席に座り奥沢さんを待った。

さてどうなるか、奥沢さんは俺の話を信じてくれるのか、馬鹿にするのか、もしくは奥沢さんがアサシン…

いやいや自分で白鷺さんに奥沢さんはアサシンじゃないと思うと話したんだ。

そう、奥沢さんはアサシンじゃない!てか気になるなら今日聞けばいいじゃないか!

俺はそう意気込み奥沢さんが来るまで携帯でネットニュースを見ながら時間を潰していた。

「お待たせー、ごめん遅くなった」

「大丈夫、43分ぐらいしか待ってないよ」

「だいぶ待たせてるじゃん」

「?そうかな、長い時は2時間待ったりしてたから感覚麻痺してるかもしれない」

「ふふ、なにそれ」

あ、奥沢さん笑うんだ。

「何飲もつかないあ、神崎さんは何頼みます?」

「同じものでいいよ」

「すみません、注文いいですかー」

「はい!今行きます!」

つぐみ、の声じゃない。他のバイトさんの声だろうか?でもこんな可愛い声の人いたっけ?

って当時通ってた時から大分開いてるからその間にバイトメンバ―も変わったりするか

「ミサキさん!ご注文をお伺いします!」

「あ、若宮さん、今日バイトの日だったの?」

「はい!」

「そうなんだ:じゃあ注文、アイスコーヒーを私とこの人の分お願いします」

「あ、アイスコーヒー:」

「もしかして神崎さんコーヒー飲めない口ですか?」

「な、何言ってるんですか、毎日飲んでた時期がありますよ」

中学2年の時だけどな、苦手なのによく飲み続けたよ過去の俺!

「さっきの人とは知り合いなの?」

「うん、同じ学校:って若宮さんのこと知らないの?」

「あれだろ、パスパレの人」

「なんだ、知ってたんだ」

昨日といい、今日といい、目の前にリアルなアイドルが現れるなん

てどんな確率してんだ？

そもそもなんでアイドルである若宮さんがここでバイトを？つぐみからそんな話聞いてないぞ

でもこれは絶好の好機だ。若宮さんもパスパレならガールズバンドに該当する。だから聞かなければ！

でもその前に

「奥沢さん、大切な話がある」

「……あのさ、大切な話って言い方やめな？私じゃなかったら別の意味に捉えるよ？あえてメッセージでは言っておげなかつたけどさ」

「別の意味って？」

「告白とか」

「俺が奥沢さんに？ないない」

「……帰ってもいいかな？」

「待って！話を聞いてくれ！」

確かに紛らわしい言い方かもしれない！でも大切な話は告白だけとは限らないだろ！

「俺が奥沢さんに色々聞いてた理由についてだ」

「神崎さんがストーカー行為と変態不審者になってた理由ですわ」

「ま、まあそうだな、そう思われても仕方がない？のかな」

自分ではわからないがそう思われているならそうなんだろう。てか話が全然進まねえ

「実は俺告白されたんだ……」

「はあ…恋バナですか？」

覇気のない返事を聞き流し俺は続けて言葉を発した。

「それも紙袋被った人に」

「え？」

「しかも誰かわからない、でもガールズバンドの一員だってことはその人に教えてもらったんだよ」

「……………」

「んで告白された日が4月29日だったからその日何してたか聞いてたの」

「これでわかったか？俺はストーカーでも変態不審者でもなく将来の彼女を探すために行動してたんだ」

「……………」

「あ、あれー？奥沢さん？」

奥沢さんは無言のまま腕を組みんーとうねり声を上げたあと声を出した。

「や、嘘ですよね？」

「はい？」

「そんな紙袋被って告白して身元明かさないうってそれ意味なくないですか？」

「彼女は恥ずかしがり屋なんだよ」

「……………にわかには信じられない話なんだけど？」

「俺も他人から聞いたらそうだと思うよ、でも本当なんだって！信じてくださいよ!？」

奥沢さんにも言った通り俺もこんな話を聞いたら信じることなんてできない！

でも実際告白されてるし体験談をそのまま伝えた嘘偽りのないことなんだよ！

これで信じれないと言われた俺は何を言って信じさせてやればいいのかわからん

「お待たせしましたーアイスコーヒーです！」

「ありがとうございます、それとちよつと聞きたいことあるんだけどいい？」

「? いいですよ」

「だつてさ、ほら聞きなよ」

「ッ！」

これは…俺の協力をしている？いや違うな

ここで俺が若宮さんにも話を聞くか試しているのか？どうゆう意図かわからないけど聞く機会をくれた。なら聞こう。

「あの俺神崎レイって言います、少し聞きたいことがあってですね…」
「はい！」

「覚えてたらいいんですけどー、4月29日って何されてましたか?」
「……4月29日、ですか?」

「やっぱり覚えてませんかね」

もう数ヶ月も前の話だもんな、何度も言うけど俺も4月29日なんてなんもないような日何してたかなんて覚えてないもん

「4月29日、4月29日……むむむ!思い出せません……誰かと一緒にいたことは覚えてるんですよ」

「!誰かって誰ですか!?!」

「マヤさんと一緒にいたと思います」

「マヤ?マヤ……あ、大和麻弥さん?」

「はい!マヤさんです!」

なるほど、何をしてたかまでは正確に覚えていないが大和麻弥さんと一緒にいたことは覚えているのか

大和麻弥さんに後日聞いてみるか、若宮さんもうる覚えみただし?
?

大和麻弥さんに聞いて若宮さんと情報が相違していたら再度聞いてみる、つてところでもいいか

「!?ああーあーこれですー!これの写真撮りました!」

「?アイドル雑誌?」

「だね、表紙は若宮さんと大和さん?」

俺達の座ってる席の近くにあった本棚にはこの雑誌が強調されるかのように置かれていた。

本棚とは喫茶店にはよくある客が読むための雑誌が並べられているあれだ。

「6月号!間違いないです!スタッフの方が撮った写真は6月号に載るって教えてくれました!」

ドンと俺と奥沢さんの目の前に雑誌を置き指を指しながら若宮さんは大声で情報を伝えてくれた。

「す、すみません、大きな声出してしまいました……切腹いたします……!」

「うん、そこまでしなくていいと思うよ?」

「そうだぞ、大声だけで切腹なんてしてたらちあかないぞ」

大声で死ぬとはたまったもんじゃねーぞ

「でも若宮さん、なんでこの写真を撮ったのが4月29日だと思うんですか？覚えてなかったんですよ？」

奥沢さんの言う通りだ。雑誌の表紙になっていることから2人で写真を撮ったことに間違いはないが：4月29日に絶対撮ったと断言できるわけではない。

「なんて言うんでしょうか、この写真を見た時ビビっ！と来たんです！信じてくださいー！」

少し涙目になりながら俺達に強く訴える若宮さん、別にそこまで酷い事情聴取をしているわけじゃないのに胸の中に罪悪感が込み上げてくる。

「では質問を変えます。この日若宮さん達のプロデューサー(P)は何をしてましたか？」

「??？」

奥沢さんは何を言い出したんだこいつと首をかしげ俺を見つめてくる。

若宮さんとは言うのと当日どうだったか思い出すかのように頭に両手の人差し指を添え唸っていた。

俺がなんでプロデューサーの話を出したのか説明しよう。

4月29日、その氷川日菜さんとPさんはハンバーグと一緒に食べに行っていたんだ(つぐみも同伴)

もしここで若宮さんがPさんと一緒にいた、なんて返事が来たら情報が相違してしまう。

さあどんな返事が帰ってくる

「その日はスタッフさんと一緒にいました、Pさんは…思えばどこにいたんでしょうか？」

「アイドルの仕事ならPと一緒に行動するんじゃないですか？」

俺知ってるもん、俺がやってるアイドル育成ゲームではPどんな時もアイドルと一緒にだもんね！そうだろう！？全国のプロデューサー！？

「いえ違います、P1人だと回しきれないので分担してます。その日

は少なくとも私達ではなく恐らくアヤさんチサトさんヒナさんのどちらかについていたのではないでしようか!」

「……なるほど」

全国のプロデューサーさんへ、プロデューサーの仕事は大変なんだよ、1人で全部やってる化け物なんてこの世にはいないんだよ

「はあ、若宮さんは白臭いな」

「白臭い? 髪が白色だからですか!」

「そういう意味じゃない!」

「ではどういう意味でしょうか?」

「この人ね、ガールズバンドのメンバーに4月29日何してたか聞き回ってるの」

「……な、なるほど?」

「その理由が紙袋被った女の子に告白されて正体を探る為に聞き回ってるんだってさ」

「なんと! それは本当ですか!」

「ええ、信じちゃってるよこの子…」

奥沢さんはえ? 信じるの? みたいな眼差しを若宮さんに送るも若宮さんはそんな視線を気にもとめず俺にがつついた。

「カンザキさん! それは本当なんですか!」

「あ、はい本当です……えっと近い」

顔が、顔が近い…可愛すぎるしいい匂いするし、え、俺臭くないよね?

「カンザキさんカワイイです! 女子と思えるほどです!」

「あ、あはは、よく間違えられるよ」

男子ならね、可愛いよりかっこいいと言ってもらいたいもんなんですよ、まあアイドルに可愛いと言われるのは悪くないかもしれない。

「それとさっきの話は本当だ。俺はその女の子、アサシンって俺達は呼んでんだけど探してんだ」

「ちなみにだけど2人は俺に告白…なんて、したりしてないよね?」

「……………はい?」

「い、いや実はかなり身近にいるみたいな可能性もあるだろ!」

「だからってついこないだ会ったばかりの人になんで私が告白すんと思うんですか」

「それは…実は前から俺のこと好きだった「絶対ない」……………あ、はい」
食い気味で奥沢さんに否定されたよ、これは奥沢さんは完全に白と断定していいようだ。

「若宮さんは？若宮さんもそんなわけないよね…」

「私はカンザキさんに告白してませんよ？」

「で、ですよねー」

話聞いた感じないと思ってたけどさ、一応ね、念の為の確認だ。

「てことは2人は完全に白か」

「なるほど、そういう意味の白だったんですね」

「そうゆうこと」

これでわかったことは？

白鷺さん、日菜さん、つぐみ、奥沢さん、若宮さん、この5人は完全な白か

サークルメンバーに関しては既にいるって可能性があるからまだ判断できないとして、友希那さん、リサさん辺りは…

友希那さんに関してはまだなさそうだな、あの人なら真正面からお前は私の男よと言えそう。

リサさんは謎なんだよな…

その他は…って情報が多すぎて今の段階で整理がつかん、今度まとめよう。

「カンザキさんはアサシンさんを見つけて何をしたいんですか？」

「なについて、そりゃな、告白してくれた人だから付き合うよ」

「そ、それは恋人同士になるということですか!？」

「ま、まあそうなるな、羨ましいだろ？」

「まだ誰かわかってないけどねー」

「そこー口を挟まない！」

「……………」

そう言うと奥沢さんはコーヒーを啜りながらジト目の視線を俺に送ってきた。

「い、イヴちゃんそろそろ仕事戻って〜！」

「はっ！すみませんツグミさん！カンザキさん！いい報告を待ってます！では！」

「うん、ありがとう若宮さん！時間とって悪かった」

「いいえ！面白い話を聞けて楽しかったです！」

若宮さん、今日初めて話したけどいい人そうだ。テレビで見た時とまんま同じ雰囲気だったしキャラ作りとかしてないんだろうな

どこかのドSベース担当とは違うや、なんてこと本人の目の前で言えば今後口を聞いてくれない可能性があるけど

「さて話も済んだし戻りますか、私学校に戻って文化祭の出し物の準備があるから」

「俺も文化祭が…」

「市ヶ谷さんから聞いたよ、神崎さん白雪姫役なんですよ？」ニヤニヤ「残念ながらそうなんだよ、まったく需要ないだろ」

美竹蘭というやつにしか需要はないと思うんだが？

「それはどうかかなーうちのクラスでも結構盛り上がったよ」

「なんでだよ」

「神崎さんうちの学校では有名人見たいだよ？えっと、サッカー部の男子と付き合ってるって」

「付き合ってるねーから!?てか誰だそんな情報流したヤツ！出てこい！女でもぶん殴ってやる!」

俺は真の男女平等主義者 v e r . 改だぞ！顔面にパンチなんかも普通に決めてやるからな!」

「そんな馬鹿言ってるんで早く出るよ」

「馬鹿にしゃがって」

「神崎さんそんなこと言っても手出せないでしょ、どうせ」
「うう」

確かにそんなことがあっても俺は何もできないだろう…。ごめんなさい、初代男女平等主義を唱えた人

「あ、言っとくけど私まだ神崎さんの話信じてませんからね」

「お前まだ信じてないの!?!てか神崎さんはやめてくれ、秘密を打ち明

けたんだ。もつと親密な関係になろうぜ」

「親密な関係って……なに？」

「おいおいそう身構えないでくれ」

全身を守るように身構え少しづつ離れていく奥沢さんに俺はそう声をかけることしかできなかった。

「普通にお互い名前で呼ぼうよ、俺これから美咲って呼ぶから」

「うーわー馴れ馴れしいーまさか私の事アサシンさんだとまだ疑うんですか？」

「ちげーよ！ただ今後も色々相談したいから…相談相手が同級生なら呼び捨ての方が、いいと思っただよー！」

「これから相談されるの…？はあ、なんで私はこんな厄介事に毎回巻き込まれるかなー」

空を見ながらそういう意味美咲に俺は共感するかのよう同じく空を眺めた。

雲ひとつない快晴、まさに夏って感じの空だった。

「ダメだよレイ君、僕以外の女の子と仲良くしてたら妬いてしまうじゃないか」

『ッ!』

2人して空を眺めている時後ろから声をかけられた。

その声は人の声とは程遠い電子音、こんな声を出すやつは俺の知ってる人の中では1人しかない。

「アサシンー！」

「いえーい、レイ君のことが大好きな僕だよー!!」

紙袋を被ったアサシンが花咲の制服を着て俺の目の前に現れた。

「う、嘘…本当だったの…？」

「ほらなーだから言っただろ！ちゃんと人の話は信じた方がいいぞー」

「そんなこと言われたってね！こっちはこころのめちやくちやな話の相手してるんだよ!?!信じれるわけ、わけ…」

ふと思いつ返す美咲、そう、弦巻こころには無茶を言ってもなんでも実現させるあの黒服達がいたことを

「ごめん、そうだよね、うん！人の話は信じよう！」

「この間に何があつたんだよ!？」

「さつきと意見が全然違うんだが!？」

「おーい、僕を外してイチヤイチャしないでよー」

「いや! 違うぞアサシン! この人は俺の相談者で!」

「え!?! は、はい本日付けでレイの相談を受けることになりました?」

「へえーそうなんだ」

電子音のため声音の変化を捉えることは大変だと思いが、何故か俺は瞬時にアサシンの声のトーンが下がったと感じた。

「君はレイ君のこと好きなの?」

「いやいや、少し前に会った人そうそう好きになりませんから」

「……本当?」

「本当ですよ」

「それはどうかな、レイ君可愛いし、かつこいし、ホイホイ落ちる女はいると思うんだよなー」

「あ、あの? アサシンさん?」

アサシンはゆっくりと美咲の方に向かって歩いていく

「アサシン? お前美咲に何を……!」

「レイ君は僕のなんだよ、それを横取りすしよななんて……!」

「……ッ!」

アサシンは美咲の前に着いたとき両手を上げ美咲の頬に手を置きゆっくりと言葉を発した。

「僕のレイ君を横取りするような素振り見せたら……ただじゃおかないからね」

「ひっ!……ってあれ?」

「ッ!」

アサシンは咄嗟に美咲から距離を置く、紙袋の位置を確認するかのようにつれる。そして今より深く被せた。

「とにかくレイ君は僕と付き合うんだ! これは決定事項なの! 奥沢君は決して邪魔しないように!」

「はっ」

「じゃあ僕はそろそろ帰るよ」

「はあ!? 久しぶりに会えたのにもう帰るのか!? 少し話そうぜ」

「レイ君ごめん、これは僕の不覚だ……くっ!」

アサシンは美咲の方を見た後少し言葉を漏らしすぐに俺の視界から消えた。

追いかけてようと思いつつ後を追って角を曲がるとそこには人っ子一人もない歩道だった…。

「あ、あいついつもどこ行ってるんだ?」

アサシンを見失った俺は美咲に所に戻る。

「……アサシンは?」

「消えた、あいつ一体なんなんだよ」

「……そっか」

「あ、えつとあんまり気にしないでくれ、アサシンは嫉妬深い人なんだよ」

「……へー」

「きつと俺と美咲が仲良かったから妬いたんだろうな」

「……そうかもね」

「そろそろ帰るね、さつきも言ったけど文化祭の準備あるし、私こっちはだから」

「わかった、その、アサシンの代わりに俺が謝る。本当ごめん」

「……」 ヒラヒラ

背を向けながら手を挙げヒラヒラと振りながら去っていく美咲、許してくれたと捉えていいのだろうか。

「さて俺も学校戻るか」

今日は劇の練習ないからサークル活動か、戻って見たらみんな絵が完成してたり…

って! よくよく考えればアサシンがこの時間に現れたってことは!

もしサークル内に既にいるとしたら…! これは調査すれば特定できるのでは!?

だって明らかに1人活動中に姿消したりしてたらメンバーの誰かは気づくだろう? それを聞けば!

「(これは今日中にアサシンに見つけられるのでは!?)」

アサシンを今日で見つけることができるかもしれないと高揚する気持ちを抑えながらレイはコンビニに入りお昼ご飯を購入するのであった。



「はあ、はあ、はあ……はあっ!」

お昼下がり、花咲の制服を着た女子生徒が1人息を上げながら走っていた。

「バレた、バレた、バレた……!絶対バレた……!」

あの時の奥沢君の目、自分の目と合った。それに言葉も少し漏らしていた。

自分とすることがこんなヘマをしてしまうとは、これまでの計画が全て狂ってしまう。

奥沢君はレイ本人にこのことを話すのだろうか、それとも話さないのだろうか。

「助けて……千聖君……!」

縫るかのように携帯を取り出し電話をかけるアサシンなのであった。

「……まさかあの人はね」

美咲は花咲の通学路を歩きながらボソツとそうつぶやく

「ふふ、頑張ってくださいねー」

なんて他人事のようにいい美咲はその後つぶやくこともなく花咲に向かう通学路を歩いていたのであった。

寝ている女子が目の前にいたら何をしますか？

バイト先のコンビニでお昼ご飯を買おうとした。

「なんだレイじゃねーか」

「店長！お疲れ様です」

「もうお昼時間は終わってる時間じゃないのか？」

お高い腕時計をチラつかせながら店長はそう問うてきた。

「今日はクラスの出し物練習ないからいいんですよ」

「へーそうかい、ちなみに俺は文化祭行けんの？」

「招待されてるなら行けますよ」

「なら行けるな」

「誰かから招待受けてるんですか？」

花咲が女子校つてのもあつて結構セキュリティが頑丈なんだよな、家族とかは家族専用の招待券がある。そして友人用に1人5枚配られる。1枚で確か複数人参加可能で、あと招待した人の名前を生徒会に教えるんだ。

これでリストにない人がやってきたら問答無用で帰らせるって魂胆だ。

生徒が伝え忘れていたとかなら可哀想だよな

ん？待てよ、まだ招待券つて発行されてないよな？

「お前が俺を招待するんだろ？」

「……はいはい、招待しときますよ」

生徒会にはわざと名前伝えないようにしないと、あはは（嘘）
「あ、」

おにぎりが目に入った。凜のやつ買ってきたら喜ぶだろうな、よし買っていこう。

しまいにはお礼でおっぱい揉ませてくれるかも、ぐへへ…：いかんいかん下心丸出しじゃないか、俺は変態じゃない。

「ありがとうございましたー」

店長にお礼の言葉を聞きながら俺はコンビニから学校に続く通学路を歩くのであった。



暑い中汗を垂らしながら羽丘に向かい、涼しい視聴覚室であるエデンを求めて階段をのぼり重い視聴覚室のドアを開ける。

「戻ったぞお前、らー」

「……………」スー

そこには床にタオルをひき、その上に仰向けになり可愛い寝息を立てながら寝ている凧の姿、しかなかった。

「他のみんなは？」

携帯は取り出し連絡をしようとした。携帯の電源ボタンを押してもなんとも言わない。

なんだこれ、電源ついてないのか？

電源ボタンを長く押し続けリングのマークが出るのを今か今かと待ちわびる。

しかし出てきたマークはリングとはかけ離れたバッテリーを示すかのようなタンクと充電ケーブルを指せと言わんばかりの指示が表示されていた。

そう言えば昨日動画見ながら寝落ちしたな…でも充電してたはず。上手くケーブルがささってなかったのか？

てか今そんな事象発生するか？勘弁してくれよー誰とも連絡取れないじゃないか!?

これは後日談だが家に帰るとコンセントにケーブルがささってなくレイはささってないケーブルをさしていたのであった。

「……………」スー

凧のやつはすやすや寝てやがる。無理やり起こすのもあれだし：凧が残ってるってことはそう遠くに行ってないだろう。すぐ戻ってくるはず、なんだけどな

「とりあえず昼飯食おう」

買ってきた昼ご飯を視聴覚室…で食べるのはよくないと思い涼んだ後教室に戻り一人ぼっち飯を決め込んだ。

凧1人にさせておくと危ない思ったから急いで食べ、視聴覚室へ戻る。

「……………」スー

よかった。万が一視聴覚室に変なやつが来たりしたら凜は真っ先に襲われるはずだ。

理由はもちろんあんな無防備な格好で寝てたら男子は興奮するだろうが。

「……………」スー

にしても本当に深い眠りに入ってんな、これ何してもバレないんじゃないかね？

「はっ！な、何してもバレ、ない」

俺の視線は一箇所に向かう。

そう、凜の胸だ。すーと息をする度に何度も動くその胸を俺は追うように眺めていた。

「いやダメだろ俺、凜がお礼で揉ませてくれるってなれば触ってもいいけどさ」

第一バレたら何されるか…ってバレないと思ったから触ろうと思ったのか

なら触ってもいいんじゃないか？

「いやだからそれは人としてだな」

幼馴染をエロい目で見てはいけないとなれば俺は一体誰をエロい目で見ればいいのだろうか。

「んー隣子さんと凜だろ」

その凜が今無防備な格好で寝てる。触るしかない。

「えーいや、えーどうなんだろう」

1人で数十分近く迷走した挙句

「よし、触ろう」

この主人公捕まってくれないだろうか…。

一体何を長考してたのだろうか。ここで長考するのなら触らないと決めるのが鉄則のルールだと思うのだが。

「……………」

俺はゆーくりと凜の寝ている隣に座り正座をする。

改めてこんなに近くで見ると凜ってすごく顔が整ってるよな、

そりや男子のみんな惚れるよこんな顔

でも本人はネガティブ思考、自分のことを微生物以下と思いついでいる……てかなんでそんなふうに自分を低くとらえてるんだろうか。

何かあったのかな？

「今はそれより……」

誘惑に負けた俺は変態のような行動をとった。

両手を凜の胸をふわっと握るように手を広げ伸ばす。

心臓の鼓動は早くなり俺の耳にはドクンドクンと大きな心音しか聞こえない。

あと数cm、数cm伸ばせばまだじっくり触ったことない凜の胸が、おっぱいが！

えーいままよ！すつと手を下ろそうとした時

「……………なさい」

「ッ!」

凜が何か言葉を発した。俺は急いで凜から距離を取り様子を伺った。

「はっ!」

今となれば俺はとんでもない変態行動をしてたぞ、おいこら俺!?!何やってんだよ!?

と自分に説教している間にまた凜がぽつりと言葉を発した。

「ごめんなさい……………おかあさん……」

「??」

凜は寝返りを打ち俺の避難した方に顔と体を向けた。またごめんなさいと発したあとと瞳からは一雫の涙がすつと流れ落ちた。

「凜?」

「もう、目立たない、から」

「だ、大丈夫かこれ」

明らかに様子がおかしいぞ、他人の寝言なんて聞いたことないからわからないけどさ、これって寝言だと捉えていいのか？

「……………お願い、助けて……………助けてよ、れい」

「ッ!凜!」

凜が俺を呼んだような気がしたから急いで近づくと同時に視聴覚室のドアがバン！と大きな音を立て開いた。

「あっ」

「神崎君いるかしら…ってあらあら随分と盛んなこと」

メンバーが帰ってきたかと思えばメンバーではなく、白鷺千聖さんが視聴覚室に赴いた。

「！ち、違います！凜が俺のこと呼んだから!？」

「寝ている人が呼ぶわけではないでしょ」

「いえ、確かに俺の名前を…」

でも白鷺さんの言うことが正しい気がする。寝ている人が一人の名前を呼ぶなんて寝言で言うだろうか。

「彼女に気があるから…呼ばれたらと思ひ幻聴が聞こえたんじゃないのかしら？」

「なんてことを言うんだ…てか凜に好意なんていだいてもせんから」

「そうよね、あなたにはもっと大切な人がいるものね」

「……なんなんですか、何かあったんですか？」

白鷺さんが俺に話しかけるなんてアサシン関連で何かあったに違いない。

そもそもこの人はアサシンのこと以外で俺に積極的に話しかけることと言えば…彼氏の自慢とかか

「あなたお昼にアサシンと会ったわよね」

「ええ、会いましたね」

「……その後美咲ちゃんと何を話したの？」

「？特に何も、アサシンの代わりに俺が謝っただけですよ」

「はあああああああ、よかった…」

「??？」

白鷺さんは聞いたことないような大きなため息をこぼししきまいはよかった、なんて言葉を発した。

「なんなんですか？」

「いえ特に何もないので、その確認だけよ」

「いや怪しすぎませんか？何か隠してるでしょ絶対」

「うるさいわね、羽丘の先生にあなたがそこに眠って生徒を襲おうとしたと報告するわよ」

「シンプルな脅しですね!？」

さっきのに関しては何に誤解なんだけどー現に1回本当に触ろうとしてたから完全否定ができない。

「私がいなくなったあとでも襲うんじゃないわよ、悪いことをしたら正義の味方が成敗しに来るのだから」

「……用事が済んだのなら早く帰ってください!」

「はいはい拗ねないの」

「ツ!拗ねてませんから!」

「じゃあ本当に帰るわ、さよなら」

「まったく本当に何しにやってきたんだとあの人……」

「……………」

レイは凜の胸をじーと眺めた後

「……………ツ!」

ちよんと人差し指の先つちよだけで凜の胸に触れるのであった。

「美咲ちゃんは神崎君に話してなかったわ」

と千聖はアサシンにメッセージを送ったあと

「これでアサシンも一安心するでしょうね……さてと後で美咲ちゃんにも連絡しないと」

なんて呟きながら演劇部の部室に戻る千聖なのであった。

◆◆◆

レイが視聴覚室に戻ってくる1時間以上前の出来事

「柘優のお見舞いに行こうと思うの」

「よつちゃんのところ?一人で行くの?」

「それなら皆で行く?レイ君用事で当分帰ってこないんでしょ?」

「うん、まあいつ帰ってくるまでは聞いてないけど」

蘭が柘優のお見舞いに行くといい出しメンバーが各々反応をした。

「あたしも行こうかな、あいつ1人に負担かけさせたしな」

「有咲ーもしかして夜桜君にほの字!？」

「それはぜってえない」

「そうだよ、有咲の好きな人は別の人」

「えっ!?有咲好きな人いるの!？」

「やっぱり香澄知らなかったんだー」

「……無知すぎ、このサークルで生きていけない」

「ひまりちゃん!凜ちゃん!有咲の好きな人って誰なの!?私気になる!」

「勝手に話進めんな!てか好きな人なんていいいいねーから!？」

動揺が隠しきれない有咲であったがこの中で1番の年上である彼女がフオローに入る。

「本人がそう言ってるんですから憶測はやめましょう、ね?ひまりさん凜ちゃんさん」

「ふふふーそうだねーやめよっかー」

「そうだね、有咲おにぎり1個で手を打つよ」

「なんであたしが要求されるだよ!？」

「じゃあ凜ちゃん!おにぎりあげるから有咲の好きかもしれない人教えてー!」

「……具によつては考える」

「んーツナマヨ!」

「ぶつぶつーダメ」

「ええええええ!!」

香澄は凜にしがみつき大きな声で驚きの声を発していた。

「はあ、それで香澄と隣子さんと凜はどうするの?」

「私も行きます、夜桜さんはモカたんのこと守ってくれたので…またお礼を」

「私も行くよ!有咲と夜桜君の話すところ見て本当に違うのか確かめたい!」

「だからぜってえ違うっての!」

「本当に?」

「本当の本当だつての!？」

「というも香澄は信じようとせずついて行くと答えた。

「凜は？」

「私はいいわ、こないだ一緒に行ったでしょ」

「そう、柊優のやつ凜が来て喜んでただけどね」

「なわけないでしょ、私昨日夜更かししてたから眠いのよ、皆が帰ってくるまでここで寝とくわ」

凜は欠伸をしながらそう答えバックからタオルを取りだし床に引き始めた。寝る準備は万全のようだ。

「夜更かして何してたんだろうね」

「凜ちゃんて爪綺麗だよねくもしかして？」

「きゃーモカさんそれはもうあれじゃないですかー！」

「あんだ達が何を言ってるのかさっぱりわからないけど馬鹿にしているのだけはわかるわ、とっととお見舞いに行きなさいよー！」

「燐子さん、モカちゃん達は何を言ってるんですか？」

「さ、さあなんでしょうか…なんだと思いますか市ヶ谷さん!？」

「え!?!いや、あたしもわからないなー」

「なんてー？」

彼女達の言うあれは果たしてなんなのか、紳士の皆さんはもうわかりだろう。わからない?感じてください(??)

「凜ちゃんさん1人になるけど大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよりんこ、1人の方がぐっすり眠れるし」

「でもそのうちレイ君戻ってくるよ？」

「そうそうーれーくんおっぱい好きだから寝てる凜ちゃんのおっぱい揉むかも」モミモミ

「揉みながら言うんじゃないわよ!？」

急いでモカから距離を取り燐子の背中に隠れる凜、どうやら燐子の背中に隠れると手を出してこないことを覚えたようだ。

「それは大丈夫だよひまり」

「え?なんでー?」

「……またかよ」

有咲は嫌そうな顔をしながら蘭が何を言うのか何となく察し視線

をわざとずらした。

「レイはヘナチヨコ腰抜けチキン野郎だから凧の胸には触らないよ」

「例え触ったとしても指先で触れるぐらい」

「……まあそれぐらいなら別にいいけど」

「おーいいんですか？」

「もかには言っていない！」

「ではレイ君ならいいんですか？でもそうなりますよね？」

「そ、それは、だからそのぐらいなら気にしないでやって意味よ」

「大丈夫、もし触ったりしたらあたしに報告してくれ、あたしの胸で窒息死させてやる」

「殺しちやダメだよ有咲」

「今のは言葉のあれだ」

「なんやかんやで柘優のお見舞いに行くメンツも決まり出発しようとしたその時ひまりが声を上げた。

「あー！私ショッピングモールに行きたいお店があったんだった、帰りに寄ってもいい？近いからいいでしょー？」

「近いて言えば近いけど…凧？ショッピングモールに帰り寄るみたいだけど…それでも来ないの？」

「行かないわよ、もかとひまりに変な下着選ばれるのが目に見えるもの」

「紐パンとフロントホックブラ着けてる人に言われたくないな」

「だからそれは凧が選んでるのよ!?!とにかく行かないったら行かない！私は寝るの！おやすみ！」

そのまま床にゴロンとなり寝る体勢に入る凧、そんな凧を全員は囲い見下ろしながら言葉を発し続けた。

「帰り遅くなるかもしれないですけど…いいんですか？」

「いいんですよ、息抜きも大事です隣子さん」

「凧お土産におにぎり買ってきてやるよ」

「私凧ちゃんの好きな具当ててくるから！」

「遅くなってもいいわよ、その分眠れるし」

うとうとしながらそう凧は答え、メンバーはこれは早く出ていった

方がいいなと瞬時に察し静かに視聴覚室を出て病院に向かうのであった。

◆◆◆
「……………」

夜桜柊優は病室で1人先日蘭の両親からいただいたお見舞い品のりんごをかじりながら外の景色を眺めていた。

頭に巻かれていた包帯は解かれいつもの髪型へと戻り、女子はハートを撃ち抜かれるであろう容姿へと戻っていた。

「……………」 トントン

「はーい、どうぞー」

柊優がそう返事をするとき軽そうなドアは音を立てながら開かれる。

「来たよ、柊優」

「げっ、蘭かよ…」

「あんた人の顔見るなりげっ、って言うのやめな？」

「安心しろ、お前以外にそんな態度は取らない」

「……………あつそ」

蘭はそう答え中に入る。すると着いてきていた他のメンバーが続々と柊優の入院室へと入室する。

「他の人達も来てくれたのか…」

「ええ、夜桜さんはモ力たんのために体を張ってくださいだったので…」

「何はともあれ来ていただけなのは嬉しいです。ありがとうございます」ニコ

お礼の言葉を発したあと柊優はニコリと微笑む

「……………」

しかしサークルメンバーはその落ちるであろう柊優の微笑みに対して特に何も影響を受けることなくそのまま受け流し話し出す。

「入院生活辛くない？」

「そうだねー、今はある程度歩けるから下のコンビニで買い物もできるし…逆に今は家にいるより自由かもしれない」

「家ではどんな生活してるの〜?」

「……………個人情報君に話す必要はないだろ、青葉さん」

柊優と蘭が同棲していることを知ってるのは燐子だけだ。

家にいる際はほぼ蘭のわがままに付き合わされる日々のため、正直に言えばこの入院生活中の方が気が楽なのだ。

「夜桜、色々買ってきたぞーお腹すいた時に食べてくれ」

「ありがとう市ヶ谷さん、いただきますよ」

「ニヤニヤ」

「ッ！こ、これは別にお前のためってわけじゃないからな！ただのお礼だからなー！」

「わかってるって、ありがとう」

香澄がニヤニヤしながら有咲を眺め、その視線に気づいた有咲がテンプレのようなツンデレセリフを発していた。

「それにしても夜桜君凄かったらしいね！私も近くで捕まえるところ見たかったよー！」

「……あはは」

と笑って柊優は誤魔化す。無理もない、何故ならその時の記憶なんて覚えてないのだから

「そうだ蘭、お前が俺に用もなくお見舞いに来ることなんて初日以外ないだろ？何が目的だ？」

「あたしがあんたの様子気になって見に来たって考えはないわけ？」

「……ないな」

「最低だね」

「俺は最低じゃない。日頃の行いのせいだ」

「蘭とよっちゃんは同じサークルなんだっけ？」

本当は同棲している間柄なのだが、モカや凜、そしてひまりには蘭と柊優が同じサークルに所属していると説明している。

間違いではないが、本来は同居しながら柊優に関しては一物を問答無用で見られる関係…であるがそんなことを人に教えることなんてできるはずがない。

「ああ、残念ながらね」

「はいこれ」

「？なんだこれ」

蘭は柊優の返事に気もとめず紙袋を柊優に渡した。

柊優は恐る恐る中身を見てみると蘭が愛用しているiPadと専用のペンが同封されていた。

「まさかお前…入院中のこの俺に作業を手伝えというのか」

「当たり前じゃん、メンバーなんだから、ベタ塗りだけでいいからね、グラデーションとかはあたしであとから付ける」

「人使い荒いぞ、お前…」

俺の入院生活が…と考えながら電源を入れ元の絵を確認する。

悔しいがかなり上手なその絵を見てはあ、と溜息をつき蘭の方を向き言葉を発した。

「こんな絵を白昼堂々と病室で塗れるわけないだろ」

「塗り絵塗り絵、そんなの気にしな〜い♪」

「う、うぜえ」

「夜桜さん絵を拝見しても!」

柊優の有無を問わず燐子は柊優からiPadを取り上げ蘭の絵をこれでもかと間近で絵を拝見していた。

「ふう、ありがとうございます」

「ど、どういたしまして…」

柊優からしては自分のまんまの物が燐子に見られる恥ずかしい気持ちで胸がいつぱいだった。

いつもの冷静沈着な柊優は何処にいるのやら

「蘭ちゃんのサークルって何やってんだ?同人誌か?」

「…:…気になるなら自分で調べた方がいい、俺は進めないけど」

「なんだそれ、めっちゃ気になるんだけど!」

「はーい、用も済んだし帰ろうねー」

蘭が手を叩きお開きの合図をしながら有咲の背中を押し病室から出ていこうとした。

「じゃあ夜桜君、文化祭実行委員の仕事はこの私に任せて大丈夫だからねー」

「うん、任せた」

「それじゃあ帰るわー元気だな、夜桜」

「じゃあねー夜桜君」

「では今度は学校でお会いしましょう、夜桜君」

各々柗優にお別れの挨拶をしながら柗優の病室から出ていく。

「……………」

そんな中、何も言わずに出ていく女性が1人

「柗優、進捗状況は随時連絡するように、本当ギリギリなんだから…頼んだよ」

「わかったから、連絡するから」

鬱陶しそうに返事をする柗優、それを聞き止め蘭はふふと笑いながら病室を出ていくのであった。

「さて！夜桜君のお見舞いも終わったことだしショッピングモールへレッツゴー!!」

「ひまりちゃんもうそれが目的だったんじゃないのか？」

「そうだ！有咲と一緒にいきたいお店あったんだ！一緒に行こうね！」

「あ、あたしと？ま、まあ？一緒に行くの全然、いいぜ」

「私お腹すいたなーショッピングモール着いたら何か食べようかな」

「あ、私も空いています。戸山さん良かったら一緒に食べませんか？」

「はい！一緒に食べましょう燐子さん！」

ひまり、有咲、香澄と燐子、4人はショッピングモールでやることを決めいざ行かんショッピングモールと意気込んでいる中、1人声を出した。

「ごめーん、モカちゃん用事思い出しちゃったー」

「用事、って？」

「本当すぐ終わる用事だからー後で合流するから先行っててー」

モカはそれだけ言うたとにした病院へと戻っていく、用事とは言ったものの向かう方向からしてあ、病院に行くんだと全員が瞬時に判断した。

しかしここで全員疑問を抱く。何故病院？体調でも悪いのだろうかと各々思う。

「わかった、終わったたら連絡してね、迎えいくから」

「ありがとう蘭ーそれじゃあー」

何処に行くかも言っていないモカに対して蘭は迎えに行くと言返事をした。

モカ本人も全員が病院へと向かうことはわかってくれてるんだろうと理解していたのだろうか。

それともただ単に伝え漏れていたのか。

モカを除くメンバーはショッピングモールへ、モカはみんなとは別に病院へ向かうのであった。

◆◆◆

夜桜柊優は全員が病室を退室後1人安がな時間を過ごしていた。

蘭の相手をするのは苦行だが、変態である青葉モカの相手もすることになるとその苦行は倍増する。

あの二人を相手にするレイは人間ではない。そう思いながら柊優は外の景色を眺めていた。

「それで？本命は誰なんですか？」

なんて看護師さんにはお見舞い後毎回聞かれる。

ただの友人だと伝えてもまたまたーと軽く流される。どうやらこの歳の人達は学生の色恋の話に興味津々のようだ。

かと言って勝手に勝手にお見舞いに来る人に行方を寄せている人物がいると決められるのは不快な気分になる。

「はあ、彼女作ろうか」

いつその事彼女を作ればこんなこと言われる必要はない。そう考える柊優だが、看護師さんとの関係なんて入院している間だけなのに気にする男。

なら彼女を作らなくても良いでは無いか。と思うだろう、柊優的には蘭から遠ざけるためにもって意味を込めて呟いたんだろうと考察する。

「……………」

看護師さんがいなくなったことを確認後柊優は蘭から渡されたiPadを手に取り作業に取り掛かる。

こんな絵を誰かに見られる訳には行かない。昼のこの時間に終わらせて夜は適当に過ごそう。

そう思いながら作業を続けること数分

「……………」

誰かがドアをノックした…のような気がした。

先程お見舞いに来たばかりだと言うのにまた誰かやってきたようだ。

レイか？先程いなかったし何か用事があつて遅れたとかだろうか。

そう思い柊優は入ってどうぞと返事をした。

「お邪魔しまーす」

「……………青葉さんか」

「いえーい、超絶美少女のモカちゃんだよ」

「……………」

柊優はモカの言葉を無視して静かにiPadの電源を消し布団に隠した。

「作業してたく？邪魔してごめんね」

「邪魔した自覚があるなら来ないで欲しいんだけど？」

「まあそう言わないでよ」

「…………もう君と話すことなんてないよ、帰ってくれないか」

柊優は横になり背をモカに向けそう発した。

柊優自信はモカがお見舞いに来た初日に話すことを全て話したと思っているためそう冷たく対応をする。

柊優自身変態のモカとはこれ以上関わりたくないと思っ
ているため、こう冷たく対応をしている。

怪我をする前からも同じ対応のため、柊優が決して怪我したせいで
全てモカに押し付けている訳では無いと察していただきたい。

「よっちゃんがなくてもモカちゃんにはあるんだよ」

「……………」

普段のおっとりとした声音ではない。彼女のこんな声を聞くのは
初めてだと思ひ柊優は起き上がり向き直した。

瞬時に真面目な話だと察したこの行動、さすが完璧超人だ。

「よっちゃんに聞きたいことがあるんだ」

「…………なに？」

「あの時、どうして頭を撫でてくれたの？」

「……………」

あの時、というのは先週の金曜日の話である。

柊優が露出魔に吹き飛ばされ意識を失っている時、モカ以外のメンバーは露出魔を追いかけたが、モカは柊優の面倒を見るといいその場に残った。

その後柊優は意識を取り戻しレイ達の所へ向かい無事に露出魔を捕まえる…。

こうしてあの事件は解決した、が。
その前にモカと柊優でちよつとしたやり取りがあったのだ。

「……………」

民家の塀に後頭部をぶつけ気絶した柊優をモカはただただ申し訳なさそうに様子を伺っていた。

自分のせいでこんな目に、柊優だけじゃない。次はレイや蘭も同じように迷惑をかけてしまうかもしれない…。

そういつた考え、迷い、様々な感情がモカの中でぐちゃぐちゃになっている時、柊優がふとモカの頭に手を伸ばした。

「…………大丈夫、絶対捕まえるから」
「ッ！」

そう言いながら柊優はモカの頭を撫で起き上がり、レイ達の元へ向かうよう走り出した。

「なんで撫でてたの？」
「……………」

あの時何故自分が撫でられたのか。
気になって仕方がない。柊優は自分のことを嫌っている。なのに何故？

特に深い意味は無いかもしれない。でも…知りたい。そうは思ったものの簡単に聞き出すことが出来なかった。

それは相手にされないが半分、もう半分は無意識のうちにしていると返答される。

この考えが邪魔をして柊優本人に聞こうとするのに時間がかかっ

てしまった。

では何故今になって聞こうと思ったか。

正直に言おう。モカ自身もわからない。でも今日なら聞けるのではないか、何故かそう思い立ちモカはいてもたってもいれずみんなと別れ1人こうして柊優に聞いたただしているのだ。

「……そんなこと覚えてたんだ」

「覚えてるよ」

「……俺は君が嫌いだ」

「知ってる。だから聞いているの」

「はは、知られてたかー」

「そんなのいいから教えて欲しいなー」

お互い顔を見ないまま会話が続く。それは柊優がモカを嫌っているからか、それともお互いを嫌いあっているからか。

それは2人でないと合わせない理由というのはわからないことなのだ。

「こんなこと言うのは変かもしれないけどさ」

「？」

「あの時、君が誰かを求めている気がしたんだ」

「ッ！」

「多分俺じゃない。いや絶対俺じゃない誰かを求めてたんだろっな」

「なに、それ……意味わからないよ」

「本当だよ、でもなんでわからないけどそう見えた。その場にいるのは俺だけだったからせめてでも、と思って撫でたんだ」

「……………」

「迷惑だったか？まっそうだよな、俺なんか撫でたところで変わることもなくてないもん、な」

モカ本人は意図してそのような顔をした訳では無い。

モカ自身あの時は様々な感情が頭の中でぐちゃぐちゃになり、意図しない時にそう顔に出してしまったのだ。

果たしてそれは誰を求めたのか、それとも本人はそんなこと思ってもいなかったのか……。

「迷惑ではなかったよ、よっちゃんのおかげであの時は助かった…その後は自分で考えて、昨日れーくんに全部話した」

「そうなんだ、じゃあ今後はそういったことしないってこと？」

「どうだろうね、あたし変態だから…迷惑かけるとわかっててもまたしちゃうかも」

「…反省の色なしかよ」

「でもそんなことしたられーくん捕まっちゃうからね、あたし達共犯者だから」

「はあ、そうですか」

柘優はモカが何を言ってるのか理解しないまま適当にそう返事をした。

「青葉さんが変態じゃなければなー、君とは良い友人になれたかもしれない」

「変態でも仲良くなれるでしょ？」

「…青葉さんにはレイがいるだろ、お前のことあんなに真剣になつてくれるのはレイだけだぞ」

「よっちゃんは？」

「俺は…先生に頼まれたからやっただけだ」

「でも頭撫でてくれたんだよね？」

「…うるさい、もう帰ってくれないかな、足が痛くなってきた」

「凶星」

この二人の関係というのはレイやモカの共犯者という関係ではない。

柘優は巻き添いをくらった身、しかし本人が気にしないと云っているが、寧ろモカの心配をしていたぐらいだ。

今後のこの関係に見ものだと第三者目線でそういうしか今は言えない。

「じゃあ帰るねー今度は1人でお見舞い来るねー」

「…来るのは勝手だけどお見舞い品よろしくな」

「手作りの愛情弁当作ってくるねー」

「うざい、早く帰ってくれ」

終優はモカに背中を向けベットに寝っ転がりながら手を振りサヨナラの仕草を送っていた。

モカはそれを見届け笑いながら病室を出ていくのであった。



その頃モカ以外のメンバーと言うとショッピングモールに到着していた。

「着いたことだし！各自自由行動ってことで！」

「燐子さん！早くお昼ご飯食べましょう！」

「行きますから、そんなに焦らなくてくださいー」

「じゃあひまりちゃん行こうぜ」

ショッピングモールに着いた途端各々目的の地へと向かうよう行動し始めた。

ひまりと有咲で行動、香澄、燐子の2人が一緒に行動をするようだ。

「美竹さんはどうします？私達と一緒に行動しますか？」

「……あたしちちよつとモカが気になるので戻ります」

「そうですか……では私達はショッピングモール内にいますので、着いたら連絡お願いしますね」

「わかりました、では」

燐子と香澄にそう伝え蘭は1人で病院へと向かう。

「モカちゃん病院に戻ったんだよね？夜桜君と何か話してるのかな？」

「はっ！ま、まさか……！いえモカさんに限ってそんなことはないと思うんですが……」

「どうしたんですか燐子さん！何かわかったんですか!？」

「もしかしたらの話ですよ、もしかしたら……」

なんてことを香澄と燐子は話しながら人の多いショッピングモールのフードコートへと向かうのであった。

「なあひまりちゃん、行きたい店ってどこなんだ？」

「着いてくればわかるってー」

「それはそうだけど先に知っておきたいというかさ」

「着いたよー!」

「?ここって!下着屋さんじゃねーか!」

「レイ君を落とすための下着、買わないとね♪」

「へっ!?!」

ひまりの言うことが理解できない有咲ではない。

しかしだ、何故ひまりがそんなことを有咲に言うのか、それが理解できなかった。

「レイ君ガード硬いからね、エッチな下着見せればイチコロだよ」

「ま、ま待ってくれ、それはあれか…?ひまりちゃんはあたしの味方をしてるってことか?」

「?何言ってるの?勝負じゃないの?」

「…:は?勝負…?」

ということはひまりもレイのことが…と考え出す。

思えばひまりがレイに対してくつつきすぎてる所を何度か見た事がある。

ひまりがレイに好意を向けていることはもう目に見えてわかる。

これはまずい。レイは大の巨乳好きだ。有咲の胸は大きいがひまりも負けじと大きい、となれば柔らかさや張り等の戦い。

それと…:下着の卑猥さでも優劣が決まるのだろうか!?

「よし、ひまりちゃんどっちがれっくんを興奮させる下着を選べるか勝負だ!」

「望むところだよ有咲!」

と意気揚々に返答するひまり、しかしこの時思ってもいなかった。

有咲はひまりがレイのことを好んでいと大きな勘違いをしていたことを…:

ひまりはただレイの匂いが大好き、っただけでレイとエッチなことをしようと思っただけだ。

そこには愛も何もない、世の中の誰しもがやってる愛のないセツクスっと言うやつだ。

結局有咲は勘違いしたまま、その後はお互い同じ店の中で別々に行動し各々選んだ下着を購入するのであった。



「んーやっぱりお昼なので混んでますねー」

「そうですね、見てみると羽丘や花咲の生徒さんもちらほらと」

有咲とひまりがえちえちな下着を選んでいる中、香澄と燐子はショッピングモールのフードコートへ来ていた。

目的地に着いたものの、周りには人が沢山いた。

燐子の言う通り短縮授業のため、午前中に学校が終わった羽丘、そして花咲の生徒が数人、また午前の業務を終えたサラリーマン、OLが休憩しようとするこの地に訪れていた。

そのようなことが相まってこのフードコートにはとごぞの知事も蜜です。と怒り狂うであろう環境ができてしまったわけだ。

「あーあれ夏限定メニューだそうですねー」

「この季節良く限定メニュー出ますよねー」

夏というこの季節、何かとどこの店も限定メニューを出したがる季節

人間は限定メニューなんて言葉を聞くと何故か無性に食べたくなってしまうものだ。

大方脳が勝手に「限定」という言葉に引かれ、食べないと損だと思おうのだろう。

「あつーあつちも限定メニューがつー」

「ふふ、戸山さん！ではお互い別々の店舗に並んで限定メニューを買って、わけながら食べ合うのはどうでしょうか！」

「おー！その手がありますね！流石です燐子さん！じゃあ私はこっちの店にー」

「では私はこちらへー」

「あつー先に席へ戻ったら食べていいので！でも一口分は残しておいてくださいね!？」

「大丈夫ですよ、ちゃんと待ちますから」

ふふふと微笑みながら燐子は答え、香澄もえへへと笑いながらお互

い夏限定メニューを手に入れるべく長蛇の列に並び始めたのであった。

◆◆◆
美竹蘭はイヤホンを耳に挿し、音楽を聴きながら1人病院へと向かっていった。

お高いイヤホンのおかげで外の音を一切気にすることなく音楽に集中することができる。

病院の入口に着き壁に背を預けモカが来るのを待ち続ける。
待ち続けること数分後、モカにはぱーと笑いながら蘭に近づいてきた。

モカは蘭が待っていたことに気づいているようだが…待っている当の本人、美竹蘭はモカが来たことに気づかないまま音楽を聞き続けていた。

「だーれだ」

「！……モカしかいないでしょ」

イヤホンを外し蘭は振り返りモカの顔を確認する。

「せいーかい、流石蘭ですなー」

「知らない人がこんなこととしてきたら恐怖しかないから」

「それもそうだねー、あ、もしかして結構長く待たせちゃった〜？」

「んー？まあ待ったんじやないかな？」

「それはごめんねー、今度凜ちゃん胸揉ませるから許してー」

「なんでモカが所有権持ってたんの？」

あははー、と流しこの会話は終了した。

その後は2人仲良く並び、皆がいるショッピングモールへと向かう。

「いやーすっかり夏だねー、暑いよーよよよー」

「じゃあ…はい、これ」

「ありがとう蘭ー」

蘭はカバンからミネラルウォーターを取り出しモカに渡した。

「結構冷えてる〜？」

「暑かったから病院向かう途中で買った」

「実はモカちゃんのためにだったりしてー」

「実際あげてるしね、半分そうかも」

「モカちゃんはモテモテだねー」

「はいはい、そうゆうのいいから早く行くよ」

蘭はモカのセリフを聞き流し1人早足で歩き始める。遅れをとったモカは追いつくため駆け足で近寄った。

「……柊優と何話してたの？」

「ん〜？こないだのお礼だけどー？」

「お礼にしては長くなかった？」

「そうかなー、普通だと思っただけな〜」

モカは腕を頭の後ろで組み、足を大きくあげながら大袈裟に歩いていた。

その仕草になんの意味があるのか、蘭は気に求めず次の言葉をなげかけた。

「もしかして柊優に惚れた？」

「モカちゃんが？まさかまさかー、そんなことないよー」

「……ふーん、そうなんだ」

蘭は十中八九モカは柊優に惚れたのではないかと考えていた。

理由は明白、あんなピンチな時に助けてくれた主人公みたいなやつをヒロイン^{モカ}が惚れないわけがない。

と思っていた蘭はモカが柊優に惚れていると思った。

ならこっちはどうだろうか。

「じゃあレイに惚れた？」

「ないない、犯したいけどないよ〜」

「……なんで犯したいのかは聞かないでおく」

「えへへ、特に理由はありませんからー」

「聞いてないのに答えてるよこの子」

顔に手を当ててそう呟きながら蘭は歩き続ける。モカはそんな様子が面白いのかあははと笑いながら蘭と同じ速度で歩く

「……あたしの考えすぎか」

「？何か言った？」

「いや、なんでもない、それより早く行こう」

レイと柊優のペアは絶対だ。あの二人を引き裂くものなんて現れるはずがない、いや現れてたまるものか。

という考えがあつた蘭は考えすぎた結果、モカが柊優、もしくはレイに惚れたかと強く思い込んでいた。

というのが正しい蘭の心情だろう。先程あげた乙女チックな思考も含むが…。

蘭はまたも歩くスピードを上げ、モカはそれについて行くように今度は駆け足気味で追いかけたのであつた。

女子に好きになつてと言われたらどうしますか？

場所は視聴覚室、クーラーをガンガンにきかせたその部屋は外の世界とはかけ離れた快適な世界を築き上げていた。

「ここは天国だー」

なんて言いながら神崎零こと神崎レイはクーラーの風が当たる床に寝っ転がっていた。

この場にサークルメンバーは凜しかいない。

それも深い眠りにについている。よって今は視聴覚室を1人で自由に使いたい放題、普段はこんなに充実した視聴覚室ライフを送ることなんてできないが今日は違っていた。

「……………にしても遅いな」

もうお昼の15時過ぎ、そろそろ戻ってきてもいいはずなのだがなかなか凜以外のメンバーは帰ってこない。

「文化祭の準備、色々考えたんだけどなー」

執筆作業を終えている俺は特にやることなんてなかったから文化祭の準備で色々と考えていた。

喫茶店を出す食べ物メニューだったり、メニューだったり…………メニューしか考えてねーや

「凜のやつも起きねーし」

床から立ち上がり凜の近くによる。

すーすーとかわいい寝息が聞こえる。

その時先程凜が呟いた寝言が脳裏にチラつく

「助けてよ、れい…………か」

正直言つて凜は俺のことをそこまで仲のいい友人とは思ってないと自負している。

自分で言うとおしくなるが実際そうだと思う。俺的に凜は1番蘭に懐いてると思う。もしくはありりだな

そんな中で俺の名前を呼ぶとなれば…俺はもしかして凜に好かれているのかもしれない。

つて妄想も程々にしないと、白鷺さんの言う通り幻聴だったんだ

ろう。

凜と仲良くなろうと思った俺の幻聴、そうしよう。

「……………ん、んんー？」

「あ、起きた」

そんなことを考えていたら凜はムクリと起き上がり大きな欠伸をしたあと立ち上がった。

「……………あれ、れいだけ？」

「ああ、他のみんなはどっか行ったまま帰ってきてないよ」

「れい、れいだけ…」

「??？」

「……………れい、だけ……………ッ！あ！あんた！」

「な、なんだ!？」

まさかあの寝言は本当だったとかか!？」

でもごめん凜、俺にはアサシンという名の未来の彼女がいるから君の思いには答え…

「あんた！私が寝てる間に変なことしてないでしょうね!？」

「そっちかーい!?!って！何もしてねーよ!?!」

俺の早とちりじゃねーか！

「ほ、ホントでしょうね！」

凜は体を守るかのように手を絡み出した。今守ってどうするんだよと思いつながら俺は語り出す。

「だ、だいたいなんで俺が凜に変なことをしないとイケないんだよー」

「だってあんたおっぱい星人じゃない、そりや触る…ってそうよね、私みたいなみすばらしい女が寝ても触るなんてことないか」

「え、凜さーん」

「人の寝顔って不細工だよねー、元から不細工な私の寝顔なんてもう言葉にできないほど不細工なんでしょうね…視聴覚室で寝るんじやなかったわ」

「全然不細工じゃねーよー！なんなら胸は触ったわ！あ、やべ」

慰めるついでに口が滑ってしまった。

こ、これはや、やっちゃったか？

「……本当に？本当に触ったの？」

「いえ、これは…その、指先でちよこんと触っただけでして」

「不細工な私の胸を揉むなんて真のおっぱい星人ね」

「揉んでないから!?! つついただけだから!?!」

「蘭の言った通りね…でもそれはそれで気持ち悪いわよ!」

「グサツ!」

心に言葉の槍が刺さり俺は一気に力が抜け両膝を地に付けた。最後は両手もだ。

気持ち悪い、女子から大きな声で気持ち悪いと言われた。畜生、もう言われることなんてないと思ってたのに

「そんなに落ち込まないでよ! 私が悪いみたいじゃない!」

「お前が悪いだろ、いやつついた俺も俺だけどき」

「嘘だから、信じないでよー」

レイと凜がそんなやり取りをしているなかあの重い視聴覚室のドアがいきなり開いた。

「たっだいまー! す、涼しいー!」

香澄が大きな声で素晴らしい颯爽に登場してきた。

香澄を初め他のメンバーも次々と視聴覚室に入室する。すると目の前になんとも言い難い難い光景が

困惑する凜、そして地に膝をつくレイ、どうなればこんな光景が目に入るのだろうか。

と戻ってきたメンバーは長考する。

「レイ君…土下座してまで凜ちゃんの胸を?」

「んでそうなるんだよ!?!」

「うわ、立ち上がった」

「れーくんは二足歩行ができて偉いな」

「なんだよそれは」

こちらら十数年間二足歩行してんだぞ、今更褒められてもなんも意味ないわ、てか二足歩行して褒められる場面なんて初めて立った時かクララが立った時ぐらいだろうが

「れつくん、そんなに困ってるならあたしが何時でも相手してやるぞ

「！今か！今がいいか！」

「なんでありりは真に受けてんだよ!? 違うからな！」

「じゃあなんで土下座してたの？」

「土下座なんてしてねーよ、絶望に慕ってたんだよ」

「何故そのような状況に？」

「こいつが寝てるあたしの胸揉んだからよ」

「だから揉んでないっての!？」

「……触ってないの？」

「……さわ、った」

『……………』

レイ以外のメンバー全員が思う。

どう言った経緯で絶望に慕ってたのかわかり兼ねるがとりあえずレイが悪いことだけはわかると

「そんな寝てる女の子の胸揉むとかーダメだよレイ君く意識のある女の子胸を揉まないと♪」

「お前のは無理やり揉ませてんだろうがつ！」

ひまりが飛びつき俺の手を取り無理矢理自分の胸に俺の手を運ぶ、毎回このムーブをかわすことはできるのだが…。

何故だろう。何故か一瞬体が硬直するような気がしてならない。

「女の子が寝てる間に胸を触るなんてとても感心できません！レイ君は反省してください！」

「そうよそうよ！」

「揉んでないっすよ！てか本当指先でちょこんと触っただけなので！」

「でも触ったことにはかわりないよね？」

「か、香澄に正論を言われただと…！」

「あんた自分で正論だつて認めてんじゃん」

くっ、ここに俺の味方はいないのか!？」

「てかさ！無防備で寝てたらそりゃ！な！」

「社会人なら捕まってるよ」

「会社クビー」

「身元全国ニュースで晒されてー」

「人生の終わりー」

「もう俺に勝ち目は無いな、これ」

全部あつちの言ってることが正しいよ、はい、触った俺が悪かったですよ

でも本当に指先で触っただけなのに…これが社会の厳しさか

「大丈夫だぞ、あたしはそんな醜態をさらけ出したれつくんでも一向に構わないからなー!」

「うう、ありりー」

多分ありりは俺のことを気にかけてこう言ってくれらるんだろう。ありがたい、その一言だけで俺は救われた気がしたよ

「あつ! 凜ちゃんお土産におにぎり買ってきたよー!」

「!ちようだい!」

「凜ちゃんの好きそうな具材選んだんだよねー、えつとね、鮭、いくら、明太子」

「いや呪言師か」

凜がおにぎり好きすぎてそのうちおにぎりの具だけで会話を成立させようとしないだろうか。てか成立するわけないか。

「素晴らしい、かすみ、君は今日から私の友達」

「やったあー! 凜ちゃんと友達になれたー!」

「お前の友達にする基準がよくわからん」

自分の好きな具材のおにぎり買ってくれただけで友達になるのかよ、なんだこいつ

「ツナマヨなんて邪道を買ってきたら絶縁するところだった」

「そもそも友達でもねーだろうが!」

「うるさいおっぱい星人、レイはこれでも首にかけてて」

「?なんだこれ」

蘭に渡された小さなホワイトボードには「私は凜が寝てる間に胸を触りました」と書かれていた。

公開処刑させるつもりか? いやまあ視聴覚室内だから他の誰かに見られることはないけどさ

「本当にかけてるよレイ君」

「俺はどうやらおっぱい星人みたいだからな」

「認めてる〜」

「……燐子さん俺暇だったんで喫茶店のメニュー考えてたんですよ、見てくれませんか?」

モカの言葉を見無視して俺は燐子さんに話しかける。燐子さんは一瞬戸惑うもいつも通り会話をしてくれた。

「でははじめにメニューについて話しましょうか、サークル活動についてはその後で」

「さんせーい!何出すの!パンケーキ!」

「パンは!先生パンは出るのでありますか!」

「おにぎり!鮭!高菜!」

「えーい黙れ馬鹿共!一旦席に座れ!」

あれ、何か大切なことを忘れているような気が……まあいいか、今は文化祭のメニューについて皆に共有を行うべきか

俺は視聴覚室の教卓に向かい、でかいホワイトボードにメニューを書き記した。

「……まっこんな所だろ、所詮文化祭だしな、軽い飯でいいだろ、てか主食系のメシは数人で回せる気がしないならな」

軽食ということで、サンドイッチやホットドッグ、サイドメニューでフライドポテトとかサラダとか

あとは喫茶店と言えよのコーヒーとかの飲み物、そしてパンケーキとかだな

「スイーツに関しては香澄が……」

「えつとゼロ君……」

「どうした?」

「お母さんもうあんまりお菓子作ってなくてー、力になれなそうだった……」

「それは仕方がないな、香澄は悪くないから気にすることはないぞ」

「う、うん!」

そうか、なんか俺の知らないようなスイーツのレシピとか教えてく

れるのかなって期待してたんだが、まあ仕方がないか

「そんな大きな店出すわけじゃないしな、パンケーキをデコレーションすればなんとかなるだろう」

「ホイップクリームたくさんのつけてーシロップとチョコソース沢山かけてー!」

「あとあとイチゴやフルーツも沢山乗せて!」

「SNSでバズりそうなパンケーキだな」

「学生さんとか好んでできてくれそうですね!」

なるほど、燐子さんの言う通りだ。

バズりそうなものは若者が好む、これは…いっちょ盛大なパンケーキを作るか

「あとは調理室の確保…できるかな?」

「そこは生徒会に相談しないとだね」

「わかった、後で俺が氷川さんに相談しとく」

「ついでにつぐにもドリンクのメニューで案ないか聞いてみれば?」

「ドリンクのメニューって普通に業務用のやつかって適当に薄めて提供すればいいんじゃない?」

我ながら名案だと思うのだが? 鬼才だったんだろう。

「羽沢珈琲店のコーヒー豆使用…なんてキャッチフレーズ付けられればいいんじゃない?」

「つまり義嗣さんにコーヒー豆を提供しろと?」

「そうだね」

「誰がドリップすんだよ、あれ結構時間かかるはずだぞ」

よくわからんが豆を砕いてドリップすんだろ? 絶対時間かかるやつやん

「それはほら! つぐにコツとか聞いて短縮…最悪つぐのお父さんに手伝ってもらおう…とか」

「それはこないだ無理そうだったって話しただろ」

「えーでもさ、羽沢珈琲店のコーヒー豆使うんだよ? 羽沢珈琲店メイド喫茶バージョンとかできそうじゃない?」

「……………できそうできなさそうだな」

義嗣さんは自分の店があるのにさー文化祭のために協力できるとは思えないしなー

それに協力となったら申請書とか書くの面倒くさそうだし、いやそれはこっちの問題だけど…。

「わかった、義嗣さんにも相談してみる」

「でだ蘭、メイドの作法？とか教えてくれる人はどうなった？」

「話通したよ、昼なら何時でもいいよだつてさ」

「わかった」

昼に暇な人？学生？なら学校あるし…フリーターとかか？

「待ってくれ、料理するのはれつくん1人だけなのか？」

「いやモカにも入ってもらおう」

「ならあたしも入るぜ、2人だけなら回らないだろ？」

「ありりー！助かる！」

そう言えばあの時ありりと燐子さん抜きで話してたからな、当時は2人のメイド姿を妄想してたけどありりは料理できるしこっちに入ってもらおうか…。

ありりのメイド姿を拝めないのは残念だがこれも仕方がないの言葉で諦めるとしよう。

「あ、あの私は…料理が苦手なので接客に回ります」

「りこさん料理しないの？」

「はい、ウーバーで頼みます」

「か、金持ちだー」

それはそれで燐子さんの食生活が心配だ。今度何か美味しいものでも作って食べさせてあげよう。

「ねえ私は？私はー？」

「ひまり、お前はその胸を使って男子達の鼻の下を伸ばせ」

「つまり私は接客だね！わかった！」

そもそもお前料理できないだろ、そんなお前に残された仕事はヤラシイ体を使って男子の心をつかむことぐらいだろうか！

「私も今回限りは大人しく接客しとくよ、心底嫌だけどね」

「すまん、こっちは3人で足りそうだ」

それに蘭は一時期メイド喫茶でバイトしていた実績もあるしな、ここは是非経験を活かしていただきたい。

「私は？私は裏方よね？」

「え、り、凜は……」

「やばい、凜のこと忘れてた……！」

「えつと凜は料理できるんだっけ？」

「おにぎりなら任せて」

「……すまん、喫茶店だ、おにぎりは出さない」

「……………じゃあ私の仕事は？」

「……………」

凜は確か裏方希望だったよな、いやー裏方4人は多すぎだろ、接客の方が絶対だ数必要だよな

料理できるモカかありりどちらか削るなんてしたら……勿体ないし、かと言って凜に接客は無理そうだし……！」

「わかった凜にも料理を作ってもらおう、んであたしとモカちゃんは交互で接客と料理の対応をしようか」

「おーメイド服着れるしモカちゃん的には一石二鳥だねー」

「でも2人とも大丈夫か？きついと思うが？」

「問題ない、れっくん以外の男に谷間を見せるのは癪だけど……そこは我慢するー！」

「ノーパン、ノーブラでメイド服着たいと思ってたんだよねー」

かー！ありりはなんていい子なんだ！でもモカ、お前はダメだ、ただのきめえ変態じゃねーか。

でも今はそんなこと言ってられない！とりあえず当日は下着を着ることを徹底させるー！

「これで役割は決まりつと、あとは俺が各自へ相談を持ちかける、朗報を期待しとけ、各自解散！」

「いえサークル活動しますよね」

「あ、はい」

流れで解散、とまで言ったが速攻で燐子から訂正をくらい恥ずかしかるレイなのであった。



文化祭のメニューについて一通り決まった後、各自それぞれやりた
いことをしていた。

とは言っても燐子さん、蘭、ありりの作画班は絵を描き、俺はそれ
をぼけーと眺めていた。

他のメンバーは後ろでなんかしてた。何してるんだらうか。

「……ずっと見られると集中切れるんだけど」

「いやいやー、あのR a nさんの作業風景をこんな間近で見れる機会
なんてそうそうないのでー」

「あつそ、てかあんた自分の作業は？」

「俺はもう執筆終えてんだよ、お前達のイラスト待ちだ」

「水着のイラストにはSS付けないんですよね？今のうちにできるこ
とはしてた方がいいのではないでしょうか」

「そ、それはー……」

燐子さんの言う通りだ。早めに作業を終えて調子に乗っていたよ
うだ。

火がついたかのように俺はリュックからPCを取り出し編集作業
に取り掛かる。

「れつくん……燐子先輩に言われなかったらずつとやらなかっただろ」

「……そんなことはない、皆のイラストが完成してからやる予定だつ
たんだよ、ただできる作業を早めに終わらせることに関しては否定し
ない」

「じゃあ早くからやりなよ、ひまりのこと馬鹿馬鹿言うけどあんたも
馬鹿だよ」

「……………」

くっー！言い返せねえ、でも蘭、俺はお前よりテストではいい点
とってるからな、そこんところ忘れるんじゃないぞ……！

俺は怒りを抑えながら皆から貰ったイラストに自分が執筆したS
Sをいい具合に貼り付ける。

おおー、我ながら言いできた。とは言っても後ろのイラストのレベ
ルが高いだけなんだがな

黙々と作業を進めていくうちにふと思い出す。

「(俺は何か大事なことを忘れているような...)」

と、何か大事なことを忘れていることはわかる。でもその大事なことがなんだったのか思い出せないんだ。なんだっけか。

「……………あああああー!」

「うわ!びつくりしたなもう!」

人とは何故忘れていたことを急に思い出すのだろうか。反動で大きな声を出してしまったんじゃないか。

「ごめんありり、いや皆に聞きたいことを思い出してだな」

俺は頬を掻き恥ずかしそうにそっぽを向きながらそう言葉を発した。

「モジモジしないで早く聞きなよ」

「あー、しょうもないことなんだけどな、皆がショッピングモールで何してた少し気になってだな」

「えっと、知ってどうするんですか?」

「え?ほらあれですよ、俺と凜を放ったらかして皆でなんか楽しいことしてたのかなーって」

我ながら咄嗟にしては満点な嘘だ。

俺は皆で楽しそうなことをしていた、ことには少し興味はある、が!実際に知りたい情報はそれではない。

アサシンについてだ。アサシンは羽丘に向かう途中俺と美咲の前に現れた。

ということは皆で行動しているとすれば?1人だけ別行動をとったやつがアサシン…の可能性が非常に高いと見ていいだろう。

さあ、どうだ!

「おい皆、れっくんが各々ショッピングモールで何してたか教えてくれだつてさ」

「なんでそんなこと聞くの?」

「…………理由はさつき燐子さん達に言った、だから気にせず話してくれ」
「変なゼロ君、私と燐子さんはフードコートにいたよ」

「…………それは2人揃って?」

「いえ、お互い別々の店に並んだので…ずっと一緒にいた訳では無いですね」

「ッ！それはどれぐらい別々で行動を!？」

まさか聞いてすぐにそれっぽい返事をいただくとは！深く、深く掘り下げなければ！

「どうでしょうか、10〜20分くらいですかね」

「でもその後隣子先輩買いたい本があるって言って20分ぐらい席外してましたよね？」

「はい、欲しい本があったので、もしかしたらショッピングモール内の本屋に置かれているかと思ったので探しに」

「……その本って結局変えたんですか？」

「それがなかったんですよ！もう大人しくネットで買いました」

隣子さんはそう言いながら俺に携帯の画面を見せてきた。その画面には本を購入したであろう購入履歴を見せてきた。

ちなみに買った本は冴えカノ（冴えている彼女の育て方）のイラスト集だった。

「なるほどなるほど」

隣子さんは一人で数十分近く行動できる時間があつたと、これは怪しいぞ

「ありは？」

「あたしはひまりちゃんと、その…」

「下着屋さんにいたよ！」

「ッ！は、はあ…好きだなお前」

「えー！だって下着だよ!?!男子を落とすためには必要不可欠でしょ!?!」

「そ、そうだぞれつくん！あたしだってすごい買ったんだぞ!?!」

「いらんわそんな情報！」

別にそこまで言えとは言っていないだろ!?!俺は言わせてないからな！ありりが勝手に口を開けただけだ！

「凜ちゃんも来とけば一緒に選んだのにー」

「ひまりと行ったら絶対変なの買わされる」

「モカちゃんとなら喜んでいくんだけどなー」

「そこ、適当なこと言わないで」

モカは普段より声をワントーン高くし凜に声を似せようそう発言していた。しかし速攻で凜にはぐらかされていた。

「で？その後は？何してたんだ？」

「下着屋で各自レイ君を襲うような下着を見繕って：それから」

「おい待て、今の情報はなんなんだ、俺はお前達に襲われるのか!？」

「……………大丈夫大丈夫、今のは嘘だから、口が滑っちゃった♪」

「せめて嘘を貫き通してくれないか」

口が滑っちゃった、は嘘を誤魔化す言葉ではないと思うぞ、それは思っていることを言葉で発した際に言うセリフだろうが。

「ひまりちゃんと一緒に行動したのは下着屋までだぞ」

「そうそう、有咲がいきなり家具みたいなんて言い出したからさ」

「家具？」

「えっーと！自分の部屋に飾る家具を探したいと思ってだな！」

市ヶ谷有咲、この女嘘をついている。本当は将来レイと同棲した際にどのような家具を買おうかと家具屋で妄想をするために行ったにすぎない。

余談だが暇な時は家具屋へ赴き、同様の妄想を1人でやっている。

「有咲結構長くいたよねー、蘭とモカが来る前ぐらいに合流したよね？」

「そ、そうかー？」

「ありりはそんなに家具屋に滞在していたのか？」

家具屋：確かに俺にとつて魅力的な店ではあるが1人でそう長々と居座るような店なのだろうか。

「そう言えば私エスカレーターで上の階に向かっている途中家具屋に入っていく市ヶ谷さんを見ました！」

「うちの制服着てましたし、金髪のツインテールなんてそうそういないと思うので：あれは間違いなく市ヶ谷さんだと思います！」

確かに金髪ツインテールなんて濃ゆいキャラは滅多にいないよな、現に目の前にいるありりぐらい。

ならば燐子さんの言うことは本当のことなのだろう。

となれば？燐子さんが本屋に向かう途中にありりは家具屋に入店したということか

蘭とモカが合流する少し前？と言うのは結構遅いつて捉えていいんだよな、だとしたらありりのやつ長いこと家具屋に居座ったことになるんだが？

これまた怪しいな…。

「そ、それよりもさ！蘭のちゃんとモカちゃんは？2人も遅かったんだろ？何してたんだ!？」

ありりは急に慌ただしくなり蘭とモカに話を振った。疚しいことでもあるのだろうか。

「あたしは燐子さん達と別れたあとすぐ病院に向かったよ」

「病院？」

「うん、ショッピングモールに行く前皆で柊優のお見舞いに行ってたから」

「へーそうなんだ」

「あ…：ごめん、彼女のレイも一緒に行きたかったよね」

「誰も悲しんでないんだが!？」

なんで俺が柊優のお見舞いに行けなかったただけでそうなる。蘭の頭の中では俺と柊優の関係性はあの作品を遥かに超えるものになっているのではないか？

「モカが柊優と話があるって言って病院に残ったから迎えに行ってた」

「えー蘭ー？あたし別に柊優とお話するって言ってないけど？」

「戻ってきた時話してたって言ってたじゃん」

「皆には言っただけじゃーん、もしかしたられーくんとかないだみだらな事をしたもんだから妊娠したのか確かめに行ってたかもしれないよー？」

「うん、まずしてねーから！あととしてたとしてもそんなに早くできないから!？」

偉い短期間でできてるじゃないか！お前付き合いたての彼女に数

週間後に子供ができたと言われる彼氏になってみる、俺だったら泣くぞ！別の意味でな！

「本当はよっちゃんにお礼を言いに行っただけだよ、これがまた別に別の頑固者でねー」

「まああいつの口癖は別に〜ほにやらだからな、気にすんな」

「流石レイ！わかってる〜！」

「そのクソ高い声を出すな」

蘭が上機嫌な様子で高いボイスで俺にそう言ってきた。凜の妹のような声で気が滅入りそうさ。

「じゃあ2人は病院で合流するまではそれぞれ1人で行動してたわけか」

モカに関しては後で柊優に話を聞けば嘘か本当か判断できる。

でも蘭はどうだ。あいつは1人で病院に向かった、外にもいる。自由すぎるな

となると今のところ自由に動けるのは蘭とモカ、この2人であるが…でも他のメンバーの可能性がゼロに等しい訳では無いからな…。

ありりに燐子さん、香澄にひまり、お互い1人で行動している時間はあった。

その間に俺の前に着替えて現れることは…できない訳ではない。

な、なんだこれ、皆綺麗にこんな別行動取るなんてことあるのか!? だとしたらお前もつと仲良くしな!? 一緒に行動しなよ!?

「はっ！忘れてた、ひまり！お前はありりと別れたあと何してたんだ!?!」

ひまりは何となくありりと別れたあと1人で行動してたと思ってたが…話を聞いていなかったな

「私？私は1人でその辺歩いてたけど？」

「その辺を1人で歩いてただと…？証拠は？」

「証拠なんて…自撮りしかないけどいい？」

「自撮りが証明になるのか？」

「だって時間とか出るし？」

「まあいい、見せろ」

時間まではさすがに把握してなかった……！アサシンと何時何分に
あっていたのかなんて覚えてねーよ！

今ひまりの自撮りを見たところでなんの意味もないかもしれない、
でも1人でほつつき歩いてた証拠には……なるだろう。

「はいこれー」

ひまりは自分の携帯を俺に渡してきた。その画面にはひまりの自
撮り写真が映し出されていた、のだが

「……なんでトイレの個室で下着姿の自撮り写真撮ってんだよ」

「レイ君にすぐに見せたかったのよ」

「しかもなんで手で顔隠すんだよ」

裏垢女子かお前は、しかもなんでこいつ少し頬を赤めてるんだ？こ
の変態に恥ずかしいなんて概念はないと思ってたんだが？

「流石に公共の場所で下着姿の写真を撮るのは恥ずかしかったと言
いますか……」

「モジモジすんな気持ち悪いな!?!」

「ひーちゃん、こちら側においておいでー」

「お前もお前で懲りてねーな!?!」

「でも撮った後レイ君の連絡先知らなかったから意味ないなーって
思ったけど！見せれたから結果オーライ!」

「……………」

俺はひまりの言葉を無視して1人で長考し始めた。

これではつきりしたが全員個別で行動していた時間がある。俺と
アサシンが話してたのは本当体感で1、2分程度、やはりシヨツピン
グモールからあそこまで来るのは可能だろう。

「(そもそもまだアサシンがサークル内にいるとは決まってるから
な」

今回はメンバー全員個別での活動時間は確かにあった。でも……メ
ンバー以外の可能性もあるとみてこれからまた考えないとだな

「れいはなんでそこまでして皆の行動履歴を確認したの?」

「……………んじゃ俺はあれであれする予定があるからあれだわ、
じゃあな」

『逃げたな』

レイは苦し紛れの言葉を言い放ちあたかも余裕そうな表情をしながら帰るのではなく1時間近くトイレに籠るのであった。

◆◆

次の日、俺は文化祭に向け早速行動に移した。

氷川さん（羽丘生徒会長）へ開催地の場所を確認に、調理室は既に他の部活クラスが抑えているため使用できないとのこと。

そこで俺は自分が所属している2-Aが展示物ではなく劇をするから、教室を貸してくれないかと案を出した。

すると氷川さんはいいよと一つ返事で認証してくれた。俺は更に隣の空き教室も借りていいかと言うとこれまたすんなり認証してくれた。

少しだけ不安になったもんだから本当に大丈夫なのか？と聞いてみる。すると別にどこも使わないからいいよ、だってさ

やったな放送部、これでガスコンロとか運べば十分に喫茶店を行うことが出来る。

それに教室2つ分だから客が沢山来ても問題ないな！

場所の確保については思ったよりも呆気なく決まりあとは義嗣さんにコーヒー豆の提供を交渉する？のみになった。

ここまですべてが順調に進んでいた…はずだった。

そう、俺は午前中に氷川さんと話をつけ午後一番に羽沢珈琲店に向かおうとした時だ。

「レイ君ごめん！夜桜君の代わりに文化祭の準備手伝ってくれない？」

「……………」

弁当を食べていた途中つぐみが俺にそう頼み込んできた。

「…………いや俺今から義嗣さんに用事が」

「お父さんに？なんで？」

「文化祭の出し物でコーヒー豆を提供していただけないかと交渉を…もちろん金は払う！払える分だけ貰う予定だ！」

そんな沢山貰える予算なんて…ありそうでなさそうなんだよな実

質無限みたいなもんだしな

「わかった！じゃあ手伝ってくれたら交渉に私も協力するから！」

「よしわかった、俺は何をしたらしい」

「……まじねーわ」

レイと一緒に昼食を食べていた由明日は現金なヤツだな、と思いがらまじねーわと言葉を発していた。

「じゃあひまりちゃんとペア組んで作業してね」

「……はっ!？」

「よろしくね、レイ君！」

「いつ!？」

舌なめずりをしながらつぐみの後ろから現れたひまりを見て俺は驚愕した。

「っ、つぐみ！ちよつと待ってくれ！手伝う！でもこいつと2人はダメだ！死んでしまう！」

「うん、確かにきついかもしれないけど…ほら頑張ったらご褒美あげるから、ね?」

「……ちなみにご褒美って義嗣さんとの交渉に協力する、以外でか?」
「うん!」

100万ドルの笑顔でそう答えるつぐみ、しかし俺はどうも悪い予感しかしなかった。

「レイ君の自慰行為中の音声後で送っとくね♪」

「うん、いらない、てかそれご褒美じゃないからね、お前頭に蛆でも湧いてんのか?」

耳元で最悪なことを呟き出したぞ、俺は女子に対して言うてはいけないようなことを言うはめになったぞ

「ちよつと2人で何話してるのー?」

「手伝ってくれたらお父さんとレイ君の交渉に協力するって言ったんだよ」

「じゃあレイ君は尚更頑張らないとね!」

「ああ、お前とじゃなければ真面目にやってたよ」

最悪だ、今日はサークル活動が休みの日なのに…よりもよってこ

いつと2人で行動って嫌な予感しかしない。

「ごめんな由明日、今日は途中まで一緒に帰れそうにない」

「まじねーわ」

「そっかー、仕方がない、じゃあ由明日はアタシと2人で帰るか」
「!!?!」

後ろから巴が急に話しかけてきた。俺達2人は驚き一瞬にして巴から距離を置いた。

「お、おいおい、そんな露骨に嫌がらないでくれよ、ぐふ、興奮しちまうだろー!」

とても女子がしていいような顔をしていなかった。幸いこちら側に人はいなかったから誰かに見られる心配はなかった。

「……由明日、俺は今から柊優の代わりに文化祭実行委員の仕事をしていかなければならぬーごめん!」

「まじねーわ!」

俺は走り出しその場から抜け出し、ジュースを飲んでいたひまりの手を取り教室を出ていく。

「きやつ!レイ、君…激しいよお」

「赤面すんな変態!」

「ご主人様…まあ由明日がいるからいいか、で何する!バツテングセンター行くか!?あ、硬式の店な、硬式の方が当たると痛くて、ふふふ、気持ちいんだよおー!」

「ま、まじねーわ」

由明日は机にふせ涙目になりながらまじねーわ、と言う。それと同時にレイに対して怒りも込み上げたが、仕事なら仕方がないかと冷めた優しい由明日であった。

由明日が机に伏せている中、ひまりの手を取り教室を出て行ったレイは由明日に酷いことをしてしまったと罪悪感があった。

今度ラーメンでも奢ろう。そう決意して握っていたひまりの手を離した。

「もう離すの?そのままずっと絡めててもよかったのに」

「変な言い方するな、俺はいち早く教室を出たかったんだ」

「そんなに私と2人で行動したかったの!？」

「なんでそうなるんだよ!?!誰が好き好んでお前と2人で行動するか!？」

「ええー!だって2人で行動してさ!体育館倉庫に荷物取りに行つてさ!閉じ困られてエッチなことできるかもしれないんだよ!？」

「んなシチュエーション起こるわけあるかあ!？」

何処まで脳内お花畑なんだこいつ!巴並の妄想力発揮してんじやねーぞ!？」

「はあ、お前の相手をしていると疲れてしまう、早く仕事を終わらせよう」

「じゃあ早く終わったらご褒美あげるね」

「もうお前達のご褒美は信用できないからいらん」

自分の自慰行為の音を聞かせてあげるなんて人生で言われたことあるか?俺はあるぞ

「それで?仕事は?」

「えつとね、3年生の文化祭準備の進行状況を確認してきて欲しいだって、日菜先輩のクラスは確認しなくていいらしいよ」

「わかった、なら3年のフロアに向かうか」

俺はひまりを置いていき1人で階段を急いで登る。ひまりが先に上った場合上からモカみたく下着を見せてこようとすることもかもしれないからな。てか体育館倉庫に行かないじゃねーか!!

「まずは3-Cからか」

「薫先輩のクラスだよね!何するのかな!？」

「……瀬田さんは演劇部の出し物が忙しいだろ?あんまり関わらないんじゃないか?」

でも文化祭だもんな、部活の出し物が忙しくてもあの人ならクラスの出し物も抜きかりなく協力するんだろうか。

「こんにちはー、文化祭実行委員です、出し物の進捗状況の確認に来ました」

「あ!神崎君だ!」

「うそほんと!？」

「わあ！本物の神崎君だ！近くで見ると初めて、本当女の子みたい！」

「な、なんだこの先輩達、いきなり俺の周りに群がり出したぞ、さてはモテ期到来？」

「思いたいが…女の子みたい、なんて言われてることから、男として見られてないんだろう。」

「はは、えっと、進捗状況を…」

「うちはね、パイ投げ屋をやるんだよ」

「ん？」

「だから当日まで準備することはそこまでないんだよー」

「はあ、なるほど？」

「パイ投げ屋？パイ投げ屋ってなんだ。あと瀬田さん全く関係ないことしてるじゃんか！」

「なんなのか聞きたいけど聞くと面倒くさそうだな、ここは早く退散してお隣の3-Aへ行こう。」

「パイ投げ屋ってなんですか？」

「と思ったのにひまりのやつが聞き始めた。今回はばかりは馬鹿呼ばわりをしないでおこう。」

「俺も聞きたいと思ってたけど、面倒くささが勝ってたから聞こうとしなかっただけ、聞けるなら聞いておくか…面倒くさそうだけど（2回目）」

「ストレスを発散するんだ、パイを投げてな」

「あんまりこうゆう機会ないだろう？だから俺達が機会を設けてやろうと思っただけ」

「そーゆうことだ」

「なんか男子達がしゃしり出したぞ、あーあれか、ひまりが来たからアピールしてるのか」

「ひまりのことだ、告白はされたことは無いと言っていたが表上Afferglowのベース担当、そしてリーダーだ、顔は知られてるし胸もでかい。」

「結論モテる、はずだ。だから男子達は鼻の下を伸ばしてひまりに近

づいてくるって訳か。

「む、なんだ君は、上原のなんなんだ！」

呼び捨て、随分と仲がいい、いや年上先輩だからカッコつけて呼び捨てしてるのか

「俺は実行委員の仕事できたんですよ、とりあえず確認はできたので退散しますね、ほら行くぞひまりー」

「もう、待ってったらー！」

大方あの先輩はひまりのことが好きなんだろう。だからそばにいた俺に嫉妬した？残念ながらこちとら付き合っておりません。ただの幼馴染だ。

ひまりの方は俺のことを幼馴染と思ってるのか、それ以外なのかは正直わからないけどな

「レイ君女子にモテモテだったねー」

「……それを言うならお前は男子にな」

「え、気づいてた？もう先輩達私の胸見すぎだよねー」

気づいていたのか、そう言えば俺が1年の時も廊下ですれ違う時見たの知ってたって言ってたしな、ひまりは思った他そういう視線には敏感のようだ。

「毎日私のことで想像しながら抜いてるのかな、どう思う？」

「知るか、本人に聞け」

「えーレイ君は？」

「俺は幼馴染でそんなことしない、ほら着いたぞ」

3—A、友希那さんとリサさんが所属するクラス、出し物はなんなんだろう。

「こんにちはー！文化祭実行委員です（略）」

「お、レイとひまりじゃん、2人で確認してる感じ？」

出迎えてくれたのは友人のリサさんだった。知らない人と話すのすこし躊躇してしまうからな、ここでリサさんが相手してくれるのはとてもありがたい。

「俺は不在メンバーの手伝いですけどね」

「不在メンバー、確か夜桜柊優君…だったけ？最近学校来てないんで

しよ？何かあったの？」

「……さあ？俺仲良くないんで知りません」

「嘘つかないの」

「い、いでー！」

リサさんはムスツとした表情をしながら俺の頬を抓りながらそう言葉を発した。

「うちのクラスの女子がさ、ほら薫的な存在でしよその夜桜君ってさ、学校に来てないとかで文化祭のモチベが下がってるみたいなの」

「ふむふむなるほど、夜桜君は文化祭で王様役で劇もするからね、ファンの人達は楽しみにしてるんですね」

「そうーもしかしたら出ないかもーってのも相まって思ったより準備の進行が遅いんだよねー」

なんだそれ、柊優1人で1クラスの準備の進行状況に影響を及ぼすってなんなんだ。

あいつの存在がいまいちわからないんだが！

「と、とりあえず心配しすぎなのでは？」

「レイは仲良いんだから何か知ってるんじゃないのー？」

「……察するにリサさんのクラスでも俺と柊優の関係を好んでる人達がいると」

「まあ極わすがだけどね」

振り向く視線の先にはこの世の終わりみたいな様子で机に伏せる女子生徒が数人、これはあの人達に話しかけられたら俺は生きて帰れる気がしないぞ

「……柊優は来週には登校します、今は怪我してて入院してるだけです、できれば俺からじゃなくてそうゆう噂を聞いた的な感じである人達を慰めてあげてください」

「おっけー♪」

柊優が来週から投稿するかもしれないと希望をもてるだけであの人達はやる気を出してくれるはずだ。

まあ本当に来週から登校するんだけどな、それは黙っておこうか。「それでリサ先輩達の出し物はなんなんですか？」

「うちは猫カフェだよ、アタシ達が猫耳つけて接客するの」

「それはぼメイド喫茶じゃないですか!？」

俺達のアイデンティティが!3-Aに奪われてしまうー!

考えてみる、リサさんが猫耳つけて接客してくれるんだぞ!?あと友希那さんも!

友希那さん…は!接客は上手くできないかもしれないけど!その容姿を見ただけで点に滅してしまう程の破壊力を持つてる…

「レイ?」

「!?」

後ろから声をかけられ俺は咄嗟に声が聞こえた方へ向く

そこにはメイド服と猫耳を着用した友希那さんが少し恥じらいながら俺のこゝを見つめていた。

「ちようどいいわ、レイ…似合ってる、かしら」

「……………」

考えていた通りだ。破壊的すぎる。なんだこれ、普段何考えているかわからない友希那さんだけど今回ばかりは何を考えているのかわかる!

恥ずかしがってる!あの友希那さんが恥ずかしがってるぞ!!

いかん、感想を…!

「凄く!似合ってます!」

できれば俺の前ではずっとその格好をして欲しい。なんてことをチキンの俺はいや、たとえチキンじゃなくても言うことはできなかった。

「……………」

「な、なんだよ」

「いや、べつにー」

ひまりのやつは気にしていない素振りを見せたが、露骨そうに自分の体に魅力を感じないのに友希那さんには感じるんだと嫉妬していた。

「…………レイは本当友希那のこと好きだよね」

「!?なっ!?何を言い出すんですかりサさん!?!」

「え?何も言っていないよー?」

「いや明らかに言いましたよね!?!」

絶対友希那さんのこと好きだよねって言った!?!聞き間違えることなんてあるか!

「もう湊さん、まだうろついちゃダメでしょー?本番までクラスの人達以外には見せない話でしょ?」

「?ごめんなさい、でもレイがいたから見て欲しかったの:」

「トウungk♡なにこの子、可愛い!」

いやあんたがときめいてどうすんだよクラスメイトさん

「じゃあ俺達そろそろ戻ります、リサさん例の件決まったら声かけてください!なんでもしますから!」

「!なん、でも:うん!わかった!」

俺とひまりはそのまま3年のフロアを後にし報告をするために生徒会室へと向かう。

その途中ひまりのやつが機嫌悪そうに俺の後ろをついてくるもんだから俺は声をかけた。

「なんだよひまり、機嫌なおせよ」

「私の方がおっぱい大きいのになんで友希那さんにはデレデレなの!?!」

「友希那さんは:お前達みたいに変態じゃないし?」

「でも私の方がおっぱい大きいでしょ!?!なんで興奮しないわけ!?!」

興奮しない?馬鹿言え、興奮しまくりだわ、でも幼馴染に手を出してはいけないという俺の決まりがあるからあえて冷たい態度を取っているんだろうが。

あとはシンプルにひまりが少し苦手になったというのもあるけどな

「レイ君は友希那さんみたいな大人しい子が好みなの?」

「好みって言うか、友希那さんとは普通に仲良いからさ」

「じゃあ友希那さんが抱いてって言ったら抱けるの!?!」

「抱くわけねーだろ!馬鹿か!」

そもそも友希那さんはそんなこと言わない!ヤリチンって言葉すらない純粹な子だぞ!

そんなこと言うはずないだろ！俺の親友の友希那さんが！

「じゃあ私が抱いてって言ったら！」

「丁寧にお断りさせていただきます」

「だからなんでえー!!」

「うわ、くつつくな！」

腕を掴みまるで子供のように駄々をこね始めるひまり、廊下を歩く生徒に変な目で見られ俺は恥ずかしさのあまりひまりの手を取り急いでその場から離れた。

「あのなひまり、前も言ったと思うけどな？そうゆうことをする人は決めてるんだ」

「決めてるって…好きな人でもいるの？」

「いや、正確にはいるってわけじゃ…」

アサシンの存在をひまりに話す訳にはいかないしな…ここは

「俺は好きな人としかエッチなことはしないんだ、だから俺がお前を好きにならない限り絶対にならないんだ、諦めてくれ」

濁すような形だったが…言い方が少しきつかったか？

ああ、どうしよう！もしアサシンの正体がひまりだったら！俺は実質アサシンを振ったことになるぞ!?

この後の返事でアサシンかどうかはわかるのか!?

「わかった」

「ッ！」

す、すんなり受け止めた？てことはひまりはアサシンじゃない？

いやだつてアサシンならさ！俺から抱かないって言われたら、な！落ち込むよな!?!なのにかかったの一言で受け入れたんだぞ!?

「ま、まあそうゆうことだ、今後は…」

「レイ君が私のこと好きになればいいんだね」

「……………は？」

俺は鳩が豆鉄砲を食らったかなように数秒間何が起こったのかわからず立ちすくんでいた。そして出た言葉は？だった。

「考えてみればそうなんだよ、レイ君が私のこと好きになれば毎日エッチなことできて、えへ匂いも嗅ぎたい放題だもんね！」

「な、何を言ってるんだお前、それって！」

「そう！レイ君が私のこと好きになって私もレイ君のこと好きになるから」

いきなりの告白？的なシチュエーションに思わず腰が抜け俺は床にへなーと座り込む。

そんな様子を見たひまりは舌なめずりをしながら俺に近づき、かがみ込み、俺と視線を合わせたあとニコリと微笑み話を続けた。

「私のこと好きになってね♪」

「ツ〜!!?」

いつもの暴走？あの話の流れから私を好きになって、なんて言い出す女子がどこにいるだろうか。ここにいたわ、なんならひまりの瞳を見てわかる。こいつは本気で言ってるんだ。

「両思いならきつと最高のエッチができるかもね！」

「なっ、な、ななな！」

「レイ君女の子みたいなの動揺してるよー？可愛い〜♪」

「ッ！」

自分でもわかる。多分俺の顔は今すぐく赤く、火照っているはずだ。心臓の音とひまりの声しか聞こえない。

しまいには過呼吸になる勢いで呼吸があらう。

お、落ち着け…こいつのペースに吞まれるな、俺にはアサシンがいるんだ。

アサシンが、アサシンが…！！

その時、アサシンの姿が脳裏にチラつく、山吹ベーカーリーの紙袋を被ったアサシンの後ろ姿を。

俺はアサシンの正体を判明するために、いつもアサシンを後ろから追いかけている。

追いかけている俺が…途中で追いかけることをやめたら…先にいるアサシンはどうなってしまう…！！

あんなに俺のことを愛してくれてるんだ。ならば俺はそれに答えないといけない。こんなところで…欲に負けて、簡単に落ちてたまるもんか…！！

大きな深呼吸を行い、立ち上がり、呼吸を整え言葉を発した。

「……はっ！俺がお前のこと好きになるだー？絶対にない！」

「むうー！なんで言い切るのさー！」

「根拠はない！でも絶対の絶対じゃない！」

何故なら俺にはアサシンがいる！

大方ひまりはアサシンじゃないんだろう。アサシンであればこんな大胆な行動はしない！

なんせ彼女は恥ずかしがり屋なんだ！こんなことできるとは到底思えない！

仮にアサシンであったとしたらひまりならこの場で正体をさらけ出すはず、何故なら馬鹿だから！

「お前が俺に惚れるのは勝手だが俺は絶対にお前に惚れない！童貞も奪わせない！」

「そこまで言わなくていいじゃないかな!?私結構勇気出したんだけど!?!」

「あつそうですか、じゃあ勝手にしてください、何度も言うが俺は絶対お前に落ちないからな！」

「ふんだ！おっぱい星人のレイ君には私がどれだけナイスボディな幼馴染なのかわからせてあげるんだから！」

「んだと馬鹿ひまり！」

「おっぱい星人！」

『ぐぬぬぬ!!!』

そう、絶対に落ちない。絶対にひまりのことを好きにならない。

なつてはいけない、アサシンが悲しむ、あいつが悲しむことはもうしない。前のことで学んだんだ。

早くアサシンを見つけ、付き合いひまりには悪いが早急に俺のことを諦めてもらおう。

「はあ……とりあえず報告に行くか」

「！うん！」

えいくつつくな！と腕を組もうとしてきたひまりを振りほどき俺は1人早歩きしながら生徒会室へと向かった。

「ごめんレイ君！もうひと仕事付き合っただけだ！」

「今度はなにかない？俺帰りたいんだけど！あとこいつとペアでの仕事は嫌なんだが！」

「それは大丈夫！ひまりちゃんは今から実行委員の会議に出席してもらうから」

「ええ！聞いてないよ！」

「ちゃんとやったよ！忘れたの？」

「……………言われてみれば聞いたような？」

「ふ、馬鹿だな」

馬鹿だからあんなよくわからんことを言い出すんだ。全く困ったもんだぜ

「レイ君には体育館の機材の状態を確認して欲しいの！マイクとかライブで使う機材とか！」

「既に1人臨時で手伝ってもらってる方がいるらしいからその人と協力してね！じゃあ私今から会議だから！行くよひまりちゃん！」

「れ、レイ君！会議終わるまで待ってくれるよね……？」

「……………誰が待つか」

「んもーう!!!」

俺は冷たくそう返事をした。ひまりは牛のように大きな声でうねり声をあげた。

あれはあれでかわいい、いかんいかん、可愛くない。変態だったな

はあ、にしても体育館の機材確認か、臨時で手伝ってもらってる人って誰なんだろう。

臨時ってことは俺みたいに実行委員じゃないのに手伝ってくれてるって人だよな

ボランティア精神の塊か？聖人か？羽丘は心が清らかな人が多いんですなー（一部除く）

体育館の倉庫についての俺は視聴覚室よりも重いドアをこじ開け声を出した。

「すみません、副会長から頼まれて来たんですけどー誰かいませんかー？」

「……………あ、はい」

奥の方から声が聞こえた。

どこかで聞いたことのある声、のような気がした。気のせいだろうか。

「すみません、確認したら散らかっちゃって、ジブン大和麻弥って言い……!」

「大和さん!?!」

倉庫の奥から現れたのは、ついこないだ顔を合わせたばかりの *steel*Palette*、ドラム担当こと、上から読んでも下から読んでも大和麻弥の大和さんが夏服を着崩したラフな格好で俺の目の前に現れたのであった。

〇〇〇を見せてくださいと言われたことありますか？

「大和さん？」

臨時で手伝ってくれてる人って大和さんだったのか、これは予想外の人だ。

「まさか神崎さんが来るなんてー微塵も思ってたつす」

「それは、俺も大和さんがいるとはね…」

顔は合わせた仲だが…この人は柊優と俺の関係を好む人達だから、絡むのを躊躇してしまう。

しかしこれはつぐみに任された仕事だ、ちゃんと業務を全うしよう。

「さて、俺は何をすればいいですか？正直言つてここにある機材は使つたことないので何をどうすればいいのか…」

「えつと、そーすね、とりあえず全部電源が付くか調べてもらつてもいいつすか？そこからはジブンが調べるんで」

「へー大和さんところう機械に詳しいんですか？」

「それはもちろんージブン、今はアイドルつすけど前はスタジオの裏方やつてましたし…フへへ」

「そうなんすか」

その後俺達は作業をしながら大和さんがアイドルになった経緯を聞いた。

パスパレのドラム担当を決める際近くにいた大和麻弥さんが白鷺さんに採用され今の5人に決まったらしい。

人生何があるか本当にわからないもんだな、だって裏方からアイドルに転職だぞ？いやいや、なくね？

「最初はジブンなんか皆に劣つてる…と思つてました、でも皆さんと過ごしていくうちにジブンはここにいてもいい存在なんだと気づけたつす」

「いいですね、そーゆう仲俺憧れます」

よくわからん機材の電源を付け俺は大和さんにそう返事をした。

「それを言うならジブンも神崎さんと青葉さんの関係もいいと思うっすよ」

「あいつとの関係は幼馴染で、そして共…なんで今俺とモカを？」

危ない、共犯者と言うところだったぜ。

そもそも俺は大和さんにモカとの関係性を打ち明けた覚えなんて一切ないのだが？

俺とモカ達が幼馴染だって知ってるのは同じクラスのやつぐらいだろ、前のクラスでは公言してなかったのだから

噂が広まった？いやそんな噂広めるメリットなんてないのだから有り得ない。

でたらめを言ってる？いやこの人は見た感じそんなことを言う人ではないと思うんだが。

「あーそれは、ほらー…仲睦まじく一緒に歩いているところ見たことあるっすよ!？」

「俺モカのことそこまで好きじゃないんでそんな仲睦まじく歩くことなんてないと思いますよ」

俺はオタク特有の早口でそう返事をした。

大和さんは見てわかるぐらいテンパっている様子で先程から手に持っている電源コードをずっと指に巻き付けは解き、また巻き付けると同じ動作を繰り返していた。

端的に言えば動揺しているな

「大和さんは俺とモカの何を知ってるんですか？」

「…口を滑らせたジブンの失態を受け入れるべきっすね、ついでに…フヘヘー!」

「な、なんだ？」

今度はいきなりブツブツ言い出ししきりにはこちらを見ながらフヘへと不気味な笑みを向けてきた。

俺のココ最近の経験からしてこの場は逃げた方がいいと危険信号が脳に突き刺さる。

「あー！いっけなーい、俺今日バイトあるんだってことなんであ

とは1人で…」

「ちよつと待ってほしいっす！ジブンの話を聞いてください！」

「結構です。もう微塵も気にならないので、少しからかいたくて聞いただけです。俺の負けだから、もうやめて！離せええ!!」

制服を掴み俺を倉庫から逃がせないという意味が嫌ってほど伝わってくる。

「……ジブン全部聞いてたんすよね」

「はっ？」

「こないだ屋上で神崎さんと青葉さんが話してる内容」

「……………」

な、ななななんだってー!?

と俺は心の中で叫んだ。表で叫んでしまえば俺はモカと屋上であ
の話をしていたことを認めてしまうことになる。

話の内容、ということより察するにモカが露出魔であることは知っ
てるんだろう。

てかあの時大和さんいたのかよ、誰もいないと思ってたんだが？

いやそれは今どうでもいい、俺が今とる行動は如何に、迅速に、こ
の話を否定しなければならぬ。

俺は無言のまま大和さんが掴んでいた制服を離すようそつと手に
触れ優しく解く。

そして俺は大和さんを向き声を発した。

「え、ええ？なんですかそれー、し、知らないんですけど？」

「……………」

レイは頬を引きつらせながら100点満点の作り笑いでそう答え
た。

今までのレイなら何かバレそうになっても適当に嘘を並べその場
をしないでいた…が

今回は訳が違う。モカの人生がかかっているこの場面、バレてはいけ
ないと思ひ込み、思ひ込み過ぎて…場を凌ぐ嘘が思いつかず、否定す
る言葉を並べたが、表情と声音で麻弥には一瞬で嘘だと悟られた。

「神崎さん…嘘つくの下手っすね」

「ツ！……はは、なんのことかな」

バレたと思った俺は心を無理やり落ち着かせ、いつものような感じで言葉を発した。もう遅いかもしれないけど

「青葉さんが噂の露出魔だったんすよね？話を聞く感じたまたま同じ趣味の方がいたからことを得たとか、なんとかで」

「大和さん面白い方ですね、そんなことある訳ないじゃないですか、仕事しすぎて頭でもおかしくなったんじゃないんですか？」

「それと神崎さんが勃起してるところも目撃したっす」

「勃起！いい、いやだってノーパンで俺の上に乗ってきたから！そんなのは必然、で……」

あ、何を言ってるんだ俺は…勃起していたことを否定することに意識を集中しずて今までの発言全てを無下にすることをしてしまっただけぞ

「やっぱり神崎さんは嘘をつくのが下手っす」

「くっ！何が目的なんですか？モカの秘密をばらして何か得でもあるか!?!」

「？青葉さんのことをバラそうなんて思っていないっすよ!」

「じゃ、じゃあ本当に何が目的でこの話を…?」

ただ単に先程の話の延長か？

俺とモカの仲睦ましい関係であることを証明するために例え話として先日の屋上でのやり取りを話した、と？

「フへへ！よくぞ聞いてくれましたね！単刀直入に言うっす!」

「あ、はい」

「神崎さんの男性器を見せていただけじゃないでしょうか!!」

頭のとっぺんに雷が落ちてきたような衝撃が俺を襲った。いや雷が落ちてきたことないけどさ、それと同等、もしくはそれ以上の衝撃だと思いたい。

要は誰もが想像するよりも遥かに超える衝撃だと思ってもらっていい。

何故なら人気アイドルのあの大和麻弥からいきなり男性器を見せて欲しいと言われたのだから。

「……どうしたんですか？本当に仕事が忙しすぎて頭の中スポンジ並にスカスカになっちゃいましたか!？」

「頭は至って正常っす！変なこと言わないでほしいっす！」

「変なこと言ってるのはあんただろうが……」

俺は正直大和さんの発言に呆れを感じ声量をだんだん下げながら返事をした。

「ジブンあの日目の前で神崎さんが勃起されてるところを目のあたりにしてなんか、おかしいんすよ……」

「子宮が疼くというか、なんか全身が疼くというか……」

「そう！これは！神崎さんの男性器に興味があるってことなんすよ！きつとー！」

「……………」

俺はよろめく、なんの抵抗もなく、後ろから引っ張られているかのように俺は後ろに倒れそうになる……ところをなんとか踏ん張り阻止する。

俺が無意識に倒れてしまうぐらいの驚異的な発言、その衝撃、威力、テレビに出るような有名人からのこの発言

さすがに脳の処理が追いつかない。

「確かにあの時俺の、元気になった息子の様子をご覧になったのでしよう」

「でもね、そこから色々な箇所が疼くというのは……それはもう変態だ」

「じゃあ変態でいいんで見せてください」

「いやです」

即答する。なんで数日前に顔を合わせたばかりの女に自分の男性器をみせなきゃならないのだ。

「そもそも男性器が元気になったところを見ただけで見たがるなんて大和さんは飛んだ変態ですよ」

「でも見せてきた神崎さんが悪いんすよ!？」

「俺は見せようとしてたわけじゃない！」

「だったら！青葉さんに馬乗りされただけで勃起してるなら神崎さん

も変態じゃないっすか!？」

「お前と一緒にすんなこのクソ変態メガネ！」

こんな奴にさんをつける必要性を微塵も感じない。年上とか知るか、変態に使う敬語なんてない。

「だいたい男性器見たいならご自分の携帯で調べればいいだろうが！」

検索すればネットに画像なんていくらでもあるだろ、Google先生なめんなよ。

「それはダメなんす…。パスパレは千聖さんの規制が厳しくて週に一度検索履歴とか確認されるんすよ」

「何が目的でそんなことを？」

「よくわかりませんがアイドルだからそれに見合う私生活を送るように、とかそんな意味だと思っす」

「はあ、なるほど？」

ようはアイドルなんだから卑猥なことに興味持つなよ的な感じか？

はは、白鷺さん、あんたの行いは意味がなかったようだな、調べなくても変態なやつがあんたと同じグループに所属しているのだから

「こないだなんて彩さんが履歴消し忘れてたみたいで…酷い目に遭ってたんすよ!？」

「丸山さんが？」

なんだそれ、あの人もしかして卑猥なこと調べてたのか？

見た目によらず結構そっち系の人だったのか、エロいな

「日菜さんは…なんかよくわからないけどいつも免除されてるっす」

「それは恐らく飽きられてるんだよ」

なんだ？パスパレは変態の巣窟だったのか？裏でなんか卑猥な活動してたりしないよな？頼むぞ本当、あんたらそんなことしてたら炎上もんだぞ

「ジブンはあの中で一番まともなのでバレル訳にはいかないんすよ！」

「お前は馬鹿か、お前がまともなわけないだろ、若宮さんが一番マシで

可愛くて正義だろうが！」

あ、そうだったそうだった。

若宮さんに4月29日何してたか確認した時やこの変態と一緒にいたと言ってたな

聞いてみるか…と思ったが！

ここで俺が質問したところかえってくる返答はおそらく「答えるから見せてください」なんて言うだろう。

この変態がアサシンであることは避けたいが…何とかして聞き出さないといけないよな

「！そっだ！」

我ながいい名案が浮かんだぞ！

「検索履歴が残るからって理由で調べたくないんだよな？なら調べる気はあるってことだよな！」

「え？あ、はいそうっすね」

「なら調べた直後に履歴を消せばいいんすよ、かプライベートモードで調べるか」

「消し忘れてたから彩さんが酷い目にあつたんすよ、話聞いてましたか？」

「…黙ってるクソ変態メガネ！」

ぐうの音も出ない俺は苦し紛れの言葉を発して声量で何とかその場を収めた。

「調べる気がある、のなら俺のは見せれないけど…俺の携帯で調べるってのはどう、だ？」

考えていたことを言葉に出すのは恥ずかしいな…前の案で調べる気があることを確認できたから先程の案は提案できた。

初めから提案して調べる気なんてないと言われたらその時点で終わりだったからな、色々

「…それはどうなんすかね？」

「言っとくが俺のは絶対に見せない、だから諦めて俺の携帯で検索して見る、頼むから！」

「神崎さんはそれでいいんすか？」

「なーにが」

「ジブンは神崎さんのが見たいって言ってるんすよ？誰かも知らない方の男性器を目の前にいる女子が見てたら…寝盗られた気持ちになりませんか!？」

「……お前はっ倒すぞ」

そんな設定寝盗られ作品とかでもないだろ！てか寝盗られてねーから！

「よし、じゃあこの話をSNSで晒すか、あんたの人生終わらせてやるよ」

「やってみてくださいよ、神崎さんのフォロワーなんてたかが知れていますし、ジブンがそんな人だとファンは信じないっすよ」

「わかった。なら白鷺さんに話す」

「へっ!？」

白鷺さんに話すと言った瞬間大和さんは大きく反応した。よつぼど白鷺さんに今のやり取りを知られたくないようだ。

それがなんだ、俺は何がなんでもチクってやるぞ、チクリ魔レイさんになってやる。

「そ、そそそんな…神崎さんが千聖さんに話しかけることなんて…!」
「言つとくが俺は白鷺さんとそこそこの仲だぞ、うんそこそこの仲だ。なんなら本人に確認してみな」

俺が一方的に思ってるだけで白鷺さんはアサシンのためにいやいや話してる存在、と思ってるかもしれない。

自分で言つてあれだがそれって俺可哀想じゃないか？

「ダメです！千聖さんに知られたら人生おしまいつすよ!？」

「はははははは、なら諦めるんだなじゃあな」

俺はみんなが予想するよりも早く早歩きをしながら大和さんの隣を通り過ぎようとしたその時

「お願いします…!…なんでもします!それだけはやめてください…!」

「……………」

やめてください…?ごめん意味がわからない。

そもそもあんたが訳の分からないことを言い出したから俺はばらすと言ってるんだぞ？

ならあんたが見せろなんて言わなきやすむ話だろうが。

とは言ってもだ、この場合楽しむのもありなのかもしれない。

「じゃあ一つ条件がある」

「な、なんすか」

「おっぱいを見せろ」

「ッ！男の人っていつつもそうですよね!?ジブン達のことなんだと思ってるんすか!?……まあいいすけど」

「いいんかい！」

どこかで見たことあるようなやり取りの気がするが…それは気のせいだろう。

「じゃあ脱げば神崎さんは見せてくれるんすね！」

「待てい、さっきのは冗談だぞ？お前…本当に頭大丈夫か？はつきり言ってるモカよりおかしいと思うぞ」

モカとかには黙れ！なんてことを言えばそれ以上踏み込むことはなかった。

「大和だけどこいつは異常だ。」

てか何をそこまでして俺の息子を見たがるんだ、本当に意味がわからない。

それと今まで相手をしてたことで考えることを放棄してたけどさ

あの真面目そうな大和麻弥が俺のイチモツを見たがるクソ変態メガネだった、なんて白鷺さんに話しても信じてもらえないかわからない話だよな

「……はあわかりました。神崎さんの男性器を見ることは諦めるっす」

「ようやく諦めてくれたか…」

「代わりに神崎さんのズボンのチャックに手を突っ込ませてください」

「……………」

これまた意味がわからない。代わりに？意味がわからない。語彙

力が崩壊するほど意味がわからない。

「実はジブンスOFFの下の隙間が大好きで…あの時屋上にいたのもフェスと建物間の隙間が大好きでよくあそこで昼ご飯食べるんすよー!」

「隙間が好きだから俺の股間のファスナーに手を突っ込ませたい、と」
「はいっす!」

「その中学生みたいな明るい声で返事をするな!俺は高い声が大っ嫌いなんだよ!」

えーい!話がズレたじゃないか!んなことよりも!

「それも嫌だ!」

「神崎さーん、見せるのもダメ、突っ込むのもダメってジブンの頼みなんなら聞いてくれるんすか…?」

「何俺がなんも出来ない奴みたいな言い方してんだ?てめえがおかしいんだろうが!」

あたかも俺を無能みたいな言い方しやがって…!てめえが無理難題な頼みごとするから断ってんだろうが!

「じゃあ2択っす、男性器を見せるか、チャックに手を突っ込まれるか」

「2つとも断ったら…?」

「神崎さんに襲われたって言いふらすっす、まずは日菜さん、次に千聖さ…」

「おうけい、わかった…話をしよう」

なんとと言おうと冤罪だ、でも氷川さんと白鷺さんは大和さんのことを純粋な清楚な女の子と思ってる。

そんななか評価の低い俺が襲った、なんて大和さんから聞いたら嘘でも信じてしまうだろう。

この女そのことを知った上で俺に案を出したな、クソ変態メガネ、社会的に死んでくれないだろうか。

見せるか、突っ込まれるか、どう考えても後者なんだが…それはそれでいい気分ではない。

「なんとですね、片方選ぶとジブンの胸が揉める特典付きっすよ!」

「さあ……どうします?」

眼鏡を外しあたかも決めゼリフを言ったかのような眼差しを俺に向けてくる。

やめろ、ちよつと魅力的な特典だと思つてしまったじゃないか。自分をぶん殴りたいぜ

しかしだ、そうは言つたもののズボンのチャックに手を突つ込むだけで女性の胸を揉めるというのはいかなものか。

このクソ変態メガネ、テレビを見てて思つてたが結構胸あるよな…。

「……………んー…」

これは何があんでもこの2択なんだろう。断つたところで永遠にここから抜け出せないと思つし、仕方がない。

「わかりました。後者を選びます。それで許してください」

「てことは突つ込んでもいいんすね!」

「突つ込むだけですよ、触つたら…わかつてるよな?」

「……お、犯されるんすか?」

「んなわけねーだろ!」

何度目の否定なのだろうか。んなわけねーだろという言葉をココ最近多く発言している気がする。

「俺は胸揉まないの、勝手にやってください」

俺は両手を上げ大和さんに勝手にやるよう頼んだ。

頼んだという表現は誤っている気がするも俺は大和さんに頼んだ通り両手を上げ万歳ポーズをとつた。

「では遠慮なく行くつ…すよ!?!」

目をガン開きしながら両手を伸ばし俺のズボンのチャックに手をかけた。

一体どんなことになれば女性からズボンのチャックに手を突つ込ませてほしいと頼まれるのだろうか。

俺の知ってる限りだと変な性癖を持った人から当然頼まれる。つてこれは持論だな、はは

ゴミを見るような目を大和さんに向けながら俺はその場から動か

ない。

動いているのは大和さんだけだ。手にかけてチャックのファスナーを掴み音を立てながら開く。

社会の窓が女性の目の前で大開き状態に。恥ずかしいという気持ちにはあまりなかった。俺は一刻も早く終わって欲しいと願うだけだった…。

「い、行くつすよー！」

「ッ！」

スポツ、なんていい音はない。擬音に例えることが難しい服と手がかすれる音を聞き受けたあと股間の周りに変な感覚がする。

「ああー、これすごいっす、この間、落ち着くつす…フへへ」

頬を赤くして笑いながらこつちを向いてくる大和さんに一瞬、ドキリとした。

いや、訂正しよう。一瞬ではない。その後も俺の心臓の鼓動は早くなった。

先程まで無理やり心を落ち着かせていたものの、大和さんのトロン、とした瞳でこちらに視線を向けられるとこう男としては興奮してしまう。

「も！もういいでしょ!?!早く抜いてください！」

「抜く、ですか？」

「ちがーう！そういう意味じゃないだろ！早く手を抜け！」

「あともうちよつと！先つちよだけですから！」

そのセリフ過去に俺がひまりに対して言ったことはあるが（そういう意味で言った訳では無い）女子が言うところなんて生まれて初めて見たぞ、いや聞いたぞ

「この！離れるクソ女…！」

あげていた手を下げ大和さんの頭を両手で掴み離せと抵抗する。

しかしこの変態はそんなことをされても微動だにしない。がつついてくる。なんだこの女

早く離れてくれと思いつながら、そして大和さんは離れるもんかと争っている中

「レイ君、会議終わったから手伝いに来たよ……?」
『!?!?』

「つぐみが俺の後ろから声をかけてきた。」

「?何してるの?」

「ッ!」

こ、これはまずいぞ…今大和さんは俺のズボンのチャックに手をぶち込んでいる。なんなら頭もほぼ股間辺りまで近づいていた。

エッチなことをしていると思われるも仕方がない!てか現に突っ込まれてるしエッチなことしてるのかな!?

「つ、つぐみ、なんで来たんだ?」

「だって2人だけなら大変でしょ?私も手伝った方が早くお父さんのところに行けるかなって」

つぐみが言っていることはご最もだ。手伝ってくれるのは嬉しい、だけど今は全然嬉しくない。

チラリと大和さんの方に目を向けると目をぐるぐるさせながら凄量の汗をかいていた。

頭の中で何を考えているのかはわからないけど焦っていることだけは見てていやってほど伝わる。

「あつ!そこにいるの大和先輩ですよね?そんなところで何してるんですか?」

「つぐみ!喉がかわいた!飲み物買ってきてくれないか!金は後で返すから!」

「水筒あるよ、今すぐ飲む?」

南無三!つぐみのやつ気が利きすぎてないか!その気は日常生活だと嬉しいけど今は嬉しくないよ!?

てか大和さんはすぐに手を抜いて立ち上がってくれればすむ話なんだが!何やってんだよこの変態は!

「早く抜け、そして立て、俺達の高校生活が終わっちゃうぞ!」

小声で俺はそう言う。

「(そ、そうすっね立ちます)」

「なにか言った?」

「なーんでもないよ、はは」

「そうかな？ なにか聞こえたような…って大和先輩いつまでレイ君の近くに座ってるんですか？ 早くしないと終わりませんよ」

大和さんは立ち上がった。しかし手は未だにズボンのチャックにぶち込んだままだ。

「(手を抜けこのクソ変態メガネ!)」

「(ええー勿体ないっす!)」

「(ツツ! わかった、今度また! な?)」

「(言質とつたす)」

こいつこれが目的だったな…!

言質をとって納得したのか大和さんはすっと手を抜いてくれた。俺はすぐにズボンのチャックを閉めつぐみに向き直りいつも通りたわいない話を始めた。

その後はつぐみも手伝ってくれたことにより機材の動作確認はすくに終わった。

「羽沢さんが手伝ってくれたから早く終わったす」

「いえ! こちらこそ確認を手伝ってくれてありがとうございます!」

「ジブンそろそろ演劇部に戻りますね、声かけてくれたら手伝うので! ではまた!」

「はい! その時はまたお願いします!」

つぐみと大和さんが話をしたあと大和さんは俺の近づき耳元で囁く。

「ではまた今度」

「……………」

俺は心底嫌そうな顔をしながらそっぽを向いていた。

「フヘヘ!」

この世から消えてくれないだろうか。あのクソ変態メガネ

「じゃあ私達も行くかうか」

「ああ、もう帰っていいんだよな?」

「うん!」

やっとだ、やっと羽沢珈琲店に行ける。過去一長く感じた放課後だったぞ

せつかくクラスの出し物の練習とサークル活動も休みだったのに…

「あ、そうだレイ君」

「?どうした」

「大和先輩と何してたの?」

一緒に教室を向かっている途中つぐみが急に止まり、話しかけてきた。

振り向くと目を細めながらすこし口角を上げ、俺に先程のセリフを発していた。

「……何って機材の動作確認だろ」

「じゃあこれは、なに?」

「……………」

つぐみは見せてきたものは俺の姿を後ろから撮った写真だった。そこには俺の足の間から大和さんが目の前に座っていることが丸わりの構図だ。

「……つぐみは何してると思うんだ?」

「フェラしてる構図に見えるよね」

「まあそうだよな…」

俺は特に驚くことなくそのまま教室に向かう足をとめない。

つぐみも歩きながら俺に事情聴取を行なう。勘弁してくれ、やっと帰れると思ったのに次はつぐみの相手かよ

「本当にさせてたの? 頭を掴んでるみたいだけど」

「させてるわけないだろ」

「じゃあ何してたの?」

「……大和さんがな、実は特殊な性癖を持っててだな、俺はそれの被害者なんだ」

つぐみには全てを話した。大和さんのに頼まれたからあんなことをしたと

「でも大和さんは変態だけどアイドルだ、だから…このことは黙って

てくれないか」

こいつはひまりや巴が変態であることを知っていたながら、そのことを公にすることは一切ない。

ならあの大和麻弥ことクソ変態メガネのことを話しても問題はないだろう。

相手のことは思わないのかって？はい、思いもしませんよ

「……ええーそれはレイ君次第だよー」

「…………つぐみさん？」

「レイ君が私の言うこととしてくれるなら黙っててあげるよ」

立ち尽くす俺の隣をつぐみは後ろで手を組みながら通り過ぎる。こいつが言いたいことは何となく察しがつく。

「今日から毎日オナニーしてね♪」

「…………」

「もちろん出す時は私の名前を呼んでね？」

「……絶対に嫌だ」

だと思つた。絶対自慰行為をしろと思うと思つてた。

こいつはその様子を録音してあとから聞いて楽しむだろう。一体そんな音を聞いて何が楽しいのだろうか。

「悪いがそれは出来ない、好きでもない女を、ましては幼馴染をオカズにしてはたくない」

「じゃあ私達以外の人でしてみたなら？今澤奈さんいないよね？前みたいに大音量でエッチな動画見なよ」

「やめろ！そのことを言うんじゃないやねえ！」

まさかあの時から既につぐみから盗聴されていたなんて思いもしないだろう!?

男子高校生なのだからエッチな動画視聴しながら自慰行為ぐらいするでしようが！

「ねえお願いレイ君」

「そんな可愛く頼まれても無理なものは無理だ」

「じゃあお父さんとの話取り繕ってあげなーい」

「……別にいいよ、元々1人で義嗣さんとは話す予定だったし」

悪いがもうつぐみに自分の自慰行為の音を聞かせる訳にはいかない。てか聞かれていると想像しながらすることなんてできるもんか。「ダメだよ、ちゃんとしないと…もう何ヶ月もしてないよね？溜まってないの？」

「溜まってはいる。でもしない、したくないんだ」

「ひまりちゃんや巴ちゃんとやる時のために？」

「そうそう、ひまりとする時1発で終わったら勿体ないからな……つて！するわけないだろ！」

自分でノリツツコミしちゃったよ、寂しいやつかな俺は!?

「…:はあ、俺が昔使ってたサイトがもう閉鎖されてるんだよ、エロ動画見るには金払わないといけないんだ」

「？払えばいいんじゃないの？」

「未成年の俺にどうやって払えと言うんだ」

これは決してムラムラして抜こうと思って調べたわけではない。

ふときになり調べてみたら…:俺達の味方だった無料で見れるエロ動画サイトはいつの間にか封鎖していたんだ。

好みの動画とかダウンロードしと置くべきだったか…:くっ！

「ダウンロードとかしてないの？」

「今脳内で後悔してたところだよ」

「レイ君の好きな体位はなんなの？」

「お前自分がどんな質問してるのかちゃんと理解した上で聞いてる？」

つぐみの質問に答えることなく俺達は教室に着いた。教室に着いたもののまた話しかけてきては適当に流し俺達は荷物を回収し生徒玄関へと向かう。

「もう勘弁してくれ、黙っててくれないか？」

「えーもうわかったよ、私の名前は言わなくていいから」

「うん、なんでそこで嫌がってると思った？もっと別のことで嫌がってると思わないのか!？」

「私の名前呼ぶことに対して抵抗はないってことなの？」

「もう変な捉え方するなああああー」

叫ぶ気力すらもう起きない。するなああーと伸ばしながら俺はその場に止まり、つぐみだけ先を歩いていった。

「じゃあオナニーはしてね♪」

「はあ、もういいよ、それで…」

俺は半泣き状態でそう返事をした。

もうつぐみにとつて都合のいい返事をしない限りずっと色々言われることになるんだろう。

俺が今日抜かなかつたら大和麻弥の秘密が暴露されてしまう…。なんで俺があのかつ変態メガネのために体を売らないといけないのか…。

本当に意味がわからない。

「あつ！おーい！レイ君！」

「彩さん？」

「え？」

絶望に慕っている中、俺の名を呼ぶ天使が目の前にいた。

つぐみがその天使の名前を呼び、俺は誰だか瞬時に判断した。

「レイ君こんにちは！偶然だね！」

「丸山さん！」

「もう彩って呼んでよねー」

「……………うっ！うう…」

「え!?どどどどうしたのレイ君!いきなり泣いて!」

「す、すみません、なんか丸山さんに会えて……………まともな人と話ができて俺嬉しくて…!」

クソ変態メガネこと大和麻弥の相手をして、盗聴癖を拗らせてた羽沢つぐみ、この2人以外のまともな人と会をした相手が、そう目の前にいるアイドルの丸山彩さんだ。

まともな人と数時間ぶりに会話出来ただけでこの有様だ。

「よ、よしよし辛いことあったんだね…」

「……………」

丸山さんは優しく俺の頭を撫でてくれた。

ん?なんか大和麻弥が丸山さんが変なこと調べてたみたいなこと

言ってたな…まああいつの言うことは信じない方がいいか。

だって目の前にいる丸山彩は天使なのだから。

「えへへ」

自分でも気持ち悪いぐらいの絵画をしながら頭を撫でられていると自覚しながら祝福の時間を堪能した。

そんな中つぐみは何故か1人だけ変なものでも見るかのように俺を見てきた。

何見てんだよ、見せ物じゃないぞ

「えへ、落ち着いたレイ君？」

「はい、ありがとうございます」

「……つぐみちゃん、レイ君何かあったの？」

「すみません、よくわかりません」

なんだそれ、もうお前たちはみんなわからないことがあったらSiriみたいな返事をするよう叩き込まれているのか？

「それよりも本当に偶然ですね」

「うっ！ぐ、偶然…うん偶然だねえ」

頬をひくつかせ笑顔でそう答える丸山さんを見て一瞬で嘘だと判断した。

「なんですぐ分かる嘘つくんですか」

「……すみません、2時間以上物陰でスタンバってました」

「何故そこまで!？」

スタンバってたって、待機してたって言い方でよかったんじゃないのか？

「だってレイ君と帰りがかったんだもん…」

「トウシク、何この子、くそ可愛いんだが」

「……レイ君？」

「ひっ！」

いかんいかん、心に思ってたことが口に出ていたようだ。

「丸山さんごめんなさい、俺今から羽沢珈琲店に行かないといけないんですよ」

「うんわかった、着いてく」

「……いやだから、文化祭の大事な話がこれから「着いてくよ、どこまでも♪」……あ、はい」

一向に引く気がないぞこの人、しまいには着いてくよ、どこまでもなんて言い出してよ

だけど丸山さんにそう言われるのは悪い気しない。

「では行きますか」

「うんー」

内心つぐみと2人つきりで羽沢珈琲店に向かうのは少し気が重たかったからな、ここで丸山さんが現れたのは不幸中の幸いだ。

一方つぐみは不満そうな顔している。こいつは俺と2人つきりではない時は普通の女の子のフリするからな。厄介やつだよ本当に

こうして俺はつぐみから弄られることなく安全に羽沢珈琲店に到着する。

「文化祭の話してつぐみちゃんのお店と関係あるの？」

「はい、実は俺達メイ…喫茶店をするのでコーヒー豆を提供していただけないかと交渉に」

「文化祭でつぐみちゃんの家のコffeeが飲めるなんて…！絶対行列ができるよー」

「んもーうー！彩さん言い過ぎですってー！」

言えない。喫茶店とは言ってもメイド喫茶なんて…知られたら丸山さんにドン引きされてしまうかもしれない。

当日まで絶対にメイド喫茶だとバレないようにしなければならぬいな

「んじゃあとりあえず、お邪魔します」

店に入る時の適切な言葉ではないことは承知の上で俺はそう発した。

幼馴染の家に入るのだからお邪魔しますでも間違いないだろう。

それに小学生の時はクリスマスパーティーとか羽沢珈琲店で毎年やってたもんだ。

「いらつしやいませ…おやレイ君に丸山さんじゃないか、それとつぐみおかえりなさい」

先に自分の愛娘の帰りを迎えるもんだろ、と思っただがここは店だ。店員ならば客をもてなすのが優先か。

「レイ君は来るの久しぶりなんじゃないかな？中学の時は夜によく1人で来てたのに」

「ちよいちよい、余計な情報を喋るんじゃない義嗣さんや」

「お父さんなんの話し？」

「つぐみは気にしなくていいんだ、それよりも手伝わなくていいのかわ？」

「そうだった！お父さんすぐに着替えてくるね！」

つぐみはそう言うと言つて自宅の家と繋がるドアを開けドタドタと音を立てながら自室へと向かうのであった。

「私はー優雅にコーヒーでも飲んでようかな？」

「丸山さん、実は最近はいいい茶葉が入ってね、飲んでみないかい？」

「ええ！いいんですか!?飲みます！」

「試作のケーキもあるんだ、一緒にどうだい？」

「んー！是非！お願いします！」

「はは、丸山さんはひまりちゃんと似たような反応するから提供する僕も嬉しい気持ちになるよ」

「今すぐ準備するから好きな席に座って待っててくれないかな？」

「はい！待ちます！」

丸山さんがひまりと似たような反応をするだ…？

何言ってるんだよ義嗣さん、ひまりと丸山さんとは天と地ほどの差があるだろうが。

あんな変態女を丸山さんを一緒にしないでいただきたい。丸山彩は俺の天使になるかもしれない存在なんだぞ!?

どこぞの赤い彗星さんが特定の女性に母性を抱いてたようなニュアンスで俺は心の中で相手もいないのに叫んでいた。(虚しい)

「どうぞ、食べ終えたら感想よろしくね」

「わーいー！っただっきまーす♪」

うん、天使になるかもしれない存在じゃない。もう天使だった。どうしよう母さん、俺この人のこと好きになっちゃう…って？

丸山さんって俺と一緒に帰りたくて2時間も羽丘の物陰でスタンバってたんだよな…?

なんで俺みたいなのやつのためにそこまで…?

おいおいそれってよ、まさかよ

「(アサシンなのは…?)」

と俺の中に何度目かもわからない。そして正しい予想なのかもわからない予想が立った。

でも考えてみてほしい。好意すら抱いてない相手を一体どんな理由で2時間も待つのだろうか。

もう2時間も待つなんてそれは彼氏がデート当日残業で2時間遅刻しても待ち続ける彼女の精神と同等の心構えなのではないだろうか!?

それに丸山さんは白鷺さんと仲良いはずだ。同じアイドルグループなんだし仲良いに決まってる!

これは本格的に怪しいのかもしれない。

「丸山さんありがとう、好評みたいだから秋のメニューに追加しようかな」

「秋!?次食べる時は秋なんですか!」

「もう夏のメニューは決まってるんだ、ごめんね」

「そんなん」

あれ、考えている間に丸山さん食べ終わってるし感想も述べてたみたいなんだけど?全く聞いてなかった。

「レイ君?」

「ぬわ!?なに!」

「ずっと丸山さん見つめてたけど…どうしたの?」

「え!?!いや、その…あはは!あははは!」

「????」

つぐみは頭がおかしくなったのか?と言わんばかりに首をかしげ俺を見つめてくる。

頭の中でアサシンのことを考えてたなんて言えるわけなく、言い訳も特に浮かばず俺は笑って誤魔化すことしかできなかった。

「つとー！そうだ義嗣さん、俺義嗣さんに話したいことがあって今日来たんですよ」

「なんだい？出世払いをようやく払う気になったのかい？」

「そ、それはまたの機会に……」

出世払い、とは俺が厨二病を患ってたあの忌まわしき中学時代、夜の羽沢珈琲店に訪れ

「マスター、いつものを」

なんていいコーヒーを注文していたんだ。そう飲めないのに、中学生の俺には毎日コーヒーを頼む金なんてないものだから「出世払い」といいことを得てたんだ。

おかげで夜眠れなくて朝の授業は寝てたな、それは今とさして変わらないか……。

でも目は昔に比べ光を取り戻していると思うぞ、香澄がみんなに見せた生徒手帳の顔写真では目なんて死んでたからな。

「ではまたポエムを聞かせてくれるのかな？」

「あんたちよつと黙れよ!?!」

恥ずかしさのあまり机を叩き俺は立ち上がり義嗣さんに指をさしながらそう発言する。

「レイ君、指を刺すのは良くないよ」

「あ、すみません」

義嗣さんに指摘され俺は萎縮してしまう。

「じゃなくて！真面目な話なんですよ」

「……ほう真面目な話し、ね」

「ゴクリ」

なんで丸山さんが唾を飲むのか、それは置いといて俺は本題に入る。

「実は文化祭の部活の出し物で喫茶店をするんですよ」

「ほう、喫茶店」

「それで……少しでいいので羽沢珈琲店の使用している豆も提供していただければとー」

「……………」

「もちろんお金は払います！払える分だけいただければ！」

「ふむ、なるほど」

うう、あまり協力的な感じには見えないな、返答も単純なものだし……やはり無理か

「僕の店の豆を使うのは一向に構わない」

「ツ！本当ですか!？」

「ただ、君が引いた豆で入れたコーヒーが家の味になると思うのかい？」

「そ、それは……」

「家の豆を使ったところで引き方、入れ方、些細な手順でコーヒーは味
が変化する。同じ味を再現するのはかなりの技量が必要なことなん
だ」

義嗣さんの言う通りだ。

羽沢珈琲店の豆を使えば店と同じ味を再現できるなんて思った
ことが自体、考えが甘かった。

声を聞いてわかる。義嗣さんは俺が甘いことを考えていたから
怒っている。早く謝ってこの話をなかつたことにしなければ……。

「だから僕が入れる」

「……………は？」

「君達には任せられない。当日は僕が入れるからそれを来たお客様に
提供したまえ」

「え、ええと……俺が言うのはあれですけど……正気ですか!？」

義嗣さんが当日コーヒーを入れてくれる!?

そこまで頼んでないのにやっていただけなんって……!

あれか?もし俺達が羽沢珈琲店で使用されている豆デースなんて
売り文句垂れて客を引き寄せ、飲みに来た結果全然違い、最悪の場合
客が減って経営が右肩下がりに状態に陥り最終的に店を畳むことを……
させないためにこんなことを!?

神崎滯、一瞬にしてこの考えに至ったのであった。理由はわからな
いが

「それに手伝う理由は他にもある」

「他、ですか？」

「……………それはまた今度話すよ」
「??」

義嗣さんは俺をしばし眺めたあと口を開こうとした、が途中で微笑み「それはまた今度話すよ」なんて匂わせなセリフをはいた。

「さて文化祭の日程聞かないと、その日は店を休むから7月は定休日なしでやろうか」

「えっと、本当にすみません…」

「いいんだ、気にしないでくれ僕が勝手に協力すると言ったんだ、レイ君は本当に気にする必要なんてないんだから」

本当に、頭が上がらない。

中学生の時から義嗣さんは俺の馬鹿みたいな話もちやんと返事をしながら話を聞いてくれた。

今回も俺の望みを、いやそれ以上に答えてくれた。

「義嗣さん、俺達絶対飲食部門、来場者数1位取りますから」

「……………当たり前だ、僕がコーヒーを出すのだから」

「そ、それは…そっすね」

なーに意気込んでるんだよ俺は、コーヒー入れるのは義嗣さんなのになー

俺達ができるのはコーヒー以外のメニューの提供、あとはひまり達の接客…正直あいつらの体えちえちだから男子達は飛んでくるだろう。

よし撮影はNGにしよう。してるやつがいたら容赦なく警察に突き出すとも宣言しておこうか。

「そうだ、レイ君も試作のケーキ食べていかないか？よかったら丸山さんももうひとつ」

「いいんですか！いただきます！最近運動頑張ったから食べても太らないよね！」

「あ、はいそうっすね…俺もいただきます」

ひと仕事終えたあとの久しぶりに食した羽沢珈琲店のケーキは、どこぞの有名店のケーキよりも美味しく感じるのであった。

有名人と一緒にアイスを食べたことありますか？

義嗣さんの試作ケーキを食したあと俺は羽沢珈琲店に残る理由も特になかったからすぐに出ていくことにした。

「ご馳走様でした。美味しかったです」

「お粗末様、文化祭の詳しい話はまた後日教えてくれ、こっちも準備とかあるから」

「了解です。つぐみ…経由で教えるので」

「助かるよ」

つぐみを経由するのは癪だが背に腹はかえられん、義嗣さんの連絡先を聞くのもあれだしな

「じゃあ私もそろそろ帰りますね、つぐみちゃんのお父さん！また試作作ったら是非試食させてくださいね！」

「はは、丸山さんは本当にひまりちゃんと似てるねー、同じこと言ってたよ」

だからひまりと丸山さんを一緒にするなって言ってるんだろ。本当に怒るぞ

「ではまた今度」

俺はそう別れの言葉を言い羽沢珈琲店を後にする。俺が出たあとすぐに丸山さんも出て羽沢珈琲店の前で少し2人で会話をした。

「さて丸山さん、俺このまま家に帰りますけど…途中まで送りましようか？」

「ええ、帰っちゃおうの…？」

やめてくれ、そんなチワワみたいな目で俺を見ないでくれ…！てかなんで寂しがつてるんだ？

「何か俺に用でもあるんですか？」

「よく聞いてくれました！」

前のめりになり顔と顔がギリギリ近づかないぐらいの距離まで顔を近づかせ丸山さんは俺にそう言った。

「実はね！今日めつつつたにこないアイス屋さんが近くの公園に来てるの！SNSで確認したから本当だよ！」

「はあ、それで？」

「レイ君と一緒に行きたいなーって」

「トウシク、何だこの子、本当に可愛ええ…」

俺は丸山さんに聞こえない声でそう言う。バレたらなんて言われるかわからないからな

「いいですけど…丸山さんの立場的に俺と一緒に行くのはまずいかと」

丸山さんはアイドルだ、そんな奴が白昼堂々と異性と公園でアイスクリームを食す。

それはもうデートと捉えられても仕方がないのでは？

「大丈夫！レイ君可愛いから男装している女の子って言えば何とかなる！」

「大丈夫じゃないと思うんだが!？」

「いいから行くの！ほら走るよ！」

「ちよっ！丸山さーん!!」

手を取られ無理やり引つ張られ俺と丸山さんはアイス屋が来ている公園へと小走りで向かうのであった。



数分後公園につくとアイス屋は本当に来ていた。

「あれだよあれ！色んな人がSNSに投稿しているバズるアイス！ずっと食べたかったんだ〜」

見るからに興奮している丸山さんを尻目に俺は周りを見渡す。

何処を見てもカップル。リア充ばかりだ…こんなところに俺達がいってもいいのだろうか？

「周り気になる？」

「！いえ、別に」

「じゃあ私達も恋人設定で行ってみる？」

「な、何言ってるんですか!？」

「冗談冗談ー、じゃあ姉弟設定で行こうか」

「いやなんで!？」

丸山さんの顔を見るが真剣な顔をしていた。恋人が無理だから姉

弟設定を無理やり推すためにこんな表情をしてるんだろうか。

「でも丸山さん、この人だからだとバレるんじゃない？」

丸山さんは先程俺のことを男装している女子という設定にすればいいと言っていたが…ここに丸山彩がいるだけで騒ぎになってしまふはずだ。

「心配ご無用、私サングラス持ってきてるから」スチャ

レンズが真っ黒のやつではなく薄いピンク色のサングラスをカバンから取り出しかけた。

正直似合いすぎてドキリとしてしまったよ、流石アイドルだ。

「じゃあ行くよー！」

「あ、はい」

並んでいる列に最後尾に加わり俺達はしばし待ち時間を過ごした。

その間はお互い最近あった出来事や文化祭の準備とか、丸山さんのクラスがどんな出し物をするのかなどだ。

その中でクラスの劇での話になり俺が白雪姫役をすると話をする
と

「絶対似合うよ！楽しみにしてるね！」

と言われて嫌だった劇の練習も少しだけ頑張れるような気がした。

「お待たせしました、お次の方どうぞー」

俺達が注文する番がやってきた。

丸山さんはペラペラと注文とカスタムを一言も囁まずに店員さんへ伝えていた。俺は特に食べたいフレーバーなんてなかったから丸山さんと同じやつを頼んだ。

「金は俺が払います」

「いいよ、ここはお姉ちゃんに任せて♪」

そういえばそんな設定だったな

「ふふ、姉妹ですか？」

「はい！そうなんですよー、うちの弟可愛いでしょ？」

「弟さんなんですか!?! てつきり妹さんかと…大変失礼いたしました、少しサーブスしときますね」

もう慣れたよ、俺を初見で男だと思ってくれた人はこの世にいただ

ろうか？

あ、いたな…こころさんのお父さん、あの人俺と会った時俺のこと小僧とか言ってたし…男だつてわかつてたよな？

いやそれは千紗さんから話を聞いていたから、なんだよ畜生てか男装している妹設定は？弟と言つてんじやんか。

「えへへ、サービスしてもらつたね」

「そうっすね…」

果たして喜んでいいものなのだろうか？よくわからなくなつてきたぞ。

「あ！あそこのベンチ空いたから座つて食べようよ！」

「あ、はい」

俺は否定もせずに1人で走つていく丸山さんの後ろについて行く。

後ろ姿のアイドルオーラがすごい、真正面の方もすごいけどさ

「ねえねえ写真撮つていい！一緒に撮りたーい」

「撮つてもいいですけどSNSにアップしちやダメですよ？」

「なんで？」

「ッ!？」

なんで？と言う丸山さんの顔がまたも真剣だった。それに声も少し低かつたような…？気のせいかな。

「考えてみてくださいよ、2人の写真なんて投稿したらファンは黙つてないですよ」

「んーそれもそうだね、じゃあ投稿しないから2人で一緒に写真撮ろうよー！」

「…：…わかりました」

なんでそこまでして俺と一緒に写真を撮りたがる？

よめたぞ、これは完全に俺に好意を向けている証拠だよな、これはアサシンであるか確認をしなければ

「はいチーズ、はーレイ君可愛い〜♪」

「いや、言い過ぎですよ」

「そんなことないよ！可愛いよ〜」

「くっ!？」

この人と話しているとどうも調子が狂ってしまふ。口を開けば可愛い可愛いと、あなたは蘭か？

でも蘭はそこまで可愛いって連呼しないよな？寧ろ丸山さんの方が言ってるの気がしてきたぞ。

「SNS用の写真も撮つとこつと」

丸山さんは色んな角度から何度もアイスを撮り、最後はアイスを片手に自撮りをしていた。

アイドルはいつもこんなことをしてるのだろうか。あの白鷺千聖さんもしてるのかな？

なんてことを考えながら俺は一足先にアイスを堪能していた。

「どう？やっぱ美味しい？」

「はい、丸山さんが進めるだけあつて凄く美味しいです！」

「口にあつてよかつた〜私も食べよつと」

「それはそうといいんですか？」

「へ？なにが？」

「だって羽沢珈琲店でケーキ2個食べたんすよ？アイスも食べて…大丈夫なんですか？」

アイドルなんだし体型の維持つてのは気にするだろ？こんなに沢山食べたら太るのでは？

なんて言えないからそう伝わるようなニュアンスで俺は口を開く。

「い、いいの！今日は！」

「丸山さんがそういうなら…」

俺は素晴らしい残りのアイスをたいらげた。

この季節やはりアイスは美味しい気がする。味なんて春夏秋冬同じなのにな、なんでか知らないけどアイスは夏が一番美味しく感じる。

丸山さんへ視線を向けると、とても美味しそうにアイスを食べていた。ずっと眺めたかったが眺め続けるのもあれなものだから俺は反対方向に視線を移す。

「ねえ見てみてお姉ちゃん！僕ちゃんと一人でゴミ捨てれたよ」

「偉いね僕くん、でもさっきのゴミは燃えるゴミだよ？ちゃんと燃え

るゴミ用のゴミ箱にいれた？」

「うんうん、カンカン入れるところー」

「もう、ちゃんと分別しないとお仕事困る人が増えちゃうよー」

「ごめんなさい…次から気おつけるね」

「うん、もしカンカン捨てる場所に僕くんのゴミが残ってたら回収してちゃんと捨てよっか」

「うんー」

なんていい光景なんだ。

俺は僕くんが成長した瞬間を目撃してしまったぞ、それにお姉さんもすっかりしていたなーうちの姉貴が果たして同じ行動できるかと言われたら言えないな

「姉弟愛を感じるシーンだったね」

「へ!? あ、はい!」

丸山さんはいつの間にか立ち上がり先程の姉弟を眺めながらアイヌを食していた。

「レイ君はお姉ちゃん、いるの?」

「……いますよ」

「どんなお姉ちゃんなの?」

どんなお姉ちゃん? そんなことを今まで他人に聞かれたことないからな、なんて答えればいいんだろうか。

「……目が離せない危なっかしいやつ、ですかね、俺がいなかったら飯とか外食ですましてしまいそうだし? 早死してもおかしくないぐらい」

「そんなの! お姉ちゃん」 「でも」 ツ!

丸山さんは何か言いかけていたような? 俺がでも、と言って途切れてしまったようだ。

少し間を開けたが話の続きがない。なら話してもいいのかな?

「でも、誰もが認める天才なんですよ」

「天才?」

「そう、とある仕事をしてるんすけどーその仕事界限では姉貴のことを知らない人はいないほどの有名人物でしてね」

心底イラつくやつだけど天才であることも事実だ。

「それに小さい頃は結構俺達の面倒見てくれてたんすよ」

俺達とは俺とあの変態幼馴染染集団達のことだ。俺達が小さい頃は一緒に遊んでくれたしなんなら色んなことも教えてくれた。

「多分丸山さんはさつきそんなのお姉ちゃんじゃないと言おうとしたんですよね?」

「う、うん」

「他人から見られたら確かにそうかもしれない。でもそんな姉貴だからこそ俺が立派に成長できたと思うんすよ」

だって姉貴がなんでも出来る完璧超人ならさ、料理とかの家事は全部姉貴に任せることになるだろ?

その点姉貴が劣っていたから俺がやるしかなくて、必然的に能力が身についたんだ。

それに関しては感謝してる。ってこの言い方だと姉貴がゴミ人間でよかったと思ってるみたいにつえられるな

「お姉ちゃんは今何処にいるの?」

「今ですか?海外にいますよ、そのうち帰ってくるんじゃないかな?」

「海外にいるの!?!」

「あ、はい今は出張中で」

「んーお姉ちゃんならちゃんと弟の面倒見ないとダメだと思っただけどなー」

「まあそれは家庭それぞれですよ、俺は家を出るまで姉貴の面倒見るって約束してますから」

「そうなんだー私の家はちゃんと妹の面倒みないとーって口酸っぱく言われるよ?」

まあそれが一般的な家庭だよな、親が姉に対してそう言うのだから。

しかしそんなごく普通の家庭像なんてうちには無い。

なんせうちは両親が海外出張に行ってるから家にいない。

まずそこから普通の家庭とはかけ離れていると思っただ方がいいか。

「お姉ちゃんに頭撫でられたことある?」

「……まあありますね」

「じゃあ褒められたことは!？」

「いや撫でられたことあるなら褒められたこともありますよ、そりゃ」
小学生の時は今と比べたら優しく接してくれてたからな、生意気なこととも言つてなかつたし

そもそも俺が成長したからあんな態度をとるようになったのではなく、姉貴が高校に入ってからおかしくなったのかもしれない。

「じゃ、じゃあ手料理は食べたことある!？」

「料理…?」

俺のグラビア雑誌燃やして作った焼き芋なら食べたことあるけど…あれは果たして手料理と呼べるのか？

「いや、ないですね」

考えた末あれは手料理に入らないと判断して俺は丸山さんの質問に答えた。

「本当?ならよかったー」

「はい?」

「ううん、なんでもないよ、私明日の準備あるから!じゃあまた明日ね!」

丸山さんはぴゅーんと一瞬にして俺の視界から消えてしまった。

また明日、というのは明日も羽丘の校門付近の物陰でスタンバってるのだろうか。

明日はクラスの劇の練習もあるしサークル活動もあるんだよな

レイはしばらくベンチに座りながらそんなことを考えていたのであつた。



少し長くベンチに座りすぎていたな、アイスを買った客が席を探している中俺が1人でアイスも食べずにずっと座ってたもんだから

「早く退けろよ」

と言わんばかりの視線を感じ取ったから急いで出ていった。

彼氏彼女揃って同じような視線を送るとは…仲がいいこと、羨まし

いすねー

1人でとぼとぼシヨンボリドルフ状態で自宅へと向かっていた。今日は久しぶりのオフだったのに大変忙しい1日だった。オフとは一体なんなのだろうか。

今日は軽く夜ご飯をすませて早めに寝よう。明日からまた忙しくなるのだから。

え？つぐみとの約束は守らないのかって？

つぐみに聞かれていると知ってながらシコれるわけないだろ。何言っただよ

そんなことを考えながら自宅に着く直前にある曲がり角を曲がる。すると家の前に誰がいることを目視で確認し、俺は咄嗟に角に隠れ様子を伺う。

誰だ？誰がうちの家の前にいるんだ？

巴か？ひまりか？それとも蘭か？いやモカか？まさかつぐみが監視に来たとかか？

俺の脳内に溢れ出る考えられる人物は全員変態幼馴染集団のメンバーだった。

てか俺の家知ってるの幼馴染ぐらいだからなーあいつらに気づかれると何してくるかわからないからな…ここはちゃんと誰か見極めないとな

蘭とかなら比較的対応に関しては楽だと思っただけだな…。

チラリと角から様子を伺う。

クソ、西日で容姿の確認ができないぞ、シルエットだけならわかるんだが

胸の大きさにひまりではないな、あと髪も下ろしている？長さ的にモカ、つぐみ、蘭ではない。

「！」

こつちに影が来るぞ…！

先程の考えから推測するに巴の可能性がかなり高い！

逃げる！

「はっ！」

後ろを振り返ると近所におばちゃん集団が俺を見てヒソヒソ何かを話していた。

「いや違うんですって！家の前に誰かいたから俺は様子を見てて！」

「レイ」

「ひっ！ごめんなさい、頼むから帰ってくれないか!？」

俺は完全に巴だと思い込み姿も容姿を確認せずにそんなことを言ってしまった。

これで巴じゃなかったら失礼極まりないぞ

「なにを言ってるの？」

「……あ？」

恐る恐る目を開け目の前にいる人物の容姿を確認する。

腰までは届かないけど長い銀髪、黄金色の何を考えているのかわからない瞳が俺を見下ろしていた。

「友希那さん!？」

「遅いわよ、いつまで待たせるつもり？」

「遅いつて友希那さん来るって知らなかったもんで……」

「？連絡したつもりよ」

「!」

俺は急いで携帯を取りだしトークアプリを確認する。が、友希那さんからそんなメッセージは届いていなかった。

「多分ですけど俺の前のアカウントに送ってませんか？」

「……そのようね」

友希那さんは携帯を確認してそう答えた。

家の前にいたのは変態幼馴染集団ではなかった、友希那さんだったのか。

「さっきのセリフ」

「ん？」

「ごめんなさい、頼むから帰ってくれないか……って今日はお邪魔することはできないのかしらっ？」

「ッ！違いますよ！俺の苦手なヤツが来たのかと勘違いしてたんです!」

「なら今日家に上がってもいいの？」

「はい！是非！上がっていつてくください！」

俺は大声で友希那さんにそう言う。

するとどうだろうか、先程ヒソヒソ話していた近所のおばちゃん集団がききやきやー言い出した。

いい歳して気持ち悪いぞおばちゃん共、なにが「零君も大人になつたねー」だ。

こちらら下着姿の女子達と密室を過ごしたこともあるんだぞ、大人だろうが!?

ち

意味不明なことを盾にして心の中で反論するレイなのであった。

「ここは人目にたくさんつきます、早く家に入りましょう」

「ええ、そうしましょう」

友希那さんはなんで今日いきなり俺の家に来たんだ？

あとちやんと家の場所覚えたんだな…もう近辺の神崎さん達に迷惑をかけなくなったただけでも俺は成長を感じるよ

「さあどうぞ」

俺はドアを開け友希那さんをリビングに案内する。友希那さんは慣れたように床に荷物を置きソファーにぼふと座り深く息を吐いた。

「ずっと立ってたから足が疲れたわ」

「それは申し訳ないっす」

「いいのよ、私がメッセージを送る相手を間違えたのが悪いのだから」

「うん相手は間違えてないよ、アカウントを間違えてるんですよ」

相手って言い方でも間違いではないか、いちいち反論して面倒臭いやつだと思われたかもしれない。

「ふふ、そうねレイの言う通りだわ」

目をつぶり微笑みながらそう答える友希那さんを見て俺は見とれてしまう。

女神だ、女神が俺の家のソファーでくつろいでいる…。

って家に来た理由を聞かないと

俺はリビングの椅子に座り友希那さんに話しかけた。

「友希那さん、今日はどういった目的で我が家に？」

「夜ご飯をご馳走してもらいたいと思って」

「そんなことですか？なら喜んで！」

「……………」

友希那さんは何か言いたげそうに口を開けかけたがその後特に発することなく携帯を取りだし画面を凝視し始めた。

すると友希那さんにはへーと微笑みソファァーにゴロンと寝っ転がった。

あの表情を見せるということは猫の写真でも眺めているのだろう。

「…………家でもそんな感じなんですか？」

気になった俺は気になったことを素直に言葉にだし友希那さんに聞いたのだした。

「家ではこんなことあまりしないわ」

「へーなんでなんですか？」

「…………家には父がいるもの、いつ部屋に来るかわからないから落ち着かないわ」

「あーわかりますそれ、俺もいつ部屋に姉貴がやってくるのかヒヤヒヤしながらしてましたね」

「？何を？」

「だから…………」

危ない危ない。友希那さんにはまだ早い性事情を話すところだった。

てか何性事情話そうとしてんだよ俺は、変態か？あいつらに影響を受けて俺までも変態になってしまったのか!?(元からです)

「んんっ！ほら、姉貴にプレゼントの準備とか、ね？」

「レイは滯奈のことが好きなのね」

「好き？はは、何を根拠に…………あの人は姉貴であつて家族、好きとかそんな感情はないですよ」

ちなみにだがこの作品は健全な作品だ。

決して近親相姦のようなエロ同人誌作品でないことをしかと心に受け止めていただきたい。

そう、健全なのだ。

「私は父のこと好きよ」

「……そうゆうのよく平然と言えますね」

悪いが好きだとしても俺は人前でそんなことをサラツと言える自信なんてないぞ。

この人普通の人が恥ずかしがることの半分以上は平然とやるよな、羞恥心があんまりないところ憧れるわー

「そうだ、レイのご両親は？今までに何度か上がったけど会ったことないわ」

「あんたりサさんから聞いてただろ、俺の両親が海外出張してるって」
「……てつきりもう帰ってきてるのかと思っただわ」

「帰ってきてるならそう簡単に友希那さんを家にあげませんよ」

特に母さんがいる時に家に上げてみる

「零ちゃんに彼女!?!今日は赤飯よ!零ちゃん炊いて炊いて!」

なんて言い出すに決まってる。しかも俺に赤飯を炊けと言うことも想像できる。

「レイのご両親……少し興味あるわ」

「なんでですか、んー軽く話すと母さんは姉貴とほぼ似た性格しててー親父が真面目と言うか、なんとと言うか……」

真面目と言う表現が正しいのかわかりかねるな……親父とはもう数年近く会っていないし昔と今とで少しは性格が変わってる可能性も、無きにしも非ず?

小さい頃なんて

「零、父さんと野球をしよう」

「あ、はい」

「零、父さんとサッカーをしよう」

「あ、はい」

「零、父さんと一緒にランニングに行かないか?」

「え、それはいやだ」

こんな感じで遊びに誘ってくれてたっけ

巴達と遊び始める前は友達6割、親父4割の比率で遊んでいた。

積極的に色々誘ってくれる世間一般的にいい親父だったのではないかと今になって思う。

それとよく弦巻文庫の本社に連れて行ってくれてたな、そのおかげで芹沢君（市ヶ谷有咲の旧姓）とも出会えたし。

「一度会ってみたいわ」

「いやー会わない方がいいですよ、母さん面倒臭いので」

姉貴がもう1人増えるんだぞ？話の間に入る俺の見になって欲しい。ツツコミすぎて死んでしまうぞ。

「さてと、もう俺の両親の話はいいでしょ、帰るのがあんまり遅くなる」と友希那さんの父親も心配になるはずです。手っ取り早く準備するのではしお待ちを」

「ええ、待つとくわ」

そう答えると友希那さんはまたもソファーに寝っ転がり携帯の画面を見てはふにやーと可愛い笑顔を作って いた。

普段実家であるようにリラックスして見れないのであれば、ここにいる間は好きにさせよう。

それにこの顔を知ってる人が人類で俺しかいないってだけこれからの人生優位な立場になれるような気がする。

しかと脳裏に刻みこもう。

訳の分からないことを考えながらレイは厨房へと向かう。

今日は元から軽めに夕食をすまそうと思っていた。軽めにとっても食事のバランスはしっかり補わければ。

レイは野菜室からキャベツを取り出し、まな板を引いては取り出したキャベツを置き、包丁を取り出す。

「よし」

数年間磨き上げた包丁裁きをこれでもかと披露し、キャベツはあつという間に千切り状態へと変わった。

続いてチルドから豚肉を取り出し、先程と同様まな板に並べこれまた適当な大きさに切り分ける。

その後フライパンに油を引き、豚肉を綺麗に並べる。火が通ってきたところで伝家の宝刀、生姜焼きのタレを適量かけた。

いい感じになったと判断したレイは豚肉を皿に並べ、先程千切りしたキャベツを盛る。

「生姜焼きの完成、っと」

このまま定食として友希那さんに振る舞わなければならぬ。肉があるなら米と味噌汁は必須、そう判断したレイは冷凍庫より1人分として分けて保存していた米を2つ取り出した。

冷蔵庫に残していた今朝作った味噌汁の残りを取り出し厨房に並べる。

この後やることは1つ

そう、この並べたものをレンチンするだけだ。

「友希那さーん、もうそろそろで座っててください」

「ええ、わかったわ」

友希那さんはソファから立ち上がりすぐにテーブルの椅子へ腰を下ろす。

そんな様子を横目で見ながら俺は米をレンジにぶち込む、カチカチだった米は数分で炊きたてかのようなホカホカのご飯へと蘇った。

続いて友希那さんの分をチンしようとした時

「ふふ、レイがヤリチンだって話は本当だったのね」

「!？」

一瞬なにを言ってるんだこの人、頭大丈夫か？病院連れていこうかな…と思ったが

以前姉貴が無知な友希那さんにヤリチン、なんて単語を発したから俺が無理やり「レンチンをやりすぎる人」と説明したんだった。

ならこの場合の返答は

「はい！俺はヤリチンなので！」

こんなセリフ人生で言うはずがない。てか言うようなことをしてる人もこんなに元気な声で言うこともないと思う。

一度ついた嘘は貫き通そう。俺はヤリチンだ、ヤリチンでもレンチンをやりすぎる人だけだな

そう思っていると友希那さんに渡す予定の米が解凍された。確認をするがホカホカ状態の米だ。

続いて味噌汁をチンしようと思い1人分よそぐ

「レイ、レンジから煙が出てるわ」

「え!?うわ、本当だ…」

友希那さんから指摘され急いでレンジを見るが…本当に煙が出ていた。

「おいおい、まさか壊れたのか?」バシバシバシ

レイはレンジを叩くも煙は止まるどころか更に増した。

「はは、こいつはもうダメだ、新しいの準備しないとだな」

トドメを指したの叩いたのが原因かもしれないが、お前さんもうちつと頑張ってくれよ、こないだトースター替えたばかりだぞ?

「レンチンのしすぎよ、ヤリチンもそこそこにしな」と

「うう、ですね」

なんだそのあたかも俺が性病にかかったような言い方は、やめていただきたい。

「仕方がない、味噌汁は沸かしなお願いします…好みの温度とかありますか?」

「熱々は嫌よ」

「了解つす」

なるほど、友希那さんは猫舌と、へー可愛いじゃん

俺も熱々の味噌汁はそこまで好きではない。ので友希那さんが好むであろう温度に調整し、すぐによそいテーブルへと運ぶ

「お待たせしましたー神崎家の生姜焼き定食ですー」

「この短時間でこのクオリティ…流石レイね」

「…市販のタレ使ったので」

伝家の宝刀とはよく言ったものだ、近くのスーパーで手に入るタレなのにな

「では、いただきます!」

「いただきます」

その後友希那さんからは美味しいとお褒めのお言葉をいただいた。

やはり誰かに美味しいと言ってもらえると今まで料理を続けて良かったと心底思う。

と思うのは何度目だろうか。

何度も思うから察するに今後も同じよう嬉しいと思いつながら俺は料理を振る舞うんだろう。

「ご馳走様、本当に美味しかったわ」

「はい、お粗末様です」

俺は食器を洗い、片付ける。

もう慣れた作業だからすぐに終わらせ俺はリビングのテーブルに腰を下ろす。

「さてと、もう時間も時間ですし…帰りますか」

「……そうね、美味しいご飯をいただけだし、夜の作曲活動もこれで頑張れそうだわ」

ふふと笑いながらそう答えた友希那さん

夜の作曲活動…うん、なんか夜のつて着くだけでなんか卑猥に感じてしまうな

これは有名な話だがポケモンの技目に夜のつけると卑猥になる、例えば夜のしおふきとかな

「では家まで送りますよ、夜道は危ないので」

「ええ、お願いするわ」

俺達は家を出て友希那さんの自宅へと向かう。

昔シロを飼うために一度友希那さんの家には訪れたことがあるんだ。家の場所は覚えている。

友希那さんはそれを知ってるのか前に出て道案内をする訳ではなく、俺の隣を歩き談笑をしながら、楽しいひと時を堪能していた。

「ふふ、レイと話すと楽しいわね…すぐに家に着いたわ」

「そ、それは…あ、ありがとう、ごさいます?」

家に着いた途端にそう言われ俺は動揺してしまう。

「またいつでも来てください」

「今度はRoseliaのメンバーを連れてくるわ」

「……待ってます!」

友希那さんとリサさんならまだしもいきなりRoseliaのメンバーを連れてくると言われた俺はすぐに返事ができなかった。

しかしここで返事をしない訳にはいかないもんだから俺は待つてますと返事をした。

「(氷川紗夜さんとは面識ないんだよな…)」

氷川日菜さんとは同じ高校だし何度も話したことはある。でも姉さんの方は本当に何も知らない。

Roseliaに所属しているということはアサシンの可能性はあるのだが…これを機に話せるのなら俺含め6人分のご飯を用意することは安いことと捉えようか。

「あ、リサだわ」

友希那さんが向かいの家を見てそう言葉を発した。

俺は友希那さんの向ける視線の方向を見てみると家の2階、多分リサさんの部屋から俺達を除くリサさんがいた。

気づかれたリサさんは一瞬隠れようと素振りを見せたがカーテンを思いっきり開け笑顔で俺達に手を降っていた。

俺はそれに答えるよう大きく手を振り返す。

「では友希那さん、俺そろそろ帰りますね」

「ええ、送ってくれてありがとう。あまり夜更かしせずにはすぐ寝るのよ」

「任せてくださいー!」

これは意地でも早く寝ないとだな、友希那さんが夜更かしせず寝ろって言うんだぞ、シコってる場合じゃない!!

友希那さんにもう一度別れの言葉を言い俺は友希那さんと別れた。

その後ふと気になりリサさんの部屋に視線を向けるとリサさんはまだ俺を見つめていた。

リサさんは俺が視線を送っていることに気づいたが…今度を手を振ることなくカーテンを閉め部屋に籠ってしまった。

心做しかきつい視線を向けられた気がした…。

リサさんは時々本当に今のリサさんか?と思うほど雰囲気が変わる時がある。正直いえば怖い、今回も似たような…。

「気のせいかな」

俺はそう思いバイト先のコンビニでアイスを買ひ、自宅に戻り風呂

に入った後本日2度目のアイスを堪能しすぐに眠りにつくのであった。



昨日、俺は帰宅後すぐにとこへつき、夢の世界に入っていた。

夢の内容は大きな胸を鷲掴みして揉み続ける夢だった。相手の顔を見てないけど…。

そんな幸せな夢を見ていたノンレム睡眠状態の俺を叩き起すのはいつものアラーム、だと思っていたが…今回は違った。

「こらー！もう朝だよ！早く起きなさい！」

「うう、うるさいなーまだアラームなってないだろ」

「アラームはお姉ちゃんが止めました。お姉ちゃんが起こしたかったのよ」

「なんでそんなことするんだよ姉貴…」

眠い目をこすりながら俺はムクリと起き上がり姉貴に返事をした。

「朝ごはんできてるから早く降りてくるんだよ？」

「はいはい、着替えたら行くって」

アラームを止めてわざわざ起こしたいって…姉貴のやつ何を考えているんだ？

俺は寝ぼけたままカッターシャツに腕を通し、ズボンを履き、最後にベストを着る。

着替え終わり、起きてから時間が経ちだんだん脳が冴えてきたところで気づく

「あれ？姉貴って帰ってきてたっけ？」

待つてくれ。色々とおかしいぞ

姉貴は自分のことをお姉ちゃんなんて言わない。そもそも背丈も違っただし声も違った。

なんなら見た目も違っただ、髪の色が全然違った。姉貴の無駄に目立つ赤色の髪ではなかった…もつと薄かった、気がする。

じゃあ俺を起こしたのは誰なんだ…？

1階から物音がする。俺を起こした誰かが何かをしてるんだろう。ああ、朝ごはんができてると言ってたな

だとすると朝食の準備をしてるのか…。
どうしよう。1階に降りたくない。

ベランダに出て2階から飛び降りてこの家から逃げようと思うも
俺には飛び降りる勇気なんてなかった。

となると家を出るためには1階に降りて玄関から出ていくしか術
は残されていない。

本当に怖い。誰なんだ？俺の知ってる人なのか？そもそも昨日は
友希那さんと別れて帰ったあと鍵を閉めたぞ？

どうやって入ってきた？そして本当に誰なんだ!?誰なんだよ!?!?

俺は恐る恐る2階から1階へ向かう。階段を降りる際は音を立て
ずにゆっくり降りる。

俺はキッチンには向かわず玄関に向かう。すぐに家を出て交番に
行こうと思い、1階にいる誰かにバレないように音を殺してだ。

頑張った甲斐があり俺は見事に誰かにバレることなく玄関に着く、
ゆっくりと靴を履き、ドアノブに手をかける。

「(勝った!)」

さらば誰かさん、次は裁判所で会いましょうか!

「もう遅いなレイ君」

「ッ!」

誰かがこつちに来る!早く出ないと!

もう玄関まで来てるんだ!ドアを開けて外に出ればこつちの勝ち
だ!多少音が鳴ったところで時すでに遅し、俺はこの家から出ている
!

ドアノブに力を込めて思いっきり開けようとした。

しかしドアは開かない。鍵が閉まっていたのだ。

1階にいる誰かが鍵を閉めたのか!?なんて律儀な野郎だ…!

「!誰?!誰かいるの!?!」

音に気づいた誰かがそう発した。誰かいるのはこつちのセリフだ。
お前が言うんじゃない。

急いで鍵を開け今度こそはとドアを開けようとする。1回盛大な
大きな音を立てたんだ。気づいてこちらにやってくるに違いない。

もう一度ドアを開けるも今度はチェーンによりドアが少ししか開かなかった。

俺はドアを閉め急いでチェーンを外そうとするも

「ごらー！レイ君！朝ごはん食わずに行っちゃうつもりなの？」

「……………」

聞きなれた声が聞こえた。

先程まで声は聞こえていたが壁越しだし、恐怖心とかで知人の声だと思えなかった。

でもこの場で聞いてはつきりした。誰かはあの人だ。

俺は恐る恐る後ろを振り返る。

そこには脳内で想像していたあの人の容姿が完全に一致している人物が腰に手を置き、まるで説教するかのように立っていた。

「ま、まま丸山さん……！」

「もうお姉ちゃんの手料理食べないなんて損なんだぞ♪」

振り向いた先にはエプロン姿で自分のことをお姉ちゃんと呼ぶ丸山彩の姿があったのであった。

自称お姉ちゃんと言乗る赤の他人を知っていますか？

なんの変哲もない平日の朝、俺の目の前には血も繋がってない、自称お姉ちゃんと言乗る赤の他人が鍵を閉めていたはずの我が家に不法侵入していた。

自称お姉ちゃんと言い張る人物の名は丸山彩、パスパレのボーカル担当のアイドル、有名人だ。

「朝ごはんできてるよって言ったでしょ？食べないとお昼までお腹もたないよ?」

「?レイ君?」

「…………いや、だからってすぐに食べるとはならんだろ」

「……………お姉ちゃんの作った料理が食べれないとでも言うの…?」

「だからそのお姉ちゃんってなんなんですか?あとどうやって家に入ったんですか!?!」

目の前にいる丸山彩は自分のことを先程からお姉ちゃんと連呼していた。

俺のお姉ちゃんにでもなったつもりなのだろうか。

「それはレイ君のお姉ちゃんだからね!ピッキングでちよちよいのちよいだよ!」

ポケットから針金を取りだし俺に見せつけてきた。

やってることが泥棒と完全に一緒だ。うちにセコムが導入されていたら問答無用であんたを牢屋に入れてたのにな

セコム導入の件については今度両親に相談しておこうか。理由は近頃この近辺が物騒だからと言っておこう。

いやそんなことは今どうでもいいんだ。

どうやって入ってきたかは理解できた。でもお姉ちゃんと呼ぶ意味が一向に理解できない。

「最初の質問に答えてください、どうして自分のことをお姉ちゃんと呼ぶんですか」

「?それはレイ君のお姉ちゃんだからだよ」

「答えになつてない、そもそも俺の姉貴は神崎滯奈ただ1人だ」

「やだなレイ君ー私が真のお姉ちゃんだってまだ気づかないの?」

「なんですか真のお姉ちゃんって、お姉ちゃんに真もクソもあるか!」

本当になんなんだよ真のお姉ちゃんって

「いい加減にしないと警察、呼びますよ?」

「それはダメだよ!」

携帯をチラつかせそう脅すと丸山さんは急いで俺の手を握り通報
することを阻止してきた。

「わかったよ、話すから通報はやめて、ね?お姉ちゃんからのお願いだ
から」

上目遣いでそう発言する。何がやめてねだ、だいたい自称お姉ちゃ
んならば下の子のように上目遣いで物事を頼むんじゃない。

「それで?理由はなんなんですか?」

どうせまともな理由ではないと思うが…聞かないと先に進まない
気がする。

「……私ねずっと前から弟が欲しかったの」

「……………はあ?」

「妹はいるんだよ?あ!もちろん妹のことは大好きだよ?でもね…満
たされないんだよ、私の心は」

「弟が欲しい!何としても欲しい!両親にお願いだつて何度もした
…」

「おいおいまじか」

両親に弟が欲しいつてお願いしたつて…遠回しに子作り運動し
ろつて言ってるもんだろ

「クリスマスプレゼントも弟が欲しいつて願つても叶うことはなかつ
たの…」

「そりやそうだろうな」

「だから思ったんだ…弟ができないなら弟を見つけるしかないつて」

「……そうはならないかと」

「なるんだよ!」

「ッ！」

いきなり顔を間近に近づけ大声で丸山さんは俺にそう発言した。一瞬のできごとに驚いた俺は玄関で尻もちを着く

その際尾てい骨を強打し痛さのあまり若干半泣き状態だった。

「そんな時にレイ君、ううんゼロ君と再開したの」

「あの時か！」

白鷺さんに連れていかれた羽沢珈琲店で俺は丸山さんと面会した。がそれは初めてではなかった。

厨二病を患っていた過去の俺が昔丸山さんと出会いギアス（笑）をかけていたんだ。

「君と再開してわかったんだ、レイ君は私の弟になる人なんだって、もう…運命感じちゃうよね♪」

頬を赤らめ恥じらいながらそう言う丸山さんを俺は冷ややかな目で視線を送る。否睨みつけていた。

「それに可愛いし、面白いし、私の理想の弟像なの！あとは彩姉って呼んでくれれば満点だよ」

「あっそうですか、絶対呼ばないので、もう帰ってくれませんか？」

ようはなんだ？ずつと弟が欲しいと願いつけていたところに俺が現れて？見た目も可愛くて面白くて丸山さんの理想の弟像だから俺を弟にしたい、と

「ごめん、意味がわからない。

「そもそも血が繋がっていない時点で本当の姉弟じゃない。俺とあなたの関係は未来永劫偽物の関係だ。正直ガツカリだよ、あなたはこんな人じゃないと思っていたのに…」

「ご、ごめんなさいレイ君！私はレイ君のお姉ちゃんになりたいくて！君の面倒を見たいだけなの！幻滅しないで！お姉ちゃんなんでもするから！お願いだから！」

「ええーい！離せ！」

丸山さんは俺を逃がさんと強く抱きつき手を解こうとしても解けないほどの強度で俺を締め付ける。正直苦しい。

「ちよ！離せ！苦しいから！」

「お姉ちゃんのこと嫌いにならない…?」

「ツク!ならない!ならないから一旦離れろ!」

「うん!わかったよレイ君!」

「はあ、はあ、はあ…」

な、なんなんだこいつ…力強すぎだろ、アイドルだからか?アイドルだからなのか!?

「さて!真の姉弟になれたことだし朝ごはんにしようか!お姉ちゃん料理頑張ったんだよ?」

「あ、はい」

まずい、主導権が切り替わってしまった。

今後丸山さんが家にやってくるのは困る。それよりつぐみのやつは今の状況をどう思ってるんだ。

携帯の画面を見てみるとつぐみからメッセージが来ていた。

『ちなみに彩先輩は朝の5時には来てたよ』

と来ていた。いらねえんだよそんな情報。つぐみのやつさてはこの状況楽しんでやがるな。

『それと昨日友希那先輩が言ってたヤリチンってなに?そのままの意味?』

俺はそのメッセージを見て驚愕する。

「レイ君どうしたの?」

「いや!な、なんでもない!」

急いで携帯をポケットにしまいキッチンのテーブルに備え付けられている椅子に腰を下ろす。

「さあ食べて食べて!レイ君のためにお姉ちゃんが愛情を込めて作ったよ!」

「あ、あはは…いただきます」

見た目はなんの問題もなさそうだ。トーストにスクランブルエッグ、そしてベーコンにヨーグルト、すごいごく普通の家庭的な朝食だ!

「食材はお姉ちゃんが全部買ってきたから心配しないで!あと今日の夜ごはん何がいかとリクエストある?なんでも作るよ!」

「え!?今日の夜も来るの!?!」

「来るって言うよりもうここに住む感じかな?」

「住む!?!」

冗談じゃない!なんで血も繋がってない自称お姉ちゃんと呼ぶ変なやつと一緒に暮らさないといけないんだ!?!

てつきり定期的にやってくるだけかと思ってたのに!いやそれも嫌だけどき!?!

同居するって…こんな状況俺は耐えられない。

いやいやアイドルと同じ屋根の下一生に生活できるから嬉しいだろ…?だと?

アホか、それは正常なアイドルならな、こんな自称お姉ちゃんと一緒に生活なんてできるか!

第一既につぐみに監視されている生活送ってんだぞ!?!さらに1人増えるなんて絶対ごめんだ!

なんととしても、なんとしてでも…!家に来ることは百歩譲ってやるさ!でも泊まるなんてことを今後言い出さないようにしなければ!

……ここはあの人に助けを求めるしかない。

あの変態クソ眼鏡が恐れる人物だ、丸山さんもあの人からお灸を据えられるとしばらくはお姉ちゃんごっこもしなくなるはずだ。

「レイ君…お口に合わなかった?」

「!いい、いえ」

「不味かったら言っただろ?弟君の好みの味にちゃんと調整するから」
♪

とうとうレイ君から弟君に呼び方変わっちゃったよ、だいぶお姉ちゃんに侵食されてるんだろうな…。

このままだと赤の他人に戻れなくなってしまうぞと誰かに言いかねられない。

「い、痛い!は、腹が…痛い!昨日アイスを2個食べたからか…?」

「ちよつと!大丈夫!?!」

「全然大丈夫じゃない、死にそう…彩姉ちよつとお手洗いに行ってくるね」

「ツ〜！レイ君…！」

俺に彩姉と呼ばれ感動したのか涙を流しながら俺を見つめる丸山さんなのであった。

馬鹿め、お腹なんて痛くねーよ、ここから抜け出すためだったの、それと彩姉とさりげなく呼ぶことで上手く抜け出す作戦も無事に成功した。

俺が今後彩姉なんて呼ぶことは未来永劫ないだろう。

「よし」

トイレに着いた俺は鍵を閉めて外から鍵を開けられないよう片手で鍵を内側から閉める突起をずっと握る。その後空いたもう片方の手で携帯の操作をする。

そしてとある人物に電話をかける。

コールが数回鳴る。頼むからでてくれ、出ないと何も始まらない…！神に願うこと数秒、俺を救ってくれるであろう神は電話に出てくれた。

「…こんな朝っぱらから何？」

「美咲！頼む！助けてくれ！」

そう、俺が電話をかけた人物は奥沢美咲、俺のまともな友人だ。

「は？助けてくれ？…ごめん、今どうゆう状況なの？」

「状況?! えっと、家にお姉ちゃんと名乗る赤の他人がやってきて…一緒に住むとか言ってきてだな」

「へーアサシンじゃないの？」

「アサシンな訳あるか！てかあんなのがアサシンの正体とか俺嫌だよ!?!」

「うるさいなー、耳元で大きな声出さないでくれませんか？」

「ご、ごめん、でもそれぐらい必死なんだよ！」

相変わらず塩対応だな…友人なのだからもつと優しく接してくれてもいいのではないか？

それに助けを求めているのだから尚更だろうが！

「具体的に何すればいいの？あたしが神崎さんの家に行けばいいの？えーやだなー」

「なんで嫌がるんだよ!？」

「実は千聖さんからあんまり君に絡むなって忠告受けてるだよね」

「はっ!?なんでだよ!？」

白鷺さんが美咲に俺へ絡むなど忠告してるだ…?なんでなんだ?
てかそんなことより!

「それはあたしがアサシンのしよ」「わかったから!白鷺さんだ!白鷺さんの連絡先を教えてくださいませんか!？」まったく、話聞きなよ…」

俺のプランは美咲に電話をして事情を説明して白鷺千聖の連絡先を入手することだ。

あの変態クソ眼鏡が恐れる白鷺さんだぞ、丸山さんも恐れているはずだ。

なんなら検索履歴を見られて…って!絶対他人を弟にする方法的なやつ調べてただろあの人!

「白鷺さんの連絡先?一応持つてるけど…なんで?」

「だから言っただろ助けてって!白鷺さんなら安全に対処出来る人物だからどうしても家に来て欲しいんだよ!」

「でもなー白鷺さん有名人だし、そんな人の連絡先ホイホイ渡すのはねー」

「俺と白鷺さんさんは知人だ!赤の他人じゃない白鷺さんも送っていいって言うに決まってる!」

「…:はあ、知ってるよ、神崎さんが白鷺さんと仲がいいってのは、いやってほどね」

「??？」

「あとで連絡先送るから、あ、私から聞いたって言わないでよね?知られたら私白鷺さんに怒られるかもしれないから」

「わかった、でも今度俺と絡むなって忠告された理由は教えてくれよな」

何も知らずに手助けをしてくれるかもしれない美咲をここで失うのは痛い。

できれば今後よき相談相手として関係を気づきたいところなんだが…。

「それはさつき答えようとしたよ、神崎さんが話聞かなかっただけ」
「いやそれは…」

「……気が向いたら教えるかもねー」
気が向いたらか：果たして美咲の気が向く日は何時になるのやら
いいや、今はなんとしても早く丸山さんに帰ってもらわなくては！
そんなことを考えていたら美咲から白鷺さんの連絡先が送信され
ていた。

俺は急いで白鷺さんを友達登録してメッセージを送ろうとするが
：いきなり電話をかけた方が必死さが伝わるか！

俺は入力していたメッセージを取り消し急いで電話をかけた。

コール音が俺の鼓膜を何度も震わせたせ、数秒後にはコール音から
女性の声へと切り替わる。

「はい、白鷺千聖です：どなたでしょうか」

「あ、俺です！神崎です」

「なんによ、あなただったのね、知らない人からの電話だったからすご
く緊張したじゃない」

「それはご最もです！でもどうしても話したいことがあつて
！」

「アサシンの正体は明かさないわよ」

「それじゃなくてですね：実は相談が」

俺は話した。朝起きたら丸山さんが俺の家に不法侵入しており、か
ついきなりお姉ちゃん宣言をしてきたことを

「はああああああああああああああああああああああああああああ

凄く深く、そして長いため息が携帯電話から聞こえた。白鷺さんの
ため息ってこんなに長いんだーと思ったが違うよな

ただ単に丸山さんの衝撃的な行動に対して呆れたため、こんなにも
大きなため息をついてるんだよな

「うちのメンバーが大変迷惑をかけたわ」

「ええ、本当ですよ」

「……って受け入れるのは早くないですか？俺が言うのはあれですけ
どにわかに信じ難いお話だと思うんですけど？」

おかしい話だろ、いきなり知人からあなたの友人が自称お姉ちゃん
と言つて不法侵入してきました。

なんて話聞いて信じるか？俺は信じれないぞ

「だって彼女携帯で他人を弟にする方法調べてたもの」

「ええ」

「他人を弟になんてできないのよとあれほど説教したのに…しかもよ
りにもよってあなたに目をつけていたとはね」

「はあ、そうかもしれないですけどだからつてすぐに受け入れるのは」
「じゃああなたは私に嘘の話をしたの？」

「いいえ！本当に今家にいるんです！」

今まで丸山さんにバレないよう小声で話していたがこの時だけ全
力で否定してしまったものだから音量が大きくなってしまった。

「レイ君ー？大丈夫？お姉ちゃんが背中さすろっか？」

くっ、聞こえていたのか。ここは何とかして誤魔化さないと

「い、いえ！大丈夫です…てかこっち来んな」

「本音ダダ漏れよ」

「いいんですよ、どうせ聞こえてないんですから」

聞こえない音量で本音を漏らしてたら問題ないでしょうが。

「とにかく俺の家に来てください。そして丸山さんを連れ戻してくだ
さい」

「いいわよ、今日は私と彩ちゃん朝から2人で撮影あるし、元々迎えい
く予定だったし、なんなら今向かった途中だったから」

「ごめんなさい、目的地変更してもいいかしら？ほら住所を言いなさ
い」

「あ、はい」

すんなり受け入れてくれた。てか既に移動中だったのかい、なんだ
Pの車か？

俺は返事をしたあと口頭で住所を伝えた。するとすぐに向かうと
白鷺さんは素晴らしいその後すぐに通話は終了した。

「本当に来てくれるんだよね？」

なんかおかしいぐらいすんなり要件を聞き入れてくれたよな、後日な

んかこのことを利用して脅されたりしないよね？ね？

俺はトイレに籠ってたものだから何もしてないが水を流す。水を流すことで音を立て、あたかも本当にトイレをしていたかのように見せかける。

さてと、俺はこれから丸山さんがこの家を出ていくことを阻止しなければならぬ。

疑問に思っただろう。何故先程まで帰って欲しいと心の底から思っていたのに今度は出ていくとを阻止しようと矛盾したことを言ってることに

それはだな丸山さんを二度とこの家に入れさせないためだ。

俺の考えはこうだ。

白鷺さんが来る↓白鷺さんが俺の家にいる丸山さんを見つける↓説教をする↓二度と家に来ないと約束させる

どうだこのプランは！ついでに俺のことを弟扱いすることも今後一切しないと約束してもらおうか。

早く白鷺さん来ないかなー、丸山さんの慌てふためく顔が見て見たいぜ、ははははは！

「おかえりレイ君、遅かったね？1人でちゃんと全部できたかな？」

「俺をなんだと思ってるんですか、それぐらい1人でできますよ」

「だってだってレイ君は弟君なんだよ？トイレに行くっただけでも心配するよ」

「……………」

正直いって本当に意味がわからない。心配するもくそもあるか、こちらら高校生だぞ、高校生の弟が1人で尿をたせるか心配になる姉がこの世界のどこにいるんだよ

教えてくれよ、なあ

「そうだ丸山さん」

「むう！彩姉！って呼んで欲しいな…」

「あ、彩姉」

頬を引き攣らせ作り笑いをしながら俺はもう発言しないと誓った言葉を口走る。

すると丸山さんはぱーと小学生見たく嬉しそうな顔をして俺に抱きついてくる。

「はーい、彩お姉ちゃんですよー♪」

「は、はは」

「それでー？私になんの用かな？」

「用って、俺いつも学校行く前は占いみるんですよ、あ、彩姉も一緒に見ないか？」

もちろん占いなんて見てない。てかさんなものは信じていない。

でも少しでも丸山さんをこの家に留めるために俺は見たくもない占いを見る。

時刻は7時54分、占いが始まるまで残り数分とベストタイミングでリビングのソファアーに腰を下ろしテレビをつける。

「レイ君は何座なの？」

「俺はー、オリオン座ですね」

「へー！かっこいいね！流石弟君だね！」

「なんで嘘だつてわからないのかなこの人」

オリオン座なんてあるにはあるけど十二座に含まれてないだろうが。馬鹿か馬鹿なのか？

「本当はやぎ座ですよ」

「やぎ座だね！絶対1位だよ、だってレイ君は私の弟だから」

「そんなんで1位なんて取れるわけないでしょ」

じゃあなんだ俺は毎日占いで1位を取ってるってことか？

にしてはおかしな人生送ってないか？幼馴染は全員変態だし、変な事件には巻き込まれるし…やっぱり占いなんて全部デタラメじゃないか。

「ごめんなさい、最下位はやぎ座の方です。今日は人生の中で最大の厄日になるかも知れません。外出することを控えましょうね、ラツキーアイテムは幼馴染です」

「おいおいおい、最下位じゃないですか」

「このチャンネルの占いがおかしいんだよ」

丸山さんはリモコンを取り他局のチャンネルに切り替える。する

と丁度よく最下位の解説をしているチャンネルであった。

内容を確認してみたがこちらも最下位はやぎ座のようだ。

「今までついた嘘が原因で人生最大のピンチになるかもしれない。今日からは嘘をつかず真面目に生きましょう」

な、なんだこれは

占いは信じないと断言したがこれは流石に信じてしまいかねない内容だぞ

てか外出することを控えましょう、って平日に言うかね？学生は学校に、一般人は会社に出勤したりするだろ？

外出を控えられるのなんてクソニートだけじゃねーか!?舐めてんのかよこの占い!

「ほら!でもワースト1位だよ」

「それ本気で言ってます?」

「本気だよ...」

丸山さんはそっぽを向き、口笛を吹くかのように口を尖らせそう発言して見せた。

「なんでそっぽ向くんですか、嘘じゃないですか」

「さて!占いも見終わったし学校行こうか!」

「話を変えんな!」

クソう、占いが終わっちゃった。丸山さんがこの家から出ていこうとしている!白鷺さんが来るまで丸山さんを留めなくては!

「あ、彩姉!実は俺占い見た後はさちよつと携帯いじって数分経ってから学校向かうんだよね」

「そうなの?ならタクシー呼ぶよ?そしたら学校に向かいながら携帯を弄れるからさ」

「.....」

花咲の生徒はタクシーが好きなのか?

どっかの黒髪巨乳さんもタクシーをよく呼ぶからな、てか愛用しているからな....

「タクシーなんて乗れないっすよ」

「?なんでなの?」

「た、たたタクシーアルレギーなんすよ、俺」

「もう、レイ君何言ってるの？今すぐ呼ぶからちよつと待っててね♪」

ああああ！丸山さんがタクシー会社に連絡しようとしている。

もう止める術はないのか!?!……はっ!?

「そ、そうだ彩姉！やっぱりタクシー呼ぶのはやめよう！2人で一緒に歩いて登校しないか!?!」

「えっ!?!」

「姉弟ならさ！一緒に登校するのはごく普通のことだと思わないか!?!
なあ！彩姉!?!」

少しでも！多く！時間を稼ぎたい！このお姉ちゃん馬鹿ならこの俺のセリフに心を打たれ承諾する……はずなんだ！

「ごめんねレイ君、私今日は朝から撮影があるからー、できればタクシー乗りたいかな……」

「oh……」

くっ！もうダメなのか!?!

そう思った時

／ピンポーン／

「！来た！」

白鷺さんだ！白鷺さんが家に着いたんだ！俺は挫けそうになった心を無理やり打ち直し、玄関に向かって全速で向かった。

「白鷺さん！待ってました!?!」

俺は泣き目になりながら玄関のドアを開けた。すると……目の前に白鷺さんの姿なんてなかった。

「あのーすみません、神崎滯奈様宛でお荷物が」

「oh……」

そこにいたのは白鷺千聖とはかけ離れた人物、配達員さんがいた。てかなんでこんな朝っぱらに配達してるんだ!?!

後に滯奈は語る

「いや、だって昼は学校だし？夕方とか夜はバイトだと思ったからー朝一の方が良くない？それにレイへのプレゼントだし」

「ありがとうございますー」

受領のサインをした後配達員はそう言い俺の目の前から消え去った。

姉貴め…帰ってきたから文句を言ってやる。

「ねえレイ君、さつき白鷺さん待ってましたって言ってなかった?」「げっ!?!」

聞かれていた。それもそうか、感極まりすぎて大きな声で、助けを求めるように白鷺さんの名前を読んだもんな

「そう言えば千聖ちゃんとレイ君はなんで知り合いだったのかな?」

「なんも接点のない2人なのに…どうしてなのかな?」

「え? いや、それは」

「もしかして…:…:噂になってる千聖ちゃんの彼氏ってレイ君、だったりするの!?!」

「ん???」

全く違う。違うんだけどーそれって俺に話してもいい話なのか?

俺は白鷺さんに彼氏さんがいることは存じているけどーもし俺が知ってなかったら間違いない爆弾発言だぞ

「違うわよ、彼はただの知り合いよ」

「!?!」

後ろから声が聞こえ俺は咄嗟に振り返る。

そこにはドアに背を預け手を組み冷ややかな目を丸山さんに向けている白鷺千聖が立っていた。

なんだこれ、家にアイドルが2人もいるんだが?世にも奇妙な光景だぞこれ

「白鷺さん!…:てか何勝手に入ってるんですか!」

「助けを求めたのはあなたじゃない、それに玄関からよからぬ憶測を考えるお馬鹿さんがいたから咄嗟に否定したくなつたのよ」

「そんなに俺が彼氏さんだと思われるのは嫌ですか、そうですか」

「ええ、いやよ、死んでもいやよ」

そんなととめを刺すようなこと…:言わなくてもいいのにグサリと
言うなこの人は

「ち、千聖ちゃん、ど、どうして…?」

指を震わせながら白鷺さんを指差しそう発言する丸山さんは目の瞳がグルグル状態になっていた。

「あなたが赤の他人を弟にしようと馬鹿げたことをしでかそうとしてたから止めに来たのよ」

「うう！レイ君千聖ちゃんにチクったの!?!」

「なんとも言え、俺は自分の身を守るためなら平気で人にチクるぜ」
チクリ屋神崎レイなんて言われてもいい！安全に人生さえ送れていればそれ以上に求めることなんてない！

「彩ちゃん前にも言ったはずよね、私達はアイドルよ、恥じない生き方をしなさいって」

「他人を自分の弟にするなんて…狂気の沙汰じゃないわ」

「…仕方ないじゃん！弟が欲しかったもん！」

「欲しいのなら自分の両親に頼みなさい」

「頼んだけど無理って言ってたもん！」

「だからって他人は他人よ」

「違うもん！レイ君は私のお母さんから産まれたって確かな記憶があるもん！」

『……………』

それを聞いた途端俺は白鷺さんと目が合った。

白鷺さんはこいつ等々頭おかしくなったな、と言わんばかりの目を白鷺さんはしていた。俺も全く同意見だ。

「彩ちゃん、病院へ行きましょう。いい精神科を案内するわ」

「存在しない記憶なんて存在しないんだよ、東堂さんじゃないんだからさ」

「嫌だあー！これから毎日レイ君と一緒に寝るのー！」

丸山さんは玄関の床に座り込みしまいにはわんわんお泣きし始めた。

ここまで来たならもう歳上とかそんなこと忘れてかなり引いてしま
うんだが!?!

「困ったわね、強く言えば引き下がると思ったのだけれど……これは

想像以上の重症ね」

「なんなんすかね、これ」

俺達2人は泣いてしまった丸山さんをどうすればいいのかしばらく長考していた。

長考しても考えは何も思いつかない。

だって何言っても言うこと聞かないのだから説得しようがないっての

「おーい、千聖、まだ終わらないのか？朝は都会道が混むから早めに高速乗りたいんだが？」

後ろから声が聞こえ振り返る。そこには超絶イケメンのサラリーマン？らしき人物がいた。

その人は白鷺さんに対して馴れ馴れしく千聖と下の名前で呼んでいた。

「……P（プロデューサー）」

「あ、Pね」

へーこの人がPか、見たところ結構若そうだなー、そんな人がアイドルのPって相当できる人だと見たぞ

この人なら丸山さんを説得してくれるかもしれない！

「おい彩、朝一に撮影があるんだ。いつまで駄々こねてるんだよ」

「だ、だって、ひく、レイ君と千聖ちゃんが2人して私をいじめるんだもん、ひく」

なんて人聞きが悪いことを言うんだ。

いじめてなんかない。正論を言ってるだけだ。

「あのな彩、他人を弟になんてできるわけないだろ」

「じゃあ再婚した家系はどうなの!？」

「お前の親はあいつの親と再婚したのか？してないだろ、無駄な足掻きはするな」

「うう、なんで、どうしてなのレイ君…」

「どうして弟になるって言わないの!？君は弟になるべき尊き存在なんだよ!？」

「俺は絶対にあなたの弟になりません」

なんだこれ、どつかで聞いたようなセリフをいい感じに言い換えて言っていないか？気のせいか？

それとも俺は君と価値基準が違うと言えるばよかったのか!?

「わかったよ彩、俺がお前の両親を説得させるから」

「へ…?」

「俺がお前の両親に事情を説明して子作りするよう説得させる」

「何言ってるんだこの人」

「赤の他人を弟にしようとするまで追い込まれてたって説明してやるからさ」ニコ

凄く爽やかスマイルでそう答えるP

その言葉を聞き止めた丸山さんは顔を真っ青にしてPの服をつかみ言う。

「……ごめんなさい、それだけはやめてください、詳しい説明はなしで説得をお願いします…!」

流石に丸山さんでも気付いたか。

考えてみる、Pがことの事情を説明した所ではい子作りしまーすとはならない。

逆にうちの娘はそんなことをしてたのか、と冷ややかな目をあろうことか両親から向けられることになるのだからな

「いいや、俺は絶対言うね、親御さんには今日あつた話を全部正直に話す」

「ひっ!?!」

「俺は残念だよ、担当しているアイドルの1人がこんなやつだったとは…かなり引いている」

「ご、ごめんなさいPさん、両親にそのことだけは言わないでください…!」

「じゃあ約束しろ、今後赤の他人を弟にしないと」

「うう…」

丸山さん泣きじやくった顔で俺に救いの目を向ける。

しかし俺は救いがなかったことを告げるように、その目と合わせることなくそっぽを向く。

「彩ちゃん、あなたは話を聞くと不法侵入したのよね？他人を弟にするよりも前に犯罪を犯してるのよ、反省しなさい」

「ああ、ああああああ…」

床には丸山さんの涙の雫が何度も垂れる。

いや、そこまで泣くようなことなのだろうか…？俺にはよくわからない感情が丸山さんにはあるんだろうか。

「だけど俺はお前を見捨てないぞ彩、だってお前は俺がプロデューサーする最高のアイドルなんだからな」

「……Pさん」

「赤の他人を弟にしたいって考えてる暇なんてお前にはないはずだ。パスパレをアイドル業界でナンバー1にするんだろ？」

「……はい！」

「ならこんな所で泣くんじやない。さあ、今日もお前の輝きをあのクソツタレ共に見せつけようぜ、彩」

「ううーPさんー！」

丸山さんは感極まりすぎて泣き出しPに抱きつく、Pはそれを受止め俺達の方を向きすごく悪そうな顔で微笑んでみせた。

まるで計画通りと言わんばかりの顔だった。

「パスパレのPさんは凄い人っすね」

「なんせうちのPよ、当たり前じゃやない」

まあなんにせよ丸山さんを説得することはできたんだ。これにて一件落着、つと

少し経ち泣き止んだ丸山さんはPの手を握り床から立ち上がり涙を拭き俺に向けて言葉を発した。

「ごめんねレイ君、怖い思いをさせちゃって」

「いえいえ、わかってくれたならいいんです」

「私ちよつと頭おかしくなってたよ、そうだよね、思えば赤の他人なんて弟にできるはずないもんね…」

「まあ、そうですね」

自分で頭がおかしくなっていたと言ってるんだ。弟が欲しすぎたが故に今回のような奇行に走ったのだろう。

「こんな私だけど、その…またお話とかしたいな、ダメかな…?」

「ツ！全然いいですよ、丸山さんが釈放されたら俺ご飯奢りますから」
「へ!?私これから警察に突き出されるの!?!」

「そんなことしないわよ、あなたもなんてこと言い出すの」

「いや、あははなんか落ち着いたら丸山さんのことからかいたくなつて」

「もうー!」

その後千聖さんが丸山さんに愚痴愚痴説教を行い、丸山さんは大人しくはいい、と何度も答えている様子を俺は苦笑いしながら眺めていた。

千聖さんの説教も終わり、そろそろ事務所に向かわないといけないう時間になり、千聖さん達は俺の家を出ていく。

最後に俺は外に出て丸山さんと白鷺さんがPの車に乗り、出発するまで見届けと思ひ、俺も一緒に外へ出た。

「レイ君、私ねお母さんとお父さんにもう一度弟が欲しいって相談してみるよ」

「…いい返事が貰えるといいですね」

「うん!」

そう答えた丸山さんの笑顔は…今日俺にみせた笑顔の中で一番の、最高の笑顔なのであった。

こうして丸山事変は幕を閉じた。自称お姉ちゃんはいなくなり、我が家には盗聴器だけが残った。

この盗聴器もいつか…外せれたらいいのよね

「おいお前」

「あ、はい」

運転席に座るPに呼ばれ俺は運転席の窓側へと向かう。

あれか?うちの担当アイドルが迷惑かけたな、すまんな?謝る展開ですかこれは

えーどうしよっかなー丸山さんのことは許してもいいけどー大和麻弥って言う変態クソメガネはなー

「彩と千聖と仲良いからって調子乗んなよこのメス顔野郎が、今後二

度とうちの担当アイドルと絡むな、この糞に群がるハエ虫が」

「え…？」

「そーゆうことだから、じゃあな」ニコ

Pはそう言うと言車を発信させた。

俺はただ車の面影がなくなるまでただ見つめることしかできなかった…。

後に冷静になって考えた。

「Pさん、見た目のわりに口悪いな」

メス顔野郎だつてさ、そんなこと初めて言われたよ、結構傷つくな…てか糞に群がるハエ虫って、な…。

「はあ、学校行こう」

散々な出だしから1日がスタートしたレイなのであった。

しかし彼は忘れていた。今日という1日が占いによると最悪な厄日になるということ。

三郎ラーメンを食べたことありますか？

散々な出だしでスタートした今日、朝から物凄く疲れていた俺は白目を向きながら通学路を歩いていた。

周りを歩いていた誰かにクスクスと笑われ我に返り急いで目を戻す。

いかん、変なやつだと思われてしまう。いや既に思われているかもしれないけどさ…

スカートとネクタイを見る限り羽丘の1年か、ならいい。下の学年となんて絡む機会ないのだからどうと思われても構わない。

「おはようレイ君」

後ろから声をかけられ俺は顔を見ずにその声音だけで誰かと瞬時に察する。

この声、間違いない。俺の家にくつも盗聴器を仕掛けている頭のネジが吹き飛んだ変態幼馴染だ。

「つぐみ…ん、おはよう」

「あはは、元気ないね」

「…聞いてただろ、全く最悪な1日の手出しだったの」

今朝の一連のやり取りは盗聴器からつぐみは聞き取っているはずだ。

こんなできごと関係者以外に知られなくなかったんだけど…盗聴器なんて仕掛けられていたら嫌でも知られてしまう。

「そうかな？ 有名人と一緒に朝食がとれたんだから嬉しいことなんじゃないの？」

「なわけないだろ、お前話を全部聞いていなかったのか？」

血も繋がってない赤の他人がいきなりお姉ちゃんです。なんて言っただけで目の前に現れる身になってほしい。

なんて感情が生まれるのか教えてほしいものだ。

「でも無事に解決できてよかったね、千聖先輩には感謝しないとだよ？」

「白鷺さんって言うか、Pさんのおかげだけだな」

10割あの口の悪いPのおかげだろ、俺のことメス顔野郎なんて呼びやがって…今度芸能界の人にあの人口悪いつて風評流してやる。

「そうそう、おかげで千聖先輩の面白い話も聞けたしね」

「……お前あのことは絶対他人に話すなよ、大事になりかねないからな」

「わかってるよ、絶対話さないから！」

あのこと、というのは白鷺さんに彼氏がいることだ。本人曰く誰がアイドルは恋人を作ってはいけないなんて決めつけたのよと発言していた。

本人がそう言っているだけで世間一般からしてアイドルは恋愛禁止という暗黙のルールがあるものだと強く根付いている。

白鷺千聖に彼氏がいる。なんてビツクスキャンダルが知れ渡れば彼女の人生が大きく変化してしまう。

「あ、それとレイ君美咲ちゃんも友達だったんだね、知らなかったよ」

「お、おいお前便所にまで盗聴器仕掛けてるのかよ??？」

「そのわからないみたいな顔をするな！」

俺は至って正常なことを述べている。

この女自分がしていること全てが正しい、いや普通のことだと思っ込んでやがるな

しかしそれを決して俺以外の他人には公言しない。表上猫かぶつてる性悪女なのだ。

「ごめんね、言ってる意味がよく分からないや」

「もういい、お前には何を言っても通じないとようやく理解したよ」

俺はつぐみを置き去り1人早足で学校へと向かう。

「あ！待ってよレイ君、まだ話は終わってないよ」

「どうせろくでもない話だろ、聞かなくていい」

「ダメだよ！レイ君の体にとって大切な話なんだから！」

「はあ？」

俺の体についての話だど？一体なんの話だというんだ。

「ほら、麻弥先輩の秘密を黙っとく代わりに約束したよね、毎日オナ

ニ―するって」

「……してないね、俺は嫌だと言ったはずだ」

「そんなレイ君のために私もサポートしようと思ってるねー」

「人の話を聞け!!」

俺の話を全て無視しながらつぐみはリュックの中身を漁る。そしてネット上でしか見たことがない赤いシマシマ模様で筒状のあるものを俺に見せてきた。

「これがあれば気持ちよくできるよね……?」

「ツ!!」

それはあれだった。言葉に出すにはちよいと難しいあれだった。

男子の紳士の皆様ならご存知、我らの絶対な味方……んが様だ。

しかし何故だ。何故つぐみがこれを、ネットか!? ネットで注文したのか!?

「お、おいお前これ一体どこで!」

「近くの本屋さんだよ?」

あそこか……確か成人者用にスペースが設けられていたっけな、てかこいつそこ入って買ってきたの? 勇者じゃないか!?

冷や汗を出しながら俺はそんなことを考えていた。そして瞬時に周りを見渡す。

よかった。幸い誰もいないみたいだ。

つぐみがこんな卑猥な物を俺に渡しているところなんて目撃されたら2人の高校生活が終わってしまうってな

そんなことを考えていると後ろの曲がり角から誰かが現れた。

「ん? おやおや、神崎君じゃないか」

「けっ! 瀬田さん!」

「瀬田先輩! おはようございます!」

えっ!? つぐみのやつ何笑顔で普通に挨拶してるんだ!? お前の手にある物はあれなんだぞ?! 卑猥なものなんだぞ!?

「やあつぐみちゃん、今日も相変わらず笑顔が眩しいね」

「え? えへへ、そうですか……?」

「お、そうそう丁度つぐみちゃんに頼みたいことがあったんだ。今日

のお昼休み君の教室に伺ってもいいかい？」

「今ここで話してもいいですよ？」

「今は神崎君がいるからね、千聖がうるさいんだ。神崎君には劇の内容一切話すなってね」

「……そうなんですか？」

「そうとも、それで今ので察したと思うのだけれど、劇のことについてつぐみちゃんに話があつて、聞いてくれるかい？」

つぐみの空いている手を取りそつと手の甲に口付けをして頼む瀬

田さん

顔がいいからなんとも思わないが……不細工な方がしたからかなり引くやつだと思う。大変失礼な意見だけどさ

「わかりました！お昼は予定を空けておきます！」

「ありがとう、つぐみちゃん」ニコ

かぁー、笑顔がイケメンだ。なんてイケメンなんだ。イケメンすぎてイケメンだ。語彙力が吹き飛ぶ程イケメンだあ。

「……所ですつと気になっていたんだけど」

「!？」

まずい。この流れはつぐみが俺に渡そうとしている物について聞かれてしまう……!

「こ、これのことですか？これは水筒です」

ありがとうつぐみ、大切に使うよとうわべつずらの言葉を述べ俺はつぐみから……んがを掴み取りカバンにしまう。

こ、これで見逃して貰えないだろうか!？」

ちなみになぜ水筒と言ったのかについてだが形状が少しだけ似ているんだ。それと昔友人がこれを見て水筒なのかな？と言ってたからそう発言した。

「ほう、変わった水筒だねー、それはそうと水筒をプレゼントするなんて……神崎君は誕生日が近かったのかい？」

「い、いえ別に」

「では2人は特別な間柄だからプレゼントを送っていたわけだ」「いや違います」

「しかし」

「いや、絶対に違うので」

俺は目のハイライトを消して全力で否定する。こんなやつと恋人同士だと思われるのはごめんだね

「瀬田先輩、レイ君の言う通りで私達特別な間柄ではないですよ？ただレイ君とは幼馴染って関係なんです」

「なんだ幼馴染か…すまない、飛んだ勘違いをしてたよ、許してほしい」

「そんな、謝ることではないかと」

内心恋人同士だと思われるのはごめんだと思っていたさ、でもいざ目の前で謝れるとなんか申し訳ない感が湧いてしまう。

「どうか許してほしい、このとおりだ」

「！」

俺の手を両手で握り許してほしいと懇願してくる。な、なんだこれ、こんなのちよろい女ならイチコロで落ちるテクニクだぞ

「わかりましたって、許しますから」

「それはよかった！許してもらえなかったから一日中その事ばかり考えて物事に集中できなくなってしまうからね」

「はあ、そうでしたか」

俺はそう適当な返事をしてしまう。

今の俺はこのリックの中にぶち込んだ例のブツが他の人にバレないか心配で心配で仕方がないんだ。

つぐみに返そうとしても絶対受け取らないはずなんだ。

もし今日持ち検なんてあったりしたら…俺は死んでしまう（社会的に）

持ち検なんて今までしたことないから問題ないと信じたいが…何があるかわからないのが学校だからな、一度家に戻って置いてから学校に行くか？でも時間が時間だしなあー

「それじゃあ私はお暇するよ、また今度だ、神崎君」

「はーい、また今度…」

「それにしてもよかったーレイ君がちゃんと受け取ってくれて」

「受け取ってねえよ！なに平然と話してたんだよお前！瀬田さんがこれのこと知ってたらどうしてたんだよ!？」

「瀬田先輩なら知らないかなって思ってたから」

「お前のその予想が外れてたら終わってたぞ…」

変なところで感が鋭いなこいつ、なんなんだ。

「ちなみにつぐみ、返却したいと言ったら受け取ってくれるか？」

「!ごめんねレイ君！私今朝は生徒会室の掃除しないといけないんだった！もう行くね！」

「お、おい！待ってくれよ!？」

H o l y s h i t …まじか、さて本当にこいつをどうしたものか…。

「くっそうー!」

長考した結果レイは奇声を上げ羽丘とは真逆の自宅へ全速力で向かい、自室のベツトに例のブツを投げつけ学校に向かうのであった。

◆ ◆ ◆

一度家に帰ったものだから遅刻ギリギリで登校することになった。

俺は教室へ入る際向こう側から担任がこちらに向かってくる様子が確認できたため、すぐにHRが始まると察した。

俺の察しは正確であった。すぐにHRは始まり担任が発する連絡事項を聞き流しながら俺は一限目の授業の準備をする。

まあ準備したところで真面目に授業は行かないけどね、理科だしいいだろう。

そんなこんなで午前中の授業は終わり、皆大好きお昼休みの時間がやってきた。

というより今は文化祭準備期間で短縮授業で午前中しか授業がないからな、正しく言えば放課後か。

「レイ君レイ君、今日は15時からの集まりでよかったんだよね？」

「ツ！あーそうなんじゃね、ひまりだけ18時からにしてもいいが?」

「わかった15時だね!」

何としても時間通りに来るつもりか。

上原ひまり、俺の幼馴染であり、何故か俺の匂いを好む匂いフェチ

持ちの変態だ。

匂いが好きすぎるが故にエツチなことをしたいとのこと、それと先日俺のことを好きになるから俺も自分のことを好きになれと訳の分からないことを言ってきた人物だ。

あれから1日経ったが本人はケロツとしてるな、さては自分で言ったこと忘れてるんじゃないか？

「れーくん今日もずっと寝てましたなー」

「今日はちよつと朝から色々あったからな、疲れてたんだよ」

「おーそうでしたかー所でモカちゃんの生尻をつけていた机での寝心地はいかがでしたか？」

「ひっ!? そうゆうのは黙っとけよ、うわ汚ねー」

「もーう、本当は喜んでるくせに」

「喜んでない」

「えーそんなことないってー凜ちゃんは思う？」

俺の前に座る凜に視線を向けモカは問うていた。凜は昼食としておにぎりを頬張っており、その顔は至福のひとときを堪能しているまさにの表情であった。

「れいはおっぱい星人だから生尻程度では喜ばないと思うわよ」

「そうなんだーじゃあモカちゃんのおっぱい吸いましょうね」

「ぬあー！ 離せ！ てかこんな所で近寄んな！」

俺は椅子から立ち上がりモカから距離をとる。左側に移動したもんだから巴の机にぶつかってしまう。

「す、すまん巴、モカのやつがくつついてくるからさ」

「くっ！これがNTRか……！」

「……………」

謝る必要なんてなかった。こんな脳内が残念なやつにすまんなんて言葉は理解ができないもんな

「皆ー！ ご飯食べようよ！ ほら蘭も起きて！」

「んんー…あと5分」

「ダメだよ、お昼食べないと夕方まで持たないよー」

ひまりのやつが蘭を起こそうと揺さぶる。蘭のやつ遅くまで創作

活動してるからさぞ疲れているんだろう。

寝かしてやりたいがひまりの言う通り昼食は食べた方がいい、ひまりのやつが頑張つて蘭を起こせることを俺は祈っているよ

俺はそう思いながら変態幼馴染集団から離れ三馬鹿共の所へ向かう。

「おーす、ここで食ってもいいか？」

「神崎、お前は幼馴染達と食べないのか？」

「そうだぞ神崎君、先程見せびらかすように仲良くしてたじゃないか」

「まじねーわ」

「んなこと考えてねーよ、大体あいつらの相手するの大変なんだぜ？」

「自慢ですよ遊さん」

「ああ、自慢だな」

「まじねーわ」ポン

由明日だけだよ、苦労がわかってくれるのは…遊と優亜には幼馴染が全員可愛いと思ってるだろうが実際は違うのだ。

そう、全員変態なのだ。ちなみに由明日は巴の性癖しか知らない。でも巴一人だけ知ってるだけで苦労つてのはこうもわかってくれるんだ。ありがたい。

「神崎どうした、いつも弁当なのに今日は違うな」

「ああ、今日はちよつと朝バタついてな、家にあつたパンを持ってきたんだ」

「なんだなんだ寝坊か神崎君、夜美竹さんと変なことしてたんじゃないの〜？」

「まじねーわ」

「してるわけないだろ、第一蘭はバンドとかで忙しいんだよ、そんなことする暇はない」

バンドに創作活動、そして最近では文化祭準備と蘭は大変な目にあつてるんだ。

俺と蘭の関係は偽物だけど本物だとしてもそんなことする余裕はないと思ってる。

「またまたそんなこと言つてー本当はしてるんだろ？」

「だからしてないって、しつこいぞ」

「なんでだよ!? 彼女いたらするだろ普通!？」

「あんな優亜、お前みたいに全員がオナニーを覚えたチンパンジーじゃないんだよ」

「神崎、食事中になんて言葉を言うんだ…」

「まじねーわ」

なんで俺が悪く言われるんだよ、いや確かに悪いかもしれんが話を振ってきて優亜が悪いだろうが。

「話で盛り上がっているところちよいと失礼するぜ」

『!?!』

男子が下ネタトークで盛り上がっているところにあいつがやってきた。

宇田川巴、俺の幼馴染であって極度のドMで救いようがない残念なやつだ。

「レイと由明日、アタシ今から三郎行くんだけど一緒にどうだ？」

『……………』

俺と由明日は目を合わせ頷く、その後お互い手に持っていた昼食を急いで食べ終えご馳走様と手を合わせたあとすぐに立ち上がり教室から出ていこうとする。

お互い同意見なのだ。巴と三郎に行きたくない、と

だからこそシンクロ率100%並の同じ動きができたんだ。なんなら食べ終えたタイミングも一緒だ。

「よし由明日、男子トイレ行こうぜ、ついでだ劇の練習が始まるまで籠っとうぜ」

「まじねーわ」

肩を組みながら教室から出ていこうとするも巴に首根っこを捕まられ阻止される。

「いいから行くぞー、女子一人だと入りづらいだろ？」

「嘘つけ！お前しよっちゅう行ってるだろうが！」

「まじねーわ!?!」

「頼むってご主人様、ご主人様にも三郎の美味しさを知ってほしいん

ですよ、ふへー！」

「あああああああああー」

「まじねーわ!!!」

俺達2人はそのまま首根っこを掴まれたまま廊下に引きづり出され下駄箱までずつとそのまま連れられていくのであった。

ちなみに教室に残っていた男子生徒達はその光景を羨ましいそうに長め、中には血の涙を流している人もいたそうだ。

「おいおいあいつ血の涙流してるぞ」

「知らないのか？あいつ宇田川さんのこと好きなんだってさ」

「うっそまじで?」

「あ、まずい」

スピーカーの優亜について話してしまった遊はそのことを若干後悔するのであった。

◆ ◆ ◆

巴に引きづられながらやって来ましたラーメン三郎、三郎ラーメンが一番有名だ。

中でもニンニク油もりもり野菜マツターホルンなんて呪文を唱えるときもなく早死サービスがついてくる。

以前優亜が食べてるところを見て俺は吐きそうになった。

あんなものが食えるものじゃない。これを食べる巴とモカは胃袋がどうかしていると思っている。

「っておい、今日は定休日じゃねーか」

「うっそーん、おやっさん今日休みにするなら休みにするって報告してくれよな」

「休みっていついつは定休日とか決まりねーのか?」

「ここは店長、おやっさんが休みだと思っただ日が定休日になるんだよ」

「なんだそれ」

「ちなみに前回の定休日は日本ダービーがあった日な、それから休んでないんじゃないか?」

それはそれで働きすぎだと思っぞ?」

色々と社会的に問題にならないのかこれ

「まじねーわ」

「?ああ、そうだな定休日なら仕方ない帰ろっか」

何となく由明日が帰ろうかと言ってるように聞こえたから俺はそう提案する。

「じゃあ銀河に行くか」

結局ラーメンは食べないといけなみたいだ。勘弁してくれ、さっき昼食とったばかりなのに…。

「なんで巴は俺達をラーメンに誘ったんだよ、モカ誘えよ、あいつも好きだろ三郎」

「モカは今日パンの気分だとき、それにご主人様誘えたら実質デートみたいなもんになるしな!」

「よかったな由明日、巴とデートできて」

「まじねーわ!」

「由明日がアタシとデートしたいって言うならそれでもいいんだぞ?! お前もなかなか人をゴミのように見ることが出来る目を持つてるからな!」

持っても大して役に立つわけでもないのによく言うよ、お前にしか得ないだろその目は

俺達が三郎の前でゴタゴタ話をしていた時定休日のはずなのに目の前のドアは盛大な音を立てながら開かれた。

「そうだ、戻ってきたんだから家族と彼女には顔ぐらい見せるんですよー」

なんてまるで誰かと話しているかのようにメイド服を着た金髪の女性が目の前に現れた。

「…………あれ?あなたどこかでお会いしましたよね?えっと、ちよつと待ってください名前思い出しますからね」

その人は俺の顔を見た途端名前を思い出すから待つてほしいと言ってきた。

俺はこの人を知ってるいる。名前は知らないがどういった人物かはよく知っている。俺の嫌いなタイプの人間だ。

以前千紗さんと弦巻邸に伺った際出迎えてくれたあの変態メイドさんだ。

「そうです神崎君です！千紗様から伺ってました、にしてもこんなチンケな店になんの用ですか？」

「ラーメン食べに来た以外に何があるんだよ」

ぶつちやけラーメンは特別食べたいわけではないがこの人には強気でいたい。だってわかるんだ、この人と絡んだら変なこと言われるって！

「そういえばここラーメン屋でしたね、アレックスは特別な用事がないと来ませんのでラーメン屋であることを忘れていました！あははは！」

「……何言つてんだこの人？」

巴はメイドさんの言ってる意味がよくわからず首を傾げながらそのような言葉を発していた。

「ではアレックスはもう帰るのでー、ラーメンを食べるのであれば十分堪能してくださいねー」

と言いながらメイドさんは商店街の人混みに紛れるのであった。

自分の言いたいことだけ言ってどっか行きやがった。まあ何か話すことなんて特にないし、辺に絡まれることもなかったからよしとするか。

「おやつさん、今ってやってんのかー？」

「巴ちゃんじゃねーか、今から営業開始だ、入った入った」

「ラッキー！一番乗りだぜご主、レイ！」

流石に公共の場ではご主人様と呼ばないか。

なんでそんなところで恥ずかしがるかねー、ドMのくせに、別に俺が呼ばれたいわけではないけどドMなら恥じらうなよな

「はあ、入るか」

「まじねーわ……」

俺と由明日は大きなため息をついたあと三郎へと入店する。

入店後は券売機に向かい、何を頼むかメニューを見ながら数秒間考え込んでいた。

「？女みたいな顔で紺碧色の頭髮…お前さん商店街の零之介じゃねーか？」

「あ、はい零之助です」

零之助とは商店街の連中がつけた俺の渾名だ。なんでこの名前なのかは不明なんだが、商店街の人達から渾名で名前を呼んでもらえるなんて、好かれている証拠と捉えられるから嬉しいだろ？

ちなみに姉貴は澤奈の姉御と呼ばれている。

「これはべっぴんさんだな、初見だと女だと思うぜ、まあ俺は男だと見抜けたがな！がはは！」

「はあ、そうですか」

券売機から出てきた食券を取り出しながら俺は適当にそう返事をした。

昔一度三郎来たことあるんだけどな…そんなことはどうでもいいか、てか零之助の存在を知ってたから見抜けただけなのでは？

「まじねーわ」

「ああ、由明日と同じやつ頼んだよ」

由明日のやつがまじねーわと言いながら購入した食券を俺に見せてきたもんだから咄嗟に同じやつを頼んだと返事をした。

「おやつさん、三郎ラーメン、ニンニク油もりもり野菜マッターホルンで」

「おっしや！まかせろ！お前さん達は？」

「普通の三郎ラーメンで」

「まじねーわ」

「あ、えつとこいつも俺と同じやつで」

「つまんねーな、男ならもつと食え！だから女だと思われるんだよ」
「関係ねーよ!?食ったら顔が渋くなるのかよ!?!」

体については体力はないけどそこまでヒョロくないと自負してるぞ!?!

それに沢山食べたところでこのメス顔が治るわけないだろうが!!

神様、何故俺はこんな顔で生まれてしまったのでしょうか…。

「ほら、不細工よりかはましじゃねーか」

「それはそうですけど」

そんなこと言われたら何も言い返せないじゃないか……。渋く
なって目の前にいるおじさんみたいな髭の濃ゆい顔にはなりたくな
い。

ならこの顔はメス顔だと罵られるけどましな方なのでは……？今ま
でよりちよつとだけ自分の顔を前向きに捉えられるようになったか
もしれない。

「所でだ。巴ちゃんの彼氏は2人のうちどっちなんだ？」

「こいつです」

「まじねーわ」

俺と由明日はお互いを指差す。なるほど、お互い考えは同じよう
だ。

死んでも巴の彼氏だとは思われたくないようだ。巴の彼氏をお互
いに押し付けあっていた。

それとおやつさんの顔が結構辛辣な顔して問うてたもんだから一
瞬怯んだのは内緒な

「巴ちゃんどっちなんだ？」

「レイがアタシのご主人様だ」

こいつキリツとした顔をしながら飛んだ爆弾発言したのと同時に
厨房に設置されていたタイマーが大きな音を立てた。

「お、すまんすまん、麺が茹で上がったみてえだ、準備するから待つて
てくれ」

よ、よかったーナイスタイミング、あとは店長が作業に没頭してこ
の質問の返答を待っていることを忘れてくれればことは全て上手く
いくー！

「てか由明日！よくも俺を売りやがったな！」

「まじねーわ！」

「ええい！お前と巴は夜中に2人でボールを投げあつて遊ぶ仲なのだ
から付き合つても当然だろうが！」

「……………ご主人様のくせに」

「ッ!？」

こいつ喋ったぞ、まじねーわしか言わない由明日が喋りやがったぞ
!?

「そうですよご主人様、今夜はアタシの首にリードをつけて散歩して
くれるんだよな!」ハアハア

「発情すんなー！離れろクソ女あー!」

カウンター席にて3人で盛り上がっている時急に後ろから鋭い視
線を感じた。

それはかなり痛く、冷たい視線：後ろを振り返った訳ではないが、
常人との視線とは比べ物にならない、何かこう説明するのが難しいと
いうか…。

とにかく今まで感じた冷ややかな視線やゴミを見るような視線と
はまた違った視線を感じ取ったんだ。

俺はちらりと後ろの席を見してみる。

4人ように設けられているテーブル席に1人ポツンと座りフード
付きのマント?を羽織っている青年らしき人物が俺を見つめていた。

「!」

一瞬目が合う。

俺は咄嗟に視線をずらしカウンター席に立てかけられているライ
スの美味しい食べ方と書かれた用紙を見る。

どこかで見たことがあるようなその人の紅緋色の瞳は一瞬にして
俺を恐怖のどん底に叩きつけるような快感を与えた。

「どうしたんだ?ご主人様?」

「まじねーわ」

「……お前らもう喋るな、静かにしとけよ後ろの人怒ってんぞ」
騒いでた俺達に大して怒りの眼差しを向けていたのだろう。

でなければ人があのようないかつい瞳で睨みつけるようなことは
するはずがない、そのはずだ。

「うわー客いたのかよ!?!一番乗りだと思ってたんだけどなー先越され
ちまったぜ」

「まじねーわ」

そんな呑気なこと言ってる場合じゃない。

これ以上後ろの人の逆鱗に触れないようにしなければならぬというのに……!

「ほいー三郎ラーメン一丁!」

「おほっーこれこれ!これを待ってたんだよ!ありがとうおっちゃん!いただきます!」

どうやら巴のラーメンができあがったようだ。

その後順番に俺と由明日のテーブルに普通の三郎ラーメンが運び込まれる。

俺達のテーブルにラーメンを届けたあとおやつさんは後ろの席に座る青年のところに向かうようだ。

「お前さん用はもう済んだだろ?早く家に帰りな」

「……………」
「ここにずっといられても困るっての、ほら家が嫌なら彼女の家にも行きな」

「……………」
青年は席から立ち上がり店長の言うがまますぐに三郎から出ていく。

「つたく昔はもつと話してくれてたんだけどな」

頭を掻きながら店長はボソツと言葉を漏らしていた。

そのセリフから察するに店長の知り合いつてところか?

知り合いの店で騒がれて迷惑だったからあんなに怒っていた……つてところだろうか。

そう思いながら俺はラーメンをすする。

「うっー!」

こってりラーメンの衝撃、それはそれは銀河ラーメンとは比にならないほどの胃へのダメージだった。

今日の経験、そして三郎ラーメンの威力……今後三郎ラーメンに来るのは控えようと覚悟を決めた俺なのであった。

◆ ◆ ◆

「ふうー!食った食った、おやつさんごちそうさん!」

「うぷ、(っ)馳走様でした」

「まじねーわ」

何とか間食できたぞ、昼飯食った後に三郎ラーメンはきつい、拷問を受けたことないがそれに匹敵する…まではないか。

俺は即座にカウンター席から立ち上がり外に出る。店内の空気を吸うだけでもう吐き気がする。

その後に由明日も同様席を外れ外へと身を出す。由明日もやはりキツかったんだろうな、そりゃ昼飯食ったあとだもんな、当たり前か「じゃあなおやつさん！また今度来るぜ！3人で！」

「おう！待ってんぜ！」

なんて巴が店長に言っていた。

何を言ってるんだ変態ドM女、俺は二度と行かんぞこんな店、店長の知り合いは怖いし油ギトギトだし…

「！まじねーわ！」

「？」

由明日が腕時計を俺達に見せつけてきた。

「あーお高い時計だな、なんだ？バイト代はたいて買ったのか？よかったな」

「まじねーわ」ブンブン

由明日首を横に振る。違うってことか？

「あー！ご主人様！時間！劇の練習開始時間！13時からですよ！」
「……げっ！」

由明日の時計では現在12時45分であると表示されていた。

「走りましょう！」

「アホか!?吐くわ！」

「それがいいんでしょうが！気持ち悪くなって吐きそうになりながら走る！そして吐くことなく学校に到着してもその後ずっと体調を悪くし！最後にクラスメイト達の目の前で吐く姿をさらけ出す、そしてみんながアタシに対して汚い視線を送る…よし計画は完璧だ！」

「なにが完璧だ！タクシーだ！タクシーを捕まえろ！」

「まじねーわ!!」

俺と由明日は巴の手を取り早歩きで商店街から抜け出し車道の脇

に止まっていたタクシーに乗り込み、そのまま羽丘に向かった。

料金については巴と由明日はラーメンで手持ちが無くなったとのことなので俺が払った。

この野郎、本当に金持っていないんだろうな？隠し持ってたらあとで料金の3分の1ぶんどるからな

10分で羽丘に着いたもんだから教室にはゆっくり向かうことができた。

吐き気も大分治まってきたところだ。劇の練習中に吐くことはつて！

息！息絶対ニンニク臭いよ、歯磨きする時間はー理由を説明すればする時間くれるかな？

「どうだ由明日、三郎美味しかったろ？今度また絶対行こうな！」

「まじねーわ」ブンブンブン

行きたくないように由明日は首を振る。

どうやら俺と由明日はとことん気が合う間柄のようだ。

こんなに気が合うやつが近くにいたとはな、いやー世界って結構狭いんだね

「？おい、なんか教室騒がしくないか？」

巴がそんなことを言う。

耳を澄ませてみると確かにうちの教室から騒がしい声が沢山聞こえてくる。

「まさか劇の練習始めてるのか？」

携帯にて時間を確認するが現在の時刻は12時57分だ、まだ開始3分前だ。

しかしこの世には5分前行動という言葉がある。しかし果たしてあのA組がそんな言葉を知ってるだろうか。否、ないな

でも確かに巴の言う通り騒がしいんだよな

俺達は騒がしいと思いつながらA組教室のドアを開く

開いた途端騒がしかったA組のメンツは一斉に静まり返った。と思えば今度は全員が黙って俺を見つめていた。

全員から視線を向けられ一瞬萎縮するも目の前の教卓に見知った

方がいたもんだからその人に自然と目を向けてしまう。

「友希那さん？」

そう、湊友希那さんが何故かA組の教卓に立っていたのだ。付近には蘭とモカ、それにリサさんもいた。

リサさんは凄くにこやかな表情をしてたが何かおぞましい気配をただよせており、モカに関してはニヤニヤしてる？蘭は腕を組んで俺を凄く睨みつけていた。

な、なんだこれ

「巴ちゃん大丈夫？」

「は？」

「神崎君、ううん、神崎に何か変なことされたりしてないよね？」
「????」

神崎：？おいおいなんの冗談だよ、俺は女子から神崎、なんて呼び捨てで呼ばれたことなんて中学以来ないんだぞ？

何故急に君を外したんだ？

それと巴に話しかけた女子生徒が俺のことを変なやつを見るような目で見てきたんだが？

結構キツめな視線を受けたんだが？

「由明日、お前ちよつとこい」

「まじねーわ」

遊に呼ばれたこと由明日は遊と優亜の元へと向かう。

「で、どうなんだよ、したのか？しちやったのか!？」

「？まじねーわ」

「とぼけんなんて、神崎君と宇田川さんとお前の3人で…」

な、なんだこれ…？

クラス全員が俺に対してまるでクズを見るかのような様子で眺めてくるんだが…？

「レイ」

「あ、はい」

友希那さんに急に話しかけられ返事をする。

「あなたがヤリチンだつてことを皆に証明しなさい」

「……………はあああああああ!!?!?」
友希那のセリフを聞いたのち、A組の教室にはレイの大声が、それは響くのであった。